

若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム (ITP)

東アジアの共生社会構築のための 多極的教育研究プログラム

成果最終報告書

(平成 20 年度～平成 24 年度)

平成 25 年 3 月 29 日

神戸大学大学院人文学研究科・国際協力研究科

はじめに

神戸大学人文学研究科と国際協力研究科は、平成 20 年度から 5 年間にわたって、若手インターナショナル・トレーニング・プログラム (ITP) として、「東アジア共生社会の構築のための多極的教育研究プログラム」を実施してきた。同プログラムは、両研究科における人文科学と社会科学のアプローチを効果的に組み合わせて、これまでにない地域研究の教育研究体制を構築しようとした野心的なプログラムである。

周知のように、1945 年以後にアジア研究の主流となった地域研究 (エリア・スタディーズ) は、アメリカで展開された社会科学のアプローチに基づいて、現地観察を中心に、激動するアジアの政治文化や経済環境に実証的な考察を加えるものであった。現地語の習得や社会調査の遂行は、こうした地域研究を成立させる上で極めて重要な役割を持った。ただ、その実証研究を遂行する中で、研究者が感じてきたのは、現代アジアの政治経済の背後に存在する分厚い歴史文化を十分に理解しない限り、アジアの現地観察や社会調査の持つ意味を十分にはくみ取れないという想いであった。

アジアをその悠久の歴史文化の位相から真に理解するためには、地域研究というディシプリン以外に、戦前から続く東洋学の学問伝統を参照することが必要であった。それは、現地観察や社会調査を中心に組み立てられた地域研究のディシプリンとは対照的に、文献学や解釈学を用いて文化の諸問題を考える人文科学的なアプローチを主要な内容とするものだった。

制度としての大学における教育研究環境の中で、地域研究と東洋学は、それぞれ人文系と社会系に属したまま、別個のディシプリンに分断されている。そうした制度的枠組みを前提にする限り、現代アジアを十分に理解することは困難であるという先述した想いは、他ならぬそうしたディシプリンの内部で育てられ、そうしたディシプリンを用いて教育研究を続けてきた私たちアジア研究者が多かれ少なかれ有するものだった。この制度的な前提を超えて新しいアジア学を創成することが、この I T P プログラムが企図した隠された野心に他ならない。

しかし、そうしたディシプリンの越境と対話は、言うは易くとも、行うことは極めて困難なものであった。初年度をアジア現地語の習得と現地観察に充て、次年度を欧米言語の習得と文献研究に充てるという本プログラムの厳しい行程に果敢に挑戦し、そこから新しいアジア学の可能性を模索してきた本プログラムの参加者には、心からの敬意と心からの謝意を表したい。

時あたかも、東アジアを取り巻く国際情勢は、領土・領海問題を中心に、共生社会の実現とは全く正反対の方向に向かいつつあるように見える。本プログラムに参加した全ての若手研究者が、本プログラムを遂行する過程で得た数多くの経験の中から、現代東アジアの困難な現実そのものを打破する手掛かりを見出してくれることを信じている。

代表 (神戸大学人文・社会 ITP 推進委員会委員長)

釜谷 武志

目次

1. 「東アジアの共生社会構築のための多極的教育研究プログラム」について	1
2. 各年度の取り組み	3
3. 派遣者成果報告	
平成 20 年度 第 1 期アジアプログラム	
[長期研修生]	
東アジアにおける公共圏構築の可能性について 藤岡 達磨(人文学研究科博士後期課程)	17
——消費社会論とトラウマの社会学を架橋する社会理論の構築を目指して——	
韓国の自己認識と統一政策 横溝 未歩(国際協力研究科博士後期課程)	23
——韓国のドイツをみる視点から——	
[メンター]	
東アジア社会におけるグローバル時代の自己形成論 速水 奈名子(人文学研究科学術推進研究員)	31
——身体イメージが自己形成に与える影響——	
現代韓国における死者と政治 田中 悟(国際協力研究科助教)	39
平成 20 年度総括コメント	47
平成 21 年度 第 1 期アジアプログラム	
[長期研修生]	
白先勇《孽子》與一九七〇年代臺北的都市記憶 小笠原 淳(人文学研究科博士後期課程)	53
——以野人咖啡室、新公園蓮花池、克難街為中心——	
韓国市民団体の立法運動と政治過程 米沢 竜也(国際協力研究科博士後期課程)	65
[メンター]	
日據時代台灣自來水建設情況和當地居民的關係 村田 省一(人文学研究科学術推進研究員)	83
韓国「国家報勲」政策の一側面 田中 悟(国際協力研究科助教)	89
——山清護国院建設を事例として——	
平成 21 年度 第 1 期欧米プログラム	
[長期研修生]	
Lyon におけるショッピングセンターの社会的機能 藤岡 達磨(人文学研究科博士後期課程)	103
<序論>としての統一論 横溝 未歩(国際協力研究科博士後期課程)	113
——「統一政策」と「統一観」——	
[メンター]	
東アジア社会における女性の身体統制に関わる分析 速水 奈名子(人文学研究科学術推進研究員)	125
——身体イメージ・統制に関する理論的フレームワークの形成——	
1940・50 年代内モンゴルにおけるモンゴル人エリートの動向と文字改革 田中 剛(人文学研究科研究員)	129
平成 21 年度総括コメント	137

平成 22 年度 第 3 期アジアプログラム

[長期研修生]

日本語と中国語と韓国語の行為要求表現の対照研究 …………… 楊 吟(人文学研究科博士後期課程) 143

観光開発がもたらす影響力 …………… 松浦 真弓(国際協力研究科博士後期課程) 151
——中国雲南省麗江市を事例に——

[メンター]

モンゴル留日学生と「満洲国」…………… 田中 剛(人文学研究科研究員) 161

韓国におけるライティング教育に関する調査 …………… 住田 哲郎(人文学研究科研究員) 169

平成 22 年度 第 2 期欧米プログラム

[長期研修生]

韓国市民運動の歴史的展開 …………… 米沢 竜也(国際協力研究科博士後期課程) 177

舞鶴、高行健の文学 …………… 小笠原 淳(人文学研究科博士後期課程) 189
——欧州プログラムで得たふたつの成果について——

[メンター]

US-Taiwan relations in the mid 1950s and the Influence of Think Tank within the Policy making
…………… 四方 俊祐(人文学研究科研究員) 195

À la recherche de l'origine de l'image : Histoires d'inventions d'images et leur « reproductibilité » contemporaine
…………… 唄 邦 弘(人文学研究科学術推進研究員) 203

平成 22 年度総括コメント …………… 207

平成 23 年度 第 4 期アジアプログラム

[長期研修生]

台湾における外国語文学の受容の在り方 …………… 中 島 恵(人文学研究科博士後期課程) 213
——主にイギリス児童文学『ハリー・ポッター』の受容から——

ITP 最終報告書 …………… 趙 昊 一(国際協力研究科博士後期課程) 219
——ソウル国立大学校での留学を終えて——

[メンター]

台湾夜市の消費者研究の可能性…………… 藤岡 達磨(人文学研究科研究員) 223
——先行研究の分析フレームの検討から——

朝鮮文化財返還問題と日韓文化交流 …………… 長澤 裕子(国際協力研究科研究員) 229

平成 23 年度 第 3 期欧米プログラム

[長期研修生]

日本語・中国語・韓国語・英語の行動展開表現に関する対照研究
…………… 楊 吟(人文学研究科博士後期課程) 233

[メンター]

ポスト・マハティール期のマレーシアにおける情報化と社会運動
…………… 伊 賀 司(国際協力研究科研究員) 241

A Brochure “ 僑資工廠在自由中国 ” and Taiwan Economy in the 1950s
…………… 四方 俊祐(人文学研究科研究員) 249

平成 23 年度総括コメント …………… 255

平成 24 年度 第 5 期アジアプログラム

[長期研修生]

Aesthetic Proximity: *Cosplay* in Taiwan as an Appropriative Institution of *Fandom*

..... アルバロ・ダヴィド・エルナンデス・エルナンデス (人文学研究科博士後期課程) 261

朝貢と保護をめぐる葛藤 三村 佳充(国際協力研究科博士後期課程) 277
——デニー・メレンドルフ論争を中心に——

[メンター]

江南左派形成の背景と「安哲秀現象」..... 横溝 未歩(国際協力研究科博士後期課程) 281

平成 24 年度 第 4 期欧米プログラム

[長期研修生]

ワシントン大学での派遣経験を通して知る西洋文化とそこに根付くキリスト教の影響

..... 中 島 恵(人文学研究科博士後期課程) 291

ITP 最終報告書 趙 昊 一(国際協力研究科博士後期課程) 295
——ワシントン大学での留学を終えて——

[メンター]

US Policy toward Taiwan and Overseas Chinese in the Early Cold War .. 四方 俊祐(人文学研究科研究員) 297

平成 24 年度総括コメント 303

4. 発表原稿

[ITP コロキアム「東アジアにおける域外経験と文化接触——言語から探る日本と台湾及び中国大陆の文化往還——」]

Bases for Research on *Cosplay* Culture and Fan Communities in Taiwan

..... アルバロ・ダヴィド・エルナンデス・エルナンデス (人文学研究科博士後期課程) 311

戦争期時殖民地台湾『文化包装』下の『戦争』與臺灣知識份子之『戦争認識』

——以吳新榮 呂赫若 葉榮鐘 林獻堂為例—— 石 廷 宇(台湾大学台湾文学研究所博士生) 325

論日治時期台灣傳統文人書寫中的女性形象及其文化意涵 劉 于 慈(台湾大学台湾文学研究所博士生) 351
——以《詩報》(1930-1944) 為觀察場域——

夢裡剪燭魂歸遲 莊 怡 文(台湾大学台湾文学研究所博士生) 361
——小泉盜泉《盜泉詩稿》中的愛情世界——

消費者為什麼去夜市? 藤岡 達磨(人文学研究科研究員) 371
——基於對士林夜市問卷調查的分析——

淺論戰後台灣文學中的現代主義敘述特徵 小笠原 淳(人文学研究科學術推進研究員) 381
——《現代文學》與舞鶴作品的敘述脈絡——

[ITP コロキアム「日本とアメリカ合衆国における日本学——日本の言語・文化についての比較研究的視座——」]

Success and Hope for the Salaryman: Japan's Economic Miracle and the Comedy of the Crazy Cats and the Drifters

..... 五十嵐香里(PhD Student at AL&L, UW) 391

A Reappraisal of the Taiwan's Role in the Cold War in the 1950s 四方 俊祐(人文学研究科研究員) 411

Offer Expressions in Japanese, Chinese, Korean and English 楊 吟(人文学研究科博士後期課程) 417

Enlightenment and Nonduality in Saigyō Bonnie McClure (MA Student at AL&L, UW) 427

Dematerialization in Abe Kōbō's <i>Hakobune Sakura Maru</i>	Sarah M. Clayton (PhD Student at AL&L, UW)	437
The Importance of Motherhood in <i>The Tale of Genji</i> and <i>Harry Potter</i> : A Comparative Study about Gender in Old Japan and Current Western Culture	中 島 恵 (人文学研究科博士後期課程)	443
[ITP 総括国際シンポジウム「東アジアの共生社会実現に向けた新しい東アジア研究」]		
Kobe University Ignites Strategic Partnerships with East Asian Universities	中村 千春 (神戸大学副学長 (国際交流担当))	453
Royal Power and the State: A Study on the Annexation of Korea.....	三村 佳充 (国際協力研究科博士後期課程)	457
Origin of Civil Movements in South Korea	米沢 竜也 (国際協力研究科博士後期課程)	461
South Korean Society Viewed through “Gangnam Style”	横溝 未歩 (国際協力研究科博士後期課程)	465
Contrastive Study on Speech Patterns: Focus on Requests as Made in Japanese, Chinese, English, and Korean	楊 吟 (人文学研究科博士後期課程)	469
On the Relationship between Japanese Americans and African Americans in Nina Revoyr's <i>Southland</i>	沖野 真理香 (人文学研究科研究員)	475
US Policy toward Taiwan and Overseas Chinese in the Early Cold War.....	四方 俊祐 (人文学研究科研究員)	481
5. 外部評価		487
6. 教員・派遣生からの声		501

1. 「東アジア共生社会の構築のための多極的教育研究プログラムについて」

「東アジア共生社会の構築のための多極的教育研究プログラム」は、独立行政法人日本学術振興会(J S P S)の「平成20年度若手研究者インターナショナル・プログラム」の一環として、神戸大学大学院人文学研究科と国際協力研究科が共同で、平成20年度から5年間にわたって実施されるプログラムである。

本プログラムは、現在東アジアが直面する政治外交・文化をめぐる諸問題の解決に向けて、東アジア相互の対話と共生を可能にするグランドデザインを設計できる若手研究者を育成する取組である。そのために、東アジアに関連する人文科学と社会科学の2つのディシプリンの中で、以下の諸分野を習得するプログラムを構築し、東アジアに関する高度な研究能力と学術論文作成能力及び外国語による研究発表能力を備えた国際的に活躍できる人材の育成を目指す。そのカバーする学術分野は以下の通りである。

- 1) 地域研究(アジア研究、現代中国研究、現代韓国研究)
- 2) 政治学(中国政治、韓国政治、台湾政治、外交史)
- 3) 歴史学(東洋史、日本史、美術史)
- 4) 社会学(社会構造論、社会変動論、文化社会学)
- 5) 言語学、文学(英語・英文学、東アジア文学)

本プログラムの目的

現在の複雑化する世界の中で、東アジアは、国家を越える異文化の浸透が必ずしも人々の相互理解につながらない地域のひとつである。東アジア相互の対話や共生のためのグランドデザインの構築は喫緊の課題であり、そのためには、長い歴史の中で形成された東アジア相互の歴史文化に関する深い理解と広範な知識が必要である。人文学はそうした理解や知識を提供する学問分野として蓄積を持っている。また、社会科学はこれまで、そうした理解や知識に基づいて、新たな社会を構想する分析枠組を提供してきた。そこで本プログラムは、神戸大学の人文学研究科と国際協力研究科が協力して、アジアと欧米の東アジア研究の蓄積を習得しつつ、地域研究・歴史文化研究という複数ディシプリン内の諸分野を相互に参照するような複合的トレーニングを行うことによって、政治と文化の問題が複雑に関連した東アジアにおいて、対話や共生のためのグランドデザインを構築できる人材を養成することを目的とする。

本プログラムの特色



本プログラムは、東アジア相互の対話や共生のグランドデザインを構築できる若手研究者を養成するに当たり、人文科学・社会科学のアプローチを双方共に理解し、政治と文化が複雑に関連した東アジアの諸問題を有効に解決できる人材育成のプログラムを構築しようとする点に特色がある。

東アジアに関する学問研究は、戦前から歴史資料文献学(「東洋史」と、戦後に地域研究の一環として出発した「アジア研究」が並行する形で進められ、時に対立してきた。しかし、政治と文化が複雑に関連した東アジアを考えるには、この2つの学問研究を相互に参照する必要がある。

東アジアに関する人文科学・社会科学の教育研究機関として、歴史と蓄積を有する神戸大学の人文学研究科と、国際協力研究科が、これまで培ったプログラムに基づきながら、本プログラムは、海外パートナー機関と共同で東アジアに関する新しい教育研究プログラムを開発する。そのことにより、国際的に活躍する高度な研究能力を有する東アジア研究者を輩出してゆくことを目指す。

本プログラムにおける教育研究の内容

本プログラムが実施する派遣者の教育研究の具体的な内容は、以下のようなものである。

○「アジアプログラム（10月～6月）」

海外パートナー機関において最長270日間のアジア研修を行い、現地に溶け込んだ参与観察、社会文化の経験的理解を深め、人文科学若しくは社会科学の枠組を構想する。ポスドク・助教については60日間派遣し、メンターの役割を担い、指導教員とともに現地指導を行う。

○「欧米プログラム（10月～6月）」

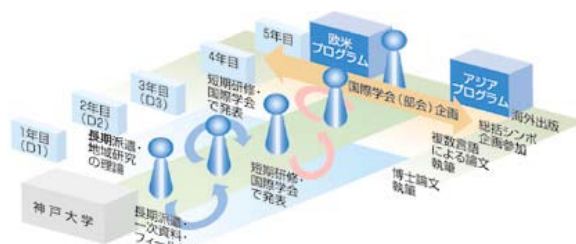
海外パートナー機関において最長270日間の欧米研修を行い、欧米の東アジア研究の蓄積と分析的アプローチを参照することで、アジアプログラムで得た構想を再検討し、世界の東アジア研究に発信できる独自の理論的アプローチを構築する。

○「博士論文の現地語・英語による作成及び海外出版」

3年目に博士論文を完成させ、学位を取得する。その後、海外での出版に向けて、博論他言語執筆支援部会の指導を受け、第2・第3言語版の作成を行う。

○「コロキウム（集中セミナー）開催等による国際研究企画運営能力の育成、グランドデザインの構築」

代表的な国際アジア学会（アメリカアジア学会：AAS）等のテーマ企画や、オルガナイザーとしてのコロキウム開催などにより、最先端の国際研究を企画運営する能力を養い、新たな東アジア社会のグランドデザインを構築する。



2. 各年度の取り組み

○平成 20 年度（2008 年度）の取り組み

平成 20 年度は、東アジアの現地での社会調査、語学訓練、国際共同研究等の研修を積み、現地に溶け込んだ参与観察や社会文化の経験的理解を深め、アジア学の最先端の理論研究を担える人材養成を目的とする「第 1 期アジアプログラム」を以下の様に実施した。（所属は派遣時のもの）

①アジアプログラム（長期派遣）として、以下の 2 名が平成 20 年 10 月より最大 9 カ月に及ぶ長期研修を始めた。

藤岡 達磨（神戸大学大学院人文学研究科博士後期課程 1 年）

研修テーマ：「東アジアにおける公共圏構築の可能性について——消費社会論とトラウマの社会学を架橋する社会理論の構築を目指して——」

派遣先：国立台湾大学

横溝 未歩（神戸大学大学院国際協力研究科博士後期課程 1 年）

研修テーマ：「韓国の自己認識と統一政策——韓国のドイツをみる視点から——」

派遣先：成均館大学校

②アジアプログラム（短期派遣）として、以下の 2 名が平成 21 年 1 月より 2～3 か月の短期研修と長期派遣者のメンター業務に従事した。

速水 奈名子（神戸大学大学院人文学研究科学術推進研究員）

研修テーマ：「東アジア社会におけるグローバル時代の自己形成論——身体イメージが自己形成に与える影響——」

派遣先：国立台湾大学

田中 悟（神戸大学大学院国際協力研究科助教）

研修テーマ：「現代韓国における死者と政治」

派遣先：成均館大学校

○平成 21 年度（2009 年度）の取り組み

平成 21 年度は、東アジアの現地での社会調査、語学訓練、国際共同研究等の研修を積み、現地に溶け込んだ参与観察や社会文化の経験的理解を深め、アジア学の最先端の理論研究を担える人材養成を目的とする「第 2 期アジアプログラム」を以下の様に実施した。（所属は派遣時のもの）このアジアプログラムにおける長期派遣者の派遣先には、ポスドク・助教 2 名を選抜のうえ派遣し、短期研修と長期派遣者に対するメンターの役割を担わせる。

①アジアプログラム（長期派遣）として、以下の 2 名が平成 21 年 10 月より最大 9 カ月に及ぶ長期研修を受けた。

米沢 竜也（神戸大学大学院国際協力研究科博士後期課程 1 年）

研究テーマ：「韓国における社会運動ネットワークと政治の相互関係」

派遣先：ソウル大学校

小笠原 淳（神戸大学大学院人文学研究科博士後期課程 1 年）

研究テーマ：「中国同時代文学テキストから探る東アジア共生の可能性」

派遣先：国立台湾大学

②アジアプログラム（短期派遣）として、以下の2名が平成21年12月より3カ月の短期研修と長期派遣者のメンター業務に従事した。

田中 悟（神戸大学大学院国際協力研究科助教）

研究テーマ：「韓国「国家報勲」政策の一側面——山清護国院建設を事例として——」

派遣先：ソウル大学校

村田 省一（神戸大学大学院人文学研究科学術推進研究員）

研究テーマ：「植民地期台湾における都市行政発展への現地住民関与について」

派遣先：国立台湾大学

「第2期アジアプログラム」とならんで、欧米の東アジア研究の蓄積と分析的アプローチを参照することで、アジアプログラムで得た構想を再検討し、世界の東アジア研究に発信できる独自の理論的アプローチを構想する「第1期欧米プログラム」を以下のように実施した。（所属は派遣時のもの）この欧米プログラムにおける長期派遣者の派遣先には、ポスドク・助教2名を選抜のうえ派遣し、短期研修と長期派遣者に対するメンターの役割を担わせる。

①欧米プログラム（長期派遣）として、以下の2名が平成21年10月より最大9カ月に及ぶ長期研修を受けた。

藤岡 達磨（神戸大学大学院人文学研究科博士後期課程2年）

研究テーマ：「フランスにおける公共圏と消費社会についての理論的研究」

派遣先：リヨン高等師範大学

横溝 未歩（大学院国際協力研究科博士後期課程2年）

研究テーマ：「韓国の自己認識と統一政策——韓国のドイツをみる視角から——」

派遣先：ワシントン大学

②欧米プログラム（短期派遣）として、以下の2名が平成21年1月より3カ月の短期研修と長期派遣者のメンター業務に従事した。

速水 奈名子（大学院人文学研究科学術推進研究員）

研究テーマ：「東アジア社会における女性の身体統制に関わる分析——身体イメージ・統制に関する理論的フレームワークの形成——」

派遣先：リヨン高等師範大学

田中 剛（神戸大学大学院人文学研究科研究員）

研究テーマ：「在外モンゴル人と文化記憶——1940・50年代における在外モンゴル人の動向と民族アイデンティティの再構築——」

派遣先：ワシントン大学

第1期アジアプログラム派遣者成果報告会

同プログラムの終了者（長期派遣者2名、短期派遣者4名）の研修結果を広く内外に報告し討論する場として、第1期アジアプログラム派遣者成果報告会を2009年7月13・14日に開催した。同報告会のプログラムは以下の通りである。

日時：2009年7月13日（月） 9時～15時

14日（火）10時～12時

場所：神戸大学大学院人文学研究科「学生ホール」(A棟 1F)

7月13日(月) 9時～12時

第1期アジアプログラム長期・短期派遣者成果報告会

藤岡達磨(神戸大学大学院人文学研究科博士後期課程2年)
横溝未歩(神戸大学大学院国際協力研究科博士後期課程2年)
速水奈名子(神戸大学大学院人文学研究科学術推進研究員)
田中悟(神戸大学大学院国際協力研究科助教)

7月13日(月) 13時～15時

成果報告へのコメント・討論

胡家瑜(国立台湾大学社会学部教授)
沈之淵(慶南大学校政治外交史学科教授)

7月14日(火) 10時～12時

コロキウム「アジアプログラムの意義と方法をめぐって」

佐々木 衛(ITP推進委員会委員長)
「アジアプログラムと東アジア国際交流の未来」
高橋 基樹(ITP推進委員会評価部会長)
「アジアプログラムのこれからの展望——SOASの経験から見たITPの可能性——」
和田 章男(大阪大学大学院文学研究科国際連携室長)
「エラスムス・ムンドゥスに見る知の拠点形成と国際交流」

○平成22年度(2010年度)の取り組み

平成22年度は、東アジアの現地での社会調査、語学訓練、国際共同研究等の研修を積み、現地に溶け込んだ参与観察や社会文化の経験的理解を深め、アジア学の最先端の理論研究を担える人材養成を目的とする「第3期アジアプログラム」を以下の様に実施した。(所属は派遣時のもの)

①アジアプログラム(長期派遣)として、以下の2名が平成22年10月より最大9カ月に及ぶ長期研修を受けた。

松浦 真弓(国際協力研究科博士後期課程2年)
研究テーマ：「中国内陸部における持続可能な観光開発モデル」
派遣先：中山大学(中国)

楊 吟(人文学研究科博士後期課程1年)
研究テーマ：「日本語と中国語と韓国語の行為要求表現の対照研究」
派遣先：成均館大学校(韓国)

②アジアプログラム(短期派遣)として、以下の2名が平成23年1月より3カ月の短期研修と長期派遣者のメンター業務に従事した。

田中 剛(人文学研究科学術推進研究員)
研究テーマ：「人民共和国建国前後におけるモンゴル人知識人の“再編”—1947～1957—」
派遣先：中山大学(中国)

住田 哲郎（人文学研究科助教）

研究テーマ：「日本語・韓国語のヴォイス表現の使用に関する対照研究」

「ライティングにおける韓国人の表現スタイルと作品教育に関する研究」

派遣先：成均館大学校（韓国）

「第3期アジアプログラム」とならんで、欧米の東アジア研究の蓄積と分析的アプローチを参照することで、アジアプログラムで得た構想を再検討し、世界の東アジア研究に発信できる独自の理論的アプローチを構想する「第2期欧米プログラム」を以下のように実施した。（所属は派遣時のもの）この欧米プログラムにおける長期派遣者の派遣先には、ポストドク2名を選抜のうえ派遣し、短期研修と長期派遣者に対するメンターの役割を担わせる。

①欧米プログラム（長期派遣）として、以下の2名が平成22年10月より最大9カ月に及ぶ長期研修を受けた。

米沢 竜也（国際協力研究科博士後期課程2年）

研究テーマ：「韓国市民運動の歴史的展開」

派遣先：ワシントン大学（アメリカ）

小笠原 淳（人文学研究科博士後期課程2年）

研究テーマ：「舞鶴、高行健の文学—欧州プログラムで得たふたつの成果について—」

派遣先：国立パリ政治学院（フランス）

②欧米プログラム（短期派遣）として、以下の2名が平成22年1月より3カ月の短期研修と長期派遣者のメンター業務に従事した。

四方 俊祐（人文学研究科研究員）

研究テーマ：「台湾の経済発展と米国の華僑・華人政策」

派遣先：ワシントン大学（アメリカ）

唄 邦弘（人文学研究科学術推進研究員）

研究テーマ：「日本/フランスにおける考古学の資料調査及び比較研究」

派遣先：国立パリ政治学院（フランス）

第1期欧米プログラム・第2期アジアプログラム派遣者成果報告会

同プログラムの終了者（長期派遣者、短期派遣者共に4名）の研修結果を広く内外に報告し討論する場として、成果報告会を2010年7月16日に開催した。同報告会のプログラムは以下の通りである。

日時：2010年7月16日 9:30～

場所：本学人文学研究科学生ホール（アジアプログラム）

本学人文学研究科小会議室（欧米プログラム）

報告者

[アジアプログラム]

田 中 悟（神戸大学大学院国際協力研究科助教）

9:30～10:10

米沢 竜也（神戸大学大学院国際協力研究科博士後期課程）

10:10～10:50

小笠原 淳（神戸大学大学院人文学研究科博士後期課程）

10:50～11:30

（村田 省一は海外研究職に赴任中につき不参加。）

[欧米プログラム]

田 中 剛（神戸大学大学院人文学研究科学術推進研究員）	9：30～10：10
速水 奈名子（神戸大学大学院人文学研究科学術推進研究員）	10：10～10：50
横溝 未歩（神戸大学大学院国際協力研究科博士後期課程）	10：50～11：30
藤岡 達磨（神戸大学大学院人文学研究科博士後期課程）	11：30～12：10

○平成 23 年度（2011 年度）の取り組み

平成 23 年度は、平成 22 年度の「第 3 期アジアプログラム」「第 2 期欧米プログラム」の長期研修を継続すると共に、1) 東アジアの現地で社会調査、語学訓練、国際共同研究等の研修を積み、現地に溶け込んだ参与観察や社会文化の経験的理解を深め、アジア学の最先端の理論研究を担える人材養成を目的とする「第 4 期アジアプログラム」を引き続き実施し、2) 海外パートナー機関において最長 270 日間の欧米研修を行い、欧米の東アジア研究の蓄積と分析的アプローチを参照することで、アジアプログラムで得た構想を再検討し、世界の東アジア研究に発信できる独自の理論的アプローチを構想する「第 3 期欧米プログラム」を引き続き実施した。

①第 4 期アジアプログラム（長期派遣）として、以下の 2 名が平成 23 年 10 月より最大 9 カ月に及ぶ長期研修を受けた。

中島 恵（人文学研究科博士後期課程 1 年）

研究テーマ：『『ハリー・ポッター』の東アジアにおける受容に関する比較文化研究』

派 遣 先：国立台湾大学（台湾）

趙 吳一（国際協力研究科博士後期課程 1 年）

研究テーマ：「Studie on Education Finance, Education and Labor Market in South Korea」

派 遣 先：ソウル大学校（韓国）

②第 4 期アジアプログラム（短期派遣）として、以下の 2 名が平成 23 年 11 月より 3 カ月の短期研修と長期派遣者のメンター業務に従事した。

藤岡 達磨（人文学研究科学術推進研究員）

研究テーマ：「消費を通じた「共同性」——台湾における夜市の社会的認識を事例に——」

派 遣 先：国立台湾大学（台湾）

長澤 裕子（国際協力研究科学研究員）

研究テーマ：「ソウル大学奎章閣と韓国文化財の返還交渉についての研究」

派 遣 先：ソウル大学校（韓国）

「第 4 期アジアプログラム」とならんで、欧米の東アジア研究の蓄積と分析的アプローチを参照することで、アジアプログラムで得た構想を再検討し、世界の東アジア研究に発信できる独自の理論的アプローチを構想する「第 3 期欧米プログラム」を以下のように実施した。（所属は派遣時のもの）この欧米プログラムにおける長期派遣者の派遣先には、ポスドク 2 名を選抜のうえ派遣し、短期研修と長期派遣者に対するメンターの役割を担わせる。

①第 3 期欧米プログラム（長期派遣）として、以下の 1 名が平成 23 年 11 月より最大 9 カ月に及ぶ長期研修を受けた。

楊 吟（人文学研究科博士後期課程 2 年）

研究テーマ：「日本語・中国語・韓国語・英語の行動展開表現に関する対照研究」

派 遣 先：ワシントン大学（アメリカ）

②第3期欧米プログラム（短期派遣）として、以下の2名が平成22年10月より3カ月の短期研修と長期派遣者のメンター業務に従事した。

伊賀 司（国際協力研究科研究員）

研究テーマ：「アジア諸国の情報化と情報統制に関する比較研究」

派遣先：ロンドン大学（イギリス）

四方 俊祐（人文学研究科研究員）

研究テーマ：「台湾の経済発展と米国の台湾と華僑・華人政策に関する考察」

派遣先：ワシントン大学（アメリカ）

第2期欧米プログラム・第3期アジアプログラム派遣者成果報告会の開催

第2期欧米プログラム・第3期アジアプログラム終了者（長期派遣者4名、短期派遣者4名）の研修成果を広く内外に報告し討論する場として、第1期欧米プログラム・第2期アジアプログラム派遣者成果報告会を2011年7月30日に開催した。同成果報告会のプログラムは以下のとおりである。

日時：2011年7月30日（土）13時00分～

場所：神戸大学大学院人文学研究科 一階 学生ホール（アジアプログラム）

神戸大学大学院人文学研究科 一階 小ホール（欧米プログラム）

報告者

[アジアプログラム]

13時00分～13時30分 田中 剛（人文学研究科研究員）

13時30分～14時00分 住田哲郎（人文学研究科研究員）

14時00分～14時30分 松浦真弓（国際協力研究科博士後期課程2年）

14時30分～15時00分 楊 吟（人文学研究科博士後期課程2年）

[欧米プログラム]

13時00分～13時30分 唄 邦弘（文化科学研究科博士課程）

13時30分～14時00分 四方俊祐（人文学研究科研究員）

14時00分～14時30分 小笠原淳（人文学研究科博士後期課程3年）

14時30分～15時00分 米沢竜也（国際協力研究科博士後期課程3年）

○平成24年度（2012年度）の取り組み

平成24年度は、平成23年度の「第4期アジアプログラム」「第3期欧米プログラム」の長期研修を継続すると共に、1）東アジアの現地で社会調査、語学訓練、国際共同研究等の研修を積み、現地に溶け込んだ参与観察や社会文化の経験的理解を深め、アジア学の最先端の理論研究を担える人材養成を目的とする「第5期アジアプログラム」を引き続き実施し、2）海外パートナー機関において最長270日間の欧米研修を行い、欧米の東アジア研究の蓄積と分析的アプローチを参照することで、アジアプログラムで得た構想を再検討し、世界の東アジア研究に発信できる独自の理論的アプローチを構想する「第4期欧米プログラム」を引き続き実施した。

①第5期アジアプログラム（長期派遣）として、以下の2名が平成24年10月より最大6カ月に及ぶ長期研修を受けた。

三村 佳充（国際協力研究科博士課程 1 年）

研究テーマ：「1880 年代における閔氏勢道と「宮中」と「府中」の関係」

派 遣 先：ソウル大学校（韓国）

アルバロ・ダビド・エルナンデス・エルナンデス（人文学研究科博士後期課程 1 年）

研究テーマ：「ファン・コミュニティの研究 - 台湾のコスプレ事情を中心に」

派 遣 先：国立台湾大学（台湾）

②第 5 期アジアプログラム（短期派遣）として、以下の 1 名が平成 24 年 12 月より 3 カ月の短期研修と長期派遣者のメンター業務に従事した。

横溝 未歩（国際協力研究科博士後期課程 3 年）

研究テーマ：「現代観光における「保安/進歩」と「統一問題」

派 遣 先：ソウル大学校（韓国）

「第 5 期アジアプログラム」とならんで、欧米の東アジア研究の蓄積と分析的アプローチを参照することで、アジアプログラムで得た構想を再検討し、世界の東アジア研究に発信できる独自の理論的アプローチを構想する「第 4 期欧米プログラム」を以下のように実施した。（所属は派遣時のもの）この欧米プログラムにおける長期派遣者の派遣先には、ポスト 2 名を選抜のうえ派遣し、短期研修と長期派遣者に対するメンターの役割を担わせる。

①第 4 期欧米プログラム（長期派遣）として、以下の 1 名が平成 24 年 10 月より最大 6 カ月に及ぶ長期研修を受けた。

中島 恵（人文学研究科博士後期課程 2 年）

研究テーマ：「現代イギリス小説の東アジアにおける受容に関する比較文化研究——『ハリー・ポッター』を中心に——」

派 遣 先：ワシントン大学（アメリカ）

趙 昊一（国際協力研究科博士後期課程 2 年）

研究テーマ：「Studies on Education Finance, Education and Labor Market in Vietnam」

派 遣 先：ワシントン大学（アメリカ）

②第 4 期欧米プログラム（短期派遣）として、以下の 1 名が平成 25 年 1 月より 3 カ月の短期研修と長期派遣者のメンター業務に従事した。

四方 俊祐（人文学研究科研究員）

研究テーマ：「1950 年代半ばにおける米国の台湾政策と東アジア冷戦の変容に関する考察」

派 遣 先：ワシントン大学（アメリカ）

第 3 期欧米プログラム・第 4 期アジアプログラム派遣者成果報告会の開催

第 3 期欧米プログラム・第 4 期アジアプログラム終了者（長期派遣者 3 名、短期派遣者 4 名）の研修成果を広く内外に報告し討論する場として、第 3 期欧米プログラム・第 4 期アジアプログラム派遣者成果報告会を 2012 年 7 月 31 日に開催した。同成果報告会のプログラムは以下のとおりである。

日時：2012 年 7 月 31 日（火）13 時 00 分～

場所：神戸大学大学院人文学研究科 A 棟一階小会議室（事務室内）

報告者

[アジアプログラム]

13 時 00 分～13 時 20 分 中島 恵（神戸大学大学院人文学研究科博士課程 2 年）

13 時 20 分～13 時 40 分 藤岡 達磨（神戸大学大学院人文学研究科研究員）

13 時 40 分～14 時 00 分 趙 昊一（神戸大学大学院国際協力研究科博士課程 2 年）

14 時 00 分～14 時 20 分 長澤 裕子（神戸大学大学院国際協力研究科研究員）

[欧米プログラム]

14 時 35 分～14 時 55 分 楊 吟（神戸大学大学院人文学研究科博士課程 3 年）

14 時 55 分～15 時 15 分 四方 俊祐（神戸大学大学院人文学研究科研究員）

15 時 15 分～15 時 35 分 伊賀 司（神戸大学大学院国際協力研究科研究員）

指導教員コメント（A 棟小会議室）

15 時 45 分～16 時 45 分

菱川秀行（神戸大学大学院人文学研究科教授）

小川啓一（神戸大学大学院国際協力研究科教授）

鈴木義和（神戸大学大学院人文学研究科教授）

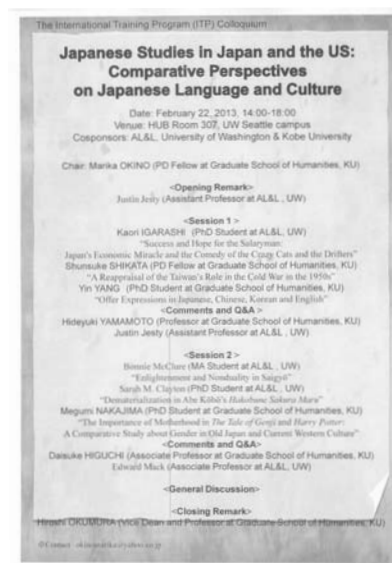
ソウル大学校における ITP 総括国際シンポジウムの開催

2013 年 1 月 10・11 日、ソウル大学校にて国際シンポジウム「東アジアの共生社会実現に向けた新しい東アジア研究」を開催し、とくに 2 日目（11 日）は ITP を 総括するシンポジウムとして行った。この ITP 総括国際シンポジウムでは、ITP 修了生・派遣生 5 名（うち一名は当日欠席）が派遣を通じて培った研究成果を発表した。



ITP コロキウム（国立台湾大学・ワシントン大学）の開催

ITP 派遣生・修了生が国際研究の企画・運営能力を養い、国際的な研究交流を深めるために、ITP コロキウム「東アジアにおける域外経験と文化接触—言語から探る日本と台湾及び中国大陆の文化往還」を企画し、2012 年 12 月 21 日に国立台湾大学において開催した。同じく、2013 年 2 月 22 日にはワシントン大学において、ITP コロキウム「日本とアメリカ合衆国における日本学—日本の言語・文化についての比較研究的視座」を開催した。



ITP コロキアムー
若手研究者の国際学会企画運営
について

報告者
山本秀行(人文学研究科)

ITP コロキアム概要

- 1)「東アジアにおける域外経験と文化接触—言語から探る日本と台湾及び中国大陆の文化往還」(2012年12月21日9:00～12:10, 国立台湾大学)
- 2)「日本とアメリカ合衆国における日本学—日本の言語・文化についての比較研究的視座」(2013年2月22日14:00～18:00, ワシントン大学シアトルキャンパス)

1) ITPコロキアム(国立台湾大学)

主な参加者:(順不同、敬称略)
(神戸大学)教員2名:緒形、樋口
学生3名(ITP)藤岡、小笠原、Alvaro
(台湾大学)教員3名:洪ほか
学生3名:石、莊、劉

1) ITPコロキアム(国立台湾大学)



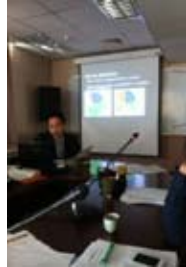
1) ITPコロキアム(国立台湾大学)



1) ITPコロキアム(国立台湾大学)



1) ITPコロキウム(国立台湾大学)



1) ITPコロキウム(国立台湾大学)



2) ITPコロキウム(ワシントン大学)



2) ITPコロキウム(ワシントン大学)

- 主な参加者:(順不同、敬称略)
- (神戸大学)教員3名:奥村、樋口、山本
- ITP学生2名:楊、中島
- メンター1名:四方
- PD1名:沖野
- (ワシントン大学)教員2名:Jesty, Mack
- 学生3名:Clayton, McClure, Igarashi
- <参加者合計:25~30名>

2) ITPコロキウム(ワシントン大学)



2) ITPコロキウム(ワシントン大学)



2)ITPコロキウム(ワシントン大学)



2)ITPコロキウム(ワシントン大学)



若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム(ITP) 派遣者一覧

実施年度	プログラム	番号	派遣者氏名	所属	身分	期間	派遣先	研究テーマ
20年度	第一期アジアプログラム	1	藤岡 達磨	人文学	D1	2008/10/1～2009/6/27	国立台湾大学	「東アジアにおける公共圏構築の可能性について—消費社会論とトラウマの社会学を架橋する社会理論の構築を目指して」
		2	横溝 未歩	人文学	D1	2008/10/1～2009/6/27	成均館大学	「韓国の自己認識と統一政策—韓国のドクトルをみる視角から」
		3	速水 奈名子	人文学	学術推進研究員	2009/1/31～2009/3/31	国立台湾大学	「東アジア社会におけるグローバル化時代の自己形成論—身体イメージが自己形成に与える影響」
		4	田中 悟	国際協力	助教	2009/1/3～2009/3/30	成均館大学	「現代韓国における死者と政治」
21年度	第二期アジアプログラム	5	小笠原 淳	人文学	D1	2009/10/15～2010/4/30	国立台湾大学	「日先勇(尊子)興—一九七〇年代台北都市記憶—以野人咖啡店、新公園蓮花池、克難街を中心—」
		6	米沢 竜也	国際協力	D1	2009/10/1～2010/6/30	ソウル大学	「韓国市民団体の立法運動と政治課程」
		7	村田 省一	人文学	学術推進研究員	2009/12/1～2010/2/28	国立台湾大学	「日韓時代台湾自來水建設状況と当地居民の関係」
		8	田中 悟	国際協力	助教	2009/12/21～2010/3/15	ソウル大学	「韓国」国家報勅」政策の一側面—山清護国院建設を事例として—」
22年度	第一期欧米プログラム	9	藤岡 達磨	人文学	D2	2009/11/30～2010/6/27	リヨン高等師範大学	「Lyoniにおけるシンポジウムセンターの社会的機能」
		10	横溝 未歩	人文学	D2	2009/10/1～2010/6/30	フジントン大学	「＜序論＞としての統一論—統一政策と統一観—」
		11	速水 奈名子	人文学	研究員	2010/1/30～2010/3/30	リヨン高等師範大学	「東アジア社会における女性の身体統制に関わる分析—身体イメージ・統制に関する理論的フレームワークの形成」
		12	田中 剛	人文学	学術推進研究員	2010/1/29～2010/4/4	フジントン大学	「1940・50年代内モンゴルにおけるモンゴル人エリートの動向と文字改革」
23年度	第二期アジアプログラム	13	松浦 真弓	国際協力	D2	2011/1/5～2011/6/30	中山大学	「中国内陸部における持続可能な観光開発モデル」
		14	楊 吟	人文学	D1	2010/10/1～2011/6/30	成均館大学	「日本語と中国語と韓国語の行為要求表現の対照研究」
		15	田中 剛	人文学	学術推進研究員	2011/1/25～2011/3/31	中山大学	「人民共和國建国前後におけるモンゴル人知識人の「再編」—1947～1957—」
		16	住田 哲郎	人文学	助教	2011/1/26～2011/4/5	成均館大学	「日本語・韓国語のヴォイス表現の使用に関する対照研究」[ライティングにおける韓国人の表現スタイルと作品教育に関する研究]
24年度	第二期欧米プログラム	17	米沢 竜也	国際協力	D2	2010/12/21～2011/6/30	フジントン大学	「舞鶴、高行健の文学—欧州プログラムで得たふたつの成果について—」
		18	小笠原 淳	人文学	D2	2010/12/27～2011/5/30	国立パリ政治学院	「台湾の経済発展と米国の華僑・華人政策」
		19	四方 俊祐	人文学	研究員	2011/1/13～2011/3/31	フジントン大学	「日本・フランスにおける考古学の資料調査及び比較研究」
		20	根 邦弘	人文学	学術推進研究員	2011/1/19～2011/3/31	国立パリ政治学院	「『ハリ・ポッター』の東アジアにおける受容に関する比較文化研究」
25年度	第四期アジアプログラム	21	中島 竜	人文学	D1	2011/10/8～2012/3/1	国立台湾大学	「『ハリ・ポッター』の東アジアにおける受容に関する比較文化研究」
		22	趙 昊一	国際協力	D1	2011/10/29～2012/7/28	ソウル大学	「[Study on Education Finance, Education and Labor Market in South Korea]
		23	藤岡 達磨	人文学	学術推進研究員	2011/11/15～2012/1/15	国立台湾大学	「消費を通じて」共同性—台湾における夜市の社会的認識を事例に—」
		24	長澤 裕子	国際協力	PD	2012/1/8～2012/3/31	ソウル大学	「ソウル大学産業界と韓国文化財の返還交渉についての研究」
26年度	第三期欧米プログラム	25	楊 吟	人文学	D2	2011/11/12～2012/7/1	フジントン大学	「日本語・中国語・韓国語・英語の行動展開表現に関する対照研究」
		26	伊賀 司	国際協力	PD	2011/10/31～2012/1/31	ロンドン大学 SOAS	「アジア諸国の情報化と情報統制に関する比較研究」
		27	四方 俊祐	人文学	研究員	2012/1/27～2012/3/29	フジントン大学	「台湾の経済発展と米国の台湾と華僑・華人政策に関する考察」
		28	三村 佳亮	国際協力	D1	2012/10/1～2013/3/29	ソウル大学	「1980年代における関税勢運と「宮中」と「府中」の関係」
27年度	第五期アジアプログラム	29	アル・バロ・ダビド・エルナンデス・エルナンデス	人文学	D1	2012/10/1～2013/3/28	国立台湾大学	「ファン・コミュニティの研究—台湾のコンプレックス事情を中心に—」
		30	横溝 未歩	国際協力	D4	2012/12/1～2013/2/28	ソウル大学	「現代観光における「保安/進歩」と統一問題」
		31	中島 竜	人文学	D2	2012/10/6～2013/3/29	フジントン大学	「現代イギリス小説の東アジアにおける受容に関する考察」
		32	趙 昊一	国際協力	D2	2012/11/12～2013/3/28	フジントン大学	「[Studies on Education Finance, Education and Labor Market in Vietnam]
28年度	第四期欧米プログラム	33	四方 俊祐	人文学	研究員	2013/1/13～2013/3/31	フジントン大学	「1950年代半ばにおける米国の台湾政策と東アジア冷戦の背景に関する考察」
		34	藤岡 達磨	人文学	研究員	2013/12/21	国立台湾大学	「消費者がなぜ去夜市?—基於對士林夜市問卷調查的分析」
		35	小笠原 淳	人文学	非常勤講師	2013/12/21	国立台湾大学	「試論戦後台湾文学中の現代主義叙述特徴—(現代文学)與舞鶴作品の叙述脈絡」
		36	アル・バロ・ダビド・エルナンデス・エルナンデス	人文学	D1	2013/12/21	国立台湾大学	「Bases for a Research on Cosplay Culture and Fan Communities in Taiwan」
29年度	ソウル大学校シンポジウム	37	米沢竜也	国際協力	D3	2013/1/10～1/12	ソウル大学	「The Origins of the Civil Movements in South Korea」
		38	横溝未歩	国際協力	D4	2013/1/10～1/12	ソウル大学	「[Gangnam Style: A New Aspect of Korean Society]」
		39	三村佳亮	国際協力	D3	2013/1/10～1/12	ソウル大学	「[The Royal Power and the State]」
		40	楊 吟	人文学	D3	2013/1/10～1/12	ソウル大学	「[A Constructive Study on Speech Acts based on Chinese, English and Korean Translations of Japanese Novels]
30年度	ITPコキアム(台湾大学)	41	四方 俊祐	人文学	研究員	2013/1/10～1/12	ソウル大学	「[US Policy toward Taiwan and Overseas Chinese in the Early Cold War]
		42	楊 吟	人文学	D3	2013/2/22	フジントン大学	「[Offer Expressions in Japanese, Chinese, Korea and English]
		43	中島 竜	人文学	D3	2013/2/22	フジントン大学	「[The Importance of Motherhood in <i>The Tale of Genji</i> and <i>Harry Potter</i> : A Comparative Study about Gender in Old Japan and Current Western Culture]
		44	四方俊祐	人文学	研究員	2013/2/22	フジントン大学	「[A Reappraisal of the Taiwan's Role in the Cold War in the 1950s]

3. 派遣者成果報告

平成 20 年度 第 1 期アジアプログラム

東アジアにおける公共圏構築の可能性について

——消費社会論とトラウマの社会学を架橋する社会理論の構築を目指して——

藤岡 達磨（人文学研究科博士後期課程 1 年）

派遣先：国立台湾大学（台湾）

はじめに

昨年の 10 月の 1 日から本年の 6 月 27 日まで、国立台湾大学へ ITP プログラムによる交換留学生として派遣され、主として台湾における消費の現場、特に台湾に特徴的な夜市というフィールドの現象から台湾の社会について分析するという研究を行ってきた。本報告ではまず現地での活動内容を時系列を追う形で記し、後にその活動から得られた研究成果について記していくこととする。

1. 台湾における活動内容

昨年の 10 月に台湾に着した際、まず行ったのは長期の研究生活を可能にするための生活環境の準備だった。また、その過程で中国語の能力特に会話能力の不足を実感し、台湾大学の指導教官である胡准教授と話し合いの結果、最初の三ヶ月は歴史・地理・文化等の基礎的な台湾社会の理解と、中国語能力の向上にあてられることとなった。したがって、午前中は台湾大学で中国語の授業を受け、昼からは図書館などで文献にあたり、夕方から夜市やその他の場所を観察に行くという生活スタイルで基本的に行動することになった。しかし、同時にこの 10 月期は何を見ても物珍しかった時期であったため、数多くの場所に赴き観察を行ってきた。私はもともと社会の消費の部分について研究しており、台湾では特に夜市というフィールドについて関心を持っていたことから、この 10 月の間に見て回った場所は、夜市では士林夜市、公館夜市、師大夜市、華西夜市、臨江街夜市などである。日本には存在しない「夜市」という社会的現象についてラフな形であるが、理解することができた。また夜市以外の消費空間も見て回り、「台湾の渋谷」と言われる西門街、近年もっともスタイリッシュな場所だと言われる台北 101 商圏、各種百貨店など近代的消費空間や、電気街である光華市場、家具街である文昌街、中古家具を扱う自強市場、週末にだけ開催される暇日玉市・花市などにも赴き観察を行った。このことで、台湾の商空間の一般的な傾向性と夜市の独自性についておぼろげながらつかむことができてきた。

11 月期は主として 2 つの側面の活動を行ってきた。それぞれ、台湾の基礎的な社会的文脈の理解、社会学的な意味の議論の整理である。台湾の基礎的な社会的文脈の理解については、前月から引き続き中国語学習を行い、文献により検討を行ってきたが、特に 11 月 11 日に台湾の前総統である陳水扁逮捕についての台湾のテレビメディアにおける語られ方や、新聞各紙における記事などから、台湾人のナショナルアイデンティティのありようについて理解が深まったように思われる。また、この 11 月期にこれまでの社会学的な意味の議論について整理検討し、現代社会における意味の議論の意義について記した論文を執筆している。また実地での調査については、11 月期は百貨店に重点的に赴き観察を行った。百貨店のように世界中のどこでも共通して見られる消費形態であっても制度・文化両面に台湾社会の影響が見られ、台湾の消費空間の傾向性をつかむことができた。また、台北市以外の夜市を見るために永和市にある樂華夜市に赴き観察を行った。その結果、台北という首都の夜市とそうではない夜市とを比較することで、台湾の夜市の性質について理解が深まった。しかし、11 月期は原因不明の耳の病気を患い、歩行の困難、目眩、視野の揺れなどを発症した。11 月期は常にこの症状の療養と並行しながら活動していく事になった。そのため、ある程度研究の進捗が滞ってしまった。

12 月期は、前月から引き続き台湾の基礎的な社会的文脈の理解について行いながら、同時に自分の専門である台湾における夜市の研究の進展についても調べはじめた。中国語の読解力の兼ね合いで、すらすら文献を読むのは難しかったが、ひとまず時間をかければ理解できるようになってきており、ある程度台湾についての理解が深まってきた。また、中国語の能力の中で特に不足しがちな会話力を補うために「言語交換」を台湾大学の学生と開始し

た。この結果中国語の会話力に向上が見られ、また同時に台湾人の認識について理解する場が与えられたことでより台湾社会に対する理解が深まったように思う。台湾における夜市の研究は、論文データベースの検索によれば多数あり、修士論文が多かった。しかし、こちらの研究の状況に暗かったので、まずどの研究から手を付けるべきか戸惑い、なかなか収集は順調に進まなかった。そこで台湾大学の人類学系の研究発表会で出会った大学院生のアドバイスで中央研究院の余舜徳教授が夜市の研究を行っていたことを知り、まず彼の研究業績について検討をはじめた。調査の面では引き続き消費現場に赴くことを続けており、師大夜市、公館夜市、忠孝 SOGO、中山三越、西門街などで引き続き観察を行い、新たに台北におけるポストモダンなショッピングセンターである京華城、台北市の隣の市である新店市の景美夜市などにも赴き観察を続けた。同時に台湾における歴史的経緯がどのように現在に影響を与え、表象されているのかについて見るために旧アメリカ領事館である「台北の家」、旧日本総統府が開発した温泉街である北投温泉に行き、現地の様子を見て回った。12 月期は当初の計画では台湾の基礎的コンテクストを理解する三ヶ月、最後の月であった。しかし、前月に発症した体調悪化の影響もあって計画に遅延が生じ、台湾社会のコンテクストの理解がこの後までズレ込むことになった。また、夜市についての研究についても台湾での文献の収集のノウハウがつかめておらず順調なスタートとはいかなかった。

1 月期は夜市研究のアプローチについて検討し、研究の計画について具体化することを目的として活動した。まずそのために台湾における先行研究について概観することが必要になり、台北にある国家図書館へ足を運び特に引用が多かった文献や論文を探しその内容について検討を行った。11 月から入手を考えていた余舜徳教授の本も二冊確保でき、その内容について整理を行った。特に余舜徳教授の夜市の研究は、質、量とも日本国内の研究では見たことがないほど詳細に夜市について記述されており、これまでの夜市に対する疑問がかなり解消された。また研究についての理論的方向性を検討するための文献として、鈴木謙介の『〈反転〉するグローバリゼーション』、大澤真幸の『資本主義のパラドックス』、B. マリノフスキーの『市の人類学』などの文献にあたり、理論的な面からも補強を行っていった。また、1 月の後半に台湾では春節を迎えるため、「年貨」と呼ばれる年末年始に食べる縁起物がどのように消費されているか気になり、台北でもっとも古いと言われる萬華地区に赴き、年貨商戦について観察した。またそのような年貨商戦が百貨店ではどのように行われているかを比較するために、SOGO 忠孝店でもその様子を観察した。このように春節ならではの現場に赴けたのは良かったが、台湾では春節を迎えた際ほとんどすべての店舗が閉まり、街が死んだようになること、またその期間が非常に長かったことは計算外であった。国家図書館や大学も休みの期間が多く、完全に当初の目標を達成することはできなかった。

2 月期はメンターの速水氏が台湾に到着したこともあり、久しぶりに本格的に社会学的な議論ができる環境が整ったこともあり、これまでの台湾生活の発見での発見や気づきについて議論する中でこれからの研究の方向性について示唆を得ることができた。この段階で台湾における夜市の研究についても、夜市における空間表象を社会表象として読み取り、夜市という空間の社会的定位と機能についての分析を行うことが大ざっぱな形ではあるが、決まってきた。家族的な繋がりが中心の台湾社会にあって、社会的な繋がりを回復し、また社会的な意識を個々の行為者に再構成するという側面が夜市にあると考えられ、そのような側面は夜市が非公式で非合法であるという条件に支えられていること、また夜市には場所消費の側面が強いことが見いだされ、このような観点から考察を進める目処が立った。研究に用いる観点が定まってきたこともあり、フィールドノートを取ることも必要な資料を集めることが可能になった。また夜市にかんする先行研究の検討も順調に進み夜市という社会空間の特性や台湾社会における夜市の意味づけなどについて新たな知見を得ることができた。さらに 2 月期は速水氏の紹介で中央研究院社会学研究所の Executive Director を務めている蕭新煌と面識を得ることができ、研究についての助言を得ることができた。

3 月期は、主要な夜市の先行研究と、引用されていることの多い余舜徳の夜市に関する論文について読破し、これまでの研究の概略についてある程度つかむことができた。先行研究をまとめた結果分かったことは、夜市の日本での研究事例はほとんどなく、台湾においても主として都市政策、建築学、人類学的な側面から研究が行われており社会学的な研究の蓄積があまりないことである。夜市の研究の社会学的進展の方向性としてどのような方向性がありえるか検討した結果、大澤真幸に代表される意味論的アプローチによる社会表象の分析枠組みが効果的であると考えたため、3 月期は意味論的アプローチを取っている社会学の文献についてあたってきた。『意味と他者性』、『恋愛の不可能性について』や『資本主義と他者』などの文献にあたり、他者性と社会についての理解を深めた。この

結果、台湾という社会においてなぜ夜市が重要な役割を担っているのかということについて、新たな示唆を得ることができた。また3月15から17日にかけて指導教官の油井教授が台湾に来られ研究の展望について指導いただき、油井教授の紹介で再び中央研究院の蕭新煌と知己を得ることができた。また、国父紀念館や中正紀念堂、228公園と228紀念館などを訪れ台湾における歴史がどのように表象されているかについて観察した。

4月期は夜市の社会空間の対照としてそれ以外の台湾の空間について調べることを重点的に行った。まず、台湾あるいは中華社会の家族に関する文献、あるいは台湾における伝統的な建築様式について検討している。また同時に比較のために日本の家族社会についての確認と、日本の伝統的な建築についても空間表象の面から検討してきた。家族に関してはこれまでそれほど深く学んでこなかったこともあり、興味深い観点を見いだしてきた。このような文献に関しては、現在もまだ網羅的に当たれているわけではないが、台湾での実際の経験と併せて次のような事が見えてくる。それは台湾における「家」がその空間表象から見ると非常に閉鎖的な構造を取っていること、そして同時に家内部での結びつきが強固であることである。またそのような閉鎖的な家の空間表象と対になる形で存在する台湾の「廟」についても同様に空間表象の面から検討を行っていった。また同様に夜市の「廟」との空間表象上の類似性から検討し、夜市が廟のような共同的行為を営む場であることが分かった。そこから、夜市は「共に」食事を取りながら、「共に」夜市という活動に参加し、夜市という場所を「共に」消費する。この点が夜市における行為では強調されているということが見いだされてきた。このような側面は、形式上似たような形を取るが、すでにあらかじめすべての行為の意味づけが経済的な消費に向かって与えられているショッピングセンターなどとは大きく異なり、夜市は狭い意味での消費空間とは一線を画す空間であることが見えてきた。このような側面は夜市を狭い意味での消費空間として整備しようとして、かえってその正式化によって整えられた部分が寂れてしまった華西・園環「観光夜市」の事例がこのことを裏付けているように思われる。また、4月度は蕭新煌教授からの紹介で、中央研究院社会学研究所で夜市の研究をしている邱啓新という Ph.D. の研究者と面識を得ることができた。同じように夜市をテーマにしている研究者と会うことができたのは初めてだったので、今後の研究について有意義な討論を行うことができた。

5月期は胡准教授の紹介で夜市の研究を行っていた中央研究院民族学研究所の余舜德教授と面識を得ることができた。彼は90年代の夜市研究の第一人者で、現在は夜市の研究は行っていないものの、いろいろと研究について指摘をいただくことができた。また日本人で夜市の研究を行っている九州大学の南博文氏や、夜市をモチーフにした小説を書いている作家の恒川光太郎氏を紹介された。5月期は4月期から引き続き論文の執筆とその準備を行ってきたが、台湾における伝統的な民家などの建築と文化の関わりについて、空間的な“しきり”という点から考察を進めてきた。特に歴史的な様式と現在の台北の建築物の連続性と相違点について考察を行ってきた。また、同時に台湾における公共の空間のありようについても同様に考察を行った。その結果、伝統的な台湾の建築の様式は、都市化の影響を受け台北などの都心では直接的な形では顕然していないものの、依然として台湾社会の空間構成に影響を与えていることが確認できた。また現在の台湾の民家の閉鎖性もこのような文化的な文脈の上で連続性を持っていることが確認できたように思われる。それとともに台湾における家族と社会についての歴史的な変遷について確認し、現在の台湾の家族社会についての理解を深めることを重点的におこなった。また同時に比較の対照としての日本社会における家族とその住宅の空間表象についても検討を加えた。

6月期は台湾での活動の一区切りとして論文を書き上げること、これからの研究のために必要な資料や文献を手に入れていくこと、台湾から日本への引越しの準備を主として行ってきた。先月から引き続き台湾における廟の構造と空間表象について文献や資料、現場の観察から検討を重ねてきた。また、本来的に移民社会である台湾社会が他者との関係を築いていく中で廟がどのような役割を果たしてきたかについて歴史的な面からも検討し、このことによって台湾における廟の存在が地域社会のコアとして機能していることが見えてきた。また同様に夜市についても空間表象と社会的な機能、意味定位の面から考察を加えることによって、よりもっと抽象度の高い社会において同様の役割を果たしていることを発見し、一本目の論文を書き上げることができた。また、台湾滞在の最終月であったため、日本に帰ってからの時のために必要な文献や資料を購入または、入手していった。特に夜市関係の書籍は日本ではほとんどみかけないため、できるだけ手に入れて帰れるように努力した。また、台湾滞在の最後の1週間ほどは、部屋の退きの準備と前述した必要な物を買ひ、できるかぎり日本に前もって荷物を送るという作業を行った。

2. 台湾における研究成果

問題提起

以上のような台湾での活動を経て、得られた成果は以下のようなものである。

まず、台湾における夜市という現象について私がもっと疑問に思ったことが、なぜ今も夜市は台湾社会の中で現存し、しかも賑わっているかということである。おそらく純粋に商業的な側面から見れば、夜市の環境はあまりに非合理的であるように見える。清潔ではなく、人混みに揉まれ、適正な価格かどうか分からない、素性の怪しい商品を買う。おそらく夜市における消費とはそのようなスタイルにならざるを得ないはずだ。このようないずれの要素も合理的な消費空間からは無駄な部分としてそぎ落とされた部分であると考えられる。

空間の閉鎖性

しかし、台湾人からすれば、彼らが夜市に求めているものは、「賑わい」であり「人間味」であり他者との「交わり」である、ということが見えてきた。なぜ彼らが夜市において人と人との繋がりを認識することを求めるのか、それは台湾における一般的社会の閉鎖性と関わりがある。まず台湾における家の空間は空間の構成から見ると外部からの強い隔離によって閉鎖されていることが明らかになった。もともと伝統的な台湾の建築様式は防犯を意識した密閉式であり、良く指摘されるような強い家族主義的な傾向とこのような表象は関連しているといえる。また現地での観察などからそのような伝統的な閉鎖性は、現代の台北という都市部の中でも未だその影響力を残していることが明らかになってきた。また、このような閉鎖性は家という空間だけに限定されず、日本であれば外側に向かう展望の視線によって構成されるような空間、例えばショッピングセンター、百貨店、ターミナルステーションのビル、といった空間であっても建物の内側に展望の視線を確保するという形式をとって外部に向かって閉じている。しかし、一方で家族などの小社会集団内部での結びつきが強固であればあるだけ、その社会集団間の関係を繋ぎうるような機制が必要となってくる。そこでまず台湾の社会の中で立ち上がってきたのが廟という空間である。後にこの廟という空間が、1960 年以降に現在の形式の台湾で見られる夜市の母体となる。

他者同士を媒介する空間としての廟

台湾社会にあって先に挙げた閉鎖的性質とは異質な場所が2カ所存在する。そのうちの一つに挙げることができるのが廟である。台湾における個別の社会の閉鎖性と内部の結びつきの強固さは、個々の自律性が高い社会集団を作り上げるが、同時にそれらの統合に困難を生じさせる。また個々の自律的な社会のほうでも、自律的な社会内部だけでは自律性は保ちえない。自己の集団を定義し安定させるためには常に「そうではないもの」としての他者が必要だからである。また、そのような個別の社会集団同士がどのように関係をとっていくか、という問題も残ってくる。実際に台湾の歴史を紐解いて見れば、1600 年代の移民の本格化以降、清朝が統治していた時代に一貫して問題となったのは、もともとの移民元を根拠にした族群同士の械鬥と呼ばれる小競り合いであった。しかし、19 世紀の終わり頃から祖籍による結びつきだけでなく、その他の社会的統合が現れてきた。それは、それぞれの廟を基礎とした台湾土着の地域社会、宗族という方向性である。このことは、社会的統合の背景をもともとの出身地という形で外部から輸入して済ませていた時代と比較して、その地域にある寺廟神の信仰の同一性を基礎として他者と関係を取り結ぶという点で、実際の村落共同体を基礎にした土着化した共同体がそこに現れてきていることをしめしている。廟の空間はその社会的性質を表すように四方が開け放たれ、誰もがそこに向かってアクセスすることができる構造になっている。この場を訪れる人間は、この場を訪れるという目的を共有することによって、共通の儀式や行動様式を経て、彼らの社会を再構築することを可能にしている。このことから台湾における廟が実践的な地域社会のコアとして機能していることが明らかになった。しかし、一方でどうしてもこの廟による社会統合は、祭祀の活動に参加しているという範囲内だけにしか適応できない。なぜなら、必然的に一つの廟がカバーできる地域内が地域社会として立ち上がってくることを意味するからである。それは実践的な範囲の社会ではあるが、社会全体を代表する他者像による審級を可能にするような普遍的な他者像の構築には寄与できない。つまり全体社会、自分の目が届かない世界にある他者を媒介にした社会の構成を行うこと、近代国民国家社会の構成はこのような枠組みでは困難である。

より抽象度の高い他者像を構成する夜市

台湾社会にあつて閉鎖的な空間構成を持たないもう一つの空間が夜市である。またその空間表象の類似もこの二つの場所が似通った社会的機能を担っていることを示している。もともと台湾における伝統的な市は廟の近くに現れてくることが多かった。これは、台湾における廟が地域共同体の社会活動の中心であり、それゆえ人の流れが絶えない場所であつたということが理由の一つであろうが、同時に廟が他者を媒介し繋ぐ場所であつたということも影響している。交換が生じるためにはその当事者同士はお互いに異なる「何か」を生産・所持している必要がある。しかし、異なる「何か」を所持しているだけでは、そこに交換は生じない。交換をする過程で必要となるのは、一方で同一性を持ちながら、他方で差異性を併せ持つ他者である。台湾の地域社会が同一の祭祀という価値の同一性の現前によって構成された時、はじめて交渉可能で理解可能な他者がそこに現れたことになる。したがって、廟の元で市がスタートしたことは、共通の基盤が必要であつたからだと考えることができるだろう。一方、夜市はたしかに廟の元にあつた価値的同一性を基盤にスタートしたが、台湾における製造・流通機構の発達と貨幣への信頼という条件による店舗の集中によって、廟の価値に依存したものでなくなっていき、廟の祭祀圏の内部で完結したものでなくなっていっていった。そして夜市には台湾中のものが流れ込み、様々な地域から売り手が集まり、台湾各地から客が訪れるようになった。したがって夜市に参加しているだけで、台湾中と関わられるような空間になってきた。

廟による他者の繋がりへの構成はあくまで実践的な社会的範囲にとどまるが、夜市における他者像の構成は、より抽象度が高い他者像との繋がりを媒介することを可能にする空間になった。夜市における共同行為の儀礼が、廟のそれと比較してより容易なものであることから見て取れる。この場合の抽象度が高い他者とは、国家の名前はどうかあれ「台湾サイズ」の社会の中に共に存在する他者のことである。つまり日常生活の中で目にすることも触れることもない対象と、それでも自分が同じ社会の一員であるとする信頼と夜市は大きく関わっている。このような信頼によって、つまり他の事は一切共通性がない他者に対しても関係を取り結ぶことが可能になる。しかし、理念的に信頼を捉えることが可能であるだけでは、同様に理念的に信頼を懐疑することも可能である。したがって、社会を形成するための信頼は常に現前によって、「今ここで現にこうあること」によって、支えられなくてはならない。どこかで、まさにそのような全くの関わりがない他者と現に関係が取り結ぶことが必要なのである。台湾における夜市はそのような抽象的で超越的な社会の現前の担保として機能していると考えられる。ここから、台湾における夜市は、狭い意味での消費空間ではなく、常にそれ以上の社会的機能を担う空間として台湾社会に存在しているといえる。それゆえ、台湾における夜市は他の合理的な消費空間とは別の存在として、現代でも台湾の人々に愛されているのだろう。またこのような夜市の空間は、全ての社会空間が狭い意味での経済的世界のヒエラルキーの元に再編されていこうとしている現代社会において、有意義な一つの事例となりうる。しかし、夜市にも正式経済化の流れは確かに見られるようになってきており、「観光夜市化」はそのような流れの一つの表れである。このような経済主義化が夜市をスポイルするのか、それとも夜市がこれまでのように柔軟にかかわすのか、今後も見守ってきたい。

韓国の自己認識と統一政策

——韓国のドイツをみる視角から——

横溝 未歩（国際協力研究科博士後期課程 1 年、国際協力政策専攻）

派遣先：成均館大学校（韓国）

はじめに：韓国月刊誌からみる盧泰愚政権期の韓国における「ドイツ統一」

東西ドイツと南北朝鮮は、第二次世界大戦が産み落とした代表的な分断国である。冷戦終結がもたらした、1990 年の東西ドイツの統一は、最後の分断国として残された南北朝鮮に大きな衝撃を与えた。そのような状況下において、韓国の人々は東西ドイツ統一をどのようなものとして受け止め、また自らの統一に考えを巡らすときどんなことを考えるのだろうか。

韓国においては一般的に、「ドイツ式統一と統一後の手法は、朝鮮半島では不可能で、また適切ではない」というのが一般的な認識である。韓国とドイツには様々な差異があるからである。そのため、現在においてはドイツの統一と韓国の統一を比較する論調はあまりみられなくなった。だが、そもそも実現してもいない南北統一を前にして、そのような「結論」がさも妥当であるかのように流通しているのは、どのような理由によるのだろうか。また、ある時期まで前例としてのドイツ統一は、分断克服を国家の目標とする韓国にとって「ドイツ統一」は研究すべき対象と認識されていた。韓国政府もドイツ統一に関心を持ち調査団をドイツに派遣したし、ドイツ統一の是非をめぐって在野でも多くの議論がたたかわされた。しかし、その後韓国における「ドイツ統一」への関心は急速に冷め、前述のような「ドイツ式統一と統一後の手法は、朝鮮半島では不可能で、また適切ではない」という認識によって変ってしまったように見える。まがりなりにも統一を達成したドイツの例に、関心を示さなくなってしまった原因はなんなのか。

本稿で注目するのは、反共政策を前面に押し出していた従来の軍事政権とは違い、東側との交流を重視する「北方政策」を行なった盧泰愚政権期（1988 年～1992 年）である。ドイツの再統一と連動して、韓国における統一政策に関する議論がどのような方向性を見せているのかについて検討していく。ドイツの状況や国内情勢の変化が、韓国の論調にどのような影響を与えているのだろうか。本稿では、韓国の月刊誌三誌を使用して分析を行うこととする。使用する月刊誌は『月刊朝鮮』・『新東亜』・『マル』である。時期はドイツのベルリンの壁崩壊やドイツ統一の時期を含む盧泰愚政権（1988 年～1992 年）を中心とする。また分析の方法としては、分析の対象である盧泰愚政権期を次の四段階にわけることとする。第一段階は盧泰愚政権が始まった 1988 年からベルリンの壁が崩壊する 1989 年 11 月以前であり、第二段階はベルリンの壁崩壊から 1990 年 10 月のドイツ再統一まで、第三段階はドイツ再統一から 1991 年 9 月の南北韓国連同時加盟までで、それ以後から盧泰愚政権の任期が終わる頃までを第四段階とする。

1. 韓国における保守と進歩

韓国国内では分断後、さまざまな統一論をめぐって議論が行われてきたが、その統一政策の歴史はおおむね保守陣営と進歩陣営の対立の歴史であったといえる。特に、1988 年の盧泰愚政権による第六共和国以降、韓国政治においては「保守と進歩」という言葉がしばしば使われるようになった。これは第五共和国までの独裁政権の終息や、87 年の民主化により、政治の舞台に進歩勢力が台頭してきたという背景がある。民主化以前の保守対進歩の理念対立は「民主対反民主」の構造をもっていたが、民主化以降この理念的対立は「統一対反統一」の構造へと変化し、これは対北朝鮮政策をめぐる「南南葛藤」¹を生じさせた。

1 「南南葛藤」とは、もともと「南韓内部の内部葛藤」を意味し、階級葛藤や地域主義、ジェンダー葛藤など南韓社会内部のすべての葛藤を指す。しかし、この言葉はもっぱら「南北関係を巡る南韓社会内部の葛藤」という意味で使われている。（손호철, 「분단과 남남갈등 60 년」, 『해방 60 년의 한국정치』, 이매진, 2006 参考）

韓国の統一を巡る論理では、「進歩勢力」とは民主化を徹底的に推進し、本当の社会共同の利益、民族的利益の観点から対北政策と統一を論じる立場であり、また「保守勢力」とはそのような「進歩勢力」を「左傾容共」とみなしてこれと対立する執権勢力側かそれに近い立場である。

具体的な例をあげると、韓国の「保守陣営」は北朝鮮の体制に批判的で、安全保障の問題に敏感で、また北朝鮮の人権侵害問題には圧迫などの手段で介入すべきだと考えている。一方、「進歩陣営」は北朝鮮の体制や核開発・人権問題を批判するよりも、北朝鮮に敵対的な政策をとるアメリカに対して批判的であるといえる。

2. 各月刊誌と盧泰愚政権

盧泰愚政権は、社会主義国家との経済交流や、北朝鮮との緊張緩和に向けた北方政策を掲げ、7・7宣言などの具体的な方案を提示した。このような盧泰愚政権の統一政策に対して、韓国の月刊誌はそれぞれどのような評価を下しているだろうか。

この時期の『新東亜』は、民主主義への支持を明確にしており、盧泰愚大統領やその政策に批判的な姿勢をとっている。しかし、盧泰愚政権の統一政策に対しては概ね肯定的だと言える²。

これに対して、『月刊朝鮮』は、そもそも盧泰愚政権を批判しない傾向にある³。また、盧泰愚政権の統一政策を否定する記事もあり見られず、7・7宣言のみによって統一が実現されるものではないとしながらも、概ね肯定的なものとして受け入れている。

一方、『マル』は13代大統領選挙における「不正選挙指針書」を暴露する記事を載せるなど、盧泰愚氏が大統領に当選するその当時から、その正当性に疑問を呈している⁴。盧泰愚政権期においても、盧泰愚大統領が国民に約束した民主主義を「裏切った」として、三党合党や公安政局⁵などを批判する⁶。

それに伴い、『マル』における盧泰愚政権の対北政策に関する記事は総じて否定的なものであり⁷、盧泰愚政権を、「分断を追求する代表的な集団の一つ」と批判する⁸。以前までの政権と盧泰愚政権の対北朝鮮政策の「方法」が変わっただけで、実質的には盧泰愚政権は「統一を望まない」勢力であるとするのである。

以上のことから、盧泰愚政権にもっとも好意的な月刊誌が『月刊朝鮮』、盧泰愚政権に批判的な態度を示しながらも、盧泰愚政権の統一政策を概ね肯定的に評価しているのが『新東亜』、そして盧泰愚政権にもっとも否定的な立場を示しているのが『マル』であることがわかる。

3. 韓国月刊誌のドイツ統一関連記事からみる「統一」

本論では、月刊『新東亜』・『月刊朝鮮』・『マル』の三誌を資料として、盧泰愚政権期の統一議論を検討した。特に韓国におけるドイツ統一関連記事を中心に、ドイツ統一への動きと韓国国内における「統一」議論が連動しているということに注目し、盧泰愚政権期を四つの段階に分けて、それぞれの月刊誌による統一議論の変化を見てきた。

月刊三誌は、「統一」についてそれぞれどのような態度をみせていただろうか。前述したように、第六共和国以降、韓国社会では「保守対進歩」の対立の歴史であった。統一に対する議論も「保守」と「進歩」との間で、対立点の

2 李信行,「統一논의 활성화와 이데올로기」『신동아』, 1988.8 など。

3 例えば、朝鮮日報や『月刊朝鮮』の記者・編集長を長く務めた趙甲済は、同政権を振り返り、次のように肯定的に評価している。韓国の保守勢力は李承晩、朴正熙、全斗煥、盧泰愚、李明博大統領を作り出した。この四人の大統領は韓国の自由民主主義を段階的に発展させる役割を担った。(中略) 盧泰愚大統領：韓国の保守主義が堅持してきた実用、開放路線に加えて自律化と民主化を行った。国内的には民主化、世界的には共産主義の分解という二重の転換期を受け、北方政策という国家大戦略を採択、韓中・韓ソ修交などにより韓国人の活動空間を拡張した。(조갑제, ‘한국 보수세력의 과제: 3C’『조갑제닷컴』, 2008.11.24 <http://www.chogabje.com/> 検索日 2008.12.7)

4 「충격적인 부정선거 지침서 폭로」『말』, 1987.12

5 「公安政局」とは、7・7宣言を契機に文益煥らが訪北し、韓国社会に大きな衝撃を与えたことを発端とする。連続するこうした訪北事件に対して、盧泰愚政権が左傾勢力への捜査強化や廃止が議論されていた国家保安法の適用範囲を拡大して彼らを処罰するなど暴力的な展開を見せた一連の政治状況を指す。

6 이수인, 「노정권의 중간평가서」, 『말』, 1990.10

7 上記の이석원의記事など。

8 정용준, 「제도언론, 그렇게도 통일이 두려운가」, 『말』, 1989.8

一つとして存在してきた。ここではまず、韓国社会の「保守」と「進歩」という概念に従って、これら月刊三誌の統一議論を位置づけてみよう。

執権勢力に対する態度という視点から『月刊朝鮮』・『新東亜』・『マル』をみると、盧泰愚政権に好意的な『月刊朝鮮』が「保守的」であるといえよう。また、民主主義重視の観点から盧泰愚政権に批判的な態度を示しながらも、盧泰愚政権の統一政策を概ね肯定的に評価している『新東亜』は統一態度における方向性において「やや保守的」・「中道的」、そして盧泰愚政権とその統一政策にもっとも否定的・対立的な立場を示している『マル』は、これら二誌と対立的な「進歩的」立場にあるといえるだろう。

また、これまで見てきた記事の内容から整理すると、北朝鮮の体制に対する否定的な態度や早い時期から一貫してみられる高い安保意識など、韓国社会における「保守的」要素をもっとも強く持っているのは『月刊朝鮮』であろう。一方、北朝鮮の体制や経済状況に理解を示し、むしろ駐韓米軍の撤廃などアメリカに厳しい視線を向ける『マル』は「進歩的」要素を強く持っていると評価できる。そして『新東亜』は、保守・進歩両側の学者の記事が混在しているために、どちらの要素も持っていると考えられるが、その分「統一」に対する立場のブレは、他の二誌に比べてもっとも大きかったといえる。

ではこれを前提として、韓国の月刊三誌のドイツ統一関連記事を通して保守・進歩による議論を整理してみる。

①韓国は分断国家であるため、統一への関心は保守陣営・進歩陣営ともに高くならざるをえない。しかしこれまで、統一政策において保守・進歩が対立してきたように、ドイツ統一をみる視角、さらには韓国におけるドイツ式統一の是非においても対立構造が見られるだろうか。

予想されていなかったベルリンの壁崩壊以前、すなわち本稿で「第一段階」と区分した時期、「二つのドイツ」として平和共存を模索していると考えられていたドイツの政策は、韓国ではほとんど注目されていなかった。なぜならば韓半島において、平和共存ではなく平和的統一が志向されていたからである。そのため『新東亜』では、ドイツ式の経済交流は分断膠着化を招くとして警戒する記事⁹がみられた。『月刊朝鮮』、『マル』誌では、ドイツ関連の記事はほとんど見られなかった。

1989年11月、ベルリンの壁が崩壊し、ドイツが統一への道を歩み始めた第二段階をみると、前段階ではドイツ式経済交流を警戒していた『新東亜』は、ドイツ式の交流や統一のための外交政策を高く評価するようになる¹⁰。しかし、『月刊朝鮮』では、ベルリンの壁崩壊の熱気も冷めやらぬうちに、ドイツにおいて統一後の生活水準の低下や、統一のための経済的犠牲をよるこばない西ドイツ人の心理を指摘し、ドイツ統一後の決して明るくない展望を描き出す¹¹。『マル』でも、このようなドイツをみつめる視線は非常に否定的であった。ドイツの統一が様々な運動、特に労働運動や環境運動をひどく後退させる恐れがあることを指摘し、「統一が、労働運動には挑戦として受け入れられている」とまで言っている¹²。またこの状況を韓半島に照らし合わせ、「南韓化」する統一を警戒する姿勢を見せている¹³。

それから一年足らずで東西ドイツが統一された。ドイツの統一は、先進国であり経済力のある西ドイツが、社会主義国の東ドイツを吸収するという形で行われた。したがって、これは自由主義体制による統一であり、これは保守陣営としては望ましい姿の統一であったはずだった。しかし、第三段階になると、『月刊朝鮮』と『新東亜』はすぐさま、統一ドイツで進行する「後遺症」に注目する。莫大な統一費用や、統一後の生活水準悪化など、「後遺症」が残るドイツのような統一は受け入れがたいということである。この時期、保守二誌は統一よりも経済を優先し、「統一の時期を先延ばしする」という姿勢をみせるようになるのである¹⁴。一方、『マル』においても保守二誌の態度とさほど大きな差は見えない。ただ『マル』は、統一後の東ドイツ人、中でも女性たちが「犠牲者」となっ

9 金世均,「東・西独,統一보다는 平和共存 추구」『신동아』,1988.6

10 安秉俊,「冷戦의 종말인가, 세계사의 전환인가」『신동아』,1989.1

11 李南圭,「무너진 장벽, 당겨진 독일 통일」『월간 조선』,1989.12や、金玄浩,「西獨, 통독 진통 인쇄하고 있다」『월간 조선』,1990.7など。

12 김호균,「독일, 반민증적으로 통일되고 있다」,『말』,1990.9

13 정대화,「남북한 통일방안 비교」,『말』,1990.6

14 討論「남북관계, 「統獨환상」 버리고 共存 찾아야」『신동아』,1990.12

ている現実を強調し、吸収統一の不可を一貫して主張している¹⁵。

南北韓の国連同時加盟後となる第四段階では、保守二誌における統一への意思はさらに希薄なものとなる。『新東亜』においても、「南北に二つの体制がある」という前提のもと、北朝鮮に厳しい目が向けられる。「北朝鮮の経済が韓国の水準についてくるまで統一をまたなければならない」という、およそ実現不可能な統一の条件を挙げ、「統一がどんなに民族的念願であるとはいえ、どんな統一でも受け入れなければならない」わけではないという¹⁶。また、吸収統一は一方がほぼすべての統一費用を負担することになるため、「南北韓では双方が統一費用を分担する形態での統一がされるだろう」¹⁷など、莫大な統一費用を警戒するあまり、現実的とはいえない統一形式を提案する。また『月刊朝鮮』でも、北朝鮮の体制が本質的に変わらない限り、南北韓関係の改善や正常化も不可能である¹⁸として、『新東亜』よりも一段と強硬な立場を示している。

一方、『マル』は、経済的に悪化した北朝鮮に対しても好意的な視線を送っているという点については対照的である。しかし、統一への意思が後退した保守二誌と同様、『マル』においてもこの時期はドイツ統一や吸収統一の是非はあまり語られず、南北韓間の経済交流の重要性を訴え、「まず南北韓同胞の生の質を高めることに互いに協力」¹⁹することや、「当分の間、南北双方が力を伸ばすようにする」²⁰ことが統一につながるという議論を繰り返している。「統一の前に、まずは力を伸ばす」という考え方による統一の先延ばしは、保守政権下で長く推し進められてきた「先建設 後統一」政策とも通じるところがあり²¹、進歩的な『マル』が保守陣営と類似する主張をしているという点で注目に値する。

また、この段階における「経済交流」に対する『マル』の肯定的な態度にも注意すべきであろう。北朝鮮との経済交流の方針を含む、盧泰愚政権の7・7宣言に対して、『マル』は否定的だった。また事実、「第一段階」から「第三段階」にいたるまで、『マル』において北朝鮮との経済交流の重要性について語られることはほとんどなかった²²。しかし「第四段階」になると、7・7宣言の一部と内容を同じくする主張、すなわち「南北韓交易」を行うことと、「南北すべての同胞の生の質を向上させる」ことを主張するようになったのである。

以上のように、ドイツが統一され、また統一後ドイツが様々な「後遺症」と直面する状況に合わせて、韓国国内でも統一に関する議論が変化していく。すなわち統一よりも自らの生活水準を優先視し、統一への意思が後退していく様子を見ることができると。それは保守的な月刊誌だけでなく、進歩的な雑誌においても同じようにその流れを見ることができるとのである。

②自由主義を信奉する保守陣営は北朝鮮を「南韓化」する「吸収統一」を好み、対立する進歩陣営はこれに反対し、違う方法の統一案を提示したか。

二つ目のポイントを考察するにあたって、まず韓半島における統一のシナリオを可能な限り挙げてみよう。戦争

15 김호균, 「통일을 후회하는 동독인민들」, 『말』, 1991.5

16 李鐘贊, 「南北韓 통일논쟁, 統合의 길 있다」 『신동아』, 1991. 11

17 李相萬, 「南北間경제통합의 비용과 전략」 『신동아』, 1992.5

18 朴廣作, 「남북한 정상회담의 도덕적 원칙」 『월간 조선』, 1992.3

19 김성훈, 「북한의 개방과 남북경제교류의 한계」, 『말』, 1992.3

20 조유식, 「인터뷰/ 남북 고위급회담 대변인 이동복 “ 흡수통일 불가능하다 ”」, 『말』, 1992.7, 이동복氏の発言より

21 もちろん、軍事政権下で進められた「先建設 後統一」という政策は、南北韓の競争の中で、韓国の力を伸ばし、北朝鮮に優越することによって最終的には北朝鮮を屈服させ、統一を行うという「吸収統一のための政策」であった。『マル』で主張される「先建設 後統一」は、韓国だけではなく、南北韓双方の力を伸ばしながら信頼を積み上げ統一に向かおうという、いいかえれば「合意的な統一のための政策」であるという違いがある。しかし、双方の力を伸ばして統一を達成するためのプロセスや具体的方案にはまったく触れられておらず、南北韓の成長が統一につながるという主張の説得力は感じられない。結局、後者の主張も、統一の先延ばしと変わらないのではないのか。

22 『マル』は、北朝鮮との経済交流を含む7・7宣言を否定的にみていたし、7・7宣言のほかの部分と切り離して経済交流を肯定的にみることといった姿勢もみられなかった。また一方で北朝鮮との経済交流を否定する直接的な言論もみられなかった。第三段階までの『マル』において、経済交流が重要視されなかった理由を推測すると、一つめは北朝鮮社会の生存が危機に陥ってはならず（우중원, 「북한의 외교정책 변화와 한반도 정세」, 『말』, 1991.7）、また北朝鮮が「外交的孤立」の状況にあるという状況判断について懐疑的であるということ（이태섭, 「북한 대남정책의 본질」, 『말』, 1990.6）、二つ目は「北朝鮮が経済交流を政治・軍事問題より優先視する可能性はほとんどない（이태섭）」という判断があるということ、三つ目は「南韓化」した統一を警戒する（이삼열, 「평화체제 구축과 통일운동」, 『말』, 1990.1）動きがあるため、交流によって北朝鮮へ韓国の政治文化が浸透することを嫌っているからではないかと考えられる。

による統一などを除き、平和的手段に限定するならば、①分断を維持する、②韓国が北朝鮮を吸収統一する、③北朝鮮が韓国を吸収統一する、④二つの体制を持つ連邦制統一を行う、の四つであろう。

自由主義を信奉する保守陣営の理念からすると、③の北朝鮮による吸収統一は当然のごとく排除されるが、なおかつ保守二誌が、「統一をするときは単一国家になることが重要である」と述べていることから考えると、④の連邦制という形での統一も排除されることになる。そして、②の韓国による吸収統一であるが、これは李承晩大統領による北進統一や、朴正熙大統領が経済の成長によって目指した勝共統一のように、保守陣営の望む統一方式であるともいえる。しかし、これまで本論で見てきたようにこの吸収方式は、生活水準を維持したいと考える保守陣営には支持されず、むしろ統一を先延ばしする姿勢を見せているということを確認した。

一方、『マル』では、盧泰愚政府の「一国家二体制」による統一方針を非難しており、統一の過程では「一国家二体制」のプロセスを経ることが必要であるという。しかし、統一の最終段階を連邦制とする記事は見られなかった。一方で、南北高位級会談代弁人であるイ・ドンボク氏とのインタビュー記事²³の中で、③の北朝鮮による吸収統一と④の連邦制は、現実性がないと否定されている。

『マル』では、政府の統一意思のなさを指摘するなど政府の統一政策を批判しつつも、「分断膠着化」を防ぐための具体的な方案を提示できずにいる。その一方で南韓化による統一を警戒するため、②の韓国による吸収統一にも反対している。③の連邦制については、プロセスとしての連邦制を経たあとにどのような国家になるべきなのかという点については提示されていない。結局、分断もだめだが、その他の統一方式もだめといった八方ふさがりの姿勢になっているように思われる。その結果、「第四段階」でみられたように、保守二誌と同じく、統一の以前にそれぞれ自国内の生の質を高めるべき、といったような統一先延ばしの姿勢になってしまったのである。

③既得権の権利や価値体系、あるいは近代化によって獲得した生活水準を守ろうとすれば、統一後の政治的・経済的な状況の変化に高い関心を持つだろう。したがって、保守陣営は自身の生活基盤が揺らぐような統一を好まないだろう。反面、「本当の社会共同の利益、民族的利益の観点から統一を論じる立場」である進歩陣営は、このような生活の現実よりも統一を優先視する立場をみせるか。

これまでもみてきたように、保守陣営で重視されているポイントの一つは統一費用や統一後の韓国の経済状況であるといえる。

経済的に落伍した東ドイツを吸収したことにより、西ドイツの経済は悪化した。韓国は、経済大国であった西ドイツほどの経済力はなく、また北朝鮮は社会主義国家の優等生であった東ドイツほどの経済力がない、そのためドイツ式の吸収統一は韓国にドイツ以上の後遺症を残すだろうという類の議論は、何度も繰り返されてきた。保守陣営は、特に北朝鮮経済の悪化を「吸収統一不可」の理由の一つとして挙げ、統一と絡めて経済的な懸念を強調する。このような議論は何を意味しているのであろうか。

ここで注目するのは、北朝鮮の経済状況、または南北韓の経済格差を理由として吸収統一を不可とする議論が出現した時期である。それは、『月刊朝鮮』ではドイツ統一後の「第三段階」、そして『新東亜』では南北韓の国連同時加盟以降の「第四段階」である。では、北朝鮮経済の悪化はこの時期に初めて問題となったのだろうか。

ここで北朝鮮の経済状況を簡単に整理してみよう²⁴。すなわち、北朝鮮の経済は60年代から既に混迷・停滞を始めており、朴正熙政権下の韓国との体制競争で、それまでの優位を奪われてしまった。

北朝鮮経済の深刻さが表面化したのは、89年7月に平壤で第十三回青年学生祭典が開催された時期を境としており、88年のソウルオリンピックに対抗する大規模な国際行事とするための大規模な動員により、この89年から90年の間には食料危機が深刻化し、生活はかつてないほど苦難に追い込まれていた。そして、韓国の北方政策によって実現した90年の韓国・ソ連国交樹立は、窮地に陥っていた北朝鮮経済に追い打ちをかけた。

このように特に北朝鮮の経済危機が深刻化した89年から90年の間というのは、第二段階（1989年12月～1990年10月）にあたる。この時期の『月刊朝鮮』は、ドイツにおける経済の変化や、すでにドイツが見せ始めていた統一への不安感を敏感に感じ取り、特に統一費用などの経済的な問題から統一への慎重な姿勢をみせていた

23 조유식, 「인터뷰 / 남북 고위급회담 대변인 이동복 “ 흡수통일 불가능하다 ” 」, 『말』, 1992.7

24 玉城素・渡辺利夫の『崩落か、サバイバルか 北朝鮮』（サイマル出版会、1993）

が、北朝鮮の経済の落伍性のために統一が困難であるという議論はまだ行われていない。

一方、この時期の『新東亜』は、現実化しそうなドイツ統一に対して総じて肯定的であり、南北韓における統一にも期待感を表していた。簡単に整理すると、『新東亜』は北朝鮮の経済状況が悪化した時期（第二段階）には、その経済状況や統一のための費用について言及せず、ドイツ式の経済交流に肯定的で、統一への明るい展望を語っていた。その後、ドイツの再統一後（第三段階）にさまざまな社会的問題が発生したことや、重い統一費用が経済悪化につながったことを目撃することで、「統一」よりも「統一後の後遺症」や「統一費用」に重きを置いて統一準備を行うことを重視することを主張、統一への意欲を後退させていった。そして南北韓国連同時加入後の時期（第四段階）にはいると、南北韓に二つの国家が存在していることを前提に、「統一自体が我々の追及する価値観を超越する至上のものにはなりえない」として、東ドイツよりも経済的に低い水準にとどまっている北朝鮮との統一が、莫大な統一費用をもたらすものとして警戒されていく。従って、北朝鮮の経済状況が悪化した時期と、韓国が重い統一費用や統一後の経済を警戒する時期には、若干のズレが生じている。

このように、少なくとも『新東亜』において「第二段階」の時期、統一は期待のまなざしで見られていた。この時期には北朝鮮経済の悪化は問題とならなかった。しかし、前例となったドイツの状況が少しずつ悪化することによって、統一後の「後遺症」に注目せざるをえなくなった。統一後の南北韓において、ドイツよりもさらにひどい「後遺症」が生じるだろうということは、北朝鮮経済の落伍性や南北韓間で大きくかい離した経済格差から予想される。そこで、「第四段階」に至って、統一よりもこれまで積み上げてきた個人的な生活基盤を重要視する姿勢をみせるようになり、統一を先延ばしする理由としての「北朝鮮経済の悪化」が取り上げられるようになったのではないか。このように『新東亜』における統一への姿勢は、非常にブレの大きいものとなっている。すなわち、『新東亜』の統一に対する論調の変化には、北朝鮮よりもまず統一ドイツの影響が見いだせるのであり、それを前提として北朝鮮経済に関して言及するという関係が指摘できるのではないだろうか。

『月刊朝鮮』では、『新東亜』よりも早い段階から統一後の経済状況について懸念する傾向を一貫してみせてきたということを考えると、統一よりも自らの生活を守ろうとする現実的な傾向が強いといえよう。結果、韓国の保守陣営ではドイツ式の吸収統一によってもたらされるであろう「後遺症」を受け入れるよりは、自らの生活基盤を重視しているということができる。

対して進歩的な『マル』では、「進歩」の定義が「本当の社会共同の利益、民族的利益の観点から対北政策と統一政策を論じる立場」であることから、このような生活の現実よりは統一という目標を重要視すると考えられる。確かに、進歩陣営においては、北朝鮮の経済を推計に基づいて判断し、北朝鮮経済が回生不可能だと勝手に判断することを批判しつつ、また経済自体の落伍性が政権崩壊につながるとはいえないと、北朝鮮の経済状況を比較的好意的に判断している。また、「民族」を重視し、北朝鮮の降伏を要求する形となる吸収統一の不可を主張している。しかし、具体的な統一方案の提示には至っていない。統一方案は「その主張通りに実践さえすれば間違いなく統一が保証される」²⁵ものでなければならぬと盧泰愚政権の統一方案（韓民族共同体統一方案）を批判しながらも、「南北韓が互いに違う思想と制度を許容することのできる統一方案」を模索することによって、対決の緩和や分断の維持を防ぐことができる²⁶というような、見方によっては非常にあいまいな理想を語っているようにみえる。それだけでなく、前述したように「第四段階」で『マル』は、統一先延ばしともとれる主張を展開する。これは他の保守的な二誌の文脈と類似する、統一に対して一歩後退した態度とも考えられる²⁷。

そこからは進歩陣営においても「生活基盤」を重要視する姿勢から逃れることはできないという示唆が読み取れるのである。

したがって、盧泰愚政権後期の統一に関する「保守」と「進歩」の態度は、実質的には大きな差異はないといえる。そのため、「保守対進歩」の対立は互いを攻撃するための「対立のための対立」になっているという側面を否定できない。

25 김낙중, 「『한민족공동체통일방안』을 비판한다」, 『달』, 1989, 11

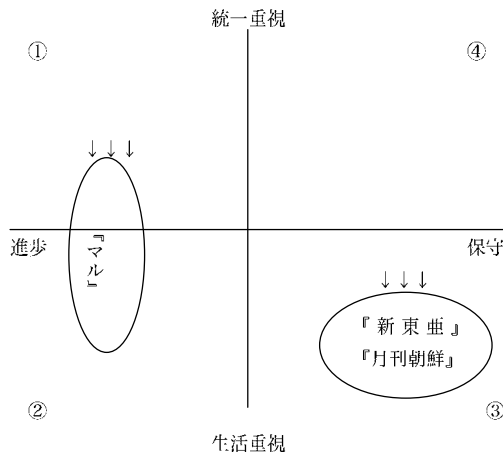
26 우중원, 「북한의 외교정책 변화와 한반도 정세」, 『달』, 1991.7

27 このような『マル』の変化には、「公安政局」の影響を排除することはできない。「左派的な勢力」に対する政府の締め付けにより、自由な統一議論ができないという社会的条件があったという側面である。とはいえ、これらの記事が読者に与える影響を無視することはできないだろう。

おわりに

韓国社会において、南北統一が未だ達成されていない民族の念願であることは否定することができない。しかし、経済的水準の低い東ドイツを吸収した西ドイツが抱えざるを得なかった様々な後遺症を観察しながら、韓国の月刊誌はどのような統一でも受け入れなければならないということではない、すなわち統一によって我々がこれまで築き上げてきた経済的・社会的基盤が大きく揺らぐならば、統一を優先視すべきではないという結論を出したのである。こうして、民族の念願としての統一という建前と、自らの生活基盤を犠牲にしてまで統一を行うよりは、平和共存を選択するという本音の間でズレが生じた。これは結局、ドイツ式の統一を行ってはいらない、すなわち統一を急ぐのではなく南北韓の経済格差を埋めながら平和共存を行おうとする現在の韓国政府の方針とも一致している。

以上のように、韓半島における「統一」議論において、経済的な要素は非常に大きな力を持っている。統一よりは、現実的な生活水準を守りたいという姿勢である。本稿で使用した三誌の統一に対する立場を表にすると以下のようになるだろう。



①のエリアは、進歩的であり統一を重視する立場である。この立場は、統一のためならば自らが経済的犠牲をはらったり、生活水準が低下しても統一をすべきであると考えらるであろう。また、このような統一の現実には言及せず、感情的に統一を訴える論調もここに含まれると考える。一方、②のエリアは進歩的でありつつも、統一よりも生活や韓国内における生の質（民主化など）をより重視する立場である。

盧泰愚政権初期の『マル』では、①の立場に基づく記事がみられた。しかし、時間がたつにつれて多くの論者が②のエリアに移動していると考えられる。

③は保守的であり統一より生活の現実を重視する立場である。④は保守的であり、統一を重視する、例を挙げると過去、保守政権においてみられた北進統一のような立場である。『月刊朝鮮』は、相対的に早い時期から統一による経済悪化を懸念しており、盧泰愚政権後期には「どんな統一でもいいわけではない」として、経済の悪化した統一国よりは現実の生活を重視する姿勢を見せている。また、『新東亜』でも、最初から統一への意思や希望がなかったわけではないが、時間がたつにつれて③のエリアへ移動した。

これは自らの生活を守ろうという現実的な姿勢を、進歩・保守の双方が持っているということになるのではないだろうか。

盧泰愚政権期、韓国の経済は全斗煥政権期に比べ大きく前進した。盧泰愚政権後半期の韓国は経済的な繁栄をある程度達成し、そのような社会的状況の中で、保守陣営は自らが獲得した経済水準を統一よりも重要視する姿勢をみせるようになった。また経済の重要性を主張するのは、これが読者である国民に対しても説得力のある要因として作用するという念頭においていたからであるとも考えられる。

また、同じように進歩陣営も経済重視の傾向を少しずつ強めていく。これは、もはや韓国において進歩的な思想

を持っていたとしても、「持てる者」としての立場を維持しようとする国民に対して、自らの経済水準を放棄してまで統一を主張することが困難になったからであると分析できるのではないか。そのため、莫大な統一費用と経済的・社会的な混乱という統一後の後遺症を残したドイツ式の統一は「適用すべきではない統一方式」と判断されるようになったと考えられる。

以上のように、本稿ではイデオロギーによる分類が比較的容易な、韓国の三つの月刊誌を使用し、ドイツ統一が進行する盧泰愚政権期の統一議論とその変遷をめぐる記事を中心に見てきた。そして、韓国社会において統一よりも自らの生活を守ろうとする現実主義的な傾向が、保守・進歩ともに見いだせるということに注目するものである。

東アジア社会におけるグローバル時代の自己形成論

——身体イメージが自己形成に与える影響——

速水 奈名子（文化科学研究科 学術推進研究員）

派遣先：国立台湾大学（台湾）

はじめに

報告者（速水）は、神戸大学大学院人文学研究科博士課程の院生、藤岡達磨氏のメンターとして、2009年1月31日から2009年3月31日（60日間）まで、国立台湾大学に滞在し、同氏の研究指導および自らの調査研究に従事した。以下、滞在記録と研究成果を、1. 滞在期間中の日常的活動の記録、2. 滞在期間中のメンターの研究成果に分けて報告していく。

1. 滞在期間中の日常的活動の記録

メンター指導

神戸大学より国立台湾大学に派遣された博士後期課程の院生、藤岡達磨氏の調査テーマは「東アジアにおける公共圏構築の可能性について——消費社会論とトラウマの社会学を架橋する社会理論の構築を目指して」である。同氏は台北滞在中に、伝統的な商業形態であり、伝統的な公共の場を提供する「夜市（Night Market）」制度と、繁華街に建設された都市型・大型の「ショッピングモール」をフィールドとした比較分析を進め、夜市のような伝統的な商業制度が、都市中心部における大企業型の商業制度とどのように異なり、台湾における人々からどのように受容されているのかといった問題を中心に考察を進めていた。報告者は台湾に滞在し始めてから、基本的に平日は大学内で藤岡氏と昼食を共にし、同氏の研究動向について話し合う時間をとるようにした。また、夜市のフィールド調査などに同行することもあった。指導内容としては、文献の推薦、フィールドノートの執筆法、「夜一」と「ショッピングモール」を比較する際の着眼点（歴史的背景、台湾における納税制度の検討など）を提示した。また、台湾の中央研究院（アカデミア・シニカ）の社会学者（蕭新煌教授）を紹介する橋渡しなども行った。

日常生活の環境整備

国立台湾大学リベラルアーツ・カレッジの協力を得ることを通じて、台北での生活環境を整えることが可能になった。特に日本語・日本文学部の徐興慶教授をはじめとした教員、研究員の方々には宿泊施設を確保する上でご協力いただいた。報告者が渡航した1月末は、大学が旧正月の長期休暇に入っており、大学内のゲストハウスに滞在することができなかったために、台北市内のシティホテル「福華ホテル」にはじめの5日間宿泊し、その後約2週間国立台湾大学内のゲストハウス「鹿鳴館」に滞在した。そして2月の半ばからは、建設されたばかりの国立台湾大学学生・教員専用寮（MRT「公館」周辺）に長期滞在することが可能になった。

日常生活のパターン

経験的調査を促進するために、平日は基本的に午前中、私立の語学学校（TLI: Taiwan Language Institute）に通い中国語（北京語）を学んだ。午後からは国立台湾大学・中央研究院の図書館を利用し、台湾の歴史、政治、文化、教育制度などを考察した。また、社会学部、および中央研究院の蕭新煌教授の研究室を訪問し、院生と交流を深めることにも努めた。大学内の授業は、基本的に中国語で行われていたため参加することがなかった。週末は参与観察やインタビュー調査を行うために繁華街（西門など）に出ることが多かった。総合的な体調面としては、2月の末に急性胃炎にかかり1週間ほど寝込んだが、3月は全般的に体調が安定していた。

2. 滞在期間中のメンターの研究成果

研究題目

東アジア社会におけるグローバル時代の自己形成論——身体イメージが自己形成に与える影響——

研究目的

本研究の目的は、台湾社会における女性の身体統制を分析することを通じて、現代東アジア社会（特に本枠組みにおいては日本・台湾の比較研究）における、男／女間の日常生活レベルでのジェンダーバイアスを検討すること、そしてそれらが女性の自己形成に与える影響を分析することにある。報告者は、すでに日本をフィールドに女性の身体統制に関わる経験的調査を進めており、最終的には台湾における調査を比較、分析することを通じて、東アジア社会におけるジェンダー研究につなげ、共生の可能性の一考察として提示していきたいと考えている。

研究意義

本研究を行うことの意義は、日本・台湾における女性の身体統制を検討することを通じて、社会制度上での女性の地位向上に関わる分析（いわゆるマクロ分析）を超えた研究、つまり、行為者の現実により近づいた「日常生活における相互行為のレベル」におけるジェンダーバイアスの研究を進めることにある。また、ここでは最終的に、そのようなジェンダーバイアスが、女性の自己形成にどのような影響を与えているのか、検討することが目指される。日本、そして台湾都共に「男性優位」の文化的伝統をもち、そのもとで、女性の社会進出、社会的地位向上が困難な時代が続いたが、日本においては1970年代以降、そして台湾においては1980年代以降、女性解放運動が高まり、法律制度や雇用制度上では女性の社会的地位は男性とほぼ同等のものとなった。しかし、両国における日常的な相互行為のレベルを考察すると、女性と男性のジェンダーバイアスは、本当に平等なものとして開かれているのか、といった問いが浮上する。本研究では、相互行為レベルの分析を進めることを通じて、このような問いに答えていきたい。

研究方法

本研究は、文献調査と経験的調査をもとに進められる。申請者は上述した通り、日本をフィールドに女性の身体統制に関わる経験的調査を行っているが、研究方法はほぼ同じものを採用している。伝統的な女性に対する身体統制を検討するためには、主に文化的・政治的枠組みを検討し、比較的統制から自由になった現代社会におけるそれを検討するためには、主に消費文化社会にみられる文化制度（イメージコンサルタントなど）やグローバル化をもとで繁栄するサブカルチャーの影響力を検討する。

<台湾における調査方法>

- I. 文献調査：
 - ①台湾社会の歴史・文化・政治：歴史・文化・政治的特徴を検討することから、社会的背景を検討する
 - ②台湾社会における女性運動：女性運動の流れを整理し、女性の社会（制度）的地位がいかに向上してきたのかを検討する
 - ③台湾社会における女性の日常生活における身体統制：女性の身体統制に関わる先行研究を検討し、その型を a. 時代別・b. 世代別・c. 階級別に分類する
- II. 経験的調査：
 - ①制度分析：現代社会における女性の身体統制に関わる企業や制度（イメージコンサルタント等の諸制度）を分析する
 - ②意識調査Ⅰ：現代社会における女性の身体統制、自己形成の在り方をインタビュー調査をもとに検討する
 - ③意識調査Ⅱ：現代社会における女性の身体統制、自己形成の在り方をアンケート調査をもとに検討する
 - ④表出調査：現代社会における女性の身体統制を参与観察（主にビデオ調査を実施する）を通じ

て検討する

<理論的分析枠組み>

E. ゴッフマンの相互行為論、特に彼が提示した相互行為儀礼論、身体儀礼論に即した分析を行う。また、彼が晩年のジェンダー分析 Gender Advertisement(1979) におい提起した方法論（ここでの考察は、広告の分析ではないが）も部分的に採用する。相互行為儀礼とは、一定の状況において、その場の秩序を壊さないように、現前する他者にたいして、それぞれの行為者がとる振舞いを指す。つまり、それらは習慣を通じてパターン化された、各状況における「身体のあるべき型」を指している。ここでは多くの女性に採用される特有の「型」を抽出し、日常生活におけるジェンダーバイアスを明らかにしたい。さらに、それが女性の自己形成に与える影響も検討していきたい。

国立台湾大学を通じた研究指導

研究面においては、社会学部、および中央研究院の蕭新煌教授から指導を得ることが可能になり、台湾で調査を進めていくための手順について議論し、また、同教授から中央研究院の図書館の利用許可を得た。人類学部の胡家瑜准教授は2月の半ばまで調査で台北を離れていたが、帰国後接触を試み、藤岡氏の研究動向をうかがうと共に、自らの研究計画についても話す機会を得た。蕭教授、そして胡准教授両者からは、現代社会における女性の身体統制に関わる問題を総合的に検討することは、困難であるという指摘を受けたが、それは、台湾における地域・民族の多様性に起因するものであると同時に、台湾社会には日本社会ほど明確な、女性特有の身体統制の型（理念型）がおそらく存在しないという理由からであった。報告者自身、台湾渡航前に台湾人留学生と接触することや、文献、インターネットサイト検索を通じて、台湾における身体統制の指導を行う制度が定着しているかどうかについて、検討していたが、なかなかそのような制度を見つけることが困難であった。

研究の進捗状況

結論から述べると、報告者の滞在期間は二カ月間と限られていた上に、期間中に体調を崩してしまったために、思うように調査を進めることができなかったというのが、正直なところであるが、国立台湾大学の図書館における文献調査やインタビューなどを通じて、台湾社会の歴史、政治体制・民族構成の複雑さ、そして女性の社会的地位の変容等について考察を深めることができた。今回の滞在期間内に、遂行することができた研究内容は以下の通りである。

- I. 文献調査を通じて、①台湾の歴史（政治的体制）、民族構成、文化制度、教育制度など、社会的背景を考察することができた。また、②女性運動の歴史について、知識を深めることができた。そして、③中央研究院の図書館の利用を通じて、台湾の歴史を紹介した著作や台湾における女学校において使用されていた、家政科の教科書等を検討し、女性の身体統制の変遷に関わる考察が可能になった（参考文献の詳細については以下に掲載）。しかし、女性の身体統制の型を a. 時代別・b. 世代別・c. 階級別に分類するためには、更なる詳細は文献調査が必要となる。
- II. 経験的調査は、思ったように進めることができなかったため、再度台湾に渡航する必要がある。今回達成できた調査は、制度的調査、インタビュー調査そして参与観察の一部のみである。まず、①現代台湾社会における、身体統制の指導を行う専門制度を検討することについては、日本社会とくらべ台湾にはそのような制度があまり定着していないという現実があり、接触を図ることが困難であったが、事前に調査依頼を行っていた2つの施設：Best Talent Image Consult and Management と Image Color and Image Consulting Center に接近し、活動内容や需要についての分析を行った。②インタビュー調査については、上述の制度を運営するスタッフ3人に、台湾における女性の身体統制について、それぞれの見解を得た。また、友人の紹介を通じての台北市内における20代から30代の女性6人にたいして、女性的振舞いについての意識についてそれぞれの見解を得た。③インタビュー調査と④表出調査については、再度台湾に渡航し（ITPとは別の公費による）、行う必要がある。

今後の課題・台湾渡航予定

今後は、経験的調査をさらに促進させるために、台湾に再度渡航し、参与観察、そしてインタビュー・アンケート調査を行っていききたい（ITP 枠とは別の公費 / 私費による）。予定としては、2009 年 9 月に約 2 週間、台北に滞在し、上述の調査を再開したいと考えている。目標として、インタビュー調査においては、20 代から 30 代にかけての一般女性にたいするインタビュー調査のサンプルを 20 に高めたい（現在、台湾におけるサンプル数は 6）。次に、アンケート調査については、前回全く実施することができなかったため、国立台湾大学の協力を得ることを通じて、実施していききたいと考えている（身体統制に関わる意識について、世代別調査 [20 代から 30 代の女性と、50 代以上の女性] を行いたい）。また、2010 年までに、調査をまとめ論文・報告書として出版することを予定している。

研究成果

「女性にたいする身体統制の変遷を概観する——日本と台湾——」

日本そして台湾社会においては、家父長制の伝統があり、男尊女卑の思想が定着していたが、戦後に展開された女性運動の高まりとともに、女性の社会的権利が徐々に開かれていくようになった。本研究では、日本、台湾社会における女性にたいする身体統制の変遷について考察を深めるが、それらは両国ともに、女性運動が展開される以前は、主に制度的なもの（政治的思想、伝統文化）と深く結びついていたということができる。しかし、女性解放運動を経て、彼女らの政治・経済的自立、文化的エンパワーメントが達成されていく中で、女性の身体統制は明らかに、伝統的なそれから解放されることになり、その型は多様化してきているということができる。つまり、女性は政治的言説（「良妻賢母」など）や文化的縛りから解放され、従来の堅苦しい統制から自由になったのである。

しかし、本当に社会制度が開かれたことによって、女性は自由を獲得したと言い切ることができるのであろうか。本稿では、相互行為分析を採用することを通じて、日常生活におけるジェンダーバイアスについて考察を深めていきたい。男女同権が謳われる現代社会において、女性にたいする社会的権利は、一見、開かれたものになったようにみえるが、実際の日常生活における相互行為を分析すると、そこには男女間のジェンダーバイアスが根深く存在しているのではないかと仮定できる。

本稿では、視覚的に観察可能な相互行為における「身体儀礼」に着目し、公共の場における、男女間の身体儀礼を分析することから、日常生活におけるジェンダーバイアスを考察していきたい。身体儀礼とは、習慣を通じてパターン化された「身体のあるべき型」をさしているが、具体的には衣服の着こなし方や歩き方、そして話し方や物の食べ方などといった、身体表出、すなわち「日常生活における振る舞いの理想的な型」を指す。当然、このような身体統制の在り方は、地域文化や階級、世代さらには個人的な志向によって異なるものでもあり、日本、台湾社会におけるその理念型を、時代別に厳密に提示することは、非常に困難な作業であるということができるだろう。ましてや、共通の価値・規範が崩壊し、価値観の個別化が進んだ現代社会において、それらを抽出することは事実上、不可能に近い作業であるといわざるを得ない。

ここでは、このような問題を念頭に置きつつも、主に各々の社会における 20 代、30 代（結婚適齢期前後）の女性の礼儀作法・マナー育成のあり方に焦点を当てることを通じて——時代別にそれを支える社会制度、および修得内容の変容を分析することから——、女性の身体統制に関わる一考察を行っていききたい。また最終的には、インタビュー調査、およびアンケート調査を進めることを通じて、女性の意識調査を行い、このようなバイアスが女性の自己形成にどのような影響を与えているのか考察を広めていくことが目指される。

報告者（速水）は現在、文献調査をもとに、日本においては明治以降、台湾においては日本統治時代以降の女性の身体統制の在り方について調査している。ここではその一考察を紹介する（日本、台湾両国において相互行為分析をはじめとした経験的調査研究を同時に遂行しているが、両国の調査とともに、いまだ研究成果を提示できるまでのデータ獲得に至っていない。部分的には、Hayami, 2009c を参照のこと）。

それではまず、これまでに行ってきた、日本社会における調査の一部について確認していきたい。日本においては、20 代から 30 代の女性の身体儀礼習得の方法が、伝統的なそれから、いかに変容したのかを考察し、現代社会における身体儀礼の多様な在り方を、参与観察（記述調査）、アンケート調査、インタビュー調査をもとに分析

している。ここではまず、日本社会における女性が、身体儀礼をいかに習得してきたのか、「礼儀作法」習得との関連から、明治期一戦後、そして女性運動の風潮が高まった70年代以降のそれを社会制度との関係を通じて比較的に分析していく。

封建制度が崩壊した明治以降の日本社会においても、家父長制の伝統の下で、女性の身体は厳格に統制されていたといえる。1899年には、文部省によって正式に「良妻賢母」が提唱されるようになり、夫を支える妻、そして将来国家のために役に立つ国民としての子供を養育するのに適した母を創出することが、女性の規範として定着するに至った[小山, 1991:49]。このような「男性優位」、「内なる女性」の精神に基づいた規範が浸透するなかで、女性の「礼儀作法」に関わる教育はますます形式化され、強化された。

明治時代（正式には明治13年[1880年]）から戦後まで、「修身」という道德教育の教科書が旧姓の学校において使用されたが、そこでは——主に女子学生のための——礼儀作法が重要な項目としてとり上げられている。この教科書は、天皇への忠誠心の涵養を軸に、孝行、従順、勤勉などの徳目を教育するためのものであるが、女子学生のための礼儀作法はその一環として捉えられていた。

このように、明治時代から戦後にいたるまでの女性の身体儀礼を社会制度との関連を通じて考察すると、基本的にそれらは、日本政府が提唱した政治的な規範をもとに構成されてきたということがわかる。このような、政府主導の規範と同時に、日本においては文化的な「道」を通じて礼儀作法を習得するという伝統がある。その中でも、「茶道（茶の湯）」における点前の習得は、明治時代以降の女性の身体統制に多大な影響を及ぼした。現在でも、茶道人口の多くは女性であり、それを通じて礼儀作法を学ぼうと試みる人びとが後を絶たない。

しかし本来、茶道とは女性のものでなく、男性のものであったといわれている。現代の日本社会において、茶道とは、主に女性によって習得される文化であると認識されているが、実際にはそれが大勢された室町時代から、江戸末期までの日本社会において、茶道は男性が芸術的志向を高める文化として理解されていた。

しかし明治時代になると、封建制度が崩壊し、諸藩に庇護されていた各流派が財政難に陥った。そうした中、裏千家十三代目能斎鉄中は茶道再興に努めたが、彼の努力が実を結び、有力財界人の関心を集めることで、茶道は息を吹き返すこととなった。この時代から茶道が——主に裏千家の言説戦略により——「女子の教養科目」、すなわち「礼儀作法を学ぶための手段」として認識されるようになり、女性の茶道人口が急増するようになる[加藤, 2004]。

このように茶道が「(主に男性の) 精神の向上の機会」から、「女子の礼儀作法」として開かれたものになったのは、明治以降のことであるといわれているが、その後、戦後に至るまでこの伝統は受け継がれ、現在でも茶道といえば「女性」という認識が定着している。明治時代以降、多くの女性が学校、および地域に密着した「茶道教室」に通い、女性にとって必要とされる礼儀作法を習得する場として利用した。当時の中産階級に属する子女の大半は、高校を卒業する頃になると茶道を習いはじめ、嫁入りに備えた身体儀礼を吸収したといわれている[Beacon, 2001, 加藤, 2004]。

それでは次に、茶道を通じて女性が修得した身体儀礼の内容を検討していきたい。ここではまず、「点前」とよばれる茶道における身体儀礼について考察しておく。茶道においては、点前とよばれる亭主型、または主人方の身体様式がある。この様式をもとに、部屋への出入りの動作から、茶道具の扱い方など、茶の振る舞い方全般を通じて厳密に身体が統制されるが、このような点前の身体化は、集中力、忍耐力、そして精神力を養うための基本であると考えられている。

既に確認した通り、この「点前」は伝統的に日本における「礼儀作法」の原点として考えられてきた。その理由は、それが自己の「精神性」・「芸術性」の向上に繋がるだけでなく、「他者とのつながり」を深めるもの——一期一会の精神に基づいた「交際礼法」の修得——と解されてきたからである。

礼儀作法とは、身体そのものが提示する作法（パフォーマンス）を指すと同時に、それは道德や倫理とも深く関わりをもつものである。「修身」における「礼儀作法」の扱いについては、既に確認したが、伝統的に日本における礼儀作法とは、道德や倫理といった問題——ここでの道德や倫理は天皇崇拝に起源を持つが——と深く結びついたものとして認識されてきた。つまり、「身体と精神は、一にある」という認識である。茶道における点前も、精神性、芸術性の向上だけでなく、他者への配慮という道德性と深く通じるものであったために、礼儀作法を習得するための基本として認識されてきたのである。

しかし、このような形式は70年代から徐々に変容し始める。「国連婦人の十年」(1976-85)など、国際的なフェミニズム運動が高まりを見せるなかで、日本においても70年代を境に女性運動が盛んになった。また、80年代以降、消費文化が浸透するなかで、女性の身体儀礼、特に「主婦」志望の女性のそれは、「フィニッシングスクール」や「イメージコンサルタントサロン」というマナー・エチケット修得の専門制度を通じて学ばれることが多くなった。ここで習得させる一連のマナー・エチケットは、伝統的な価値観とはかけ離れたもので、西欧文化に基づいたテーブルマナーや国際儀礼である「プロトコール」を基準にしたものである。このような身体儀礼の修得法の違いは、以下のように分析することができるだろう。

人類学者の加藤は、茶道における「点前」とは、M. フーコーの「鍛錬 (ディシプリン)」という用語に近いものである[加藤, 2004]。「鍛錬 (ディシプリン)」とは、長い期間をかけて訓練・習慣化された身体の型を指しており、フーコーは国家による身体統制——学校や刑務所などにおける身体の鍛錬——が、精神をコントロールする要因になっていると指摘した。加藤も指摘する通り、茶道を通しての鍛錬——点前の身体化——は、国家ではなく、社会規範から来るものであるため、厳密にはこの二つの概念の間には違いがあるが、両者は身体と精神の一体化に焦点が当てられているという意味において類似している。

既に確認した通り、この「点前」は伝統的に日本における「礼儀作法」の原点として考えられてきた。その理由は、それが自己の「精神性」・「芸術性」の向上に繋がるだけでなく、「他者とのつながり」を深めるもの——一期一会の精神に基づいた「交際礼法」の修得——と解されてきたからである。

礼儀作法とは、身体そのものが提示する作法 (パフォーマンス) を指すと同時に、それは道徳や倫理とも深く関わりをもつものである。「修身」における「礼儀作法」の扱いについては、既に確認したが、伝統的に日本における礼儀作法とは、道徳や倫理といった問題——ここでの道徳や倫理は天皇崇拝に起源を持つが——と深く結びついたものとして認識されてきた。つまり「見た目の身体とその内面は、一にある」という認識である。茶道における点前も、精神性、芸術性の向上だけではなく、他者への配慮という道徳性と深く通じるものであったために、礼儀作法を習得するための基本として認識されてきたのである。

日本における「礼儀作法」と同じく、西欧には「マナー」や「エチケット」といった理想的な身体様式を指すことばがあるが、J. アールディティ (1998) は「エチケット」が18世紀のイギリスに生まれたことによって、儀礼と倫理が断絶したと指摘した。また、E. ゴッフマン (1959) は「マナー」と称して、身体 (振る舞い) をコントロールすることが可能な現代人は「道徳の商人」だと指摘している。このような発想は、西欧における身体儀礼が道徳と距離をおくものになってしまったことを示している——マナーやエチケットが定式化されることで、人びとの関心はマナーを守る事それ自体に向き、マナーを守る意義を忘れてしまっている。このように、マナー・エチケットの定式化が、道徳性からの遊離を導くという事態は、身体／精神を二元論的に捉える傾向が強い西欧においては、早くから指摘されてきた。

戦後に導入された「フィニッシングスクール」や「イメージコンサルタントサロン」とよばれる女性の身体儀礼に関わる諸制度は、西欧のマナーやエチケットに焦点をあてた身体統制の形式を教育するためのものであり、ここでは「鍛錬 (ディシプリン)」、「礼儀作法」としての身体儀礼ではなく、「マナー」、「エチケット」としての身体儀礼が主に学習されている。また、両者が決定的に袂を分かť点は、伝統的な身体統制が、日本の伝統文化を基盤に構成されていたのに対して、現代社会におけるそれが、「心理学」という人文科学を基盤に成立しているという点にある。例えば、「イメージコンサルタント」を要請するためのテキストにおいては、「他者が自分をいかに認識・評価するのか」、ということが、まず重要であるとされ、カラーチェック (個性を生かす色を選択する) やパフォーマンス術 (他者を「ひきつける」話し方を学ぶ) などを、社会心理学理論に即して学習・実践していく方法が記されている。また、もうひとつ両者が大きく異なる点として、前者が伝統的文化に起因する身体の統制であるのに対して、後者は自らの身体の自己言及的なコントロールであるという点である。「イメージコンサルタントサロン」に通う、現代社会における多くの女性は、心理学的な科学的構造を基盤に、半ば「意識的に」自らの身体を美しく見せること——パフォーマンス術を高めること——に勤しんでいるのである。

ここまで、明治から戦後、そして女性運動が活発になる、70年代以降の女性の身体儀礼習得過程の変容について考察してきた。次に、台湾社会における伝統的な女性の身体儀礼について概観していきたい。台湾社会において、女性運動が活発になったのは1980年代であるといわれているが、その基盤は70年代に起こった「台湾の奇跡」

と呼ばれる経済発展期にある。1965年から1973年までの間に、女性の労働市場参加率は、33.1%から41.5%に増加し、また後の副総統である呂秀蓮らによって『新女性主義』(1974)が刊行され、女性の精神的自立が叫ばれた〔台湾女性史入門編纂委員会、2008〕。

台湾における民族構成は、その複雑な歴史的な背景から、オーストロネシア語族に属する原住民族（14民族）と、1662年鄭成功の台湾統治時代に大陸から渡ってきた本省人（主に閩南人・客家）、そして、1949年の蒋介石と国民党政府中央の台湾占拠以降、大陸から台湾に渡ってきた外省人（漢族・モンゴル族・回族など）に分かれる。日本による台湾統治以前、原住民族と本省人はそれぞれ独自の文化を尊重しつつ台湾に共在していた。女性の身体儀礼についても日本と同じく、それぞれの伝統文化から強い影響を受けていた。例えば、原住民族の間では、刺青、抜歯などの伝統的な身体装飾がみられ、女性は男性に比べて受身的な身体儀礼を要請されていた。また、本省人、特に閩南人の間では、纏足の伝統があり、女性は内にこもり、家事に勤しむ存在という伝統があった。また、女性の色の白さが尊重されたために、外に出て家事を行う際には、日傘をさすことが常であった。しかし、日本統治下で、これらの伝統的な身体統制の型は、日本的なものへと変容させられることになる。原住民の文化である抜歯や入れ墨は、統治後すぐに廃止され、閩南人纏足は1915年に廃止された。

日本統治時代に、女子の高等教育機関として唯一認められた私立台北女子高等学院においては、「良妻賢母」を育てる教育がなされ、実質上「花嫁学校」としての機能を果たしていた。当時、高等女学校を出た裕福な女性が、結婚するまでのモラトリアム時期をここで過ごしたといわれているが、ここでは「大和なでしこ」として生きることが強制され、女性としての礼儀作法——茶道の点前の修得や正座の強請——が行われたといわれている。日本による台湾統治は、その敗戦を機に幕を閉じたが、その後も原住民族や閩南人の中にみられた伝統的な身体装飾や、身体儀礼（特に身体装飾）は回復することなく、続いて蒋介石率いる国民党政府の統治下で、中国本土の文化的統制をうけることになる。中国も伝統的な家父長制に基づいた男尊女卑の思想が流れているが、身体統制の在り方そのものについては日本ほどに厳密な型はないといわれている〔洪、2001〕。

その後、日本と同じく台湾社会においても、80年代以降は消費文化が浸透することとなり、女性の身体は統制されるものから、見せるものへと、つまりパフォーマンスの場へと移行していった。また、グローバル化の影響を受けることを通じて、台湾社会には日本のファッションが広く浸透するようになり（哈日族ハーリーズーの出現）、現在でも日本製のファッション雑誌や服飾品が数多く輸入されている。しかし、日本的な服飾品に興味を持ち、それを好んで身につける女性は多いものの、日本的な女性の身体統制そのものを身につけようとする女性はほとんどいないといえるだろう（日本による統治時代に、日本的な身体統制を上流階級の象徴として身に付けた高齢者を除いては）。

ただ、現代の台湾社会においても「イメージコンサルタントサロン」が浸透しつつあるという事実がある。今回の台湾での調査を通じて、Best Talent Image Consult and Management と Image Color and Image Consulting Center というふたつのイメージコンサルタントサロンを訪問し、インタビュー調査と制度調査を行った（詳細については Hayami, 2009c 参照のこと）。両者共に、主にビジネスマナー、得に西欧的なそれを学ぶ、男性／女性の会員が全会員の9割を占めているということであったが、残りの1割は、女性のマナー育成に開かれているということであった。このように、台湾社会においても、西欧的な身体統制を学ぶ機会が増えており、身体的を介したパフォーマンスを通じて、自らを美しく表現しようとする女性が増えていく傾向にあるといえるであろう。

以上、日本と台湾における伝統的な女性の身体統制について社会制度との関連を通じて概観してきた。女性運動の展開により、このような伝統的な身体統制の在り方が効力を失い、現在社会においては多様な身体儀礼を確認することができるが、日本、台湾ともにグローバル化の影響を受けて、「イメージコンサルタントサロン」が浸透しつつある。しかし、台湾における「イメージコンサルタント」の浸透は、日本社会のそれに比べ、まだまだ活発ではないということがいえる。

参考文献

天野正子他編、2009『新編日本のフェミニズム 8 ジェンダーと教育』岩波書店。

Arditi, J., 1998 A genealogy of Manners : Transformations of Social Relations in France and England from the Fourteenth to the Eighteenth Century , University of Chicago Press.

綾部恒雄編, 1982 『女の文化人類学: 世界の女性はどう生きているか』 弘文堂。

新川登亀男, 1999 『日本古来の儀礼と表現』 吉川弘文館。

Bacon, A. M., 2000 Japanese Girls and Women, Univ Pr of the Pacific . (= 2003、矢口祐人、砂田絵里加訳『明治日本の女たち』 みすず書房)

Goffman, E., 1959 The Presentation of Self in Everyday Life. Doubleday, Anchor Books. = 1974、石黒毅訳『行為と演技——日常生活における自己呈示』 誠信書房。

———, 1963a Behavior in Public Places: Note on the Social Organization of Gatherings. The Free Press. = 1980、丸木恵祐・本名信行訳『集まりの構造——新しい日常行動論を求めて』 誠信書房。

———, 1963b Stigma: Note on the Management of Spoiled Identity. Prentice Hall. = 1970、石黒毅訳『スティグマの社会学——烙印を押されたアイデンティティ』 せりか書房。

———, 1967 Interaction Ritual: Essay on Face to Face Behavior. Doubleday, Anchor Books. = 1986、広瀬英彦・安江孝司訳『儀礼としての相互行為——対面行動の社会学』 法政大学出版局。

———, 1969 Strategic Interaction. University of Pennsylvania Press.

———, 1971 Relations in Public: Micro-Studies of the Public Order. Basic Books (hardcover); Pelican Books (paperback).

———, 1974 Frame Analysis: Essay on the Organization of Experience. Harvard University Press (hardbound); Harper and Row (paperback).

———, 1979 Gender Advertisements. Harvard University Press (hardbound); Harper and Row (paperback).

原田伴彦、遠藤武、百瀬明治, 2006 『絵で見る江戸の女たち』 柏書房株式会社。

加藤恵津子, 2004 『「お茶」はなぜ女のものになったか: 茶道から見る戦後の家族』 紀伊國屋書店。

黄英哲, 2007 『「去日本化」「再中國化」: 戦後台湾文化重建(1945-1947)』 麥田出版。

洪郁如, 2001 『近代台湾女性史: 日本の植民統治と「新女性」の誕生』 勁草書房。

小山静子, 1991 『良妻賢母という規範』 勁草書房。

熊倉功夫, 1980 『近代茶道史の研究』 日本放送出版協会。

Maffesoli, M., 1988 The Time of the Tribes: The Decline of Individualism in Mass Society, London: Sage. (= 1997、古田幸男訳『小集団の時代——大衆社会における個人主義の衰退』 法政大学出版局)

Riesman, D., 1950 The Lonely Crowd: a Study of Changing American Character, Yale University Press. (= 1964、加藤秀俊訳『孤独なる群集』 みすず書房)

関沢まゆみ, 2008 『現代「女の一生」——人生儀礼から読み解く』 NHK ブックス [1114]、日本放送出版協会。

菅原正子, 2008 『日本人の生活文化——くらし・儀式・行事』 吉川弘文館。

台湾女性史入門編纂委員会編, 2008 『台湾女性史入門』 人文書院。

Turner, V., 1969 The Ritual Process: Structure and Anti-Structure, Routledge & Kegan

Paul. (=1966、富倉光男雄訳『儀礼の過程』 新思索社)

ITP 派遣以降の研究業績

著作:

1) 大野道邦・小川信彦編、速水奈名子、第 12 章「現代社会における自己形成と身体——ゴッフマンのフレーム論をもとに」、査読無、『文化の社会学——社会と文化のダイナミクス』(文理閣)、2009 年 a、3 月。

学術雑誌投稿論文(予定):

2) 速水奈名子、「ゴッフマン理論と個人化」、査読有、『社会学史研究』(日本社会学史学会)、第 31 号、pp239-253、2009 年 b、6 月。

国際学会:

3) Nanako HAYAMI, 'Research on Woman's Bodily Regulation in Contemporary Japanese Society: Breakdown of the Traditional Communities and Growth of Consumer Culture', Workshop on Comparative Studies of 'Communities' in China and Japan organized by School of Modern Languages and Cultures at University of Hong Kong, Hong Kong University, 7-9 May, 2009c.

現代韓国における死者と政治

田中 悟（国際協力研究科 助教）

派遣先：成均館大学校（韓国）

はじめに

報告者は今回、本プログラムに基づき、2009 年の 1 月から 3 月にかけて第 1 期アジアプログラム短期派遣者として韓国・成均館大学校に滞在する機会をいただいた。本報告はその経験に基づく報告である。

構成としては、まず長期派遣学生に対するメンターとしての活動を報告し、そこから導き出される反省点などを、今後に向けた議論の材料として提供したい。その上で、研修テーマに基づく報告者自身の研究成果について述べた上で、今後の研究方針について若干付け加えることとする。そして最後に、今年度以降のプログラムの実施に向けての課題についてコメントすることで、全体のまとめとしたい。

1. メンターとしての現地指導

本プログラムの短期派遣者は、ポスドク・D4 以上の大学院生もしくは助教であることをその申請資格としており、単に自らの研究の進展を図るだけでなく、D1 もしくは D2 である長期派遣の大学院生のメンターとして、指導教員とともに現地指導に当たるものとされている。今回の場合、長期派遣者の派遣期間は 2008 年 10 月から 2009 年 6 月であり、短期派遣者である報告者は 2009 年 1 月から 3 月までの派遣であった。したがって、派遣院生の留学初期段階のスタートアップなど生活面でのバックアップは基本的に不要であり、メンターとしての活動は院生の研究の進捗状況確認と研究上の相談への応対が中心となった。

現地におけるメンター活動は、面談形式を基本とした。また、その場で解決できない問題については、いったん双方で持ち帰った上で、次回の面談時やオンライン上で再度議論することとした¹。理想としては、こうした面談を定期的実施すべきところであろう。今回の場合、ある程度はそのような形での実施を実現できたと考えているが、時期によっては面談が難しく、間隔が開いてしまうこともあった。その要因としては、(1) 双方に体調不良の時期があったこと、(2) 報告者は地方へのフィールドワークに出ることが多く、院生とのスケジュール調整が難しかったこと、などが挙げられる。これらはあくまでも個人的・個別的事情によるものであって、必ずしも制度上の問題があったわけではない。

ただし、本プログラムの設計上、現地指導は長期派遣者と短期派遣者とで一対一で行なわれるのが基本であるから、指導のやり方やスケジュールなど形式的な面でも、両者の間で事前にある程度のコンセンサスが存在したほうが望ましいと思われる。特に両派遣者が（研究科や所属ゼミを異にするなど）それほどよく知る関係ではない場合、現地指導の実効性を確保するためには、短期派遣者が渡航する前に、そうした点について両者であらかじめ詰めておく必要はあるだろう。

さて、現地指導の具体的な内容としては、その時々の進捗状況や研究スケジュールなどの確認・研究上の問題点の指摘や方向性に関する議論・参考文献の提示などが基本となった。形式的には、院生が執筆中の草稿をもとに議論することもあれば、構想メモやレジュメを基にすることもあった。今回の場合、長期派遣の院生は韓国で碩士（修士）課程を修了しており、語学や研究人脈の開拓といった面で報告者が出る幕はなかったと言ってもよい。その分、院生自身が現地の研究状況に埋没しがちとなって、研究の枠組みそのものがともすればそちらに引っ張られてしまうことも少なくなかったため、その点の修正が指導時の主要なテーマとなるが多かった。むしろこれは最終的には指導教員が責任をとるべき問題であり、現地指導に際しては、院生の指導教員とメンターとの間の連携も充分

1 オンラインでの対話ツールとしては、主に Windows Live Messenger を用いた（<http://messenger.live.jp/index.htm> 参照）。

に図られるべきであろう。

2. 研究報告—現代韓国における死者と政治

次に、報告者の研究について報告することとしたい。最初に、本研究の問題意識に関連して、『死者の政治学』とは何か²について簡単に論じる。次いで、現地でのフィールドワークや収集資料などを基に、研究の課題や展望について述べることにしたい。

「死者の政治学」とは何か

報告者の研修テーマは「現代韓国における死者と政治」であった。現地での活動を報告する前に、まず「死者と政治」をどのように問題とするのか、という点に関する報告者の問題意識を、ごく簡単に述べておきたい。

近代という時代を「世俗化」という形で理解すれば、それは一般的に、ヨーロッパにおけるウェストファリア体制の出現を一つの基点とする。これは、宗教的世界が普遍性を失って分断され、国家の栄枯盛衰によってその安定を左右される時代の始まりであった。近代社会におけるそうした「世俗化」は、近代科学に象徴されるような合理的思惟と、世界認識の人間中心主義とにつながっていくことになる。

この近代で、近代人の近代的な思惟や認識から排除されたのは、あらゆる超越概念であった。そこで排除された超越概念の中には、神だけではなく、死者も含まれていたのである。けれども、いかに近代を生きる生者の思惟や認識から排除されようとも、死者は、科学的合理的な枠組みの限界を超えたところから、「存在するのとは別の仕方」で、生者に関わり続ける。結果として、近代の生者は、自らの近代的思惟との緊張をはらみつつも、死者と関わるのをやめることはできなかったのである。そこで次に問題となるのは、「生者は、死者とどのように関わるのか」という点である。

超越概念が否定された近代において、超越概念である死者とどう向き合うか。宗教的普遍を排除した上でその問題に取り組むとすれば、生者に残されるのは、現世の秩序を他界へも適用する方法しかない。すなわち、国家単位に分断された秩序が死者にも適用され、カール・シュミットの「例外的事態における友敵の区分」がもたらす観念としての「政治的なもの」が、死者に対しても持ち込まれることになるのである。政治的に引かれた境界線内の死者のみが「死者」として遇される。そのような境界線を引く政治的権力は〈死者の範囲〉をめぐってせめぎあい、権力に服する人々はそうした境界線を内面化したり、違和感を覚えたり、時としては拒否したりもする。

このような、死者の範囲をめぐる近代人の営みを、報告者は「死者をめぐる政治」と呼ぶのである。さらに、国家や時々の政権、その他の人間集団などが、どこで／どのように、死者の境界線を引く／引き直すのか。その際に、死者と生者との間ではいかなるコミュニケーションが成立し、そのコミュニケーションに生者はどれほど拘束されるのか。こうした点の分析を研究上の焦点とするのが、報告者が定義するところの「死者の政治学」である。

研究対象

派遣前に行なった予備的考察²で報告者が研究対象として主に取り上げたのが、1987年の民主化前後に成立した諸政権によって建設された歴史記念施設である。すなわち、独立記念館（忠清南道天安市）・戦争記念館（ソウル特別市）および国立4.19民主墓地（ソウル特別市）・国立5.18民主墓地（光州広域市）・国立3.15民主墓地（慶尚南道馬山市）といった各施設は、全斗煥・盧泰愚・金泳三・金大中の各政権における「死者をめぐる政治」を体現する国立の（もしくはそれに準じる）施設であり、本研修期間において改めて観察・比較検討すべき中心的な研究対象であった。また、例えば国立ソウル顕忠院（ソウル特別市）・国立大田顕忠院（大田広域市）や国立永川護国院（慶尚北道永川市）・国立任実護国院（全羅北道任実郡）・国立利川護国院（京畿道利川市）といった、軍人墓地に端を発し、もう一つの系列をなす国立墓地群は、上記の施設との関連において比較分析の欠かせない対象である。さらに、独立運動家や民主化運動家の「烈士」を記念する墓域や人物記念館といった施設も、観察対象としては外せない。これらの施設に対しては、直接訪問による実地観察と、それに基づく資料や情報の収集が求められる。

2 田中悟「現代韓国における死者と政治—独立記念館から国立墓地まで—」（日韓歴史共同研究委員会教科書小グループ 広島研究会、2008年5月）

次いで、文献資料調査と収集が挙げられる。調査対象は大きく二つを考えられる。一つは、独立記念館やほとんどの国立墓地の管理を一手に引き受ける官庁である国家報勲処の関係文書や報告書類であり、もう一つは学術研究書や一般の関連図書などの刊行物、およびマスメディアの関係記事である。これらの読み解きを通じて、「政府の公式見解としての死者論」および「韓国社会における死者論」の内容を見極めていくことを目指す。

フィールドワークについて

まず、主要なフィールドワークの記録を列挙しておく。

国立利川護国院（京畿道利川市、2009.01.08）
 独立記念館（忠清南道天安市、2009.01.10）
 牡丹公園墓地（京畿道南陽州市、2009.01.17）
 忘憂里公園墓地（ソウル特別市中浪区、2009.01.18）
 孝昌公園（ソウル特別市龍山区、2009.01.19）
 南山公園（ソウル特別市中区 2009.01.21）
 国立ソウル顕忠院（ソウル特別市銅雀区、2009.01.26）
 ソウル歴史博物館・鉄道博物館（ソウル特別市鐘路区・京畿道義王市、2009.02.01）
 国立 4.19 民主墓地・北漢山先烈墓域（ソウル特別市江北区、2009.02.02）
 朴正熙大統領生家ほか、関連記念施設（慶尚北道亀尾市、2009.02.03）
 国立永川護国院（慶尚北道永川市、2009.02.03）
 民主公園・釜山大学校ほか、民主化関連記念施設（釜山広域市、2009.02.04）
 高麗大学校（ソウル特別市城北区、2009.02.10）
 4.19 革命記念図書館（ソウル特別市鐘路区、2009.02.11）
 延世大学校・ソウル大学校（ソウル特別市西大門区・冠岳区、2009.02.16）
 李韓烈記念館（ソウル特別市麻浦区、2009.02.19）
 西大門独立公園（ソウル特別市西大門区、2009.03.01）
 国立任実護国院・金朱烈墓（全羅北道任実郡・南原市、2009.03.05）
 国立大田顕忠院（大田広域市、2009.03.06）
 国立 4.19 民主墓地（第2次調査、ソウル特別市、2009.03.11）
 国立 5.18 民主墓地ほか、光州事件関連記念施設（光州広域市、2009.03.12-13）
 戦争記念館（ソウル特別市龍山区、2009.03.15）
 居昌事件犠牲者墓域（慶尚南道居昌郡、2009.03.19）
 洛東江勝戦記念館・学徒義勇軍戦勝記念館ほか、朝鮮戦争関連記念施設（大邱広域市・慶尚北道浦項市、2009.03.20）
 国立ソウル顕忠院（第2次調査、ソウル特別市、2009.03.22）
 国立 3.15 民主墓地ほか、関連記念施設（慶尚南道馬山市、2009.03.24）
 民主公園ほか、関連記念施設（第2次調査、釜山広域市、2009.03.25）

これらのフィールドワークについて一つ一つ報告する紙幅はないし、その成果の取りまとめは今後の課題であるので、ここではいくつかの主要な論点について取り上げ、報告者の観点からまとめておくこととする。

第一に、国立墓地に埋葬される死者は、それとして完結しているわけでは必ずしもなく、その周囲に一定の〈広がり〉を有しているという点が注目される。一つ例を挙げれば、光州の国立 5.18 民主墓地は、この国立墓地造成以前に犠牲者が埋葬された「5.18 旧墓地」と道一本でつながっている。そこには 1980 年当時の光州事件の犠牲者だけではなく、李韓烈・姜慶大のように、1980 年代・1990 年代以降に亡くなっていわゆる「民主烈士」とされた人々も少なからず埋葬されており、光州市郊外の望月洞一帯に広がるこの墓地自体が、光州事件と民主化との

関連性を表象している。こうした連関は、民主化にとどまらず、例えばある種の南北統一運動³、また労働運動⁴と延びていく。報告者としては、国立墓地を手がかりにしてこの連関の広がり把握住し、その社会的位置づけを量ることができるのではないかと考えている。この点は今後の課題の一つに数えられる。

国立墓地のもう一つの系列をなす顕忠院・護国院についても同様の考察は可能である。すなわち、国軍墓地として始まった顕忠院は、戦没・殉職した軍人・警察官の墓所としての機能を全国各所の護国院へと分散させながら、国家元首・抗日独立運動家・国家有功者など、多様な死者を取り込みつつ発展を続けている。この「発展」は、移葬という手段を通じて現在進行形で進められており、その選別過程や、集められた異質な死者集団が奏でる〈不協和音〉、国立墓地以外の墓地・慰霊施設（例えば孝昌公園・西大門独立公園・居昌事件犠牲者墓域など）との関連性など、注目すべき論点を見出すことは難しくない⁵。

第二に挙げておきたいのが、「死者をめぐる政治」と個々の都市イメージとの関連性である。例えば1960年、李承晩大統領の下野に帰結した「四月革命」の国立記念施設は、首都ソウルの国立4.19民主墓地を別にすれば、慶尚南道の馬山にある（国立3.15民主墓地）。もちろん馬山は1960年の大統領選挙における不正選挙に抗議して激しいデモが展開され、それがソウルのデモを呼び込んだことで広く知られているが、運動の導火線ともなった大邱でもなく、ソウル同様に死者まで出す激しいデモが展開されて戒厳令が宣布された釜山や光州でもなく、何故に馬山だったのか。この1960年だけでなく、1979年の朴正熙大統領射殺事件から1980年の第五共和国発足にかけての政局においても、釜山という都市が（馬山と同様に）果たした役割は決して過小評価すべきものではないと思われる。けれども、「民主化」という文脈における釜山の位置づけは、実際問題として光州や馬山とは比べ物にならず、中央公園内に設置された「民主公園」も、「民主都市・釜山」といった象徴性の獲得には失敗しているように見える。何故に釜山は、そのような帰結を招いているのか。こうした疑問を説明するロジックはいろいろと考えられるだろうが、可能な限り各都市の現実在即した形でそうした〈偏り〉に説明を与え、「死者をめぐる政治」と生者との間の関係への考察へとつなげたい。

第三に、歴史博物館がそれぞれに提起している歴史観の相克にも注意を向けてみたい。韓国の正統的な歴史理解では、大韓民国臨時政府の法統を受け継いで成立したのが現行の大韓民国だということになるが、こうした歴史観は近年いわゆる「ニューライト」の批判に晒され、しばしば議論の対象となっている。同様の議論は、実は韓国に現存する歴史博物館からも導き出せる。例えばソウル歴史博物館はソウルの〈都市としての歴史〉に焦点を絞った博物館であって、日本植民地下の「京城府」時代もその歴史の一部として展示コースに組み込まれているし、鉄道博物館における植民地時代の鉄道についての展示も同様である。こうした歴史展示に貫かれている叙述が、孝昌公園内にあって金九を記念する白凡記念館や独立記念館などの歴史叙述と噛み合わないのは当然のことである。また、大邱の洛東江勝戦記念館に代表される、反共意識高揚のために各地に建設された展示施設や記念施設と、現代韓国社会との間の距離感は、どのように理解されうるのか。これらの点に関して、それぞれのロジックが、様々な雰囲気をもとって各地に点在している状況から、韓国社会の社会観・世界観の変遷と現状とを分析していけないか、と模索しているところである。

「国家報勲」というキーワード

さて、現代韓国において、報告者が関心を持っている「死者と政治」に関連するキーワードとして「国家報勲」が挙げられる。日本語としては耳慣れない言葉ではあるが、例えば独立記念館や国立墓地を管轄する役所は「国家報勲処」という名前であるし、韓国社会の文脈の上で国家と死者とをつなぐ概念用語として、注目するに値しよう。

この「国家報勲」に関する現地での研究活動として、金玄氏（神戸大学人文学研究科・博士後期課程）よりご紹介いただいた歴史研究家の趙成雲氏の紹介により、1月30日に国家報勲処を訪問し、そこで功勲審査課研修員の金美英氏と面談した。その中で、国家報勲処の業務内容に関する説明を受けるとともに、若干の部内資料の提供を

3 1989年の平壤訪問などで知られる故・文益煥牧師の記念事業を行なっている財団がソウルの李韓烈記念館に入居していることなどから、このことが示唆される。

4 すぐに指摘できるのは、「5.18旧墓地」に近年埋葬されている人物の中に、労働運動関係者が相当数存在することである。また、文益煥の墓所のある南陽州市の牡丹公園墓地に、1987年の拷問死によって民主化運動に火をつけた朴鐘哲らとともに、労働条件改善を訴えて1970年に焼身自殺したことで知られる全泰壹の墓所があることも、ここでは想起されている。

5 その中でも特に注目されるべきは、これらの国立墓地を管轄する国家報勲処の動向であるが、この点については後述することとする。

受けた。また、それと並行して資料収集を進める中で、「国家報勲学」もしくは「報勲政策」の題を冠した文献にいくつかぶつかった。それらの読み込みや内容に立ち入った分析についてはなお今後の課題とせざるを得ないが、ここではその前提たる「国家報勲と何か」という点について述べておきたい。

一つの例として、この分野では代表的な研究書である柳永玉^{ユ・ヨンオク}の大著『韓国報勲学』（弘益齋、2005）の目次を以下に掲げてみる。

第1篇 国家報勲学の概念と機能

第1章 国家報勲学の概念定立

第2章 国家報勲学の研究方法

第3章 わが国の報勲制度の発達過程

第4章 国家報勲の機能と内容

第2篇 3.1 運動と 6.25 戦争

第1章 3.1 運動と臨時政府

第2章 臨時政府の光復軍

第3章 独立運動と日本の降伏

第4章 6.25 戦争の始まり

第3篇 報勲政策の象徴性と国家別報勲政策

第1章 南韓報勲政策の象徴性

第2章 北韓報勲政策の象徴性の理解

第3章 重要国家の報勲政策

第4篇 韓国の報勲政策

第1章 高齢報勲対象者支援政策

第2章 国家有功者礼遇法と対象範囲

第3章 参戦軍人の国家有功者編入

第4章 除隊軍人支援政策

第5章 除隊軍人報勲政策

第6章 西海交戦を契機とする軍人補償の問題点

第5篇 国家有功者と遺家族

第1章 特殊任務遂行者補償制度の現況と問題点

第2章 殉職軍警遺族補償問題

第3章 ベトナム戦争等参戦軍人の枯葉剤被害対策

第4章 報勲補償の現況と改善策

第5章 軍警遺子女に対する報勲政策

第6章 国を守った人々の集まり

第6篇 世界化と民族精気

第1章 民族主義

第2章 世界化と民族精気

第3章 民族精気宣揚事業

第7篇 報勲文化拡散と当面の課題

第1章 大学生の護国報勲意識

第2章 韓国報勲文化拡散

第3章 韓国報勲政策の当面の課題と発展方向

この目次を一読して気付かされるのは、「国家報勲」が、歴史や国家、あるいは「民族精気」といったナショナル・スティックな抽象概念を包摂しながらも、実態としては国家有功者や除隊軍人・殉職軍警とその遺族を対象とす

る支援や補償といった社会福祉の側面を濃厚に有しているという点である⁵。「報勲政策」とは、具体的な財政支出を伴う社会保障に関係するものとしてまずイメージされるものであり、こうした事情は日本よりも直近の戦闘での戦死者・殉職者やその遺族・家族を多く抱える韓国の実情を反映していると言えよう。もちろんそれで「国家報勲」のすべてが尽くされるわけではなく、目次にも見える「民族精気」「報勲文化」といったキーワードには、(日本的な表現を借りれば「国民道徳」論とでも表現できるような)倫理的な側面も見ることができる。

行政学や社会福祉学の分野は別として、日本においてこうした「国家報勲学」に完全にパラレルな学問分野を見つけることは難しいが、強いて挙げるならば「国体」論に関する研究や、「国家神道」をめぐる研究など、「国家」をめぐる歴史学的・思想史的研究が相当するのではないかと思われる。日本近代を対象とするそうした研究が現代韓国を視野に入れることはこれまであまりなかったと思われるので、「国家報勲」をめぐる日韓間での比較研究などは今後、新規に開拓される可能性を秘めていると言えよう⁶。

鄭滄基『韓国の歴史記念施設』について

比較研究の可能性という点をめぐって、もう一つ紹介しておきたい。

今回の滞在でのフィールドワークの計画を立てる途上で複数の韓国人研究者から推薦された研究書に、鄭滄基^{チョンホギ}『韓国の歴史記念施設』(民主化運動記念事業会、2007)がある。独立記念館・戦争記念館・国立墓地など、韓国内の歴史記念施設の多くを考察の対象にした本書は事実、報告者が研究を進めるに当たっての道標たる先行研究として、たいへん有益なものであった。

以下、その目次を掲げる。

記憶と記念の必要性と意味
植民地の傷跡の治癒と「独立」の記念空間
内戦から国際戦へ！韓国戦争の「記念」空間
居昌追慕公園と歴史教育館
馬山の 3.15 義挙と国立 3.15 民主公園の記念館
権力を替えた社会運動、4.19 革命と記念空間
釜山の民主化運動を抱く保守山
5.18 民主抗争の記念事業と未完の「記念館」建立
記念館建立運動の変化と動学
民主主義殿堂と「希望世界」

そもそも、韓国内各地に数多く存在する近現代史関連の記念施設を包括的に紹介・分析した研究は韓国内においても決して多くないのであって、数多くの歴史記念施設を実際に訪れて分析を加え、そうした歴史記念事業が持つ意味合いまで論じた本書は、現時点においてたいへん貴重な研究成果である。そこで、報告者の先行研究として利用するだけでなく、現在、金世徳氏(芦屋大学講師)とともに日本での翻訳出版を目指して、企画を進めているところである。

4. まとめにかえて

以上、第1期アジアプログラム派遣者としての成果報告を行なってきた。3月末に帰国して以降、現在に至るまでの間に、具体的な研究成果をいまだ刊行できないでいることについては、忸怩たる思いがあるが、これは今後を期するほかない。ここでは、第2期以降のプログラムの円滑な実施に向けて、若干の課題をコメントすることで、全体のまとめに代えたい。

6 田中悟「現代韓国における死者と政治—独立記念館から国立墓地まで—」(日韓歴史共同研究委員会教科書小グループ 広島研究会、2008年5月)

メンターとしての活動について

今回の韓国プログラムでは、長期派遣者と短期派遣者とが同じ出身大学・ゼミであったため、研究上の問題関心や方向性について、現地指導の時点ではすでにある程度の共通認識が両者の間で成り立っていた。けれどもこれはかなり幸運なケースであって、今後のアジアプログラム・欧米プログラムでも同様の条件で指導を進められるとは限らない。原稿のプログラムにおける派遣前の研究指導はアカデミックライティング・オーラルコミュニケーションなど語学面のケアが中心となっているように思うが、上で見たような派遣者相互、また指導教員や派遣先大学の教員との間での現地指導や研究活動の遂行に関するコンセンサスを確立させるための研究指導や議論の場が必要になってくるのではないかと考える。

研究活動について

まず、事前指導において、語学面だけではなく韓国研究全般に関して丁寧かつ広範なアドバイスをいただいた金玄氏（人文学研究科 博士後期課程）に末筆ながら厚くお礼を申し上げたい。氏の人脈によって韓国で多くの人に会うことができた。これは、今後の研究にもつながるたいへん有益な機会であった。

韓国での活動そのものについては、基本的に制約なく自由にさせていただいたが、その中でも報告者の研究活動を制限したものが二つあった。一つは長期派遣大学院生の現地指導であり、もう一つは自身の体調である。前者はともかくとして、後者については最後の1ヶ月間、胃腸系の不調に断続的に襲われ、生活や研究活動が著しく制限されることとなった。むろん派遣者は海外傷害保険に加入しているのだが、加えて成均館大学校であれば「成均館大学校 保健治療所」（<http://web.skku.edu/~healthcenter/new/main.htm>）のように、学生証・身分証を持参すれば診察治療は無料だという診療所などが利用可能である場合が多いと思われる。こうした施設の確認を含め、健康管理については派遣者自身ができる限り気を配るべきであろうし、プログラムとしても可能な限り情報提供などの支援をお願いしたい。

平成 20 年度総括コメント

国立台湾大学派遣院生・メンターの成果報告

油井清光（本学人文学研究科教授）

2008 年度は人文学研究科からは、以下の両名をそれぞれ大学院生学生、及びメンターとして派遣した。

藤岡達磨 神戸大学大学院人文学研究科博士後期課程

速水奈名子 神戸大学大学院人文学研究科ポスドク

両者のうち、まず藤岡は 2008 年 10 月から 2009 年 6 月まで台湾の国立台湾大学人類学研究科・留学生として滞在した。

同大学では、「東アジアにおける公共圏構築の可能性についてー消費社会論とトラウマ社会学を架橋する社会理論の構築を目指してー」を全体テーマとし調査研究活動に、同研究科の胡家楡・准教授の下で従事した。第一には、台湾の複雑な歴史的経過を分析すると共に、第二には、具体的な調査対象として、消費活動と公共性が交差する場としての「夜市」に注目した。すなわち、台湾における公共圏の構築と、資本主義社会としての台湾における消費活動とが交差する空間的領域として、同地域の庶民活動および観光産業の特徴をなす「夜市」の実態に焦点をあてる調査研究を行った。まず、「夜市」の歴史的発展経緯として、地域的祭祀の場としての廟に注目し、廟の周辺における市の発展形態として「夜市」を捉え、当初は近隣住民による祭祀の場として同住民に開かれた場であった廟の空間が、都市圏（台北市）において、より拡大され開かれた空間として展開していく過程を想定した。こうした夜市の空間が、台湾全体からの客や、国外からの観光客を集める場になっていくにつれて、地域性を越えて全体としての台湾スケールでの「想像の共同体」を構築する場となり、消費活動と交差する「公共圏」を成していくという経緯の分析を行った。

また、速水は、2009 年 1 月末から同 3 月末まで、同じく国立台湾大学に滞在し、この間、藤岡の良き相談相手として、その研究に対して適切なアドバイスを行うと共に、上記の胡准教授および中央研究院の蕭新煌教授の指導の下、自らの研究テーマである、東アジア社会における女性の身体儀礼に関する分析ー身体イメージと身体統制に関する理論的フレームワークの形成に関して積極的な調査研究活動を行った。理論的フレームワークの研究としては、E・ゴッフマン、Y・ヴァンカンらの観点を、東アジアにおける女性の身体統制の調査研究に応用するためのより洗練された分析枠組構築を図ると共に、イメージ・コンサルタント業を中心とした実態調査にあたった。伝統的な身体統制のあり方が、グローバル化の影響を受けることを通じていかに変容してきているのかに焦点をあてた研究を行った。このような両者の研究は 2009 年 7 月の報告会において、高く評価され、現在、両者は、ヨーロッパ・ラウンドでの一層の研鑽を目指し、研究の発展と完成のため、積極的な努力を続けている。

成均館大学校派遣院生・メンターの成果報告

木村幹（本学国際協力研究科教授）

2008 年度は国際協力研究科からは、以下の両名をそれぞれ大学院生学生、及びメンターとして派遣した。

横溝未歩 神戸大学大学院国際協力研究科博士後期課程

田中悟 神戸大学大学院国際協力研究科助教

両者のうち、まず横溝は2008年9月から5月まで韓国の成均館大学東アジア学術院研究生としての滞在を行った。同学術院では、韓国におけるドイツ統一に関わる論議に関する研究を行った。その方法は、大きく二つである。一つは資料収集であり、主として韓国の総合雑誌である「月刊朝鮮」「新東亜」「マル」の三誌に着目し、この三誌におけるドイツ統一前後の論調の変化を研究した。

二つ目は、研究成果の分析とそれに関わる韓国人研究者からの意見聴取であった。この意見聴取に当たっては、成均館大学内部における研究者の聞き取りを中心に、北朝鮮研究を専門にする北韓大学院、更には、横溝自身の修士課程在学時の所属先であった、西江大学の教員、大学院生に対して、調査を行った。

その結果、明らかになったことは以下の通りであった。即ち、当初はそれぞれのイデオロギー分布に応じて、ドイツ統一に対して異なる論調を以て対していた総合雑誌は、ドイツの統一が現実になるに連れ、次第に論調を等しくしてゆくことになった。就中、注目すべきは、この過程において、当初はドイツの統一を、朝鮮半島の統一に対して好ましいモデルを提供してくれるものとされていた論議が消滅し、やがてドイツの統一は朝鮮半島の統一のモデルにはならない、という理解が形成されていったことである。このことは、特に、左派誌である「マル」において顕著に見ることができた。

また、田中は2008年12月から2009年3月までの間、同じく韓国の成均館大学東アジア学術院に客員研究員として滞在した。この間、田中は横溝の良き相談相手として、その研究に対して適切なアドバイスを行うと共に、自らの研究テーマである、韓国におけるナショナリズムと「死者」の扱い、に対して積極的な研究を行った。研究の内容は、やはり大きく二つに分けることができる。一つは、基礎的な文献調査であり、田中はその間、成均館大学付属図書館を始め、韓国内の図書館において積極的な資料収集を行った。二つ目は、現地調査である。韓国においては、解放以後、ソウル市内の顕忠院をはじめ、多くの国立墓地やこれに類する追悼施設が作られており、田中はこれら多くの施設を実際に訪問し、その死者追悼の形式の変化等を、実地にて調査した。

このような横溝、田中、両者の研究は2009年7月の報告会において、高く評価され、現在、両者はこの発展、完成の為に積極的な努力を続けている。

アジアプログラムの意義と方法をめぐって

高橋基樹（ITP 推進委員会評価部会長）

佐々木衛神戸大学人文学研究科研究科長により、ITP 事業の総括的説明として、「人文学研究科における「若手研究者 ITP」と教育研究の国際化対応」と題する報告がなされた。その主な内容は次のとおりである。同事業は、東アジアに関する高度な研究・論文執筆に加えて、外国語による研究発表の能力を備え、国際的に活躍できる人材の育成を目指す。こうした人材に究極的に望まれるのは、東アジア相互の対話や共生のためのグランドデザインを構築することである。そのため、同事業では、アジアと欧米の双方で行われている東アジア研究の蓄積を習得しつつ、人文学と社会科学の諸分野を参照する複合的トレーニングを行うものとし、それを可能とする、日本－中台韓－欧米の多極的な国際的共同教育体制を構築する。人文学研究科としては、海港都市研究センターにおける教育研究の開発、学域横断的な「古典力」と「対話力」の養成、「大学院教育改革支援プログラム」の成果を継承発展させるものとして ITP を鋭意推進していく。

続いて和田章男大阪大学文学研究科国際連携室長により、「エラスムス・ムンドゥスに見る知の拠点形成と国際交流」と題する報告が行われた。エラスムス・ムンドゥス計画は、2004 年から開始された EU 諸国の高等教育機関の国際連携であり、本 ITP 事業で目指す国際的共同教育体制が参考とすべき先駆例でもある。報告の要旨は以下の通りである。エラスムス・ムンドゥス計画の下で行われる主な事業には、国際的な大学連携による修士課程プログラム創設、域外からの留学生研究者支援、域外の大学との連携、EU の高等教育への関心の喚起などがある。同計画の一翼である「ユーロカルチャー」プログラムは域内の 8 大学及び域外 4 大学によって、修士課程の教育に関する国際連携が行われている。阪大文学研究科は域外大学のひとつとしてその連携を担い、日本研究・比較研究に関わる英語の授業を設けている。

さらに、高橋基樹神戸大学大学院国際協力研究科教授は、「アジアプログラムのこれからの展望：SOAS の経験から見た ITP の可能性」との報告を行い、ITP 事業の連携先であるロンドン大学東洋アフリカ研究院（SOAS）の概要、SOAS との連携協力のあらまし、そこから見えてくる、アジア地域研究及びその国際的連携の展開の将来性について、次のように論じた。SOAS は、社会科学・人文科学の双方を備え、アフリカ・中近東に加えて、アジアに関する高水準の教育研究を行う、世界有数の地域研究に関する高等教育研究機関であり、ITP 事業の国際的合教育体制における重要なパートナーである。SOAS に代表される欧州の地域研究は、過去の帝国支配の遺産として、地域研究の対象となっている地域の出身者によって担われる面があり、そこでは自文化理解・異文化理解の発信・交信が行われている。今後の地域研究においては、SOAS のような英語圏の中心にある高等教育機関の教育研究の先例、そこでの研究の蓄積を参考としつつ、自国語・現地語による他者理解に加えて、世界語による自文化理解・異文化理解の発信・交信を行うことのできる地域研究者の養成が求められている。

平成 21 年度

第 2 期アジアプログラム

第 1 期欧米プログラム

白先勇《孽子》與一九七〇年代臺北的都市記憶

——以野人咖啡室、新公園蓮花池、克難街為中心——

小笠原 淳（人文学研究科博士後期課程）

派遣先：國立台灣大學（台灣）

白先勇（1937－）的長篇小說《孽子》（1977－1981）是一篇引起過很多爭論的小說。這個爭論的重點主要在於它的同志論述與家國認同上面。我在這裏從另一個角度，來解讀《孽子》這部小說。就是臺北的都市記憶。此報告的題目是〈白先勇《孽子》與一九七〇年代臺北的都市記憶〉。所謂的臺北都市記憶，我在這裏想通過對三個場所的記憶來進行探討。這三個場所就是野人咖啡室、新公園蓮花池、南機場克難街。

《孽子》裏面的許多敘事，相當精確而細膩地呈現了當時的都市風貌，以及同志社群生態等新現象。白先勇在《孽子》裏所描寫的新公園蓮花池、西門町「野人咖啡室」、中華商場的公廁、龍江街的眷村、三重鎮的小劇場、南機場的貧民窟等各個空間，都是在現實中存在的，或者是曾經存在過的空間與現象。《孽子》就是以這樣的臺北都會空間為舞臺，展開了被主流社會邊緣化的青春鳥們的故事的。我在這裏把《孽子》暫時作為一篇「都市小說」去進行解讀分析，試圖透過《孽子》的具體描述，來重新構造和呈現七十年代臺北的都市空間。本研究穿梭於「文本」（text）和「城市記憶」之間，對《孽子》所包含的「現實性（actuality）」以及「精確性」的問題進行思考分析。

白先勇在寫《孽子》（1977－1981）時，已經離開了臺北十幾年，而且他只住了十一年的臺北。雖然他在臺北的時間並不長，但是他認同的還是臺北，自己承認自己是個「永遠的臺北人」。他曾經說過，「我覺得文學藝術，可以說是人類心靈最深刻那方面的投射，可能我們有歷史、有新聞記載，那都是可能是表層的一種事實的記述，要到更深一層，更往下接近人的心靈，那樣的表現我想可能要訴諸於文學，訴諸於藝術。這方面對我來說是我一生的追求，至於到什麼境界，我一直覺得只是往前一步一步的走，那個是無止境的。我是永遠的臺北人〔…〕我在臺北只住了十一年，在我一生中只有七分之一。可是這十一年大概是我的形成期（formed period），所以印象最深刻就是臺北。所以臺北對我來說，這個意義來說，可能我的寫作的，臺北是我的一個鏡頭，從臺北看出去，無論是大陸也好，紐約也好，香港也好，臺北來說是我一個焦距，一個 focus 的一個地方。所以我的小說是從臺北看出來的。」（「白先勇的藝文世界」系列講座）」

聽作家的這一番講話，我們得知他對臺北的感受超過曾經住過的任何一個地方。我認為白先勇的漂泊他鄉的離散（Diaspora）經驗產生陌生化效果（Verfremdungseffekt），因此他能夠以新奇的眼光來仔細地觀察臺北。這些成分，是白先勇得以精確地描寫臺北的主要原因之一。

六十年代，白先勇用〈臺北人系列〉（十四短篇），書寫了活在臺北的各種人物。可是「臺北人」描寫的終究是從大陸遷移臺灣的悲劇性人物，白先勇在「臺北人」裏主要追求的是「人在臺北心懷大陸」（梅家玲）的主人公，對過去的美好回憶與喪失故鄉的創傷。然而，到了《孽子》有了明顯的變化。與六十年代書寫相比較，我們就會發現彼此之間的很大的差異。其中一個就是，《孽子》對臺北空間的極為細膩的描寫和它的精確性。在我看來，白先勇似乎放棄了對中國大陸的回憶與向往，把眼光開始轉向給在臺北土生土長的新生代了。這是白先勇文學的很大轉變。白先勇在《孽子》的題詞裏面，很快地表達了對於這些新生代的同情與關懷。他寫道「寫給那一群，在最深最深的黑夜裏，獨自彷徨街頭，無所依歸的孩子們」

我們從此容易想象到，魯迅『狂人日記』裏的最後一句話「救救孩子……」我認為白先勇繼承了五四精神，期盼透過『孽子』來拯救被主流社會邊緣化的新生代。白先勇似乎充分發揮了臺大的人道主義精神。

北大的五四精神（五四時期的學生領袖傅斯年先生在1949年任職臺大校長，有幾位五四時期人物也任教臺大。臺大是五四精神的繼承者，發揚者，實踐者（柯慶明））。

經過六十年代的〈臺北人系列〉，到了《孽子》，白先勇的寫作有了明顯的變化。與六十年代的小說相比較，《孽子》對臺北空間的描述更加精確了。在我看來，白先勇已經放棄了對中國大陸的回憶與向往，把眼光開始轉向給在臺北土生土長的新生代了。這是白先勇文學的一大轉變。《孽子》的產生跟臺北的現代都市化有密不可分，所以在此也要約略地討論當時臺北的大環境。

1. 隨著臺灣經濟的快速發展，現代化都市臺北逐漸形成

自 1960 年代起，臺灣輕工業發展迅速，七十年代，臺灣政府開始推動十大建設，也帶動了民間企業的發展，加上越戰給臺灣帶來很大的利益，促使臺灣經濟起飛。由於經濟發展成功，臺灣進入亞洲四小龍的行列。具有首都地位的臺北的發展充分反映出，整個臺灣經濟的發展趨勢。1968 年 7 月四鄉鎮也劃歸為臺北市，因此人口膨脹的情形極為明顯。

臺北市改制（民國五十六年）之後，土地面積及人口都急劇的增加，工商企業發展迅速，又促成土地的高度利用，而使部分農地或改建工廠，或建造住宅，或托築道路，致農作面積逐年減少。這是邁向現代化都市的必然結果。『臺北改制十年』第三遍經濟建設（臺北政府新聞處、1977）

人口：1945 年 335,397 人、1946 年 271,754 人、1948 年 379,400 人、1949 年 484,312 人、1968 年 1,253,274 人、1970 年 1,777,630 人

電力的供給量：用電量 (KWH) 1966 年 600,209,820 、1970 年 1,774,916,682

道路：鋪裝路的長度 (m) 1966 年 548,829.21 、1970 年 1,018,557.32

公園園數：1966 年 12 (304,070 m²)、1971 年 61 (2,385,193 m²)

（臺北市政府市計處編印『臺北市統計要』（1971）、p.31）

電影產業：從六〇年代到七〇年代西門町迎來映畫產業的黃金時代

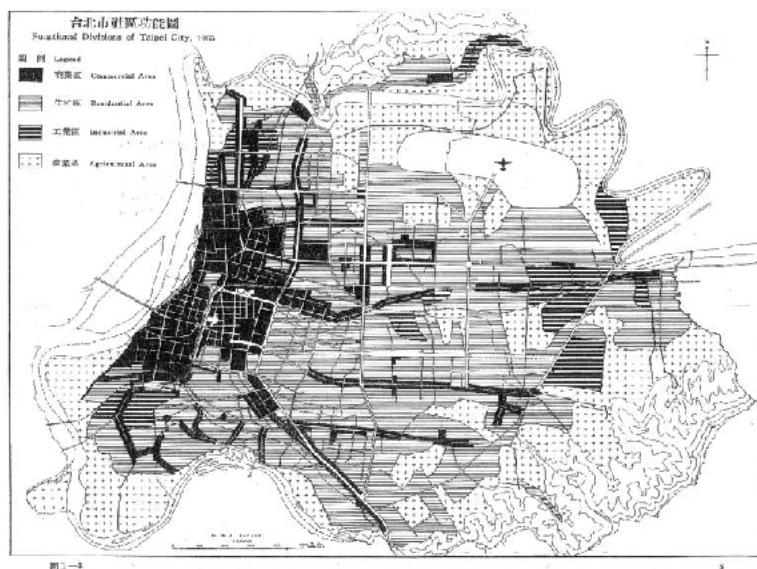
上「西門町」是六、七十年代臺北市民經常掛在嘴邊的一句話，上西門町，除了逛街、購物外，主要沖著電影街而來，而西門町黃金時代的電影街…

（葉龍彥「臺北西門町電影史（1896-1997）」（行政院文化建設委員會、1997））

◇產業構造的變化：由農轉工

在 1960 年代末期至 1970 年代初期，臺灣的產業結構已經明顯地「由農轉工」、產業構造有了變化。（周素卿「都市更新視域外的性別、遷移與貧民窟世界生活」、p.34）

在 1960 年代末期至 1970 年代初期，臺灣的產業結構已經明顯地由農轉工，婦女在農業的勞動參與率已由 36% 降至 13%，工商業參與率則由 16% 提高至 41%。（姜蘭虹，1983）

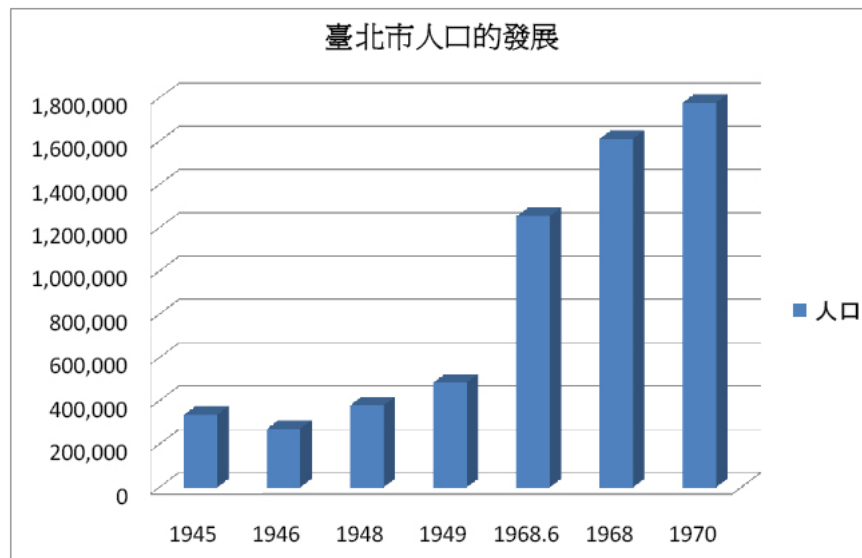


◇產業結構的變化：由農轉工

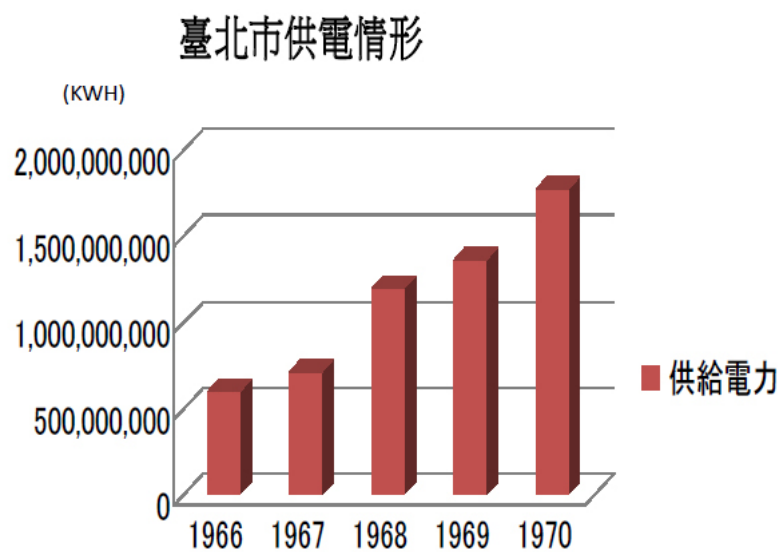
◇**臺北市改制**：於1967年臺北市改制之後，土地面積和人口都急劇的增加，工商企業發展迅速，又促進土地的高度利用，導致農作面積逐年減少。這是邁向現代化都市的必然結果。《臺北改制十年》（1977）

◇經濟成長與西門町：一九七〇年，政府開始推動十項建設，繼之有十二項建設，也帶動了民間企業發展，不少中小型企業因而發展為大企業，甚至電子產業成型。

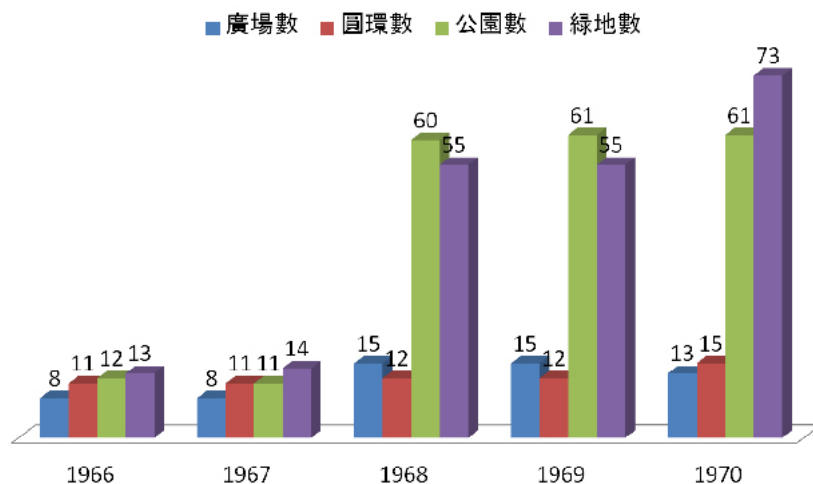
經濟的快速發展，反映在西門町的是百業繁榮，並且早在臺灣經濟奇蹟締造之前便已出現。大型的綜合商場紛紛開張，第一百貨公司、今日百貨公司、遠東百貨公司、人人百貨公司、天鵝百貨公司、中外百貨公司、萬年商業大樓（國際戲劇改建）、國泰百貨公司、六福商業大樓、新光獅子林大樓、來來百貨公司等，都在五、六〇年代創作了西門町的黃金時代。（葉龍彥、P.188）孽子裡也有描寫西門町當時的幾所百貨大樓的模樣。小玉先到西門町今日百貨公司去買了一大堆資生堂化妝品帶給他母親。（《孽子》p.150）



根拠『臺北市統計要覽』（臺北市政府市計処編印、1971）



臺北市的圓環・廣場・公園・綠地



公園園數：可見隨著人口的膨脹，公園的需求也逐漸增長。從這些數據來看，1968 年是臺北現代化的一個很重要的轉折點。把這些大環境作為基礎知識，下面要討論具體的都市空間。

II · 《孽子》與臺北空間

II - 1 地下音樂空間——野人咖啡室（1967-1970）

II - 1 地下音樂空間——野人咖啡室（1967-1970）

- 野人咖啡室也是《孽子》里的青春鳥們經常愛去的地方，是他們的聯絡站之一
- 「那架大唱機正在播著火爆的搖滾樂。披頭四放肆的在喊·· Ya—Ya—Ya」(《孽子》，p.63)

「小得像一個家庭晚會，這就是「野人」特殊的妙處。野人經常擠滿了年青的男男女女，沉浸在熱門音樂的浪聲中，歡笑暢談。這裏人與人之間沒有距離。同鄰座的人講話，也不會覺得是禮貌。」席德進〈野人咖啡室情調〉(1969. 2)



席德進素描「野人」

Bob Dylan的「The Times They Are A-Changin'」(1964) 裏反抗父母親的歌詞象征意義很大，充分反映了在現代化城市裏的異種青少年們對傳統體制的不滿和叛逆。

野人咖啡室是《孽子》裏的青春鳥們經常愛去的地方，是他們的聯絡站之一。炎熱八月的一天，李青鈺進野人的地下室裏，每張桌子坐滿了青少年「那架大唱機正在播著火爆的搖滾樂。披頭四放肆的在喊·· Ya—Ya—Ya」(p.63) 在六七十年代的臺北盛行的咖啡屋集中在西門町一帶，其中位於峨嵋街轉角的野人咖啡室（峨嵋街十六號地下）是非常獨特的地下空間。「野人」並不大，桌子只有十二張，最多擠上五六十人就滿了。席德進曾經說過，「小得像一個家

庭晚會，這就是「野人」特殊的妙處。野人經常擠滿了年青的男男女女，沈浸在熱門音樂的浪聲中，歡笑暢談。〔…〕這裏人與人之間沒有距離。我可以同鄰座的人講話。」席德進〈野人咖啡室情調〉《旅行雜誌》第45期（1969年2月）、pp.60—61

六十年代中期的臺北趕上了美國嬉皮時代的尾巴，在「野人」裏總是播放前衛的美國搖滾樂，使得年輕人喜歡聚集到這個自由空間。嬉皮風吹到臺灣，所有青春無聊、心靈無依的異種人類，都流浪到峨嵋街上的“野人咖啡館”。以大唱機播放的「野人」的搖滾樂，恐怕是在當時的臺灣最趕時髦的音樂了。這些搖滾樂是美國留學生帶到「野人」來的最新美國唱片，因此「野人」有很多其他咖啡屋聽不到的歌曲。其中 Bob Dylan 的「The Times They Are A-Changin'」（1964）（林懷民『蟬』p.146）裏反抗父母親的歌詞象征意義很大，充分反映了在現代化城市裏的異種青少年們對傳統的以及現行的體制的不滿和叛逆。

另外值得注意的是能夠「完全消除人與人之間的冷漠的冰牆」的野人的功能，果然如此，李青在「野人」裏結識了少年趙英，一同站出野人到新世界看「獨臂刀」，然後赴淡水河堤五號水門聊天。李青「沿著河堤，朝中興大橋那邊走去」。「野人」的地下音樂空間，能夠拉近人與人之間的功能，《孽子》的描述抓住了這一點。

「朝中興大橋那邊走去」的李青忽然回過頭去，看見了西門町的上空。他眼裏的西門町「霓虹燈網已經張了起來，好像一座高聳入雲的彩色森林一般。」（p. 73）五彩繽紛的霓虹燈把整個西門町覆蓋起來，好比是神秘的「彩色森林」一般。「彩色森林」與「青春鳥」一詞互相呼應。阿青、小玉、老鼠等「青春鳥」們棲息於巨大稠密的「城市森林」裏。反過來說，肯定自己同性戀的性取向的他們，只能在這樣的森林裏得到自己的匿名性，能夠確保認同生活下去。大都市是相對來講，對同志社群比較寬容的空間。就「青春鳥」們來講，大都市是他們的母親，母親一般的溫柔來擁抱他們，會暫時隱藏他們所經歷過的創傷。這些「青春鳥」的匿名性很顯然。阿青、小玉、老鼠、烏鴉、龍子、鳳子等人用的都是假名。

告訴你？小玉打鼻孔眼裏哼了一下，「為什麼要告訴你？誰我也沒告訴！」

我們公園裏的人，見了面，什麼都談，可是大家都不提自己的身世，就是提起也隱瞞了一大半，因為大家都有一段不可告人的隱痛，說不出口的。（《孽子》p. 94）

II-2 新公園蓮花池畔

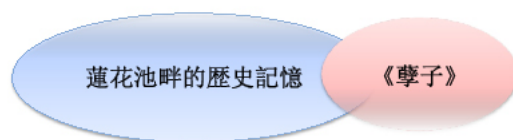
1961年，白先勇《寂寞的十七歲》里有對六十年代新公園的「同性戀」生態的描寫。

新公園這個地方到了晚上常生稀奇古怪的事情，可是我不想離開新公園，我沒有別的地方去。（《寂寞的十七歲》（1961），（pp. 218-219）

當白先勇寫《寂寞的十七歲》（1961）時，新公園裏還未修建蓮花池和中國式閣樓，青春鳥們的王國也還未浮現。到了1968年，白先勇寫了《滿天裏亮晶晶的星星》，在這個短篇小說裏，新公園的蓮花池畔已經成為了男同性戀的聚集場所了。

在水池邊的臺階上，繞著池子，一個踏著一個的影子，忙著在打轉轉（p. 247）

◆ 蓮花池畔的歷史記憶，賦予《孽子》明顯的象征意涵



II-2. 新公園蓮花池畔

六十年代是「同性戀」概念浮現於社會的時期」。1961年，白先勇在《寂寞的十七歲》（1961）裏描寫了六十年代新公園的「同性戀」生態（pp.218-219）。

新公園這個地方到了晚上常生稀奇古怪的事情，可是我不想離開新公園，我沒有別的地方去。《寂寞的十七歲》

(1961), (pp.218-219)

七十年代，由於臺灣經濟的巨大變化，使得更多的外移人口進入臺北工作，而新公園成為臺灣男同志的最主要情欲空間。當白先勇寫「寂寞的十七歲」(1961)時，新公園裏還沒有蓮花池和中國式閣樓，青春鳥們的王國也還未浮現出來。到了1968年，白先勇寫了「滿天裏亮晶晶的星星」，在這個短篇小說裏，新公園的蓮花池畔已經成為了男同性戀的聚集場所了，從這裏已經明顯看得到，「在水池邊的臺階上，繞著池子，一個踏著一個的影子，忙著在打轉轉」的青春鳥們的身影和他們的同性戀情欲了。由此可見，在新公園的男同志社群的形成，很有可能是跟公園東北端的「一小撮的土地」密切相關。不僅如此，這個土地的歷史記憶也賦予『孽子』明顯的象征意涵。

- 臺灣是個開放而又被阻隔的地方，因為種種國內及國際政經因素，臺灣不斷陷入被挾持的困境（廖炳惠）
- 臺北的現代都市化給同性戀者帶來匿名性
- 都市公園的自由空間（與政治和社會隔絕的都市公園的）
- 五座中國北方式樓閣的緊密以及蓮池周圍的隱蔽性

參考資料：吳瑞元『『孽子』的印記－臺灣近代男性「同性戀」的浮現（1970－1990）』（國立中央大學 史研究所、1998）

在我們的王國裏，只有黑夜，沒有白天。天一亮，我們的王國便隱形起來了，因為這是一個極不合法的國度……我們沒有政府，沒有憲法，不被承認，不受尊重，我們有的只是一羣鳥合之眾的國民。〔…〕說起我們國王的疆域，其實狹小得可憐，長不過兩三百公尺，寬不過百把公尺，僅限於臺北市館前路新公園裏那個長方形蓮花池周圍一小撮的土地。我們國土的邊緣，都栽著一些重重疊疊，糾纏不清的熱帶樹叢……綠珊瑚、面包樹，一顆顆老得須發零落的棕櫚，還有靠著馬路的那一排終日搖頭嘆息的大王椰，如同一圈緊密的圍籬，把我們遮掩起來，與外面世界暫時隔離。然而圍籬外面那個大千世界的威脅，在我們的國土內，卻無時無刻不尖銳地感覺到。

遠遠有兩個刑警，大搖大擺，向蓮花池子這邊跨了過來。〔…〕我們倏地都做鳥獸散，一個個留下了石階，各分東西，尋找避難的地方去了，〔…〕於是我們蓮花池的那個王國，驟然間便消隱了起來。

「青春鳥」與新公園的都市空間

青春鳥的王國是不是男同志的烏托邦？

他們即使身在這個國土內，也仍然無時無刻不尖銳地感覺到「圍籬外面那個大千世界的威脅」

- 新公園的空間緩和主流社會對他們的壓抑與創傷的作用
- 他們的王國一旦隱形起來，主流社會對他們壓抑就會恢復，於是他們的創傷也開始疼痛
- 作家以母愛般的溫柔促使青春鳥們離巢，離開他們青春時代的王國「新公園」



新公園的歷史變遷 ——日據時代是不折不扣的文化政治空間

新公園是臺灣第一個近代都市公園。日本殖民政府拆除了清代的天后宮，將其改建成公園。於1908年完成後，

新公園成為殖民統治最重要的都市空間之一。公園的東北側作為休閒空間修建了大運動場，表現出了殖民政府向往的現代化都市生活。在皇民化運動中，大運動場是一個「最重要的意識形態統治空間，在此進行各種升旗行禮、精神講話、廣播訓詞……等等精神統治活動」（陳誌梧「新公園多少舊事？」『中國時報』1992.5.23.27版）。在戰爭體制下新公園擁有強烈的殖民意識形態統治的作用。

蓮花池畔的歷史記憶

1941～1945年：大運動場（意識形態統治空間）

1947年：二二八事件

1963年～：五座北京官式亭閣（凝聚民族國家想象）

五座閣樓分別為：「翠亨樓」〔紀念孫中山〕大木亭〔紀念鄭成功〕、大潛亭〔紀念劉銘傳〕、滄海亭〔紀念丘逢甲〕、劍華亭〔紀念連橫〕

1970年～：男同性戀的地下王國

1996年：在臺北市長陳水扁主導下，改名為「二二八和平紀念公園」

五十年代末到七十年代初

五十年代末，當時的國民黨強化抹除本土認同，試圖重新建立中國北方風格的都市意象，在這種大環境之下，1963年在昔日的大運動場上改建蓮花池與中國北方式閣樓。不同的統治者在這一小撮土地上，不斷地重寫自己的歷史記憶，賦予這都市空間不同的意識形態及象徵意義。《孽子》的王國建立於這些歷史記憶上面。意識形態空間轉換為男同性戀的地下王國，這本身有強烈的諷刺意味，體現了地下王國反體制的挑釁。五座中國式閣樓的出現讓這一空間結構更緊密，擴大了它的隱秘性、排他性，也賦予了怪異荒謬的象徵意味。在「蓮花池周圍一小撮的土地」上，青春鳥們的王國無聲無息地浮現出來了。

另外，保護青春鳥們的起碼有三重圍牆，一個是現代化都市的匿名性，一個是新公園的緊密圍牆，另一個是荒謬的五座中國式閣樓。不過這個圍牆並非是鋼鐵般的堅固，而好像是個薄膜，一碰就會消滅，非常的脆弱。他們的王國不是永恒的，而是暫時的。就像「天一亮，他們的王國便隱形起來」一樣。

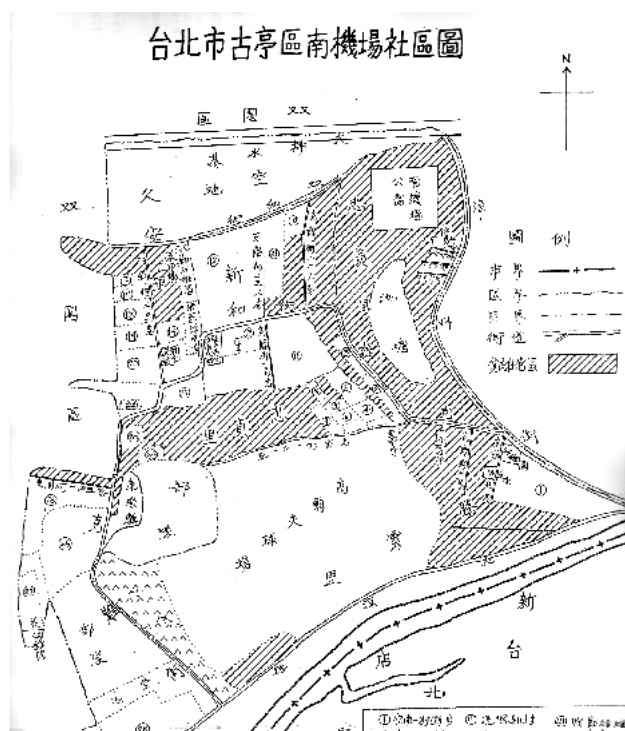
「青春鳥」與新公園的都市空間

青春鳥的王國是不是男同志的烏托邦？青春鳥的王國不是男同志烏托邦。因為李青他們即使身在這個國土內，也仍然無時無刻不尖銳地感覺到「圍籬外面那個大千世界的威脅」。只要呆在蓮花池畔，能夠緩和主流社會對他們的壓抑，而王國一旦隱形起來，他們的創傷就開始疼痛。這種循環是永遠不會停下來。他們總有一天要離巢飛到新生活裏面去。於是作家以母愛般的溫柔眼光促使青春鳥離巢，離開他們青春時代的王國「新公園」。小玉為了尋找父親離開臺北前往東京，阿青在小說的結尾，領著走投無路的少年羅平，伴隨著「一二 一二 一二 一二」的叫聲漸漸的遠離了新公園。

II－3. 南機場克難街

◇伴隨著臺北的現代都市化，開始形成了貧民窟，最顯著的例子就是南機場社區了。此地區是當時臺北市最大規模的貧民集結社區。該社區創設於1952年，最初兩年間居民都是外省籍，一直到1954年才有兩千余本省籍人口遷入該社區，集居於池塘附近。六十年代，南機場社區人口膨脹，一九五二年只有二千五百人，到了一九六三年增加了十倍，達到二萬五千人。隨著臺灣社會發生「由農轉工」的社會結構轉變，大量的本省籍人口遷入該地區，蓋建了棚屋，因此該地區貧民窟化越來越嚴重了。

（龍冠海、範珍輝編著「臺北市古亭區南機場社區調查報告」（臺灣大學法學院社會學系編印，1967）p.25）



《孽子》所呈現的克難街貧民窟生態

白先勇在《孽子》里怎么描述的南機場是如下。

南機場克難街兩邊，都是賣西瓜的小販，地上撒滿了吃剩的西瓜皮西瓜子。稀爛鮮紅的西瓜肉，東一塊，西一塊，**招來許多嗡嗡的蒼蠅**。在太陽底下曬狠了，那些爛紅的西瓜皮肉，**都在冒著一股發了醇甜膩的餿氣**。母親住的那棟房子就在**克難街底的一個貧民窟裏**。那是一棟十分奇特的建築物，〔…〕一座樓裡不知道住了多少戶人家，**裡面人聲嘈雜，大人的喝罵，小孩的啼哭**，可是因為幽暗，只見黑影幢幢，卻看不清人的面目。〔…〕

「阿巴桑，黃麗霞在么？」我卸掉了墨鏡，招呼她道。（pp.56－57）

李青是為了要找母親到南機場克難街來的。李青的母親在他八歲時，「跟了歌舞團裏的一個小喇叭手，私奔而逃」。李青在這棟碉堡式的房子裏找到了好幾年沒見著的母親。在李青眼前的母親完全變掉了。她在又惡臭又幽暗的房間裏，臥在床上連起都起不來了。母親對阿青說，「給點錢給你阿母買東西吃好嗎？我餓了一天了，他們拿來的東西，是餵豬的糠，哪裏是人吃的？」由此可見，這個地區的貧窮狀態極為惡劣。我在這裡要強調《孽子》的現實性，那應該探討更具體的現實空間。是不是可以提出這樣的問題，就是「李青母親住的房子的原型在哪裡？」李青的母親去世的房子的原型，很有可能是位於忠義裏地區池塘周圍的貧民窟一角。

在 1960 年代，龍冠海教授針對南機場社區做過大規模的深入調查。研究結果顯示，忠義裏地區有以下幾個特點

- 1) 約有 3 分之 1 的居民為貧民，該區為本社區貧窮問題最嚴重者
（母親餓了一天，想吃片西瓜也沒有錢買）
- 2) 密集池塘周圍的住宅倒入垃圾與糞便，使池水更加汙濁，蚊繩繁殖
（招來許多嗡嗡的蒼蠅）
- 3) 忠義裏除了新建的南機場公寓外，到處汙穢，到處惡臭
（母親住在「死雞死貓身上發出腐爛的穢氣一般」幽暗房間裡）
- 4) 池塘北側的環境更差，到處養豬，使空氣惡濁
（「是猥豬的糠，哪裡是人吃的？」）
- 5) 本省籍人口比率最高
（「阿巴桑，黃麗霞在嗎？」）

忠義裏的這些特點都符合《孽子》裏的描述。在這段短短的敘事中，白先勇充分刻畫了 70 年代南機場短暫的「景觀歷史」以及相當嚴重的貧民窟狀態。這就是孽子描寫的精確性與現實性。南機場一帶如今已經發展成為臺北市最大

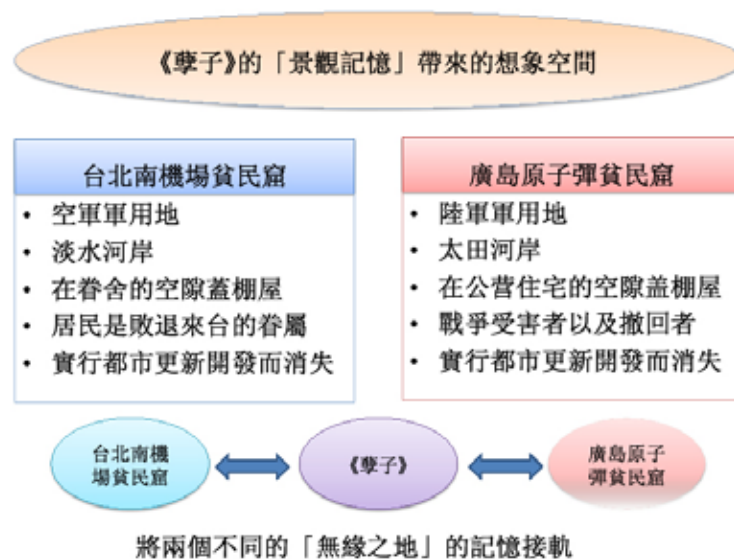
規模的國宅集結社區，現在已經看不到以往的貧民窟了。但是這一景觀的歷史記憶，仍然凝縮在孽子的一小段當中。

這些景觀記憶給我們帶來更多的想象空間，能夠跨越國境與其他的景觀記憶接軌。此照片是兩個不同地方的對照。右側是日本廣島縣的貧民窟，叫做原子彈貧民窟。兩地的景觀非常相似。不僅如此，原子彈貧民窟的短暫歷史跟南機場的歷史，是相當相同的。到底怎麼個相同法呢？



這一帶曾經是陸軍的軍用地，原子彈將一切化成了灰燼，變成了一無所有的一片空地。戰後，作為住宅缺乏的應急措施，政府給戰爭受害者以及撤回者們蓋了木造公營住宅，還有相當多的人利用太田河岸的土地蓋了棚屋而度日。由於都市更新開發，大部分居民在 1970 年代中期搬遷到新的高層公營住宅，因此原子彈貧民窟自然消亡。從產生到消亡的兩地貧民窟的短暫歷史，極為相似。田中純在『都市的詩學』裏指出「從產生到消滅，只不過是不到三十年的「原子彈平民窟」的景觀歷史，並非是「前所未有」的「在日本史上少見的例子」，而更適合把它稱呼為河岸上反反復復地循環了的「無緣之地」的再次到來。」田中純『都市の詩學』(東京大學出版會、2007)

在我看來，孽子所描繪的也就是河岸上那短暫的「無緣之地」的記憶。我們從孽子裏所感覺到的南機場貧民窟的視覺、嗅覺、聽覺等感受，也同樣可以用來想象原子彈貧民窟的景觀歷史。『孽子』能夠把這兩個不同的「無緣之地」的記憶接軌，這種文本的通融性與互文性正就是優秀文學作品給我們帶來的魅力與力量吧。



結論

白先勇《孽子》以臺北空間的現實性為基礎，透過少年李青的視角來刻畫當時新出現的社會問題，包括少年同性戀、傳宗接代式家庭結構的崩潰、貧民窟的形成等。尤其書中所展現的男同志社群的力量，「這在臺灣文學中是石破天驚的」（劉亮雅）。在七十年代中期的中國大陸，莫言、韓少功、馬原等陸續創作了馬爾克斯魔幻主義風格的長篇小說。值得注意的是，白先勇《孽子》反而選擇回溯喬伊斯式的現代主義寫作，透過李青的第一人稱，極為細膩深入地描寫了七十年代臺北各階層的面貌與生態。

《孽子》裏充滿了七十年代臺北的都市記憶，再現了當時的臺北。在我看來，成功地做到了這一點的《孽子》，將會是經得起時間考驗的作品，具有長久的文學價值。孽子將小說的閱讀提升到思考「人性」的高度，無疑是一篇當代中文小說的傑作。

* * *

日本語概略

白先勇『孽子』と台北の記憶——野人珈琲室、新公園蓮池、克難街を中心に——

はじめに

白先勇（1937－）の長編小説『孽子』（1977－1981）には、一九七〇年初期における都市台北の様相や新興の現象がきわめて忠実に刻み込まれている。新公園の蓮池、西門町の劇院、中華商場、眷村（1949年以降に国民党軍が形成した村）、三重鎮の小劇場、南機場の貧民窟、喫茶室「野人」など現実中の具体的な空間を舞台とし、表面化し始めた同性愛コミュニティや底辺を生きる人々の諸相が浮き彫りにされてゆく。白先勇は『孽子』のなかに、そのような精緻な空間を築きあげて、その上に「青春鳥」たちの青春劇を想像力豊かに描いた。

これまでの先行研究の多くは、エスニック・アイデンティティ（国族認同）やセクシャル・マイノリティ（同志）の視座から『孽子』を読み進め、研究が蓄積されてきたが、本研究は『孽子』を一九七〇年代の都市台北の記憶が刻印された「都市小説」として再読し、テキストと都市の記憶を行き交いながら、『孽子』をめぐる現実性の問題について考えてみたい。

作者紹介

白先勇（1937－）、同時代の台湾文学を代表する小説家。広西南寧で生まれ、桂林で育つ。父白崇禧は新桂派の将軍。幼年期を大陸で過ごし、香港を経て十五歳で台湾に渡った。二十六歳でアメリカに渡るまでの約十一年間を台北で過ごす。台湾大学外文系在学中、夏濟安ら学院派が編集する『文学雑誌』に短編小説「金大奶奶」を発表し、本格的に小説執筆を始めた。一九六〇年、同じ外国文学部の同級生であった王文興、歐陽子、陳若曦の学生とともに『現代文学』を創刊。「寂寞的十七歳」（六一）、「滿天亮晶晶的星星」（六九）など、同誌上に小説を次々に発表し、六十年代の台湾モダニズムを代表する若手作家へと成長した。一九七七年、『現代文学』復刊第一期にて「孽子」の連載開始、一九八一年に連載を終えた。

長編小説『孽子』（1977－1981）

『孽子』にはひとりのheroも、ひとりの主人公もない。それは「群体（コミュニティ）」を描いた物語だ。（白先勇『INK 31』）

登場人物：李青（阿青）、小玉、呉敏、老鼠、郭老、楊教頭、傅老爺、龍子、鳳子、烏鴉

叙述形式：李青の一人称小説

時代と都市：1970年頃の台北

物語の空間：新公園、西門町、中華商場、克難街、三水街、三重鎮、

粗筋：「同性愛行為」によって高校を退学処分になった少年李青は、元国民党軍人の父から勘当され、台北中を彷徨ったあげく、終に夜の新公園へとたどり着く。新公園の蓮池周囲には同性愛者たちが集う地下「王国」が存在し、李青は世話役の郭老に導かれて「王国」の一員となるのだった。「青春鳥」と呼ばれる仲間の少年たちもまた、

家族を喪失したり家を飛び出したりと、心に深い傷を抱えて生きている。李青は、小玉、呉敏、老鼠ら「王国」の仲間たちと絆を深め、彼らと共に都市に寄生するように暮らし始めた。李青は次第に、愛に生きる少年たちの情欲と、家族をもたないことへの深い喪失感が、彼らのなかに常に混在し渦巻いていることを知る。また、李青の心中にも弟「弟娃」や母、父の陰影がつきまとい、拭い去ることが出来ない。

物語は、新公園を中心に、一九七〇年代の都市台北を彷徨する「王国」の少年たちの青春群像を縦糸とし、少年らが背負っている個人の歴史を横糸として織り込みながら、李青ら少年たちが主流社会の抑圧や現代社会の酷薄な日常のなかで、次第に小さな希望を見だし成長してゆく姿が描きだされる。

韓国市民団体の立法運動と政治過程

米沢 竜也（国際協力研究科博士後期課程）

派遣先：ソウル大学校（韓国）

第1章 はじめに

1987年に実現した韓国の民主化は、大統領選挙の自由化だけでなく、市民社会における運動組織化と運動実践の自由化をもたらした。1987年までの韓国においては権力集中を具現化した大統領が権威的な政策決定を行っており、それに反対する世論や政治主体は徹底的に弾圧された。市民社会の意思表明、意見収斂、意見伝達の機能は著しく制限されていたと言ってよい。民主化後、抑圧から開放された韓国の市民社会は量的にも質的にもかなりの成長があったといえる。市民社会の成長とは組織の数やそれに参加する人の量だけでなく、先に挙げた世論の収斂と政治社会への伝達機能が向上することを意味する。1987年以降、韓国ではこうした市民社会の成長が、学会やマスコミで大きく取り上げられるほど存在感を増したといえる。

こうした成長の原動力になったのは、いわゆる「市民運動団体」である。韓国の文脈における市民運動団体とは、民主化運動後に登場した脱階級的な改革イシューを扱う団体のことを指す。つまり、民主化運動を担った反体制的、反資本階級的理念とは一線を画す、体制順応的・制度改革的な団体のことである。このような団体は福祉や保健といった社会サービスを提供する生活者密着型というよりは、あくまで中央政治志向型であり、民主化をさらに進展させるための政治制度の改革を目標としている。これら団体が民主化以降の政治体制で、どのような権力配置のもと、どのような目標を持って、どのような影響力を行使し、なぜそれらが可能だったのかという点を明らかにするのが本報告の目標である。

この論点の意義は、市民社会運動が民主主義にどのような意味を持つのかという点である。これは韓国だけでなく、日本や他の民主政の国にも当てはまるだろう。民主主義体制を採用している国々では、各個人が有する自由と平等の権利の行使を担保するために議会制民主主義を採用し、政治を運営している。この議会制民主主義の制度が果たして民主主義の理念を実際に反映しているのかという問題意識が世界的に高まっている。産業社会の発展と共に社会内における個人の分業体制の深化とそれによる利害の多様化、疎外に対する市民の要求が果たして政党政治に反映されているのか。また、同時に行政機能が拡大し、生活のあらゆる局面で国家と対面することになった個人が自らの政治的利益を決定できる主体性をどのようにして確保するのか。こうした問題意識を実践するのが市民社会運動といえる。このような社会運動団体が議会制度内や行政内で完結していた政策決定と政策執行に参加したり、影響力を行使したりすることで、民主主義制度における市民の政治的有效感を高め、議会政治から漏れたイシューを再び政治の場に上げることができるといえるのかという問題意識がこの報告はよっている。

具体的には、韓国の市民運動団体が政策の議題設定過程、政策決定過程、政策執行過程へと影響力を拡大していった要因は何かを論ずる。ただ、運動団体の影響力を調べると言っても、それら団体が政治制度と相互作用を結ぶ接点は無数にあるほど国家社会関係は複雑であり、また運動団体の種類や数もまた多い。よって本報告では韓国の市民や学会によって影響力があると認識された「総合型」市民団体を取り上げ、これらの団体がどのような資源（運動レパートリー、組織要因）を用いて、どのような条件の下（政治体制や政治的同盟の有無）で政策過程に影響を与えていったのかを考察する。本報告が目指す「総合的」市民団体の特徴は、政治制度改革、経済制度改革、環境問題から南北統一問題までありとあらゆるイシューを扱っている点、団体参加者の構成が政策決定を行う知識人・専門家と会費を払って運動に対して支持を表明する一般市民の二重構造になっている点¹、さらに制度改革の手段として法案を直接準備する政治ルートと改革の執行段階となる行政機関に参加する行政ルートへのチャンネルを有している点などが挙げられる。このような「総合型」市民団体は、その形成自体がユニークであるといえる。韓国

1 スコッチポルはアメリカの市民団体が専門家団体化していることを指摘し、市民の自発的参加よりも専門家によるイシュー独占を批判している（スコッチポル、2007）。

の行政学的アプローチから言えば、こうした団体は市場の失敗や政府の失敗を埋め合わせる必要性から生じたというよりは、民主化運動の理念と改革アジェンダを継承した運動家（アントレプレナー）が主導して設立したという供給的側面が大きいからである（キム・ジュンギ、2006；ナムグン・グン、2003）。各界の専門家が集合する「総合的」市民団体は既存の研究にあるような「運動主体」として論じることが果たして適切なのかという点についても言及したい。

本報告では特に、市民社会団体が立法という方法で制度転換を目指した「政治ルート」に焦点を当てる。なぜなら、これら団体の活動目標である制度改革は立法という法文によって裏づけられ、実現されるからである。立法に携わる議会、政党、大統領、官僚などのアクターがこれまで独占してきた政策決定過程に市民団体はなぜ参加でき、どの部分で影響力を行使したのか。さらには、これまで提起してきたイシューのうち、立法に至ったものと至らなかったものの条件の差は何かという点を明らかにする。同じ団体が提言する数あるイシューの中で、「成功」とされるものと、「失敗」とされるものの間にはどのような違いがあるのだろうか。この条件を明らかにすることは、韓国政治における民主政治参加の制約、市民団体の理念、政党と政治家の行動の特徴を明確に示すことになる。

さらに、韓国のこうした「総合的」市民団体自体がある時期を境にその影響力を低下させる現象についても注目したい。民主化直後に発足し、金泳三政権（1993－1998）時に大々的に取り上げられた「経済正義実践市民連合（以下、経実連）」は、1997年、1999年の相次ぐスキャンダルもあいまって、その名声と影響力を大きく損ねた。一方、金大中政権（1998－2003）下で大きく成長した「参与連帯」もやはり、2004年頃から自らの運動について危機論を提起している（金善美、2007）。つまり、実際の「政治ルート」に対する影響力に関してはともかく、それまでの影響力が低下したと認識するようになるのである。このような変化は何によって説明されるのだろうか？

本報告では、「総合的」市民団体が「政治ルート」を利用して立法運動を展開できた理由、そして、市民団体に影響力低下を認識させる環境の変化とは何かという点を探るための予備的考察を行う。この市民団体の運動は、韓国の政治システムにおいてどのように位置づけられるのかという問題意識も念頭に置きながら、韓国政治の政策過程の特徴を浮き彫りにすることが目標である。まず、第2章では先行研究を検討する。そこでは、政治的機会構造論から論じられた市民運動成功の条件にさまざまな議論があることを紹介する。第3章では、代表的な「総合的」市民団体である参与連帯の実際の立法活動について敷衍する。第4章では韓国の市民団体と政党の理念は韓国政治内でどのように位置づけられるのかを論じ、市民団体の理念性向は既存政党と大きな違いはないことを論証する。終章では、得られたデータから今後考察すべき研究課題を展望する。

第2章 先行研究

民主主義であれ、別の政治制度であれ、制度化されたチャンネルではなく、別のルートで政治決定を求める方法を一般的に社会運動という。しかし、この一般的なタームである社会運動は、厳格に定義されたタームではない。なにが社会運動で、何が社会運動ではないかという点は、一義的には観察者の分類であり、便宜上のものといえる。さらに、社会運動が抗議運動といったイメージと結びつくことで非制度的、違法的、非日常的といった要素を特徴と見なされる場合も多い。

しかし、日本におけるデモを見てみても、デモを計画する社会運動団体がデモ隊の行進するルートをあらかじめ決め、警察に申告し、決まった時間に秩序を持って行うパターンがほとんどである。社会運動とは、自然発生的で暴力を伴ったデモも、日常の中で制度化された運動もすべて包括する概念である。しかし、その中核には静態的なもの（社会制度）に動態（変動）をもたらす集団行動という本質がある（高畠 1976）。つまり、制度化したものを変える要因として運動が位置づけられる。

この本質的な意味としての運動をふまえて、韓国語の持つ「運動」というタームを見てみよう。韓国でも一般的に政治的要求を集団で行うことを「運動」という。しかし、韓国の場合、その主体性の根拠を何に置くかによって、名称が細分化されているのが特徴である。つまり、韓国の場合、民主化運動の歴史から「国家とそれを支える既得権益層に抑圧された民衆」による「解放運動」という意味で、権威主義国家と対立し、体制転換を伴う民主化を目指した「民衆運動」がある。1987年の民主化達成以後、この民衆という概念がマルクス主義的な二項対立（資本家対労働者）に還元される傾向を見せると、新たに「階級を超えた市民による社会変革」を目指す運動が登場す

る。つまり、社会の対立軸を階級によって事前に設定するのではなく、脱階級的な「中流市民による社会変革」という「市民運動」が注目を浴びたのである。市民運動の特徴は、この主体性以外にも、民衆運動からの分化の要素として「順法」という方法論が強調されるようになった。民衆運動は、民主化の過程に民主化運動の主体が参加できず、権威主義体制の要素が残ったという点を問題視し、体制変革を主張した（チョ・ヒョン、2001）。一方、新たに登場した市民団体は市場経済という体制を受け入れ、民主化後の政治体制を実質的に改革していくという実用路線を主張した。この嚆矢となったのが経実連である。経実連は1989年、市場経済の効率性改善、不動産関連イシューの解決、財閥改革を目標にソ・ギョンソク牧師を中心に設立された。経実連は、民衆運動との距離を明確に取りながら、金泳三政権には協力的な態度を明確に示すなど、体制内での変革運動を標榜した（キム・テリョン／クォン・ヘス、2007）。一方、経実連が次第に影響力ある市民団体として認知されてくると、その体制順応の姿勢に反発を感じた運動家が経実連とは区別される運動組織として参与連帯を1994年に立ち上げた。参与連帯は、実用的な市民運動も民衆を志向することができるとして、民衆運動と近い距離を保ちながら、「参加民主主義」という体制内での変革を目指した（チョ・デヨプ／キム・チョルギョ、2007）。

こうした市民団体の運動方法は、大きく3つに分けられる。1つ目は本稿で扱う立法運動である。立法運動は、市民団体が進める改革議題を法律の形で実行するもので、国民の権利として認められている立法請願制度や直接国会議員にロビーする形で行われる。2つ目は監視活動である。韓国政治・経済の実質的な権力を持つ政府、官僚、国会議員、司法（検察・裁判所）、財閥の不正行為の有無を監視し、これまで法が無視されてきた慣習を変えることを目的とする。このオンブズマン的機能は、これらの権力主体を改革対象にした際に圧力を加えることができる基礎として重要視されている。3つ目は公益訴訟である。市民の権利として法律に保障されていることが慣行で無視されている場合、市民の救済と市民権の擁護のために訴訟を変わりに行うというものである。こういった運動方法は、いずれにしても専門的な知識が必要とされているものであり、デモや座り込みといった運動方法とは一線を画すものである。

本報告では特に立法運動に注目するが、この立法活動が法案として国会に請願され、その内容が法案として成立する要因に関する先行研究をここでは検討したい。

まず、第一に立法運動成功の構造的条件と歴史的展開を論じたホン・イルピョの研究が挙げられる（ホン・イルピョ、2007）。ホン・イルピョは立法請願制度を通じて法律制定請願された240件のケースをデータ化し、それを政治的機会構造の変数と社会的機会構造の変数から成功と失敗の条件を導き出した。政治的機会構造論は社会運動論の主流の理論であり、運動主体にとって政治的構造がどれだけアクセス可能か、立法を推進する同盟は存在するか、統治エリートは分裂しているかなどの短期的条件によって運動の発生もしくは成果を説明する（小野耕二、2001）。ホン・イルピョの論文では、政治的機会構造の具体的な変数として請願当時及び法案通過時の政治体制が分割政府か統合政府か（立法空間の不安定性）、大統領は誰か、大統領選挙・国会議員選挙が間近に迫っているか（エリートの応答性）、請願を紹介する議員の数と所属（立法同盟の存在）を挙げている。一方、運動主体が能動的に自分に有利な政治環境を整えるという意味の社会的機会構造という概念を提案し、分析に用いている。ここでいう社会的機会構造とは、運動に対する世論の好感度や各運動組織間の協力を指す。具体的な変数としては、報道件数、複数団体の連帯、歴史的期間を挙げている。歴史的期間とは立法運動の展開を歴史的に分析した結果、1988年から1994年、1994年から2002年、2002年以降と立法運動に対する社会の支持度が各期で違うことから、それを変数にしたという。分析結果によると、請願の発生に関しては国会任期が有意であり、請願の成功に関しては報道件数と連帯活動の有無が有意だったという。結論的には、ホン・イルピョは立法運動の成功条件としてメディアの注目を集めるような運動を行うこと、社会的に運動を動員することが重要だとする。つまり、変数としてはメディアと運動主体が成功の可否を握っているとみている。

この結果については、方法論的問題を指摘することができる。まず、変数が韓国政治システムの変化を捉えきれていないという問題が挙げられる。国会会期や与野党構図といった変数は長期的な運動の生成など構造的な側面で重要であるが、その会期内において失敗と成功の両方が起きているからだ。そういった意味で、エリートとの同盟という変数が重要になってくるが、ここでは紹介議員の数と所属になっている。この変数も問題を含んでいる。というのも、法案請願後の法案推進エリートは紹介議員とは限らないからである。さらに、この分析で唯一有意となった報道件数も、著者自らが限界を認めるように報道のコンテンツは無視されている点がある。また、この研究では

立法運動を法律制定請願に限っているが、それよりも多くの請願が法律改正の分野で行われている。こうしたケースも含めてこそ、立法運動の全体的な見取り図が得られるといえよう。

一方、参与連帯が制定請願した「国民起訴生活保障法」の制定過程を分析した金淳和の研究や、女性団体が推進した「戸籍法」の制定過程を分析した春木の研究は、政治的機会構造論という枠組みを使いながらも、ホン・イルピョとは別の結論を導き出している。金淳和は、大統領の議題設定能力や官僚の議題拒否能力など「強い国家」である韓国で、どのようにして市民団体の議題が法律として成立できたのかという問いに拒否点という概念を使って説明している。つまり、韓国の政策形成過程において大統領に議題設定の権力が集中しているため、大統領という拒否点の同意さえ得られれば、議題は通過するというものだ（金淳和、2007）。そして、拒否点へのアクセス（政治的機会構造）が開かれるのは、分割政府という議会構成と国政選挙の実施というダイナミクスによってであると論じている。つまり、相対的に野党の影響力が強い「与小野大」（分割政府のこと）の条件下で、重要な国政選挙が近づくと、中間層支持獲得のため市民団体の議題が拒否点である大統領によって受け入れられるという説明である。

一方、春木は政治的機会構造の変数として同盟の存在と文化的フレームという二つから「戸籍法」制定過程を説明する。戸主制廃止は「男女差別是正」の観点から提起されたものの、「家族の民主化」や「離婚家庭子女の福利」といったフレームに拡張されたことで広範な支持を得ることができ、最終的には大統領の支持（政治的同盟）を獲得できたと主張する（春木、2006）。さらに、2004年に与党が国会議席の過半数を得ることができたため（政治的機会の開放）、戸主制廃止を規定した戸籍法が改正されるに至ったと主張する。

両者は共に政治体制内の同盟として大統領の支持を重要な変数として挙げている。韓国の政治過程において大統領の強さが議案成立の条件として中心的な位置を占めるということになる。一方で、その大統領に対するアクセスについて両者は別々の変数を挙げる。金淳和の場合、分割政府という不安定な議会状況を、春木の場合は統合政府という安定した議会状況を挙げている。これはイシューを推進する団体にとっての機会という意味で、イシュー毎に異なるのは不自然ではない。また、金淳和は選挙という制度的側面を、春木はフレームという文化的側面を重要な機会と見なしている。この点から、政治的機会構造は構造という観点を重要視しながらも、状況と主体の観点によって議論が左右されるという弱点を持っていることが分かる。単一イシューの政策過程を追跡する際には有用かもしれないが、「総合的」市民団体による多様なイシューの提案という集合的側面においては実際の構造を説明する力は弱いといえよう。

そもそも社会運動論における政治的社会構造論は、非制度的アクターによる制度へのアクセスという観点から出発している（成元哲・角一典、1998）。立法運動が国会の議案審査という通常の過程を利用する点を鑑みると、果たして立法運動を社会運動の抗議の側面からのみ捉えられるのだろうかという疑問がわく。バーンスタインは利益団体と社会運動が区別できる基準は「公的な利益に利するという自負」のみであるとしている（Burnstein、1998）。運動が「制度政治の外にある人」を代表するとしても、運動が成功することで制度政治の中に位置づけられ、その境界はあいまいになる。また運動の手段が非制度的であることが社会運動と利益集団を分ける基準になれない。社会運動はすでに訴訟や立法請願、政策討論会出席などの制度的な手段を利用しているためだ。ここで扱う立法運動は、立法請願制度を利用するにしろ、議員にロビーを行うにしろ、法案審査という制度的な過程を経ることや、組織的な側面に置いては「総合的」市民団体という確固たる基盤があるため、政治的機会構造論とは別の観点からアプローチする必要がある。

政治的機会構造論に基づく研究から示された重要な要素は、大統領の意志と市民運動の社会的支持の獲得であった。しかし、大統領の意志は市民運動が世論の支持を得ることから独立しているのだろうか？つまり、大統領の意志というものは大統領の政治的信念によるものなのか、世論の支持獲得のために市民運動を支持するものかははっきりしない。この二つが相互依存的であると主張する研究は多い。特に、革新系の大統領は支持基盤が弱いために市民団体を取り込もうとするという議論だ（磯崎、2004；廉、2004）。ならば、大統領の強さは分割政府時には弱く、春木が論じるように統合政府の時は強いということになり、朴淳和の研究は矛盾を呈することになる。

こうした側面とは別に、メディアの重要性を説いたのが大西の研究である。大西は、市民団体が腐敗した国会議員候補を落選させる運動を成功させることができた原因として、マスメディアの強さを挙げている（大西、2000）。韓国の利益集団は政策共同体に入っていないため、マスメディアの報道によって初めて政府の政策方向性を知る。よって、それが集団にとって不利である場合は猛烈に反発し、その報道によって政府・政党は弱気になる

と論じている。落選運動の成功も強気の市民団体が、確固たる支持基盤のない政党にマスメディアを通じて圧力を加えることができたためだとされる。要約すれば、選挙によって政治的機会が開き、そこに市民団体がマスメディアを通じて圧力を加えることができたということだ。この論点の重要な点は、市民団体や利益集団は政治過程の外にある点と政党・大統領の支持基盤は弱いという点を前提にしていることである。市民団体の影響力は制度内になく、政治システムが脆弱であるがゆえにメディアの影響力が大きくなったという意味だ。

以上のように、市民団体の立法運動に関する成功条件の議論は同じ要素をめぐって迷走している感がある。市民団体の影響力に関して否定する論者はいないものの、市民団体にとっての政治的機会構造という要素は論者によって、またイシューによって異なる。第3章では、「総合的」市民団体の代表格といえる参与連帯の実際の立法運動からこれらの議論を敷衍してみる。

第3章 参与連帯の立法運動から見る韓国政治

この章では、総合的市民団体である参与連帯の立法運動の展開をデータにして分析する。参与連帯は1994年の結成以降、立法請願制度や国会議員・政党との直接的な連携を通じて法案を国会に提出してきた。これまで参与連帯が立法請願制度を通じて提出した法案は制定請願、改正請願、意見請願すべて合わせておよそ140件になるが、ここでは第17代国会（2004－2008）までに提出された制定、改正、意見請願を扱う。ただ、意見請願については予算関係に関する全般的な意見など、法案の形を取らないものはのぞいた。1994年の内部告発者保護法制定請願から2008年の公職選挙法改正請願まで125件の請願について、請願日時、国会常任委員会回付日時、法案本会議通過日時、参与連帯活動部署、請願先常任委員会、処理結果、紹介議員、紹介議員所属政党、紹介議員該当常任委員会所属の有無、共同請願者・連帯の有無、請願当時紹介議員所属政党が与党か野党か、請願当時紹介議員所属政党が国会多数派か少数派か、該当法案の報道量の変数を調べた。これら変数は先行研究で運動研究に重要であるとされた変数である。これらデータは、参与連帯が発行した『世界を変える市民の力ー参与連帯10年の記録1994－2004』と韓国国会議案情報システム²のサイトを利用した。

参与連帯が1994年に結成した当時は政策委員会と5つの活動センターからなる運動組織であった。16年の活動期間中に活動範囲の拡大・縮小とともに活動組織も数回の編成を経ている。その中でも立法運動を展開した活動センターは、議政監視センター、司法監視センター、経済改革センター、租税監視センター、明るい社会作り本部、小さい権利探し運動本部（2006年以降は民生希望本部に統合）、社会福祉委員会である。議政監視センターは主に国会・政党改革を、司法監視センターは司法改革、経済改革センターは財閥改革、租税監視センターは税制改革、明るい社会作り本部は汚職全般、小さい権利探し運動本部は庶民の権利、社会福祉委員会は年金などの福祉政策に関する政策を提言している。参与連帯の活動センターの上には政策委員会と事務局があり、参与連帯全体としての運動方向性を決定するが、立法活動そのものは各センターが行う。

参与連帯や他の団体が利用する立法請願制度は国会法36条で規定されており、請願する権利は韓国国民全員に認められている（イ・ナムソク、2004）。請願先は国会もしくは政府で、請願するためには少なくとも国会議員1人の紹介が必要となる。紹介された法案は請願後、国会議長を通じて各常任委員会に回付され、常任委員会の委員長と野党側代表が議論して委員会に上程するかを決める。委員会に上程されると質疑・討論が行われ、場合によっては小委員会ですらに審議を行う。委員会の審議で法案が通過すると、法制司法委員会での字句審査を経て、本会議に付議される。本会議の審議を経て議決されれば法案は成立するが、韓国の場合、法案の審議は常任委員会中心主義を取っており、常任委員会と与野党が合意して通過させた場合は、通常本会議で否決されることは少ない（イ・ヒョヌ、2007）。以上のプロセスを図にすると以下のとおりになる。

2 <http://likms.assembly.go.kr/bill/jsp/main.jsp>

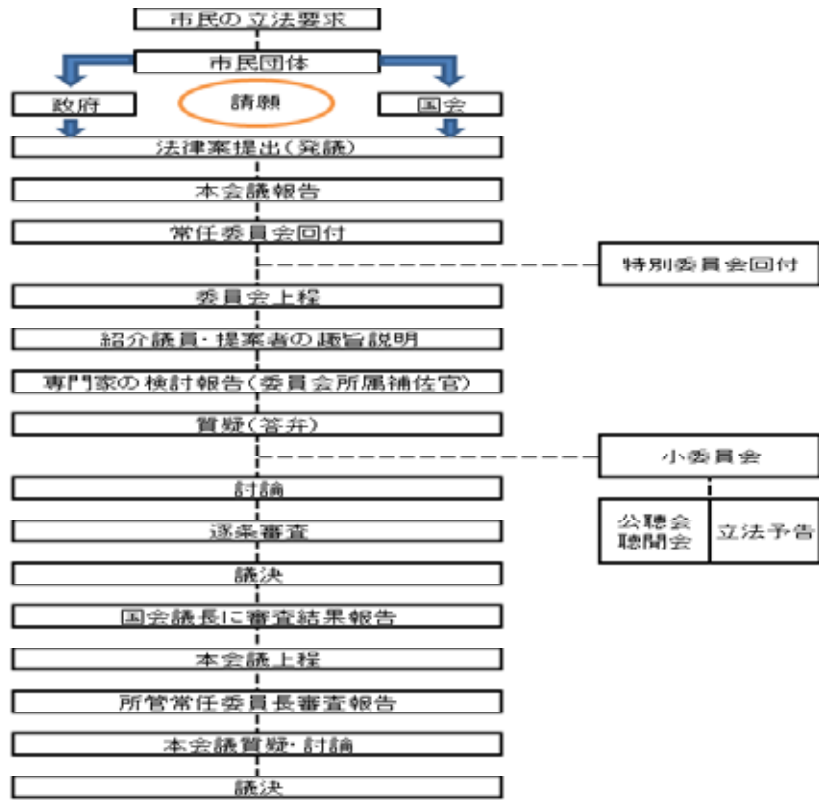


図 1

この過程は、委員会上程において議員・政府が発議した法案が優先される傾向を除いては、議員発議の法案審議過程とほぼ同じである。よって、一旦法案が委員会に回付されると、市民団体は個別議員に対するロビーや世論を喚起する運動を行うことはできるが、審議自体には公聴会・聴聞会以外参加できない。紹介された法案が本会議に付議されるためには国会議員 10 人以上の署名が必要である（2003 年までは 20 人）。

参与連帯が請願した法案は大きく分けて 5 つの分野に分類できる。1 つ目は「制度改革」で、国会・政府・官僚・政党・選挙・裁判所・検察・警察などの国家機構を改革対象に据え、権威主義体制下の不平等な制度や慣習を変える目的のものである。2 つ目は「経済正義」で、韓国社会で大きな影響力を持つ財閥や金融界の経営制度、商習慣、消費者権利などの改善を目指すものである。3 つ目は「腐敗防止」で、国家機構における腐敗防止のための制度構築を目的としている。4 つ目は市民・高齢者など国民全般を対象にした福祉である。年金制度の改革や医療制度の改革を目的にしている。5 つ目は低所得層を対象にした優遇・再分配の制度で、生活保護や公共住宅供給の制度改革を目的にする。

まず、本報告が扱った参与連帯の請願 125 件の処理結果を見てみると、次の表 1 の通りである。

表 1 参与連帯の立法請願件数と結果

	全面反映	一部反映	失敗	合計	成功率
件数	11	55	59	125	52.80%

請願した法案が全面的に反映されたのは 11 件、一部内容が反映されたのは 55 件、内容が反映された法案が成立しなかったケースは 59 件で、反映された法案の割合を求めると 52.8%だった。請願した法案がそのまま本会議

まで上程されることはまずなく³、常任委員会に発議された類似法案に内容が盛り込まれるという形式がほとんどである。よって、類似法案が議員もしくは政府によって発議されていることが一つの条件となっている。

次に、時期別の立法請願件数と成功率について見てみると、まず、国会会期別に区別した場合は表2の通りである。表2を見ると、参与連帯設立直後の14代国会では請願件数が少なかったものの、15代、16代国会では多数のイシューを請願している。一方で、17代国会では請願数が減少している。この理由としては、法案提出に必要な国会議員の署名数が20人から10人に緩和されたことで、立法請願制度を利用するより国会議員に依頼して発議することが多くなっているためとみられる（ホン・イルピョ、2006）。成功率で言えば、時期にかかわらず50%前後と大きく変化していない。

表2

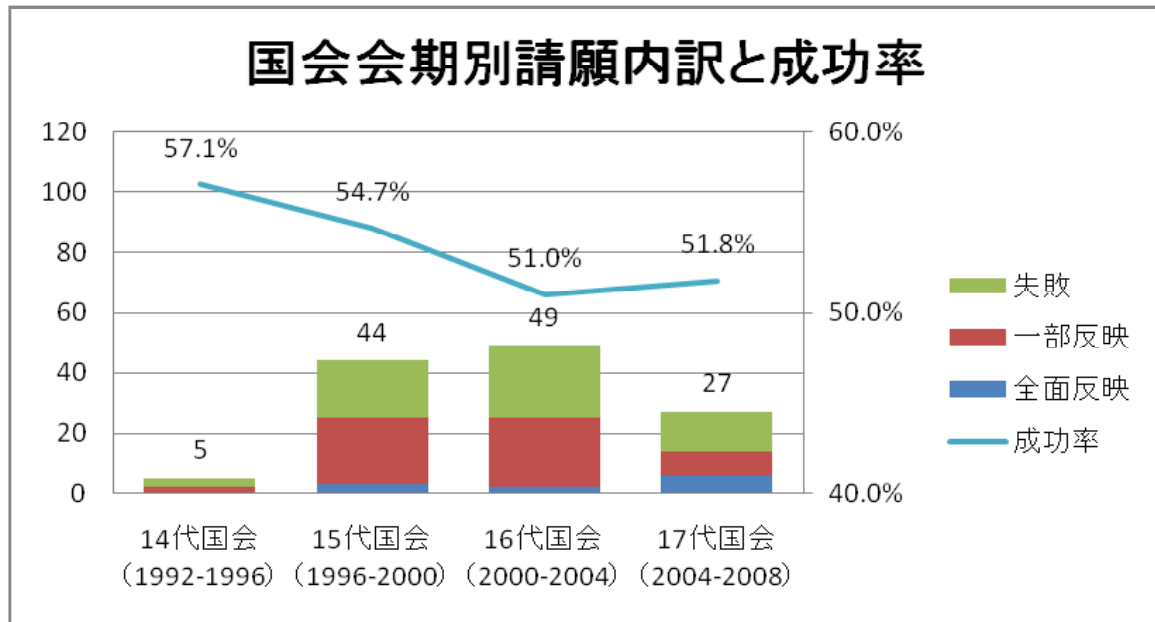
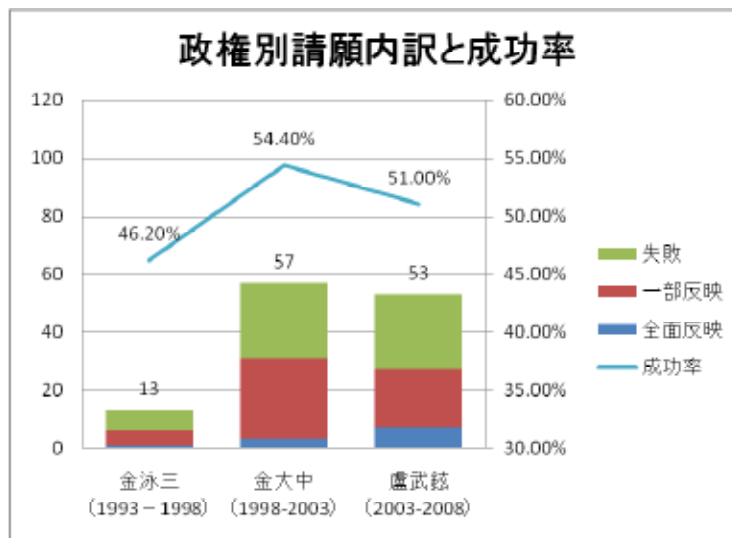


表3は時期区分を国会会期別ではなく、大統領政権別に区切って請願件数内訳を見たものである。政権別の時期区分においても成功率に大きな違いは見られない。表2、表3を見る限り、請願数には変化が見られるものの、成功率そのものには大きな違いがないように見える。

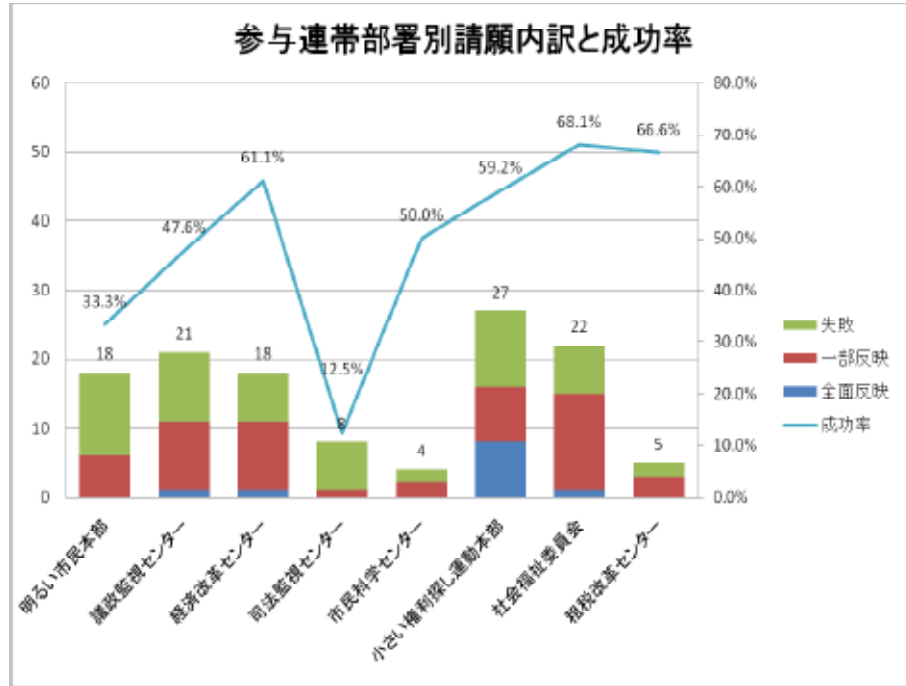
表3



3 請願全体の内訳を見ても、1988年から2010年まで2987件の請願があったが、その中で原案可決となったのは35件しかない（国会議案情報システム参照）。

次に、参与連帯の部署別および法案内容別の請願内訳を見てみよう。部署別に取り扱う 이슈の性格が変わること、また部署にかかわらず、法案の内容で分類した場合に成功率に違いは見られるだろうか。表4は参与連帯の部署別請願数の内訳と成功率を示したものだ。司法改革センター、市民科学センター、租税改革センターは請願数自体が少ないため、成功率の傾向はつかみきれないものの、福祉関連の 이슈を扱う社会福祉委員会と市民権関連の 이슈を扱う小さい権利探し運動本部、そして経済改革センターの成功率が高い。

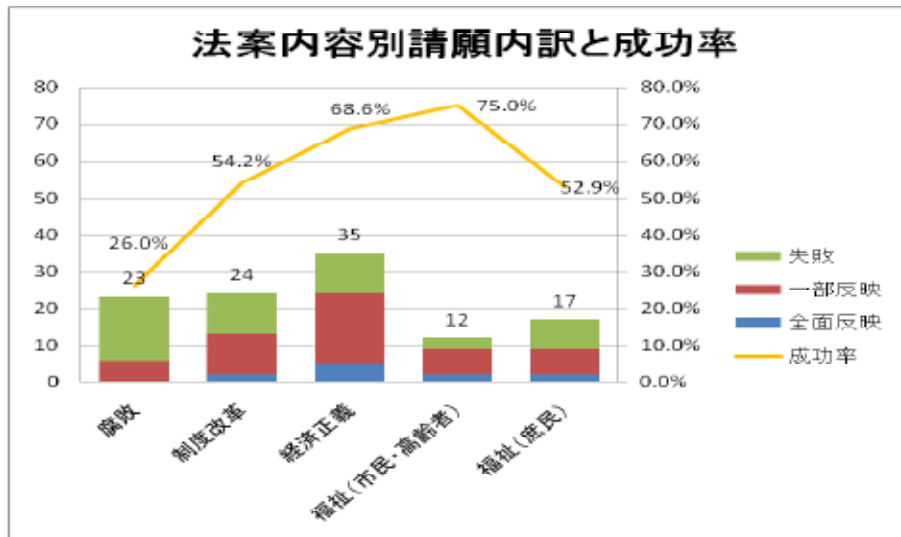
表4



また、表5は部署別ではなく、法案の性格別に分類した場合の成功率を示しているが、市民全般の福祉問題の 이슈と経済改革の 이슈の成功率が高い一方、腐敗防止の 이슈の成功率は平均より低い。

先行研究では、大統領の意志や議会の構成といった要素が運動の機会構造に影響を与えるという議論であったが、参与連帯の組織全体としての運動には影響を与えていない。やはり、政治的機会構造というのは 이슈毎のミクロの部分に焦点を当てているといえよう。参与連帯が提案する法案の中で、 이슈別に成功率の違いがあったのは韓国政治も政策領域別に異なるメカニズムで政策形成が行われているか、もしくは参与連帯の運動方法や運動資源が内部で異なるかを意味する。

表5



次に、イシュー毎の時期別成功率を見ていく。

表6 腐敗関連イシュー国会会期別成功率

	15代国会	16代国会	17代国会
全面反映	2		
一部反映	9	5	3
失敗	14	7	6
合計	25	12	9
成功率	44.00%	41.66%	33.33%

表7 腐敗・制度改革関連イシュー政権別成功率

	金泳三	金大中	盧武鉉
全面反映	1	1	
一部反映	1	12	3
失敗	9	12	7
合計	11	25	10
成功率	18.18%	52.00%	30.00%

まず、腐敗・制度改革関連である。表5で明らかになったように、もともと成功率が高くない政策分野だが、ここでは金大中政権時のイシュー成功率が他の時期に比べて高いのが注目される。腐敗・制度改革関連法案は国会法、政党法、政党資金法、公職選挙法など政党や国会議員の利害が最も反映される分野であるため、市民団体がイニシアチブを取りにくく、さらに政界全体での合意も必要になる。ここでは金大中政権下の政治改革特別委員会がまとめて政治改革法案を通過させたが、当時の参与連帯および他団体の位置づけが重要になる。

次に、経済改革法案である。表8、表9を見ると、時期区分による成功率の違いは余り見えてこない。ただ、金泳三政権時（1993－1998）はたった1件の請願しか行っていない一方、時期が重なる15代国会（1996－2000）では13件もの請願が行われている。つまり、1998年から2000年の間に集中して請願が行われている。

表8 経済改革法案の国会会期別成功率

	15代国会	16代国会	17代国会
全面反映	1	1	3
一部反映	8	8	3
失敗	4	4	3
合計	13	13	9
成功率	69.20%	69.20%	66.7%

表 9 経済改革法案の政権別成功率

	金泳三	金大中	盧武鉉
全面反映	0	2	3
一部反映	1	13	5
失敗	0	8	3
合計	1	23	11
成功率	100%	65.20%	72.70%

これは、1997 年のアジア通貨危機の影響で経済改革を進めざるを得なかった金大中政権と、その改革路線に同意・反対を表明する市民団体側の活発な動きがあったものと見られる⁴。

次に福祉関連法案を見てみよう。

表 10 福祉関連法案の国会会期別成功率

	15代国会	16代国会	17代国会
全面反映		1	3
一部反映	5	7	3
失敗	2	6	4
合計	7	14	
成功率	71.42%	57.14%	60%

表 11 福祉関連法案の政権別成功率

	金泳三	金大中	盧武鉉
全面反映			5
一部反映	3	4	7
失敗	1	3	7
合計	4	7	19
成功率	75%	57.14%	63.15%

福祉関連法案も成功率に時期的な違いはみられない。ただ、他のイシューと違って、盧武鉉政権になって請願件数が増加していることである。この大幅な増加は何を示すのだろうか。市民団体内の資源配分に変化があったのか、それとも盧武鉉政権の政策方向と合致したのか。事例を見ていく必要がある。

参与連帯全体としてみると、時期別の請願件数は 17 代国会で減少するものの、成功率でみると常に 50%台と変化が見られなかった。一方、イシュー別に見ると、成功率、請願件数ともに変化が見られた。まず、成功率では、

⁴ 参与連帯経済改革センターに勤めていた活動家のイ・スンヒ先生のインタビュー

腐敗・制度改革関連法案が、他の時期に比べて金大中政権下でもっとも高かった。一方、経済関連・福祉関連は時期別で成功率の違いが大きく変わるということではなかった。請願件数で見ると、金大中政権下において腐敗・制度改革関連と経済改革関連の請願件数が多かった。一方、福祉関連法案は盧武鉉政権下において、請願件数が急増した。

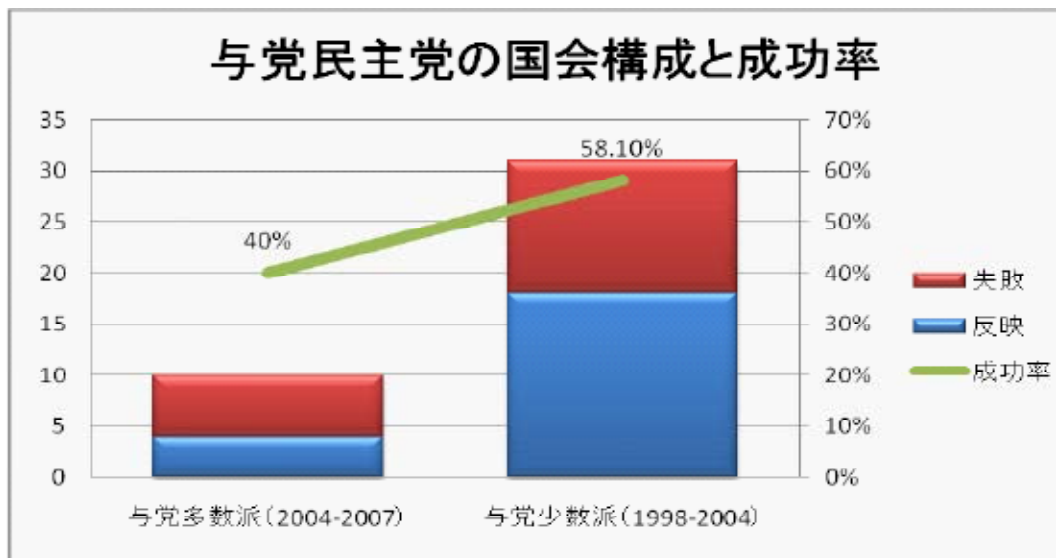
次に政治システム関連から参与連帯の立法運動の成功率を概観する。韓国政治では分割政府が頻繁に登場する。大統領選挙と国会議員選挙のサイクルが一致していないうえに、与党連合の形成もイデオロギー的に離れた政党同士による不安定なものだったからである。下の表は、歴代政権における政府類型の変遷を示したものである。

表 12

時期	国会	大統領	類型	第1野党多数派	与党
1992-1996	第14代	金泳三	統合政府	0	民自党
1996-1998			統合政府	0	新韓国党
98.2.25-98.8.16	第15代	金大中	分割政府	1	新政治国民会議
98.8.17-00.5.29			統合政府	0	新政治国民会議、自由民主連合との国民会議が国民新党をはじめとする野党議員を迎え入れ152議席確保
00.5.30-01.4.14	分割政府		1	総選挙の結果、与党新千年民主党は115議席のみ	
01.4.15-01.9.2	第16代		統合政府	0	民主党、自民連との連合回復
01.9.3-03.2.24			分割政府	1	民主党、自民連との連合解消
03.2.25-03.9.19		盧武鉉	分割政府	1	民主党
03.9.20-04.5.29	分割政府		1	ウリ党、民主党から分裂	
04.5.30-05.3.24	統合政府		0	総選挙の結果、ウリ党が152議席を獲得	
05.3.25-08.2.24	第17代		分割政府	0	補欠選挙の敗北でウリ党過半数割る

金大中政権から盧武鉉政権の前半まで与党の民主党系が多数派であった時期と少数派であった時期を分けた場合の成功率は表13の通りである。ウリ党が2004年以降議会多数派になってからの請願件数は10件と、成功率を比較するにはケースが少ない。参考としては、与党が議会少数派であるほうが成功率は高い。

表 13



一方、請願が提出された後に類似法案が議員もしくは政府に提出されると、請願の反映される確立は高くなるが、金大中政権下では政府案提出の法案が多く、可決された法案も政府案が多かった。また、金大中政権下では、議員発議の場合も、法案提出は党全体として行われ、個別議員が行うことは少ない傾向にある。

表 14

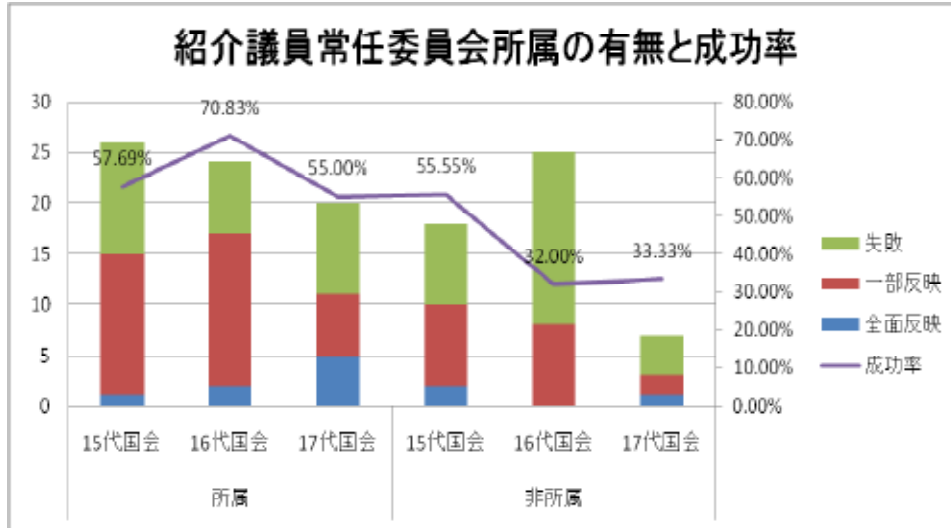
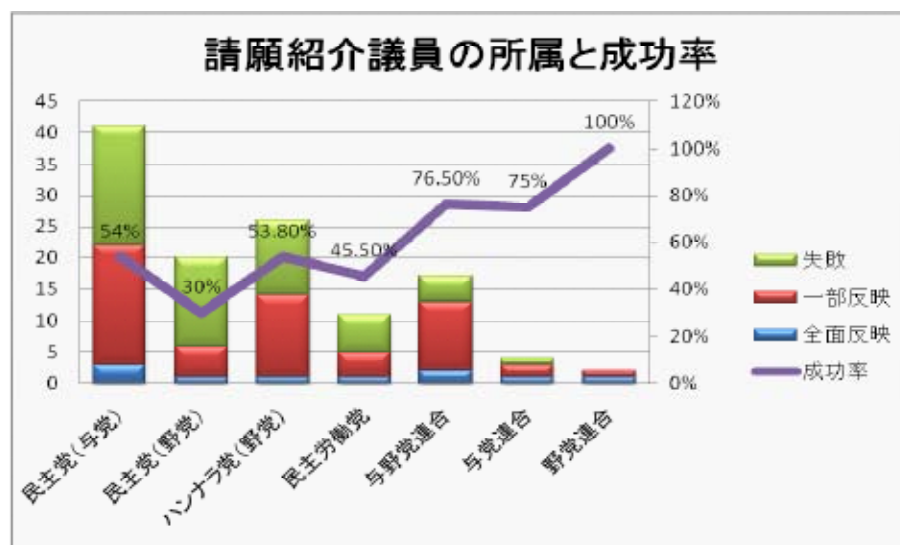


表 14 は、参与連帯の請願を紹介した国会議員が請願法案回付先の常任委員会に所属しているか、していないかで成功率の違いがあるかを見たものである。15 代国会は違いが見られないが、16 代国会では紹介議員が当該常任委員会に所属しているほうが成功率は高くなっている。15 代国会は常任委員会での議論よりも、政府・政党の意向が重要だったことになる。一方で 16 代国会では常任委員会の機能がより強化され、国会議員の自律性が強まったことになる。つまり、大統領の意志やエリート議員との同盟は 16 代国会より 15 代国会で重要だったといえよう。

次に注目するのは、参与連帯の請願を紹介した国会議員の所属先によって成功率に違いが出るかどうかである。表 15 を見ると、与党民主党系の国会議員による紹介が最も多く、次に野党ハンナラ党、そして野党民主党系の順となっている。成功率は政党ごとには違いがあまりないが、複数政党の国会議員による紹介の場合、成功率が高くなっている。特に、与野党の議員が合同で紹介した請願の場合、反映率は高い。一方、立法請願を紹介する議員は必ずしも同一政党ではないことが分かる。金大中政権下ではハンナラ党議員を通じた紹介も頻繁に行われていた。2004 年以降の第 17 代国会では、初めて議会に進出した民主労働党を通じた請願が多くなっている。この点から、参与連帯は進歩という理念を打ち出しているものの、政党にアフィリエイトすることはなく、イシュー毎に協力先を構築するという手法をとっている。

表 15



以上の点をまとめると、金大中政権までは大統領の意志や政党全体の意志が重要であったが、16代国会以降、国会の自律性と共に分割政府下の与野党協力という点が、請願の法案反映に大きな影響を及ぼしていることが分かった。

次に、報道量と請願の反映率の相関関係を見てみる。報道量は韓国言論振興財団（www.kinds.or.kr）のサイトで全国総合日刊新聞の検案件数で調べた。報道量は当該請願が出された国会会期中に限定して調べ、同じ法律をめぐって複数回請願が出された場合でも報道量は同一に扱った。結果は表16の通りである。

表 16

報道量と反映の相関	制定全体	改正全体	意見全体	福祉改正	腐敗改正	制度改革改正	経済正義改正
相関係数 (r)	-0.06846	0.015201	-0.11649	0.535353	0.0197637	-0.15483	0.349926
t 値	0.391155		0.422889	2.9045853	0.0655626	0.664906	1.397767
p 値	0.698447		0.679288	0.008476**	0.9489024	0.51454	0.183939
度数 (n)	32	78	15	23	13	20	16

報道量と請願成功の間にはほとんど相関はなく、制度改革にいたっては相関係数がマイナスを示している。イシュー別で唯一1.0%未満の有意となったのが福祉関係法案である。報道量が多ければ多いほど、請願が反映される頻度も多くなることを示している。福祉関連では報道量がどのように市民団体や国会議員、政党に影響を及ぼしているのかを分析する必要がある。

参与連帯による立法運動のデータ分析では、立法請願全体でも法案ごとでもないイシュー別というメゾレベルを扱うことで、それまで見えてこなかった特徴を浮き彫りにすることができた。

- イシュー毎に成功率が異なる。腐敗関係では低く、福祉関係では高い
- 大統領や政党エリートのイニシアチブは金大中政権下で強く、特に政治改革関連で強い
- 16代国会からは国会や議員の自律性が高まり、国会議員の常任委員会での活動が運動の成功に関係するようになってきた
- 自律的な国会で一番多く扱われたイシューは福祉関連
- 議会構成は立法運動の同盟相手の選定に大きな影響を与える。特定の政党に従属しない運動手法
- 福祉関連のみメディアの報道量と請願反映に相関関係がある

以上の知見を基に、市民運動が韓国の政治システムに占める役割を考察していく。

第4章 韓国政党政治における理念と市民団体のイシュー

前章のデータから、韓国市民団体による立法運動はイシューによってその結果に多少なりとも違いがあることが分かる。そのため、市民団体による立法運動全体の盛衰という観点では捉えきれないダイナミクスが韓国政治には存在するといえる。ここで提起されるべき問題は、市民団体によって提起されたイシューの性格と韓国の政党制が反映できる理念スペクトラムの関係である。つまり、左が抜け落ちた理念スペクトラム（チェ・ジャンジブ、2005）を持つ韓国政治において、市民団体が政党に代わって革新的なイシューを提案しているという「代議の代行」説は果たして妥当なのかという点である⁵。

韓国の保革理念対立は「保守対進歩」という対立軸で語られ、これら二つの陣営は非妥協的な姿勢で対立してきた。ただ、韓国の保革対立の重要な特徴は、立場の違いによってその対立軸の設定が異なるという点である。民主化前からの保守与党の系統を受け継ぐハンナラ党が保守に分類されることについてきほど異論はないが、その対抗政党である民主党は革新に分類されることもあれば保守に分類されることもある。民主党もその前身は権威主義体

5 韓国の左右理念は、建国以前の米軍占領の時から体制外の北朝鮮という存在のために社会主義理念や労働者階級理念が体制内に反映されなかったという特殊性がある。この分断体制のために韓国では、体制変革的な左翼はもちろん、社会民主主義的な議論も韓国の体制を脅かすという理由で抑圧されてきた。1987年の民主化から15年後の2004年に左派政党の民主労働党が初めて議会進出した（チェ・ジャンジブ、2005）。

制下の保守野党であり、理念的には資本主義体制の擁護と主権在民を唱える自由主義であるため、その意味では体制変革を主張する人たちにとって保守なのである。この見方は、対立軸を制度圏と在野の間に設定することで、左が抜け落ちた韓国政治制度を批判し、制度外にある運動圏に正当性を強化する役割をしている。

一方で保守ハンナラ党に対抗する民主党は自らを革新（進歩）と位置づける。資本主義体制の擁護という点では両党とも自由資本主義に立脚しているが、既得権益の保護といった保守的観点、市場重視か分配重視かという点では違いがある（カン・ジョンイン、2009）。この対立軸は実際の政策に転換される際にはあいまいになる特徴がある。それは、朴正熙元大統領の権威主義体制下から続く成長第一主義という風潮が韓国社会に広く受け入れられているためである。例えば、盧武鉉政権下で進められた米韓自由貿易協定（FTA）は市場の開放によって自由貿易を促進し、経済活動を活発化させるという名目があった。韓国の輸出主導型経済構造から言えば、経済のグローバル化は避けられないものであっただろうが、やはり国内の脆弱な産業セクターは産業基盤を脅かす政策であったに違いない。このように自らを進歩と位置づけることに意味があるのであって、実際の政策選好は確固とした区別があるわけではない。

一方、韓国で言われる保守主義も時代によってその内容は変わってきた。権威主義体制下では反共テーゼが最優先され、自由主義の憲法を持ちながらも自由は国家の安全保障のために制限されてきた。また、韓国の近代化を自らの政権の正当性を誇示する手段とした権威主義体制は、国家主導による産業化という積極的な市場介入を特徴としていた。冷戦時代における韓国の保守主義は韓国の憲政（自由民主主義、資本主義）を保守する目的で、自由を抑圧し、市場に介入しながら財閥の自立を促し、政権を保持するというイデオロギーであった（金東椿、2005）。この時代の保革は独裁（保守）対民主主義（進歩）という対立軸であった。

しかし、1987年の民主化、1989年の冷戦の終焉により、韓国の保守主義は権威主義体制の保護というよりは財閥に代表される市場の既得権保護という方向に転換した。さらには、自由主義の解釈において分配を強調する進歩派とは異なり、市場の効率性を重視する方向に転換した（カン・ジョンイン、2009）。財閥はすでに世界市場での経済活動によって利益を十分に上げ、韓国経済の発展エンジンの役割をしているため、国家主導の財閥育成というよりはサポート役を担っていると見たほうが適切であろう。一方で、民主対独裁という対立軸の弱まりは、民主化過程における改革対反改革に移行を意味した（韓培浩、2004）。政治制度改革や過去の政権による国家犯罪の清算などの改革イシューは最重要課題とされたためこれを無視できる保守派はいなかった。保守派の民主化プロセスに対する消極的な推進は市民の圧力によるものと言えよう。よって、保守と革新は明示的に政党で分けられたり、政策に対する態度で区別したりするのではなく、その時その時の政治状況によって規定される可変的なものである。

こうした状況の中で、市民団体が要求する改革イシューは必ずしもハンナラ党対民主党の政党保革分布にあてはまるわけではない。つまり、市民団体が要求するイシューや立法案は必ずしも進歩政党が賛成し、保守政党が反対するという構造にはなっていない。特に、市民団体のイシュー分類の中で最も成功率が高かった福祉関連イシューは、ハンナラ党の紹介議員がいたり、政党間対立に至らなかったりするケースが多かった。

ここで指摘すべき点は、参与連帯の立法運動が政党対立構造に当てはまらなかったということが、韓国の政党政治の理念対立の激しさとはうらはらに、共通の利害を調整できる場合も多いということである。この理由として、第一にハンナラ党と民主党になんらかの理念的共通点、もしくは利害の共通点があることが挙げられる。第二に、参与連帯のイシューもやはり政党の方向性に一致する点があったということだろう。特に、福祉イシューは生活保護法、老人福祉法、児童福祉法などそれまでに韓国で後回しになってきた福祉制度の整備を図るもので、これらの法整備は既定路線であったといえる。対立は福祉の範囲と実現可能性にあったものとみられる。つまり、改革路線は保守政党、進歩政党、進歩的市民団体のコンセンサスであったといえる。

参与連帯は、参与連帯創立以前に活躍していた経実連の改革議論が既得権益・中間層中心であることに反発した自由主義系の人士たちが創設した。創設の大きな原動力となったチョ・ヒョン聖公会大学教授はこうした運動趣旨を「進歩的市民団体」という言葉で表している。つまり、経実連がそれまでの民衆運動とは一線を画すためにあえて疎外されている階層「民衆」という言葉を使わなかったことに反発し、再び体制改革に疎外階層「民衆」の主体性を主張に取り入れたことになる。ただ、政策基調は資本主義体制の受容とその体制内の変革にあるという点は経実連と変わらない。つまり、経実連が経済自由主義に改革の重点を置いたのに対し、参与連帯は福祉自由主義に改

革の重点を置いたといえよう。

この位置づけが経実連を保守、参与連帯を進歩という認識の構図に収斂させたが、実際の国会構成もこれと似た構図を取るようになったといえる。つまり、民自党→新韓国党→ハンナラ党という保守政党の再編によって権威主義色は薄まると同時に経済自由主義の傾向が強まった一方、平民党→新民党→民主党の保守野党の再編は次第に福祉自由主義のスタンスを強め、自らを進歩と位置づけるようになった。つまり、左の抜け落ちたスペクトラムの中で保革が再構成され、市民団体も労働運動系の民衆運動を除いたまま、自らを進歩と位置づけた。よって、保革の言説の中では激しい対立があっても、自由主義や福祉という観点から言えば共通の利害を見つけることができるのである。

よって、市民団体の立法運動がイシューを先取りしたかどうかは慎重に考察する必要がある。市民団体の要求がイシューに関する制度内での議論を促進したことは間違いないが、市民団体が主張しなくても政党によってイシューが扱われる可能性もあるからだ。ホン・イルピョは市民社会による立法圧力を「contentious」な立法類型であるとし、その中に4つの下部類型を示した。市民社会側の戦略が挑戦的であるか妥協的であるか、そして政府・与党の戦略が一方的であるか説得的であるかという軸で4象限に分け、葛藤・吸収・異議提起・協力の4類型を提示した（ホン・イルピョ、2007）。金泳三政権半ばの1995年までは民自党が国会の多数派を占めており、大統領所属政党と国会多数派が同一である「与大野小」であったため、市民社会側が大統領側に決断を促し、大統領の一存で立法の行方が決まる「吸収型」だったと論じている。そして、1996年から2002年までは政権与党が国会で少数派となる与小野大の期間であったため、立法空間が不安定になり市民社会内の各勢力が立法空間に参加できる「異議提起型」であったと論じる。この吸収型と異議提起型を分けるのは大統領の意思であるのか、政権与党全体としてなのかは明示的ではないが、おそらく大統領の意思であるといえよう。そうした場合、「吸収」型は立法運動にとっては敗北を意味するのだろうか？ホン・イルピョは吸収型の立法類型を市民運動側の議論参加が希薄であるという点から否定的に見ている。つまり、制度政治に上った時点でも市民運動側にイシュー推進の役割が残っているかないかで価値判断をしているようだ。これは左の抜け落ちた政党システムで市民運動とまったく同じ理念を代弁する政党がない場合に意味を持つ議論である。一方、市民団体の改革方向と大統領もしくは政党の改革方向が同じである場合、イシューが立法化されるということは制度政治にイシューが「吸収」されても問題はないことになる。よって、こうした「吸収」や「異議提起」の立法類型はある市民団体の主観的な立場によって価値判断されているといえよう。つまり、イシューが制度政治に「吸収」されることが問題ではなく、市民団体が望む方向から改革論議がずれることが問題と認識されているのである。

市民団体が常に主張する「参加型民主主義」の実践として、制度政治内で議論に参加したという事実があるならば、それは韓国政治の変化と特徴を示すものといえよう。参与団体の例で言えば、福祉関連イシューの議論に非公式に参加する例（2007年）⁶と、政治制度改革関連で政民合同フォーラムに公式に参加する例（2001年）⁷があった。参与連帯がこうに市民団体を代表する総合団体に成長し、そのように認知されたことも重要だが、参与連帯が実際に市民団体の意見収斂を図っていたのかという部分も重要になる。参与連帯が議論に「参加」し、イシューを「吸収」させる力の源泉はそうしたプロセスにあるのではないか。参与連帯は議題設定において既存の政党にも受け入れやすいイシューを扱いながらも、市民団体の代表として政党とは一線を画すことで発言力を発揮してきたと仮定できるのである。

第5章 今後の研究課題

参与連帯の立法運動から得られた知見に基づき、今後の研究課題を展望する。

まず、立法運動が国会における通常の法案審議の過程を経るという点を考慮する必要がある。つまり、与野党の対立・妥協などその時々政局に法案は影響されるため、立法運動が成功する絶対条件は存在しないだろう。一方で、民主化以降の韓国政治の制度運営の変化や理念分布の変化、国会構成の変化によって立法運動の成否が影響を

6 大学授業料引き下げ運動の過程で参与連帯が市民団体の意見調整と国会議員に伝達という役割を担った（参与連帯活動家インタビュー）。

7 参与連帯は国会が政治改革立法を目指し設置した政治改革汎国民協議会に2003年に参加した。

受けてきたことは間違いない。法案に内容別に見ると、福祉関連 이슈가盧武鉉政權期に、経済関連 이슈가金大中政權期に最も多く扱われ、さらに成功率も高かった。一方、腐敗関連は総じて成功率が低いものの、金大中政權期に最も多くの 이슈가扱われた。ここで重要なのは、このデータが参与連帯のものであり、参与連帯の運動の推移であるということだ。よって、ほかの市民団体、特に経実連のデータを今後分析する必要がある。

第2に、政治社会における 이슈の受容の過程である。ある団体にとっては吸収であり、ある団体にとっては協力でありうるように、一団体の観点からは韓国政治の特徴を露わにすることはできないだろう。2つの総合的市民団体が別々に扱った同一 이슈、協力して運動を展開した 이슈、それぞれ独自に展開した 이슈の3種類においてどのような政治過程があったのかを確認する必要がある。保守や進歩の言説が用いられている場合、それは立法運動を妨害する要因になるのか、それとも促進する要因になるのかを見極める必要がある。

第3に政党内での 이슈の伝達の仕方である。全国的に注目される 이슈であれば、党内での意見収斂は党幹部を通じて行われるはずである。そして、それが第15代国会まではっきりとした傾向であった。しかし、前述のデータ分析からも分かるように国会議員の自律性が高まっていることから、政党内の意見収斂過程よりも国会委員会における政党間合意の過程がより重要になってきていると仮定できる。このような状況では、市民団体は直接的なロビー活動で成果を得ることができるだろうか？

一方で、第17代国会以降、参与連帯の立法請願のみならず、全体的に立法請願の件数が減っている合意を明らかにする必要がある。参与連帯のケースでは、第16代国会までは主に民主党系の賛成を背景に国会審議過程をサポートする活動を展開していた。しかし、第17代国会で民主党系のウリ党が過半数を得て与野小の議会構成に変化すると、参与連帯は立法請願をせず、さらには当該国会で初の議会進出を果たした民労党との全面的な協力に移行するのである。この状況は参与連帯の運動方向性が中産層志向から貧困層に移動したためなのか、国会構成の変化によるものかを明確にする必要がある。

最後に、これらの分析結果から韓国の民主化における市民団体の役割、韓国政治で不変なもの、変化したものを俯瞰する必要がある。制度改革における市民団体の要求の強さとともに、それに消極的かつ妥協的である政治社会という姿が仮説的に浮かび上がっている。一方で、市民団体も政治社会もエリートで構成されており、特に知識人（教授）の運動参加や政治参加が韓国政治の特徴であるといえる。ここに市民一般のディベート参加はみられない。知識人は理念的に明確な志向性があるため、議論は保革の構図に回収されるが、実際は保革の対立軸はあいまいであることを証明する必要がある。

このような論点を今後の研究課題として取り組んでいくつもりである。

参考文献

日本語文献

磯崎典世、2004、「第2章：体制変動と市民社会のネットワーク」、辻中豊・廉載鎬編、『現代韓国の市民社会・利益団体 - 日韓比較による体制移行の研究』、木鐸社：52-83。

小野耕二、2001、『比較政治』、東京大学出版会。

金淳和、2007、「韓国の公的扶助制度改革—拒否点と市民団体に開かれた政治的機会構造」、『早稲田政治経済学雑誌』369号：99-118。

金善美、2007、「市民運動の危機論と市民社会の構図変化」、小此木政男・西野純也編『日韓市民社会の意識と動態』、慶応義塾大学出版会：3-26。

金東椿、2005、水野邦彦訳、『近代のかけ—現代韓国社会論』、水野書店。

シーダ・スコッチポル、2007、河田潤一訳、『失われた民主主義—メンバーシップからマネージメントへ』、慶応義塾大学出版会。

成玄哲・角一典、1998、「政治的機会構造論の理論射程」、ソシオロギス、第22巻：102-123。

高島通敏、1976、『政治学への道案内』、三一書房。

春木育美、2007、「政治的機会構造と韓国の市民運動—戸主制廃止運動を事例として」、ソシオロギ、51巻3号：75-89。

韓培浩, 2004, 『韓國政治のダイナミズム』, 法政大学出版局.

廉載鎬, 2004, 「第7章: 市民社会とニューガバナンス; 民主化以後の市民団体の政治化」, 辻中豊・廉載鎬編, 『現代韓國の市民社会・利益団体 - 日韓比較による体制移行の研究』, 木鐸社: 184-212.

韓国語文献 (カナダ順)

강정인 타 편. 2009. 『한국 정치의 이념과 사상 - 보수주의・자유주의・민족주의・급진주의』. 후마니타스.

(カン・ジョンイン他編, 2009, 『漢国政治の理念と思想 - 保守主義・自由主義・民族主義・急進主義』, フマニタス.)

권해수 / 김태룡. 2007. “ 시민단체에 대한 행정학자의 참여 평가.” 한국거버넌스학회, 한국거버넌스학회보, 제 14 권 제 2 호: 1-25.

(クオン・ヘス/キム・テリョン, 2007, 「市民団体に対する行政学者の参与評価」, 韓国ガバナンス学会, 韓国ガバナンス学会報, 第 14 卷第 2 号: 1-25)

김준기. 2006. 『한국 시민단체의 내부의사결정과정에 관한 연구』. 서울대학교 출판부.

(キム・ジュンギ, 2006, 『韓國市民団体の内部意思決定過程に関する研究』, ソウル大学校出版部)

남궁근. 2003. “ 행정학자의 시민단체 참여활동 성과와 한계 - 경실련, 참여연대, 함께하는 시민행동, 함께련을 중심으로.” 한국행정학보, 제 41 권 제 4 호: 45-66.

(ナムグン・グン, 2003, 「行政学者の市民団体参与活動の成果と限界 - 経実連, 参与連帯, 共にする市民行動, 行政連を中心に」, 韓國行政學報, 第 41 卷第 4 号: 45-66.)

조대엽・김철규. 2007. 『한국시민운동의 구조와 동학』. 집문당.

(チョ・デヨプ/キム・チョルギ, 2007, 『韓國市民運動の構造と動学』, チプムンダン.)

조희연. 2001. “ 종합적 시민운동의 구조적 성격과 변화전망에 대한 연구.” 유팔무・김정훈 엮음. 『시민사회와 시민운동 2 - 새로운 지평의 탐색』. 한울: 232-258.

(チョ・ヒョン, 2001, 「總合的市民運動の構造的 성격と変化展望についての研究」, 유・팔무/키ム・جون프編, 『市民社会と市民運動 2 - 新たな地平の探索』, 한울: 232-258.)

이남석. 2004. “ 입법과정과 NGO 의 역할: 관련 법안과 NGO 의 입법참여 사례를 중심으로.” 주성수 편. 『정치과정에서의 NGO - 한국과 일본의 비교』. 한양대학교 출판부: 53-85.

(イ・ナムソク, 2004, 「立法過程と NGO の役割: 関連法案と NGO の立法参加事例を中心に」, チュ・ソン스編, 『政治過程における NGO - 韓国と日本の比較』, 漢陽大学校出版部: 53-85.)

이현우. 2008. “ 국회상임위원회의 운영: 전문성과 대표성의 재평가.” 의정연구, 제 15 권 제 1 호: 145-176.

(イ・ヒョヌ, 2008, 「国会常任委員会の運営: 専門性と代表性の再評価」, 議政研究第 15 卷第 1 号: 145-176.)

참여연대. 2004. 『세상을 바꾸는 시민의 힘 - 참여연대 10 년의 기록 1994-2004』. 참여연대.

(参与連帯, 2004, 『世界を変える市民の力 - 参与連帯 10 年の記録 1994 - 2004』, 参与連帯自主出版.)

최장집. 2005. 『민주화 이후의 민주주의』. 후마니타스.

(チェ・ジャンジ, 2005, 『民主化以後の民主主義』, フマニタス.)

홍일표. 2007. 『기로에 선 시민입법 - 한국 시민입법운동의 역사・구조・동학』. 후마니타스.

(ホン・イルピョ, 2007, 『岐路に立った市民立法 - 韓國市民立法運動の歴史・構造・動学』, フマニタス.)

英語文献

Paul Bernstein. 1998. “Interest Organizations, Political Parties, and the Study of Democratic Politics.” Costain and McFarland eds. *Social Movement and American Political Institutions*. Roman & Littlefield: ML.

인터넷

韓國国会議案情報システム, <http://likms.assembly.go.kr/bill/jsp/main.jsp>

韓國言論振興財団, www.kinds.or.kr

日據時代台灣自來水建設情況和當地居民的關係

村田 省一（人文学研究科学術推進研究員）

1 導言

1895 年，甲午戰爭後日本根據馬關條約讓清國割讓台灣，重新派遣軍隊來制壓台灣的抵制，終於接管台灣。當時日本從淡水、基隆（即日據初期的日軍基地）開始建設自來水廠，1899 年在日本統治下首次完成自來水廠於淡水。後來迄 1920 年，台北（1909 年完成）、台中（1914 年完成）、台南（1922 年完成，但 1912 年開工）、高雄（1913 年完成）等，主要於台灣的大都市進行建設自來水系統。上述的日據前期的自來水建設，即以日軍的活動基地、或者對日本支配而言重要的大都市為主。再說，這些自來水建設的工程費來源是日本本國開支的預算，或者台灣總督府的預算（包括公共衛生費）。¹

1920 年，台灣開始地方行政改革，於台灣各地方出現地方行政組織（比如市、街、庄）。雖然這些行政組織真是不是堪稱所謂自治體，還有疑問，不過從此各個地方的公共事業從總督府被移交地方行政組織了。其中，1920 年以後這些行政組織負責地方的自來水建設。²

總之而言，日據前期，大都市的自來水是由日本當局主導建設的。本人認為這些計劃是一種日本國家直轄的計劃。1920 年之後，總督府改正地方行政系統，隨著改正地方行政，總督府將地方的公共工程委託地方的行政組織。以後因此在中小城市裡，地方行政組織的主導下進行自來水建設。至 1942 年，台灣的自來水普及率是 100 分之 16 左右（以總人口中受到自來水的供水人口比率為標準）。³

有關日據時代的台灣自來水建設的研究（現在舉一部的例子。但除外於日據時代做的。）

中華民國自來水協會 << 台灣自來水誌 >>1977 年

關於近現代台灣的自來水建設，以技術的問題為主題。

朱志謀 << 國家與個人關係的再組 以日領時期台灣自來水事業為中心 >>1998 年

國立台灣師範大學碩士論文

他將日據時代台灣的自來水事業，從台灣全土建設進行的概觀、自來水給台灣社會造成的影響來討論。據本人所知，本研究好像最廣泛地包括近代台灣自來水的題目來討論。不過從論文題目的一些部分，即通過自來水來看 << 國家與個人關係 >> 的部分而言，也許還有檢討的空間相當多。

呂哲奇 < 日治初期台灣北部衛生工程之建設事業 以台灣衛生工程顧問技師爸爾登為中心 > 1999 年 << 台灣史料研究 >>13 號

本論文將日據初期總督府如何計劃建設自來水，以實際上指揮建設台北地方的自來水的英國人工程師爸爾登的業績為中心討論。

李宛諭 << 上水道於城市近代化中的角色變遷 以台南水道發展脈絡與轉型為個案研究 >>2009 年 國立台灣大學碩士論文

這份論文的主題是於日據時代台南市的自來水建設給台南市的都市開發計劃、自來水的水源地造成帶來什麼影響。另一個主題是將現代的自來水故址如何為文化遺產保存。

1 朱志謀 << 國家與個人關係的再組 以日領時期台灣自來水事業為中心 >> pp. 36-46.

2 台灣總督府編 << 台灣統治概要 >>1945 年、p. 238.

3 << 國家與個人關係的再組 以日領時期台灣自來水事業為中心 >> p. 50.

劉俐伶 << 台灣日治時期水道設施與建築之研究 >>2004 年 國立成功大學碩士論文

跟上述的朱志謀論文一樣，本論文也將日據時代的台灣各地的自來水建設網絡在內。

還有有關自來水建設的研究題目，即是台灣的管理衛生問題。研討這些問題的論文比較多。可是本次不提及。

總之而言，有關日據時代台灣歷史的研究中，以自來水建設問題為主的研究還不太多，而且於自來水建設的研究中學位論文占去得多。關於研究內容，以建設的工程技術，1920 年之前台灣總督府作為日本國家的計劃直轄進行的工程，或總督府決定進行工程的政策經過等為主。

順便說以下，關於日本的有關近代台灣自來水研究，石井多三 <戰時中に於ける台灣の水道> (<< 水道協 雜誌 >>180 號，1949 年) 將二戰中在台灣存在的自來水系統簡單地論述以外，白井征彰、やまだあつし <日本統治時代台北の上下水道について—台北水道の進展— (報告要旨)> (<< 現代台灣研究 >>33 号，2008 年)、齋藤博康 <台灣の水道とパルトン> (<< 水道協會雜誌 >>67 (8)，1998 年) 等，論述日據時代初期總督府進行的自來水建設。

這些先行研究有問題，即欠缺研討日據時代台灣的自來水建設和當地居民之間的關係，因為 1920 之前的自來水事業是總督府直轄的，而且資料有限制。本人也查看 1920 之前的有關自來水事業的總督府資料的時候，於資料上幾乎沒有發現自來水建設和居民之間的關係的痕跡。

另一方面，關於 1920 年之後的自來水建設，建設事業移交給地方行政團體，而當時台灣人居民參加地方行政之路（雖然不完全地）開始，因此在當時的資料上能看當地居民試圖參與自來水建設。不過這些看點於先行研究中還沒處理好。本次報告從這些看點試圖研討日據後期台灣自來水建設和當地居民之間的關係。

2 台北州新莊郡新莊街的歷史經歷

新莊，即現在的台北縣新莊市的位置是於台北平野西部，隔淡水河跟台北市接鄰。現在新莊市成為台北市的衛星都市之一。新莊的中心市街（即昔日的新莊街的中心部分）在大漢溪（淡水河的分流）北邊。

日據時代，新莊郡在現在的台北縣新莊市、三重市、蘆洲市、五股鄉、泰山鄉、八里鄉上展開。而且新莊街當新莊郡的中心。

原來台北地方，通過從大陸來的漢族移民的開發成為開往大陸福建經商的據點，而且成為跟琉球、日本貿易的據點。清朝也將台北地方視為比較重要的軍事據點。隨著漢人移民進行開發，這個地方的中心從淡水河口遷移到內陸的艋舺（今台北市萬華區）、新莊（今台北縣新莊市）。昔日的新莊，因為是大型船可以溯上達到的，而且是在台北和新竹、桃園之間的陸上交通樞紐，所以當台北地方的交通中心。⁴台北地方產生的大米從新莊用船搬到福建。⁵

新莊的脈絡可以溯 18 世紀中葉探索。於 1732 年前後，新莊首次登場在歷史上，到 1760 年代形成市街了。⁶1746 年，巡檢從八里坌遷到新莊，於 1767 年巡檢名稱變成新莊巡檢，新莊還成為台北地方的政治中心。⁶但到 19 世紀，大漢溪的河底堆積泥沙，大型船已經無法進入新莊，新莊逐漸失去商業中心的地位，而政治軍事的中心也逐漸遷到於淡水河下流域的艋舺。⁷後來艋舺也面臨泥沙堆積等問題，不免將商業中心的地位讓給大稻埕（今台北市大同區）。1878 年清朝設置台北府，到 1885 年台灣巡撫才來到台北府。

日據時代開始後，原來經由新莊行駛的鐵路，竟然在淡水河上的鐵路橋遇大雨被沖泡，所以鐵路被廢除等厄運發生，妨礙新莊回復商業中心的地位。⁸另一方面，由於日據時代的新莊平野上稻作發展，因此從日據初期到末期新莊的人口增加了一倍。1932 年時，新莊街的人口到 18000 人以上，戶數到 3000 戶左右，包括 1100 戶左右的農戶。⁹最晚 1941 年時新莊街被稱“交通の機関備はり 隣接する台北市との商取引極めて活発にして”。（完備交通機關，對

4 陳宗仁 << 從草地到街市 十八世紀新莊街的研究 >> 稻鄉出版社、1996 年。pp. 136-137.

5 同上、pp. 139-141.

6 同上、pp. 193-196, 209. 八里坌在淡水河口的南岸，現在的台北縣八里鄉。<< 八里坌全覽手冊 >> 台北縣立十三行博物館，2001 年。p. 2. 作為板橋林家（即林本源家，於清末成為台灣最大的地主家。）的事實上始祖的林安邦，也 18 世紀末前後從福建來新莊，從事米商嶄露頭角。板橋街役場 << 板橋街誌 >>1933 年。P. 56.

7 同上、pp. 169, 197.

8 尹章義、陳宗仁 << 新莊政治 展史 >> 新莊市公所、1989 年。pp. 179-181.

9 宮崎聖子 << 殖民地台灣における青年団と地域の変容 >> 御茶の水書房、2008 年。pp. 44-48.

台北市的商業交流非常活躍。) ¹⁰

日據時代新莊，首先屬於台北縣，台北廳的管轄下，後來由於 1920 年的台灣地方行政改革，街庄制也開始。新莊成為台北州新莊郡，郡下有新莊街、鷺洲庄、五股庄、林口庄。 ¹¹ 新莊市部屬於新莊郡新莊街。

新莊街的街長是台北州長任命的。歷代街長是林明德（任期 1920-1923，1923 年死去）、黃淵源（任期 1923-1931）、阿久根巍（日人，前新莊郵局長，任期 1931-1935），然後也一直有日人的街長。 ¹²

3 新莊街的自來水建設

新莊的自來水計劃可以溯到 1910 年。1910 年時，當地居民依靠井水取得生活用水，但是井水的水量不足，水質差，所以「附近の住民は困窮を訴え」（一帶居民告訴困苦）。於是台北庁要調查”後村圳”的圳路和大料坎溪，而計劃從圳路和大料坎溪提飲水。 ¹³ 1911 年時，台北庁做調查，結果發現良質水源，計劃設計自來水。雖然未定財源，據報道計劃從公共衛生費開支。 ¹⁴ 1914 年時，新庄、水返、枋橋、大龍峒等地點有自來水計畫。總督府將敷設自來水的費用 20 萬 3000 圓列入 1914 年的預算。 ¹⁵ 不過，以後自來水建設計劃一旦停滯。停滯的理由還沒解釋清楚，有說”常に財政上の掣肘を受けて実現を見るに至らざりしもの”。（經常受到財政的制約，無法實行。） ¹⁶ 於停滯時期，居民將大漢溪谷支流圳的水為飲用水使用。 ¹⁷

到 1929 年，才重新進行建設計劃。當年新莊街長 淵源，訪問 督府跟當局商量自來水施設の借款。 ¹⁸ 從當時的台灣日日新報 1929 年 2 月 3 日〈新莊〉上，看來當時已經有建設預算的原案，所以當時可能有自來水建設計劃的原案。預算總額是 15 萬圓，比 1933 年當時（即建設工程開工時）新莊街的年間稅收 56970 圓 ¹⁹ 貴得多，對新莊街而言自來水事業堪稱巨款的事業。

隔年（1930 年），於新莊街的西邊山地出現建設癩病休養所（樂生癩瘋養院）的計劃。建設用地將在新莊街的生活用水的水源地上，所以居民們向計劃掩飾不住不安的神情。於是當地的士紳向總督府請求自來水建設的補助。 ²⁰ 於 1932 年度總督府預算中，列入了新莊自來水的補助費 23000 圓。 ²¹ 終於建設總預算是 151000 圓，細目是總督府的補助費 47550 圓、台北州的補助費 47550 圓、新莊街的負擔 56000 圓 ²²。1932 年 12 月，總督府許可建設計劃，1933 年 1 月開工 ²³ 1934 年 8 月完成給水施設。 ²⁴

4 自來水建設和新莊街的街政

林明德是於 1920 年被任命當新莊街的第一任街長。他於日軍來台灣制壓時合作日軍，然後被任命新莊區長等職位。他被視為日本進行台灣的地方統治時，為了順利地進行地方統治 日本懷柔的台灣人地方名士之一。 ²⁵

第二任的 淵源（1880 - 1945 任期 1923 - 1931），出生於新莊街。首先他學習漢學，後來學日語。一邊做地主業，一邊建設醫院等，他成為新莊的知名人士。他還被 督府表彰，歷任新莊信用組合專務理事等職務。 ²⁶ 他熱情的

10 台灣水道研究 『台灣水道誌』1941 年、p. 153.

11 <<新莊政治 展史>>pp. 222-223.

12 同上、p. 230.

13 1910 年 9 月 14 日〈台北廳下水道現狀〉台灣日日新報

14 1911 年 5 月 9 日〈新庄水道計画〉台灣日日新報

15 1914 年 7 月 15 日〈台北の新設水道〉台灣日日新報

16 <<台灣水道誌>>p. 153.

17 中華民國自來水協會 <<台灣自來水誌>>1977 年、p. 173.

18 1929 年 2 月 3 日〈新莊〉台灣日日新報

19 新莊街役場編 <<昭和八年新莊街要覽>>1933 年。

20 <<台灣自來水誌>>p. 173. 本人明確表示，無法支持當時的對癩病的看法。關於癩病的醫學見識，現在和當時之間的差別大。關於日據時代的癩病行政的問題，已經有相關的研究。比如清水寬〈殖民地台灣におけるハンセン病政策とその實態〉（<<殖民地社會事業關係資料集 台灣編 別冊（解説）>> 近現代資料刊行會，2001 年。）

21 1932 年 1 月 26 日〈督府の 行予算 額九千万 程度〉台灣日日新報

22 <<台灣自來水誌>>1977 年、p. 173.

23 <<台灣自來水誌>>1977 年、p. 173.

24 1934 年 8 月 28 日〈新莊水道はけふ落成式〉台灣日日新報

25 <<殖民地台灣における青年団と地域の変容>>pp. 54-56.

26 同上、pp. 57-59.

做地方文教政策。比如開辦漢文夜學會。可是 1931 年，當他的任期滿了時，有黃街長被更迭的說話。街民向當局請求在任 淵源。可是終於當局決定後任街長是日人官員阿久根巍。儘管當時的台灣的大部分街長、庄長是終身任命的²⁷，還是 淵源竟被解除。（宮崎聖子指出，總督府也許討厭他的漢文夜學會等政策，而且當時的新莊街有所謂“無賴漢”（即不法分子）多，所以總督府通過交代日人的街長打算強化監視新莊街的治安。²⁸）

結果新莊街的協議會員向阿久根街表出不滿，有些 員拒絕參加協議會會議。²⁹ 終於 1932 年 11 月，街民舉辦街民大會，企圖演說批評阿久根的街政，結果當日被警察阻攔，解散大會。

如上述來看，當時於新莊街有街長、其背後的日本當局和有力街民之間的對立。這個事情和進行自來水建設有什麼關聯？以下本人敢試探。

事實上自來水建設費要 150000 圓以上，對新莊街來說自來水事業可以堪稱巨款的事業，本人已經上述。難怪當地的士紳向總督府請求自來水建設的補助。新莊街的街長交代日人阿久根後，於 1932 年才總督府的補助費開始具體化。在當時的新莊街協議會裡有些協議會會員，即有力街民對建設費表出不安感。

1932 年 1 月 23 日，在新莊街第一回協議會上，有自來水預算有關的提問。向街長兼協議 議長阿久根巍，協議會員林世南³⁰ 請求使用從 督府或者簡易保險出來的低利的借款。阿久根說，他打算使用低利的借款，可是變更借款的條件的時候，請將那件全面地委託給他（即阿久根）。協議會員謝文程³¹ 請求增加總督府或者台北州的補助金，阿久根說他要努力。謝文程還請求，說如果實際上工程費成為比原來的計劃便宜的話，街不需要多額的借款。阿久根對這個發言不回答，對借款的問題馬上進行表決，沒有反對者，結束提問。³²

原來林世南、謝文程等新莊街的有力者，向阿久根跳過他們成為街長應該很有意見。³³ 他們很可能於上述的協議會上，為了追究阿久根發出有關自來水建設的提問。阿久根不充分地應付回答，後來在事實上的預算上他們的建議沒有充分地反映。這樣的情況下，1932 年 11 月的街民大會上，當主持人的謝文程對自來水問題發言如下：「街民自夙知為必要，已向督府申請批准，經費十五萬圓，此於同街預算為未曾有之巨款，然須藉督府補助及起街債。」，竟馬上被官員阻攔，最後大會本身也僅花 20 分鐘就被中斷。³⁴

以後從 1932 年自來水工程開工，其中當工程主任的日人井田某因“水道に關する種種の問題から”被更迭的醜聞發生。³⁵

以下，本人要將新莊街自來水建設預算的性格檢討一下。新莊街的自來水工程總預算 158500 圓中，有 63000 圓的新莊街的負擔。這 63000 圓是基本上從日本勸業銀行貸款的，利率是 7.6%（但據 << 台灣水道誌 >> 中的預算（好像最後決定的），總額 151150 圓，其中街負擔是 55950 圓。³⁶）。³⁷ 比如，新莊街自來水開工的四年前，像新莊街一樣在台北州的海山郡板橋街也有自來水開工，這時預算是 132000 圓，細目有 42000 圓的台北州補助費，另外有 90000 圓的街的負擔。90000 圓中有 80000 圓的貸款，像新莊街一樣從日本勸業銀行出來，利率是 8.5% 的。後來預算好像更變更，板橋街的負擔增加。³⁸ 於新莊街協議會，對低率的貸款問題有討論。果真新莊街的貸款的條件，對新莊街而

27 吳文星 << 日治時期台灣的社会領導階層 >> 五南圖書出版、2008 年。p. 196.

28 << 殖民地台灣における青年団と地域の変容 >> pp. 166-167.

29 << 新莊政治發展史 >> p. 273. 協議會是日據時代於各級地方行政團體設置的，地方政治的資訊機關。但是有協議會會員至 1935 年為止完全官選，協議會沒有議決權等問題。<< 日治時期台灣的社會領導階層 >> pp. 185-186.

30 林世南是前任街長林明德的長子，曾當新莊信用組合理事、新莊街青年會會長等，可以說街的有力者。後來當台北州議會議員，光復後還當新莊信用金庫董事，台北省議會議員等。<< 殖民地台灣における青年団と地域の変容 >> pp. 108, 179.

31 謝文程台北師範學校畢業，曾當教師後來告辭。有說跟抗日派有關係。光復後還是地域的領導者，1960 年當台北縣長。同上、pp. 169-171.

32 台灣 督府公文類纂 冊號 10593 文號 4 < 新莊街上水道敷設費借入金許可稟請 > pp. 341-342.

33 據 << 殖民地台灣における青年団と地域の変容 >>，原來林世南或者吳培標（新莊街協議會會員）來接任街長，首先阿久根裝支持林世南，結果自己接任街長。因此新莊街民向阿久根驚訝。同書 p. 168.

34 1932 年 11 月 25 日 < 為郵局水道諸問題新莊街民大会詳報 > 台灣日日新報

35 1933 年 11 月 22 日 < 新莊 > 台灣日日新報

36 << 台灣水道誌 >> p. 161.

37 < 新莊街上水道敷設費借入金許可稟請 > p. 338.

38 灣總督府公文類纂 冊號 10551 文號 6 < 板橋庄水道敷設資金借入許可指令案 > pp. 478-485. 但據 << 台灣水道誌 >> pp. 146-148.，總費用是 138000 圓，其中街負擔是 116000 圓。<< 台灣水道誌 >> 說：「本工事は工程の進行に伴ひ設計變更の必要を生じ、昭和四年五月、總工費預算範圍内に於ての變更許可を得て（略）然るに殘部工事の完成には預算額を以てしては不足を来すべきこと明らかなる事情に立至れるにより之が更正を申請し總預算に於て六千圓（街負擔）の増額變更を認められ」（本次工程隨著進行發現變更設計的需要，因此 1929 年 5 月獲得不超過原來的預算的條件下變更設計的允許，（從略）然而後來發現，原來的預算不夠完成剩餘部分的工程費用，所以再次申請變更設計，獲得增加街的負擔 6000 圓的允許。）以上的說明，還有跟 < 板橋庄水道敷設資金借入許可指令案 > 之間較大的差別。我們可能推測原來的計劃試行後有大的變更，可是現在還不太清楚。

言真是不是有利？再說，當時的新莊街對貸款對方有沒有別的選擇？

5 自來水建設和資金籌措

1929年當時，於台中州大甲郡清水街建設自來水的時候，從當地的信用組合借款。利率是6%，金利比新莊、板橋低。³⁹但是總工程費94000圓中，只有20000圓的台北州的補助，其外都是清水街負擔的。⁴⁰於台北州七星郡松山庄建設自來水的時候，總工程費45000圓中，有15800圓的庄的負擔，其他是台北州的補助、台北市的負擔、總督府和台灣電力的捐助。庄的負擔中，有10000圓的借款（從台北市內的銀行、簡易保險），利率是7.6%。⁴¹新竹州桃園街（今桃園市）的話，建設資金從簡易保險借款，利率是4.3%（1937年時）。⁴²原來的總工程費267117圓中，⁴³有135000圓的街負擔的借款（但跟別的資料之間的差別大）。⁴⁴

雖然上述的幾個例子是還少，可是現在將這些台灣各地的行政組織進行的公共工程例子試圖探索。

首先舉清水街的例子。1928年清水街決定借款來源時，當地的信用組合的利率比銀行低（當時銀行的利率是8.1%），因此清水街決定以叫蔡柏初的人士⁴⁵為中轉從信用組合借款。據總督府資料，這時的利率是6.7%，雖然這份消息和上述的消息（據台灣民報）不一樣，可是利率比銀行的還低。⁴⁶這樣的低利率可能是，當時於清水街一戶（五個人）一個月的水費只要1圓的原因之一。當時清水街的水費被視為比較便宜。⁴⁷於新莊街，一戶（五個人）一個月的水費要1圓50錢。⁴⁸於松山庄，一戶一個月的水費還要1圓50錢，比當時的台北市內多0.5倍。⁴⁹

但後來蒙受世界經濟恐慌，蔡柏初的經濟情況變差，事到如此清水街不能繼續通過蔡柏初借款，終於1930年不得不給蔡柏初還款而從日本勸業銀行借63000圓。這時利率是7.6%。⁵⁰

另一方面，如上述，1937年桃園街決定建設自來水時，從簡易保險借款填補建設費。現在檢討當時的利率時，本來因該考慮景氣的變化等因素。所以現在不能敢斷言桃園街的利率比新莊、松山、清水等地方低得多。不過桃園街等行政團體除了銀行以外，還有簡易保險的選擇。再說桃園街的情況，原來1927年前後也於協議會有檢討建設自來水。這時當地居民認為原來桃園街有豐富的地下水，因此不必花很多費用建設自來水，於街協議會阻攔被稱“原係謀官吏之創意，街當局為迎合上司之意見，不論良惡”的自來水建設計劃。⁵¹

從這些例子來看，當時的地方行政團體決定借款時，除了銀行以外，還有簡易保險，信用組合等的選擇。而各個地方行政團體由各個事情，有的時候看借款的條件選擇借款的貸方。有的時候街的協議會發揮實力，阻攔官方的計劃。

日據時代，日本的金融機構（台灣銀行、日本勸業銀行等）控制台灣的上層金融結構。另一方面，地方的信用組合緊貼地方經濟。地方的有力人士（地主等）經常經營的信用組合，為地方金融的骨幹⁵²。

關於簡易保險，於先行研究上，僅有中日戰爭，太平洋戰爭時期的少消息，⁵³本人認為台灣的研究還不太多。但簡易保險於戰爭以前的時期還可能有不可漠視的作用，以後因該有更多研究。

39 1929年5月5日〈清水敷設水道料金很便宜〉台灣民報

40 <<台灣自來水誌>>p. 240.

41 台灣總督府公文類纂 冊號 10608 文號 1 〈指令第三三九四號松山庄水道敷設工事〉pp. 7, 41.

42 台灣總督府公文類纂 冊號 10759 文號 1 〈桃園街上水道敷設費〉p. 23.

43 <<國家與個人關係的再組 以日領時期台灣自來水事業為中心>>p. 54.

44 〈桃園街上水道敷設費〉p. 12. 另一方面 據<<台灣水道誌>>p. 219. 建設費246000員中 街的負擔是81068圓 其中借款是80000圓。如此兩者之間的差別大。〈桃園街上水道敷設費〉是1937年的紀錄。還有，冊號 10692 文號 2〈桃園街水道工事〉pp. 14-18. 中有1936年的紀錄。其中，當時的預算也有別跟時點的紀錄之間的差別。

45 關於蔡柏初，據紀錄叫蔡（木十百）初的人曾於從1920年到1926年任清水街協議會會員。陳瑤塘主編<<清水鎮志 增編本>>清水鎮公所，1998年，p. 149.

46 台灣總督府公文類纂 冊號 10557 文號 7 〈清水街水道施設資金借替ノ件〉p. 481.

47 1929年5月5日〈清水敷設水道料金很便宜〉台灣民報。但在清水街，因為沒有公共栓，所以產生了庶民的不滿。1929年5月19日〈水道給水不公平〉台灣民報

48 〈新莊街上水道敷設費借入金許可稟請〉p. 373.

49 〈指令第三三九四號松山庄水道敷設工事〉p. 36.

50 〈清水街水道施設資金借替ノ件〉pp. 481-482, 486-487.

51 1927年2月27日〈桃園欲設水道〉台灣民報

52 關於信用組合的概論，有林寶安〈日據時代臺灣的信用組合與地方社會〉（<<臺灣銀行季刊>>44(3)，1993年。）、蕭慧君〈日治時代臺灣銀行與其體制下金融機構之研究〉（東海大學歷史學研究所碩士論文，2005年。）等研究。

53 比如，李為楨〈戰時體制下臺灣金融統制體制之初探〉（<<第五屆臺灣總督府檔案學術研討會論文集>> 國史館臺灣文獻館，2008年。）

還是言歸地方行政團體和金融機構的關係，於新莊街確定建設自來水的計劃前後，台灣人街長被解除，日本人成為新街長。這樣的情況下，跟清水街不一樣，新莊街可能難為選擇依靠台灣人經營的信用組合建設自來水的手法。因為於當時的新莊街日本人街長抑制台灣人有力居民進行街政。由新莊街的自來水計劃確定於台灣人街長被解除後，而工程當中日本人工程主任因一些醜聞被解除的事實，本人推測新莊街的自來水建設在日本人的主導下強硬地進行。如上的新莊街的情況，跟於清水街居民們用信用組合試圖減輕街的負擔，或者於桃園街居民們嚴格地監視、抑制花太多建設費的自來水建設等情況不一樣。

果然新莊街的經過就意味著自來水建設的形勢對於街居民不利嗎？我們要注意板橋街、清水街不受總督府的補助，因此街的負擔率比較高的事實。特別是板橋街和新莊街接鄰，建設自來水的時候離新莊街相近的。為什麼新莊街取得國庫補助，反而板橋街不能，本人對這個問題感興趣，不過迄今還沒達到表示理由的階段。

這次本人為了說明新莊街自來水建設的特點，舉板橋街、清水街、松山庄、桃園街的例子進行比較研討。可是需要研討的例子還不夠。本來進行研究時需要研討全台灣的情況，還要從全台灣的視點來考慮新莊街的情況。⁵⁴

6 小結

本次通過以新莊街為主的例子，看從 1920 年代到 1930 年代台灣人居民於街政對自來水建設的公共事業試圖獲得相當的作用。這樣的傾向跟以前總督府親自進行工程（比如 1900 年代台北市內的自來水建設）不一樣。原來新莊街的自來水計劃，從居民們的希望、請願出來的。有的時候，各地的居民們據協議會等政治手段向公共事業提議，或者向官方提意見。

眾所周知，於 1920 年代台灣文化協會等的請求自主台灣，而且台灣議會設置請願運動也聯動。從 1920 年代末文化協會分裂，台灣議會設置請願運動也越來越衰退。可是另一方面，追求基層階層的自治行政的趨勢高漲。⁵⁵ 到 1935 年舉辦首次市街庄的協議會會議員的選舉，迄今比較多研究以這樣的趨勢為“接受殖民地支配的恩惠的抗日右派做妥協”、⁵⁶ 沒有實質的地方自治”⁵⁷ 等，做較低評價。可是這樣的經過當中，居民們如何試圖獲得地方行政，公共事業的角色，本人認為還有需要檢討的空間。本次報告可以說是檢討的開端。

54 朱志謀於《國家與個人關係的再組：以日領時期台灣自來水事業為中心》編輯日據時代台灣的各地自來水建設預算表。可是將預算來源分類為“國庫”、“其他”，於“備註”欄只寫“其他”來源的粗略的內容，比如“州”（即州有負擔的意思）“街”（即街有負擔的意思），沒有說明州、街等的負擔率、街的負擔的籌辦辦法。朱志謀據台灣水道研究會《台灣水道誌》寫預算表。在《台灣水道誌》中，關於自來水建設的預算負擔，說明“國”、“州”、“街”等各階層的負擔金額、街庄的負擔的來源、街庄的借款金額等消息。但沒有街庄的借款的貸方、利率等消息。

55 關於地方自治運動的趨勢，參看比如《日治時期台灣的社會領導階層》pp. 186-191.

56 若林正丈《台灣抗日運動史研究 增補版》研文出版，2001 年。pp. 169-170.

57 《殖民地台灣における青年団と地域の変容》pp. 215-217.

韓国「国家報勲」政策の一側面

——山清護国院建設を事例として——

田中 悟（国際協力研究科助教）

派遣先：ソウル大学校（韓国）

はじめに

本報告は、現代韓国においてナショナリズムを通じた国民統合を目指す、いわゆる「国家報勲」政策を、その分析の対象とする。まず、本報告が考察対象として取り上げようとする国立墓地の成立と展開が現代韓国社会において意味するところを探り、より具体的なケースとして、慶尚南道山清郡に建設が予定されている「山清護国院」に注目する。そして、その建設をめぐる〈困難〉を跡付け、そこから韓国の「国家報勲」政策が現在直面している課題について、論じていくこととする。

1. 韓国の国立墓地概観

「国家報勲」政策を分析するにあたり、その具体的な〈現場〉の一つである韓国の国立墓地について、概観しておきたい。現在、韓国内各地に展開する国立墓地は全部で8ヵ所を数え、名称や対象者の違いによっていくつかのグループに分類できる。

国立墓地への安葬¹対象者

韓国で各地に設置されている国立墓地は、それぞれについて安葬対象者が定められており、そうした人物が亡くなると、遺族の申請と審査を経て、各墓地に葬られることになる。

国家報勲処の「国立墓地安葬管理システム」サイトによれば、各国立墓地の安葬対象者は次の通りである。

国立大田顕忠院・国立ソウル顕忠院

- (1) 大統領・国会議長・大法院長または憲法裁判所長、国葬または国民葬で葬儀された者
- (2) 殉国先烈・愛国志士
- (3) 現役軍人・召集中の軍人および軍務員として死亡した者
- (4) 武功受勲者
- (5) 長官級将校または20年以上軍に服務した長期服務除隊軍人
- (6) 戦没・殉職郷土予備軍隊員および警察官
- (7) 戦・公傷軍警
- (8) 火災鎮圧・人命救助または救急業務の遂行またはその現場状況を想定した実習訓練中に殉職した消防公務員
- (9) 在日学徒義勇軍人
- (10) 義死傷者
- (11) 殉職・公傷公務員
- (12) 国家社会貢献者（外国人も安葬対象者に含む）

1 韓国語の「安葬（안장）」は、文字通り「安らかに葬ること」という意味であり、埋葬・納骨堂への納骨・散骨葬など様式を問わずに使われる。適当な翻訳語が思い当たらないため、本論ではそのまま「安葬」と記述する。

国立 4.19 民主墓地・国立 3.15 民主墓地

- (1) 4.19 革命²死亡者
- (2) 4.19 革命負傷者
- (3) 4.19 革命功労者

国立 5.18 民主墓地

- (1) 5.18 民主化運動³死亡者
- (2) 5.18 民主化運動負傷者
- (3) 5.18 民主化運動犠牲者

国立永川・任実・利川護国院

- (1) 戦没・殉職軍警、戦・公傷軍警、武功受勲者
- (2) 参戦有功者
- (3) 軍に 10 年以上服務した長期服務除隊軍人⁴

以上を簡単にまとめるならば、国軍墓地に由来する顕忠院は、そうした背景を色濃く残しながら、国家元首や要人、警察官など公務員、また大韓民国成立以前に独立運動に従事した殉国先烈・愛国志士なども安葬対象者として受け入れている。また護国院は、ソウル・大田の両顕忠院の将来的な満場を見越して、軍警関係者を対象に「顕忠院の地方分院」といった位置づけで開かれたものである。そして民主墓地は、1960 年に李承晩大統領を退陣に追い込んだ「4.19 革命」（その先駆けとして馬山で起きた「3.15 義拳」をも含む）の関係者と、1980 年の全斗煥らいわゆる「新軍部」によるクーデタに抗議した光州市民が国軍部隊によって激しく弾圧された「5.18 民主化運動（光州事件）」の関係者を、それぞれ対象としている。戦時中もしくは民主化運動当時の戦死者・死亡者だけでなく、生還・除隊後に亡くなった者や運動参加者と認定されて後に亡くなった者なども対象であるため、現在でもなお安葬対象者は亡くなり続けており、安葬者の数が今も日々増え続けている点には、注意を促しておきたい。

国立墓地の地域的配置

次に、上記の安葬対象者が安葬される国立墓地の地域的配置について確認しておこう。

2010 年現在、全国 8 ヲ所に展開する国立墓地の所在地を地図上に表すと、図 1 の通りになる。顕忠院が 2 ヲ所（ソウル特別市銅雀区・大田広域市儒城区）、護国院が 3 ヲ所（慶尚北道永川市・全羅北道任実郡・京畿道利川市）、国立民主墓地が 3 ヲ所（ソウル特別市江北区・光州広域市北区・慶尚南道馬山市）である。

この中で最も早くに設置されたのが、1955 年に「国軍墓地」として創設されたソウル顕忠院⁵であり、安葬対象者の増加に伴って大田顕忠院が 1985 年に設置された。その後、さらに増加する安葬需要に応えるため、2001 年に永川護国院、2002 年に任実護国院が相次いで開院し（2006 年になってともに国立墓地への昇格を果たした）、2008 年には首都圏である京畿道にも利川護国院が竣工した。

なお、民主墓地についても付言しておくなら、ソウルの 4.19 墓地は 1963 年、馬山の 3.15 義拳関連者の墓地は 1968 年には既に成立していた。このうち 4.19 墓地は金泳三政権下の 1995 年に国立化され、2006 年に「国立 4.19

2 1960 年、全国に展開して李承晩大統領を退陣に追い込んだ学生・市民デモのことを指す。警察によるデモ隊への発砲などで、首都ソウルをはじめとする各地で多くの死傷者を出した。

3 朴正熙大統領暗殺後の 1980 年、全斗煥ら「新軍部」勢力の権力掌握に抗議して全羅南道光州市で起こされた抗議運動——いわゆる「光州事件」——を指す。鎮圧のために軍部隊が光州市内へ投入され、学生・市民との間で多数の死傷者を出した。

4 <http://www.ncms.go.kr/requirement.jsp>（最終確認：2010.7.21）

なお、「国立墓地安葬対象から除外される者」として、以下の 5 項目が挙げられている。

- (1) 大韓民国国籍喪失者（殉国先烈・愛国志士と在日学徒義勇軍人を除く）
- (2) 服務中に自殺・逃亡・脱営中の死亡者、変死者、受刑中の死亡者、死刑を執行された者
- (3) 国家有功者の法適用除外対象者（受刑の事実自体が国家有功者としての功績とされる場合を除く）
- (4) 弾劾もしくは懲戒処分によって罷免または解任された者
- (5) 安葬対象審議委員会から国立墓地の榮譽性を損なうと認定された者

5 1965 年に「国立墓地」へと昇格し、1996 年に「国立顕忠院」、2006 年に「国立ソウル顕忠院」と改称された。

民主墓地」と改称された。そして1994年に光州事件の犠牲者が埋葬されていた共同墓地の隣接地で建設が開始された5.18墓地は、1997年に竣工した。馬山と光州の両墓地は2002年にともに国立化し、やはり2006年にそれぞれ「国立3.15民主墓地」「国立5.18民主墓地」と改称された。

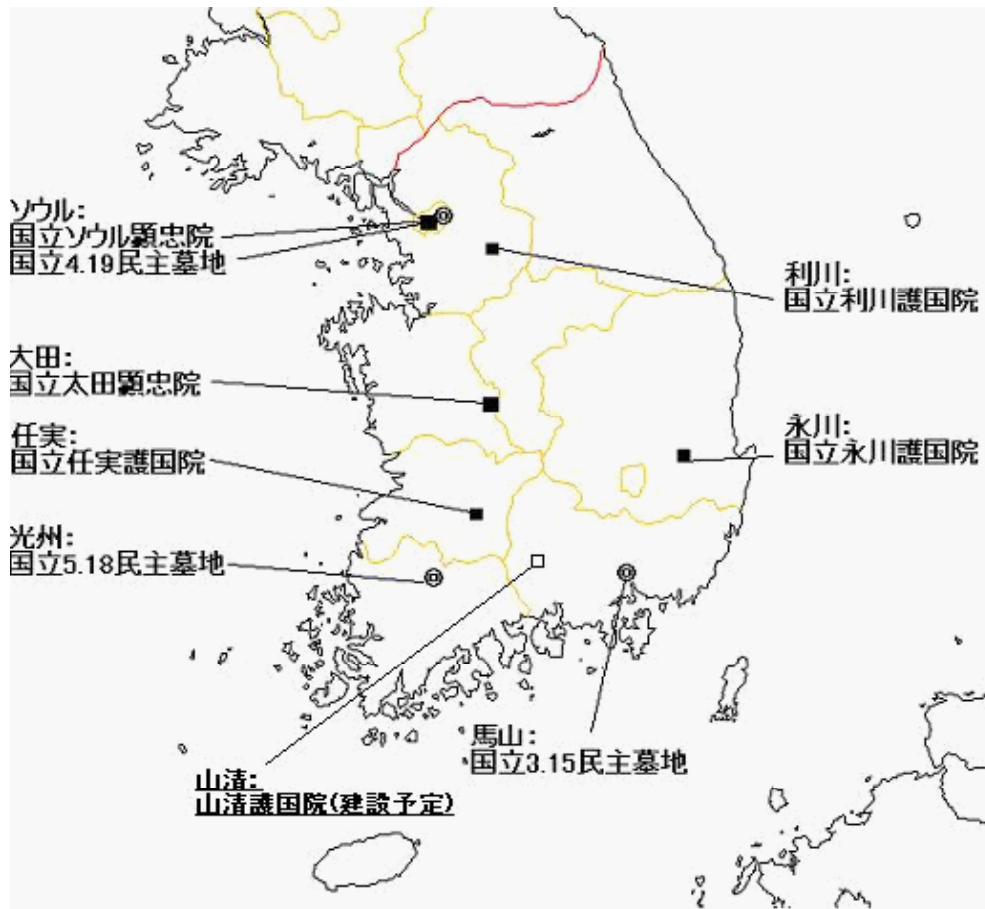


図1 韓国国立墓地の地域配置 (2010年現在)

以上の基本情報を前提として、改めて国立墓地の地域配置を眺めてみると、印象的なのは地域的バランスへの配慮の跡である。特に慶尚道と全羅道との間では、護国院についても、民主墓地についても、設置および国立墓地昇格については、ほぼ同時に実現している。

国立墓地の問題点―増設への圧力

このように韓国全土に展開する国立墓地であるが、現在大きな課題となっているのが、「安葬者の増加に伴う収容能力の不足」という問題である。

韓国の国立墓地は、埋葬にせよ、納骨堂にせよ、安葬は個人単位（2人用墓域に配偶者とともに安葬される場合もある）で行なわれる。そしてその対象者には、戦時の戦死者だけでなく、参戦して無事帰還した後に亡くなった者や服務中に殉職・死亡した者、独立運動家、長期服務除隊軍人なども含まれるため、亡くなった後に国立墓地に葬られる者は今なお少なくない。結果として、国立墓地の安葬者は年々増え続け、収容能力の拡大が常に課題となる、という事態が生み出されることになる⁶。

『国防日報』は、このような状況について、2008年の時点で次のように整理している。全国に展開している国立墓地は、現状で完成状態なのではなく、さらなる増設が急務の課題とされているのである。

6 また、国立墓地の安葬対象者でありながら、他の墓地に埋葬されていた者が、後に国立墓地へ「移葬（改葬）」されるケースもある。

現在、わが国には、ソウル・大田に顕忠院、全羅北道任実・慶尚北道永川・京畿道利川に護国院、民主墓地3ヵ所（4.19、3.15、5.18）の計8ヵ所の国立墓地がある。

国家有功者等の国立墓地の安葬対象者は50万人で、ほとんど70歳以上である。一方、国立墓地の収容能力は7万2000基に過ぎない。昨年1年間で9229名が安葬されたので、算術的に計算しても7年後には飽和状態である。

これにしたがって、国立墓地造成を急いでいる。2011年に南部圏（慶尚南道山清）に完工することを目標として推進し、大田・忠清南道地域についても今年、敷地造成の妥当性調査の予算を反映した。済州圏も検討中である。⁷

ここで、慶尚南道への国立墓地増設が第一の課題に挙げられているのは偶然ではない。慶尚道在住の戦没・殉職軍警や国家有功者を安葬対象とする永川護国院は、2001年開院にもかかわらず、2008年9月には早くも埋葬墓域が満場（19,864基）を迎えている。現在は2008年に竣工した「忠霊堂」という納骨堂に安葬者を受け入れているが、その収容能力は6000基にとどまり、こちらもまた早期の満場が予想されているのである。また、慶尚南道・全羅南道・済州道といったいわゆる「南部圏」には護国院がなく、（国立民主墓地を除けば）既存の国立墓地からも遠く離れているという現状も、あわせて指摘できよう。

そこで新たに設置が目指されているのが、慶尚南道の「山清護国院」である（図1参照）。ただ、この護国院新設については、当初2005年に着工が予定されていたにもかかわらず、2010年現在、いまだに着工前の段階にとどまっているという状態である。

安葬対象者の需要を満たすためにはその建設が急務であるはずの「山清護国院」の建設は、何故にそのように難航しているのか。以下、章を改めて、具体的にその経緯を見ていくことにする。

2. 「山清護国院」をめぐる



図2 慶尚南道地図

「山清護国院」の建設予定地である慶尚南道山清郡（人口約3万5000人）は、道西部の中心都市である古都・晋州市（人口約34万人）の北に接している。晋州を流れる南江（洛東江の支流）の上流にある人工湖・晋陽湖に流れ込む鏡湖江や徳川江沿いに広がる山清は、韓国で最初の国立公園に指定された名勝・智異山の入り口に位置することでも知られている（図2参照）。

2005年：問題の発端

2010年現在、軍警関係者を安葬対象とする国立墓地として、永川・任実・利川に次ぐ新たな護国院として建設が目指されている山清護国院の話題がマスメディアによって報道されたのは、2005年2月以降のことである。

山清郡に隣接する慶尚南道西部の中心都市・晋州を拠点とする地方紙『慶南日報』の2005年2月2日付記事「山清護国公園墓地摩擦予告」が、その最初期の報道になる。

7 『『殉国先烈・護国英霊の血と汗を忘れてはならない』—護国報勲の月インタビュー：金揚国家報勲処長』（『国防日報』オンライン版2008年6月3日付記事）

慶南・蔚山在郷軍人会において今年7月初めに着工の計画を控えている山清郡丹城面南沙里一帯の護国勇士公園墓地の設置事業が、住民の反対によって支障が予想されている。

2日の公園墓地設置反対推進委員会（委員長パクウサム）は、今月4日に首相室と道知事・郡守・議長・国家報勲処・ハンナラ党・ウリ党などに住民が署名した嘆願書を送付することとし、〔旧〕正月以降、晋州の環境連合団体と連携して大規模なデモを計画していることを明らかにした。

山清郡丹城面南沙里山49-1一帯の敷地17万坪余に総事業費280億ウォンを投入し、2007年末に竣工予定の南部圏国立護国院は5万基規模の納骨堂と顕忠館、野外展示場、体育施設などが建てられ、6.25戦争・ベトナム戦争などの戦闘に参加した軍人・警察とその配偶者をはじめ、10年以上の軍服務者などが無料で安葬されることになる。

一方、在郷軍人会の関係者は「国立顕忠院の場合、安葬の条件が20年以上の軍服務者と武功勲章授与者・愛国志士などに制限されており、これまで多くの長期軍服務者や参戦勇士たちが恩恵を受けられずにいた」とし、「護国院が造成された暁には、このような問題が解決されるだろう」述べた。⁸

馬山に本社を置く『慶南道民日報』もまた、2月4日に「国立護国院納骨施設はだめだ」と題した記事を掲げ、地元住民の護国院建設に反対する理由も含めて、この問題を報道している。

国家報勲処と在郷軍人会が山清郡丹城面南沙里一帯に光州・全南・慶南・釜山・蔚山と済州島地域の参戦軍警とその配偶者らのための南部圏国立護国院納骨施設造成を推進するや、該当地域の住民が強く反発している。

特に、これらの人々は、住民に知らされず秘密裏に事業が推進されてきたとして、今後住民の同意なしに事業の推進を強行すれば、〔2003年、全羅北道扶安郡蛸島で中低レベル放射性廃棄物処理場の建設計画に反対する激しいデモが展開された〕「扶安事態」に劣らない惨事がありうるだろうと警告して注目されている。

（中略）

これに対し、反対の推進委員会と住民たちは、「国立護国院が建てられる地域は、国道20号線・智異山の入り口として重要文化財と観光資源がベルトを成している地域であることはもちろん、西部慶南の乳腺である南江上水源保護区であり、近隣の南沙・吉里・官亭・召南・道坪など5つの村の住民たちがこの場所で〔河川の〕流水を生活用水として使用している」とし、設置反対の意思を明らかにしている。

これらの人々は、「特に南沙の村は、伝統韓屋村としての地域特化事業として伝統テーマ村を造成し、「イエダム村」という名前で全国に知られ、体験探訪客の訪問が続いているのに、大規模な公園墓地を造成するということは不当千万だ」と声を上げている。

したがって、これらの人々は「いくら国策事業であっても、国がすることであればあるだけ、妥当性と合理性に立脚しなければならず、住民たちの同意なく秘密裏に事業を強行しようとするれば、住民たちが決して目をつぶって生存権を放棄することはないだろう」と強調した。⁹

『慶南道民日報』はさらに、2月25日に山清農協丹城支所前で300名余が参加して行なわれた、公園墓地反対推進委員会による住民集会を、翌26日に速報で伝えている¹⁰。この記事によって、山清郡丹城面南沙里一帯への護国院建設計画に対する住民の反発に端を発する具体的抗議行動を、この時点において確認することができる。

2007年：問題の再燃

この山清護国院建設問題はその後もくすぶり続け、2007年に再燃することになる。きっかけは、在郷軍人会によって山清郡に提出された開発行爲の許可申請であった。

8 「山清護国公園墓地摩擦予告」（『慶南日報』オンライン版2005年2月2日付記事）。なお、〔 〕内は引用者による補足。以下同じ。
9 『国立護国院納骨施設はだめだ』—山清丹城一帯、参戦軍警のための施設推進（『慶南道民日報』オンライン版2005年2月4日付記事）
10 「山清郡丹城面住民、納骨施設反対集会—『安保団体の設置歓迎、とんでもない』（『慶南道民日報』オンライン版2005年2月26日付記事）



写真 1 山清郡庁前反対集会
(『慶南日報』2007 年 4 月 4 日付記事より)

山清公園墓地反対闘争委員会（委員長クォンスンジク）は 3 日午前 10 時、山清郡庁前で集会を開き、在郷軍人会が丹城面南沙地区で推進している山清公園墓地（山清護国院）建設に反対を訴えた。

集会に参加した韓農連〔韓国農業経営人連合会〕など 14 団体、約 500 人の会員は、「山清水辺区域と晋陽湖上水源のすぐ上 2km 地点に 17 万坪 5 万基以上の公園墓地ができたとすれば、水質汚染は火を見るより明らかなだ」とし、「水辺区域と韓米 FTA とで生存権

を脅かされている今、清浄山清の農産物を守るため、最後まで戦う」と主張した。

在郷軍人会は、先月 2 日、山清の智異山の玄関口である丹城面南沙地区 17 万坪の山清公園墓地（山清護国院）の建設を骨子とする開発行為の申請を山清郡に提出した。

これにより、山清郡議会・丹城面里長団など 27 人は先月 29 日、慶尚北道永川市にある護国公園墓地を訪問し、既存施設の実態を調査した。

調査団は、「昨年 1 月 30 日に改装された 11 万 500 坪に 5 万 2000 基という膨大な〔収容規模を擁する〕永川護国墓地は、わずか 1 年で 65% 以上埋め尽くされたことを確認した」とし、「周辺河川がゴミ捨て場になっており、護国院排水口からは腐敗した水が流出するなど、村の住民が苦しんでいるのを目撃したからには、郡内の施設建設を座視することはできない」と明らかにした。

山清公園墓地反対闘争委は、「山清は清浄イメージを通じて高品質な農産物を開発してきたが、これに反する施設の造成は、郡民の生存に直結する」と述べ、反対の立場を明らかにした。

これに先立って、洛東江環境庁は、山清公園墓地の敷地と同じような場所にあった畜協の畜産施設を、水辺区域管理区域内になくとも汚染源であるという理由で買収することを決めており、山清郡の対応の帰趨が注目される。¹¹

山清護国院を推進する在郷軍人会は、2004 年から用地買収を開始しており、この時点で既に大部分の買収を完了していた。そして上の記事に見える開発申請を受けた山清郡庁は 5 月 11 日、護国院建設の許可手続きである山清郡管理計画の変更の供覧公告を行なった。

これに強く反発した地域住民は 15 日、山清郡庁前に再び集結し、下記の記事に見えるような「激烈な反対集会」を開いた。

国家報勲処と在郷軍人会が山清郡丹城面南沙里一帯に推進している「国立山清護国院」を山清郡が承認すると見込まれている中、山清公園墓地反対闘争委員会（委員長パクウサム）が 15 日午前 10 時から山清郡庁前のハンマウム（一心）公園で、700 人余りの住民が出席した中、国立山清護国院造成に反対する集会を開いた。

この日の集会で、これらの人々は「水辺区域および晋陽湖上水源のすぐ上 2km 地点である山清郡丹城面南沙里山 49-1 番地一帯の 17 万坪の中に 5 万基以上の公園墓地が造成されれば、水質汚染の問題が発生する恐れがある」とし、「水辺区域へ制約を受け、農家の生活の危機に瀕しているのに、山清郡が護国院を許可する手続きである山清郡管理計画（道路・納骨施設）の決定（変更）立案に伴う供覧公告をしており、これに住民

11 『『清浄山清』の脅威 公園墓地建立反対一闘争委「汚染、火を見るより明らかな」郡庁前集会』（『慶南日報』オンライン版 2007 年 4 月 4 日付記事）



写真2 山清郡庁前「山清郡農産物火刑式」
(『慶南道民日報』2007年5月16日付記事より)

が憤激してこの場に集まったのだ」と強調した。

彼らはまた、「在郷軍人会は、約17万坪の土地を購入しておきながら、納骨施設造成事業の環境影響評価を避けるために、21万1225㎡(約6万6930坪)のみを郡に納骨施設として許可申請した」とし、「国家的に推進されている大事業のこのような非良心的な方法で行なっているのに対し、住民たちは憤慨している」と主張した。

(中略)

イジェグン郡守は回答において「山清を発展させること以外は頭の中には何もない」とし、「住民の代表者を選んで郡守との対話をしよう」として席を立った。

これに激怒した住民がイガンドゥ国会議員とバクセジク在郷軍人会長、そして丹城面で生産されている環境農産物を燃やす火刑式の後、イジェグン郡守の確実な答弁を要求して郡庁に入り、これを阻止する警察ともみ合いを繰り広げた。

続いて闘争委は代表者を構成して郡守室を抗議訪問することとし、郡守の意を明らかにするように要求した。この席でイ郡守は、「土地を購入したのは就任前のことなので、今から解決策を見つけなければならない」と述べ、「今すぐに郡守は動くことができず、回答しようとして答えが出てくるわけではないので、今日はこの辺で余地を残して帰るのならば、よくよく考えてみるつもりだ」と語った。

続いて住民たちが「供覧公告を撤回することがあるのか」という質問に、イ郡守は「供覧公告には大きな意味はなく、丹城面住民の意思に従うつもりだ」と締めくくった。

これを受けて住民たちは、昼食を食べた後、再び郡庁に押しかけ、郡守は住民の意思に従えと通告した後、自主解散した。¹²

かくして、最初の報道から2年が過ぎた2007年になって、ようやく着工にこぎつけるかと思われた山清護国院の造成計画は、地元住民の激しい反対と、それに押された山清郡当局の態度の曖昧化によって、なお混迷を深めていくことになる。

さて、護国院建設促進の旗を振る在郷軍人会は、こうした住民の反対に直面してどのように反論していたのだろうか。この「山清護国院問題」について、『慶南日報』は2007年8月6日・7日・9日の3回にわたって「葛藤の溝深まる『山清護国院』」と題した特集記事を掲載し、その解決策を模索しようとした。その中で8月9日付の記事が、彼ら在郷軍人会の立場を伝えている。長い引用が続くことになるが、当事者の立場と主張とを伝える資料として敢えて引用する。

山清公園墓地(山清護国院)の建設に地域住民の反発が続いている中、事業の主催側である在郷軍人会が立場表明に乗り出した。在郷軍人会のパクガプチャン顕忠事業団副団長は、本紙との電話で「汚廃水による環境の汚名は、反対の住民たちによって誇張された側面があり、交通問題の解決は、山清郡と代替道路の建設を推進中であって、近いうちに結ばれるはずだ」と明らかにして、護国院造成を既定事実化した。

12 国立山清護国院造成『大騒ぎ』—農民「水質が汚染されれば生存の脅威だ」激烈な反対集会(『慶南道民日報』オンライン版2007年5月16日付記事)

パク副団長は特に、既存の建設敷地を既存の 70 万㎡から 22 万㎡に縮小しながらも、土地利用計画図・施設配置図のような既存の文書はそのまま使用したのは、環境影響評価などを受けないための便法だという疑惑について、「当初、山清護国院建立に必要な面積の傾斜度や緑地、遊休地などを考慮して 40% 程度の未開発空間を設けただけだ」と釈明した。

これに、山清郡の関係者も「護国院設立は協議中であって、道路・環境・イメージ毀損の問題などさまざまな角度から補完点を模索している」と明かし、「来年 1 月 1 日、〔当時、造成工事がすでに進行中であった〕京畿道・利川護国院のように、1 年間の補完期間が過ぎれば、予定通りに推進される見込みだ」と述べた。

◇墓地ではなく納骨堂、環境汚染はない＝在郷軍人会側は、独自の汚廃水処理施設を作り、0.5ppm 水準（1 級水）の水質を維持するようにする法規定を必ず守って「親環境的護国院」を作ることと断言している。

特にパクテス山清護国院事業団長は、「去る 2001 年に開放された慶北・永川護国院とは異なり、遺骨を埋葬するのではなく、納骨塔に遺骨を保管する「地上塔安置型」であるため、農業散布による環境汚染はないと見なければならないだろう」と説明した。

パク団長はまた、「納骨堂の安置に際しては、窒素充填式の最新の工法で設計し、60% 以上が自然の状態で残る敷地は「護国の場」「テーマ公園」として活用し、自然と調和した一般公園のような護国院を作るつもりだ」と付け加えた。

◇交通難解消の代替道路建設＝在郷軍人会側はすでに、既存の 2 車線〔道路〕による混雑を勘案し、南沙里から鏡湖江側の道坪里までの道路を通すことで山清郡と協議し、山清郡側は建設交通部に関連資料を提出した状態だと伝えた。

これとともに、一部の 2 車線路で起こるボトルネック現象を最小限に抑えるため、他の道を通す計画を釜山国土管理庁とも協議中だと発表した。山清郡の関係者も「可能性のある交通機関の問題を多角的に調査しており、効率的な道路工事を計画中である」と述べた。

しかし丹城面地域住民は、今でも行楽シーズンともなれば智異山を訪れる車が一度に集中し〔ており〕、頻繁に起きる交通事故はもちろん、耕運機などの農業機械の運行を考慮に入れない場合には、護国院が入ってくればこの一帯は完全に交通地獄になるだろうと反発している。

◇清浄地域イメージの毀損は理屈に合わない＝在郷軍人会側は、山清のイメージ毀損の問題に対する見方も変えてもらえるだろうと訴えた。在郷軍人会の関係者は「山清郡の愛国精神と気性は、山清郡のあちこちに残っている抗日遺跡・記念塔などの顕忠施設物で容易に訪ねることができ、国立山清護国院はこのような山清を護国の聖地にしてくれる存在として、住民たちには理解してほしい」と述べた。

山清郡のある関係者も「国のために命を捧げた護国英霊を「鬼神」としてだけ見るのは誤りだ」と指摘し、愛国的な決断をもって山清郡の名所にしていくことができるよう、知恵を絞ってほしい」と語った。

一方で山清郡は、護国院誘致について、毎年、慶尚北道の永川・全羅北道の任実に続く 3 番目の護国院として京畿道利川市に利川護国院が開院し、当初は 2007 年竣工と予定されていたが遅々として建設計画が進まない山清護国院が、国家報勲処の報勲政策の上でも懸案として浮上してくる。¹³

もともと、こうした推進側の論理が地元の反対住民を説得することはなく、この特集記事の後に続く報道でも、建設に対する賛成・反対の議論は完全に平行線をたどることになる¹⁴。

そのような状態の中、2008 年 4 月には、慶尚北道の永川・全羅北道の任実に続く 3 番目の護国院として京畿道利川市に利川護国院が開院し、当初は 2007 年竣工と予定されていたが遅々として建設計画が進まない山清護国院が、国家報勲処の報勲政策の上でも懸案として浮上してくる。

2009 年：山清郡での決定案否決、慶尚南道での否決取消

けれどもその後も、山清護国院建設に向けた歩みはいっこうにはかどらない。2009 年 4 月には山清郡議会が、

13 「葛藤の溝深まる『山清護国院』〈下〉—在郷軍人会・山清郡の立場」（『慶南日報』オンライン版 2007 年 8 月 9 日付記事）

14 例えば、「山清護国院造成、賛成・反対の論難」（『慶南日報』オンライン版 2007 年 8 月 20 日付記事）や、「山清護国院をめぐる賛成・反対の葛藤」（KONASnet 2007 年 8 月 20 日付記事）など参照。

護国院造成に関する行政手続として提出された管理計画決定案の意見聴取の件について、留保とすることを決めた。その際、「審査の結果、在郷軍人会が丹城面南沙里一円に推進する国立山清護国院（道路・納骨施設）敷地の周辺住民の生活の不便と予想されるいくつかの問題点を考慮し、交通・環境保全計画、住民支援などについての賛否の世論を再度収斂することが望ましい」という多数意見が議会では出されている¹⁵。そしてこの留保決定を受けて開催されることになった住民懇談会は、建設推進側・反対側が相互に同席を拒否して両派個別に開催された¹⁶。「世論の収斂」への展望は開ける気配すらいっこうに見えず、かえって双方の立場の人々による山清郡庁前集会がそれぞれに相次いで開催される¹⁷などして、混迷の度はさらに深まっていくことになる。

このように騒然とした状況の中、郡の計画委員会は7月30日、山清護国院建立に関連する決定案を委員の反対多数によって否決した。4年を費やしてきた山清護国院の建設は、この段階で山清郡において明確にストップがかけられたのである。

国立山清護国院の建立と関連して、納骨施設決定のための山清郡計画委員会の審議で〔決定案が〕否決された。山清郡は30日午前、郡庁小会議室で郡計画委員23名中18名が出席した中、国立山清護国院の建立と関連して、納骨施設決定のための山清郡計画委員会の審議をした。この日、審議に参加した計画委員が無記名で投票した結果、反対16票、賛成論2票で否決され、4年余の間引き延ばされてきた国立山清護国院の建設が、結局は行政審判へと行くことになった。

計画委員は否決条件で、△住民の反対△意見収斂不足△敷地購入時に住民との協議がされていない△護国院造成後、交通の不便と清浄イメージの毀損で農産物の販売不振が予想される△反対住民の権利侵害、などを提示した。

これに対し、在郷軍人会の関係者は「4年余の間準備してきたが、郡の計画委員会の審議で否決されて残念であり、否決過程に疑いを抱かせる」とし、「すぐに行政審判を申請する計画だ」と明らかにした。

国立山清護国院建立反対闘争委員会は、「結果を謙虚に受けとめる。このような決定は反闘争の勝利ではなく、山清郡民全体の勝利だ」とし、「今後、住民たちが生業を放棄してまで反対闘争をすることがないよう、郡から〔事態の収拾に〕乗り出してほしい」と述べた。

これに対し、山清郡の関係者は「軍の計画委員会の決定で、この件は終わりにしたい」とし、「退役軍人会と報勲処で、行政審判などの行政行為を行なうのであれば、それに応じて対応する」と明らかにした。¹⁸

上記の記事にあるとおり、山清護国院の建設推進の動きはここで挫折してしまっただけではない。在郷軍人会は山清郡の決定を慶尚南道の行政審判へ付し、計画委員会の審議否決取消を請求した。これを受けた慶尚南道行政審判委員会は9月23日、山清郡による否決処分の取消を決定したのである。

在郷軍人会が、住民の反対で霧散の危機に瀕していた山清郡の納骨施設等公園墓地造成事業を再開できることになった。

しかし、反対住民は、慶尚南道の行政審判への不満を表示し、決死闘争意思を明らかにしており、論難は継続されるものと見られる。

慶尚南道行政審判委員会は23日午後、在郷軍人会が山清郡守を相手に出した護国院建立〔に関する〕山清

15 「山清護国院造成、遅延不可避―郡議会、意見聴取の件『世論再収斂が望ましい』留保」（『慶尚道民日報』オンライン版2009年4月2日付記事）

16 「山清護国院造成、葛藤深化―『半分の懇談会』に闘争委の反発激しく、賛成側『もう延ばせない、行政は積極的に進めよ』（『慶尚道民日報』オンライン版2009年5月19日付記事）、『山清護国院、地域発展に百害無益』―反対闘争委、住民懇談会で『清浄親環境イメージを傷つける』（『慶尚道民日報』オンライン版2009年5月20日付記事）、『山清護国院住民懇談会、また『半分』の危機―山清郡、賛否双方の意見収斂のために12日再推進、賛成側『前回の懇談会で意思は伝えた』不参加を通告』（『慶尚道民日報』オンライン版2009年6月10日付記事）、『山清護国院意見収斂、二度目の討論会も『半分』―反対側住民のみ参席…『環境汚染・交通大乱』反対』（『慶尚道民日報』オンライン版2009年6月10日付記事）など参照。

17 山清農民団体、護国公園墓地反対集会」（『慶尚日報』オンライン版2009年6月30日付記事）、『国立山清護国院建立を督促―6.25参戦有功者会など報勲団体、集会を開催』（『慶尚日報』オンライン版2009年7月13日付記事）など参照。

18 「国立山清護国院建立、否決―審議委『住民反対・清浄イメージ毀損』…在郷軍人会『行政審判申請』（『慶尚道民日報』オンライン版2009年7月31日付記事）

郡計画委員会の審議否決取り消し請求について、「否決処分取り消し決定」を下した。

〔慶尚南〕道法務担当官室の関係者は、今回の決定について「国策事業であり、在郷軍人会が4～5年の間、手続きを進めているのと同時に、感情的な問題以外には、水質や環境問題で事業を差し戻すだけの重大な事情はなかった」とし、「今後、実施計画承認手続きの過程において問題を補完することができると委員会が判断した」と説明した。

（中略）

山清護国院反対闘争委員会の関係者は「在郷軍人会が事業を撤回し、別の場所を物色することが正道であるが、数限りない不合理を抱えるこの場所で無理に事を進めようとする行政審判を要請して、道政発展に混乱を来した」とし、「郡計画委員会否決処分取り消しの決定が出て心配ではあるが、より決死の決意で戦っていく」と述べた。¹⁹

慶尚南道行政審判委員会のこの決定を受けて、パクセファン在郷軍人会会長は同月28日、『国防日報』紙上のインタビューにおいて、山清護国院の認可を受け、忠清圏に続き、済州道・全羅南道・江原道にも護国院建設を推進していきたいという意向を示した²⁰。そして国家報勲処もまた、2010年度の業務報告において、山清護国院の早期建設推進の方針を示したのである²¹。

2010年：山清護国院造成は本格化するのか

かくして、2005年に問題化して以来、慶尚南道山清郡において長らく懸案であり続けてきた「山清護国院」問題は、2009年になって行政手続的には造成推進の方針ということでいちおうの結論が出た。

とは言え、過去数年にわたって対立してきた人々が妥結点を見出したわけではないし、建設を推進する在郷軍人会や国家報勲処が地元住民の説得に成功したわけでもない。早期着工を強行すれば、地元住民による実力阻止もなお予想されるため、在郷軍人会の側も簡単には事業を推進できない状況に追い込まれていると言える。

筆者が今年（2010年）3月に現地（山清郡丹城面南沙里）を訪れた際にも、護国院の造成工事が進んでいることをうかがわせるものは何もなく、在郷軍人会や国家報勲処の意向とは裏腹に、事業が順調にはかどっているわけでは決していない。

こうした状況に関するメディア報道について付言しておく、2010年に入って山清護国院関連の報道記事は明らかに減っており、『慶南日報』『慶南道民日報』にもなかなか記事は見られない。

そこでここでは、数少ない例の一つとして、2010年1月16日付で『聯合ニュース』が配信した記事を引用しておく。

〔在郷軍人会〕南部圏事業団は、現在の建築許可・森林毀損許可・農地転用許可・災害の影響評価・環境省の検討などを受けるといった手続きを経た後、早ければ来月末に実施計画の許認可書を提出する計画だ。

工事期間は少なくとも30ヶ月程度かかるものと予想され、2012年の末に完成するとみている。

しかし、住民の反対は変わっておらず、着工は順調ではないものと予想される。

反対闘争委パクウクォン事務局長は、「在郷軍人会などから住民たちと1回の協議〔の呼びかけ〕さえもなく、一方的に推進されてきたし、住民被害が予想される山清護国院建立事業を許可することはできない相談」とし、「物理的な方法を動員して、最後まで反対闘争を繰り広げる」と話した。

一方、国家報勲処は昨年、今年の業務報告で、「安葬の需要と近接性を考慮して、圏域別の国立護国院の造成を推進しており、南部圏の山清護国院を早期に建立する」とし、実際に事業を奨励することが明らかにされており、両サイドの摩擦さえ懸念される。

行政審判で敗訴し、法的に〔護国院建設を〕食い止めることはできないが、住民が引き続き反対すれば、許

19 山清護国院建立再開―慶尚南道行政審判委、郡の審議否決『取り消し』決定…反対委、決死闘争方針（『慶南道民日報』オンライン版2009年9月24日付記事）

20 「若く力強い未来志向的な先進郷軍建設」（『国防日報』オンライン版2009年9月28日付記事）

21 第1章参照。



写真3 山清護国院建設予定地に掲げられた横断幕
「決死反対 山清護国院（公園墓地）設置反対」
「公園墓地が建っていいことがあるなら、山清郡に来はしない！！」

しかし、何よりも、地域住民と国のために献身した国家有功者を社会が尊重して扱っているというコンセンサスを形成してこそ、4年間漂流してきた山清護国院をきちんと建てることのできる、というのが周囲の人たちの指摘だ。²²

このように、護国院建設の方針は変わらないながらも、その推進に当たっては極めて慎重にならざるを得ないというのが、山清護国院を取り巻く現状である。今後、この事業がどのように進展するかについては予断を許さないが、いずれにせよなお紆余曲折があるものと予想される。

3. 山清護国院を通して見る韓国国家報勲政策の現状

ここまで、韓国の国家報勲処において進められている報勲政策について、その管轄事業の一つとしての国立墓地の現況を概観し、その中で新規造成が目指されながら長年にわたって着工が延び延びになっている「山清護国院」をめぐる経緯をやや詳しく見てきた。ここから我々は、どのような含意を引き出すことができるだろうか。そもそも、何故に「山清護国院」は、ここまでの困難に直面することになったのであろうか。

既存の施設に山清護国院を含めた9カ所の国立墓地のうち、「地元住民の反対運動が明らかに認められるところ」として山清護国院の他に指摘できるのは、慶尚北道永川市の永川護国院のみである。山清の住民も視察に訪れた永川護国院は、埋葬墓域が満場となり、屋内型納骨堂もそう遠くない将来の満場が予想されている中で、納骨施設の増設が検討されており、この工事に対して地元住民が反対の意思を表明している。

永川護国院と山清護国院予定地に共通するのは、地元住民の居住生活圏に隣接しているという立地面である。設置年の古い顕忠院や設立の経緯が違ふ国立民主墓地を除いて護国院の中で比較すれば、任実郡や利川市の中でも隣接して暮らす人々が非常に少ない土地に立地している任実護国院や利川護国院との違いは、差し当たりは指摘可能な事実である。住民の生活圏との隣接度が高ければ高いほど、様々な問題が惹起される可能性は増すわけである。

ただし、そのこと自体が必ずしも建設の困難に直結するわけではない。ソウルの住宅地に隣接する国立4.19民主墓地や、馬山市内から見通せる高台に位置する国立3.15民主墓地にはそのような反対運動は見られない。また、周辺住民の生活圏との位置関係では山清とよく似ている慶尚北道居昌郡神院面の「居昌事件²³ 追慕公園」にも、設

²² 「4年間難航の山清護国院建立…今年着工されるか」（『聯合ニュース』オンライン版2010年1月16日付記事）

²³ 朝鮮戦争下の1951年2月、共産ゲリラ討伐の名目で韓国軍が居昌郡神院里の住民を無差別虐殺した事件。1996年にこの事件に関する特別法が制定され、「良民虐殺事件」としての追慕事業が開始された。



写真4 「ソウル追慕公園」完成予想図

立の経緯からは当然のことながら、その種の反対運動は見られない。

では、この山清護国院に対するものとよく似た反対運動が展開される事例として、何が挙げられるだろうか。

それは例えば、2010年2月25日付の下記の記事に見られる、次のようなケースである。

ソウル瑞草区院趾洞に建てられる火葬施設であるソウル追慕公園が、最初の鉄入れを行なった。

ソウル市は25日、院趾洞68番地一帯の17万1335㎡に、ソウル追慕公園や国立総合医療施設を建設する起工式を行なった。ソウル追慕公園は、嫌悪施設であるという理由で住民の反対に直面し、敷地選定後約9年の間、着工を持ち越してきた。

追慕公園が建つ敷地は、京釜高速道路・京畿道城南市寿井区と隣接している牛眠山の奥深くに位置して、一般人の目に触れないところだ。市はここに、2012年4月までに火葬炉11基を備えた火葬場（3万6453㎡）と家族公園（5万8336㎡）を建てることを目指しているが、期間を最大限に早めることにした。敷地の入り口には、総合医療施設を2014年末までに完成させ、地域住民の「反対」感情を最小限に抑えることにした。火葬場の敷地は、上空から見下ろしたときに一輪の花を形象化し、追慕の道に一輪の花を差し上げるという意味を込めた。

火葬場には、火葬での焼却により発生する騒音や煤煙、粉塵やダイオキシンなどの有害物質を除去し、無煙・無臭・無害となるような施工を行なう計画だと市は強調した。特に火葬炉は地下化し、太陽発電システム・地熱システムなどの再生エネルギーを装備して、炭素ゼロ化を実現することになる。

市は1998年、第2火葬場の建設計画を発表し、2001年院趾洞の敷地を選定して事業を推進したが、地域住民の反対と法的紛争によって「事業は」漂流した。しかし2007年、大法院で追慕施設の建設を許容する内容の確定判決が出され、翌年、国土海洋部との間で総合医療施設の立地の議論をまとめて、この日の着工に至った。

オセフン（呉世勲）市長は「ソウル市の最大の宿願事業の一つである追慕公園の建立事業がようやく結実を見ることになった」とし、「ソウル市民が、遠くに行かずに、ソウルで快適で敬虔な雰囲気の中で葬礼を受けることができるよう、工事に全力を傾けるつもりだ」と語った。²⁴

山清護国院とソウル追慕公園。その事業内容や推進主体は異なれど、地元住民の反対による困難に直面して建設が思うに任せない点について、両者はたいへんよく似た経緯をたどっている。火葬場のような施設がいわゆる「迷惑施設」として建設予定地の住民の反対に遭うという図式は、韓国に限らずしばしば見られる光景である。そのような住民感情は、「NIMBY (Not In My Back Yard)」などと表現されることもある。

しかし、国家報勲処による報勲事業の一環としての護国院建設が（火葬場やゴミ焼却場・畜産施設などと同様の）「迷惑施設」として人々に受け止められているという事態は、ナショナリズムの宣揚を目的とする報勲事業にとって、深刻なものであると言わざるを得ない。今後も護国院の建設を通じて、国民に向けた「報勲宣揚」を進めようとするのであれば、この事態の意味するところの理解は、避けられない問題となってくる。

24 「ソウル院趾洞火葬場、9年目の鉄入れ…2012年初稼働」（『フィナンシャルニュース』オンライン版2010年2月25日付記事）

一般的に言って「NIMBY」現象は、「どこかに必要ではあるが、そこにあることの必然性は乏しい」施設に対して、「そこにあることの不利益」を看取することによって生まれる。それを山清護国院の事例に当てはめれば、「護国院のない地域（また既存の護国院が満場になった地域）に護国院は必要ではあるが、それが山清にあることの必然性には乏しい。にもかかわらず、環境問題や交通問題・地域イメージの悪化といった不利益は懸念される」といったところであろう。仮に、環境問題や交通問題が技術的・経済的に解決されたとしても、地域イメージのような主観的問題を同様にして解決することは難しい。報勲政策を推進する側にとって何よりも問題なのが、護国院の存在が地域イメージの悪化につながるという主張、そしてそれが社会的に一定の説得力と影響力を持っているという事実である。在郷軍人会は、「護国の聖地」という最大限の表現を使って、山清郡丹城面の住民に護国院への理解を求めている。だが、それが住民への説得にはまったくつながらなかったという事実は、すでに見たとおりである。事業推進側には、それ以上にどのような説得の言葉が残っているだろうか。

問題の核心はおそらく、そこに眠る（ことになる）死者たちが、護国院の地元住民にとって「我々の死者」ではもはやなくなっている点にある。ベネディクト＝アンダーソンを引くまでもなく、ナショナリズムとは、一度も会ったこともない人々の間に「我々＝国民」という単位で集团的アイデンティティを形成しようという運動のことである。護国院に眠る死者、具体的には戦没・殉職軍警や参戦有功者などは、ナショナリズムの本来の文脈において、国民＝国家のために生命を投げ出したという意味で、「我々＝国民の死者」として（自らを含む）一人称複数で構成される共同体の範囲内に括りこまれるべき存在である。

したがって、「護国院の迷惑施設化」とは、そうしたナショナリズムの前提自身が問い直しを迫られるという事態に他ならない。そこにネーション自体の弱体化を見るかどうかはともかく、確かなことは、「彼ら」は「我々」から疎外され、もはやそこには含まれていないという、ナショナリズムにとっては「危機的」とも言える事実である²⁵。

もちろん、「この事態を規範的・倫理的に批判し、国民教化を通じてネーションとしての一体感の回復を目指す」という方向での問題解決は想定可能である。報勲政策の意義はそこにこそある、とも言えよう。だが、時間の経過によって生者と死者との代替わりが進むにつれて、護国院など国立墓地に眠る「国民＝国家の死者」と「生者＝国民」との距離感は、そのままであれば開く一方であることもまた事実である。こうした距離感に基づく「国立墓地の死者の疎外」の進行を食い止める術はあるのだろうか。

そこで、いささか異なる文脈から、川村邦光の靖国神社に関する指摘を参照してみたい。

明治末期、日露戦争の戦死者・戦病死者の合祀によって8万8000名を越える祭神を祀り、「国家的・国民的神社となり、隆盛を極めた」とされる靖国神社であるが、大正期に入って、「少なからず危機的な状況が訪れ」というのである²⁶。

その背景にあったと指摘されるのは、第一次世界大戦やシベリア出兵によって戦死者は出たものの、日露戦争に比べればその数は圧倒的に少なく、合祀祭が低調であったという事実である。国民国家の戦死者を祀る靖国神社は、「戦争だけが頼り」であり、だからこそ昭和に入り、日中間の全面戦争が始まると、状況はまたもや転換するのである。

日露戦争後、一九三八年の秋の臨時大祭から日中戦争（「支那事変」）での戦死者の合祀数は、ほぼ三十年ぶりに一万台を突破し、三九年春の臨時大祭では一万二百七十九柱であった。四四年春の臨時大祭には日中戦争と太平洋戦争（「大東亜戦争」）の合祀数が二万台を超え、四五年春の臨時大祭には一挙に四万台を超えるにいたっている。三八年の秋口から靖国神社境内ばかりでなく、全国津々浦々、異様な熱気に包まれていったようだ。靖国神社はおびただしい戦死者が出現することによって、息を吹き返したのである。²⁷

この川村の指摘する事実から示唆を得れば、「護国院の迷惑施設化」を食い止める可能性として一つ考えられるのは、新たな国民戦争の惹起である。国民国家を単位として戦われるその戦争において、国民＝国家のために生命

25 なお、韓国は徴兵制が敷かれているが、その点とこの「護国院の死者の疎外」とは矛盾しない。現役兵務中に死亡したり公傷を受けた者や武功受勲者を除けば、護国院の安葬対象となるのは10年以上の長期服務者（顕忠院の場合は20年以上）に限られるからである。

26 川村邦光「靖国神社と神社の近代」（川村邦光〔編著〕『戦死者の行方一語りと表象から』青弓社、2003年）130頁。

27 川村「靖国神社と神社の近代」135頁。

を投げ出した戦死者は、新たに文字通り「我々の死者」として括りこまれ、護国院をはじめとする国立墓地は、「息を吹き返す」ことになるだろう。

言うまでもなく、そうした可能性を望ましいものと筆者が考えているわけではない。だが、積極的にそのような選択肢を選ぶことを差し当たり考慮に外に置きつつ、その上でなお護国院設置を報勲宣揚事業の一環として位置づけて推進し、「より大きな大韓民国」を目指そうとするとき、そこにはどのような選択肢が想定しうるのであろうか。それこそが、福利厚生面も含めて展開される現代韓国の報勲政策が直面する課題の、少なくとも一つであると言えるだろう。

参照サイトURL

『国防日報』 オンライン版

<http://kookbang.dema.mil.kr/>

『慶南日報』 オンライン版

<http://www.gnnews.co.kr/>

『慶南道民日報』 オンライン版

<http://www.idomin.com/>

KONASnet (Korean National Security Net)

<http://www.konas.net/>

『聯合ニュース』 オンライン版

<http://www.yonhapnews.co.kr/>

『フィナンシャルニュース』 オンライン版

<http://www.fnnews.com/>

Lyon におけるショッピングセンターの社会的機能

藤岡 達磨（人文学研究科博士後期課程）
派遣先：リヨン高等師範学校（フランス）

1. Lyon における活動内容

昨年 11 月 30 日に Lyon に移ってから、生活環境の整備とリヨンでの研究を具体化することを行っていった。前者は Lyon での派遣先である ENS LSH(Ecole normale superieure Lettres et sciences humines) の指導教官、Yves Winkin 教授からリヨンでの研究についてより具体的な方策についての問題提起とアドバイスがあり、本来考えていた理論寄りの研究計画を「なぜ Lyon でこの研究を行うのか」という焦点に合わせてシフトさせることを目指して行われた。確かに、当初想定していた研究計画はどちらと言え「なぜフランスでこの研究を行うのか」という点に力点が置かれ、Lyon という特定の都市であり空間に根ざした研究というわけではなかった。この問題提起を受け、油井教授の的確な指導を受けつつ研究計画の新たな見直しを行っていった。後者について、住居は大学内の寮である Residence J.BONNAMOUR に入居することができた。幸いルームメートに英語が分かる人が多いため、こちらでの生活情報の入手が比較的容易にでき、生活必需品の入手も滞りなく進んでいる。また在留届の提出やフランス移民局への必要書類の提出などの事務処理も徐々に進めていった。生活環境に関する問題点としては、この ENS LSH は基本的にフランス語が一定以上できることが入学の条件であるため、大学内の事務員や職員の多くは英語が理解できない。また、大学内での案内や書類なども全てフランス語で書かれているため理解が困難であることがあげられる。また、フランスはクリスマス前から新年にかけて冬のバカンスに入るため 12 月は約半月に渡って大学が閉まり、特に事務手続きや授業などがあまり捗らなかった。現地の消費状況を知るために、Part-dieu 駅にあるショッピングセンター、Perrache 駅前で開催されていたクリスマスマーケットなどを訪れた。

一月度は主として、Lyon における具体的な研究枠組みの模索と理論的整備を中心に行った。まず、前月からの引き続きの課題として、Lyon における具体的な研究計画について 1 月度初頭に再び Winkin 教授に提出した。それを受けて 1 月の半ばに Winkin 教授から再び研究の方向性についての指導と先行研究の紹介があった。研究の方向性については、Winkin 教授自身が以前 Part-Dieu にあるショッピングセンターについて分析を行っていたことがきっかけとなって、Part-Dieu のショッピングセンターを対象に研究を行っていくことが決まった。研究手法については Bruce Jacson の『Field work』, Martyn Hammersley & Paul Atkinson の『Ethnography』などの紹介があり、現在これらの本から研究手法について確認していった。また先行研究について、特にアメリカを中心とする研究で宗教的空間と消費センターの空間の類似性が指摘されていることが分かった。特に Winkin 教授からは Ira G Zep による著作、『The New Religious Image of America The Shopping Mall as Ceremonial Center』を紹介され、この研究を元に私自身の研究仮説を再検討をおこなった。また、近代消費主義の成立について議論している Colin Campbell の『THE ROMANTIC ETHIC AND THE SPIRIT OF MODERN CONSUMERISM』について検討を行った。

二月度は Part-Dieu consumer center におけるフィールドワークの開始と、メンター速水氏の到着にともなう博士論文構成の検討について主として行ってきた。前月に Winkin 教授によって提示された参考文献、フィールドワーク関係の文献と Ira Zep による先行研究、の読解と並行しつつ、Part-Dieu consumer center におけるフィールドワークを開始した。その結果、ショッピングセンターの全般的な傾向と、いくつかの興味深い点が発見された。モール全体として音楽などが小さくほとんど聞き取れないほどの音量でしかかかっていないこと、また店内の装飾・色彩のありようが全般的に地味であること、買い物袋を下げている人が全般的に少ないこと、老人世代が中央広場を公園のように利用していること、10 代の少年少女の遊び場になっていること、などである。また、3 階の中央広場においてはホームレスらしき集団とここを訪ねてくる常連の間になんらかの親密な関係があること、またそのような集団があまり他の客から避けられていないことなども見えてきた。時間帯によって、この中央広場の利用者

は大きく変化し、人が少ない時間帯には常にここにいる人間たちが主流になるものの、お昼時はランチをここに持ちよって食べる会社員や学生、夕方以降は10代くらいの若者たちが中心に広場を利用し、ホームレスと常連たちはその時は中央広場から姿を消す者が多いようである。理論的な面に関しては先月末にメンターの速水氏が ENS LSH に到着し、博士論文を12月の末までにどのような形で仕上げていくのかについて指導があった。社会学における伝統的な理論枠組みと、ITP での研究がどのようにリンクされるのが望ましいか、について議論を行った。

三月度は前月に引き続いてリヨンの Part-Dieu consumer center でのフィールドワークを行い、またそこで得られたものについてまとめる作業を行った。また博士論文に向けて、投稿論文をどのような形で書くのが望ましいかについてメンターの速水氏と検討を行った。まず、前月から引き続き、Part-Dieu consumer center でのフィールドワークを行った。先月が中央の広場などの共有スペースにおける人々の振る舞いを中心に観察したのに対し、今月は店舗スペースや通路スペースなどの人々の振るまいや装いを中心に観察を行った。また先月からの観察と合わせて、今月ではほぼ Part-Dieu consumer center のほぼ全域を全ての曜日時間帯で回ることができたため、全体的なデータの整理を行っている。この整理でおおまかな全体像をつかみ、今後の研究の方向性を定めていきたいと考えている。この段階では、ショッピングセンターのような現代の祝祭空間は〈聖〉と〈俗〉の境界線上にある事象について、井上俊が考えたような〈遊〉の次元の現象として分析できないかということを検討していった。また現地での消費のありようについて考えるために、フランスが発祥の地であるフリーマーケットについても見学に訪れた。日本におけるフリーマーケットとはずいぶん違う商品が扱われ、雰囲気も違ったので非常に興味深かった。理論的な側面については、博士論文全体の構成として消費を軸にそちらの側から見た社会学理論を構成できないかということを考えている。これは、これまでの社会学が社会を主として生産と労働の局面から捉え、消費を生産の残余概念として扱ってきたことに対する補完的な試みとなるはずであり、またこれまで生産主体の文脈から狭く解釈されてきた消費社会論の現代社会分析に対する有用性について再解釈を試みた。また三月初めには、油井教授・緒方教授・西橋文学部事務長が Lyon に視察に訪れた。多忙なスケジュールの中ではあったが研究のことについて、また ITP の今後のプロジェクトについてなどの指導があった。

四月度はリヨンの Part-Dieu consumer center でのフィールドワークを前月までとは異なった方法論で行った。前月は店舗スペースや通路スペースなどの人々の振るまいや装いを中心に観察を行ったが、本月は場所と時間ごとに人々の様子を記述していくのではなく、それぞれの買い物客に注目して観察を行った。具体的には、これまでのように一地点での観察を続けるのではなく、特定の買い物客がショッピングセンター内でどのように振る舞い、どのようにこのショッピングセンターを利用しているのかについて調べるために、特定の買い物客の買い物を最初から最後まで追跡して観察し記述していった。このことによって、これまでのやり方では時間および場所で細切れになっていた、買い物客の行為を連続体の中で捉えることができるようになってきた。また、ショッピング以外の消費の場として、フランスではよく見られるマルシェ（朝市）へも赴いてみた。マルシェは朝から正午までという早い時間に行われるにもかかわらず、多くの人が訪れ活気があり、普段歩道として利用されているところに店が立つという点や教会の近くで行われやすいという点で、台湾の夜市に似ており非常に興味深かった。一方、マルシェでは主として、農産物とその加工品が売られていると言う点で、衣類・服飾雑貨主体の台湾の夜市とは異なっており、値引き交渉などもほとんど行われていないようだ。

4月まではいろいろな可能性を考え、様々なアプローチで研究に取り組んできたが、そろそろどのような形で成果を出していくのかを逆算して、日々を過ごすことが必要になってきた。そこで油井教授と相談の上、幅広くやってきたアプローチを一時凍結し、博士論文に結びつく領域について強化していくことを念頭に五月度は活動をおこなってきた。取り組んでいる様々なアプローチについてどのようにまとめるかということとをさぐべく、矢田部謙太郎、池田成一、松井剛、阿部勘一、水原俊博、伊藤明己、間々田孝夫、G. Ritzer、C. Campbell など消費社会論関係についての近年の文献を読み返していった。このことは80年代の消費社会論の枠組みが現在どのように受け入れられ、またどのように批判されているか。そして、それらの批判との対話の中から現在の議論がどのような地点まで進められてきたかについて、一定のまとまりをもったフレームを与えてくれたように思う。もちろん、これら個々の資料の目指す方向性はそれぞれ異なるのであるが、消費という行為が行為者に意味づけられたものとして捉えられてきていること、またその意味づけが相互に構造化するコミュニケーションの形をとっていることなどの共有性があったように思われる。このようなアプローチは明らかに J. Baudrillard が志向した記号消費と連続性

を持っているが、その構造決定論的でアイロニカルな部分をいかに乗り越えるかというところに現在の消費社会論の焦点はあるよう思われた。一方、消費の場についての理論的な理解のため、以前から読んでいた Ira G. Zepp に続き、Daniel Miller、関口英里、遠藤薫などの文献を検討中であり、G. Ritzer の「消費の大聖堂」と「再魔術化」などの議論を結びつけて理解してきた。現在の消費空間が、人が集まる Centre であり、社会意識上の秩序を再構成する役割を担っているという指摘が興味深かったが、しかし、特にアメリカにおけるもののようにショッピングセンターが「聖」なるものに結びつけられているかどうかについては、特にアジア的文脈を考えれば微妙なところがあり、そこで聖/俗の二元論ではなく、聖/俗の中間領域としての「遊」の次元を扱った議論について検討を行った。ただ、5 月度は体調の面であまり快調とは言い難い状態が続き、想定していたよりも作業の進み具合が遅くなった。

6 月度は今回のフランス滞在の最終月であり、これまでの研究成果についてある程度のまとまりをもったビジョンを提示することを目指して今月は活動を行ってきた。まず6月の前半は、ENS LSH の指導教官である Winkin 教授に Part-Dieu ショッピングセンターでの調査についての報告を行う必要があったため、これまでの調査データを参考にしながら Part-Dieu の立地や設備など記述を行い、また、場所や時間帯ごとの内部の状況の変化について観察結果からの考察を行った。また、検討を続けていた Ira G. Zepp のアメリカにおける商業空間、特にショッピングセンターをコミュニティの中心としての「聖」なる領域とつながるものとしてとらえるアプローチについて、さらなる検討を行った。確かに Zepp が言うように現代におけるショッピングセンターは “more than shopping” な空間であるように思われるが、Lyon における Part-Dieu の状況を考えるとその「聖」性の文脈もまた、適合的ではないように思われる。そこで、聖の領域でも俗の領域でもない「遊」の領域というとらえ方からショッピングセンターでの現象について理解することを試みた。主として井上俊の『遊びの社会学』と西村清和の『遊びの現象学』を下敷きに、遊の領域や象について理解を深めていった。その結果 Lyon におけるショッピングセンターの領域における現象は、「聖」―「遊」―「俗」の三次元からの分析枠組みを採用した際に、Zepp の枠組みからとらえられない側面に光を当てることも可能にした。しかし、一方でこの図式はショッピングセンターにおける相互行為を個々の行為以上の社会的なものとして捉える Zepp の図式の明解さを欠いてしまう面があり、「遊」の領域における行為がどんな（社会的）信頼のもとに成立しているか、そしてその相互行為が表象し再生産しているものは何であるのかという部分が不透明なまま残ってくる。「遊」と「聖」を別の社会的ゲームが支配する領域であると考えれば、それらの論理によって成り立つそれぞれの社会的な場がそれぞれどのように関係しどのように機能するのか、などの点を解き明かしていくことが今後の課題として残された。

2. Lyon における研究成果

以上のような活動をうけて、得た成果は次のようなものである。

問題提起

ショッピングセンターは、近代的な消費の象徴である百貨店の後継を担う消費の場である。従来、消費に関する研究では、常設化した万国博覧会として百貨店における消費の合理性とスペクタクル性の両者が指摘されてきた。しかし、社会科学においてマーケティングに関する研究や消費の合理化に関する問題についての研究などにおいて消費の合理性がより強調される一方で、実用性以外の消費の側面についての研究の取り組みは近年になって始められたばかりである。

Lyon の Part-Dieu ショッピングセンターは、確かに一方で多くの買い物客で賑わっているが、その様子は地元のスーパーマーケットにおける様子とも異なる。買い物のバッグを提げないでショッピングセンターの中を散歩している人も多い。この場に集まっている人たちは、何を求めてここを訪れるのか、またショッピングセンターという現代的な消費の場は、現代のフランスの都市の中でどのような役割を果たしているのだろうか。

La Part-Dieu ショッピングセンターの概要

1. La Part-Dieu consumer centre の立地

Part-Dieu ショッピングセンターは、リヨン市の中央部やや東よりの地点に店舗を構えている。この場所は、様々な公共交通機関の結節点であり、リヨンの交通網の心臓部にあたる。たとえば、メトロの B 線はこの建物と直結し、街の全方面に行くためのバス・トロリーバス・トラムウェイの駅がここに集結している。空港バスもここにもっとも大きな駅があり、通りを挟んだ向かい側には TGV と在来線の電車の駅も存在している。つまり、外からこの Lyon 市を訪れる際の玄関口とも言うべき場所でもある。一方、しかしながら、この場所はリヨン市における中心街ではない。リヨンのもっとも賑やかな場所は、ベルクール広場などが存在するセーヌ川とローヌ側で挟まれた地域であり、Part-Dieu のある場所は、そこから少し外れた、しかし、交通の中心地にある。これは、都市型のショッピングセンターの典型的な配置、といえるだろう。Part-Dieu 付近はもともとアラブ系の移民街であり、現在でも比較的多くのアラブ系の人間がこの周りには居住している。

2. Part-Dieu の施設

Part-Dieu ショッピングセンターは、デパート、映画館、スーパーマーケット、大型電気店、ボーリング場、美容院、旅行代理店、レストラン、携帯ショップなどを含んだ 230 店舗の店から構成されている。もし、上空から Part-Dieu ショッピングセンターを見ることができれば、このビルの形が十字架のような形状になっていることが分かるだろう。つまり、このビルは東西南北中央の 5 つのホールによって構成されている。また、これらのホールの中央部は全て吹き抜けになっており、天窓とエスカレーターとプランターを備えている。またそれぞれのホールに中心となるアンカーストア¹がある。

西側のホールは、主として駐車場として活用されており、一般の買い物に利用されることはない。しかし、2 階の部分はレストランが存在し、テラスのような形でこの場所が利用されている。晴れた日には、ここを訪れた人が日光浴をしながらおしゃべりにふけっている姿をよく見ることができる。

北側のホールは、アンカーストアとして 1～4 階までのホールの一面を、フランスでもっとも有名な百貨店の一つである Galeries Lafayette が占めている。もっとも、この Part-Dieu に入っている Galeries Lafayette は本来のこの百貨店が持っているような高級感が控えめであり、敷居の高い雰囲気を感じさせない。そのことを象徴するように、Galeries Lafayette と Part-Dieu の境目には、確かに警備のスタッフは立っているものの、何のゲートもドアもなく直接的な形で空間が連結されている。百貨店は独自のカラーを強く主張することなく、どちらかというとこのショッピングセンターの秩序に組み込まれているようである。もっとも、とはいってもこのホールには Hugo Boss などの高級ブランドショップが比較的多く見られるが、それでも、この場が全体から浮いているという印象は受けない。

南側のホールは、1-2 階に Go sports という総合スポーツショップが入っており、3-4 階に Carrefour という世界で二番目の規模のフランス系スーパーマーケットチェーンの店舗が入っている。万引き対策のためであろうか、奇妙な事に Carrefour の入り口は 3 階からだけになっており、Part-Dieu の側から直接 Carrefour の 4 階に入ることとはできない。大ざっぱに分類すれば 3 階のフロアが日用品のフロアであり、4 階が食料品のコーナーであるため、もし何か飲み物を買いたくなった場合、わざわざ 3 階から入って 4 階の食料品に行き、レジを済ませて 3 階に戻って店を出なくてはならない。報告者はこの Carrefour の入口あたりで警備スタッフに連れて行かれる子供たちを複数回目撃しているので、おそらく万引きなどの防犯の対策のためこのような構造になっているのだろう。また、このホールの 2 階は、図書館につながっている。

東側のホールのアンカーストアは 1 階に総合ファッションの C & A、3 階に家庭用雑貨を扱う BHV、4 階に映画館の UCG が入っている。概して言うと、このホールのアンカーショップは他のホールと比較して小さい。しかし、

¹ ショッピングンセンターの中でも、集客力や販売力で核となる店舗のこと。(Anchor Store)

このホールの地下は地下鉄の駅と直結し、他の公共交通機関もこのビルの出入り口と隣り合っている。したがって、公共交通機関を利用する客は多くの場合、最初にこのホールを通る必要があり、ある意味このホールのもっとも強力なアンカースタはこの地理的な条件とも言える。実際、このホールは多くの通り抜ける人と共に常ににぎわっており、特に駅に続く階段は常に人を吐き出し吸いこんでいく。

これら東西南北の4つのホールは一階から三階まで吹き抜けになっている回廊で繋がれており、上階にいる人は下の人が行き交う姿を眺めることができる。もちろん、これらの回廊部分の両サイドにも店舗が存在し、それらの店はホールのそれと比較して比較的小規模であることが多いようだ。

中央ホールは他の全てのホール部分より大きく、他のホールと同じように天窓と吹き抜けを備えている。また中央ホールはこれに加えてホール中央部の吹き抜けのところに噴水がある。このスペースは普段は噴水が設置されているが、クリスマスのような特別なイベントの際にはクリスマスツリーなど特別なモニュメントがここに築かれたり、イベントの際にはステージが設置されたりする。2階、3階は中央の吹き抜けをベンチが取り囲み、多くの人がここで休憩をとったり、食事をしたり、本を読んだり、おしゃべりをしたりして過ごしている。またシースルーのエレベーターと螺旋階段が設置しており、縦方向への動きを空間に取り入れることで吹き抜けの空間を縦方向に接続している。

3. Part-Dieu はどのように利用されているか

アメリカにおけるショッピングセンターの研究を行った Ira G Zepp は、ショッピングセンターを単なるビジネス以上の場であるという観点を提起した。彼によれば現代のショッピングセンターは、一種の儀礼や儀式によって都市の神話を形作る聖なる空間である。考察において後述するように彼の議論の枠組みと私の見出した結果は若干の相違を含んだものになっているが、今回のフィールドワークでは私も単なる物を買う場としてのショッピングセンターから外れているように見えるものを中心に観察を行った。また、「楽しみ」としてのショッピングの部分を抽出することを心がけ、フィールドワークを行ってきた。Part-Dieu におけるフィールドワークでは主として観察によって、ショッピングの道具的ではない側面について明らかにするため、Part-Dieu ショッピングセンター内の雰囲気や利用者の様子を記述していった。

概して言えば、Part-Dieu ショッピングセンターはさまざまな人々によって利用されている。私たちはそこに Lyon に住んでいるほとんど全てのタイプの年齢、人種、階級、性別の人を見いだすことができる。彼らは、あらゆる区別を問わず「ショッピングをする」という相互作用に参加しているが、しかし、Part-Dieu は全ての時間と場所でまったく同じ状態を保っているわけではない。ここで、時間と場所にともなう変化に目を向けてみる。

a. 曜日にともなう変化

水・金曜日を除く平日

比較的多くの客が見られる。特にフランスでは多くの店が日曜が定休日であるため、月曜日はにぎわっている。しかし、若者やティーンエイジャーはそれほど見られない。最も典型的な利用者は、中年以上の人々と小さな子供連れの家族である。

水曜日

フランスでは水曜日は学校が休みであるため、多くのティーンエイジャーと子供が見られる。

金曜日

最も明確かつ明瞭に Part-Dieu の雰囲気の変化が見て取れるのは金曜日の午後以降である。若者たちの人数が増加してくるにつれて、Part-Dieu の雰囲気も次第に盛り上がって行く。もちろん、若者以外的人数が減っているわけでない。しかし、友達連れや恋人同士の若者たちは、その活力によってどうしても人目を引く。この

ころになると、買い物鞆を下げた人の割合が落ち始め、内部をぶらぶらしている人の姿が目立つようになる。施設内のいたるところで話し声と笑い声が聞こえ、人々の歩くペースがゆっくりになる。しかし、一方で、時間的制約から子供とティーンはそれほど多くはやってこない。

土曜日

土曜日は Part-Dieu がもっとも混み合う日である。実際にこのような人ごみのなかに入ると、認識するべき情報の量が多すぎて飽和し人に酔ったような状態になることもある。また、このような状況下では、自分が見ているのか見られているのかという境目があいまいになる。午前中は主として家族連れが訪れ混み具合もそれほどではないが、午後以降は低年齢層の利用者が爆発的に増える。彼は日常よりも少し着飾っている場合が多い。土曜の Part-Dieu はある種の遊び場と化し、人々の社交場になる。また、一方で私たちは大きなかばんを背負ったり、スーツケースを運んでいる旅行者を見かけることもある。時には、彼が何か買ったり、ここで休んでいる姿も見ることができる。

日曜日

Part-Dieu ショッピングセンターは、ほかのほとんどの Lyon の施設と同様、日曜日は定休日である。少数の例外はマクドナルドと映画館で、これを除くと公衆トイレですら利用することができない。しかし、このような状況でもいくらかの人が Part-Dieu ショッピングセンターを利用している。主に三種類の利用者がここにはいる。それぞれ、常連組、映画を見に来た人、Lyon に到着した人、である。常連組は子供とホームレスの2種類がいる。子供はこの場所を遊び場に変えて遊びまわり、ホームレスはほとんどの時間を座り込んで眠って過ごす。また、そのどちらでもない幾人かの人はセントラルホールのベンチでパソコンを使ったり、本を読んだりしていた。

b. 中央ホールの時間帯による変化

朝方の時間では、常によく見る人々を除いてそれほど多くの人は見られない。彼らの多くは、ここで生活しているか、ここに入り浸っている人である。彼らは車座になって座り、何かしゃべりあう。それ以外の買い物客は中高年以上の人々か、家族連れが多い。この時間帯の全体的な雰囲気はまさに「ただ何かを買う」といった感じで、観察者にとって、楽しみとしてのショッピングの要素を見いだすことは困難である。

ランチタイムが訪れると、中央ホールはここで食事を取ろうとする人々で混み合い始める。子供たちがパンにかぶりつき、女性の会社員らしき人々がお弁当箱を広げる。人々は次々に訪れ、ホールはすぐに人でいっぱいになる。このときには全体で 50 名以上がこの場に座っていたと思われる。買い物客だけでなく、周辺の仕事場の人も多く訪れ、まさしく雰囲気としては公園に近くなる。不思議なことに、常連のここで生活している人たちは、ランチタイムはどこかに行ってしまう姿が見えなくなる。ここから三時くらいまでは全体的にのんびりとした雰囲気がホールに漂う。

午後四時を回るとティーンや若者の姿が目立ち始める。彼らは大きな身振り手振りを交えておしゃべりをし、この時間帯あたりから流れている音楽を聴きとることが難しくなっていく。同時に、ホールもこの時間あたりから活気づいていく。白人の少年たちが柵にもたれながらしゃべり、偶然あった女の子同士がハイタッチを交わす。4 人の黒人の女性たちがジェスチャーを交えてまわりを見渡しながしゃべり、中年の男が若者とチェスを打っている。かれらの大多数は、何かを買うというよりただここをうろうろしているように見える。

c. 場所による変化

また、時間帯による変化以外にもあきらかに場所による構成メンバーの偏りがみられる。もっとも、明確な形でそれが見られるのは南ホールの 3 階 Carrefour 前の広場と中央ホールの 3 階である。

Carrefour 前の部分はティーンエイジャーのたまり場になっている。明らかに彼らがここにとどまることによって、警備のスタッフは神経質になっているし、かれらが警備のスタッフにどこかに連れて行かれるのを見

たことも1度や2度ではないが、それでも彼らはここに集い、しゃべり、踊っている。

中央ホールの3階はホームレスの人々の生活スペースになっている。彼らは食べ物を集め、仲間と集い、ここで酒を飲んだりもする。日本人にとっては驚くべきことに、彼らはここでは他の人々から避けられておらず、実際のところ彼が警備のスタッフと問題を抱えたときに、彼らを守る立場に立つ人もいる。

4. 考察

ショッピングセンターは聖なる場か——アメリカにおけるショッピングモール研究との比較——

アメリカのショッピングセンター研究を長年行ってきた Ira G Zepp 教授は近代におけるショッピングセンターが “Ceremonial Centre” としての役割の担ってきた、と主張している。この場合の “Ceremonial Centre” は、かつての宗教的な儀式が行っていたような、象徴的次元で、世界と人を、またその参加者相互を結びつける場、つまり社会的世界の秩序を再現出させる場という意味合いである。Zepp の記述はアメリカにおけるコミュニティのコアとして、伝統的な商業空間である “Saturday night in Bel Air” から始まる。そして、彼はこの場が誰に対しても開かれている事、その場が人間としての交流を促進すること、そしてその場の祝祭的な雰囲気強調している。そして、彼はアメリカのショッピングセンターをこの “Saturday night in Bel Air” の連続性の上に配置する。彼によれば、ショッピングセンターは「単なるビジネスのため以上の場所である」(Zepp, P143)。ショッピングセンターとは人々が集う場所であり、もともとのコミュニティ的な文脈から切り離された人々が、都市的な神話に出会う場所である。人々はモールの聖なるシンボルと儀礼による相互行為を通じて、郊外や都市の内部に彼ら自身にとって大切な人間的で意味にあふれた経験を可能にする『『本当』の場』を見出す。そこは、さまざまな要素(光、水、自然、シンボル、建築など)を用いることによって世界の秩序を再構成し、またそれらと関係性を取り結ぶ場である。彼はおそらく、ショッピングセンターを教会のような聖なる空間と同じような性質を持つ場と見なしている。たしかに、私もショッピングセンターが単なるビジネス以上の場であることには同意する。しかし、Zepp の論点は次の3点でフランスにおけるショッピングセンターの状況にはそぐわないのではないだろうか。

1) 近代的なショッピングセンターを直接的にコミュニティに結びつけることができるか

たしかに、ショッピングセンター内部には相互行為が見出されるし、その基盤となっている価値からコミュニティ的なものを逆算することも可能かもしれない。しかし、一方でこのコミュニティ的なものは、Zepp が Bel Air の事例で提示している意味でのコミュニティとは異なると思われる。Bel Air で描かれていたコミュニティは地理的なコミュニティの表象であった。一方、現代のショッピングセンターにおいては、近隣のコミュニティとショッピングセンターとの間の結びつきを直接的に見出すのは難しい。例えば Part-Dieu の場合にはアラブ系のコミュニティが付近にあるにも関わらず、Part-Dieu の内部でそのような近隣のコミュニティとつながる表象を見出すことは非常に困難である。むしろ、ショッピングセンターの意味世界は、周囲の環境から切り離され、隔絶したものを目指しているように思われる。現代の消費空間は「再魔術化」しており、むしろテーマパークのような自律的な意味の秩序を指向しているように思われる。

2) ショッピングセンターが宗教的な価値と結びついているようにみなせるか

Part-Dieu ショッピングセンターと教会や修道院の間には天窓を持ち、回廊形式の柱を用いた建築であり、中庭を持っていることなど、いくつかの共通点が見出せる。そして、すべてのものを分類し秩序づけるという広い意味での宗教とショッピングセンターは関わりを持っているということもできるかもしれない。しかしながら、そうした宗教的な施設に共通した特定の方向に方向づけられた秩序の表象は Part-Dieu の内部ではほとんど見ることができない。そもそも Part-Dieu における中心的な何かがどこにあるのかすら明確ではない。

現代的なショッピングセンターは、確かに完全に俗なる空間に存在している訳ではないが、Zepp が主張しているような完全に聖なる空間に存在しているわけでもないとは私は考える。そこで私は、ショッピングセンターのリアリティに迫るため、第3の次元として<遊>の次元を用いたい。これによって<聖一俗>の二元論から、

中間領域としての〈遊〉の次元を組み込んだ〈聖一遊一俗〉の三元論にフレームワークを変更することができる。

井上俊は Roger Caillois と Johan Huizinga の理論を参照しながら、〈遊〉の次元の特徴を議論している（井上，1977，130-154 頁）。〈聖〉と〈遊〉の二つの次元は日常的な実生活の面から離脱し、それと対立するという点で共通している。しかし、その方向性は異なる。〈聖なるもの〉は人間を越えた神秘的な力であるから、常に厳格に定められた手続きにしたがって細心の注意をもって扱われなければならない。〈聖〉なる力は本来人間がコントロールできるような力ではない。儀礼によってうまくこの力をとらえ、うまく誘導することができるが、現実生活のうえに望ましい結果を生じさせることもできるが、もし万一取り扱いを誤るとたいへんことになる。それゆえ〈聖〉の領域は、失敗の許されない厳粛な領域であり、そこに参与する個人にとっては、日常的な実生活以上に拘束の強い不自由な領域である。これに対して〈遊〉の領域では、人々は実生活上の配慮を離れ、聖なる義務や拘束をも離れて、「自由」に楽しみを追求する。ショッピングセンターを訪れる買い物客は明らかに自分の本来のコミュニティの人間関係や利害関係から切り離されている。この意味で、確かに彼らは〈俗〉なる秩序の外にいる。しかし、同時に彼らの様子は非常にくつろいだ様子であり、何らかの緊張感を持ってその場で行われている相互行為のゲームにのめりこんでいるように思われない。その意味で彼らはやはり、〈聖〉なる秩序の外にもいるように見える。むしろ、ショッピングセンターの場にあるのは、「無秩序」という名の秩序であるといえるだろう。

3) ショッピングセンターにおける〈遊〉の相互行為の偶然性について

美学者である西村清和は井上とは別の方向性から遊びの概念を議論しているが、彼は遊びとは「ある特定の活動であるよりも、ひとつの関係であり、存在状況である」。「それはいずれが主体とも客体とわがちがたく、つかずはなれずゆきつもどりつする遊動のパトス的な関係である」（西村，1989，31 頁）としている。この関係の特徴は、遊びが誰かの企図によらず、企ての主体を欠いた状態で行われる独特の行動様態であり、つねに同時に遊ばれ、偶然によって、つまりそれ自体が目的とならず、副次的に行われることである。

この観点からすれば、ショッピングセンターにおける相互行為は、〈遊〉の次元に近いものとして見なすことができるように思われる。なぜなら、ショッピングという行為における遊びの要素は、ただ何も買わずにウィンドウの前をいろいろと見物しながら歩く場合であっても、買い物の要素の副次的なものにとどまり続け、逆転することはありえないからである。これに対して、宗教的な場で行われる相互行為は参与者を特定の方向に秩序づけるという目的から行われ、個々の行為は完全にその目的のための手段になっている。この点で、儀礼と儀式を伴った相互行為が必ず目的との関連性を持っている教会などでの行為と、ショッピングセンターにおける相互行為は意味合いが違ふといえる。また、一方でこの「ショッピング」という行為は、Lyon の食料品店でよく見られるようなメモを手に厳密に必要なものを調達に行く行為とも異なるだろう。ショッピングという行為は、物を調達する行為にそれに伴う意図しない何らかの楽しさを付与した行為であり、その副次性という形式の中に〈遊び〉の要素が立ち現われてくる余地があると言える。

結論

現代的な社会において、ショッピングセンターに代表される空間が単なる経済や商業のため以上の場所であることは、ある程度明白であるように思われる。しかし、未だその「経済以上」の部分は解明されておらず、私たちはこの部分を明らかにしていかななくてはならない。

今回私は、アメリカでの聖なる空間としてショッピングセンターを捉えるアプローチと、Lyon における Part-Dieu ショッピングセンターの状況を比較することによって、その経済以上の部分を説明することを試みた。その結果、Zepp が先行研究で指摘したような宗教的要素が、今回の事例ではそれほど見られないことが明らかになった。

このような場を説明するフレームワークとして、〈聖一俗〉の二次元によるものから〈聖一俗一遊〉の三次元の図式を持ち込むことによって、非宗教的であり、非俗の空間である、現代の商業空間における現象を説明するフレー

ムを見つけることができるようになった。

もちろん、まだ明らかにせねばならないことは数多く残っている。＜遊＞の次元はどんな論理で動作するのか、コミュニティ的なものでないとしたらショッピングセンターの共同行為のベースになっている信頼はどこからやってくるのか、ショッピングセンターにおける相互行為はどんな社会の表象なのか、そして最も難しいのが以上のようなことを証明するためにはどのような方法論があるか。どの問題も一様にタフなものであるが、これらを少しずつ解消していくことを今後の課題としたい。

参考文献

- Campbell, Colin “The Romantic Ethics and the Spirit of Modern Consumerism”, 1987, Blackwell Publishers
Miller, Daniel, “MATEERIAL CULTURE AND MASS CONSUMPTION”, 1987, Basil, Blackwell Ltd
Ritzer, George, “ENCHANTING DIS ENCHANTING WORLD, 2nd ed.”, 2005, Pink frog Press
Zepp, Ira G, “The New Religious Image of Urban America THE SHOPPING MALL AS CEREMONIAL CENTER SECOND EDITION”, 1997, University press of Colorado
- 井上俊, 『遊びの社会学』, 1977, 世界思想社
西村清和, 『遊びの現象学』, 1989, 勁草書房
鈴木謙介, 『カーニヴァル化する社会』, 2005, 講談社

＜序論＞としての統一論

——「統一政策」と「統一観」——

横溝 未歩（国際協力研究科博士後期課程）

派遣先：ワシントン大学（アメリカ）

1. 問題関心：「統一」とは

朝鮮半島は、外勢によって分断され長い間南北韓は別の国として存在してきた。朝鮮半島にルーツをもつ人々にとって、祖国の統一は「民族の念願」である。また、朝鮮半島は地政学的に重要な位置にあり、北東アジアシステム、ひいては世界の国際システムを変容させる可能性を秘めているという点から、朝鮮半島の統一は国際的にも大きな関心事項になるだろう。

韓国では分断が、韓国社会に与えている影響は大きいと考えられている。具体的な影響としては、特に大統領選挙の際の「색깔론」「北風」「保守・進歩対立」「地域主義」などが挙げられる。このような影響は87年の民主化以降も継続して存在し、「分断」や「統一問題」はそれ自体が、大きな争点となるよりはむしろ違う形、韓国社会内部の「分断」「対立」という形で表われてきたとされる。

このような状況を、「分断体制論」と名付けたのが白樂晴である。白樂晴は「南北韓がそれぞれ違う「体制」（すなわち社会制度）を持ちながらも、両者が巧妙に結びつき分断現実を再生産していく構造」¹であると説明している。

分断という対立状況下にある韓国社会において、「分断の再生産」という構造が存在し、また認識されているが、実際に国民がその克服のために行動するかという点はまた別の問題である。

実際、「統一問題」は、大統領選挙の結果を左右するほどの重要イシューとして韓国社会に登場することはほとんど無かった。統一が現実的なものとして感じられた89年のベルリンの壁崩壊とそれに続く90年のドイツ統一達成当時、統一ドイツの事例は韓国国内でも強い関心が持たれたが、90年代初頭のうちにドイツ統一の事例を朝鮮半島に適用する見方は下火となり、その後現在に至るまでドイツ統一の後遺症ばかりが注目されることとなった。

韓国社会に目を向けてみれば、韓国はすでに70年代の経済的成功、87年に民主化への第一歩を踏み出し、その後現在に至るまで民主化を確固にしてきた。南北韓の統一は、韓国で築き上げられた自由市場主義と経済基盤、民主主義を放棄する形で行われることはありえない。（「ドイツ式統一＝吸収統一という方法」）そしてどんな方法であれ、朝鮮半島の統一は少なくとも短期的に韓国の経済や民主化に大きな動揺と打撃を与えることが予想される。

韓国国民は、自らが築き上げた経済的・社会的基盤を犠牲にしての「統一」を果たして望んでいるのだろうか。ここに、韓国における「統一観」と「統一政策」のズレが生じている。

分断国である韓国では統一は至上の目的であるという方針が掲げられており、また「我々の願いは統一」という感情は、長く分断されている分断国の国民に共通のものだろう。それにも関わらず、現実に行われている太陽政策を始めとする「統一政策」は、「二つの韓国」という現状維持を狙っているように見える。また、統一のための犠牲や統一後の後遺症という観点からみれば、国民レベルでも統一よりも現状維持が望まれているという現状があるのではないかと。本稿では、このような「統一観」と「統一政策」のズレに注目していく。

2. 「統一観」への影響

では、「統一観」に影響を与えるものはなんだろうか。一つ目に、「分断からの時間」が考えられる。「時間」を経ると、ある事柄・事件に対する理解や重要性は変化する。

「過去」とは、ある時間的段階においてのある地理的空間内での何かしらの総体でしかなく、それ自身が直接

1 백낙청, 『흔들리는 분단체제』, 창비, 1998, p.17.

に意味を有するわけでもない。「過去」に意味を見出すのは「現在」に生きる人々であり、だからこそ、その解釈や意味は、特に「過去」以上に、「現在」によって左右される。²

したがって、

例えば、問題となっている「過去」を自ら直接経験した人々にとって、「過去」はすなわち彼ら自身を含むものであり、その認識は彼らの「過去」に対する関わり方に大きく規定される。対して、同じ「過去」を直接経験することができなかった人々にとって、「過去」は文献や伝聞を通じて間接的な関係しか持ちえないものである。³

統一に対する姿勢も、「分断」を経験した人々と、それを経験することなく分断状況を日常的なものとして受け入れてきた人々の間には「統一」に対する姿勢に差が生じるだろう。また、「過去」、すなわち分断と統一をどのように受け止めるかという姿勢は、「現在」の状況によって左右されると考えられる。

そのため分断の直後には、統一への情熱が高く、反対に分断の期間が長くなれば長くなるほど、統一への情熱は低下するのではないだろうか。これは、分断によって生じた離散家族など、分断の直接的な当事者の減少などからも推測できる。

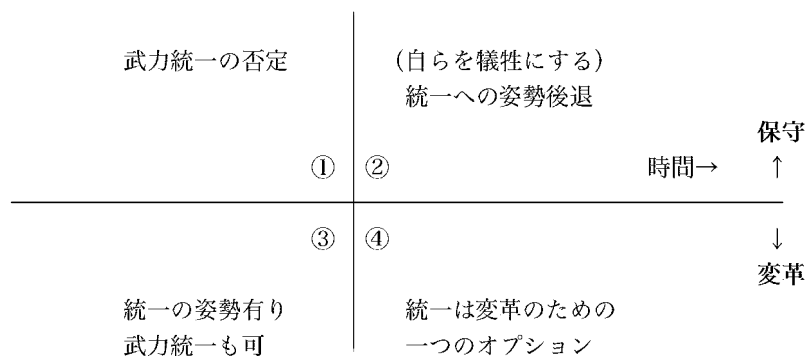
二つ目に考えられるのは、「経済の発展」である。これは、「生活保守主義」というキーワードで説明できるのではないか。日本の八〇年代における「生活保守主義」について、山口二郎氏は次のように説明している。

この言葉は、そもそも一九〇八〇年代の自民党支持の増加を説明するときに使われ始めた。当時は、バブルにつながる経済の膨張期であり、社会全体が富を追求していく中で、世の中に対する不平不満を持たず、ただ自分の豊かな生活を守りたいと考える態度を生活保守主義と呼んだ。⁴

この「生活保守主義」は、経済水準の上昇が国民の保守化をもたらすという現象を説明している。「自分の豊かな生活を守りたい」という態度は、変化を望まない国民の保守化へとつながり、結果として分断国では統一への姿勢が後退していくことが考えられる。もちろん統一への姿勢後退だけでなく、武力統一といった生活を破壊するような統一方式の可能性が排除されるだろう。

一方で、経済水準が低ければ自らの生活を守るといった保守性よりも、改革を求める傾向が強く、「統一」がその改革のための一つのオプションとして選択されることもあるだろう。

この二つの考え方に従うと、「統一観」、「統一への姿勢」は次のような図⁵で表せるのではないかと仮定する。



縦の軸が「経済の発展」を表しており、①と②では高い経済水準を備えた場合である。また、横の軸は分断から

2 木村幹『近代韓国のナショナリズム』、ナカニシヤ出版、2009、p.256.

3 同上、p.257.

4 山口二郎『戦後政治の崩壊—デモクラシーはどこへゆくか—』岩波新書、2004、p.126.

の「時間」の経過を表している。

前述のとおり、高い経済発展を経た場合、「生活」を重視する保守性をみせることになる（①、②）。一方、経済の発展していない場合には、貧しい生活を変えるため変革を求める傾向があると推測される（③、④）。

一方、時間軸でみると、分断直後は統一への意思が強く分断克服に向けての動きが見られるだろう。反対に分断からの時間が長くなれば、統一への情熱は薄くなり統一をめぐる動きは「現在」の状況に左右される可能性がある。これらを前提に上の表の4つのエリアにおける統一観を説明すると、次のようになるのではないだろうか。まず、①では分断から間がなく、統一への情熱はあるが、生活水準も高く守るべき生活があるため、大きな変化を望まず、武力統一などの激変は望まれないだろう。さらに分断から時間を経た②では、統一への姿勢は後退し、現状維持を望むのではないだろうか。少なくとも、分断を日常的なものとして受け入れて生活してきた人々は、統一によって自らの生活が犠牲になることを好まないだろう。一方、③では統一が重要なイシューである。分断から日が浅く、また変革を望む傾向にあるため、統一が非常に重要な意味を持つだろう。この場合、統一のための手段は、他のエリアの場合と比べると選択肢の幅がより広く、武力による統一の可能性もある。分断から長い時間がたち、しかし経済水準がさほど高まらなかった場合の④では、社会の変革が求められるものの統一が強く求められるかどうかはわからない。しかし、変革のための一つのオプションとして統一が選択される場合もあるだろう。

このように仮定した四つのエリアに、実際の分断と統一の事例を当てはめてみる。事例としてドイツ（1945年分断、1990年統一）、イエメン（1967年分断、1990年統一）、ベトナム（1954年分断、1975年統一）を当てはめたのが次の図である。

①のエリアに該当すると思われる事例がないため、①と②についてはドイツを60年代と80年代に分けて分類した。

経済の発展↑	
60年代西ドイツ	80年代西ドイツ
①	②
時間→	
③	④
ベトナムの武力統一	イエメンの統一

①は、60年代西ドイツの例である。西ドイツは1950年から10年の間に「経済の奇跡」を達成した。そして50年代末までには非常に安定した社会が築かれたが、60年代（61年ベルリンの壁構築）は内政的・外交的に停滞した時期となった。

西ドイツが主権を獲得し、経済的政治的に西ヨーロッパに統合される時期の後まで再統一を＜引き延ばす＞というアデナウアーの政策は——ヴィリー・ブランドとエゴン・バルが60年代から開始したその後の東方政策がなければ——成果なく終わらざるをえなかった。⁵

一定の経済力を獲得した60年代の西ドイツでは、統一に対する優先順位の低下がみられ、統一を先延ばしにする政策がとられた。

②は、分断から長い時間がたち、経済水準がより高くなった80年代西ドイツの例だ。70年代、ブランドの「新東方外交」は、ハルシュタイン原則⁶から一転して、東西間の緊張緩和を推進しようとした。この「新東方外交」

5 H・K・ルップ『現代ドイツ政治史』、彩流社、2002、pp.173-174。

6 ハルシュタイン原則とは、アデナウアー首相によって表明された建国以降の西ドイツの対東ドイツ政策である。これは西ドイツの単独代表権を主張し、東ドイツを国家承認した（ソ連以外の）国家とは国交を断絶するというものであり東ドイツの孤立を狙った

により、西ドイツは東ドイツと 72 年に両独基本条約を締結、翌年 73 年には正式に外交関係を樹立し、また同時国連加盟を果たすという成果を出した。

この「新東方外交」で行われた東ドイツに対する承認は、西ドイツの単独代表権の放棄であり、分断を永久化するという立場から非難された⁷。しかし、この「新東方外交」の方針は受け継がれていき、結果的に東西ドイツの接近をもたらしたのである。

③は、武力によって共産化統一が行われた、南北ベトナムにおける強硬な統一の例である。分断されたベトナムは、北へはロシアと中国、南へはアメリカが支援を置こう会うことで冷戦の中心軸となっていた⁸。また、1965 年以降は北ベトナム（共産勢力）と米軍との戦争の様相を示しており、1973 年 1 月 29 日に調印されたパリ協定によってベトナム戦争が終結した後にも戦闘は続き、1975 年 4 月 30 日に南ベトナムが降伏、南ベトナムの消滅によって 35 年に及んだ戦争が終了し南北統一が達成された。これは共産政権による、武力統一の事例である。

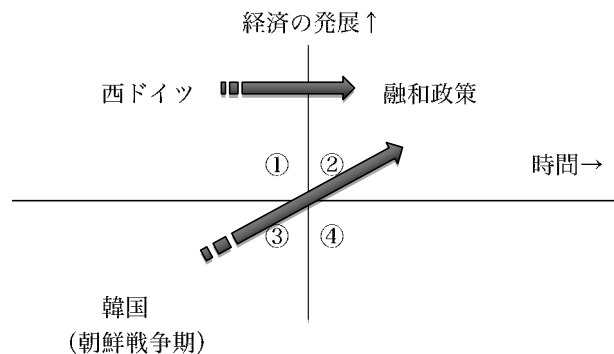
④は、二度の国境衝突を経て、合意による統一が行われたものの、その後再分断の危機が訪れたイエメンの例だろう。イエメンでは理念の対立、統一方式の違いにより南北が敵対、統一を困難にしていた。また、2 度にわたる武力衝突が生じた。

南北イエメンは、協商を通じて統一への合意を行い、統一自体は平和的に行われたが、統一後には、権力分配の問題に関して葛藤が生じ、その結果、内戦が勃発することとなった。が、このイエメンの事例は統一後内部統合がうまく行われなければ、再度分離することもあるという貴重な教訓を残した⁹。

統一は、人口や経済力の優勢な北イエメンが主導となって行われたが、非常に経済水準の低いイエメンでは、両国がほとんど同等の立場で統合されるという形態がとられた¹⁰ 点は、東西ドイツにおける吸収統一やその後の「後遺症」などとの差異点である。

このように、④のエリアに位置するイエメンでは、統一がいったんは選択されたが、統一は変革のための一つのオプションにすぎず、問題が起こればまた再分離しようとする動きがみられ、統一に対する優先順位の低下がみられるのである。

では、朝鮮半島の場合をみてみよう。



分断後のドイツが 50 年代にはすでに一定の経済力と安定的な社会を築いており、統一を先延ばしして経済力を伸ばそうと試みた①から、その後「新東方外交」によって東側との接近を試み、共存の道を探ろうとする融和政策的な態度（②）へ移動していったという点については前述のとおりである。

一方、朝鮮半島は分断直後 1950 年には、武力による統一の試みである朝鮮戦争が勃発した（③）。その後、韓国では 70 年代に「漢江の奇跡」と呼ばれる経済成長を経験、北朝鮮を上回る経済的繁栄を達成した。分断から長い時間が経ち、南北で社会文化の異質化が進んだ。そして韓国においては、統一のための統一政策ではなく、北朝鮮との「共存共栄」のための「統一政策」（②）が施行されるようになったのである。このように、朝鮮半島では、③から②へと統一観（姿勢）が推移するという、ドイツよりも急激な変化が見られたといっていよう。

ものであった。このハルシュタイン原則は、ブラントによる「東方外交」が始まるまで、西ドイツの基本的な外交方針であった。

7 김영탁『독일통일과 동독재건과정』한울, 1997, p.71.

8 박성관, '베트남 통일의 현실과 그 평가: 북한의 변화 방향과 한반도 통일에 대한 시사점', 경남대학교 극동문제연구소 "동북아연구", 2001

9 김영탁, 前文獻, p. 416

10 金秀南, '南北에멘의 統一過程과 教訓', "국방연구", 1991

3. 韓国における「統一政策」・「統一観」の変遷

韓国においても「統一観」の変化がみられるということを見てきたが、では大韓民国建国以降の「統一政策」の変遷と、それらに対する韓国社会の認識の変遷はどのようなになっているのだろうか。ここでは、韓国の主要新聞の一つ、「朝鮮日報」の記事数¹¹を分析して概観したい。

この分析は、韓国の主要紙の一つである「朝鮮日報」を使用して行った。この「朝鮮日報」を使用したのは、朝鮮半島分断以降から現在まで存在するもっとも歴史の長い新聞社であるということ、またそれらの全記事を検索、閲覧することのできる新聞だからである。

統一議論は、時代によってその内容が変化する。この分析では、大統領の任期ごとに統一関連のキーワードを入力し、時期ごとに、どのキーワードが比重を持って語られているか、そしてその変遷についてみていくこととする。

分析の時期は、大韓民国成立の1948年から盧泰愚大統領の任期終了の2008年までである。50年以上にわたる長い期間であるため、新聞のページ数や全記事数自体が大幅に増加している。そのため、「統一」と「北朝鮮¹²（北傀＋北韓）」という言葉を含む記事を抽出したのち、これを母数とした。その後、統一議論の方向性を表していると考えられるキーワードを含む記事を抽出し、その割合を出した。

統一関連のキーワードは、「統一方案」、「統一政策」、「戦争（＋北朝鮮）」、「武力（＋統一）」、「段階（＋段階）」、「援助／支援（＋北朝鮮）」の六つである。

「統一方案」、「統一政策」というキーワードは、「統一」の方法やそのための政策について、どのような議論がなされているのか、またそのような議論に国民やメディアがどれほど参与できていたのかという点について、時期を追ってみることができるのではないか。

また、「戦争（＋北朝鮮）」、「武力（＋統一）」の二つでは、朝鮮半島の武力統一に関する議論の推移をみることができ、「段階（＋段階）」、「援助／支援（＋北朝鮮）」では韓国の北朝鮮への支援や、「段階的統一論」といった緩やかな統一方式についての議論の推移をみることができる。

ここで表われている韓国国民の「統一観」と、韓国政府による統一政策のズレがいつ生じ、またそのズレがいつ解消されるのかという点に注目してみたい。

「統一観」の変遷は、韓国で最も歴史が長く、また発行部数の多い日刊紙『朝鮮日報』に登場する単語の数とその変遷から見ていきたい。

そして以下の表は、「統一方案」・「統一政策」・「戦争」・「武力」・「段階」・「援助／支援」という6つの単語が含まれる記事数を、「統一」と「北韓（北朝鮮）」という単語を含む記事数を母数として、その割合を出した表である。

11 朝鮮日報アーカイブ (http://srchdb1.chosun.com.offcampus.lib.washington.edu/pdf/i_archive/)

12 韓国では北朝鮮に対し、分断初期には「北の傀儡政権」という意味の北傀（북괴）という言葉を使用することが多く、また現在では北韓（북한）という名称がつかわれている。ここでは、北朝鮮を指す言葉としてこの二つを足して母数としている。

	大統領		任期	母数 (件)	統一キーワード (%)		大統領		任期	母数	統一関連キーワード (%)
1	李承晩	第一共和国	1948 年 7 月 24 日～ 1952 年 8 月 4 日	統一：304	統一方案：0.6 統一政策：0 戦争：7.2 武力：0.3 段階：0 援助 / 支援：1.3	9	朴正熙	第四共和国	1978 年 7 月 6 日～ 1979 年 10 月 26 日	統一：170	統一方案：0 統一政策：2.9 戦争：0 武力：0.6 段階：0 援助 / 支援：0.6
				北：406	統一方案：0.5 統一政策：0 戦争：5.4 武力：0.2 段階：0 援助 / 支援：1.0					北：807	統一方案：0 統一政策：0.6 戦争：0 武力：0.1 段階：0 援助 / 支援：0.1
2			1952 年 8 月 5 日～ 1956 年 5 月 14 日	統一：824	統一方案：1.8 統一政策：0.7 戦争：2.4 武力：1.0 段階：0.1 援助 / 支援：0.8	10	崔圭夏		1979 年 12 月 6 日～ 1980 年 8 月 16 日	統一：57	統一方案：0 統一政策：1.8 戦争：0 武力：0 段階：1.8 援助 / 支援：3.5
				北：942	統一方案：1.5 統一政策：0.6 戦争：2.3 武力：0.8 段階：0.1 援助 / 支援：0.7					北：315	統一方案：0 統一政策：0.3 戦争：0 武力：0 段階：0.3 援助 / 支援：0.6
3			1956 年 5 月 15 日～ 1960 年 3 月 14 日	統一：736	統一方案：7.3 統一政策：6.0 戦争：1.1 武力：0.1 段階：0 援助 / 支援：1.0	11	全斗煥		1980 年 8 月 27 日～ 1981 年 2 月 24 日	統一：53	統一方案：1.9 統一政策：3.8 戦争：0 武力：3.8 段階：0 援助 / 支援：1.9
				北：1830	統一方案：3 統一政策：2.4 戦争：0.4 武力：0.1 段階：0 援助 / 支援：0.4					北：359	統一方案：0.3 統一政策：0.6 戦争：0 武力：0.6 段階：0 援助 / 支援：0.3
4	尹潽善	第二共和国	1960 年 8 月 13 日～ 1962 年 3 月 22 日	統一：534	統一方案：2.6 統一政策：4.3 戦争：0.2 武力：0 段階：0.6 援助 / 支援：0.6	12		第五共和国	1981 年 2 月 25 日～ 1988 年 2 月 24 日	統一：950	統一方案：1.2 統一政策：8.7 戦争：3.6 武力：0.9 段階：0.2 援助 / 支援：3.0
				北：705	統一方案：2 統一政策：3.2 戦争：0.1 武力：0 段階：0.4 援助 / 支援：0.4					北：6375	統一方案：0.2 統一政策：1.3 戦争：0.5 武力：0.1 段階：0.03 援助 / 支援：0.5
5	朴正熙	第三共和国	1963 年 10 月 15 日～ 1967 年 5 月 2 日	統一：467	統一方案：3.4 統一政策：2.6 戦争：5.1 武力：0.2 段階：0.4 援助 / 支援：0.4	13	盧泰愚	第六共和国	1988 年 2 月 25 日～ 1993 年 2 月 24 日	統一：5271	統一方案：3.9 統一政策：7.3 戦争：12.8 武力：4.4 段階：10.5 援助 / 支援：22.4
				北：1317	統一方案：1.2 統一政策：4.2 戦争：1.8 武力：0.1 段階：0.2 援助 / 支援：0.2					北：8915	統一方案：2.3 統一政策：4.3 戦争：7.6 武力：2.6 段階：6.2 援助 / 支援：13.2
6			1967 年 5 月 3 日～ 1971 年 4 月 26 日	統一：424	統一方案：0.9 統一政策：5.9 戦争：4.5 武力：1.4 段階：1.4 援助 / 支援：0	14	金泳三		1993 年 2 月 25 日～ 1998 年 2 月 24 日	統一：7439	統一方案：1.9 統一政策：4.0 戦争：23.1 武力：3.8 段階：10.6 援助 / 支援：54.5
				北：3355	統一方案：0.1 統一政策：0.7 戦争：0.6 武力：0.2 段階：0.2 援助 / 支援：0					北：16682	統一方案：1.2 統一政策：3.7 戦争：10.3 武力：1.7 段階：4.7 援助 / 支援：24.3
7			1971 年 4 月 27 日～ 1972 年 12 月 22 日	統一：373	統一方案：0.8 統一政策：4.0 戦争：0 武力：1.3 段階：0.8 援助 / 支援：1.3	15	金大中		1998 年 2 月 25 日～ 2003 年 2 月 24 日	統一：8622	統一方案：1.9 統一政策：4.0 戦争：24.4 武力：2.7 段階：5.7 援助 / 支援：51.1
				北：931	統一方案：0.3 統一政策：1.6 戦争：0 武力：0.5 段階：0.3 援助 / 支援：0.5					北：19394	統一方案：0.8 統一政策：1.8 戦争：10.9 武力：1.2 段階：2.5 援助 / 支援：26.4
8		第四共和国	1972 年 12 月 23 日～ 1978 年 7 月 5 日	統一：960	統一方案：0.3 統一政策：1.5 戦争：0.7 武力：0.3 段階：0.4 援助 / 支援：1.4	16	盧武鉉		2003 年 2 月 25 日～ 2008 年 2 月 24 日	統一：7721	統一方案：0.8 統一政策：2.8 戦争：30.7 武力：3.1 段階：6.4 援助 / 支援：47.6
				北：4183	統一方案：0.1 統一政策：0.3 戦争：0.2 武力：0.1 段階：0.1 援助 / 支援：0.3					北：17055	統一方案：0.4 統一政策：1.2 戦争：13.9 武力：1.4 段階：2.9 援助 / 支援：21.5

3-1. 70年代以前（経済発展以前）

李承晩政権において、「統一方案」や「統一政策」についての議論はほとんどされていなかった。政府樹立後、李承晩が初めて統一問題に言及した際（1948年12月18日）の内容は、国連監視の下で北朝鮮地域の自由選挙を実施し、国会に合流させるという方法で統一を実践するということだった。また、その翌年には、武力の使用の意思があるということを間接的にほのめかした。朝鮮戦争（1950年6月25日～1953年7月27日）以前の李承晩政権における統一政策は、対外的には選挙を通じた統一を公式に標榜しながら、対内的には公然と武力北進統一論を主張していた¹³。また、朝鮮戦争後には、政治的・社会的・経済的不安という状況の下で統一問題を議論したり、提議したりするという状況にはならず、政府もただ漠然と国連監視下の南北総選挙を主張するにとどまった¹⁴。国内では「北進統一論」が有力であったが、「統一方案」や「統一政策」の記事数が2%未満である点、また記事の内容をみても単純に政府による統一方案が紹介されているだけであり、統一議論自体がタブー視されているという状況を読み取ることができる。

「我々は機会さえ与えられるならば、アメリカの兵力による援助がなくとも北朝鮮から共産主義者たちを追い出し、統一することができる。韓国を統一する唯一の道は武力行使のみである。アメリカと国連の同盟国は、我々に北朝鮮から共産主義者を追い出し、韓国を統一する機会を与えるべきだ」¹⁵

1959年6月6日、李承晩大統領はこのように主張し、政府としての統一方針を明確にした。また、同時に革新勢力の弾圧が行われた。58年には革新勢力の進歩党党首曹奉岩をスパイ容疑で逮捕、59年7月に処刑した。曹奉岩は、政府の北進統一論と正反対に位置する「平和統一論」を主張していた。非政府次元の統一議論は、タブー視されており、新聞記事も政府側の見解をただ伝えるものとなっているが、この「進歩党事件」は、保守的な国家と進歩的な非政府レベルの統一論が対立しているということを暗示させるものであった。

1960年4.19革命によって李承晩政権が倒れ、尹潽善大統領の下で張勉政権が樹立、統一議論は新しい次元へと突入した。第一共和国の時代に抑制されていた革新勢力の平和統一論が再び台頭し、南北交流論、中立化統一論などが議論され始めた。記事でも統一方案「討論」、「再照明」といった内容が並んでいる。また、武力北進統一論は廃棄された¹⁶。保守的な国家と対立する非政府レベルの統一議論は、この時期、政府の力が弱まったために、息を吹き返したがその期間は非常に短かった。

3-2. 70年代（朴正熙政権による開発独裁）

1961年5月16日、軍事クーデタによって長い朴正熙政権が始まった。朴正熙政権期は、前半の第三共和国（1963年10月15日～1972年12月23日）と維新体制と呼ばれる後期で構成されている。

朴正熙政権が反共をかかげるのは、以前の政権と同じであるが、朴正熙政権で特に力が入れられたのが民衆を貧困から解放するため、経済を成長させるという点である。当時、経済的には韓国よりも北朝鮮のほうが勝っていた。北朝鮮との体制競争に勝つためには、経済面での成長が不可欠だった。

・・・祖国統一を達成するためには何よりもまず、国力をさらに増強して平和統一を固く決意しなければなりません。¹⁷

朴正熙政権は、「先建設、後統一」という路線を明らかにした。しかしこれは、経済の発展を重視し、統一を先延ばしにするということに他ならなかった。

13 신영석, 『역대정권의 통일정책 변천사』, 평화문제연구소, 2008, pp. 50-51.

14 신영석, 同上, p.71.

15 양영식, 『통일정책론』, 박영사, 1997, p.19, 신영석, 同上, p.75. より再引用.

16 신영석, 前掲書, p.85.

17 朴正熙, 「第二十七回（1972年）光復節記念 大統領閣下慶祝辞」

同時に、朴正熙政権はこれまで以上に統一議論を「独占」しようとした。5・16革命のあと、61年7月4日に反共法を公布することによって、事実上政府の意見と違う非政府統一議論は、統制されるばかりでなく容共として罵倒されることとなった¹⁸。

60年代後半に韓国は急激な経済成長を達成し、その高度成長は「漢江の奇跡」と称され、北朝鮮との経済的競争における劣勢状況を相当部分克服したといえる。そのような状況を踏まえ、1972年には歴史的な「7.4南北共同声明」が採択され、南北の和解ムードが醸成された。朴正熙政権前期では、「先建設、後統一」という方針と、「対話のある南北対立」という南北対話の模索が同時に進行された時期であった。

しかし、朴正熙政権後期は「維新独裁体制」と呼ばれ、独裁が強まるとともに、「統一」に関する扱いにも変化が起きた。先の「7.4南北共同声明」（1972年7月4日）の直後、これを利用し¹⁹、数か月後の10月に「10月維新」が宣布された。この措置により、統一議論はさらに抑制された。

この時期の非政府レベルの「統一議論」は、新聞など公のものではほとんど確認することができない。政府の抑圧が非常に強い時期であった。

3-3. 80年代前半（全斗煥政権）

全斗煥政権の後期には1982年1月22日、大統領国政演説を通じて新しい統一方案「民族和合民主統一方案」が発表された。これは、決して新しい統一哲学や発想から作成されたものではなく、既存の統一政策の脈絡を維持しながら補完・体系化したものであった²⁰が、この方案はその後の韓国の統一方案の基盤となった。

また、1984年には「南北間物資交易および経済協力」を提議、分断以降初めて南北の民間交流の道を開くなど、韓国の「対北朝鮮政策」の原型は、すでにこの全斗煥政権後期に出来上がっていたといえる。

以上のように、韓国政府の「統一政策」について簡単に表にまとめると、次のようになるだろう。

<歴代政府の統一政策概要²¹>

	対北朝鮮認識	統一方式
第一共和国	・存在を認定せず ・失地回復の対象	・国連決議による北朝鮮地域のみ総選挙 ・国連監視下の北韓自由総選挙
第二共和国	・存在を認定せず ・失地回復の対象	・国連監視下での北韓自由総選挙
第三共和国	・存在を認定せず ・失地回復の対象	・国連監視下での北韓人口比例による自由総選挙 ・先建設、後統一
第四共和国	・存在を認める ・平和共存の対象	・土着人口比例による南北韓総選挙
第五共和国	・存在を認める ・平和共存の対象	・統一憲法にしたがって総選挙実施 - 南北韓基本関係に関する暫定協定締結
第六共和国	・体制を相互に認める ・善意の 동반者	・南北連合の過渡段階を経て、統一憲法が定めるところにより総選挙実施

3-4. 80年代後半から90年代前半（盧泰愚政権）

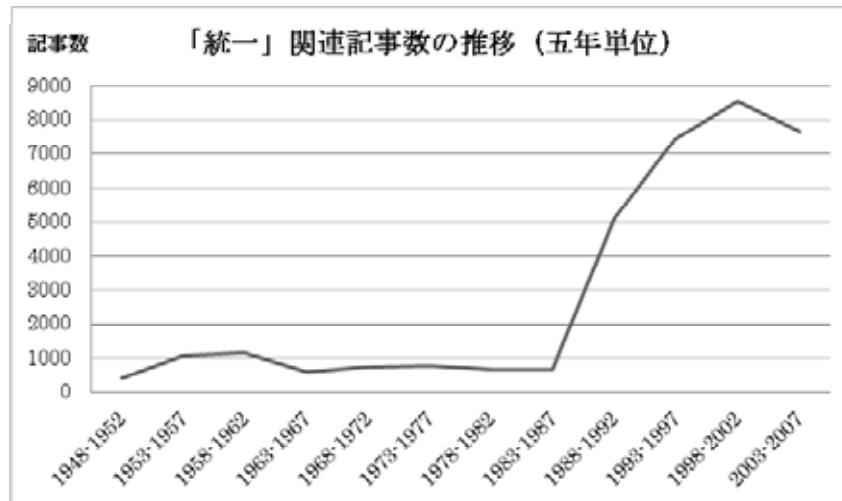
そして、統一関連議論においてもっとも大きな変化の契機となるのが、1987年の「6・29民主化宣言」である。宣言の内容は大統領直接選挙制と、言論の自由など韓国社会の民主化措置である。これを機会として、それまでタブーであった非政府レベルでの自由な統一議論がある程度自由に行えるようになり、統一関連記事の数は爆発的に跳ね上がった。下の図は、「統一」を含む新聞記事の数の推移を五年ごとにみたものである。

18 신영석, 前掲書, pp.117-118.

19 朴正熙政権は、7・2南北共同声明の熱気を利用して、10月17日、非常戒厳令を抜き打ち宣布した。南北対話を進めるため、強力な国家体制が必要で、そのため改憲するという口実だった。一週間後に維新新憲法方案が公告された。内容は任期六年の大統領間接選挙制である。また、大統領の再選禁止規定は削除された。池東旭, 前掲書, p.112.

20 신영석, 前掲書, pp.153-154.

21 신영석, 前掲書, p.196. より一部引用。



また、盧泰愚政権は「北方政策」と呼ばれる、対北朝鮮＜包容政策＞への転換をみせた。それが、盧泰愚政権は1988年には北朝鮮を対決の相手としてではなく「善意の同伴者」とみなすという「民族自尊と統一繁栄のための特別宣言（7・7特別宣言）」を発表し、南北の対決構造を和解へと転換しようとする努力である。

統一は必ず民族自決の精神に従い自主的に、武力行使によらず、平和的に、そして民族大団結を行い、民主的に実現されなければなりません。

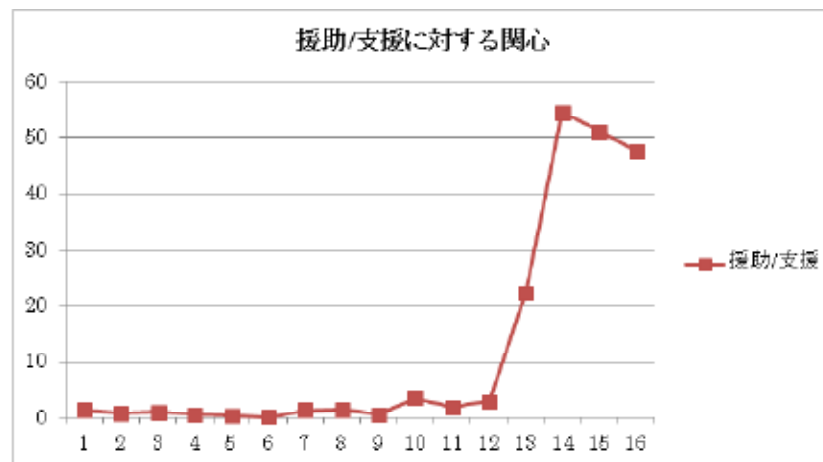
（中略）

南と北は統一をなす中間段階として、まず互いが互いを認定する基礎の上で共存共栄しながら、開放と交流、協力を通じて民族共同体を回復・発展させなければなりません。

南と北がこのように一つの社会的・文化的・経済的共同体を達成していきながら、政治的統合を成熟させ一つの国家を成す統一を達成しなければなりません。²²

この7・7宣言に基づき、政府は共産圏国家との関係正常化を進める「北方外交」を展開し、国際社会における自らの地位を確固たるものにすることに成功した。

このような盧泰愚政権下の80年代後半には、ベルリンの壁崩壊、そして90年に東西ドイツ統一が達成されるという環境下で、非政府レベルにおけるさまざまな統一議論が非常に活発に行われたと評価することができよう。非政府レベルでも、北朝鮮への「援助/支援」が盛んに語られるようになった²³。北朝鮮に対する「援助/支援」に言及する記事が、13代盧泰愚政権期から急激に増加しているということを、以下のグラフによって確認することができる。



22 盧泰愚、「北韓同胞에 自由・人權 보장해야」 第四十四周年（1989年）光復節記念 大統領閣下慶祝辞

23 以下のグラフは「統一」を含む記事の数を母数とし、「援助/支援（+北朝鮮）」を含む記事の割合を出したものである。

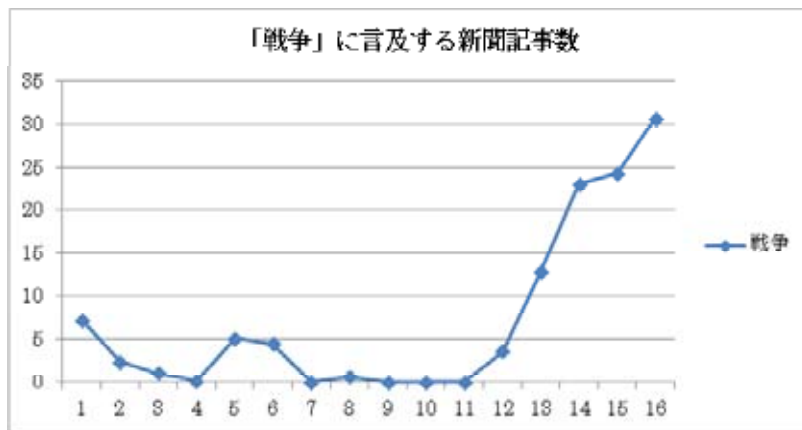
盧泰愚政権期に表面化したのは、北朝鮮への＜包容＞的な「統一観」ばかりではない。民主化によって、自由な統一議論が可能となったこの権期には、公式的な政府の「統一政策」と国民（知識人）のさまざまな「統一観」が噴出し、「統一政策」と「統一観」の間のズレや対立が非常に表面化した時期であったといえるだろう。

3－5. 90年代以降：「太陽政策」の定着

政府による「統一政策」は、盧泰愚政権における統一政策が、90年代以降も大筋で引き継がれていった。金大中大統領は、対北朝鮮政策の目標と原則を「対北朝鮮和解協力政策」として設定して推進し²⁴、「太陽政策」として定着させた。このような包容政策を通じて、北朝鮮に食糧や肥料援助を供給、六年間に九億ドルを支払う現代グループの金剛山観光事業を認可するなど対北和解を進めた。これにより、2000年6月には平壤で南北頂上会談が実現した²⁵。

このように90年代以降は、西ドイツで行われたような「融和政策」、すなわち現状維持を目的とする「統一政策」が一定の成功を得た。北朝鮮への支援が、政府によって大々的に行われるようになり、前のグラフでみたように「援助／支援」に言及する記事の数は、これまでとは比較にならないレベルで急増したが、その記事の内容をみていくと、必ずしも援助に賛成するものではなく、支援の是非を問う論調が急増しているという変化が起きている²⁶。

新聞記事における「戦争」というキーワードの急増も興味深い。この傾向は、盧泰愚政権期から始まり、盧武鉉政権まで継続しており、北朝鮮の脅威を訴える記事は増加を続けている。経済的・軍事的に北朝鮮よりも劣勢に立っていた分断直後にも、北朝鮮の脅威は新聞上で語られていたが、韓国が圧倒的な優位に立った後に北朝鮮の脅威を語る論調が増え続けているのである²⁷。



記事の内容に注目すると、建国初期に見られる「戦争」関連の記事は、朝鮮戦争（1950年6月25日～1953年7月27日）の最中や直後という時期で、実際に直面している脅威に関する記事が多くを占める²⁸。しかし、＜包容＞的な対北朝鮮政策へと転換したと考えられる盧泰愚政権以降（第13代）における、「戦争」への言及記事の急増と、その後も継続して増加する「戦争」言及記事の内容をみると、経済的・軍事的に韓国が優位に立っているにも関わらず、概ね北朝鮮の脅威を訴えるものであるといえる²⁹。

すなわち、80年代後半で表面化した、「統一政策」と「統一観」のズレは、90年代には早くもその差異が狭まり、ズレへの解消がみられるようになっていくのである。「二つのコリア」の現状維持を試みる政府による「統一政策」

24 『조선일보』1998年2月26日の記事より。

25 池東旭、前掲書、p.229。

26 国連人権委が「北朝鮮に支援された食料の大部分を軍部と政府機関、政府が転用している」と発表していることなどを挙げ、北への支援がどのように使用されているのかが不明なままに対北朝鮮支援が行われていることへの不満（〔社説〕「주민 먹여살리라는 유엔 돈 만 데 쓰는 북한」, 『조선일보』, 2007.6.11）だけでなく、日本から北朝鮮に行われる支援に対しても慎重を求める記事も見られる。（〔社説〕「살 의 투명성을」, 『조선일보』, 1995.6.10）など。

27 グラフは、「統一」を含む記事の数を母数とし、「戦争（＋北朝鮮）」含む記事の割合を出したものである。

28 第5代、6代大統領に当たる時期にも「戦争」に言及する記事が増加している。この記事は、韓国がベトナム戦争への派兵を行ったこととも関連し、ベトナム戦争との関連で記事数の増加がみられる。

29 具体的には、北朝鮮による核戦争や、北朝鮮による戦争の脅威が挙げられている。

に対する「肯定」や、北朝鮮に対して感じる脅威の高潮という韓国社会の「統一観」は90年代初期にかなりの部分、一致を見たのである。

4. おわりに

「統一政策」と「統一観」のズレに注目した場合、ズレは80年代後半に表面化し、90年代初期には速やかに「解消」されていったということが、本論の結論である。このように変遷した時期が、まさに盧泰愚政権期であった。

「ズレ」が生じた理由の一つは、「民主化」を転機に、統一議論が急増し、また議論の自由化によるものと考えられる。しかし、ここで注目すべきは、「統一議論」・「統一観」の「変化」の転機が、87年の「民主化」ではなく、90年代初期だということである。

この90年代初期の転機のきっかけとなった、一つの「事件」がドイツ統一という統一事例ではないだろうか。莫大な統一費用に苦しむ、ドイツ統一の目撃は、「統一」に関する現実を韓国社会に突き付けた。

90年代には高い水準に到達していた韓国経済の一方で、経済的・軍事的には非常に劣勢にある北朝鮮への脅威に対する感覚はむしろ増加していった。80年代後半には、「現状維持の統一政策」であると評され、批判されることもあった「政府による政策」は、その後も大筋で引き継がれていくことになるが、90年代初期には、「統一観」のほうに変化し、統一よりも現状維持を肯定的に受け入れる傾向へと変わっていったことで、「統一政策」と「統一観」のズレは「解消」されていった。

二節でみてきたように、韓国の統一を語る場合も、「分断からの時間」と、「経済的発展」に伴う生活保守主義は重要なキーワードであると考えられる。経済成長を達成した韓国政府は、「現状維持」を目的とする融和的な「統一政策」を設定した。これに対する様々な批判は民主化を期に表面化したか、その後「統一観」も現状上維持へと変化していく。そこには、一定の生活水準を達成した韓国社会が、その「統一観」を変化させたためであると考えられる。

この転換期が盧泰愚政権期であるという点、またこの時期のドイツ統一が韓国にもたらした経済に対するリアリズムは韓国社会の「統一観」になんらかの影響を与えたのではないだろうか。また、分断からある一定の時間が過ぎ、90年代韓国において「分断」は日常になっていたと考えられる。

本論を踏まえ、(前回、ITP報告会で発表した)盧泰愚政権期における統一議論の内容分析、韓国社会における「ドイツ統一」議論を通して、韓国の知識人が朝鮮半島の統一について何を主張しようとしているのか、という論文に続けていきたいと考える。

東アジア社会における女性の身体統制に関わる分析

——身体イメージ・統制に関する理論的フレームワークの形成——

速水 奈名子（人文学研究科学術推進研究員）

派遣先：高等師範大学リヨン人文科学学校（フランス）

はじめに

報告者（速水）は、神戸大学大学院人文学研究科博士課程の院生、藤岡達磨氏のメンターとして、2010年1月31日から2010年3月31日（60日間）まで、高等師範大学リヨン人文科学学校に滞在し、イヴ・ヴァンカン教授（同大学副学長）の指導の下で、同氏の研究指導および、自らの研究に従事した。以下、滞在記録と研究成果を、1. 日常生活およびメンター指導の記録、2. 報告者の研究成果、に分けて報告していく。

1. 日常生活およびメンター指導の記録

■日常生活の環境整備

高等師範大学リヨン人文科学学校に滞在し、イヴ・ヴァンカン教授の力を得ることを通じて、リヨンでの生活環境を整えることが可能になった。前半の一か月間は、大学内のゲストハウスに宿泊し、後半の一か月間は、学生寮に滞在することができた。また、大学内における個人研究室および中央図書館を使用することが可能であったために、研究に集中することができた。

■日常生活のパターン

<平日>

午前中は、ゴッフマン・アーカイブスの調査を行い、正午には、藤岡氏と昼食をとりながら互いの研究動向について話し合うことが多かった。また、午後には主にヴァンカン教授の研究室及び、図書館における図書の検討を行った。

<休日>

主に、藤岡氏とともにリヨン市内の商業施設においてフィールドワークを行った。

■滞在期間中の全体的な流れ・主要な出来事

<第1－2週目：1月31日から2月14日>

- ・ヴァンカン教授が2月中旬までパリに滞在される予定だったために、到着からの二週間は、電話・Eメールで連絡を取り合い、生活環境を整えることに専念した。
- ・ENSにおける授業には、コンスタントに参加しなかったが、興味深い授業がある際には、聴講を試みた。2月半ばには、日本の劇作家平田オリザ氏（大阪大学教授）が集中講義を行っていたので、専門外であるが藤岡氏と共に聴講した。

<第3－4週目：2月15日から2月28日>

- ・ヴァンカン教授と面会し、近況報告や今後の調査スケジュールの調整を行った。それを通じて、2週に一度のペースで、'Question Paper'を提出し、ディスカッションを行うことを義務付けられた。
- ・ヴァンカン教授の研究室に設置された、ゴッフマン・アーカイブスの調査を開始した。また、同教授所蔵の、主に欧米で出版されたゴッフマン理論関連図書の検討も同時に開始した。

<第5－6週目：3月1日から3月14日>

- ・神戸大学より油井教授・緒形教授・西橋事務長が視察に来られ、ヴァンカン教授と面会し、藤岡・速水の近況について、及び本プログラムの今後の組織運営について、話し合いがもたれた。
- ・ENS内の「東亜学院」（東アジア研究所）との交流が可能になり、東アジア研究者と議論する機会を得ることが

できた。

・ヴァンカン教授の指導のもと、Strategic Interaction (1968) をはじめとしたゴッフマンの中期以降の著作の再解釈に関するディスカッションを行った。

＜第7－8週目：3月15日から3月30日＞

・ヴァンカン教授とゴッフマン・アーカイブスに関連する、最後のディスカッションを行った。

・ヴァンカン教授より、パリ在住のゴッフマン研究者と交流を持つ機会を与えられ、Eメールで連絡を取り合い、互いの研究動向について話し合った。

■メンター指導

神戸大学より高等師範大学リヨン人文科学学校に派遣された博士後期課程の院生、藤岡達磨氏の調査のテーマは「東アジアにおける公共圏構築の可能性について－消費社会論とトラウマの社会学を架橋する社会理論の構築を目指して」である。同氏はリヨン滞在中に、リヨン市内最大のショッピングモールである「パールデュ・ショッピングセンター」において、フィールド調査を行った。前回の台北滞在中には伝統的な商業形態であり、公共の場を提供する「夜市(Night Market)」制度について考察し、台湾社会における夜市の機能－夜市のような伝統的な商業制度が、都市中心部における大企業型の商業制度とどのように異なり、台湾における人々からどのように受容されているのか－についての考察を行っていたが、今回はショッピングモールという、より(ポスト)近代的でグローバル化の影響を受けた商業施設において参与観察をすることで、消費文化と新たな公共性の可能性を模索することが狙いである。

報告者はリヨンに滞在し始めてから、基本的には平日は大学内で藤岡氏と昼食を共にし、同氏の研究動向について話し合う時間をとるようにした。また、ショッピングモールのフィールド調査などに同行することもあった。指導内容としては、文献の推薦、フィールドノートの執筆法の指導、「夜市」と「ショッピングモール」を比較する際の着眼点(歴史的背景、台湾における納税制度の検討など)を提示した。具体的には、カイヨワ(1958)や井上(1977)¹により提唱されている「聖・俗・遊」理論をもとに消費空間の構造分析を行うように指導した。

生活面の指導としては、上述したように、藤岡氏とは昼食を共にすることで、学術面だけでなく、日常生活における近況を確認することにも務めた。また、学生寮入居に伴う「保険」加入に関わる手続きを行うなど、生活環境を整えることにも力添えをした。

2. 報告者の研究成果

■研究題目

東アジア社会における女性の身体統制に関わる分析－身体イメージ・統制に関する理論的フレームワークの形成

■研究目的

本研究の目的は以下の2点に集約される。(1) イヴ・ヴァンカン教授の指導のもとで、東アジア社会における女性の身体統制²の調査に関する理論的フレームワークを検討・構築すること。(2) 同教授の指導のもとで、報告者が予てから進めてきたゴッフマン理論の総合的・基盤的研究を促進すること、以上である。特に後者については、同教授所有のゴッフマン・アーカイブスの調査に従事することにある(ゴッフマン・アーカイブスについては以下に詳細を記す)。

1 Caillois, R., 1958 *Les jeux et les hommes: le masque et le vertige*, Gallimard=1970

清水幾太郎・霧生和夫訳『遊びと人間』岩波書店。井上俊, 1977『遊びの社会学』, 世界思想社。

2 2009年1月から二ヶ月間、報告者はITPのメンターとして、国立台湾大学、及び台湾中央研究院において、「東アジア社会におけるグローバル時代の自己形成論－身体イメージが自己形成に与える影響」と題した研究活動を行った。この研究活動では、日本との比較研究として：1. 台湾社会における自己形成論に関わる文献調査を行うこと。2. 現代台湾社会における身体と自己形成に関わる経験的調査を、ジェンダーバイアスに配慮しながら行うこと。以上二点に焦点を当てた調査を実施した。詳細については、速水(2010)「東アジア社会におけるグローバル時代の自己形成論－身体が自己形成に与える影響」『ITP 東アジア共生社会構築のための多極的教育研究プログラム：第一期アジアプログラム派遣者成果報告書』神戸大学大学院人文学研究科・国際協力研究科] 参照。

■滞在中の研究計画

(1) 東アジア社会における女性の身体統制の調査に関する理論的フレームワークの検討・構築:

滞在中にヴァンカン教授とのセッションを通じて、E. ゴッフマンの相互行為論、特に彼が提示した相互行為儀礼論、身体儀礼論を検討する。また、ゴッフマンが晩年のジェンダー分析 *Gender Advertisement* (1979) において提起した方法論(ここでの考察は、広告の分析ではないが)も部分的に検討する。相互行為儀礼とは、一定の状況において、その場の秩序を壊さないように、現前する他者にたいして、それぞれの行為者がとる振舞いを指す。つまり、それらは習慣を通じてパターン化された。各状況における「身体のあるべき型」を指している。ここでは多くの女性に採用される特有の「型」を抽出し、日常生活におけるジェンダーバイアスを明らかにしたい。さらに、それが女性の自己形成に与える影響も検討していきたい。また、ゴッフマン理論のみならず、ポスト近代の消費文化社会を生きる女性の分析を行うための身体社会学の諸理論についても、滞在中に検討していきたい。

(2) ゴッフマン理論の総合的・基盤的研究の促進:

滞在中に、ヴァンカン教授の研究室における(同教授作成による)ゴッフマン・アーカイブスの調査を行う。なお、同アーカイブスには以下のような資料が所蔵されている。①ゴッフマンの未刊行資料(学会・研究会などに提出された論文等)、②ヴァンカン教授自身によるゴッフマンへのインタビュー記録、③ヴァンカン教授自身によるゴッフマンと同時代の研究者(研究仲間)へのインタビュー記録、④ゴッフマンと同時代の研究者間で交わされた手紙、⑤ヴァンカン教授を含む海外研究者のゴッフマン研究論文、⑥ゴッフマンが行ったフィールドワークのヴァンカン教授による再調査の記録、以上である。報告者は、2008年9月に ENS LSH にポスドク研究員として採用され、約一か月間同大学で研究活動を行った経験がある。その際、上述の諸資料の検討・複写を行ったが、一ヶ月の滞在期間では、リストの作成を三分の二までしか進めることができなかった。またインタビュー記録の検討、分析についても約半分しか行えていない。今回の ITP の枠組みにおける滞在中を通じて、前回の調査で未完成に終わった作業を完了させ、ゴッフマン理論の総合的・基盤的研究を日本語で進めていくことを目指したい。特に前回の滞在期間中に総合的に収集することができなかった、ゴッフマンのハーバード大学国際問題研究所での滞在記録(1966-67)、およびその年代にゴッフマンによって進められたフィールドワークの記録(カジノの賭博場でのフィールドワークの記録)の検討・複写を進めることを計画している。これらの資料は、ゴッフマンがゲーム理論の受容を基調に展開した「戦略的相互行為論」の理解、解釈を進める上で重要なものである。ゴッフマン社会学における同理論の分析はいまだ日本において十分に進められていないために、アーカイブスにおける情報を整理・分析していくことには、大きな意義があると思われる。また、これらの新たな情報の分析のほかにも、アーカイブスにある資料を再検討することを通じて、報告者自らのゴッフマン理論解釈、および理解を深めていくことが目指される。

■研究成果

(1) 東アジア社会における女性の身体統制の調査に関する理論的フレームワークの検討・構築:

・ヴァンカン教授より、現時点における、日本・台湾での経験的調査(文献調査、インタビュー調査、アンケート調査)の結果を報告し、それぞれに対して批評を得た。特にインタビュー調査については、さらにサンプルを増やし、文化組織以外の一般女性の意識調査も行う必要があるという指摘を得た。

・ヴァンカン教授より、身体統制がフォーコー的な「規律 discipline」から、ゴッフマン的な「戦略的なイメージコントロール」になっているという主張をさらに強化するために、ゴッフマン理論のほかにもリッツァーやフェザーストーンらによる表出性を強調した理論を取り入れる必要性を指摘された。

(2) ゴッフマン理論の総合的・基盤的研究の促進:

・ゴッフマン・アーカイブス調査を通じて、'The Service Station Dealer' (1953) をはじめとした、ゴッフマンの未刊行資料の検討、複写が可能になった。

・ヴァンカン教授によるゴッフマン関連著作の草稿 'Goffman at St Elizabeth' (1991) の検討、複写が可能になった。

・ゴッフマンの愛弟子である Michael Delaney によるゴッフマンによる授業ノート(ペンシルバニア大学)の検討、複写が可能になった。

- ・その他、ヴァンカン教授によるゴッフマン関連インタビュー調査の結果を検討することが可能になった。
- ・現在報告者が進行中の、ゴッフマンによる 1968 年の著作、*Strategic Interaction* の翻訳に関わる問題点（翻訳を進める際の著作権上の注意点や、解釈が困難な箇所の理解補助など）にたいしてヴァンカン教授から意見を頂いた。

今回の研究活動を通じて、まずゴッフマン理論基盤研究を進めていく上で重要な資料を数多く入手することができた。また、現在進行中の「社会的自己形成と身体の関係性」に関わる経験的調査を進めていくための、理論的フレームワークについて、ヴァンカン教授指導のもとで、考察を深めていくことができたことは、大変有意義な経験であった。今後、日本・台湾において、経験的調査によるデータをさらに増やしていくことに専念し、2012 年には調査研究を完了させたい。

■ ITP 派遣以降の研究業績論文

1) 西原和久・油井清光編、速水奈名子「第 12 章 身体統制の変容—礼儀作法からイメージコントロールへ」、無査読、『現代人の社会学・入門—グローバル時代の生き方（有斐閣コンパクト）』（有斐閣）、2011 年 1 月。

国際学会：

2) Nanako HAYAMI, 'Female Bodily Regulation in Public Sphere,' 2nd International Symposium for Young Sociologists, National University of Taiwan (Taiwan), 7 November 2010.

3) Nanako HAYAMI, 'My Research Topic: Sociological Theory and Sociology of the Body,' The Dialogue between Japanese Young Scholars and the Dean of International Association of Sociology [ISA], University of Sophia (Tokyo), 20 November 2010.

4) Nanako HAYAMI, 'Female Bodily Regulation in Japanese Society,' The 4th Workshop on the Encounter of Young Scholars on Asian Studies, The University of Hong Kong (Hong Kong), 6 January 2011.

国内学会：

5) 速水奈名子「ゴッフマン理論とエスノメソドロジーの関係性再考」、第 83 回日本社会学会大会、名古屋大学、2010 年 11 月 7 日。

6) 速水奈名子「ゴッフマンと初期ガーフィンケルの比較分析—状況に依拠した『理論』の展開」、第 3 回社会構築主義の再構築プロジェクト研究会（略称 RSC 研）、大阪府立大学、2011 年 2 月 27 日。

翻訳：

7) 速水奈名子・田村周一・雑賀忠弘（共訳）、王向華・邱愷欣著「諸個人の行動は文化によって規定されず、いかに秩序づけられるのか—台湾人女性におけるポルノグラフィティ使用についての検討—」、『現代社会学理論研究』第 5 号（日本社会学理論学会）、2011 年 6 月刊行予定。

1940・50年代内モンゴルにおけるモンゴル人エリートの動向と文字改革

田中 剛（人文学研究科研究員）

派遣先：ワシントン大学（アメリカ）

はじめに

1947年5月、内蒙古自治区政府（49年に内蒙古自治区と改称）が中華人民共和国の成立に先立って誕生した。それまで中華民国期に内モンゴルで展開した民族運動の多くは、分裂したままの内モンゴルの統一を目標の一つに掲げていた。その意味で、中国共産党の指導下に内蒙古自治区が誕生したことは、内モンゴル全土が初めて政治的に統一されたことでもあった。

内蒙古自治区は中華人民共和国の民族政策の特徴である「民族区域自治」の先駆的モデルといわれるが、47年の成立は内モンゴルの政治的枠組が明確になっただけに過ぎず、なお「未回収」の地域を多く残していた。その後自治区は管轄地域を拡大して、1952年6月に首府を張家口市から綏遠市に移転させ、54年3月綏遠省が正式に廃止されて、その管轄地域を吸収すると、4月に綏遠市を呼和浩特市に改称する。さらに56年には、阿拉善左・右旗と額濟納旗を甘肅省から移すことによって現在の内蒙古自治区が完成する。

このように管轄地域を拡大していく過程で、内蒙古自治区はモンゴル人のさまざまな政治権力と運動をも切り崩し、取り込んでいった。周知のとおり、内蒙古自治区の成立にあたっては、「満洲国」のモンゴル人官僚ハーフンガをはじめとする東蒙古人民自治政府が吸収・合併された。この外にも、たとえば、阿拉善旗定遠營では1949年春、「蒙疆政權」崩壊後北平に蟄居していた徳王が、再び自治運動を進めつつあった。8月には蒙古人民代表大会を開き、本格的に西蒙自治運動を開始したものの、中国人民解放軍が迫ると内部分裂を起し、阿拉善旗のモンゴル王公と徳王のプレーンは中国共産党の和平解放を受け入れた。また、抗日戦争以前から国民党の支配下にあった烏蘭察布盟、伊克昭盟などでは、49年9月19日の「綏遠省平和解放」によって、中国共産党の支配下に入った。

こうした旧支配に関わったモンゴル人は、中国共産党下の内モンゴルにおいて、自治区政府・地方政府のポストが与えられ、阿拉善旗や伊克昭盟ではモンゴル王公がそのまま地方政府の主席に就いた。こうした処遇は、大まかに言えば1954年頃まで採られていた。この事実は、封建・漢奸といった基準で簡単に排除できないほど、彼らの存在が内モンゴル社会において大きかったということであり、旧支配に関わるモンゴル人の「再編」が中国共産党にとっても重要課題であったことを示している。その後、政府のポストから外されたモンゴル人は、学校、図書館、研究機関、あるいは民族・文化工作機関などに配置換えされた。もともと彼らは、抗日戦争以前には北京や南京の高等教育機関、あるいは日本留学などで高度の専門知識を身につけた知識人であり、民族工作を進めるなかで彼らの持つ専門性が発揮されたと考えられる。では、この一連の動きのなかで、彼らモンゴル知識人は内モンゴルの現状と将来について、どのように考えたのであろうか。

その際注意すべきは、1950年代の内モンゴルをめぐる国際環境、主として中ソ関係である。1950年代は、中ソ「蜜月」時代を反映して、内蒙古自治区とモンゴル人民共和国との間で、人的・物的・文化的交流が活発に行われた。この交流によってモンゴル語の近代語彙や社会システムなどが体系的に内モンゴルへ導入されていった。モンゴル人民共和国の文化的影響を強く受けつつ、内モンゴルのモンゴル人エリートのなかでは民族運動で築き上げられてきた価値体系の組み換え、すなわち「知の再編」が起きたと思われる。

現在、中国周辺の台湾、香港で民主化が着実に進みつつあるが、モンゴル国においても同様である。中国の改革開放とモンゴル国の民主化の流れを受け、内蒙古自治区とモンゴル国の関係は近年ますます強くなっている。こうした中国周辺部で進む民主化が、中国大陸政治に与える影響、とりわけモンゴル国の民主化が内蒙古自治区のモンゴル人の政治・社会・民族意識に与える影響について考える際にも、1950年代のモンゴル人エリートの「再編」が持つ歴史的意味合いは大きい。

以上の点を踏まえて、本報告ではモンゴル知識人が中華人民共和国・内蒙古自治区の成立をどのようなものにと

らえ、それに対してモンゴル人がいかに望むべきであると考えたかを、「自治」「民族」「文化」などの主題をめぐる議論を通じて跡づけてみたい。

1. 中国共産党によるモンゴル人エリートの取り込みと民族幹部問題

まず、中国共産党（以下、中共と略称）が大戦終了後、旧政権のモンゴル人エリートをどのように取り込んでいったのか、その過程を簡単に整理しておきたい。中共によるモンゴル人エリートの取り込みは、①「蒙疆政権」の系列を引き継ぐ「内蒙古人民共和国臨時政府」の吸収、②「満洲国」崩壊後に復活を宣言した内蒙古人民革命党の吸収、③国民政府が支配する内蒙古地区の吸収、以上の三段階に分けることができる。では、モンゴル族エリートの動向を中共の取り込み段階に応じて見ておきたい。

その第一段階は、「蒙疆政権」の系列を引き継ぐ「内蒙古人民共和国臨時政府」の吸収である。1930年代に「内蒙古自治運動」を指導した蒙古王公の徳王は、日中戦争が勃発すると、日本の協力の下に「蒙疆政権」を樹立した。抗戦末期、日本の敗戦が濃厚になると、徳力格爾朝克図ら「蒙疆政権」の青年官員は、1944年8月に「蒙古青年革命党」を結成して日本敗戦後に備えた。第二次大戦終了直後の8月下旬、「蒙古聯合自治政府」最高法院長の補英達頼、「蒙古青年革命党」主席の徳力格爾朝克図らは、西蘇尼特旗に「内蒙古臨時人民委員会」（9月「内蒙古人民共和国臨時政府」に改組）を結成した。彼らは内外モンゴルの統一を訴えて、ソ連・モンゴル人民共和国に支持を求めたが拒否され、運動は行き詰った。この動きに対して中共黨員烏蘭夫は「臨時政府」の青年に対して中共の民族政策を懸命に説明し、同時に「臨時政府」の食糧問題を解決した。この工作が功を奏し、政府首脳の選挙をやり直した結果、烏蘭夫は主席となり、他の「臨時政府」メンバーも中共黨員に刷新された¹。

では、中共系に吸収された後の「臨時政府」系の青年は、どのように行動したのであろうか。「蒙疆政権」時期に蒙古軍幼年学校の教員で、蒙古青年革命党の中央委員であった烏力吉那仁（ウリジナラン）の回顧録に沿って確認しておこう²。「臨時政府」吸収に成功した烏蘭夫は、「臨時政府」と蒙古青年革命党が大衆を基盤としない非合法なものだ、として補英達頼と徳力格爾朝克図を批判し、組織を解散させて新たに内蒙古自治運動連合会を設立することを決定した。1945年11月26～28日に張家口で開かれた連合会成立大会には、延安や西蘇尼特のモンゴル人青年だけでなく、旧「蒙疆政権」の官員やモンゴル人学生も出席したが、参加意思を持つ者は全て歓迎されたという。事実、中共晋察冀中央局の電報は、広範な統一戦線の問題に基づいて進歩的中間分子、および自己の誤りを認める「蒙疆政権」の上層分子を吸収して大会に参加させる、と伝えている³。ここからは、旧「蒙疆政権」系の民族運動のリーダーを排除しながら、その下のモンゴル人青年知識分子を積極的に吸収していく姿勢が看取できる。烏力吉那仁は連合会章程起草小組の成員に抜擢され、関連文献をモンゴル文に翻訳するだけでなく、大会ではモンゴル語通訳を努めて彼自身連合会執行委員に選出された。その後も彼は、1947年4月23日～5月1日の内蒙古人民代表会議まで烏蘭夫のモンゴル語通訳を務めている。

第二段階は、内モンゴル東部で展開した民族運動の吸収である。1945年8月、ソ連軍が内蒙古に進軍すると、「満洲国」官員の哈豊阿（ハーフンガ）、博彦滿都（ボヤンマンダホ）、阿思根（アスガン）らは、王爺廟で反日武装蜂起を起こし、内蒙古人民革命党の復活を宣言した。内蒙古人民革命党は1920年代に内蒙古の自立を目指して活動した組織であった。内外モンゴルの統一を主張する哈豊阿らは、内外モンゴル合併の署名を集め、内外モンゴル統一を支持するようウランバートルに向かったが、喬巴山（チョイバルサン）は彼らの請願を拒否した。モンゴル統一の希望を断たれた哈豊阿らは、1946年2月、王爺廟で東蒙自治政府の成立を宣言し、中華民国での「高度自治」を目標に活動の立て直しを図った。これに対してウランフの内蒙古自治運動連合会は東蒙工作団（団長劉春、副団長克力更）を組織し、東蒙自治政府の指導部のもとへ派遣した。烏力吉那仁も工作団の一人であった。東蒙自治政府と協議を重ねた末、3月30日から東西内モンゴルの統合をめぐる承德会談を開くことが決定した。会談は内蒙古の統一工作で中共と内蒙古人民革命党のどちらが指導権を握るのか紛糾した。だが、会談前に烏蘭夫は克力更に対して、会談を有利に進めるために哈豊阿を中共に入党させるよう指示したという。指示を受けて劉春と克力更

1 中共中央統一戦線部編『民族問題文獻匯編』中共中央党校出版社、1991年、972-973頁。

2 烏力吉那仁「在蒙古民族解放運動的洪流中」『内蒙古文史資料』第50輯、1997年6月、193-206頁。

3 前掲『民族問題文獻匯編』、974頁。

は、哈豊阿を入党させ、会談中の問題は哈豊阿と特木爾巴根（トムルバガナ）を通じて処理することができた。中共系の攻勢の結果、中共系の指導権が合意された。5月、東蒙古自治政府は解散した。内モンゴル地域での地歩を固めた中共は、翌1947年5月に内蒙古自治政府を樹立するのである。

そして第三段階は、国民政府が支配する内モンゴル地域の取り込みである。国民政府は抗日戦争中、伊克昭盟や阿拉善旗をかりうじて支配するだけで、綏遠省政府は陝北に逃れていた。第二次大戦が終了すると傅作義の率いる国民政府軍は、八路軍の攻勢を排除しつつ速やかに綏遠省地区を回復し、省政府も陝北から綏遠に戻った。さらに国民党軍は綏東、綏南解放区にも進攻するが、八路軍の反抗を受けて46年3月、停戦に合意した。ところが46年7月に内戦が勃発すると、国共両党は西部内蒙古でも争奪戦を再開した。48年9月に始まった第二次綏遠戦役で勝利した共産党は、綏遠を除く平綏線沿線の各県・各旗を手中に入れた。さらに48年12月の平津戦役によって華北が中共の手中に入ると、綏遠は孤立状態に陥った。これを看取した毛沢東は1949年3月、「綏遠方式」を発表し、綏遠に残る国民党勢力の投降を迫った。これを受けて中共は傅作義側と協議を重ね、人民解放軍と国民党軍残余部隊の勢力範囲などを定めた「綏遠協議」を締結した。なお、伊克昭盟でも8月までに中共が全域を占領した。そして1949年9月19日、傅作義に説得された董其武、榮祥ら39人は「綏遠和平起義」を宣言し、内蒙古地区に内蒙古自治政府と綏遠省政府が成立することとなった。なお、徳王の西蒙古自治運動を支持していた阿拉善旗も、9月に寧夏が解放されると、中共支持を表明した。

では、モンゴル人エリートたちは内蒙古地区の新政権に対して、どのような認識を持っていたのだろうか。亢仁（蒙古名：黙勒根巴図爾）は内蒙古自治政府成立直後、『内蒙古自治報』の「抗戦10周年記念特刊」に以下のような中共の蒙古政策を語っている。すなわち、中共は1922年の第二回党大会で中国本部と蒙・蔵・回の連邦国家を採用して以来、一貫して蒙古民族の自決権を認証し、蒙古民族の自救解放を認めてきた、と説明するが、分離権の問題には触れていない⁴。周知のように中共の民族政策は結党から建国直前まで連邦国家と単一国家のあいだで揺れていたが、この頃には内蒙古の分離を一貫して否定し続けていた。にもかかわらず、亢仁が分離権の問題に触れず、自決権を強調するのは彼の経験が影響している。彼は1926年に蒙古旅京学生会を結成して以来、蒙古青年のリーダーとして蒙古の復興を訴え、「蒙疆政権」では興蒙委員会委員をつとめたナショナリストである。中共は大戦終了直後から旧政権のモンゴル人エリートを積極的に取り込んでいったものの、彼らの考える民族政策は中共の指導の下に一致していたわけではなかった。

モンゴル人幹部の思想統一が問題となったのは、1948年7月2日から約一カ月間、中共中央東北局が哈爾浜で開いた内蒙古幹部会議であった。会議では自治政府成立後一年間の成果を総括し、土地改革、牧区政策について討論した。大会で総結報告をした烏蘭夫は、内蒙古建党中の問題として、1947年5月の中共中央の指示を受けて積極的に党員を拡大してきたが、新党員の政治質量に差が見られ、重大な思想の誤りがあると指摘した⁵。また、高崗も幹部会議での演説で、モンゴル人の新幹部が民族闘争を偏重して階級闘争を軽視し、内蒙古の共産党を漢人がつくったものと見なす傾向を問題に挙げた。そのため、内蒙古に党学校を建設し、幹部に対して中共の民族理論やマルクス・レーニン主義の民族理論、また具体的政策との関連などを学習させるよう提案した⁶。

内蒙古自治政府の幹部養成学校には、王爺廟に内蒙古軍政幹部学校（校長：哈豊阿）があった。1947年8月7日、軍政幹部学校は内蒙古軍政大学第一院（校長：烏蘭夫）に改称され、齊齊哈爾にも内蒙古軍政大学第二院が新設された。このうち齊齊哈爾の軍政大学第二院で学んだツェベクマの回想によれば、大学には思想改造が必要と判断されたモンゴル人青年が多く集められ、中共の思想教育だけでなく、連日開かれる「集会」で自己批判を要求され、「満洲国」時代に受けた日本語・専門教育を徹底的に批判されたという⁷。また、1948年9月9日、内蒙古共産党工作委員会は烏蘭浩特（1947年12月、王爺廟を改称）に内蒙古党校を設置することを決定した。11月に開学した党校には、烏力吉那仁も第一期生として入学して半年間の教育を受けた。なお、49年1月に中共が北平を解放すると、国民政府が運営していた北平蒙蔵学校のモンゴル人青年は、烏蘭浩特の内蒙古軍政大学に移されて再教育を受けたという⁸。

4 亢仁「中共歴年来対蒙古民族政策」『内蒙古自治報』1948年7月7日。

5 前掲『民族問題文献匯編』。

6 高崗「在内蒙古幹部會議上講和」1948年8月3日（同前、1142-1154頁）。

7 B・ツェベクマ『星の草原に帰らん』NHK出版、1999年。

8 前掲「在蒙古民族解放運動的洪流中」。

中共にとって新幹部の思想は問題であったが、建国期の内蒙古地区では幹部の不足もまた問題であった。前述の高崗演説は、抗戦勝利以後の内蒙古工作で 3000 余の幹部を養成したが、管理・財政・経済建設および各種専門技術の幹部が著しく欠乏している、と指摘している⁹。

2. 内モンゴル建設とモンゴル人エリート

1949 年 9 月 20 日から中共、人民解放軍、民主党派、大衆団体、各民族などの代表を集めて中国人民政治協商会議が開催され、中華人民共和国の樹立を決定した。9 月 29 日に採択された「共同綱領」は民族区域自治の採用を明記し、その第 53 条で、「各少数民族は、すべてその言語・文字を発展させ、その風俗習慣および宗教上の信仰を保持しまたは改革する自由を有する」、と規定した¹⁰。共産党が「共同綱領」で民族言語文化の尊重を打ち出したのは、共産党の民族政策を国民政府の同化主義と同一視する少数民族の疑念を払拭するためであった。

民族問題の二つの偏向、すなわち大漢族主義と地方民族主義の克服にあたって、最初のうちはもっぱら大漢族主義の克服に向けられていた。

とりわけ、日本帝国主義や国民政府大漢族主義に対するアンチテーゼを掲げて成立した内蒙古自治区においては、旧政権の奴化教育・同化主義と中共の民族政策との質的違いを明確にするためにも民族言語文化を尊重する必要があった。1951 年 1 月 11 日、『内蒙古日報』は社論「糾正輕視蒙文教育、努力發展民族文化」を発表して、学校教育に見られる民族語言文字を輕視する傾向を非難した。内蒙人民政府も 1 月 24 日、『内蒙古日報』社論に照らして蒙文教育工作を全面的に検査し、改善案を提出するよう、各地中等学校に通知した¹¹。

これを受けて『内蒙古日報』紙上には、各地から意見が寄せられた。例えば、蒙漢雜居地区では漢語の喋れない蒙古児童に対しても漢族学生と同様に漢語を教えようとした結果、教育効果は上がらないばかりか、ある児童は「鳳」の字がどうしても読めなくて毎日泣く始末で、このようなことが続けば蒙古児童の入学に重大な影響を与えると危惧する。また、学校教育のみならず、旗の工作幹部が蒙古老郷に対して宣伝する際にも、専門述語をモンゴル語に翻訳できないため、「優撫工作」をモンゴル語風に発音して説明したところ、漢語の分かる老郷は「優不工作」と聞き取って笑い、ほかの老郷は宣伝を全く理解できない状況であった¹²。

民族言語輕視を危惧する中共は、1951 年 6 月 11 日、烏蘭浩特に内蒙古人民出版社が成立した。該社は新中国建国後、少数民族地区で最も早くに設立された出版社で、通俗讀物と蒙文教科書を出版した。人民出版社でモンゴル文の出版事業を指揮したのは、内蒙古自治政府文教部編訳処から転任した総編室主任の索特諾穆卓瑪綽であった¹³。建国に先立って、内蒙古地区では内戦期からモンゴル語文による中共政策の宣伝工作が行われていた。例えば、1948 年には『中国革命和中国共産党』、1949 年には『論新民主主義』がモンゴル語に翻訳出版された。この作業を手がけたのは、内蒙古自治政府文教部編訳処副処長の索特諾穆卓瑪綽で、「蒙疆政權」時代には政務院長卓特巴扎布の秘書をつとめ、日本早稲田大学に留学した経験を持つ¹⁴。したがって、革命運動に参加したのは大戦終了後のことであり、「蒙疆政權」時代に「反共」を掲げる日本の教育を受けた彼が、中国共産党や毛沢東について十分な理解を持っていたと考えられない。にもかかわらず、彼が中心となって毛沢東の著作などを蒙文翻訳していたという事実は、中共がモンゴル人エリートを積極的に登用したということであり、また中共に民族幹部が不足していたともいえる。1950 年 11 月 24 日の政務院「培養少数民族幹部試行法案」は、民族区域自治、「共同綱領」実施のため、北京に中央民族学院を設立して大量に少数民族幹部を養成することを決定した¹⁵。だが、この計画は 2・3 年をかけて少数民族幹部を養成するもので、できるだけ知識分子を吸収して旧い知識分子の能力を高めることも明記していた。内蒙古人民出版社は 54 年 5 月 5 日にモンゴル文版『毛沢東選集』第一巻を出版している。こ

9 前掲、「在内蒙幹部會議上講和」。

10 『人民日報』1949 年 9 月 30 日。

11 『内蒙古大事記』内蒙古人民出版社、1997 年、460 頁。

12 「奈曼旗人民政府教科檢討忽視蒙文錯誤」『内蒙古日報』1951 年 4 月 23 日。「向蒙古老郷宣傳要用蒙古語」『内蒙古日報』1951 年 11 月 25 日。

13 前掲『内蒙古大事記』、464 頁。

14 「索特諾穆卓瑪綽 致力於保留民族文化」『蒙古寫意』当代人物卷 2、民族出版社、423-426 頁。

15 「培養少数民族幹部試行法案」1950 年 11 月 24 日(中央人民政府法制委員會編『中央人民政府法令彙編 1949 - 1950』人民出版社、1952 年、181-182 頁)。

の翻訳・出版作業に参加したのがサイチングである。大戦中は日本東洋大学に留学して教育学を学び、帰国後は「蒙疆政権」でモンゴル人教育を担当し、大戦末期には「蒙古革命青年党」に参加した。「内蒙古人民共和国臨時政府」解散後は蒙古人民共和国に留学して社会主義教育を受けていた。蒙古人民共和国から帰国した彼は、うち蒙古日報社、内蒙古自治政府文教部編訳処を経て、索特諾穆卓瑪綽と一緒に内蒙古人民出版社に転属された。『毛沢東選集』をモンゴル文に翻訳するにあたって、サイチングが蒙古人民共和国で学んだモンゴル語による社会主義理解の経験が必要だったのである。

1952年8月、「民族区域自治実施要綱」が発表された。これを受けて中共中央と中央人民政府は、1952年末から53年上半年にかけて全国範囲での民族政策執行状況を検査するキャンペーンを実行した。その重点は、強制と命令で漢族地区の方法をそのまま少数民族に持って来たり、無神経な民族的差別を行ったりする「大漢族主義」を批判することだった¹⁶。

「大漢族主義」批判の全国的展開を受けて、1953年5月16日、蒙綏地区蒙古語文工作会議が開かれた。会議に出席した烏蘭夫は、「民族語文を発展させることは党の民族政策を貫徹する重要な構成部分である。広大な幹部中にあるのは計画的に順序を追って蒙文学習を展開し、モンゴル語文の使用範囲を逐次拡大する。党・政・群各機関が牧区・蒙漢雑居区に発する文献は主に蒙文を用いる。蒙文工作幹部を大量に養成し、モンゴル語文工作の指導を強化するよう求める」と報告した¹⁷。

さらに、中共蒙綏分局は1953年7月1日、「關於反对忽視民族語文現象及進一步加強民族語文工作的指示」を発表し、民族語文工作の重要性、民族語文の学習と使用、モンゴル語文翻訳、蒙文工作幹部の培養、蒙古語文研究会の創設を明確にした。同日、この方針にしたがって第一次全区蒙文工作會議が開かれ、内蒙古自治区蒙古語文研究会が成立した。研究会は蒙古名詞述語の統一、辞書編纂、蒙文語法・翻訳の研究、新蒙文の研究、識字工作などを目的とし、哈豊阿を主任、額爾敦陶克陶と清格爾泰を副主任とした¹⁸。

主任の哈豊阿は「満洲国」駐日大使館の要員として東京に滞在していた頃、東京四谷の自宅に蒙古留学生を集めて反日思想・民族主義を訴えるだけでなく、モンゴル語統一の問題についても講義していたという。額爾敦陶克陶は「満洲国」で中学教師をするかたわら、蒙文学会のモンゴル文雑誌『丙寅』の編集をつとめていた。蒙文学会は1926年に北平で創立され、五・四運動の影響を受けて成立した蒙古青年文化団体であり、蒙古民族文化の継承と発揚、蒙古民族の振興を目的とした。その機関誌である『丙寅』は、総合雑誌として歴史・地理・衛生・科学・常識等の内容を含むものであった¹⁹。また、清格爾泰は日本留学経験を持ち、齊齊哈爾の軍政大学で蒙文研究室の主任、語文工作処処長を歴任している。このように蒙古語文研究会に結集したモンゴル人エリートは、建国以前からモンゴル語文に関する研究・実践に従事しており、中共指導下のモンゴル語文研究に対しても十分な意欲と力量を有していた。

また、7日には帰綏市に内蒙古自治区蒙文專科學校が成立し、特古斯が校長となった

蒙古語文研究会が55年6月に編纂出版した『漢蒙簡略辞典』は、標準モンゴル語を確立する上で意義は大きい。辞書編纂だけでなく、亢仁が中心となって蒙古歴史・語言文学・その他1000件以上の資料を収集し、そのなかには蒙文「江嘎爾伝」や「紅樓夢」の蒙文訳本など珍しい民族文化遺産も含まれていた。

また、文学芸術工作についてみれば、蒙古青年の作家や詩人も民族語文を用いて創作活動を進め、民衆の歓迎する作品を発表した。そのなかでも、サイチングは詩歌「迎接国慶節」を発表するなど活躍が目覚しく、内蒙古人民出版社が内蒙古自治区成立10周年を記念して出版物にも収録された²⁰。サイチングは1939年、蒙文学会に入会し、額爾敦陶克陶が編集する雑誌『丙寅』に作品を投稿していた。

3. 新モンゴル文改革

1954年3月6日、綏遠省建制が正式に撤廃され、東西内モンゴルの統一が完了した。内蒙古統一民族区域自

16 『当代中国的民族工作』上、当代中国出版社、1993年、102-107頁。

17 前掲『内蒙古大事記』、482頁。

18 前掲『内蒙古大事記』、483頁。

19 内蒙古図書館編『建国前内蒙古地方報刊考録』1987年、80頁。

20 『光明日報』1957年4月12日。

治の実現は、蒙古民族内部の団結と蒙漢各民族の団結を増強するため、蒙古民族内部に歴史的にある分割統治形成された盟旗間・地区間の阻害を徹底的に削除し、歴史的に残されてきた蒙漢各民族間の阻害を徹底的に削除することであった²¹。

1955年2月28日、内蒙古自治区中ソ友好協会第二次代表会議が呼和浩特で開催された。中ソ友好協会の新会長に哈豊阿が選出された²²。

1955年7月13日、蒙古語文研究会を基礎に、内蒙古自治区蒙古文字改革委員会が成立し、哈豊阿が主任、額爾敦陶克陶が副主任についた。22日には自治区人民委員会が「関于推行新蒙文の決定」を発表した²³。この決定は旧モンゴル文が蒙古民族の団結と発展に果たした歴史的使命を認めつつも、旧モンゴル文の持つ欠点を補うため、蒙古人民共和国で成功した新モンゴル文（35個のキリル文字を新モンゴル文字とする）を採用する、というものであった²⁴。新文字推進にあたっては、準備期間3年、普及期間3年、計6年での実現が計画された。蒙古文字改革委員会主任の哈豊阿は、新モンゴル文字採用の意義を次のように説明した。伝統的モンゴル語文は文言の差が甚だしく、民衆の文字習熟を妨げている。外モンゴルでは1946年に新文字を採用して以来、迅速に識字率はアップし、人民の文化水準は上昇している。内蒙古でも数年来、外モンゴルの新文字出版物が出回り、内蒙古の出版物にも新しい名詞述語が使用されている。中蒙両国の文化交流にも有益である²⁵、と。

内蒙古自治区教育庁は56年から中小学校で開始する新モンゴル文推進の具体的弁法を決定した。56年以後に入学した小学1年生は、完全に新モンゴル文教育を採用する。小学校2年生のモンゴル文課は新モンゴル文課に改める。小学校3年生から中学校の旧モンゴル文課は一律に3コマ減らし、新モンゴル文課を3コマ増やす²⁶。

1956年3月19日、内蒙古自治区党委常委会議は内蒙古自治区蒙古文字改革委員会党組の成立を決定、額爾敦陶克陶が書記に就任した²⁷。

1956年5月22日から29日、呼和浩特で蒙古文字改革委員会と中国科学院少数民族語言研究所準備処の主催による蒙古語族語言科学討論会が開かれた。会議には自治区政府官員や内蒙古・新疆・青海の民族代表のみならず、ソ連の言語学者・謝爾久琴柯やソ連の専門家托達叶娃、蒙古人民共和国の専門家帕利亜も参加した。中国文字改革委員会主任の呉玉章も、内蒙古自治区が蒙古人民共和国の新モンゴル文を採用したことは、蒙古民族が利により便に乗じたものとして新文字政策を評価した²⁸。彼らがモンゴル文字改革を積極的に評価する背景には、新モンゴル文を「科学的文字」と語るように、旧モンゴル文から新モンゴル文の移行を民族の発展とする認識があった。

新モンゴル文推進事業が進められるなか、内蒙古教育庁の責任者は、自治区でおこなわれている新モンゴル文の学習状況について次のようにその成果を強調した。庫倫旗旗級機関は三級幹部会議の忙しい期間であっても新文字学習を停止することなく、会議に参加した幹部の多くが積極的に学習に参加している。教育庁は、新モンゴル文字教科書の購買と学習方法について問い合わせる漢族幹部の書簡を常々受け取っている²⁹。また、『内蒙古人民出版社成立30周年紀念図書目録』によれば、該社が1956年から57年の間に出版した新モンゴル文字の書籍は67件を数える。その分野は教育、文芸、自然科学、農業、医学の多岐にわたり、ソ連、蒙古人民共和国の著作も多く出版されている。このように自治区の決定以来、モンゴル文字改革は順調に進展していたようである。

むすびにかえて

むすびにかえて、モンゴル人エリートのその後を記しておく。

内蒙古地区における反右派闘争は、1957年6月15日付『内蒙古日報』社論「不能只許批評、不許反批評」で幕を開けた。さらに『内蒙古日報』は7月1日に社論「狠狠地打擊右派分子」を発表し、8月になると攻撃は、自

21 『内蒙古自治区史』内蒙古大学出版社1991年、136頁。

22 前掲『内蒙古大事記』、501頁。

23 同前、504頁。

24 『光明日報』1956年6月1日。

25 哈豊阿「推行新蒙文敵意義」『内蒙古日報』1955年9月1日。

26 『光明日報』1956年4月27日。

27 『中国共产党内蒙古自治区組織史資料』内蒙古人民出版社、1995年、167頁。

28 『光明日報』1956年6月1日。

29 『内蒙古日報』1956年10月16日。

治区党政機関、大專院校、民主党派、新聞出版会、科学技術界、文芸界から工人、農民、工商界、学校職員に発展していった。

まず攻撃されたのは、かつての「内蒙古独立」論者ではなく、一貫して中国のなかの内蒙古を主張していた呼和浩特市副市長、内蒙古自治区人民委員会委員の榮祥であった。榮祥は整風運動開始後、中共、蒙古民族、漢民族の団結を破壊することを目標としてきた。清朝時代蒙漢人民は波風も立てずに仲良く暮らしていたが、現在瀕死の状況である。東西内蒙古の統一後、東部から来たモンゴル人は「セクト主義」である。共産党は主観主義と官僚主義である。蒙古民族が漢族の一支族とする「蒙漢同源論」を掲げ、国民党の同化政策を援助した。土默特旗と呼和浩特市のモンゴル族人民は、内蒙古政協主催の反右派大会上で、榮祥のでたらめを粉碎したという³⁰。榮祥攻撃の言説には、内蒙古における反右派闘争の理論が内包されている。中共の民族政策の重点は、各民族固有の言語文化を發展させることにあった。57年2月に毛沢東の講話「關於正確處理人民内部矛盾的問題」は、民族地区に存在する「大漢族主義」と「地方民族主義」のうち、「大漢民族主義」の克服を先決条件としていた。榮祥の「蒙漢同源論」は民族の固有性を否定する「大漢族主義」と見なされ、攻撃対象となったのだった。8月14日、内蒙古自治区人民委員会はモンゴル文版『毛沢東選集』の翻訳人員を奨励した³¹。

1958年3月19日、内蒙古自治区人民委員会は「關於停止推行新蒙文、繼續學習和使用旧蒙文的決定」を發表し、新モンゴル文の推進を停止して旧モンゴル文を引き続き使用することとなった。その理由は、キリル文字を基礎とする新モンゴル文は文字改革の精神に適合しない。このまま新モンゴル文の推進を繼續すれば、モンゴル文字の改革工作と發展において著しい回り道をする恐れがある、というものであった³²。これによって、新文字の普及事業は3年足らずで中止されることになった。この突然の中止決定にいたる状況を詳しく伝える資料は、現在のところ確認できていない。ただ、1957年12月、國務院は少数民族のローマ字化と漢語ピンイン方案との一致を図るよう通達している。中国のモンゴル人が蒙古人民共和国の人々と同じ文字を使うことによって、両者の交流が緊密になり、内外モンゴル統一の動きが出ることを恐れたためとも伝えられる。

30 『光明日報』1957年8月28日。

31 前掲『内蒙古自治区史』、519頁。

32 『光明日報』1958年4月10日。

平成 21 年度総括コメント

国立台湾大学派遣院生・メンターの成果報告

濱田 麻矢（人文学研究科准教授）（小笠原分担当）

緒形 康（人文学研究科教授）（村田分担当）

2009 年度、人文学研究科からは以下の両名をそれぞれ大学院生学生、及びメンターとして派遣した。

小笠原 淳（おがさわら・じゅん） 神戸大学大学院人文学研究科博士後期課程

村田 省一（むらた・しょういち） 神戸大学大学院人文学研究科ポスドク

両者のうち、小笠原は 2009 年 10 月から 2010 年 5 月まで台湾の国立台湾大学台湾文学研究所の留学生として滞在した。

同大学では、「白先勇『孽子』と台北の記憶——野人珈琲室、新公園蓮池、克難街を中心に——」というテーマのもと、同研究所の柯慶明教授についてテキストの精読と台北の街のフィールドワークに励んだ。『孽子』は戦後台湾を代表する作家である白先勇における唯一の長編小説で、先行研究は既に汗牛充棟であるが、彼は「都市空間」「文学地理」という独自のキーワードのもとに、テキスト内に現れる 1970 年代の台北を再構築しようという新しい試みに挑戦したのである。この研究では主人公阿青をめぐる台北の三つの空間が選ばれ、詳細に論じられる。一つ目には反対性的な若者たちが集い、むさぼるように西洋音楽を聴いた喫茶店「野人」、二つ目に阿青たち同性愛者が煌めく都会の明かりから逃げるように潜む新公園の蓮池周辺、三つ目に最下層の住人がひしめき合う台北の貧民窟、克難街。これら三つの空間を実際に見て歩き、歴史的文献や白先勇以外の小説にこれらの場所がどのように描写されているかを収集し、その空間の持つ意味を小説の分析に還元するという形で研究が進められた結果、『孽子』ないしは白先勇研究において今までになかった見地がえられただけでなく、70 年代の台湾文学空間における台北の表象が明らかにされた。こうした「文学都市空間」再構築は、今までにない新しい試みとして、指導教員の柯慶明教授を招いた七月の報告会でも非常に高く評価された。

村田は、小笠原のメンター役として、2009 年度後期（2009 年 12 月～2010 年 2 月）、国立台湾大学歴史学系において周婉窈教授（台湾近代史）のもと短期研修に従事した。

村田は博士論文において、近代上海の都市建設に係る政治経済関係を取り上げて以来、一貫して近代中国における市民社会の「公共圏」形成の解明という課題に取り組んできた。今回の短期研修においては、小笠原の文学テキストや先行研究の収集等に協力する一方で、研修先の大学図書館のみならず多くの文書館に赴いて、日本植民地時代の台湾都市政策の展開に関する文献収集に努めた。その際、村田が目にしたのは、台北市の北西にある新莊街における水道整備事業の実態であった。その最終報告書「日本植民地時代の台湾における水道建設と現地住民の関係」は、台湾総督府の直轄事業として開始された水道建設事業が、日本における同時代の水道建設とどのような差異があるのか、こうした水道事業が 1920 年代に地方公共団体の管轄へと移された後、どのような形で現地住民の直接参加が可能になったのか、そうした住民の地方政治参加が、近代台湾の「公共圏」形成にとっていかなる意味を有したかを議論している。

これらの考察を進める上で、村田が台湾における 1 次史料だけではなく、若い研究者の修士論文を丹念に集めた上で議論を展開していることは、大きな意味のあることだと考える。こうした海外の若手研究者との学術交流によって、当時の水道建設事業を「植民地支配の恩恵を浴した、抗日右派と支配者側の妥協の産物」と考えたり、現地住民の公共事業への参加を「実態のない地方自治」と捉える見方から距離を置くことができたのであろう。将来的には、もっとグローバルな台湾全土を視野に入れた上で新莊街を再考したいという抱負に期待したい。

村田の国立台湾大学短期研修が大きな成果を得たことの 1 つの証明は、この研修終了後、同大学歴史学系の PD に採用され、2010 年度後半の 6 ヶ月を、周教授のもとで再び研究に従事したことに表れている。貴重な海外研修

の機会を氏に提供下さった ITP 推進委員会に対して厚く御礼申し上げたい。

ソウル大学校派遣院生・メンターの成果報告

木村 幹（国際協力研究科教授）

2009 年度は国際協力研究科からは、以下の両名をそれぞれ大学院生学生、及びメンターとして派遣した。以下はその 3 名の研究成果に対する評価である。

米沢竜也（まいさわ・たつや） 神戸大学大学院国際協力研究科博士後期課程
田中悟（たなか・さとる） 神戸大学大学院国際協力研究科助教

米沢竜也（まいさわ・たつや） 神戸大学大学院国際協力研究科博士後期課程

本研究は、参与連帯の立法運動に対する関わりを分析することにより、韓国における市民運動に対する分析の手がかりを得ようとしたものである。その内容は大きく次の二つに分けることが出来る。

第一は先行研究の分析である。支援対象者はここにおいてこれまで韓国において注目されてきたこの団体に関わる研究、就中、その立法政策の成功に関わる研究が、非常に混乱した状況にあることを指摘している。

第二の部分は詳細なデータに基づき、参与連帯の立法活動に関わる分析を行う部分である。支援対象者はここにおいて広範なデータを検討し、この団体の立法政策に関わる様々な側面を明らかにしようとしている。

このような支援対象者の研究は、これまでの韓国における市民運動団体に関わる研究とは一線を画する緻密なものであり、高く評価することができる。今後の博士論文の執筆に向けた資料整理の観点から十分な水準に達している、ということが出来る。

しかしながら、問題がない訳ではない。支援対象者は、参与連帯の活動について様々な側面から分析を試みる一方、依然としてそれが何故にある時期に大きく成功したのかについて、明確な結論を出すに至っていない。今後の研究の進展が強く望まれるところである。米沢の研究については、現在はまだ公表には至っていないが、2011 年 6 月には、アメリカ合衆国におけるアジア研究学会太平洋岸大会、また 11 月には、現代韓国朝鮮学会の年次大会において公表する予定で調整を進めており、今後の飛躍が期待される。

田中悟（たなか・さとる）神戸大学大学院国際協力研究科助教

本研究は、支援対象者がライフワークとする「死者と政治」に関わる研究の一部である。具体的には韓国、就中、山清護国院の建設を巡るケーススタディとなっている。

研究そのものは大きく二つの部分に分けることができる。第一は、ケーススタディの前提となる、韓国の国立墓地とそれを巡る韓国政府の政策についてである。そこにおいて支援対象者は、現在整備中の山清護国院を巡る問題を、これまでの韓国政府の国立墓地政策を巡る歴史的展開の延長線上に位置づけようと試みている。

第二は、具体的な山清護国院建設を巡る状況の展開過程の叙述である。ここにおいて注目されるのは、この墓地の建設が現地住民の強力な反対にあって、遅延として進まないことにある。そこにおいて強調されるのは、国立墓地が迷惑施設として煙たがられるという、新しい状況であり、支援対象者そこに韓国における「死者と政治」の関係の変化を読み取ろうとしている。

支援対象者のこのような研究は、これまでの韓国における国立墓地やそれを取り巻く国家報勲政策に対する研究とは明らかな一線を画するものであり、その実証性の高さと併せて、高く評価することが出来る。本 ITP の主要な研究成果の一つとして、注目すべきものである。田中の研究は極めて高い水準に達しており、その一部は既に学術論文として公表され高く評価されている。

リヨン高等師範大学派遣院生・メンターの成果報告

油井 清光（人文学研究科教授）

2009 年度は、以下の両名をそれぞれ大学院生とメンターとして派遣した。

藤岡 達磨（ふじおか・たつま）神戸大学大学院人文学研究科博士後期課程

速水 奈名子（はやみ・ななこ）神戸大学大学院人文学研究科学術推進研究員

両名のうち、まず藤岡は 2009 年 11 月 30 日から 2010 年 6 月 26 日までフランス・リヨンの高等師範大学・リヨン人文学科の留学生として滞在した。

同大学では、「フランスにおける公共圏と消費社会についての理論的研究」を全体テーマとした調査研究活動に従事した。指導教員は、同大学の副学長であったイヴ・ヴァンカン教授であった。同大学において藤岡は、第一には、フランス、ドイツ、アメリカ、イギリスなど欧米圏を中心とした社会学理論の研究と、リヨン市中心部にある大型ショッピングモールでの現地実態調査による調査とを 2 本の柱とした研究にあたった。

これらにより、台湾・台北市での「夜市」を中心とした前年度における実態調査との比較の視点を発展させ、加えて欧米における社会学理論研究を本格的に深めながら、両者の組み合わせにより、本 ITP の主旨である、欧米理論とアジアの特定地域でのフィールドワークを結合した調査研究を進展させた。指導教員であり、本 ITP のリヨン高等師範大学におけるコンタクト・パーソンでもあったヴァンカン教授は、社会学におけるフィールドワーク手法の専門家であると共に、欧米理論に精通した研究者であったので、こうした藤岡の研究活動の遂行と発展にとって最適の体制であった。

また、速水は、2010 年 1 月末から同 3 月末まで、同じく高等師範大学リヨン人文科学学校に滞在し、この間、藤岡の良き相談相手として、自らの研究テーマである「東アジア社会における女性の身体儀礼に関する分析—身体イメージ・統制に関する理論的フレームワークの形成」に関して積極的な調査研究活動を展開した。速水はもともとゴッフマン研究者としてつとに高名なヴァンカン教授の理論的フレームワークを自らの理論的研究の柱の一つとしてきたので、今回のリヨン高等師範学校滞りは、同教授から直接の教えを受けるまたとない機会であった。したがって、ヴァンカン教授が同校に所蔵するゴッフマン・アーカイブスを活用した調査を進め、上記の女性の身体統制の調査研究のためのより洗練された分析枠組をさらに発展させることができた。これにより伝統的な身体統制のあり方が、グローバル化の影響を受けることを通じていかに変容してきているのかに焦点をあてた研究を進展させた。このような両者の研究は 2010 年の報告会において、高く評価されると共に、藤岡は、成果を学位論文にまとめ神戸大学大学院人文学研究科に提出し、厳正な審査を経て学位授与が決定され、現在はその英訳作業に従事している。速水は、これまでの研究成果を集約し、学術雑誌論文として公表すべく執筆活動を行い、自らの研究の発展と完成のため、積極的な努力を傾けている。

ワシントン大学派遣院生・メンターの成果報告

木村 幹（国際協力研究科教授）（横溝分担当）

緒形 康（人文学研究科教授）（田中分担当）

2009 年度は国際協力研究科から院生を 1 人、人文学研究科からメンターを 1 人派遣した。

横溝 未歩（よこみぞ・みほ）神戸大学大学院国際協力研究科博士後期課程

田中 剛（たなか・つよし）神戸大学大学院人文学研究科ポスドク

横溝の研究は、韓国における統一論について、論じたものである。その目的は大きく二つある。

その第一は、支援対象者が研究対象とする韓国の統一論を議論する為の前提となる理論的枠組みを、作り上げることである。韓国の統一論については、これまで様々な角度から論じられてきたが、それに関わる明確な枠組みは未だ確立されていない。この点について、本研究は同じ分断国家であった西ドイツにおける動向を参照にしつつ、これをくみ上げる努力を行っている。

第二の目的は、この分析モデルの妥当性を、実際の韓国における動向を参照しながら、検証することにある。支援対象者はここにおいて、朝鮮日報のアーカイブを用いた数量的なデータにより、それを行おうとしている。統一論の歴史的変遷については、これまでこのような数量的データによる分析は余り試みられていない。斬新な取り組みであると言うことができ、極めて高く評価することができる。

しかしながら、そのことは、本研究が既に研究成果の完成に至るまでの最終段階に至っていることを意味しない。本研究の分析モデルは、依然として精緻さを欠いており、その因果関係は十分に示されていない。数量的な分析も、それに必要な手順を尽くしているとは言えない。

今後は、これらのモデルとデータを生かしつつ、より具体的な統一論の質的分析を進める必要があるであろう。横溝の研究成果については、日本政治学会、及び韓国の成均館大学における研究会において報告され、高い評価を受けている。

田中は、横溝のメンター役として、2009 年度後期（2010 年 1 月～3 月）、ワシントン大学ジャクソン・スクールにおいて Madeleine Yue Dong 教授（中国近代史）のもと短期研修に従事した。

田中は、その研修期間中、横溝氏の研究における良き相談相手かつアドバイザーを務めた他、自身の研究においても大きな成果を得ることができた。氏は、研修期間の初期に執筆した "Cultural Memory among Overseas Mongolians: The Reconstruction of National Identities and Trends during the 1940's and 1950's" に見られるように、20 世紀モンゴルの表象文化に主要な関心を集中していたが、ワシントン大学図書館が所蔵する豊富な 1 次史料を読破する中で、最終報告書「1940・1950 年代内モンゴルにおけるモンゴル人エリートの動向と文字改革」を執筆し、中華人民共和国建国前後の複雑な文化摩擦の問題に、その考察を広げることになった。

同報告は、『民族問題文献匯編』などの貴重な内部資料や、『内蒙古日報』などの地方新聞を駆使して、1940 年代以降のモンゴル族・漢族の多元的な相互関係を、共産党・国民党が繰り広げた内政問題だけではなく、米ソの国際関係をも視野に入れながら明らかにすることに成功している。氏によれば、中国共産党による内モンゴル人エリートの体制化やモンゴル文化の近代化政策は、大漢族主義を排した民族文化の多元性の認識に基づいており、そうした民族政策のもとで、モンゴル人を主体とした文字改革や言語教育が展開されたのである。終章に暗示されているように、中国共産党のモンゴル政策が排他的なものに転換するのは反右派闘争を経由してからであり、モンゴル文字表記に際しキリル文字の使用を中止するに至ったことは、そうした民族政策のドラスティックな転換を象徴していた。研究の今後の課題としては、こうした政策転換を促したものが何であったのかを、丁寧な文献収集によって解明してゆくことであろう。

以上の学術的な成果に加え、Dong 教授のゼミナール参加を通じてアメリカの中国近代史研究の最新動向に触れるなど、田中の中山大学短期研修は大きな学問的刺激に満ちたものであったと思われる。このような得難い機会を氏に提供下さった ITP 推進委員会に対して深甚の謝意を表したい。

平成 22 年度

第 3 期アジアプログラム

第 2 期欧米プログラム

日本語と中国語と韓国語の行為要求表現の対照研究

楊 吟（人文学研究科博士後期課程）

派遣先：成均館大学校（韓国）

韓国成均館大学に留学する間に、成均語学院に通い、韓国語を3級程度まで勉強した。中国語中国文学学科で朴正九教授に指導を賜り、中国語研究の知識を深めた。そして、韓国で勉強したことをもとに、「第一人称からの恩恵表現に関する日韓対照研究」を行って、韓国日語日文学会で口頭発表をした。ソウルの真冬が－17度に下がるほど、耐えにくい時期もあったが、とても充実した9カ月間を送ってきた。

成均語学院からみる韓国の語学教育

韓国語の学習歴はこれまでまったくなかったが、今回のITP派遣のおかげで派遣前と派遣中をあわせておよそ1年間勉強した。派遣前に、人文学研究科で韓国語の個別指導を受けたり、国際学部の韓国語授業を聞いたり、成均館大学の夏期短期語学研修（2010/8/2～2010/8/20）に行ったりして、入門レベルぐらいまで勉強した。派遣中、成均語学院で冬学期（2010/12/20～2011/2/25）と春学期（2011/3/21～2011/5/27）にわたって、3級（Intermediate）まで上達した。

成均語学院の韓国語正規課程は週5×4時間×10週間の文法会話クラスが基本となっており、そのほか、発音クラス、歌謡クラス、ドラマ視聴クラスなどもオプションで受講できる。ソウル市内の見学旅行も企画されている¹。学費130万ウォンかかるが、交換留学生ということで免除された。大学付属語学院に韓国語コースがあるのは成均館大学のほか、ソウル大学、西江大学、延世大学、梨花女子大学など数多くある。留学生に長期滞在ビザを与え、語学を勉強させ、日本でいえば、日本語学校のような存在であろう。しかし、大学に付属しているだけにこんなメリットもある。一つに、在学の大学生とペアを組んで練習する機会が得られる。成均語学院ではそれを「トウミン」という。留学生にとっては勉強の面でも生活の面でも役立つし、韓国大学生にとっては外国人と交流できるチャンスになるので、留学生と韓国大学生の両方から応募が多いらしい。二つに、学生証が発行されるので、大学図書館を利用するや資料を調べることができる。このプログラムを利用して、研究目的で滞在すること人もいるらしい。

韓国語能力試験（TOPIK）では、韓国語能力レベルを初級（1～2級）、中級（3～4級）、高級（5～6級）のように分けてある。語学院のクラス分けもそれに対応して、1～6級まである。10週間で一つのレベルを終えることを目標としている。本当にハードなスケジュールである。私はだいたい午前中に勉強して、午後に宿題をして、夕方に韓国学生と会って話すことを繰り返してやってきた。徐々に道を聞けたり、買い物の交渉ができたり、韓国人と日常の会話ができたりするようになってきた頃は、本当にうれしかった。2級のときクラスのなかで成績が良かったから、努力賞ももらえた。3級に進んでから、もっとも自分でも驚いたことに、大学院のゼミのような学術的な内容さえ60%以上分かるようになってきた。

日本語の分かる人にとって韓国語が習いやすいこともあるだろうが、世界各国からのすべての学生に短期間にこんな多くの知識を覚えさせることに成功した、語学院の教育方法も大したものと思った。成均語学院の授業にはたくさんの工夫が見られた。まず、成均語学院は、独自のテキスト『Easy to Learn Korean』『Easy to Speak Korean』シリーズを開発した。『Easy to Learn Korean』は文法中心で、『Easy to Speak Korean』は会話中心で、内容が互いに関連しており、生活に密接した場面が設定されている。文法クラスと会話クラスは毎回2時間ずつ、2人の先生が交代して担当していた。文法クラスで習った言葉をだいたい翌週の会話クラス時間にもう一度習う。そうすることで復習効果を図れて、いい循環になっていると思った。教科書の練習のほかに、たくさんの例文、単語と文法の応用練習問題が加えられた。また、Communicative Language Teaching, Task-based Language Teachingといった教授法が実施されたように思われる。先生と学生のインタラクションが多く、学生同士のペア

1 サイト http://home.skku.edu/sli/4/ko_01_02_en.php

ワークまたはグループワークも非常に多かった。単語クイズゲームをしたり、あるテーマについて発表したり、ドラマを演じたり、ニュース番組を作ったりして、遊びながら言葉を勉強したのも面白かった。試験問題は読み・書き・聞き・話しの配点をバランスよく作られたと思った。語彙、文法、読解など筆記問題のほか、作文、ヒアリング、口頭試験まであって、学生のレベルを全面的にチェックしている。学期の終わりに、語学院修了式が行われ、優秀な学生が表彰される。学生の勉強のモチベーションの上げることに目的があるのではないと思われる。

このように、外国人のための韓国語教育に韓国の大学が大変力を入れていることが伺える。一方、韓国の大学生に対する外国語教育も非常に重視されている。英語はもちろん、第二外国語の科目もほとんどの高校、多くの中学校・小学校に開講されている。日本語は第二外国語のなかで一番人気のようで、2009 年海外日本語教育機関調査によると、中学校と高等学校を併せて、2,825 機関で 871,200 人が日本語を学習しているという。大学に入る前にすでに第二外国語をある程度習得できた学生や、大学に入って第三外国語を勉強し始める学生や、数か国語できる学生も少なくないようである。韓国の学生の高い語学力に本当に感心した。さらに、驚いたことは、留学に行ったことがある人の数である。JASSO によると、2010 年に大学学部レベル・大学院レベルと語学留学を合わせて 251,887 人の大学生を海外に送り出したという。外国語学習や留学の支援策もたくさん見られる。例えば、成均館大学には、「トウミン」に参加することで大学生が単位を修得できるという制度がある。また、外国語で授業する科目が全学で数百個もある。語学院は英語ライティング、英語プレゼンテーションなどの指導を実施している。オンラインで利用できる外国語学習コンテンツも充実している。²

成均語学院の韓国語クラスに入る前に、最初の 2 か月間ぐらい Seoul Global Center で韓国語を習った。このセンターはソウルにいる外国人居住者達にいろんな支援サービスを無料で提供している。韓国語講座は週 2 回×12 週のコースで、初級から高級までのクラスがあり、ソウル市内 8 か所ある Village Center で受けることができる。そこでの勉強も大変役に立った。

民間と学校のハイレベルな語学教育のおかげで、ソウルという都市はグローバル化が進んで、多様な文化が尊重され共存しているように感じられる。交通機関、観光地などでは、多言語による表示が至るところに見かけられる。また、インターネット・新聞・テレビにおいても、多言語で韓国事情・文化を絶えず発信し続けている。高い語学力の人材がいるからこそできることであろう。いまどきの韓流ブームにも韓国の語学教育は一役買っているのではないと思われる。

成均館大学における大学教育

韓国の強みといえば、IT 技術が挙げられるだろう。その先進的な IT 技術が大学教育にも十分に活かされている。感心した技術をいくつか紹介しておきたい。一つに、図書館のシステム。例えば、携帯を学生証代わりとして使えたり、本の請求番号を携帯に送れたり、スマートホンのアプリを使って図書館にアクセスできたり、とても便利。また、学術データベースも豊富である。例えば、「RISS」という DB を通して、国内外の膨大な数の学術論文、研究著書がオンラインで見られる。二つに、オンライン学習コンテンツ E-learning システム。内容は外国語やパソコンや数学など幅広く、とても充実している。三つに、学習管理システム icampus³。履修した科目の一覧が見られる。授業に参加する全員が参加できる掲示板に、先生がスケジュールを公開したり、授業の知らせをしたり、学生が宿題をアップロードしたり、質問を書いたりすることができる。授業が simultaneous e+ course（同時録画講義）、100% cyber course（ネット専用講義）、open course（公開講義）の場合、教室に行かなくてもオンラインの動画を見て学習できる。もちろん、何回でも再生でき、復習にも使える。そのオンライン授業の数は数百件に達している。

留学中に中国語研究の方法と知識を習いたいと思い、成均館大学中国語学科の朴正九（PARK Jung-ku）教授に指導を賜った。自分の研究について意見を伺ったり、大学院のゼミと学部の講義を聴講したりした。朴先生は、学部の授業では自分の翻訳著書『現代中国語実用文法』をテキストにを使って、中国語文型を解説されていた。授業中、一人一人の学生に予習してきた文章を翻訳させたり、暗記させたりする。大変だが、文構成を理解したうえで文型

2 写真 1：オンライン学習コンテンツの動画イメージ

3 サイト <http://www.icampus.ac.kr/front/main/MainAction.do?method=list>

を覚えるためにとても役立つようである。しかし、大学に入ってから習い始める人もいれば、入学前にすでに何年間の学習歴がある人や留学したことのある人もいるので、授業の大変さが人それぞれ違うようである。学生のもとの語学レベルがさまざまなので、自然に勝ち抜きのような激しい競争感が教室中に漂っているように感じた。朴先生の大学院ゼミは、博士課程と修士課程の大学院生を合わせて20人ぐらいもいた。中には中国出身の留学生も数人いた。大学院のゼミでは、朱德熙著『文法講義』、趙元任著『中国話語法』、研究論文集など中国語の原本を読んでいた。学生全員に全文を翻訳させておいて、授業中一人の学生にレジメを発表してもらうというふうに進行していた。翻訳によって中国語の理解力を高めることと、参加者の討論によって理解を深めることを目的としているようである。また、4月12日、19日2回にわたり中国語研究のためのコーパスの利用に関する特別講義があった。北京大学中国語言学研究中心が開発したオンラインコーパス CCL⁴の使い方を習った。現代中国語または古代中国語の用例を新聞、雑誌、文学作品、テレビ、映画などから検索できるので、今後の研究に活用したいと思った。

韓国の大学においては、修士課程なら24単位、博士課程なら36単位を履修したあと、試験を受けて初めて学位論文に取りかかることができるそうだ。日本の大学院生より在学年数が長く要求されているわけである。中国語学科の開講科目は、学部向けに基礎中国語、会話、作文、発音、翻訳中国語学、中国文化理解、映像中国語、ビジネス中国語、時事中国語、名詩鑑賞、中国語教育論などがあり、一般大学院向けに中国語学史、中国語文法、文字学、中国文学史、中国演劇研究など、教育大学院むけに中国現代文学講読、中国古文講読、中国古代文学概観などがある。そして、中国語に直接関連するのではないが、儒教精神を建学理念とする成均館大学⁵では、儒学教育の伝統が継承されていて、漢文・漢籍に関連する科目が際立っている。儒学・東洋学部さえある。国際化を目指す一方、韓国の伝統を受け続けるところが成均館大学ならではの魅力と感じた。

日本語・韓国語・中国語・英語を対照しながら

修士論文の段階で「依頼表現の日中対照研究」を行った。日本語の研究に対照という研究のアプローチを取ることとは、「外国語を鏡にすることで、母語話者にとって『あたりまえ』のことがらを『特徴』として捉えなおすことができる」⁶。それとともに、母語や既習言語と対照しながら新しい言葉を習う方法も非常に有効的な習得法と思われる。知っている言語が多ければ多いほど対照できる言語のバックグラウンドが広がるわけなので、新しい言語がより習得しやすくなるのであろう。私は、韓国語を習う際、ずっと母語の中国語、既習の日本語・英語と対照しながら勉強するように意識していたのである。この1年近く、ゼロから韓国語を勉強した経験から、韓国語について分かったことを、自分なりに次のようにまとめてみた。そして、日本語・中国語・英語に関しても新たな発見があった。

1444年に、ハングルは世宗大王と大臣によって作られた⁷。ハングル文字は子音 + 母音、あるいは子音 + 母音 + 子音からなる。つまり、まず母音字母と子音字母があつて、それからその組み合わせによってハングル文字をなす。最小単位が字母という点は、アルファベットに近い性質を持っていると言える。パソコンのキーボード⁸を見てみると分かるように、ほとんど一つのハングル字母が一つの英文字に対応している。日本語の最小単位は仮名で、仮名は母音と子音を統合した形と言えるであろう。

【例】

한국 (韓国) → ㅇ + ㅏ + ㄴ (韓) ㅏ + ㅑ + ㅓ (国)

日本 → に (日) + ほん (本)

表音文字とされるハングルの字母が象形文字の特徴も持っている。子音字母が発音するときの口の形を、母音字母が「天・地・人」を象徴して作られたと伝えられる。サムソンの携帯のキーボードが「天地人式」と呼ばれている⁹。

4 サイト http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/

5 写真2：キャンパスに掲げてある儒学の名言

6 国立国語研究所編 (2002) 『対照研究と日本語教育』 くろしお出版

7 写真3：ハングルの発明した世宗大王

8 写真4：韓国語のキーボード

9 写真5：サムソンの携帯のキーボード

【例】

ㄱ [k/ □]…舌
 ㄴ [n]…舌
 ㄹ [m]…口
 ㅅ [s/ □]…歯
 ㅇ [ŋ]…喉
 ㅈ…ㅊ (人) + ㅊ (天)
 ㅊ…ㅊ (人) + ㅊ (地)

しかし、ハングルが誕生した後も、長い間公的文書においては漢字だけ、あるいは漢字とハングルの交ぜて使っていた。1970 年から始まった漢字廃止政策とハングルの便利さとが相まって、現在に至っては、通常の読み書きはハングルのみになっている。韓国内で漢字が使用される場面は、道路標識や公共交通機関、ニュースなどにおける国名の漢字略称、新聞の見出し文字、「大」など特定文字を強調したい場合、仏教関係、冠婚葬祭などに限られるそうである¹⁰。一方、若い世代が漢字を書けなくなったことが懸念されている。文字表記政策をめぐって、韓国内で長年揺らいでいる難題のようである。

韓国語における漢字と比べて、日本語における漢字の役割について改めて考えさせられた。日本語は漢字と仮名で表記されているが、実際は 1 つの漢字に対して音読みと訓読みの幾通りの発音もあって、振り仮名をつけないと正しい読み方が分からない場合さえある。しいていえば、仮名だけでも日本語の意味疎通ができる。小学生や外国人向けの教科書はまさに仮名だけで書かれているものが多い。漢字はむしろ形の意味が大きいのではないかと思われる。同じ漢字圏の中国語・日本語・韓国語を比べてみると、中国語においては、漢字が唯一の表記法で、表音表意の役割が同等だと考えられる。韓国語においては、形として現れないものの、6 割の単語が漢字語というほど、意味の上では漢字をなくしては考えられないので、背景的に強い存在感を持っている。日本語においては、表音の役割が仮名に分担されたぶん、主に表意の役割を持っていると言えよう。

韓国語はハングルで表記され、日本語の漢字の訓読みに相当するものがなく、読み方が音読み一通りしかない。ただし、実際かなりの同音異義語があるので、漢字を使わない分、前後の文脈から判断することになる。また、音読み一通りしかないとはいえ、音節と音節をくっつけるときに発音変化の法則がたくさんあって、学習の難関となる。文字のまま読むと伝わらないし、聞いた発音が実際の表記と必ずしも対応していない。物事が一利一害とよくいうが、言葉も決して例外ではないということであろうか。

【例】

감사합니다 (感謝します) [カムサハブニダ→カムサハムニダ]
 꽃이 예쁘다 (花がきれい) [ゴッイェブダ→ゴチィェブダ]

発音変化のポイントは音節末に来る子音パッチム（支えるという意味）にある。それに対して、日本語の発音変化（濁音、促音など）はすでに文字表記で表されている。読むときの変則は助詞「は [wa]」「へ [e]」しか考えられない。

韓国語の文法はとにかく日本語とよく似ている。たとえば、Google の韓国語⇄日本語翻訳ツールを使った結果はほかの言語と比べてはるかにいい。私の学習経験でも、日本語の文を韓国語の単語に置き換えればだいたい意味が通じた。なぜなら、韓国語は日本語と同じく粘着語であり、SOV、「修飾語＋被修飾語」の語順を取っているからである。そして、同じように、語幹と語尾があって、テンス、アスペクト、モダリティを表すために語尾活用が必要である。同じくアルタイ語族に属するかはまだ定説がないが、韓国語は日本語よりもアルタイ語に属する可能性が高いとされている。

韓国語を習うとき、次のような日本語との違いが面白いと思った。

10 写真 6：2011 年 1 月 1 日付の朝鮮日報

韓国語は基本的に文節で区切って、1文字分のスペースを空けて書く。ハングルのみの表記なので、スペースを空けないと意味理解の曖昧さを招くからである。

韓国語の助詞・助動詞は前の被修飾語の語尾にパッチムあるかないかによって二通りある。

【例】

이 / 가 (主語)

을 / 를 (目的語)

으로 / 로 (方式)

으면 / 면 (条件)

敬語に代表される待遇表現が非常に発達している。日本語の「だ・である」調、「です・ます」調の2通りよりも細かく分かれている。4通りから6通りあると言われている。

【例】

온다 오네 오신다 오시네 와요 오세요 읍니다 오십니다

(来る)(来はる)(来ます)(来はります)(来られます)(いらっしゃいます)

実際の違いがもっと複雑かもしれないが、その敬意さを簡単に感覚的に日本語に直すと、「一し」が関西弁の「一はる」に相当し、標準語の敬体形と常体形の間に位置しているように思われる。また、動詞に限らず、文の数か所においてすべての語彙を入れ替えなければいけない。それを日本語に直訳すると二重三重敬語のようになる。この問題が日本語学習者の習得における母語干渉の一つとしてしばしば研究される。

【例】

어머니께서 신문을 읽으시고 계신다. (お母さんは新聞を読んでいる)。

(直訳) お母さんにおかれましては新聞を読みはっていらっしゃる。

日本語の敬語のような内と外の区別がなく、家族にも敬語を使う。基本的に、年齢・職位などの上下関係をもとに使い分ける。この意味で、韓国語の敬語は絶対的敬語で、日本語の敬語は相対的敬語だと提唱する研究もある。敬語の使い方と関わっているからか、韓国では知り合ったばかりの人に年齢を聞く習慣があるようである。それから、年齢が上だが親しみのある人に、「～さん」づけより「お姉さん」「お兄さん」と呼びかける傾向があるようである。テンス、アスペクトに関しては、日本語とずれるところがある。

【例】

결혼했어요. (結婚しています。)

(直訳) 結婚しました。

たとえば、上の例では、日本語が完了形を使っているのに対して、韓国語では過去形が使われている。このように、同じに事態に対して、日本語と韓国語では過去なのか完了なのか捉え方が異なることがある。これまで、日本語の過去形「た」の意味用法はたくさん研究されている。近年、ほかの言語のテンス・アスペクトと対照するアプローチを取る研究も見られるようになった。韓国語との対照は許(2004)が挙げられる。韓国語の「eoss」は状態性を有しており、現在の状態をもあらわすことができるが、日本語の「た」と韓国語の「eoss」との比較対照を通して、日本語の「た」は状態性を有していないことを証明できた。

【例】

잘 부탁드립니다. (よろしく願いいたします。)

(直訳) よろしく願いしようします。

잘 모르겠습니다. (ちょっとわかりかねます。)

(直訳) よくわからないしよう。)

たとえば、上の例において、韓国語では「一옆」を加えることによって敬意が増す。「一옆」は本来推量・意志を表す助動詞であって、なぜ敬意につながるのかとても興味深いところである。日本語のモダリティ研究や婉曲表現研究や敬語研究にも示唆を与えそうである。意志・推量を表す助動詞の対照研究は李(2006)が挙げられる。

私の研究の関心から言えば、もっとも興味があるのは言語行動の違いである。サールが speech act を提唱してから、言語行動についての研究がたくさん行われ、そのうち言語行動の対照研究がますます注目されるようになってきた。多くの分野において対照研究が有効的と考えられるが、日本語話者の言語行動を考察するにはなおさら対照研究が欠かせないようである。依頼表現に関して、井出(1986)、李(2008)などの先行研究が見られる。

留学中、対照の観点から申し出表現に関連した研究を行ってみた。2011年4月16日に行われた2011年度韓国日語日文学会春季大会で、「第一人称からの恩恵表現に関する日韓中対照研究」をテーマに口頭発表をした¹¹。この研究は、村上春樹の人気小説『1Q84 BOOK 1』の日本語版と韓国語訳と中国語訳との対照を通して見つけた、日本語の第一人称からの恩恵表現の意味と使い方をまとめたものである。日本語の「Vてあげる」は行為の方向性を明示する場合と、許容する意味(またはそれに近い意味)を表す場合に多く使われていることが分かった。日本語では頼まれてなくて自分からすすんで相手のために何かをする場合、人間関係にもよるが、「Vてあげる」の使用を避ける傾向がある。しかし、韓国語・中国語の訳では「Vてあげる」に相当する恩恵表現が使用された。代わりに、日本語では、恩恵表現を伴わない動詞を使うか、目上の聞き手に動詞の謙譲の形を使うか、または、恩恵を与える視点から恩恵を受ける視点へ変えて表現している。学会で多くの先生方から貴重なアドバイスを頂いた。この研究で得た経験をもとに、博士論文のテーマである行為展開表現の全体像の解明に向けて、今後とも研究を深めていきたいと思っている。

参考文献

井出祥子(1986)『日本人とアメリカ人の敬語行動：大学生の場合』南雲堂

許宰碩(2004)「現代日本語の過去テンスについて--韓国語との対照の観点から」『筑波日本語研究』第9号、筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科日本語学研究室

国広哲弥編(1982)『日英比較講座第5巻 文化と社会』、大修館書店

国立国語研究所編(2002)『対照研究と日本語教育』、くろしお出版

張光軍他訳(2008)イイサ他著『韓国語概説』、世界図書出版公司

国際交流基金「日本語教育国別情報・韓国」

<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/country/2010/korea.html>

独立行政法人日本学生支援機構「ウェブマガジン『留学交流』2011年4月号」

<http://www.jasso.go.jp/about/documents/marikonagashima.pdf>

李泓馥(2006)「日韓両言語の意志、推量を表す助動詞：述語組織全体の対照研究にむけて」『日本語学論集』第2号、東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室

李宜真(2008)「依頼の言語行動に関する日中語対照研究—ポライトネスの観点から—」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』(3)、東北大学高等教育開発推進センター

11 写真7：2011年度韓国日語日文学会春季大会のプログラム



■ 日本語学習

第1 発表会 (1月1日 13:00 - 15:00) 座長: 田代(韓国語)

時間	発表者	発表題目	発表内容	発表場所
13:00 - 13:30	田代(韓国語)	韓国語の発音と文法	韓国語の発音と文法について	韓国語(韓国語)
13:30 - 14:00	田代(韓国語)	韓国語の発音と文法	韓国語の発音と文法について	韓国語(韓国語)
14:00 - 14:30	田代(韓国語)	韓国語の発音と文法	韓国語の発音と文法について	韓国語(韓国語)
14:30 - 15:00	田代(韓国語)	韓国語の発音と文法	韓国語の発音と文法について	韓国語(韓国語)
15:00 - 15:30	田代(韓国語)	韓国語の発音と文法	韓国語の発音と文法について	韓国語(韓国語)
15:30 - 16:00	田代(韓国語)	韓国語の発音と文法	韓国語の発音と文法について	韓国語(韓国語)

第2 発表会 (1月1日 16:00 - 17:00) 座長: 田代(韓国語)

時間	発表者	発表題目	発表内容	発表場所
16:00 - 16:30	田代(韓国語)	韓国語の発音と文法	韓国語の発音と文法について	韓国語(韓国語)
16:30 - 17:00	田代(韓国語)	韓国語の発音と文法	韓国語の発音と文法について	韓国語(韓国語)

写真1：オンライン学習コンテンツの動画イメージ

写真2：キャンパスに掲げてある儒学の名言

写真3：ハングルを発明した世宗大王

写真4：韓国語のキーボード

写真5：サムソンの携帯のキーボード

写真6：2011年1月1日付の朝鮮日報

写真7：2011年度韓国語日文学会春季大会のプログラム

観光開発がもたらす影響力

——中国雲南省麗江市を事例に——

松浦 真弓（国際協力研究科博士後期課程）

派遣先：中山大学（中国）

1. はじめに



観光産業は外貨獲得や雇用創出など経済発展に大きく貢献できる資源であり、開発途上国における貧困問題の解消にも寄与する有力な手段となりうる。しかしその反面、観光開発には、環境を破壊し、その地域に住む人々の生活文化をも変えてしまうほど大きな影響力を持ち合わせている。観光開発を進めていく上で、これらのプラス面およびマイナス面の調和をいかにして保つかがカギとなる。

そこで、本研究では、中国雲南省麗江市を事例に、観光開発によってどのような影響を受けているのか、プラス面として経済的効果を、マイナス面として環境問題について明らかにし、今後持続可能な観光開発を実現していくための課題を提示する。

2. 麗江市の概要

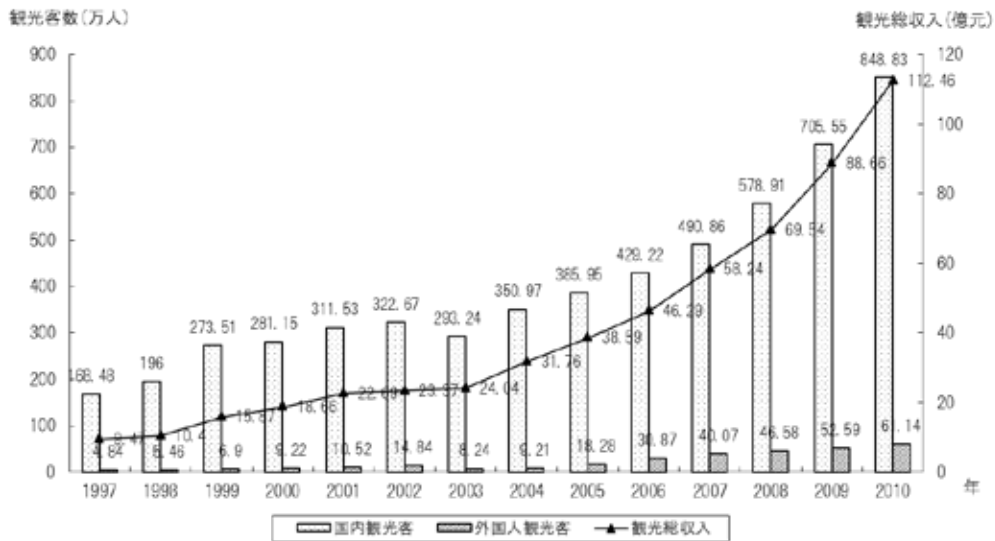
中国雲南省麗江市は中国南西部、雲南省西北部に位置し、海拔約 2400 m の高原地帯にある。また、1 区 4 県から構成され、北側には麗江市のシンボルである約 5600 m の玉龍雪山がそびえ立ち、非常に自然豊かな地域である。麗江市統計局によると、2010 年の人口は 124 万人、そのうち漢民族が 43%、少数民族が 57% を占め、彝族、納西族、リス族など 10 以上の少数民族が麗江市内に居住している。また、2010 年の国内総生産は 143.59 億元と前年に比べ 15.2% 増加し、2003 年以降 10% 以上の成長率を維持している。

3. 観光開発

改革開放後、中国政府は沿海部と内陸部との経済格差を是正するため、少数民族が居住する地域において、ソフト産業である観光産業を取り入れる方針を立てた。そのため、麗江市でも 1994 年以降、観光開発が推進されるようになり、1995 年には麗江空港が開港され、1997 年 12 月には「The Old Town of Lijiang（麗江古城）」として麗江市内 3 か所（大研古鎮、束河古鎮、白沙古鎮）が世界文化遺産に登録された。さらには、2010 年に昆明から直行列車が開通し、麗江へのアクセスがより便利になり、これまで以上に観光客が麗江市を訪れるようになった。2010 年に訪問した国内外観光客が 909.97 万人と前年に比べて 2 割増えている。また、観光収入においても、112.46 億元と前年に比べて約 3 割増加しており（図 3-1）、麗江市 GDP、観光客数、観光収入全てにおいて 10% 以上の成長率を記録していることから、麗江市にとって観光は重要な産業の一つとなっていることが言えるだろう（図 3-2）。

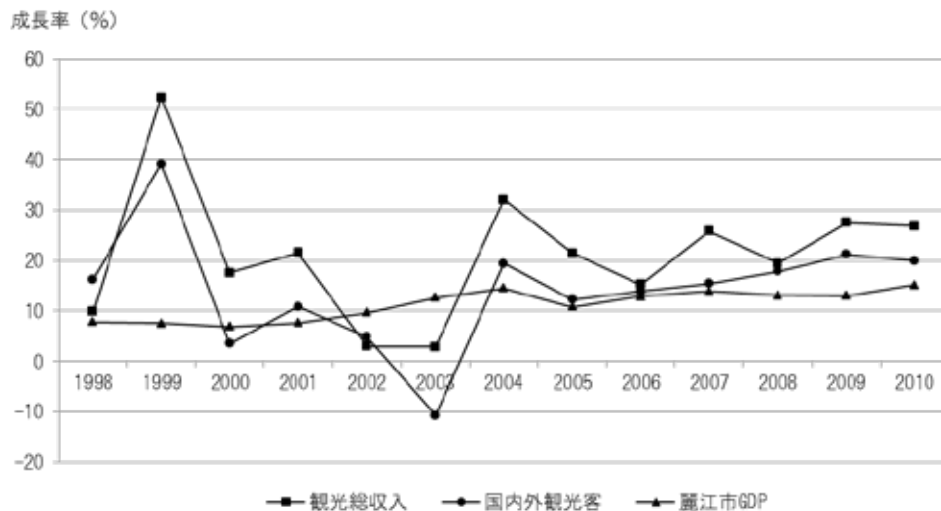
しかしながら、急速に観光地化が進んだことで大量の観光客が流れ込んで来てしまい、そのため環境破壊が進み、また商売目的で外部から移り住む人々が増えてきてしまった結果、原住民の生活文化が大きく変化してしまっている。観光によって経済が発展する一方、いかにして環境および生活文化を守り、維持していくかが今後の大きな課題である。

図 3-1 観光客数および観光総収入（1997 年-2010 年）



出所：麗江年鑑および麗江市旅游局 HP より作成

図 3-2 観光総収入、国内外観光客数、麗江市 GDP の成長率（1998 年-2010 年）



出所：麗江年鑑および麗江市旅游局 HP より作成

4. 環境問題



図 4-1 麗江古城内図（出所：山村（2007））

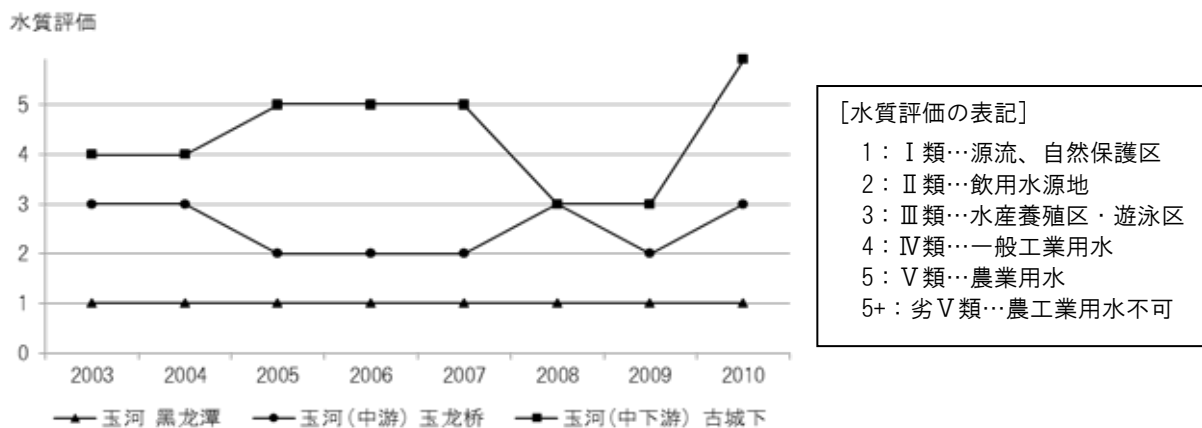
麗江市は四方を山々で囲まれ、北にそびえ立つ海拔約 5,600m の玉龍雪山には 3,200 種の植物や 300 種の葉草など、珍しい動植物が生息し、また市内数か所には水の湧き出る泉があり、非常に自然豊かな地域である。また、麗江古城は古くは少数民族納西族の政治・経済・文化の中心として栄えた都市であり、古城内を幾筋もの河が流れていることから、水文化を重んじる習慣があり、今なおその習慣が受け継がれている（図 4-1）。

ところが、観光開発が推進され経済が急速に成長したことで、生態系への負荷が大きくなってきている。麗江市の

主な水源は黒龍潭、清溪貯水池、三東河の3地点で、黒龍潭は麗江古城内へ、清溪貯水池は耕地または黒龍潭の補充水源として麗江古城内へ供給し、三東河は農工業用水として使われ、現在のところ、水の供給量は足りている。しかしながら、近年の観光地化による水利用の増加や水汚染、気候変動による降水量の増減などの影響により、今の水使用量を続けると将来水不足になる可能性が示唆されている（范他 2008a,b）。

また、麗江古城内における水汚染が非常に目立っている。先でも述べたとおり、黒龍潭から麗江古城内へ玉河によって水が運ばれており、黒龍潭の水質は「Ⅰ類」と非常にきれいだであるにもかかわらず、そこから麗江古城内を通り抜け外へ出るわずか2.4kmで水質が「劣Ⅴ」にまで悪化してしまっている（図4-2）。麗江古城内を流れる玉河の水はそこに住む住民の生活用水であり、飲料水としてでも使用されていたが、今では飲むことはもちろんで、古城内へ入ってくる水は景観用、出ていく水は農工業用水として用途が定められている。このように、麗江市内において水汚染が徐々に問題になりつつあり、特に麗江古城内では深刻化しており、早急に対処が必要である。幸いにも、麗江市の空気に関してはこれまで常に最も評価の良い「一級」を取得し続けている。

図4-2 玉河の水質変化



出所：麗江年鑑、范他(2008a,b)より作成

また、麗江市の経済発展と環境汚染との関係性について、王西琴等（2010）が1994年～2007年の麗江市の一人当たりGDP、排水排出総量、排気ガス排出総量、固体廃棄物貯蔵総量を用いて分析を行っている。その結果、環境汚染の程度が最も高いのは1998～1999年で一人当たりGDPが2,000～3,000元、環境汚染の程度が最も低いのは2001～2002年で一人当たりGDPが3,000～4,000元の時であり、逆U字型からU字型に転じる環境クズネッツ曲線を描くことが分かった。その背景として、麗江市はもともと第1次産業の農業が主要産業であったのが、1994～1996年に第2次産業の工業が盛んになり、工業廃水の排水量が非常に増え環境に大きな影響を与えた。そこで污水处理場の建設や排水規制など環境政策により1997年を境に排水量は減少し始め2000年以降環境汚染の程度は低かった。しかし、その一方で第3次産業の観光業が急速に発展したことでまた環境が汚染され始め、近年建築業や交通運輸業の発展により排気ガスの排出量が2003年以降増え続けている。

「観光」を主軸に経済発展させるためには必ず環境対策も併せて考える必要があり、確かな環境政策が求められる。

5. アンケート調査および経済波及効果推計

2011年6月11日および12日の2日間、観光客および事業所に対してアンケート調査を実施した。その集計結果を用いて、観光客の麗江市の環境に対する評価、観光客の特性、観光客が麗江市において行った消費が自地域にどのような効果をもたらすのか検証する。

5-1. 来訪者アンケート調査

中国人観光客および外国人観光客を対象に、大研古鎮北門および四方街、東河古鎮の3か所を調査地点として、1) 属性、2) 麗江市内での消費金額、3) 麗江市の魅力、4) 麗江市の環境に対する評価について尋ねた。294件の回答を得、そのうち中国人観光客が238件、外国人観光客が56件であった。

5-1-1. 調査結果

(1) 観光客の特性

2009年9月にも同様のアンケート調査を行ったため、その結果と今回の結果を照らし合わせながら観光客の特性を見てみた。その結果、前回の調査では回答数が少なかったため集計結果に対する信憑性が薄かったが、今回の結果でも同じような特性が見られたことから、麗江市を訪問する観光客の特性の傾向として捉えることができるだろう。

まず国籍に関して見てみると、2009年の調査結果と同様、中国人観光客が8割以上と圧倒的に多く、外国人観光客では欧州からの観光客が一番多かった(表5-1)。また、今回中国人観光客に対して、中国のどの地域から来たのか尋ねる項目を設けた。その結果、中南部からの観光客が全体の3割を占め、その中でも広東省からの観光客が最も多く、全体で見ても広東省からの観光客が一番多い地域となっている。次いで麗江市のある西南部からの観光客が多かった(表5-2)。

さらに表5-3にまとめた回答内容を詳しく見ていくと、観光客の中で20代が全体の約5割を占めて最も多く、そのうちの7割が麗江市を初めて訪問している。また30代に関しても20代に次いで2番目に多く、7割が初めて麗江市を訪問している。2009年の調査結果からも、麗江市は20～30代に人気のある観光地と言えるが、20代の再訪率が3割と極めて低く、全ての年代においても再度麗江市を訪れている観光客は少ない。しかし、旅行形態では全ての年代においてほとんどの観光客がパッケージツアーを利用しないで個人で麗江市を訪問しており、全体では7割をも占めていることから、あらゆる年代にとって麗江市は個人旅行でも気軽に訪問できる観光地であることが見取れる。

表5-1 国籍の割合

	中国	アジア	ヨーロッパ	東 北 中	テ オ 多	全 体
2011 年	238 (81%)	2 (1%)	32 (11%)	16 (5%)	6 (2%)	294
2009 年	72 (85%)	3 (3%)	6 (7%)	4 (5%)	0	85

表5-2 中国人観光客の内訳（地域別）

地域	省市	人数	地域	省市	人数
東北部 (17)	遼寧	5	西南部 (50)	雲南	18
	吉林	2		貴州	6
	黒龍江	10		四川	17
東部 (44)	山東	4		重慶	9
	江蘇	8	北部 (33)	河北	9
	安徽	3		山西	4
	上海	6		内 蒙 古	3
	浙江	8		北京	9
	江西	3		天津	8
	福建	12	西北部 (10)	陝西	4
中南部 (73)	河南	9		甘 肅	2
	湖北	11		青 海	2
	湖南	5		新疆ウイグル	2
	広東	33	香 港		5
	広西	10	台 湾		3
	海南	5	不 明		3

表 5-3 回答内容

年齢層（歳）		-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-	不明	全体
回答者数		15	136	86	27	16	13	1	294
平均滞在日数		5							
来訪回数	初回	5	98	61	22	9	12	1	208
	2回	3	24	15	3	5	1	0	51
	3回	4	8	5	2	2	0	0	21
	4回	2	2	5	0	0	0	0	9
	5回以上	1	4	0	0	0	0	0	5
同伴者	ひとり	1	24	11	4	1	2	0	43
	夫婦	0	36	33	3	3	7	0	82
	家族	2	17	11	9	7	3	0	49
	友人	12	53	18	2	3	0	1	89
	同僚	0	6	12	7	1	1	0	27
	その他	0	0	1	2	1	0	0	4
旅行形態	ハック旅行(観光付)	0	9	4	4	4	2	0	23
	ハック旅行(フリー)	0	20	9	2	1	0	0	32
	団体旅行	0	5	7	4	0	2	0	18
	個人旅行	15	102	66	17	11	9	1	221

(参考) 2009年実施アンケート調査結果

年齢層（歳）		-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-	不明	全体
回答者数		1	37	23	15	3	4	2	85
平均滞在日数		5							
来訪回数	初回	0	26	11	9	1	4	1	52
	2回	1	7	6	4	0	0	0	18
	3回	0	2	3	1	0	0	1	7
	4回	0	0	2	1	2	0	0	5
	5回以上	0	2	1	0	0	0	0	3
同伴者	ひとり	0	4	3	2	0	1	0	10
	夫婦	0	10	4	8	0	2	0	24
	家族	0	2	4	0	2	1	1	10
	友人	1	14	8	3	0	0	1	27
	同僚	0	3	2	2	0	0	0	7
	その他	0	4	1	0	1	0	0	6
	不明	0	0	1	0	0	0	0	1
旅行形態	ハック旅行(観光付)	0	0	3	2	0	0	0	5
	ハック旅行(フリー)	0	9	0	4	0	3	0	16
	団体旅行	0	5	0	1	0	0	1	7
	個人旅行	1	23	20	8	3	1	1	57

(2) 麗江市に対する意識調査

中国人観光客および外国人観光客に対して以下の質問をして回答を得た。

①麗江市のどこに魅力を感じますか。

a. 自然環境 b. 伝統建築物 c. ナシ文化 d. 特になし e. その他

②麗江市の環境についてどのように感じましたか。

a. 非常によい b. よい c. あまりよくない d. 悪い

この調査の目的は、観光客が麗江市を訪問してどのように感じているのかを明らかにすることで、今後 CVM の

手法を用いて環境評価を行う際、どこに重点を置いてシナリオを作成すれば良いかを把握するために実施した。その結果、麗江市の魅力に関して、中国人観光客の4割が「自然環境」を、外国人観光客の4割が「伝統建築物」を選択し、中国人と外国人の視点の違いが浮き彫りとなった（表5－4）。また、麗江市の環境に対する評価に関して、中国人観光客の6割が「よい」を、外国人観光客の5割が「非常によい」を選択し、ここでも中国人と外国人との違いが明らかとなった（表5－5）。

表5－4 麗江市の魅力（単位：％）

	自然環境	伝統建築物	ナシ文化	特になし	その他
中国人観光客	42.6	29	27	0.3	1.2
外国人観光客	25.4	40.7	32.2	0	1.7
全体	38.2	32	28.3	0.2	1.3

表5－5 麗江市の環境に対する評価（単位：％）

	非常によい	よい	あまりよくない	悪い
中国人観光客	33	61	5	1
外国人観光客	53	45	2	0
全体	36.4	58.4	4.5	0.7

上記の結果を得て、観光客の感じる魅力と環境に対する評価の関係について表5－6にまとめた。麗江市の魅力について「自然環境」、「伝統建築物」、「ナシ文化」と回答した多くの人は環境に対する評価について「よい」を選んでいる。すなわち、観光客が感じる麗江市の魅力が置かれている環境について良いという評価を出しているが、「自然環境」を選んだ人が「非常によい」より「よい」を多く選んでいることから、観光客に麗江市の魅力をよりよく感じてもらうためには、自然環境に対して何らかの改善が必要であることを示唆している。したがって、今後麗江市においてCVMの手法を用いて環境評価を行う際、シナリオの内容については環境を維持もしくはよりよくするための環境政策を用い、その評価対象として、中国人観光客と外国人観光客では魅力が異なっていたが、麗江市を訪れる観光客のうち中国人観光客が統計局の報告によると9割以上を占めていることから、「自然環境」を評価するような環境政策を考えれば良いことがこの調査を通じて分かった。

表5－6 麗江市の魅力と環境に対する評価との関係（単位：％）

魅力	環境に対する評価			
	非常によい	よい	あまりよくない	悪い
自然環境	19(1)	25	3	0
伝統建築物	7	21(4)	0	0
ナシ文化	9(2)	12	1	0.5
特になし	0	0	0	0.5
その他	1.5(1)	0.5	0	0

回答者総数=100とする

()内の数字は外国人観光客の割合

(3) 消費活動

観光客が麗江市内においてどのくらい消費を行っているのか、直接麗江市で使った金額に加え、団体旅行者に関しては、後日旅行会社を通じて麗江市に落とされるツアー代金も含め、5つの項目（宿泊費、飲食費、交通費、土産購入費、その他）に分けて集計を行った。その結果、一人当たり平均1,845.5元の消費を行っており、項目別に見ると、宿泊費が一番多く、交通費が一番少なかった。また、現地ツアー代金や入場料などその他の費用に対しても比較的多くの消費が行われているため、観光客は多くの観光名所を訪れたり、さらには麗江古城内には旅行あっせん会社が点在しているので、近隣の観光地を訪問したりしているのではないかと推測できる（表5－7）。今回

の結果は、2009 年の調査結果においても同じような傾向が見られた。

表 5-7 平均消費単価（単位：元）

項目	金額	割合 (%)	
		2011	2009
宿泊費	525.5	28	24
飲食費	415.3	23	18
交通費	239.6	13	17
土産購入費	269.7	15	18
その他（現地ツアー、入場料など）	395.3	21	23
合計	1,845.4		

5-2. 事業所アンケート調査

麗江市内にある事業所を対象に、大研古鎮北門および四方街、東河古鎮など麗江市内を調査地点として、1) 事業所および経営者情報、2) 売上高内訳および域内調達率について尋ね、100 件の回答を得た。

5-2-1. 調査結果

(1) 事業所について

各事業所において、いつ開業したのか、また経営者がどこの出身なのか尋ねた。すると、8 割の事業所が 2000 年に入ってからの開業で、その中でも 2010 年に開業している事業所が最も多かった（図 5-1）。また、経営者の出身地では、西南部出身者が全体の約 6 割を占めて一番多く、その中でも約 7 割が麗江市出身者であった（表 5-8）。この結果からも分かるとおり、麗江市は急速に観光地化が進んだことで、観光客が増えたと同時に、麗江市以外から多くの人々が商機を求めてやって来ているため、外からの文化との衝突により原住民である納西族の文化が薄れてしまい、麗江市は大きく変容している（張波 2004）。

図 5-1 開業年別事業所数

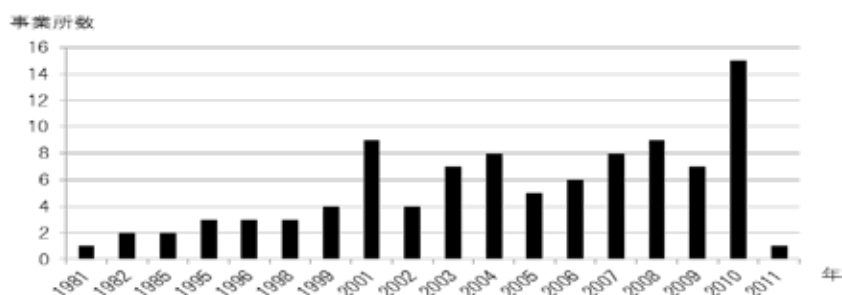


表 5-8 経営者の出身地別

地域	東北部	東部	中南部	西南部	台湾	アジア	パ ヨー ロッ	不明	全体
経営者数	4	16	15	53	1	2	1	8	100
割合 (%)	4.3	17.4	16.3	57.6	1.1	2.2	1.1	-	-

5－3. 観光消費による経済波及効果

来訪者および事業所アンケート調査の集計結果を基に、2002 年国土交通省が提唱した「観光消費による経済波及効果推計」の算出方法を用いて経済波及効果推計を行った。使用した指標は表 5－9 のとおりである。なお、観光消費の内訳に関する統計データはないため、アンケート調査で得た平均消費単価の各項目の比率を観光総収入に当てはめて算出した。また、交通・運輸業のデータを収集することができなかったため、日本政策金融公庫総合研究所『小企業の経営指標 2010』による運輸業の数値を使用した。

その結果、直接効果として、観光消費額のうち麗江市内に残る金額 79.7146 億元、さらにそこから生じる観光産業での付加価値額 43.8713 億元と雇用者数 24.1214 万人が算出され、波及効果として、生産波及効果 142.8091 億元および雇用者数 1.8660 万人が算出された。したがって、観光客の消費によって麗江市にもたらされた経済波及効果総額は 255.2691 億元であり、雇用者数 25.9874 万人を創出していることが分かった（図 5－2）。さらに、観光産業で生じた付加価値額を麗江市 GDP（143.59 億元）と比較したところ、付加価値額は麗江市 GDP の 59%を占め、また、雇用者総数を麗江市従業員総数（67 万人）と比較したところ、雇用者総数は麗江市従業員総数の 39%を占めることが明らかとなった。

表 5－9 指標

観光消費内訳 (単位：万元)

飲食費	320,500
宿泊費	253,000
交通費	146,200
土産品購入	164,200
現地ツアー、入場料など	240,700
総額	1,124,600

対売上高比率

(単位：%)

産業名	原材料費	営業経費	人件費	その他経費	営業利益
飲食業	35.6%	17.8%	15.6%	8.0%	23.0%
宿泊業	29.9%	19.9%	16.1%	14.0%	20.1%
交通・運輸業	42.5%	19.3%	34.8%	4.5%	-1.1%
土産販売業	46.8%	18.6%	10.3%	5.5%	18.8%
観光施設業	15.0%	40.0%	35.0%	5.0%	5.0%
全産業	26.6%	21.3%	19.6%	9.1%	23.4%

域内調達率

(%)

(%)

産業名	原材料費	営業経費	人件費	本社比率
飲食業	80.5%	90.7%	83.6%	78.9%
宿泊業	87.7%	85.8%	92.1%	95.2%
交通・運輸業	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
土産販売業	84.4%	92.0%	82.1%	52.2%
観光施設業	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
全産業	77.0%	85.0%	77.0%	42.0%

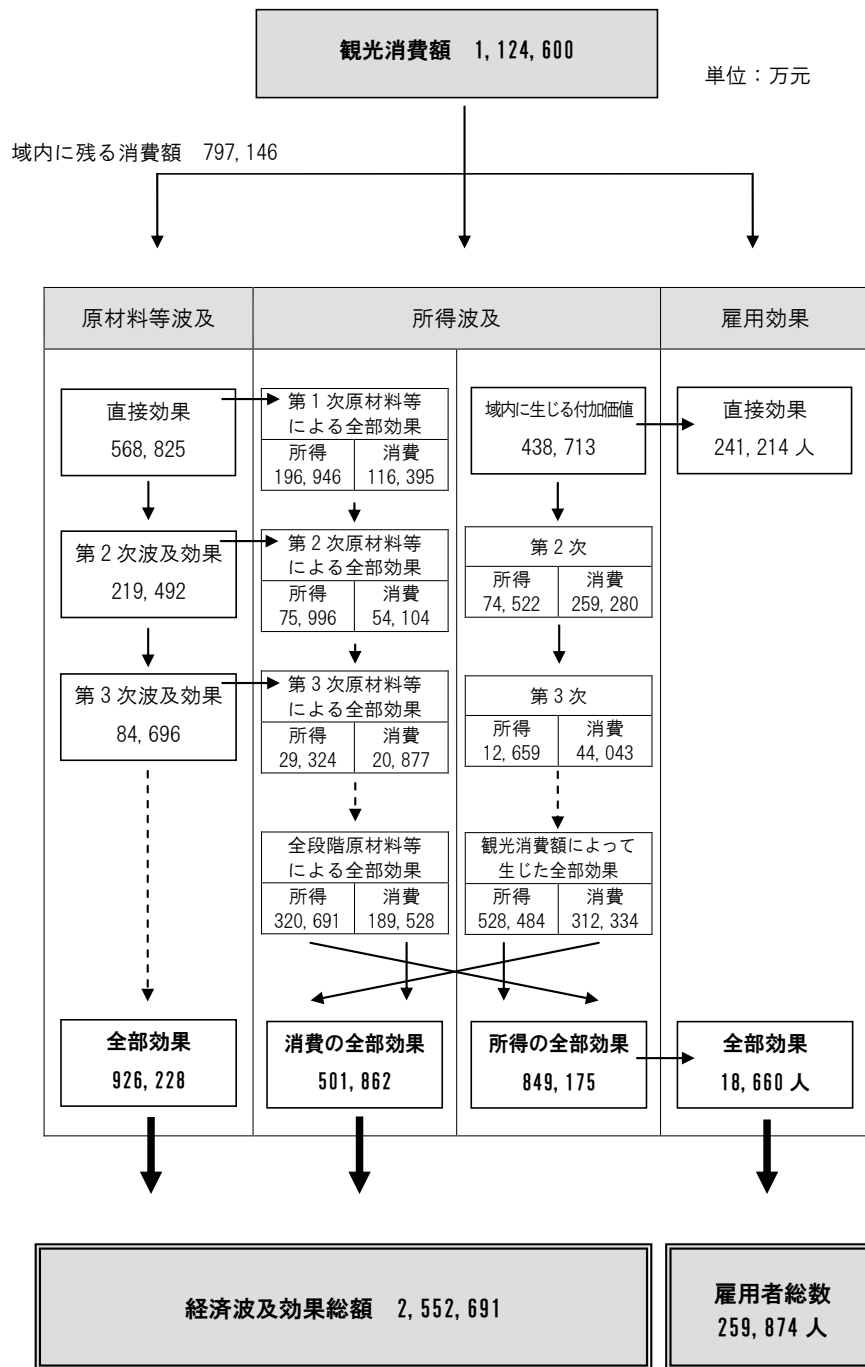
その他

限界消費性向 ^{※1}	0.591
市内消費率	100%
給与地域補正值	75.6%
域内人口(人)	1,244,769
市内平均所得(元)	9,465.5

^{※1} 吳鋭(2007)の2007年のデータを使用^{※2} 城鎮居民人均可支配収入 15,521 元と農民人均純収入 3,410 元の使用

観光客実人数(人)	9,099,700
観光客消費単価(元)	1,236

図5-2 麗江市における観光消費による経済波及の流れ



6. まとめ・課題

中国政府が内陸部において観光産業を推進する方針を立てた影響を受けて、1994年以降急速に観光産業が盛んになり、経済成長し続けている麗江市では、観光開発のもつプラスの影響力として、本研究では経済波及効果推計を行うことで麗江市にもたらされている経済的効果を明らかにした。本推計では交通・運輸業のデータが収集できなかったため、算出した数値は参考程度に留まってしまうが、麗江市を訪問する観光客の消費が観光産業に麗江市GDPの約6割を占めるほどの付加価値額を生み出し、麗江市従業員数の約4割もの雇用者を創出していることから、観光客を受け入れることによって麗江市は大きな利益を得ていることが分かった。しかし、このように経済発展を

遂げている中で、同時に観光開発のもつマイナスの影響力である水質汚染や水不足などの深刻な環境問題にも直面している。麗江古城内を流れる玉河はもともと飲料水として使用されていたほどきれいな水であったが、観光地化が進み外部から異なる民族が商売目的だけにやってくるようになって以来、水文化の習慣を知らない民族が河にごみを投げ捨てたりモップを洗ったりして、麗江古城を流れ出ていく玉河の水はいかなる用途でも使用できないほど汚れた水となってしまうている。麗江市政府や自治会などにより水利用方法についての看板を掲げるなど新住民に対してさまざまな対策を行っているが、一向に水質が改善されていないのが現状であり、麗江市の魅力「自然環境」に感じている観光客が全体の約4割を占めていることから、一刻も早く水質汚染の問題に取り組む必要がある。また、2011年のアンケート調査では、麗江市を訪問する観光客の7割以上が個人旅行者であるにもかかわらず、多く人が初めての訪問であり、2回以上訪問した人は全体の3割にも満たなかった。年代についても20～30代が7割以上を占め、年代の偏りが見られた。再訪率を上げるためにも、産官民が協力し合って地域を盛り上げ、幅広い年代の観光客が訪問しやすいような工夫を凝らし、万全の受け入れ体制を整えておく必要がある。

このように、本研究を通じて観光開発によって生じる影響力のプラス面およびマイナス面について検証を行ってきた。今現在地域経済が発展していても、このまま続くとは限らない。また、どのような問題が潜んでいるのかも分からない。今後いかにして観光開発の持続性を追求していくかが重要であり、その方向性を示す指標となるものが需要ではないだろうか。そこで、今後の研究課題として、経済発展、環境保護、住民の幸福度の3要素を評価基準として現行の観光開発を数値化し、その評価を指標で表すことができるような評価モデルを構築したいと考えている。具体的には、経済発展は今回使用した経済波及効果推計で測り、環境保護はCVMによって環境を評価し、住民の幸福度はプータンで取り入れられている国民総幸福度(GNH)を用いて算出することでそれぞれを数値化し、これら3要素をもって観光開発を評価する。持続可能な観光開発を検討していく上でも今後の対策を考える上でも、この指標を用いることで現在の状況を把握することができる。また、統一した評価が行えるようになるため、将来的には地域間または国家間での比較が可能となり、世界で行われている観光開発の現況を一目で知ることができる。このような評価モデルを作るためにも、本研究で使用した経済波及効果推計の改善を行い、CVMによる環境評価では他の事例でどのようなシナリオが用いられているのかを調査し、麗江市もしくは開発途上国に適した環境政策を提案する。さらに住民の幸福度ではプータンでどのような調査が行われているのか調べ、環境評価同様、麗江市もしくは開発途上国にふさわしい算出方法を導き出し、観光開発評価モデルの構築を実現したい。

【参考文献】

- [1] 山村高淑、張天新、藤木庸介（2007）『世界遺産と地域振興～中国雲南省麗江にくらす～』世界思想社
- [2] 日本政策金融公庫総合研究所（2010）『小企業の経営指標 2010』（株）中小企業リサーチセンター
- [3] 范弢、庄立会（2008a）「丽江城市水资源评价」水资源保护第24卷第2期 pp.65-69
- [4] 范弢、杨世瑜、角媛梅、李捷（2008b）「滇西北主要城市水资源环境问题分析」资源科学第30卷第1期 pp.78-85
- [5] 范弢、杨世瑜（2007）「丽江古城水环境现状与调控对策研究」资源开发与市场23(2) pp.153-155,192
- [6] 王西琴、何芬、张兵（2010）「丽江市经济发展与环境污染水平的关系」地理研究第29卷第5期 pp.927-933
- [7] 吴锐（2010）「全国城镇居民消费结构的实证研究」陕西农业科学第1期 pp.192-197
- [8] 张波（2004）「旅游对接待地社会文化的消极影响」云南师范大学学报第36卷第2期 pp.125-130

モンゴル留日学生と「満洲国」

田中 剛（人文学研究科学術推進研究員）

派遣先：中山大学（中国）

はじめに

1932年3月、関東軍は「満洲国」を樹立し、内モンゴル東部も支配下に置いて興安省とした。モンゴル地域での社会建設をすすめる「満洲国」にとって、専門人材養成の切り札として重視されたのが留学生派遣であった。以後、政府関係部門や関東軍によって間断的にモンゴル人青年が日本に派遣された。それまで「満洲国」派遣のモンゴル留日学生は、内モンゴル西部に樹立された「蒙疆政権」の留学生とともに善隣協会の一体的な指導監督を受けてきたが、1935年に満洲国留日学生会館が設立されたことによって「満洲国」のモンゴル学生は移管され、「満洲国」の留学政策のなかに位置づけられることになった。こうして1941年には「満洲国」モンゴル留日学生が96人を数えた。拡大していく留学生事業を興安省の委託を受けて推進したのが、財団法人蒙民厚生会であった。同会は1941年、第一次五カ年派遣計画を策定して留学生派遣の拡大を期し、「満洲国」内の高等教育機関に104人、日本に28人のモンゴル人留学生を派遣した。

この「満洲国」におけるモンゴル留日学生について、近年の研究は日本植民下という限界はありながらも内モンゴルの社会建設を支える人材を養成したとするが¹、どれだけの留学生が日本に派遣されたのか、その人数を含めて実態が明らかにされたとは言えない。本稿では「満洲国」におけるモンゴル留日学生について、「満洲国」成立前後から戦争末期までの実態を概観してみたい。

1. モンゴル留学生事業の開始

大本教の「聖師」、出口王仁三郎がモンゴル宣教に失敗して間もない1924年夏ごろ、中央大学学生の笹目恒雄が門司から大連に渡った。シャマニズムの立場から騎馬民族を研究したいと思った笹目は、夏休みを利用して中国東北地方やフルンボイル、外モンゴルを放浪した。このとき、外モンゴル・オノン河近くの山頂で「チンギス・ハーンの精霊」を感得し、モンゴル人の日本留学事業を思いつく。帰国した笹目はその足で京都綾部を訪ね、再保釈されたばかりの出口王仁三郎から「入蒙」の話を聞いた、という²。この経緯を伝える笹目の自叙伝には、いくらか脚色が加わっていると思われるが、少なくとも宗教的情熱が一青年を留学生事業に突き動かしたことは確かであろう。

その後、笹目は1927年ごろ再度モンゴルに渡り、蒙旗師範学校校長のメルセーを訪ねるなどして、モンゴル人少年7人を連れて日本に戻った。帰国した笹目は王仁三郎から横浜根岸の大本教「関東別院」を提供され、ここに蒙古青少年道場「戴天義塾」を開く。外部との接触を避け、塾内で中学校入学レベルの日本語を教えた³。1928年11月には場所を東京目黒に移し、笹目は新たな学生寮に「神殿」を設けて「大本皇大神」の神霊を祀り、毎朝の勧行を怠ることはなかった⁴。同年にはさらにモンゴル人少年4人を受け入れ⁵、事業は順調に展開しつつあった。大本教の「熱心な信者」であった笹目が、モンゴル人学生にどのような教育を施していたのか定かでない。ただ、

1 娜荷芽「内モンゴルにおける近代教育の研究の展開について—満洲国時代(1932～45)を中心に—」『中国研究月報』第64巻第8号、2010年8月。

2 笹目恒雄『神仙の寵児』全8巻、国書刊行会、1991年7月。

3 警視総監丸山鶴吉→内務大臣安達謙蔵「蒙古人学生ヲ收容スル学園ノ開園式挙行ニ関スル件」1931年2月2日、外務省史料I.1.2.0.2『在本邦中国留学生関係雑件』。

4 警視総監宮田光雄→内務大臣望月圭介「蒙古人及蒙古関係邦人転入ニ関スル件」1928年12月6日、外務省史料A.6.1.2.1-16『満蒙政況関係雑纂 呼倫貝爾ノ部』第3巻。笹目恒雄『神仙の寵児』第5巻、国書刊行会、1991年7月、68－69頁。

5 警視総監宮田光雄→内務大臣望月圭介「蒙古学生入京ニ関スル件」1928年12月27日、前掲『満蒙政況関係雑纂 呼倫貝爾ノ部』第3巻。

笹目の自叙伝によれば、モンゴル青年教育は精神教育に重点をおき、その基本に「チンギス・ハーン精神」をあげている。チンギス・ハーンに学ぶべき点は、全モンゴル民族統一の理想が実現したとき、さらに天下一家の和合統一を心に描いたことにある。そして今日、新たな精神運動が生まれたとき、天下一家の実現がなるのであり、モンゴルはそのとき乗ずるべき体制を築いておく必要から、民族の団結精神を涵養することが先決だ、とも語っていた⁶。

宗教上の信念に発した王仁三郎の「入蒙」が、結果として日本の大陸侵略を先取りしたかたちとなったように、笹目のモンゴル人留学事業もまた満鉄や日本陸軍から注目され、援助を受けるようになっていった⁷。ところが、しばらくして笹目は、関係者に種々の「術策」を弄したということで信用を失ったようだ。援助を打切られた戴天義塾の経営は、1930年夏ごろ窮地に陥り、ついに笹目は陸軍の斡旋で留学事業から完全に手を引くことになり、代わって修養団後援会幹事長の瓜生喜三郎に委ねられることになった。瓜生は麻布笄町の自邸にモンゴル人学生9人を收容し、これを「経国学園」と名付けた。

1931年1月18日の開園式には学園顧問の白川義則大将、建川美次少将、学園理事の白土千秋、座間止水も出席した。このときモンゴル人学生らは、「明い東瀛に組立てられる我が学園の成立を迎えて」と題するパンフレットを「蒙古留日学生会」の名で作成し、出席者に配布している。そのなかで彼らは次のように述べていた。すなわち、チンギス・ハーンの覇業によって全アジアを統一し、欧州にまで進出した我が大モンゴル国もここ数百年は清朝の支配に氣息奄々とするばかり、最近の「変象的な侵略主義たる三民主義」やロシアの「赤化」活動はモンゴル民族を滅亡させるものである、と民族の危機を喧伝していた⁸。

ところで、前述の蒙古留日学生会は、「蒙古革命」を宣伝する目的で1930年春に結成された。会員は経国学園の学生9名のほか、ジルガラ（徳古来：長崎高商）、ミンガニバヤル（韓鳳林：陸士）、アーチンガ（包国樑：大阪高工卒）、オユンダライ（呉廣義：早稲田大学）の計13名からなり、顧問に東京外国語学校日本語教師の施祥廷をおいた。1930年夏からは機関紙『祖国』も発行している。同誌は蒙古留平学生会の機関誌『蒙古』と「兄弟の間柄」であるといい、留平学生会や同郷人などにも配布していた。蒙古留日学生会の構成は【表1】のとおりである。

表1)					
蒙古留日学生会会員一覧 (1931.1)					
モンゴル名	漢名	年齢	本籍	学歴	在学校名
モウリユゲン	梁玉崗	26	昭烏達盟奈曼旗	国立北平医科大学	
チョロバートル	郭興元	26	布特哈	南京中央政治学校	
チョクバートル	徳樹元	25	布特哈	南京中央政治学校	
サンドロン	包海明	24	哲里木盟博王旗	遼寧省立第三高級中学	
ネーロウト	鄂遜五	24	布特哈	上海美術専科	
アルタンサン	李友桐	23	哲里木盟達爾罕王旗	北京蒙蔵専門学校	
ションクル	韓慶徳	23	哲里木盟札賚特旗	洮南中学校	
ランプリンシン	曹伯聖	16	哲里木盟達爾罕王旗	洮南高等学校	麻布獣医学校
チンジャン	李樹槐	16	哲里木盟達爾罕王旗	洮南高等学校	東京府立第六中学校
ジルガラ	徳古来	26	布特哈	北京国立師範大学	長崎高商
ミンガンバヤル	韓鳳麟	26	哲里木盟達爾罕王旗	奉天高級中学	陸軍士官学校
アーチンガ	包国樑	25	哲里木盟札賚特旗	黒竜江高級中学	大阪工高卒
オユンダライ	呉広義	25	卓索図盟土默特旗	奉天高級中学	早稲田大学専門部政治経済科
顧問					
	白雲梯		内蒙革命党党務委員会委員長		
	施祥廷		内蒙革命軍総司令部参議		
	包悦卿		内蒙革命軍左翼総指揮		
	梁粹軒		内蒙革命軍総司令部秘書		
	鄂伯乾		内蒙革命軍総司令部参謀		
【出所】経国学園瓜生喜三郎→外務省文化事業部坪上貞二「申請書」1931年4月1日、外交史料館所蔵、外務省記録H.6.2.0.2『助成費補助申請関係雑件』第1巻。					

6 笹目恒雄『神仙の寵児』第3巻、国書刊行会、1991年7月、50－51頁。

7 警視總監宮田光雄→内務大臣望月圭介「蒙古人及蒙古関係邦人転入ニ関スル件」1928年12月6日、前掲『満蒙政況関係雑纂 呼倫貝爾ノ部』第3巻。

8 警視總監丸山鶴吉→内務大臣安達謙蔵「蒙古人学生ヲ收容スル学園ノ開園式挙行ニ関スル件」1931年2月2日、前掲『在本邦中国留学生関係雑件』。

1931年9月18日、満洲事変が勃発するや、これを内モンゴル革新の好機とみた中国内外のモンゴル青年たちは陸統と奉天に集結した。日本からも蒙古留日学生会の徳古来、包海明、アルタンサン、チョクバートル、チョロバートルら8名が急遽帰国して加わり⁹、先に帰国していた韓鳳林もこれに合流した。彼らは陸軍士官学校の留日経験を持つガンジュールジャブの下で行動を開始する。結局のところ彼らの活動は、日本の「満洲国」建国によって遮られてしまうものの、モンゴル留日学生の多くは「満洲国」や「蒙疆政権」で官吏・軍人として重要な地位を占めていくことになる。また、経国学園のモンゴル留日学生のうち、満洲事変で帰国しなかった者たちは日本留学を継続し、その後も間断的にモンゴル留学生在が経国学園に派遣された。

2. 「満洲国」と善隣協会のモンゴル留学生事業

1934年1月12日、財団法人善隣協会が東京千駄谷に創立された。同協会の目的は、「人道的見地ヨリ比隣諸民族ノ融和親善ヲ図リ相互文化ノ向上ニ寄与スル」ことにあり、その事業は、①「蒙古各地ニ文化的施設ヲ行フ」、②「蒙古ノ産業開発ヲ助成シ之カ通商ノ促進ヲ図ル」、③「相互事情ノ宣伝紹介」、④「附属研究所並ニ図書館ノ経営」、⑤「蒙古留学生ノ指導援助」、⑥「比隣諸邦ノ文化産業ノ開発指導ニ従事スル人材ヲ養成スル学校ノ経営」、⑦「蒙古ニ関スル調査、研究ノ発表」、⑧「診療所ノ開設並ニ巡回診療ノ実施」、⑨「蒙古人子弟ノ教育」、⑩「蒙古ノ資源及物資ノ調査」、⑪「其ノ他本会ノ目的達成ニ必要ト認ムル事業」の11項目とされた。善隣協会の代表にあたる理事長には陸軍中将の井上璞、理事には楠山又助、大嶋豊、斎藤貢、古仁所豊がそれぞれ就任し、事業の推進にあたった¹⁰。

1934年4月、日本陸軍参謀本部の委嘱で「満洲国」のモンゴル人学生10名が善隣協会に入寮した。このとき入寮した学生10名のうち、胡色文、包壮飛、福色黎、金増顕、玄恩忠などは、すでに経国学園で日本留学していた青年たちで、善隣協会の成立を機に移管されたのであった¹¹。このことは、満洲事変以降、日本側にとってモンゴル人留学事業を組織的かつ積極的に進めることで、内モンゴル東部に対する日本の支配を確立しようとした意図の表れと見ることもできよう。

さて10名うち3名は早稲田大学専門部政治経済学部に入學し、他の7名は協会内で日本語、数学、物理化学、英語の学習を開始した。また、10月には徳王が推薦するモンゴル人学生8名も入寮した。これ以降、善隣協会は「満洲国」出身のモンゴル学生のみならず、内モンゴル西部からも学生を収容し、準備教育と監督指導を推進した。このとき協会は特別に教育・寄宿施設を持っていなかったため、協会本部の事務所内に寄宿施設を用意して「蒙古寮」と名付け、モンゴル人学生に提供した。

「満洲国」では支配下にあった内モンゴル東部に対する行政機関として興安総省が設置されていた。その興安総省はモンゴル地域の「経済力向上」をはかるため、「畜産振興」に力を入れることを打ち出した。その「畜産振興」を支える「緊急的人材の養成」としてモンゴル青年を日本の専門学校程度に派遣して獣医畜産学を学ばせることに決定した¹²。

そうしたところ「満洲国」は1934年12月、機構改革を行い、興安総省を廃止して新たに蒙政部（大臣・チメドサムビル、次長・依田四郎）を置いた。「満洲国」の国境安定をはかるため、内モンゴル西部や外モンゴルのモンゴル人を「親満洲国」「親日」に転換するため、「満洲国」支配下のモンゴル地域を「民族協和の精神に基き其の本然の発展を遂げしむる」ためであった¹³。

新設された蒙政部も、日本への留学生派遣策を推進する方針で調整を進めた結果、「蒙古人留学生日本派遣案」を1934年12月に策定した。この派遣案は、畜産の専門技術員養成のためモンゴル人学生を日本の中等専門学校に留学させてモンゴル産業の発展に資せんとするもので、興安分省各1名、省外蒙旗1名の計5名を1935年1

9 塚本閑東長官→幣原外務大臣「東北新政権樹立問題、吉林省臨時政府組織および蒙古独立運動等時局に関する政治策動の情報について」1931年10月8日、外務省編纂『日本外交文書』満洲事変・第1巻第1冊、1977年3月、335頁。

10 「財団法人善隣協会創立趣意」、善隣会編『善隣協会史—内蒙古における文化活動—』社団法人日本モンゴル協会、1981年7月、253頁。

11 財団法人善隣協会理事長井上璞→外務省文化事業部長岡田兼一「蒙古学生養成費補給申請書」1937年4月21日、外交史料館所蔵、外務省記録H.6.2.0.10『善隣協会関係雑件』第3巻。

12 「蒙古人ノ獣医畜産学専攻者養成ニ関スル意見」1934年6月12日、外交史料館所蔵、外務省記録H.5.5.0.7『満洲国蒙政部派遣留学生関係雑件』。

13 閑東軍参謀部「暫行蒙古人指導方針要綱案」、『現代史資料』8・日中戦争1、みすず書房、1964年7月、447—448頁。

月から38年3月まで派遣する計画であった。派遣先の学校は北海道、東北を中心に宮城県立宮城農学校1名、青森県立三本木農学校1名、北海道庁立空知農学校2名、同庁立十勝農学校1名を予定し、修学期間終了後も成績優秀者はさらに上級学校に入学させることも予定していた。

「満洲国」で行われた試験の結果、多爾斉、蒙和敖斉爾、索越爾図、蘇爾勒謨、喇喜色克巴の5名が選抜された。5名は外務省からの学費補助の手続きで来日が遅れたが、ようやく2月16日に新京を出発、18日に東京の善隣協会に入寮して日本語の補習授業を受けることになった¹⁴。そして4月から多爾斉（宮城農学校）、蒙和敖斉爾（空知農学校）、索越爾図、蘇爾勒謨（三本木農学校）、喇喜色克巴。蘇爾勒謨は1937年12月に農畜科に転科して1940年4月に卒業、その他の4名は1938年3月に各学校を卒業・帰国した¹⁵。

一方、善隣協会は1935年4月に東京西大久保に協会本部と善隣協会専門学校を新設した。「東亜ノ文化産業ノ開発指導ニ従事スル」人材の養成を目的とする専門学校には善隣学寮が併設され、従来の蒙古寮は廃止されてモンゴル人学生は善隣学寮の蒙古学生班に移って専門学校の日本人学生と起居を共にした。9月には「満洲国」出身のモンゴル留日学生はすべて善隣協会が監督指導するよう蒙政部から委託があり、官費も協会を通じて支給すること

とした。さらに11月には蒙政部官費留学生4名が入寮、36年4月には蒙政部官費留学生5名、私費留学生7名、5月にも私費留学生2名が陸続と入寮した¹⁶。こうして1936年5月時点で「満洲国」出身のモンゴル留日学生は、善隣協会の学費支給学生が12名、蒙政部派遣学生32人、私費学生9人を数えるまでに増加していた。

増加傾向にあるモンゴル留日学生に対応するため、1936年7月8日、善隣協会専門学校に蒙古留学生特設予科を設置することが認可された。同校は「上級学校ニ入学セントスル者ニ必要ナル準備教育ヲ施スト同時ニ将来蒙古民族ノ更正並ニ日蒙親善ノ嚮導者タルベキ人格見識ヲ教養スルタメニ必要ナル訓育」することを目的に掲げ、中等学校卒業あるいは同等の学力を有するモンゴル男子25名を定員とし、修業年限を1年とした。学科は国語（週15コマ）、英語（7）、数学（6）、理化（3）、体育（3）の計34時間、課程修了者には修了証を授与して本科に編入することとした¹⁷。これは、従来の教育において修学上の資格が得られないために終業後の取扱いに不便があったからだった。善隣協会の指導監督したモンゴル人留学生は【表2】のとおりである。

ところが「満洲国」政府は1936年5月20日、「蒙古民族指導の根本方針」を策定し、「国内蒙古民族の離満解体運動は之を許さず」としてモンゴル人

【表2】 善隣協会指導監督モンゴル人留学生（1936.4）			
氏名	年齢	出身	在籍学校
善隣協会・外務省給費生			
瑞永	29	興安東・巴彥旗	早稲田大学専門部政治経済科
包壯飛	27	興安南・達爾罕旗	東京農科大学専門部選科
胡色文	26	興安北・陳巴爾虎旗	早稲田大学専門部政治経済科
何什格図	25	竜江・斉斉哈爾	早稲田大学専門部政治経済科
福色黎	22	興安北・海拉爾	法政大学専門部法律科
金増額	21	興安東・布特哈旗	東京高等師範学校本科
和畢巴図爾	27	熱河・卓索図音	陸軍士官学校
補圖木濟	26	綏遠・土默特	陸軍士官学校
玄恩忠	17	興安北・海拉爾	安田工業学校第二本科
桑傑札布	29	吉林・郭爾羅斯前旗	早稲田大学専門部政治経済科
拉瑪松	26	興安北・海拉爾	陸軍士官学校
包雲郷	25	竜江・郭爾羅斯後旗	陸軍士官学校
烏古魁(超克巴達爾胡)	24	熱河・喀喇沁左翼旗	明治大学経部
昭儒巴図爾	24	熱河・喀喇沁左翼旗	麻布獣医専門学校
那木四郎	25	興安南・哲里木盟	東京農科大学専門部選科
畢勒圪図	22	綏遠・土默特	善隣協会専門学校特設予科
超克図莽賽	22	熱河・喀喇沁左翼旗	東京農科大学専門部選科
札補勒図	16	外蒙・三音諾顔部	千駄ヶ谷第三小学校専五
薩音托布	24	興安東・布特哈	東洋大学倫理教育科
徳古仁	24	綏遠・准噶爾旗	法政大学専門部政治経済科
佈爾渣格得	19	熱河・喀喇沁左翼旗	善隣協会専門学校特設予科
徳格吉勒図	17	熱河・喀喇沁中翼旗	善隣協会専門学校特設予科
ロプスン	18	外蒙・ハルハ	日本語特別教授
サンジェスルン	16	外蒙・ハルハ	日本語特別教授
蒙政部給費生			
復生阿	21	興安南・札賚特旗	善隣協会専門学校特設予科
羅布着	21	興安南・東科爾沁前旗	善隣協会専門学校特設予科
敖勤学	21	興安東・布特哈旗	善隣協会専門学校特設予科
爾陶樂	33	興安東・莫力達瓦旗	熊岡書塾
則布道爾吉	19	興安南・奈曼旗	善隣協会専門学校特設予科
喇勒陳巴図爾	22	興安東・布特哈旗	善隣協会専門学校特設予科
恩和巴雅爾	22	興安東・布特哈旗	善隣協会専門学校特設予科
徳爾格熱湖	21	興安東・布特哈旗	善隣協会専門学校特設予科
騰合台	22	興安東・布特哈旗	善隣協会専門学校特設予科
羅勒少ト	23	興安南・東科爾沁後旗	善隣協会専門学校特設予科
那木勤札布	21	興安南・札賚特旗	善隣協会専門学校特設予科
恩和吉爾嘎朗	20	熱河・喀喇沁右翼旗	善隣協会専門学校特設予科
特木勒	19	興安南・喀喇沁左翼旗	善隣協会専門学校特設予科
熱熱根伯爾	25	興安東・布特哈旗	善隣協会専門学校特設予科
訥木格祺	25	竜江・郭爾羅斯後旗	東京農科大学専門部特科
業喜札布	24	興安南・札賚特旗	東京高等工業学校
額爾德莫図	22	興安東・斉斉哈爾	東京農科大学専門部選科
帕格達	23	興安東・斉斉哈爾	研数学館
多爾齊	22	興安北・索倫旗	宮城農学校
蘇爾勒謨	20	興安西・札賚特旗	三本木農学校
蒙和敖斉爾	21	陳蘇嚕克旗	空知農学校
喇喜色克巴	20	興安南・東科爾沁中旗	空知農学校
孟定英	17	興安北・索倫旗	日本中学
沃振東	21	興安東・布特哈旗	法政大学予科
呉鴻齡	22	熱河・喀喇沁	東京高等師範学校本科
何音札布	26	興安東・斉斉哈爾	広島高等師範学校
孟貢桑	23	興安西・克什克旗	山口高等商業本科
烏臻和	26	熱河・喀喇沁	山口高等商業本科
汪雲騰	21	熱河・喀喇沁	山口高等商業本科
楊徳新	21	熱河・喀喇沁	山口高等商業本科
薩楞阿		興安南・東科爾沁後旗	福岡師範学校
私費生			
篤多博		熱河・喀喇沁右翼旗	早稲田大学専門部政治経済科
邢復禮		熱河・喀喇沁右翼旗	早稲田大学法学部
希中和		熱河・喀喇沁右翼旗	早稲田大学専門部政治経済科
蘇桂田		吉林・郭爾羅斯前旗	早稲田大学専門部政治経済科
那森巴伊爾		興安南・東科爾沁中旗	法政大学専門部法律科
孟定亮		興安北・海拉爾	研数学館
張鴻業		興安南・東科爾沁中旗	研数学館
那嘎爾札布		興安北・新巴爾虎左翼旗	東亜学校
達瓦		興安北・新巴爾虎左翼旗	東亜学校

【出所】善隣協会理事長井上璞→外務省文化事業部長岡田兼一「蒙古留学生教育事業ニ対スル給与申請書」193

14 在満洲国日本大使館谷参事官→外務省文化事業部長岡田兼一「第139号」1935年2月15日、前掲『満洲国蒙政部派遣留学生関係雑件』。

15 外務省文化事業部「満洲国政府派遣蒙古留学生蘇爾勒謨ニ対スル学費補給継続ニ関スル件」1938年6月13日起案、前掲『満洲国蒙政部派遣留学生関係雑件』。

16 善隣協会理事長井上璞→外務省文化事業部長岡田兼一「蒙古留学生教育事業ニ対スル給与申請書」1936年5月16日、前掲『善隣協会関係雑件』第3巻。

17 文部省実業学務局長→外務省文化事業部長「善隣協会専門学校ニ蒙古留学生特設予科設置ニ関スル件」1936年7月8日、外交史料館所蔵、外務省記録H.6.2.0.10『善隣協会関係雑件』第1巻。

の民族主義を抑え込むことを確認した¹⁸。さらに、1937年7月には蒙政部の廃止を決定し、モンゴル行政機構の権限を縮小して興安局を新設した。この機構改革にともない、蒙政部派遣の留学生は民生部に移管されることとなり、善隣協会に寄宿していた「満洲国」出身のモンゴル人学生は、1939年3月31日をもって「満洲国」留日学生会館に移った。なお善隣協会はその後、蒙古聯盟自治政府から派遣の官費・私費留学生に対して指導監督にあたることになった¹⁹。

「満洲国」派遣留日学生政策の一体的統制の下に置かれることになった「満洲国」出身モンゴル人の留学生事業は、次第に「満洲国」内への派遣に重点が移され、日本への留学生事業は減少傾向にあった。モンゴル王公の土地権利放棄（蒙地奉土）の代償に教育・厚生事業団体の蒙民厚生会（39年7月）と蒙民裕生会（40年2月）が「満洲国」に設立され、教育振興、人材育成、産業開発、保健衛生などの事業を実施した。蒙民厚生会は39年から「満洲国」内外に留学生の派遣を開始し、41年に「蒙民厚生会派遣生第一次五カ年計画」を策定した。その内容は、「優秀なる蒙古学生を上級学校に進学せしめ、将来に備ふるに有能、有意の人材を養成し、蒙古文化の向上発展に資せんとす」ることを方針に、師道、農畜産、医術等の養成に重点多くもので、五カ年で200名（国外45名、国内155名）を派遣する予定であった²⁰。1943年までには【表3】にあるように延べ108名のモンゴル青年を日本に派遣している。

【表3】

蒙民厚生会派遣生年度別一覧

学校名	1940年度	1941年度	1942年度	1943年度	計
国外派遣					
秋田県師範	2		1	1	0
岐阜県師範	1	1		1	3
山形県師範	1	1		2	4
千葉県師範	1	1		4	6
長野県師範		3		2	5
高田師範		1	1	1	3
岩手県師範		1	1	1	3
新潟県師範			1		1
静岡県師範			1	2	3
青森県師範				2	2
和歌山県師範				2	2
福島県女子師範	1	1	2	1	5
富山県女子師範	1	1	1		3
松本女子師範		1	2		3
山梨県女子師範		2		1	3
長岡女子師範		1	2		3
新潟県新発田中学			1	1	2
東京府第九中学				1	1
京都府園部中学				1	1
群馬県富岡中学				1	1
三重県津中学					0
岩手県盛岡中学				1	1
新潟県高田中学				1	1
山形県山形中学				1	1
千葉県匝瑳中学				1	1
岡山県西大寺高女			1		1
東京府第六高女				1	1

18 満洲国政府「蒙古民族指導の根本方針」1936年5月20日、前掲『現代史資料』11、948頁。

19 善隣協会常任理事大島豊→外務省文化事業部長三谷隆信「昭和一三年度事業報告書提出ノ件」1939年12月28日、外交史料館所蔵、外務省記録H.6.2.0.10『善隣協会関係雑件』第2巻。

20 「留学生派遣概況」『蒙民厚生会留学生会報』康德10年度第2号、6－7頁。

善隣高商				1	1
東亜建設青年訓練所		6	4		10
京都府京都医科大産婦人科			1	1	2
玉川学園				1	1
計	7	20	19	32	78
早稲田大	1			1	2
東京工大	2		1		3
日本女子大	1				1
東京農大	1				1
慶應大	1				1
明治大女子部	1				1
久留米医専	1				1
盛岡高農	1			1	2
東京高師	1			1	2
広島高師	3				3
奈良女子高師	2				2
麻布獣医	2				2
東京獣医	1				1
京都帝大		1			1
一高			1	1	2
山口高商			1	1	2
二高			1		1
語学院			1		1
東京医専			1		1
計	18	1	6	5	30
国外合計	25	21	25	37	108
国内派遣					
奉天満洲医科大	7	5	6	6	24
奉天農業大	7		2		9
新京医科大	2	2	1		5
新京法政大	13	4	5	5	27
新京畜産大			1	2	3
新京女子師道大	1		1		2
新京留学生予備校		4	3	9	16
吉林師道大	9	5	4	18	36
哈爾浜医科大	7			2	9
哈爾浜軍医	8		3	1	12
哈爾浜学院	2	3	1	3	9
哈爾浜農大			2	1	3
哈爾浜工大		1	1		2
齊齊哈爾師道			31	36	67
奉天同善堂助産士	14	17	15	9	55
四平助産士				5	5
国内合計	70	41	76	97	284
総計	95	62	101	134	392

【出所】「留学生派遣概況」『蒙民厚生会留学生会報』康德 10 年度第 2 号、16 - 28 頁より作成。

結びにかえて

1944年12月29日、日本政府は「留日学生教育非常措置要綱²¹」を閣議決定し、大学高等専門学校の留日学生を国別（「満洲国」、「中華民国」、南方諸地域等）に一乃至数校で集合教育を行うことを原則に疎開を推進することとした。45年4月、「満洲国」派遣留日学生30余名が盛岡農専、盛岡工専に入校した。岩手県知事は盛岡市内の報恩寺の一部を「満洲国」留学生の寮とすることを決定、さらに盛岡在住の大光寺氏も自宅を提供、仁王寮とすることにした。5月2日に開寮式が開かれ、報恩寮には工専の学生、仁王寮には農専の学生が収容された²²。また「満洲国」は45年6月、派遣留学生のうち2年生を仮卒業、1年生を休学にして帰国を促し、これによって留学生の多くが帰国したようだ。日本に残った「満洲国」留学生は盛岡のほか東北帝大、京都へ疎開して集合教育を受けた。日本敗戦時、いったい何名の「満洲国」派遣留学生在が日本に滞在していたかと言えば、45年9月20日時点で83名という記録が残っている²³。ただし、このなかにモンゴル人がどれだけいたのか不明である。この点を含め、「満洲国」派遣モンゴル人留日学生の実態について、当事者への聞き取り調査も進めつつ明らかにしたいと考えている。

21 閣議決定「留日学生教育非常措置要綱ヲ定ム」1944年12月29日、国立公文書館、類2872『公文類集第六十八編昭和十九年』巻74 学事門二国民学校雑載

22 「盛岡に日満親善の学寮」『新岩手日報』1945年5月4日、2頁。

23 外務省「留日学生現存員数」1945年9月20日、戦後期外務省記録I.1.1.0.1『在本邦諸外国留学生関係』第1巻。

韓国におけるライティング教育に関する調査

住田 哲郎（人文学研究科研究員）

派遣先：成均館大学校（韓国）

0. はじめに

本報告書は、神戸大学大学院人文学研究科博士後期課程に在籍する楊吟氏のメンターとして2011年1月27日から3月31日にかけて韓国の成均館大学校に派遣された際に行った研究活動をまとめたものである。

本報告では、韓国入学生に対して行った四コマ漫画を使った作文実験、韓国の小学校、中学校、高等学校におけるライティング教育に関するアンケート調査、そして成均館大学校で開講されているアカデミック・ライティングの授業見学を行った際の記録について報告する。

1. 調査・研究の背景

グローバル化が進む中で日本の大学でもこれまで以上にコミュニケーション能力の重要視されるようになり、いわゆる「アカデミック・スキルズ」に注目が集まるようになった¹。事実、近年、多くの大学で「情報を整理する」「学術的なレポート・文章の書く」「口頭発表を行う」等、大学や大学院の授業で必要とされる日本語力を養成する授業が新たに開設されている。しかし、これまでの日本の大学におけるライティングの指導は、レポートや卒業論文を書かせるにもかかわらず、そのスキルをゼミの先輩や指導教員から間接的、能動的に学生自らが学び取るのが当然のことと期待されてきたため、その教育体制が未だ十分に整っていない。

こうした中で、留学生の増加に伴い2000年以降、日本語教育の分野でもアカデミック・ジャパニーズという表現が聞かれるようになり²、最近では各研究分野に特化した日本語アカデミックライティングの研究も盛んに行われるようになってきた。

現在、神戸大学大学院人文学研究科の共同研究組織、日本語日本文化教育インスティテュートでは、大学院レベルの上級日本語学習者に対する日本語アカデミックライティングの研究プロジェクトが遂行されている。報告者もその研究グループの一員として、今回の調査では、韓国におけるアカデミックライティング教育の現状について調査を行った。

2. 四コマ漫画を用いた作文実験

渡辺（2004）では、日米両国の書き方と語り方を含む叙述表現について興味深い考察を行っている。普段我々が物事を理解する際、出来事をそれぞれ別々に理解しているのではない。どの出来事をはじめと捉えどの出来事を終わりと捉えるのかは、その出来事に対する話し手の解釈による。どの言語、文化にもそれぞれ固有の語りの順序がある。ある言語特有の語りの順序を学ぶことは、その言語特有の論理システムを学ぶことであり、逆に論理的でないと感じるということは、その言語や文化特有の語りの順序から外れているということの意味する。Kaplan（1966）によると、話の筋が通っていると感じるために必要な要素は「統一性（unity）」「一貫性（coherence）」であるとされている。統一性とは、説明に必要な部分がすべて揃っていることで生まれる感覚であるのに対し、一貫性とは、その必要な部分が読み手に理解可能な順序で並んでいることで生まれる感覚であるとされている。たとえ必要な部分がすべて揃っていても、読み手に理解可能な順序で並んでいないと、論理の一貫性がない、納得でき

1 佐藤・湯川・横山・近藤（2006）では、「大学で学問を行う者にとって、最低限必要な技法あるいは技術」のことを「アカデミック・スキルズ」と呼んでいる。

2 門倉・筒井・三宅（編）（2006）を参照。

ないという感情が起こるというのである。

日本でよく使われる作文構造は「起承転結」である。この構造は、物語・随筆・学術論文だけではなく文学・その他芸能を含め、日本語による語りのすべてを構造化する組織原理とされている。この起承転結の構造では、結論から最も遠い情報からはじまり徐々に話題の核心に近づいていく。この構造は書き手の思考過程そのものをあらわしているので、読み手はその思考をたどることで書き手の意図を理解できる。

これに対して、米国のエッセイと呼ばれる小論文は、「主題提示 (Topic sentence)」「主題の証明 (Body)」「結論 (Conclusion)」の三部構造になっている。最初に書き手の主張を述べ、次にその主張を裏付ける証拠を提示し、最後に主張が正しいことを最初とは異なる表現で繰り返すのである。エッセイにおける評価は、どれだけわかりやすく主張を擁護できたか、主張に関係のない部分がどれだけ削り落とされているかで決まる。

一方、日本の起承転結型の作文では、その完成度はイメージの豊かさによって測られる。読み手の意表をついたり多様な表現で主題をあらわすなど、奥深い感性によって形成された多彩なイメージの複雑さによって円熟度が測られる。このように日本と米国では基礎とする語りの構造が異なり、その違いが書き物に反映される。

渡辺 (2004) は、以上のような語りの順序の傾向を踏まえ、日本とアメリカで作文の書き方が違うとすれば、何がどの程度違うのかを調査した。日米の小学校児童に同じ四コマ漫画を見せて、それらをどのように説明するのかを比較した。

2.1 実験方法と参加者

ここでは、渡辺 (2004) の四コマ漫画の作文実験の手順に従い、成均館大学校の学生に対し同様の実験を行った。手続きは単純で、下の図1が示すような指示文と四コマ漫画が書かれた用紙を配布し、各自自由に文章を作ってもらった。この時、特に時間制限は設けなかった。実験に参加してくれた被験者は成均館大学校に所属する1年生から4年生までの大学生74名 (男性26名、女性48名) であった³。

図1は、ある少年の一日の出来事をあらわしている。少年の名前は、韓国でなじみのあるチョルス (철수) と名付けた。最初のコマでは少年がゲームに夢中になっている。二コマ目では少年は慌てて野球の試合に出かけ、三コマ目では少年は間違ったバスに乗ってしまったことに気づく。そして最後のコマでは別の少年がマウンドで投げている傍ら、少年がベンチでしょんぼり座っている場面が描かれている。

図1 課題の問題文と四コマ漫画

<日本語訳>

철수는 중학생입니다. TV게임이랑 야구를 정말 좋아합니다. 철수는 야구팀에서 제일 잘하는 투수여서 매주 토요일 아침 야구 경기에 출장합니다. 아래의 그림은 철수의 어느 하루를 나타내고 있습니다. 철수에게는 그 날은 어떤 날이었는지 쓰십시오. (문장을 만들기 전에 먼저 4가지 그림을 다 본 후에 시작해주시요.)



チョルスは中学生です。テレビゲームと野球がとても大好きです。チョルスは野球チームのエースピッチャーで、毎週土曜日の朝、野球の試合に出場しています。下の絵はチョルスのある一日をあらわしています。チョルスにとってその日はどんな日だったか書いてください。

(文章を書く前にまず4つの絵をすべて見てからはじめてください。)

3 実験を行うにあたり成均館大学校意思疎通教育センターのJeon Dae Seok先生、国語国文学科のHwang Ho Duk先生の協力を得た。

上の課題に対して学生がどのような構造で一連の出来事を語るかを探るため、作文の内容を6つの要素に分け、それぞれの要素があらわれる順序に従って下の表1のように5つの型（とその他）に分類した。そしてさらに、この5つの型は出来事が起こった順に述べられる時系列型と、ある時点から過去を振り返って出来事が述べられる遡及型（因果律）の2つの構造タイプに分類される⁴。

表1 作文の型とその特徴

作文の型	作文の特徴	出来事の順序
遡及連鎖型 〈BC:backward-chain〉	出来事が時間軸を遡る順序で述べられる	(S)-4-3-2-1
遡及混合型 〈BS:backward-sequence〉	一日の評価が最初に述べられた後、出来事が時系列で述べられる	S-1-2-3-4
遡及省略型 〈BR:backward-reason〉	出来事の連鎖生がなく、主人公ががっかりしている理由と特定された出来事のみを述べる	4 S
時系列連鎖型 〈FS:forward-sequence〉	出来事が時系列で連鎖的に述べられる	1-2-3-4-(S)
時系列省略型 〈FR:forward-reason〉	時間順であるが、途中で省略される	1-4, 2-3 など
その他	出来事の感想のみを述べるなど、時間軸の方向や省略の有無のカテゴリーで分類できない作文	(C) 1-3-4-3 など

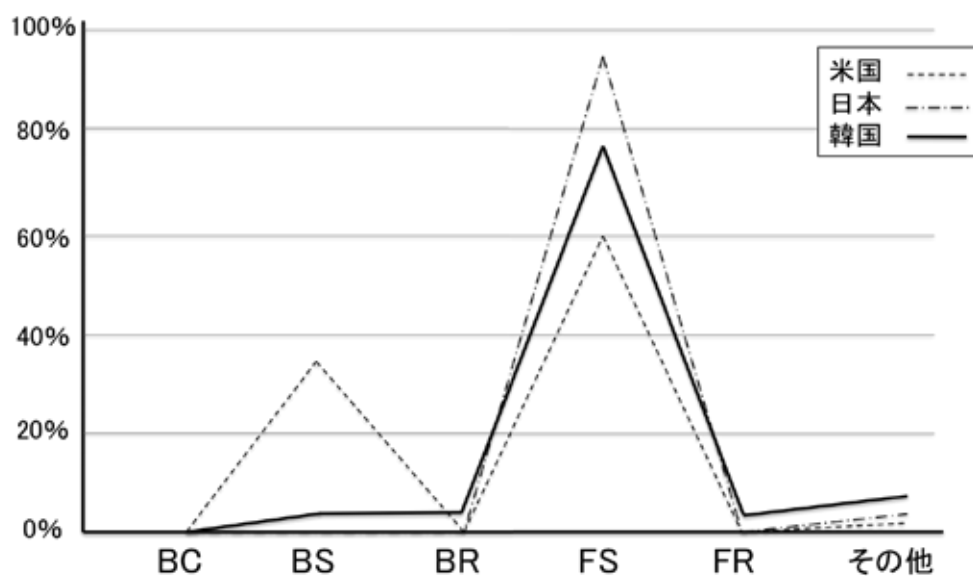
表1の[出来事の順番]の欄にある数字は作文に記述された四コマの絵に対応し、出来事をあらわす。1は最初の出来事、4は最後の出来事をあらわす。またS（Summary）はどのような一日だったかという総括的な評価、C（Comment）は絵の出来事の叙述以外の感想や一連の絵に対する評価をあらわす。

学生に書いてもらった文章を、これらの型と照らし合わせ、韓国人学生がどのような語りの順序で文章を作成するのか、その傾向について考察する。

2.2 結果

作文実験の結果、下のグラフ1のようになった。ここでは、渡辺（2004）が行った日本とアメリカの児童に対する作文実験の結果と合わせて提示する。

グラフ1 作文実験の結果



4 渡辺（2004）では四コマ漫画を用いた作文実験において「自由課題」と「条件課題」という2つの課題を課しているが、本報告では「自由課題」のみを扱うことにする。「条件課題」については渡辺（2004：26-28）を参照のこと。

2.3 考察

作文実験の結果、韓国の大学生が文章を書く際の語りの順序も日本やアメリカと同様、時系列連鎖型が最も多く全体の約 77% がこれに該当した。ただし、グラフの形からもわかるように、どちらかと言えば、アメリカではなく日本に近い語りの構造を持っている傾向があることがわかる。つまり、韓国でも日本とそれほど変わらないライティング教育がなされてきたのではないかと推測できる。

ここで、最も割合の多かった時系列連鎖型の例を見てみよう。

時系列連鎖型：(3 年生・女性)

철수는 금요일 저녁 늦게 (토요일 새벽) 까지 게임을 하느라 늦게 잠들었다. 그 결과 토요일 아침에 예정 기상 시간보다 늦은 시간에 일어나게 되었다. 시간에 쫓겨 허둥지둥 하다가 결국 야구 경기가 있는 장소에 가는 버스가 아닌 다른 버스를 타게 되었다. 결국 철수는 가장 뛰어난 선수임에도 그 날 야구 경기에 출장할 수 없게 되었다.

<日本語訳>

チョルスは、金曜日の夜遅く（土曜日の深夜）までゲームをしていて寝るのが遅かった。そのため、土曜日の朝は予定の起床時間よりも遅い時間に起きてしまった。時間に追われてあたふたし、結局、野球場がある場所に行くバスではない別のバスに乗ってしまった。結局、チョルスは最も優れた選手ではあったが、その日、野球の試合に 出ることはできなかった。

実験では少数ではあるが遡及型の例も見られた。以下にあげる 2 例は、遡及混合型と遡及省略型の例である。

遡及混合型：(1 年生・女性)

철수에게 그 날은 지우고 싶은 날이었습니다. 철수는 중요한 야구 시합 전날 밤에 TV 게임을 하다가 2 시를 훌쩍 넘겨 잠이 들었습니다. 그리고 다음날 늦잠을 자서 허둥지둥 야구경기장으로 향했습니다. 하지만 급한 마음에 버스를 잘못 타게 되어 시합에 완전히 늦게 되었습니다. 결국 주전투수이지만 경기에 지각을 했기 때문에 마운드에는 올라가보지도 못하고 팀원들의 눈총만 받으며 자신을 탓해야 했습니다. 끔찍한 날이었습니다.

<日本語訳>

チョルスにとって、その日は消してしまいたい日であった。チョルスは重要な野球の試合の前日の夜、テレビゲームをしていて 2 時過ぎに寝た。そして次の日、寝坊をしてあたふたと野球場へと向かった。しかし、焦る心のせいかバスを乗り間違えてしまい、試合に完全に遅れてしまった。結局、エースピッチャーであっても試合に遅刻したせいでマウンドにも上がることができず、チームメートからの冷たい視線を受けながら自分自身を責めなければならませんでした。とてもひどい一日でした。

遡及省略型：(1 年生・女性)

철수에게 자업자득으로 야구 경기에 못나가게 된 교훈적인 날이었습니다.

<日本語訳>

チョルスにとっては自業自得、野球の試合に出られなかった教訓となる一日でした。

以上のように、数こそ少なかったが、アメリカのエッセイに近い遡及型（因果律）のような語りの順序で文章を書いた学生も見られた。

3. ライティング教育に関するアンケート調査

では次に、韓国におけるライティング教育の実情を知るために行ったアンケート調査について見ていきたい。尚、アンケート調査は作文実験の被験者と同じ学生らにお願いした。ただし、ここでは2年生から4年生のグループと1年生のグループとにわけて考察する。

3.1 調査方法と参加者

アンケート調査に協力してくれた学生は、成均館大学校の学生74名（男性26名、女性48名）で、そのうち2年生から4年生が44名（男性11名、女性33名）、1年生が30名（男性15名、女性15名）である。調査では、学生らに質問用紙を配布し韓国のライティング教育について次のような質問をした。尚、ここでも特に時間制限は設けなかった。

- ＜質問1＞ 지금까지 글쓰기를 배운 적이 있습니까？
（今までライティングについて学んだことがありますか？）
- ＜質問2＞ 언제 배웠습니까？ ※복수회답가능
（いつ学びましたか？ ※複数回答可）
- ＜質問3＞ 어떤 글쓰기 스타일을 배웠습니까？ ※복수회답가능
（どのような型のライティングを学びましたか？ ※複数回答可）

3.2 結果と考察

次の表2から表4は、それぞれ＜質問1＞から＜質問2＞に対する回答の結果をまとめたものである。

表2 ＜質問1＞に対する回答

	Yes	No
2～4年生	33 (75%)	11 (25%)
1年生	24 (80%)	6 (20%)

＜質問1＞に対する回答を見ると、学年に関わらず、おおよそ7割から8割の学生がこれまでに（小学校、中学校、高等学校、大学で）何らかのライティングに関する教育を受けてきたことがわかる。

表3 ＜質問2＞に対する回答

	大学	高等学校	中学校	小学校
2～4年生	11	24	7	7
1年生	0	20	3	1

＜質問2＞に対する回答から、韓国では主に高等学校において重点的にライティング教育を行っていると考えられる。しかし、2～4年生のグループが小学校や中学校でも何らかのライティング教育を受けてきた学生が比較的多いのに対して、1年生のグループは小学校や中学校でほとんどライティング教育を受けていないという点は、大変興味深い傾向であると言えるのではないだろうか。

表4 ＜質問3＞に対する回答

	感想文	エッセイ	日記	論文	手紙	レポート	詩	物語	その他
2～4年生 (33名)	8	10	2	5	1	7	6	2	15
1年生 (24名)	2	8	2	5	2	4	0	0	15

＜質問3＞に対する回答で興味深いのは、2～4年生のグループに比べて1年生のグループで[感想文]について学んだ学生が少ないという点、それから1年生のグループでは[詩]、[物語]の項目が0となっている点である。これらの結果から推測すると、現在、韓国におけるライティング教育に何らかの変化が起こっていると考えられる。しかし、その詳細については調査がまだまだ不十分でありまたデータも少ないため、今後さらに追跡調査を行い韓国の教育制度も含め、その動向を慎重に分析していく必要がある。

ちなみに、2つのグループともに最も数値の高かった[その他]の項目は、大学受験のための論述対策（答えの書き方）としてライティングを学んだという学生がほとんどであった。

4. 成均館大学校におけるライティング教育

最後に、成均館大学校におけるライティング教育の現状について報告する。

4.1 成均館大学校におけるライティング教育の現状

2011年2月11日、成均館大学校意思疎通教育センターのJeon Dae Seok先生に成均館大学校でのライティング教育について約30分間のインタビュー調査を行った。

Jeon先生によると、近年、韓国でも急速にグローバル化が進み世界で活躍できる人材の養成が急務とされているが、その一方で、若者の活字離れも進み大学生がまともな文章を書けないという事態も起こってきているそうである。このような社会的背景もあって、成均館大学校ではライティングの授業を1年時の全学必修科目（基礎課程）としており、また2年時以降についても選択科目（高級課程）としてより質の高いレポート、学術論文を書くためのライティングの授業が開講されている。

以下、参考として成均館大学校で開講されているライティング関連の教科目名とその概要をあげる。

【基礎課程】

教科目名：글쓰기의 기초와 실제（ライティングの基礎と実際）

概要：大学生のライティング能力は全ての学問領域の学習と研究遂行の基であり、知識情報化社会が要求する基礎能力の養成は必須とされる。従って批判的思考と創造的表現能力を養い、社会生活全般に必要な分析力、問題解決力、コミュニケーション能力を備える必要がある。この科目は、ライティングの基礎を段階的に学習し、多様なライティングを実際に学ぶことで、大学のみならず社会に出てからもこれを活用できるようにする。

【高級課程】

教科目名：학술적 글쓰기（アカデミックライティング）

概要：大学で学術的な活動を行う、大学外で業務活動をするために必要とされる論証的思考能力とこれを表現する論証的なライティング能力を養う。実習を通じて体系的に学ぶ。

4.2 授業見学

2011年3月23日（15:00～16:15）、高級課程の選択科目「학술적 글쓰기（アカデミックライティング）」の授業を見学した。担当講師はPark Jeong Ha先生、受講人数は30名であった。授業は講義形式で行われ、パワーポイントが使用されていた。この時の授業テーマは、「文章を評価する能力」についてであった。文章をどのような基準で評価すれば良いのか、あるいは逆にどのような基準で評価されるのかということについて、様々な観点からその基準の詳細が整理されていた。授業の間、学生らが一人も居眠りすることなく真剣な眼差しで講義を聴いていたのが印象的であった。

5. 結び

以上、成均館大学校で行った作文実験および調査について報告した。

現在、韓国では多くの大学がライティング教育に力を入れており、しばらくすれば、その成果があらわれてくるのではないかと考えられる。隣国の研究者として韓国の教育システムの変化には今後も注目していきたいと考えている。

一方、日本の大学ではまだライティング教育（特に日本語アカデミックライティング）の基盤が確立されておらず、最近になってようやく研究が進められるようになったという段階である。小学校、中学校、高等学校の国語教育においてもライティング教育については従来の作文指導とそれほど変わりはない。今後、日本がグローバル化の流れの中に取り残されないよう、ライティング指導のできる教員養成を含め日本語ライティングの教育基盤を整備していくことが喫緊の課題であると思われる。

参考文献

- 門倉正美・筒井洋一・三宅和子（編）（2006）『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』ひつじ書房。
- 佐藤望・湯川武・横山千晶・近藤明彦（2006）『アカデミック・スキルズ 一大学生のための知的技法入門』慶應義塾大学出版会。
- 渡辺雅子（2004）『納得の構造 一日米初等教育に見る思考表現のスタイル』東洋館出版社。
- 김경원・김성수・박진숙・구자황・박재연・박해남・오광근・육민수・정희창・최진형（2006）『창조적 사고 개성적 글쓰기（創造的思考と個性的ライティング）』성균관대학교출판부。
- 손동현・원만희・박정하・배식한・박상태・이승희・이지영（2005）『학술적 글쓰기（アカデミックライティング）』성균관대학교출판부。
- Kaplan, Robert B. (1966) "Cultural thought patterns in intercultural education." *Language Learning* 16, pp.1-20.

韓国市民運動の歴史的展開

米沢 竜也 (国際協力研究科博士後期課程)

派遣先：ワシントン大学 (アメリカ)

はじめに

1987年の民主化以降、韓国政治の現場では市民運動が急激に注目を浴び、存在感を示してきた。マスメディアにも市民運動団体の活動が大きく取り上げられる一方、学会でも韓国の市民社会の成長という観点から市民運動を研究対象に取り上げた。特に、民主化後の政党体制が地域という対立軸で構成されたことや、権威主義体制から続く政治腐敗などによって一般の人々の政治不信は強く、市民団体に対する信頼と支持が政党・政府を上回るという調査もあった（ハ・スンチャン、2000）。韓国の社会運動研究者の間では、市民運動団体が世論の支持を受けられない政党に代わって「代議を代行」している（吳法哲、2000）という表現が出るほどだった。

このように民主化後の韓国政治において市民運動団体がなぜ浮上し、影響力を行使できたのかという問いが筆者の根本的な問題意識である。それは韓国において平等の実現と参加の実践という民主主義の価値がどのように実体化しているのか、実体化しているとすればその原動力は何かということ进行を明らかにすることである。特に、政治・社会的変化を求める集合行為が政策もしくは人々の社会的行動に影響を与える条件は国家によっても異なる。韓国の市民運動の成功と限界がどのような社会的・政治的条件を反映しているかを考察することは、韓国の政治システムの特徴を明らかにすると共に、他国の運動との比較においても重要である。

これまで韓国の市民運動について多くの研究がなされてきた。韓国では制度的チャンネル以外の方法で社会変革を求めるすべての集合的行為を「社会運動」¹と範疇化しつつ、運動の目的や主体によって社会運動の名称を使い分けるのが一般的である。市民運動も社会運動の下位類型とされる。さらに、民主化以前の運動はどのような主体であれ国家による制約を受けており、それに抵抗する性格を帯びていたため、包括的に「民主化運動」と捉えることがある（チョ・ヒョン、2010）。民主化運動の中核を担ったのが「民衆運動」である。民衆運動とは、「国家とそれを支える既得権益層に抑圧された民衆」による「解放運動」という意味で、権威主義体制と対立し、体制転換を伴う民主化を目指すものである。この民衆という概念が1980年代にマルクス主義の労働者階級として再解釈されると、それとは別に「階級を超えた市民による社会変革」を目指す市民運動が登場する。1989年に設立され、市民運動団体の中心的位置に浮上した経済正義実践市民連合（以下、経実連と略称）は、市場経済という体制を受け入れ、民主化後の政治体制を実質的に改革していくという実用路線を主張した。経実連は、市場経済の効率性改善、不動産関連イシューの解決、財閥改革を目標に徐京錫を中心に設立された。経実連は、1987年までの民主化運動の主翼を担った民衆運動に取って代わり、1990年代に市民運動の主役として大きな注目を浴びた。

ただ、経実連の市民運動が韓国において全く新しい現象であったわけではない。経実連の例を取ってみれば、徐京錫（ソ・ギョンソク）牧師をはじめ設立メンバーが1970年代の民主化運動の主翼を担った点、さらに民主化運動の1部門として重要な役割を果たしたキリスト教青年・学生運動の組織的・理念的分裂が経実連のアイデンティティおよび組織構成に直接的な影響を与えている点など、民主化運動からの連続性を有している。よって、1990年代に市民運動が活躍するに至った理由を考察するうえで、本稿では「総合的市民団体」として民主化後の韓国政治に存在感を示した経実連を市民運動の一ケースとして取り上げ、その成立過程をたどることで韓国市民運動の特徴を浮き彫りにすることを目的とする。

本稿で注目する経実連の設立過程の特徴は、第一に1970年代から積極的に社会運動に参加したキリスト教学生・青年運動の系譜である。キリスト教学生・青年運動はキリスト教の信仰と社会問題に対する実践という二つの要素の強弱によって、別々の組織が結成された。貧困層を社会構造の変革から救済することを強調した勢力がある一方、多様な背景を持つ人々の意識を変革して民主主義を実現することを強調した勢力があった。このうち、後者がキリ

1 社会運動は厳格に定義されるものではなく、一義的には観察者の分類であるといえる。ただ、社会運動の本質としては、静態的なもの（社会制度）に動態（変動）をもたらすという点が挙げられる（高島、1976）。

スト教運動としての独自性を模索しつつ、市民運動の理念を構成したことが、後の経実連の組織化につながったことを論じる。第二に、経実連設立者の徐京錫の人脈である。経実連の組織的基盤はキリスト教運動の一派にあることを指摘したが、経実連は純粋なキリスト教運動団体ではない。キリスト教関係者以外にも多数の専門家が参加したが、その専門家らは徐京錫の個人的な人脈によるところが大きい。徐京錫の人脈形成が60年代・70年代に行われ、徐京錫の団体参加呼びかけに参画した人々によって初期経実連の性格もまた規定されたといえよう。この2つの要素が市民団体を特徴付けたのかを論じるのが本稿の目的である。

第1章：70年代民主化運動におけるキリスト教系団体の浮上

第1節：キリスト教系団体による民主化運動

1989年に経実連が自らを市民運動と規定して発足する以前から韓国では市民運動という言葉が存在していた。1989年以前の新聞記事から市民運動という単語を含む記事を検索してみると、1960年代から70年代にかけては、生活マナーの向上を訴える官民共同のキャンペーンを市民運動と呼び、一般市民生活に関する法秩序や社会秩序を守るよう啓蒙するスタイルであったことが伺える²。また、80年代には公害問題に端を発した環境運動や、原発反対運動、消費者運動などが展開されるようになったが、こうした運動は共同体に住む「市民」の「権利」を主張し、生活の向上を図ることが目的だった。よって、70年代から80年代の市民運動とは、市民を「啓蒙」するか、市民の「権利」を主張するといった「市民に対する」運動に主眼が置かれていた。こうした運動は行政に主導されることも多く、運動を展開する主体も行政に認定された合法的団体であったために、権威主義体制から民主主義体制への転換を求める運動に従事していた人々にとっては親体制的運動と映った。

1987年の民主化までの社会運動は権威主義体制に抵抗して民主主義体制を樹立し、政治的自由や基本的自由権の保障を目指すものが大部分であった。学生や知識人、労働団体、農民団体、宗教団体などが各自の目標を持ちながらも、互いに協力しながら運動を展開したため、1987年以前の各運動を民主化運動として捉えることが多い(チョ・ヒヨン、2010)。

民主化運動の展開において韓国のプロテスタントが果たした役割は大きい。韓国のプロテスタント団体は大きく保守派とリベラル派に分けられるが、このうちリベラル派が民主化運動の一翼を担っていくことになる。リベラル派の運動を取りまとめたのが韓国基督教教会協議会(KNCC)³である。

リベラル派のプロテスタント団体は70年代に入ってから、直接的な民主化運動を展開し始めている。(民主化運動記念事業会研究所、2009:360)。その背景には、第一に世界的な神学傾向の変化が挙げられる。1960年代までのプロテスタント教団は、個人的靈性に重点を置いて宣教を行っていたほか、政権よりの態度をとることで政権から各種支援を受けていたため、社会問題に対して意見表明をすることはなかった(チョ・ビョンホ、2005)。しかし、1960年代にカトリック・プロテスタントのリベラル派が世界教会協議会(WCC)によるエキュメニカル運動(教会一致運動)に参加する過程で、「神の宣教」神学⁴や解放神学⁵の影響を受け、宣教における重点が個人の靈性から社会における神の意志の実現に移った(キム・ヨンイル、1984)。その背景には、1960年代の第3世界における貧困状況に対する関心があった。ラテンアメリカにおける一部既得権層が大多数の貧困層を支配するという社会矛盾やアフリカの絶対貧困を目にしたとき、キリスト教の役目は従来のように個人の救済を論じることではないという自省の念が生まれたのである。1965年のWCCジュネーブ大会でははっきりとキリスト教の社会参加を謳っている(キム・ヨンイル、1984)。こうした事情により、キリスト教系団体による社会運動(以下、キ

2 例としては、交通マナー向上運動や違法露天商摘発運動、たばこポイ捨て撲滅運動などがソウル市によって推進された(朝鮮日報1983年2月5日付10面)。

3 1966年当時、大韓イエス教長老会統合派、大韓基督教長老会、基督教大韓監理会(メソジスト派)、救世軍、大韓聖公会、基督教大韓福音教会で構成されており、プロテスタント信者の3分の1を占めていた(民主化運動記念事業会研究所、2009:360)。

4 神の宣教神学は、それまでの宣教が教会主体で個人に対して行われてきたことで、教団の分裂が生じ、教会を膨張させ、教会内に活動が限定されていることを批判し、宣教の主体は神であり、宣教の場は世界であることを強調した(キム・ミョンベ、2009)。つまり、宣教の脱教会主義であり、キリスト教信者の積極的な社会参加による宣教を主張し、福音主義との立場とは決定的に対立した。

5 解放神学は神の宣教神学の社会矛盾に対する関心をさらに推し進め、社会問題の構造悪に対する革命を主張した。こうした主張はマルクス主義の科学的分析手法を取り入れ、構造悪を伴う発展から人間を解放することを論じた(キム・ミョンベ、2009)。

リスト教運動と略称)が登場するに至る。

第二に、朴正熙大統領の軍事政権が政権維持のために政治的自由の抑圧を強めた政治状況が挙げられる。キリスト教系団体が直接的に政権批判を行うようになったのは、朴正熙大統領が1969年、憲法の大統領3選禁止規定の改正を試みたことがきっかけだった。当時の野党関係者はもちろん、学生や文化人などは朴正熙大統領の非法的な政権維持の試みに強力に反対したが、プロテスタント系リベラル派の教団である韓国基督教長老会⁶の金在俊(キム・ジェジュン)牧師が反対運動に参加したことが契機となり、朴正熙大統領の3選反対運動にキリスト教系団体も参加して行くことになる⁷。結局、朴正熙政権は1972年に戒厳令を宣布、行政・立法・司法のすべての権力を大統領に集中させる維新憲法を制定し、反体制派の運動に対する弾圧をさらに強めていくことになる。この朴正熙大統領の新たな体制(維新体制)は反体制派に対する弾圧をさらに強めたが、そのことがキリスト教系団体を運動の中心に浮上させる要素となる。

当時の反体制派の運動は主に政治参加さえも認められなくなった野党政治家、民主化を要求する言論・知識人⁸、そして学生によって担われていた。維新体制下の弾圧は容赦なく、民主化を要求した学生、教授、マスコミ関係者などは職や学籍を剥奪されたり、拘束されて尋問や拷問を受けたりすることがしばしばだった。キリスト教系団体については、初めにキリスト教学生団体が反体制的運動を始めることになる。キリスト教学生団体である韓国基督教学生会総連盟(KSCF)⁹がこのような状況下で学生運動を率先する立場になったのは、第一に、学生運動が弾圧によって萎縮していた中、学生運動に従事していたキリスト教学生が全国の大学に存在するキリスト教組織のネットワークを活用することができたからである¹⁰。すでに弾圧の対象となっていた学生運動は各大学の学生会をつなぐネットワークを形成することができず、キャンパス内でのデモを行うのも困難な状況であった。こうした状況下で、キリスト教学生会の全国的なネットワークは学生運動の全国展開において貴重であったといえる。1973年4月にはキリスト教学生によるデモの試みが弾圧され、KSCFに所属する学生ら¹¹が拘束される事件(南山復活節礼拝事件)があったが、この事件を通じて学生だけでなく牧師や教団、KNCCも反維新体制の姿勢を強めることになった(KSCF、1995)。

キリスト教運動団体と維新体制が決定的に対立する契機となったのは1974年4月の民青学連事件だった。民青学連事件はキリスト教学生を中心とする学生運動組織とそれを背後で支援していた在野人士が緊急措置4号¹²によって一斉に検挙されたもので、学生運動および在野の民主化運動勢力にとっては指導力と組織を失う打撃となった。この事件は前述したとおりキリスト教系団体のネットワークが利用されたため、学生運動系¹³とキリスト教学生会を結ぶ役割を果たしたKSCF実務者26人はもちろん、KSCFの指導者の役割を果たしていたKNCCの朴炯圭(パク・ヒョンギュ)牧師やカトリックの池学淳(チ・ハクスン)主教も逮捕されるなどした。この事件がキリスト教全体に与えた衝撃は大きかったといえる。

多くのキリスト教運動家が拘束されたことから、キリスト教組織が多く入居する鐘路5街の基督教会館は拘束された運動家の家族らが釈放を求めて祈祷する空間¹⁴となった。キリスト教関係者家族の祈祷会から始まったこの

6 韓国基督教長老会はキリスト教プロテスタント派の一教派である。1953年、金在俊(キム・ジェジュン)牧師が自由主義神学を受け入れ、聖書解釈の自由を訴えたため、大韓イエス教長老派から除外された。韓国基督教長老会はその自由主義的・進歩的立場で知られている。

7 民主化運動の青年学生組織である「民主守護全国青年学生総連盟」およびキリスト教系団体の「民主守護基督青年協議会」が選挙直前の1971年4月結成されたが、キリスト教系団体以外はすべて弾圧された(チョ・ビョンホ、2005)。

8 政治制度の枠外で民主化を要求する人々を韓国では在野と呼ぶ。通常、この用語は通常、知識人や作家、宗教関係者、言論関係者など学生運動や労働運動に属さない人々を指して使われる。

9 韓国基督教学生会総連盟(KSCF)は1949年に設立されたキリスト教信者の学生の自治組織であり、KNCC加盟6教団からの後援を受けている。また、韓国基督教教授協議会の指導を受けている。

10 徐京錫のコラムによると、当時の一般学生運動とキリスト教学生運動は共に維新憲法の改正という目標を立て、KSCFの全国的ネットワークを通じて運動の拡大を狙っていたという(http://www.suhkyungsuk.pe.kr/bbs/view.php?id=column&page=9&sn1=&divpage=1&sn=off&ss=on&sc=on&select_arrange=subject&desc=desc&no=288、2011年4月11日取得)。

11 拘束された学生は、KSCF会長ナ・ソング、会員ソ・チャンソク、チョン・ミョンギ、ファン・インソン、イ・サンユンなどだった(チョ・ビョンホ、2005)。

12 維新憲法では大統領に体制を脅かす行為に対して処罰する権限を与える緊急措置権を付与している。第4号では全国民主青年学生総連盟(民青学連)とそれに関連する団体に加入、加担することを禁じた(徐勝、2003)。

13 コラムによると学生運動のリーダーはイ・チョル、ユ・インテ、ユ・グンイルなどだった。

14 キム・サンギン牧師、イ・ヘドン牧師がまとめ役となって「木曜祈祷会」が開かれるようになった(イ・グンソン、1984)。

運動空間はやがて、キリスト教系以外の運動家の釈放を求める人々が集まるようになり、さらには民主化運動に負担して職を追われた教授¹⁵やマスコミ関係者、退学させられた学生が集まって連帯運動を行う場を提供した。キリスト教運動の枠を超えた民主化運動の場が基督教会館や明洞聖堂といったキリスト教の空間を中心に形成されたのは、宗教団体に対する弾圧が他の団体に対する弾圧よりも程度が弱かったためである¹⁶。集会の自由も制限されていた政治的状況で、拘束された運動家の釈放を要求できる唯一の場所であった。キリスト教運動家の度重なる逮捕・拘束は越権行為であり、人権侵害であるという主張の下、KNCC 下に人権委員会が 1974 年に構成された。人権委員会は拘束運動家の家族による釈放要求だけでなく、地域単位の組織作りや法律支援活動、時局批判など民主化運動の中心に立った（民主化運動記念事業会研究所、2009）。1970 年代の民主化運動におけるキリスト教の中心性は、朴炯圭牧師や文益煥（ムン・イクファン）牧師や徐南同（ソ・ナムドン）牧師といったリーダーの輩出だけでなく、野党政治家やマスコミ関係者と共同で体制批判を教会で行ったといった事実からも垣間見える。1976 年の 3.1 民主救国宣言や翌年の民主救国憲章署名運動はキリスト教の組織を通じて実行された（民主化記念事業会研究所、2009）。

一方で、キリスト教学生運動を含む学生運動全体が指導者の拘束で組織が瓦解し、弱体化したため、大学を卒業した運動経験者（青年）の役割が重要になっていた。各教会の青年会が連合して 1976 年に韓国基督青年協議会（EYCK）を結成すると、それまで学生運動がキャンパスで行っていた民主化要求デモを教会で行うようになった。それだけにとどまらず、キリスト教青年運動は労働運動や貧民運動の現場に参加して現場の組織化を率先したりするなど重要な役割を行った。70 年代における反体制的青年組織はキリスト教系が唯一だった（民主化記念事業会研究所、2009）。

このように、維新体制下におけるキリスト教運動は当時の各運動における中心をなしており、キリスト教系団体の活動が野党政治家や著名運動家を引き込みながら一つの反体制運動を形成したといえる。特に、プロテスタント系教団の協議体である KNCC 所属の運動家は下部組織の KSCF や EYCK、また人権委員会などを構成し、学生から青年、そして知識人にいたるまで体制による弾圧に反抗する基盤を提供したといえる。KSCF の弾圧から青年や牧師まで多くの人々が運動家釈放要求や人権改善要求、そして労働環境改善要求など体制の正統性に疑義を唱えるようになっていった。

しかし、キリスト教運動団体が反体制的な運動拠点となった一方で、維新体制による弾圧は強まる一方だった。たくさんのキリスト教運動家が拘束され、拷問を受ける中で、キリスト教運動の反体制的性格と運動の中心性は強まったが、必然的に組織に参加する人々は少なくなっていった。非合法団体となった KSCF は中央組織としてネットワークを維持することが困難になったほか、リベラル派の教団の中でさえもこうした運動方針に批判の声が上がることもあった（民主化運動記念事業会研究所、2009）。こうした組織基盤の弱化がその後の運動路線の分裂をもたらすことになる。

第 2 節：70 年代民主化運動の理念と組織

70 年代の民主化運動における重要なモチーフは「民衆」であった。朴正熙大統領による経済成長政策とその成功は、一方で韓国社会に大きな変動をもたらした。工業化による都市化によってソウルをはじめとする大都市ではスラムが形成された。また、輸入関連セクターに特化した産業育成政策は、労働環境の悪化をもたらし、さらには貧富の差を拡大させた。また、労働者の賃金抑制のために農産物の価格抑制政策をとったために、人口流出が起きていた農村はさらに疲弊することになった。労働者や都市貧民、農民といった産業政策の犠牲者が状況の改善を要求することは許されておらず、政治的自由は極端に制限されていた。こうした政治的・経済的抑圧が、スラム街形成、劣悪な労働環境、農村の疲弊といった社会問題として顕在化し、その問題の根源が朴正熙政権の抑圧的体制にあると認識された時に抑圧された者として民衆が概念化されるのである。つまり、韓国の経済発展は韓国国民の

15 維新体制に反対を表明したという理由で解職された大学教授は多数に上るが、その中には多数の韓国基督者教授協議会の会員が含まれていた。こうした解職教授らが韓国解職教授協議会を立ち上げ、人権運動および民主化運動を主導した（民主化運動記念事業会研究所、2009）。

16 韓国民主化運動史 2 参照。

ためであるという朴正熙政権の主張に対する強烈なアンチテーゼとして民衆概念は成立することになる（Chang、2004）。

70年代の時代的背景として民衆とは維新体制の開発独裁によって不利益を受けた全ての人々という意味合いが強い。維新体制が余りにも強権的であったため、民衆は経済的な困窮者だけでなく、反体制的な言動や行動から職を失ったマスコミ関係者や教授、除籍された学生など政治的な抑圧を受けた者も含まれるのである¹⁷。よって、民主化運動の目標は、労働者や農民などの経済的困窮者の生存権の保障、政治的自由の保障といった人権の問題と深く結びついていた。また、こうした人権侵害を行う朴正熙政権を交代させ、民衆の意見を反映させる政治を行うために、民主主義制度、具体的には議会制度と司法部の独立の回復が主張された。また、その具体的な目標として維新憲法の撤廃が設定された¹⁸。

一方、経済的格差の拡大と貧困層の増加についての原因は、経済の外国依存に焦点が当てられている。在野運動家として活躍した文益煥神父は経済問題について次のように論じている。まず、国内の労働者や農民が抑圧されているのは、朴正熙大統領が政権維持のために外国資本の導入による経済成長を推進したためであると論じる（民主統一編集部、1985）。こうした経済的抑圧をなくすためには外国資本ではなく民族資本による経済の建て直しが必要であるが、分断状況にある韓国では日米の資本主義に組み込まれており、政権維持に汲々としている朴正熙大統領はこうした外国勢力の言いなりにならざるを得ない。よって、経済問題は権威主義体制から民主主義体制に転換することだけでなく、朝鮮半島の統一によって根本的に権威主義体制の出現を防ぐ必要があるとする。よって、経済問題は民族問題であり、民族自立経済の成立は統一による安定した民主主義政権の成立に懸かっていると説くのである（民主統一編集部、1985）。

よって、1970年代の民主化運動の理念は、政治的自由を含めた人権の確立と民主主義政権の成立と、民族自立経済の確立というナショナリズムがともなっていた。そしてこのナショナリズムの担い手である民衆は、独裁体制とそれに寄生する買収資本に抑圧された被支配者であり、国民の大多数を占める人々を指しているのである。民衆概念が経済的貧困層や政治的に抑圧された人々を包括したことが、キリスト教系団体による運動を成長させる要因となった。特に、社会参加の義務を唱えた「神の宣教」神学を受容し、韓国の社会問題として民衆概念を神学に取り入れたプロテスタント団体は、中央組織である KNCC を中心に各種問題に対応する組織のネットワークを結成することになった。貧困層としての民衆に救済する取り組みは都市産業宣教会（UIM）や韓国基督学生会総連盟（KSCF）による学生社会開発団といった活動として具体化するようになった。一方、民主化運動に従事して逮捕拘束された学生やマスコミ関係者の釈放を要求する運動も KNCC に設置された人権委員会が担当した。また、民主化を主張したがために解職された教授らは韓国基督教教授協議会のもとに結集して声明書の発表を行うなど、キリスト教系団体を中心とした民主化運動ネットワークを結成した。キリスト教系団体がこのようなネットワークを形成し、1970年代の民主化運動において中心的役割を行うことができたのは、前節で指摘したように政治的弾圧の保護幕となった教会という場があっただけでなく、運動の概念が支配側対被支配側という二項対立的かつ包括的であったためだといえよう。

第2章：キリスト教運動における民衆と市民

第1節：YMCA のアイデンティティ葛藤と市民運動

1970年代にキリスト教系団体、とくに学生・青年組織が民主化運動の主翼を担ったことは前章で確認した。また、民衆概念が民主化運動において重要なモチーフとなったことも指摘した。本章では、KSCF や EYC といったほかのキリスト教系団体が反体制運動を展開していた 1970年代に、同じくキリスト教系団体である YMCA が市民というモチーフを使って運動を展開していく状況を分析することにする。

YMCA の歴史は KSCF よりはるかに長く 19世紀末にはキリスト教の宣教と西洋文化伝道の窓口として韓国に

17 この民衆概念の主唱者である韓完相は、民衆が経済的に抑圧を受ける階層のみならず、体制から政治的に抑圧を受ける人々も民衆概念に包括し、「支配—被支配」の観点から民衆を概念化した（Kim,1995）。

18 1976年に在野運動家が発表した「3.1民主救国宣言」では維新憲法の撤廃が要求されている（民主化運動記念事業会研究所、2009）。

も YMCA 支部が設立されている。YMCA は基本的にカトリック・プロテスタントを問わず、教派を超えたキリスト教信者のボランティアから成り立っており、基本的に聖職者ではなく平信徒の集まりという性格を持つ。つまり、YMCA の組織はこのような自主性のほかにも、あらゆる階層の青年を一つにするという開放性を特色¹⁹としている。YMCA には市 YMCA 連盟の傘下に高校 YMCA、青年 YMCA など構成員の所属別に組織が結成されている。一方、学生 YMCA が大学ごとに構成されており、その連合組織として大学 YMCA が結成されている。大学 YMCA や市連盟は各自独立した組織であり、その連合組織として全国単位の大韓 YMCA 連盟が結成されている（チャ・ユンジェ、1986）。

YMCA は解放後、米国 YMCA の支援の下で組織の再建を行っていたこともあり、YMCA のプログラムも米国 YMCA と同様の性格を持つようになった。例えば、宣教団体としての聖書研究、社会教育機関としての体育教育・趣味講座、青少年事業としての幼児教育や子どもクラブ、職業技術学校などである（キム・ジュンシク、1984）。大学 YMCA に関しては、エキュメニカル運動を推進する世界学生キリスト教連盟（WSCF）の指導により、KSCF との共同事業を 60 年代初頭から行っており、1969 年には KSCF と大学 YMCA が組織を統合することになる²⁰。これらキリスト教学生組織の運動路線を指導したのが、キリスト教信徒の教授らである。彼らは 1963 年に韓国基督教者教授協議会²¹を設立し、KSCF や大学 YMCA、さらには韓国 YMCA の運動理念を模索するブレインの役割を担った（キム・チョンベ、1987）。

このように韓国 YMCA や KSCF、KNCC など主にプロテスタント系リベラル派の教団が参加している団体間では聖職者である教団の指導者がその理事を持ち回りしていることが多く、重複している。知識人でもある指導者たちは、その組織の特徴に合わせて理論的根拠を提示していったと思われる。

大学 YMCA と KSCF が統合し、大学生会員が KSCF に流出した YMCA は、組織の維持・拡大のために青年 YMCA の全国連盟を設立し、その後の運動の方向性を模索することになる。こうした運動路線の模索の背景にあるのは、第一に、キリスト教運動全体に影響を与えた「神の宣教」神学の広まりとそれに伴う社会参加の義務感であった。KNCC が WCC の決議を受けて社会問題に取り組み始めたように、韓国 YMCA も世界 YMCA の動向に影響を受けた。1969 年にイギリスで開かれた YMCA 世界総会では、第 3 世界と先進国の格差拡大の問題が取り上げられ、社会正義が YMCA 運動のキーワードとなった（大韓 YMCA 連盟、1987）。1973 年にウガンダで開かれた YMCA 世界総会では今一度 YMCA 運動が社会正義に関わることを確認し、各国特有の社会問題に合わせて YMCA 運動の目的を定めるよう勧告した（大韓 YMCA 連盟、1986）。

こうした流れを受けて韓国 YMCA は 1970 年代初頭から YMCA の運動理念を再確認する作業に入り、1974 年からは韓国独自の文脈から YMCA の使命を探る「目的と事業研究委員会」が傘下に設置されることになった。ここで重要な点は、当時 KSCF が民主化運動に集中し、KNCC が貧民や政治犯の人権救済に専念していた時期に YMCA の独自性を探ることになった点である。そして、その作業は KNCC や KSCF にでも指導していたキリスト教知識人によって担われたことも重要である。

当時、目的と事業研究委員会には姜汝奎、徐南同、韓完相、盧明植（ノ・ミョンシク）、キム・チョンベ、ユ・ドンシク、ユ・ジェジョンといった神学者・教授などが参加し、韓国 YMCA のアイデンティティと今後の運動目的について議論した（大韓 YMCA 連盟、1986）。この YMCA 運動の再定義の議論は 1976 年に韓国 YMCA 目的文という形で結実したが、その内容には以下の特徴がみられる。

第一に当時のキリスト教知識人の問題意識が、都市化・産業化にともなう大衆社会化や社会の隅々までに国家統制が及ぶ管理社会化にあることである。この議論は 1960 年代から 1970 年代にかけて近代化を達成した国々でみられる共通の現象として盛んに議論された問題だが、YMCA の目的文ではアパシー化した大衆に責任意識を持たせ、民主主義社会の主体にさせることが謳われている。

第二に、貧困層としての民衆を救済の対象と見なすと同時に、韓国文化の主体であると設定していることである。主体性をなくした個人がよりどころにする新たな韓国文化は民衆から発見されるという民衆民族主義が盛り込まれ

19 1855 年に世界 YMCA が結成された時、YMCA の運動理念と参加資格について基準（パリ基準）が設定され、各界各層の青年が一つになって神の国を建設することが謳われた（チャ・ユンジェ、1986）。

20 KSCF と大学 YMCA は 1949 年に組織統合を試みたが失敗している（KSCF、1995）。

21 韓国基督教者教授協議会には徐南同や金在俊など韓国の神学において多大な影響を持った教授だけでなく、ヒョン・ヨンハク、ノ・ミョンシク、韓完相など社会科学関係の教授も参加していた。

ている。一方で、YMCA は韓国の民主化や韓国の文化アイデンティティを確立する主導的役割を担うことはできないと明記していることから、YMCA は民衆の組織ではないことが意識されている。

以上の二つの立場は、韓国の社会変動をもたらす主体を誰に設定するかという点で若干の違いがみられる。目的文採択後の同研究委員会の議論においても「民衆とは誰か」という点が取り上げられている（大韓 YMCA 連盟、1988）。フランス革命など西洋史を専攻とする盧明植の場合、オルテガの大衆社会論を援用しつつ、資本主義社会における消費階層である「大衆」を平等と自由を主体的に実現しようとする「市民」に変えることが重要だと説き、民衆＝市民といった見解を示した。同じく同委員会に参加した韓完相は、民衆とは即自的民衆と対自的民衆に分けられるが、自らを歴史的な責任を持つ民衆（対自的民衆）として認識すれば知識人であっても民衆に含まれるとした（大韓 YMCA 連盟、1988）。二人の議論は、社会問題に対して責任意識を持つことで民衆＝市民といった主体が形成され、彼らが民主主義社会の主体となるという点で共通している。よって、YMCA の運動も韓国の民主主義に対して重要な意味を持たせる意図があるとみられる。

しかし、こうした立場の違いは、実際のプログラム運営においてはあまり問題にならなかったようである。近代化の主体としての市民を形成するための教育文化事業が YMCA の役割であるとして、まず市民教育を担当する人々を育成するプログラムが作られた。これは YMCA の会員に多かった教師、法曹、医師、そして学生運動経験者を市民教育担当者として養成することで、YMCA が市民教育の中心となることを目指しているものである（大韓 YMCA 連盟、1988）。さらに、市民教育の具体的な内容としては政治・社会・経済問題について合理的な認識を持てるよう議論する市民論壇²²を1970年代から展開している。また、国家や企業などによる個人の権益の侵害に対処するため法律問題や商品告発などを行う市民中継室も実践された。こうした運動は民主化という大きな問題の中の一分野として捉えられたのである。一方で消費者運動も実践されたが、それは海外負債を抱えた国内産業を守るという民族主義的な内容を持っていた。

このように YMCA の運動理念は民主主義と民族主義を前面に出すことによって、YMCA の構成員である中間層の位置づけをあいまいに位置づけることができた。つまり、YMCA の構成員は民衆のパートナーであり、民主主義の価値を実現する勢力としての市民であるという範疇化によって YMCA 構成員を社会問題に取り組みせようとしたのである。

第2節：1980年代のキリスト教運動と民衆

1980年代の幕開けは朴正熙大統領の暗殺という歴史的な事件と共に始まった。1979年10月に朴正熙大統領が暗殺され、にわかに民主化の期待が膨らんだ中、キリスト教系団体を中心とした在野運動家が1979年11月25日に結婚式を装って民主憲法の制定などを主張する集会を開いたが、過渡期政権によって弾圧される事件が起こった（YWCA 偽装結婚事件）。この事件は運動陣営にとって朴正熙大統領という抑圧体制の指導者が消えても、体制の抑圧的性格は健在であることを認識させるきっかけとなったといえる。さらに1980年5月の光州事件は、従来の運動方法では民主化を達成することができなかつただけでなく、一般市民を巻き込んだ虐殺に対して何の対応もできなかったという虚脱感を抱かせた（KSCF、2005）。

さらに、キリスト教系運動家が相次いで逮捕されるなど²³組織の先細りという問題は特にキリスト教運動の重要な課題として浮上した。KSCF 指導者の逮捕はもちろん、キャンパス内での学生運動はほぼ弾圧されたため、70年代初めに有していた KSCF の全国ネットワークは機能しておらず、KSCF 傘下の学生会が連合して運動することはほぼ不可能になっていた。このことから1980年代初頭には KNCC 人権委員会を中心とした指導者の釈放要求がキリスト教運動の中心議題となっていた（民主化記念事業会研究所、2010）。

一方で、大学を卒業して EYC などのキリスト教青年組織で運動していた人々は、1980年の光州事件をきっかけにいったん運動を離れるか、農民運動もしくは労働運動といった分野に関心をもち新たな運動路線を模索し始めた。農民運動に関しては1982年に韓国基督農民会総連合会を結成し、農村にある教会を中心に農家を組織し、農

22 具体的には、各種時事問題について YMCA 会員である専門家が講義をするという形であった（大韓 YMCA 連盟、1986）。

23 国家転覆内乱陰謀事件、クリスチャンアカデミー事件、KSCF 集会事件などによって徐南同、文益煥、韓完相、イ・ヘドンなどの指導者たちが逮捕された。

民の生存権を訴えた（民主化記念事業会研究所、2010）。また、労働運動組織として韓国基督労働者総連盟、都市貧民運動組織として韓国基督教都市貧民宣教協議会などを1985年に相次いで設立した。

よって、1980年のキリスト教運動団体の運動路線の見直しは主に貧困層としての民衆に集中した。このような民衆への関心の集中は、同時代の学生運動の流れに大きく影響を受けたKSCFにもみられた。1980年代初頭の新体制に直面し、運動の方向性を決める「理念」とそれに適合した「組織」の再建がKSCFにとって重要な課題となっていた。1981年のKSCF政策委員会では、70年代の運動とキリスト教学生運動が挫折したのは、現実問題に対する科学的分析、民衆志向性、戦闘的実践が足りなかったためだという主張がなされた（積極闘争論）。つまり、キリスト教の民衆神学と民衆全体の変革運動が合流して社会構造を変革するためには、民衆とともに運動の力を終結して闘争をさらに拡大する必要があるという主張だった（KSCF、2005）。当時の政情や社会状況を科学的に分析するという主張は、1980年の光州事件によって権威主義体制だけでなくそれを支持する米国や外国資本をどのように捉えるべきかという問題意識のことを指す（学生運動論争史編集部、1990）。民衆が抑圧され、劣悪な環境で生活しているのは、権威主義体制が資本家階級および外国資本と連携して経済的に労働者階級を搾取しているためだという理解が光州事件をきっかけに急激に広まるようになった。よって、革命を実現させるためにはキリスト教運動が前衛となって民主化運動を主導しなくてはならないというマルクス主義的路線がKSCF内で台頭するようになったのである。

他方で、キリスト教運動が70年代を通じて急進的になった結果、組織の弱体化を招いたとして、再びキャンパス内の問題に集中して組織の建て直しを主張する新たな主張が登場した（準備論）。ITグループと呼ばれる彼らの主張は、キリスト教運動団体として反外勢・反独裁運動を実践するためには理念を確固としたものにすべきであり、その理念はキリスト教の信仰に立脚すべきだという内容であった（KSCF、2005：369）。また、信仰に基づいて大衆を意識化して組織に参加させることが組織再建の道であり、大衆の意識化には個人主義的価値観を是正する文化運動を行うべきだと主張している。

この論争は当時の学生運動における路線対立をそのまま反映したものである。当時の学生運動の間でも1980年の民主化運動の挫折について、大衆基盤の不在と統一的指導部の不在が原因であるとし、一般学生の使命感を鼓舞する運動が必要だという段階的闘争論の立場があった。それに対し、段階的闘争は機会主義であるとし、学生運動が先導的役割を担って民衆革命を達成すべきだとした（カン・シンチョル、1988）。

学生運動をはじめ、キリスト教運動など民主化運動全体が民衆による変革というテーゼに傾倒していく中、YMCAは市民運動という位置づけで穏健な立場を維持した。KSCFのITグループは新しい文化の創造を前面に打ち出していたYMCAに移り活動を行った（KSCF、2005）。このようにして、YMCAはその組織上の特性から個人の権利に焦点をあてた運動を展開し、さらに経済ナショナリズムを加えた理念を標榜することになった。

第3章：経実連の登場と市民運動言説の再構成

第1節：経実連の登場

前章では、YMCAの運動が組織の特徴と民主主義の実現という観点から市民運動言説を誕生させるきっかけとなったことを論じた。しかし、その市民運動が大々的に脚光を浴びるようになったのは1989年の経実連結成以降である。

1990年代にメディアに大きく取り上げられた経実連が自らの運動を市民運動であると規定したため、市民運動という用語が広く韓国社会に定着するようになったが、前章で見たように市民運動の言説は1980年代のキリスト教運動に直接的な起源がある。本章では、1990年代に韓国政治に大きな影響力を持った市民運動の性格を、経実連の結成過程とキリスト教運動との共通点から浮き彫りにする。

経実連は1989年7月、当時大きな社会問題となっていた不動産価格暴騰と格差拡大の是正を目標に、徐京錫（ソ・ギョンソク）牧師が中心となって結成された。徐京錫は1970年代のキリスト教運動で指導的役割を担った人物で、KSCFのほかKNCC、EYCで活動していた。1974年には民青学連事件の主導者として逮捕され、獄中生活を余儀なくされたこともあるなど、当時の学生運動・青年運動の先鋒に立った人である。1980年の光州事件後は、

運動の第一線から退き、アメリカのユニオン神学校に留学した。1987年の民主化を契機に韓国に帰国し、キリスト教運動のシンクタンク機関である韓国キリスト教社会問題研究院（以下、研究院）の院長職に就いた。しかし、1989年には研究院の常勤研究員と意見が対立し、辞任要求が出されたため、徐京錫は自ら研究院を辞任し、新たな運動として経実連を同年に結成することになる。

徐京錫が市民運動を全面に打ち出した理由の一つは、資本主義体制の容認がある。1987年の民主化は労働運動や学生運動などは階級的な変革目標を持った運動が中心となって展開されたが、民主化自体は軍部政権と野党が「直接選挙によって大統領を選出する」ことで妥協して成立した。1988年に軍部出身の盧泰愚大統領が直接選挙で選出されると、民衆運動側は「真の民主化はまだ達成されていない」として変革を求める運動を継続する姿勢を打ち出した。民主化後は、労働運動においては労使紛糾、在野においては統一問題に打ち込むようになり、徐京錫はそうした運動の展開に対して批判的であった。

そもそも徐京錫が70年代にキリスト教運動のリーダーとして活躍していたころは、社会主義による変革を意識して運動をしていたという²⁴。その徐京錫が社会主義理念から資本主義体制の擁護に方向転換することになったのは、1980年代に米国留学で見聞した北朝鮮の現状と韓国製品の力強さであったという²⁵。それまで徐京錫は、世界経済に従属した韓国経済は一部の資本のみが成長し、その結果国民の生活も悪化しているため、民族自立経済を確立すべきだという従属理論的見解を堅持していたが、資本主義の躍動性を評価し、今後はこの資本主義体制化における矛盾に対する運動が必要だと認識するに至ったという²⁶。こうした立場を確立して米国から帰国した徐京錫と、いまだに民衆的言説を堅持していた研究院の立場には大きな隔たりがあったことは想像にかたくない。

1989年の5月に院長職を辞任した徐京錫は、同年6月には新たな運動団体を発足させるために活動し始めている。徐京錫が最初に提示した運動は、「不動産投機とそれに伴う住宅価格の高騰」を是正するというものであった。このテーマ自体が徐京錫自身のアイデアであったかどうかは確認できないが、このテーマを扱うに当たって徐京錫は2つの系統の人脈に相談している。

一つ目の人脈は自身が所属し、キリスト教運動の活動の根拠としていたセムンアン教会系である。セムンアン教会を拠点に1970年代のキリスト教学生運動を展開した徐京錫は、同教会の後輩のシン・デギョンに新しい運動について相談している²⁷。シン・デギョンは、KSCFでITグループを主導し、YMCA幹事に移った人物である。このセムンアン教会の人脈に関しては、シン・デギョンを初め、YMCA幹事のユ・ジョンソン牧師などキリスト教運動のITグループ側の人物たちであり、YMCA市民運動の理念と組織のあり方を提示したと思われる。

もう一方の人脈は徐京錫の高校・大学時代の同期などが中心の知識人たちである。徐京錫は米国留学から帰国後、高校・大学の同期で親しい友人である朴世逸（パク・セイル）ソウル大教授（当時）の誘いで「ウリマダン」という知識人グループに参加していた。このグループに参加していた知識人の多くが、経実連結成時に運動に参加したという。管見の限りではこのグループの特徴を知りうる資料は見当たらないが、所属していた知識人の主張などを論文で知ることができる。特に、経実連発足当時に積極的に参加した朴世逸教授と李根植（イ・グンシク）ソウル市立大教授（当時）は民主化以降、市場自由主義を基調としながら、市場の失敗による分配の不公平さを政府の介入によって是正することを主張していた（朴世逸、1988；李根植、1990）。こうした市場自由主義的立場は、徐京錫の民衆運動批判意識とあいまって、経実連発起宣言文にもはっきりと表明されている。

経実連は資本主義市場経済体制の効率性と躍動性に基づくものの、市場経済がもたらす貧富の格差を政府が介入して是正することで、経済成長と社会的公平の両方を同時に実現することを目標に置く²⁸

このように徐京錫が主唱した市民運動はキリスト教系の運動組織の活用と市場自由主義を前提とした公正分配という理念に特徴があったといえる。

24 徐京錫コラム「10. 社会主義革命家になるぞ」参照。

25 徐京錫は自身のコラムで、1980年代に米国に初めて輸出された自家用車などを例に上げ韓国経済の強さを認識したと語る一方、在米韓国人から北朝鮮訪問の話聞いたことで北朝鮮に対する幻想が崩れたことを語っている。

26 徐京錫コラム参照。

27 同上。

28 経実連1周年資料集参照（経実連、1990）。

第2節：経実連の市民運動の特徴

では、経実連が主張した市民運動とキリスト教運動から登場した YMCA 市民運動の共通点と差異について考察してみたい。

YMCA 市民運動が想定した社会改革とは韓国の民主化であり、韓国の国民としてその責任を認識した人々を市民とみなしていた。つまり、国民イコール市民であったからこそ、階級を超えた運動になると説くことができたのである。しかし、実際のプログラムは YMCA 構成員に向けたものだった。当時も現在も会員規模 20000 人という数字は最大規模であり、この会員をどのように動員するかが喫緊の問題であったのである。

一方で、徐京錫も、経実連の運動を脱階級の運動と規定し、市民運動が特定階層に限定されない運動であることを強調している²⁹。曲がりなりにも民主化を達成していた 1989 年の状況において、徐京錫の関心は政治体制の変革よりも経済的不平等を解消することにあつた。この点はそれまでの民主化運動の問題設定とは 180 度逆となっている。つまり、民主主義や統一の達成によって経済的矛盾を解決するというこれまでの運動理念とは逆に、経済成長と福祉を実現することが統一の近道であると論理を逆転させたのである³⁰。

また、運動の主体の設定も微妙に異なっている。YMCA においてはすでにある組織を前提に議論が展開されたため、中間層の議論は常に YMCA の会員が民主主義や民衆の福祉にどのように寄与するかという主体的な意味合いが強かった。ところが、徐京錫によって設定された中間層は、経実連運動のこれからの展開対象であり、支持獲得の対象であった³¹。つまり、市民の中でもとりわけ中間層の比重が高いため、中間層の支持を動員して「覚醒した人々」が運動を行うという 2 重の市民像が浮き彫りになってくる。

こうした折衷的な市民像は経実連の組織にも反映されている。経実連が発足した当時、会員数の 75% が福音主義系プロテスタント³²の信者であり、その他は実務や研究を担う知識人であった（イ・ハンギ、1993）。このうち、実質的な政策提案を担っていた知識人はそれぞれの専門分野における代案提示を行っており、経済正義実践という枠組のもとでかなりの多様性を持っていた³³。経実連に参加する「覚醒した人々」が市民に政策の正当性をアピールするという形態がここで生まれたのである。

一方、運動主体を一つの組織の下にまとめるための理念に対する姿勢も似て非なるものだ。会員数は巨大でありながら、社会問題に対する関心が薄かった YMCA は、キリスト教理念と社会参加を結びつける理念の再構成を行った。つまり、YMCA はキリスト教的共同体と民主主義社会を結びつけ、その実現のために新しい人間となることを YMCA 会員に求めた（大韓 YMCA 連盟、1988）。

他方、経実連の理念は「中間層の素朴な希望である経済発展、社会平等、環境保全」にあるというのが、実際はそれに至る方法に関しては議論しない。後に経実連組織委員長となるシン・デギョンがインタビューで、理念によって一般市民の支持を失った民衆運動を反面教師にしたため、「経実連は理念を定立しない」と述べている（ハ・スンチャン、2000）。

しかし、経実連は理念がないわけではない。資本主義体制の肯定と経済発展の重視、そして民衆による変革の否定は十分に理念的である。特に、経済発展の重視は朝鮮半島大のナショナリズムというよりは韓国という国家におけるナショナリズムを反映しており、朴正熙大統領による経済近代化に対しても一定の評価を与えることになるからである。

資本の蓄積において勤勉さと節約が必要であるというヴェーバー的見解を援用³⁴し、労働者がサービス業や投機に集中していることを問題視した。「善なる意志」を持った人々が自らの貪欲さと利己主義を正して社会的公正を

29 徐京錫コラム「42. 私たちはなぜ経実連を結成するのか」

30 同上。

31 1992 年 9 月号の月刊誌『マル』で徐京錫は、「市民という言葉はブルジョアではなく“国民”という言葉に近い」と述べている。

32 福音主義系は聖書の解釈を厳しく行う点で保守的であり、社会的救済を取り入れたリベラル系プロテスタントとの対比で保守のプロテスタントとされる。特に、個人の救済や節制といった点を重要視する。

33 経実連の組織は中央の政策決定機関である常任執行委員会の下位に多様な組織を抱えている。下部組織には都市貧民協議会、中小商工人協議会、キリスト青年学生協議会、弁護士会、労働者協議会、女性委員会、仏教系グループなどがあるが、これらの組織が自律的に活動している。組織母体となったキリスト教運動グループでさえも下部組織に編成されており、仏教系グループと同列にあるのは注目される。

34 こうした見解は朴世逸が 1988 年の著書で主張している内容とほぼ一致する（朴世逸、1988）。

目指す運動を展開することが市民運動であるとした。

おわりに

韓国の市民運動は経実連によって大きく注目されたが、その歴史的起源においてはキリスト教運動内の路線対立があった。反体制であるならば弾圧されるという政治的状況で、韓国のキリスト教運動は70年代にその人的ネットワークと社会変革という宗教的意志によって民主化運動の中核に浮上することになった。しかし、朴正熙大統領の暗殺によって民主化が達成されるかと思われた1980年には、光州事件など抑圧的体制の暴力性がさらに強まった。この新局面において、韓国の社会問題をどのように解決するかという根本的問題に対し、異なるアプローチが登場した。一つはマルクス主義的な革命論（積極闘争論）であり、もう一つは大衆性を再び確保すべきだという大衆組織論であった。

積極闘争論を採用したKSCFはそのまま民主化運動の主翼であった学生運動に合流することになったが、一方の大衆組織論はキリスト教運動の主体性という問題点を意識しながら、YMCAに活動の場所を移してその方向性に苦悩することになる。YMCAが合法公開運動であるという当時の条件において、YMCAの運動はやはり民衆のための運動であるべきだという方向性は色濃く残っていたようだ。その方向性を反映した中間層論は、YMCAの組織構成を中間層＝小市民として認識し、その条件からYMCAが民衆のために運動することを市民運動と呼んだ。そして、キリスト教的アイデンティティはその組織の凝集性を保つために援用されたのである。

一方、変革主体論は西洋市民革命から市民の概念を援用したと思われる。つまり、西洋民主主義革命をもたらした市民勢力が韓国の民主化にも必要だという問題意識から、市民勢力を形成するという意味で市民運動の必要性を主張するきっかけとなった。ただし、この文脈での市民はブルジョアを意味するのではなく、民主主義の実現のために注力する韓国国民という概念であり、その意味で全階級的なのである。そして、キリスト教的アイデンティティはその運動を率先する資格として認識された。

しかし、曲がりなりにも民主化が達成された1990年初頭の状況は、この市民運動の概念の再構成をもたらした。徐京錫の持つ人脈と民衆運動に対する批判意識が出会ってできた経実連という「市民運動」は、中間層論と変革主体論の折衷として登場した。人口の70%を占める中間層のための運動として、市民運動の階層性を強調する一方、変革主体論的な「覚醒した個人」という論理を採用し、多種多様な人々を組織に取り込もうとしたのである。しかし、その結果は個人の自主的な参加という市民性よりも、反マルクス主義的な風潮の下、徐京錫のソウル大学を中心とした人脈による組織化という極めて「階層」的な組織が登場することになった。

よって、韓国の市民運動は、権威主義体制による弾圧強化とそれに立ち向かうキリスト教運動という時代的条件の中で生まれたという特徴を持っている。よって、1990年代の民主主義の時代に市民社会が成長した証拠として認識される市民運動団体の活躍は、民主化運動の理念対立や組織構造を多分に反映した時代的な産物なのである。

参考文献

日本語文献

- 呉滋哲（オ・ヒョン Chol）、2004、「“韓国の市民社会に対する分析枠組みの模索”、『立命館国際地域研究』、第22号（2004年3月）：3-19。
- 徐勝（ソ・スン）、2003、「宋石允著、現代韓国憲政史における国家緊急権」、立命館法学2003年1月号（287号）：421－437。
- 高島通敏、1976、『政治学への道案内』、三一書房。

韓国語文献

- イ・グンソン、1984、「維新政権と在野勢力の登場」、ハン・スンホン編『維新体制と民主化運動』、三民社。
- 韓国基督教学生会総連盟（KSCF）、1998、『韓国基督教学生会総連盟50年史』、タラクウォン。

- カン・シンチョル、1988、『80年代韓国学生運動史－思想と組織路線を中心に－』、ヒョンソンサ。
- キム・ジュンシク、1985、「社会運動の側面から見た YMCA 運動」、YMCA 幹事論文、韓国 YMCA ホームページ <http://www.ymcakorea.org/peaceon/category/15970> から取得。
- キム・ミョンベ、2009、『解放後韓国基督教社会運動史－民主化と人権運動を中心に（1960－1987）』、ブックコリア。
- キム・ヨンイル、1984、「韓国基督教の社会参与」、ハン・スンホン編『維新体制と民主化運動』、三民社。
- ソ・ギョンソク、2007、「ソ・ギョンソクコラム “私のストーリー”」、ソギョンソクホームページ <http://www.suhkyungsuk.pe.kr/> 参照。
- 大韓 YMCA 連盟、1986、『韓国 YMCA 運動史』、ロ出版。
- 大韓 YMCA 連盟、1988、『韓国 YMCA の理念追求 1 巻－13 巻合本』、大韓 YMCA 連盟。
- チャ・ユンジェ、1986、「大韓 YMCA 運動の歴史と課題」、YMCA 幹事論文、韓国 YMCA ホームページ <http://www.ymcakorea.org/peaceon/category/15970> から取得。
- チョ・ヒヨン、2010、「序章：“巨大な運動”への収斂から“違いの運動”への分化－韓国民主化過程における社会運動の変化に関する研究」、チョ・ヒヨン、キム・ドンチュン、キム・ジョンフン編『巨大な運動から違いの運動へ－韓国民主化と分化する社会運動』、ハンウル：25-137。
- チョ・ビョンホ、2005、『韓国基督青年学生運動 100 年史散策』、タンエスシンクルシ。
- ハ・スンチャン、2000、『ハ・スンチャンの NGO のはなし』、ヨクサネット。
- 民主化運動記念事業会研究所編、2009、『韓国民主化運動史 2－維新体制期』、トルベゲ。
- 民主化運動記念事業会研究所編、2010、『韓国民主化運動史 3－ソウルの春から文民政府樹立まで』、トルベゲ。
- 民主統一編集部、1985、「民主化と民族統一運動論－民主化運動と民族統一運動は一つだ」、『民主・統一』第 2 号：6－20。

英語文献

- Chang, Paul. Y. 2006. “Carrying the Torch in the Darkest Hours.” Robert E. Buswell Jr. and Timothy S. Lee. et al. *Christianity in Korea*. Honolulu, Hawai’i: University of Hawai’i Press: 195-220.
- Kim, Hyung-A. 1995. “Minjung Socioeconomic responses to State-led Industrialization.” Wells, Kenneth. M. et al. *South Korea’s Minjung Movement*. Honolulu, Hawaii: University of Hawaii Press: 39-59.

舞鶴、高行健の文学

——欧州プログラムで得たふたつの成果について——

小笠原 淳（人文学研究科博士後期課程）

派遣先：国立パリ政治学院（フランス）

はじめに

私は ITP 欧州プログラムで、2010 年 12 月 27 日から 2011 年 4 月 30 日までの五ヶ月間、パリ政治学院に留学した。パリ市 14 区にあるパリ国際大学都市内（Cité Internationale Universitaire de Paris）の日本館（Maison du Japon）に居住し、パリ政治学院（SciencesPo）のあるサンジェルマンデュプレまで RER とメトロで通った。その他にもフランス国立図書館（Bibliothèque Nationale de France）、パリ日本文化会館（Maison de la culture du Japon à Paris）、コレージュ・ド・フランス（Collège de France）の法蘭西学院漢学研究所、オペラのフランス語学校にも頻繁に足を運んだ。日本館の住環境はすこぶる快適で、その上図書館などの施設も充実していたため、研究に専念することができた。

パリ政治学院では、台湾、中国の政治学を研究されている Francoise Mengin 教授に教えを仰いだ。提出した研究計画書に沿って進捗状況を報告するとともに、必要に応じて中国文学関係の研究者を紹介していただいた。コレージュ・ド・フランスの漢学院で台湾現代文学を研究されている、Esther Lin-Rosoloto(卓立)先生もそのひとりである。

私が ITP によるパリ留学の研究成果として強調しておきたいのは、次の二点である。本稿では、この二点に即してその研究成果を報告することにしたい。

1 台湾同時代文学研究の一環として、舞鶴小説の研究と翻訳を行った

『植民地文化研究』第 10 号（2011,7）に発表。

2 中国当代文学研究の一環として、パリ在住の華人作家、高行健へのインタビューを実施した

一部を『すばる』2011 年 7 月号へ発表。

一、舞鶴小説の研究と翻訳

卓立先生は、台湾出身の台湾現代文学の研究者、翻訳家だが、なかでも専門は、舞鶴小説の研究及び翻訳である。舞鶴（1951 - ）とは当代台湾文学における最も重要な小説家の一人とされ、殊に「二十一世紀の台湾文学を語るには、必ず舞鶴から始めなければならない」（王徳威「原郷人裏的異郷人—重読舞鶴的《悲傷》」、八頁）と称されるように、九十年代から二十一世紀に至る期間に顕著な仕事をした作家として、台湾文学界においてきわめて高い評価をあたえられている。舞鶴の本名は陳国城。「逃兵二哥」（1991）の発表から筆名を舞鶴と改めた。1951 年、台湾嘉義市生まれ。成功大学水利系に入学後、中文系に転学、学部時代に書き上げた処女作「牡丹秋」（『長大青年』二八期、1974）で成功大学鳳凰樹文学賞受賞、翌年の『中外文学』に転載され作家としてのキャリアをスタートさせる。1978 年、張恆豪、許素蘭らと『前衛文学叢刊』を創刊。同誌に発表した「微細の一線香」が『六十七年度小説選』、『一九七八年台湾小説選』に同時入選。退役後、1981 年から淡水に移り住み、十年間幽居して一切作品を発表せずに「読書に耽り、創作実験を行い」、この「十年間で数多の禁忌や重荷を取り除いた」（後記『悲傷』p242）という。1991 年、十数年振りとなる小説「逃兵二哥」を『文学台湾』創刊号に発表、呉濁流文学賞を受賞する。以後、「調査：叙述」（1992）、「拾骨」（1993）、「悲傷」（1994）、「思索阿邦・卡露斯」（1995）などの中短編小説を次々に発表し、一躍文壇の脚光を浴びた。その他の代表作に、霧社事件を描いた長編『余生』（麦田出版、

2000) がある。

本省人である舞鶴の小説創作は、台湾の郷土と歴史に根ざしている。彼の赤裸々なエクリチュールは、悲哀にみちた台湾の「記憶の残骸のなかから骨を拾い上げる」(王徳威、七頁) ことに似た文学営為であり、彼は書くという儀式によって、台湾の「悲情」を鎮魂するかのようである。郷土性とモダニズムの混淆は、舞鶴小説の大きな特徴であり、それは同時に彼の小説をきわめて晦渋なものとしている。彼は国語のなかに台湾語を共存させ、現行の白話文の形式に収まらない前衛的な言語運用をして、物語を迷宮のような構造に導いている。その小説言語は詩的言語と台湾庶民の日常語によって織りなされる奇妙な叙述体といってよく、そのような舞鶴の晦渋な言語は時に、読まれることを拒む。したがって、テキスト理解は自ずと人それぞれ異なり、殊にディテールの解説に関しては決定性に欠き、どのような文脈で読むかは最終的には個人の判断に委ねられる。

その小説言語の晦渋さゆえに、これまで舞鶴小説は翻訳が困難な小説であるとも言われてきた。実際に日本や韓国、中国文学の翻訳が盛んなフランスにおいても、その翻訳には手がつけられていなかった。私が訪ねたとき、卓立先生は舞鶴の代表作の一つで、最も晦渋とされる、長編『余生』(2001) のフランス語訳を終えられたところであった。この訳書は今年六月、舞鶴小説の初のフランス語訳“Les Survivants”として出版された。

この時期、私も舞鶴の短編小説「調査:叙述」(1991) の翻訳に取り組んでいた。「調査:叙述」は二・二八事件をテーマとした小説である。私たちの議論は自ずと、舞鶴の難解な文体をいかに訳すか、というテーマをめぐる進められた。卓立先生は原作の叙述スタイルにこだわり、直訳を心掛けておられた。それによって意味がうまく通らない部分がでてきても、それが作者の意図なので致し方ないという観点である。それでも、句点や段落がほとんど存在しない『余生』は、フランス語に直訳しようと思っても到底無理な箇所が多数あったらしい。その問題のほとんどは、中国文化とフランスの間に横たわるあまりに深い溝によるものだった。中国語から日本語へ訳す際にはこうしたストレスは幾分か軽減されるだろう、と私は考えていた。

私は「調査:叙述」を訳し終えてから、卓立先生とこの小説に対する理解を付き合わせた。細部の読解をめぐる意見の相違が生じたが、それによって自身の解説ミスや読解力不足も洗い出され、収穫はこのほか大きかった。また、その結果を翻訳に反映させることもできた。他国の翻訳者が同じテキストをどう読み、またどう訳すかという問題を、議論を通じて身をもって知ることができたとし、その結果、舞鶴小説の理解を深めることになった。「調査:叙述」の翻訳は、濱田先生にご指導いただいた後、訂正を加え、『植民地文化研究』第10号(2011,7)に発表した。これは舞鶴小説の初の日本語訳である。

以下に舞鶴の小説言語の特色を分析した。舞鶴の小説で多用される技巧のひとつが言葉の重複である。多義的な意味を喚起する言葉を繰り返すことで、文体に独自のリズム感と諧謔味を与え、物語を前進・展開させる方法である。以下の例文(1)から(4)で強調で示しているのがそれに当たる。また、例(3)の「嗟嗟滴」及び例(4)の「轟嘖嘖嘖」はオノマトペである。敷衍するならば、「轟嘖嘖嘖」は軍用車のエンジン音であり、また「拿起武器——」と声高に群衆を鼓舞するのは、二・二八事件の民衆の指導者である。このセンテンスでは、国軍軍用車のエンジン音と蜂起した台湾本省人がスローガンを叫ぶ声を交互に重ね合わせ、両者の音と声とを拮抗させて表すことで、対立する両者の力関係とほどなく引き起こされる市民の虐殺という大惨事を我々に予感させている。舞鶴のこのような技巧が私たちに容易に想起させるのが、『現代文学』が輩出したモダニズム作家王文興(1939～)の創作である。(6)に彼の作品からセンテンスを抜き出した。これはほんの一例に過ぎないが、それでも舞鶴の小説技巧の一つには、王文興の創作の影響が見いだせると言うべきだろう。この文脈から考えれば、舞鶴は「現代文学派」の最後の継承者と言えるべき存在なのかも知れない。

(7)に一例を挙げたのは言葉遊びである。拾骨の儀式の当日に長兄が乗ってきたドイツの高級車に「便池」という珍妙な同音異義語が当てられているのは、台北という大都市の酒池肉林に対する強い揶揄であろう。そしてそれは現行の価値観を著しく倒錯せしめ、物質主義、合理主義に対して言下に異議申し立てを行うものである。「便池」は「拿經濟效益當生命指標的」とする長兄の車であり、兄の携帯電話の向こうからは「豪華的大吃場」のざわめきが聞こえ、台北のコンピューター企業に努める兄はその雑音の中で「看要多少錢・辦事要有效率, 要合經濟效益」(p88)と話すのである。

ここに挙げたのは一部に過ぎないが、このように舞鶴の小説言語は、重複と擬声語、造語、私的主観的なイメージリー、諷刺、諧謔、そして時折用いられる台湾語(それほど顕著ではないが)が混淆し、「晦渋さ」を呈している

のである。

例(1)

但是尿尿是為了騰空小腹，空的小腹便於飄浮，澡盆是勤練飄浮的好地方…如果你能在澡盆中飄浮，你就能在這飛馳的火車廂中飄浮，那麼現在你就飄浮在天堂之島的任何一個泳池了。(『拾骨』P. 110)

例(2)

「黑心石！暖搖喂還有一種南非進口的黑心石 石面幼秀可比少女不輸我的面肉皮，上禮拜民權路吳董就替老母買了一粒。」
「黑心石！我熬時放手桃罐好穩穩落在三太子乳溝間。黑心石！天底下竟有這般石頭敢自稱是「黑心」。黑心一粒實價二萬四，看在你秋歌舅介紹來的面上，黑心石一粒萬八。我翻轉頭顱找尋心目中的黑心石。(同、P. 92)

例(3)

正當此時我聽見一台厚重的東西悄悄熄在門口，同時噠嗒滴不客氣的噠嗒滴——
難得大哥抱歉當了一天我們左鄰右舍的起床鳥，噠嗒滴噠嗒滴
停在市場巷口，望見內裏六舅蹲在水仙宮前階上，噠嗒滴噠嗒滴 (同、P. 109)

例(4)

「拿起武器——」引擎聲遮過那人，只一片轟嘖嘖嘖。「武武武——」掙迸出，「武——器，武——器」轟嘖嘖嘖。「拿——起——武——器」似乎一再反复，「拿——起——武——器」轟嘖嘖嘖。轟嘖嘖嘖。(「調查：敘述」P. 131)

例(5)

「阿——母，阿——母，母母母母母……」「母母母母母……」(同、p. 139)

例(6)

打自樓梯頂頂頭上一溜溜滾跌滑滑落了下來了個了了了個了個了的……久久久久久而久之之長長漫漫一大段時間…… —— (王文興『背海的人(上)』洪範書店、P. 43)

「老——妖——怪，老——妖——怪——，你的大腿肉都全部給我看到了，一點都不白！」(王文興『背海的人』p112)

這是在全全統統的個兒的這一港深坑澳港凹的裡邊的最最最最合身稱體來的的個的的的的一掛條西裝褲條。(同、P69)

例(7)

六舅嘆他老貨今生頭一遭坐這種便池轎車，為了坐鎮這德國便池，他昨夜老遠到安平結拜兄弟壇請來小尊地藏王。(『拾骨』、P. 109)

看啃著肯塔基……「早就告訴過你們，」二哥打斷我的話，「必要拾骨。」肯塔基在怎麼啃也比不上咱小時候後院自家養的土雞。(同、P. 87)

二、高行健へのインタビュー

2011年4月8日、パリ在住の華人作家、高行健へ単独インタビューを行った。まず高行健の略歴を紹介する。高行健は、1940年、中国江西省南部贛州に生まれた。抗日劇団の役者でもあった母の影響もあって少年時代から演劇や小説に興味をもった。1957年、ソ連の作家エレンブルグ(1891-1967)が描いたフランスの芸術家たちの暮らしぶりに魅せられ、北京外国語学院フランス語科に入学。在学中にブレヒトの戯曲に触れ衝撃を受け、海鷗劇社を組織。『セチュアンの善人』などの部分的上演を試みたという。1979年通訳として巴金に随行して訪仏、この際にじかにパリの演劇に触れ、ベケットの『ゴドーを待ちながら』、イヨネスコの『禿の女歌手』の評論「巴黎

戯劇随筆」を『十月』（79年3期）に発表した。不条理演劇を早い段階で肯定的にとらえた随筆として知られる。高行健はこの頃から精力的に短編小説を執筆するとともに、新中国成立後初のモダニズム理論書、『現代小説技巧初探』（1982）を発表、モダニズム論争を引き起こす。1982年に初の戯曲『絶対信号』を発表、中国小劇場演劇の嚆矢となった。同年に『ゴドーを待ちながら』の強い影響を受けた不条理劇、『バス停』（82）を発表した。

1987年、ドイツとフランスの招聘で出国。翌年からパリに滞在し、1989年に天安門事件が起きると戯曲『逃亡』（1990年）を発表して、亡命を表明した。1997年にフランス国籍を取得。2000年10月、華人作家として初となるノーベル文学賞を受賞した。

中国政府は高行健のノーベル文学賞受賞を黙殺した。高が『逃亡』を書いて天安門事件に抗議し、現中国政権との決別を表明したからである。一瞬にして故郷を失い、ディアスポラとなった高は、パリという異郷の地で芸術家として生きることを決意する。四十九歳のときであった。

私のインタビュー内容は、六つの大きなテーマ、十四の具体的な項目から成る。まとめれば、1980年代の中国での創作を亡命先パリで振り返ってもらうことから始まり、モダニズムとの出会い（カフカとの出会い）、中国語という小説言語の限界と可能性、創作空間としてのパリ、これらからの文学創作と展望である。過去から現在へ、さらには今後の展望に言及を求めた幅広く中身の濃い内容となった。以下にその一部を引用して若干の検討を行いたい。

——創作を開始したころのことを振り返っていただけますか。

若い頃から創作はしていました。大学にあがったときからです。ただ本当に作品が発表できるようになったのは、毛沢東の死後、文革が終わってからでした。七十年代末から八十年代初にかけてようやく作品が発表できるようになりました。それ以前に書いたものは、ほとんど焼いてしまいました。十作の脚本もそれに含まれています。農村へ下放したときには長編小説も書きましたが、それも焼いてしまっただけで残っていません。文革以前のものは、小説、詩、戯曲、論文どれも今は残っていません。

作品を発表しはじめたのは、いわゆる「粉碎四人幫（四人組の粉碎）」以後でした。新たな芸術創作が提唱された時期で、しかしその頃はまだ非常に厳格な当局の「審査」がありました。この「審査」以外に作者自身による「自我審査」（self-censorship）が働いていたのです。この作品は発表できて、これは無理だ、これを発表すれば面倒なことになるから触れられない、というように作者自身が「自我審査」するのです。中国文学において、この「自我審査」はとても重要なものです。それは現在の中国作家にも言えることです。私が中国で発表した作品と上演した話劇は、当局の「審査」の他に、自身の非常に厳格な「自我審査」のコントロールのなかで創りあげられたものなのです。事実が証明しましたが、それでもやはりだめでした。たとえそのようなやり方でも、批判され、禁止されたのです。出国前には作品を発表することもかなわない状況でした。

1982年に高行健が発表した『バス停』は、翌年秋から始まる精神汚染追放キャンペーンで、賀敬之から「建国以来最も有害」な劇と批判され、その後の公演が中止された。また、1986年に発表した『彼岸』は反動思想と見なされ、当局により上演が禁止された。

このような背景のもとで、私は82年に『靈山』を書き始めました。82年には私はすでに多くの問題に直面していました。その時私は二つの方法をとったのです。一つの方法は「自我審査」を通して、当局の認める範囲で作品を発表すること。私は作家ですから作品を発表しなければなりません。もう一つの方法、それは自分のための作品を書くことだった。私はその作品を発表するつもりが全くありませんでした。それがつまり『靈山』です。ですから中国にいたころ、私は二つのエクリチュール（寫作）を使い分けていたことになります。

中国時期におけるふたつの創作方法について、高が言及したのは管見によれば初めてのことであり、貴重な言説として受け止められよう。また、『靈山』が高の個人的な創作から出発したという点は、興味を惹く。この小説は

叙述者が「你」と「他」の自問を繰り返しながら、靈山へ巡礼するという、苦悩を抱えた八十年代中国知識人の精神の歷程が描かれており、受難者、高行健自身の心情を色濃く反映している。

——「流亡」(亡命)について

1987年末にフランスにやってきました。ちょうどクリスマスの頃でした。その時は政治難民ではなく、招聘されてやってきたのです。北京人芸(北京人民芸術劇院)に一年間の創作休暇を申請してこちらにきたのです。私はこの一年を利用して『靈山』を書き上げるつもりでした。たとえ発表するつもりがなかったとはいえ、中国の抑圧された状況では心情も含めて様々な制約があったからです。ですから一年間は他のことは何も手をつけずに『靈山』に専念して、書き上げるつもりでした。私は『靈山』を書き進めました。一年が経ち、創作休暇を一年延長したいと劇院に告げたところ、劇院は私に、創作休暇を取るのならば「脚本を一本渡してくれ」と言ってきました。そこで私はしばらくの間『靈山』を離れて、中国から持参してきた資料で、長年構想していた、現実とは全く関わりのない『上海経伝』を集中して書き上げて、劇院に提出しました。脚本を提出すると、一年延長の創作休暇が与えられたのです。一年延長した後に、ちょうど天安門事件に遭遇したのです。それ以前、私はもうひとつの生活を送ることになる、つまり西洋に亡命するなどということは、考えたこともありませんでした。やはり帰ろうと思っていましたから。しかし少なくとも『靈山』を良好な(心理)状態で書き上げてから、と心に決めていました。結果的に、天安門事件が発生しました。天安門事件はすぐに私を刺激し(12:30)、私はすぐにもうひとつの戯曲『逃亡』を書き上げたのです。一ヶ月も必要としませんでした。1989年8月には劉再復、徐剛など古い友人たちを含む中国から逃亡してきた人々に会いました。当時みながとても興奮していました。私も彼らを助けたり交流を持ったりしたのです。ですから私は何が起こったのかをよく理解していたのです。このときアメリカの(1420)が天安門事件に関する劇を書いてみないかと、友人を通じて話を持ちかけてきたのです。私はすぐにやると答え、たちまち『逃亡』を書き上げて発表したとたん、当然のことですが、私は中共のもうひとつの「把子」(標的)となり、完全に禁止され、黙殺されました。その時からもう中国に帰ることはかなわなくなりました。中国での創作はそれをもって終結したのです。このようにして、私の西洋における亡命生活が始まったわけです。

一九八九年九月、高行健は『靈山』を脱稿した。これまで、『靈山』の執筆から『逃亡』発表に至る細かいプロセスと心境が、作者の口からこれほど具体的に語られたことはなかったように思う。たとえば、聯経出版の『靈山』(1990年12月初版)に附録する「高行健の生平與作品」には、「一九八七年再度赴德、隔年以政治難民身分定居巴黎」とあるが、このインタビューの内容によって、一九八七年の時点では政治難民ではなかったことが分かってくる。

——モダニズム受容について(なぜ『現代小説技巧初探』を書くことができたのか)

私は自身の職場にいた専門家を通じて、西洋文学と接することができました。当時私が勤めていた雑誌社『中国建設』の法文組(フランス語班)にはフランスの専門家がいました。ですから私は彼を通じて、フランス大使館から(他の人は全く読むことができないような)西洋の現代、同時代文学の資料を借りることができました。当時、中国科学院の外国文学研究所でさえあのような完全な資料を見ることはできなかったでしょう。私はそれをいつでも彼を通じて、フランス大使館の図書館から借りることができた。そもそも私が大学でフランス語を学ぼうと思ったのは、ひとつの言葉を通して、西洋の現代、同時代文学に何が書かれているかを理解したいと考えていたからです。1949年(新中国建国)以後、大陸では西洋の現当代文学は基本的に訳されることがありませんでした。ルイ・アラゴンやエリヤなどフランス共産党の作家以外は訳されなかったのです。六十年代の「反修」以後はこれらの作家の作品さえも消えていったのです。ですから原文で読むほかありませんでした。このような当時の中国の状況下において、私のように西洋文学を理解している者は本当に少数でした。そして私はこの理解を基礎として、自身の芸術に対する考えを敷衍するようになりました。『現代文学技巧初探』は、そのようにして書かれたのです。また、私はそのような思考で、短編小説を書きました。しかし政治性のない純文学でありながら、発表は非常な困難をともしました。なぜなら、彼らは「分からない」というのです。

彼らが理解できなかったのは、それが分かりやすい革命の物語ではなかったからです。

ここからは、高行健が閉じられた箱のなかにあつて、いかにモダニズムを受容してきたかが分かってくる。彼はフランス大使館の蔵書を通して、現代文学を吸収していき、『現代文学技巧初探』を書いたようである。そのようにして培われた思考と小説技巧は後に、彼の小説、戯曲の創作に注がれていく。

以上見てきたように、今回のインタビューを通じて、新たに分かった新事実がいくつかある。とくに後半に触れたモダニズム受容についての言説は、中国新時期文学の流れと付き合わせて検討することで、八十年代における中国のモダニズム受容の一端を浮き彫りにすることができるだろう。

結語

パリから見る東アジアの文学は、そのあまりの地理的疎遠から自ずと、あるいはオリエンタリズムの意図的な文脈から往々にして、神秘のベールが被せられる。たとえばそれは、大衆が消費する小説の装幀となって表れる。太宰や川端など昭和作家のそれはきまって、様式化された浮世絵の美人画だし、また莫言の小説には古代中国の兵と馬の絵、そうでなければ上海モダンガールの微笑、閻連科の装幀には紅衛兵のスカーフを巻いたポップな毛沢東が鏤められ、白先勇の『孽子』は一重まぶたの目がつり上がった少年のアップによって覆われている。少なからぬ文化を共有する東アジア圏では、プリミティブな表象をわざわざ小説の装幀に用いる必要がない。このように、日本からアジアの文学を見るのと、パリからアジアの文学を眺めるのとでは、自ずと大きな観点の相違が生じることになる。そしてそのような相違は、文学テキストの「読み」にも表れるだろう。しかしどちらの「読み」が優れているとは一概に言えないのは、文学とは、むしろそのような個々の相違を貴ぶ芸術だからだ。

前述した二つの具体的な成果の他に、今回のパリ留学で得た収穫とは、このようなそれまでにはもちえなかった、文学に対する寛容さといくつかの新たなまなざしを養うことができたということだ。こうした観点や視座は、今後の同時代の中国文学研究に活かすことができると考えている。

参考資料：高行健へのインタビュー内容

- a. 過去：文學創作的出發點
 1. 1979 年的訪法可以看做是您文學生涯的出發點嗎？
 2. 現在，怎麼回顧以及總結您在中國大陸八十年代的文學創作？
- b. 卡夫卡和高行健：
 1. 怎麼看待卡夫卡與魯迅文學的文學意義上的區別？
 2. 高行健與卡夫卡的邂逅
 3. 卡夫卡文學與高行健文學的互動與對話
- c. 文學語言：
 1. 漢語書寫的只限性
 2. 對於跨越母語寫作的看法（非母語寫作，卡夫卡、Nabokov）
 3. 文學語言與作家想像力的關係
- d. 寫作的空間（城市）：巴黎與中國
 1. 巴黎的空間與您創作的互動
 2. 如何去面對故鄉與巴黎的距離
 3. 東西方文化的差異在您的創作當中起的作用？
- e. 文學的未來：
 1. 在困難的 21 世紀裡，嚴肅文學與作家能扮演一個什麼樣的角色？
 2. 高行健文學的今後發展方向
- f. 文學與災害 —以日本大地震為例—

US-Taiwan relations in the mid 1950s and the Influence of Think Tank within the Policy making

四方 俊祐（人文学研究科研究員）
派遣先：ワシントン大学（アメリカ）

Introduction

I was sent to the University of Washington through International Training Program of Kobe University between January 13 and March 3, 2011. At UW, I attended some forums and colloquia of China Studies by permission of Professor David Bachman of Henry M. Jackson School of International Studies.

Jackson School has its origin in the Department of Oriental Subjects about a hundred years ago. It was in the end of 1930s, when Professor George E. Taylor headed there that the Department made a great leap forward. Although the center of China Studies was east coast scholarly establishment, Cambridge- New York- Washington area at that time, Taylor took full advantage of the strategic position of Seattle and endeavored to organize the Department for research and education of Far Eastern problems with encouragement from his friends, Owen Lattimore and John K. Fairbank. He re-formed the Department and changed its name to the Department of the Far Eastern Studies to built good relations with the Departments of Political Science, History, and Economics. He introduced Japanese Studies program actively. During the Second World War, Taylor was appointed in the position of Principal Directive Writer in the Overseas Branch of the Office of War Information, while he spearheaded an Army Specialized Training Program designed to prepare Army enlisted men to take up service in military governments in occupied area in the Far East and extended to civilian student in 1944. In post-war period, he reorganized the faculty to change its name to the Department of Far Eastern and Slavic Languages and Literature, beginning building the Far Eastern Library receiving funding of Rockefeller Foundation. In that period, the Carnegie Foundation and the Ford Foundation started providing large funding to some universities. Taylor came to realize the establishment of a first-rate center of interdisciplinary studies until the end of 1950s. This realization resulted from particularly larger engagement of federal government in the academic education under the National Defense Education Act of 1959. In 1960s, Taylor was retired, and the Department was reconstructed under funding of the Ford Foundation, the Department of Far Eastern and Slavic Languages and Literature be divided into two new departments in 1968. The Institute for Comparative and Foreign Area Studies was founded in 1970s, receiving a grant of \$1 million from the Japanese government, which permitted the establishment in 1974 of the Journal of Japanese Studies. The school of the international studies, which Taylor had advocated before his retirement, was founded with support of Senator Henry M. Jackson in 1978. The name was changed to Henry M. Jackson School of International Studies in 1983 to honor Senator Jackson's contribution. Furthermore, The Mellon Foundation provided endowment funds for further developing East Asian studies. In 1987, for example, \$1.2 million was donated to the School's Japan Program.

I often went to the East Asia Library at the University of Washington to research on the papers of Overseas Chinese. At the library, I owned many obligations to two librarians, Ms. Yokota and Mr. Michael Shen direct and indirect. According to Ms. Yokota's explanations, the official beginning of the Library can traced back to 1937, when the library received the first funding from the Rockefeller Foundation to purchase a small collection of Chinese literary works. With the establishment of The Far Eastern Institute in 1946, the some collections became the Far Eastern Library. In the late of 1940s, the library acquired Japanese collection and a small number of Korean titles assembled during World War II for U.S. Army teaching purposes formed the beginning of the Korean collection. She told that the library had been the first institution outside the Republic of China to acquire the Twenty-Five Dynastic Histories database and the first academic library in North America to establish a direct connection to the NACSIS-IR service in Japan.

When I talked about my research theme with Mr. Shen of EAL, He gave me a piece of advice on how to search for the

materials. He added that there had been Area Studies starting in 1950s and at University of Washington Professor George E. Taylor had initiated the Study of Far East Area with support of some private foundations. In East Asian Library there were a lot of interesting historical publications and handouts, which had been collected for the Area Researching at that time. One of them was the quarterly journal, 'Orbis' by what we call think tank, Foreign Policy Research Institute (FPRI). I had seen some archival records on the US policy toward Taiwan and happened to find some reports of FPRI and CFR circulated in the US government. After Mr. Shen's explanation, I got intrigued to examine to what extent those organizations called think tanks have the impact on the US Taiwan policy within the Eisenhower Administration in mid -1950s.

Think tank and China problem in US

Think tank is a research organization which advises and offers many recommendations to the government on a specific political issue. It is a nonprofit corporation which has membership system and often includes not only the scholars of Universities but former government officials and business leaders. Basically it never receives the financial support from government and sells its publications or gets some endowments. Most of think tanks in US were established after the First World War. Council on Foreign Relations (CFR) is the well-known think tank, which has sometimes the influence on the US politics. It publishes the periodical *Foreign Affairs*, to which some articles are contributed by leading figures from various quarters¹.

In the middle of 1950s, when the Brookings institution still concentrated on economic policy, AEI was still mainly a business lobbying group, and Center for Strategic and International Studies (CSIS) and the Heritage Foundation had yet to be organized, most foreign policy think tanks (except for CFR) were associated with major universities, e.g. Hoover Institution at Stanford University, the Merzhon Center at Ohio State, the Center for International Affairs at Harvard, and a few years later, CSIS at Georgetown. FPRI also belonged to the University of Pennsylvania. These independent think tanks always came to conflict with their host universities and some of their relations broke apart in 1960s. FPRI and the UPenn were no exception in these regards. But relations between them were relatively favorable at the outset.

FPRI was founded in 1955 by Robert Strausz-Hupé. He was born in 1903 in Vienna, capital of the Austro-Hungarian Empire. His father's family, the Strauszes were-to-do Hungarian Jews in the grain business and his mother belonged to the Hopés, who connected descendents of prominent Huguenots (Protestant). His parents' marriage made them to break off the Jewish union, and Austro-Hungarian Empire has crashed down at the end of the Great War. He first came to the United States in 1923 to find a job. Having a run of good luck and good times, he moved up to the position of doing what we would call today "Political risk analysts" to evaluate the worth of European bonds. He earned enough money from his first job to return to Europe and to travel and comprehend all over Europe in the late 1920s and 1930s. His marriage to Eleanor Cuyler Walker from a prominent Philadelphia Mainline family had him move to Philadelphia and advance his career at the University of Pennsylvania. Thanks to his wife, Eleanor, he got acquainted with some future prominent economic and political elites, such as Dean Acheson, James Forrestal. After earning the Ph.D. in 1946, he stayed on at UPenn with an appointment in the political science department. A decade later, He convinced his colleagues, the university and the Smith Richardson Foundation to support his own research institute, FPRI and the Institute continues hitherto². Strausz-Hupé did not only gather together a group of colleagues and collaborators, but create the position of FPRI associate, who included some of the greater International Relations Scholars of the time; Hans Kohn, William Y Elliot, Henry Kissinger, and James Schlesinger.

With abundant funds of the Mellon Foundation, FPRI launched a new quarterly journal, *Orbis*, in 1957. And that soon seemed to be, along with *Foreign Affairs*, the leading journal in the field.

On the top of the first issue, Strausz-Hupé expressed what he thought the global situation is like³.

1 For example, about some member of CFR, who had a great influence on the US occupation policy toward Japan after the Second World War, see Makoto Iokibe, *Beikoku no Nihon Senryou Seisaku: Sengo Nihon No Sekkeizu* (two volumes), (Chuokoronsha, 1985), especially chapter five.

2 see in detail, Harvey Sicheman, 'Robert Strausz-Hupé: His Life and Times', FPRI *Orbis* (Spring 2003) p195-216.

3 Robert Strausz-Hupé, 'the Balance of Tomorrow', FPRI of University of Pennsylvania, *Orbis*, vol.1 no.1 (April 1957), p10-27.

He regarded the history of the interwar period as a series of conflicts of ‘federative power’. Though Germany and Japan dishonored the term federation by baseness of motive and monstrosity of conduct, their functional conceptions were in complete harmony with the historic necessity. The defeat of Germany and Japan and the decline of Britain and France did not only indicate the epoch of the nation state as a viable unit of world politics but also allowed the rise of the United States and the Soviet Union to gain the federative power. The United States became uniquely fitted for leadership in global unification, so did the Soviets. Therefore, the duel between the both resolved itself, in the long run, into a contest between two social systems. In this contest, the United States would be bound to win, for its social system suits not only the American people but all over the world including those of the Soviet Union. Strausz-Hupé didn’t have a unique point of view. Rather, his opinion seemed to be very akin to that of Hans Kohn’s “*American Nationalism*”⁴. At least, the academic circles in the FPRI possibly had shared the common sense about world affairs of that time. I was interested in the some articles of the early numbers because they included the topics of my research.

Those articles had the matters which called our attention to the powers of India, China, and Japan in Asian area due to changes in the international environments⁵. The article gave the standpoint as follows; there is approximately half the world population in Asia and over three quarters of this half inhabits India, China, and Japan. The relative power status of three countries in terms of armed strength corresponds to populations ratios. Japan is the third, yet remains the most advanced of the three industrially. China, the most powerful, is under the communist control. The task of Western powers in the Far East is to maintain the deterrent to Chinese communist forward policies by American defensive pact with Japan, and other countries. Moreover, the main function of the West is to offer economic help to Asian countries in need of it.

As a matter of fact, this periodical was sold for the public since 1957. Before publishing the periodical, the Foreign Policy Research Institute devised the important policy recommendations to the Eisenhower Administration and those recommendations was similar in a number of aspects to the essay in the periodicals. It is not known exactly why those recommendations were circulated in the US government at present. The policy-making circles in Eisenhower administration probably welcomed the proposals from the experts of CFR or other Universities given that they received many reports on Soviet Russia, the People’s Republic of China, and Southeast Asia. Here are some recommendations summarized.

At first, in July 1955 there was a report titled “‘which Chinese?’ Diplomatic Recognition and Official Representation’ by Stanley K. Hornbeck, who was a prominent State Department officials during the Second World War and bitterly anti-communist during the Cold War⁶. In his report, he insisted that China’s “National Government” has politically, legally, and morally qualified for continuances of United State’s diplomatic recognition and continuance of its occupation of China’s seats in the United Nations, whereas China’s “Central People’s Government” was a creation and an instrument of world Communist program of conquest. As for Hornbeck, the safest and soundest course for the United States to pursue at that time is to stand by the existing US commitments and, doing so, ask of the communist governments which called on US government to enter into new agreements that they first demonstrated that they were able and willing to honor the commitments.

It is not clear why he had put forward the report. But he seemed to be concerned that People’s Republic of China (PRC) had been enhancing its influence in the international scene after the first Taiwan Strait Crisis (September 1954- February 1955) and Bandung Conference (April 1955) and complained about the rumor that the US government might have adopted the ‘two China policy’ recognizing de facto in fact the PRC.

In the mid-1950s, US government had the outstanding problem about how to obtain the peaceful solution of Taiwan problem. At Bandung Conference, Chinese Prime Minister Chou En-lai announced that Chinese government would be ready to enter into negotiation with US over the peaceful solution for Taiwan Strait Crisis. On the part of the US government, they indicated to acceptance of the negotiation with China though they were skeptical about China’s true intentions. John F. Dulles, the Secretary of US State Department, thought that Chinese Communists moved publicly toward peaceful solution, but there

4 Hans Kohn, *American Nationalism*, (New York, 1957) especially see in chapter four.

5 G. F. Hudson, ‘India, China and Japan: the Emerging Balance in Asia,’ FPRI, *Orbis*, vol.1 no.4 winter 1958, p474-88.

6 ‘Which Chinese?’ by Stanley K. Hornbeck, no dated (Jul 1955?), in *Records of the Office of Chinese Affairs, 1945 – 1955*, (Scholarly Resources, 1989) Reel.38, File name 020 ‘Publications and Manuscripts (1955)’, Flame no. 206-243. [hereafter, *ROCA*, 38, 206-43.]

were some complexities of situation. One of them was that Chinese Communists continued to declare the ‘liberation’ of Taiwan, another was that Chinese Communist regime failed to release American airmen despite US action to ease situation. On the other, He felt frustrated and annoyed about attitude and status Chinese Nationalist leader, Chiang Kai-shek. When the first Taiwan Strait Crisis broke out and US government persuaded Chiang to withdraw the troops from strategically nonsignificant small islands, He rejected the US demand obstinately. US decision-makers began to take into account that they would approach problem of cease-fire ‘realistically’.⁷ And that is, they decided respond to bilateral talks with Chinese Communists in Geneva.

US policy toward Taiwan within the US over-all Asian policy

By summer 1955, US high-level officials were aware that there was no possibility of the hostilities in Asian area as a result of the mutual security treaties between US and non communist Asian countries and the statement of US President Dwight. D Eisenhower that US would not have taken part in any aggressive action against Chinese mainland. Instead, the communist expansion would shift the military aggression into infiltration and subversion. To deter its threat, they recognized that economic health and progress was important to the political health of free countries in Asia.⁸ At the same time they found it necessary to reconsider their general policies toward Far Eastern countries.

Apropos of US Taiwan policy, US officials designed the basic policy for Taiwan and Republic of China during the first Taiwan Strait Crisis. In January 1955, President Eisenhower approved the Taiwan policy titled ‘US Policy toward Formosa and the Government of the Republic of China (GRC)’ numbered the National Security Council paper 5503 (NSC5503)⁹. Before formulating NSC5503, US officials expected the Chinese Nationalist Armed Forces to be available for the deterrence in Far Eastern Asia. In contrast, the basic objectives of NSC5503 stated that US should deny Taiwan and Penghu to the communists and foster a friendly and stable GRC enjoying the broadest possible base of popular support in Taiwan and Mainland and among the Chinese overseas. As for the Nationalist military forces, US policymakers softened the tone of words to the point that GRC could assume the defense their actual territory.

From the latter half of 1955, US officials discussed the review of general policy toward non-communist Asian countries. In early September, a policy guideline titled ‘Reappraisal of United States Policy with Respect to Free Asia: 1955-60’ was circulated in the policy-making circles¹⁰. There were some remarkable points in the papers. First, it premised that until 1960 and probably for some indefinite period of time thereafter, the external power from outside of free Asia, principally US, would have to assure the security of the areas. Concerning the central issues of US military policy for free Asia, there needed to review priorities among conflicting requirements of general war or local war, etc... However, none of the possible Asian theaters would have been an area of decision in general war, and the only free Asian areas in which the possibility of local war then seemed serious were Taiwan and Indochina. The force level of the Republic of Korea, Taiwan, and Free Indochinese armed forces should have been reexamined in the light of their respective current and prospective missions, their economic capabilities, and the requirements of US national interests. The paper also stated that the consolidation of internal power and control in the free Asian states would not by 1960 match the effective consolidation achieved by the Asian communist regimes and, for a short run, the US could not scruple to work with and assist existing free Asian authoritarian governments. Apparently, US officials changed their posture which they had had on demanding the democratic progress.

More significantly it is Japan and India that they regarded as the key positions to maintain US influence in Asian area. They thought that if Japan and India followed Mainland China into the communist fold, the US and Western orbits would have lost in Asia. Moreover, they presumed that the redress against Asian imbalance would depend in the long run upon the extent to

⁷ Sebald to Halde, May 11, 1955. *ROCA*, 38, 801-2.

⁸ Burton I. Kaufman, *Trade and Aide: Eisenhower's Foreign Economic Policy, 1953-1961*, (the Johns Hopkins University Press, 1982). For example, see Chapter three.

⁹ NSC5503, NSC Report, Jan 15, 1955, U.S Department of State, *Foreign Relations of the United States, 1955-1957*, volume 2, [hereafter, *FRUS1955-57*, 2] (Washington DC, USGPO, 1989), p30-34.

¹⁰ ‘Reappraisal of United States Policy with Respect to Free Asia; 1955-1960’, Sept 1, 1955. *ROCA*, 38, 854-952.

which Japan and India could be brought to interpose themselves as ‘effective counterweights to Communist China’¹¹. The decision makers in the Eisenhower administration seemed to expect Japan (and India) to become the driving forces in the Asian economy because it was improbable that the rest of Asian non-communist countries could prosper if these two countries should suffer serious deterioration.

At that time, however, Japan had fell into an economic stagnation. US governmental dignitaries have come to realize that the solution of Japanese economic problems lie in the expansion of the markets of Southeast Asia and the improvement of Japanese competitive position in those market. They had intended to press that over the long run, Japanese and Indian military forces had been capable of contributing to the external power interests of these two key Asian states.

As it was, US policy toward Japan had been formulated as NSC5516/1¹². These policy papers, which was revised between autumn 1954 and April 1955, has been said to reflect the thinking of President Eisenhower and Secretary of State Dulles. At the beginning of the papers, it is stated that ‘Japan has the potential to assume a leading and stabilizing role in Asia’. It was indicated that US hoped to request Japanese rearmaments increasingly while they had to avoid their pressure of Japanese military buildup to prevent its political and economic stability. In this way, it was recognized in the US officials that Japanese economic stability became the US basic policy prior to other Asian policies.

Eisenhower administration came out with “Massive Retaliation” or “New Look Strategy” in public. What these plans intended to mean in the Cold War struggle was to reduce the costly US ground forces and to depend on the relatively reasonable nuclear weapons and US Strategic Air Command in consideration of the financial constraints. In light of the relations with foreign allied countries under the US “nuclear umbrella”, US intended to curtail or withdraw the costly US ground forces from these countries. US wanted to substitute the indigenous military forces for US counterparts to defense allied partners. In Free Asia area, as said before, US high officials wanted Japan to play this leading role in the future.

However, it was probably the officials in Chinese affairs that opposed to those above ideas. They had in common with their top-levels the notion that the policy of the People’s Republic of China (PRC) was intended primarily to consolidate its own absolute power at home and to make possible its expansion abroad rather than to realize those revolutionary aspirations. All the more, they insist that US should have turned their attention to economic modernization in the most of non-communist Asian countries other than Japan. In their opinion, therefore, it was essential that US ‘look more closely at the free Chinese as one of the significant components of the over-all Asian situation’ which US government must include in any calculation of the purposes and possible effects of its Asian policy. While Taiwan had been regarded as a military problem, US had failed to understand ‘the broad significance of the total phenomenon of the Free Chinese in Asia, of which the military defense of Formosa is only one part’¹³.

It may be a matter of guessing, but there seemed to be different directions of Asian policy among US officials. As a result, some research institutes may have been asked for the academic perspective from the standpoint of the outsiders. A. Doak Barnett from Council on Foreign Relations gave a report on historical background of Chinese Communist. Howard L. Boorman from CFR a study on Chinese Soviet relations, Paul M. A. Linebarger from FPRI on the next decade US China policy.

According to the chronological order, I can go through their report. First of all, Boorman’s report explained that the US economic and financial stake in China was minor in terms of the total US national economy and amount of direct political pressure from PRC was negligible. But concerning the Taiwan, his comment included a measure of irony as following; ‘the most troublesome Far Eastern issue involved in the Sino-American controversy is Taiwan... Indeed it is paradoxical to observe that the United States and the People’s Republic of China appear to embrace virtually identical assumptions with regard to the existence of the Chinese National Government... The United State accepts and Communist China regrets the fact that it is a Chinese government with recognized international status and a place in the United Nations... Rest of the world is interested in Taiwan only to the extent that it could cause international complications, and regards its continued survival as an American

11 *Ibid.*

12 the authorless report, ‘Chapter 4: An Economic Policy for Free Asia’ and ‘Chapter 6: the Free Chinese’, no dated, *ROCA*, 38, 696-774.

13 the authorless report, ‘Chapter 4: An Economic Policy for Free Asia’ and ‘Chapter 6: the Free Chinese’, no dated, *ROCA*, 38, 696-774.

problem. There appear to be slight prospect of evolving a solution...¹⁴

As regards the PRC's foreign policy and relations with Soviet Union, Boorman developed a similar view with US top officials. He warned that the Chinese Communists had been sharply aware of the importance and potentialities of Japanese power in the Far East, and tried to wean Japan from its alignment with the United States. In his report, likewise, Chinese Communists saw its long term sphere of influence in Southeast Asia. And PRC relations with Soviet Union derived psychological benefits from its coalition as well as political and economic prestige.

Boorman didn't indicate to what extent the Sino-Soviet alliance had posed a concrete threat to non-Communist world. He only suggested that there had been no abandonment of major Communist goals in Asia and Peking may have limited herself to political warfare such as infiltration, subversion, propaganda, sabotage, and clandestine aid to dissident groups.

Barnett's expertise on Chinese Communists also made a little difference with that of Boorman. His comment emphasized on more aggressive behavior of PRC as follows; 'As Communist China's power has grown, Peking has become increasingly active in military pressure, political subversion, and diplomatic maneuvering in Asia.... Chinese Communist Revolutionary tactics have become the model for revolutionaries in much of Asia. And now Peking is pressing a diplomatic offensive and actively competing for leadership in Asia'¹⁵. He remarked there was a continuing need to study for activities of PRC though he stood on the similar side of US top-levels.

In contrast, Linebarger of FPRI suggested the more specific Chinese policy compared to the above mentioned description of Asian circumstances. Judging from several revised editions of his recommendations, he might have been asked for more definite proposal than the foregoing two people. In the middle of September, Linebarger submitted the brief report titled 'Prologue for a New China Policy'. He criticized the current US policy toward China and Taiwan as below; 'Up to now much of the difficulty of an American "China policy" has been the fact that it was "China policy" and nothing more—not an organic living part of America's general policy in the world'¹⁶. He pointed out that the Chinese themselves admitted in fact two separate Chinese states, two Chinas and that 'a balance of interventions' by United States and Russia both had stopped the Chinese civil war at the particular boundary which obtained between the two Chinas. In addition, He stated that 'the only operational great power in Asia is Japan... Only Japan possesses the near future capacity of putting task forces overseas...for the preservation of life and order in disturbed portions of Asia'. In short, Linebarger made realistic proposals that US government should adopt two Chinas policy and emphasized the US strong ties with Japan.

In November, He remarked the same opinion in the newer report. He delivered that a new US policy toward China had to be closely related to its global policies and that United States had continued to recognize the Chinese Communists as de facto authorities for certain areas and for certain purposes, i.e. in some international conferences or bilateral talks since 1953. Linebarger advocated maintaining the status quo of current circumstances without dishonor to Taiwan and argued that 'the United States should stimulate and encourage the creation of a sound Japanese policy toward China and should reappraise American policy as soon as such a Japanese long-range policy had been developed'. He considered the United States and Japan as 'the only two great powers in the Pacific area'¹⁷.

Strausz-Hupé seemed to have a dinner meeting with US officials to discuss Linebarger's draft report soon thereafter. It is obvious that Strausz-Hupé had shared in Linebarger's point of view with US Asian policies because he stated that 'this statement was prepared by Dr. Linebarger on the basis of extensive discussions by the Staff Conference of the FPRI'¹⁸. It is not known what kind of debate there was in that dinner meeting, but it is easily conceivable that US officials concerning with Chinese problem vehemently opposed to the concept of FPRI. Some of them insisted repeatedly the inappropriateness of Linebarger's draft report.

Walter S. Robertson, the Assistant Secretary of the State for the Far Eastern Affairs agreed that the conclusions and

14 Howard L. Boorman, 'The Sino-Soviet Alliance in the Struggle with the West', Sept 19, 1955. *ROCA*, 38, 129-205.

15 A. Doak Barnett, 'A note on China', Oct 5, 1955. *ROCA*, 38, 81-95.

16 Paul M. A. Linebarger, 'Prologue for a New China Policy', Sept 15, 1955, *ROCA*, 38, 5-12.

17 Linebarger, 'Draft Statement of a Ten-year China Policy, 1955-1965', Nov 1, 1955. *ROCA*, 38, 1047-68.

18 Strausz-Hupé to Robertson, Nov 2, 1955, *ROCA*, 38, 1.

recommendations in the paper ‘seem more valid over a long-range period than for the next five years’¹⁹. But he described negatively that in that period there was little chance that Japanese forces would become mobile for use outside Japan in the sense the paper discusses them. He opposed to the reduction of US military and economic aid programs to Taiwan in favor of concentration on India and Japan and rather tried to attract US attention to the military and psychological strength of Government of Republic of China on strategically-located Taiwan. ‘It will play a significant role in the next few years in our policy on Asia... Psychological and ideological conditions do not favor Japanese leadership on a regional basis’.

Similarly, Walter P. McConaughy, the Director of the Office of Chinese Affairs, Department of State, presented a pessimistic outlook about Indian and Japanese leadership in Asian area. He also disapproved of the validation of the report in next five years and warned that ‘in view of the limited number of trained and organized US ground troops available to meet an outbreak of war in the Far East, the GRC’s force could be invaluable’²⁰. There were several reflections unfavorably like those comments. Most of them included in their frustration because there was little prospect that the economy of Taiwan would be able to assume a larger share of the defense burden in the next five years if US economic aid programs for Taiwan was curtailed. It is, however, noteworthy that US officials involved in Chinese problem allowed that Japan would play the leading role in military and economic growth in Pacific area on a long-term basis.

Conclusion

In April 1956, Linebarger had written the revised report, which included the analysis on the unstable situation in Indochina. To sum up this report, there was little difference from the previous version. But that report appeared to put a great deal of thought into Taiwan problem. It indicated that ‘if the United States continues to be the primary source of support for the government on Formosa it should be prepared to accept as corollary of that support the responsibility of stimulating or suggesting political, economic and military developments of Formosa to make sure that the Nationalist Government represents not only historic Chinese nationalism, but also a partner of whom the American people can be proud’²¹. The conclusion and recommendation part of the report was similar with that of previous one. It suggested the “two Chinas” policy that US should recognize PRC as de facto authority in Chinese mainland and prevent the possibility of Chinese civil war, and encourage Japanese leadership in Asian area. Distribution of this report in the Eisenhower administration seemed to mean that the subject matter of this report was regarded as the described course of US Asian policy.

Then, did the think tanks in US have any influence on the US policy-making? The answer would be affirmative on the ground that the report of think tank (e.g. FPRI) made the over-all Asian policy more figurative and pervasive within the government even if the basic policy had previously been formulated within the high-level officials. At the same time, the answer would be negative on the ground that it did not silence the minor opponents in the government (e.g. the officials of Chinese Affairs) because they had often called for the strategic significance of Taiwan thereafter.

Be that as it may, what is more important for me is to find out that the decision making circles in the Eisenhower Administration were more heavily swayed toward the emphasis on their relations with Japan than Taiwan and Republic of China since mid-1950s. Those who studies the US relations with Taiwan tend to focus too much on the bilateral relations between the US and Taiwan and forget to examine US-Taiwan relations among the over-all Asian policies. It is beneficial to realize that I have to expand my view.

19 Robertson to Bowie, Dec 19, 1955, *ROCA*, 38, 660-9.

20 McConaughy to Rinden, Dec 15, 1955, *ROCA*, 38, 670-3.

21 Linebarger, ‘Draft Statement of a Ten-Year China and Indochina Policy, 1956-1966’ Apr 3, 1956, *ROCA*, 38, 70-82.

À la recherche de l'origine de l'image

Histoires d'inventions d'images et leur « reproductibilité » contemporaine

唄 邦弘 (人文学研究科学術推進研究員)

派遣先：国立パリ政治学院 (フランス)

Préface

La communauté scientifique s'accorde à dire que les peintures rupestres de l'art franco-cantabrique, à la fin de Paléolithique supérieur, du Magdalénien, sont caractérisés notamment par le réalisme des représentations et par ses thèmes animaliers (fig.1). La science préhistorique s'est progressivement constituée en discipline au cours du XIXe siècle en se nourrissant d'admettre l'apparition de l'homme. La grotte espagnole d'Altamira, située à Santillana del Mar près de Santander (Cantabrie), renferme l'un des ensembles picturaux les plus importants de la Préhistoire. C'est l'abbé Breuil (Henri Breuil : 1877-1961), le préhistorien en France, qui l'a qualifié d'origine de l'image dans l'humanité, bien qu'elle ait déjà été découverte par Marcelino Sanz de Sautuola (1879). Il a constitué la base de la recherche sur l'art pariétal afin de percevoir des images préhistoriques.

Mon propos ici n'est pas seulement de faire un travail explicatif sur l'art franco-cantabrique, mais aussi de comprendre la manière de voir des vestiges du passé, comme l'abbé Breuil l'a fait en considérant les peintures pariétales dans la grotte d'Altamira comme images originales ou authentiques. L'important, c'est qu'on ait pu les confirmer à l'aide de reproductions figurative et les arrangements artistiques de Breuil ont éliminé des tracés indéterminés.

Dans ce but, je vais d'abord faire un rapport sur mon voyage du musée d'Altamira en Espagne. Je vais parler de la reproduction actuelle préhistorique dans la salle d'exposition d'Altamira et établir une comparaison entre l'original et sa copie. Ensuite, je vais décrire précisément la méthode et technique de relevé de l'art préhistorique, surtout la méthode de Breuil ; il a reproduit une image « artistique » ou authentique afin de discerner une silhouette d'animal dans la grande paroi ornée. Les relevés de Breuil traduisent les peintures originales compliquées en des copies par le décalque posée directement sur les œuvres réalisées sur des parois non friables. Enfin, sous-jacente à cette réflexion, je voudrais poser la question : quelle est la relation entre l'original préhistorique et sa copie ? Comme Walter Benjamin dit, la technique de reproduction ne détruit jamais l'unicité de l'œuvre d'art, mais au contraire, elle actualise la chose reproduite. Il semble clair que la reproduction du musée permet de montrer comment il est possible de faire une analyse interne des représentations figuratives: la découverte des peintures pariétales auraient dû être le résultat d'une recherche méthodique à l'aide d'instruments de mesure. Cet article propose donc une réflexion épistémologique concernant la conception de la visibilité préhistorique et fournit la proposition d'une alternative muséographique en terme de reproductibilité.

La Visite de la grotte d'Altamira

Le Musée national et centre de recherche d'Altamira de Santillana del Mar (le Museo nacional y centro de investigación de Altamira) que j'ai visité, a été inauguré par Les Rois d'Espagne en 2001 pour accueillir un complexe muséographique moderne totalement dédié au Paléolithique (fig.2). Il organise l'exposition permanente "les temps d'Altamira" dans laquelle se trouve une infinité de pièces archéologiques, de récréations et de répliques qui nous transporte à la vie quotidienne des gens qui ont habité et décoré Altamira.

A cause des problèmes de conservation de la Grotte d'Altamira, le Musée d'Altamira offre une alternative spectaculaire aux personnes qui souhaitent connaître la grotte et son art. Après la première découverte de la grotte d'Altamira, en 1973, environ cent-quatre-vingts mille touristes l'ont visité. L'augmentation de visiteurs a causé de grands dégâts avec l'apparition de moisissures blanches sur les sols et de petites tâches noires sur les voûtes. Finalement en 1977, le ministère du Culture en Espagne a décidé au public la fermeture de la grotte pour la remettre en état gardant la même humidité et la même température.

Actuellement, la grotte originelle d'Altamira est donc fermée provisoirement au public.

Le musée permet aux visiteurs de voir les peintures rupestres d'Altamira à la place de la grotte originale. Il abrite la reproduction la plus fidèle qui soit de l'original, tel qu'il était il y a quinze-mille ans(fig.3). Le visiteur peut parcourir un couloir dans le diorama, où l'on peut discerner une silhouette d'animal avec l'éclairage adéquat. Le diorama est un dispositif où le spectateur visionne une image topographique peinte sur une toile gigantesque. C'est un mode de reconstitution d'une scène en volume qui présente l'ensemble de la grotte d'Altamira. Ce système de représentation repose sur un changement de point de vue qui permet au spectateur d'avoir illusion d'être dans la grotte originale.

Sans doute, la véracité de ce diorama est obtenue par un rendu des textures et des couleurs les plus proches de la réalité exposée, voire par l'utilisation des véritables matériaux et objets, mises en situation d'objets archéologiques ou de fossiles dans leur environnement contemporain ou des reconstitutions de sites de fouilles. L'échelle de la représentation dépend principalement du sujet exposé : dans un mode plus évolué, le diorama comporte un environnement modélisé en volume avec une richesse de détails identique à celle du modèle.

Mais la grotte originale d'Altamira et son diorama sont-elles exactement pareilles ? Autrement dit, quelle est la relation entre l'original préhistorique et sa copie ? Il me semble important d'évoquer la technique de reproduction courante au début de 20ème siècle. Parce qu'historiquement, il faut considérer les deux questions (l'original et sa copie) séparément. On va traiter la méthodologie de l'abbé Breuil qui n'a pas assimilé la peinture originale à sa représentation.

L'Histoire de la découverte et de la reconnaissance d'Altamira

L'art pariétal est un art animalier et une imitation de la nature. Cette affirmation banale et généralement admise est directement issue de la conception breuillienne de l'art préhistorique. Sa renommée tient à ses qualités de dessinateur qui l'autorise à réaliser la belle reproduction « artistique » par le calque ou le croquis.

L'histoire de la grotte d'Altamira commence par la découverte fortuite de Marcelino Sanz de Sautuola en 1879, qui était un juriste et archéologue amateur espagnol. Après découvrant les images de l'âge de pierre, il a présenté au Congrès préhistorique quelques dessins dans lesquels on a pu voir un ensemble de peintures rupestres de bisons, de chevaux, et de cerfs (fig.4). Celui-ci confirme les suppositions de Sautuola qu'elles ont été réalisées au cours du Paléolithique supérieur. Présentées à l'Académie des sciences, ces découvertes viennent alimenter le débat sur l'authenticité de l'art de cavernes.

Mais, l'Académie des sciences en France a rejeté de la façon la plus ferme l'hypothèse de Sautuola. La découverte était ridiculisée pour elle, car, comme le dit Emile Cartailhac, « on reste sans comprendre comment l'œuvre a pu être accomplie dans ces antres obscurs, à la lumière vacillante de ces lampes fumeuses, dont les primitifs actuels usent encore,... »¹ : les préhistoriens ont supposé que les peuples préhistoriques avaient habité à l'entrée de la grotte. Ou bien, du fait de la qualité artistique remarquable des peintures et de l'état exceptionnel de leur conservation, on a cru que les peintures avaient été réalisées par un artiste contemporain.

Il me semble qu'il y avait un changement épistémologique dans l'approche du passé après la méthodologie de l'abbé Breuil. Car, à partir de plusieurs de ses investigations de peintures préhistorique, on était disposé à accepter une telle ancienneté pour ces peintures. Dans ces travaux, Breuil s'efforce de dépasser la seule dimension descriptive pour proposer une interprétation de l'art des cavernes. Le relevé de l'un des bisons polychromes d'Altamira a été publié par Breuil en 1906 (fig.5). Il explique le rude travail, quand il le calque dans la ténèbres de la grotte.

« Elles (les gravures des parois des cavernes) n'ont jamais d'entourage conventionnel. Elles sont si fines qu'elles deviennent invisibles pour peu qu'on s'éloigne. Les ayant perdues de vue, on a souvent de la peine à les retrouver. Comment, dès lors, auraient-elles pu jouer un rôle décoratif. Une fois de plus nous arrivons à supposer qu'elles ont une toute autre destination. »²

1 Émile Cartailhac, « Les Cavernes ornées de dessins, la grotte d'Altamira, Espagne, "Mea culpa" d'un sceptique », *L'Anthropologie*, 1902, t. XIII, p. 349.

2 Émile Cartailhac et Henri Breuil, *La caverne d'Altamira à Santillane, près Santander (Espagne) : Peintures et gravures murales des cavernes*

Dans l'obscurité de la grotte, on peut à peine voir des tracés sous la lumière insuffisante. S'il s'attache à situer les œuvres qu'il examine, Breuil cherche aussi bien la belle forme que la signification de l'art préhistorique pour ne pas perdre ses traits. Cherchant la technique préhistorique dont il souligne la complexité, il reproduit une image par l'élimination de traces indéterminées. Au contraire de la reproduction de Sautuola, celle de Breuil ne présente que des formes d'animaux sur le papier blanc (fig6).

Il est certain que la méthodologie de Breuil a soulevé le débat sur la conservation de vestiges archéologiques. Son expression graphique des tracés se fonde, dans un sens plutôt sur son interprétation intentionnelle que sur l'objectivité scientifique qui signifie l'occultation de la volonté d'observateur. Mais, à vrai dire, pour lui le problème n'est pas de savoir comment décrire exactement la même chose, ou comment reproduire la même image dans la grotte. Plutôt, quand il est entré dans la grande paroi ornée, il a reproduit ce qu'il a vu. Il a expérimenté une compréhension intuitive de leurs intentions esthétiques, tant bien que toutes les peintures préhistoriques ont contribué à impressionner le visiteur moderne qui cherche à deviner des signes, des tracés d'autrefois. Donc le fait de reproduire une œuvre du passé par lui a eu pour but de faire apparaître l'image authentique par l'intermédiaire de la représentation de l'image originale. Il s'ensuit de là que les préhistoriens au début de 20ème siècle ont considéré les peintures pariétales de l'art franco-cantabrique à la fin de Paléolithique supérieur.

L'Original et sa copie

Le Musée d'Altamira présente des spectacles de la grotte caveirne pour la conservation. Mais c'est une réplique où nous pouvons parcourir comme si nous nous situons dans la grotte originale. Approuver la copie suppose qu'on renverse les valeurs respectives de l'original et de la copie, mais aussi qu'on remette en question la catégorie de l'originalité sur l'art traditionnel.

En 1936 Walter Benjamin a publié un article intitulé « L'Œuvre d'art à l'époque de sa reproduction mécanisée » (1936). Dans cet article, il prétend qu'il est du principe de l'œuvre d'art d'avoir toujours été reproductible. Traditionnellement, la valeur unique de l'œuvre d'art s'est intégrée dans la valeur du rituel situé à une place déterminée (par exemple, l'église ou la grotte). Il est essentiel que tel objet possède une unicité et que le mode d'existence de l'œuvre d'art soit déterminé par elle. Par contre, la technique de reproduction fait disparaître cet « ici et maintenant » de l'original qui forme le contenu de la notion de l'authenticité.

Autrement dit, on peut dire sans doute que la technique de reproduction multiplie à la fois l'original et produit sa copie. Mais, ce qui se dégage de la réflexion de Benjamin c'est que le développement des techniques de reproduction a changé la perception du spectateur, qui paradoxalement a l'impression que l'art lui est plus accessible (il peut avoir accès à des images en permanence), alors qu'en même temps ces images lui révèlent leur absence.

Il dit :

« La technique de reproduction - telle pourrait le domaine de l'art – détache la chose reproduite du domaine de la traduction. En multipliant sa reproduction , elle met à la place de son unique existence son existence en série et, en permettant à la reproduction de s'offrir en n'importe quelle situation au spectateur ou à l'auditeur, elle actualise la chose reproduite. »³

Le fait de reproduire une œuvre fait perdre son unicité, tandis que le produit nouveau actualise la chose reproduite. Il sera indépendant de l'œuvre originelle par le fait que la copie sera placée dans de nouveaux contextes.

On dit donc que la grotte d'Altamira possède une unicité tandis que le musée d'Altamira l'annule. La technique de reproduction dans la découverte au début du 20ème siècle a permis à préhistorien de réaliser l'ancienneté pour les peintures rupestres. De même, le diorama du musée représentent les spectacles qu'on ne peut jamais voir dans les circonstances actuelles. En y parcourant, nous imaginerions un instant où les peuples paléolithiques dessinèrent les peintures et où ils les regardèrent. Il

paléolithiques, Monaco, 1906, p.60.

3 Walter Benjamin (1989), "L'Œuvre d'art à l'époque de sa reproduction mécanisée", in *Gesammelte Schriften*, Suhrkamp, Bd. 1-2, S.711.

va sans dire qu'il n'est que d'imitation très ressemblante à l'original. Mais, nous y faisons l'expérience de l'autre instant où les anciens peuples ne vécurent jamais. En effet, personne ne connaît la raison pour laquelle ils dessinèrent les peintures rupestres dans les ténèbres qu'ils n'habitèrent pas. Autrement dit, on ne sait pas s'ils les regardaient comme un objet d'exposition ou un outil magique. Chaque fois reproduites dans le musée, les images préhistoriques transforment leur signification et nous font réfléchir autrement. La reproduction du diorama en volume nous fait donc sentir à la fois l'originalité que nous nous rappelons et la matérialité que possède l'autre authenticité.

Conclusion

En 1985, la grotte d'Altamira a été inscrite sur la liste du Patrimoine mondial de l'Humanité par l'UNESCO. Paradoxalement, d'un point de vue culturel, le patrimoine fait appel à l'idée d'un héritage légué que nous devons transmettre intact ou enrichi aux générations futures. Mais, il n'est pas juste que des peintures fragiles soient ni vues ni connues pour les conserver dans un milieu vivant. En proposant le concept de la technique de reproduction, j'ai tenté d'appréhender la signification de l'expérience double de l'originel.

Cela concerne le patrimoine culturel du Japon. Par exemple, la conservation des fresques des tumulus de Takamatsuzuka a détruit les peintures rupestres originales pour les rendre visibles. De toutes façons, nous percevons le passé en tant que traces du passé. Découvertes, elles sont conservées et reproduites.

平成 22 年度総括コメント

成均館大学校派遣院生・メンターの成果報告

鈴木 義和（人文学研究科教授）

（院 生）楊 吟（大学院人文学研究科博士後期課程）

（メンター）住田 哲郎（人文学研究科研究員）

楊吟君からは、韓国の語学教育、成均館大学における大学教育、日本語・韓国語・中国語・英語の対照研究について報告があった。韓国における外国人に対する韓国語教育、韓国人に対する外国語教育、IT を大いに活用した教育援助システムなどについての報告は、詳細かつ具体的である。中でも、「トウミン」というシステムなどは、自らの韓国語学習の経験があつて、はじめてその具体的 / 現実的な方法と効果を知ることができるものであったと言える。また、Communicative Language Teaching や Task-based Language Teaching が韓国語教育の中で積極的に採用され、それが機能して、インタラクティブでバランスの良い教育がおこなわれていたという指摘も非常に興味深い。さらには、韓国においては外国語学習や留学の支援策がたくさんあり、そのためもあつて海外に留学する韓国大学生の数が非常に多いということや図書館システムや教務システムが IT 化で非常に便利になっているということなども、今後の人文学研究科・文学部の教育を考えていく上でも参考になる情報であった。日本語・韓国語・中国語・英語の対照研究については、特に韓国語の表記と待遇表現に関して日本語との共通点の多さとその上での相違点の存在について考察し、自らの韓国語の理解を深めることができたようである。専門の研究については多く触れられていないが、2011 年度韓国日語日文学会春季大会で発表をおこなうなど、韓国語学、中国語学を専門とする教員に指導を受けられ、韓国語の話者からの豊富なデータ採取ができる環境を利用して、成果を上げたことがうかがわれる。

住田哲郎君からは、韓国人学生に対する四コマ漫画を用いた作文実験、韓国の学校におけるライティング教育についてのアンケート調査、および、成均館大学校でのアカデミックライティングの授業見学の記録について報告があった。作文実験では、韓国人の作文に対する意識が米国人と日本人の中間的なものであるが、より日本人に近いという興味深い結果を得ることができた。アンケート調査では、学年によってどのようなライティングの教育を受けているかに差があることが明らかにされたことは有意義であったが、その中身のさらなる検証と日本の小中高等学校におけるアカデミックライティング教育との比較対照が必要であろう。大学レベルでのライティング教育については、成均館大学校でライティングの授業が 1 年時の全学必修科目となっていること、2 年時以降にも選択科目としてより高度な授業が開講されているという報告のように、韓国におけるライティング教育が日本よりも先を行っている現状を、授業見学をとおして実感してきたことが大きな成果であったと言える。アカデミックライティングの教育をどのように展開していくかということは、人文学研究科・文学部における教育の今後の大きな課題である。今回の派遣で得られたものを日本語日本文化教育インスティテュートで現在進められつつあるライティング教育に関する研究プロジェクトに活かし、アカデミックライティングのための教科書作成やライティング授業のカリキュラム作成などにつなげていくことが大いに期待されるところである。

中山大学派遣院生・メンターの成果報告

駿河 輝和（国際協力研究科教授）（松浦担当）

緒形 康（人文学研究科教授）（田中担当）

（院 生）松浦 真弓（国際協力研究科博士後期課程）

（メンター）田中 剛（人文学研究科研究員）

松浦の論文は、観光地として注目を浴びている中国雲南省麗江市を事例にして、観光のもたらすプラスの面とマイナスの面を調べた論文である。294 人の観光客と 100 の事業所からアンケート調査によりデータを集めて分析を行っている。観光客の消費内訳と事業所の経費内訳と地域内調達力をベースに観光の経済波及効果を計測した。その結果、観光産業の付加価値は麗江市 GDP の約 6 割を占め、雇用は麗江市従業員総数の 4 割を占めており、観光業のもたらす経済的メリットの大きさを示していた。

また、観光客の来る地域、年齢層、どこに魅力を感じているかといった特徴を調べている。事業所の調査からは、8 割が 2000 年以降の開業であり、その中でも 2010 年開業という極めて新しい事業所が多いことがわかった。経営者の半分以上は外部から来ていて、商機を求めて流入していることを明らかにした。

急速な観光業の発達のマイナスの側面として環境の悪化を、中国語の文献を調べて取り上げている。水利用の増加により、将来の水不足の可能性及び水が汚染されて水質が悪化していること、排気ガスの排出量の増加を指摘している。

独自のアンケート調査を実施して観光業の経済的貢献を具体的な数値として示したことは評価できるであろう。また、麗江市に来る観光客の特徴、外から流入してきた新しい事業所が多いという点を明らかにした点も興味深い。観光業のマイナスの側面を中国語の文献を調べて提出している点でも研究の発展がみられる。しかし住民が観光業をどのように評価しているかという点に対しては調査が行われておらず、今後の課題であろう。

田中剛は 2011 年 1 月から 3 月まで、松浦真弓のメンター役として、中国の中山大学にて、袁丁教授（東南アジア華僑経済史）のもと短期研修に従事した。

田中は、松浦の留学中の助言を行うかたわら、中山大学図書館、広東省立図書館、省立図書館の文徳分館などで史料収集を精力的に行い、『内蒙古日報』、『光明日報』、『中正日報』、『広東日報』、『中央日報（広州版）』などの閲覧を通じて、内蒙古自治政府成立後のモンゴル人と国民党との諸関係、国共内戦期のモンゴル人立法院委員の動向について新たな知見を積み、あわせて訓政時期のモンゴル工作工程表等の貴重な一次史料を発掘することができた。

田中の派遣研究テーマは「人民共和国建国前後におけるモンゴル知識人の“再編”—1947～1957—」であった。1949 年に中国共産党は「共同綱領」において、民族言語文化の尊重を打ち出したが、そこで毛沢東たち党中央が重視したのは、民族問題の二つの偏向、すなわち大漢族主義と地方民族主義の克服に他ならなかった。とりわけ建国所期の重点は大漢族主義の克服に向けられていた。田中は、この大漢族主義に対する態度表明を軸に、1947 年から 10 年にわたるモンゴル知識人の思想改造に焦点を当てて研究を進めた。ここで「思想改造」と一般に総称される当該期の動向を、敢えて「知識人の再編」と名付ける理由は、反右派闘争に帰結する内モンゴル地域の思想改造の粛清対象が、建国前から有力な一派としてあった「内蒙古独立論」者ではなく、国民党の漢族同化政策に同調するかたちで、「中国の中の内蒙古」を主張してきた人々に向けられたというパラドックスを重視したからである。思想改造がモンゴル民族に固有な言語や文化を発展させる運動として展開してゆく中で、モンゴル知識人が新しい民族性のイデオロギーの体現者として「再編」されるという重要な指摘がここにはある。これまでの研究の盲点を突く新しい研究詩論として評価できよう。

国立パリ政治学院派遣院生・メンターの成果報告

濱田 麻矢（人文学研究科准教授）（小笠原担当）

長野 順子（人文学研究科教授）（唄担当）

（院 生）小笠原 淳（人文学研究科博士後期課程）

（メンター）唄 邦弘（人文学研究科学術推進研究員）

中国文学（台湾文学）研究を専攻している小笠原さんがヨーロッパという場所からアジア文学としての中国語文学を見直すことができたのは本当に貴重な機会であったと思う。小笠原さんはいくつか文学作品の翻訳も手がけているが、「外国文学を翻訳する／研究する」という作業について、ヨーロッパの研究者と話し合い、共同作業に携わることができたからだ。中でも小笠原さんが台湾同時代文学を読む上で書かせない作家だと考えている舞鶴を翻訳者に出会えたことは幸運だった。Esther Lin-Rosolato 先生と、複雑で難渋なことで知られる舞鶴のテキストの読み方、訳し方について意見交流をすすめることができたことは、この先の小笠原さんの研究にとって大きな力となると思われる。

また、現在はフランス国籍を取得しているが、八〇年代の北京の文学シーンを牽引していたノーベル賞作家、高行健氏へのインタビューを成功させることができたのも、パリ留学の大きな成果として評価したい。元来中国語で創作し、中国で表現活動をしていたにもかかわらず、中国政府の圧力に耐えかねて亡命に踏み切る知識人はあとをたたない。その中でも高行健はホスト社会に適応し、フランス語という新たなツールと絵画という手段とで世界に発信しつづけている希有な存在だからだ。このインタビューを通じて、小笠原さんは爾来の「中国モダニズムの読解」という大きな目標に、新たな足がかりを見つけられたことと思う。

今回の派遣者・唄邦弘は、修士論文でフランスの思想家 G. バタイユにおけるイメージとテキストの関係の特殊性をテーマとして優れた論文に仕上げ、文化学研究科博士課程に進学後も同研究を進めたが、2007 年に日仏コンソーシアム交流プログラムの派遣学生としてパリ社会科学高等研究院に在籍してディディ＝ユベルマン教授の指導を得たのを機会に、バタイユも論じた洞窟壁画美術におけるイメージとその身体性の問題及びその美学的意義をめぐって大きく研究の射程を広げてきた。今回の ITP 派遣では、23 年 1 月から 3 月までパリで ITP 派遣学生（小笠原淳）のメンター役として、フランスでの中国の現代文学の現状に関する調査及び研究論文執筆の指導や生活面でのサポートを行う一方で、自分自身の研究テーマについても文献調査や実地調査を精力的に行った。とりわけフランス国立自然史博物館等で先史学の発展への他学問領域（考古学、民族学、心理学等）の影響関係を検討するとともに、フランス・スペインの現存する洞窟壁画のフィールドワーク及び現在の研究状況についての調査を進めた。また 20 世紀初頭の先史学者アンリ・ブルイユの分析方法とその後の研究方法（例えばルロワ＝グーランのそれ）とを比較検討することにより、洞窟という空間内での身体所作を含めたイメージ再現の独自性とその意味について考察した。

その成果としては既に学会誌『美学』第 62 号（2011 年 6 月）に論文が掲載された他、このテーマをさらに進展させた意欲的な研究を表象文化論学会第 6 回大会（2011 年 6 月）、美学会西部会例会（同 12 月）等において口頭発表している。今後はこれまでに蓄積してきた研究を博士論文として仕上げ、考古学・人類学的なイメージ生成という未開拓の領域だけでなく、イメージと身体性という根本問題への新たな視点を切り開くような研究成果を、国内外の学界で公表していくことが期待される。

ワシントン大学派遣院生・メンターの成果報告

木村 幹（国際協力研究科教授）（米沢担当）

大津留 厚（人文学研究科教授）（四方担当）

（院 生）米沢 竜也（国際協力研究科博士後期課程）

（メンター）四方 俊祐（人文学研究科研究員）

米沢君は2011年12月から6月までシアトルにいるワシントン大学に滞在した。ワシントン大学はアメリカ有数の朝鮮半島研究の拠点であり、米沢君は其中で、主として韓国の「市民運動」について研究した。その要点は、何故に韓国において今日見られるような「市民運動」が発展したかを、歴史的経路依存のモデルを用いて明らかにしたものであり、韓国研究分野においてのみならず、政治学的に極めて高く評価できるものとなっている。

また、同君は、活発な研究報告活動も展開している。その最大の表れは、同君が、この内容に関わる研究を、アメリカ滞在中の2011年6月には、ロサンゼルスでの the Pacific Basin Institute of Pomona College で開催された Asian Studies on the Pacific Coast と、Western Conference of the Association of Asian Studies の合同年次会議にて、また続く同年11月に神戸大学にて行われた現代韓国朝鮮学会にて、それぞれ報告したことが典型的に示している。Association for Asian Studies は世界最大のアジア研究の学会であり、また、現代韓国朝鮮学会は現在の日本の社会科学分野の朝鮮半島研究において、最も影響力を持つ学会である。この国内外の二つの学会にて報告機会を得、日英二ヶ国語で朝鮮半島に関わる理論的、且つ実証的の高い研究報告を行い、そこでの高い評価を勝ち得たことは、同君の研究水準の高さを示すものであり、本プログラムの典型的な成功事例であることが言えよう。

最後に、このような優れた業績を挙げた同君は、日中韓協力事務局一般役務職員（研究職）に応募して採用され、本年1月から赴任することとなっている。同職は、日本語、英語、韓国語の三ヶ国語を駆使することが求められる研究職であり、この僅か1名の募集に彼が応募して採用された事は、同君が本プログラムにおいて得た機会を存分に生かした結果であるといえる。博士論文完成前の就職となったが、この同君の事例が、本プログラムが追求する現地と欧米の双方に熟知した新しい研究者の早期育成の典型的な成功例である事を強調したい。

四方俊祐はITP派遣研究者としてワシントン州立大学に派遣され、調査研究に従事しました。四方は学位論文において冷戦期アメリカ合衆国の台湾政策を、主に台湾の経済成長戦略との関連で論じましたが、ワシントン州立大学の極東図書館には関連する資料があり、四方は当図書館のShen氏のアドバイスを受けながらその調査研究に当たりました。

四方が主として調査したのはアメリカ合衆国外交調査委員会（Foreign Policy Research Institute=FPRI）の資料で、その分析を通じてFPRIがアメリカ合衆国の台湾政策形成に与えた影響を計ることを目指しました。FPRIの創始者Strausz-Hupéはウィーン出身のハンガリー系ユダヤ人で、大戦間期に配偶者の出身地アメリカ合衆国のペンシルヴェニア大学で学び、1946年にペンシルヴェニア大学で教職につきました。冷戦たけなわの1955年にFPRIを設立したStrausz-Hupéの意図は、ドイツと日本の敗戦で国民国家の時代が終わり、連邦制的なアメリカ合衆国とソヴィエト連邦の間での主導権争いが不可避な中でアメリカ合衆国の外交政策を問うことにありました。メンバーにはHans KohnやHenry Kissingerなど錚々たる人物が名を連ねていました。彼らの狙いは、世界の人口の半数を占めるアジアでソ連や中国の影響力に対抗するために周辺のアジア諸国にいかに経済援助を行うかということにありました。その中で台湾の平和的維持はアメリカ合衆国の外交政策の要の一つを形成することになります。

ワシントン州立大学はアメリカ合衆国の中でアジアに近い西海岸に位置し、東海岸の諸大学に対抗するためアジア研究に力を入れており、その点で充実したスタッフの指導を受け、貴重な資料を有する極東図書館で調査研究を行えた事は四方の今後の研究に資するところ大きかったと評価することが出来ます。

平成 23 年度

第 4 期アジアプログラム

第 3 期欧米プログラム

台湾における外国語文学の受容の在り方

——主にイギリス児童文学『ハリー・ポッター』の受容から——

中島 恵（人文学研究科博士後期課程）

派遣先：国立台湾大学（台湾）

・ はじめに

神戸大学主催の若手研究者インターナショナルプログラム（ITP）に参加し、2011 年秋より所属先の人文学研究科から、提携校の一つである台湾大学に半年ほど派遣されることとなった。現地では、専門であるイギリス文学の児童小説『ハリー・ポッター』の東アジアでの受容を探ることを目的に、文学系の授業に出席する他、文献を調査し、文学イベントに参加するなどして、その外国語文学の受容を通して、台湾で研究対象としていかに『ハリー・ポッター』シリーズへのアプローチが形成されているか知ることに努めた。派遣前には語学力などに不安はあったものの、多くの助けを得て研究活動を終えることができた。台湾での研究成果は、台湾という歴史的、政治的に特殊とも言える地域でこそ得たものであることを踏まえて、ここにその内容を報告させていただきたい。

・ 派遣先について

派遣先である台湾大学は、正式名称を「國立臺灣大學」と表記する。1928 年に日本人によって設立され、当時の名前を「臺北帝國大學」としていたが、1945 年に中華民国政府によって現在のものに改名している。2011 年時点で 11 学院、54 学系、96 研究所及び 33 研究中心を抱えるマンモス校であり、留学生も多数受け入れる国際的な環境であると言えることができるだろう。

大学名には国立とあるが、台湾、あるいは中華民国という名の共和国で知られるこの地域が、実際に国として国際的に認められるかどうか、いまだ明確でないことが現状である。そのためか、台湾に住む人々の台湾人としての自意識は非常に強いように感じられることがしばしばあった。しかし多民族、多文化を擁するこの地域は外国文化に対して概ねとても寛容であり、植民地時代から友好的な関係が続けている日本には特に多くの人が友好的である。近年中国語の需要が高まるにつれ、語学留学のため台湾を選ぶ外国人も多く、その国際化はますます進んでいるようである。

台湾は元より複数の民族が混在しており、漢民族 98%（河洛族 70%、客家族 14%、外省人 14%）とその他の台湾原住民 2%で構成されていると言われる。それに増えつつある外国人居留者が加わり、台北市で発達している地下鉄では中国語、台湾語、客家語、英語の順に 4 カ国語でアナウンスがあることから明らかなように、日常に複数の言語があることは当たり前の環境である。更に宗教を理由に菜食主義者も少なくなく、ベジタリアン向けのレストランが立ち並び、また大々的なゲイパレードが行われるなど、信仰の自由や文化の違いについても日本よりオープンな印象を受け、日頃から個の違いを意識し受け入れているように感じた。

ここで台湾を「国」として捉えて考えるならば、日本とは、地理的に近く、ともに東アジアにおける島国であること、国土的に決して大きくないことなど互いに親近感を持つことが納得できるほど共通点も多い。しかし、日本製品が溢れ、一見すればよく似ているように見える台湾ですら、やはり環境や文化において日本とは大きく異なるのである。むしろ似ている部分があるからこそ、その違いはかえって浮き彫りにされると言っても過言ではない。

以上に挙げたような相違が、外国語文学受容においてはどのように現れるのか。それを知るため、台湾大学では文学系の講義に出席してみることにした。

・ 台湾での活動

台湾での外国語文学の受容を知るため、日本文学系及び外国文学系の講義に出席した。

日本文学に関しては、日本人である太田登先生による石川啄木を扱う「日本近代詩歌研究」と、同教授の日本の古典作品を幅広く題材にした「日本文化史研究」を受講した。また、同学部で台湾人である何瑞藤先生の「台日文化比較研究」にも出席した。こちらは専門や所属学部等に関係なく、台湾人及び日本人の学生がそれぞれの文化について一人ずつ発表するものであった。どの授業でもレジュメや資料は全て日本語を使用しており、日文系所属院生たちの内の数名は学部では違う分野を専攻していたことを考慮にいと、その言語能力の高さには大変驚かされた。

「台日文化比較研究」の授業については、文学の授業ではないものの、台湾と日本の文化の違いについて触れられる貴重な機会になったように思う。例えば受講した回では東京大学大学院から派遣されたメディア専攻の研究員により「台日アイドルのファンの違い」がテーマに挙がったことがあった。アイドルという、いわばメディアの創造物である存在にファンが求める傾向の違いから見る双方の社会の需要の差異について、あるいは、台日を比較するにあたって特にメディアの話題を取り上げる際、自然と本土中国や韓国が比較対象として欠かせない存在であるとして話題にのぼったが、メディアがアイドルファンの需要をどう満たしているか、その戦略から観測できる各国の国際的・流動的なマーケティングの相違に至るまで、様々な分野に渡って議論が展開し、非常に盛り上がるディスカッションとなった。それ自体も興味深かったが、テーマの選び方から考えるに、台湾では研究対象として「文化」の定義が非常に柔軟で幅広くあることに驚かされた。この他、台湾大学開催のシンポジウムにて猫の耳を模した装飾をつけた研究者による日本のオタク文化についての発表が行われるなど、漫画やアニメの研究も奨励されているようである。このことから、本国イギリスではいまだに文学研究対象になりにくい『ハリー・ポッター』を始めとする児童文学、あるいはSF作品や絵本なども、台湾でなら学術的な分析を進めるに比較的易しい土壌が出来上がっているように感じられた。

現に、外文系では、滞在中に『ハリー・ポッター』シリーズに関するオンライン講義が開講された。周樹華先生による「哈利波特與鍊金術 Harry Potter and the Philosopher's Stone 錄影檔」である。これは、上海からのウェブカメラを通してライブで中継され中国語で行われたが、外国人留学生と思われる発言者からの英語の質問も受け付け、チャットを通じた学生との相互作用から、心理的な距離はむしろ通常の大人数相手の講義より近いように感じられた。内容はシリーズの第一作目を題材にイギリス版とアメリカ版に見られる英単語の違いを扱ったもので、同シリーズを簡体字表記の中国本土と異なる繁体字版で出版している台湾と重なる題材であるように思われ興味深かった。台湾大学の教授陣及びスタッフは国際化の促進もあつてか海外出張が多いようで、それに対応した授業形態を取り入れ早くも浸透させているようである。海外から特別講師を迎えた講演等も多い。

同じく外文系で出席した趙括儀先生による「17、18 世紀英国文学」の講義では、欧米圏出身の留学生を含む参加学生が少人数のグループに分かれプレゼンテーションを行い、そのほとんどが英語を使用していた。テーマ選択は自由であったようだが、『ガリバー旅行記』など台湾の植民地時代を想起させる作品を複数のグループが取り上げたことは興味深かった。ただしその内容については、時折中国の故事が引き合いに出されることはあっても比較対象は同じイギリス文学にとどめており、特に台湾の文学作品について触れられることは無かった。

外国語文学の授業では、概ね使用言語及び資料はその研究対象の国のものを使用することの方が多かったように思われる。各国の文化を、その国の言葉で学び、分析し、また同じ国の作品同士で比較させている所はしばしば見たが、台湾独自の文学等に関する言及があまりなかった。これは台湾人と接する上で感じる彼らの自意識の高さと矛盾しているようにも感じられたが、「台湾文学」の定義を図るならば、現代に至るまで台湾史上で政治的な理由によって使用を強いられた日本語を含むあらゆる外国語文学が挙がってくることを留意すると、当然のやり方なのかもしれない。しかしながら、大学で文学作品を台湾独自のものと比較分析している場面にあまり出会えなかったのは残念である。

そこで、台湾という地域における文化の受容の独自性をより良く知りたいと思い、あらゆる場所へ出向きできるだけ多くの人と知り合うため積極的な交流を図った。大学ではヨガのクラスや伝統芸能鑑賞会などの課外授業に出席し、音楽サークルに参加するなどして現地の学生との関わりを増やした。知り合った台湾大学院生の日本語翻訳及び添削、発表の補佐をするようになり、台湾人学生との言語交換をし、他国からの留学生に日本語を教えることもあった。二二八公園での式典に参加するなど、伝統的な行事や活動などにも参加するようになった。中国語の習得の必要性を感じたため 11 月からは語学学校中華語文研究所 (TLI) に通い始め、発音や簡単な文法など中国語の

基礎を学び、初級レベルの会話能力を獲得した。クラスメートは日本人の他、欧米圏から来た人が多く、授業はほぼ英語で行われていた。

こういった活動を通して台湾に住む人々と交流するうちに、彼らとの日常の会話やその行動から、台湾人同士でもやはり民族が異なればその違いを意識していること、しかしその違いを公には普段あまり出さないようにしていること、多くの違いを受け入れる一方で、一度その相違を「違い」とであると認識してしまったらそこに触れないようにしがちになり、その是非はさておくとしても、結果として違和感を抱えたままになってしまう傾向にあること、などを感じるようになった。彼らが所属民族等の違いについてあまり互いに表に出さないのは、もちろん彼ら自身がそれをデリケートな話題であることをいやというほど自覚しているからであろう。異なる民族の人と個別に話す機会が何度かあったが、それぞれが自分の所属する民族グループに誇りを持っており、理由は様々なれども、自分たちこそ他より優れていると主張する人も少なからずいた。

また、上に挙げたような傾向は、台湾人に限らず台湾在住の外国人たちにも現れてくるようだ。日本人の多い台湾では交流会の活動も活発であったので、台日交流会や日本人会に参加した。これによって所属大学や専攻・年代等に関係なく多くの人との交流が実現できたように思うが、日本人に友好的な台湾の人と接するうちに、台湾の人が思う台湾は中国と違う一国家であるという思想を強く意識するようになる人がとても多いのである。また、多くの台湾の人が親日である理由を「日本人は親切」であるからだと頻繁に口にしながら我々に接するため、我々は自身が日本人であるということを常に意識させられ、また同時にその居心地の良さに台湾人と日本人である我々の善性とそこにある正義あるいは正当性のような概念を、強く信じるようになってしまうようなのだ。同時に彼らが台湾に住む台湾人であり、我々は日本人であり、また華僑の人々はそのどちらにもなれないまた違う団体であるという意識を持つようになり、それに徐々に捕われてゆくのである。

人との違いを認めようとすることは、それゆえに、その差異を意識しすぎてしまい、違いをステレオタイプ化することによってそこから逃れられなくしてしまう、あるいはその違いによって生じる摩擦をあえて無視するようになるなど、かえって相互理解を複雑にしてしまう危険性を含んでいる。この構造は、異文化理解に内包される急所の一つであると言えよう。台湾大学で外国語文学の講義を受けた際にその内容や方式について感じた物足りなさもこの危機感に通じるものがあり、確実に台湾の文学受容に反映されているように思う。

台湾では米国発祥の巨大 SNS「フェイスブック」が大流行しており、新しく知り合う人と繋がりを保つことは比較的容易であった。多くの人が毎日と言っていいほど頻繁に更新するが、日本と違う注目すべき点は、個人的な投稿よりも共有機能を活用していることだ。共有する対象は美しい風景やかわいい動物の写真であったり、政治的主張であったりと様々であるが、その情報の拡散の速さには目を見張るものがあつた。特に台湾の建国記念とされる日や、ロンドンオリンピックの開会式で台湾の紹介があつた際には、台湾人のみならず台湾在住の外国人に至るまで、同じような投稿を拡散し続けていた。日本での SNS は mixi の流行があつたように身内同士での交流が主な動機として活用されるが、台湾ではそれを越えて自身の、あるいは集団としての主張を発信するツールとして認識されているようだ。また、こちらでは「ハリー・ポッター」シリーズの台湾に限定されたファンのコミュニティ「哈利波特仙境」がいまだに 5000 人超の参加者を抱え大きな盛り上がりを見せており、今後台湾の読者研究をするにあたってアンケートを行うなどでもできるかもしれないと見ている。

・台湾での調査

講義への出席以外に、台湾で開催される文学イベントに赴いたり、国家図書館に行ったりなどして文学受容に関する調査活動を行った。

台北市では毎年行政院新聞局主催の国際図書展に参加した。第 20 回にあたる 2012 年は 2 月 1 日から 6 日にかけての 6 日間に渡って開催されたが、36,474 平方メートルの敷地に 749 社、60 カ国が参加するという大規模なもので、年々増える来場者数も今までで最大の 60 万人を超え大盛況に終わった。国だけではなく、ジャンルや対象年齢などあらゆる分類分けがされており、電子書籍及び映像作品も扱われる他、作家や出版社の講演なども設定されていた。

児童文学、SF 作品及び外国語文学のブースを中心に見て回りインタビューを行ったが、台湾での『ハリー・ポッ

ター』シリーズの知名度及び好感度はかなり高かった。スペインのブースではその人気を理由にスペイン語版を全巻揃えており、台湾で有名な書店店員は、シリーズの人氣があと五年は続くだろうと断言していた。このイベントでは台湾版『ハリー・ポッター』シリーズの翻訳者である彭倩文氏の夫で有名な絵本作家である幾米氏も講演に呼ばれていたのをそれを拝聴した。氏を通して彭倩文氏とコンタクトが取れないかと彼女宛に手紙を渡したが、返信はいただけなかった。その後、出版元の会社も訪問してみたが、彭氏は不在であり、伝言を頼んでみたもののやはり連絡はかえってこなかった。

メンターである同じ神戸大学の藤岡さんに助言をいただき、調査のため国家図書館に赴いた。国家図書館は、中華民国政府教育部において設置された、約三百万冊の蔵書を誇る台湾の国立図書館であり、そこで『ハリー・ポッター』に関する学術論文を検索したところ中文・英文合わせて4部の碩士論文（日本でいう修士論文にあたる）が見つかったので講読した。作品がイギリスの児童文学だからか、執筆者の所属大学は外国語系及び教育系であった。その傾向について述べるため、それぞれの論文の内容を簡潔に紹介したい。

国立嘉義大学教育学系所属林億萍さんの論文のテーマは「以正義與關懷理論分析道德抉擇—An Analysis of *Harry Potter's* Moral Choices from the Theory of Justice and Car Ethics」（中華民国 99 年 12 月、中国語）であり、作品そのものに焦点を絞りその内容に見る道德を分析したものである。主人公のハリーをこどもたちのロールモデルと見なし、その道德的選択を通して人生と教育における普遍的な回答を探っている。執筆者は道德的選択の多角的視点の必要性及び柔軟性、理不尽な規制への反抗について語っており、それらは正義の概念によるとされる。執筆者のいう正義の定義は論文内で明確にされていないが、『ハリー・ポッター』シリーズ読者の内にある道德性を前提にして選択された用語であるように読み取れる。執筆者が教育系所属だからか、児童文学として対象の読者が比較的若い年齢であることを想定し、彼らの手本たる存在である主人公を、正しい存在、つまり「正義」であると表現したのだろう。多様な価値観を奨励する一方で、主人公を正義と呼ぶことは、その行動を全肯定してしまうようで偏りを生むようにも感じたが、多文化・多民族を有する台湾出身の学生が、柔軟性を備えているという理由でハリーを子どもたちのロールモデルに選んでいるという事実は注目すべき点であるように思う。

『ハリー・ポッター』を他の文学と比較している学生もいる。国立臺北教育大学語文創作学系の張淑玲さんはテーマを「《西遊記》與《哈利波特》之英雄形塑比較研究—Comparison Study of Hero-shaping between *Journey to the West* and *Harry Potter*」（中華民国 98 年 8 月、中国語）とし、中国四大名著のひとつに数えられる『西遊記』と本シリーズを比較している。タイトルにある通り、両シリーズの主人公たちは「英雄」と表現され、その概念については、混沌の時代に生まれ、人々に必要とされる存在であると説明されている。執筆者は、両作品ともに主人公がチームの一員となって冒険をし、その過程で成長する物語であると捉え、物語進行上の困難は全て主人公が英雄となるため必要な試練であると主張している。『西遊記』は 16 世紀の明代に大成したとされ、仏教の影響を大きく受けた伝奇小説である。イギリスの作品である『ハリー・ポッター』とは東洋と西洋で大きく背景は異なるのだが、主人公一行が旅するのは現実とリンクする世界であり、全てフィクションでありながら時代を反映した壮大なファンタジーであるという点で、この二作品は確かに共通している。両者とも天界や魔法界と言った別の世界と、実際に存在する世界とを行き来しているがゆえに多くの種族や未知の風習に出会うきっかけが多く、また用途は違えども杖を持って敵に立ち向かう姿が重なることなども理由になるかもしれない。また、先に述べた林さんの論文とは異なり、主人公たちを「英雄」とは呼んでも、彼らが必ずしも正義であるとは言い切っていないところは興味深い。また、日本でも広く知られる歴史的大作である『西遊記』と『ハリー・ポッター』がこうやって並べられていることは、『ハリー・ポッター』シリーズの将来性を示してくれたようで単純に嬉しかった。東洋で広く長く愛されてきた『西遊記』にあるような時代や国境を越える普遍性を、今まさに世界中でブームを巻き起こしている『ハリー・ポッター』も備えていると証明できるなら、文学作品としての学術研究価値を見いだせるからである。

残り二作の論文は、どちらも『ハリー・ポッター』シリーズに見るキリスト教の影響を分析したものであり、英文で書かれている。国立暨南國際大学人文学院外国語文研究所所属楊格林さんの「《哈利波特》中基督教傳統的扭曲 Distortion of Christian Tradition in *Harry Potter*」（中華民国 99 年 7 月、英語）では、比較対象に有名なイギリス文学の作品 C.S. ルイス作『ナルニア国物語』や J.R.R. トールキン作『指輪物語』などを引き合いに出し、全ての作品はそこに表れるキリスト教的価値観によって、ファンタジーや児童文学といったジャンルであっても大作として成り立ちうると主張している。また、シリーズ最大の敵であるヴォルデモート卿は、神によって創造された世界で

神の領域に踏み込もうとした存在であり、それに対抗するのが「キリスト教的騎士道」を実践するハリーであるというのが執筆者の解釈である。一方で、執筆者は作者 J.K. ローリングのキリスト教観を一部批判的に捉えているが、そもそも作品が執筆者の解釈するようにキリスト教的世界を表すために書かれているのか、そして執筆者の主張する「騎士道」とはなんなのか、といった根本的な前提が曖昧であり、また執筆者が信じるキリスト教観をあまりにも絶対的なものとして押し出していることによって、あらゆる主張が客観性を欠いてしまっているような印象を受けた。このようにある絶対的な視点を持ってそれを唯一正しいとして書かれた論文は、他のものと比べると新鮮であった。

もう一作は、台湾在住のアメリカ人学生によって書かれたものである。国立成功大学外国語文学研究所の Derek Murphy さんが執筆した「神話對基督教文學形成的影響以及其在 J.K. 羅林之《哈利波特》系列中的沿用—Mythical Influence on Formative Christian Literature and their Inclusion in J.K. Rowling's *Harry Potter Series*」(中華民國 98 年 1 月、英語)では、『ハリー・ポッター』シリーズがキリスト教の影響を受けていることを前提に、歴史的・神話的・神学的観点からその分析を試みている。ハリーが復活するキリストの象徴であるなど、本シリーズと聖書の類似点を指摘し、同時にキリストという存在の歴史的定義を図りながら物語のルーツを探るという内容で、非常に興味深かった。台湾ではキリスト教を始め、多くの宗教が信じられており、町中には教会も多く見られる。『ハリー・ポッター』シリーズは、過去に台湾でもあるキリスト教教会で焚書にされたことがあったように、世界の一部のキリスト教関係者から「読者である子どもたちを魔術への欲求に向かわせる」として批判を浴びている。執筆者はその批判に異を唱え、魔術を扱う本シリーズと、キリスト教的世界の調和を目的としてこの論文を作成したと語っている。

以上に挙げた学術論文に共通して見られることは、まず本作の世界的な人気と高い知名度が前提となっている点だろう。やはり台湾でもその例外でなく、いまだブームが過ぎ去っていない現在、世間的評価や読者の反応を切り離して論文が執筆されることは難しいようである。また、主人公主体の分析の傾向があるように思われる。また、魔術が登場する物語であるがゆえに、宗教的物議を醸す内容であるということも、キリスト教関係の読者からすれば目につぶれない問題であるようだ。たった四部の論文に見る傾向なので、台湾全体の受容を知るには十分な根拠になるとは言えないだろうが、『ハリー・ポッター』シリーズがこうやって台湾の修士課程においても学術的に研究され始めているという事実は喜ばしい。

・ まとめ

台湾での生活は、言語の壁や三度に及ぶ引っ越し、体調不良など落ち着かないことの多い日々ではあった。『ハリー・ポッター』に特化した受容についてはまだ調査の余地があるが、しかしながら、多くの人との出会いや助けによって約五ヶ月に及ぶ滞在期間中、その体験を通し現地での外国語文学受容について少なからず学べたように思う。関わった人々が台湾大学を中心としていたため、対象に偏りがあるであろうことは留意しておかなければならないが、その中で感じたことを以下にまとめたいと思う。

台湾独自の文学の定義が難しい台湾では、外国の文学というよりは、現在母国語のどれでもない外国語で書かれた文学が「外国語文学」として研究されている。それらは、しばしば対象の文学が生まれた場所の言葉で読まれ、学ばれて、自国のそれとは違うものとして、しかしその差異の是非を問われることはなく、異文化としてそのまま受け入れられた上で研究されている。こういった外国語文学の受容には、もちろん台湾での異文化そのものに関する受容の姿勢が大きく反映されていたようだった。

台湾は多民族・多文化が混在し、それゆえ多様性を認める地域である。ゆえに児童文学や SF といったジャンルの文学も積極的に研究対象として取り上げられており、『ハリー・ポッター』のように文学史上新しい作品の研究にも理想的な環境が整っていると言えるかもしれない。また複数言語を話すことを当たり前と思う学生も多い環境のため、外国語ということも比較的障害になることはない。また、現地では情報系産業が目覚ましく発達し続けており、インターネットやソーシャルメディアへの関心も高いので、あらゆるソースから情報を引き出し、より新しく、また多様な視点からの研究を進めることができるかもしれない。

しかしながら、台湾に住む多くの人々は民族という概念を常に意識しており、そのため、かえってその違いをステレオタイプ化してしまい、各個人の独自性が軽視され、また同時に普遍性が見失われがちになってしまう側面が

あることも否めない。歴史的・政治的なタブーも多く、結果として触れられず放置されてきた摩擦もあるだろう。この矛盾は異文化理解に置いて無視できない問題である。急速な発展と国際化の状況にある台湾は、見方によっては、今後ますます狭くなり、入り乱れてゆくことが予想される、地球上の国際社会の縮図としても捉えられうる。ゆえに、これからの台湾での異文化の受容は、社会全体への指針を示す可能性を含んでいると言えるのではないだろうか。そんな台湾における外国語文学の受容を知ることで、現代人として未来を生きる上でのヒントを得ることができれば、と考えている。

ITP 最終報告書

——ソウル国立大学校での留学を終えて——

趙 昊一（国際協力研究科博士後期課程）

派遣先：ソウル大学校（韓国）

ITP の支援を受けてソウル国立大学校で 2011 年 10 月 29 日から 2012 年 7 月 29 日までの 9 ヶ月間留学をしました。韓国でこんなに長い間、生活をするのは初めてでしたが、受け入れ教員の Ki-Seok Kim(キム)先生のおかげで、充実した留学生生活を送ることができました。また、留学中に指導教員である神戸大学国際協力研究科の小川啓一先生にはスカイプ等を通して論文の指導もしていただきました。

韓国での留学先はキム先生が所属されるソウル国立大学校大学院教育研究科の Global Education Cooperation 専攻でした。キム先生は米国の大学院で教育社会学の分野で博士号を取得され、開発途上国の教育政策や計画を研究テーマにされておられ、世界銀行やユネスコなどの国際機関でも客員研究員を務められたご経験があります。また、韓国の国際協力機構(KOICA)でもアドバイザーをされ、ソウル国立大学校副学長もされました。このような国際的に活躍されている先生のもとで研究ができたことをとてもありがたく思っています。

今回のソウル国立大学校に留学する 1 年前の 2010 年 10 月に、神戸大学国際協力研究科で、小川啓一先生が「国際教育開発フォーラム」を開催された際に、ソウル国立大学校からキム先生と先生の指導学生の方々 8 名が神戸に来られましたので、事前にキム先生や先生の博士課程の学生さんと面識を持つことができた点は、今回の留学を行う上で良かったと思います。ソウル国立大学校に留学するにあたり、入国ビザの問題で少し時間がかかりましたが、キム先生と小川先生のおかげで解決することができました。

また、ソウル大学校に留学する前に、ITP で 40 時間の韓国語の研修を受けさせていただきましたので、実際にソウルでの生活を始めるにあたり、スムーズとまではいきませんでしたが、心の準備はできました。この事前研修は、韓国で生活をするにあたり、とても良かったと思います。

ソウルでの最初の数日間、住むアパートを探すために不動産屋に何軒か行きました。9 カ月間という短期契約ができないとか、家賃の値段が高すぎるとか、全然言葉が通じなかったとか、いろんな問題がありました。しかし、最終的には円高のおかげで、とても良い部屋を借りることができました。とても安全な場所で、大学に近く、不動産屋で勤務しているおばさんと部屋の大家さんにはとても良くしていただきました。韓国でアパートを借りるのが始めてだったので、頭金としてたくさんのお金を事前に振り込まなくてはならないのには驚きました。部屋を探している間に、ソウル国立大学校のキム先生の研究室にご挨拶に行きました。キム先生がご指導をされている大学院生とも再会しました。キム先生はお忙しい方ですが、定期的にお会いしてご指導をいただきました。私の研究計画についてもご指導をいただきました。また、キム先生のご紹介で同研究科の Bong-gun Chung 先生のゼミにも出席しました。Chung 先生は世界銀行と OECD に勤務されたご経歴もあり、現在、ソウル国立大学校の客員教授をされています。Chung 先生のゼミにはキム先生の大学院生も参加しており、私も参加させてもらいました。

このゼミは毎週 1 回 3 時間行われて、毎回、教育開発や教育政策に関する異なったテーマをもとにディスカッションをしました(講義の前半が先生のレクチャーで、後半が大学院生との討議です)。このゼミでの主なディスカッション・テーマは下記の通りです。

- 1) Poverty and Inequity;
- 2) Theories and Practices;
- 3) Gender;
- 4) Globalization;
- 5) Educational Development;
- 6) International Organizations;

- 7) Education for All;
- 8) Human Capital Institution;
- 9) Democracy and Institutionalism; and
- 10) Technical Vocational Education Training

例えば、第9回目の「民主主義と組織制度」のゼミでは、民主主義がどれぐらい開発途上国に影響しているか。民主主義と経済発展のうち、政府はどちらを優先すべきか、など、様々な視点から英語で議論をしました。組織制度に関して開発途上国はまだ発展中なので、組織に多くの問題を抱えていることを Chung 先生は指摘されました。人的資源や政治腐敗など、多くの途上国が抱えている問題です。第10回目の講義は、途上国の技術的な職業教育訓練という題目をもとに行われました。日本とドイツなどの先進国は職業教育成功の代表として、アメリカなどは一般的な教育成功の例として。その一方で、アフリカや東南アジアの途上国はどのような教育を実施しているかなど、様々な一般教育だけにとどまらず、職業訓練教育などについてカバーされました。

12月になるとソウル国立大学校の学生は学期末で、終末試験とレポート作成で忙しくしている中、私の参加している最後の講義では、開発途上国に対する韓国の援助の効率性について学びました。韓国の援助は日本に比べて20年も遅れをとっている、との教授の説明に、神戸大学国際協力研究科で学んだ日本の教育協力の支援の現状や課題について、問題意識を共有することができました。この講義は英語で行われているので、ディスカッションに参加できました。11月末に韓国釜山で第4回目の High Level Forum on Aid Effectiveness という国際会議が開催され、ヒラリー・クリントン米国国務長官や国際援助機関の代表も参加されました。本ゼミを担当されている Chung 先生もこの国際会議に参加され、フォーラムの最新情報を講義でお話いただきました。

1月にメンターの長澤裕子さんがソウルに来られました。早速に長澤さんと1月10日にお会いして、色々とアドバイスをいただきました。長澤さんは韓国政治の専門なので、韓国のことを良く分かるだけでなく、ソウルに長い間住んでおられましたのでソウルの生活についてもアドバイスをいただきました。2012年の3月まで毎月2回くらい長澤さんと昼ごはんを一緒に、ソウルでの留學生活についていろいろとアドバイスをいただきました。また、韓国研究に関して韓国職業能力開発院の Dr. Kim Chul-hee (キム・チョルヒ先生)、李ヨンデ先生と Han Do-Hyoung 先生のことを紹介してくださいました。私の研究テーマであるベトナム研究の方では、ベトナム政府の研究機関である Vietnam Academy of Social Sciences の Institute of Anthropology 部門で教授をされている Minh Nguyen 先生と彼のアシスタントの Dr. Nguyen Thi Thanh Binh を紹介してくださいました。

ソウル国立大学校の冬休みの間、講義を受講することなく、大学の研究室に毎日通って研究を続けました。キム先生の学生さんは、韓国の教育問題を研究されている方が多いのですが、彼女たちの影響も受け、韓国の中等教育とベトナムの中等教育について比較研究をしました。韓国は既に OECD のメンバーになるなど先進国の一員ですので、技術教育より普通教育の方が人気も高いです。ただし1960年ごろは、韓国の経済は急成長しており、その当時韓国よりも成功していたドイツの技術教育のシステムを導入して、自分の国に適用しました。したがって、現在の韓国の中等教育レベルの技術教育はドイツの技術教育と似ています。60年代から今まで、韓国の技術教育は自国の経済成長と共に著しく発展をして、現在、安定した状態になっています。また、韓国の企業も順調に世界的なシェアを伸ばしています。一方、ベトナムは1986年から始まった経済改革のもと、教育セクターも改革がされました。その中でも一番大きな改革は、中等教育における技術教育でした。ベトナムが市場経済に移行するとともに、技術教育中学校も倍に増えました。市場のニーズに対応できる教育になるよう、ベトナム政府は中等教育改革を促進しています。韓国の成功例をもとにベトナムの中等教育についてより深く研究したいと考えています。

本研究では、ベトナムの中等教育における一般教育と職業訓練教育の収益率の比較分析を行いました。それは学校へ行く時の必要な経費、個人的には学費、雑費など、政府（国）としては、教育のために使う補助金などを分析係数に使います。ベトナムでの事例研究を韓国の研究にも生かしていこうと思います。韓国の中等教育を戦後から現在までの研究を労働市場との関係を含めて研究をしました。ベトナムの研究の手法を韓国のデータをもとに研究をして、比較分析をしました。韓国の経験からベトナムがどのような点を学ぶことができるか、教育開発の Education Transfer の視点からも研究もしました。教育の質を分析すると韓国は教育の世界比較試験で算数や理科が世界でもトップクラスです。韓国の経験はベトナムでも有効に使えると思います。

冬休みが終わって、3月から授業が始まりましたが、ほとんどの講義は韓国語で開講されていたので、英語の授業は前期と同じ Bong-gun Chung 先生の講義で、授業内容も全く同じだったので、講義には出席しませんでした。その代り博士論文の作成に焦点を当てました。

例えば、ベトナムの中等教育の経済的分析を中心に研究をしました。今までの研究は2008年の国民調査のデータを使って、教育の収益率の分析をしました。これまで、1997年のデータを使って分析をしたので、2008年の家計調査を使って教育の収益率の分析をしました。この2つのデータ分析の結果を比べると、10年間の間でベトナムの中等教育がどのように変わったかが分かりました。ベトナムでは経済改革が実施されており、教育の改革も並行して行われました。その中で一番大きく変化したのが中等教育でした。中等教育の在学生の人数は何倍以上を増えただけでなく、技術教育に最も柔軟なシステムがつけられました。中等教育レベルで技術教育学校に進んだ学生たちは以前、技術教育を受けた学生と違って、大学に進むことが可能になりました。このような教育的な背景から教育の収益率の分析結果がどのように変わったかの研究はとても意義のあるものだと思います。

2006年の家計調査の分析では、中等教育レベルでは、中学校、高校、短期技術教育、長期技術教育、専門高校とベトナムでは5つに分かれていて複雑になっているので丁寧に分析をしました。例えば中学校を終了した後、短期技術教育学校、または、長期技術教育学校の両方を選ぶことができます。この2つ違った進路を選んだ人々のどちらの教育利収益が高いかを分析しました。高校に進学した場合と収益率が同じになりました。また、普通教育よりも技術教育の収益率が高い結果になりました。これは他の国では見られない結果です。短期技術教育は長期技術教育より収益率が高いことも分かりました。専門高校の利益率は見ることができませんでした。更に、短期技術教育学校、長期技術教育学校と専門高校に関して、技術種類、学費、教員の資格などに深めての分析を行いました。6月末には、2010年のベトナム家庭調査のデータを入手し、これまで分析した1998年のデータ、2006年のデータとも比較分析をすることができ、歴史的に3つの時期で比較することができました。

ソウル国立大学校での留学を振り返ると、私の受入教員であるキム先生が指導学生のリーさん（女性）を私のチューターのような形で割り当ててくださったので、大学や日常生活でも色々と助けていただきました。そのお陰で、ソウルでの生活もとても順調に過ごすことができました。ソウル国立大学校は、とても広いキャンパスで、大学の図書館もとても充実していたので、夜遅くまで勉強をすることができました。

留学を終えて帰国後に、博士課程のワークショップを通して研究成果を発表しました。小川啓一先生の他に、2名の先生と15名以上の大学院生に参加していただき、とても貴重なコメントをいただきました。

今回のソウル国立大学校での留学を支援していただいた ITP プログラムの緒形先生や橋本先生を始め、多くの先生方や事務の方々にはとても感謝しております。ありがとうございました。今となつては、ソウルの氷点下10度のとても寒い冬が懐かしく思われます。ソウル国立大学校には多くの優秀な学生さんが集まっているので、とても刺激になりましたし、研究も順調に行うことができました。私の人生の中でもとても貴重な経験になりました。

台湾夜市の消費者研究の可能性

——先行研究の分析フレームの検討から——

藤岡 達磨（人文学研究科研究員）

派遣先：国立台湾大学（台湾）

はじめに

報告者は今回、ITP 第 4 期アジアプログラムに基づき、2011 年 11 月から 2012 年 1 月にかけて、短期派遣者として台湾・国立台湾大学に滞在する機会を得た。本報告はこの台湾滞在の経験に基づいている。

内容としてはまずメンターとしての活動内容を報告し、それを受けて現地での指導について今後の活動に向けたいくつかの点を指摘しておきたい。次に台湾における研究活動について紹介し、研究活動の結果得られた成果について簡単に紹介していきたい。

1. メンターとしての活動内容

本プログラムにおける短期派遣者は派遣中、自身の研究活動に従事するのみでなく、長期派遣の大学院生のメンターとして彼らの研究上、生活上の問題について適切なバックアップをすることが求められている。報告者が到着した際には派遣院生の生活上の状況はほぼ安定してきたため、主として研究面での進行の確認や研究上でのアドバイスなどを行った。

現地でのメンター活動は面談の形式を基本として、週 1 回前後の間隔で行った。だいたいの流れとしては、現在までの研究計画の進捗状況の報告を受け、質問やアドバイスを交えながら議論を行い、その内容を受けて今後の課題と次回までの目標について検討するという形で行われた。しかし、前提としてはこのような枠組みであったものの、普段とは異なる環境下ということもあり、なかなかこの通りには機能しなかったことも付け加えておく。その原因としては、やはり異国の環境下で体調を崩しやすかったこと、現地での住居の変更などによって時間が圧迫されたことなどが挙げられる。

指導の内容としては研究面に関して以下の四つの助言を行った。

1. ハリーポッターシリーズの台湾における書評を収集し、分析してみる可能性について。台湾においてはハリーポッターが思ったより広く受容されているわけではないらしいので、まずは評論家による書評の参照を提案
2. Cultural Studies などで見られる文献読解の可能性の提示
3. ハリーポッターの台湾におけるファンコミュニティと接触しそこを起点に調査を行う可能性
4. 国家図書館の紹介と文献データベースの活用についての提案

これらはそれぞれ長期派遣者のこれまでの研究と問題意識、これからの研究計画についての兼ね合いから提示された方針である。具体的な指導内容としては、

1. 台湾大学の文献データベースである NTUMUSE と国家図書館の紹介
2. 台湾大学英文学科の学部 4 回生で大学院進学が内定している陳品諭を紹介
3. 哈利波特仙境という繁体中国語圏のハリポッターファンサイトの紹介

などである。

長期派遣者は中国語が初学者であるというハンデを抱えており、派遣当初は多くの困難に遭遇したはずである。その点についても十分にサポートする準備があったが、報告者が到着した際にはそのような生活面での問題はほぼクリアされていた。また長期派遣者は意欲的に中国語を学習し、現地の文化や社会について理解しようと努めていた。もちろん、顕著な形で成果が表れるにはさらに時間がかかると思われるが、この滞在の経験は今後の長期派遣者の研究に対して一定の肯定的な影響があったと思われる。

2. 研究報告

a. 活動内容

今回の台湾滞在の主な目的は台湾における夜市の先行研究を検討し、先行研究の分析枠組みについて検討することで、これから行う自らの研究についての指針とすることを目的としていた。

台湾に着した際、現地で生活を送る中で中国語能力の低下が認められたので、11月28日から台湾大学の言語中心が開講している中国語クラスへ参加。できるだけ早く中国語能力を取り戻すように努めた。比較的早い段階で以前の語学の感覚を取り戻し、現地での円滑な研究活動に入ることが可能になった。

それから台湾における消費関係の議論について知るために、陳坤宏の『消費理論』などを代表とする消費研究の文献について検討を行った。また、90年代の台湾夜市研究の第一人者である余舜徳が近年再び夜市について言及していることを知り、特に最新の研究である「物與身體感的歷史：一個研究取向之探索」について検討を行った。この研究では物質文化と日常生活実践がどのように相互に関係性を取りながら補完されているかについて特に夜市における消費に注目しながら議論が展開されており、報告者の今後の研究にとってポジティブな刺激を受けるものだった。加えて台湾大学人類学系での胡副教授の消費に関する授業に12月27日から参加した。中国語能力の問題もあり、ネイティブとの議論はなかなか難しいが、発表のおおよその内容は理解でき、新鮮な刺激を受けることができた。また消費研究についての人類学における議論の幅広さを知ることができ、非常に有益だった。

また NTUMUSE という台湾大学内に籍のある研究者しか用いることができない学術データベースを用いて夜市関係の論文、特にここ5年ほどの論文を中国語で書かれた物と英語で書かれた物を分けながら検討した。さらに、このデータベースを用いて英語圏の新聞記事についても検索が可能だったので、そちらについても簡単にではあるが内容を確認した。

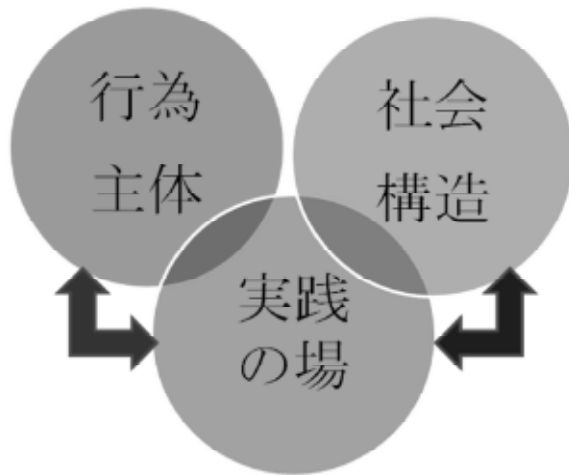
b. 研究成果



これまでの消費研究においては、消費の領域は個人的で美学的なものとして内面的次元に回収されるか、産業的な諸力によって外在的に決定されてしまうものとして描かれてきた。例えば松井剛（2003；2004）は前者の代表例としてマネジリアル・マーケティングと一部のポストモダン消費論をあげ、両者の共通点として、消費者の内在的側面が決定的に重要な役割を演じ、中間的な存在としての社会が不在であることを指摘している。

また、松井は後者の代表例として一般的な消費社会論に連なる議論をあげ、それらの議論の特徴として構造的な決定力による外在的決定が強調されている点を指摘している。この場合、行為者である消費者は構造に対して無力な立場として想定されている。このような観点は、J. ボードリヤール（1968;1970;2007-2008）に代表される消費社会論における伝統的な社会の終焉と産業社

会の優越の議論と強く結びついているといえる。そして、ボードリヤール自身が「社会の終焉」を唱えた事からも推測できるように、この二項対立の図式を採用する限り、どちらの立場をとっても外在と内在の中間的な場である「社会」は積極的な役割を与えられていない。



しかし、社会学の理論において A. ギデンズや P. ブルデューに代表される行為主体と構造のどちらにも決定力を想定しない構造化の議論系が主流になりつつある現在において、消費研究の両者の立場に共通している点は消費における構造化の局面を軽視しているところにある。もちろん、カルチュラルスタディーズにおける取組みのように、消費過程における構造化の局面に焦点を当てる研究も存在する。しかし、カルチュラルスタディーズでは権力への抵抗を強調する立場から、消費の構造化をマイノリティのアイデンティティ

ティに結びつくものとして捉える研究が主流である。そのような研究では、権力による画一化からいかにして個性性を確保するかが争点となり、承認をめぐる闘争につながりこそすれ、消費を通じた能動的な社会構成を解明しようとする方向には発展していきにくい。そこで本研究においては、消費を通じての構造化をアイデンティティではなく共同性の構成の局面において捉えることを試みてきた。このような試みは現在の消費研究、現代社会研究の困難さに対して、別の方向からの読み解きを可能にすると思われる。

本研究では現代社会におけるある種の特定の消費行動をある種従来とは違うバーチャルな共同性の構築に寄与するものとして見なしてきた。なぜ消費の社会的な側面に特に注目するのかについては、これまでの消費研究においては消費の創造的側面、社会構成的側面が重要視されてこなかったという認識によっている。また同時に消費の社会的な側面は、現代社会において重要な役割を演じつつあると考えている。したがって、この研究を通じて現代社会の在り方について、新たな視角の提供を目指してきた。

また夜市研究の蓄積においては、台湾の夜市についての研究は、主として公共政策、都市政策、建築学、人類学での蓄積がある。しかし、前者三者の研究手法においては夜市というイレギュラーな存在をいかに管理するかという点に重点が置かれている。特に 1970 年代から夜市は「都市の瘤」と呼ばれ、失業対策の一環として積極的ではない形で見逃されてきたものの、肯定的な評価を受けてきたわけではなかった。たとえば 1990 年に布告された〈台湾省加強攤販管理執行計畫〉の中では、「先進国家」になるために「屋台を減らし、できれば消滅させる」こと、またスーパーマーケットやチェーンストアなどを充実させることが「民衆の買い物環境を良くし、生活品質を引き上げる」というように記述されている。特に、夜市は「非正式経済」の代表的な事例として扱われており、正式な秩序の中でいかにしてこのような存在を解消できるのかということが主題であったといえる。したがって、政策学の方野で議論されてきたのは無計画な夜市をいかにして管理しコントロールできるのかという論点であって、夜市の内情をそのものを問題にしたような研究はあまり行われてこなかった。

一方人類学では余舜徳（1995；1999）の卓越した研究があるものの、その研究方法は夜市の主體的な構成者である商人の側のコミュニティとその発展を中心に扱っている。この研究は、現在台湾にある夜市研究の中でもっともまとまったものであると考えられ、非常に示唆に富んでいる。夜市における商店と屋台の関係、警察と屋台の関係、廟と夜市の相互作用、交通の発展と夜市の発展の相互影響、商品の流通の形式などどれも具体的かつ詳細に記述されている。しかし、一方で、消費者にまつわる部分は、全体的な分量の中ではごく一部を占めているにすぎない。このことから、これまでの夜市を対象にした研究では、消費者の観点から描く研究が欠けていることが分かる。したがって今後の夜市研究をさらに発展させていくためにはこの消費者からの視点を研究に組み込むことが必要であると思われる。

そこで、消費社会論や消費に関する研究の蓄積に従い、消費をある種のコミュニケーションとして捉えた場合の「共同性」がどのような形で可能であるかという点を、現場性（時間性・場所性）という概念をキー概念として研

究を行っていく。

現場性の概念を取り入れることで、一方で消費社会における行為は個人的で美学的な行為ではありながら、他方で参加者の意図によらず、しかし「社会」的に媒介された形で、コミュニケーションやゲームが始まってしまうことが明らかになる。こうした偶然性と「他者」の発見によって、個々の認識としては閉じているはずの行為者は「共同性」と外部への信頼を構成する。このような「共同性」によって、行為者たちは閉じられたそれぞれの美学的な世界を保持しつつ、なお包括的な何らかの「社会」に属していると信じることができ、実際の共同行為が首尾よく継続されることでこのような信頼は再生産されていく。この過程で伝統的ではなくかつ産業的に媒介されている消費社会においても、「共同」的なものは構築されうることが示される。

ここから「社会」的なものを構造化する消費社会理論のフレームの原型をみいだすことができる。このような消費者からの視点を採用することによって、夜市は社会における信頼感を担保する起点として、また他者とともに在ることを実感する場として、肯定的な社会的機能を持っているのではないか、という観点が浮かび上がってきた。

b-2. 夜市消費者へのインタビュー

最後に台湾での夜市消費者のインタビュー調査の結果を概観し、台湾夜市研究の発展の可能性について検討したい。このインタビューは夜市によく行く台湾人大学生（19-22 歳、男 2 名 女 3 名）5 名に夜市の利用について聞いたものである。一人あたりの所要時間はだいたい 30 分前後であった。

1. 在什麼樣的情況下台灣人去夜市（どんな時に夜市に行きたいと思うか）

台灣人不常去夜市，平均的話一個禮拜一次左右，而且，所有的都不是一個人去的，大部分的人跟朋友或是同事一起去。我感興趣的部分是他們去夜市的時候的感覺，女生們都說想吃好吃的小吃時會去，其他的人說覺得無聊或是認真工作以後想去。

インタビュー対象者は、こちらが想定していたよりもあまり夜市に行かないようである。ほとんどの人は友達もしくはクラスメートと行くと答えており、一人で行く人は少ない。女性は全員が美味しいものを食べたい時に夜市に行くと答えており、男性は退屈な時や仕事をまじめにやった後に行く、と答えている。このことから、彼らは何かに必要に駆られて夜市に行くというよりは、誰かと一緒に何か楽しい気分になりたい時に夜市に行くと考えられる。

2. 夜市の特色是什麼（夜市の特色は何か）

所有的人強調夜市的特色是吃的方面，也就是小吃。他們又強調在夜市可以享受跟朋友聊天著邊吃邊走的快樂，另外，有的人說在夜市可以看到很多東西，也可以看到現在流行什麼。可是雖然他們都覺得逛夜市很開心，但他們不太相信夜市的衛生水準・東西的品質。有人覺得夜市又髒又擠，食物品質也許不好，服務太隨便。有一點複雜的部分是這個部分；雖然他們認為夜市有這些壞處，不過他們卻認為夜市很好玩。

すべての調査対象者は夜市の特色はローカルフードだと答えた。そして、夜市の楽しみとはローカルフードを食べながら友達とおしゃべりしつつ歩くことだ、ということを強調している。また、あるひとは、夜市ではたくさんの商品を見ることができ、現在の流行がなんなのかについて知ることができる、と答えた。しかし、一方で彼らは夜市の衛生水準や商品の品質をあまり信用していない。またある人は、夜市は人混みがひどく、汚く、サービスもあまり良くない、という回答をしている。ここでの問題は、彼らは夜市の問題点を認識しているにも関わらず、それでも夜市を楽しく遊ぶ場所だと認識している、という点である。

3. 百貨公司跟夜市比起來（百貨店と夜市を比較してみると）

我請他們把百貨公司跟夜市拿來比一比。他們都說夜市跟百貨公司完全不一樣。對他們來說百貨公司是購物的地方，又漂亮，又乾淨。衣服品質也很好，可以了解時尚。不過他們覺得去百貨公司的時候有一點緊張。要是不買的話，覺得不好意思。去百貨公司的時候，他們應該打扮得漂亮，注意自己的衣服。因為百貨公司的東西都很貴，所以不是誰都可以去的地方。他們對夜市的印象正好相反，逛夜市的感覺非常輕鬆，誰都可以去，

什麼都買得起。有人說夜市裡面有熱鬧的氣氛，他們在那個熱鬧的氣氛中逛著。

夜市と百貨店を比較してもらくと、全く違うという回答を得ることができた。彼らによれば、百貨店はショッピングの場所である。綺麗で清潔であり、衣服の品質もよく、ファッションを理解することができる。しかし、回答者たちは百貨店に行く際には、少し緊張し、もし買わなかった場合は申し訳ない気持ちになると答えている。また、百貨店に行く際には自分の身なりを整える。また百貨店の商品はとても高価なので、すべての人が行ける場所ではないと感じているようだ。夜市の印象はまさに正反対であり、リラックスしたまま行ける場所であり、誰でも行け何でも帰る場所である。夜市には賑やかな雰囲気があり、彼らは賑やかな雰囲気の中でぶらぶらする。

4. 對台灣人來說夜市是什麼樣的的地方（台灣人にとって夜市はどんな場所か）

他們認為夜市是台灣的夜生活的一部分，而且覺得這個部分是台灣獨特的。夜市裡面的東西很特別，除了夜市以外，別的地方看不到的這樣的東西。他們覺得夜市裡面有平常不太見的文化，而且在夜市各個特別的文化混合在一起，融合了。有人說在夜市可以看到真正的台灣人，我的解釋是：台灣是一個移民國家，移民國家的特色是文化融合。所以，在夜市裡那種文化融合的感覺，讓他們覺得自己正在參與一場專於台灣的文化活動。

回答者は夜市を台湾の夜の活動の一部だと考えている。加えて、この部分は台湾の独特な部分であるとも感じている。夜市の商品は特別なものがあり、夜市以外では見かけないものが多い。夜市内部では、日常で見かけない文化が有り、またそれらが混ざり合って融合している。ある回答者は、夜市では本当の台湾人を見ることが出来ると答えている。台湾は移民国家であり、移民国家の特徴が文化の融合にあるとすれば、夜市における異なる文化が解け合っている感覚は、彼らがまさに台湾社会に参加しているという実感をもたらすのかもしれない。

インタビュー結果からの考察

インタビュー結果から明らかなのは、夜市は確かに消費活動でありながら、一方で異なる側面を持っているということである。それは、ある回答者にとっては異なる文化的基盤を持つ「他者」と出会う社交の場所である。また多くの回答者が強調しているように、夜市に行くことは一種のレジャー活動であり文化活動であって、日常的な「買い物」という側面はあるにしても、夜市はそれ以外の側面からも研究される必要があるといえる。

今後は、夜市を消費空間であり、文化活動を行う場であり、社交の場でもあるという複合的な空間として捉え研究を行っていきたい。一方で消費という行為の中にこのような異なる要素がどのように入り込み、相互に影響を与えているのかについて検討していく必要があるだろう。

参考文献

- Baudrillard Jean, "LA SOCIETE DE CONSOMMATION Ses Mythes, Ses Structures", 1970, 今村仁司・塚原史訳『消費社会の神話と構造』, 1995, 紀伊国屋出版
- , "Le système des objets", 1968, 宇波彰訳『物の体系 記号の消費』, 1980, 法政大学出版
- , "Carnaval et cannibal Pourquoi tout n'a-t-il pas déjà disparu?" 2007-2008, 塚原史訳, 『なぜ、すべてがすでに消滅しなかったのか』, 2009, 筑摩書房
- Bourdieu Pierre, "La distinction : critique sociale du jugement", 1979, 石井洋二郎訳, 『ディスタクシオン：社会的判断力批判』 1990, 藤原書店
- 伊藤明己, 「消費の意味と社会性—相互依存性、ヴェブレン、ジンメル」, 2008, 『自然人間社会 45 25-49』, 関東学院大学経済学部教養学会
- 松井剛, 「消費主義の制度化プロセスとしての消費社会」, 2003, 一橋論業, 129 (5) : 575-91, 一橋大学
- , 「消費社会批判の4類型」, 2004, 一橋大学研究年報 商学研究 45 : 171-196, 一橋大学
- 余舜德, 「空間、論術與樂趣 夜市在臺灣社會的定位」 1995, 黃應貴主編, 空間、力與社會 : 391 - 462 頁, 中央

研究院民族學研究所

——，“夜市研究與台灣社會”1999，徐正光・林美容主編，人類學在台灣的發展：89－126 頁，中央研究院民族學研究所

インタビュー内容サンプル

台灣人為什麼喜歡夜市？

1. 你大概一個月去幾次夜市？常常去的夜市是哪一個？
2. 你什麼樣的時候想去夜市？
3. 你覺得台灣夜市的特色是什麼？你喜不喜歡這些特色？
4. 你覺得從台灣人的角度來看，台灣夜市算是可去的地方嗎？為什麼？
5. 對你來說逛夜市的樂趣在哪裡？
6. 研究者跟外國人說台灣夜市是獨特的，你想他們這麼說的原因是什麼？
7. 你覺得逛夜市跟逛百貨公司有哪些差異？
8. 有人說台灣夜市有一些功能，比如說社交，社會福利，回收利用資源等等。你同不同意這樣的意見？又，你想起得其他的功能嗎？
9. 你想如果有一天台灣沒有夜市的話，會變得怎麼樣？

朝鮮文化財返還問題と日韓文化交流

長澤 裕子（国際協力研究科研究員）

派遣先：ソウル大学校（韓国）

I. 短期派遣者のメンターとしての役割

ソウル滞在中は、神戸大学側の事務局の皆さんのおかげで、有益な経験をさせていただいた。御礼申し上げます。私は、長期派遣者がソウル大学教育大学院に留学中に後から合流し、3ヶ月のメンター役を担当した。ソウル大学到着後、教育学大学院に私からも連絡を取り、留学生の受け入れ制度や研究環境について問い合わせしてみた。留学生も多く、学位取得希望者と聴講者として大学院側のサポート体制も大きく異なり、後者の場合、指導教授に一任されており、大学院事務室では事務や連絡体系が一貫していないということだった。こういった点は、今後の長期派遣者にも役立つ情報になるかもしれない。また、派遣滞在前の時期に、ソウル大学は法人化に移行したということもあり、学長を始めとする大学事務室の業務が長期停止するなど、大学側の混乱があった。

そのような中、長期派遣者は、インターネットや英語の語学力を駆使してメールで積極的にソウル大学の受け入れ教授とも連絡を取っていた。勤勉に教育学科内の研究室に通い、パソコンでのデータ整理に黙々と取り組んでいた。学内や大学近くで約束をして会い、お昼などを食べながら、韓国との比較研究の可能性を話し合い、ソウルでの教育学、技術専門教育の研究者などを紹介することで、私自身も高等教育以外の専門教育というフィールドに関心を持つことができた。昨今、韓国でも高等学校卒業後の技術専門教育の方針が新たに変わり、長期派遣者の研究に今後役立つような事例が今後、韓国でも起こっていくかと思われる。夏の報告会で他のメンターの方々からも発表があったが、専門が異なるメンターができることは数少なく、また私個人的な対応能力が不十分で、両者の日程以外にも事務局などと連絡し、メンターに求められる仕事の領域を具体的に確認し、積極的に相談できたらよかったと、反省が多い。ソウルでの体験や学習が、今後、長期派遣者が新たな派遣地でさらに研究を進める上で良い糧になるよう祈っている。

II. 滞在中の研究結果報告

「朝鮮文化財返還問題と日韓文化交流」

1. はじめに

2011年、日本国会での「日・韓図書協定」の締結を受け、宮内庁が所蔵していた朝鮮儀軌が韓国に「引渡」された。それを受けて、ソウルでは2012年2月5日まで、儀軌を含めた「返還文化財」が「還收文化財展示」として故宮博物館に展示された¹。派遣滞在中に、展示会を訪れることができたのは幸運だった。

今回、儀軌は歴代の返還文化財の展示品と同時に展示された。にもかかわらず、観覧者の中には、展示文化財の文化的な価値が高くないと評する者も少なくなかった。ところが、こうした歴代の価値ある美術品との同時展示、つまりは返還文化財だけの展示を避ける韓国側の展示方法と「返還文化財の価値が高くない」という批評は、既に1965年日韓国交正常化時の文化財の「引渡し・返還」時に遡る。

1 日本政府側が「返還」という用語を用いるのは、「軍事占領」のケースに制限しており、事例としては、「豊臣秀吉の朝鮮征伐」による朝鮮文化財の搬出が該当すると規定している。「軍事占領」以外で朝鮮文化財が日本に搬入した事例としては、日韓併合がある。日本政府は、日韓併合は「平和的領有」とよむという判断に基づき、「引渡し」という用語を用いている。1965年の日韓国交正常化の際に、取り決めた文化財をめぐる協定は、日韓併合以降の文化財を対象としている。ただし、韓国政府はすべての事例に対して「返還」と主張している。詳細は、以下を参照。長澤裕子「日韓会談と韓国文化財の返還問題再考」『歴史としての日韓国交正常化Ⅱ』（法政大学出版局、2011）、pp.205-234。

2.1 「返還文化財」の展示をめぐる日韓政府の思惑

1965年の日韓国交正常化時、引渡し・返還文化財については、1965年6月22日に次の4つの協定と附属書および往復書簡によって、具体的に品目と数、そして引渡し後の取り扱いについて取り決められた。日韓政府の代表によって交換されたその取り決めは、1)「文化財及び文化協力に関する日本国と大韓民国との間の協定」2)「文化財及び文化協力に関する日本国と大韓民国との間の協定、附属書」3)「文化財及び文化協力に関する日本国と大韓民国との間の協定、往復書簡（大韓民国政府に引き渡される文化財に関する往復書簡）」4)「文化財及び文化協力に関する日本国と大韓民国との間の協定、合意議事録（文化財及び文化協力に関する日本国と大韓民国との間の協定についての合意された議事録）」である。第1および第2条で、文化財が「引渡し」である点が強調され、それが「文化関係を増進させ」るためという点を明示している。また、この協定が「文化財および文化協定」であることを強調しているが、これは、植民統治による反省に基づいた「返還」や「請求権による賠償」ではなく、「文化交流」だということを明示している。本協定は、内容的に日本政府の主張を反映している。同時にこの協定は、批准を義務付けており、日韓両政府の国会での批准を持って発効となった。

両国国会での批准後、1966年5月27日、上記2)「附属書」に列記された「陶磁器、考古資料及び石造美術品」の古美術品428点、図書852点、通信文化財36点、合計1326点が韓国に空輸二便で到着した。上記3)の文書「大韓民国政府に引き渡される文化財に関する往復書簡」は、日韓国交正常化の際に、日本政府側が宮内庁の文化財展示に関する意向を反映させたものだった。つまり、引き渡される文化財が、韓国で窃盗・盗掘・略奪などによるといった説明を付した展示をされては困るというもので、結局、「日韓両国間及び両国民間の文化協力関係の発展に資する目的にも沿う適切な方法で取り扱われることを希望」という内容で最終的な語句を調整したが、韓国政府側がこれに応じず、「政府間の合意」ではないという意味で代表者間の「往復書簡」という命名となった²。政府間の責任で内容を今後も遵守するという取り決めにはならず、あくまでも日本側の引渡し文化財の展示方法の要望を形として残すということになった。

日本から引き渡された文化財に対する展示方法は、宮内庁を始めとする日本政府側だけでなく、韓国政府にとっても国内情勢から対応を考慮せざるをえない問題だった。大統領府は返還文化財の到着前日の5月26日、「返還文化財の到着及び展示に関する報告」という大統領秘書室から大統領への報告書で、到着直後の所蔵予定と展示についてまとめている。大統領府秘書室が朴正熙大統領に報告した計画によると、到着した文化財は、同日中には博物館に入庫し、破損などの確認作業を日本人2名と韓国側の専門家間で29日の日曜日まで行い、翌30日の月曜日には「博物館内で全報道機関による大々的なPRを展開」することになっていた。そして、国民に「返還文化財」を見せる展示の開始日は、7月1日と設定していた。大統領秘書室は、文化財の韓国到着について、全報道機関を通じて国民にアピールすると同時に、展示の準備を具体的に計画していた。返還文化財の中から展示品種を選定し、説明書きの作成や陳列作業に、最低でも1ヶ月は要すると計算している。日光や風などによる破損の可能性を考慮し、仮設会場や屋外の展示はしないと、決めていた³。「返還文化財」の韓国に到着翌日には、大統領府が計画していた通り、入庫から全報道機関への報道という流れで、7月1日の展示についても、すでに、新聞で報じられた⁴。

ところが、6月10日、大統領府秘書室は、引渡し文化財の展示計画を中止することを急遽、朴政権大統領に建議する。展示準備は順調だった。同日作成の報告書で、大統領府秘書室政務秘書官は、「7月1日頃に予定していた展示は、6月20日頃に前倒しできる」とその状況を大統領に報告している。だが、秘書室は、「一般人に公開展示する際、最初に観覧するのは骨董品商人」という点から、以下の二点から、展示が得策でないと判断した。なぜなら、大統領府秘書室は、骨董品商人は、展示物の値打ちを良く知っており、昨今、「政府が文化財を海外に搬出できないようにしたことで政府に対する不満」を持っていることを案じていた。具体的に秘書室が案じていたのは、骨董品商人が、展示物を観覧し、「良い物が来ていない」と返還文化財の価値が低いと言いふらされるという世論

2 長澤、同上、pp.223-226.

3 大統領府秘書室政務秘書官から大統領閣下「返還文化財到着 및 展示에 関한報告」[返還文化財到着及び展示に関する報告]1966.5.26, (報告番号 66-第 614号) 韓国大統領資料館 EA0002021.

4 「문화재 한국 . 61 년만에 총 천 3 백 24 점 . 어제 덕수궁에 보관 일반공개는 7 월에」[文化財還國 . 61 年ぶりに總 1,324 点 . 昨日德壽宮に保管一般公開は 7 月に]『朝鮮日報』1966.5.28.

の批判だった。秘書室は、「返還文化財は到着後に新聞、放送では良い物のみを選択してきたので、良い世論はすでに形成されている」と判断していた。秘書室は、大統領に対して、日刊紙の『韓国日報』では、良い物のみを選んで「文化財紙上展示会」を本日まで開催している」と報告し、返還文化財をめぐる政府に対する評価の「良い世論」は十分だと判断し、展示を開始することで、悪評をあえて煽る必要はないと考えていたのである。秘書室は結論として、当初の返還文化財のみの展示計画は中止し、展示するならば「既存文化財と混ぜあわせて展示すれば良い」と大統領に提案した⁵。他の価値ある美術品と共に展示することで、「返還文化財」の数や質が期待に満たないという政府批判を避けようとしたのである。

そもそも、「返還文化財」は、質的そして数的にも、世論の批判以前に、政府の期待値にも達していなかった。1962年2月28日、日韓国交正常化交渉(1951－1965年)が妥結に傾く過程で⁶、韓国政府側が日本政府側に対して請求した文化財は、数的には引渡し分1,432点の約3倍の4,479点だった。質的にも、韓国政府の要求と実際の「返還文化財」の差は歴然としていた。例えば、韓国側が請求した1,371点の朝鮮統督および総督に搬出による仏像、書画などは「引渡し」とならず、統督および総督由来の搬出品は、初代統監の伊藤博文が天皇に献上した103点のうちの97点だった⁷。

2.2 国交正常化直後、韓国大統領府の対日文化危険視と選挙対策

大統領府が、「返還文化財」の展示をめぐる世論を意識せざるを得なかったのは、文化財の一般公開展示により、国民世論、さらには野党の批判に対する憂慮がその背景にあった。それは、ちょうど同じ時期に、大統領府が、国交正常化に伴う対日文化交流の対応の中での政府批判や、野党対策に神経を尖らせていたことからよくわかる。韓国大統領府秘書室が6月28日付で作成した大統領宛への報告書は、国交正常化の批准にともなう日本文化の韓国流入は、与党にとって危険だという判断に基づいていた。大統領府秘書室は、「刊行物や日本言語、音盤、映画等の大量流入は危険」と主張し、その理由として、次の3つを上げた。1) 韓国国内文化活動の萎縮、2) 韓国国内文化の主体性が弱体化、3) 韓国国民の精神活動の基準をゆがめる。大統領府秘書室は、日本文化の大量流入は、「精神面で日本に占領された」と、野党に攻撃される材料になり、選挙に悪影響だと判断した。秘書室は、日韓国交正常化にともなう文物交流は、「原則的に特別法の措置等、差別的な規制が不可能」と考えた。したがって、大統領府は、公報部が対策を研究していると大統領に報告しながらも、国内文化界が自律的に対策を講じ、国民への精神的姿勢について、政府が法的な規制をしなければならないとまで考えていた⁸。

こうした「対日文化への脅威と野党・国民による政府批判」と「大統領府の憂慮」という図式は、日韓国交正常化の調印前に遡る。調印を目前に控えた韓国国内では、連日、反対集会と政府批判が繰り返された。調印のわずか1ヶ月前の1965年5月末には、連日、韓国政府の対日外交をめぐる反政府集会が開催されていた。新聞紙上でも「対日屈辱外交反対闘争委員会」の開催を告げる記事が、報導されていた⁹。国交正常化直後もなお、国民の反対運動は続き、連日、日刊紙の一面で、正常化への国会手続きの日韓条約批准反対、そして批准後は、その無効化を主張する反対集会が各地で開催されたと報じられていた¹⁰。

5 大統領秘書室政務秘書官 주관 중から大統領閣下, 「반환문화재 전시 계획 중지 건의」 [返還文化財展示計画中止建議] 1966.6.10, (報告番号 66－第 648 号) 韓国大統領資料館 EA0002023.

6 文化財少委員会では、1961年10月31日の第1回会議の冒頭で、両国の主席代表が「話を難しくしないでまとめたい」と挨拶を交換し、妥結への思いを明らかにし、1962年末には文化財に関する協定の骨子を作成し、両国で要綱案を交換していた。長澤、同上、pp.222-223.

7 朴薫、「日韓会談における文化財「返還」交渉の展開過程と争点」『歴史としての日韓国交正常化Ⅱ』(法政大学出版局、2011), p.204. 同ページの「1965年5月28日返還」は「1966年5月27日」の誤植か。

8 大統領秘書室秘書官朱より大統領閣下、「韓日国交正常化에 따르는文化關係對策」[韓日国交正常化にともなう文化關係對策] 1966.6.28. (報告番号 65－第 163 号) 韓国大統領資料館 EA0002334.

9 「내일 하오 효창구장서 대일굴욕외교 반대투위 성토회의 확정」[明日午後、孝昌球場 対日屈辱外交、反対特委聲討大會]、『朝鮮日報』1965.5.28.

10 「대일굴욕 외교 반대투위, 조국 수호협, 한일조약 비준 저지연합전선모색」[対日屈辱外交、反対特委、祖国守護協、韓日条約批准阻止連合戦線模索]『朝鮮日報』1965.8.11. 「비준 무효 행사 제기. 대일굴욕외교 반대투위」[批准無効行政訴訟提起. 対日屈辱外交反対特委]、『朝鮮日報』1965.11.5

3. 結論

派遣者は、派遣期間にソウル現地の資料館で、韓国文化財の返還をめぐる韓国政府の対応を調査した。現地では、1945 年日本敗戦直後と 1965 年の日韓国交正常化直後の期間について、大統領府や国会閣議といった政策樹立過程の資料、そして、朝鮮総督府図書館やソウル大学奎章閣、中央博物館等の文化財保存側の資料を調査した。

本最終報告書では、以上のように、1965 年の日韓国交正常化直後の期間の大統領府の対応を中心にまとめた。そもそも、文化財返還問題は、日韓国交正常化で、交渉時の最大争点であった請求権問題から分離され、国交正常化後の文化交流として矮小化されたが¹¹、日韓国交正常化直後は、韓国大統領府の野党外交のために、文化財の国内一般公開は「選ばれた価値ある文化財の紙上展示会」に化し、対日文化交流も韓国国内政治の育成を妨げると危険視され法規制を検討し始める事態となる。日韓国交正常化の過程で調印に取り付けた両国の外交「成果」は、国交正常化交渉による調印内容とは相反する、「ねじれ現象」を韓国国内政治で露呈している。その背景には、正常化以前から国交正常化反対や対日屈辱外交を叫び、政府を批判し続けていた国民世論とそれを脅威に感じていた大統領府という図式があった。大統領府は、国交正常化直後に「返還文化財」を外交的な成功と考え、文化財の到着直後から綿密に一般公開を早々に計画していたが、野党や国民批判という国内事情から中止・歴代文化財との合同展示という方向転換に迫られた。

派遣者は、渡韓前までは、主に、日韓国交正常化の過程で、日本政府の交渉姿勢とそれに対する韓国側の批判および両政府の合意の過程を中心に研究してきた。派遣によって、現地の視点が取り入れ、韓国政府や国民の感情と政策に関する文化財の引渡し事例やそれをめぐる一次資料を確認できたのは、大きな収穫だった。合わせて、ソウル大学等で、何度か日本での研究を発表する機会に恵まれ、韓国研究者に厳しくも有益なコメントをもらうことができたのも幸運だった。

今後は、本最終報告書を修正・補充し、派遣中にソウルで収集した、1945 年の朝鮮解放直後や 1948 年大韓民国政府樹立直後に起きた、文化財返還要求の動きや、米軍政庁の対応についても、総合的にまとめたい。最後に、その方向性を記して、最終報告書のまとめとする。

解放直後の時期の文化財返還要求については、先行研究では、朝鮮解放直後や建国のさなか、政権の中心が文化財という周辺的な案件にまで気を配れず、政策的にも朝鮮での返還請求がなかったと言われてきた¹²。しかし、実際に資料を調査した結果、政府を主導とした愛国運動の一貫で、ハングル教科書の作成や対馬島の返還といっしょに文化財返還を主張していたことがわかった。また、日韓国交正常化の開催時に、韓国側が日本側に提示した膨大な請求リストの『対日賠償要求調査（1949 年）』の 3 分の 1 ほどの紙面が、文化財返還請求リストであったように、文化財返還問題は、愛国運動の開始だけでなく、請求権問題の牽引役を担っていた。合わせて、韓国側の対日請求には、日本敗戦直後から南朝鮮を軍事占領した米軍政庁やマッカーサー率いる GHQ が介入し、許可を下ろしていたこともわかった。年内にはこうした点をまとめるように努力したい。

11 長澤、同上、pp.227.

12 クリスティン・キム「古美術品をめぐる国際政治－冷戦政治と朝鮮半島の文化財一九四五～一九六〇年」『歴史としての日韓国交正常化 II』（法政大学出版局、2011）、pp.159-177.

日本語・中国語・韓国語・英語の行動展開表現に関する対照研究

楊 吟（人文学研究科博士後期課程）

派遣先：ワシントン大学（アメリカ）

1. はじめに

ITP プログラムの補助によって、前年度の韓国成均館大学への派遣留学に続き、今年度アメリカのワシントン大学（University of Washington、略称 UW）にて 8 か月ぐらい滞在する機会に恵まれた。授業、学会、研究会に参加したり、アメリカの教授・若手研究者とじかに交流することで、新たな知識を身につけ、欧米の研究動向にも目を向けるようになって、視野を広げることができた。

以下、ワシントン大学での「授業」、「研究活動」、「教育・研究環境」について、見聞や経験をもとに報告する。

2. 授業－第二言語習得と社会言語学を中心に－

滞在中、UW のアジア言語文学研究科日本語学科（Japanese Program, Department of Asian Languages and Literature）に所属し、応用言語学、第二言語習得、社会言語学が専門の Amy Ohta 先生にご指導を賜った。応用言語学は言語学の一分野として欧米で発展を遂げたが、英語などのヨーロッパ言語が対象にされることが多いなか、Amy 先生は日本語を対象に研究をなさっている応用言語学者である。私の習いたい分野と一致しているので、Amy 先生に指導のチャンスをいただけたことは大変貴重だと思っている。

応用言語学の知識は自分に欠けていた知識でもあるため、Amy 先生の学部講義や院生ゼミに積極的に参加した。これまで、神戸大学にて修士・博士課程を通じて、国語学（現代日本語文法）を中心に学んできて、伝統的なアプローチから日本語を見るが多かった。しかし、応用言語学はより社会的、現実的に日本語を見ていると言えるかもしれない。

秋・冬・春 3 学期にわかって、Amy 先生による次のような講義・ゼミに出席した。第二言語習得と社会言語学を中心に扱った内容であった。先生や学部生・院生と議論を交わすことが授業の醍醐味だった。

- ・ The Acquisition of Japanese as a Second or Foreign Language Acquisition（第二言語としての日本語習得）、
- ・ Classroom Interaction and Second Language Acquisition（教室インターアクションと第二言語習得）、
- ・ Asian Language Teaching Methods（アジア言語教授法）、
- ・ Japanese Language in Society（日本語と日本社会）、
- ・ Topics in Japanese Sociolinguistics（日本語社会言語学）

第二言語習得に興味を持ったのは、私は語学学習が趣味だからである。母語の中国語のほかに、これまで英語、日本語、ドイツ語、イタリア語、韓国語を学習した経験がある。何となく自分が語学学習に向いているほうだと思っているが、いったい何を持って向いているかいないかを言えるのか、ずっと疑問に思っていて知りたかったのである。そして、たとえば中国語を人に教えるとしたらどのような方法がよいのか、それもずっと自分なりに模索していた。それが、今回第二言語習得の研究に触れることではじめて、抱えていた疑問が解けた気がした。

外国語学習に向いているかどうかの問題は、まず、個人の要因が係わっているとされている。もっとも学習の成否に影響を与えるのは、学習開始年齢と適性と動機づけの 3 つだと言われている。子供が大人より言葉を覚えるのが早いとよく言うが、これは、実は、外国語学習には臨界期（Critical Period）があることを指している。12、3 歳を過ぎるとネイティブのような言語能力を身につけるのはほぼ不可能だと研究によって報告されている。発音能力に関しては、もっと早い 6 歳までが臨界期だという研究もある。

子供を幼稚園から英会話教室に行かせる親なんかは焦りすぎではなくて、むしろ正解だと認めなければいけないのであろう。方言のことを考えても納得できるのである。なぜなら、方言と標準語の関係を母語と外国語と見立てれば、多くの人は方言と標準語の両方ネイティブレベルに達しているのはまさに学習開始年齢が早いからであろう。

外国語学習の適性を測るために、現代語適性テスト (Modern Language Aptitude Test) がアメリカで作られた。4つの能力、

- Phonetic coding ability
- Grammatical sensitivity
- Rote learning ability for foreign language materials
- Inductive language learning ability

が測られている。これをまとめると、要は「音声認識能力」、「言語分析能力」、「記憶」(白井 (2008)) が外国語学習適性の3大要素だということである。IQ と似たように、一生のうちあまり変わらないものだと考えられているわけであるが、自分の適性にあった方法で外国語を学習すると効果が上がるのである。たとえば会話で覚えるのが得意な人と、文法練習で覚えるのが得意な人がいるはずである。

外国語学習の動機付けが高い人は、動機付けの低い人より高いレベルまで上達できる。外国文化への興味のような統合的動機づけであろうが、受験や就職のような道具的動機づけであろうが、自分を学習動機が高まるような状況に持続的におくことが語学学習の成功のカギのようである。

私の外国語学習の経験を振り返ってみると、やはり動機づけが肝心だと思いつくと思う。私は、日本語と英語の場合、使う必要があるからと思って習い続けて、話せるし書けるが、ドイツ語、イタリア語の場合は、習ってからしばらく経つと、全然使わなくなったので、今はもう覚えていないのである。それと、韓国語は、去年韓国にいたとき、本当に毎日使わないといけないので、一生懸命勉強して結構中級まで上達した。ただ、日本に帰って、韓国語を使う環境から離れたら、韓国語を使う動機も弱まってしまったのは事実である。どうにか高めないと、と思う私。次に、母語も第二言語習得に大きな影響を与えるとされている。母語と学習言語が似ていればいるほど、その言語が習いやすい。習いやすい外国語の場合、母語をそのまま外国語に訳していけばうまくいく場合が多い。それは、母語の知識の「正の転移」と言う。逆の場合は、「負の転移」、または「干渉」と言うが、それが学習の邪魔になりやすい。母語の正の転移を最大限に、負の転移を最小限にすれば、学習の効率がよくなる。

私は新しい言語を習うときに、実は母語あるいは既習の言語の正の転移を生かしているのだということに気づいた。たとえば、英語を習うとき、語順が同じ SVO である中国語の文法知識を英語の構文の理解に役立てたり、日本語を習うとき、同じ漢字・漢語を使う中国語の語彙知識を日本語の単語の暗記に役立てたりした。韓国語を習うとき、文法は日本語と非常に似ているので日本語の文法知識を生かし、単語は漢語が多いので中国語の語彙知識を生かしたりした。

聞き取るだけでは上手になるとは限らない。第二言語の習得にはインプットとアウトプットどちらも不可欠である。できるだけ大量のインプットを受け続けることが理解につながるとともに、アウトプットのための予備知識にもなる。しかし、アウトプットしなければ、インプットの効果がただ理解できる程度で止まってしまう可能性がある。言葉は完全に習得されるまで、何度も繰り返す「自動化」の過程を経なければならない。アウトプットの役割はその自動化を促進するためとも言える。

インプットとアウトプットの両方を最大限に増やすことが理想であろう。インプットを徹底した教育法として、欧米でイマージョン (Immersion) 教育法 (一般科目を外国語で教える方法) が流行っていた。しかし、それではインプットの効果が評価されたものの、文法や社会言語学的能力が劣っていると、Swain (1985) は調査に基づいて指摘した。その後、もっと文法にも注意を払おうと、Focus on Form (形式重視) のアウトプットが必要だと提唱された。つまり、ヒアリング・会話練習を中心としながらも、文法・例文の暗記も欠かせないのである。現在主流のコミュニケーティブアプローチ教育法も、インプットとアウトプットを促すという考えが含まれているものである。

第二言語習得において、学習者個人の努力が大事であることは言うまでもないが、教育側にとって、学生の習得

プロセスを理解し、学生に効率よく覚えてもらうように努力もしなければならない。たとえば、限られたインプットの量しか与えられないなら、できるだけ質のいいインプットを与えること。教育者が学習者のレベルに適した語彙・文章を使うと、より理解されやすいのであろう。文化的な知識も含めて教えると、社会言語学的能力にもつながるのであろう。Corrective Feedback（修正）をできるだけ学生の自主的学習を促進するようにすること。学生にすぐに Recast で正解を教えるより、聞き返すような質問をしたり学生に自分の間違いに気づいてもらうほうが、もっと学習効果が続くのであろう。指名質問やペアワークなどでアウトプットの機会をたくさん与えること。Ohta（2001）は、7名の初級日本語学習者の教室での活動を長期的に考察し、その結果、学習者が授業中 private speech（独り言）をしたり、ペアワークのときにパートナーによる peer assistance（学習者の助け合い）を得たりすることが、第二言語習得に有益であることが分かった。学習者が、一人ではできないが、少しのガイダンスがあれば達成できる能力、すなわち Zone of Proximal Development（最近接発達領域）を持っている、という Vygotsky（1978）の理論を応用し発展させた研究である。

第二言語習得は、第一言語（母語）の習得と共通点を持ちながらも、違う特徴を持っている。これまでの研究で分かったを知ると、ますます興味が湧いてきて、さらにこの先を知りたくなった。第二言語習得理論について理解を深めたことは、今後教員になるときにもきっと役に立つと思うので、関心を持ち続けたいと思っている。社会言語学に関して、言語政策、方言、性差、（学習者の）中間言語、会話分析、インタビュー調査、待遇表現、言語行動などについて学ぶことができた。

アメリカの社会言語学は、異なる民族や文化の存在を背景とする社会問題を解決しようとする学科とも言える。アメリカに滞在してみて、この国にいる民族・人種の多さを肌で感じて、「言語と社会」という概念の意味合いを日本に居るときと違う視点で考えさせられた。授業中の学生の発表や質問を聞いても、人種や地域性や性別などがよく話題になるが、アメリカの人がこういう問題に関心があるのだ、といつも興味深く聞いていた。

アメリカにおける日本語学習ブームは日本の高度経済成長につれて、1980年代に起きた。日本・日本語に関する研究もその頃から盛んになった。UWのあるワシントン州はアメリカ国土の西海岸に位置し、日本文化・アジア文化に比較的に親しみが深く、身近にいる日本人移民・留学生などとコミュニケーションをとる機会も多いので、日本語は外国語のなかで今でも人気が高い。日本語クラスは専攻生のためのものや全学共通科目のものといった区別はなく、ただレベル別に1-4に分けられている。それはUWの履修制度と関係がある。学生は入学したあと、学部所属せず、全学の授業を自由に取りることができる。学位をもらうために、ある Major（文学コース／語学コースの区別がある）、あるいは Minor の規定履修単位さえ満たせばいいのである。日本語クラスでは『げんき』（The Japan Times 出版）という教科書が使われている。講師が担当する授業（50分×週3）とTAが担当する Quiz Section（50分×週2）から構成されている。講義では本文・文法を、Quiz Section では練習・会話・テストを中心としている。日本語クラスのほか、日本文化、日本近現代文学、日本古典文学、日本語社会言語学、日本語音声学と統語論、日本現代史、日本建築、日本茶道、日本芸術、日本経済、日本音楽等々の科目が開設される。

アメリカのちょっと特殊なところは、UWでは Heritage Learners（継承語学習者）、いわゆる移民のための授業（日本語、中国語、韓国語など）もあることである。Intermediate Japanese for Heritage Learners は、「リーディングとライティングに特化し、文法、翻訳、ビジネス会話、文化習慣などを習う」ことを学習目標としている、とシラバスに書いてある。移民の国のアメリカでは、外国語教育が特に移民政策にかかわる。9・11からは English Plus（英語に加え外国語を習得することが大切）として、外国語教育を一種の安全対策とも捉えているようである。

私は2年生、3年生、4年生と一緒に受講したことがあるが、たいていの人は発音がきれいということにまず感心した。上級生に留学経験者も数人いた。JET（The Japan Exchange and Teaching Programme「語学指導等を行う外国青年招致事業」）プログラムに応募する人が毎年いるようである。英語指導という需要が高いからかもしれないが、日本に来ているJETプログラムの参加者のなか、アメリカ人は半数以上を占めているそうである。

たいていの人は漢字が下手だということは、ちょっと残念に思った。教科書などを見れば、それもそのはずだと思った。日本語クラスで使う教科書は英訳付きだし、そのほかの授業で論文を読む場合も英語で、議論や発表も英語である。それなら、勉強・研究の上で漢字の読み書きの必要性が極めて低く、当然上手になりにくいだろう。たとえば、次の例（Strauss(1995)）にあるように、英語の研究論文に出る日本語は大体ローマ字表記で示されている。会話分析の場合、音声の長短・変化などを表わすにはローマ字が都合という理由が考えられるが、そうでない場

合でもやはり漢字の出現が少ない。

1 Ai: Maa rosanzerusu mo sou iu- na: nanchiundaroo ibento no ooi tte iu ka: warui imi de

Well, Los Angeles has been, what shall I say? Eventful, in a bad sense.

—> 2 Hide: Ho:nto ni ne shizen to no tata- ne tatakai desu yo ne

It's true ne. Its like a strug- ne struggle against nature ne

—> 3 Ai: Ne soo desu nee

ne. Exactly nee

4 Hide: Demo amerika no:, seefu toka:. sono: amerikajin kanari borantia seeshin ga aru shi: kanari hayaku hukuuu hayakatta desho

But the American government, or well, the American people have a pretty good volunteer spirit and, the damage repair was pretty fast, right?

このローマ字の表記に慣れていない私は、英語を読むよりも時間がかかって大変苦労した。考えてみれば、日本語でも、よく英語をカタカナ表記・外来語に置き換えたりする。これは英語の論文などで漢字をローマ字に置き換えるのと少し似ているかもしれない。だとしたら、外来語の多用が日本人の英語下手の一因に数えるかもしれない。実際の会話の音声を詳細に書き起こして分析する会話分析 (Conversation Analysis) の方法は、中間言語や待遇表現や言語行動など多くの分野の研究に応用されている。Ohta (2001: Ch 5) は日本語初級学習者の教室での会話を分析し、Interaction Style は Acknowledgement から Alignment へという順序を経て習得されていくと考察している。Cook (2008) は学生のホームステイ先の家族の間の会話を分析し、家庭内での「一ます」フォームとプレーンフォームの使い分けを明らかにしている。

論述の手順に関しても、欧米の社会言語学研究は日本と違いが見られる。中井 (2005) に書いてあるように、欧米の社会言語学は、演繹的な手順で、まず仮説を立ててモデルを作り、その説明モデルの有効性を高めることを目標としているのである。それに対して、日本の社会言語学は、帰納的で、データの分布自体から分布を生み出す要因を推測するという手順をとっている。できれば、私は、欧米と日本の社会言語学研究のいいところを取り入れて、自分の研究の発展につなげたいと思っている。

2. 研究活動

今回の滞在を利用して行った研究活動は主に次のようである。

- ・ 英語文献調査・購読
- ・ 英語によるプレゼンテーション
- ・ TA
- ・ AAAL 学会参加
- ・ コロキアムで研究発表

これまで日本語で書かれた論文を読むことが多くて、英語の論文にはあまり慣れていなかった。渡米前、英語指導の時間に、英語の論文を読む練習を少ししていた。しかし、それでは全然足りなかった。アメリカの学生は授業の予習課題 (Reading Assignment) として、毎回 50~100 ページ相当の論文を読まされている。最初はどうしても読みきれなかったが、それは訓練で早くなるものだと思感した。先生はときどき Reading Questions を挙げてくれるが、それを手がかりに読み進めたり、読んだ後に理解をチェックしたりすると、文章の意味がつかみやすくなった。先生は毎回 Reading Notes を提出させるが、それを実践すると、論文のポイントがもっと印象に残るようになった。後で復習するときにも便利である。それから、Skimming and Scanning の速読法を意識して使うと、重要な情報だけ読み取れるようになった。

宿題は、Reading Assignment のほかに、実践的な課題 (Project) もあった。たとえば、ネイティブと学習者の会話データを集めて、会話分析の方法で書き起こして、第二言語習得の理論を使って分析するような課題があった。理論知識を習った後、すぐに実践的に応用することで、理解を深めることが狙いであろうか。タスク式の教育法はアメリカ教育の一つの特徴とも言えよう。

院生のゼミで輪読・発表を担当したことがある。論文を要約して考察を入れるというやり方は基本的に日本と同じだが、アメリカでちょっと特徴的なのはグループワークを取り入れているところである。学生2人か3人でグループを組み、授業前にグループメンバーで打ち合わせして議論・意見交換をして、それから、授業のために Discussion Questions を作って Catalyst (教務情報システムに相当するサイト) にポストする。ほかの学生がそれを読んでコメントを書いて返事する。授業当日、Discussion Questions をいくつかピックアップしてクラス全員で議論をする。このようなことを毎回のゼミでやっていた。

期末レポートの提出とともにプレゼンテーションも必ず行う。Organization, Content, Delivery に分けられて採点される。レジュメを棒読みするような感じでは Delivery の点数が取れないのである。私は、Delivery の面でアメリカの学生と比べて大きな差を感じた。英語であろうが日本語であろうが、今後もっと練習してプレゼンをうまくできるようになりたいと強く思った。

Amy 先生の 2011 冬学期の授業 The Acquisition of Japanese as a Second or Foreign Language Acquisition で、1 回 TA をやらせていただいた。いつもはこの授業を聴講しているだけなのだが、そのうちの Interlanguage Pragmatics (第二言語習得における学習者の言語使用実態) は対照研究・語用論と関連しているので、教えてみたいかとある日 Amy 先生に勧められた。せっかくのチャンスと思って、喜んで引き受けた。内容も形式も自分で考えてから、先生と相談した。前の授業と関連付けたほうが良いと思って、テーマを「苦情の表現 (Complaints and Responses)」に決めた。まず、学生に日本のドラマを見せてセリフを聞き取ってもらった。それから、習った会話分析の方法でドラマの会話を分析させた。そのあと、2 組の学生にロールプレイをさせて、日本語の言語行動・表現は英語とどう違うのかについて考えさせた。ドラマのなかで、日本人は苦情を言われてすぐ謝罪をしたが、アメリカ人なら苦情を言うときもっと罵倒語を使うだろうとか、謝罪より弁解するだろうとか、学生から面白い意見が出た。Amy 先生からは、選択問題をあげたらもっと分かりやすかったとか、教え方についてアドバイスをいただいた。

春休みを利用して、東海岸のボストンで開催された AAAL (American Association for Applied Linguistics) アメリカ応用言語学会 2012 年度の大会に参加した。Amy 先生もこの学会に所属していて、今年は「Beyond the Zone of Proximal Development: The Assistance-Related Unit (ARU) as an Integrated Unit」という題で発表をなさった。今年度の大会の主題は「多分野にまたがる (Interdisciplinarity)」であるが、まさにそれに相応しく、アメリカ国内外から第二言語習得、認知言語学、社会言語学、言語工学、言語心理学、言語政策など各分野の研究者が 1000 人ぐらい集まった。研究テーマを全体的に見た印象では、従来の英語・スペイン語・フランス語に加えて、日本語・中国語などアジアの言語も注目されつつあるようである。アメリカ式のユーモアが会場にあふれている。ジョークを言いながら発表をする研究者が意外と多かった。アメリカ人にとっての学会は、まじめの場よりも、聞き手と一緒に楽しむ場であってほしいのだろうか。昼間に発表があつて、夜にレセプションが行われた。そのうちの一晩は院生のための就職・出版ガイダンスであつて、そこで院生や先輩と話ができてとてもよかった。アメリカの博士の学生は口頭発表は在学中でも積極的に行うが、学会誌への投稿は博士論文を提出したあとするのが一般的のようである。

4 月、ワシントン大学アジア言語文学研究科主催のコロキウムで、「A Contrastive Study on Request-Action Expressions between Japanese and English (依頼表現の日英対照研究)」という題で研究発表をした。この研究は、日本語の小説における依頼表現の用例がどういうふうに英語で訳されているかを調べ、日本語と英語の依頼表現は形式上どのような相違があるのかを明らかにしようとしたものである。研究科内外の院生が参加しているが、みなさんからコメントやアドバイスがたくさん寄せられて、大変勉強になった。

アジア言語文学研究科には日本語のほか、仏教学、中国語、韓国語、南アジア言語、東南アジア言語とさまざまな学科がある。日本に関連する研究はほかに、たとえば、Dept. of Near Eastern Language & Civilization, Jackson School of International Studies, Dept. of American Ethnic Studies, Technical Japanese Program な

どももある。Mailing list などによって、情報交換が緊密に行われているように思われる。この機会に、研究科内外の院生と交流できたことが本当によかったと思う。

3. 教育・研究環境

教育・研究環境に関していえば、アメリカは世界のトップとも言われている。実際そこの環境に置かれてみれば、その豊かさと便利さを実感し、本当にアメリカで勉強していいなあと思った。

UW は州立大学であるが、マイクロソフトをはじめとする大企業による資金支援が相当大きい。一例を挙げると、UW の学生・教職員なら、無料で最新のオフィスソフトをダウンロードすることができる。しかも、Windows 版とマック版両方、英語版、スペイン語、フランス語版がある。

大学院の学生はたいてい TA 職に就くなり、教授のプロジェクトにかかわるなり、授業料が免除される上、奨学金が与えられている。経済的な心配がなく、勉強・研究に集中できるところが非常に羨ましく思う。ちなみに、UW の授業料は州外学生（留学生を含む）は州内学生の倍以上になる。州内学生向けの学部授業料は年間 \$ 12,383（2012-2013 年度秋・冬・春学期）である。Major 以外に Minor を専攻したり、夏学期を履修したりすると、履修単位が多くなる分、授業料も上がる。

TA は Quiz Section を教えることが主な仕事で、教授の仕事負担を減らすことが本来の目的であるが、院生が教える経験を積むことができるので教育トレーニングとも考えられている。たとえば、日本語クラスの TA は、日本語を母語にする院生がほとんどだが、非日本語話者でも日本語のレベルが十分高ければなれるのである。TA になる人は、たとえば、アジア言語関係なら「アジア言語教授法」といった授業を履修することが薦められるが、会議などで講師や先輩に相談したりする以外、具体的な指導は受けていないように思われる。この意味では大変なのかもしれない。

大学の図書館は設備もサービスも充実していて、非常に利用しやすい。24 時間オープンな図書館もある。各館内に自習スペース・共同学習スペースが設けられており、PC と Mac 両方のパソコンがたくさん置いてあって自由に使える。コピー機よりもスキャナーが多く設置されているが、それが非常にエコで便利なので、日本の大学にも普及してほしいと思った。

ID でログインすれば、学外からでも学内と同じように、データベースにアクセスでき、膨大な数の論文や学術書がオンラインで見られる。オンライン DB と大学内の蔵書だけでも極めて多いが、Interlibrary Loan サービスを利用すれば、全国しいては全世界の資料を手に入れることができるのである。論文を取り寄せした場合、紙のコピーで届いてくるのではなく、個人のアカウントページに PDF ファイルでアップロードされ、自分でダウンロードするのである。本の場合は指定のカウンターで受け取れる。取り寄せのサービス料も送料も無料、とはちょっと信じられないが、本当にありがたい。

図書館の司書は 24 時間オンラインで質問を受け付けている。論文の探し方などよくある質問は動画「How Do I...?」シリーズで配信されている。どこどこをクリックするような説明は動画なら直感的で、文章よりずっと分かりやすいので、これを日本の大学にも作ってほしいと思った。

図書館の Writing Center というところでは、課題、レポート・論文に関する個別相談が予約制で受けられる。各学生寮にも Tutor が常駐していて、数学や化学、ライティングなどの指導を受けられるようである。

4. おわりに

この 8 ヶ月間、アメリカで充実した研究生活を送ってきた。こんな大切な経験をさせていただいたのは、ITP プログラムの支援のおかげである。これまで助けてくれた先生方、メンターの方、語学指導の方などに深く感謝を申し上げたい。

参考文献

- Ohta, A.S. (2001). *Second Language Acquisition Processes in the Classroom: Learning Japanese*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Vygotsky, L.S. (1978). *Mind in Society: the Development of Higher Psychological Processes*. Edited by M. Cole, V. John-Steiner, S. Scribner & E. Souberman Harvard University Press. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
- Swain, M. (1985). Communicative competence: Some roles of comprehensible input and comprehensible output in its development. In S. Gass & C. Madden (Eds.), *Input in second language acquisition* (pp. 235-253). Rowley, MA: Newbury House.
- 白井恭弘 (2008) 『外国語学習の科学 —— 第二言語習得論とは何か』 岩波新書
- 中井精一著・町田健編 (2005) 『シリーズ日本語のしくみを探る 7・社会言語学のしくみ』 研究社
- 国際交流基金 HP 「日本語教育国・地域別情報 2011 年度米国」
<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/country/2011/usa.html>
- JET プログラム HP 「JET プログラム参加者数」
<http://www.jetprogramme.org/j/introduction/statistics.html>

ポスト・マハティール期のマレーシアにおける情報化と社会運動

伊賀 司（国際協力研究科研究員）

派遣先：ロンドン大学（イギリス）

はじめに

本報告では、マレーシアにおけるポスト・マハティール期の社会運動と情報化との関係を考察の対象とする。ポスト・マハティール期のマレーシアでは、社会運動が活性化し、街頭での大規模なデモを行う運動も散見されるようになってきている。こうした近年の社会運動の活性化は、1981年から22年間の長期政権を誇ったマハティール政権期における社会運動の在り方とは以下の3点で大きく異なっている。

第一に、ポスト・マハティール期の社会運動は、参加者の点で特定のエスニック集団に限定されないものが多いとなっている。

第二に、社会運動の動員、コミュニケーション、抗議の戦術など運動の様々な側面において、ニュー・メディアの影響が見られる。

第三に、一部の社会運動の中には、マレーシア国外の在外マレーシア人が国内の運動と連動して活動を行うような運動も見られるようになってきている。

こうしたポスト・マハティール期の社会運動の変化について、紙幅と現在の筆者の能力の関係上、全てを検討することはできない。しかしながら、本報告では、上記の変化の第二点目で指摘するニュー・メディアの影響、換言するならば、情報化の影響を中心にポスト・マハティール期の社会運動について以下で検討する。

本稿の構成は以下のとおりである。まず、2011年の「アラブの春」を受けて権威主義体制下にあったアラブ諸国の社会運動とニュー・メディアの関係について考察したリンチの研究を紹介し、マレーシアの事例を理解するための理論的枠組みを得ることとする。次に、ポスト・マハティール期のマレーシアの社会運動について概観する。最後に、ポスト・マハティール期の社会運動の中でも、3度にわたって大規模な街頭デモを引き起こした選挙制度改革運動の「ブルシ運動」や、集会の権利を制限する平和的集会法案への反対運動を事例として取り上げて、近年のマレーシアの社会運動と情報化との関係について考察する。

なお、本稿で使用する「情報化」については、ニュー・メディアの普及による個人間のコミュニケーションの量的増大と新たなコミュニケーション様式の登場・伝播という質的变化の側面を示す概念として定義する。この定義を踏まえ、以下の論考では、「情報化」について言及する際には、ニュー・メディアの影響に特に注目して議論を進める。

Ⅰ 社会運動とニュー・メディアをめぐる理論的枠組み

近年、社会運動における情報化の影響は非常に注目されている。2011年の「アラブの春」でのチュニジアやエジプトの権威主義的政権の崩壊や、ニューヨークから始まって世界の各都市に広まった「オキュパイ・ウォールストリート」で、ツイッターやフェイスブックなどの「ソーシャル・メディア」が大きな役割を果たしたことが指摘された。こうした現実の動きを反映して、近年、社会運動と（ソーシャル・メディアを含む）ニュー・メディアとの関係を明らかにしようとする新たな研究が登場している。

そうした研究のうち、「アラブの春」を受け、アラブ諸国の権威主義的国家との関係の中でニュー・メディアの影響を捉えようとしたリンチの論考については注目すべき点がある [Lynch, 2011]。リンチは、社会運動の分析において近年頻繁に適用される理論的枠組みである「たたかひの政治 (contentious politics)」を踏まえつつ、ニュー・メディアによるアラブの権威主義的国家への挑戦を論じる際に、4つのポイントを指摘している。

第一に、ニュー・メディアは、運動側による集合行為 (collective action) を促進させる。リンチによれば、ニュー

メディアは、(a) (コミュニケーションのための) 取引費用の低下、(b) 情報カスケード¹の発生による反体制的情報の拡散、(c) (体制側による) 抑圧コストの増加、(d) (情報の拡散がもたらす) 運動の規模の拡大と伝播、(e) リーダーのいないネットワーク型の運動組織構造、という5つの点で運動に変化をもたらす。

第二に、ニューメディアは運動側に利益をもたらすだけでなく、権威主義的国家にとっての統制と抑圧の手段にもなることに留意しなければならない。一部の権威主義的諸国が実際に行っていることでこれまで注目されてきたオンライン上での情報アクセスの制限のみならず、ツイッターやフェイスブックなどのソーシャル・メディアは体制側の反対者の特定や活動の監視などに使われることもある [Morozov, 2011]。

第三に、ニュー・メディアは、運動が国際的な注目を集めるのに大きな役割を果たし、しばしば国外で運動が同盟者を獲得するのに貢献する。

第四に、ニュー・メディアは新たな公共圏の創出に貢献する。特に、オンライン上の言論空間が登場することの長期的な効果として、(オフラインを含めた) 市民社会の活性化をもたらすことが重要である。このニュー・メディアが公共圏を創出して市民社会を活性化させるとの議論は、アメリカの対外政策との関係で、ソーシャル・メディアの政治的影響力について論じたシャーキーの議論と重なる。

シャーキーが指摘するように、権威主義的体制下にある諸国がインターネットを導入する際には「保守派(独裁者)のジレンマ」が存在する。権威主義的国家がオンライン・メディアの言論を抑え込もうとすれば、インターネットの検閲かプロパガンダの方法を採ることになる。しかし、これらの方法は、保守派にとってオンライン上の言論を統制するうえでの根本的な解決とはならず、体制に批判的な言論は依然として残る。オンライン上の言論を完全に統制しようとするれば、国内のインターネットのアクセスを切断し、携帯電話を禁止することになるが、これらは経済発展を大きく阻害することとなる。こうした状況が「保守派(独裁者)のジレンマ」と呼ばれる。

シャーキーはインターネットの自由をめぐるアメリカの対外政策の文脈で、権威主義的諸国の民主化を支援するには、市民社会の拡大に果たすインターネットの長期的な役割を評価すべきだとしている。この点については、リンチも同様に指摘する点である。

以上にみるように、ニュー・メディアと社会運動との関係を考える際の論点は、①社会運動に対する動員の側面での集合行為の促進、②体制側のニュー・メディアへの対応、③国際的な影響、④新たな公共圏の創出による(オフラインを含む)市民社会の活性化、といった点を考えていく必要がある。以下では、まず、IIでマレーシアのニュー・メディアの歴史的発展を簡単に見た後、2009年以降のナジブ政権期のニュー・メディアへの政府の対応を検討することで②を論じる。その後、IIIでは、ブルシ運動の事例を中心にマレーシアで近年活性化している社会運動を検討することで、①と③について論じ、最後のまとめで④について論じていくことにしよう。

II ポスト・マハティール期のマレーシアのメディアと社会運動

1. 主流メディアとオンライン・メディアとの間のギャップの発生

ポスト・マハティール期のマレーシアのメディアと社会運動を以下で見ていくが、その前提として、マレーシアの主流メディア統制の実態とマハティール政権下のインターネット政策について簡単に指摘しておきたい。

マハティール政権下では、マハティール首相の肝いりで情報通信産業を経済発展の柱とするための政策が採られた。クアラルンプールを取り囲む広大なクランバレー地域で情報通信産業や政府のIT化を推進することを目的に1996年に設置されたマルチメディア・スーパー・コリドー(Multimedia Super Corridor: MSC)は、当時のマハティール政権が最も重視した事業の一つである。本稿に関連して言えば、情報通信産業の振興と外国からの投資拡大を目指してマハティール政権が宣言したMSCの域内でのインターネットの非検閲の方針には注目する必要がある。

Iで示したように、インターネットを導入する際に権威主義的諸国が直面するのが「保守派(独裁者)のジレンマ」である。マレーシアもこのジレンマの例外ではない。実際に、マレーシアではインターネットの普及によって

1 情報カスケードとは金融などの場面で投資家の行動を説明するときにしばしば使用されるが、情報がゲームや取引の参加者に行き渡らない不完全情報下で最初に行われた行動と同じ行動が次々と行われて、それが増幅していく状況を指す。

政府・与党のコントロールできない情報が氾濫することとなった。ただ、マレーシアの場合に興味深いのは、当時のマハティール首相がいち早くインターネットの非検閲方針を決定し、その方針がとりあえずこれまでは守られてきている点である。このマハティールの決定は後の時代にまで重大な政治的影響を与えた。

インターネットの非検閲方針の重要性は、マレーシアにおける主流メディアの統制の実態と併せて見る必要がある。

マレーシアの主流メディアは免許制度と所有・経営の双方の側面から政府・与党によって統制されている。免許制度ではテレビやラジオなどの放送メディアだけでなく、新聞や雑誌などの印刷メディアにも免許の申請が求められる。印刷メディアの免許制度については、2012年に法改正が行われて若干の変更が加えられたものの、基本的に免許の発行や停止について内務省の強力な指導下にある。

所有・経営の側面では、新聞社は与党に直接所有されているか、与党と密接な関係にある企業家によって所有・経営されており、基本的に紙面は政府・与党寄りの記事で多くが占められている。テレビについては、国营放送局の2局を除き、全国規模の地上波民放チャンネルは4局あるが、この4局は全て持株会社のメディア・プリマ社の傘下にある。メディア・プリマ社の経営陣には政府・与党の意向に沿った人物が据えられている。

以上のような主流メディアの状況を考慮に入れば、90年代のインターネットの非検閲方針の重要性が理解されよう。マハティール政権下のインターネットの非検閲方針はその後も継続されたことで、マレーシアには統制下にある主流メディアと比較的自由を享受することのできるオンライン・メディアとの間に自由のギャップが生まれたのである。

2. アブドゥラ政権と2008年総選挙

マハティール政権末期からこうしたオンライン・メディアと主流メディアのギャップはオンライン・ニュースサイトのマレーシアキニの登場などで顕在化していたが、アブドゥラ政権になり、政治・社会的な発言を行うブログが登場するにあたり、さらに拡大した。特に、野党政治家やアブドゥラ政権に批判的な立場の活動家やジャーナリストがブログを活発に利用したことで、新たな情報源としてブログの重要性が高まっていった。

一方、政府・与党の側は、これまで主流メディアに依存し、常にその支援を得るのが当然な環境にあったために、ブログの影響力について十分な認識が無いままであった。その結果が2008年3月に行われた第12回総選挙での与党の大幅な議席後退である。アブドゥラ首相自身が総選挙後、次のような反省の弁を述べている。

我々は確かに、インターネットの戦争、サイバー戦争に敗れた。我々は新聞、印刷メディア、テレビが重要だと考えていた。だが若者は、SMSやブログを見ていたのだ [The Star, 26 March 2008]。

このアブドゥラ首相の言葉に示されるように与党連合の国民戦線は2008年総選挙での大幅な議席後退を受け、オンライン・メディアの影響力を強く認識することとなった。

3. ナジブ政権のニュー・メディアへの対応

政府・与党側がニュー・メディアへの対応を本格化し始めるのは、2008年総選挙での与党の大幅な勢力後退を受けてから以降のことである。総選挙の責任を取る形で退任したアブドゥラ代わって2009年に首相の座に就いたナジブ首相はニュー・メディアに対して新たな対応を取った。

ナジブ首相は国民とのコミュニケーションにブログ、ツイッター、フェイスブックなどのソーシャル・メディアを初めて本格的に活用することを始めた現役首相である。ナジブ首相のオンライン・サイトの「1マレーシア (1Malaysia)」ではブログだけでなく、写真やビデオなど多様なプラットフォームを通じて情報提供が行われている。また、このサイトを通じて一般のブロガーとの会食やイベントなども企画されている。さらには、このサイトに限らず、ツイッターやフェイスブックもナジブ首相専用のものが存在し、ほぼ毎日更新されて積極的に活用されている。ナジブ首相の双方向のコミュニケーションを重視しようとする姿勢は、首相就任演説や与党・統一マレー人国民組織 (United Malays National Organization: UMNO) の党大会での演説の中でも公に宣言されている (伊

賀、2012 年)。こうしたオンライン・メディアを通じて国民に対して直接的コミュニケーションを取ろうとするナジブ首相の政治スタイルは、従来の政権と比較しても大きく際立っている。

その一方で、ナジブ政権のオンライン・メディアに対する対応では、前政権と比較して統制が強まっているという見方があったり、あるいは、そこまでいかなくとも少なくとも政権側がオンライン・メディアへの統制を強めようとするサインを見ることができる（伊賀、2012 年）。

例えば、ナジブ政権は発足時に省庁の再編を行っているが、注目すべき省庁改編の一つが情報通信分野を管轄するマレーシア・コミュニケーション・マルチメディア委員会（Malaysian Communication and Multimedia Committee: MCMC）をめぐる再編である。MCMC はマハティール政権とアブドゥラ政権の下では、旧エネルギー・コミュニケーション省（2004 年 3 月からは、エネルギー・水利・コミュニケーション省）といった情報通信産業の振興やインフラ整備を主要な目的とする省の外局であった。しかし、ナジブ政権から MCMC は、これまで政府広報や国営放送の運営などを主な任務とし、情報統制に中心的に関与してきた情報省の外局に変更された。この再編からは、ナジブ政権ではオンライン・メディアの産業としての育成よりも、統制の観点の方に力点が置かれていることを読み取ることができる。

実際、マハティール時代のインターネットの非検閲の方針を実質的に無効にしてしまうような試みもある。ナジブ政権下では政治・社会的な側面を論じるウェブサイトへの免許制度の導入が内務大臣や情報大臣などの間から提案されたこともあった。また、内務省や情報省の内部では子供や社会を守ると言う名目で中国が導入しているような特定の情報をブロックするフィルタリングのシステムを取り入れることが研究されていると報じられている [The Malaysian Insider, 8 August 2009]。

以上に見られるように、政府・与党の側のオンライン・メディアへのキャッチアップの試みの一方で、統制につながるような動きも見られる点で、今後のマレーシアの情報化への対応を注視する必要がある。

III ブルシ運動にみる情報化と社会運動の関係

次にニュー・メディアと社会運動との関係を過去に 3 度の大規模なデモ行進を実施した、選挙改革運動のブルシ運動の事例を中心としながら検討していくこととする。

1. ブルシ運動とは何か

まず、ブルシ運動とは何かについて簡単に紹介しよう。正式名称を「クリーンで公正な選挙を求める同盟（Gabungan Pilihanraya Bersih dan Adil）」というブルシ運動は、選挙制度改革を求める社会運動である。ブルシ運動の開始の発端は 2006 年 11 月 23 日に NGO の 25 団体と 5 野党が議会内で結成を発表したことにある。この時のブルシ運動が求めたのは、選挙人名簿の精査、投票時の二重投票を防ぐために投票済みの人の指につけるための消えないインクの導入、郵便投票の改革などが挙げられていた。これらの改革要求を選挙管理委員会に求めて 2007 年 11 月 10 日に 3 万人から 4 万人規模のデモ行進を首都のクアラルンプールで起こしている。

この 1 度目のデモの後、ブルシ運動は一時的に休眠状態になるが、2010 年 11 月に再び活動を再開することになる。この時のブルシ運動は「ブルシ 2.0」と呼ばれ、翌年の 2011 年 7 月 9 日にクアラルンプールで 2 万人規模のデモを起こした。この 2010 年に活動再開したブルシ 2.0 と 2006 年のブルシとの違いは、ブルシの指導部に野党が入らず、NGO が主導することとなった点である。また、ブルシ 2.0 の要求も 8 大要求に拡大し、2006 年のブルシの 3 つの要求に加え、21 日間の選挙運動期間を取ることで、公平なメディアへのアクセス、（選挙管理委員会などの）公的機関の強化、汚職の防止、汚い政治をやめることの 5 つの新たな要求を行うようになった。さらに、2012 年 4 月 28 日には「ブルシ 3.0」と呼ばれる 3 度目の街頭デモを行い、8 万人から 10 万人とも言われる参加者を動員した。

マレーシアにおけるブルシ運動の位置づけについて考えてみると、(a) 参加者について特定のエスニック集団に限定されず、(b) 動員、コミュニケーション、抗議の戦術など運動の様々な側面において、ニュー・メディアの影響が見られる、という 2 点を指摘することができる。このうち、情報化との関係で (b) について注目することとし

よう。

2. ニュー・メディアとマレーシアの社会運動

マレーシアでは既にニュー・メディアの浸透度は顕著なものになりつつある。国際電気通信連合のデータでは、マレーシアでの全国民に占めるネット・ユーザーの割合は2011年段階で61%にのぼる。周辺国と比較して比較的高い浸透度の下で、ソーシャル・メディアの利用が近年急速に高まり、オンライン上での個人のネットワークが大きく広がっている。一部のデータでは、マレーシアは2010年段階でソーシャル・メディア上の平均の友人数が世界一を記録し、ソーシャル・メディアのユーザーの77%はフェイスブックを使用しているという[ジャスティン・カルデロン、2012]。

ブルシ運動について言えば、2007年の最初のブルシのデモが起こった際、動員のために重要な役割を果たしたのがブログであった[伊賀司、2008]。しかしながら、2011年のブルシ2.0や2012年のブルシ3.0のデモになると動員のためのメディアの最も重要なものがフェイスブックやツイッターなどに移行していった。

ブルシ運動を含むマレーシアの社会運動にとってニュー・メディアが動員のための取引費用の低下や情報カスケードを引き起こすことで重要な役割を果たしていることは言うまでもない。こうしたニュー・メディアの利点を最大限生かす形で行われたデモとして、2011年末に行われた平和的集会法案への反対運動がある。集会の権利を事実上、制限するための法案の撤回を求めて行われたデモでは、参加者は自分たちをフラッシュ・モブと呼び、主にフェイスブックを通じて得た情報に従って参加した。

フラッシュ・モブとは、インターネットや携帯電話を通じて呼びかけられた見ず知らずの人々が公共の場に集まり、(一見すると)わけのわからないことをしでかしてからすぐにまた散り散りになることや、そうしたことを行う集団のことを指す[伊藤、2011]。マレーシアの平和的集会法に反対するフラッシュ・モブ達は、黄色のシャツを着てKLCC周辺に短い時間滞在した後、解散した。彼らは2011年末に3回、KLCCに集まったが、その集会の目的としてそれぞれ、「マレーシア人は警察の許可書なしにKLCCを自由に歩くことができる (Malaysians can walk freely in KLCC without police permit)」、「マレーシア人は警察の許可書なしにKLCCパークを黄色の服を着てピクニックすることができる (Malaysians can picnic in yellow at KLCC Park without police permit)」、「マレーシア人は警察の許可書なしにクリスマスツリーの前でショッピングとポーズをとることができる (Malaysians can go shopping & pose with Xmas Trees without police permit)」といった目的を掲げて集まった。

ここに見られるように、平和的集会法への反対運動はピクニックやショッピングと同じ扱いでデモを行うことが目指されている。過去3回行われたブルシ運動によるデモ行進の中でも、ブルシ2.0やブルシ3.0のデモでは、平和的集会法の反対運動に見られるようなフラッシュ・モブ的な傾向が常に存在していたと言える。そこでは、フェイスブックやツイッターを通じてデモの場所や時間を確認した人々が、ピクニックにでかけるのとも似た感覚で土曜の午後に集まり、数時間、座り込みや警官隊と対峙した後でばらばらに帰っていく光景が至る所で見られた。以上のような運動による動員の方法はこれまでのマレーシアの社会運動ではあまり見られなかった方法であり、情報化の進展が前提となって行われていると言えるであろう。

3. グローバル・ブルシ

さらに、近年の社会運動の中でもブルシ運動が特に注目すべきなのは、そのデモが首都クアラルンプールに留まらず、マレーシア各地の都市に広がり、さらに国外各地の都市にも広がっていった点である。

2011年のブルシ2.0では、正確に数えられた者だけでも海外の都市では38か所でデモが組織され、4003人の参加者がいたとされる[Tan, 2011: 153]。ブルシ3.0では、マレーシア国内でクアラルンプール以外の10都市、国外では35カ国の85都市でデモが行われた[Global Bersih homepage]。

この海外の都市でのデモの参加者のほとんどは仕事や学業のために海外に滞在している在外マレーシア人であるが、首都クアラルンプール以外でこれほど広範かつ大規模なデモが行われるような事態はこれまでマレーシアの歴史の中では見られなかった。この各地に散らばる在外マレーシア人を結びつけたのは、各都市ごとに作られたフェ

イスブックのページであった。そして現在では、世界各地のブルシ運動の活動に沿ってグローバル・ブルシのフェイスブック・ページや専用のホームページも存在するようになった。

東京ブルシと大阪ブルシの代表者と筆者とのインタビューで、彼らは現在の政府・与党の政策の一部に批判的な見解を持つてはいるものの、普段は政治活動にあまりかかわりのない人々であり、特に党派的な意見を持っているわけではないことがうかがえた。代表者たち自身の見方でも他の参加者についても、ことさら党派的な参加者は見られなかったという。なぜ、彼らが日本でブルシ運動によるデモを行ったかという点については、ブルシ運動が掲げる 8 大要求に賛同した点は勿論だが、彼らの話を聞いてみると、フェイスブックやツイッターを見て、同国人が集まる楽しみをそこに見出した点も大きかったと言えそうである [インタビュー I、インタビュー II]。

こうした在外マレーシア人による海外のブルシの運動は、マレーシア国内のブルシ運動以上にリーダーの存在が希薄でネットワーク型の運動組織をしているといえるであろう。ただ、その一方で、ブルシ 3.0 のデモの後から海外の在外マレーシア人によるもう一つのブルシ運動が始まっている。それは、在外投票の権利の拡大を求める運動である。

マレーシア憲法 119 条は 21 歳以上のマレーシア人に投票権を認めており、選挙区で選挙人名簿に登録されていれば、不在者投票も可能なはずなのだが、実態は海外在住者の投票には大きな制限がある。海外在住者の投票を制限しているのは、「選挙（選挙人登録）規則 2002」であり、この規則のために海外で投票権を行使できるのは、軍人、公務員、フルタイムの学生か、これらの配偶者だけになっている。また、在外のマレーシア大使館によっては、政府奨学金を得て留学している学生だけが実際に投票可能であり、私費で留学する学生は投票ができない場合もあるとされる [Yoga, 2011]。こうした在外投票をめぐる制限の撤去のため、現在ではオンライン上で寄付金を募り、裁判を起こそうとする動きが進んでいる。

終わりにかえて—マレーシアにおける新しい公共圏の成立

既に見たように、マレーシアにおけるニュー・メディアの発展の背景には 1990 年代半ばの政府の決定があり、アブドゥラ政権の頃からのブログのブームを経て、現在はフェイスブックやツイッターなどのソーシャル・メディアが人々の間で活用される時代に入っている。こうしたニュー・メディアはテレビや新聞などの主流メディア以外の情報源として定着するとともに、そこで様々なコメントが書き込まれ、新たな議論が形成されていく「公共圏」としての役割を果たしていることも見逃せない。

そして、このマレーシアの新しい公共圏を考える際には、それがオンライン上だけに留まっているのではなく、街頭でのデモや抗議活動と陸続きになった形で形成されていることに留意する必要がある。平和的集会法への反対運動やブルシ運動に典型的に見られるように、新たな公共圏の中で具体的にどのような議論やアジェンダが形成され、それが現実の世界でのデモや抗議活動に繋がっていくのか、この点についての検討は稿を改めて行うこととしたい。

参考文献

日本語文献

- 伊賀司「新世代とオルタナティブ・メディア—総選挙の裏側で起こっていた地殻変動」山本博之編『「民族の政治」は終わったのか？—2008 年マレーシア総選挙の現地報告と分析』日本マレーシア研究会、2008 年、89-104 頁。
- 「2008 年総選挙後のマレーシアにおけるメディアと政治—ナジブ政権のメディアをめぐる言説と統制」神戸大学国際協力研究科『国際協力論集』第 20 巻 1 号、2012 年、93-108 頁。
- 伊藤昌亮『フラッシュモブズ—儀礼と運動の交わる場所』NTT 出版、2011 年。
- シドニー・タロー（大畑裕嗣監訳）『社会運動の力』彩流社、2006 年。
- ジャスティン・カルデロン「蔓延するフェイスブック中毒障害」『ニューズウィーク日本版』2012 年 2 月 22 日号掲載。

外国語文献

- Shirky, Clay. 2011. "The Political Power of Social Media-Technology, Sphere and Political Change." *Foreign Affairs* January/February.
- Lynch, March. 2011. "After Egypt: The Limits and Promise of Online Challenges to the Authoritarian Arab State." *Reflections* 9(2): 301-310.
- Morozov, Evgeny. 2011. *Net Delusion: The Dark Side of Internet Freedom*. New York: Public Affairs.
- Tan, Nathaniel. 2011. 9 July 2011: *What Really Happened*. Kuala Lumpur: Kini Books.
- Yoga, S.S. 2011. "Overseas Malaysians want their vote counted." *The Star*. April 25.

ウェブ・ページ

- Global Bersih Homepage [<http://www.globalbersih.org/>]
- International Telecommunication Union (ITU) [<http://www.itu.int/en/pages/default.aspx>]
- My Overseas Vote [<http://myoverseasvote.org/>]
- The Malaysian Insider [<http://www.themalaysianinsider.com/>]
- The Star [<http://thestar.com.my/>]

インタビュー

- インタビュー I : Satya Arjunan (理化学研究所研究員、大阪ブルシ 2.0 と大阪ブルシ 3.0 を組織した中心人物) 2012 年 11 月 12 日、大阪にて。
- インタビュー II : Lee Chyi (Penang Institute 研究員、東京ブルシ 3.0 を組織した中心人物) 2012 年 11 月 16 日、ペナンにて。

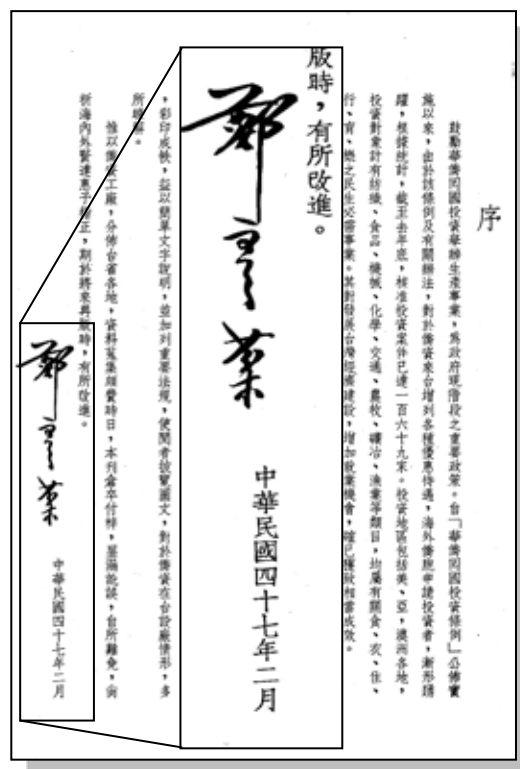
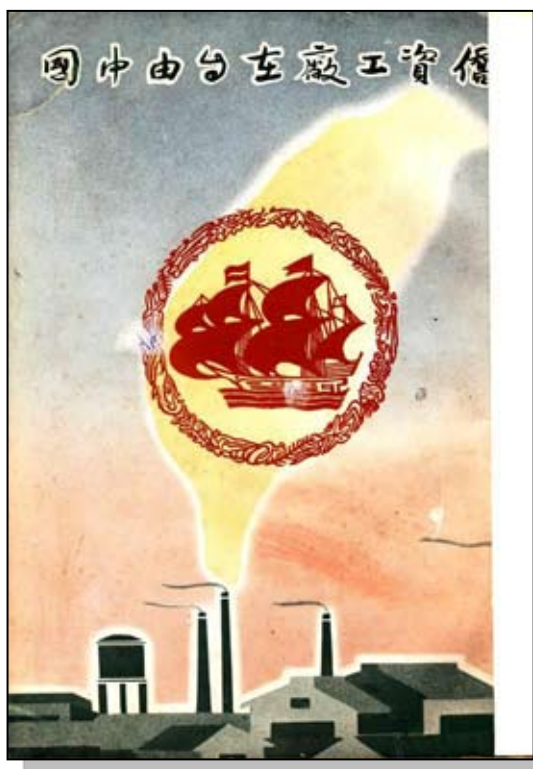
A Brochure “僑資工廠在自由中国” and Taiwan economy in the 1950s

四方 俊祐（人文学研究科研究員）

派遣先：ワシントン大学（アメリカ）

1. Introduction

The East Asian Library of the University of Washington has large quantities of documents on my research. There is an interesting document which I had found in the East Asian library. This document was published by the Government of the Republic of China (hereafter referred as ROC or Taipei) with US assistance. The document to be introduced is a brochure titled “Overseas Chinese Industrial Investment in Free China.” Original one has the vivid color photos. The purpose of this essay is to explain why and how this brochure was published.



This document shows the overseas Chinese around the world invested the some 40 kinds of industries in Taiwan. At the beginning of this brochure, Yeh Yan-fen 葉彥芬, the chair of Overseas Chinese Affairs Commission(OCAC), Executive Yuan of the Republic of China, noted the purpose of this book in his foreword. The date of publication was printed in 1958 (the 47th year of the Minguo era). In the foreword, he stated that Taipei was implementing the second 4 year plan of economic construction. However, the Government was suffering financially. At the same time, the overseas Chinese capital assets had the difficulties investing in Southeast Asian countries. Therefore, he expected them to invest in Taiwanese industries instead and announced that some relevant statutes to implement the policy were listed at end of the book.

Each page of this brochure shows a few photos about the different kinds of Taiwanese Industries and has captions and comments, which explains that many factories and plants had been invested by overseas Chinese in the US, Japan, Hong Kong, Macao, Singapore, etc. Some comments imply that Taiwanese industries would possibly export their products worldwide in the future. Though it seemingly looks usually simple, given when it was published, Taiwan had great difficulties economically at that time. Despite of its difficulties, Why did the ROC make this brochure? To explain the background, there needs to be

explored briefly what the Taiwanese economy was in 1950s, and what kind of economic policies Taipei formulated.

2. Taiwanese economy in 1950s and the ROC economic policies

As a result of Chinese Civil War, the ROC had fled to Taiwan Island in 1949, which imposed abrupt increase in population and large military burden on the island economy. Taiwanese economy had great difficulties because of serious shortage of governmental finance and social capital. Without the US aids, Taiwan Government could not have arranged to maintain their financial balance. However, the US Government repeatedly alluded to the future suspension of fiscal help. Nonetheless, Chiang Kai-shek 蔣介石, the leader of ROC, had never accepted to curtail its armed forces and stopped employing the slogan, 'The Return to the Mainland.' Taipei undoubtedly needed to stabilize the economy and develop the industries due to sustain the government and its armed forces.

As a matter of fact, Taipei had enacted the legislation to promote the influx of not only overseas Chinese capitals but also foreign capitals. Taiwan economic officials ardently attempted to enact the two statutes; one is the Statute for investment by Foreign Nationals (July 1954), the other is the Statute for investment by Overseas Chinese (November 1955). They were young officials called "economic technocrats," for example, Yin Zhong-rong 尹仲容 and Li Guo-ding 李國鼎, who had acquired their expertise on economics in US, and members of the Economic Stabilization Board (ESB) of the Executive Yuan. They thought the utilization of private capitals called for urgent attention to stimulate the Taiwanese economy.

Yin served concurrently the director of Industry Committee, ESB and the Ministry of Economic. He wrestled with the reform of currency multiple exchange rates. He assumed that the intricate multiple systems of currency exchange caused price distortion in market and the obstacle to export in Taiwan.

However, conservative group (the capital-saving group) and the financial specialists like the Minister of Finance had been objecting to him on the ground that the complicated exchange rate was essential to controlling inflation and that switch to single rate system would have affected the profit from multiple rates and provoked the increasing expenditure. On the one hand, the government-owned companies got profit from utilization of lucrative exchange rate in importing raw materials. Their reduced return caused by the switch would have affected the revenue of ROC.

In December 1955, Yin had to leave his official job and Gang Biao 江杓, who was sympathetic to the conservative group, was substituted for his Ministry of Economy. Taipei pulled the plug on his reform on foreign exchange system. Two foregoing statutes remained no more than the provisional prescription on investment and short on specific. This indicated that his reform was under some pressure from conservative group, though there remained the reform to be demanded by many overseas Chinese.

Moreover, in August 1958, ESB was abolished on the ground that the board was redundant organization against the Ministries of Finance and Economic Affairs. This seems to have been the power struggles over the economic policies between economic Technocrats and the conservative officials. The planning operation on economic policy which the Industrial Committee of ESB had responsibility for was substantially taken over by the Council for the US Aid (CUSA).

When the above-mentioned brochure was published, the Second 4-year plan of economic construction had been implemented in Taiwan. It started in 1957 and aimed at development of heavy industries and agricultural output as well as expansion of light industries that relatively small funds needs founding a company. This plan reflected on the problem of the first plan that the agriculture sector could not have the coherent and compatible program with industry sector. It was implemented on the base of import-substitution policy. To adopt this policy means the preferential allocation of US aids to public (government-owned) enterprise, the curtailment of import excess. This economic policy implied the conservative group in the Government was more predominate one than the economic technocrats.

In October 1958, a month after the second Taiwan Strait Crisis, however, ROC made changes in the Executive Yuan. Chen Cheng 陳誠, the new Premier of Executive Yuan, assumed the Chair of CUSA. Chen appointed Yin to be the vice-Chair. He was the sympathizer of Yin's institutional reform plan. At the same time, he appointed Li to be secretary of CUSA. Accordingly, economic technocrats took major responsibilities for the formulation of the basic economic policies and operational guideline

of US aid in the CUSA. Thus, they intensified the export promotion policy instead of the import-substitution policy.

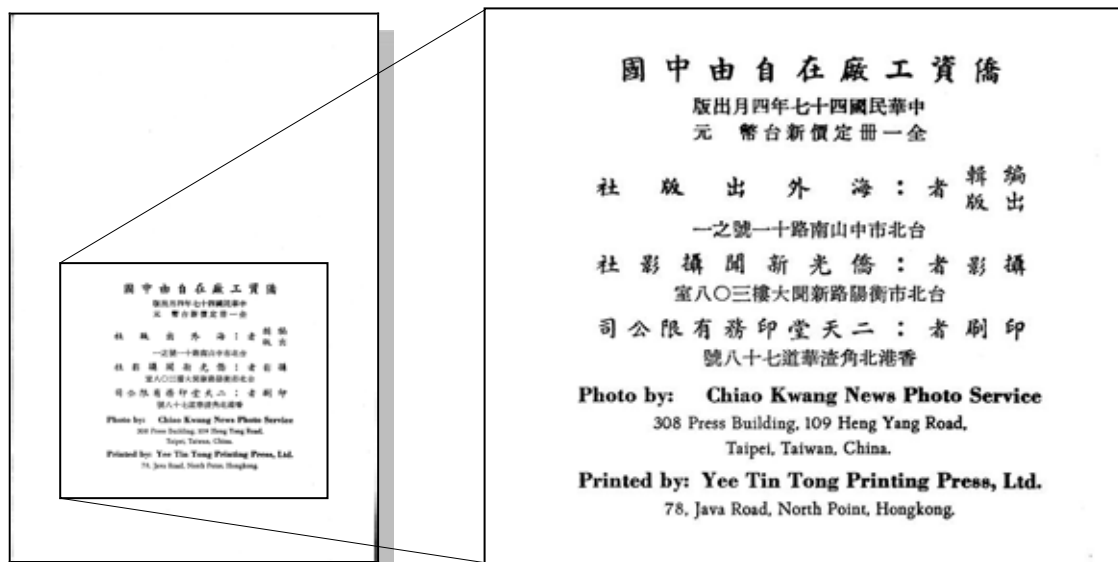
In the light of this political background, there was a critical shift in Taiwan political dynamics in the period when the abovementioned brochure was published. That is, that brochure appeared at precisely the almost same time Taipei turned around from the policy toward protecting and nurturing domestic industries to economic progress by fostering export industries. One of this turnaround pursued the enhancement of relationship between Taiwan and overseas Chinese communities.

As for the economic technocrat, they had another purpose aside from absorption of overseas Chinese capitals into Taiwan industries. During the period when Yin and Lee left their offices, they carried out the hearing conferences and investigated the situation in overseas Chinese communities in Southeast Asia. When hearing that Japanese companies had been tapping into market in Southeast Asia, they realized Taipei should build its relations with Southeast Asian countries through cooperation of overseas Chinese. Consequently, they consisted that Taipei should rebuild and reinforce its relations with overseas Chinese. Afterward some stipulations were rectified about the influx of investment, the reimbursement for import expenses and taxes, and revision of income tax act. In addition, overseas Chinese got a green light on the acquisition of factory space in Taiwan.

Given how the things developed, however, it is questionable whether they could build the effective relations with the SEA countries. As Yin mentioned in the early 1960s, the considered overseas Chinese capitals turned out to be that of Taiwanese merchants which imported and sold the commodities in the name of their acquainted Chinese outside Taiwan.

3. US policy toward Taiwan and overseas Chinese in the 1950s.

There is the other question this brochure has. That is, where was the brochure printed? The Copyright page shows that it was printed by Yee Tin Tong Printing Press Ltd., 二天堂印務有限公司 in Hong Kong. The editor was the Haiwai publisher 海外出版社, which belonged to the Department three of OCAC. In 1950s, this company usually undertook to print any book. Why was the abovementioned brochure printed in Hong Kong? This implies that an organization of the US Government was probably engaged in the brochure. This chapter considers the question by focusing on US information and publicity campaign and US policy change.



What is US information and publicity campaign? This means to ensure the US security from the cultural viewpoint by developing the pro-US opinion through the mass media. It started as a part of public relations campaign policies in the First World War. US Office of War Information operated some activities in the Second World War. These activities made great progress in 1953, when the Eisenhower administration established the US Information Agency (USIA) under the control of National Security Council (NSC). USIA managed the subordinate organization, the US Information Service (USIS) at some 76 embassies and consulates in the world. In Japan, for example, there are some "American Center," the public affairs offices near

the US embassy in Tokyo, US consulate general in Osaka, Nagoya and Fukuoka and Sapporo. These offices offer the events, exchange programs and activities to promote the US-Japan good relationship. In the 1950s, these offices provided the Peaceful Uses campaign for Atomic Energy throughout Japan.

The precise nature of US information and publicity campaign were revealed in the USIA course of action in December 1954. This guideline was distributed to the USIA in 12 Asian countries. For example, in Japan, their objective was to create the pro-US feelings and confidence in the Japanese Government and people. In Taiwan, their purpose is to propagate the Taiwanese development with US aid, and to give Taiwan the image of the safety shelter as 'Free Chinese' throughout Asia. In Hong Kong, they regarded Hong Kong as the place to offer the information resources to all of overseas Chinese communities in Asia, and as the bastion of radio station, the Voice of America, for the Chinese mainland.

Looking at the abovementioned brochure in the context of US information campaign, this brochure might have been published in Hong Kong to inform the successful overseas Chinese in Taiwan, and it could have been distributed to their communities in Southeast Asia. There is just the circumstantial evidence. But this possibility might be inferable from the careful consideration to the change of the US policy toward Taiwan.

US policy-makers of the Eisenhower administration initially expected Taipei to be the military presence. They only regarded Taiwanese military power as available in Asia. US officials had a common understanding that Taiwan was 'the latent strategic reserve' (NSC146/2, November 1953). After the first Taiwan Strait Crisis, the US Government concluded the Mutual Defense Treaty with ROC, and contained not only the Chinese communist aggression but also Taiwanese provocation in the Strait. Washington seemed to take precautions against Chiang Kai-shek's hard-line policy toward China during the Crisis. At the same time, they began to regard Taiwan as "the focal point of the free Chinese alternatives to Communism" (NSC5503, January 1955). The focal point means the refuge or shelter for overseas Chinese in the policy statement.

In other words, US officials needed to get support of overseas Chinese for ROC to prove the legitimacy of US support for Taiwan. For the US Government, the influx of overseas Chinese capitals into Taiwan was one of evidences that overseas Chinese supported ROC. Washington thought the evidences to be essential to encourage Taiwan to develop its economy.

When taking office in White House, Eisenhower insisted in the principle of balanced budget and criticized that the policy of the predecessor Truman, "Containment" policy, caused the increasing military expenditure. He stood for fiscal conservatives and repeatedly warned his policy makers not to take steps toward military spending increase, which meant falling into the "barrack" state like USSR. The "massive retaliation" strategy and "New Look" policy advocated by the Secretary of State, John F Dulles, designed to wage the Cold War within the limits of the Government budget, that is, to keep the nuclear weapon the US primary military power and to utilize the allied conventional military powers instead of US counterparts.

US Congress demanded the aid recipient countries to change their tariff protection policy and keep their currency and expenditure stable. At the same time, Congress insisted that the recipient countries should improve the investment environment and promote private companies to attract foreign business. Taking into consideration the cut budget demanding from the Congress, US Government established the Council on Foreign Economic Policy (CFEP) in 1954 to review the foreign assistance policy. US top officials also regarded as significant the reduction of economic military aid and the facilitation of trade to avoid the allied dependence on US economy power.

But in the late 1950s, US officials changed their mind and thought it important to expand its aid as well as trade with foreign countries. They watched out for Chinese Communist attitude in the Geneva conference and Bandung conference as well as Soviet "peace offensive" action, which facilitated its foreign assistance toward the Third World. The Communist action made Washington change its Cold War strategy. US officials especially began to realize the situation of developing countries. They became increasingly aware that the developing countries were looking at the rivalry between democratic world and communist from the viewpoint of economic success and prosperity. In their estimate, the developing countries had criteria to select the democratic system or communist one through the economic prosperity with US or Soviet assistance.

4. Conclusion

When the introduced brochure was clearly published by a ROC-linked corporation, Taipei had dynamic change in its

economic policy and power politics. This brochure aimed at encouraging the overseas Chinese to invest their capitals in Taiwanese industries. The linkage among the printing company and OCAC and USIS remains to be revealed thus far. As a result, it is not clear how this brochure was distributed to the overseas Chinese communities. Moreover, It is also obvious whether it was distribute by way of the USIS throughout Southeast Asian countries. Hypothetically, there might be some connection among them because US Government wanted Taipei to develop its economy and Taipei aimed at strengthening its relations with overseas Chinese. To elucidate this question will be an issue to be explained in the future.

平成 23 年度総括コメント

国立台湾大学派遣院生・メンターの成果報告

菱川 英一（人文学研究科教授）

（院生）中島 恵（人文学研究科博士後期課程）

中島恵さんは一貫して英国小説の研究に従事している。神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程（文化構造専攻）においては英国の小説家 J. K. ローリングの小説『ハリー・ポッター』シリーズの受容に焦点を当てて研究しているが、今回の派遣先の一つ、台湾（中華民国）における同作品の外国語文学としての受容を特に掘り下げる研究をおこなっている。

もともと、文化のひとつとしての文学の受容のあり方に関心を抱いていたところもあり、中島さんの目は台湾特有の柔軟な文化の捉え方に向かった。その文化観は同小説が生み出された英国とはまた異なり、台湾ならではの視点を提供することになった。

『ハリー・ポッター』シリーズは英米で単語をはじめとして内容に大きな違いが見られることは研究者の間で広く知られた事実であるが、その相違点を探るにあたり、台湾（繁体字）とシナ本土（簡体字）の表記の相違と重なる点があることに着目したのは興味深い視点である。さらに、台湾のソーシャル・メディアの「哈利波特仙境」コミュニティにおける、台湾ならではの同シリーズへのアプローチの研究は、日本のみならず、世界でも殆ど全く知られていない側面の研究として、今後発展させられる可能性を有する。

異文化理解の文脈で『ハリー・ポッター』シリーズの受容を捉える際に、多民族や多文化が混在する台湾というまたとない研究の場を与えられたことを生かし、今後の研究へとつなげてもらえれば派遣の意義がより深くなるであろう。

ソウル大学校派遣院生・メンターの成果報告

小川啓一（国際協力研究科教授）（趙担当）

木村 幹（国際協力研究科教授）（長澤担当）

（院生）趙 昊一（国際協力研究科博士後期課程）

（メンター）長澤 裕子（国際協力研究科研究員）

博士課程後期に在籍している Zhao Haoyi さんを ITP の助成金によって、韓国のソウル国立大学と米国のワシントン大学に留学させていただき、両大学でとても充実した研究生活を送ることができたことに指導教員として大変嬉しく思います。本学の ITP 関係の教員、事務の方々には大変お世話になりました。また、受け入れ大学の先生方には、素晴らしい研究環境をご提供いただき、とても充実した研究活動を遂行することができたと思います。

ソウル国立大学では、Zhao さんが教育社会学の分野では世界的に有名な Kim Ki-Seok 先生のもとで研究を行わせていただき、経済学の視点からではなく、社会学からの視点から教育問題について研究をする機会を得ました。Kim 先生には、研究室もご提供していただき、更に、先生の指導学生をチュータとしてつけていただきましたので、研究のみならず、日常の生活面でもご配慮をいただきました。また、韓国教育省や OECD 等の国際機関でのご経験がある Chung Bong-gun 先生のご講義を受講させていただいたのも、Zhao さんにとっては国際協力や国際開発を韓国の視点から詳しく研究できたので良かったと思います。ソウル国立大学から帰国して、ワシントン大学に行くまでの間に、ワークショップを本研究科でおこない、韓国留学の成果を十分に共有してくれました。

長沢氏の研究は、1965 年に締結された日韓基本条約の付属協定として作られた「文化財及び文化協力に関する

協定」等の、文化財の引渡しに関する日韓間の外交交渉に関わるものである。近日の対馬所在の社寺から盗まれた文化財の引渡しを巡る日韓間の紛争にも現われているように、日本国内に数多く存在する韓国由来の文化財を巡る問題は、今日においても重要であり、この研究はその点において大きな意義を有している。

このような研究を行うに当たっての長沢氏の視点は次のようなものである。即ち、日韓基本条約そのものの締結過程においても現われているように、当時の日韓両国の基本的な姿勢は、一連の条約により日韓間に存在する様々な問題を、これ以上悪化させないようにする事であり、その点は文化財引渡しを巡る協定の締結過程にも顕著に現われている、とするのである。具体的には、日韓両国は日本側から韓国側への文化財の引渡し、基本条約の原則である、一連の資金や文化財の日本側からの提供が、植民地支配等に関わる「請求権」に直接関係するものでない、という原則の延長線上にある事を確認し、飽くまで日韓関係を重視する、日本側からの「好意」によるものである、という形で解決を図ろうとした。また、引渡し後の文化財の扱いについても、それが「略奪文化財」という形で位置づけられる事を回避する為に、慎重な扱いを行う事を確認もしている。

このような研究は、文化財引渡し問題もまた、当時の日韓間の圧倒的な国力差と、それを背景にした交渉の中に位置づけられるものである事を示している。その意味で、極めて学問的価値の高いものであり、今後一層の充実が期待されるものである。

ワシントン大学派遣院生・メンターの成果報告

鈴木 義和（人文学研究科教授）（楊担当）

天津留 厚（人文学研究科教授）（四方担当）

（院生）楊 吟（人文学研究科博士後期課程）

（メンター）四方 俊祐（人文学研究科研究員）

楊吟君は、本プログラムにて、韓国成均館大学に約9ヶ月、アメリカワシントン大学に約8ヶ月留学する機会を得、それぞれの大学で言語学の学習・研究を進めると共に、韓国語、英語の能力を大いに向上させることができた。得に韓国語については、まったくの入門段階から中級レベルにまで到達するという著しい進展があった。

楊吟君の研究テーマは、行為展開表現の日本語・中国語・韓国語・英語の対照研究であり、2度の留学の成果を基に研究を発展させてきた。その研究成果は、2011年4月韓国日語日文学会春季大会での「第一人称からの恩恵表現に関する日韓中対照研究」、2012年4月ワシントン大学アジア言語文学研究科主催のコロキウムでの「A Contrastive Study on Request-Action Expressions between Japanese and English」、2012年8月神戸大学文学部国語国文学会での「命令・助言・許可与え・許可求めなどによる依頼表現—日本語・韓国語・中国語・英語の対照研究—」、2013年1月ITP総括国際シンポジウム「東アジアの共生社会実現に向けた新しい東アジア研究」での「A Contrastive Study on Speech Acts Based on Chinese, English and Korean Translations of Japanese Novels」などの研究発表や論文「申し出表現の形式—日本語・中国語・英語・韓国語の対照研究—」（『国文論叢』46号、2013年3月発行予定）に結実している。これらの成果をさらに発展させ、2013年7月には、博士学位論文を完成させる予定である。

楊吟君は、日本語、英語の能力が極めて高く、本プログラムによって韓国語の力も向上させることができた。これに母語である中国語を加えた4カ国語の対照研究というあまり類を見ない方法で行為展開表現の研究を進めつつあり、本プログラムの利点を大いに活かした成果を上げているといえる。

四方俊祐は、平成22年度、23年度と2年連続で欧米プログラム・短期派遣者のプログラムでワシントン大学で調査研究に従事する機会を得ることができました。四方はすでに学位論文において冷戦期アメリカ合衆国の台湾政策を、主に経済成長戦略との関連で論じました。

冷戦初期のアメリカ合衆国のアジア戦略の中で台湾の経済戦略を中心にすえた研究はこれまで手薄であり、その点で四方の研究は日本のアメリカ史学会でも一定の評価を得ています。しかしこれまでの四方の研究はアメリカ合

衆国の外交文書、安全保障会議文書の分析を中心としたものであり、受け手としての台湾側の政策はあくまでもアメリカ側の文書に反映されたものとして言及されたにすぎず、限界はおのずと明らかでした。

ワシントン州立大学の極東図書館にはアメリカ合衆国、台湾双方の史料が豊富に存在し、ITP の派遣研究者として四方が当地で調査研究に従事できたことは、アメリカ合衆国の政策と台湾の経済政策を総合的に論ずるうえで大きな意味を持ちました。四方は極東図書館の専門家の指導を受けながら、アメリカ合衆国外交調査委員会の資料を分析することから始め（平成 22 年度）、台湾側の『僑資工廠在自由中国』などの資料に取り組むまでに至りました。アメリカ合衆国の冷戦政策が軍事や外交だけでなく経済や文化の領域にも及んでいることは最近の研究が明らかにしているところですが、その点で四方の研究は先んじていると言えるでしょう。

ロンドン大学派遣院生・メンターの成果報告

片山 裕（国際協力研究科教授）

（メンター）伊賀 司（国際協力研究科研究員）

伊賀氏は平成 23 年度の ITP 派遣でロンドン大学の SOAS に滞在し 3 か月間、十分な成果をあげました。

アジアにおける情報化と政治との関係をテーマとする伊賀氏は、ITP 期間中にポスト・マハティール期のマレーシアにおける社会運動と情報化との関係について研究を進めました。

社会運動と情報化に関する研究は、2011 年の「アラブの春」や「オキュパイ・ウォールストリート」の例に見られるように近年注目が集まっていますが、実証的な研究は依然として不十分なままです。特にマレーシアでは、2008 年総選挙後で長期与党体制の動揺が見え始めてから後、活発な社会運動が観察されており、実態に基づいた研究が求められています。

伊賀氏は、「アラブの春」の社会運動を情報化の観点から分析したリンチの理論的枠組みに沿って、マレーシアの情報化と社会運動の近年の展開を分析しています。その際、フェイスブックやツイッターといったソーシャル・メディアが社会運動の動員に果たした役割が実証的に明らかにされるだけでなく、体制側のソーシャル・メディアへのキャッチアップについても言及されている点が重要です。

また、選挙制度改革運動のブルシ運動がソーシャル・メディアによって世界各地の在外マレーシア人に広がり、運動がグローバルな展開になった点についても、近年のグローバルな社会運動との比較の可能性を予感させ、今後の研究が楽しみです。

報告書で指摘されているように、今後は、情報化の影響によりマレーシアで生まれた新しい公共圏の存在が、社会運動のアジェンダや街頭での抗議運動の展開にどのように影響を与えているのか、実証的な研究を進めることが必要だと思います。

平成 24 年度

第 5 期アジアプログラム

第 4 期欧米プログラム

Aesthetic Proximity

Cosplay in Taiwan as an Appropriative Institution of *Fandom*

アルバロ・ダヴィド・エルナンデス・エルナンデス

(人文学研究科博士後期課程)

派遣先：国立台湾大学（台湾）

0. About this paper

In this report I show the first results of an ongoing research on *cosplay* in Taiwan, started on the beginning of October 2012, and scheduled to finish by the end of March 2013. The approach of this research follows a theoretical background based on fan culture studies and focuses in *cosplay* as an appropriative institution within fan communities. However the empirical approach makes necessary to split this theoretical community in many concrete fan groups. Their places of gathering like events, stores or fan clubs, as well as the observation of their activities, including those activities carried out on internet, are the principal source of empirical data. This paper is based on those observations and on a preliminary analysis of two questionnaire surveys¹, some interviews and bibliographical research.

This research attempts to describe the dynamics and characteristics of *cosplay* in relation with fan communities, and address to the questions raised by the interplay of consumption, appropriation and fan productivity or creativity in the cultural context of Taiwan. Hence I seek in this paper to focus on a wider phenomenon that exceeds the particular activities of *cosplayers*, but at the cost of losing sight of many important details.

As the first step in this general approach, I show in this report the guidelines of the research, as well as some basics characteristics that define *cosplay* culture as it is approached in this research. However a better understanding of the context of *cosplay* culture in Taiwan and a deeper qualitative research is still needed for a later analysis.

This paper is a reworking of a previous paper entitled “Bases for a Research on *Cosplay* Culture and Fan Communities in Taiwan”², and it conserves most of the core of the theoretical framework. Following that previous work, I will briefly describe in this paper the general context about *cosplay* and focus on the theoretical perspective for the analysis of *cosplay* as an appropriative institution of fan communities. I regarded *cosplay* as new institution within the fan communities, which reflect some changes occurred in the last decades that have affected the background of fan cultures. These changes can be summarized as changes in the structure of the cultural industries, changes in the cultural products, and therefore, changes in the patrons of consumption and the activities of fans.

As tools to address to these changes, I relied on Hills’s works on “performative consumption” (2002) and the analysis of “narcissism” in fan consumption from the work of Sandvoss (2005a;2005b,2007). These two perspectives can represent two opposite ways to understand the appropriative activities of fans through consumption, but here rather than being in contradiction, these perspectives are helpful tools to look into the multiple faces that *cosplay* culture have.

1. Introduction

Cosplay can roughly be described as an activity in which someone dresses up like a fictional character, and *cosplayer* is the person whose wear the costume. As I will explain later, there can be many “kinds of *cosplay*” that not fit in this description, for instance, (depending of the point of view) there could be “*cosplay*” of non fictional characters, and activities where people

1 Questionnaire research: 1) The 32th Comic World Taiwan, at National Taiwan University. 15/16 December 2012. 199 samples. A focus on Cosplay activities and motivations. 2) National Taiwan University Manga, survey among students and Japanese manga and anime fans. 25-28 December 2012. 44 samples. Focus on Consumption and Fan activities

2 Paper presented at the ITP Colloquium 東アジアにおける域外経験と文化接触—言語から探る日本と台湾及び中国大陸の文化往還, held on December 21, 2012 at the National Taiwan University.

dress up like fictional characters that cannot be considered *cosplay*. The research topic of this paper is focused in this kind of people who likes to dress up like fictional characters and it is delimited to those characters picked up from Japanese subculture like *anime*, *manga* and games, or other creations regarded as products of the influence of this Japanese subculture, like fan creations, that may cannot be Japanese. Because as the research shows, most of these performers are under their 20s, and because most of them assure that “to have love for the character” is essential in *cosplay*, *cosplay* can be considered as a “youth fan culture”, thus I follow the approach of fan studies for its study.

Japanese cultural products like *manga*, games, and *anime* are famous all over around the world and the so called “otaku” or fans and enthusiasts of these cultural goods have drawn the attention of some scholars, businessmen, politicians, critics, many kind of writers, other fans, and many curious. This attention has made of the “otaku culture” a relatively well-known phenomenon, but also a “disputed territory” where it has been difficult to achieve consensus, in particular about the boundaries of this “culture”. However, following some studies on fan cultures, it is possible to determinate some key elements as guidelines in the research of “otaku culture”. In my approach these are; the consumption of certain cultural goods also regarded as a set of texts, and the shape of institutions through practices of appropriation.

Cosplay, as one of the newest forms of this culture, has quickly become popular among new generations of fans, where changes in the cultural goods, practices of consumption and practices of appropriation are shaping new kinds of fan cultures. A growing focus on aesthetic elements rather than narrative elements in the cultural texts, the impact of internet and the popularity of the social networking services, along with the spread of digital cameras and other new technologies, can be easily identified as some of the changes that have prompted the spread of *cosplay*.

Fan cultures are tightly related with the textual characteristics of cultural goods as well with extra-textual characteristics like their “means of consumption”, and consequently, fan cultures reflect any change in these texts and their consumption context in their everyday practices. In addition, fan cultures are a cultural and economical power, which in turn promotes and supports the development of new cultural goods and new means of consumption. Therefore fan studies must be sensitive to change and should be able to integrate a comprehensive sight of the interaction between cultural industries, consumption, cultural texts and the appropriation of their meanings in the “practice of everyday life”.

Cosplay is also one example of the intentional rationality of fans creativity. Fans builds their own world through the interchange of borrowed symbols, where meanings pass from one hand to another, shaping places of interaction, institutions and communities. Yet, at the same time *cosplay* take sides whit the playful irrationality of the game, where interchange is overtaken by a vivid sense of the experience of being part of the masquerade; see and be seen. In *cosplay*, bodies succumb to the delightful pleasure of the gaze and fall in love with a mirage made from symbols of its own.

Hill’s “performative consumption” and Sandvoss’s work on narcissism in fan consumption is a way to address to this both sides, however since this perspective is subscribed to a regard on *cosplay* as an appropriative institution within fan communities, I will introduce a brief explanation of this theoretical framework and concepts in the first parts of this paper. A more contextualized introduction of *cosplay* in Taiwan will follow in the last part, including some of the data from a preliminary analysis.

2. An overall picture of *cosplay*

“*Cosplay*”, the abbreviation for “costume play”, is an English word coined in Japan. As Emoto (2009) explains, in the most of the cases this word refers to a playing where someone dress the same costume that a character, mainly drawn from *manga*, *anime* or video games. The people that practice this playing are called “cosplayers” (Kosupureiyā), or the Japanese abbreviation “Reiyā” (Emoto 2009, Hiroyasu 2008). In Taiwan, the abbreviation “Coser” is commonly used. “To *cos*” is also used in Taiwan as a verb for express “to perform a *cosplay*”.

While in the most of the cases *cosplay* can be considered as a “secondary creation”, like “dōjinshi” (amateur *manga*), where fictional characters are drawn from an “original” fictional work, namely *manga*, game or animation, in some cases, “*cosplay*” is also used to refer a playing of wearing uniforms of some highly stereotyped professions or roles, like maids, nurses, school

girls, or army uniforms. Moreover, specific fashion trends like “Gothic Lolita” and impersonations of music idols, celebrities, and rock stars, (for example, for “Band-Cos” (*Bando-kosu*) see Koizumi and Suzuki (in Narumi 2009)), alongside with *cross-dressing* (*Josō* and *dansō*) exemplified by the so called “crossplay”, among others, make *cosplay*, an area difficult to define.

As I pointed out in the introduction, I focus in this paper on the most common form of *cosplay*, that is, *cosplay* based on fictional characters from Japanese *manga*, *anime* and games culture. I analyze here this *cosplay* culture as a part of the *anime* fan culture, where *cosplay* practices are one more expression of fan appropriative activities. As Sharon Kinsella has stressed, there is a parallelism between amateur *manga* culture (*dōjinshi*), and *cosplay*, which she regards as “a form of live parody” (Kinsella 1998:301).

In Japan, the first *cosplay*, as a part of this *anime* fan culture, is believed to appear in the amateur *manga* festivals (*dōjinshi sokubaikai*) among amateur *manga* sellers. This happened around the 70s, when the anime visual culture had become popular and was shaping a new trend within this subculture, different than the literary based activities of the former science fiction fan groups (Yoshimoto 2009, Emoto 2009). However, *cosplay* popularity rises up mostly from the late 90s, alongside with the spread of personal computers, video games culture, internet and new trends in the *manga*, *anime* and games related cultural industries, where there is noteworthy increasing use of the characters charisma, in a business model based in the use of multiple media. This model has been referred by Ito (2006) as “media mix”, to describe a “character- based media” (Ito 2006:2).

The so called “Character business” is a usual strategy in contents industries to tackle the high risks of this kind of productions, and it can be compared with the “star system” used for example by Hollywood filmmaker industries. Nevertheless a recent emphasis on the characters charisma can be observed in general since the 90s, with the famous examples of “*Hello Kitty*” and “*Pokemon*”, and the emphasis on “*Moe Characters*” (*Kyara Moe*) that has followed the success of “*Neon Genesis Evangelion*” (Kanzawa 2006). In a general context of financial struggles within the *anime* industries, this trend has been reinforced in the “midnight *anime*”, produced mainly by a new model of production and many small industries that was established in the short period of *anime* financial success that goes from 2005 to 2006, called the “*anime* bubble” (Taniguchi 2010, Kanzawa 2006, Aoki 2006, Ishizaka 2005).

Thus, the launch in 1999 of “2 chanel”, a Japanese massive internet textboard (internet forum) in 2000, the birth in Akihabara of the first “*cosplay* cafe”, the launch in 2005 of “You Tube”, and in 2007 of “Niko Niko Dōga”, as well as the emergence of Akihabara and “Moe” as central icons in the “otaku culture” around 2005, are some of the symbols of a new fan culture, where *cosplay* plays a protagonist role.

Cosplay is mainly practiced by women, but if we focus widely in *cosplay* as an appropriative institution, it is easy to distinguish many other actors at play. We can enumerate some of them as follows: 1) The *cosplayer* (*Reiyā* or *Coser*) 2) The camera mans or *kameko*, 3) The helpers, 4) The surrounding institutions and business, and 5) The surrounding fan community and concrete fan groups.

The *kameko* is the short for “*kamera kozō*”, or the “guy with the camera”. If we consider the *cosplay* as a kind of performance, this *kameko* are in many cases the primary main audience of the *cosplayers*. They are the guys (mainly males) who crowd in front of the *cosplayres* (mainly females) while they are posing, with cameras of any kind, most of them visibly expensive, and look for the best shoot. In many cases they own some kind media like websites where they post the pictures and help to spread the image of *cosplay*. Furthermore many of them build some kind of “follower” relationship with some *cosplayers*, tracking their activities as amateur idols. They use to have, as well as the *cosplayers*, their own business cards and usually exchange them shaping networks focused on *cosplay* activities.

The relationship between *kameko* and *reiyā* could be however problematic, while some *kameko* will take obscene pictures or pictures that the *reiyā* does not approve, and spread it through internet. There are also cases in which *kamekos* intrude into the privacy and personal life of the *reiyā*. That is one of the reasons why there are some basic manners of good behavior in *cosplay* culture, like to not take a picture without the approval of the *reiyā*. Ranging from professionals to amateur or simply casual photographers, *kamekos* play an important role as an audience and as well in feeding the *cosplay* networks with *cosplay* pictures.

The “helpers”, as I am calling them here, are some close friends or relatives of the *reiyā* who helps to carry out the activity, and in many cases they are also *reiyā* that are not performing in that moment. They help the *reiyā* to dress the costume, to take care of the luggage, inform the *reiyā* if something is wrong with the makeup or the costume, and also help to handle possible bad behavior among *kamekos* and other people. In Taiwan, friends that help in this way are also called “managers” “馬內”. The so called “*Nuiko*” in Japan (needleworker), a friend or close acquaintance specialized just in make the costume, as well as those who help with the props or other technical requirement of *cosplay* can also be consider part of this category.

About the “surrounding institution and business”, we can divide this category in three subcategories. 1) Places to practice *cosplay* in public, 2) *Cosplay* related media and 3) Other related business like *cosplay* merchandise and online selling of costumes. Within the first category, we can find any kind of festival or gathering where *cosplay* is part of the official schedule, or any place where *cosplay* can be practiced in public. This places and events can be in charge of companies or semiprofessional fan groups. They arrange and hold fan events and *cosplay* specialized events, photo sessions and photo studios, or run *cosplay* cafes or *cosplay* bars, *manga* and *anime* stores, etc.

In Japan, the amateur *manga* events like “Comic Market” in Tokyo, the “World Cosplay Summit” in Nagoya, alongside with street parades held in Akihabara or Nipponbashi, as well as *cosplay* focused events like “CosJoy”, and other smaller events and festivals are representatives. In Taiwan, the events “Fancy Frontier” and “Comic World Taiwan” are among the most important. There are also other many small events organized by fan clubs based in universities.

Among “*Cosplay* related media” we can enumerate magazines, photo albums, as well as social networking services where *cosplayers* photographs can be observed. Some of these SNS have an specific orientation towards *cosplay*, like “Cosplayers Archive”, “Cure”, “Layer Cloud” and “World Cosplay”, among the most popular, alongside with those oriented to general users like “Face Book”, “Twitter”, and also “Plurk” in Taiwan.

Finally there are the fan community and the concrete fan groups. They are other possible concerned and indirect participants of *cosplay* culture. They consume the same or similar cultural goods, and share most of the institutions, places and media. As some of them actively like *cosplay* and have many friends engaged in *cosplay* activities can be considered as part of the same community. However, not everyone is so enthusiast about *cosplay* and also many fans dislike it and do not consider *cosplay* as a fan activity.

Thus, and also because of the different requirements and uses of the spaces of each fan activity, such as *dōinshi* and *cosplay*, the confine of *cosplay* to some specific areas of the events, the prohibition of *cosplay* in some events, and the proliferation of only *cosplay* focused events particularly in Japan has become necessary. This is also causing the split of the fan groups and the subdivision and specialization of the *cosplay* fan community. However in any case, *cosplay* is an activity that integrates a variety of actors and elements from the fan culture, and cannot be analyzed if we lost sight of that.

3. *Cosplay* as an appropriative institution within *fandom*

As a costume party, *cosplayers* like to gather and dress-up like their favorite characters. Mighty warriors or bizarre protagonists from *animes*, *manga* or games (ACG for short) well known among the fans, pose for the cameras of friends, other fans and a lot of strangers. But it is more likely that the attention of a casual visitor will be drawn to some of the many young girls that wander around dressed in sexy or cute disguises, and in the majority of cases, they are the ones in which the most of the cameras focus and shoot, again and again.

It is clear that not all *cosplay* is like this. *Cosplay* involve many kind of activities and many actors are engaged, each with their own preferences, roles, and motivations. But the mixture of individual activities that implicate a certain rank of freedom and heterogeneity, stand aside to give rise to a more homogeneous and standardized number of group practices. The behavior of *cosplayers* in Taiwan is not exactly the same than in Japan, and there are also many clear differences between perform *cosplay* in an ACG event, in a *cosplay* only event, or just among other friends. But these practices have some regularity that allow to different persons be part of the same game.

Definitions of what is *cosplay* begin at this level, but the meaning of these practices, as well as the distinction of what is *cosplay* and what is not, (as well as what *cosplay* should be) will be meaningful only when we stand from a particular point of view. Who is speaking to whom? Is it an outsider introducing *cosplay* to a layperson or is it a *cosplayer* addressing to other *cosplayers*, or perhaps to other ACG fans?

It is clear that any explanation of what *cosplay* is, entails a setting of boundaries and these boundaries establish who is inside, who is outside and explain why. Concrete groups of persons and their practices lie at the bases of these demarcations but only the utterance of an imagined homogeneity and affinity transforms these demarcations into discourses of shared identity. Now we are in a new level, where the groups are regarded as communities; integrated and meaningful, and their practices achieve a normative status becoming into institutions.

In this research I regard *cosplay* as an appropriative institution within fan communities, and this means the vertical integration of three possible focuses; *cosplay* as an activity, *cosplay* as a set of practices, and *cosplay* as an institution. This approach summarizes a general theory of fan communities and may be also employed in a general analysis of fan productivity. Even more, this simple distinction is useful in the analysis of the conflictive relationship between fan consumption and creativity, as well as the analysis of the questions about “performative consumption” and narcissism. Before continue with this, I will introduce briefly the general perspective from which I am analyzing fan communities.

4. *Cosplay* and Fan Communities

In previous studies I have focus on the theoretical problem of the concept of “community” in fan communities’ studies, as well as centered on the theoretical definition of fandom. For this topic, I have mainly centered on the works of Abercrombie and Longhurst (1998), Fiske (1992, 2011), Grossberg (1992), Hills (2002), Jenkins (1992a, 1992b), Sandvoss (2005a, 2005b, 2007), and Thompson (1990, 1995), and for the concept of community in Anderson (1991), Bauman (2001), Cohen (1985) and Delanty (2009). Some details like the analysis of texts in mass culture or popular culture, have references mainly from Adorno (1994, 1991), Barthes (1956, 1975, 1977, 2002), Eco (1968, 2005), and Ricoeur (2006, 1988). Thus, roughly speaking, the general model I will introduce is a reinterpretation of these works also based on my experience in Mexican fan activities, and my observations on Japanese fan groups.

Fan community

A fan community or *fandom* is a community composed of fans. However, as everyone can tell, many fans together shape a quite different phenomenon to study than a fan alone. If a fan can be described as someone emotionally engaged in the consumption of a cultural text or texts, an aggregation of many fans brings into play a multiplicity of people, texts and ways of consumption that, despite their heterogeneity, are imagined as a coherent group. Then, the setting of boundaries and the identification of elements that help us to define the extension and the borders of this group becomes a central issue. Therefore, regardless of what exactly “community” can mean, the study of fan communities poses the question of how consumption, as a matter of meaning, can play a decisive role in the construction of social identity. Here, identity is a discursive factor underpinned by the everyday practice of appropriation of texts through the institutions built by fans.

Departing from this perspective, we can briefly define *fandom* as a community that builds institutions through their practices of appropriation of several set of texts, where their practices and institutions are elements subordinated to the emotive consumption of those texts.

In my approach to Japanese *animation*, *manga* and video games culture fan communities, I regard the integration of these three empirical elements; consumption, practices, and institutions, as the heart of the community as well as the key factors to observe in their research. The concrete social groups of fans that we observe in fan gatherings like amateur *manga* markets, *cosplay* photo sessions, comic stores, theaters, etc, alongside with the traces of their activities, like amateur *manga* and *fanfictions*, *cosplay* photos and *anime* forums flooding the internet, can be approached by the analysis of these three elements

and through them, we can abstract the category of community and attempt the analysis of symbolic elements like identity and the construction of meaning in *fandom*. Following I will introduce these three elements.

Consumption

Consumption in *fandom* has an emotive or affective nature. There is a deeply subjective attachment in fans towards *some* cultural goods in market. That means a meaningful discrimination of certain cultural goods, and the stress upon subjective values more than a “rational choice” in the market of cultural goods. As the goods consumed by fans are commodities which consumption depends on the interpretation of meanings, they are considered cultural texts. Their textual characteristics, this means the specific elements that compose the texts, like the plot of a the TV *anime*, the characters qualities and also the music or colors used in it, are essential in their value. In general, all of these can be summarized as a stress on use-value rather than exchange-value in fan consumption.

This is natural if we focus from the standpoint of the consumers. However this characteristic also leads us to two important points. One is the set of boundaries that distinguish specific territories within the supply of cultural texts in market, and as this distinction is subjective, when we focus in *fandom* as a collective, then this means *an inter-subjective distinction of cultural goods*. The second point is concerned with the nature of texts as commodities, and the pleasure and creativity in consumption.

While the issue about the aesthetic experience as consumption and the commodification of cultural texts like art, leads to an emphasis in the loss of its creative and even revolutionary nature, an emphasis on the subjective use-value in fan consumption, has been argued, can restore this creative nature that links the textual characteristics of the commodity with the social experience of the consumer (fan). Nonetheless, the experience is still regarded as consumption since it works with cultural texts produced as goods by cultural industries within a capitalist economy.

The pleasure in the consumption of popular culture relies in the creativity, where consumers are able to create their own meanings and interpretations from the text, and this leads us to the second element of fan communities: their practices.

Practices

The practices are the activities that fans carry on, where consumption is the most evident of them. However, when commodities are cultural texts, in many cases, a set of multiple texts, consumption involves an act of interpretation, where meaning is actively produced. This production of meaning can range from the sole act of interpretation, to the creation of new meanings and the expression of them in many ways, like behavioral (use the hairstyle of your favorite rock star, speak as your favorite character), verbal (talk about the story of your favorite movie), or textual (produce new texts like writing your opinions, write an amateur *manga*, paint or produce new images of the characters like *cosplay* pictures).

These are “appropriative activities” because through them, fans appropriate the meanings of the text and make them “their own meanings”. Through interpretation, fans assimilate the textual elements to their own social experience. The meanings they create rely on this experience and also become raw materials used in the interpretation of everyday life experiences.

However, in every case, these activities are creative activities subordinated to the affective consumption, which is why they are considered as “secondary activities” and their textual productions are regarded as “secondary texts”. This is a condition that generates tensions and contradictions within the activities in *fandom*. For while the creativity deployed by fans and the appropriation of the meanings of the text can be a way of expressing the passion and the attachment towards the object of consumption, it also takes distance from it, criticizes it, and even can destroy its original meaning. This is a natural condition of creativity and interpretation, and becomes more evident when the social experiences of the consumer does not fit with the textual elements of the object of consumption, or constantly challenges it.

But fans “criticizes precisely because they love” the texts, and they care so much about them. As many has observed, fan culture is not a revolutionary culture, and that is the reason why fan activities must be careful in to not take too much distance from their object, so they lose it at all, maintaining a contradictory balance between creativity and subordination.

Finally, the appropriative activities of fans lead to the creation of new texts and new meanings, which circulates among other fans. Through social interaction, fans build places and means where new meanings can be exchanged and new values can be negotiated, but also where the meanings can be experienced in an inter-subjective way. The constant practice of these activities shapes the bones of the structure of the fan communities. As good examples of this, there are the festivals-similar-to-markets or markets-similar-to-festivals, like the amateur *manga* events. This “bones” that supports the body of fan communities are the fan institutions.

Institutions

Fans institutions are shaped from the activities in practice and their function is *to regulate these activities and the meanings in circulation*. Fan practices are integrated each other and interrelate many different fans and fan groups. Many kinds of texts and many kinds of secondary texts, interpretations and possible meanings flood the activities of fans, and since many of these activities are carried out in group, or the resultant texts circulate among fan audiences, some kind of regulation, setting of rules, ways of proceed, etc, becomes necessary, and help to maintain unity and to produce and reproduce these activities in group, among different persons and through time.

The production of amateur *manga*, the practice of *cosplay*, and the organization of fan events, are good examples of how these activities rely on social structures that organize the activities and guarantee their reproduction. For example, the emphasis on good manners of behavior in *cosplay* makes possible the relationship between *cosplayers* and *kamekos* that otherwise can be conflictive. To ignore these rules or to transgress them could be offensive or harmful for the community in general.

Fan institutions however, are easily to change and develop, born and die. In fact, the construction of new institutions, and the mutation and transformation of these institutions, is one of the characteristics of *fandom*. The rapid formation of Japanese animation *fandom* in many places of the world following the consumption of such cultural texts, as well as the fast development of their institutions and the shaping of new activities and means of expression is a signal of this.

Therefore, if the emotive consumption of a set of texts, the realization of “secondary activities” in relation with this consumption, and the construction of institutions through these activities are the central characteristics of fan communities, the emergence of new means of consumption, new texts and new relations between the texts and the audiences, the developing of new kind of activities and new places of social interaction, and the birth of new institutions that regulates these activities are the elements we must focus in order to analyze *cosplay* as a new institution of appropriation among fan communities.

5. Theoretical challenges

The emphasis *cosplay* puts into the body and visual elements is noteworthy, especially when narratives and interpretation has played a vital role in the definition of fan communities. These communities, mainly approached from activities like amateur comic or magazine production, has been regarded as “interpretive communities”, a concept borrowed from Stanley Fish in the early works of Henry Jenkins (1992a). Likewise *cosplay* has been regarded as an activity in which fictional narratives are used as raw materials in the shaping of the self (a search for individual identity), and the shaping of the self as a *fan* (group identity). From this perspective, consumption, interpretation, and negotiation of interpreted meanings of shared texts are in the base of fan interaction and fan institutions.

However, the playful nature of *cosplay* contrasts with this highly modern and discursive construction of the self and community. Here the visual and the emotive take over narratives, and aesthetic experience seems to blur any systematical search for identity. The excitement at the gathering place, in front of or behind the camera, goes beyond to interpret and to share meanings. The pleasure at this moment is, more than in resistance and creativity, like Fiske could argue, in falling deep into the game, no matter what might it means, and at what cost. The deeper we fall, the more intense the experience becomes,

and thereby, the more subjective and individual³.

In order to address to this complexity, I describe *cosplay* as the integration of activities into practices, and practices into institutions, characterized by the appropriation of mainly fictional characters through the body. In *cosplay* the evident central role of the body has drawn special attention on the interplay between this activities and the search for identity, for like in fashion, the external appearance is regarded as the link between the self and society. For example, see the introduction to the book “*Kosupureka suru shakai*” (“*The society that becomes cosplay*”) (Narumi 2009). However, it is important to distinguish between fashion and *cosplay* by stressing on the role of affective consumption and subordinated creativity.

Following I will approach to *cosplay* from the next three aspects. From I address to some of the theoretical challenges that *cosplay* introduce when we focus it as a fan community institution: 1) The consumption, that it is here, the object of *cosplay*. 2) The practice of appropriation, and the particularity of appropriation by means of the body. 3) The institutions as fan markets, the dialectic of value, and the audiences of fans.

Regarding on the consumption and the object of *cosplay*, there is a noteworthy change in the textual characteristics of the *anime*, *manga* and games consume, which is what I briefly referred as a growing stress upon the charisma of the characters rather than narrative aspects.

Manga and animation, and in many cases also TV games are narrative forms of expression. This means there is a story to tell, and there is a way to tell it; there is a narrative structure expressed by means of a certain discourse. However, as Yoshimoto (2009) has shown, *manga* and animation represents a shift from a fan culture based on literary texts, to a culture based on visual texts. The discourse in *manga* integrates visual (iconic) and literary elements, and animation relies mainly in a visual narrative. This introduce an important element that it is not present in novels and literary works, that is, the possibility of reading the aesthetic elements of the work separately from the narrative ones. In short, we can say that animation and *manga* can be read relying only in iconic elements and without paying attention in narrative elements. The famous thesis of Azuma (2007) on the role of “moe elements” in “otaku culture” echoes this characteristic.

Azuma and previous authors like Kinsella (1998, 2000) have pointed the “post modern” nature of fan culture, which seems to work without “big narratives”. The focus that *cosplay* put upon characters seems to reflect this characteristic. However, when *cosplay* is approached, there is a tendency in try to explain how narratives (fictional narratives) come to shape the body and the identity. This is quite logic because as Ricoeur (1988) has noted, identities are narratives explanations of the self.

The theories on appropriation of media messages in Thompson (1995), and fans appropriation in Abercrombie and Longhurst (1998) and Hills (2002) are underpinned by this hermeneutic idea about narratives as raw materials in the shaping of the self. However, there is a possibility that narratives play a secondary role in *cosplay* and nowadays fan culture.

Accordingly to this, we have to focus on the practices of appropriation, *through the body*. Hills (2002) has described fans “inper-tonation” and costuming as “performative consumption” (2002:166), and approaches to it as composed of two stages; “self-absence” and “self-reflexivity”. The “self-absence” is when fans cannot explain their likings and their activities as fans. This stage represents the irrational affectivity in fans consumption that we have already pointed. The “self-reflexivity” represents the rationality and intentionality of fans, expressed by the conscious discourse of “me as a fan”, and therefore, a narrative construction of identity. Roughly, Hills based on Ricoeur, suggest that fans have to “erase” themselves in order to “let the text be”. This experience is the base for the re-appropriation of the self (as well as the text) and the construction of fan identity. In Hill’s words, “it is only by passing through moments of self-absence that our sense of self can be re-narrated an expanded” (2002:167). The idea of the “lose of the self” in appropriation is relatively common. See for example Fiske’s idea on “evasive pleasures” (1989), and a similar idea about fans erasing their self and re-finding it in *cosplay* can be found in Narumi (2009).

³ With this metaphor I am echoing the work of Chen, Mia Ming-Hisu (2010) and the experiences narrated and presented in the workshop.

However, Sandvoss (2005a) proposes a different picture of fans. Where appropriation implicates the existing difference between an object to be appropriated and a subject that appropriates it, Sandvoss suggest that this difference can be blurred when the object gets too close to fans experiences and desires. He calls it an “aesthetic distance” but we can say it is also an affective closeness (or better, as the “moe” jargon can tell, aesthetics elements and affectivity are closely related each other). The next quote resumes his point:

“While aesthetic distance enables the reader to engage with the textual Other, its eradication in a fan texts signals the collapse of the reading situation as potential dialogue between the self and the world. Here the circle between the aesthetic condition of fan texts and the conceptualization of fandom as narcissism closes: as all experiences fund by the fan in the fan texts coincide with his or her horizon of expectations, the fan texts takes on the role of a mirror, and thus becomes the banal object of narcissistic perspective” (2005a:145).

Sandvoss’s analysis on fan texts seems to reflect the new characteristics I mentioned like the emphasis in characters. Thus, we have to take in deep consideration his description of *fandom* as “narcissistic”, where, as he proposes, the “self-reflexive” fan identity becomes “self-reflective” (ibid 161), and where appropriation does not mean to make the text “mine”, but to make it “me” (ibid 163).

Summarizing, the appropriation of characters through the body without narratives elements in *cosplay*, may not be a “modern” *reflexive* construction of the self, or a narrative “search for identity” but rather, a more “post-modern alike” reflective performance, where narratives play a secondary role and there is not an identity to find through the mask, because for *cosplayers*, all those masks are not *mine*, but already *me*.

Finally there remains the problem of *cosplay* as an institution of appropriation and its place within other institutions, like the fan events. As I referred before, fans institutions regulate meanings on circulation, and *cosplay* as a practice that integrate many actors, not just the *cosplayers*, generate and circulate new texts and meanings like *cosplay* pictures. If the activity of *cosplay* could be regarded as narcissistic, then what can be said about those who observe, those whose are the audience of the *cosplay*, and how can we explain the relationship with these audiences? Or it can be said audiences are not necessities in *cosplay*? Pictures are not important and fan institutions are just a mere context?

While these problems remain to be careful researched, there are two approaches, one from Hills (2002) and the other from Abercrombie and Longhurst (2008) and Sandvoss (2005a, 2005b) that give us some clues in the analysis of these problems. From Hills I will briefly focus on his “dialectic of value” in fan cultures, and from Abercrombie and Longhurst, and Sandvoss, the “diffused audiences” and its link with narcissism in fan culture.

When I addressed to consumption in *fandom*, I remarked that its emotive nature is an important factor in make “subjective” the object of consumption, and thanks to that, the use-value can be recovered in the commodities. This subjective value conferred to commodities supports the creativity of fan activities and *cosplay* is not an exception.

However as Hills remind us this is not the end of the story, because fans also shape markets where they circulate their secondary texts. When he discusses about the role of fans in “performative consumption”, he stress on the fact that the character to be performed is not just an individual or personal object of love, but a communal one. Then when fans dress-up as these characters in front of others fans, put not just their interpretation of these meanings in exchange, but also their own body in the system of consumption (and that is precisely why he calls it performative consumption), re-shaping a new exchange-value among fan community, and going back, from making “subjective” the object, to making it “objective” again. The photographs of *cosplay* that circulates among fans (where the subject becomes an object) can be a good example of this, that he calls the “dialectic of value” in fan culture.

The second approach, (about “diffused audiences” and narcissism) is related with this perspective, because takes in account the importance of the fan community as an audience where fans (*cosplayers* in this case) are performers. However, if as Sandvoss says, “by making their object of *fandom* into extensions of themselves [and this description fits very well with the image of *cosplay*], fans [...] removes their object of consumption from the logic of capitalist exchange” (2005a:116). Then

what happens when fans make their object, not just an *extension* of the self (mine), but make it *themselves* (me), as he suggest happens when fans become narcissistic. In this approach there is no distance between the object and the subject, because they become the same body. Without object, exchange is impossible and therefore, rather than the image of fan events as markets, its description as a spectacle, and *cosplay* as performance seems to be more appropriate.

As Abercrombie and Longhurst (1998) propose, “diffused audiences” are continuously engaged into consumption. Text flood everywhere and consumption of texts, even if we do not want it, becomes everyday life. Even more, these audiences have come to feel that their life is a spectacle in which they are performers, or the “protagonists of their own movie” as its commonly said. To these audiences, appropriation is not an active and intentional act; it is an *inevitable* and *unintentional* condition of life, as Sandvoss points out. The popularity of SNS and their importance in the spread of *cosplay* popularity can be a signal of the narcissistic nature of *cosplayers* as performers for them audiences.

If we focus in colspay as the vertical integration of activities, practices and institutions, it is possible to address to these different faces of cosplay; from a narcissistic experience to a system of exchange of meanings and the base of the construction of a cultural identity in fan communities. The context of cosplay in Taiwan gives particular relevance to this issue, for as I previously mentioned, an assumed closeness between Taiwan and Japan, has been noted as an important factor in the nature of the influence of Japanese pop culture in Taiwanese youth. But here, I advocate a further distinction between cultural and esthetic closeness. The first one can be explained by the historical experience, while the second one is derived from consumption.

6. In Taiwan

Japanese popular culture

The popularity of Japanese cultural industries in Taiwan has been regarded as resultant from the particular history of Taiwan, not just because of the colony experience but also because of the place of Japan in East Asia as a major modernizing force. As Ming-Tsung Lee (2004) highlights, the cultural influence of the Japanese modernity, which extends from the colony period through the years of the martial law under the KMT rule and after the democratization, has exert an undeniable influence in the attractiveness of Japanese cultural products in Taiwan. Iwabuchi (2005) and Lee have argued in the same vein about the transformation of occidental modernity into a more concert and close reality by Japanese hands, and in particular, by Japanese popular culture, like music and T.V. dramas. Moreover, when Lee depicts the scene of consumption of Japanese cultural products in Taiwan at the beginning of the new century, he described Japanese pop culture as a “mega-textual system”, in a way that remembers many characteristics of the diffused audiences. Here Lee describes consumption as a dynamic process that evolves many different popular texts like music, dramas, fashion or comics, as well as secondary texts (those created by the consumers themselves). In this scene, every cultural product is related to each other, and consumption is a practice of fantasy in a longing for modernity, and identity, in the shaping of an “own cultural and self-identity” for Taiwanese youth (See en particular Lee 137-148).

As in the case of China and Korea, the fears for Japanese cultural imperialism resulted in a regulation of importations of Japanese cultural industries in the decades following to the Second World War. In the case of Taiwan, the cultural embargo begins after the breaking of formal relations between Japan and Taiwan (Republic of China) governments in 1972, but an ambiguous situation prevailed. In one hand, the geopolitical situation of Taiwan made important for both governments to collaborate, and the economical ties between Japan and Taiwan continued growing. Also, the old generation of people that had experienced the Japanese colonial rule continued yearning to consume Japanese products. This resulted in an underground proliferation of Japanese cultural products were *manga* and animation was also included. (Lee 2004; Davison 2003; 西川潤 2010) The clandestine consumption proliferated and as Wang (2010) points out “Not only Japanese animation were generally watched since the 1970s, Japanese *manga* were also found everywhere in bookstores, grocery stores, and rental stores.

Japanese *manga* shared more than 90% of the comic book market in Taiwan, and the others such American, Hong Kong or Taiwan's comic books shared less than 10% of the market" (Wang P 2010:66). Videocassette recorders become popular in late 70s, and from the 80s piracy of Japanese audiovisual products was a profitable business. Also underground cable television prospered transmitting Japanese contents and by 1985 the number of cable TV viewers reached 40% of the population in Taipei (Lee 2004:82).

The martial law ended in 1987 followed by a period of fast democratization, and when the cable television is legalized in 1993 and the restriction of imported Japanese audio and video products is removed in 1994, consumption of Japanese popular culture was already generalized. But it is noteworthy that as Lee points out, this consumption and the meanings of Japan behind it was generationally differentiated, between "Old Japanophiles" and "Young Harizu" (Lee 2004). I will address later to this in the conclusions.

Fan culture

In 1995, in a more relaxed political environment and just one year after the restriction of Japanese audio and visual products was removed, the first fan event in Taiwan was held. This event held in Gaoxiong city, south of Taiwan, was centered on *cosplay* of games characters, and from this year to the end of the decade, the popularity of *cosplay* will spread along side with other fan activities like amateur *manga* production. Thus, since the beginning of ACG fan activities in Taiwan, *cosplay* has been present and for many is the soul of fan events. (Wang K 2010:32, 仝 2012:28 Chen M 2010:2;2012, Chen J 2007:15)

Also in 1995, the National Taiwan University's Bulletin Board System (BBS) was launched, and quickly became popular among fans. In the next years many universities will launch their own BBS helping the formation of new fan communities of many trendy cultural products, in which ACG and *cosplay* are still holding an important place (Wang PT, Cheng Mia 220)

In 1996 the cartoon-writer Cheng Gui-Xi, also known as Hari Kyoko, coined the term "*hari*" in her book *Good Morning Japan* (1996), "to describe the sentiment and behavior of young Japanophiles in Taiwan" (Lee 2004:247). She express in this neologism, composed from Taiwanese dialect (Mingnanese) and Mandarin, the feelings of many young Taiwanese engrossed in absorb every detail of a Japanese way or life through the consumption of popular culture. "If you feel poorly acclimatized in Taiwan, and are always interested in and pay attention to everything about Japan, while feeling like a Japanese expatriate living in Taiwan, then you have undoubtedly got the *hari* addiction" (Hari Kyoko, 1998, in Lee 2004:247).

As Lee states, these young Taiwanese have "a strong cultural identification with Japan or even an intense desire to 'become Japanese' " (Lee 2004:248), and for them consumption is also a pursuit of self-identity. This term was rapidly adopted by the media and as Lee (2004) and Iwabuchi (2005) points out, turned symbolic within the framework of an increasing criticism towards what was perceived for some as a new Japanese colonialism.

The first amateur *manga* convention "Comic World" was introduced to Taiwan in 1997 by a Japanese company of *manga* drawing tools and a Taiwanese comic chain store. This event, which in 2002 changed its name to "Comic World Taiwan" and its venue to the newly constructed NTU Sport Center, alongside with "Fancy Frontier", which was first held in 2003 and organized by a Taiwanese monthly comic magazine and amateur *manga* writers, became the places for the biggest *cosplay* gatherings in Taiwan. Following its growing popularity, *cosplay* magazines also begin to be published, like DREAM (2002) and COSmore (2007), formerly named COSmania (2006) (Chen M 2010;2012).

Thanks to the lively activity of ACG fans, the stabilization of the principal amateur *manga* events and many smaller ones held at fixed times from the north to the south of Taiwan, and the disseminator effect of mass media and internet BBS networks, *cosplay* has become from the first years of the new century, a popular activity among Taiwanese youth. This widespreading of *cosplay* culture has attracted criticism as well as the necessity within the *cosplay* communities of self definition.

Cosplay

Cosplay, as I have pointed several times, is an activity driven by a deep love towards a fictional character. And as Chen Mia

(2012:244) notes, in many cases these characters can be symbols that threaten the society in some way, and this gives also an implied subversive spirit to *cosplay*. However rather than subversion, is passion, joviality and sensuality the atmosphere that surrounds *cosplay* gatherings.

Outside of the sports center of National Taiwan University, where amateur *manga* circles and its fans crowd, many young girls and some boys began to arrive with small suitcases, most of them accompanied by friend or relatives. They start to prepare their costume, the makeup and the wigs, helping each other and talking happily and loudly. “Oh, how cute you are”. Some of them bring small tents that install in the back corridors of the building and change clothes there. When the costume is ready they are completely transformed into the characters and began to wander near the building, where other visitors and many males with expensive cameras had started to gather. The cameras begin to shoot, and from morning to sundown, when there is not enough light for take more pictures, the *cosplayers* pose to the camera of friends and strangers.

Prepare the costume and the props can take several months and may cost quite a lot of money, and some participants also take a long way from other parts of Taiwan to Taipei. At the end of the day they are exhausted but as Zhang⁴, a 19 years old girl says to me; “doing *cosplay* make me feel happy, and I have a lot of friends here, why should I stop it?”

Zhang started to perform *cosplay* at the age of 16 years old. In her case was her love in junior high school for Gackt, a Japanese singer, what prompted her interest in *Cosplay*. This singer provided his voice for the software “Vocaloid 2” in the character of “Kamui Gakupo”. This was her first costume when her best friend, which already was a *cosplayer*, asked to join her. However, the first *cosplay* of Wang and Cheng, about 22 years old girls, was an anime character because as they tell me, at the age of 15 when they began, their world was surrounded by Japanese *manga* and *anime*. Wang and Cheng learned about *cosplay* by internet, where they also met other friends interested in *cosplay* and amateur *manga*, and it was in company of those friends when they went to their first amateur *manga* events and start to perform *cosplay*.

As these examples and the questionnaire survey shows, *cosplay* in Taiwan is mainly performed by a young female community. In the past CWT 2012, among 199 respondents, 84% were female and 80% younger than 20 years old, and 36% of the total has between 15 and 16 years old. Moreover, this young community is likely to stay young, since many of them are probably ephemeral participants. Since for the 30% of the respondents it was their first time or first year performing *cosplay*, and the experience in *cosplay* of the 80% of the total does not exceed four years. If we consider that 96% of the respondents began to perform after 2003 (and 82% between 2009 and 2012), when the spread and popularization of *cosplay* stabilized, it is possible to say that there is a tendency of ceasing *cosplay* after approximately 20 years old.

Also for the most of these young girls, *cosplay* is a fan institution already established where they can take part easily, as well as to quit. As we have seen, the period of formation of fan communities and their activities in Taiwan took place between the years 1995 and 2000. A 64% of the respondents were born after this period, and do not have direct experience of the transformations in political and social life that allowed the birth of fan cultures in Taiwan. Only less than 5% of the respondents were born between 1978 and 1987, having some experience of the martial law. Thus for the very large majority of them, consumption of Japanese popular culture and fan appropriative activities have been part, in some extent, of their everyday life since childhood.

This community has developed principally around Japanese ACG culture, but as Lee argues, this culture has created a “mega-textual system”, including the consumption of many media, and many other practices. As a different questionnaire survey about consumption designed for Japanese pop culture fans, which I carried out among 44 university students, showed alongside with a high consumption of Japanese ACG and anime songs, similar patterns of consumption in secondary texts as Japanese or Taiwanese amateur comics, music, games, novels, illustrations, and *cosplay* magazines and web sites (only 34.9% do not consume this magazines or visit *cosplay* web sites at all) as well as a little more low but also present consumption of commodities not directly related with ACG but rather with Japan pop culture in general, like movies, TV dramas, pop music and fashion magazines.

As Chen J (2007) observed in 2001, the most important sources of characters for *cosplayers* was first, Japanese ACG

⁴ Names are fake

characters, Japanese visual rock bands and Taiwanese traditional puppetry (Ibid p15). Chen M (2010) also noted the popularity of characters of traditional puppetry, what could have been a sign of a new trend of *cosplay* in Taiwan, as an effect of localizing this culture. However, as some *cosplayers* explained in interview, Taiwanese glove puppetry characters popularity has declined over the years, in part because of the difficulty of make the costumes and its cost, and also because a decrease in the popularity of the puppetry TV shows. In the survey only a 3% of the respondents have ever performed that kind of characters, although in the past February 3th, at the Taipei International Book Exhibition, was carried out a *cosplay* concourse were several *cosplayers* of puppetry attended.

But in general, the results of the survey showed an expected and overwhelming majority (94.5) centered on Japanese ACG characters. Vocaloid characters (47.2 %), *crossplay* (31.7%) and uniforms (23.1 %) was the following more popular categories, although in the most of the cases those categories can be considered part of Japanese ACG characters. Out of that category, 16.1 % of the respondents have ever performed not Japanese ACG characters, and only a 6% for visual rock bands, and 8.5% for other bands or singers.

If *cosplay* is regarded in this research as an activity part of a larger system of practices within fan communities, it is because of the essential presence of the character; the deeply subjective affective consumption in which the character is appropriated through the body. But the love for the character, which is the most narcissistic element in *cosplay*, is not a lonely pleasure in *cosplay* for as many fan studies has pointed, those characters are not only an individual object of love, but also a communal one. The words of Lin, a 29 years old fan of visual rock, explain clearly this feeling. When she performs the *cosplay* of her favorite band member, she not only feels happy because she feels very close to him, but also she wants other fans to recognize the singer when they look at her. The singer she *cos* has passed away several years ago, and when she dress as him in the band concerts, as she tells me; “I don’t want to transform me into him, what I want is to show to others fans about him, to the new ones who doesn’t know him and to the old ones, who still remember”. Hence the importance of achieve realism and exactitude in her *cosplay*.

A shared subjectivity arises from many similar experiences among *cosplayers* also about fictional characters, and from here we shift the focus from activities to practices. As Chen Mia (2012) highlights, no matter how individually a *cosplayer* could be absorbed in her (or his) hobby, a *coser* should never forget there are other fans who likes the same character. Forget this simple rule and you risk being harshly criticized by the fan community. As a 27 years old amateur *manga* drawer related me, at the her first time at *manga* events, encouraged by her friends, she used to go dressing improvised customs of characters she did not know. It was fun but, she said “that is not the attitude you should have in *cosplay*”, so she quitted.

Thus, this commitment towards the character can rank in its depth and kind, but almost everyone (92% of the respondents) agreed that love for the character is essential in *cosplay*, and a high percent also stressed the importance of knowing the background and the worldview that evolve the character (74%), rather than be pretty or good looking (25%), (but conditioned to not damage the image of the character).

Thus, if we look at *cosplay* as a practice, the emphasis goes from the character to the shape of social ties, and here the role of the body as a secondary text is essential.

First, as many *cosers* has related, it was the love for the character what makes them to *cos* that character, but it was a friend who take them to the events or introduced them to the world of *cosplay*. 64% of the respondents were invited by a *cosplayer* friend when they perform at first time, and to make new friends through the same hobby is one of the principal attractions in *cosplay*. Without the networks and institutions of fan communities, to perform *cosplay* would be extremely difficult. Not only because you have to do all by yourself, but also because *cosplay* rely on the social production of meaning.

From this perspective, it is also the body of the fan and not only the consumed texts, what becomes the raw material in where the secondary text will be produced. The subjective experience of *cosplay* is retained by the camera and becomes an object, which circulates within the networks of *cosplayers* and fan communities where the exchange of symbols close the circle that Hills called “performative consumption”, and reinforce the identity of the *coser* as a fan.

Cosplay as “performative consumption” needs of interaction and exchange, and this implies the participation of many other actors, as I described formerly in this paper. The importance of these networks is also perceived by the *cosplayers*,

where a high percent (55%) recognized the importance of maintain these networks. Also in the same aim there are many unspoken and spoken rules and also many complaints if other *cosplayers* do not respect those rules. It is here where those few more experienced play a major role. They give sense to the rules, the social structures they support, and to the whole social experience of *cosplay*, by strictly defining what is and what should *cosplay* be. Those definitions, are discourses of identity within the fan communities, and are the starting point of the meaningful integration of fan practices into institutions.

In her paper entitled “悪魔の遊びー台湾のコスプレ” (The play of the Devil: Cosplay in Taiwan), Cheng Mia, following the words of Mierocco, a well reputed Taiwanese *cosplayer*, defined *cosplay* as “the game of the devil” since for her the fascination for *cosplay* relies on and indispensable “aesthetic sense of the depravity” (Cheng M 2012:217). As Cheng points out, rather than pose a threat or a direct resistance to the mainstream society and its values, *Cosplay* recognizes these values but mocks them and takes sides with the devil, recognizing itself as heretic but not without a sense of sin and guilty. Escapism, avarice, vanity, and self-neglect are some of the adjectives that can characterize this “devil’s game” (Ibid).

The words of Mierocco articulated by Cheng in her paper, makes with the *cosplay* experience what the camera does with the images, but words and images work at different levels. Mierocco words organize her experience into a meaningful discourse of what means to be a *cosplayer*, and these narratives provide an explanation of the self for those who share similar experiences. Images however do not explain anything, but closer to the emotiveness of the experience, helps to reproduce an aesthetic shared sympathy.

Preliminary conclusions:

Aesthetic and cultural proximity, consumption an identity

Cosplay in Taiwan is a culture mainly influenced by the Japanese *anime*, *manga* and games industry, alongside with the activities of Japanese fans. But the unique cultural context in which the Japanese pop culture is consumed in Taiwan, gives a particular interest to the relationship between consumption, appropriation, and creativity, given that appropriation may mean contradictions between the original context and the context of reception. Thus, the cultural context makes necessary the integration of the question on the shape of identity in *fandom*. This question concerned with fan narratives about belonging and self definition, is also clearly concerned with other kind of narratives of belonging like cultural and national identity. *Cosplay* as an appropriative activity, decontextualizes and recontextualizes the contents consumed, and the creativity entailed in this process may conflict with affective consumption in *fandom*. Creativity in fan activities may mean a risk of losing the object of worshipping, even more when the contexts seem to be far apart. Here, is the influence of Fiske’s idea about popular culture as a culture of resistance, and its pleasure in adapting the meanings to daily struggles of everyday life. Thus, one of the questions of this research was if there is that kind of cultural conflict in fan activities in Taiwan, and understanding the meaning of *cosplay* in the everyday life of Taiwanese youth.

Given that this research is not yet finished, and a qualitative approach as well as a better understanding of the context is still needed, I cannot reach to any conclusions. However, at this point of the analysis, seems evident a need to review the idea of resistance in appropriation. The idea of narcissism in consumption, even more in the case of *cosplay* where the body, the experience and the aesthetic identification plays an important role, provides a clue in how to approach to this issue.

In the case of Taiwan, an assumed closeness with Japan as well as references to the colonial past is commonly seen as an important factor in explaining the success of Japanese cultural products in Taiwan. There is no doubt in the relevance of these factors, however it may be necessary a further distinction between a cultural closeness, driven by historical experience, and aesthetic closeness, driven by the experience of consumption.

I think the distinction that Lee (2004) draws between “young *Harizu* and old japanophiles” illustrates this point.

Narcissism in *fandom* is a string criticism to the idea of cultural resistance, because although recognizes the creative power of construction of meaning, neutralizes the notion of “resistance”. A “lack of aesthetic distance” (2005a:155) in narcissism (or a great affective proximity), means that every meaning can be appropriated in any possible way. But if any meaning can be possible, there is no importance in meanings at all. The metaphor of cultural texts as mirrors in Sandvoss, emphasizes that

for these audiences, there are no meanings in the cultural texts. As he says, “The profound social and cultural significance of popular texts, thus, derives not from encoded meanings but from their very absence” (2005b:836) Therefore, there are not meanings to resist or subversive lectures, and no cultural conflict can arise.

At this point of the research, I have observed a strong commitment towards aesthetics elements and there is no apparent relevant conflict between consumption and appropriation. In other words, this *cosplay* culture belongs to these young people in an emotive level, and their build their social experience with its symbols which more than borrowed are of their own. But unlike Sandovoss’s mirror, *cosplay* pictures are not only the narcissistic reflection of the self, but also an important tool through which fans build their own (sub)culture within the institutions of fan communities.

References

- 東浩紀 2007, 『動物化するポストモダン—オタクから見た日本社会』 講談社現代新書
- 石坂悦男, 2005, 「日本のアニメーション産業」 社会志林 51(4), 117-137 法政大学
- 榎本秋, 2009, 『オタクのことが面白いほどわかる本』 中経出版
- 化濱 (Hua, Bin) 2012 『コスプレでつながる中国と日本 (China and Japan Connected by Cosplay)』 学術出版会 (Gakujyutsusyuppan-kai).
- 神澤孝宣, 2006, 「二極化するキャラクター消費—まんが・アニメ産業からみたキャラクター消費の考察」 宝塚造形芸術大学紀要 ARTES No.20
- 谷口功, 2010, 『最新アニメ業界の動向とカラクリがよーくわかる本』 秀和システム
- 陳明秀 (Chen, Mia Ming-Hsiu) 2012 「悪魔の遊び—台湾のコスプレ」 谷川 『コンテンツ化する東アジア—大衆文化 / メディア / アイデンティティ』 青弓社
- 成実弘至 2009, 『コスプレする社会—サブカルチャーの身体文化』 せりか書房
- 西川潤, 2010, 『東アジア新時代の日本と台湾』 明石書店
- ヒロヤス・カイ, 2008, 『オタクの考察』 シーアンドアール研究所
- 吉本たいまつ, 2009, 『おたくの起源』 NTT 出版株式会社
- Abercrombie, Nicholas; Longhurst Brian, 1998, *Audiences, A Social Theory of Performance and Imagination*, London, Sage
- Adorno, Theodor; Horkheimer, Max, 1994 (1969), *Dialectica de la Ilustración*, Madrid, Trota
- Adorno, Theodor, 1991 “On the Fetish Character in Music and the Regression of listening”, in Adorno, Theodor, 1991, *The Culture Industry*, New York, Routledge
- Anderson, Benedict, 1991, *Imagined Communities, Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, London, New York, Verso
- Barthes, Roland, (1956), *Mitologías*, México, Siglo XXI.
- Barthes, Roland, 1975, *The Pleasure of the Text*, New York, Hill and Wang.
- Barthes, Roland, 1977, *Image Music Text*, London, Fontana Press.
- Barthes, Roland, (et al), 2006, *Análisis estructural del relato*, México, Ediciones Coyoacán.
- Bauman, Zygmunt, 2001, *Community, Seeking Safety in an Insecure World*, UK-USA, Polity Press
- Chen, Mia Ming-Hsiu, 2010, “Falling in the Devil Game: Cosplay and Doujinshi in Taiwan”, paper presented in the workshop “New Possibilities of Trans Asian Anime Studies” organized by the the School of Modern Languages and Cultures, The University of Hong Kong, February 20-21, 2010
- Chen, Jin-Shiow, 2007, “A study of Fan Culture: Adolescent Experiences with Anime/manga Doujinshi and Cosplay in Taiwan”, *Visual Arts Research*, Vol. 33, No. 1(64), pp. 14-24, University of Illinois Press
- Cohen, Anthony, 1985, *The Symbolic Construction of Community*, New York, Tavistock Publications and Ellis Horwood Limited
- Davison, Gary Marvin, 2003, *A short History for Taiwan: The Case of Independence*, Praeger Publishers

- Delanty, Gerald, 2009, *Community*, London and New York, Routledge
- Eco, Umberto, 1968, *Apocalípticos e Integrados*, Barcelona, Editorial Lumen.
- Eco, Umberto, 2005, *La estructura ausente, Introducción a la semiótica*, México, Debolillo.
- Fiske, John, 1992, “The Cultural Economy of Fandom”, Lewis, A Lisa (ed) *The Adoring Audience. Fan Culture and Popular Media*, London, Routledge
- Fiske, John, 2011 (1989), *Understanding Popular Culture*, London and New York, Routledge
- Gray, J., Sandvoss, C. & Harrington, L. (eds), 2007, *Fandom, Identities and Communities in a Mediated World*, New York and London, New York University Press
- Grossberg, Lawrence, 1992, “Is There a Fan in the House?: The Affective Sensibility of Fandom”, Lewis, A Lisa (ed) *The Adoring Audience. Fan Culture and Popular Media*, London, Routledge
- Hills, Mat, 2002, *Fan Cultures*, London and New York, Routledge
- Ito, Mizuko 2006, “The Gender Dynamics of the Japanese Media Mix”, A draft of a position paper for the Girls ‘n’ Games Workshop and Conference May 8-9, 2006. University of California, Los Angeles www.itofisher.com/mito/ito.girlsgames.pdf
- Jenkins, Henry, 1992a, *Textual Poachers, Television Fans and Participatory Culture*, London, Routledge
- Jenkins, Henry, 1992b, “‘Strangers No More, We Sing’: Filking and the Social Construction of the Science Fiction Fan Community”, Lewis, A Lisa (edit) *The Adoring Audience. Fan Culture and Popular Media*, London, Routledge
- Kinsella, Sharon, 2000, *Adult Manga, Cultura and Power in Contemporary Japanese Society*. Honolulu: University of Hawai’i Press
- Lee, Ming-Tsung 2004, “Absorbing ‘Japan’: Transnational Media, Cross-cultural Consumption, and Identity Practice in Contemporary Taiwan”, King’s College, University of Cambridge (Doctoral thesis)
- Ricoeur, P, 1991 (1988), “Narrative Identity”, *Philosophy Today*, 35 :1 p73 Chicago, University of Chicago
- Ricoeur, P, 2006, *Teoría de la Interpretación, Discurso y Exedente de Sentido*, México, Siglo XXI
- Sandvoss, Cornel, 2007, “The Death of the Reader? Literary Theory and the Study of Texts in Popular Culture”, Gray, Jonathan (ed), *Fandom, Identities and Communities in a Mediated World*, New York and London, New York University Press
- Sandvoss, Cornel, 2005a, *Fans, The Mirror of Consumption*, UK-USA, Polity Press
- Sandvoss, Cornel, 2005b, “One-Dimensional Fan, Toward an Aesthetic of Fan Texts” *American Behavioral Scientist*, Vol.48 No.7 822-839, Sage Publications
- Thompsn, John, 1990, *Ideology and Modern Culture, Critical Social Theory in the Era of Mass Communication*, UK-USA, Polity Press
- Thompsn, John, 1995, *The Media and Modernity, A Social Theory of the Media*, UK-USA, Polity Press
- Wang, Kanzhi, 2010, “Cosplay in China: Popular Culture and Youth Community”. (Master program Thesis) Lund University
- Wang, Pei-Ti, 2010 “Affective Otaku Labor: The Circulation and Modulation of Affect in the Anime Industry”, The City University of New York (Doctoral Thesis)

朝貢と保護をめぐる葛藤

——デニー・メレンドルフ論争を中心に——

三村 佳充（国際協力研究科博士後期課程）

派遣先：ソウル大学校（韓国）

1. はじめに

19世紀末のウェスタン・インパクトの中で朝鮮は日本との間で結んだ日朝修好条規（江華島条約）を通じて西欧万国公法体制に編入された。周知の通り、その条約文第一条において「朝鮮国ハ自主ノ邦ニシテ、日本国ト平等ノ権ヲ保有セリ¹」と明記されたように、日本側の立場は朝鮮を「自主ノ邦」と見なし、万国公法に基づいた新条約を締結することにあつた。しかし、朝鮮側はあくまで旧来の交隣関係の復活と捉えており、東アジアの伝統的秩序の枠内において理解していた。その最たる例が「清韓宗属関係」であり、「今後二〇年間朝鮮・清国と第三国間に婁婁重大な係争を惹起し、日清戦役の一原因」となったのは周知の通りである²。

ところで、こうした万国公法体制への編入過程において問題となるのが、中国を中心とする東アジア地域に見られた外交秩序（＝華夷秩序）であり、万国公法の受容過程とともに華夷秩序の実態についても研究の関心を集めてきた。近年では従来の中国を中心とする一元的なシステムから、日本や朝鮮などの関係国が中心となる多元的なシステムという見方が提起されている³。本報告ではこうした研究動向をふまえた上で、万国公法体制下での外交問題の一つ「清韓宗属関係」について外国人顧問官の視点から論じていきたい。その詳細については本論に譲るが、特に顧問官であつたメレンドルフとデニーの言説分析を通じて、国王を中心とする「宮中」と両班官僚を中心とする「府中」の対立とその展望について述べることにする。

2. 研究史の整理と「清韓宗属関係」

「華夷秩序」とは、中国皇帝を中心・頂点とする円錐状の世界秩序であり、周辺国は中国皇帝からその国の国王であることを承認する冊封を受け、中国皇帝に臣属し、朝貢を行うことで成立するとされる。一般的に宗主国と朝貢国（属国、藩属国）の関係は、冊封体制とも朝貢関係とも称せられるが、こうした「冊封」と「朝貢」という概念に着目した研究から「条約体制」と「朝貢体制」が対峙するという図式が提示され、その後も朝貢関係は前近代の東アジア国際関係を理解する上で重要な操作概念として定着した⁴。

しかし、その一方でこうした「朝貢関係」については、その実証性の乏しさと再検討の必要性が指摘され、同時に周辺国を中心に据えた華夷秩序研究への関心が払われるようになったのは先に触れた通りである⁵。そこで以下、万国公法体制への編入過程において問題となった朝貢関係、即ち、「清韓宗属関係」について見ていくことにしよう。

先述した日朝修好条規において、朝鮮が「自主ノ邦」と明記されるに及び、当時、駐日清国公使であつた何如璋は、総理衙門に提出した「主持朝鮮外交議」なる意見書の中で、「然るに朝鮮をして自ら行いて人と約を結ばしむるを聴けば、すなわち他国皆その自主を認め、中国の属国、忽ちにその名を去る⁶」と指摘し、万国公法に基づいて条約締結が成された以上、朝鮮の「自主⁷」を否定するのは困難であるという認識を示している。そこで代わりに中

1 市川正明編『日韓外交史料』巻一（原書房、1979年）p.215。

2 田保橋潔『近代日韓関係の研究』上（朝鮮総督府中枢院、1940年）p.482。

3 例えば、豊見山和行『琉球王国の外交と王権』（吉川弘文館、2004年）、夫馬進編『中国東アジア外交 交流史の研究』（京都大学出版会、2007年）等。

4 坂野正高『近代中国政治外交史』（東京大学出版会、1973年）、濱下武志『近代中国の国際的契機』（東京大学出版会、1990年）等。

5 川島真『中国近代外交の形成』（名古屋大学出版会、2004年）、岡本隆司『属国と自主のあいだ』（同、2004年）等。

6 『清季中日韓関係史料』巻2、中央研究院近代史研究所編（1972年）440項。

7 岡本によれば、そもそも「自主」という言葉は、万国公法における独立（Independent）の翻訳語と、伝統的な清韓宗属関係における「内治外交の自主」という二重の意味をもっていた。当時日本は、前者の見方をもって「自主」を「独立自主」と解釈していたが、清韓両国はあくまで「属国自主」という解釈であつた。当初、関係者たちはこうした自主概念の二重性にほとんど気づいていなか

国の「属国」であることを明らかにするためには「よく朝鮮において駐劄大臣を設け、蒙古西藏の例、およそ内国の政治、外国の条約に及び、皆中国によりてこれが主持をなさば、外人あえて覬覦せざるに庶し⁸」と述べたように、朝鮮の内治外交を掌握する駐劄大臣を設け、名実ともに朝鮮の属国化を図ることを主張したのである。

しかし、こうした属国化案を実施することになれば、清国側の負担が重くなり、また日本や欧米列強からの反発を生みかねないという理由で却下された。この属国化案に代わって、朝鮮の「自主」を認めつつも、それまで曖昧であった「清韓宗属関係」を欧米との条約文に明記することによって、日本の主張する「自主ノ邦」を否定しようと試みたのが李鴻章である。その後、米朝条約草案を携えて天津を訪問した金允植は、李鴻章と会談した際に、条約文に「清韓宗属関係」を挿入することで一致したのであるが、その文言こそが後に条約締結国に送ることになる「朝鮮素より中国の属邦たるも、内治外交は向來均しく大朝鮮国君主の自主に由る⁹」という一節を含む国王高宗の親書である。

ここで注意しなければならないのは、両者の考える「属国」と「自主」の解釈に相違が見られたという点であろう¹⁰。例えば、金允植は李鴻章との会談において次のように発言している。

我国の中国の属邦たるは、天下のともに知る所なり。常に中国の着実担当の意なきを患う。我国の若き孤弱の勢をもって、若し大邦の保を作すなくんば、則ち実に特り立ち難し。・・・天下の人、中国の我国を担任するを見れば、則ち各国、我を軽んずるの心も、また小阻によりて、且つその下において、もって均しくその自主してこれを継ぐを得たり。これ則ち各国と相交わるも害なくして、平等の権を用ゆ¹¹。

朝鮮が「中国の属邦」であることは天下周知の事実であるが、これまで清国が本気で宗主国としての責任を担おうとしていたのかが憂慮すべきことであった。我が国のような「孤弱之勢」では、大国の保護なしに生き残ることはできない。だが清国が我が国を保護する姿勢を見せれば、他国から軽んじられることもなく、各国と交渉できるという内容である。つまり、彼がここで主張したのは、「清韓宗属関係」の挿入による自国の安全保障の確保であったと言える。

一方、李鴻章や清国の立場では「属国」の面に重点が置かれていた。ゆえに、朝鮮を自国の影響下の元に留め置き、曖昧であった「清韓宗属関係」を条約文に明記することによって、朝鮮が清国の「属国」たることを他国に知らしめ、また自国の国益を守るためには、朝鮮の「自主」に干渉することさえも厭わなかったのである。

その後、両国の認識の相違は、しだいに清国の干渉が強まるにつれて表面化してくることになるが、このような「清韓宗属関係」について、万国公法を用いて明確に定義づけたのが米国人顧問官デニー (Denny) であった。彼はその著述『清韓論』を通じて、清国の対朝鮮政策を手厳しく批判したのであるが、次にその内容について見ていくことにする。

3. デニーの『清韓論』とメレンドルフの反駁論文

まずデニーの『清韓論』の出版背景について説明しておこう¹²。先述したように、17世紀にはじまり開港以後も存続してきた「清韓宗属関係」については、当事国たる清韓両国だけに留まらず、一種の外交問題として国際的な論議の焦点となっていた。折しも袁世凱の内政干渉が深刻化する時期に赴任したデニーは、こうした清国の朝鮮政策に対して反対の立場を示しており、その後、欧米への公使派遣について李鴻章と会談した際の内容を記した覚

ったが、しだいに清国と朝鮮の間でも解釈の不一致が見られるようになったのである。岡本隆司「大君と自主と独立」『近代日本研究』第28巻(2011年)を参照のこと。

8 同上。

9 『清季中日韓関係史料』巻二、中央研究院近代史研究所編(一九七二年)p.675。

10 この辺りについては、岡本前掲書、第一部を参照のこと。

11 『陰晴史』國史編纂委員會編(1972年)高宗18年12月27日、pp.57-58。

12 『清韓論』については、岡本前掲書の他、Robert. R. Swartout, *Mandarins, Gunboats, and Power Politics: Owen Nickerson Denny and the International Rivalries in Korea*, The University Press of Hawaii, 1980. 金賢淑「구한말 고문관 데니의『清韓論』 분석」『梨花史學研究』第23, 24合輯(1997年)、鄭容和『문명의 정치사상』(문학과 지성사, 2004年)等を参照。

書が『清韓論』の下敷きとなっている¹³。

その具体的な中身は、すでに先行研究でも明らかにされているので、ここでは本論と関連する部分だけの引用に留める。まず、彼自身、独立国については、

主権とは国を治める最上権である。この最上権は内外いずれにも行使するものである。対内的な主権とは、その国民に固有のもの、あるいは国内で制定した基本法で君主に託されたものである。その対外的な主権は、他のあらゆる政治集団との、戦時・平等における国際的關係が維持される¹⁴。

という国際法学者ホイートン (Wheaton) の主権概念を引用した上で、「内政外交の問題を、いつも外国に依存せず、独自に処理してきた国は、法的には独立しているのであり、独立主権国家の範疇に入れなくてはならない¹⁵」と述べている。言うまでもなく、日本や米国と条約を結んだ朝鮮はこうした独立国に該当するのであり、そのことは「内治外交は向來均しく大朝鮮国君主の自主に由る」という国王親書の文面が何よりも物語っている。その一方で、朝貢關係については、

朝鮮はしかし、清国の朝貢国である。この朝貢關係は過去、誠心誠意続けられてきたし、清朝が朝鮮を友好的かつ正当に遇するかぎり、朝鮮もその継続を心底から望むものである。それでも、一国が別の国ともつ朝貢關係は、その主権、独立権にまったく影響しないし、するはずもない。したがって、朝鮮の清朝皇帝に対する毎年の貢納は、決して朝鮮国王の主権・独立を傷つけるものではない¹⁶。

と述べているように、朝貢關係そのものを否定しておらず、朝鮮を清国の「朝貢国 (tributary state)」であると認識していた。しかし、こうした朝貢關係は国際法上、「その主権、独立権にまったく影響しない」のであり、朝貢国であることは国家の独立性を損なうものではないとする。つまり、清国側の主張する伝統的な「属国」と、万国公法でいう属国 (dependent state) とは異なるものであり、朝鮮の国際的地位は、独立国であるという結論を導きだしている。

その後、『清韓論』は、関係各国に大きな波紋を呼ぶことになるのであるが、これに反駁文を寄稿したのがデニーの前任顧問官であったメレンドルフ (Moellendorff) である。周知の通り、彼は初代外国人顧問官として朝鮮に赴任した経歴をもつ人物であり、その活動内容について論じた論考は多数存在する一方で、この反駁文そのものを取り上げたものは、管見のかぎり余り見当たらない¹⁷。そこで以下、デニー・メレンドルフ論争を整理・要約した上で、「清韓宗属關係」をめぐる解釈の相違について確認していくことにしよう。

まず、彼は、1637年に結ばれた「三田渡の盟約」によって「清韓宗属關係」が成立したと前置きし、こうした東アジア冊封体制下における「属国」と、万国公法体制下における属国という用語の違いを説明するために、言語学的な見地から検討を行っている。即ち、朝鮮の隷属的地位を意味する「属国 (속국)」という朝鮮語を翻訳するに際して、「欧米人たちは無差別に 'vassal state' や 'tributary state' と翻訳しているのであるが、「属の意味は、ある権威に従属する部下のように臣民と関連」する言語であると説明する¹⁸。したがって、「属国」という言葉の適切な翻訳は、「subordinate」(従属国) ないしは 'dependent state' (属国) となり、宗主国と藩属国との關係に対応する言葉である」とした上で、「朝貢とは、ただ藩属国 (または中国語で進貢国) が宗主国に対して行う義務のうちの一つに過ぎない」と述べ、朝鮮は清国の朝貢国、即ち、国際法上、独立国であるというデニーの主張に反論したのである¹⁹。

また同様に、国家の独立性を損なわない朝貢關係と、主権が著しく侵害されている属国というデニーの区分につ

13 岡本前掲書、pp.235-239.

14 『清韓論』p.51.

15 同上。

16 O. N. Deeny 著・岡本隆司校訂・注釈『清韓論』(成文社、2009年) p.52. 以下、引用に際しては『清韓論』と表記する。

17 金賢淑前掲論文の他、李起勇「開港期 清國의 朝鮮屬國化 政策과 朝鮮의 對應」『선문대학교 인문과학계열』第3巻(2003年)等。

18 P. G. von Moellendorff, "A Reply to Mr. O. N. Denny's Pamphlet entitled: China and Korea," Moellendorff, Rosalie. Von, P.G. Von Moellendorff: ein Lebensbild, Leipzig, 1930, p.128.

19 Ibid., p.129.

いては、

属国であっても国際法上、独自のかつ確実な主権国であり、諸権利を享受することができる。ただし、その条件に付随する義務においてのみ可能であり、それゆえ、他国への従属とは、主権に対する制限を意味するが、主権の絶対的な否定を意味するのではない。・・・他国の保護下にある国家は、一見すると主権を有しているように見えるが、完全なる主権を有するわけではないのである²⁰。

と、国際法学者のハレック (Halleck)、カルボ (Calvo)、ウールジー (Woolsey) の定義を引用しながら、属国という地位であっても部分的な主権行使は可能であるとし、条約締結権や戦争・講和を宣言できる権利等をもたない国は、「条約の明文化された条項にしたがって、半独立もしくは属国と分類されなくてはならぬ²¹」というデニーの主張に疑問を呈した。

4. 今後の展望と課題

以上見てきたように、両者の認識には、「朝貢国」に対する解釈の相違が存在し、突き詰めて言えば、朝鮮を国際法上の独立国と見なすべきか否かであった。言うまでもなく、前者の見方をデニーが、後者のそれをメレンドルフが代弁していたのであり、そういう点においては「両者の論争はまさに朝鮮政府側と清国政府側の論争であった²²」と見なすことができるかもしれない。

しかしながら、その一方で両者の共通認識も存在していた。即ち、朝鮮の主権国家として独立する能力が非常に懐疑的であったという認識がそれである。例えば、デニーは、

西洋列強は、この小王国を何世紀ものあいだ神秘的なかに封印してきた隠遁状態から、文字どおり引きずり出し、圧迫や不当な待遇を受けたら援助するとのお墨付きをあたえて文明国の社会に加入させた。それなら、その新たなメンバーが、国際社会で生きてゆくまさにその入口で、抑圧されるにまかせては、約束をやぶるにひとしい。かの列強はそんなことを絶対にゆるさないだろう²³。

と述べており、弱体な国家である朝鮮が独立国として生き残るためには、国際社会からの援助が必要である点をほのめかしている。また、メレンドルフもやはり、

仮に朝鮮が清国の友国として独立を維持するくらいの強国となれば、清国は自国の利益のために、ようやく幼い子供が一人歩きするようにするであろう。だが朝鮮が現在の脆弱な状態から独立すれば、一体どのくらい続くであろうか²⁴。

と「清韓宗属関係」からの離脱を危惧しているように、依然として朝鮮は清国の保護が必要であるという立場を主張していた。このように両者は、何かしらの「保護」が必要であるという点においては一致していたのであり、それを国際社会に求めるのか、或いは従来通り宗主国に求めるのかによって意見が分かれたとも言える。

その後、こうした保護を前提とする外交路線は、国王を中心とする宮中派と、両班官僚を中心とする府中派との間でも分かれることになる。即ち、東アジア冊封体制下における「朝貢国」を、万国公法体制下における独立国と解釈したデニーの系譜と、属国としたメレンドルフの系譜がそれであるが、しだいに両者の政治的葛藤は、「保護の帰趨」から「保護の是非」へと論点が変化していった。今後の課題としては、こうした対立の実態と変化が、「宮中・府中」の対立にどのような影響を及ぼしたのかについて検討していきたい。

20 Ibid.

21 『清韓論』 p.51.

22 金賢淑前掲論文、p.123.

23 『清韓論』 p.58.

24 Ibid., pp.135-136.

江南左派形成の背景と「安哲秀現象」

横溝 未歩（国際協力研究科博士後期課程）

派遣先：ソウル大学校（韓国）

1. はじめに：「江南左派」とはなにか

韓国人歌手・PSY（サイ）が発表した「江南スタイル」が、Youtube で再生回数 13 億回（2013 年 2 月現在）を越え、韓国だけでなく世界中で話題になっている。

「江南スタイル」が韓国国内で人気となった理由の一つは、その歌詞や映像が、韓国社会における「江南」イメージへの風刺になっているという点にあった（William Pesek）¹。

そもそも韓国国内では、「江南スタイル」が発表される以前から、「江南」というキーワードに注目が集まっていた。すなわち、いわゆる「江南左派」である。

「江南スタイル」では「江南」を風刺しながら、その歌詞において、「근육보다 사상이 울퉁 불퉁한 사나이（筋肉より思想がでこぼこな男）」という表現が登場する。「思想がでこぼこ」という言葉が示すのは、しばしば「思想が一貫していない」と批判される「江南左派」を指しているように思われる。

では、「江南左派」とはいったい何であろうか。

「江南左派」とは、「江南」と「左派」という単語の合成語である。「江南」というのは、ソウルを東西に流れる漢江の南、主に「江南区」・「瑞草区」・「松坡区」といった、裕福な地域を指す。この地域には、世界的に有名な SAMSUNG の本社などもあり、この地域に住めるのは韓国人の 3.4% である²。富の集中だけでなく、教育環境にも差異が存在し、韓国社会にとって「江南」は単純にソウルの一地域ではない意味を持っている。

また、韓国において「左派」は複雑な性格を持っている。分断と北朝鮮側における左派政権の樹立と、それにとりまう「反共」という韓国の国是によって「左派」は弾圧の対象であった。民主化が達成され 1990 年代以降になると、国内政治における文脈において「右派」と「左派」が対立した³。現代韓国社会における福祉、女性、環境など、さまざまな社会問題における「対立」へと変化していった⁴。こうして「右派對左派 / 保守對進歩」という対立は形を変えながら継続して存在してきた。

こうした意味から定義を試みると、「江南左派」とは、単なる「江南」に住む「左派」ではなく、韓国社会における上層階級、あるいは裕福層でありながら、「左派」的な価値を重視する人々ということができるだろう。

本稿では、韓国で「江南左派」がどのように登場し、なぜ韓国社会で注目されるに至ったのかについて分析を試みたい。まず先行研究やメディアの記事を使用して「江南左派」議論を整理した後、韓国社会において「江南左派」が登場する背景を概観し、それによって「江南左派」を構成するのはどのような人々であるかを分析する。その後、第 18 代大統領選挙の過程で注目された「安哲秀現象⁵」に焦点をあて、その影響力の原因を探りたい。最後に、「南

1 'Gangnam Style' Tells Economic Truth of Our Day 『Bloomberg』 2012.10.15 (<http://www.bloomberg.com/news/print/2012-10-15/-gangnam-style-tells-economic-truth-of-our-day-william.html>) など。

2 「江南 3 区」の人口は、全国人口の 3.4% にすぎないが、銀行預金額はソウルの 47%、全国の 27% にもなる。（「[2012 국감] “산업 고금리·다이렉트” 강남 3 구에만 집중」『아시아경제』 2012.10.16 <http://view.asiae.co.kr/news/view.htm?idxno=2012101617130668640&nvr=Y>）

3 「現在の理念的葛藤は、対北朝鮮政策にとどまらず両極化解消問題（所得および福祉政策、租税政策と雇用政策、教育政策）などにいたるまで諸般の領域に及んでいる」한관수·장윤수 「한국의 보수와 진보의 대북관에 대한 연구」『한국정치학회보』 제 46 집 제 1 호, 2012.3, pp.63-88.

4 「（「進歩の側にも」環境や女性、その他さまざまな問題への対応が切に求められるようになった」（尹健次『現代韓国の思想 一九八〇——一九九〇年代』岩波書店、2000, p.173. カッコの中は著者による。）

5 安哲秀現象とは、2011 年 10 月 26 日のソウル市長補欠選挙に出馬宣言をした直後から爆発的な支持を受けた安哲秀の登場により「政治的経歴のほとんどない人（安哲秀）が、大衆の爆発的な支持を得、あつという間に既存の政治圏を無力化した」現象を指す。この安哲秀現象は、「今回の選挙（2011 年ソウル市長補欠選挙）に限らず、来年の総選挙や大統領選挙（2012 年の大統領選挙）へと繋がっていく可能性が高く、現在も既存の政治圏の再編を促進する重要な要因になっている」（신용욱 「안철수 현상」과 한국정치」『내일을 여는 역사』 2011 년 가을호（제 45 호）, 2011.12.）カッコ内は筆者による。

南葛藤」がもっとも先鋭化するテーマの一つである「統一問題」について、「江南左派」がどのような姿勢をとるかという点について、「江南左派」支持層の「統一観」を中心に分析を試みる。

2. 「江南左派」に関する議論

まず、未だアカデミックには取り上げられることの少ない「江南左派」に関する議論を整理したい。

韓国の代表的な新聞の一つである『中央日報』のある記事によれば、「持てる者＝右派」「持たざる者＝左派」という過去の二分法が「一般的」であったとされている⁶。つまり、分断以降の「既得権層」が「右派（保守）」であり、一方で力や経済力を持たないが平和を希求する大衆が「左派（進歩）」であるといったようなイメージ付けがなされてきた。このような「二分法」は、現在に至るまでさまざまな韓国国内問題にも強く影響を及ぼし、韓国社会に根強い「亀裂」をもたらしている。こうした対立の図式は、「南南葛藤⁷」と呼ばれ、特に北朝鮮をめぐる政策においては特に激しく対立してきた。

過去の二分法が、「江南左派」には適用されないところにその「新しさ」がある⁸。要するに「江南左派」は、「持てる左派」として登場したのである。

「江南左派」という言葉から受け取られるイメージも、時期によって変化を見せている。「江南左派」という言葉が登場した当時、彼らは、(進歩政権である) 盧武鉉政権下では、政治エリートを狙うもの」という否定的な意味合いが強かった。反面、「(保守的な) 李明博政権に入ってから肯定的な意味のものへと変わってきているのではないか」と指摘されており⁹、この「既得権層」でありながら「左派」であるという、従来の韓国社会では矛盾するように思われる「江南左派」は、若い世代を中心に肯定的に受け入れられるようになってきた。

次に、「江南左派」に関する韓国国内での評価に焦点を当ててみたい。

- ・「江南左派は我々の社会で公開的に自ら『左派』であると宣言した初めての勢力」「自らの生活と地域を基盤とする新しい左派勢力の出現」¹⁰
- ・「江南左派は現在『生活政治』を基盤としてめざましい活動を行い、実際に社会的影響力を行使するほとんど唯一の勢力」¹¹
- ・江南は成長と富を象徴する。江南左派は成長する左派、富を享受する左派だ¹²。
- ・「江南左派が増えれば、社会がより穏やかになるだろう」¹³
- ・「国民所得 2 万ドル時代に生きる大韓民国で、江南左派の登場は自然な現象」¹⁴

「肯定的な議論」では基本的に、「江南左派」という現象は「自然な現象」であり、「進歩の外縁拡大」という意味で受け取られている¹⁵。特に「江南左派」の特徴であるとされる「左派」の実践¹⁶といった部分での評価が高い。

6 「진보의 분화 ... 리무진 리버럴 '강남 좌파' 뜬다」『중앙일보』2011. 3. 8 より一部抜粋。(http://article.joinsmsn.com/news/article/article.asp?total_id=5155885&cloc=olink|article|default)

7 「南南葛藤」とは「南と南の葛藤」、言い換えれば「南韓社会の内部葛藤」を意味する。南南葛藤は「南北葛藤」に対称する意味で作られた用語として南韓社会の内部葛藤一般ではなく、「南北関係をめぐる南韓社会の内部葛藤」を称する概念として使用されてきた。(손호철, 『해방 60 년의 한국 정치 1945-2005』, 이매진, 2006, pp.17-18.)

8 「진보의 분화 ... 리무진 리버럴 '강남 좌파' 뜬다」『중앙일보』2011.3.8

9 「진보진영이 보는 '강남좌파' / 진보의 확대나 중도의 다른 이름이나」『한겨레』2011.8.3 より姜俊晩の言葉を引用。カッコの中の表示は著者による。(http://www.hani.co.kr/arti/culture/religion/490105.html)

10 ウ・ソクフン (우석훈) 2.1 研究所長 (経済学者。「나는 꿈수다」・「나는 꿈사리다」出演、進行など)「진보진영이 보는 '강남좌파' / 진보의 확대나 중도의 다른 이름이나」『한겨레』2011.8.3

11 イ・テックァン (이택광) 慶熙大教授 (英米文化専攻。大学時代、NL運動を行っていた)「진보진영이 보는 '강남좌파' / 진보의 확대나 중도의 다른 이름이나」『한겨레』2011.8.3

12 「진보의 분화 ... 리무진 리버럴 '강남 좌파' 뜬다」『中央日報』2011.3.8

13 イ・ジュング (이준구) ソウル大教授、前掲記事。

14 キム・ホギ (김호기) 延世大教授、前掲記事。金教授は、江南左派を自認してはいないが、江南左派の意義を認めている。

15 前掲記事

16 강준만, 前掲書, p.52.

「富」を象徴する「江南左派」が、韓国社会において「新しい現象¹⁷／新しい進歩」であり、言い換えれば「よりよい進歩」であるとされる理由と背景について、チュ・デファン(주대환)は次のように述べている。

これまで進歩は「生活(衣食住)の問題に関心な、あるいは無能な進歩」であった。(中略)それは一言で、後進国型の進歩、いわゆる民族民主運動時代の姿を脱皮することができなかったせいだった。(中略)

新しい進歩は、社会経済的問題の解決を中心課題にしなければならない。(中略)進歩は、今は「食べることに困らない民主主義」を実践することでしか国民の心を再び引きつけることはできない。¹⁸

この点は、尹健次によって「進歩的自由主義者」と評される¹⁹崔章集が、盧武鉉政権に対して行っていた主な批判点でもあった²⁰。盧武鉉政権における「進歩」は、「古い進歩」であったとすれば、「豊かな」イメージをもたらす江南左派は「新しい現象」であり、そこに「江南左派」の「目新しさ」が注目されるようになったといえよう。一方で、「江南左派」に否定的な評価もある。

- ・(江南左派と言われる人々は)公私があまりにも違うのが問題²¹。
- ・「体制の果実を誰よりも多く享受する彼らが体制のよくない面ばかり浮き彫りにして批判するのは前後が合わない言行²²」
- ・民主化運動、進歩運動を主導してきたのは江南左派だった。江南左派が突然登場した新しい現象であるとするのは間違いである。我々の本当の問題は、江南左派ではなく「江北右派」である。²³

否定的な意見には、二つの特徴がある。一つ目は、「江南左派」の言動に対して注目が集まり、その「言行不一致」を批判するものである。二つ目は、「江南左派」に否定的なのは保守だけではないという点である。孫浩哲は、旧左派的マルクス主義と評され²⁴、自らも左派を自認する知識人であるが、「江南左派」は「新しい現象」ではなく、それよりも韓国社会においては「江北右派」が重要であると指摘している。

もちろん江南右派に亀裂を走らせ、江南と富裕層において、左派を拡大することは非常に重要だ。しかし、最近、流行している江南左派の話題は、より根本的な問題である江北右派という問題を隠ぺいしている²⁵。

本来、江南に象徴される富裕層が「右派」であるとするならば、江北に象徴される庶民層は基本的に「左派」である。そのため、「江北左派」が普通であり、「江北右派」のほうが異例的なものであるという。

また注目すべきは、この「江南左派」議論が行われる過程で、「曹国(조국)現象²⁶」に代表される、新しい政治論争の流れが生まれたということである。自らを「江南左派」と自認するソウル大学の曹国教授の個人的な人気に加え、SNSを利用した世論を通じて、彼を指導者(2017年大統領選挙の候補)とみる流れである。このようなネットを利用した、若い世代に向けての「進歩」政治への呼びかけ(訴え)は、2012年の大統領選挙に少なからず影響を与えるものであった。

17 「진보의 문화 ... 리무진 리버럴 '강남 좌파' 뜬다」『中央日報』2011.3.8

「資本主義を批判しても、社会主義理念に固守せず、ヨーロッパ式の福祉国家を志向する」

18 주대환 「한국 진보에 미래는 있는가?」『보수와 진보의 대화와 상생』나남, 2010, pp.240-241.

19 尹健次 「現代韓国の思想 一九八〇——一九九〇年代」岩波書店、2000を参照。

20 주대환, 前掲論文。

21 김・스도크(김순덕) 論説委員 「[김순덕 칼럼] 분당우파 vs 강남좌파」『동아일보』2011.3.20(<http://news.donga.com/3/all/20110320/35731181/1>) カッコ内は著者による補足である。

22 유・찬현(유창현) ソウル市立大経営学部教授(保守知識人) 「진보의 문화 ... 리무진 리버럴 '강남 좌파' 뜬다」[이슈추적] '있는 자=우파, 없는 자=좌파' 이분법 탈피」『중앙일보』2011.3.8

23 孫浩哲(손호철) 西江大学教授(尹健次によれば、「旧左派的マルクス主義」と分類される) 「[손호철 칼럼] 강남 좌파? 진짜 문제는 '강북 우파' 다」『PRESSian』2011.4.19

24 尹健次、前掲書。

25 「[손호철 칼럼] 강남 좌파? 진짜 문제는 '강북 우파' 다」『PRESSian』2011.4.19 より引用。

26 김용민 『조국현상을 말한다』 미래를 소한 사람들, 2011

「裕福でありながら、左派的」といった現象は、韓国独自のものではない。しかしながら、韓国における「江南左派」がどのように形成され、こういった特性を持つのかという点に注目し、以下の章で検証していきたい。

3. 「江南左派」形成の政治的および社会経済的背景

「江南左派」という言葉はもともと、盧武鉉政権時に与党と与党を支持する人々、俗に「386 世代²⁷」を皮肉る言葉として登場した。

「江南左派」の亜流といえる「満腹な進歩 (배부른 진보)」という言葉が、初めて登場したのは、2005 年 3 月 24 日『文化日報』論説委員イ・シンウ (이신우) が書いた「満腹な進歩」というタイトルのコラムのようだ。(中略) このコラムは「最近では、膨大な富を持っていながらにして、理念的には進歩を志向したり、主張したりする人々がたくさん出現している。

「江南左派」という言葉が言論に登場したのは、2006 年 3 月 13 日『東亜日報』編集局副局長パク・ヨンギョン (박영균) が書いた「賭けゴルフを楽しむ‘江南左派’」というタイトルのコラムのようである。²⁸

では、江南左派の核心をなしているとされる「386 世代」はどのような政治的性格をもっているのだろうか。

ハン・サンジン (한상진) は、彼らの生まれた 1960 年代と、彼らが大学に通った 1980 年代の特徴を次のように説明している²⁹。

1960 年以降、韓国の経済的近代化が加速していった。経済的近代化は、広範囲の階層上昇移動とともに、自己表現の要求、参加の熱望、既存の権威に対する批判意識の強い社会集団を可能とした。物質的価値だけでは推定することのできない、違う内面性と欲望をもった人間性、すなわち美しい生活、人権と自由の尊重、民主主義の伸長、因習と権威の自由な検証、環境保護などに献身する参加的人間性が形成され始めた。

また 1980 年代は、権力層と民衆、催涙弾と火炎瓶、極左と極右の理念が激しく対立した時期である。6 月抗争や、光州事件がその例である。1980 年代に大学に通った 386 世代は、過去のどんな世代よりも、より組織的で体系的な方法で、既存の権威と因習を否定し、新しい自我を探そうとした苦しい実験を続けることとなった。

こうした時代を通じて 386 世代は、中産階級として成長し近代化を享受する中で文化的実践能力を獲得していく一方で、既存の権威を否定し、阻害された少数集団にたいして理解を示す、改革志向的中民を形成するようになった³⁰、という。

民主化と、産業化を達成する役割を担った 386 世代は、韓国政治において重要な意味を持っているといえる。同時に、このような経験を経て 386 世代は、時間が経つにつれ経済的には豊かであるが、「自己アイデンティティを強く持ち、現状維持よりも変化を追求³¹」し、理念的にはなお進歩性向を強く表すという、「江南左派」の典型となったのである。また、「江南左派」がインターネットによって若い世代からの人気を勝ち取ったことと関連して、386 世代が、コンピューターを大衆的に扱い始めた最初の世代³²であるということも注目される。

4. 「江南左派」の構成

前述のように、「江南左派」は保守陣営からの皮肉から始まったが、次第に肯定的な意味へと変化していったといえる。その理由の一つとして、『『進歩』が精練されクールな人々であるということを表す、といった間違っ

27 990 年代中盤に登場した言葉で、当時「1960 年代に生まれ、1980 年代に大学に通い、30 代の人々」であり、民主化闘争を主導した学生運動の世代として知られる。

28 강준만『강남좌파』인물과사상사, 2011, pp.99-105, p.108.

29 한상진「386 세대는 누구인가? -9 가지 명제 -」한국정신문화연구원『386 세대의 가치관과 21 세기 한국』2000.4.7

30 한상진, 前掲論文。

31 정성호『중년의 사회학』살림, 2006, p.23.

32 정성호, 前掲書, p.28.

い方がされて」おり、「江南左派はその典型的な事例³³」であることが挙げられるだろう。現代韓国社会では、「進歩」的であるということは、道徳的に優越しているという考えかた³⁴があるほど、非常に肯定的なものとして受け取られている。

また「江南左派」に対する「洗練された」イメージは、「江南」という言葉のもつイメージによるところが大きい。「江南」に対するイメージに対する調査では、1位は人が多く複雑なところ（86%、重複回答）、2位は金持ちが住むところ（74.7%）、3位は若者に似合う場所（67.9%）、4位は活気のあふれる場所（66.3%）と続いている³⁵。

こうして、お金持ちで高学歴、なおかつ精練されたイメージを持つ「江南左派」という言葉は、好意的な言葉へと韓国社会に受け入れられ始めている³⁶。

「進歩派」の政治家に関するイメージも変化している。

<図1>



<図2>



<図1>³⁷は、2012年の「統合進歩党」から出馬する大統領候補の一人だったイ・ジョンヒ議員である。彼女が「統合進歩党」の前身の一つである「民主労働党」の代表であった2010年には翌年の予算処理をめぐって、国会で「保守」的なハンナラ党議員ともみ合う図である。この図のように、従来の韓国の「左派／進歩」には、ある種闘争的なイメージがある。

一方、<図2>は、「進歩新党」のノ・フェチャン（노회찬）ソウル市長候補（当時）がチェロを演奏している写真である。ノ・フェチャンは、「すべての国民が、楽器の一つくらいは演奏することのできる国」が、彼の夢であるということを明かし、文化的にも「洗練」され生活に余裕があるイメージを全面に押し出した。この写真は、「江南左派」のイメージを大衆に認識させるものとなった³⁸。

またソウル大学教授である曹国に代表されるように、「知識人」といったイメージも「江南左派」の特徴である。これは、「江南左派」の核になっている386世代の性格からも見いだすことができる。

彼らが大学に進学する1980年代の大学進学率は、平均すると高等学校卒業生の35%程度である³⁹。大学進学率

33 「논쟁/강남좌파, 어떻게 바라봐야 하나?」『한겨레』2011.7.27、김호기의指摘より。（<http://www.hani.co.kr/arti/opinion/argument/489089.html>）

34 주대환「한국 진보에 미래는 있는가?」『보수와 진보의 대화와 상생』나남, 2010, p.245.

35 「'강남'하면 가장 먼저 떠올리는 이미지는?」『파이낸셜뉴스』2012.6.26（http://www.fnnews.com/view?ra=Sent0701m_View&corp=fnnews&arcid=201206260100214190013102&cDateYear=2012&cDateMonth=06&cDateDay=26）

36 윤・피ョン쥬ンによると、韓国社会で「進歩」が尊敬を集めるようにあった理由を次のように説明している。冷戦反共主義と賤民資本主義によって歪められた、既得権である保守右派陣営の原罪から始まっている。そして、李明博政府の退行的な行動がそれを助長しているという。（윤평중「社説[아침논단]강남좌파는 북한문제를 직시할 수 있을까」『조선일보』2011.7.2）

37 「이정희 민노당 대표, 여당 의원들 집단폭행에 실신」『민중의소리』2011.2.25（<http://www.vop.co.kr/A00000343654.html>）

38 「노회찬 첼로 연주 사진' 강남좌파 전파에 일조」『한국일보』2011.2.2（<http://news.hankooki.com/lpage/society/201102/h2011022509383021950.htm>）

39 『문교통계연보』문교부, 1980-1989より著者作成。ここでは、高等学校卒業生の大学進学率を算出しているが、大学入学該当年齢者のうち何%が大学に進学しているかに着目すれば、大学進学率は20%後半から30%前半ほどになる。（社会実情データ図録 <http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/3928.html>）

が80%を超える現在と比較すれば、80年代の大学進学者はある程度「知識人」であるといえることができるだろう。

また386世代は一般的に、社会参与が活発であると言われているが、どのような人々が社会参与をより活発に行うのかについて、ユン・サン Chol (윤상철) は、次のように分析している。

大学時代により積極的に学生運動に参加した人、また女性よりは男性、非専門技術職・販売/サービス業を仕事にする人よりは、専門職/管理職・事務職の人がより積極的な社会活動に参加しているという。また、経済的には中産層はより積極的、民衆はより消極的だ。すなわち、386世代の中でも、大学時代の経験と現在の社会経済的地位によって、社会参与の姿勢が違う⁴⁰という。「江南左派」は、積極的に「左派の実践」を行う人々と評価されていることを考慮すれば、上記の要素は「江南左派」に共通しているといえるのではないかな。

これらのことから、「江南左派」とはどのような人々であるかを本稿なりに整理してみたい。

姜俊晩は「江南性」といった言葉で、「江南左派」の特徴を説明した。すなわち、「合理性、配慮、魅力、田舎臭くない、グローバルな競争力」である⁴¹。

本稿ではこれに加えて、386世代の政治的性格から、「江南左派」の構成は、1) 現在40代後半から50代前半にかけての、2) 知識人、専門職/管理職・事務職従事者が中心であると分析する。また、3) インターネットなどを通じて議論や社会に対する発言を積極的に行う「江南左派」は、4) 経済的に中産層であり、洗練されたイメージを活用しながら活動しているといえるだろう。

では、「江南左派」の政治とはどのようなものであろうか。現在のところ、「江南左派」を掲げた政党はまだ存在しない。しかし、江南左派の核となっているといわれる386世代の政治家から、その実際の政治的態度に注目したい。

盧武鉉政権以降、386世代の政治家（「386政治家」）はその大部分が「開かれたウリ党」に所属し、与党になることによって彼らの政治的な力はさらに大きくなった。

しかし、386政治家に対する批判は保守・進歩両方から行われた。保守言論と保守政党は、彼らを急進的な理念をもったアマチュアと責立てた。また、改革的・進歩的な層は、彼らの現実妥協的な路線を批判する声があがった⁴²。

17代大統領選挙と、総選挙を経て、386政治は第二期となった。それまで主に与党に布陣していた386政治家たちが、国政の全面に出てくるようになり、特に17代総選挙を通じて国会に大挙進出するようになった。17代国会で特徴的に現れたのは、386政治家の現実主義的な傾向である⁴³。

このように、非常に改革的であろうと期待された386世代出身の政治家たちも、「現実主義的」に変化していった。すなわち、政治家・エリートとなった386世代は、時間がたち、国民から期待されているほど「改革的・進歩的」とは言い難い。それが、386世代が核となっている「江南左派」政治の一側面であるといえることができるであろう。

5. 第18代大統領選挙と「安哲秀現象」

第18代大統領選挙は、保守派である朴槿恵の勝利に終わった。選挙後、「若い世代ではなく、古い世代が重要だった」と皮肉の声もあるが、長い間、ずっと大統領候補一位を独走していた朴槿恵の優勢を揺るがしたのが、無所属の候補、安哲秀だった。

この「安哲秀現象」の主役・立役者として注目されているのが「江南左派」であり、また2040世代⁴⁴である。全体の有権者の3分の2を締め、また進歩的な指向をもつ2040世代は、進歩派が多数派へと変換する政治変化の

40 윤상철 「높은 개혁열망, 분절화된 신뢰구조」 한국정신문화연구원 『386 세대의 가치관과 21세기 한국』 2000.4.7. ここでは、ソウル大学を卒業した386世代へのアンケートを使用して分析されている。

41 「안철수는 ... 엄친아 강남좌파 ... 강준만 교수 핫이슈 12명 인물평」 『동아일보』 2012.5.24 (<http://news.donga.com/Politics/3/00/20120524/46476208/1>)

42 유창선 「386 정치인」의 변화와 책임 『한해문화』 2005 가을. 特に、イラク派兵問題・国家保安法問題において改革路線を示すことができなかったことが指摘されている。

43 유창선, 前掲論文。

44 20代から40代の、政治的にリベラルな世代をさす。最近では、50代から60代（5060世代）の保守的な人々と区分して対照的に使用されもする。（이광석 「2040세대」의 등장과 SNS의 역할 『지역정보화』 2011）

中心にいとされる⁴⁵。

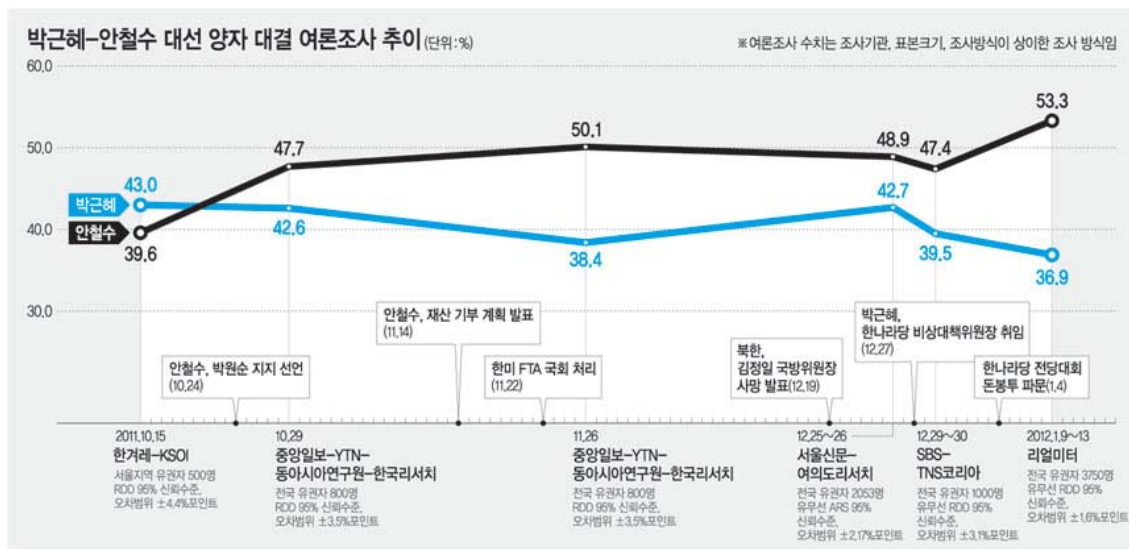
若い世代と、古い世代の対立とも言える世代構造は、2010年地方選挙から登場した。韓国の選挙は、これまで地域構造・地域主義に支配されてきた。しかし、この2010年の地域選挙では、多くの地域で2040世代が進歩陣営の候補者に票を投じ、古い世代が保守陣営の候補者に票を投じるという、世代構造の重要性がはっきりと現れている⁴⁶。

では、2012年12月に行われた第18代大統領選挙において、「江南左派」と2040世代はどのような役割を演じたのだろうか。

前述の通り、第18代大統領選挙の候補者でもっとも有力であると目されていたのは、セヌリ党の朴槿恵だった。民主党の候補者文在寅への支持率はさほど高くはなかった。一方で、2030世代と触れ合う大衆講演を行いながら、若い世代との共感を深めていくことで人気を集めていた安哲秀は、出馬を公式に宣言する前から高い支持率を誇っており、2011年9月19日に大統領への出馬を表明した。

世論調査によると、朴槿恵と安哲秀の二者対決であった場合、朴槿恵を押して安哲秀が50%前後の支持をえると予想されていた<図3>。

<図3>：朴槿恵—安哲秀、大統領選挙両者対決世論調査の推移⁴⁷



青い線が朴槿恵への支持率、黒い線が安哲秀への支持率である。『文化日報』2012.1.19

政治を手がけたことのない安哲秀が、このような「安哲秀現象」を巻き起こした背景には、「江南左派」の存在があったといえる。

まず、安哲秀は「江南左派」なのかという点から見ていきたい。

『江南左派』の姜俊晩は、「엄친아（母親の友達の息子、転じて「家柄もよく、性格も明るく、勉強もよくでき、人物もよく出来たすべての面で優れた若者」という言葉を使いながら、安哲秀がこのような「完璧な」江南左派であると評している⁴⁸。

さらに本稿では、4章で「江南左派」の具体的な特徴を、1) 現在40代後半から50代前半、2) 知識人、また専門職/管理職・事務職従事者が中心、3) インターネットなどを通じて議論や社会に対する発言を積極的に行い、4) 経済的に中産層であり、洗練されたイメージを活用しながら活動している、と整理している。

ここに当てはめてみると安哲秀は1962年生まれの満51歳で、ソウル大学医学部の教授であり、SNSで「アン

45 유창오『진보 세대가 지배한다』폴리테이아, 2011, p.26.

46 これまで地域構造が明確に表れていた慶尚南道・釜山・蔚山(PK)でも、世代構造が地域構造に変わって現れた。これは1987年の民主化以降、初めてのことであり非常に重要な事件であるといえる。(유창오, 前掲書, p.31.)

47 「2030' 행동하는 무당파'가 '靑 입성' 좌우한다」『문화일보』2012.1.19より引用。

48 「안철수는 ... 엄친아 강남좌파 ... 강준만 교수 핫이슈 12명 인물평」『동아일보』2012.5.24

サモ (안철수를 사랑하는 모임)」や「安哲秀真心キャンプ (안철수의 진심캠프)」などのアカウントを利用して、インターネット利用者に向けて政治的発言を行ってきた。また、経済的状況に関して言及すれば、「安哲秀研究所」という IT 事業を初め、その事業を 10 数年間運営した後、MBA をとるためにアメリカ留学にいくという、非常に輝かしい経歴を持っている。また、自身が運営していた事業の株を職員に分け与えたり、自身の持っている財産を社会に還元することを発表したりするなど、「富の分配」を重要視する「江南左派」であるといえることができるだろう。

安哲秀自身が、「安保は保守、経済は進歩」であると言及しているため、その「進歩性」に対する検証は今後とも必要となるだろうが、いったん本稿では、安哲秀が「江南左派」であると結論してもいいのではないかと考える。

次に「安哲秀現象」とはなにか。

安哲秀現象は、9 月 1 日の『オーマイニュース』で、彼がソウル市長選挙に出馬すると報道され、翌日、彼が「国会議員とは違って、市長は多くのことを変えることができる」とソウル市長選挙出馬の意向をほのめかしたことから始まった。その時点で、世論調査で圧倒的一位となったが、朴元淳候補に譲歩して彼を応援した。その結果、朴元淳が当選することになったが、このような安哲秀の態度は韓国社会に衝撃と感動を呼び起こした。

その後、安哲秀はソウル大学の教授に戻ると宣言したが、各メディアは安哲秀を大統領候補と想定して世論調査を行った。そして長い間大統領候補として不動の一位を占めていた朴槿恵にわずかな差まで迫るという結果をみせたのである。このように、短い間に大統領候補にまでなったのは、過去にも例がないという⁴⁹。

政治家ではない安哲秀が、このように短期間で強い人気を得ることになった要因は、彼の行動にあるという。安哲秀は、安哲秀研究所の CEO を辞任する際には、60 億ウォンに相当する株を職員に無料で配布したり⁵⁰、「青春コンサート」と名付けられた講義を、全国 27 回にわたって行うなどした。これは、若い世代に人生と社会に対するビジョンと希望のメッセージを伝えるという趣旨⁵¹で、若い世代と話しい、それを通じて彼らの悩みや痛みを共有しようとする姿勢をみせた。この「共感」がその人気の原動力である。

チョン・ヘグ (정해구) は、安哲秀政治が示唆する政治的リーダーシップとは、既得層やエリート層にたいしてはその社会的責任を強く要求する一方で、若い世代をはじめとして社会的弱者層には公正な機会を提供することによって彼らを保護する市民的共同体主義のリーダーシップではないか、とする⁵²。

このノブレス・オブリージュを重要視する安哲秀の行動は、「成長よりも分配」を優先視⁵³する若い世代に共感を呼び起こしたのだと考えることができる。

安哲秀を大統領候補にまで押し上げた一人である曹国も「青春コンサート」に参加したり、SNS を利用してオンラインでの意見交換を行ったりすることで若い世代の人気を獲得してきた。前述したが、「曹国現象」も注目されており、今後の大統領候補とみる向きもある。

このように、「江南左派」はオンライン / オフラインにおける意思疎通や「共感」によって、若い世代の支持を獲得してきた。注目すべき点は、安哲秀が「進歩的」だという理由で、2040 世代の支持を得たわけではないということである。なぜならば、安哲秀は野党の大統領候補の一本化に向けて候補を辞退したが、安哲秀を支持していた層が「進歩陣営」の文在寅に票を投じたとは言い難いからである⁵⁴。

2012 年の選挙 (総選挙・大統領選挙) を契機に進歩／保守という理念的対立構図が「価値の対立」に変化する可能性が高くなった。すなわち「私益対公益」、「既得権対自己犠牲」、「不公正対公正」、「非常識対常識」、「不通対疎通」、「古さ対新しさ」の対立だ⁵⁵。また、安哲秀が掲げた「新しい政治」は「庶民の生の問題解決中心の政治」⁵⁶である。

49 정해구 「안철수 현상, 시민정치 의 부상, 정당정치 재편의 전망」『내일을 여는 역사』2011 년 겨울호 (제 45 호), 2011.12

50 정해구, 前掲論文。

51 시사상식사전 (<http://terms.naver.com/entry.nhn?cid=476&docId=938410&mobile&categoryId=476>)

52 정해구, 前掲論文。

53 유창오, 前掲図書。

54 文在寅への応援を發表した安哲秀は、遊説先で「私が辞退したから、投票に行かないという方が周りにいたら、必ず投票に行くように伝えてください」という言葉を繰り返した。実際に、安哲秀の支持者だという有権者の中で、投票に行かなかった人は 16.6% に上り、また投票した人の約 4 割が文在寅ではなく朴槿恵に票を投じた。(『안철수 지지자, 실제 투표는 박 36 문 61』『한겨레 21』2013.2.18 제 948 호)

55 경제회 「18 대 대선에서의 유권자 투표행태 분석」 제 18 대 대통령 선거 외부평가 중간발표회 (한국정치학회), 2013.1.25

56 박명호 「『안철수 현상』, 2012 년 총선 그리고 한국정치」『선거연구』제 2 권 1 호 (2012 년 봄호)

「江南左派」とそれに共感する 2040 世代が「安哲秀現象」を支えた。それは、これらの世代にとって、「進歩／保守」の理念よりも、彼らの直面している生活苦や経済の両極化のほうが重要な問題であり、「生活問題解決の政治」を求めているからだといえることができるだろう。

それらのことを考慮すれば、なんらかの形で「安哲秀現象」が今後の総選挙や次の大統領選挙まで続く可能性は大きい⁵⁷といえるだろう。

6. おわりに：「江南左派」の統一観に関する試論

本稿では、まず「江南左派」に関する専攻研究や議論を整理し、「江南左派」形成の政治的および社会経済的背景を概観した。「江南左派」の核となった 386 世代は、韓国社会が民主化する激動の時代を経験することで、現状維持よりも変化と改革を求める「進歩的」な勢力となった。

「江南左派」を構成する人々は、「合理性、配慮、魅力、田舎臭くない、グローバルな競争力」というイメージを持っている。具体的には、現在 40 代後半から 50 代前半にかけての知識人、また専門職／管理職・事務職従事者が中心で、経済的に中産層であり、インターネットを通じた議論などで 2040 世代と意思疎通ができる人々である、といえる。

「江南左派」は、盧武鉉政権期にその存在を指摘されたが、第 18 代大統領選挙では「安哲秀現象」として大きな注目を集めた。今後、さらなる検証が必要ではあるが、安哲秀も「江南左派」を構成する条件を多く持っており、「江南左派」と位置づけられると考える。安哲秀は、他人への譲歩や利益の再分配などの行動、弱者への「共感」を通じて「新しい政治」を打ち出した。それによって、両極化した社会の中で成長よりも分配を優先視するようになった 2040 世代の絶大な支持を受け、大統領候補としても朴槿恵を脅かすほどの支持率をもっていた。第 18 代大統領選挙では、安哲秀の辞退によって「江南左派」政治は実現しなかったが、今後の選挙において「安哲秀現象」・「江南左派」に対する支持が継続する可能性は十分にあるだろう。

では、「江南左派」政治において統一問題はどのように扱われるだろうか。「韓国社会で進歩と保守が、もっとも克明に分かれる 이슈」が、まさに北朝鮮、統一問題⁵⁸であり、「江南左派」が『スタイリスト』を越えて本当の進歩になる道は「北朝鮮問題」を直視することにある⁵⁹と指摘されている統一問題にたいして、「江南左派」はどのような姿勢をみせるのだろうか。

「江南左派」を掲げる政党や指導者が、現時点では存在しないため、その「統一政策」については現時点で推測するしかない。しかし、「江南左派」を支持する若い世代の「北朝鮮観」や「統一観」を分析することで、その試論を試みたい。

イ・ネヨン(이내영)の北朝鮮に対する韓国国民の認識調査(2005 年と 2010 年の調査の比較)によると、北朝鮮を兄弟／我々／隣人としてみるよりは、他人／敵とみる比率が顕著に増加している。特に 2010 年の調査では、若い世代のほうが北朝鮮を「他人」とみる比重が明らかに高くなっている(6 つの選択肢⁶⁰の中から 1 位と 2 位を合計した結果。2005 年：18.4%、2010 年：32.9%)。その主要な理由は、北朝鮮が韓国の脅威となる敵であるからではなく、我々と違う他人であるからという認識が支配的であると考えられている⁶¹。

また、北朝鮮への経済支援に対する態度も否定的なものが増加している。特に「まったく支援するべきではない」は、2005 年(7.9%)と比べて 2010 年(14.8%)では約 2 倍になった。北朝鮮の核兵器開発、安保不安の増加、北朝鮮の三代世襲に対する批判的な評価などがその理由としてあげられる⁶²。

「無理に統一する必要はない」と考える人々は、20 代から 30 代でもっとも高く、なおかつ 2005 年(7.9%)と

57 신용욱 「안철수 현상' 과 한국 정치」『내일을 여는 역사』2011 년 가을호(제 45 호), 2011.12

58 김근식 「합리적인 대북관, 통일관, 대북정책」한반도산진화재단한국미래학회좋은정책포럼 공편 『보수와 진보의 대화와 상생』나남, 2010, p.179.

59 윤영중 「社説[아침논단]강남좌파는 북한문제를 직시할 수 있을까」『조선일보』2011.7.24

60 6 つの選択肢は、「敵」・「他人」・「隣人」・「我々」・「兄弟」・「関心がない」

1 位のみ結果では、2005 年：10.0%、2010 年：15.9%だった。

61 이내영 「한국인의 국가정체성과 북한과 통일에 대한 인식의 변화」강원택・이내영 『한국인, 우리는 누구인가? 여론조사를 통해 본 한국인 정체성』동아시아연구원, 2011, pp.38-39.

62 강원택・이내영, 前掲書, pp.44-45.

比べると 2010 年 (19.3%) では 2 倍以上増加している⁶³。

このように、「北朝鮮」や「統一」といったイシューは、韓国国民の関心、特に若い世代の関心が顕著に低くなっている⁶⁴。

また、第 18 代大統領選挙でも「民族的次元から、北朝鮮に可能なだけ多くの支援をしないといけない」という意見に対しては、共感する有権者 (30%) より、共感しない有権者 (70%) が多いことがわかった。また注目すべき点は、この北朝鮮支援イシューが候補選択に統計的に意味がある重要な変数となったという点である⁶⁵。

「統一」に関心のない若い世代は、一方で保守陣営を嫌い、「江南左派」を支持するという傾向をみせている⁶⁶。このことから、「江南左派」は、「統一」を語らない「左派」である。それは、国民の関心事を反映したものであるといえる。一方で、「江南左派」は「スタイリッシュ」で「裕福」な、すなわち「生活問題解決の政治」を掲げて、若い世代の支持を得ている。「生活問題解決の政治」の中で、「統一問題」への重要性は低くならざるを得ない。

今や、「保守／進歩」の対立よりも、「古い世代／若い世代」の対立構造が重要な意味を持つようになっており、若い世代が「生活問題解決」を求める限り、「江南左派」ひいては「安哲秀現象」が、今後の韓国政治に影響を与え続けることになるだろう。

63 강원택・이내영、前掲書、pp.48-49.

64 例として、2010 年の「北朝鮮に対する意識」で「他人」と回答したのは、20 代 (20.7%)、30 代 (16.8%)、40 代 (8.9%)、50 代 (15.2%)、60 代以上 (12.7%) である。また、統一に反対する世代別比率は、20 代 (30.4%)、30 代 (21.6%)、40 代 (17.8%)、50 代 (16.8%)、60 代以上 (9.3%) となっている。

65 韓国社会科学データセンターが 18 代大統領選挙日 (2012 年 12 月 19 日) の翌日、21 月 20 日から 6 日間、済州島を除外した全国で満 19 歳以上の男女 1200 名を対象にしたサイバーデータを利用している。

66 「20 대 “새누리 싫어”, 40 대 주부 “친정배 잘났네”, 60 대 “승과 말전 여당때문”」『H 헤럴드경제』2012.3.28 (<http://news.heraldm.com/view.php?ud=20120328000339&md=20120328093613>) や「'강남좌파' 조국 서울대 교수, 성남 분당갑 민주당 김창호 후보 지지」『노컷뉴스』2012.4.9 (<http://www.nocutnews.co.kr/show.asp?idx=2111229>) や、「'강남좌파들이 뛰고 있다 20, 30 대는 많이 넘어와」『주간조선』2012.9.18 (<http://weekly.chosun.com/client/news/viwi.asp?nNewsNumb=002199100007&ctcd=C03>) など。

ワシントン大学での派遣経験を通して知る西洋文化とそこに根付く基督教の影響

中島 恵（人文学研究科博士後期課程）

派遣先：ワシントン大学（アメリカ）

アメリカはシアトルで何より感じたのは、アメリカという国の大地の果てしない広大さと基督教の影響の強大さである。それを感じるにあたっては様々な要因が重なったのであろうが、西洋文化に身を置くにあたって、生活の上だけでなくいかなる研究を行うにしても、基督教教的要素を避けることは、ここシアトルでは非常に難しいように感じられた。

研究対象であるイギリス文学『ハリー・ポッター』の根底に見られる哲学は、ファンタジーというフィルターを通すことによって信仰の違いや国境を越える普遍性を備えていながら、やはり西洋文学であり、随所に基督教の影響が見られる。それゆえ、アメリカに来て教会という繋がりがあらゆる階層や時にはまったく違う人格同士をも結び付け、それが大きく機能している社会を目の当たりにすることは非常に大きな衝撃であり、また同時に収穫でもあった。

ワシントン大学という環境において、アジア系学生・研究者の比率は他所に比べてもかなり高いと言える。彼らはアジア系アメリカ人であったり、フルタイムの留学生であったり、短期の訪問学者であったりとその立場はさまざまであるが、やはり米国在住のマイノリティであるという点においてしばしば共通のコミュニティに属しているようである。そこでアジア圏出身の学生をサポートするのはほぼ百パーセントが基督教徒であり、基督教教的奉仕精神に基づくボランティア活動として運営されている。布教が目的の活動というわけではないが、彼らとの交流をきっかけに改宗するアジア人学生も少なくない。アメリカという大国におけるその絶大な影響力は、あらゆるカテゴリーを越えた相互理解の可能性を掲げる作品として『ハリー・ポッター』シリーズを研究するにあたってはとても無視できるものではなく、基督教徒の学生たちと対話を重ねたほか、大学でも19世紀のイギリス文学が信仰といかに折り合いをつけてセキュラリゼーションが行われたかを研究するセミナー講義を受講するなどし、文化として基督教がいかに彼らの生活に溶け込んでいるかを知るように努めた。

受講した講義で、学生の実際の信仰心について問うことなく、あくまで研究対象として基督教を扱うという内容であった。大学院対象の授業ということもあって、聴講生も含む学生たちの、主に19世紀ヴィクトリアン文学作品に関する知識量はすさまじく、ディスカッションはしばしば盛り上がった。アカデミックな用語が飛び交うなか、授業に参加する上で最も苦労したのはやはり学生たちが当たり前知っている宗教的な用語をほとんど一から学ばなければならないことだった。ダーウィンの進化論を読むこともあったが、日本の小学校では当たり前の過程として教えられていたそれが、西洋文化圏においていかに物議を醸す内容であったか、学生たちの反応と合わせてようやく実感として理解が深まってきたよう感じた。また、その内容からは地球上の進化の過程における人間の発展が自然の一部であるかそうでないかなど哲学的な議題も引き出され、自身の内に当然としてあった偏見に気付かされることも少なくなかった。また、扱う文学作品に“moral”と“ethic”という単語が登場した際はその違いについて、前者がおのおのの宗教的価値観に基づくもの、後者は社会的規範に基づいたものと説明され、モラルという単語において宗教観が当たり前前提であることに驚いた。基督教が、当時あるいは現代においても西洋社会や文学そのものに与えた影響について、アメリカに来て初めて肌で感じるできるようになったように思う。また、その講義はアメリカでイギリスの文学を扱うものであるため、その点においても外国文学の受容を知る上でいい経験になった。同じ英語圏と言えども、その歴史背景や文化はやはり大きく異なる。とても穏やかで良いクラスだったが、優秀で積極的に見える学生たちですら、講義中の発言を恐れていないわけではないようだった。

基督教徒である学生たちとの対話はとても興味深いもので、おのおのの解釈は人により大きく異なるようだ。まず聖書を読み、しばしばそれに関する質問を彼らにするという形で答えてもらったが、特に印象に残っているのは創世記でのアダムとイブに性別的に優位性をつけることができるか、など、現代の価値観と彼らの聖書の解釈がどう折り合いをつけているか知るための質問をしたときである。ある学生は、男性性の象徴であるアダムの、あえ

てあばら骨からイブが創られたことを指摘し、女性は男性の傍らに等しくあるもの、そしてあくまで男性と女性は別ものであるが、優れている点が違うからこそ対等にある存在だと説明してくれた。また違う学生は、その描写に優位性が問われているかを考えたこともなかったが、現代の事情を見ても決して男性が優位というわけではなく、女性は男性の一部から創られているが、それは両性が揃って一つの完全体になるという意味で、つまりお互いに支え合うものであるはずだと答えた。また、それについて何も答えられない学生もいたが、彼はそれでも聖書に書かれていることはとにかく事実であると主張した。彼らは皆熱心なキリスト教徒であり、それゆえに知人同士であることも多いのだが、通う教会や育った環境によっても大きく異なるようだ。一方、あるカトリックの友人は、聖書に書かれている内容はいわば象徴的な寓話であって、そのまま信じている人は少ないと言った。それぞれが自分の現状に合わせて聖書を解釈し、独自の価値観を築き上げており、例え仲のいい知人同士でも宗教観の違いは個人同士の違いとなつてはつきりと顕在化する現状は、相互理解の難しさを痛感させるに十分であったと言えよう。個人的な印象になるが、聖書について詳しい解釈を共有してくれる学生ほど、自身の私生活の現状と聖書の教えとのギャップに苦しみ、結果としてその解釈を独自に深めているようだった。いわば現代におけるセキュラリゼーションの実践を目の当たりにすることができたのかもしれない、貴重な経験であった。

指導教官である Mack 先生の日本文学の授業も聴講させていただいた。題材として三島由紀夫から村上春樹といった多くの近代日本文学が扱われ、熱心な学生たちの反応はしばしば日本人の視点からは意外なものが多く興味深かった。講義で印象に残っているのはしばしばあらゆる作品に共通して取り上げられた "alienation"、つまり「疎外」というテーマである。特に、作品の語り手たる主人公が所属するコミュニティに疎外感を持っているという傾向だ。アメリカでは、個人個人が何を思っているか、その主張が要求されるように感じる。個々のアイデアを持つことは必須であり、自由を謳いながらも、それが奨励されるがゆえに思想が極端になったり、強烈に同じカテゴリーにあたる仲間を求めたりと、結果として枠組みを求めてそれに捕われている人や、そこになじめない疎外感を抱えている不自由さを見ることも少なくなかったように思う。関わった人々の多くがまだ若い学生であったことも要因であろうが、アメリカという強大な、しかし比較的まだ若い国においては、規範や救いとしてキリスト教が強く必要とされているのかもしれない。また授業で取り上げられる作品のなかにはクリスチャンとして有名な遠藤周作の『母なるもの』もあったが、筆者の独自のキリスト教観と葛藤は、こちらで出会った友人のそれと重なって感じられた。

こちらでできた友人たちと、彼らが通う教会に何度か足を運ぶこともあった。アジア系中心であったり、クリスチャン同士のあいだでも極端と噂されるところであったりと、教会によってもそこに漂う空気や特色は様々であった。教会では日曜のミサの際、信者間での交流を奨励しているようだったが、日本人のクリスチャンの方には特によく声をかけられた。彼らがどうしてクリスチャンになったか、その過程はもちろん人によって違ったがそれゆえに興味深かった。また、バンド演奏に合わせ天を仰いで熱心に聖歌を歌う人々の姿を目の当たりにし、今までに国や歴史を動かしてきた信仰の力の強さを垣間みることができたような気がした。

熱心なクリスチャンたちにとって、キリスト教徒でない人々はまだ神について知らない存在である。彼らから同情されている、あるいは差別されているとは思わなくとも、その考えにははっきりとした線引きを感じた。彼らにとって大切なのは何よりも神の愛であり、出会った中には配偶者に求める第一条件が神への愛を共有できることであると言う人も少なくなかった。もちろん、宗教を異にしても結婚するカップルも多くおり、これが一部の例であることは当然の前提であるのだが、相互理解をテーマに人文学を研究する上で無視することのできない現状がそこにあった。彼らにとっては全ての人が等しくあるがゆえ、神の愛を共に認知することが最高の相互理解となるのだが、そのために神の愛を受け入れていない人々、あるいは異なる宗教を信仰する人々はあくまで違う存在であるという意識が顕在化する。彼らにとっては、神の愛を知るまでの道のりの一過程に過ぎないかもしれない。しかし、キリスト教徒でない者にとっては、いつ超えられるかもわからない壁のような矛盾とも言えるのである。もちろん、半年という短い期間でキリスト教文化の一部をただでそれになつわるあらゆることを判断することはできない。しかしながら、派遣が短期間であるからこそそのあいだにこれほどに大きく感じる文化の差異は、貴重であると同時に今後研究を続けるにあたっても留意し続けずにはおられないであろうかというほど強烈なものであった。

外国文学に相当するが故か、『ハリー・ポッター』の研究は、児童文学であることを理由に冷遇されがちな本国イギリスよりもアカデミックに進んでおり、比較的多くの参考文献に恵まれたように感じた。『ハリー・ポッター』

シリーズの浸透ぶりは、国内でのテーマパークの建設や、作品がアメリカ生まれであると誤解している学生がいたという事実からもうかがえる。アメリカに派遣され、以来キリスト教の根付いた文化や環境に触れ改めて読み込むことにより、作品の根底にある自己犠牲や無償の愛やその強さなどに関する概念が、キリスト教圏においていかに受け入れやすいものであるのか、実感をもって知るようになった。また、それが世界中に受け入れられているということより、作品の持つ普遍性をも再認識した。

神戸大学と UW 共催のコロキウムでは、日本学がテーマということもあって『源氏物語』と『ハリー・ポッター』の両作品に置ける母の絶対性と普遍性に関する比較研究を発表した。修士論文でテーマにした様々な違いを越えた相互理解から派生した、時代と文化を大きく飛び越える乱暴とも言える内容だったため、かなりの挑戦であった。コロキウムに出席した先生方からは、比較研究に置いてあまりにも違いすぎる作品を選んだことについてももっと慎重であるべきだとか指摘をいただいた。当然ながら先行文献もほとんどなく、反省する点多かったが、今回の派遣によるアメリカ生活で体験したカルチャーショックやそれを乗り越えてなお感じる人間同士の普遍性を軸に、新たな見方を提案できていれば幸いである。また、今回の発表は修士論文の時点では触れることのできなかったキリスト教の影響についても少しであるが言及した内容になった。西洋文学を扱う上で、キリスト教は非常に慎重に扱わなければならないテーマであること、それと同時に不可避のテーマであることを肌で感じた上での発表は、初めて英語で行ったプレゼンテーションであるという事実も合わせて今後に活かせる経験になったのではないと思う。

台湾とアメリカでの研究経験は、日本人である被派遣者のアイデンティティを大きく揺さぶるものであった。アジアとアメリカはわかりやすく異なる環境であるが、どちらも一筋縄ではいかない歴史を背景に、あらゆる人種や文化が混在しており、そこでの生活はアジアにおける日本人、欧米圏におけるアジア人としてのアイデンティティを問いたださざるを得ないものであるという点で共通していたからである。自分自身の背景について再考させられると同時に、他者との相違と意識し続けることで、相互理解という課題の難しさとその重要性をより強く感じた。この経験は、現代が舞台である外国文学を題材にする上で、そこに見る課題の更なる追求を促すものであり、また作品をより深く理解するためにもかけがえのないものになったと言えるだろう。

ITP 最終報告書

——ワシントン大学での留学を終えて——

趙 昊一（国際協力研究科博士後期課程）

ITP でワシントン大学に留学することが決めたあと 2012 年 3 月頃から、米国ワシントン大学で研究をする準備を始めました。教育経済を専門にされている教授 (Prof. Mark Long) をインターネットで探して、この先生に私の英語の履歴書を送り、この先生のもとで研究をしたいとメールを送りましたが、二週間以上待った末に、先生から送られてきた返答は non-degree student を受け入れることはできないとのことでした。小川先生ともご相談をしながら、私の専門分野の先生を再度探していました。ITP でワシントン大学に留学した楊さんにアドバイスをもらい、Visiting International Student Internship & Training Program (VISIT) のプログラムで大学にアプローチをするように言われました。しかし、VISIT にはいつでも参加ができますが、受け入れ教員が見つかっていませんでした。ワシントン大学での受け入れ教員を早くに探さなくてはと少し焦っていました。9 月末、GSICS の指導教員の小川先生にご相談をして、教育公共政策の先生 (Margi Plecki 先生) にメールを送りました。また、小川先生とも Plecki 先生にもう一回にメールを送りました。今回はポジティブな返信をいただきました。また VISIT プログラムを経由して、アメリカのビザ申請に必要な手続きをしてもらって、通例の 1/3 の期間で無事アメリカの留学ビザを入手することができました。そして、11 月 12 日にシアトルに向けて出発しました。

現地到着後、早速に宿泊先のアパートを始めました。ワシントン大学の講義は既に 9 月から始まっていたので、空いている部屋があまりありませんでした。最初の二か月間はホームステイの形で過ごしましたが、場所が少し大学から離れていて、また安全面に若干不安がありました。そこで、大学の掲示板で見つけた大学寮へ移ることにし、1 月 8 日から実際に寮に引っ越しました。ただ、家賃は以前の倍になりました。

ワシントン大学教育研究科における指導教員の先生は Margi Plecki 教授です。Plecki 先生は教育経済や教育財政をご専門とされているので、私の博士論文のテーマであるベトナム中等教育に関する利益収益率の分析等についても学ぶことがたくさんあります。

アメリカの大学の学期は前期と後期ではなく、秋、冬、春、夏の 4 期あります。11 月と 12 月は秋期授業でした。Plecki 先生と相談をし、授業に参加せずに、毎 2 週間に 1 回、先生と二人だけ面会しました。私がアメリカに到着する前に、Plecki 先生は右足骨折のけがをされて、車椅子を余儀なくされて大学には 2 週間に 1 回しか来られていませんでした。そのようななか、先生は大学に来られるときには、私のために 1 時間以上も時間を割いてくださいました。また、Plecki 先生から多くのセミナーや講義をご紹介いただき、これらのセミナーや研究会に参加して、とても充実した研究生活を送り始めました。ワシントン大学の博士課程の学生の研究発表を聞くのも良い勉強になり、とても刺激を受けました。一方、研究の方に、神戸大学国際協力研究科で 10 月末、博士論文のワークショップ 1 をやりました。先生からいろんなコメントをもらいました。これ方の研究先は多少分かってきました。

11 月と 12 月、授業がない間に自らの研究を進めることができました。

12 月末に入ったら、主教の国として一番大きなクリスマスが迎えました。クリスマスの前、秋期の最終ごろ、いろんなパーティを誘われて、参加しました。ほとんど主教についての話ですが、自分は主教じゃないけど、文化的に勉強になりました。

その他、学内での活動として英語の語学力を上げるために、同じく ITP 派遣学生である中島さんに紹介してもらい、International Talk(iTalk) グループに参加しています。毎週水曜日の午後、アジア系アメリカ人とアメリカに留学してきたアジア人が、2 時間ぐらい特定のテーマについて意見交換をします。この iTalkのおかげで、多くの学生と知り合うことができました。

シアトルは、冬にほとんど雪が降らず、雨が多いと聞いています。1 年前はソウル国立大学で寒い冬を経験したので、今年の冬が楽しみです。ワシントン大学のキャンパスはとても大きくて、魅力的なキャンパスです。図書館も 24 時間空いていますので、研究をするのにはとても良い環境だと思います。

12月の末から1月上旬まで冬休みを迎えました。ちょっと大学寮に移動の準備をして、8日に大学の寮に移れることになりました。一緒に住む方(Aimee Gong)はアメリカの原住民でした。シアトルは昔の原住民領地でした。彼女からいろいろ原住民の話を聞きました。

1月から冬期授業が始まって、毎日大学に通う生活に戻りました。単位を取っていないので、Plecki先生と相談しながら、授業を担当する先生に自己紹介のメールを送り、全部で三つ授業に参加することができました。一番目の授業はMixed Methods Designs in Educational Policy Researchでした。先生は指導教員のPlecki先生でした。研究方法に関する授業です。研究問題について、どのような研究方法が適当であるか、質的研究方法か、それとも量の研究方法か。現在よく使われるのは二つ手段を同時に使用する方法です。この授業を受講することによって、博士論文の研究方法がはっきりとしてきました。論文は大きく分けて三つの部分に分けて書いています。二つ目と三つ目は家庭調査データの分析、これは完全に量の研究です。しかし、データを分析する前に、データの取捨選択をしなければならない。そのために、ベトナムの中等教育ではどのようなタイプの技術が教えられていますか。学生はなぜ技術教育を選びましたか、その技術教育を選んだのは家庭や経済的な理由からですか、または技術学校で教えられる技術が理由ですか。この量的な分析が博士論文の最初の部分を構成することになります。ベトナム技術教育の収益率を計算するため、学生が受けた技術教育の種類とその家庭事情を分けて分析しています。

二番目の授業はWilliam Zumeta先生のP-20 SYSTEMS, POLICIES AND REFORMです。Zumeta先生はアメリカ国内教育政策に精通した先生です。この授業はアメリカ中等教育から高等教育への進学を促進させる政策を分析する授業です。アメリカは先進国ですが、国内には深刻な問題をいろいろ抱えています。まずは白人と、黒人・ヒスパニック系・アジア系との間に大きな格差があります。次にhighly decentralizedシステム、州と州、都市と都市、町と町。貧富の格差も一つの大きな問題です。さまざまな問題の中で、どのような政策と改革が全国の中等教育と高等教育をうまくつなぐことができるのか、という問題が授業のテーマです。アメリカの中等教育はほとんど普通教育だけで、高等教育の中のCOLLEGE教育が技術教育のような存在です。COLLEGE教育は普通の大学より授業料も安く、技術も教える、また大学に編入できる可能性もあるなど、その価値はとても高いと考えられます。この点について、先進国にしろ途上国にしろ、どのような国でも技術教育が必要だと思います。ただ、技術教育を他の教育と組み合わせることや、労働市場と合致させることは大切だと思います。適切な政策を行えば、ベトナムにおける技術教育は今よりも人々から求められる可能性があります。

三つ目の授業はLiz Litzler先生のSociology of Educationです。教育社会学は教育研究のfoundationと考えられます。幼稚園から大学まで、すべての教育を対象としています。また国を問わず、さまざまな社会問題、例えば民族、経済、家庭などの問題も含んでいます。実現と理論、その両方を検討しています。この授業は、博士論文における技術教育を分析する理論を考える上で、非常に参考となりました。

三つ授業を参加して、アメリカの授業では討論が大切であることが分かりました。三つ授業はほとんど同じ形式で、まず来週の先行研究を読んできて、授業の時に先生と学生と一緒に討論します。

1月からメンターの四方さんがシアトルに来られました。早速に四方さんとお会いして、色々アドバイスをいただきました。毎月二回くらい、四方さんと中島さん三人で2,3時間面会しました。四方さんはとっても優しい方です。研究とシアトルの留学生活について、いろいろと指導してもらいました。

冬期授業以外にも、以前参加したiTalkはまだ毎週一回のペースで続けていました。週末はbakingクラスも行きました。言葉は通じますので、なかなか充実した日々を過ごすことができました。ワシントン大学に滞在する4か月間は気にすることなく、終えることができそうです。

ワシントン大学キャンパスはシアトル市内にあり、交通はなかなか便利です。ただし、11月からは、雨の日が続き、外出はとても不便でした。1月末、天候も良くなって、Boeing社の工場を見学したり、中華街にいったり、観光することができました。3月25日には日本に戻るようになりますが、その前に、借りていた部屋の片づけと解約、Plecki先生との最後の面談、シアトルで知り合った友人たちとの別れの挨拶など、いろいろなことをして終わりました。

4ヵ月間は非常に短いですが、アメリカの大学を体験できて、とっても勉強になりました。また、参加した授業が自身の博士論文を執筆するにあたり、とても参考になったことはよかったです。これでITPによる派遣は終わりますが、これから博士論文を書き、卒業を目指して頑張りたいと思います。

US policy toward Taiwan and Overseas Chinese in the early Cold War

四方 俊祐（人文学研究科研究員）

派遣先：ワシントン大学（アメリカ）

1. Introduction

Since the end of the Cold War, some twenty years ago, the analytic methods of the Cold War Studies have expanded from the political analyses and the military strategies¹ to some analyses in the cultural and socio-psychological fields. As a result, there have appeared some remarkable research outputs, such as the study on the Cultural Cold War, which means ‘psychological warfare’ in the Cold War societies.

What is Cultural Cold War? For example, the research by Osgood provides a noteworthy illustration of this concept.² In his argument on the Cultural aspect of the Cold War, Osgood shows how the US Government propagated the pro-US image throughout the world in the Cold War era. That is, he suggested that, in waging the Cold War with the Soviet Union, the US (in his case, the Eisenhower administration) did not only utilize its military pressure but also engaged in ‘psychological warfare’ through the exploitation of various media outlets with the aim of gaining a strong international sympathy for the US (and antipathy toward the Soviet Union).

However, his research had a very narrow focus on the US Governmental organization, its system and commitments about exploiting the pro-US activities. As a result, it is unclear how American information and publicity campaign was significant within the whole US Cold War strategies and how the US engaged in the psychological warfare against the Soviet “peace offensive,” for example.

In comparison to Osgood’s study, Asian historians examined the responses of East Asian countries as beneficiaries of American “psychological warfare,” and verified whether or not the information and publicity campaign worked effectively in Japan, South Korea, and Taiwan. They presented the various cases of American activities in East Asia.³ But, their studies also seemed to have adopted a limited perspective in assessing the outcomes of campaign activities. Asian historians as well as Osgood just only concentrated on how the US officials utilized the media outlets to build a pro-US image there, but they did not consider the reasons why the US did so. Consequently, they gave the impression that the campaign activities themselves were the main goals in the US Cold War strategies. These activities must not have been the ends, but the means. Even though the goals were different in each region, as far as Taiwan was concerned, at least, American policy-makers set out Taiwanese reconnection with the overseas Chinese and its economic progress as the goals.

Therefore, the purpose of this paper is to examine how Taiwanese linkage with overseas Chinese was pursued by the US government in the context of the “Cultural Cold War” and how such objective had shifted in the mid-1950s.

2. US policy guidelines toward overseas Chinese⁴ and Taiwan in the mid-1950s

Since the Korean War, the Eisenhower administration began to view the People’s Republic of China (hereafter referred to

1 Concerning US-Taiwan relations, the contemporary historiography similarly tends to concentrate on the military aspect and has therefore overlooked the role of Taiwan in the gradually emerging dimension of “politico-economic warfare” since the late 1950s. See Robert Accinelli, *Crisis and Commitment: United States Policy toward Taiwan, 1950-1955*, (Chapel Hill and London, 1996). See also John W. Garver, *The Sino-American Alliance: Nationalist China and American Cold War Strategy in Asia*, (New York, M.E. Sharpe, 1997)

2 Kenneth Osgood, *Total Cold War: Eisenhower’s Secret Propaganda Battle at Home and Abroad*, (University Press of Kansas, 2006)

3 Toshihiko Kishi and Yuka Tsuchiya, eds., *De-Centering the Cultural Cold War: The U.S. and Asia* [Japanese], Kokusai Shoin, 2009.

4 “Overseas Chinese” is the English translation of the Chinese-language term *huaqiao*, an identity promoted by various modern Chinese governments’ members and used to refer to members of the global Chinese diaspora. t See Stephen Fitzgerald, *China and the Overseas Chinese: A Study of Peking’s Changing Policy, 1949-1970* (Cambridge, UK, 1972)

as PRC or Mainland) to be a regional threat. The administration attempted to prevent PRC from influencing the neighboring countries and considered the Republic of China (Nationalist Government, hereafter ROC or Taiwan) as the Chinese alternative to communism. With respect to Taiwan policy in the 1950s, the Eisenhower administration formulated three basic statements of the Taiwan policy guidelines. The first one was a series of NSC146 (August –November 1953), the second was NSC5503 (January 1955), the third was NSC5723 (October 1957). In these statements, there were eight objectives set by US officials. The eighth objective will be highlighted as it is related to the view of the Cultural Cold War.

In NSC 146/2, the eighth objective states that the “increased support for the Chinese National Government by all non-Communist Chinese groups outside mainland China and Formosa, especially the overseas Chinese of Southeast Asia, consistent with their obligations and primary allegiance to their local government.”⁵ In NSC 5503, the eighth objective bears similar expressions with the former: “increased support for the GRC (the Government of the Republic of China) by non-Communist Chinese outside mainland China and Formosa, especially [sic] the overseas Chinese of Southeast Asia, insofar as such support does not conflict with obligations to their local governments.”⁶ These two objectives of the Taiwan policy statement relate to the US strategy to strengthen the connection between Taiwan and overseas Chinese communities. To achieve these, as described hereinafter, the US Government expected the children of the overseas Chinese in Southeast Asia to be educated in Taiwan better than in the mainland.

But the eighth objective in the NSC5723 was very different: “GRC adherence to the principle of increased orientation of overseas Chinese, especially in Southeast Asia, toward the host countries and integration into their local communities.”⁷ This eighth objective substantially invalidated the above-mentioned objectives. Why did the revision in the third statement happen? Does this reflect the shift within the US policy making?

3. Activities of US State Department and Assistance Organization in the Far East

Between the Chinese Revolution of 1911 and World War II, Chinese Nationalist Party had received a large amount of support from overseas Chinese worldwide, though the party got short of the support since the Chinese Civil War. In 1949, the ROC fled to Taiwan Island as a result of its defeat in the Chinese Civil War. In confrontation with PRC since the Korean War, the US policy-makers began to assist Chiang Kai-shek, the leader of the ROC, to rebuild their relations with overseas Chinese. However, US officials supposed that the successful communities of overseas Chinese in Southeast Asia, and their adherence to Chinese Culture and homeland had provoked more or less antipathy from the people in Southeast Asia. On the part of the Southeast Asian Governments, most of them had been independent since World War II. Since then they intended to build a nation-state and thus adopted a policy of communalism.

The Government of Thailand, for instance, prohibited the children of overseas Chinese from having Chinese education in the fourth grade or higher at elementary schools. No matter how strongly Chinese parents in Thailand hoped to give a higher-level traditional Chinese education for their children, there were some obstacles to study abroad: most of the parents could not afford to send their children to foreign school even though the children were talented, and immigration of overseas Chinese had never been approved by the other governments in Southeast Asia (and Hong Kong).⁸

Under these circumstances, PRC strenuously invited the overseas Chinese students through their local offices in Southeast Asia.⁹ To win the loyalty of Chinese residents in Burma, Thailand, and the Philippines, China attempted to influence the local Chinese organization by contributing directly the Chinese newspapers, and by offering Chinese teachers and textbooks to the schools through its local branch. The US Government, however, estimated that Beijing’s activities in Southeast Asia were in

5 NSC146/2 (United States Objectives and Courses of Action with respect to Formosa and the Chinese Nationalist Government), Nov 6, 1953, U.S Department of State, *Foreign Relations of the United States, 1952-1954*, volume 14, (Washington DC, USGPO 1985),p.307-330. [hereafter referred to as FRUS 1952-54,14:307-30]

6 NSC5503 (US Policy toward Formosa and the Government of the Republic of China), Jan 15, 1955, FRUS1955-1957,2: 30-4.

7 NSC5723 (US Policy toward Taiwan and the Government of the Republic of China), Oct 4, 1957, FRUS1955-1957,3: 619-23.

8 Martin to McConaughy, Nov 14. 1952, *Records of the Office of Chinese Affairs, 1945-1955*, (Scholarly Resources, 1989) , Reel.29, 2.501. no. 620 [hereafter ROCA, 29, 620]

9 ‘U.S. Problem among Overseas Chinese in Southeast Asia’, Sept 29. 1953, ROCA, 34, 570.2.

vain by that time partly because the local communities in Southeast Asia were usually anti-communistic, and partly because overseas Chinese wanted to keep a wait-and-see attitude toward the conflicts between China and Taiwan.¹⁰

Notwithstanding the failure of Beijing's activities in Southeast Asia, it was recognized very early within the US policy circles that the desire for a Chinese education was one of factors attracting the overseas Chinese to the mainland. Overseas Chinese youth's move to the mainland would increase Chinese influence in Southeast Asia in the future. It was reported that, in 1954, concurrently with PRC's gains in international prestige, a great number of overseas Chinese student went to the mainland for higher education.

Why did overseas Chinese go there? From the view of US staff in Singapore, three reasons were presented to Washington; pride in Chinese Communists' accomplishments, the Asian local pressure, and that the Communists were there to stay.¹¹ Consequently, the US Government began to consider the assistance in the establishment of educational facilities for overseas Chinese students in Taiwan and former Malaya.¹²

In the fall of 1953, when US Vice-President Nixon visited Taiwan during his Asian tour, he made a commitment that the US should assist Taiwan to improve and expand educational facilities for overseas Chinese students.¹³ Incidentally, as of the summer of 1955, there were about 1250 college-level and 650 high-school level overseas Chinese enrolled in educational institutions in Taiwan. About 85% of the college group came from Hong Kong or Macao. On the other hand, all the high school students were from localities other than Hong Kong and Macao.

Moreover, US officials took a great deal of interest in the establishment of Nanyang University, which was scheduled to open in the spring of 1956. Chancellor of Nanyang University, Dr. Lin Yutang, who was a prominent Chinese writer and ROC supporter, was thought to be instrumental in achieving US objectives though the US Government was not officially connected with the University. In April 1955, however, Lin's resignation from his position because of political struggles over the University in Malaya greatly embarrassed the US officials.

Since then, some US officials were getting nervous and anxious about whether or not "the US should undertake any program which would impede the effort of the Southeast Asian Governments to promote the assimilation of the overseas Chinese."¹⁴ Any US action reflecting particular solicitude for the overseas Chinese would have produced adverse reactions on the part of these governments and other ethnic groups. For example, the office of Chinese Affairs, Department of State warned that "the establishment of a public Commission or other public action which seemed to reflect US assumption of a voice in the internal affairs of the Southeast Asian Governments would have unfortunate results."¹⁵

Interestingly, US policy prescribed the assimilation of the overseas Chinese for the local communities as the only long-range solution for the overseas Chinese problem. In essence, US officials did not think they could give any unequivocal answer to this problem for the time being because neither Taiwan nor China allowed the overseas Chinese to have dual nationality. Nonetheless, US officials continued to regard the overseas Chinese students' move to Taiwan as beneficial means to urge them to support ROC and not PRC with the primary loyalty to their local governments.¹⁶

4. Activities of US information Agency in Far East

The US Information Agency (USIA), which had more than 70 subordinate bodies called the US Information Service

10 *ibid.*

11 Field Comments on "Overseas Chinese students- A Study," Mar 14, 1955, *ROCA*, 41, 544

12 Memo of Conv., by Anderson, May 15, 1953, *ROCA*, 34; 570.1 Overseas Chinese, 204. See also Mika Sugimura, *Malaysian Education Policy and the minorities*, (Tokyodaigaku, 1981), see also Mak, I-Chun Kung, *the Overseas Chinese Network: Forms and Practices in Southeast Asia*, PROSEA Occasional Paper No.26, Academia Sinica, May 1999.

13 Education of Overseas Chinese Students in Taiwan, Aug 29, 1955, *ROCA*, 41, 568- 571. As a preliminary stop-gap measure, the local currency equivalent of \$554,000 in US aid counterpart funds, supported by the equivalent of \$255,000 from the ROC educational budget, was provided to construct dormitories and classrooms and to meet other urgent needs.

14 US concern with problem of Education of overseas Chinese, May 27, 1955, *ROCA*, 41, 555.

15 *Ibid.*

16 U.S. Department of State, *Report to Congress on the Mutual Security Program*, U.S. GPO, Washington 25, D.C., December 31, 1954, p18.

(USIS) around the world, also engaged in the overseas Chinese problem from the outset of the Eisenhower administration. The Agency recognized the overseas Chinese as an important minority group in Southeast Asia. Over a period of time since the former agency, it had developed the program activities and the assignment of functional responsibilities specifically directed at the overseas Chinese problem. The program and their materials to propagate the life of overseas Chinese in the US or the situation in Taiwan were presented through the various media outlets of print, film, and radio (e.g., the Voice of America (VOA) broadcasts daily, special programs designed for this audience).¹⁷

In the field, all USIS posts serving an area, in which the overseas Chinese were deemed to be important elements, were charged with responsibility of developing and carrying forward program specifically aimed at the overseas Chinese. The USIS Hong Kong operated under a mandate that designated the overseas Chinese problem as its primary functional interest, and charged it with coordinating and servicing the activities of USIS/SEA posts vis-a-vis the overseas Chinese. USIS Taiwan, while primarily concerned with local affairs in Taiwan, devoted much time to the overseas Chinese problem and worked closely with USIS Hong Kong in its service functions. Moreover, in 1956, USIS Taiwan and International Cooperation Administration (ICA) Mission in Taiwan advised ROC in the preparation and distribution of a brochure that would be sent to young people in Southeast Asia by the Overseas Chinese Affairs Commission of ROC. Additionally, ICA continued its cooperation with the Asian Foundation, which, as a NPO, had made sizable financial contributions to student scholarships and travel expenses.¹⁸

Though USIA/USIS was extremely active with various programs, assessing the difference between its activities and its achievements is difficult. In fact, one USIS official staff confessed as follows: “[It] is difficult to appraise the effectiveness of these efforts. We can say with assurance that we reach substantial numbers of these people [in Southeast Asia] – in terms of results we can speak with much less assurance.”¹⁹ His remarks indicate that, while he admitted the importance of USIS activities through the Southeast Asia, he also doubted the consequence of its activities.

Since 1955, in fact, US decision makers realized the difficulty in dealing with the overseas Chinese problem in an integrated manner through Southeast Asia. Because the Southeast Asian Governments had adopted the assimilation policy, they opposed to US assistance in the overseas Chinese going abroad. On the US part, there were some criticisms within the officials about the contradiction of US activities with regard to its acceptance of assimilation. Above all, US officials were afraid that their activities to deal with the overseas Chinese problem might be regarded as intervention to domestic affairs. The US Embassy in Taiwan pointed out that attracting high school students to Taiwan would contradict established US policy concerning the integration of overseas Chinese into their local communities. As a result, US aid funds had not been allotted for some high school facilities since 1954. Furthermore, an US staff of Public Affairs in Hong Kong also raised the question about the overseas Chinese problem. He observed that the importance of overseas Chinese was over-estimated and not great enough to warrant any significant increase in the propaganda operations aimed at them, and that the vast majority of them were entirely “apathetic” and “apolitical.” He thought that assimilation of overseas Chinese was under way in several forms through Southeast Asia and that the USIA publications had few effects in the US propaganda.²⁰

In addition, in August 1955, there was a statement from USIS Taiwan corroborates such observation: “the breach between the native Taiwanese and the superimposed “Mainlanders” has not been closed,... ,may be widening.”²¹ The question was raised as to whether some of the Taiwan activities in Taiwan might as well be carried out by USIS Hong Kong. USIS Taiwan insisted that USIS Hong Kong should be specifically charged with prime area responsibility to service the overseas Chinese population and that USIS Hong Kong should be given direction and responsibility to centralize the whole service of the overseas Chinese, and that the USIS Taiwan might have more time to devote to local problem.

Five days later, the US Government delivered the course of action with respect to the overseas Chinese. This course of action included two parts. One is “Action designed to exploit existing communalistic institutions or motives,” another is “Action

17 Meiklejohn to OCB working group, July 28, 1956, *ROCA*, 41, 541

18 Op.cit., Education of Overseas Chinese Student in Taiwan, Aug 29, 1955, *ROCA*, 41 568-7,

19 Overseas Chinese –Working Paper for Ad hoc Sub-Committee July 26, 1955, *ROCA*, 41. 561-2,

20 Hong Kong PAO's comments on Overseas Chinese situation, Aug 15, 1955 *ROCA*, 41, 576-582

21 Meiklejohn to Busick, August 24, 1955. *ROCA*, 41, 57.

designed to promote assimilation at the expense of communalism.”²² The former course of action included the US assistance in the expansion of educational and training facilities for overseas Chinese teacher on Taiwan. In addition, it indicated that the US assistance developed the capabilities of Hong Kong to produce adequate supplies of textbook for use in overseas Chinese schools, and it required US efforts to develop a society and a political system on Taiwan in as attractive a contrast as possible to the Chinese Communist regime. But more importantly, the US adopted the invisible approach by not getting directly involved in the recruitment of overseas Chinese teachers or students, and in the distribution of textbooks. The latter course of action included the educational exchange through Southeast Asia aside from US aid and advises to establish private credit cooperative associations. This approach recommended the openness of these actions to all nationalities throughout the world. By making the problem broader, they adopted the invisible and indiscernible approach to hide the migration of overseas Chinese students behind the global exchange program.

Finally, in November 1955 the US Government made the following conclusions: “a country- by- country approach to the [overseas Chinese] problem is indicated,” because “any US attempt to deal with or appeal to the overseas Chinese on the regional and a racial basis, might result in a heightening of the potential danger represented by these communities.”²³ In other words, the US apparently placed a serious emphasis on the assimilation of overseas Chinese to Southeast Asian communities. US officials were deeply concerned that strengthening the overseas Chinese linkage with Taiwan (or China) might make the situation in Southeast Asia unstable and volatile. This approach at least continued at the beginning of the second term of the Eisenhower administration.

5. Conclusion

As soon as Eisenhower took office in 1953, the Eisenhower administration started to formulate its Cold War Strategy. With regard to Taiwan policy, US officials designed the policy guidelines after a ceasefire took effect in Korea. They set up an objective to strengthen the connection between Taiwan and the overseas Chinese. The US officials implemented the information and publicity campaign to inform the overseas Chinese that Taiwan, and not the mainland China, had the more democratic, freer and more affluent society. By means of the campaign, they tried to stimulate overseas Chinese to support Taiwan.

This objective continued to be advocated even after the US realized that the Taiwanese military power could not be utilized in its Cold War strategy as a regional collective security in the Far East after the first Taiwan Strait Crisis. This is why Taiwan was regarded to be the alternative to Chinese threats. In the mid-1950s, however, US officials could not gradually deal with the overseas Chinese problem as a regional or racial one. Rather, the US Government began to place an emphasis on the assimilation of overseas Chinese as an internal problem of each country in Southeast Asia. This was a political shift, but did not mean the USIS stopped the activities to overseas Chinese. US officials, for example, coped with their activities in a broader way like student exchange program covering entirely the whole Asian continent. That is to say, they did not indicate their direct concern about the overseas Chinese problem. But they continued to resolve the problem behind the scene.

22 Course of action with respect to the overseas Chinese, August 29, 1955. *ROCA*, 41, 572.

23 Country-by Country Approach to Overseas Chinese Problem, November 23, 1955, *ROCA*, 41, 539-41.

平成 24 年度総括コメント

ソウル大学校派遣院生・メンターの成果報告

木村 幹（国際協力研究科教授）

（院生）三村 佳充（国際協力研究科博士後期課程）

（メンター）横溝 未歩（国際協力研究科博士後期課程）

三村氏の研究は、1880 年代を中心とする朝鮮近代政治史を「王朝」と「国家」と言う二つの概念を用いて再整理しようとするものである。通常、植民地支配への過程を意識して、「国家」のあり方に焦点が集中しがちな朝鮮近代政治史であるが、実際にはそこには王朝を巡る政治過程と、国家を巡る政治過程の二つが存在し、両者は時に矛盾する存在となっている。就中、当時の政治過程において中心的な位置を占めた国王は、国家の守護者であると同時に、王朝の守護者でもあらねばならない、という二重の義務を負った存在であり、国王がこの時に対立する両者をどのように位置づけ、どのような政策を行うかは、前近代から近代への移行期に位置する、19 世紀後半の朝鮮近代政治史においては決定的な意味を有していた。

三村氏は、このような概念的な整理を前提に、朝鮮においては王朝の強化が進む一方で、国家の強化が進まなかった事例である、としてし、これを同じく「ウェスタンインパクト」に直面した他国と比較可能なものとして位置づけようとする。このような試みは、時にその「特殊性」ばかりが強調されがちな朝鮮近代政治史を、より普遍的な比較政治史的の中に位置づけようとするものであり、それ自身大きな意味を持つものと言える。

しかしながら、その研究には問題もまた存している。最大の問題は、このようにして行われる朝鮮近代政治史の「理念系」の中への位置づけが、どのような意味を有しているかが、明確に延べられていない事である。言い換えるなら、この研究は「分類の為の分類」のディレンマに陥っている可能性があり、この「分類」を用いて、関連する研究にどのようなインパクトを与えようとしているかが明確ではない。それ故、具体的な政治過程の分析も総花的なものになりがちであり、十分に焦点が絞込まれていない。今後、自らの研究を膨大な先行研究の中でどのように位置づけ、どのようなメッセージを発していくかを、より意識して行う事が必要であろう。

横溝氏の研究は、今日の韓国における「江南」のイメージと結びついた言説を分析する事により、今日の韓国が抱える問題を明らかにし、ひいてはその延長線上に、南北関係に関わる示唆を得ようとするものである。

この研究の対象は具体的には二つの言説に対して向けられている。第一は、「江南左派」という言説である。周知のように、「江南」とはソウル市内を貫流する漢江の南側に位置する、相対的に富裕層が集住する地域に対する俗称であり、行政区としては、江南、瑞草、松波の三区を意味している。「江南左派」とは、このような「江南」に代表される地域に集住する富裕層の中に存在する左派勢力の事であり、それは一部では元来、貧困層の意見を代表すべき「左派」が自ら特権層的な存在と化しており、本来の自らの立ち位置を見失っている、という強い非難と揶揄の響きを持った言葉である。

横溝氏はこのような「江南左派」言説を取り扱う事で、この言説によって表現される「豊かなりベラル勢力」の出現が、急速な経済成長と同時に、大きくなる経済的格差に直面する韓国の現在を象徴するものであり、またこのような状況の中で、従来の「左派」言説が効力を失いつつある事の現われである事を論証しようとしている。

横溝氏のもう一つの対象は、昨年一大ブームとなった「江南スタイル」を巡る言説である。韓国外での受け止められ方と異なり、韓国内においては「江南スタイル」は、経済的格差が拡大する中で出現した韓国の富裕層を揶揄するものであり、また同時に経済格差拡大の中で、実態を伴わない「富裕層的」なライフスタイルを追い求める事を戯画的に示すものであると理解されている。

一言で言うなら、横溝氏はこの「江南」を巡る言説こそが、今日の韓国社会の閉塞感を典型的に示すものであり、その中での「左派」勢力が急速に力を失いつつある事の典型的な現われである事を示そうとしている、ということ

が出来る。しかしながら、これらの一連の研究には問題も存在する。その第一は、言説分析の為の手法が洗練されていない事であり、そのデータの取り方も、依然として主観的な部分に多くを依存している。今後は、マスメディアを初めとする様々な媒体における膨大な言説をどのようにして扱うかについての、より詳細で技術的な試行錯誤が必要であろう。

ワシントン大学派遣院生・メンターの成果報告

菱川 英一（人文学研究科教授）（中島担当）

小川 啓一（国際協力研究科）（趙担当）

大津留 厚（人文学研究科教授）（四方担当）

（院生）中島 恵（人文学研究科博士後期課程）

（院生）趙 昊一（国際協力研究科博士後期課程）

（メンター）四方 俊祐（人文学研究科研究員）

中島恵さん（人文学研究科）の ITP 派遣（ワシントン大学）についての報告書「ワシントン大学での派遣経験を通して知る西洋文化とそこに根付くキリスト教の影響」には、日本人研究者が西洋文化を研究するうえで避けることのできない重要な問題についての貴重な考察が見られ、今後の参考になる点が多い。

アメリカ人の日常生活のすみずみに浸透するキリスト教の影響の深さは、日本にいてアメリカ人と対話したり、アメリカ人の書いたものを読んだりするだけでは中々わかりにくい。やはり、アメリカに暮らして、日常生活を共にするなかでしか見えてこない部分も大きい。彼らの共同体意識の根幹をなす教会に実際に足を運んだり、キリスト教にからむ問題について真摯に意見交換したり、問題意識を共有する学生たちとともに授業に出たりすることは、かけがえのない経験であつたろうと想像できる。学生時代という多感な年代だからこそ可能な、いわば特権的な経験であり、価値観が固定化してしまった世代とはそこまで腹を割った真摯な話し合いは、不可能とはいわないまでも、難しいからである。特に、キリスト教にからむ問題が、現代の人間をとりまく疎外の問題を考える上で考究の重要な基礎になることを、骨身を通して知ることは有意義である。また、それは異文化の交流を考える上でも貴重な体験となるであろう。

イギリスで生み出された「ハリー・ポッター」シリーズをアメリカで考えるということは、台湾での派遣経験も合わせ、これから国際的に活躍してゆくべき中島さんのような日本人研究者に大いに思考の糧を与え、今後の研究発展の足がかりを与えたものと評価できる。これを活かして将来精進することを期待する。

博士課程後期に在籍している Zhao Haoyi さんを ITP の助成金によって、韓国のソウル国立大学と米国のワシントン大学に留学させていただき、両大学でとても充実した研究生活を送ることができたことに指導教員として大変嬉しく思います。本学の ITP 関係の教員、事務の方々には大変お世話になりました。また、受け入れ大学の先生方には、素晴らしい研究環境をご提供いただき、とても充実した研究活動を遂行することができたと思います。

ソウル国立大学では、Zhao さんが教育社会学の分野では世界的に有名な Kim Ki-Seok 先生のもとで研究を行わせていただき、経済学の視点からではなく、社会学からの視点から教育問題について研究をする機会を得ました。Kim 先生には、研究室もご提供していただき、更に、先生の指導学生をチュータとしてつけていただきましたので、研究のみならず、日常の生活面でもご配慮をいただきました。また、韓国教育省や OECD 等の国際機関でのご経験がある Chung Bong-gun 先生のご講義を受講させていただいたのも、Zhao さんにとっては国際協力や国際開発を韓国の視点から詳しく研究できたので良かったと思います。ソウル国立大学から帰国して、ワシントン大学に行くまでの間に、ワークショップを本研究科でおこない、韓国留学の成果を十分に共有してくれました。

ワシントン大学では、教育財政と教育経済の分野で名声のある Plecki Margi 先生に受け入れていただき、定期的にお会いしてご指導を受けたり、大学院の講義もいくつか受講して米国の大学院生と議論ができたようですので、

とても有意義な研究生生活を送ることができたと思います。ワシントン大学に留学するにあたり、大学の留学生センターからは、ビザ取得に最低 2 ヶ月がかかると言われていましたが、1 ヶ月弱で米国領事館からビザを発券していただきました。ワシントン大学の事務方のスピーディな対応には指導教員として感謝しております。

四方俊祐は、平成 22 年度、23 年度、24 年度の三回にわたり欧米プログラム・短期派遣者のプログラムでワシントン大学で調査研究に従事する機会を得ることができました。四方はすでに学位論文において冷戦期アメリカ合衆国の台湾政策を、主に経済成長戦略との関連で論じました。

冷戦初期のアメリカ合衆国のアジア戦略の中で台湾の経済戦略を中心にすえた研究はこれまで手薄であり、その点で四方の研究は日本のアメリカ史学会でも一定の評価を得ています。しかしこれまでの四方の研究はアメリカ合衆国の外交文書、安全保障会議文書の分析を中心としたものであり、受け手としての台湾側の政策はあくまでもアメリカ側の文書に反映されたものとして言及されたにすぎず、限界はおのずと明らかでした。

ワシントン州立大学の極東図書館にはアメリカ合衆国、台湾双方の史料が豊富に存在し、ITP の派遣研究者として四方が当地で調査研究に従事できたことは、アメリカ合衆国の政策と台湾の経済政策を総合的に論ずるうえで大きな意味を持ちました。四方は極東図書館の専門家の指導を受けながら、アメリカ合衆国外交調査委員会の資料を分析することから始め（平成 22 年度）、台湾側の『僑資工廠在自由中国』などの資料に取り組むまでに至りました。アメリカ合衆国の冷戦政策が軍事や外交だけでなく経済や文化の領域にも及んでいることは最近の研究が明らかにしているところですが、その点で四方の研究は先んじていると言えるでしょう。その成果はソウル大学校における国際シンポジウムの「グローバル社会における文化交流」部会で US Policy toward Taiwan and Overseas Chinese in the Early Cold War と題して報告され、高い評価を受けました。

四方はこのような成果を踏まえて、現在平成 24 年度の ITP プログラムの一環で短期派遣者としてワシントン大学で調査研究に従事しております。研究の一層の深化が期待されます。

ITP コロキアム（台湾大学）

東アジアにおける域外経験と文化接触
——言語から探る日本と台湾及び中国大陆の文化往還——

東亞的域外體驗與文化接觸
——由語言探討日本與台灣以及中國大陸的文化往來——

発表原稿集

東亞的域外體驗與文化接觸 ——由語言探討日本與台灣以及中國大陸的文化往來

時間: 2012 年 12 月 21 日(金) 9:00-12:10 地點: 国立台湾大学

共同主辦: 国立台湾大学文学院台湾文学研究所、神戸大学

9:00-9:10 <開幕辭>

緒形康 (神戸大学大学院人文学研究科教授)

洪淑苓 (台湾大学台湾文学研究所所長)

<研究発表 第一場>

主持: 小笠原淳 (神戸大学大学院人文学研究科学術研究員)

評論: 緒形康 (神戸大学大学院人文学研究科教授)

9:10-9:25 Alvaro David Hernandez Hernadez (神戸大学大学院人文学研究科博士後期課程)

“Bases for a Research on *Cosplay* Culture and Fan Communities in Taiwan”

9:25-9:40 石廷宇 (台湾大学台湾文学研究所博士生)

「戰爭期時殖民地台灣『文化包裝』下的『戰爭』與臺灣知識份子之『戰爭認識』——以吳新榮、呂赫若、葉榮鐘、林獻堂為例」

9:40-9:55 評論和答辯

<研究発表 第二場>

主持: 緒形康 (神戸大学大学院人文学研究科教授)

評論: 樋口大祐 (神戸大学大学院人文学研究科准教授)

9:55-10:10 劉于慈 (台湾大学台湾文学研究所博士生)

「論日治時期台灣傳統文人書寫中的女性形象及其文化意涵——以《詩報》(1930-1944) 為觀察場域」

10:10-10:25 莊怡文 (台湾大学台湾文学研究所博士生)

「夢裡剪燭魂歸遲——小泉盜泉《盜泉詩稿》中的愛情世界」

10:25-10:40 評論和答辯

10:40-10:55 <休息>

<研究発表 第三場>

司会: 樋口大祐 (神戸大学大学院人文学研究科准教授)

コメンテーター: 柯慶明 (台湾大学台湾文学研究所兼任教授)

10:55-11:10 藤岡達磨 (神戸大学大学院人文学研究科非常勤講師)

「消費者為什麼去夜市？——基於對士林夜市場卷調查的分析」

11:10-11:25 小笠原淳 (神戸大学大学院人文学研究科学術研究員)

「試論戰後台灣文學中的現代主義敘述特徵——《現代文學》與舞鶴作品的敘述脈絡」

11:25-11:40 評論和答辯

11:40-12:00 <全体討論>

12:00-12:10 <閉幕辭>

柯慶明 (台湾大学台湾文学研究所兼任教授)

東アジアにおける域外経験と文化接触
—言語から探る日本と台湾及び中国大陆の文化往還—

日時: 2012 年 12 月 21 日(金) 9:00-12:10 場所: 国立台湾大学
共催: 国立台湾大学文学院台湾文学研究所, 神戸大学

9:00-9:10 <開会の挨拶>

緒形康 (神戸大学大学院人文学研究科教授)
洪淑苓 (台湾大学台湾文学研究所所長)

<研究発表 第1部>

司会: 小笠原淳 (神戸大学大学院人文学研究科学術研究員)
コメンテーター: 緒形康 (神戸大学大学院人文学研究科教授)

9:10-9:25 Alvaro David Hernandez Hernandez (神戸大学大学院人文学研究科博士後期課程)

“Bases for a Research on *Cosplay* Culture and Fan Communities in Taiwan”

9:25-9:40 石廷宇 (台湾大学台湾文学研究所博士生)

「戦争期時殖民地台湾『文化包装』下の『戦争』與臺灣知識份子之『戦争認識』—以吳新榮、呂赫若、葉榮鐘、林獻堂為例」

9:40-9:55 コメント&質疑応答

<研究発表 第2部>

司会: 緒形康 (神戸大学大学院人文学研究科教授)
コメンテーター: 樋口大祐 (神戸大学大学院人文学研究科准教授)

9:55-10:10 劉于慈 (台湾大学台湾文学研究所博士生)

「論日治時期台灣傳統文人書寫中的女性形象及其文化意涵—以《詩報》(1930-1944)為觀察場域」

10:10-10:25 莊怡文 (台湾大学台湾文学研究所博士生)

「夢裡剪燭魂歸遲—小泉盜泉《盜泉詩稿》中的愛情世界」

10:25-10:40 コメント&質疑応答

10:40-10:55 <休憩>

<研究発表 第3部>

司会: 樋口大祐 (神戸大学大学院人文学研究科准教授)
コメンテーター: 柯慶明 (台湾大学台湾文学研究所兼任教授)

10:55-11:10 藤岡達磨 (神戸大学大学院人文学研究科非常勤講師)

「消費者為什麼去夜市?—基於對士林夜市問卷調查的分析」

11:10-11:25 小笠原淳 (神戸大学大学院人文学研究科学術研究員)

「淺論戰後台灣文學中的現代主義敘述特徵—《現代文學》與舞鶴作品的敘述脈絡」

11:25-11:40 コメント&質疑応答

11:40-12:00 <全体討論>

12:00-12:10 <閉会の挨拶>

柯慶明 (台湾大学台湾文学研究所兼任教授)

1 Introduction

Nowadays fan cultures are an increasingly everyday phenomenon, and fan activities merely part of modern culture.

As a social phenomenon fan cultures and their activities can be seen to be a response to changes that have taken place in the social contexts in which they developed, and where the expansion of consumer societies, the influence of mass-media, the overwhelming amounts of information available, and the transformation of social institutions as both nation-states and families are some of the most significant changes in the context of fan cultures. This then means that fan cultures are no longer just isolated phenomena concerning only certain people that are extremely or “abnormally” devoted to some form of subculture, as was commonly believed at the end of the 80’s. Nowadays to be a fan is to be quite “normal”, and as Gray, Sandvoss, and Harrington (2007) point out the particular patterns of interactions and consumption that take place within fan cultures have come to shape everyday life in modern societies, while also having become a global phenomenon.

However, the spread of fan cultures and the “everydayness” that they have achieved should not just be taken as a “natural” consequence of life in modern societies. It remains important to question the types of society that enable them to exist, and what the driving force underlying them is. Focusing on the role of the media in social interactions researching fan cultures can help us understand many aspects of modern society beyond the fan cultures themselves.

This paper will clarify some of the underlying bases of an ongoing research project regarding the *cosplay* culture in Japan and Taiwan in which I am involved in¹. These bases involve some theoretical points of view regarding *cosplay* and fan cultures, as well as some empirical information that shapes the context of this research. However, the research is still at its beginning stage and there is not enough data for a precise analysis, and hence rather than focusing in introducing some of the results and findings I will mainly center on clarifying what means the study of *cosplay* as an appropriative institution of fandom, and what questions poses its study as a fan community.

Cosplay can be basically described as the activity in which someone dresses up like a fictional character, with a *cosplayer* being the person wearing the costume. As explained later there are many “kinds of cosplay” that not fit into this description, however, including for example (depending on the point of view) nonfictional character “cosplay” and activities where people dress up like fictional characters but which cannot be considered true *cosplay*. The topic of the research in this paper will focus on the kind of people who like to dress up like fictional characters and delimited characters from Japanese subculture that includes anime, manga and games, or other creations regarded as being products of the influence of that Japanese subculture, for example fan creations, that may not actually be Japanese. Our previous research revealed² that because most of the performers are in their 20s and most of them considered “loving the character” essential in *cosplay* and it can be considered to be a “youth fan culture”, and thus I have followed the approaches of fan based studies in this research.

Japanese cultural products like manga, games, and anime are famous throughout the world and so called “otaku” or fans and enthusiasts of these cultural goods have drawn the attention of a number of scholars, businessmen, politicians, critics, writers, other fans, and the merely curious. This attention has resulted in the “otaku culture” being a relatively well-known phenomenon, but it also involves “disputed territory” where it has been difficult to achieve a consensus concerning the boundaries, in particular, of that “culture”. However, some other studies on fan cultures enable some key elements to be determined as guidelines for use in researching “otaku culture”. My approach used the following: the consumption of certain cultural goods can also be regarded as a set of texts, and the institutions involved are shaped by appropriation practices.

1 See the appendix

2 See appendix

Cosplay, as one of the newest forms of this culture, has quickly grown in popularity among new generations of fans, and where changes in the cultural goods, and consumer and appropriation practices are shaping new types of fan cultures. A growing focus on aesthetic elements rather than narrative elements in the cultural texts, the impact of the internet and the popularity of social networking services, alongside the spread of digital cameras, are easily identifiable as some of the changes that have prompted the spread of *cosplay*.

Fan cultures are tightly related with the textual characteristics of cultural goods as well extra-textual characteristics like their “means of consumption”, and consequently fan cultures quickly reflect any change in the texts and the context of consumption in their everyday practices. In addition, fan cultures are a cultural and economical power, which in turn promotes and supports the development of new cultural goods and means of consumption. Fan studies therefore must be sensitive to change and should be able to integrate a comprehensive view of the interaction that takes place between cultural industries, consumption, cultural texts, and the appropriation of their meanings in the “practice of everyday life”. From this perspective, and because it does tend to reflect new trends in fan cultures, *cosplay* is an interesting topic of study.

This particular research focuses on *cosplay* as one particular practice of a larger system of practices within a fan community. Its main aim is to first describe and identify the structure of that community, the type of people that are part of it, and the context of its development. An empirical approach necessitates splitting this theoretical “community” up into many concrete groups of fans. The places they gather, for example fan events, stores, and fan clubs, as well as observation of their activities, including those using the internet, are the principal sources of empirical data. A quantitative approach, for example questionnaire surveys, and a qualitative approach, for example interviews, were both used.

In Japan the study also included events like the “Comic market”, which is the biggest fan convention in the world, being held in Tokyo, among other events, and fan groups and *cosplayers* mainly in the region of Osaka and Kobe. In the case of Taiwan the study focuses on Taipei, and the events “Fancy Frontier” and “Comic World Taiwan”.

This research is part of a study of which the general purpose is to help identify the process through which fan communities form and the role of the media and cultural goods in that process, which then means attempting to identify the connection between the individual construction of meaning and the social construction of institutions.

Achieving this goal necessitates identifying the particularities and similarities of the phenomenon as it appears in different contexts via use of the comparative study method, a valuable methodology in this research. The expectation was that comparing fan group activities in Japan and Taiwan would enable greater understanding of the *cosplay* culture as a whole, and also of some of the particularities of both societies, Japanese and Taiwanese, that make these practices possible. In addition, the particular cultural relationship between Taiwan and Japan, the tension that exists with the identity of Taiwan, and its position between mainland China and Japan, makes Taiwan an interesting place to study with regard to the cultural flows and shape of its identity through the means of fan communities.

2 An overall picture of *cosplay* in Japan

“Cosplay” is an abbreviation the English words “costume play” that was coined in Japan. As Emoto (2009) explains in the majority of cases it is used to refer to someone dressing up in same costume as a character that is typically mainly drawn from manga, anime or a video game. The people that practice it are referred to as a “cosplayer” (Kosupureiyā), or the Japanese abbreviation “Reiyā” (Emoto 2009, Hiroyasu 2008). In Taiwan the abbreviation “Coser” is also commonly used.

While in most of cases *cosplay* can be considered a “secondary creation”, like “dōjinshi” (amateur *manga*), where fictional characters are drawn from an “original” fictional work, typically a manga, game, or animation character, in some cases “cosplay” is also used to refer wearing the uniforms of highly stereotyped professions or roles, for example maids, nurses, school girls, or army uniforms. Moreover, specific fashion trends like “Gothic Lolita” and impersonations of music idols, celebrities, and rock stars, (for example, refer to Koizumi and Suzuki (in Narumi 2009)) for “Band-Cos” (*Bando-kosu*), alongside *cross-dressing* (*Josō* and *dansō*), as exemplified by so called “crossplay”, among others, make *cosplay* a rather difficult area to define.

As pointed out in the introduction the focus in this paper will be on the most common form of *cosplay*, or, that is, *cosplay*

based on fictional characters from the Japanese manga, anime, and game cultures. This type of *cosplay* culture, which is part of the anime fan culture, will be analyzed here, and the practice of which can be considered one more expression of appropriative fan activities. As Sharon Kinsella stressed a parallelism can be drawn between amateur *manga* culture (*dōjinshi*) and *cosplay* in what she regards to be “a form of live parody” (Kinsella 1998:301).

In Japan the origin of *cosplay*, and as part of the abovementioned anime fan culture, is believed to have arisen at amateur *manga* festivals (*dōjinshi sokubaikai*) among amateur *manga* sellers. This first occurred around the 1970s, when a visual anime culture grew in popularity, and which then shaped a new trend within the subculture, differing from the literary based activities of the former science fiction fan groups (Yoshimoto 2009, and Emoto 2009). However, the increase in *cosplay* popularity occurred mostly in the late 1990s alongside the spread of personal computers, video game culture, the internet, and new trends in the *manga*, *anime*, and game related cultural industries, and in which the increasing use of the charisma of characters in a business model based on the use of multiple types of media can be considered rather remarkable. This model has been referred by Ito (2006) as a “media mix” to describe “character-based media” (Ito 2006:2).

The so called “Character business” is a typical strategy used in content industries in thereby helping to cope with the high risk posed by this kind of production, and which can be compared with the “star system” used by, for example, the Hollywood filmmaker industry. Nevertheless, a recent emphasis on the charisma of characters has been observed overall since the 1990s, with rather famous examples including “Hello Kitty” and “Pokémon”, or the emphasis on “Moe Characters” (*Kyara Moe*) that followed the success of “Neon Genesis Evangelion” (Kanzawa 2006). Within the general context of financial struggles occurring within the anime industries this trend was then reinforced by “midnight anime”, which were mainly produced using a new model of production and a number of small industries that were established in the short period of financial success achieved by *anime* from 2005 to 2006, or the so-called “anime bubble” (Taniguchi 2010, Kanzawa 2006, Aoki 2006, and Ishizaka 2005).

The launch in 1999 of “2 chanel”, a massive-scale Japanese internet text-board (internet forum) in 2000, the birth in Akihabara of the first “cosplay café”, the launch in 2005 of “You Tube”, and then in 2007 of “Niko Niko Dōga”, as well as the emergence of Akihabara and “Moe” as central icons in the “otaku culture” around 2005, can be considered just some of the symbols of a new fan culture in which *cosplay* plays a leading role.

Cosplay is mainly practiced by women, but if *cosplay* is focused upon as an appropriative institution it is easy to distinguish that many other actors are also involved, some of which can be listed as follows: 1) The cosplayer (*Reiyā* or *Coser*) 2) The cameraman or *kameko*, 3) Assistants, 4) Surrounding institutions and businesses, and 5) The surrounding fan community and concrete fan groups. Before describing some of the basic characteristics of *cosplayers* a brief introduction will be provided of the other four surrounding actors.

A *kameko* is the shortened form of “*kamera kozō*”, or “guy with a camera”. If *cosplay* is considered to be a kind of performance then *kameko* are in many cases the primary audience of *cosplayers*. They are typically guys (mainly males) who haunt *cosplayers* (mainly females) while they pose with all types of cameras, most of them expensive looking, in an attempt to take the best shot. In many cases they own some type of media source, for example websites where they post the pictures, and which help disseminate the image of *cosplay*. Furthermore, many of them create a type of “follower” relationship with *cosplayers*, and even track their activities at many events as amateur idols. Some of them, along with the *cosplayers* themselves, also have their own business cards that they usually exchange with each other, thus shaping a network with a focus on *cosplay* activities.

The relationship between *kameko* and *reiyā* can be, however, problematic in that some *kameko* take obscene pictures or pictures that the *reiyā* does not approve of, which they then make available over the internet. There are also cases in which *kamekos* intrude into the privacy and personal lives of the *reiyā*, which is one of the reasons why the *cosplay* culture has some basic ground rules, for example not taking any pictures without first obtaining the approval of the *reiyā* concerned.

While ranging from professionals through to amateurs, or even just simply casual photographers, *kamekos* play an important role “observers” or an audience. I will return to this in the next section of this paper.

The “assistants”, as they will be referred to as here, can be close friends or relatives of the *reiyā* who assist them in their

activities, and in many cases can also be *reiyā* that are not themselves performing at the time. They help *reiyā* to put on the costume, take care of their luggage, inform the *reiyā* if something has gone wrong with their makeup or costume, and also help to handle any possible bad behavior among the kamekos and other people. In Taiwan friends that help in this way are usually called “managers” or “馬內”. The so called “*Nuiko*” (seamstress) in Japan, or a friend or close acquaintance that specializes in making costumes, as well as those who help with the props or other technical requirements of *cosplay*, can also be considered part of this category.

The “surrounding institutions and businesses” category can be further divided into the following three subcategories. 1) Public places where *cosplay* takes place, 2) *Cosplay* related media and 3) Other related businesses, for example those involving *cosplay* merchandise and online retailing of costumes. The first subcategory includes any type of festival or gathering where *cosplay* is part of the official schedule, or anywhere *cosplay* can be practiced in public. These places and events can be the responsibility of companies or semiprofessional fan groups who arrange and run fan events and specialized *cosplay* events, photo sessions and photo studios, or *cosplay* cafes or *cosplay* bars, *manga* and anime stores, etc.

Amateur *manga* events like the “Comic Market” in Tokyo, the “World Cosplay Summit” in Nagoya, alongside street parades held in Akihabara or Nipponbashi, as well as focused *cosplay* events like “CosJoy”, and other smaller events and festivals can be considered representative of this in Japan. Events like “Fancy Frontier” and “Comic World Taiwan” can be considered among the most important of this in Taiwan. There are also other many other small events organized by university based fan clubs.

“Cosplay related media” includes magazines and photo albums, as well as social networking services where photographs of *cosplayers* can be observed. Some SNS sites have a specific *cosplay* orientation, for example with “Cosplayers Archive”, “Cure”, and “Layer Cloud” being the most popular, alongside “Face Book” and “Twitter”, and also “Plurk” in Taiwan.

Finally fan community and concrete fan groups must be included, which are other possibly concerned or indirect participants of the *cosplay* culture. They consume the same or similar cultural goods, and share most of the same institutions, places and media. Some of them actively like *cosplay* and have many friends who engage in *cosplay* activities (68.4% of the respondents to a general survey on fan activities³ have *cosplayers* friends) and thus can be considered part of the same community. However, not everyone is that enthusiastic about *cosplay* and also many fans actively dislike it and do not consider it a fan activity.

Therefore, and also because of the different requirements and uses of the places where the individual fan activities take place as *dōjinshi* and *cosplay*, confining *cosplay* to a specific area of an event, prohibiting *cosplay* at some events, and the proliferation of *cosplay* only focused events have all become necessary. This has also resulted in a split in the fan groups and further subdivision and specialization of the *cosplay* fan community. However, and in any case, *cosplay* is an activity that integrates a variety of actors and elements from the fan culture, and therefore must be taken into account in any analysis.

The following will briefly introduce some of the characteristics of *cosplayers* in Japan and their activities. Some of the information in this section comes from personal observations and some research conducted in Japan by me and some other researchers.⁴

An approach to *cosplayers* in Japan through questionnaire surveys

Sex

Anyone can see at glance that *cosplay* is an activity that is mostly carried out by women. Indeed, not only *cosplay* but other appropriative activities representative of Japanese subculture fans, for example the production of *dōjinshi*, are mostly feminine in their origin. Yoshimoto (2009) and Kinsella (1998, 2000) can be referred to for more details. The famous study on Star trek fan fiction carried out by Jenkins (1992) provides another example of the predominant role of women in fan cultures. Nevertheless, the interesting thing here is the male centered view of “otaku culture”.

³ See appendix

⁴ See appendix

A preliminary questionnaire survey of 100 assistants at “80 Comic Market” (Tokyo) selected randomly revealed 58 % male and 41% female respondents, but where only 25 % had ever practiced *cosplay*. Of that 25% (23 respondents and 8 excluded) 81 % were female respondents. The same questionnaire survey was carried out on 50 participants selected randomly at “Super Comic City Kansai 17”, an event that focuses on female *dōinshi* and where *cosplay* is not permitted. Here 47 of the 50 respondents were women (47), but of whom only 29% had ever practiced *cosplay*. Another questionnaire survey, with the on *cosplayers* only, that took place at “82 Comic Market” and with 202 respondents revealed 82% to be female *cosplayers*. And although none of the above surveys depicts a complete sample they are a good reference to use in confirming the proportion of male and female respondents who engage in the activity.

Age

The survey at “82 Comic Market” revealed a minimum of 10 and maximum age of 38 years old, with the average being 23 years old. A peak could be observed at 18 years old and another at 22 years old and with most of the results being distributed between 18 and 28 years old. This then means that in general it involves generations born in the second half of the 1980s and the first half of 1990s, or slightly younger generations than described by Azuma (2007) as the third *otaku* generation. The surveys of general participants at amateur manga events (80 Comic Market and “Super Comic City Kansai 17”) reveal similar results, or, that is, a minimum age of 14 and a maximum of 39 years old, with the average of all the respondents being 23, as well as the same average when only *cosplayers* were considered, and which could then mean that there is no generational difference between *cosplayers* and the surrounding fan community.

The age at which the respondents first indulged in *cosplay*, as revealed by the results of the “82 Comic Market” survey, was at an average of 17 years old, with most of the results ranging between 14 and 19 years old and a peak at 16 years old. This then means that in general the participants had been indulging in *cosplay* for 5 years.

Occupation and education

The survey of the *cosplayers* revealed only the 33.3% of them to have been students and the rest, 66.7%, to have been working adults of society. University graduates accounted for the majority at 34.3%, followed vocational or technical school graduates at 32%, and then high school graduates at 23.3%. The average age of 23 years old leads to the estimate that most of them have or expect to have a higher education level qualification.

Some other aspects involved in the practice of *cosplay* that are based on simple frequency analysis of the “82 Comic Market” questionnaire survey will now be introduced.

The results of where the *cosplay* typically took place were as follows: 1) Amateur *manga* events: 81.7%, 2) Events organized by professional *cosplay* companies: 58%, 3) At private gatherings of cosplayers: 46.5%, 4) At a photo studio: 46%, and 5) 4% each at *cosplay* cafes, busy streets, and shopping areas.

The results of the type of *cosplay* respondents indulged in were as follows: 1) Characters from *manga*, *anime*, or games: 94%, 2) Virtual Idols (for example *Vocaloid*): 39.6%, 3) *Crossplay*: 24.8%, 4) Uniforms: 22.3%, 5) Lolita: 10.4%, 6) A movie or TV drama character: 7.4%, 7) Visual Key, and Singer or member of a music group, 5.9% each, and last 8) Idol, entertainer or TV star: 4%.

The results of the people with whom the *cosplayer* indulged in the practice with were as follows: 1) With friends from school: 70.8%, 2) With friends they met while indulging in *cosplay* at a *cosplay* event: 61.2%, 3) With friends they met over the internet: 47.8%, 4) With colleagues from work or a part-time job: 15.9%, 5) With family member(s) or relatives: 9%.

The results of the reason they began to indulge in *cosplay* were as follows: 1) Because there was a character they liked they

wished to dress up like: 63.9%, 2) Because they were interested in disguises, costumes, or in changing their appearance: 49%, 3) Because they were invited by a friend or relative who was already a *cosplayer*: 47%, 4) Because they were interested in fashion and clothes: 21%, 5) Because they were interested in experiencing a “new me”: 19.1%, 6) Because they were invited by a friend or relative who was not a *cosplayer*: 6%, 7) Because they were interested in discovering a new way of express themselves: 3.5%.

The results of the elements of *cosplay* they considered important were as follows: 1) Loving the character: 82.6%, 2) Knowing the background of the character and the work it appeared in (*anime/manga/game*): 54.2%, 3) Getting completely into the role of the character: 52.2%, 4) Paying particular attention to the creation of the costume: 38.3%, 5) Caring about the relationship between “Kameko”, “Nuiko”, and “Player”: 30%, 6) Being pretty/good looking: 28.9%.

Finally, and with regard to the importance of the use of some form of SNS, 73% of the respondents utilized a SNS that specialized in *cosplay*, although a big percentage, or 34.2%, only used it a few times a month. Most of the users, or 54.1%, utilized it at least once a week, and 19.2 % every day. Excluding those that utilized a *cosplay* specialized SNS 18% of the respondents used another form of SNS, and thus in total 91% of the *cosplayers* were familiar with using a SNS. This then clarified that a wide range of that kind of service is utilized, although it does not prove any specific dependence between the use of the services and the practice of *cosplay*.

This simple data also clarified that for the *cosplayer* assistants at the “Comic market” *cosplay* is an activity which is tightly related to what is commonly believed to be “fan” attitudes. The overwhelming predominance of the preference to be *anime*, *manga*, and game characters, as well as the general predominant preference to be fictional characters, the stress upon the like of a specific character as the reason why they started to indulge in *cosplay*, and the love of the character and understanding of the general context of the work as fundamental elements in *cosplay*, among other characteristics, also supports this. This is, however, a highly stereotyped and conscious discourse of “me as a fan”, and which also close to the description of the rationalized fandom made by Jenkins (1992). Nevertheless, as Hills observes (2002), this should only be considered half (or maybe even less than half) the story.

For example, the question remains whether the same thing holds true for other *cosplayers*, for instance those who do not assist at amateur *manga* events but still indulge in the practice in other places. In addition, qualitative data (interviews and observations) also suggests that the choice of a character “just for love” is not always the main reason because many *cosplayers* talk about choosing “characters that are easy” to dress as, or pay special attention to having a nice body that will honor the character or its fans. In general, therefore, the opinions of fans regarding their activities as revealed by the questionnaires should only be taken as “half” the story with respect to being a fan. This would appear to be the most rational explanation of their identity as a member of a fan community.

3 *Cosplay* and Fan Communities

This section will clarify the most basic points of the theoretical perspective from which *cosplay* will be analyzed. This perspective will be used to shape the guidelines used in this study on *cosplay* as an activity within a fan community and the basis for the questions posed by it. However, it should be kept in mind that the purpose of this paper was not to delve deeper into this theoretical framework, and also that many of its details should be regarded as hypotheses rather than statements.

In previous studies I focused on the theoretical problem of the concept of the “community” in fan community studies, as well as centering on the theoretical definition of *fandom*. This topic mainly involved the works of Abercrombie and Longhurst (1998), Fiske (1992, 2011), Grossberg (1992), Hills (2002), Jenkins (1992a, 1992b), Sandvoss (2005a, 2005b, 2007), and Thompson (1990, 1995), and with the concept of community Anderson (1991), Bauman (2001), Cohen (1985) and Delanty (2009). Some details, for example the analysis of texts in mass culture or popular culture were referenced from Adorno (1994, 1991), Barthes

(1956, 1975, 1977, 2002), Eco (1968, 2005), and Ricoeur (2006, 1988). Roughly speaking, therefore, the general model that will be introduced is a reinterpretation of those works but also based on having experienced Mexican fan activities, and my observations of Japanese fan groups.

Fan communities

A fan community or *fandom* is a community composed of fans. However, a group of fans together result in quite different phenomenon with a study than one single fan alone does. If a fan can be described as someone emotionally engaged in the consumption of a cultural text or texts then a group of a number of fans brings into play a plurality of people, texts, and methods of consumption that, despite their heterogeneity, get considered a coherent group. The setting of boundaries and identification of elements that help define the extension and borders of the group then becomes the central issue. Regardless of what exactly a “community” can mean, therefore, the study of fan communities poses the question of how consumption, as a particular meaning, can play a decisive role in the creation of a social identity. Here, identity can be considered a discursive factor underpinned by the everyday practice of appropriation of texts through the institutions that are created by fans.

Departing from this perspective *fandom* can be briefly defined to be a community that creates an institution through the practice of appropriation of several sets of texts, and where their practices and institutions are elements that are subordinate to the emotive consumption of those texts.

The approach to Japanese *animation*, *manga*, and video game culture fan communities taken in this paper regard the integration of the following three empirical elements: consumption, practice, and institution as the heart of the community as well as key factors to use when making any observations. The concrete social groups of fans that can be observed at fan gatherings like amateur manga markets, *cosplay* photo sessions, comic stores, theaters, etc, alongside the traces of their activities they leave behind like amateur *manga* and *fan-fiction*, *cosplay* photos, and anime forums on the internet, can be approached by analyzing the abovementioned three elements and then using them to create an abstract of the category of the community and then attempting to analyze symbolic elements like identity and the creation of meaning in fandom. The three elements will therefore be further discussed in the following.

Consumption

Consumption in fandom has an emotive or affective nature. There is a deeply subjective attachment in fans towards *certain* cultural goods available on the market, which then means some form of meaningful discrimination of certain cultural goods takes place and a stress upon subjective values rather than a “rational choice” in the cultural goods market. The goods consumed by fans are commodities whose consumption depends on the interpretation of certain meanings, and are thus considered cultural texts and to have textual characteristics, which then means that the specific elements which make up the texts, for example the plot of a the TV anime, the qualities of a character, and also the music or colors used in it, are essential to their value. All of these therefore lead to the overall summary of user-values being stressed rather than exchange-values in fan consumption.

This is, of course, natural if the point of the view of the consumer is focused upon. However, this characteristic also leads to two other important points. The first being the set of boundaries used to distinguish specific territories within the supply of cultural texts available on the market, and as this distinction is subjective, and when fandom as a collective body is focused upon, this then reveals *an inter-subjective distinction of cultural goods*. The second point is concerned with the nature of the texts as commodities, and the pleasure and creativity that results from their consumption.

The aesthetic experience as a consumer issue and the commodification of cultural texts being a form of art has led to the destruction of its creative and even revolutionary nature being emphasized, but an emphasis on the subjective user-values in fan consumption has also been argued which can restore the creative nature that links the textual characteristics of the commodity to the social experience of the consumer (fan). However, and nevertheless, the experience can still be regarded as consumerism

as it can be linked to cultural texts produced as goods by cultural industries within a capitalist economy.

The pleasure in the consumption of popular culture relies on creativity, and where consumers can create their own meanings and interpretations from texts, which leads to the second element of fan communities: their practices.

Practices

Practices are the activities fans indulge in and of which consumption is the most evident. However, when commodities are regarded as cultural texts, or in many cases, a set of multiple texts, then consumption also involves the act of interpretation that produces an active meaning. This production of meaning can range from the sole act of interpretation through to the creation of new meanings and the expression of them in a variety of ways, and for example behavioral (copying the hairstyle of your favorite rock star or speaking like your favorite character), verbal (discussing the story of your favorite movie), or textual (producing new texts like writing your opinions, creating amateur *manga*, or painting or creating new images of characters as in *cosplay* pictures).

These are “appropriative activities” because through them fans can appropriate the meanings of the text and make them “their own”. Different interpretation enable fans to assimilate textual elements into their own social experience, and with the meanings they create relying on that experience and also being the raw material used in the interpretation of their everyday life experience.

However, these activities are all creative activities that are subordinate to the affective consumption, which is why they are considered “secondary activities” and their textual productions regarded as “secondary texts”. This then leads to tension and contradictions within fandom activities. The creativity deployed by fans and the appropriation of the meanings of the text involved can be a way of expressing the passion and attachment towards the object consumed but it also creates a distance, criticism, and even destruction of the original text. This is a natural with creativity and interpretation, and becomes more evident when the social experience of the consumer does not fit the textual elements of the object consumed, or at least constantly challenges it.

However, fans “criticize precisely because they do love” the texts and care so much about them. As many have observed fan culture is not revolutionary, which is exactly the reason why fan activities must take care not to distance themselves from the object involved, else they could lose it, and thus maintaining a contradictory balance between creativity and subordination.

Finally, the appropriative activities of fans result in the creation of new texts and new meanings, which then circulate among other fans. Social interaction leads to fans creating places and means where new meanings can be exchanged and new values negotiated, but also where the meanings can then be experienced in an inter-subjective way. The constant practice of these activities shapes the foundation of the structure of fan communities. Good examples of this would include festivals-that-are-similar-to-markets and markets-that-are-similar-to-festivals, for example amateur *manga* events. The “foundation” that supports the body of fan communities is the fan institutions themselves.

Institutions

Fans institutions are shaped by the activities put into practice and their function is *to regulate the activities and meanings currently in circulation*. Fan practices are integrated with each other and involve an interrelation of a number of different fans and fan groups. Fan activities abound with texts and many types of secondary texts, interpretations and possible meanings, and since many of these activities are carried out in groups or the resultant texts get circulated among fan audiences some kind of regulation, rules, and procedures, etc. become necessary that help to maintain unity and to produce and reproduce the group activities which are made up of different people and indeed over time.

The production of amateur *manga*, the practice of *cosplay*, and the organization of fan events are good examples of how these activities relay on the social structures that organize the activities and guarantee their reproduction. For example, the emphasis on good manners and behavior with *cosplay* enables the relationship between *cosplayers* and *kamekos* that otherwise could

come into conflict. In fact ignoring or transgressing the rules would be found offensive by or harmful to the overall community.

Fan institutions, however, easily originate, change, develop, and die. In fact the creation of new institutions and their eventual mutation and transformation is one of the characteristics of *fandoms*. The rapid formation of Japanese animation *fandoms* in many places throughout the world arising from consumption of such cultural texts along with the rapid development of their institutions and shaping of new activities and means of expression, can be considered indicative of this.

If the emotive consumption of a set of texts, the realization of “secondary activities” in relation to that consumption, and the construction of institutions through these activities are the central characteristics of fan communities then the emergence of new means of consumption, new texts, and new relationships between the texts and the audience, the development of new kinds of activities and new places for social interactions to take place, and the birth of new institutions that regulate the activities are the elements we should therefore focus on when analyzing *cosplay* as a new institution of appropriation by fan communities.

Cosplay as an appropriative institution of fandom

The practice of *cosplay*, as the integration of actors and activities introduced in section two, can be described in the context of this study as a physically appropriative institution of, in general, mainly fictional characters. The evidently central physical role in *cosplay* has drawn special attention to the interplay between the activity and the search for an identity because similar to fashion the person’s external appearance is regarded to be the link between their self and society. For example refer to the introduction to the book “*Kosupureka suru shakai*” (“*The society that becomes cosplay*”) (Narumi 2009).

I will briefly focus on some new aspects and questions that *cosplay* give rise to in the following. Another commonly regarded issue in *cosplay*, namely the gender issue, will be left aside here, and not because I do not consider it important, but because I still do not have the appropriate tools to deal with the question.

I will therefore use the following three aspects in my approach *cosplay*. The topics introduced with these three points are some of the problems arising from *cosplay* as a fan community institution, and the expectation is that this research can help contribute to explaining them.

1) Consumption, as defined in this paper, is the objective of *cosplay*. 2) The practice of appropriation, and the particularity of appropriation via physical means. 3) The institutions as fan markets, the dialectic of the value, and the fan audiences.

With consumption being the objective of *cosplay* the particular issue is as I mentioned before a change in the textual characteristics of the *anime*, *manga*, and games consumed that instead stresses the charisma of the characters rather than the narrative aspects.

Manga and animation, and in many cases also TV games, are narrative forms of expression. This typically means that there is a story to tell and a method of telling it, or a narrative structure that can be expressed via a certain discourse. However, as Yoshimoto (2009) discussed, *manga* and animation represent a shift from a fan culture being based on literary texts to a culture that is based on visual texts. The discourse within *manga* integrates both visual (iconic) and literary elements, while animation basically relies entirely upon a visual narrative. These introduce an important element that it is not present in novels and literary works, i.e., the possibility of appreciating the aesthetic elements of a work separately to the narrative. In conclusion then it could be said that animation and *manga* can be enjoyed through their iconic elements only and without having to pay any attention to the narrative. The famous thesis of Azuma (2007) on the role of “moe elements” in “otaku culture” echoes this characteristic.

Azuma and earlier authors like Kinsella (1998, 2000) pointed out the “post-modern” nature of fan cultures that would appear to have eliminated the need for “big narratives”. The focus that *cosplay* places upon the characters would seem to reflect this characteristic. However, with the approach taken with *cosplay* there can be a tendency to try to explain how the narrative (fictional narrative) shapes both the physical form and identity. This is really quite logical because as Ricoeur (1988) noted identities are narrative based explanations of the self.

The theories based on the appropriation of media messages of Thompson (1995), and the fan appropriation discussed by

Abercrombie and Longhurst (1998) and Hills (2002), are underpinned by this hermeneutic idea that regards a narrative as the raw material used in the shaping of the self. However, the possibility also exists that narratives play a secondary role in *cosplay* and current fan cultures. This then identifies that greater understanding of what makes a character and how it is appropriated by fans is therefore necessary.

Accordingly the the practice of appropriation, *via physical form*, needs to be focused upon. Hills (2002) described fans “impersonation” and costumes as “performance-based consumption” (2002:166), and approaches to it, as being composed of two stages: “self-absence” and “self-reflexivity”. “Self-absence” is where fans cannot explain their individual likes and activities as fans. This stage represents the irrational affectivity in fan consumption pointed out earlier on. “Self-reflexivity” represents the rationality and intentionality of fans as expressed by the conscious discourse of “me as a fan”, and therefore a narrative-based creation of an identity. Basically Hills’ suggestion was based on Ricoeur’s in that fans must first “erase” their sense of self in order to “let the text be”. This then becomes the base of the re-appropriation of the self (as well as the text) and the creation of the fan’s identity. In Hill’s words, “it is only by passing through moments of self-absence that our sense of self can be re-narrated and expanded” (2002:167). The idea of “losing one’s sense of self” in appropriation is relatively common. For example see Fiske’s idea of “evasive pleasure” (1989), or the similar idea of fans erasing their sense of self and rediscovering it via *cosplay* in Narumi (2009).

However, Sandvoss (2005a) proposes a completely different view of fans. Where appropriation implicates the existing difference between the object to be appropriated and the subject that appropriates it Sandvoss suggest that this difference can grow blurred when the object gets too close to the fan’s experiences and desires. He refers to it as “aesthetic distance” but it could also be said to be affective closeness (or even more as “moe” jargon reveals the aesthetics elements and affectivity are closely related to each other). The following quote resumes his point.

“While aesthetic distance enables the reader to engage with the textual ‘Other’, its eradication in a fan text signals the collapse of the reading situation as a potential dialogue between the self and the world. Here the circle between the aesthetic condition of fan texts and the conceptualization of fandom as narcissism closes in: as all experiences discovered by a fan in fan texts coincide with his or her horizon of expectations the fan texts takes on the role of a mirror, and thus becomes a banal object of narcissistic perspective” (2005a:145).

Sandvoss’s analysis of fan texts would appear to reflect the increasingly prevalent characteristics of *anime*, *manga* and games described in section one and the emphasis on characters just referred to. His description of fandom as “narcissistic” therefore very much needs to be taken into account, where, as he proposes, a “self-reflexive” fan identity becomes “self-reflective” (ibid 161), and where appropriation does not denote making the text “mine” but instead “me” (ibid 163).

In conclusion the physical appropriation of characters without requiring any narrative element in *cosplay* may not necessarily be a “modern” reflexive construction of the self, or a narrative “search for identity” and instead a more “post-modern like” *reflective* performance in which the narrative plays a secondary role and there is no actual identity to find through a mask, because for *cosplayers*, all those masks are not *mine* and instead already *me*.

Finally there remains the problem of *cosplay* as an institution of appropriation and its place within other institutions, for example fan events. As previously referred to fan institutions regulate the various meanings in circulation, and *cosplay* as a practice that integrate a variety of actors, and not just the cosplayers themselves, generate and circulate new texts and meanings, an example being *cosplay* pictures. If the activity involves in *cosplay* can be regarded as somewhat narcissistic then what can be said about the observers, the *cosplay* audience, and how do we explain the relationship between the different audiences? Or can it be said an audience is not even needed in *cosplay*? That pictures unimportant and fan institutions a mere context?

These questions remain to be carefully researched but there are two approaches, one provided by Hills (2002) and the other by Abercrombie and Longhurst (2008) and then Sandvoss (2005a, 2005b) that provide some clues to use in analyzing them. The “dialectic of values” in fan cultures of Hills and the “diffused audiences” of Abercrombie and Longhurst, and then Sandvoss,

and its link with narcissism in fan culture, will be briefly focused upon.

When I addressed consumption in fandom I made the remark of its emotive nature being an important factor in making the “subject” the object of consumption, which thanks to enables the user-value to be recovered via commodities. That the subjective value conferred upon commodities then supports the creativity of fan activities and *cosplay* is no exception.

However, and as Hills reminds us, this is not the end of the story because fans also shape the markets where they circulate their secondary texts. When he discusses the role of fans in “performance-based consumption” he stresses the fact that the character involved in the performed is not just an individual or personal object of love but communal. Thus when fans dress up as characters for the sake of other fans, thereby not just making their own interpretation of the meanings available but also their own physical form within the system of consumption (and which is precisely why he calls it performance-based consumption), thus re-shaping new exchange-values within a fan community, and then returning to from making the “subject” the object to making it the “object” again. Cosplay photos circulated among fans (where the subject becomes an object) are a good example of what he refers to as the “dialectic of values” in fan cultures.

The second approach (the “diffused audience” and narcissism) is also related to this perspective because it takes into account the importance of the fan community as an audience where the fans (*cosplayers* in this case) are also the performers. However, if as Sandvoss states, “by making their object of fandom into extensions of themselves [and this description fits very well with the image of cosplay], fans [...] removes their object of consumption from the logic of capitalist exchange” (205a:116), then what happens when fans make the object not just an *extension* of the self (mine) but actually *themselves* (me), as he suggest for what happens when fans become too narcissistic. This approach suggests that there is no distance between the object and the subject because they both become part of the same physical form. Without an object no exchange can take place and therefore, rather than fan events being viewed as markets, they describe a spectacle, and *cosplay* as a performance would appear to be more appropriate.

As Abercrombie and Longhurst (1998) propose “diffused audiences” are constantly engaged into consumption. Texts are available everywhere and their consumption, even if not intended, becomes part of everyday life. In addition, the audiences start to feel that their life is a spectacle in which they are performers, or “protagonists in their own movie”, as is commonly stated. To the audiences appropriation is not an active and intentional act; it is an *inevitable* and unintentional part of their life, as pointed out by Sandvoss. The popularity of SNS and its importance in the increased popularity of *cosplay* can be considered a clue to the narcissistic nature of *cosplayers* as being performers for themselves as the audience.

However, while *cosplay* may appear to have originated in the same patterns of consumption that gave birth to “diffused audiences” and narcissist fans it remains for an empirical study to reveal if cosplay really is a narcissist performance, and whether fandom practices and institutions can be reduced to being a complex encompassing mirror where performers can view themselves or not.

4 The Taiwan Situation (Conclusions)

Some months ago I wrote a report⁵ on the analysis of the results of a preliminary questionnaire survey made by the Japan Subculture Studies Project office. The survey concerned the “Acceptance of Manga Content and Practices in East Asia” and the content analyzed composed of a sample of 200 respondents from Hong Kong and 205 from Taiwan. (Refer to the Appendix for more details).

My role in the research was secondary, although I did have the opportunity to use the data in some comparative analysis that focused on *cosplay*. I was not involved in the actual sampling and hence did not observe the places and events where the two surveys were carried out. In the case of Taiwan, however, it was “Fancy Frontier” that held on the 4th and 5th of February, 2012.

5 “Manga Readers and Japan: Reflecting the Survey on the Acceptance of “Manga Contents” and Practice in East Asia”. Paper presented at “The 1st International Conference on Manga / Anime World Network”, held on June 1st and 2nd, at the Takigawa Memorial Hall, Kobe University.

When I wrote the conclusions I observed that there were “two different images of fandom” in Hong Kong and Taiwan, respectively. There was very little difference in the age of the fans, (the Hong Kong fans being slightly younger than the Taiwan fans, which is rather inexplicable due to the earlier influence of Japanese subculture in Taiwan), and some different aspects with regard to consumption, with the most significant being an apparent tendency in Taiwan towards “appropriative activities like ‘cosplay’, ‘doujinshi’, and internet activities”. A hypothesis (not yet verified) was then made regarding the existence of a “further subculture within the Japanese subculture present in Taiwan”. This then meant that the emphasis in Taiwan was not just on the consumption of Japanese subculture but also a higher tendency to engage in typical fan activities. I then proposed a close relationship between Japan and the need for distinction as a possible reason for that because as we have seen the activities are to a certain extent creative, and can help to develop a new culture that better fits the everyday lives of Taiwanese youth. That opinion was based on the idea of a type of “cultural resistance” existing, or at the very least a type of “cultural conflict” between appropriation and consumption that echoes the idea of popular culture as a culture of resistance, as proposed by Fiske in the 1980s.

I spent almost two months in Taiwan, and although rather short, the limited observations I made and my limited knowledge of the context did not allow me to draw any conclusions or suggest anything new, but the cultural identity issue now appears even more interesting than I first thought.

Japanese cultural goods would appear to be merely a part of ordinary life in Taipei, and as in many other places in the world their consumption and appropriation just a part of everyday life. Since the 1980s a variety of changes in the politics, economy, markets, and production of cultural goods have shaped a completely different image of “popular culture”, with this new context having resulted in authors like Hills and Sandvoss criticizing the notion of cultural resistance presented in Fiske.

The presence of narcissism in fandom would be the biggest criticism to the idea of cultural resistance because although it recognizes the creative power involved in the construction of meaning it also neutralizes the notion of any “resistance”. A “lack of aesthetic distance” (2005a:155) in narcissism (or more affective proximity) suggests that any meaning can be appropriated in any possible way. But if any meaning can be adopted then there is no importance in meanings at all. The metaphor of cultural texts as mirrors in Sandvoss emphasizes that for the audience there is no meaning in the cultural texts. He states, “The profound social and cultural significance of popular texts, thus, derives not from encoded meanings but from their very absence” (2005b:836) There are no meanings to resist or subvert and hence no cultural conflict can occur.

The wide spread of popular Japanese culture in a variety of social contexts throughout the world would appear to support, to some extent, this thesis. However, leaving consumption behind the practices of fandom and the way in which they appropriate meanings will require greater clarification. The study of *cosplay* as an appropriative institution of fandom, within the cultural and historical context of Taiwan, is a good opportunity to observe how cultural proximity or distance starts to matter, and whether consumption and appropriation do indeed come into conflict or not. These are some of the bases of this research on *cosplay* culture in Taiwan.

Appendix

Regarding the research and surveys referred to in this paper

This paper focused on some theoretical and empirical background information that is the basis of some ongoing research on cosplay among Taiwan youth. That basis, however, can also be used in similar research in Japan and a general study of Japanese subculture fan communities.

The research in Taiwan commenced October 1st of this year and will take until the end of March of 2013. The research has just been commenced upon and therefore the empirical data obtained up till now still insufficient to be used in any analysis here.

Many of the ideas explored in this paper originated in previous studies and the experiences of fans, and as a fan myself, for example as the basis of my bachelor’s thesis on Mexican fandom. The theoretical concepts presented here are discussed in more detail in my master’s thesis.

The data from the questionnaires came from the following surveys:

1) A general survey on fan activities carried out by myself at the “80 Comic Market” at Tokyo Big Sight, (100 respondents) and at “Super Comic City Kansai 17” summer at Intex Osaka (48 respondents), both in the summer of 2011.

It involved preliminary research on the topics of fan consumption and fan activities, and was planned in the context of a study of fandom as a fan community.

2) A survey on *cosplayers*. This survey is part of ongoing general research on *cosplay* planned by Dr. Hayami Nanako in which I am taking part.

The survey is still in progress and the data presented in this paper from the first sampling stage, which took place at “82 Comic Market” and involved 202 respondents, all of them *cosplayers*, in the summer of 2012.

3) The survey “Acceptance of Manga Content and Practices in East Asia” was conducted by the Japan Subculture Studies Project office. It was headed by Dr. Yui Kiyomitsu and research fellows at the office, namely Dr. Hayami Nanako, Dr. Okubo Motomasa, and Dr. Saika Tadahiro, aided in created the questionnaire and arranging the field research abroad. M.A. Hirai Taiki also helped in the program with analyzing the data.

The surveys referred in this paper took place in Hong Kong and Taiwan.

The Hong Kong survey took place at the ‘32nd Comic World’ held at the Kowloon Bay International Trade and Exhibition Center on the 27th and 28th of August 2011 under the supervision of Dr. Wong Heung Wah. The survey involved 200 respondents. The Taiwan survey took place at ‘Fancy Frontier’ held at the National University of Taiwan on the 4th and 5th of February 2012. The survey involved 205 respondents.

References

- 東浩紀 2007, 『動物化するポストモダン—オタクから見た日本社会』 講談社現代新書
- 石坂悦男, 2005, 「日本のアニメーション産業」 社会志林 51(4), 117-137 法政大学
- 榎本秋, 2009, 『オタクのことが面白いほどわかる本』 中経出版
- 神澤孝宣, 2006, 「二極化するキャラクター消費—マンガ・アニメ産業からみたキャラクター消費の考察」 宝塚造形芸術大学紀要 ARTES No.20
- 谷口功, 2010, 『最新アニメ業界の動向とカラクリがよーくわかる本』 秀和システム
- 成実弘至 2009, 『コスプレする社会—サブカルチャーの身体文化』 せりか書房
- ヒロヤス・カイ, 2008, 『オタクの考察』 シーアンドアール研究所
- 吉本たいまつ, 2009, 『おたくの起源』 NTT 出版株式会社
- Abercrombie, Nicholas; Longhurst Brian, 1998, *Audiences, A Social Theory of Performance and Imagination*, London, Sage
- Adorno, Theodor; Horkheimer, Max, 1994 (1969), *Dialectica de la Ilustración*, Madrid, Trota
- Adorno, Theodor, 1991 “On the Fetish Character in Music and the Regression of listening”, in Adorno, Theodor, 1991, *The Culture Industry*, New York, Routledge
- Anderson, Benedict, 1991, *Imagined Communities, Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, London, New York, Verso
- Barthes, Roland, (1956), *Mitologías*, México, Siglo XXI.
- Barthes, Roland, 1975, *The Pleasure of the Text*, New York, Hill and Wang.
- Barthes, Roland, 1977, *Image Music Text*, London, Fontana Press.
- Barthes, Roland, (et al), 2006, *Análisis estructural del relato*, México, Ediciones Coyoacán.
- Bauman, Zygmunt, 2001, *Community, Seeking Safety in an Insecure World*, UK-USA, Polity Press
- Cohen, Anthony, 1985, *The Symbolic Construction of Community*, New York, Tavistock Publications and Ellis Horwood Limited
- Delanty, Gerald, 2009, *Community*, London and New York, Routledge
- Eco, Umberto, 1968, *Apocalípticos e Integrados*, Barcelona, Editorial Lumen.

- Eco, Umberto, 2005, *La estructura ausente, Introducción a la semiótica*, México, DeBollillo.
- Fiske, John, 1992, "The Cultural Economy of Fandom", Lewis, A Lisa (ed) *The Adoring Audience. Fan Culture and Popular Media*, London, Routledge
- Fiske, John, 2011 (1989), *Understanding Popular Culture*, London and New York, Routledge
- Gray, J., Sandvoss, C. & Harrington, L. (eds), 2007, *Fandom, Identities and Communities in a Mediated World*, New York and London, New York University Press
- Grossberg, Lawrence, 1992, "Is There a Fan in the House?: The Affective Sensibility of Fandom", Lewis, A Lisa (ed) *The Adoring Audience. Fan Culture and Popular Media*, London, Routledge
- Hills, Mat, 2002, *Fan Cultures*, London and New York, Routledge
- Ito, Mizuko 2006, "The Gender Dynamics of the Japanese Media Mix", A draft of a position paper for the Girls 'n' Games Workshop and Conference May 8-9, 2006. University of California, Los Angeles www.itofisher.com/mito/ito.girlsgames.pdf
- Jenkins, Henry, 1992a, *Textual Poachers, Television Fans and Participatory Culture*, London, Routledge
- Jenkins, Henry, 1992b, "'Strangers No More, We Sing': Filking and the Social Construction of the Science Fiction Fan Community", Lewis, A Lisa (edit) *The Adoring Audience. Fan Culture and Popular Media*, London, Routledge
- Kinsella, Sharon, 2000, *Adult Manga, Cultura and Power in Contemporary Japanese Society*. Honolulu: University of Hawai'i Press
- Ricoeur, P, 1991 (1988), "Narrative Identity", *Philosophy Today*, 35 :1 p73 Chicago, University of Chicago
- Ricoeur, P, 2006, *Teoría de la Interpretación, Discurso y Exedente de Sentido*, México, Siglo XXI
- Sandvoss, Cornel, 2007, "The Death of the Reader? Literary Theory and the Study of Texts in Popular Culture", Gray, Jonathan (ed), *Fandom, Identities and Communities in a Mediated World*, New York and London, New York University Press
- Sandvoss, Cornel, 2005a, *Fans, The Mirror of Consumption*, UK-USA, Polity Press
- Sandvoss, Cornel, 2005b, "One-Dimensional Fan, Toward an Aesthetic of Fan Texts" *American Behavioral Scientist*, Vol.48 No.7 822-839, Sage Publications
- Thompsn, John, 1990, *Ideology and Modern Culture, Critical Social Theory in the Era of Mass Communication*, UK-USA, Polity Press
- Thompsn, John, 1995, *The Media and Modernity, A Social Theory of the Media*, UK-USA, Polity Press

戰爭期殖民地台灣「文化包裝」下的「戰爭」與臺灣知識份子之「戰爭認識」

——以吳新榮、呂赫若、葉榮鐘、林獻堂為例——

石廷宇¹

摘要

「戰爭」，在殖民地文學研究的脈絡中，往往被視為集體性、全稱的概念語彙，連結對文學生產與文化現象的詮釋。這種「戰爭認識」固然便於理解日本經營殖民地「十五年戰爭期」（1931~1945）時的多頭統治格局，但若更細緻地瞭解究竟「戰爭」如何牽動，並影響帝國統治下各地文藝統制、文學生產與文化現象的變異，似乎就不能不重新檢視「戰爭」的形態與內涵。

本文提出「文化包裝」概念，重新思考日本於東亞戰爭期（1937~1945）時的「戰爭認識論」，理解帝國實施於殖民地臺灣的「戰爭」修辭——以多元的文化形態，經過包裝的戰爭。並以吳新榮、呂赫若、葉榮鐘及林獻堂等人的日記為藍本，爬梳戰爭期、乃至於決戰時期殖民地知識階層的戰爭觀察、認識，以及他們對於「戰爭」的反應。

當「戰爭」被以文化的方式包裝，並滲透進入殖民地時，殖民地知識階層一方面對於戰爭的多樣性有其接受與服膺，但他們也以各自的理解，拆解了由帝國所建構的戰爭動員的內涵與戰爭認識，在日記裡建構屬於他們自己的「戰爭認識」。

關鍵詞：戰爭期、決戰時期、殖民地臺灣、日本帝國、戰爭認識、文化包裝

一、前言

連著 2010、2011 兩年，由英國 See-Saw Films 與 Pathé 兩家製片公司，分別推出了《The King's Speech》²（中譯：王者之聲：宣戰時刻）、《Iron Lady》³（中譯：鐵娘子：堅固柔情）兩齣以「戰爭」為背景的歷史電影（historical movie）。前者，描述第二次世界大戰中期，歐洲大陸正亟需英國支援之際，以國王接班人之姿登基的喬治六世（George VI，1895.12.14~1952.2.6），如何克服口吃的宿疾，透過各式演說，鼓舞國人支持動員戰爭的故事。後者，記述了英國女性首相柴契爾夫人（Margaret Hilda Thatcher，1925.10.13~）如何透過個人魅力與政治信念，帶領英國克服經濟衰退、國家情勢低迷的困境，以至贏得福克蘭群島之役（Falklands War）勝利等事件，帶領英國重又躋身世界強國之林的故事。雖然兩部傳記式風格電影皆以「人物」，作為劇情推展主要的軸心，我們卻不能忽略——「戰爭」（The War）——之於他們所身處時代的重要性及影響。無論是第二次世界大戰的歐洲戰場（1939~1945），或是福克蘭群島之役（1982.4~1982.6），皆不約而同地有其關鍵性意義，成為了突顯兩位政治人物影響力的歷史要素，照映出兩人的領袖氣質與魅力，以及他們如何憑藉戰爭，成就各自的歷史評價與定位。

但是，若我們仔細思考「戰爭」在電影中所表現的「形象」（image），卻不禁得要問：「究竟『戰爭』發生在哪裡？」，究竟電影如何讓今日的我們感受到「戰爭」的緊迫性、嗅得到「時局」的緊張氣息，或身歷其境感受「戰爭」實際上正在歐洲大陸、福克蘭群島一觸及發？

同樣的疑問，似乎也可對應身處「戰爭期」時的殖民地台灣（1937~1945）。在中日戰爭（1937）伊始，台灣作為日本殖民版圖的「南進基地」，雖然位於帝國擴張動線上，卻似乎從未真正身處「戰爭」風暴的核心。及自首相近

1 本論文作者為臺灣靜宜大學通識教育中心兼任講師、臺灣大學臺灣文學研究所博士研究生。論文內部分日文翻譯感謝日本愛知大學王敬翔、國際日本文化研究中心簡中昊協助校譯。關於戰爭概念，感謝臺灣政治大學李東諺協助校訂。

2 《王者之聲：宣戰時刻》（*The King's Speech*，片中 speech 既解作演講，也解作說話能力，是雙關語）是 2010 年由湯姆·霍伯執導的英國傳記片。男主角柯林·佛斯獲得了包括第 68 屆金球獎最佳劇情片男主角、第 83 屆奧斯卡金像獎最佳男主角在內的許多表演獎。影片還在第 83 屆奧斯卡金像獎中獲得 12 項提名，並勇奪最佳影片、最佳原創劇本、最佳導演及最佳男主角四項大獎。（參考：<http://zh.wikipedia.org/wiki/%E5%9B%BD%E7%8E%8B%E7%9A%84%E6%BC%94%E8%AE%B2>）（瀏覽日期：2012-3-5）

3 《鐵娘子：堅固柔情》（*The Iron Lady*）是一部關於英國前首相瑪格麗特·柴契爾夫人的傳記電影，《媽媽咪呀！》一片的英國女導演菲利達·勞埃德執導，美國著名演員梅麗·史翠普主演，梅麗憑藉本片獲得了她的第二座奧斯卡最佳女主角獎。（參考：http://zh.wikipedia.org/wiki/%E9%90%B5%E5%A8%98%E5%AD%90_%28%E9%9B%BB%E5%BD%B1%29）（瀏覽日期：2012-3-5）

衛文膺提出「大東亞共榮圈」(1941)概念,臺灣在帝國的「大東亞戰爭」格局中的位置被強化,並隨著日本開拓美西戰場的「太平洋戰爭」(Pacific War, 1941)後,捲入了西處「中日戰爭」、東鄰「太平洋戰爭」、南接南洋戰場的帝國東亞擴張線上的樞紐位置。不過,除了幾次報國隊、勤行團、志願兵制度,或是中國對於台灣零星的轟炸行動,基本上,臺灣島內對於「戰爭」的印象,實際上仍是屬於官方統一給予、管理的被動接受狀況。⁴直到進入決戰時期(1943),美軍開始對台灣隣海、本島進行較為密集的轟炸,方給予臺灣島民留下較為直接深刻的戰爭印象。

那麼,臺灣總督府究竟是如何展開其對於帝國擴張戰爭的呼應與宣傳?這種不在場的、間接的戰爭氣氛與情緒,又是透過何種方式介入殖民地社會,以及如何被透過文化手段,「包裝」成為一種特殊的時局色調?殖民地台灣知識份階層的對於這種「包裝」的反應又是什麼?是本文主要的關懷。

以下,筆者將以殖民地台灣與「戰爭」的關係為對象,企圖處理兩個問題:第一、帝國的戰爭認識:「文化包裝」作為一種解讀「戰爭」的方法。第二、殖民地知識階層日記中的「戰爭認識」,以期能開展出一套理解由殖民地上統治者與被統治者雙方各自建構的戰爭認識論。

(一) 帝國的戰爭認識:「文化包裝」作為一種解讀「戰爭」的方法。

過去,對於戰爭期的台灣文學研究,多半將「戰爭」視為單一、全稱的概念,如「中日戰爭」、「大東亞戰爭」等,並採取與殖民地社會反應進行直觀連結的詮釋方式,或是著重於「皇民化傾向與否」的文學詮釋傾向,如:柳書琴〈滿洲事變與島都書寫:節點都市的文本化〉、陳建忠〈大東亞黎明前的羅曼史--吳漫沙小說中的愛情與戰爭修辭〉等,諸如對戰爭形態、抑或是戰爭修辭的差異對殖民地社會、文學、文化所可能產生的影響,則未有更深入的探討。

因此,立基於前述研究框架的豐富軌跡與基礎,本文將先以《時局認識辭典》⁵、《大東亞戰爭事典》⁶兩部發行於戰爭期的「辭典」為對象,歸納帝國對於戰爭論述的建構,並以「戰爭」作為閱讀殖民地文化反應的框架(frame of war),提出「帝國文化包裝下的戰爭」概念,思考總督府如何藉由嚴密且複雜的「文化」手段,將「戰爭」包裝成多元、系統性的戰爭修辭。

(二) 殖民地知識階層日記中的「戰爭認識」

在瞭解了帝國的戰爭認識、戰爭形態與修辭策略的多樣性後,本文則將繼而處理殖民地知識階層的戰爭認識,透過判讀與歸納葉榮鐘、林獻堂、吳新榮、呂赫若等人日記中的「戰爭紀事」,瞭解他們當時究竟籠罩在何種帝國的戰爭力學結構中?他們對經總督府文化包裝後的多重戰爭形態,又抱持何種態度?留下了何種屬於殖民的知識份子的戰爭認識論。

二、帝國的戰爭認識:「文化包裝」作為一種解讀「戰爭」的方法。

昭和17年(1942)12月,日本「大政翼贊會」根據「國民總力戰思想對策」提出了一份報告書,內容包括五個部份:國民總力戰的意義、國民總力戰思想的現狀、徹底普及國民總力戰思想、確立國民總力戰思想,以及除去妨害思想的原因,明確地指出了究竟何謂「國民總力戰思想」:

國民總力戰思想包括有精神力、武力、政治力、經濟力、科學力,是動員國家總力激烈而且深刻的綜合戰(武力戰、思想戰、經濟戰、外交戰等等),除了軍人以外,國民全體都要加入戰鬥行列。⁷

對於這種「總力戰」結構下戰爭形態的修辭差異,以櫻本富雄⁸的一段話,作為思考臺灣所接觸的「戰爭」,或許適足

4 1937年7月7日後,台灣總督小林躋造及台灣軍司令一方面皆對「北支事變」(即「蘆溝橋事變」)發表聲明,同時對台灣民眾發出戰時警告,另一方面,台灣總督府亦召開緊急會議,決定設立「臨時情報委員會」,統管島內外戰時資訊,並由台灣軍司令部參謀長再向台灣民眾發出嚴厲警告,避免發生所謂「非國民之言動」。

5 時局研究會編《時局認識辭典(上、下)》(東京:日本書院,1939年)收錄於《戰時下資料事典》(東京:日本圖書センター,2002年4月)。

6 情報局記者會編,《大東亞戰爭事典》(東京:新興亞社,1942年)收錄於《戰時下資料シリーズ-戰時下資料事典 第2卷》(東京:日本圖書センター,2002年3月25日)。

7 翼贊運動史刊行會編,《翼贊國民運動史(上卷)》(東京:翼贊運動史刊行會,1954年1月)(東京:ゆまに書房復刻,1998年9月),頁285。

8 櫻本富雄,1933年生,日本長野縣人,詩人,長期關注對於國家以及文化人的戰爭責任。著述包括有《文化人たちの大東亞戰爭》(青

以說明，以往殖民地文學研究多將「戰爭」視為單一的集合名詞的討論方式，或許尚有得以深化與延伸的空間。

大東亞戰爭不只是**武力戰**，更是**經濟戰**、**宣傳戰**、**思想戰**、**文化戰**，是跨越全面的一大**總合戰**。因此在這裡特別將**思想戰**、**文化戰**關係深刻的文藝家們應當要組織為強而有力的一元化團體，這種所有人的與物的力量的集結是為了戰爭目的，而且必須從**總力戰**的立場來採取必要的措施。⁹

(一)「文化包裝」作為一種解讀「戰爭」的方法

易言之，「戰爭」從來便不是單一性質、單一內容與單一形態的概念。尤其是戰爭期殖民地臺灣所具有的「遠離帝國擴張邊界」¹⁰——由「工業日本，農業台灣」到「工業台灣，農業南洋」，再到「南進兵站基地」的非暴力、非接戰狀態，更突顯了戰爭之於臺灣社會的特殊意涵，以及其需要被以多樣性的戰爭形態進行思考之必要。

因此，本文建立在當時日本帝國戰爭多樣形態的思維上，提出較過往視「戰爭」為集合名詞更為細緻的「文化包裝下的戰爭」，作為本文的論述框架，思考發生在殖民地臺灣的戰爭，究竟經過何種文化包裝手段，以及內涵為何。

在日本大東亞戰爭時期，對於現代化戰爭的多樣性，有過較為完整界定的，要屬「時局研究會」¹¹編纂《時局認識辭典》（1939）與「情報局記者會」¹²編《大東亞戰爭事典》（1942）這兩部時局資料。

筆者將帝國分類戰爭的標準：「武力戰」「非武力戰」「全稱式」戰爭三類，歸納日本帝國因應戰爭屬性與內涵差異，而發展出作用、形態不一的「戰爭」：

戰爭性質							
非武力戰	電波戰 (放送戰)	文化戰	生活戰	精神戰	思想戰	廣告戰	言論戰
	宣傳戰 (聲明戰)	心理戰	諜報戰	謀略戰	經濟戰	外交戰	祕密戰
	消耗戰	科學戰	防諜戰	監視戰	國力戰		
武力戰	低空戰	追擊戰	山地戰	遭遇戰	空中戰	塹壕戰	市街戰
	海戰	平地戰	野戰	討匪戰	陣地戰	夜戰	地中戰
	大會戰	掃蕩戰	神經戰	山岳戰	細菌戰	夜襲戰	前衛戰
全稱式	總力戰	近代戰	和戰	白熱戰	立體戰	爭霸戰	前哨戰

從上表中戰爭形態的多樣性與稱謂來看，過去我們所認知、並慣常使用的戰爭概念，對於帝國來說似乎並非鐵板一塊的均質概念——不僅指武裝形態的戰鬥（combat），尚有著因時間、空間、內涵以及統治目的、發生條件不同而有所差異的「戰爭」（warfare）。

首先，就戰爭的「集合性」（collectivity）概念而言，以往在殖民地文學研究論文中所使用、指稱的「戰爭」（尤以研究戰爭期為主的論文），其內涵多是「全稱式」的。名之曰「戰爭」，實際上指的則是無論概念、意義皆較為抽象、籠統的「近代化的戰爭形態」或「戰爭發生」如：「中日戰爭」（等於「蘆溝橋事變」後的中日鬥爭關係）「太平洋戰爭」（等於「珍珠港事變」後的美日鬥爭關係）等等。

以李文卿〈共榮圈的想像：帝國日本與大東亞文學圈（1937-1945）〉（2009）¹³為例，或許可以幫助我們理解，

木書店）、《大東亞戰爭と日本映画》（青木書店）等書。

9 櫻本富雄，《日本文學報國會一大東亞戰爭下の文學者たち》（東京：青木書店，1995年6月），頁77-78。【粗體為筆者所加】

10 這裡所謂的「遠離帝國擴張邊界」意指臺灣自1895年改隸以來，實際上於帝國的東亞擴張線上，已從原本的「前線」轉而成為中介點。從臺灣被賦予「南進跳板」的性格這點來看，可以得到佐證。

11 時局研究會：甲午戰後，日本朝野對中國與東亞問題興趣越來越高。當時早稻田專門學校的部分學生設立了「時局研究會」，討論中國問題，並且邀請參謀本部的田村怡與造、福島安正、宇都宮太郎等人，對中國時事進行演講。光緒二十二年（1896），日本政界大老犬養毅主張「確立對華政策，實為當務之急」，勸告當時的內閣派人調查中國問題。日本外相大隈重信即派遣可兒長一、平山周、宮崎寅藏三人，以外務省諮議的名義前往中國華南，調查革命黨的活動情形。參考「歷史文化學習網」：http://www.tmps.hc.edu.tw/school/culture/95-96culture-1/history/smenu_photomenu_smenuid_768.html（瀏覽日期：2012-4-27）

12 情報局記者會：「內閣情報局」（ないかくじょうほうきょく）。「滿洲事變」（1931）後，為了統一與強化政府內部的情報、宣傳方面，於1932年9月10日，將外務、陸軍、海軍、文部、內務、遞信等六個單位的情報關係局局長集合設立非正式的「情報委員會」（情報部前身），後於第二次近衛內閣上任後（1940.7），將原有的「內閣情報部」擴大強化為「內閣情報局」。統籌負責的事務計有：1. 企劃、調查。2. 指導與取締新聞、出版、放送事務。3. 對外宣傳。4. 檢閱。5. 文化宣傳等五部份。機關誌有《週報》、《寫真週報》。參考日本近現代史辭典編集委員會，《日本近現代史辭典》（東京：東洋經濟新報社，1978年4月5日），頁476。

13 李文卿，〈邁向大東亞（上）：殖民地的文學動員—臺灣〉，《共榮圈的想像：帝國日本與大東亞文學圈》（台北：國立政治大學中國文學系博士論文，2009年1月）【粗體為筆者所加】

文學研究者思考殖民地「戰爭」時的基本使用邏輯：

……究竟「皇民文學」在整個戰爭時期是如何被體制化的呈現？作為戰爭體制的一環，應該如何閱讀「皇民文學」？
……在戰爭的外力干擾下，文學走向又如何被呈現？¹⁴

為了服膺帝國戰爭格局底對於台灣的規劃，「共存共榮」「八紘一宇」等標語，成為了總督府文化統制的重要號召。不過，若以全稱式的「戰爭」思考之，則這種「戰爭」的「外力」究竟如何影響殖民地文學、文化的反應與生成？似乎無法釐出較為清晰與細緻的軌跡，使得「戰爭」的作用不是被扁平化，便是將戰爭與文化統制理所當然地等同視之。因此，本段以「文化包裝」重新放進帝國對戰爭時期殖民地的統治政策脈絡中，理解李文卿筆下的「外力」，所可能呈現的多樣面貌，及其影響路徑。

大抵上，臺灣文、史學研究者們皆普遍視「西來庵事件」（1915）為臺灣民眾武裝抗日的尾聲。此後，殖民地臺灣知識階層便改採文化抵抗及進行殖民體制內的周旋等方式，繼續與帝國對峙。¹⁵這也意味著，自1915年總督府弭平事件後，便未曾再對台灣島內採取大規模武裝掃蕩的「武力戰」。

島外方面，除了「中日戰爭」開打後，零星來自中國的轟炸，¹⁶亦是直至「太平洋戰爭」期後，臺灣才開始遭受來自美國的攻擊；而臺灣實際參與帝國戰爭，除了前階段的軍伙派遣、末期的志願兵募集、徵兵等政策，其他時間多半是間接協力，而非直接參與戰爭。這一點，亦可從臺灣被賦予的階段性稱謂：「南進跳板」、「南進兵站基地」，以及「工業臺灣，農業南洋」等屬性變化窺知。

除了全稱式戰爭外，以「武力／非武力」格局來思考發生在台灣的「戰爭」，似乎更可以清楚地呈現出戰爭與台灣的關聯性，以及戰爭形態的差異對於詮釋臺灣文學生產、文化現象的特殊意義。而對這種戰爭的修辭差異與文學、文化研究所可能發生的連結與影響，已有如：李文卿、陳偉智、柳書琴等研究先進，不約而同地觀察到了其中的關連性與多樣性。

李文卿於〈共榮的想像：帝國日本與大東亞文學圈（1937-1945）〉（2009）中，對於台灣文學者們如何服膺帝國大東亞建設、決戰文學體制的動態過程，亦提出了與前述「全稱式戰爭」在內涵上有所區別的「思想戰」觀察：

……，在1943年「臺灣決戰會議」上，文學者們被要求要以筆代劍投入**思想戰**，以及確立台灣文學者的決戰文學體制，要求文學者的實踐文學，……。¹⁷

另外，陳偉智在〈戰爭、文化與世界史：從吳新榮〈獻給決戰〉一詩探討新時間空間化的論述系譜〉一文中，爬梳吳新榮對戰爭的理解時，亦點出了不同於「全稱式戰爭」的戰爭認識：

……表面上似乎呼應了當時官方戰爭宣傳，呼應了作為「**總力戰**」一環的「**思想戰**」。此一**思想戰**的特徵，是日本領導有色人種，團結被西方殖民的亞洲各民族，反抗西方帝國主義，遮蔽日本自己在東亞的擴張與侵略，弔詭地變成一種反帝國的帝國主義（anti-imperial imperialism）。……。¹⁸

除了陳偉智點出了「總力戰」與「思想戰」的位階與內涵之不同外，柳書琴於〈殖民都市、文藝生產與地方反應：「總力戰」前臺北與哈爾濱都市書寫的比較〉中，也同樣在原有的戰爭認知中，以帝國「總力戰」體制為框架，「文化戰」為論述焦點，連結台灣與「滿洲國」的都市書寫：

14 同上註，頁79

15 若林正丈在論述台灣的抗日運動歷程時，提及臺灣總督府所分析的「臺灣議會設置請願運動」的企圖，認為在運動指導者基本上是站在「不企圖脫離當前日本統治」這一概念上，與總督府進行對話，其中包括有歷史性與階級性之問題。而「歷史性」的部份，便是「西來庵事件」受到日本武裝鎮壓這一事情。參考若林正丈著，台灣史日文史料典籍研讀會譯，《台灣抗日運動史研究》（台北：播種者，2007年3月），頁36。

16 葉榮鐘於〈1938年2月22日〉記載：「中國的飛機來空襲台北市，投下炸彈於松山機場附近。鎮民死者八人負傷者數十人（上午十一時五分）。又於下午一時五分攻擊竹東郡、圓棟仔的天然瓦斯工廠投下炸彈二時多枚。」收錄於《葉榮鐘日記（上）》（台中市：晨星，2002年3月），頁122。

17 李文卿，〈共榮圈的想像：帝國日本與大東亞文學圈〉，頁152。【引文內粗體為筆者所加】

18 陳偉智，〈戰爭、文化與世界史：從吳新榮〈獻給決戰〉一詩探討新時間空間化的論述系譜〉收錄於韓國臺灣比較文化研究會著，柳書琴主編，《戰爭與分界：「總力戰」下臺灣，韓國的主體重塑與文化政治》（台北：聯經，2011年3月），頁23。【引文內粗體為筆者所加】

滿洲事變後，日本右翼勢力及軍部的崛起，為總動員體制的施行鋪路；中日戰爭爆發後，1938年「國家總動員法」頒布，「總力戰」體制正式確立。在台灣，軍部勢力日益抬頭，台灣人民從精神面、軍事面、經濟面無一不被編入戰時體制下。配合此一體制，**文化戰**受到高度重視，「帝國—殖民地」差別性架構也受到調整。¹⁹

著眼於此，筆者承繼前行研究者的敏銳觀察與成果，將以「非武力戰爭」中，與殖民地文化現象、文學生產發生有密切關連的戰爭形態，作為本文主要研究對象，歸納這些經過帝國「文化包裝」過的戰爭形態，其多樣的修辭策略與形態究竟如何透過官方報紙媒體（以《臺灣日日新報》為例），進入台灣島內的文化空氣之中。最後，則是站在對帝國「文化包裝」下的「非武力戰」有所理解的前提下，思考帝國／臺灣總督府的特殊戰爭認識論。

（二）帝國「非武力戰」的文化意涵與戰爭認識

本段雖說是討論非武力性質的戰爭，但是其被以「戰爭」形態視之，基本上仍可從其內容，窺得其鬥爭意涵與強烈的目的性、侵入性。不過，較之實體以兵器相互攻擊的傳統認知下的戰爭（戰鬥），這種非武力性戰爭，不只歷史條件上，要在臺灣被更多面地交互實踐；就影響層面來說，也要比「武力戰」所產生的影響要更為深刻、廣泛。

德國（普魯士）戰爭暨軍事理論先鋒大師克勞塞維茨（Karl von Clausewitz，1780～1831）²⁰於其被譽為的西方近代軍事理論經典《戰爭論 Vom Kriege》中，曾對「戰爭」與「戰鬥」、「物質力」與「精神力」的概念進行析論：

戰爭的本義即為戰鬥，因為在所謂戰爭的廣泛意識內所包括的諸多活動中，只有戰鬥才是為一發生效力的根源。但戰鬥又是精神力量與物質力量的考驗，而以後者為其手段。至於精神因素之不可或缺也極為顯然，因為心靈的條件對於武力在戰爭中的使用經常具有最大決定性的影響。²¹

他並認為，此一「心靈的條件」（或曰「精神力量」），與戰爭時要求的「物質力量」有著同樣的重要性，「他們只知注意物質力量，而整個軍事行動卻是為心靈力量及其效果所貫穿的。他們僅考慮到一方面的活動，而戰爭卻是以相互行動為常態，其效果都是互相的。」²²。而在「非武力」戰爭形態中，要歸納為「心靈」層面的，則當屬：文化戰、思想戰、言論戰、生活戰，而此四項，正是臺灣總督府汲汲營營亟欲經營的文化手段。

首先，觀察帝國理解下的「近代戰」（即「現代戰」）內涵，或許可以幫助我們釐清，坐落在帝國擴張線上的台灣，究竟身陷何種近代戰爭形態之中：

過去對於戰爭的觀念，咸認為以**武力戰**為主，並不那麼重視經濟觀念。近代以來，尤其是經過世界大戰以後，戰爭的觀念有了非常明顯的改變，即改變為「戰爭是政策持續延長，也就是國策。」**完全近代的戰爭是指國家之間相互生存的競爭本身即戰爭，國民若不以全部的生活力量與之抗爭，便無法貫徹其目的，也就是必須整合各個國家機構，以合理的統制技術來統合一切力量，包括一國全部的武力、經濟力、生活力的總體，才能具有國防力量。**在戰爭哲學上鞏固一國的內政、外交，並將政治、經濟、思想、武力等四大要素以一元化集中統制，以發揮其全力，是近代戰的必要條件，因近代戰係建立在如此繁複的要素上，故不再採取過去宣戰布告的方式，平時和戰爭的界限、戰地和內地的區別也自然消失，而是交戰國民所居住的全部區域都是戰場的觀念，這樣的變化與過去有極大不同，因此近代戰是整合**科學戰**和**經濟戰**，將一國與一國之間全國民總括起來的戰爭。單單以前線戰士的數量、砲數、飛機的多寡來決定勝敗的方式已經過去了。²³

可以說，此詞條雖然是對於「近代戰」（即現代化的戰爭形態）的釋義，卻已包含對戰時「國家」、前線／後方、

19 柳書琴〈殖民都市·文藝生產與地方反應：「總力戰」前臺北與哈爾濱都市書寫的比較〉收錄於韓國臺灣比較文化研究會著·柳書琴主編，《戰爭與分界：「總力戰」下臺灣·韓國的主體重塑與文化政治》（台北：聯經，2011年3月），頁63。【引文內粗體為筆者所加】

20 卡爾·馮·克勞塞維茨（Karl Von Clausewitz，1781-1831），普魯士軍人出生，曾參與普魯士軍事改革運動，著有《戰爭論》，並被譽為是西方近代化戰爭的軍事理論家。

21 克勞塞維茨著、李昂納德·編、鈕先鍾·譯，《戰爭論精華》（台北：麥田，1999年1月），頁109。

22 同上，頁118。

23 時局研究會編，《時局認識辭典（上）》，頁151。【引文內粗體為筆者所加】【感謝愛知大學王敬翔學長指正翻譯】

國民國家，以及戰爭期統制管理的合理性、必要性等諸多概念的界定。除了作為帝國主義擴張的修辭策略的「國家之間相互生存的競爭本身即戰爭」以外「一元化集中統制」「平時和戰爭的界限 戰地和內地的區別也自然消失」以及「交戰國民所居住的全部區域都是戰場」等內涵，可說皆正好符合了日本在戰爭期時對於「國民」、「皇民」的要求——無論是內地的「大政翼贊會」也好、殖民地台灣的「內地延長」、「皇民奉公」也好，乃至於「志願兵制度」的落實與服膺，都因此找到了與「戰爭」連結更合理的解釋背景。

那麼，當進入戰爭期後，日本銳意強調的「總力戰」（又稱：總體戰）結構，究竟指的是何種狀態？

近代戰不可能只依靠**武力戰**來完成，因此前線和後方的區別已消弭。哪裡開始需要陸海軍的力量，哪裡需要以國民力量來做結等，**如今戰爭的界限已然消失，軍事和國民成為了一體。確實現在的戰爭是集結國民總體力量的國民戰爭。**這個廣大的戰線在茫茫大海上與敵人武力戰鬥的同時，也必須努力將敵國人民的精神及生活力量加以破壞。**總力戰所直接影響不僅僅是軍隊的工作，也包括每一個作為參戰國人民的生活及精神。**因為飛機的進步和數量的增加，而對普通市民投下各種炸彈、傳單及其他宣傳資料的飛機設備進步與增加，以及對敵宣傳廣播設施的改良等，都使得總力戰的意義越發深刻。最初使用這個詞的是德國的 Erich Friedrich Wilhelm Ludendorff 將軍指出第一次歐洲大戰德國一面以**武力戰**取勝，一面以**總力戰**擊破的重要而吸引了關注。**總力戰**的內容包括了**武力戰、經濟戰、宣傳戰、文化戰、思想戰、生活戰**的總合，這正是總力戰成為近代戰爭特質的原因。²⁴

無論是近代戰、總力戰，皆離不開以「國民國家」思想為基礎、以「打破戰場邊界」為前提的戰爭思維，而再再強調國民的集體動員、戰爭形態多樣性的重要性，企圖透過各種「包裝」，將「國民」或殖民地受殖者直接與戰爭的成敗連結等修辭策略，也說明了「戰爭」不再只是軍人的事，身為一國之國民，無論男女老幼，也同樣負有責任與「方法」，能夠透過各色形式參與戰爭。

因此，本文依序擷選文化戰、思想戰、生活戰等三項「非武力戰」，列舉其內涵：

1. 文化戰

在《大東亞戰爭事典》中，對於「文化戰」的釋義如下：

處於對立狀態而不相容的兩個文化互相關爭的狀態。這是發生在民族、宗教、國家或者國內，由於文化在性質上並非完全水火不容，經常在經過長時間的長短互補後達成同化。第二次世界大戰與大東亞戰爭宛如是軸心文化與美英文化的相互關爭，其中一方以文化作為戰爭手段之一者便稱為文化戰。這是一種秘密地將本國文化植入對手國之中，以本國化的文化進行文化的征服。如同英國對於泰國所實施的政策，就是一種以英國文化涵蓋於醫院、學校、電影等等各方面之中，使泰國成為囊中物的文化戰。²⁵

若搭配《臺灣日日新報》「天無口」欄中的短評，或許更可以理解將「文化包裝」為戰爭一環的「非武力」內涵：

戰爭的方式已經進入無宣戰時代，不再是佈告宣戰的時代。從思想、謀略戰還有文化戰，都是在開戰之前就開始，還有經濟、金融、貿易戰的展開，都是從武力戰發展而來的。²⁶

可以說，「文化」既是武力戰的結構性條件，也是其產物。而「以文化作為戰爭的一種手段」，適足以對應日本殖民統治台灣從軍政、內地延長主義到皇民化等政策的階段性調整中，諸如廢除漢文、提倡日語、著日式服裝、敬拜日式信仰與宗教、日式屋舍等改革要求。

除了對立文化間的衝突外，以《臺灣日日新報》中，〈戰跡訪ね彩管現地報告文化戰士各畫伯に感想聴く〉（聽取去各戰地以繪畫採訪的畫家文化戰士們的感想）²⁷一篇，或許最能看得出「文化戰」的完整形式：文中採訪了各個發

24 情報局記者會編，《大東亞戰爭事典》，頁 191。【引文內粗體為筆者所加】【感謝愛知大學王敬翔學長指正翻譯】

25 情報局記者會編，《大東亞戰爭事典》，頁 384。【引文內粗體為筆者所加】【感謝愛知大學王敬翔學長指正翻譯】

26 〈天無口〉，《臺灣日日新報》1939 年 8 月 25 日，2 版。

27 佛印ブノンペンにて十八日發同盟〈戰跡訪ね彩管現地報告文化戰士各畫伯に感想聴く〉《臺灣日日新報》1942 年 4 月 19 日，夕刊 2 版。這些派遣畫家包括有：藤田嗣治、寺內萬治郎、清水澄之、鶴田吾郎、宮本三郎、中村研一、山口蓬春、田村孝之介、小磯良平等。

配南洋各地從事繪畫紀實等文化戰的「文化戰士」——派遣畫家們，包括介紹畫作中皇軍勇士的戰鬥之姿「大東亞建設」的成果、傘兵部隊的英勇作戰、攻陷香港與馬尼拉等事蹟，並說明他們服膺國策的繪畫理想與內涵，以及其南方見聞。

原本類屬於藝術的「繪畫」活動，經過了戰時文化包裝，搭配繪畫、說明會、巡迴演講、展覽會，加上報紙媒體的傳播，形成了一系列輔助帝國南洋擴張的文化戰。這類非武力戰形態的戰爭，毋寧說不透過完整細密、宛如作戰的規劃與包裝，是無法達成的。

無論是「同化」或是「皇民化」，就其文化戰意義來說，即是「將本國文化植入對手國之中」的一種手段。在觀察總督府多樣形態與內容的展覽會、時局講演會等文化活動時，若將文化戰的層次納入考慮，或許更加可以理解為何台灣的文化人、知識階層，會選擇以成立「台灣文化協會」（1921.10）、「台灣文藝聯盟」（1934.5）等文化方式，在「武力戰」勢不可得的情況下，持續與殖民母國的文化戰進行持續周旋，即是企圖抗拒「對手國（殖民母國）對於本國文化（臺灣本地文化）的植入」，進行屬於殖民地位置的「反文化戰」²⁸。

2. 思想戰

在《大東亞戰爭事典》中，對於「思想戰」的釋義如下：

兩個不相容的思想相互對立，是思想戰原來的意義。這是一國之內的事，或國與國之間不同理念。我國所進行的戰爭，是神武天皇的東征以來的戰爭肇國思想，即使是在我國境內的戰爭，自神武天皇東征以來，可以說大多數的戰爭，都是以我朝建國的思想意圖擊破反對建國思想的戰爭。大東亞戰爭也是我國八紘一宇的大理想與美英帝國主義思想之間的思想戰。這就是之所以在亞洲進行大東亞戰爭、與在歐洲發生歐州大戰，有著相同志向的德國與英美間的思想戰。可是思想戰未必與武力戰同時進行。從對美英戰前就開始公開地進行對美英的思想戰，為我國取得了相當的成果。以上是思想戰的原意，作為狹義的總力戰的一部份內容。這可以令敵人國或對方國民的思想動搖、戰爭意識降低。這個意義下的思想戰，是兩個思想對立的國家間所進行的戰爭。資本主義國家同志與帝國主義結合進行領土的奪時，對彼此爭取好的時機來對對方國民進行戰爭的理由進行思想戰。這是狹義思想戰的規模。²⁹

雖然釋義中最後強調的是國際間「不同理念」的鬥爭，卻不難看出，無論是「對美英的思想戰」，或是大東亞戰爭與歐洲大戰間的理念差異，「思想戰」的內涵，仍是強調「令敵人國或對方國民的思想動搖、戰爭意識降低。」這一決定性目的，期望透過非武力的方式，優先降低對手國的戰鬥意識，以利兩國間為了領土的爭奪所進行的「武力戰」。那麼，總督府又是如何在臺灣強化、執行其「思想戰」呢？

進入戰爭期後，為了鼓吹島民配合時局，進行戰爭動員，總督府大量推動一系列相關的「思想活動」，透過進行有配合時局的銑後演講會、報國會、映畫會、展覽會、慶祝運動等文化戰，就內容上，進行對肯定、支持帝國發動戰爭的動機的思想改造。

在一篇〈完遂後方思想戰 臺北州內舉行講演與電影會〉³⁰中，便提及在大東亞戰爭一週年時，以演講與電影等方式，強化後方一百二十萬台北州民的防諜精神及時局認識的思想，也期望透過募集「防諜劇本」，動員州內的劇團活動，服膺國策。另一篇社說〈思想戰は永久の戦ひである 思想指導本部の設立を提唱〉（思想戰是永久進行的戰爭 提倡設立思想指導本部）³¹中，也提及為因應思想戰的持久性與必要性，以及能夠與武力戰、生產戰並行，加之歐洲戰場上英美與德國鬭爭關係的顯示，而有了設置「思想指導本部」的構想，以指導後方進行思想準備，強化島民支持戰爭的意志與思想狀態。

另外，像是由大本營海軍報導部所撰文的〈武力戰勝利に應へ 生産思想戰に完勝〉（呼應武力戰勝 完勝生產思

28 如由「文協」及臺灣本地知識階層所推動的「新劇運動」（1923～1937），便將當時上演的新劇以「文化劇」稱之。而由於文協以推行文化啟蒙運動等目的，「文化劇」的內容便多以宣傳、教化，反封建、破除迷信等近代思想為主，代表的劇團有像是：新竹的「新光社」、彰化「鼎新社」、「星光演劇研究會」，或是1930年由張深切、何集璧於台中成立的「台灣演劇研究會」，或是張維賢的「民烽劇團」等。

29 情報局記者會編，《大東亞戰爭事典》，頁135。【引文內粗體為筆者所加】【感謝愛知大學王敬翔學長、日本國際文化研究中心簡中吳指正翻譯】

30 銑後思想戰の完遂へ 臺北州下で講演と映畫の會，《臺灣日日新報》1942年11月21日，夕刊2版。

31 本刊，〈思想戰は永久の戦ひである 思想指導本部の設立を提唱〉，《臺灣日日新報》1942年12月19日，4版。

想戰)³²、〈決戰 思想戰と改姓名〉(決戰 思想戰與改姓名)³³、〈皇奉本部 思想戰に完璧の陣 宣傳協力委員會の 委員委囑發令さる〉(皇奉本部 完美的思想戰陣勢 宣傳協力委員會的委員委囑發令)³⁴、〈思想戰に萬全の陣 初の「宣傳協力委員會」〉(萬全的思想戰陣勢 宣傳協力委員會開始運作)³⁵等文，都集中在教化後方民眾應有的思想準備與戰爭認識，強化服膺時局思想的必要，以及建設宣傳思想戰的相關配套機構、講演、會議，如「宣傳協力委員會」、「思想戰完遂講演會」³⁶「思想戰協力會」³⁷「大東亞新聞大會」³⁸「言論報國會」³⁹等。也有臺灣憲兵隊司令部透過發表如〈家庭 武力戰か思想戰か女性よ蹶起せよ 防諜こそ銃後の鐵壁陣〉(家庭 無論武力戰和思想戰女性也一起蹶起吧 防諜是後方的銅牆鐵壁)⁴⁰等文章，企圖對戰時女性進行思想戰，重新定位他們的重要性與工作內容。

從上述社論的內涵來看，對於日本內地或是台灣總督府而言，「思想戰」非但是總力戰結構底下不可或缺的一環，從各種官民營組織、團體的動員頻率、數量，以舉辦活動的密集程度與活動範圍來看，思想戰亦與台灣島民的生活作息之間有著密不可分的關係。

3. 生活戰

近代戰即是生活戰。養成全部國民在生活中戰鬥的信念，然後實踐戰爭生活以期能完成大東亞戰爭。家庭即戰陣、生活即戰場。特別是長期戰中時間越長，越需要實踐必勝的飲食生活，以及採配給票制度的必勝穿著生活、配給圈內的合理生活等等，必須過著貫徹聖戰真義的新生活，這就是生活戰，甚至可謂大東亞戰爭的成敗取決於生活戰的成敗。⁴¹

在《大東亞戰爭事典》中 針對「生活戰」的說明 是將其內涵直接等同於「近代戰」，尤其強調「國民生活連結戰爭」這一概念。「生活戰」與「總動員體制」的關聯性，即是當「人民服膺總動員，即是參與了戰爭」，這一「動員」的核心概念。

當國民被統攝入集體的、群眾的戰爭結構中，而做到「生活即戰爭」時，戰爭的邊際也得以從前線，推向後方，從而將國民某種程度地「軍人化」、「軍隊化」成為「軍國民」(ぐんこくみん)，使得日本帝國統治下無論數量、區域關係皆複雜多樣的殖民地，能透過完善各自的生活戰，達成跨空間的「精神總動員」。

根據日本「國民精神總動員中央連盟」於1937年9月發佈的「國民精神總動員運動」內容，所謂的「精神總動員」，指的正是動員國民參與經過「文化包裝」的「非武力戰」，諸如：文化戰、精神戰、思想戰、生活戰等。而這些「非武力戰」的具體表現，包括有如：制定國民堅忍章、明治節奉祝活動振興國民精神週運動、贈呈前線將士慰問品運動、制定慶祝新年誓詞、國旗揭揚運動、紀元節家庭慶祝運動、購買愛國公債運動、戰士英靈奉迎行事、慰問傷夷軍人運動、家庭報國運動、舉辦各式展覽會、確立國民精神總動員實踐綱領運動、天長節奉祝運動、精動健康週運動、靖國神社臨時大會、慶祝攻陷城市(南京、徐州等地)運動、國民貯蓄獎勵運動、海軍(陸軍)記念日運動、支那事變週年記念運動、經濟戰強調週運動、非常時國民生活樣式確立運動、心身鍛鍊運動、後方援助強化運動、事變下的學生運動、發揚日本精神週運動、年末經濟強調運動等等。⁴²

32 大本營海軍報道部海軍中佐 田代 格，〈武力戰勝利に應へ 生産思想戰に完勝〉，《臺灣日日新報》1943年1月2日，4版。

33 本刊，〈決戰 思想戰と改姓名〉，《臺灣日日新報》1943年6月26日，4版。

34 本刊，〈皇奉本部 思想戰に完璧の陣 宣傳協力委員會の 委員委囑發令さる〉，《臺灣日日新報》1943年7月1日，3版。

35 本刊，〈思想戰に萬全の陣 初の「宣傳協力委員會」〉，《臺灣日日新報》1943年8月1日，3版。

36 〈思想戰完遂講演會〉，《臺灣日日新報》1942年12月14日，4版。

37 〈思想戰協力會議の開催〉，《臺灣日日新報》1943年6月13日，4版。

38 〈思想戰を 力展開あす大東亞新聞大會〉，《臺灣日日新報》1943年11月16日，夕刊1版。

39 〈言論報國會愈よ結成 思想戰を強力に推進〉，《臺灣日日新報》1942年12月20日，1版。

40 臺灣憲兵隊司令部 友利准尉談〈家庭 武力戰か思想戰か女性よ蹶起せよ 防諜こそ銃後の鐵壁陣〉，《臺灣日日新報》1943年3月29日，4版。

41 情報局記者會編，《大東亞戰爭事典》，頁174。【感謝愛知大學王敬翔學長、日本國際文化研究中心簡中昊指正翻譯】

42 翼贊運動史刊行會編，《翼贊國民運動史(上卷)》，頁29。

(附圖 1：國民堅忍章⁴³)



這種「生活戰」的內涵，在日本內地由「大政翼贊會」刊行的《必勝の生活戰》⁴⁴中，更可以清楚地看到。為了建立一套經營時局生活的方式，作為大政翼贊會囑託的醫學博士菅沼，先以德國的青年、婦女、產業家為對照組，說明她們的「生活戰」樣式，其次，則將生活戰條列如：產業合理化、排除浪費、生活合理化、婦女活動、增產戰與工業戰、科學的生活、抗病戰、飲食的生活戰，以及勤勞戰、休養生活戰、衣住生活戰等方面。說明了，除了前線將士的戰鬥外，後方的國民也應該以如戰鬥般經營「生活」。

從上述各形態「文化包裝」過的「非武力戰」釋義中，我們不難發現幾個關於「戰爭」重要的關鍵詞，如：國民、戰爭界限、集體動員、生活即戰爭等等，都要較原本「全稱式」戰爭更為細緻地將戰爭的內涵與殖民地社會連結，並且使得我們對於戰爭期殖民地的戰爭修辭，得以有了較為不同且深刻的詮釋與理解框架。

毋寧說，藉由這些生活戰、文化戰等非武力形態的戰爭，帝國企圖將這些摻雜有思想、文化等層面，構成各個戰時生活切面的動員，建構成為無論是內地或是殖民地人民戰時生活整體的一部份。

因此，當戰爭透過了帝國的「文化包裝」後，即便殖民地受殖者並非人人都參與「武力戰」沒有為皇國犧牲，不過，一旦參與了總動員體制下的各式「非武力戰」，事實上便已經在程度與形式方面，一如日本內地人參與戰爭動員一般，在一定程度上成為了「皇民」。

當「戰爭」被由單一模糊、抽象的概念，擴展成多樣性的概念與形象後，對於戰爭期時的帝國統治政策的系統性與日本的戰爭認識論，也就有了更為清楚的理論脈絡。那麼，當上述這些非武力戰，在透過「文化包裝」滲透進入殖民地台灣的社會後，殖民地知識階層的反應又是如何？

三、殖民地知識階層日記中的「戰爭認識」

在這之前，我們則先從楊達所發表的一篇〈思想與生活〉中，理解作家對於這種非武力戰的「戰爭認識」，或許有助於理解後面所引述的日記。

這篇發表在《台灣新報》上的文章，首先引用津久井龍雄的政論〈我的思想戰〉，認為無論是思想戰也好，世界觀之戰也罷，最重要的是這些抽象概念能否談及它們的具體類容，以及如何具體化實踐的問題。並且，他認為，不應該提到任何問題，便立即草率地與國家體制放在一起討論。這一點，楊達指出，是台灣特別需要留意的一點。楊達緊接著，則針對這種類型的戰爭，提出他的見解：「要對抗敵人的謀略戰時展開的思想戰，只有把國民都當成國民，彼此切磋，努力找出具體的內容，才能期待有好的戰果。⁴⁵」，進一步，他更將決戰時期皇民化、奉公實踐的概念性話語，還原其本質，認為：

越是高喊著缺乏具體內容的世界觀，反而越是缺乏真正的生活（以世界觀為基礎的生活）。這是相當諷刺的現實，卻是理所當然的結果。⁴⁶

其中所提到的「缺乏具體內容的世界觀」不啻是指向了帝國日本不斷宣揚的「大東亞」概念。其次，楊達並點出「生活」之於戰爭動員的重要性，「因為對這種人來說，所謂世界觀和思想都只是吶喊而用的詞彙而已，並不是為了生活所作的設計，也不是生活的指標。」，最後他認為，必須要回歸到具體的生活本質，天下大一統不再是一種詞彙，而會從生活中在各自的土地上紮根生長以後，他才提出他對於這一系列非武力戰的核心思想：「思想戰應該要有這種生活戰作基礎，才能相輔相成，才能打贏這場戰爭，徹底保護台灣、日本和大東亞。⁴⁷」

43 「國民堅忍章」參考網站：<http://blogs.yahoo.co.jp/pandradra/4195637.html>

44 菅沼清次郎，《必勝の生活戰》（東京：大政翼贊會宣傳部，1942年7月）

45 楊達，〈思想與生活〉，《台灣新報》1944年6月21日。收錄於彭小妍主編，《楊達全集·第十卷·詩文卷（下）》（台北：國立文化資產保存研究中心籌備處，2001年12月），頁156。

46 楊達，〈思想與生活〉，頁157。

47 同上註，頁158。

在楊達的論辯中，他巧妙地採取帝國話語的模糊抽象處，作為反駁帝國戰爭動員、口號的一種方式，利用對於帝國非武力戰的話語弱點，建立起自身對於「生活戰」、「思想戰」的解讀方式，透過發表於《台灣新報》上，毋寧也說明了這種論證與辯駁方式，雖然披上了呼應時局的外衣，實際上卻是說著屬於殖民地自己的話。

作家楊達如此，其他同時代的作家、文化人們，又是如何反應的呢？本段擬依照時間，穿插以《葉榮鐘日記（1936-1942）》《灌園先生日記（1937-1944）》《呂赫若日記（1942-1944）》《吳新榮先生日記（戰前）》（1933-1945）等日記為觀察對象，改從殖民地知識階層的戰爭體驗與紀事着手，思考這類「戰爭」究竟以何種形象，滲透並進入他們的生活與意識之中，他們又如何記載這些帝國總動員體制下的戰爭活動、抱持何種態度與反應？以試圖整理出一套由殖民地知識階層立場觀看的戰爭認識論。

（一）《葉榮鐘日記》

葉榮鐘身為一位既私塾過漢學教育，留學日本，且擔任林獻堂通譯秘書，參與過「台灣文化協會」、「臺灣地方自治聯盟」等殖民地運動的知識階層，究竟是如何記載與面對這場戰爭，以及其被動員背後，又可能持有何種對於帝國戰爭的認識？

在他的戰時日記中，最常被記載的是「戰爭期」台灣的後方生活動員，與圍繞戰爭進行的相關活動，像是捐獻衣物、環境美化、防火演習等：

在鄉軍人和國防婦人會會員來收集舊的毛布類，把舊的衣裳和襪子供出。⁴⁸

管轄區的甲長來通知：「今早九點在大舞臺要開主婦會，請出席。還有明早七點，帶掃把或鋤來下奎府町的小公園集合。把供出的舊毛織類記名，送至甲長處。」

想起這種事感到憂鬱。⁴⁹

下月八日要出發的內地旅行團領隊，專務今天正是決定是我。晚上在蓬萊閣出席森岩吉君歸還歡迎會。歸途因空襲警報全市黑漆一片，在亭仔腳等了好久。**很想寫自傳式的小說，描寫在這個非常時期本島知識階級的生活面貌。**⁵⁰

午餐後隣組有**防火演習**之舉，從來是婦人擔當，但因時局緊迫，故各戶非男子出馬不可。今日由町會役員及各組長先行示範，另日將有各組員之演習云。⁵¹

隣町（即板町）一帶今日實施**防火演習**。每戶門口擺水一桶、砂袋數包，男子帶戰鬥帽、穿國民服，婦人則裹頭巾、穿モンペイ，舉街惶惶如臨大敵，令人有山雨欲來之感。⁵²

以「在鄉軍人會」與「愛國婦人會」等團體組織成的「生活戰」體系，和為預防空襲，以「隣組」為單位動員的各式防空、防火演習，在葉榮鐘筆下，顯得尤為深刻。無論男女，皆被納入響應經過「文化包裝」的後方動員體制中，或多或少間接地成為了參與「戰爭」的協力者。

在空襲警報的震懾下，葉榮鐘突如其來地，想要撰寫自傳式的小說，「描寫在這個非常時期本島知識階級的生活面貌」，或許是他在戰爭的間接壓逼下，所不得已的尋找的精神出入吧。

然而，更引人注目的，是多篇關於葉榮鐘日記中記載，書寫服膺「生活戰」的社論與講演，如：

寫了社論〈儲蓄獎勵と消費節約〉。⁵³

48 〈1938年8月23日〉，葉榮鐘，《葉榮鐘日記（上）》（台中市：晨星，2002年3月），頁136。

49 〈1938年8月24日〉，葉榮鐘，《葉榮鐘日記（上）》，頁137。【引文內粗體為筆者所加】

50 〈1939年3月6日〉，葉榮鐘，《葉榮鐘日記（上）》，頁169。

51 〈1941年8月24日〉，葉榮鐘，《葉榮鐘日記（上）》，頁191。【引文內粗體為筆者所加】

52 〈1941年8月28日〉，葉榮鐘，《葉榮鐘日記（上）》，頁192。【引文內粗體為筆者所加】

53 〈1938年4月1日〉，葉榮鐘，《葉榮鐘日記（上）》，頁128。

寫社論〈勤勞奉仕に関する一考察〉（關於勤勞服務的一個考察）。⁵⁴

寫了社論，談起有關〈後方後援強調週〉之事。⁵⁵

在社的圖書室寫社論，〈國民は思想戰の準備をせよ〉（國民應作思想戰的準備）。⁵⁶

十一時到教化會講演——赤城婦女團練成會即市內女給藝旦酌婦所組織者——講題係〈防諜與婦人〉，因致激勵竟動傷感不禁為之泫然。⁵⁷

內容上，姑且不論其是否含藏有葉氏特出的隱語與心機，但就其公領域身份的尷尬處境，這類文章除了突顯出殖民地協力者在面對時局時，要較一般小老百姓「被動動員」更加尷尬與曖昧的處境與頻率，就其標題，也可以看出所謂動員與應戰，自有其相應於「非武力戰」的內容，像是〈儲蓄獎勵と消費節約〉（獎勵儲蓄與節約消費），便分別屬於「經濟戰」與「生活戰」的範疇；而〈勤勞奉仕に関する一考察〉（關於勤勞奉公的一考察）亦屬於「生活戰」的範疇、〈後方後援強調週〉既屬於「思想戰」，亦屬於「生活戰」；〈防諜與婦人〉則是討論後方女性的防諜任務，屬於「防諜戰」範疇；〈國民は思想戰の準備をせよ〉（國民們對於思想戰的準備）自然是討論「思想戰」的內涵與動員方式。

在《翼贊國民運動史》中曾針對這類戰爭動員的內容，做過如下區分：「為了確立非常時期的國民生活樣式，像是消費節約、物資活用、資源愛護、貯蓄增強等的運動，是翼贊會發起後非常重視的生活實踐的國民運動。」⁵⁸。在戰爭體制下，即使殖民地尚未直接參與戰爭，帝國仍經由密不透風的「生活戰」與「文化戰」等手段，交互包覆殖民地社會，在多重圈限的動員之中，任何有助於戰爭的活動，此時都被盡可能納入包裝的範圍內，而一旦參與其中，也就實際上成為了參與帝國「聖戰」的一份子。只是涉入程度輕重、自覺與否的問題而已。

想抄錄事變以來的台灣人在後方的活動，去菊元買了一本筆記簿。⁵⁹

早上八點多到台北站。在細雨濛濛中出征的士兵進入車站，來歡送的群眾高呼「萬歲」，淒慘之感湧於心頭。⁶⁰

因有廣東陷落的祝賀籠燈遊行，街上很熱鬧。⁶¹

下午廣播武漢三鎮陷落的消息。⁶²

面對戰爭，及隨之而來的「文化動員」，日記裡雖然只簡單地交代了日軍在中國的戰況，然而，無論是歡送軍伕出征，抑或是慶祝日軍進駐廣東，日本在臺灣進行的「文化戰」，似乎都在殖民地社會上發酵著。

事隔「西來庵事件」不過 13 年的光景，事隔「霧社事件」（1930-1931）也還不到 8 年，看著日軍侵華勝利，「歡送的群眾高呼萬歲」、「祝賀燈籠遊行，街上很熱鬧」等場景，即便葉榮鐘手寫著呼應著國策、時局需要的社論文章，他似乎也在日記裡，暗示著戰爭時期的臺灣社會另一面不為人所觀察到的群眾氣氛。看著台灣人民響應捐獻（送給攻打中國的前線戰士的慰問品），「想起這種種事而感到憂鬱」；看著高呼「萬歲」的群眾，他的心裡滿是「淒慘之感」，毋寧透露出身為殖民地知識階層強烈的矛盾感。

然而，曾參與過「台灣議會設置請願運動」、籌組發行《南音》的葉榮鐘，雖然表面上撰寫國策論文，對於服膺戰爭動員的實踐，諸如送軍伕出征、志願兵、慶祝日本在中國的勝利，以及上述引文中，微微透露出他的「憂鬱」與

54 〈1938 年 9 月 16 日〉，葉榮鐘，《葉榮鐘日記（上）》，頁 141。

55 〈1938 年 4 月 1 日〉，葉榮鐘，《葉榮鐘日記（上）》，頁 144。

56 〈1938 年 11 月 1 日〉，葉榮鐘，《葉榮鐘日記（上）》，頁 149。

57 〈1942 年 8 月 4 日〉，葉榮鐘，《葉榮鐘日記（上）》，頁 205。【引文內粗體為筆者所加】

58 翼贊運動史刊行會編，《翼贊國民運動史（上卷）》，頁 29。

59 〈1938 年 8 月 28 日〉，葉榮鐘，《葉榮鐘日記（上）》，頁 138。

60 〈1938 年 9 月 5 日〉，葉榮鐘，《葉榮鐘日記（上）》，頁 138。

61 〈1938 年 10 月 22 日〉，葉榮鐘，《葉榮鐘日記（上）》，頁 147。【引文內粗體為筆者所加】

62 〈1938 年 10 月 27 日〉，葉榮鐘，《葉榮鐘日記（上）》，頁 148。

「自省」，他又有什麼對於這類經「文化包裝」的「戰爭」有著什麼樣的觀察與「筆法」？

今早七點起床九點左右去台南車站。剛好原來七點四十分要出發的火車因遲到而剛要出發，很多兵士坐在車中，火車開動時他們都舉雙手高唱「萬歲」。**我也不自覺的舉手，但一看周圍掛著「國防婦人會」彩帶的一群人倒毫無表情。**⁶³

同樣高呼「萬歲」，同樣歡送士兵出征，與前述的觀察不同，這次他沒有寫下心中的「淒慘之感」，反而著墨在觀察送行的人們，雖然自己和她們一樣「不自覺的」舉起手來揮舞，但看著那群掛著「國防婦人會」彩帶的人們的臉上，卻是「毫無表情」的。這些經過「文化包裝」的動員活動，確乎是達到了翼贊要求，但是，參與其中的人們，卻似乎並非是發自內心的，而是充滿距離的。而這或許正暗示著帝國「生活戰」對於殖民地人民在身體動員的成功，卻也意味著在「思想戰」、「精神戰」上的失敗。他所「自覺」的「不自覺」，不僅是個人的，也同時可能是群眾的。

葉榮鐘也曾記下他對於曾參與雜誌《福爾摩莎フォルモサ》活動，寫過〈早朝〉⁶⁴、〈自殺行〉⁶⁵等文的施學習⁶⁶，在準備赴廣東就任公職前，身著日式軍服出現在「興南新聞社」中的觀察：

施學習君穿著**畢挺的軍服**出現在社中，據說要坐夜行快車去廣東赴任。看他掛在腰帶的軍刀確實給我一種**異樣的感覺**。他好像對掛在腰上的軍刀——看來比他身體還要大的軍刀——覺得很得意的樣子。**人大概會隨著環境而轉變**。學習君也因一把軍刀而連人也變了的樣子。平常連殺一條蟲都不敢的人，一旦上了戰場卻能殺敵多人而立功，我想人的心理狀態大概就是這樣。⁶⁷

即使如曾經參與左翼組織「東京台灣藝術研究會」（「台灣文藝聯盟」東京支部）與殖民地文藝活動的施學習，似乎也無法抗拒總督府長期的文化戰、思想戰與生活戰，在穿上軍服後，成為了「隨環境而轉變」的「連人也變了的樣子」的殖民地知識份子。這把「軍刀」正如「皇民化」的完成般，似乎暗示著殖民地人民終於也能夠參與「聖戰」而有「立功」機會了。

葉榮鐘這種充滿批判的筆法，不只表現在觀察外界的人、事，他也對自己參與國策論述的撰寫，有話不能說的窘境感到「可憐」：

晚上寫了社論〈諸政革新と皇民化運動〉，想說的話受抑壓而不能說，深深體會到言論自由的重要性。同時感到忍耐著不自由的自己很可憐。⁶⁸

尤其是內容直接觸及日本對於台灣的核心措施——「皇民化運動」，葉榮鐘誠實地記下了自己卑屈且不自由的狀態。面對帝國文化戰縝密、長期的滲透，加之因為「戰爭期」而升高的檢閱尺度與密集的大小動員活動，他既透露出言論受壓抑的苦悶，也強調了處於忍耐狀態的可憐。或許，這正是部份殖民地知識階層在戰爭期時，即使認清了帝國無所不用其極的以文化包裝「戰爭」，也無法有所作為的最為鮮明的內心處境與自陳。

另外，葉榮鐘也在日記裡記下了有關「中國」的訊息。不過，從內容上，他並未清楚地交代傾向，只婉轉帶出金融家兼文化人陳炯對「中國民族」的看法是「樂觀的」。（時太平洋戰爭尚未開打，中國方面戰爭尚未明朗化）：

跟炯兄⁶⁹談了有關**臺灣、事變**、還有**台灣知識階級的態度問題**等約二小時，很意外的他對中國民族有相當樂觀的

63 〈1938年11月23日〉，葉榮鐘，《葉榮鐘日記（上）》，頁153。【引文內粗體為筆者所加】

64 施學習，〈早朝〉，收錄於蘇維熊編輯，《フォルモサ》（東京：臺灣藝術研究會，1933年12月），頁7。

65 施學習，〈自殺行〉，收錄於蘇維熊編輯，《フォルモサ》（東京：臺灣藝術研究會，1933年7月），頁28。

66 有關施學習（1906-1977，彰化鹿港人，日本大學文科）的相關資料，可參考柳書琴，《荊棘之道：台灣旅日青年的文學活動與文化抗爭》（台北市：聯經，2009年5月），頁5、197、211、218、237、242、271、272、279、306、592、594、595。

67 〈1939年2月22日〉，葉榮鐘，《葉榮鐘日記（上）》，頁166。

68 〈1939年2月24日〉，葉榮鐘，《葉榮鐘日記（上）》，頁166-167。

69 陳炯，曾與蔡培火、林呈祿、蔡惠如等人於東京創設「新民會」（1920）並任會長，亦曾參與東京「台灣青年雜誌社」機關誌《台灣青年》，發表〈文學與職務〉，主張言文一致，確立以白話文運動的啟蒙民智的意義與作用。於1930年代參與「東亞共榮協會」以及機關報《東亞新報》的相關活動。

看法。⁷⁰

從他們談論的「臺灣」、「事變」（中日戰爭）、「台灣知識階級的態度問題」等議題來看，或許也能夠幫助我們理解「戰爭期」知識份子間關心的焦點，結論無論服膺國策與否，至少是反思現實的。這種反省性，在下面這則日記中，能看得更加清楚：

晚上訪問上田氏（筆者按：疑為上田雄太郎）——因為他下午打電話來報社要我去。所謂要事雖然沒有明言，但其意為值此時局，林獻堂先生及其一派人士，對時局採取「與我無關焉」的局外者的態度不太好。軍部和總督府方面的要人，期待先生要有較積極的行動，要我向獻堂先生進言。我要他提出更具體的方案，但他不欲明言。他的話雖然不足輕重，但如果這要人們的意向，應研究對策。⁷¹

在帝國「總力戰」動員結構底下，葉榮鐘記下了身為總督府重點「關心」的資本家林獻堂所採取的，消極的「與我無關焉」的應對態度，並強調應對當局的注意「研究對策」。那麼，林獻堂又在他篇幅繁浩、跨度甚大的日記中，記載下何對於總督府在「戰爭期」時以「文化」包裝「戰爭」的手段，以及他對於「戰爭」的認識？

（二）林獻堂日記

或許由於林獻堂身份的複雜性與重要性，「戰爭」，在林獻堂的日記中，也時常扮演了複數的角色。無論是記載的廣度與深度、理解與判讀，也都有別於其他知識階層的日記；甚至是觀察事件的方式、反應的態度，也常常隨著時局而有所不同。

林獻堂對於身邊發生的各類動員、組織、團體，每每有詳細記載，從各種後援會、協力會、協議會、懇談會、紀念會、報國會、展覽會、促進會、講演會、祝賀式、隣組訓練活動等等（節錄）⁷²，到時局律令與相關配套等，如：青果統制令、節米日、愛國貯金、肉類配給、銅鐵回收、支那事變國債、芭蕉乾統制、菜乾統制等等。

其次，對於相應於「武力戰」的「生活戰」與「思想戰」的注意，林獻堂也有一定比例的記述與描寫：

本日起實行防空訓練至月末，不行 火管制。

巡查帶壯丁團搜索藏米，內子有糯米一斗頗以為慮，又不敢密藏以重責罰，進退為難不知所可。⁷³

霧峰庄決定成為模範村，半個月巡查督責修繕、除糞，九時餘招坤山攜博正同出巡視，頗為清潔，若能繼續實為可觀。⁷⁴

警防團出始式及防火群競技按〔案〕內狀之時間訂八時三十分，余如時而往，……團員大部份未來，巡查亦無一人至焉。⁷⁵

役場命大安會社供出電扇、火爐諸銅鐵類。⁷⁶

70 〈1939年3月31日〉，葉榮鐘，《葉榮鐘日記（上）》，頁172。

71 〈1939年3月30日〉，葉榮鐘，《葉榮鐘日記（上）》，頁171。

72 其他尚有如：地主產業報國會、代用食展覽會、天長節祝賀式、時局懇談會、國民精神總動員街庄分會、防諜講演會、燈火管制、防衛團活動、愛國獻身團、「皇民奉公會州支部懇談會、奉公青年隊（結隊式）、公用地獻納式、陸軍航空支廠分廠開廳式、將兵一同歡迎會、飛行場獻納式、獻納陸海恤兵金、銃後後援會、防空訓練、防空壕挖掘、大東亞戰講演會、健民運動、戰死者之慰靈祭、臺灣從軍紀念會、前線皇軍慰問金募集、總蹶起運動講演會、女子報國救護隊、戰勝祝賀會、實踐協力會、戰爭繪畫展覽會、從軍看護婦講演會、警戒警報、國民禮儀、詔書奉讀、義勇報國隊、防空警備協議會、警備協議會、防空協議會、防空疎開協議會、地主增產協力會、企業整備促進會等等。參考林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（10-16冊）》（台北市：中研院台史所、中研院近史所，2008年10月）

73 〈1941年8月15日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（13冊）》，頁286。

74 〈1942年1月19日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（14冊）》，頁22。

75 〈1944年1月3日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（16冊）》，頁5。

76 〈1944年2月24日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（16冊）》，頁74。

除此之外，林獻堂對於總督府的相關「文化戰」舉措，也有他的紀錄與反應：

《興南新聞》主催時局及改題講演會將開於霧峰座，……

郡守請余講演「霧峰庄大政翼贊實踐要綱：一、敬皇尊神，二、報恩感謝，三、公藝優先，四、國語尊重，五、產業報國，六、資源愛護，七、勤勞奉仕，八、節約貯蓄，九、納稅報國，十、防空防諜防犯，十一、軍事援護，十二、鄰保相助，十三、明朗剛健，十四、心身鍛鍊，十五、時間嚴守。」余將鄰保相助、時間嚴守，反復說明以為勉勵。⁷⁷

呈祿八時餘來旅館相訪，因皇民奉公會提唱廢止送迎，故特來表示懇切之意。⁷⁸

藤田嗣治、鶴田吾郎、小磯良平、宮本三郎、田村孝之介、寺內萬治郎、中村研一、山口蓬春、清水澄〔登〕之，九位畫家受陸海軍之囑託，將往南揚各處繪此回戰爭及風土民情，昨由宮崎乘飛機來台中，今朝以泉義夫、吳天賞、李石樵、張星健為導來訪，並遊萊園，因無料理，中食僅有蜆飯及金雞酒而已，二時半往台中。⁷⁹

夔龍九時來，謂助役林元吉前日受叔之勸告勿辭職，已承諾矣……。…次到村上國民學校觀南洋戰利品之陳列。⁸⁰

皇民奉公會台中支部長命二十六日往大肚山女子訓練所講演，數日來屢換演題，本日乃決定「女子對國家應盡之義務及其修養訓練」。⁸¹

〔參與奉公委員會〕閉會後又看海軍映畫襲擊珍珠灣及新嘉坡之狀況，頗為壯觀。⁸²

雲龍來書，為往保安課調查《樂社第二集》禁止發行之理由，據云凡無則應時局之文學，此後皆要禁止。⁸³

在面對各式「戰爭」之餘，林獻堂亦隨著帝國的東亞擴張與情勢變化，記載了他對於「時局」及帝國戰事的注意：

二旬來台中市海兵來往不絕，因大肚山為海軍之飛行場故也。日、美戰雲漸次濃厚之色，新高會館水兵亦出入甚夥……。⁸⁴

七月廿九日佛印增兵以來，國際間之形勢漸次緊逼，大有山雨欲來風滿樓之概，最近三、四日間皆不登載於新聞紙上，果無其事乎，或秘而不宣乎？⁸⁵

五時餘往萊園，歸到五弟處，他於一時前方反自臺北也。他言聞說滿鮮國境日蘇大起衝突，或者因此而宣戰，亦未可知也。聞知頗為愕然，談論數十分間，乃返。⁸⁶

本日為大東亞戰一週年，皇軍戰無不勝攻無不克，臺灣遂免敵軍之攻擊而得平安過日，真大幸也。二日中央參與奉公委員會伊藤海軍武官之講演，謂明年是激戰之年，國民須皆盡其力以為後援云云。明年之激戰不知如何，吾人門外漢不敢預決之也。⁸⁷

77 〈1941年3月19日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（13冊）》，頁115。

78 〈1941年12月4日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（13冊）》，頁405。

79 〈1942年4月8日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（14冊）》，頁98。

80 〈1942年4月17日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（14冊）》，頁107。

81 〈1942年7月17日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（14冊）》，頁185。

82 〈1942年12月2日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（14冊）》，頁309。

83 〈1943年10月12日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（15冊）》，頁343。

84 〈1941年3月5日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（13冊）》，頁100。

85 〈1941年8月19日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（13冊）》，頁291。

86 〈1943年2月22日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（15冊）》，頁75。

87 〈1942年12月8日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（14冊）》，頁314。

マーシャル二島玉碎，陸、海軍人四千人、軍屬二千名俱死，聞之愕然，嗚呼。⁸⁸

除了上述對於「戰爭」的紀錄、反應與觀察外，林獻堂在直接面對潛藏有「文化包裝」修辭的「戰爭」，他也有他自己的應對方式：

林啓明來求余揮毫以作記念，並問改姓之事，告以絕對不改。⁸⁹

修復元煌之信，謂皇民奉公會之組織不日將發表，吾人惟有政府之命是從，盡吾力之所能為者而為之耳，此外勿多言，惟讀書而已。⁹⁰

惟會廷俊女婿黃逢春，他因論物資缺乏、株式不振，對國家之悲觀言辭，去廿八日被憲兵居留至七日始無罪釋放。余囑其此後務必更加謹慎……。⁹¹

本間司令官招待

晚餐後論衣住之改良，許丙、陳炯俱直言內地服不適合於台民，長官亦頗同意。⁹²

磐石、巖石來看余疾。巖石言，資彬長女阿微（眉）寄書與友人，謂日本戰爭之不利。聞之頗為意外，無知女子（十六歲）乃敢妄談戰事，真是可恨，但未知果有其事否。⁹³

處於緊張的戰爭期時，林獻堂在私領域的態度，多是保持對戰爭的發生與事件戒慎恐懼且冷靜的；而當他回到「公共身份」時，所表現出的則是完全順從於帝國態勢與要求的姿態，這或許可以作為前段葉榮鐘所述「與我無關」態度之後所衍伸因應對策吧！

大東亞戰講演會

……我島民同心協力以作統後之後援，各盡其力以擴張生產，內地人如兄以指導無智之弟，而為國家、國防作同一之步調，是我所希望也。⁹⁴

雲龍九時同往總督府，呈祿已先在矣，遂同入見長谷川總督。略述舊遊記之登載於《南方雜誌》，因不注意以不合時宜之思想而復現於今日，以煩閣下之心配，實為遺憾，又蒙寬大處置深為感激。總督謂此後更加努力對皇民運動之合作，並注文寫一篇國家觀之論文以發表意。⁹⁵

今朝陳子卿來，謂凡有接著奇怪之書信須速報巡查，不然則必被取調，聞醫師甘（柑）木被取調兩次云。近日為防諜訓練，而子卿不知也。

林獻堂：〈大東亞戰爭與島民之覺悟〉：一述東亞民族受英、米之壓逼及經濟搾取；次言英蘇戰敗物資之困難，……第二段言對奉公會的協力，使其能達到目的。第三段言間諜預防之必要。⁹⁶

大每台中通信部連見泰通、日報社台中支局吳來興，八時來訪，蓋為近日將發佈徵兵令，問余之感想也。「臺灣歸帝國版〔版〕圖已五十年矣，受浩大皇恩之庇蔭，產業、教育其他一切皆甚發達，際此國家非常時，日漸逼促，

88 〈1944年2月26日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（16冊）》，頁76。

89 〈1941年2月2日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（13冊）》，頁57。

90 〈1941年3月6日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（13冊）》，頁101。

91 〈1941年5月9日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（13冊）》，頁177。

92 〈1941年5月14日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（13冊）》，頁182。

93 〈1941年7月11日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（13冊）》，頁247。

94 〈1941年12月14日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（13冊）》，頁415。

95 〈1942年6月29日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（14冊）》，頁171。

96 〈1942年7月27日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（14冊）》，頁195。

島民當盡微力以報皇恩之萬一，當此之時而發佈徵兵令，島民誠為光榮，感激不置也。」⁹⁷

評議會

余答申之大略：一、欲舉島一致協力，須以台語開講演會或坐談會，使下層階級了解現在之新情勢；二、勞力不足採用女子，須使有訓練之機會；三、下層指導者多不能答上方之意，須激勵之。⁹⁸

然而，林獻堂對於總督府多樣的「戰爭」修辭，也並非沒有反省與批判，在他的日記裡，亦婉轉地記載了諸多的「時局認識」與反應：

【於軍司令部，與呈祿、忻、萬俤、許丙、黃欣、猶龍、雲龍外二十餘名】會本間軍司令官，他謂本島人在島內不能得當局之信用，往支那又被蔣政權所疑，頗難於進退，以後當作實在之皇民，如本島人衣服用布鈕而改為角鈕，即可漸次與內地人同樣矣。忻答曰皇民係關於精神，不是區區在於物質。……⁹⁹

宗特務來，問東京臺灣同鄉會將募集寄附金六十萬，有其事乎，曰無此事。又問一新會將再活動，以連絡台灣之青年，有其事乎，曰無此事。又問日、美戰爭若實現，將有所計劃乎，曰別無所計劃，為奉政府之命，盡吾力之所能而為之……¹⁰⁰

皇民奉公會發會式

宮原述總督甚欲知余對皇民奉公會之感想，余略述深感總督之熱誠，次論內台人之情意未能融和，因內地之猜疑未能忘也。皆暢談無腹藏，至十時方散會。¹⁰¹

晚餐後談對皇民奉公會之所感，忻、宮原、炎廷皆有陳述，最後余乃言萬一日、米戰爭實現，台灣在第一線，內、台人當同心協力以維持國防之責，豈可兩方互相猜疑，置大局於不顧也。¹⁰²

雲龍述呈祿為皇民奉公會生活部長，頗為焦慮將何作起。余使雲龍告之曰：「生活有不善者當改之，善者當保存之，切不可使島民全數學內地人樣式也。」¹⁰³

賣間善兵衛以上村、荒木兩特務為導來謝罪，雜談數十分間，繼則往遊菜園，時已十一時三十分餘矣，金荃與之同往，又招之到新樂亭午餐。……五弟四時餘亦來見舞，告以賣間來之事，他謂視此輩為敵不可，視此輩為友亦不可，深合余意。¹⁰⁴

皇民奉公會總裁長谷川清諮問，在本島以何法而使之為健民健兵也。四時餘命磐石寫答申案：第一、使其得飽食，第二、訓練，第三、涵養日本精神，其要點如是。¹⁰⁵

雲龍昨晚歸來，述長谷川總督、山內警務局長、後藤保安課長，或對他言明或對呈祿言明新聞社合併之事，而《興南新聞》至於三月末日及當停刊云云。聞之頗為愕然，事已至此，亦無可奈何也。¹⁰⁶

97 〈1943年9月8日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（15冊）》，頁304。

98 〈1944年4月25日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（16冊）》，頁143。

99 〈1941年2月25日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（13冊）》，頁90。

100 〈1941年2月28日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（13冊）》，頁93。

101 〈1941年4月19日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（13冊）》，頁152。

102 〈1941年4月21日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（13冊）》，頁156。

103 〈1941年6月11日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（13冊）》，頁213。

104 〈1942年7月14日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（14冊）》，頁184。

105 〈1943年11月12日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（15冊）》，頁373。

106 〈1944年2月13日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（16冊）》，頁63。

萬俾言，山內警務局長勸其為新組織之新聞社之副社長，余贊成其意，切不可因《興南》被合併有不滿之意而拒絕之，際此非常時局，當與當局合作為是，彼亦深以為然。¹⁰⁷

皇民奉公會支部遠山事務局長、生活相談所主任楊基先一時餘來，請余為大屯郡支會事務長，其言曰時局日漸急逼，預想最惡之時恐地方人心不安以起動搖，彼時維持安寧秩序者當屬於地方有力者，先生為地方最有信望之人，請先生以當此難局。聞之頗為感動，祇恐身體衰弱，國語不通，不能負此重任，然為國家盡力而又義不容辭，曰其俟我考慮兩、三日，然後決定也。四時往商之五弟，夜又商之內子，皆贊成引受勿辭。¹⁰⁸

佃人王昆來謂他有三子，一為志願兵、一為工員，昨日又徵其長子為軍屬，今年七十三歲無力再耕田矣。聞之頗為同情，惜無力以援助之也。¹⁰⁹

而與葉榮鐘相似，林獻堂也在日記裡留下了對「中國」的印象，包括定期學習與研究「支那語」（中國話），勤讀《漢文讀本》，甚至發出「際此漢文將絕之時，吾人若力之所能及者，當為之援助，切勿因飢廢食也。¹¹⁰」的呼告等。

因於身份之故，林獻堂在公領域所發表的議論與講演，大多並不只是單純因應時局、強調戰爭，而是更準確地對準了文化戰、思想戰、生活戰等內容，進行相應於「皇民奉公會」委員身份的發言；不過，他也留下了對於總督府所推行的各項時局運動的評價，包括混雜了對時局的無奈、擔任不可推辭的公職遲疑、特務虛與尾蛇的問答態度，延續《台灣新民報》的《興南新聞》遭到廢撤、臺人多消極因應時局等等內心的反應，加上因身份需求而應邀的奉公發言，以及他對於「建設」的隱微說明，都使得林獻堂的戰爭認識充滿了衝突與曖昧。

尤其到了1944年末，他甚至留下：「秋定之來也，蓋為奉公會純為官僚化，對民眾運動無甚影響，問有無積極之方法。余謂奉公會之運動係精神運動，欲見成績殊為不易，……。」¹¹¹如此直接批評「時局」的記載。

面對殖民帝國主義密不透風的戰爭動員，緊密的文化包裝網絡將一個個組織與團體，包裝上文化的外衣，每一個不得不參與的運動與動員，都被總督府利用細密的組織體系，收編進入總動員體系中。

葉榮鐘與林獻堂或者礙於公領域上「協力者」的身份，而展現對於總督府「非武力戰」的兩面性，那麼既身為劇作家、戲劇人及小說家的呂赫若，身處「戰爭期」的變動風雲之中，又會展現出何種姿態？

（三）《呂赫若日記》

曾於〈牛車〉一文登上日本中央文壇《文學評論》雜誌（1935）並收錄於由胡風所編譯的《山靈：朝鮮臺灣短篇集》（1936）中的作家呂赫若，除了參與過由張文環主編的《台灣文學》雜誌（1941），更曾於決戰時期，以小說〈財子壽〉獲得由台灣總督府情報課所舉辦的「第一回臺灣文學賞」（1943），以及甚至也曾在決戰時期作為派遣作家，至台中州農場進行「職浴奉公」，撰寫有〈風頭水尾〉，收錄於《決戰台灣小說集·坤卷》（1945）。

如此活躍於中央與殖民地文壇的呂赫若，在他橫互戰爭期的日記（1942-1944）中，又會呈現出何種文化人的「戰爭認識」與反應呢？

在呂赫若的日記裡，最常出現的戰爭印象，便是「空襲警報」。

所謂的「時局」，對呂赫若來說，似乎是由一連串密集的「空襲警報」與「燈火管制」所組成的。偶爾，伴隨著不定期實施的「管制訓練」與「防空演習」：（5月10日之前在東京，之後回台中）

凌晨兩點半十分響起空襲警報。起床。四點左右解除的吧？早報被昨天的空襲報導填滿了。……所謂的「空襲狀態下」就是這樣嗎？¹¹²

107 〈1944年3月4日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（16冊）》，頁83。

108 〈1944年4月14日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（16冊）》，頁130。

109 〈1944年11月29日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（16冊）》，頁393。

110 〈1941年9月10日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（13冊）》，頁314。

111 〈1944年12月6日〉，林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（16冊）》，頁401。

112 〈1942年4月19日〉，呂赫若著，鍾瑞芳譯，《呂赫若日記（1942～1944）》（台南：國家台灣文學館，2004年12月），頁108。

晚上，第二種防空演習。在管制狀況下寫稿。¹¹³

大稻埕正在防空演習。¹¹⁴

雪絨早上去參加家庭的防空群的訓練。¹¹⁵

與林獻堂的狀態相仿，在被滿足一定程度的「皇民」定義下，呂赫若的日記裡也記述了他所參與各式總督府舉辦的「文化戰」：

下午兩點和王井泉去廣播電台。正好碰上「皇民奉公會」在評選島民歌謠，乃參加。¹¹⁶

晚上：七點去廣播電台。從八點到八點半，和遠藤保子一起播播放軍國歌謠。獨唱曲目一從《金槐集》選出的〈戊卒之歌〉、〈大日本之歌〉。合唱曲目一〈英靈讚歌〉、〈在此一戰〉¹¹⁷

而與林獻堂、葉榮鐘作為「文化戰」的「宣導者」的相同之處在於，呂赫若也以其明確的文藝者身份，親身參與由總督府所組織動員的「文化戰」，諸如：參與「演劇挺身隊」的排練、甚至與廣播合唱團齊唱（自己並擔任男高音獨唱）、在「皇民奉公會」於公會堂主辦的第一次「國民皆唱大會」登台表演：

晚上六點的巴士與王、張、中山等人去新莊街，看「演劇挺身隊」的戲劇排練，指導其造型。¹¹⁸

九點到九點半和廣播合唱團一起播放《海陸東征》，自己擔任男高音獨唱。¹¹⁹

晚上在公會堂舉行的第一次「國民皆唱大會」¹²⁰—「皇民奉公會」主辦—登台表演。¹²¹

除了參與文藝奉公活動，呂赫若也在日記裡記載有他的特殊興趣——看電影，包括流連在「芳乃館」、「榮座」、「大世界館」、「太平館」等戲院，觀賞如《國民大會》（中山侑導演之戲劇大會）、電影《馬來·夏威夷海戰》（見附圖2）、電影《鴉片戰爭》、《陸軍航空戰記》、「臺灣劇場」《戰鬥前夕》、《海軍戰記》、《瞭望塔的敢死隊》等電影。充斥「戰爭」印象的鏡頭、劇情與對白，更是集合有總督府「宣傳戰」、「文化戰」、「思想戰」、「精神戰」等諸多元素，透過「電影」這種大眾化的媒體「宣傳戰」，無形中成為戰爭時期呂赫若的文化生活的一部份。

（附圖2：《馬來·夏威夷海戰》）

有時，呂赫若不只是參與「生活戰」中基礎的民防動員團體，如站崗、值鄰、守夜，他也會參與與「戰爭」有更為密切關係的文化活動：

下午三點起出席在「皇民奉公會」總部召開的，為了編輯《勤勞產戰記》的座談會。出席者有新聞工作者、作家、產業界的人士。說是要訪問工場做現地報導。¹²²

113 〈1942年7月30日〉，呂赫若著，鍾瑞芳譯，《呂赫若日記（1942～1944）》，頁172。

114 〈1943年1月18日〉，呂赫若著，鍾瑞芳譯，《呂赫若日記（1942～1944）》，頁276。

115 〈1943年5月23日〉，呂赫若著，鍾瑞芳譯，《呂赫若日記（1942～1944）》，頁347。

116 〈1942年7月9日〉，呂赫若著，鍾瑞芳譯，《呂赫若日記（1942～1944）》，頁158。

117 〈1942年7月10日〉，呂赫若著，鍾瑞芳譯，《呂赫若日記（1942～1944）》，頁158。

118 〈1942年7月13日〉，呂赫若著，鍾瑞芳譯，《呂赫若日記（1942～1944）》，頁161。

119 〈1943年2月17日〉，呂赫若著，鍾瑞芳譯，《呂赫若日記（1942～1944）》，頁292。

120 「國民皆唱大會」，「國民皆唱運動」活動之一，為「皇民奉公會」所舉辦的「音樂奉公運動」，其他尚包括有：「台灣音樂奉公會」、「大東亞戰爭二周年紀念音樂會」、「愛國歌曲募集」、「皆唱活動」亦曾發行《島民皆唱：我等の歌集》歌曲集。可參考高沛秀，《皇民奉公會的音樂動員運動》（台北：國立台灣大學音樂研究所碩士論文，2009年）

121 〈1943年8月5日〉，呂赫若著，鍾瑞芳譯，《呂赫若日記（1942～1944）》，頁388。

122 〈1943年7月30日〉，呂赫若著，鍾瑞芳譯，《呂赫若日記（1942～1944）》，頁384。



下午一點起舉行「台灣文學決戰會議」¹²³。在圓山集合，參拜臺灣神社。三點起在公會堂開磋商會議。¹²⁴

對於參與上述這些事件，呂赫若並沒有在日記中提及他的態度、傾向與相關評價，反倒是多將情緒透露在其自發性參與的日常文化活動中，如：

去榮座看戲劇大會《國民皆兵》（中山侑導演）**中途即出場**。¹²⁵

八點起在山水亭聽利用公休日辦的「厚生音樂會」的第一次試聽會。**雖屬盛況卻沒有值得一聽的**。¹²⁶

七點起和他們去榮座看「青年文化常會」的戲劇《楠氏一族》。**馬上辭出**。¹²⁷

海軍紀念日。上班後，真受不了募捐「軍艦捐款」的女性之多。在亭子腳有展出「文學奉公會」的街頭小說 街頭詩 繪畫等。**水準很低**。¹²⁸

可以說，呂赫若不只對這些「宣傳戰」、「思想戰」樣板的內容與粗糙低落的水準感到不厭，也對總督府強制島民參與志願兵、「興南新聞社」舉辦的相關文化活動，提出了身為文化人的反省與見解：

昨晚派出所送來傳喚書，所以早上去公會堂，一看，原來是志願兵的事。以警察力量強迫人家志願什麼的，實在是文化國家的恥辱。總之我覺得是吊兒郎當的做法。在此終究感到文化運動的必要性了。¹²⁹

下午四點半起出席在「明治製菓」三樓召開的，有關「興南新聞社」的籌設「藝能（娛樂）文化研究所」第一次預備會，對那些無聊傢伙們的氣餒感到錯愕。¹³⁰

他以日本自詡為「文化國家」這件事，反諷總督府徵集志願兵的手法並不「文化」，亦對「興南新聞社」所企圖籌設之「藝能（娛樂）文化研究所」感到不滿。

那麼，他又對身處於「戰爭期」，以及發生於身邊的「戰爭」有何種體認呢？

下午三點半在大世界看《海軍戰記》的試映會。**戰爭是系統性的訓練**。¹³¹

清晨四點多左右發布空襲警報。

到上午八點多突然發表說敵機入侵。接近九點時，美國的俯衝轟炸機群終於在台北上空出現，以松山機場為目標開始轟炸，是俯衝轟炸。接下來大約有十次——迄下午三點半，一波又一波地頻頻飛來轟炸。交通機關停頓。沒上班，一整天在陽台觀戰。**覺得現代化戰爭是組織戰、科學戰**。晚上警戒警報。

123 「台灣決戰文學者會議たいわんけっせんぶんがくかいぎ」，由「台灣文學奉公會」於「台北市公會堂」召開，會前先赴臺灣神社及護國神社參拜，內容包括有：「確立本島文學決戰態勢」、「文學者的戰爭協力，包括理念和實踐方法」、強調「臺日作家一體化」等議題，令《文藝台灣》與《台灣文學》兩雜誌停刊，確定以「皇民文學」取代「地方文化論述」的官方文化統制態勢。

124 〈1943年11月12日〉，呂赫若著，鍾瑞芳譯，《呂赫若日記（1942～1944）》，頁403。【引文內粗體為筆者所加】

125 〈1942年12月6日〉，呂赫若著，鍾瑞芳譯，《呂赫若日記（1942～1944）》，頁250。【引文內粗體為筆者所加】

126 〈1943年4月16日〉，呂赫若著，鍾瑞芳譯，《呂赫若日記（1942～1944）》，頁327。【引文內粗體為筆者所加】

127 〈1943年4月18日〉，呂赫若著，鍾瑞芳譯，《呂赫若日記（1942～1944）》，頁328。【引文內粗體為筆者所加】

128 〈1943年5月27日〉，呂赫若著，鍾瑞芳譯，《呂赫若日記（1942～1944）》，頁350。

129 〈1943年1月16日〉，呂赫若著，鍾瑞芳譯，《呂赫若日記（1942～1944）》，頁275。

130 〈1943年3月27日〉，呂赫若著，鍾瑞芳譯，《呂赫若日記（1942～1944）》，頁315。

131 〈1943年5月24日〉，呂赫若著，鍾瑞芳譯，《呂赫若日記（1942～1944）》，頁348。【引文內粗體為筆者所加】

頭一次的空襲。¹³²

在呂赫若的日記中，對「戰爭」的態度一直是不甚明朗卻又不證自明的。一方面，他創作著殖民地的新文學小說、參與殖民地文學者相關文藝活動，也積極參與文化劇、歌唱等奉公活動；然而，他對於奉公文化活動的態度，卻仍試圖保持有一定的距離。究竟是對於奉公文化活動「內容」上的不滿，抑或是對這類活動的「品質」，發出身為專業人士的批評，並沒有更多的資料可以佐證。不過，藉由他所描述的戰時氣氛，我們可以更清晰地觀察到，除了空襲警戒與演習，總督府所進行的文化與思想滲透，一一透過如：演劇挺身隊、國民皆唱運動、廣播軍歌節目、評選島民歌謠等系統性的文化經營方式，更明確地透露出非武力型「文化戰」的多元面目。

即使到呂赫若日記的最後一則，記載的仍是與「戰爭」有關的訊息：

今天微陰。即使是這樣，早上八點也發布了空襲警報，接著美機飛來台北上空，和昨天一樣實施俯衝轟炸。

昨天的轟炸，據說是由美國機動部隊的艦載機空襲全島各地，總計出動一千一百架次。掛念故鄉。下午去報社上班。待了一陣子之後，去臺灣信託探問陳遜章、去探望山水亭。又發布空襲警報了，嚇得跑回家。據說下午幾乎都沒見到敵機。

晚上警戒警報。¹³³

從呂赫若記載下錯綜凌亂的訊息，或許可以反應他在面對「武力戰」的心情。聽著自大本營傳來日本被輪番轟炸的消息，令人不安的情緒也隨之升高。從虛擬的「防空演習」到「空襲警報」，再到「本島空襲」，連臺灣也真正捲入事件核心了。

大本營發表說美國機動部隊以艦載機轟炸南西諸島中的奄美大島、沖繩島、宮古島（十日上午到下午共四次）。

本島於昨天上午起警戒警報。¹³⁴

此外，上述葉榮鐘、林獻堂、呂赫若筆下對於「戰爭」的印象，大抵上可以歸納出「戰爭期」時台灣人所身陷的「戰爭」，並非如中國華北、或是南洋一般，是以「武力戰」為主，而更著重在經濟戰、精神戰、文化戰、宣傳戰、思想戰、生活戰等形態，軟性地、間接地參與戰爭活動；一直要到「決戰時期」，總督府實施「志願兵制度」¹³⁵，臺灣才真正較為全面性地被收納進入帝國的總力戰結構之中。從這些知識階層的戰爭觀察中，也可以看出，世界局勢之下的「戰爭」，對於殖民地臺灣的影響與介入：

報紙報導德蘇之戰德軍大敗。從奧勒耳撤退一哈里科夫之役。還有義大利法西斯黨解散的政變。買回一張歐洲地圖貼在牆上。¹³⁶

與葉榮鐘、葉榮鐘時時觀察、思考世界戰事的變化與時局的異動不同，呂赫若的日記中，特別提及自己買了一張歐洲地圖貼在牆上，並以新聞的手法註記了同屬於法西斯政權、軸心國的德、義兩國的敗退，意有所指地藉由「戰爭」，投射自己的意志。那麼，吳新榮以跨越醫界、文學界與作為地方公職的多重身份，又將如何在戰爭期偌大的「時局地圖」中，找尋自己的坐標？

132 〈1944年10月12日〉，呂赫若著，鍾瑞芳譯，《呂赫若日記（1942～1944）》，頁438。【引文內粗體為筆者所加】

133 〈1944年10月13日〉，呂赫若著，鍾瑞芳譯，《呂赫若日記（1942～1944）》，頁439。【引文內粗體為筆者所加】

134 〈1944年10月11日〉，呂赫若著，鍾瑞芳譯，《呂赫若日記（1942～1944）》，頁438。【引文內粗體為筆者所加】

135 「志願兵制度」：1938年2月23日，小林躋造總督公佈「外地志願兵制度」；1938年4月3日實施外地的「陸軍特別志願兵制度」；1941年6月22日，台灣軍參謀長和知鷹二發表正式實施「志願兵制度」。1942年3月，第一回「高砂挺身報國隊」編成；1943年5月12日，臺灣實施「海軍志願兵制度」。

136 〈1943年8月11日〉，呂赫若著，鍾瑞芳譯，《呂赫若日記（1942～1944）》，頁391。

(四)《吳新榮日記》

隨著時局漸趨緊張，身為「鹽分地帶」成員一份子的吳新榮，在他的日記裡述及了總督府對於台灣文化活動的箝制：「長坂好子¹³⁷ 女史要在台南公會堂開演奏會，因為是我們鹽分地帶¹³⁸ 同人擔任賣票，致使完全失敗……。究這原因第一是他們的藝術完全是 burger 的。¹³⁹ 第二是當局對我們的行動有相當的干涉。」¹⁴⁰。暗示了在蘆溝橋事變即將爆發的前夕，台灣總督府當局對於臺灣文人所舉辦的文化活動，實際所採取的緊縮措施。而在 1937 年 7 月 7 日當天，吳新榮又對這場撼動東亞的事變，發出如何的唏噓？

正義如不滅，
良心遍世界。¹⁴¹

這種明確透露出自己意志與傾向的果決態度，隨著戰爭局勢的推展，對吳新榮來說，似乎開始造成某種壓抑，甚至做了如下的夢魘：「昨夜的惡夢：有兩個軍相關，飛機飛來大炸，我們驚逃走上北，到了未曾到的山地，有人家是鍾姓的客庄，我遇了一個故友，是舊同窗，忽然間聽了休戰的聲音，我就醒了。唉，不是魘人說夢呢？」¹⁴²，以及發出了「這樣緊張的氣氛我矣不能耐忍了，我這生理上的不快使我終日消沈！」¹⁴³的呼喊。

然而，加在被殖民者上的重擔，只隨著時局進入戰爭期，進入新的階段。原本僅在地方診療的吳新榮，不時需要參加當局舉辦的「非常時期的醫師會」，討論對家有出征士兵家庭的免費診療，或是對維持時局治安的警察提供藥價上的折扣、往赴公學校參加「出征士兵的送別會」、或是官方團體如：「防衛團」、「軍機獻納會」、「國民精神總動員佳里分會」等；而妻子亦須參加「愛國婦人會」、「佳里婦人會」等團體，去縫紉慰問出征士兵的日本國旗（日章旗）等，參與頻繁且密集的時局活動。隨著時勢之需要，光為了投身這些「文化戰」，幾乎快要比每天工作維生來得更為重要了：「雪芬參加愛國婦人會及佳里婦人會，每日都刺紉日章旗以為前線士兵的慰問用，我也被認為防衛團員及軍機獻納會幹事，時時都去服務集合，以為統後大眾的指導者。免講如何，這是時勢，這是潮流。」¹⁴⁴、「人人都有部伍，人人都順時勢。」¹⁴⁵

這樣驟然升高壓力的時局氣氛，有時也使得吳新榮的心理狀態，產生難以言喻的混淆：「東洋的悲劇慘至何處實在不可期，我們只期待早期完結而已。但我們能生看這轉換期的時代，也可說是幸福。不過我們不可盜安，每時要持一旦之時要出門，最後之機要奉公。」¹⁴⁶或許是身為醫者之故，他一方面希望這樣的悲劇盡速完結，一方面，又不得不應合時局，身體力行機要奉公之業務，再再使得吳新榮的心理狀態漸趨疲憊。然而，即便如此，他卻又會在身體力行的過程中，紀錄下他對時局的逃避與矛盾：「我們因何日日都打麻將食燒酒？第一就是娛樂，第二就是交際，第三就是時勢，等等總是表現這階級的生活。」¹⁴⁷，雖然「身體」是被迫服膺大小形態的「文化戰」；心態上，吳新榮卻不如總督府所宣傳、強調「時勢」的優先性，反而是將它擺在第三順位上，甚至比「交際」還不如。或許從這點，足見他在戰爭體制下，身為殖民地知識階層的某種「時局認識」。

一方面，他寫下「國家興亡，匹夫有責」這類既可能朝向中國，亦可指涉日本的帶有雙關詮釋可能的字句；另一

137 長坂好子（ながさか - よしこ），（1891.5.29 ~ 1970.9.30），愛知縣人，大正一昭和時代的女高音歌手以及音樂教育家。明治 24 年 5 月 29 日生。於大正 15 年為日本文部省留學生，赴義大利師事ソルディーニ。回國後，於昭和四年任職母校東京音樂學校教授（現東京藝術大學）教授，學生有大橋國一（くにかず）等人，亦曾擔任過台灣小說家呂赫若之聲樂老師。參考「數位版・日本人名大辭典 + Plus 解說」：<http://www.sanseido.net/User/Dic/Index.aspx?TWords=%E3%83%87%E3%82%B8%E3%82%BF%E3%83%AB&st=0&DORDER=151617&DailyJJ=checkbox&DailyEJ=checkbox&DailyJE=checkbox>（瀏覽日期：2012-4-27）

138 「鹽分地帶」鹽分地帶文學乃是於 1930 年代臺南州北門郡自然形成的文學團體，因其所在地地處濱海或溪埔地，土壤多含鹽分而得名，活動的文學者之作品，多有濃厚的鄉土色彩以及鹽村情景，參與者有如：郭水潭、徐清吉、王登山、吳新榮等人。參考「台灣大百科」：<http://taiwanpedia.culture.tw/web/content?ID=4574&Keyword=鹽分地帶>。（瀏覽日期：2012-4-27）

139 burger：有混雜、不純的意思。參考「Dictionary.com」<http://dictionary.reference.com/browse/burger>

140 〈1936 年 8 月 22 日〉，吳新榮，《吳新榮日記》（台北：遠景，1981 年 10 月），頁 39。

141 〈1937 年 7 月 7 日〉，吳新榮，《吳新榮日記》，頁 49。

142 〈1937 年 7 月 23 日〉，吳新榮，《吳新榮日記》，頁 49。

143 〈1937 年 7 月 23 日〉，吳新榮，《吳新榮日記》，頁 51。

144 〈1937 年 10 月 2 日〉，吳新榮，《吳新榮日記》，頁 52。

145 〈1937 年 10 月 16 日〉，吳新榮，《吳新榮日記》，頁 52。

146 〈1937 年 9 月 21 日〉，吳新榮，《吳新榮日記》，頁 51。

147 〈1937 年 11 月 6 日〉，吳新榮，《吳新榮日記》，頁 53。

方面，吳新榮的心中卻有某種不確定的成份隱然成形：

過去曾大叫：「國家興亡，匹夫有責。」現在要重新考慮。**有種種矛盾的思考混亂於我們內心**。讀史書知道我們個人是何等無力，我們只是時代奔流的一粒砂而行動。我們只有認真治療患者最為重要。我們盡自己的職務就夠了。我們非拋棄名譽慾望不可，也沒有勾結權勢的必要。昨日之是，今日之非。我們的矛盾混亂愈來愈深，一切只待歷史的奔流來解決。我們靜的行動只待**外力**而得動前進。¹⁴⁸

除了定期參加的各種國策團體與民防活動外，「空襲警報」、「防空演習」亦是殖民地戰時生活中不可少的成份：

午後，突然防衛團緊急集合。當然，空襲警報也響了。不久傳令下來，說是敵機空襲台北。事實不得其詳，但對我臺灣，不，對日本，這是第一次的空襲。但沒有目擊空襲的人們，連電臺廣播都不相信，以為是一種空想而已，仍然以「天下太平」的態度處之，毫無戰爭的氣氛。(下略)¹⁴⁹

第一種防空演習自本月一日至今日訓練完成。連鄉間愚直的民眾漸被組織化，使吾人感到東洋的大胎動，世界的大轉變的空氣甚濃。吾愛吾鄉土，必守空權，故做防空演習，絕非好玩湊熱鬧而已。¹⁵⁰

在戰爭情勢驟然升溫，「空襲」與動員的次數只有增無減的情況下，吳新榮也對於自己的戰時生活與體驗有過如下的記載：

我們每天做完了工作，就脫下西裝與皮鞋，換上和服和木屐，半天過和服生活；吃醃蘿蔔、味素湯、生魚片、日式火鍋。又以家中設他米寢室為榮。而後以日本話談話，用日文寫作，最後以日本式的方法來思考。一切只為了方便。「方便」與「必要」成為同化的不可缺條件。我們是被方便與必要所迫，而被同化的台灣人。¹⁵¹

卸下醫師身份的吳新榮，換上和式服裝，過著和式生活，無論起居坐臥，無處不被「日本化」，連同「思考」也是如此。然而，他卻藉由敘述服膺「生活戰」，有所保留地寫下了「一切只為了方便」以及「我們是被方便與必要所迫，而被同化的台灣人。」這樣的充滿無奈的遁辭，以及與總督府所強調「生活戰」下的同化目的截然不同的認識論。

除了日常生活坐息外，吳新榮也記載了戰時生活的困苦與日漸拮据的殖民地經濟。他認為，這種日漸拮据的情形，既是外在的現實條件、也是內在世界的失衡：

(前略)物價高騰，入不敷出，我們非挨餓不可，豬死尚留皮。漸入代用品的時代，出遠門亦非打赤腳不可，恢復古代的生活。這復古氣氛不就是戰時精神的一型態嗎？亦即在原始時代，無論戰爭的目的、行動、精神等，現代人都可套進去。簡言之，戰爭的目的在於勝利；為了勝利，一切犧牲在所不惜。這個犧牲就是現代的**消耗戰**。因物質缺乏帶來我們生活的不便與困苦，若是為了神聖的犧牲，我們當然接受，且盡最大之犧牲，以待最後之結果。¹⁵²

住於田園，與農民相處，愈感心安。在這種食缺乏的時代，沒有米則送番薯來，沒有魚肉則送青果來。……想起連地瓜都吃不到的別地方，吾人已太享受了。今天因為下痢，遂無勇氣參加鎮上的戰死者的葬禮。沒有勇氣的現象，是最近我的心理變化之一；不想見人，不想和人講話，是我最近的心境。在政治上、經濟上一連失敗的我周圍，已無必要去重顧它。¹⁵³

148 〈1938年1月16日〉，吳新榮，《吳新榮日記》，頁62。【引文粗體為筆者所加】

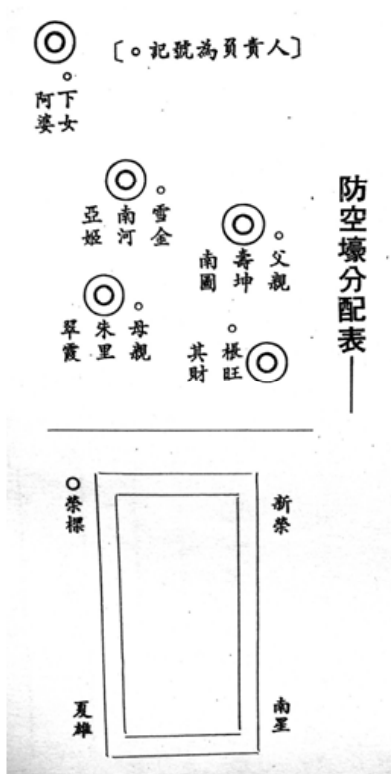
149 〈1938年2月23日〉，吳新榮，《吳新榮日記》，頁66。

150 〈1940年7月6日〉，吳新榮，《吳新榮日記》，頁96。

151 〈1938年1月19日〉，吳新榮，《吳新榮日記》，頁62。【引文粗體為筆者所加】

152 〈1938年7月8日〉，吳新榮，《吳新榮日記》，頁71。

153 〈1940年5月7日〉，吳新榮，《吳新榮日記》，頁93。【引文粗體為筆者所加】



處在這樣長期不確定與矛盾的現實與心境的衝突環境下，吳新榮更直白地在日記中，對自己的心態進行質疑：「但精神方面實在悲慘，首先為了彩屏，浪費了很多精神；其次對於時局，有至多良心上的煩悶。(下略)」¹⁵⁴。

不過，吳新榮這種良心上的煩悶與衝突，並沒有被時局的緊張與戰爭的陰影，以及自己時時被國策團體所驅策，而感到真正的沮喪與閉塞，反而正是憑藉著「戰爭」，重新找到了他的心靈寄託：

南邊牆上，貼著一張時局大地圖。這是七七事變後，友人送我的。中國全國也包括在內，蔣介石軍隊配置全國，為歷史之轉機：……我不掛美術品或風景畫，而選掛這張地圖。是因為它明示了世界的大勢，暗示了我們的生活。¹⁵⁵

今天我受命為佳里街防衛團救護班副班長。在這地球的苦惱時代，豈能獨我過安然生活？當然對世界任何微小的一點，吾人也當貢獻。當局認定我對時局能挑一擔之重，至感滿足。吾人雖贊成從菲律賓、從印度支那、從印度、從非洲驅走法蘭西及英吉利，但若制霸歐洲的德意志，以其兇暴性的武力來控制亞洲，則免談了。¹⁵⁶

最近吾人全面性的敗北，全面性的退却，就像國際上的哪一個國家一樣。

那些國家戰到最後關頭，我們也同樣戰到最後。集團精神是親和的，同伴精神是仁義的，黨派精神是盟約的。此親和、仁義、盟約三精神，非擴充而行動化不可。¹⁵⁷

雖然自己身處於殖民統治底下，身為總動員體制下的一員而服從著總督府的意志，處於「全面性的敗北、全面性的退却」狀態中，吳新榮卻將意志投射在同時也正處於困厄的「哪一個國家」（暗指「中華民國」）身上，宣告自己將會「戰到最後」，並積極將這三種精神「擴充而行動化」。這種具體行動與想法的落實，也可從他參與戰時皇民奉公事務或總督府經辦的文化活動的態度與批評之中窺見：

首先日本文壇中堅作家久米正雄呼籲以文藝處理日支事變。新進作家中野實暴露重慶政府的宣傳戰。中堅作家吉川英治喚醒大家作銃後準備。新進作家火野葦平報告前線實情。最後由日本文壇大將菊池寬談武士道。這一羣通俗小說家及大眾文藝家或戰爭文學家的高級理論，沒有說動我心，說什麼「文藝家銃後運動」，名堂響亮，其實無理要求。¹⁵⁸

昨日下午去公會堂，出席「皇民奉公會的大會」，同晚該去參加興亞奉公日慶祝會，我未去，而去酒家下圍棋。(下略)¹⁵⁹

昨日皇民奉公會北門郡支會開委員會，對於農村娛樂的諮詢，我簽報如下：娛樂是一種文化運動，而北門郡過去從未有這種文化運動，令人遺憾。¹⁶⁰

除了暗自批判與逃避參與奉公集會外，即便進入決戰時期以後，「時局」不斷強調著殖民地人民欲成為「皇民」所應

154 〈1938年12月1日〉，吳新榮，《吳新榮日記》，頁75。【引文粗體為筆者所加】

155 〈1938年11月8日〉，吳新榮，《吳新榮日記》，頁74。

156 〈1940年6月11日〉，吳新榮，《吳新榮日記》，頁95。

157 〈1941年7月9日〉，吳新榮，《吳新榮日記》，頁109。

158 〈1940年12月21日〉，吳新榮，《吳新榮日記》，頁104。

159 〈1941年12月2日〉，吳新榮，《吳新榮日記》，頁118。

160 〈1942年11月8日〉，吳新榮，《吳新榮日記》，頁136。

盡的犧牲與奉公義務，吳新榮仍是採取一貫的消極態度，認為「戰爭的不幸已可預期，但我們應設法減少損失至最小程度，且不做不必要之犧牲。」¹⁶¹，持續地承擔著這「精神的負債」面對空襲、挖掘防空壕、構築戰鬥工事，以及不時地帶著全家奔向防空壕。（見附圖 3：防空壕分配表）¹⁶²

可以說，在總督府實施的各種戰爭形態與動員過程中，吳新榮一方面無可避免地，必須參與總督府所規定的各式奉公團體，如：戰爭末期強制志願充員的「南方派遣醫」、「臺灣奉公醫師團」，以及參與「奉公壯年團」、「警防團」等地方團體，響應各式「文化戰」（如：興亞奉公日慶祝會、戰捷感謝郡民大會）、「生活戰」（如：食糧配給、代用品時代、「守時」規約、防空演習）；一方面卻又希望能在內心世界裡，尋求矛盾心理的依靠與寄託。

在日記中，我們所看到的戰爭形態，最大一部份揭示屬於對於「武力戰」的反應與記載，以及身為「皇民」的矛盾與衝突。從戰前到終戰，身為殖民地醫師、以及任就公職的吳新榮，正是由於他所參與的是「非武力戰」之故，使得他得以採取消極、內在的方式，回應時局。

也即是說，對於身為殖民地知識階級，亦是醫師身份的吳新榮來說，「武力戰」雖然無所不在地籠罩著殖民地，所能影響的卻僅是某種緊張與不安感。「非武力戰」則不然，這種不得不參與的戰爭，反而正是造成吳新榮精神上與思想上惶惑與矛盾的主要來源。

與呂赫若買了一張「歐洲地圖」貼在牆上一樣，吳新榮亦買了一張「時局大地圖」貼在牆上，吳新榮甚至記下了「中國全國也包括在內，蔣介石軍隊配置全國，為歷史之轉機：……」¹⁶³，彷彿將自身的想望凝縮進臺灣知識階層牆上的地圖中，透過對報紙中的世界局勢的觀察，投射對於世界、對於自身位置想望，展開屬於他們的「戰爭」。

四、結語

透過微觀「戰爭」的多元形態與歷史條件，戰爭期的殖民地臺灣實際上所接觸戰爭，乃是與直接參與的「武力戰」形態有所距離，以「文化戰」、「思想戰」、「生活戰」等「非武力戰」為主的戰爭。不同的戰爭形態，使得對於殖民地社會的影響，以及臺灣知識份子、文化人、文學者的反應亦有所差異。

當總督府依照帝國擴張與時局需要，並針對「近代戰」的「總動員」特質，對臺灣進行一系列計畫性的組織動員、強調奉公翼贊時，殖民地知識階層如葉榮鐘、林獻堂、呂赫若、吳新榮等人，皆不約而同地在日記裡紀錄下他們對於這種經過「文化包裝」過後的戰爭認識：

1. 記述「武力戰」的形態與氣氛：如防空演習、防空壕、空襲警報。
2. 記述「非武力戰」的內容、動員形態與參與情形
3. 記述對於「戰爭」（非武力戰）的批判與反省
4. 自述身處於戰爭期時的精神矛盾與衝突
5. 記述發生於「中國」的事件
6. 記述對於世界局勢的看法與觀察

針對張文環曾在「台灣決戰文學會議」（1943）中發表如：「臺灣沒有非皇民文學，假如有任何人寫出非皇民文學，一律槍殺。」¹⁶⁴，歷來已有如葉石濤、林瑞明等人，為其時代背景進行平反。在「皇民化運動」與時局壓力的急逼下，這些戰爭期下的知識階層們，卻如葉石濤所言：「他們也是人之子，並不是神旗，再生活和強權的重壓下，有時他們也不得不違心願，對統治者的政策美言幾具。然而，大致而言，他們是英雄，而不是投降者。」¹⁶⁵。

本文一改研究者多從「皇民」、「皇民文學」的角度切入，而著重觀察「戰爭期」時殖民地知識階層對於「戰爭」的認識。試著從日本帝國與臺灣總督府「文化包裝」下的「非武力戰」角度切入，在臺灣總督府「文化戰」、「生活戰」等戰爭力學結構底下，即便是不參與文學創作的殖民地大眾，一方面正經歷著「皇民化」的政策階段，一方面亦在「非武力戰」的戰爭力學結構底下，已然被囊括作為「皇民」而動員與組織。

161 〈1943 年 12 月 12 日〉，吳新榮，《吳新榮日記》，頁 149。

162 〈1942 年 11 月 8 日〉，吳新榮，《吳新榮日記》，頁 164。

163 〈1938 年 11 月 18 日〉，吳新榮，《吳新榮日記》，頁 74。

164 林瑞明，〈騷動的靈魂—決戰時期的台灣作家與皇民文學〉，《台灣文學的歷史考察》（台北：允晨文化，1996 年），頁 296。

165 葉石濤，〈「抗議文學」乎？「皇民文學」乎？〉，《台灣文學的悲情》（高雄：派色，1990 年 1 月），頁 111～112。

雖然就結果論來說，殖民地的臺灣知識階層最終仍是被動參與其中，並在身體的服膺與精神的、良心的抗衡與矛盾之中，處於時而全然服膺、時而無奈抗拒的狀態。然而，由於打開了「戰爭」的形態多樣性，加深了對殖民地知識階層在總督府非武力戰下的心理活動的理解，也對他們的戰爭反應、戰爭認識與精神生活，有了更為深刻的理解與認識。從他們對於這種「文化包裝」手段的反應，再去進行思考，在考量殖民地的特殊時局條件與「非武力戰」的修辭策略後，或許使我們能夠更加了解這群身處在文化包裝底下的戰爭中的臺籍知識階層的戰時精神樣貌，以及他們企圖在內在建構的屬於殖民地的戰爭認識論。

參考書目：

日記類：

吳新榮，《吳新榮日記》（台北：遠景，1981年10月）

葉榮鐘，《葉榮鐘日記（上）》（台中市：晨星，2002年3月）

呂赫若著，鍾瑞芳譯，《呂赫若日記（1942～1944）中譯本》（台南：國家台灣文學館，2004年12月）

林獻堂著，許雪姬編註，《灌園先生日記（10-16冊）》（台北市：中研院台史所、中研院近史所，2008年10月）

專書類：

時局研究會編，《時局認識辭典（上、下）》（東京：日本書院，1939年）收錄於《戰時下資料事典》（東京：日本圖書センター，2002年4月）

情報局記者會編，《大東亞戰爭事典》（東京：新興亞社，1942年）收錄於《戰時下資料シリーズⅠ—戰時下資料事典 第2卷》（東京：日本圖書センター，2002年3月25日）

菅沼清次郎，《必勝的生活戰》（東京：大政翼贊會宣傳部，1942年7月）

翼贊運動史刊行會編，《翼贊國民運動史（上卷）》（東京：翼贊運動史刊行會，1954年1月）（東京：ゆまに書房復刻，1998年9月）

日本近現代史辭典編集委員會，《日本近現代史辭典》（東京：東洋經濟新報社，1978年4月5日）

葉石濤，《台灣文學的悲情》（高雄：派色，1990年1月）

櫻本富雄，《日本文學報國會一大東亞戰爭下の文學者たち》（東京：青木書店，1995年6月）

林瑞明，《台灣文學的歷史考察》（台北：允晨文化，1996年）

克勞塞維茨·著，李昂納德·編，鈕先鍾·譯，《戰爭論精華》（台北：麥田，1999年1月）

若林正丈著，台灣史日文史料典籍研讀會譯，《台灣抗日運動史研究》（台北：播種者，2007年3月）

韓國臺灣比較文化研究會著，柳書琴主編，《戰爭與分界：「總力戰」下臺灣·韓國的主體重塑與文化政治》（台北：聯經，2011年3月）

論文類：

高沛秀，《皇民奉公會的音樂動員運動》（台北：國立台灣大學音樂研究所碩士論文，2009年）

網路資源：

維基百科：<http://zh.wikipedia.org/wiki/Wikipedia:首>

「國民堅忍章」：<http://blogs.yahoo.co.jp/pandradra/4195637.html>

「數位版·日本人名大辭典 +Plus 解說」

「台灣大百科」

「Dictionary.com」

日治時期臺灣文學中的女體想像及其文化意涵

——以《詩報》（1930-1944）為觀察場域——

劉于慈

摘要

《詩報》（1930-1944）作為日治時期發行最久的漢文藝刊物，其廣收全臺各地詩作，加上跨越時代綿長，遂具備傳播媒介及文化生產場域之特色，筆者試圖透過此開放性的文化空間，詮釋臺灣傳統文人書寫中，如何藉由擊鉢聯吟對女性進行集體想像？在想像的進程中衍生何種文化期待與標準？此皆是本文所欲關照之面向。是故 論文首先從「視覺審美」的角度切入，梳理女性從一個展現自我的主體，轉為被書寫的文化客體脈絡，傳統文人通過女性的「身體美感」（裸體、乳峰、美人腳）與「妝扮美學」（斷髮、洋裝、跳舞襪）兩軸線，推演男性的審美觀，同時藉由詩作鋪展對流行文化的正反評價。其次，傳統文人對於女性形象的再造也反映在女性參與新興職業的面向之上，從廚房到廳堂，從家庭進入社會，女性的社會地位雖有所鬆動及變化，但對於婦德的要求仍是當時的主要訴求，是故，在新 / 舊文化衝擊下，社會變貌往往非二元對立，而是彼此交涉混雜，隱含繁複的對話空間。

關鍵字：台灣文學、《詩報》、視覺審美、職業女性、女性形象

一、前言¹

在西方的羅馬神話中，金星維納斯（Venus）是愛與美的女神化身，她長髮垂腰，肌膚白皙，如少女般的嬌羞，用雙手遮住裸身，以及圓滑曲線的豐滿體態，皆形塑力與美的象徵，「維納斯」這個符碼逐步具有審美價值的特質，也成為西方藝術家對女性美的理想形式，亦為大眾提供了女性理想形象的前景。因此，對於女性形象的想像與建構，不外乎由視覺起始，從外而內層層推衍，女性形象的塑造不僅是一種對於性別的想像與期待，其背後隱含著社會文化的脈動，倘若「維納斯」作為西方對女性想像的範式，可進一步思考的是，日治時期的臺灣社會，其日常生活型態的改變與現代化都市發展過程息息相關，在新文明的氛圍下，湧生許多價值觀的轉型與變動，而傳統文人如何面對時代的感覺結構？繼而想像女性、再現女性？是本文所欲關照的面向。

依日治時期臺灣古典雜誌的發行狀況言，舉其要者有：《三六九小報》、《風月報》、《詩報》、《臺灣詩報》《臺灣詩薈》……等²，然以《詩報》為日治時期發行最久之刊物，尤人鳳在《詩報》百期的祝詞上也提到：「號數多至一百為我臺漢字文藝雜誌未曾有之長壽命者誠可慶也」³，可見《詩報》所跨越的時間長度是其他漢文藝雜誌未有之特色，且由於擊鉢吟具有集體性創作的文學特色，因此，本文試圖將《詩報》做為文化載體，檢視傳統文人如何建構女性形象？耙梳其所蘊含的文化意涵，冀以探見日治時期臺灣的文化動態以及精神圖像。

《詩報》於 1930 年 10 月 30 日創刊，是為半月刊，由《吟稿合刊詩報社》發行，目前所見史料計有 319 期（1944 年 9 月 5 日），發行人首為周石輝⁴，設有副社長杜香國、盧纘祥（未設社長），1932 年後改由許梓桑⁵為榮譽社長。《詩

1 本論文宣讀於 2012.12「東亞的域外體驗與文化接觸——由語言探討日本與台灣以及中國大陸的文化往來」研討會，感謝講評老師及與會貴賓給予指正，將架構做一調整和增補，當中仍有未及之處，容待日後更進一步梳理。

2 1930 年代左右臺灣的古典文藝雜誌有：《臺灣詩報》（1924-1925）、《臺灣詩薈》（1924.2-1925.10）、《三六九小報》（1930.9-?）、《漢香文藝》（1931.11-1931.12）、《風月報》（1937.9-1941.7）…等，然而發行時間多為 1 至 5 年，未有如《詩報》跨越十個年頭之久者。

3 尤人鳳，〈詩報百期祝辭〉，《詩報》第 100 期（1935 年 3 月 1 日），頁 16。

4 周石輝（生卒年不詳）為桃園吟社社員，柯喬文在其文章指出《詩報》發行出期的事宜皆由桃園周圍詩社支援，如編輯員周石輝、林雲帆、王篆、吳周元等，以及檢閱人鄭永南，皆為「桃園吟社」社員。可參照：柯喬文，〈基隆漢詩的在地言說：《詩報》及其相關書寫〉，《中正大學中文學術年刊》第 12 期（2008 年 12 月），頁 171。

5 許梓桑（1874-1945），基隆德高望重之士紳，1903 年任基隆區街莊長，後升為基隆區長，1921 年調升為基隆街助役，未幾退職，為臺北州協定會會員及基隆同風會會長，服務地方四十載，因其治事精勤，日人頒其紳章，除公職之外，許喜參與詩社、擊鉢吟詩，與顏雲年先生一同參與臺北瀛社，二者對推動基隆詩文有重要貢獻，另為吟稿合刊詩報社長、大同吟社名譽社長，可見其文學活動狀況，著有《慶餘堂詩稿》，今已散佚。基隆市文化中心編印：《基隆第一·人物篇》（基隆：基隆市立文化中心，2004 年），頁 11-16。基隆

報》原在桃園發跡，後移址至基隆地區，陸續由蔡清揚⁶、張曹朝瑞⁷發行，我們可從以下表 1「《詩報》發行印刷演變表」窺見負責人的異動情形：

表 1：《詩報》發行印刷演變表⁸

日期	期數	發行人	印刷人	印刷所
1930 年 10 月 30 日	1-44	周石輝	藍萬城	桃園：振合印刷所
1932 年 10 月	45-46	周石輝	張朝瑞	基隆：仁華活版所
1932 年 11 月 18 日	47-69	蔡清揚	張朝瑞	基隆：李建益印刷所
1933 年 11 月 15 日	70-319	張曹朝瑞	張曹朝瑞	基隆：仁華活版所

《詩報》發行人的更迭，主要是因為周石輝身體狀況不佳⁹，故將雜誌業務轉交於其他人負責，而社址從桃園到基隆，雖然經過遷徙，但仍都聚焦在北部地區，《詩報》的刊行是由北部各吟社社員相互支援、參與，並且得各地文友贊助，以及收取商家廣告費作為運作資金，使得順利發行。尤人鳳曾言：「詩報創刊桃園始。方便移轉基隆市。營業駸駸日擴張。購讀紛紛來遐邇」¹⁰，點出《詩報》發行的熱絡狀況，而其內容多元，除了「騷壇消息」一欄報告各吟社的動態之外，主要刊載全臺詩社成員的擊鉢吟作品，魏潤庵在〈詩報發刊詞〉提到：

改隸以還，臺灣漢學之所以維持者為詩，道德者所賴以維持幾分者，亦惟詩。……臺灣詩界之漸盛，別非出於在上者之獎勵，良由漢詩為物，有至味存，天下之口，嗜好同似，決不因洋菜館之盛行，歲費中國料理山海珍肴。¹¹

振詩學、維繫漢文文化成為雜誌刊行的主要目標，因此，有別於新文學的嚴肅、使命感與批判性，古典文學所承載的是日常生活議題的實踐，臺灣傳統文人的聯吟內容，題材包羅萬象，就《詩報》而論，除了風月吟詠、節慶祝賀等生活瑣事與風俗雅致之閒情外，亦在其枝微末節之中包含了臺灣當時的社會觀察與文化特色，其編輯部所刊登之徵稿廣告聲明：「望學界諸公，輪扶大雅，常惠大著，以為指針。但礙及政治之文章，恕不刊登」¹²，此點出《詩報》的內容取向，並非針對政治、殖民、日本政府做出批判性辯論，漢文在此扮演著文學社會化的功能，或許，這也是《詩報》能在日治時期臺灣報紙漢文欄全面廢除後，還能繼續發行的原因之一¹³。

承上所述《詩報》做為日治時期發行最久的漢文刊物，兼具全臺古典漢詩的發展場域之一，其所包含的詩社、詩題、刊載內容非單一向度，深具其廣度與多元性，然而，臺灣文學界對於一九三〇年代的期刊報紙研究，多聚焦於《風月報》及《三六九小報》，關注古典傳統文人書寫中的通俗性、現代性等面向，對於日治時期發行最久的《詩報》研究尚屬闕如，仍待更多研究者投入。因此，若我們要觀察臺灣日治時期傳統文人書寫中的女性形象，就《詩報》的歷史性與議題性而言，應是一值得參考的文本對象。

目前對於《詩報》的相關論述有柯喬文〈基隆漢詩的在地言說：《詩報》及其相關書寫〉¹⁴一文，柯喬文透過《詩報》對其中刊載的漢詩進行閱讀討論，從地域性來開展詩作中展現的「基隆」意象，對於《詩報》的文本特色與歷史意義極具參考價值。另外，黃美娥在〈實踐與轉化：日治時代臺灣傳統詩社的現代性經驗〉一文中，闡述傳統文人因

市文獻委員會：《基隆市志人物篇》（基隆：基隆市文獻委員會，1960 年），頁 24。

6 蔡清揚為「大同吟社」社員。

7 張曹朝瑞為「大同吟社」社員。

8 《詩報》發行人為周石輝，地址為桃園郡桃園街桃園字中南一〇四番地，印刷所為振合印刷所，印刷人為藍萬城，第 45 期（1932.10）時改由仁華活版所印刷，印刷人為張朝瑞，第 47 期（1932.11.18）則遷址基隆市旭町二丁目四十番地，由蔡清揚發行，印刷所為李建益印刷所，印刷人為張朝瑞，第 70 期（1933.11.15）則又移址基隆市福德町一丁目二五番地，發行人及印刷人皆為張曹朝瑞，印刷所為仁華活版所，爾後至 319 期（1944.9.5）皆未再改變。

9 周石輝自述轉移經營是由於「忽患神經衰弱重症」之故。周石輝，〈詩報發刊十週年回顧談〉，《詩報》第 241 期（1941 年 2 月 4 日），頁 13。

10 尤人鳳，〈祝詩報發刊十週年紀念〉，《詩報》第 239 期（1941 年 1 月 1 日），頁 24。

11 魏潤庵，〈詩報發刊詞〉，《詩報》創刊號，1930.10.30，頁 2。詩報於創刊號共收錄三篇發刊詞，除魏文之外，另有鄭香秋、邱筱園撰寫。魏潤庵為何會寫發刊詞，據其文所言，乃由發行人周石輝邀稿。筆者以為，邀稿有其代表意義，除去私交情感，魏當時為推行擊鉢吟之大家，有其贈言，得以增加《詩報》的重要性與價值。

12 詩報編輯部，〈懇望惠稿〉，《詩報》創刊號（1930 年 10 月 30 日），頁 2。

13 1937 年 4 月 1 日，日本政府為推行皇民化運動，禁止使用漢文，並且全面廢止報紙漢文欄，然並非全部雜誌都遭到停刊，《風月報》、《詩報》、《孔教報》、《崇聖道德報》都是報紙漢文欄廢止後刊行的漢文刊物。

14 柯喬文，〈基隆漢詩的在地言說：《詩報》及其相關書寫〉，頁 161-200。

感受日本及西方的現代化所帶來之文化危機，故凝聚新漢文想像共同體的共識，並且吸取現代性的美學體驗，進行新題詩創作，行文以《漢文臺灣日日新報》及《詩報》中的詩題與內容進行分析，由詩社對於新式器物的歌詠，以及各類身體 事的展示，開展傳統社群的現代性體驗¹⁵，黃教授的研究觀點對本文甚有裨益。

立於前行研究基礎之上，筆者試圖再衍論另一思考面向，嘗試以女體想像與女性形象的研究視角切入文本，冀以豐富《詩報》的意義網路。本文首先從「視覺審美」角度探究古典漢詩 通過女性的「身體美感」與「妝扮美學」由「裸體」、「乳峰」、「斷髮」、「洋裝女」……等詩題及詩作，梳理傳統文人如何在公開的文學傳播媒體上，對女性身體乃至妝扮進行集體文化想像，其後隱含何種觀看標準與文化期待？其次，除了對女體外貌的描繪之外，對於女性想像的另一書寫層面，體現在女性職業的描繪上，嘗試以職業新女性的議題進行討論，思辨女性社會身份的變化，耙梳傳統文人站在何種認同位置發聲？是認同男性職業還是認同女性身份？最後，《詩報》所處的歷史氛圍與感覺結構，如何藉由古典漢詩構築文化想像？而此文化想像是否能與東亞銜接、對話？亦是本文所要關照的部份。

二、視覺審美：傳統文人書寫中的女體想像

以下筆者試圖從傳統文人對於女性外在形象的描繪著眼，從「身體美感」與「妝扮美學」兩面向開展研究進程，探究傳統文人如何觀看女性、凝視女性，當中是否隱含男性的主觀意識？或許透露集體文化的價值判斷？女性從展現身體的主體位置，轉為被書寫的客體位置，「女性形象」是基於女性自身的理想樣貌？還是呼應男性的擇偶條件？從中思辨臺灣社會中的性別文化空間。

（一）身體美感：裸體、乳峰、美人腳

女性的身體結構往往隱含著性徵與生殖功能之特色，兩性對於生理結構的差異、改變、修飾，造就性別期待的想像，以及文化審美的討論，「女性身體」既是主體，也是客體；既主動地展示體態，亦被動地被觀看書寫。中國南朝宮體詩¹⁶的吟詠，已不乏對於女性形象的描摩和女體雕繪，循此脈絡，臺灣傳統文人對女性身體的描述及相關詩作，在《詩報》上可見「裸體」、「香汗」、「歌唇」、「臀」、「乳峰」、「美人腳」……等詩題¹⁷，將各個女性身體部位做為詠物詩的題目，延續宮體詩對於題材的擇選，但不以艷情為目的，這些詩題除了增加傳統文人的詩題觸角，其內容也涉及對女性身體特徵的想像與評價，同時傳達日治時期台灣的審美觀念與對女性的理想標準。

例如「高雄詩會」擊鉢錄作課題〈裸體美人〉，社員陳春林、洪耕南皆描寫女性體態與藝術繪畫關係：

甘願獻身的，臨風出浴朝，偷窺防越禮，不著轉生嬌，豔體詩誰作，芳蹤筆好描，吳宮西子比，真個為銷魂。（陳春林）¹⁸

輕盈體態嬌，不掛一絲條，玉潤非施粉，桃花自帶潮，乳峰雙突聳，屁股幾招搖，隱約銷魂處，難堪彩筆描。（洪耕南）¹⁹

陳春林以「西子」（西施）與「銷魂」二詞點出對裸體美人的讚歎，洪耕南則是透過具體的「輕盈」、「玉潤」、「乳峰」、「屁股」等特徵，描寫女性肌膚的滑潤美麗，二者皆透過「描」字，傳達裸體美人與繪畫藝術的關係。次如「聚星詩學研究會」所吟詠之〈裸體美人〉，涵卿作有：

閨中婦女不知羞，脫盡衣衫倚畫樓。回憶小憐當日事，橫陳玉體表風流。（涵卿）²⁰

15 黃美娥，〈實踐與轉化：日治時代臺灣傳統詩社的現代性經驗〉，《重層現代性鏡像》（臺北：麥田出版社，2004年），頁143-181。

16 「宮體詩」指中國南朝的側艷詩，狹義來說專描寫女性，從宮廷佳麗到娼妓佳人，表現了當時的婦女形象，廣義而論，則是指以輕柔細膩的寫作手法，描寫貴族生活的記遊宴詩、詠節候詩、寫風景及詠物詩。請參照林文月，〈南朝宮體詩研究〉15，1966.6。

17 《詩報》中與女性身體相關之擊鉢創作，計有「乳峰」、「香汗」、「處女」、「歌唇」、「臀」、「美人腳」……等相關詩題，本文以出現次數較多，並且具有代表性、指涉性強之議題做為分析物件，其相關篇目可參照附錄表2：「詩報之「女性形象」詩題」之整理。

18 陳春林，〈裸體美人〉，《詩報》第133期（1936年7月16日），頁18。

19 洪耕南，〈裸體美人〉，《詩報》第133期（1936年7月16日），頁18。

20 涵卿，〈裸體美人〉，《詩報》第172期（1938年3月6日），頁8。

詩作前兩句點題，說明裸體美人與畫樓之關係，和先前「高雄詩會」談到裸體美人的彩筆描繪具有相同指涉，然與前述書寫女性體態優美之詩作不同處為，涵卿以「不知羞」三字表明身體裸露對傳統禮教的衝擊。然而，我們要問的是，「裸體美人」的「美人」指的是何種女性角色？是傳統女性、藝旦，還是模特兒？在詩作中並未點明對象，然由日治時期臺灣保守風氣來說，應是後兩者可能性較大，雖然繪畫藝術並非能統稱一般社會的女性形象，但我們仍可從對身體聯吟的書寫，得知傳統文人對肉體美的評價，聚焦於「玉骨冰肌」、「輕盈柳腰」²¹之感，此亦為對理想女性體態的投射。另，〈裸體美人〉的課題書寫，並非只是聯吟趣味的單向創作，「裸體」一詞象徵從西方傳入的文化風氣，在《臺灣日日新報》上可見幾篇相關報導²²，除讚揚裸體美感之外，亦有現代性的文明意涵，強調身體的自由與解放，此皆傳達現代的身體觀與傳統價值觀互涉交織的狀況。

除了裸體以外，《詩報》中亦有其他對女性身體的聯吟創作，如有「培文書簡」作〈乳峰〉課題，黃栽培云：

突屹雞頭兩兩奇，輕羅遮就恨難窺，何當哺育孩提日，得見雲開岫出時。(黃栽培)²³

女性的乳房同時具有情慾與生育兩種指涉，是男性與女性生理特徵的差異之一，詩作中談到乳房的獨特，以及所生發的窺視與好奇心態，但其重要的功能在於哺育後代，傳統文人在公開場域談論女性身體，延伸集體的性別想像，然針對女性性徵的吟詩，除了描繪乳房的美好之外，重點仍不脫女性孕育後代的角色。

另外，還有「柏社同意吟會」擊鉢課題〈美人腳〉，也是將女性身體特徵作為創作對象，喬才與曉峰分別作有：

歐西色相上珍奇，不羨金蓮緩步遲，豈但賽跑稱健足，善於跳舞即蛾眉。(喬才)²⁴

纏足誰云綽約姿，宵娘新樣信堪嗤，看花又怕蒼苔滑，玉筍如今不入時。(曉峰)²⁵

二詩內容皆提及「纏足」於今不合時之感，臺灣女性纏足的風氣是在中國女性遷臺後傳入，日治時期總督府的治臺策略以現代化為導向，革新傳統的舊文化，宣導纏足有害身心，危害生命，並於1900年成立放足組織，1911年後改由女性相率推動，婦女組成的放足團體逐漸成為運動主體，加上總督府借學校灌輸放足觀念，1915年後放足運動如火如荼的展開²⁶。誠然，日本政府推動放足運動除了移風易俗目的之外，亦欲藉此擴大臺灣女性從事經濟活動的機會，此也帶來女性形象的改變，「三寸金蓮」作為女性足部的審美標準已漸次轉移，反而是追求自然健康的肉體美，除了可探見價值觀的轉移外，亦可觀察臺灣文化的變遷。

(二) 妝扮美學：斷髮、洋裝、跳舞襪

傳統文人對女性形象的評價，不僅呈顯在體態美儀上，對於女性的服飾妝扮亦有許多關注，舉其要者有：「斷髮」、「燙髮」、「洋裝」、「跳舞襪」……等詩題的創作，此些外在的表徵與裝扮，除了呈顯女性美之外，傳統文人又是從何角度進行書寫？此也耐人尋味。

女性的頭髮有視覺展示的效果，其指涉著性格、宗教、欲望、消費等多重文化意涵，「陶社（關西支部）」曾以〈毛斷女〉詩題進行創作，「毛斷」一詞具有臺語諧音，並和英文「Modern」發音相近，除了指短髮造型以外，也傳達短髮是種西方傳入之流行風潮，如子春、子華作有：

滿清雄髮民多死，今日環球髮盡殲，夢醒女兒頭腦變，平權氣象兆先占。(子春)²⁷

風潮中毒日侵漸，主唱同權戀愛兼，桃臉柳眉才詠絮，自由那復顧身嚴。(子華)²⁸

21 《詩報》第172期（1938年3月6日），頁8。

22 《臺灣日日新報》刊有：〈裸體西洋之風氣〉（1926.4.16）、〈裸體主義〉（1934.7.1）、〈理想的肉體美〉（1940.7.14）、〈裸體生活禮讚（上）〉（1935.8.11）、〈裸體生活禮讚（下）〉（1935.8.13）

23 黃栽培，〈乳峰〉，《詩報》第180期（1938年7月4日），頁16。

24 喬才，〈美人腳〉，《詩報》第229期（1940年8月1日），頁11。

25 曉峰，〈美人腳〉，《詩報》第229期（1940年8月1日），頁11。

26 游鑑明，《日據時期臺灣的職業婦女》（臺北：師範大學歷史所博士論文，1995年），頁14-15。

27 子春，〈毛斷女〉，《詩報》第9期（1931年4月2日），頁9。

28 子華，〈毛斷女〉，《詩報》第9期（1931年4月2日），頁9。

子春說的「環球」；子華寫的「風潮」皆提到「毛斷」關鍵，為短髮乃歐洲流行文化，一九二〇年代西方年輕女子以短髮造型作為其時尚宣言，傳達活潑訊息，且短髮具有紀律、自制、效率、自主果斷的表徵²⁹，短髮樣式嚴然為時尚的表徵，如是般對身體的自由選擇，也表述了「平權」、「同權」之性別觀的挪移，女性雖然是被書寫的客體，但作為短髮的自由選擇意志，則是一種主體意願的表現。另外，「萬花吟社」擊鉢〈斷髮女〉，也是書寫短髮風潮相關之議題，王蓁蓁云：

休將短髮笑如尼，剪斷烏雲別有姿，儂愛輕盈梳洗便，淡妝端得合時宜。（王蓁蓁）³⁰

王蓁蓁詩作認同短髮裝扮的愜意與合時，展現女子審美的自主性³¹，除此之外，便於梳洗與整理的髮型，也有衛生文明的指稱。然而，並非每位作者都對短髮有正面評價，亦有「梳妝自是舊頭皮」、「虛榮少女趁時潮」³²的聲明出現，認為即使是新潮流但梳妝底下仍是舊腦袋，追求流行只是一種虛榮的行為，由此可見，正反兩種聲音並蓄在《詩報》這個公開的文學場域之中。

此外，對於頭髮的變化，「聚星詩學研究會」也曾針對〈燙髮〉課題進行擊鉢：

美人頭亦有炎涼，為慕歐洲國勢強，卻恨眼睛難化碧，皮毛空解效西方。（文樞）³³

卻厭如蓬髮漸長，持刀剪斷鬢偏忙，買鉗灸罷能華美，那管毛焦腦袋傷。（華袞）³⁴

綜合二首詩意得知，比起短髮，傳統文人對於燙髮的評價是負面大於正面的，燙髮雖為新奇，但燙髮工具鉗的火熱確實使人畏懼，且一味的效法西方，以歐洲文化標準作為新的審美判斷，詩中透漏對此的不滿情緒，認為是一種空想、擬仿，即便是頭髮和歐洲人一樣，但白皮膚與藍眼睛仍非東方人所有，思想的啟蒙與變革才是重要的。

除了髮型之外，傳統文人對於女性外表妝扮的觀察，也表現在「淬礪社」擊鉢〈洋裝女〉的課題上，「洋裝」，顧名思義，指涉從西方（洋派）傳來的服裝，隱含西方的文化特色與審美觀，

異他鳳尾與狐貂，合式輕衫更束腰，莫漫俊兒香見誚，裝成端欲逐時潮。（依人）³⁵

歐風美雨泛時潮，廿紀偏多斷髮嬌，帶束纖腰妝更好，秋波一轉欲魂銷。（文奎）³⁶

從詩作內容得知，洋裝的剪裁合身，曲線盡露，是一種流行時尚服飾，傳統文人視其為一種風潮，從肯定的角度看待服飾的演變，認為洋裝展現女性身體的曲線美，增添女性魅力。除了洋裝，「鷺洲吟社」也曾徵詩題〈薔薇標跳舞襪〉，從絲襪的彈性與美觀來應和歐洲服飾時潮，許成章云：

薔薇標榜辨無訛，燈影如花且踏歌，鞋配高跟真放浪，人非微步也凌波。（許成章）³⁷

跳舞襪應近似於今日絲襪，高跟鞋與絲襪的搭配，具有性感象徵，皆非一般傳統婦女的裝扮，而是跳舞女／摩登女的服飾配件，穿上它有輕盈凌波之感，絲襪所帶給人的視覺效果，具有高雅美觀之意。〈薔薇標跳舞襪〉的詩題，是臺北鷺洲吟社社員李慶賢於《詩報》第109期時，在〈騷壇消息〉上的徵詩，交卷位址為經綸織襪廠（臺北市太平町四ノ二五〇番地），或許，我們可以聯想，此徵詩活動有廣告意義喻於其中，因此詩作大抵收錄正面評價者，更

29 德斯蒙德·莫里斯著、陳信宏譯：《裸女：女體的美麗與哀愁》（臺北：麥田出版，2005年），頁29-33。

30 王蓁蓁，〈斷髮女〉，《詩報》第49期（1932年12月15日），頁10。

31 黃美娥，〈實踐與轉化：日治時代臺灣傳統詩社的現代性經驗〉，頁172。

32 王蓁蓁，〈斷髮女〉，《詩報》第49期（1932年12月15日），頁10。

33 文樞，〈燙髮〉，《詩報》第182期（1938年8月4日），頁6。

34 華袞，〈燙髮〉，《詩報》第182期（1938年8月4日），頁6。

35 依人，〈洋裝女〉，《詩報》第108期（1935年7月1日），頁9。

36 文奎，〈洋裝女〉，《詩報》第108期（1935年7月1日），頁9。

37 許成章，〈薔薇標跳舞襪〉，《詩報》第113期（1935年9月16日），頁15。

進一步說，古典漢詩不單只是一種閑情吟詠，也包含與日常生活的互動性，它除了是文人情感的抒發，也具備了廣告價值的面向，可成為觀察臺灣日治時期文化發展的切入點。

對於女性形象的描繪，大多是從西方文化傳入的刺激生發，「裸體」、「斷髮」、「燙髮」、「洋裝」…等符碼，皆象徵西方時尚風潮，傳統文人所受的儒教觀念，乃至西方文化所帶來的美學標準，兩者之間互相撞擊，在衍生新形象的同時，也與傳統審美觀念相互拉扯。我們從女性身體（裸體、乳峰、美人腳）到時髦裝扮（斷髮、燙髮、洋裝）的課題觸角，探見傳統文人對文化現象的觀察，以及女性形象的建構，「女性」成為審美的客體，繼從圓潤、健康、哺育、曲線、自由，等面向敷衍「女性特質」。

三、職業參與：傳統文人對職業新女性的形象塑造

傳統文人對於女性形象之形塑，除了從身體的、外在的特徵改變描寫之外，女性在社會裡的角色扮演，亦觸及其社會地位與女性形象之變貌，因此，新 / 舊文化之間如何互相滲透、挪移，並且反映在女性地位之轉移，值得我們討論。在 1914 年至 1930 年間，職業婦女的議題漸受到社會矚目，據楊翠研究，一九二〇年代前後世界生發婦運浪潮，英、美、北歐諸國、日本，乃至於朝鮮婦女，同聲共調地進行反傳統運動，日治時期的臺灣社會，自不能免於此風潮，當時《臺灣民報》中有許多關於婦女婚姻、教育、經濟、參政等議題之言論，婦女解放運動也開始出現³⁸，加上婦女團體的相繼成立，雖然，這些團體的成立以民族或階級解放為主要目的，女性解放並非位居首要的目標，但這亦顯示了臺灣社會正面臨著轉型的歷史進程，婦女的解放與生活型態的改變對於傳統的臺灣文化產生了衝擊³⁹。而《詩報》在日治時期亦感染社會脈動，其出現許多職業新女性的相關詩題創作，舉其要者如有：〈女醫〉、〈女車掌〉、〈女律師〉、〈看護女〉、〈女辯護士〉……等聯吟，以下，探究古典漢詩如何透過新女性的文化想像建構臺灣的文明空間。

日治女性的新興職業中，由於日本統治所帶來的現代化醫療，產生了女醫、看護婦等等的女性新興職業，翁聖峰對日治時期的職業婦女觀察裡，提及關於女醫形象的漢詩書寫，傳統文人時常將女醫與觀音菩薩與慈母聯想在一起⁴⁰，如「聚星詩學研究會」作〈女醫〉課題，提到：

輕言細語慰呻吟。爲製良方藥徧尋。如此先生巾幗少。果然慈母一般心。(華袞)⁴¹

懸壺事本是婆心，莫怪紅顏著意深，術擅華陀仁董奉，蒼生拜合似觀音。(涵卿)⁴²

在華袞一詩中，女醫生的形象與特徵，並非就其手術精湛肯定，而是從「輕言細雨」、「慈母」等女性特質肯定其醫生地位，在醫術優良之外，女性的慰問與細心照料，使病人得到關心的母性形象，展演對女醫的溫柔想像。而在涵卿詩作觸及醫生職業的社會地位，具有權威性與景仰性，女性參與行醫提高了傳統文人對女性形象之揣想，甚至以「觀世音」此一神明形象來觀想女醫生，雖然神明多無男女之相，但在臺灣的民間信仰中觀世音菩薩的女性形象非常顯著，其以慈悲心著稱，庇祐婦女順產，因此在民間也將「觀世音」稱作「送子觀音」或是「觀音媽」，而傳統文人將女醫與神祀相連，有其正面的肯定意涵，值得一提的是，就醫生職業的術心而言，傳統文人將女性比擬菩薩，然就醫療的技術而言，則是以「華陀」指稱，「華陀」男性，擁有神乎其技的醫術，且具有「神醫」、「仁心仁術」的形象，在此衍生兩條思考線路，一為「醫生」職業史上，並無女性先例可循，因此以「華陀」此一符碼做扣合，除此之外，是否透露對女性職業的評價，仍依附在以男性作為標準的視野下，值得深思。

而同樣的以往皆由男性主導的法律社群中，日治時期也逐漸有女性參與，「屏東聯吟會」的擊鉢錄作〈女辯護士〉一題：

申韓再世屬嬋娟，雄辯才能新獄先，海國重男輕弱女，天教解放婦人權。(黃嘉源)⁴³

38 楊翠：《日據時期臺灣婦女解放運動：以〈臺灣民報〉為分析場域（1920-1932）》（臺北：時報文化，1993年）。

39 游鑑明，《日據時期臺灣的職業婦女》（臺北：師範大學歷史所博士論文，1995年），頁 7-17。

40 游鑑明，《日據時期臺灣的職業婦女》（臺北：師範大學歷史所博士論文，1995年），頁 10。

41 華袞，〈女醫〉，《詩報》第 188 期（1938 年 11 月 3 日），頁 10。

42 涵卿，〈女醫〉，《詩報》第 188 期（1938 年 11 月 3 日），頁 10。

43 黃嘉源，〈女辯護士〉，《詩報》第 189 期（1938 年 11 月 17 日），頁 10。

申韓指申不害與韓非，是法家的代表，亦是一種紀律與權勢的象徵，詩作以此隱喻女性的發聲與女權的提高，現代性的文明經驗下，女性職業涉及法律，不僅是從廚房到廳堂的身分挪動，就社會地位而言也相對提高，除了替他人發聲，亦是表露女性自主性的增加。然而，女醫與女律師在社會地位上，都屬於「菁英」職業，皆須受高等教育，甚至是出國留學才能接觸的行業。傳統文人對於女性工作現象，是否都採取正面態度，值得我們再進一步觀察討論。

日治時期日本在臺灣推動的現代交通運輸，使得「女車掌」的職業興起，由王了菴與楊子淵評選的〈女車掌〉詩作，可以窺其職業面貌：

洋裝結束貌如花，剪票收錢禮意嘉，莫道車中生意淡，絕勝樓上抱琵琶。～顏其昌，〈女車掌〉

顏其昌在詩作中首句點明女車掌的容貌與體態，除了如花美貌之外，其服裝則穿著流行的洋裝展現曲線，透露女性形象的健美乃應和於車掌職業的需要，在送客往來之間，選擇窈窕少女作為門面，具有招攬生意的意味，而詩作中也提到，莫道生意淡，猶勝抱琵琶，指涉女性應跳脫藝旦賣聲的場域，以自己之力謀生，即便是辛苦，亦能掌有自主權。

但女性參與社會工作，增加收入之後，傳統文人也表達了對價值觀更迭的關心，中壢「以文吟社」也有對〈女車掌〉課題的擊鉢，石富云：

一唱嬌聲到著臨，車中賣票善關心，莫來學作摩登女，競鬥新裝恐惹淫。(石富)⁴⁴

別於「司機」以男性形象為主，「車掌」此一職業本身就充滿對女性的想像與指涉，是因應現代交通所發達起來的行業，雖然日治時期的女車掌基本條件為公學校畢業，但我們從詩作鮮見對於女性受教育進而改變社會地位的肯定，反是著墨「嬌聲」與「關心」等，屬於「女性特質」的姿態表述，對於婦女參與社會勞動，傳統文人憂思的是價值觀的扭曲，呼籲女性勞動固然使得經濟能力提高，但莫朝「摩登女」與「新裝」（案：應指洋裝）步趨，盲目的跟隨流行並非「良家婦女」的舉動，呼籲女性仍要保守自身。

新興職業婦女身上所帶有的時尚感，是一種在報紙媒體中被不斷強化的印象。導致於一般社會大眾產生一種時代正在顛覆的感覺，但實際上已經根深柢固的傳統女性地位並不那麼輕易的就被改變⁴⁵。（職業）新女性興起的同時，社會並非完全採取開放的角度接納文化改變，在《中央日報》上的〈新生活女兒經〉一文中，從衣食住行四面向，總共列出兩百餘句勸文指導新女性的生活習慣，不外乎在建構女性作為「女性」的形象標準：「育兒童，為母職，夫婦睦，長幼親，健為美，屏脂粉，舶來貨，當遠身」⁴⁶，傳達女性作為母職的基本要求，並以自然為美，忌奢華及跟流行，此女兒經與傳統文人的擊鉢聯吟相呼應，呈顯臺灣社會在日治時期，雖然鼓勵女性就業，然就業的前提是不能偏廢母職，雖然婦女勞動提高了社會地位，但就性別價值觀而言，「男主外，女主內」的傳統思維仍與女性形象相互糾結。

四、結論：臺灣古典漢詩與東亞文化想像的對話空間

日治時期，臺灣社會隨著時代變遷，湧生迥異的主流價值觀，塑造流行或理想的女性典型，我們透過對《詩報》的觀察，探見傳統文人對女性想像的挪移，在新／舊文化相互衝擊之下，女性如何被重新拼貼？如何再現？傳統文人筆下的女性形象，雖然帶有被凝視、想像的客體意味，且為片面的、獨立的個案，並非能統稱為全臺女性之形象，然而從這些詩題的文化現象切片，恰好拼湊男性觀點與女性形象的多重意涵，作為思考時代氛圍的一種可能。

傳統文人如何書寫女性形象？本文從兩個面向來討論，其一則是女性的體態容貌，經由對身體、妝扮的審美觀，表達對女性外在的觀感，女性表現柔弱、嬌美、時尚等特質，仍是男性關注的焦點。而對現代性身體觀的改變，以及受西方流行風潮影響下的服裝打扮，揭示文化具有流動性與參照性，女性選擇以西方審美標準為參照對象，隱含了對西方文明的憧憬與想像；傳統文人在既有價值觀下，面對西方文化，則同時採取認同與反思的態度，在二者交會的曖昧之間，找尋新的價值觀。其二透過職業新女性的角度，梳理女性社會地位之變化，女性勞動乃和日本政府推行教育、現代化設施息息相關，而從傳統文人的書寫中，我們可以看到女性雖然走出家庭，但其背後的傳統價值觀（母職）仍

44 石富，〈女車掌〉，《詩報》第110期（1935年8月1日），頁9。

45 翁聖峰，〈日治時期職業婦女題材文學的變遷及女性地位〉，《臺灣學誌》創刊號（2010年4月），頁6。

46 新運總會編訂，〈新生活女兒經〉，《中央日報》（1937年4月2日）。

緊隨，傳統文人一方面讚揚女性勞動；另一方面則是以「男性」角色作為職業優劣的判定標準，並憂心現代化社會底下衍生的消費行為，此與傳統講求節儉、素樸的價值觀略有差異。

傳統文人對於女性的觀察，反應古典漢詩對於日常生活的關注，從女性形象的多元發展，勾勒文化時潮的變化，開展女性視野與生活空間，文化的生產與影響皆非一時一地現象，而是與其他地區價值觀的對話，並且加諸自身的歷史經驗，進而產生的形象塑造，如對身體觀的審視，裸體藝術應是從西方、乃至日本、臺灣等地蔓延的文化風潮，若將三者並置討論，應可深化不同國家對女性身體的美感想像之差異，循此而論，東亞國家如何面對現代性的進入，反映在文學創作上如何影響女性形象的建構，此也是筆者日後繼續關注的面向。

附錄

• 表格 2 「詩報之「女性形象」詩題」

西元	日期	期數	詩社	詩題	頁數	首
1931	昭和 6 年 1 月 19 日	4	大新吟社	傭粧	4	15
1931	昭和 6 年 1 月 19 日	4	韶山吟社	春粧	5	10
1931	昭和 6 年 2 月 17 日	6	(雪庵)	老妓	4	1
1931	昭和 6 年 2 月 17 日	6	彰化初春小集 (一)	斷髮女	6	16
1931	昭和 6 年 2 月 17 日	6	小瀛吟社徵詩	還俗尼	8	10
1931	昭和 6 年 2 月 17 日	6	中壢以文吟社	艷粧	10	17
1931	昭和 6 年 2 月 17 日	6	風岡吟社	無情妓	12	7
1931	昭和 6 年 3 月 16 日	8	(中壢 彭祝堂)	病妓	11	1
1931	昭和 6 年 4 月 2 日	9	陶社 關西支部	毛斷女	9	10
1931	昭和 6 年 4 月 15 日	10	無	啞妓	3	1
1931	昭和 6 年 4 月 15 日	10	鶯社 徵詩	半面美人	8	10
1931	昭和 6 年 6 月 1 日	13	淡北吟社 徵詩	從良妓	10	10
1931	昭和 6 年 6 月 1 日	13	鼓山吟社 擊鉢錄	乳峰	11	6
1931	昭和 6 年 6 月 15 日	14	詞林 (郭茂松)	病妓	2	1
1931	昭和 6 年 6 月 15 日	14	員林 興賢吟社 課題	半面美人	7	10
1931	昭和 6 年 6 月 15 日	14	萬華 高山吟社 擊鉢錄	跳舞女	14	11
1931	昭和 6 年 7 月 15 日	16	鹿港芸香室 課題	曉粧	10	8
1931	昭和 6 年 8 月 1 日	17	西山吟社 擊鉢錄	採薪女	9	13
1931	昭和 6 年 8 月 1 日	17	善化 淡如吟社 徵詩	虛榮女	11	10
1931	昭和 6 年 8 月 1 日	17	鹿港 芸寶吟社 第一期擊鉢錄	跳舞	12	5
1931	昭和 6 年 8 月 15 日	18	竹林吟社 社員家族懇親會擊鉢吟錄	課女讀詩	10	7
1931	昭和 6 年 9 月 1 日	19	觀江吟社	待字妹	10	18
1931	昭和 6 年 11 月 15 日	24	詞林	醉妓	2	1
1932	昭和 7 年 1 月 1 日	27	寒鷗吟社 課題	殘粧	17	16
1932	昭和 7 年 4 月 1 日	32	(葉民)	傭粧	15	1
1932	昭和 7 年 4 月 15 日	33	海國清音 (娟娟女士)	女婢	14	1
1932	昭和 7 年 5 月 1 日	34	陶社 擊鉢錄	老妓	10	13
1932	昭和 7 年 6 月 15 日	37	(黃金聲)	時世粧	4	1
1932	昭和 7 年 7 月 1 日	38	楊梅昭和吟社 徵詩	梅占花魁	10	19
1932	昭和 7 年 7 月 1 日	38	(許庚墻)	艷妓	13	1
1932	昭和 7 年 7 月 1 日	38	(李傳興)	妓女	16	1
1932	昭和 7 年 7 月 1 日	38	無	妓怨	16	1
1932	昭和 7 年 7 月 15 日	39	麻豆綠社 擊鉢錄	醜婦	9	16
1932	昭和 7 年 9 月 15 日	43	寒鷗吟社 課題	啞妓	10	10
1932	昭和 7 年 10 月 15 日	45	綠社 擊鉢吟	織婦	7	12
1932	昭和 7 年 12 月 1 日	48	蔡官嬋	採蓮女	5	1
1932	昭和 7 年 12 月 1 日	48	大新吟社 擊鉢錄	醉妓	9	15
1932	昭和 7 年 12 月 15 日	49	萬花吟社 第一回擊鉢錄	斷髮女	10	15
1933	昭和 8 年 2 月 15 日	53	苑裡蓬山吟社 第六期課題	歌妓	10	18
1933	昭和 8 年 5 月 1 日	58	中壢瑤玉吟社 三週年紀念擊鉢錄	娘子軍	10	17
1933	昭和 8 年 7 月 1 日	62	(蔡官嬋)	短髮偶成	4	1
1933	昭和 8 年 9 月 1 日	66	鰲西吟社 擊鉢吟	詩妓	12	21
1933	昭和 8 年 9 月 15 日	67	屏東讀我書吟會	雞 妓女	11	5
1933	昭和 8 年 11 月 15 日	70	蘭齋小集	斷髮女	9	10
1933	昭和 8 年 11 月 15 日	70	(三水 陳炯南)	醉妓	15	1
1933	昭和 8 年 11 月 15 日	70	(三水 陳炯南)	歌妓	15	1
1933	昭和 8 年 12 月 1 日	71	(臺中散人)	老女歌	4	1
1933	昭和 8 年 12 月 15 日	72	(林坤福)	從良妓	15	1
1934	昭和 9 年 2 月 15 日	75	鼓山吟社 第四期劉靜濤氏徵詩	伏女 授書	7	10
1934	昭和 9 年 7 月 15 日	85	讀我書社 課題	貧女	10	10
1934	昭和 9 年 7 月 15 日	85	北港鄉礪吟社 課題	擇婦	14	10
1934	昭和 9 年 8 月 15 日	87	登雲吟社 課題	貧女	15	33
1934	昭和 9 年 9 月 1 日	88	中壢瑤玉吟社 擊鉢	花狀元	6	14
1934	昭和 9 年 9 月 1 日	88	月津竹音聯吟 課題	跳舞女	6	10
1934	昭和 9 年 9 月 1 日	88	高雄瀨南詩社 擊鉢	雛妓	12	16
1934	昭和 9 年 9 月 1 日	88	學甲吟社 課題	醜婦	12	15
1934	昭和 9 年 10 月 1 日	90	學甲吟社 擊鉢	舞女	15	16
1934	昭和 9 年 10 月 15 日	91	(鼓)山吟社 擊鉢	農婦	6	17
1934	昭和 9 年 11 月 15 日	93	新竹讀我詩社 擊鉢	蓄髮尼	11	16
1934	昭和 9 年 11 月 15 日	93	登雲吟社 擊鉢	送客妓	14	12
1935	昭和 10 年 2 月 15 日	99	栗社	老妓	9	17
1935	昭和 10 年 3 月 15 日	101	東明吟社 擊鉢錄	病妓	14	15
1935	昭和 10 年 5 月 15 日	105	北斗蠶溪吟社 土曜會擊鉢錄	歌妓	8	12
1935	昭和 10 年 5 月 15 日	105	(岱江 荷生)	妓怨	16	1
1935	昭和 10 年 6 月 1 日	106	大治吟社 擊鉢錄	盲歌女	3	14
1935	昭和 10 年 7 月 1 日	108	淬礪社 課題	洋裝女	9	10
1935	昭和 10 年 7 月 1 日	108	登雲吟社 擊鉢	倦繡	12	13
1935	昭和 10 年 8 月 1 日	110	中壢以文吟社 擊鉢	女車掌	9	14
1935	昭和 10 年 8 月 15 日	111	瑤玉吟社 擊鉢	女醫	8	15
1935	昭和 10 年 9 月 15 日	113	麻豆綠社 第六期徵詩共三百四十八首	憶妓	8	10
1935	昭和 10 年 9 月 16 日	113	鷺洲吟社徵詩	薔薇標跳舞襪	15	22
1935	昭和 10 年 1 月 1 日	114	高雄市內 擊鉢會	女律師	5	13

西元	日期	期數	詩社	詩題	頁數	首
1935	昭10年10月1日	114	旗峰吟社 擊鉢	女車掌	7	14
1935	昭10年11月3日	116	曾北聯吟會 課題	美人閱報	10	16
1935	昭10年11月3日	116	仰山銀社 擊鉢	香汗	15	15
1935	昭10年12月15日	119	聚星詩學研究會 擊鉢	女伶	6	18
1935	昭10年12月15日	119	新竹三孝人家 第二期擊鉢	海女	8	16
1936	昭11年1月1日	120	龍江吟會 擊鉢	樵婦	19	10
1936	昭11年2月2日	122	高雄市內詩人聯吟會 擊鉢	處女	4	11
1936	昭11年3月1日	124	大籟吟社 擊鉢	醉妓	18	13
1936	昭11年5月15日	129	(張國珍)	跳舞女	20	1
1936	昭11年7月16日	133	高雄市詩會 擊鉢錄	裸體美人	18	14
1936	昭11年9月17日	137	新竹讀我書社 擊鉢	盲女	3	15
1936	昭11年9月17日	137	登瀛吟社 擊鉢吟錄	海水浴美人	8	9
1936	昭11年11月16日	141	員林興賢吟社 課題	盲女夜唱	3	10
1936	昭11年11月16日	141	溪湖菱香吟社 課題	拔鉄釵	17	15
1937	昭12年1月1日	144	臺東藏拙軒 小集	送芸香女校書回梓	17	10
1937	昭12年1月17日	145	培文書簡 擊鉢	老妓	12	14
1937	昭12年3月21日	149	麻豆綠社 擊鉢	歌唇	16	14
1937	昭12年4月1日	150	讀我書社	女閨	5	18
1937	昭12年5月11日	152	鷺洲吟會月例會擊鉢吟	未嫁女	14	14
1937	昭12年6月8日	154	登瀛吟社 擊鉢	跳舞女	5	13
1937	昭12年6月25日	155	聚星詩學研究會	看護婦	11	14
1937	昭12年10月6日	162	臺南珊社	跳舞女	6	3
1937	昭12年10月6日	162	鷺洲吟社	乳母	9	13
1937	昭12年12月6日	166	待查	女車掌	19	16
1937	昭12年12月19日	167	屏東吟會 擊鉢	農場女	8	15
1937	昭12年12月19日	167	聚星詩學研究會	交換姬	10	16
1938	昭13年1月1日	168	員林興賢吟社 課題	村姑	15	10
1938	昭13年1月1日	168	鷺洲吟社 擊鉢	漁婆	21	14
1938	昭13年3月6日	172	聚星詩學研究會	裸體美人	8	15
1938	昭13年3月18日	173	(黃登彩)	處女	21	1
1938	昭13年4月2日	174	貂山吟社 擊鉢	賣花女	8	10
1938	昭13年4月17日	175	芸雜錄(一)(星東)	歌妓	5	1
1938	昭13年4月17日	175	田中蘭社	採茶女	6	16
1938	昭13年7月4日	180	培文書閣 擊鉢	乳峰	16	14
1938	昭13年7月19日	181	種竹齋 詩略	美人兵操 夾竹桃	18	20
1938	昭13年8月4日	182	聚星詩學研究會	燙髮	6	17
1938	昭13年8月4日	182	仰山吟社 擊鉢	俠妓	14	14
1938	昭13年9月1日	184	聚星詩學研究會	家政	14-15	19
1938	昭13年9月1日	184	耕耘草堂雜抄	臂波韻話	19	1
1938	昭13年9月17日	185	嘉義麗澤吟社 擊鉢錄	賣花女	8	15
1938	昭13年11月3日	188	聚星詩學研究會	女醫	10	19
1938	昭13年11月3日	188	讀我書社	老妓	14	15
1938	昭13年11月17日	189	屏東聯吟會 擊鉢錄	女辯護士	10	13
1939	昭14年2月4日	194	讀我書社	老處女	10	16
1939	昭14年2月19日	195	讀我書社	女弟子	16	19
1939	昭14年5月3日	200	聚星詩學研究會	乳母	9	15
1939	昭14年7月4日	204	菱香唱酬錄	爭妓	15	4
1939	昭14年8月1日	206	(鄒子襄)	洋裝美人	5	1
1939	昭14年8月16日	207	中壢瑤玉吟社 擊鉢	賣菜女	18-19	19
1939	昭14年9月1日	208	萍聚吟社	丐妓	17	15
1939	昭14年11月2日	211	讀我書社	廚娘	4	17
1939	昭14年11月17日	212	讀我書社	賣花女	10	22
1939	昭14年12月12日	214	仰山吟社 擊鉢	老處女	9	13
1939	昭14年12月12日	214	待查	贈麗珠女校書	12	16
1940	昭15年2月18日	218	培文書閣 擊鉢	處女帶	14	15
1940	昭15年4月6日	221	仰喬軒 擊鉢	女車掌	15	14
1940	昭15年5月21日	224	東石石社	村女	16	15
1940	昭15年6月5日	225	朝輝農場 擊鉢	採蔗女	15	14
1940	昭15年7月6日	227	柏社同意吟會	憶妓	12	17
1940	昭15年7月15日	228	鹿港萍礪吟社	電髮女	9	17
1940	昭15年8月1日	229	(東京 黃寬和)	妓女	9	1
1940	昭15年8月1日	229	柏社同意吟會	美人腳	11	17
1940	昭15年9月1日	231	義竹竹音吟社 課題	村女	20-21	18
1940	昭15年9月15日	232	新竹市聯吟會	美人閱報	13	16
1941	昭16年1月1日	239	鹿港萍礪吟社	處女枕	52	14
1941	昭16年4月2日	245	田中蘭社	女詩人	16-17	13
1941	昭16年5月19日	248	東林吟社 第一期課題	媚妓	9	17
1941	昭16年6月4日	249	麻豆綠社	乳峰	10	19
1941	昭16年6月4日	249	竹音吟社 擊鉢	訪妓	15	15
1941	昭16年6月4日	249	田中蘭社 課題	按摩女	18	18
1941	昭16年8月2日	253	草湖荔香室 刻燭催詩錄	種茶女	17	5
1941	昭16年8月2日	253	草湖荔香室 刻燭催詩錄	採茶女	17	5
1941	昭16年11月17日	260	待查	老妓	9	1
1942	昭17年1月1日	263	老處女	老處女	28	13
1942	昭17年3月7日	267	豐原墩山吟社	炊事婦	17	15
1942	昭17年5月20日	272	(高雄 林振輝)	乳峰	6	1
1942	昭17年5月20日	272	大成吟社 課題	產婆	14	12
1942	昭17年7月24日	276	螺溪土曜吟會 擊鉢	女給	20	10
1942	昭17年9月15日	280	樂社同吟會 第二回課題	採茶女	22	19
1942	昭17年11月25日	284	墩山吟社	訪妓	15	12
1942	昭17年12月7日	285	竹風吟會 課題	口脂	10	19
1943	昭18年3月23日	292	竹市朔望吟會	管妓	16	11
1943	昭18年4月23日	294	寶桑吟社 擊鉢錄	美人枕	15	15
1944	昭19年1月19日	309	大成吟社 擊鉢	老妓	19	17
1944	昭19年4月25日	314	竹風吟社	村女	19	17
1944	昭19年6月6日	316	大成吟社 擊鉢	離妓	15	15

參考書目

專書

- 詩報社，《詩報》1-319，基隆，1930-1944。（龍文出版社影印本，《詩報》1-319，2007）
- 基隆市文獻委員會：《基隆市志人物篇》（基隆：基隆市文獻委員會，1960年）。
- 楊翠：《日據時期臺灣婦女解放運動：以《臺灣民報》為分析場域（1920-1932）》（臺北：時報文化，1993年）。
- 基隆市文化中心編印：《基隆第一・人物篇》（基隆：基隆市立文化中心，2004年）。
- 黃美娥：《重層現代性鏡像》（臺北：麥田出版社，2004年）。
- 德斯蒙德・莫里斯著、陳信宏譯：《裸女：女體的美麗與哀愁》（臺北：麥田出版，2005）。

單篇論文

- 翁聖峰，〈日治時期臺灣「女車掌」文學與文化書寫〉，《文史臺灣學報》（2009年11月），頁207-246。
- 翁聖峰，〈日治時期職業婦女題材文學的變遷及女性地位〉，《臺灣學誌》創刊號（2010年4月），頁1-31。
- 柯喬文，〈基隆漢詩的在地言說：《詩報》及其相關書寫〉，《中正大學中文學術年刊》第12期（2008年12月），頁161-200。
- 李玉嵐，〈日治時期臺灣傳統文人的女性觀〉，《臺灣史研究》第16卷第1期（2009年3月），頁87-129。

學位論文

- 游鑑明，《日據時期臺灣的職業婦女》（臺北：師範大學歷史所博士論文，1995年）。
- 張志樺，《情慾消費於日本殖民下所呈現之文化與社會意涵：以《三六九小報》與《風月報》為探討文本》（臺南：成功大學臺灣文學研究所碩士論文，2006年）。

其他

- 新運總會編訂，〈新生活女兒經〉，《中央日報》（1937年4月2日）。

夢裡剪燭魂歸遲

——小泉盜泉《盜泉詩稿》中的愛情世界¹——

莊怡文

摘要

小泉盜泉（1867-1908）於1900年來臺，1908年最後一次離臺，並在同年自我結束生命。博學多聞、才華洋溢的他，生命歷程極為戲劇化，作為日本漢文人的他，終生追尋自我理想並盼能受伯樂看重，惜在明治維新後漢學漸衰的日本較難以漢學素養／漢文創作施展抱負，為求事業發展而不斷流徙於日本、臺灣、中國各地。如此流離的生命經驗使他難以與親友、愛戀對象穩定交往，然而終身未娶的他卻留下諸多深情動人的愛情詩作，頗值得進一步探討。本論文擬以「無以為繼的感情旅程」、「若有似無的往日回憶」、「愛情世界的最終姿態」三個個面向剖析其唯一的漢詩創作出版品《盜泉詩稿》，試圖描繪小泉盜泉的愛情世界。

關鍵詞：小泉盜泉、小泉政以、盜泉詩稿、愛情、感情

一、前言

小泉盜泉（1867-1908），本名小泉政以，字子潔，號盜泉，日本奧州盛岡人，是臺灣日治時期來臺日本漢文人群中之一人，共來臺五次，第一次於1900年來臺，最後一次離臺為1908年7月，隔月即於日本仙臺松島自我了結其一生，生命歷程極為戲劇化。他在臺時曾於臺灣日日新報社工作，後任為臺南廳事務囑託、臺北警察本署囑託，最後受時任臺灣民政長官的後藤新平賞識，擔任其幕賓秘書，常因公與後藤新平至中國與日本行旅。小泉盜泉因家貧無法繼續升學，其博學多聞的學識與與驚豔四方的文采多靠自修而來，在臺與館森鴻、伊能嘉矩共同被稱為「臺灣の三變物」²；在神田喜一郎與島田謹二合著的〈關於在臺灣的文學〉³中，兩人極力誇獎小泉盜泉之才華無人能望其項背，「不像初山一般，適合創作幽婉高雅而柔媚的文藝，而是一個博學無匹、才氣縱橫、心境高潔而始終帶著一抹禪意的怪人」，並「擅長裝神弄鬼般詭屈聳牙的文體」，足見小泉盜泉的特殊性與重要性。

日本漢文人在明治維新後西學為上的環境中漸漸失勢，隨著日本國內的社會變遷、教育改革等變動，漢文人多半需要轉換跑道，臺灣作為日本近代的第一個殖民地，便是漢文人尋找新出路的選項之一。在乙未割臺後大量來臺的日人中，小泉盜泉與他們都是屬於具漢學背景但較為失意的一群，然而在個性與詩風上卻是完全迥異。小泉盜泉孤高自許，鮮與人來往，較少出席公開活動，詩作時而奇險僻苦、時而寫實喻世，而數量居高不下的愛情詩作卻又充滿深情感懷與悵然悲愁，頗為值得探討。終其一生，選擇追尋理想與事業，流徙於日本、臺灣、中國各地，難以與親人、朋友、愛戀對象建立長久且親密的關係。然而，終身未娶的小泉盜泉，其感情生活未必一片空白，早年即離家在外的他，盼能在事業上有所成就，然而，生活的不穩定也使得愛情生活難以穩定，理想抱負的未能實現，使他難以給予感情對象更深的承諾，這樣的情感糾結或許就是他愛情詩作特別動人的原因之一。

1 本論文曾於臺灣大學與神戶大學合辦之「東亞的域外體驗與文化接觸」會議宣讀（2012年12月21日），特別感謝緒形康教授與樋口大祐准教授的評論與建議。此外，本論文擷取修改自筆者碩士論文〈在理想的幻滅中尋找生之路——小泉盜泉《盜泉詩稿》研究〉（2012年1月）第三章第三節，相關詳細內容請參看筆者碩士論文（國家圖書館臺灣博碩士論文網 <http://ndltd.ncl.edu.tw> 可下載）。

2 小觀子，〈臺灣の三變物〉，《臺灣日日新報》第2480號第三版，1906年8月5日（明治39年）。

3 神田喜一郎、島田謹二合著，張文薰翻譯，涂翠花校譯，〈關於在臺灣的文學〉，《日治時期臺灣文藝評論集》（雜誌篇）第三冊（臺南：國家臺灣文學館籌備處，2006），頁93-94。日文原稿於1940年10月（昭和15年）完稿，原刊於《愛書》14，1941年5月10日，王惠珍、橋本恭子校訂。

《盜泉詩稿》是小泉盜泉過世後，由館森鴻與小泉之胞弟小泉政忠共同整理輯錄而成，根據其生前已訂定之詩稿命題體例的 12 卷詩冊，集為《盜泉詩稿》⁴。以下針對《盜泉詩稿》中與愛情相關的詩作進行簡要整理：

表一、《盜泉詩稿》中愛情相關詩作之整理表

詩集	年代	年紀	數量	詩題
卷二・北游吟草	1895-1899	28--32 歲	4 (6)	失題 (1896・29 歲) 七夕 (1897・30 歲) 回頭曲 (1897・30 歲) 不寐 (1899・32 歲)
卷三・南游存稿	1900	33 歲	4 (9)	酬貺 寄題聽松閣 八月二日星夕也寓齋獨坐觸景偶題 小四愁
卷四・赤奮若集	1901	34 歲	2 (6)	憶梅 落花
卷五・攝提集	1902	35 歲	1 (1)	都中詠柳
卷六・單閼集	1903	36 歲	2 (9)	新秋 紅豆
卷七・執徐集	1904	37 歲	2 (2)	鵲橋吟 眼兒媚暮秋京中 (詞)

註：「同題組詩」在數量上計為一首。「數量」一欄括號內的數字表示的是，將同題組詩視為多首後再進行統計的總數。

小泉盜泉詩作內容多充滿重層複雜性，故在歸納所謂「愛情相關詩作」時不免流於主觀，為求論述之條理性與邏輯性，此處的分類標準從嚴，僅將最為相關且重要的詩作條列於表一，須補充的是，《盜泉詩稿》中的廣義「愛情相關詩作」數量多於以上所列之詩。

第一首明顯具有愛情氛圍的詩作為 29 歲所作的〈失題〉，在其於日本北海道工作與剛來臺灣之際，與愛情相關的詩作數量頗多，可見其在工作變動時，心中特別掛念著感情對象，也由於生活的不安定與距離的拉遠，使得小泉盜泉心中情思更為深切、洶湧。幾首情詩多半描寫分離之苦、思念之悶，少見歡愉的戀愛詩，隨著年歲的增長，小泉盜泉似乎更能接受現實的殘酷，且此類相思之作亦逐漸減少。以下以「無以為繼的感情旅程」、「若有似無的往日回憶」、「愛情世界的最終姿態」三個面向簡析其詩作。

二、無以為繼的感情旅程

早年因為工作變動而流離四方的小泉盜泉，一直無法擁有穩定的感情生活。自小家貧必須承擔家計，無法繼續升學，也無法選擇自由的人生⁵，穩定的薪水對於小泉一家非常重要。但此時適逢日本新舊變革年代，自小學習中國文學與文化並傾心於此的他，無法再以此仕進，然而其個性又較難放下身段改變自己、轉換跑道，事業上的發展更顯困難。懷抱遠大理想的他，渴望能以己身才能回報國家社會，然而明治維新後的日本社會，傳統漢文人已漸從國家統治中心退下，取而代之的是擁有新式教育背景、懂得西學的知識份子，於是他的宦途更為顛簸。事業上的多番變動為原本就愛鑽牛角尖、多負面思考的他增添許多愁思，原以為若能早日顯達，便能使家人過好日子，自己也才有資格擁有穩定感情歸宿，無奈這一切隨著年歲的增加與社會的快速變遷，應是更難以達成了。

因此，早年不斷追尋成功機會的小泉盜泉，錯失了許多次的感情機會，而有了機會時卻又優柔寡斷，在事業與愛情間躊躇猶豫。若說是事業野心拖慢了感情進度，不如說是事業理想過於遠大而無法達成，使他的感情旅程始終無以為繼：

4 1914 年 4 月 1 日印刷，4 月 4 日於日本東京發行，編輯者與發行人皆為本莊堅宏，印刷者為仙葉元太郎，印刷所為秀英舍第一工場。本書主要由太華高橋與秋水濱名兩位先生進行校定，並附有後藤新平所寫的〈序〉與東城濱名寬祐所撰之〈小泉盜泉傳〉。關於小泉盜泉簡要生平動態與《盜泉詩稿》內容，可參考文後附錄一、附錄二。

5 無法選擇自由人生的原因，一來是家庭經濟問題所困，二來是自身思想所限，其極力盼能在漢學沒落的時刻以漢學專長受重用，而不（主動）尋找其他出路，筆者認為這即是他生命發展的兩大限制。

死前難破是牢愁，情累世緣天所囚。直使名山屬芳草，何由宦海有浮漚。
麻幘抱影終猜夜，米價關心早感秋。如問半年飛鳥意，臨風好唱莫登樓。
(〈單闕集·新秋〉，頁 50-51，1903)

此為〈新秋〉組詩八首中的第一首，寫於 1903 年秋天，是時小泉盜泉 36 歲，距離 1902 年第二次來臺時，已在臺度過一年多的時光。小泉盜泉心中的憂愁就像牢愁般難以排解，對一段感情、一個人的執著如同生生世世的因果循環，他無法進一步把握而努力善終、也無法退一步放下而得到自由，一切的一切都囚住了他。心中雖然有喜歡的人，但是怎料「宦海有浮漚」，自己的宦官生活漂浮不定、困難重重，自然也無心維繫這段感情了，在無盡的夜裡只能翻來覆去不斷猜想。「臨風好唱莫登樓」，早知如此何必當初呢？到了外地發展卻無法施展事業上的抱負與理想，在異地不斷思鄉，也面臨生活上更大的失落與低潮，錯失了愛情、事業也未成功，魚與熊掌都失去了。

在〈小四愁〉中，他表現了他與情感對象形同陌路的惆悵感：

解道登樓萬里愁，春如水處月如舟。蕊珠風露蚌珠淚，碧海青天各自流。

別夢細占無賴月，一拈誰護可憐紅。碧雲搖落美人國，香草女蘿秋自風。
(《南游存稿》，頁 40，1900)

以上是〈小四愁〉組詩四首中的第一首與第三首。第一首開頭流露出思鄉的氛圍，從接下來要談到的幾首詩，我們可以根據詩作內容、數量、寫作時間等推測，小泉盜泉應該有個一直令他念念不忘的初戀情人待在他的故鄉岩手縣，因此他的一些思鄉詩作也常參雜一些愛情元素於其中，也因此，其「為了求取事業成功而流離於各地」但又「始終無法功成名就、衣錦還鄉」的悔恨心情更為複雜。「碧海」、「青天」表達兩人之間的遙遠空間距離，「香草」、「女蘿」分別意指忠貞的賢臣（比喻自己對國家的忠誠且暗喻自己頗具才德）與他所喜愛的女子，兩人最終是「各自流」、「秋自風」，各走各的路。

即使他理解其感情上無以為繼的原因，但是思念依舊濃重，難以痛定思痛、改變想法、重新開始。在〈鵲橋吟〉中，他以牛郎織女的故事來抒發自己思念之愁緒：

妾望君時雲自浮，君思妾處星空流。如教薄命可消受，敢怨良時難自由。
銀浦盈盈夜鵲噪，白榆歷歷罡風愁。相關總似夢迂闊，十二萬年秋又秋。
(〈執徐集·鵲橋吟〉，頁 56，1904)

詩作中的「妾」與「君」正互相思念著，「如教薄命可消受，敢怨良時難自由」，若說無法相聚是因為生來薄命，那麼小泉只得接受，然而思念女方的心卻自此困囚於此不得自由，這兩句表達了小泉盜泉的身不由己。心中愁緒依舊，總夢些不切實際的夢，但歲歲年年仍舊這樣地過，秋天過了，接著還是下一個秋天。詩題名為「鵲橋吟」，但卻不見男方與牛郎織女一樣得以每年會面，可見這段無以為繼的感情，是真的無法再繼續了。

為何無法再繼續了呢？除了兩方距離遙遠之外，我們可以試著從〈落花〉組詩四首之第三首得到可能的答案：

萬綠叢中得信遲，一番無力拒封姨。香銷南國應同命，蜨嫁東風不及期。
淺暈苔痕春只夢，微稜桂魄夜如眉。酷憐轉眼芳塵歇，野土鴛鴦燒瓦時⁶。
(〈赤奮若集·落花〉組詩四首之第三首，頁 41-42，1901)

6 溫庭筠〈懊惱曲〉：「野土千年怨不平，至今燒作鴛鴦瓦。」此詩感懷一對青年男女真摯相戀、歷經挫折、阻撓仍至死不渝的感情。最後一句意指，隨著歲月流逝，不管最後結果為何，野土會將一切記錄下來，永世流傳。清聖祖御定，《全唐詩》（臺北：文史哲出版社，民國 67 年 12 月），第九冊，卷 576，溫庭筠二，頁 6707。

小泉盜泉得知女子的消息，女子的家人欲安排她與他人締結婚姻，但女子心中不願意接受（「一番無力拒封姨」），想要和小泉共作同命夫妻（「香銷南國應同命」）。小泉感到十分悲痛，但面對現實只得屈服，他認為雖然兩人無法結合，但隨著時光的流轉，兩人堅貞的感情終究會被歲月記錄下來。「蝶」指得是蝴蝶。「野土鴛鴦燒瓦時」典出溫庭筠〈懊惱曲〉，全詩感懷一對年輕男女真摯相戀卻波折不斷，兩人仍不改其心，而此衷心終究會被歲月記載下來。

對於當時的女子而言，等待一個不知歸期的男子是不智的舉動，家長也不允許女子年紀漸長卻仍苦守一個不知是否願意許下承諾的男子，小泉盜泉對於自身生命的方向、事業的發展全都還在摸索中，對於感情際遇的如此造化，除了能怪環境的捉弄外，恐怕還是得歸根於自己當時的想法。

三、若有似無的往日回憶

1895 年小泉盜泉第一次離開家鄉到了北海道工作，從此時開始，小泉盜泉愛情相關的詩作驟增，也許是年歲長了，也許是到陌生環境充滿了不安。同樣的，1900 年前後來到臺灣時，此類愛情相關詩作依舊有增無減，顯見小泉盜泉在環境變動時，心中特別放不下執著，日思夜思他心中思慕的人。1896 年，小泉盜泉 29 歲所寫的〈失題〉組詩（共三首）表達了他心中對於情人的離愁與思念：

楚吟腸斷望歸樓，夜夜啼烏夜夜秋。八九人生不如意，十三兒女未知愁。
羅幃自動風通簾，玉笛遙傳月掛鉤。星露滿簾人小立，柳疏蘋老送江流。

媚嫵流雲過綺櫺，笙篴何處水連空。美人南國杜蘭信，古曲西洲烏柏風。
鈴語應猜香夢穩，鏡華詎似別秋濃。相思一夜汀蓮老，月落煙波寂寞中。

一枕清愁憶洛神，西樓斷夢苦難真。消沈密約珍珠字，彷彿遺蹤羅襪塵。
墜露無聲空似玉，流螢何處幻如燐。曲闌干外徒招恨，江上峰青不見人。
（《北遊吟草》，頁 17，1896）

第一首將思鄉與思念情人的氛圍融雜在一起了，小泉自言以前年紀尚小不知愁，年長後才知愁滋味，站在簾前看著滿天星斗，遠望當年訣別的地方，只剩江流依舊流著。1895 年小泉盜泉第一次離家至北海道工作，由此情此景此時可見他於此詩的思念對象，應該是在他故鄉的女孩。這年是他來到北海道的第二年，也年近而立之年了，夜晚觀星徒增離愁，現實生活中皆物是人非。第二首則運用了「美人南國」⁷、「古曲西洲」⁸兩典故來表達對情人的苦苦思念，美人恐怕不曉得其感情對象濃厚的思念之情，但他卻「相思一夜汀蓮老」，遠在他鄉的他只能與寂寞作伴了。第三首整首詩化用曹植〈洛神賦〉⁹，將夜晚不寐整夜思念的感情表現出來，小泉盜泉想起與女子過去的感情與分別的傷心地，感嘆那些美好終究無法實現，看著過往的信件，過去彷彿歷歷在目；如今，他只能站在曲欄杆外徒增惆悵，因為女子已不在身邊。小泉盜泉於此，已是全心投入感情，而因此有了更深的離愁與傷懷。

在他來到臺灣的第一年時所寫下的〈酬貺〉，也可發現相同情調：

愛而不見我所思，有美一人天之涯。天涯登樓賦就早，夢裡剪燭魂歸遲。
愁聞夜雨豈歌吹，遠管垂楊唯別離。東望側身傷春地，美人贈我白接䟽。
（〈南游存稿·酬貺〉，頁 35，1900）

7 李白〈古風·美人出南國〉：「美人出南國，灼灼芙蓉姿。皓齒終不發，芳心空自持。由來紫宮女，共妬青蛾眉。歸去瀟湘沚，沈吟何足悲。」清聖祖御定，《全唐詩》（臺北：文史哲出版社，民國 67 年 12 月），第三冊，卷 161，李白一，頁 1678。

8 〈西洲曲〉為南朝樂府民歌。詩中描寫了一位少女從初春到深秋，從現實到夢境，對愛人的苦苦思念，洋溢着濃厚的生活氣息和鮮明的感情色彩。以上參考陳徐陵編、清吳兆宜原注，《玉臺新詠箋注》（臺北：漢京文化事業有限公司，出版年不詳），頁 260-261。

9 〈洛神賦〉描寫曹植入朝返回封地途中，偶遇洛水之神，兩相愛慕，終於無成的一段遭遇。舊說曹植曾求婚甄逸女不遂，為曹丕所得，後甄后被讒死，曹植有感於甄后而作，故初名〈感甄賦〉，然此說不足信。另一說認為此賦假託洛神寄寓對君主的思慕，反映衷情不能相通的苦悶，此說較有理。以上參考周啟成等注譯，《新譯昭明文選》（臺北：三民，民國 86 年），第二冊，卷十九，頁 781-790。

小泉盜泉思念的愛人遠在天邊，因為年少時他太早離開家鄉，遠赴異鄉追尋理想，而不得不捨棄這段感情。然而到頭來卻還是不為所重、落拓失意，最後兩人只能在夢裡相見了（「夢裡剪燭魂歸遲」）。美人曾送給他的白色羅草，就是兩人間感情的信物，象徵彼此之間連綿依附、相互扶持的關係，然而現在一切都物是人非了。

小泉盜泉無以為繼的感情際遇成了往後回憶的觸發點，在一個人的夜裡即成為難以擺脫的毒癮，明知不該多想卻又忍不住不斷回憶。經過五、六年後，小泉盜泉此類的詩作漸漸變少，其濃厚的思念已在歲月遞進中成了無可奈何的愁緒：

冷淡風情倍可憐，空山仙子夢魂牽。江城玉笛難消雪，嶺徼郵籤欲帶煙。
素艷何人拜新月，淺愁如霧結諸天。相思為誦西洲曲，聞道春寒劇去年。
（〈赤奮若集·憶梅〉組詩兩首之第二首，頁 41，1901）

依依故柳淡煙凝，饒未十圍人曷勝。養蠟幽房接曉戶，話愁小院傍風燈。
當年張緒神安在，別後劉郎恨轉仍。鴻雪年華身世感，英雄未免泣江陵。
（〈攝提集·都中詠柳〉，頁 46，1902）

第一首〈憶梅〉的「空山仙子夢魂牽」用典於李白〈鳳臺曲〉¹⁰，指其醉酒後夢見美麗的仙子，醒後覺得不捨；「江城玉笛難消雪」用典於李白〈與史中郎欽聽黃鶴樓上吹笛〉¹¹，大意为被貶的官員旅居外地，懷鄉之情濃厚，此時聽到淒涼的〈梅花落〉¹²一曲，雖是五月夏日，卻感到一陣寒意襲來，如身在梅花飄落的冬季一般；〈西洲曲〉¹³則為南朝樂府民歌，呈現女子對愛人的苦苦思念。小泉於此詩表達對於已消失的仙女及其彼此互動之美好的魂牽夢縈，但現在只能憑空相思，「聞道春寒劇去年」表明了這位他所掛念的仙女可能居住在日本，已經來到臺灣的他，聽人說道今年北方春天較寒，他隨即想到的是居住在那裡的仙女愛人。第二首〈都中詠柳〉的「張緒」、「劉郎」、「泣江陵」分別化用三個典故：「張緒」是南朝齊賢臣¹⁴；「劉郎」則典出唐代許渾〈寄房千里博士〉¹⁵，詩作內容寫道男子的戀人已嫁給他的朋友；「泣江陵」則典出杜詩¹⁶，指窮途末路、無路可走的悲苦。此詩最末四句的典故似乎暗示了，小泉為了事業理想，立志作一個用世之臣，然而離家打拼後愛人就另有歸宿了，往事遺恨讓他有了一番感懷，心中充滿了不知該往何走的悲苦情感。

當所有的感情都成了過往回憶，小泉盜泉心中感慨萬千，人生到頭來仍是一場空，若小泉盜泉將心中高遠的理想放下，是否就能使感情之路順遂些呢？往事如煙，此情只能在文字中追憶。

10 李白〈鳳臺曲〉：「嘗聞秦帝女，傳得鳳凰聲。是日逢仙子，當時別有情。人吹綵簫去，天借綠雲迎。曲（一作「心」）在身不返，空餘弄玉名。」清聖祖御定，《全唐詩》（臺北：文史哲出版社，民國 67 年 12 月），第三冊，卷 165，李白五，頁 1710。

11 李白〈與史中郎欽聽黃鶴樓上吹笛〉：「一為遷客去長沙，西望長安不見家。黃鶴樓中吹玉笛，江城五月落梅花。」清聖祖御定，《全唐詩》（臺北：文史哲出版社，民國 67 年 12 月），第三冊，卷 182，李白二十二，頁 1857。

12 〈梅花落〉為漢代樂府之橫吹曲辭，用羌笛吹奏，其曲調流行後世，自南朝至唐代文人，如鮑照、吳均、徐陵、盧照鄰、沈佺期等都有〈梅花落〉歌詞，內容都與梅花有關。宋郭茂倩，《樂府詩集》（臺北：里仁書局，民國 69 年），第一冊，頁 349-352。

13 〈西洲曲〉為南朝樂府民歌。詩中描寫了一位少女從初春到深秋，從現實到夢境，對愛人的苦苦思念，洋溢着濃厚的生活氣息和鮮明的感情色彩。

14 《南齊書》：「張緒，字思曼，吳郡吳人也……緒少知名，清簡寡欲……宋明帝每見緒，輒歎其清淡……緒忘情榮祿，朝野皆貴其風。嘗與客閑言，一生不解作諾……緒口不言利，有財輒散之。清言端坐，或竟日無食。門生見緒飢，為之辨，然未嘗求也。卒時年六十八。」以上參考見據南宋紹興間江南重刊北宋監本影印，《仁壽本二十六史·南齊書》（臺北：成文出版社，民 60 年 10 月），南齊書三十三，列傳第十四，頁 7998-8000。

15 唐代許渾〈寄房千里博士〉：「為報西遊減離恨，阮郎纔去嫁劉郎。」以上參考清聖祖御定，《全唐詩》（臺北：文史哲出版社，民國 67 年 12 月），第八冊，卷 536，許渾九，頁 6127。

16 杜甫〈大歷三年春，白帝城放船出瞿塘峽，久居夔府，將適江陵漂泊，有詩凡四十韻〉：「此生遭聖代，誰分哭窮途。」比喻無路可走的悲苦情懷。杜甫又有詩句「茫然阮籍途，更灑楊朱泣」（〈早發射洪縣南途中作〉），阮籍泣是因為無路可走，楊朱泣是因為走入歧途，皆比喻面對人生道路選擇時的深刻心情。以上參考清聖祖御定，《全唐詩》（臺北：文史哲出版社，民國 67 年 12 月），第四冊，前一首收於卷 232，杜甫十七，頁 2555-2556；後一首收於卷 220，杜甫五，頁 2317。

四、愛情世界的最終姿態

隨著時間一年年的過去，小泉盜泉始終為了事業在外飄盪、無以為家，究竟何故落得這般落拓？〈小四愁〉組詩四首之四，他如是說：

月珠何以報天涯，料合牽蘿只是家。八十七山風雪夕，一燈如夢繡梅花。
(《南游存稿》，頁 40，1900)

小泉盜泉正在艱困的環境中求生存（此時剛從北海道轉至臺灣發展），希望在此地能夠東山再起，而過往如夢，即使兩人之間的變動很多，也希冀彼此都能在心中以堅貞的心態看待。「料合牽蘿只是家」，似乎意指小泉艱困的處境不許他作其他決定¹⁷。

因此，小泉盜泉認為他的變動是由於身不由己，從他寫給弟弟的詩即可窺知，當時他的弟弟小泉政忠在滿州從軍，小泉返家時見到可愛的小姪子，也就是弟弟的小孩，有感而發：「無以成家慚菽水」¹⁸，自己孑然一身未有家庭，因此也無法奉養母親、給予母親優裕的晚年生活。早年為了未有結果的愛情而傷神，中年後又因自己生活的不穩定而擔心母親寡歡，終身未娶的他越鑽牛角尖，越難以走出人生的顛途，整夜失眠成了常態：

不寐聞虛籟，一星臨曉窗。思詩偏病枕，如夢是殘缸。深巷先秋冷，遠鐘帶濕撞。無端愁絕處，栖鳥起雙雙。(〈北遊吟草·不寐〉，頁 30，1899)

他在失眠的夜裡聽遠鐘、看星斗、搖筆為文、愁緒增生，連「栖鳥起雙雙」都能讓他大作文章，可見他多麼在意自己一個人孤獨寂寞的景況，連鳥兒都雙雙對對，徒增心中的惆悵，無能為力的他只能順其自然。

〈八月二日星夕也寓齋獨坐觸景偶題〉(《南游存稿》，頁 59，1900) 重述了他情詩中常見的情人離別之主題，特別的是，雖然和情人分別後斷無音訊，但「河鼓分懸莫懊惱」：

烏鵲南飛月西墜，璇宮機絲若君思。滿目天海萬萬重，暗拈紅冰污霞帔。
豈知流火新秋節，黃姑闌干倍愁絕。星宿海畔有誰來，蒼茫感觸去年別。
寄君雙琳瑯，未見青鳥酬。我今欲經度，濯足絳漢流。匏瓜千金質可保，
河鼓分懸莫懊惱。南極老人鼓瑟時，破鏡上天天未老。相攜明年向蓬島，
托宿麻姑游應好。六銖新衣雲錦裳，步搖珊珊拾瑤草。白榆風動星如雨，
天雞膺膊夜過午。人間不知銀潢闊，黃姑織女水之汜。(底線為筆者自加)

小泉盜泉雖然對於分別感到難過，但他認為到了「南極老人鼓瑟時」兩人就能在天上破鏡重圓了。南極老人指的是壽星，可見這是個遙遠不可期的時刻，但他認為總是有破鏡重圓的一刻，只要天未老，兩人即可相見。不知是因為過多的情感壓力造成小泉盜泉有此不切實際的荒誕想法，還是他真的想開了、想通了而不再對於離別這件事繼續鑽牛角尖了？我們可以從他四年後於東京寫的詞作一探究竟：

扶形弔影影仍寒，敲斷玉闌干。箇中消息，魚沉雁絕，月破河殘。七年夜
雨銷鴻雪，點檢總無端。千般別夢，萬般流幻，幻夢般般。(〈執徐集·眼兒媚·暮秋京中〉，頁 59，1904)

17 此處採「牽蘿補屋」之典故。牽拉羅藤來修補房屋的漏洞，指人處境困難，經濟拮据。清蒲松齡撰《聊齋誌異·卷二·紅玉》：「荷錢誅茅，牽蘿補屋，日以為常。」以上參考《聊齋誌異》（臺北：漢京文化事業有限公司，民國 73 年 4 月）第一冊，頁 276-283。

18 〈執徐集·自京省母仙臺兼兒姪攝影寫照寄家弟在滿州軍〉：「珠海神京既遠，五城北更指天涯。元戎絕域枕戈日，小院深宵燒紙時。無以成家慚菽水，不遑寧處折墳荒。只喜繡襦添柔質，縱得懸弧事可知。」（頁 58，1904）

這首詞是《盜泉詩稿》中僅有兩首詞的其中一首，收錄在《執徐集》（1904）的最末。詞牌「眼兒媚」的由來，根據南宋《古今詞話》一書的記載，來自王安石之子王雱的一首抒發相思之情的詞¹⁹。王雱初見翰林學士龐公之女龐荪即一見鍾情，兩人後來雖結為連理，但龐公與王安石政見不合，加上王雱身體虛弱，最後龐荪奉王安石之命改嫁，嫁給王雱的好友昌王趙顥。據說龐荪再婚之時，王雱病危，彌留中寫下這首詞，不久去世，可見此詞牌背後為一情感糾結的悲劇故事。小泉盜泉仍處在思念中，斷了音訊的女子不知身在何方，七年來小泉依舊思之省之、不得放下，一切如夢，如夢似幻，而他始終走不出這個夢。

胡巨川依此詩認為小泉盜泉在東京曾有過一段戀情²⁰，而依據其生平經歷，其早年在北海道工作時亦常懷念故鄉的某個女孩。可見在小泉盜泉短暫的生命中，雖終身未娶，感情世界卻也豐富萬千，唯多情害了他，雖讓他情思濃厚得以寫出淒美詩篇，卻也讓他走不出感情中的千千結：常常動情，卻又無法在當下把握時機、掌握幸福，離開後卻又放不下的舊情，最後走入相思回憶的死胡同中。

五、結語

本論文探討小泉盜泉《盜泉詩稿》中的愛情世界，長年為遷客的他，自然難以在同一地點與喜歡的對象穩定發展、甚至論及婚嫁，家貧的他必須為了薪水而四處工作，生活顛沛流離。故本文將其愛情世界分為三部分討論：「無以為繼的感情旅程」、「若有似無的往日回憶」、「愛情世界的最終姿態」。小泉因為工作而使得感情發展無以為繼，僅能在回憶中回想過去曾有過的美好，然而多情的他，在面對感情抉擇的當下，選擇了事業，希望能有所作為，而年年理想破滅的他最後又反過頭後悔，若當時選擇的是感情是否就無這麼多折磨？拿不起也放不下的他，最後只能陷入生命痛苦的迴圈中。

附錄一、《盜泉詩稿》各卷簡介表

《盜泉詩稿》之十二卷	地陰	寫作年份	年紀	詩作數量	小泉盜泉去向
卷一・摸壁集		1880-1899	13-33	74（同題組詩計為一首）	1886年起在家鄉之小學擔任教員工作
卷二・北游吟草		1895-1899	29-33	72	至北海道工作
卷三・南游存稿（困敦集）	子	1900	34	27	5月第一次來臺
卷四・赤奮若集	丑	1901	35	14	5月返回日本岩手縣
卷五・攝提集	寅	1902	36	13	3月第二次來臺
卷六・單闕集	卯	1903	37	9	
卷七・執徐集	辰	1904	38	27	10月隨後藤新平入東京
卷八・大荒駱集	巳	1905	39	19	年初第三次來臺，9月隨後藤至中國與朝鮮
卷九・途中雜詩		1905/9	40	29	隨後藤之滿州北京朝鮮而歸
卷十・數畛集	午	1906	41	6	5月第四次來臺，7月赴東京
卷十一・協洽集	未	1907	42	13	4月第五次來臺，5月離臺
卷十二・涪灘集	申	1908	43	2	1月返回東京，8月歸鄉省母，8月30日留下遺書後即不知其蹤

19 王雱《眼兒媚》：「楊柳絲絲弄輕柔，煙縷織成愁，海棠未雨，花先雪，一半春休。而今往事難重省，歸夢遶秦樓。相思只在，丁香枝上，荳蔻梢頭。」以上參考清代沈雄編纂，《古今詞話·詞辨卷上》（上海：上海書店，1987年12月），頁29-30。

20 胡巨川，〈小泉政政及其《盜泉詩稿》析論〉，《日治時期臺灣傳統文學研討會論文集》（臺中：東海大學，2003），頁455。

附錄二、《盜泉詩稿》各卷詩作目錄

《盜泉詩稿》之各卷	寫作年代	詩作
卷一・摸壁集	1880-1899	古壯士歌、雜賦、廚川懷古、白牡丹、秋夜、東墩、夢斷、梅花、哭靜海子、秋思、夜、幽居雜詠、看天下行、二十一初度、春詞、秋日即事、望煙行、偶成、擬古、北禪、秋興、郊行、自嘲、盆梅、春遲、拱默、納涼、山宿、秋思、言懷、吐芳亭、守夜、出門何所見、端午、偶成、得意、枯骨歌、瓶梅、折壁關、清明、仿人、夏日、古風、有客、送別、行路難、詠富嶽、春興、酬貽、歌扇戲題、屬目、寄人、元旦、春日即事、新綠三十韻、妾薄命、長夏山居與野僧相往來、步虛詞、山宿、中秋蘇陵齋中分韻、江行、小住、哭草陰先生、初冬旅次、遊仙詞、歲暮感懷、南堂、魂斷、春夜過故人廢宅、旅次、自嘲、夏日雜興、秋興、秋夕留別。
卷二・北游吟草	1896-1899	旅次、憶家弟、元旦、席上戲醉處翁、紀夢、熊節婦詩、聞訃哭皖山先生、失題、金古筠故宅、蝦夷詠古、秋蓮詞用高青邱吊宮二隊長詩韻、壞劫、中秋、次楊廉夫仿李義山體韻、秋思、唐集、鬼詞、雁門高、歲杪書懷、偶述、有感恭賦、偶成、寒夜月下、寄似、輓城春詞、古別離、龍語、雲物、采蓮曲、放歌、聽雨、夏日、七夕、枕上偶得、重陽、巖頭、秋居雜詠、秋思、二樹、郊夜、寓言、回頭曲、歲暮、送別、哭喪我真人、日本四仙詞、秩父柳坡長華蹊二畫手為余各畫呂真人像用尤西堂印月軒詩韻賦二首分呈、變緩歌、送別、清夢、除夕、雜述、古艷詞、楊柳亭送別、馬鈴薯、赤熊行、和人早春韻、春望、移居偶作、不寐、過神威古潭、送高野竹隱赴上州、送濱名東城徙任金澤、送村上李門之官臺灣、送本莊天賴因尊人喪歸筑後、觀劇、中野天門所贈匕首歌、席上走筆示臥海越山諸人、誌別、雜憶、歲杪、守夜。
卷三・南游存稿（亦名《困敦集》）	1900	盛岡夜發、京中寄懷北海諸友兼遙作別、京中留別、東海道值雨中戲作長句排悶、過西都、神戶客次疊韻、神戶懷古、酬祝、舟中口號、南泛、入臺灣、金子龍江徵宣堂七十壽詞賦寄、呈村上李門、關渡、滬尾廢舍題壁、山形雲林赴官雲林過滬尾席上賦送、寄題聽松閣、失題、八月二日星夕也寓齋獨坐觸景偶題、無題、誌媿、不眠症歌、秋日寄似北海諸友、滬尾留別、鮫人、小四愁、烏島。
卷四・赤奮若集	1901	人日南菜園率賦、憶梅、落花、失題、楊花、列眉山歌、中立堂雜詩、公母渡河、臺北誌別、內渡雜詩、上京途中即事、菊花淵明圖、題阿四書後、無聊。
卷五・攝提集	1902	新年夜雨、出門、都中詠柳、婆羅驛、遠州道、舟下澎湖、開山神社、曾文溪遙祭家弟、臺南所聞、偶題、種婆羅密子歌、中秋雅集席上分韻得歌戲用杜甫詩語成二絕、歲晚懷人。
卷六・單闕集	1903	無題、五月以官事南巡浹月而歸所獲唯有兩首、護國寺避暑、新秋、無題、病間偶得、紅豆、得表妹道家事書、失題。
卷七・執徐集	1904	新正口號、安江五溪徵尊人七十壽詞賦呈、詠史、遊草山、失題、山形雲林中鼠疫或傳不起既而雲林寄似病中諸作仍而囑和乃次其偽傳病起兩首韻卻呈、可憐樹、卻步初山依州見留韻送其之紀州、南菜園率賦、自論、夏日謾吟、華燭吟、新秋夜坐、從軍僧玄秀索詩賦贈、小野半醒為余作小照戲賦似、鵲橋吟、月下栽猿猴蘭戲作、郊行、寄懷來原小蠻從軍在遼東、基隆晚歸、內渡船過雌雄島、神戶晤中村竹涯、都中逢本莊天賴、自京省母仙臺兼見姪攝影寫照寄家弟在滿州軍、都中雜感、京中喜濱名東城歸自滿洲、歲杪雜感、〔菩薩蠻〕內渡舟中作、〔眼兒嬌〕暮秋京中。
卷八・大荒駱集	1905	讀書有感、南旋過內海詠鷗鳥、李蘇泣別圖、有贈、春雨憶鄉、喜晴、郊行、次韻寄題村上李門仁山小墅、題桃花源圖、短古、浴佛、賦得孟夏草木長、觀水嬉、紙魚行、北條時宗、荷花、夏夜追涼、一友為余作照見贈賦此卻報、中元即事。
卷九・途中雜詩	1905/09 始	門司、藝州、入都雜感、將向滿洲字品寄高野竹隱、對馬水道、大連、鞍山店昔征清時我師北進止于此、奉天呈兒玉大將、奉天之戰舊藩主及親故武弁多死之城外揚士屯是家弟苦戰被創處、奉天北陵、昌圖、田庄臺征清時至此旋師、山海關懷古、榆津鐵道所見、天津酒樓題壁、昌黎作、北京客夜、塘沽、旅順東雞冠山北砲臺是露將孔得先科戰死處、安東、平壤、漢城景福宮內松林、釜山夜發、舞子雜詠、再入都感事、馬關春帆樓、言歸、呈棲霞長官、京中除日。
卷十・敦牂集	1906	京中送市村藏雪之北京、稻田南溟有書論以妙理余既賴於言書此二偈卻寄、四月阿廉入京就學不見八年挺然既長適家弟亦以職事來京憶南游握別之日又既七年客中相會忻慰莫名時余去期維近集晤之次率賦誌懷、題加藤雪窗遺稿、題佛出山圖、行路難。
卷十一・協洽集	1907	京中歲旦、偶得、有馬道中、宿函山洗心樓、鳥松閣絕句次韻、擬古、閒愁、對馬水道作北京玉泉山、金閣寺、丁未七月重游滿洲旅中偶得兩絕、戲仿禪家語、村上李門為故山形雲林追徵輓詞賦呈。
卷十二・涪灘集	1908	竹鼓行、別領上人。

參考文獻資料

專書

古籍類（按原著作書朝代排列）

- 〔北宋〕郭茂倩編，《樂府詩集》（臺北：里仁書局，民國 69 年）。
- 〔南朝梁〕蕭子顯撰，《仁壽本二十六史·南齊書》，據南宋紹興間江南重刊北宋監本影印（臺北：成文出版社，民國 60 年 10 月）。
- 〔南朝梁〕蕭統編，周啟成等注譯，《新譯昭明文選》（臺北：三民，民國 86 年）。
- 〔南朝陳〕徐陵編、清代吳兆宜原注，《玉臺新詠箋注》（臺北：漢京文化事業有限公司，出版年不詳）。
- 〔清〕清聖祖御定，《全唐詩》（臺北：文史哲出版社，民國 67 年 12 月），第三、四、八、九冊。
- 〔清〕蒲松齡著，《聊齋誌異》（臺北：漢京文化事業有限公司，民國 73 年 4 月）。
- 〔清〕沈雄編纂，《古今詞話·詞辨卷上》（上海：上海書店，1987 年 12 月）。

現代類（按姓氏筆劃排列）

- 小泉盜泉，《盜泉詩稿》（東京：秀英舍第一工場，1914）。
- 黃英哲主編，甘文芳等著，《日治時期臺灣文藝評論集》（臺南：國家臺灣文學館籌備處，2006）。

單篇論文（按姓氏筆劃排列）

- 胡巨川，〈脫盡恆蹊說盜泉〉，《南臺文化》（高雄：南臺灣文史工作室，2002 年），2002 年第一期。
- 胡巨川，〈小泉政以及其《盜泉詩稿》析論〉，《日治時期臺灣傳統文學研討會論文集》（臺中：東海大學，2003）。
- 莊怡文，〈小泉盜泉〈漢詩之沿革〉的中國文學觀——兼論其在臺傳播之意涵〉，收錄於國立臺灣大學臺灣文學研究所主編，《第八屆全國臺灣文學研究生學術研討會論文集》（臺南：國立臺灣文學館，2011）。
- 謝崇耀，〈小泉盜泉及其漢詩探析〉，《臺北文獻直字》（臺北：臺北市文獻委員會，2007 年 6 月），第 160 期。

電子資源

- 國家圖書館臺灣記憶：http://memory.ncl.edu.tw/tm_cgi/hypage.cgi?HYPAGE=index.hpg
- 行政院文建會臺灣大百科全書：<http://taiwanpedia.culture.tw/web/index>
- 《臺灣日日新報》、《漢文臺灣日日新報》：國立臺灣大學圖書館電子資料庫 <http://www.lib.ntu.edu.tw/resource>
- 日本東京國會圖書館線上館藏：<http://kindai.ndl.go.jp/index.html>

消費者為什麼去夜市？

——基於對士林夜市問卷調查的分析——

藤岡 達磨

導言

在臺灣文化中，夜市有著獨特的地位。從形態上看，夜市屬於一種市場。因此，可把夜市看作一個消費空間，把其中產生的行為當作一種消費行為進行分析。但是，根據社會機能與社會意涵的觀點，夜市不僅僅是購物的地方，它還具有其他社會功能，因而也可稱其為複合空間。本文將以 2012 年 7 月于士林夜市附近實施的問卷調查為依據，具體分析夜市的社會文化功能及其在消費者心中的存在價值。

夜市是什麼樣的存在？

東亞下的市場與共同性關係

目前為止的社會學領域中，一般對於現代市場的理解皆不脫卡爾博蘭尼（2009）的精闢分析，即經濟領域自政治與社會抽離而自成一格，而對世界經濟加以涵攝。如此的市場理解思維方式，近似對目前消費社會的理解詮釋方式。本文尊重這樣的理解脈絡過程，也欲對現代市場的他種可能性作一初探。

本文的立論點以達成自發性近代化的西歐為起始，以東亞脈絡視角探究近代西歐市場與社會的殊異存在關係。世界經濟發展過程當中，自東亞脈絡下的意義出發，說明原來當地社會在接受異質性外部排山倒海的經濟壓力同時，社會內部也受到一定衝擊與影響，多數時候即便未能保持社會統一性，也須設法維持經濟體系的基本存續性。在此之下，最關乎經濟而又不可避的近代化進程也悄然造訪，于東亞近現代進程當中，以最初與市場脫鉤分離過程為前提而在未有社會的狀態下形塑一新的社會結構可謂一難題。例如本文就以臺灣的夜市為例加以檢證，並兼論對照市場與社會固有理論彼此要素殊異的部分。

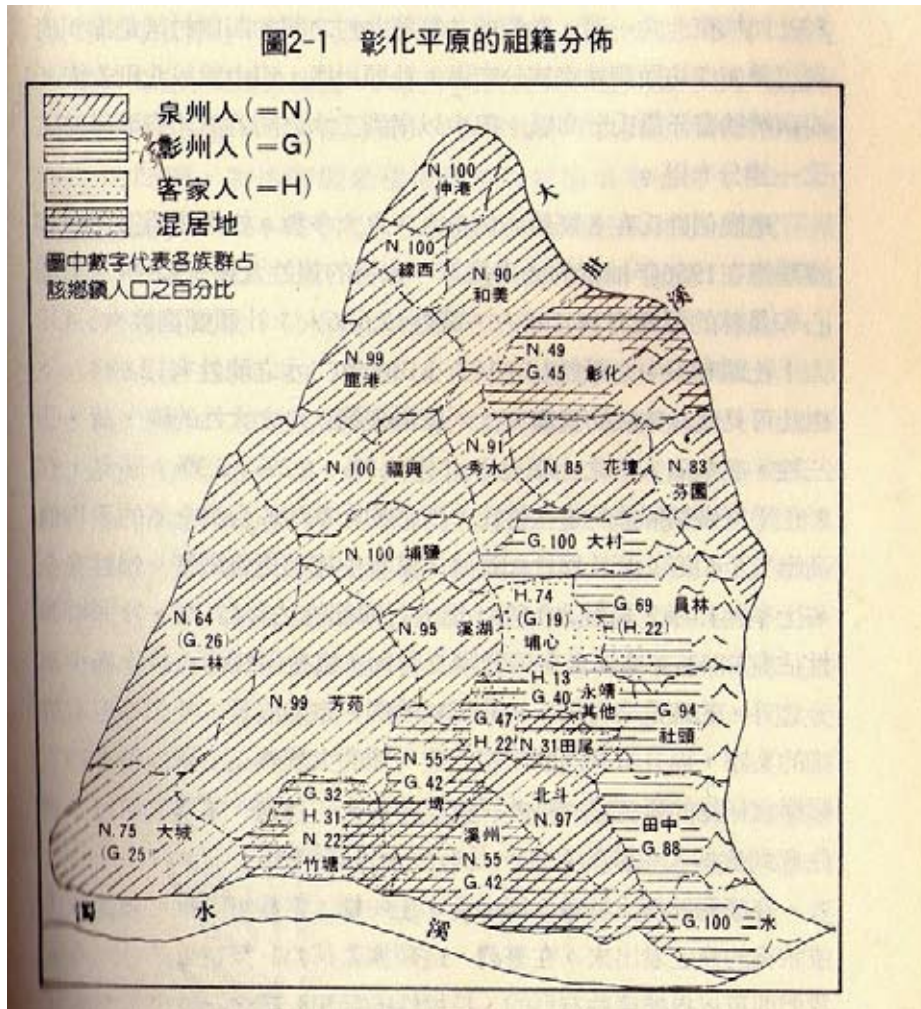
作為移民社會的臺灣

眾所皆知，臺灣乃為一移民社會。據稱臺灣漢人系譜歷史約莫四百年左右，在此之前於臺灣居住的是南島語系馬來-玻里尼西亞語族的臺灣原住民¹。其後則是來自中國福建，被稱為閩南人的族群，以及來自廣東的廣東人，即客家人族群，兩者開始移入臺灣。時間上乃是廣東人較早移入，但人口數量上卻是閩南人較多。與此同時，閩南人內部彼此又有所區別，並非一高度整合而緊密團結的族群特質。另一方面而言，目前臺灣內部亦有來自國共內戰後自大陸來台的外省人族群，從上述脈絡經緯切入可知，臺灣社會作為移民社會的發軔系譜。意即，原先臺灣自古以來就居住著被稱為土番的原住民，依照分類方式切割的不同，彼此部族區別方法也隨之大異其趣，但大致上可略分為 10 種以上的部落。當時的“臺灣”，並不存在著社會整體生存的文明脈絡基礎，故自大陸遷至臺灣的移民便撐起了“臺灣”文明脈絡基礎的主軸。也就是在未存有先前社會的比較參考基準點的同時，就意味著當時的移民須想盡辦法，建構出維持彼此的社會網路關係的模式。

吾人參考陳其南的《家族與社會》一書中可瞭解，當時作為上述比較基準點，是以移民者本身的居住地—祖籍這一帶有地緣性的劃分為參照點。臺灣自 18 到 19 世紀中期，平均每三年就有一次大規模的械鬥武裝事件，當時械鬥各方就以祖籍來源地畫分敵我關係。換言之，祖籍成為區隔我群與他群的符號，檢證了以移民祖籍地緣性為判准的內外團體圖騰。

1 日本使用「原住民」字眼帶有略微歧視意涵，故而一般採以「先住民」稱呼，中文當中的「先住民」指涉已消亡或滅種的民族。而于臺灣的 native Taiwanese 自發性自稱為「原住民族」，故本論文沿用如此稱呼而在此敘明。

臺灣漢民族部落的住民結構上，吾人可知“祖籍”是一個極為重要的判准指標。如彼此械鬥對峙的衝突齟齬下，彼此祖籍迥異的移民鮮少會居住在一起。泉州人²與漳州人彼此相互攻擊、撻伐。如此祖籍劃分之下所生的對立事件，也加速蔓延至其他地區。（陳其南，1988,78 頁）如此情況即便進入了廿世紀，其影響仍為顯著鮮明。



圖三 彰化平原的祖籍分佈 (1926 年)

（陳基南，1988，83 頁）

如圖所示，此為 1926 年臺灣北部地方，當時依祖籍為判准的各區分佈圖。於圖中標示可瞭解從北部到西部地區，乃以泉州人為大宗。東部地區則以漳州人為主。中部地區則是混合了上述泉、漳兩州的閩南人的共棲區域，客家人則分佈于現今的新竹地區一帶。以各祖籍為地域單位居住的輪廓幾乎至此也固定下來，各族群爭奪勢力與影響之大可見一斑。即便衝突情勢不斷，但為了連結隔海相望的出身地情感，從而使“祖籍”這符號成為了區隔移民者的最大判准。

然而，一方面因為祖籍因素而出現居住地域性上明顯各自有別之外，與此同時，十九世紀末左右不僅由於“祖籍”強烈連帶感的因素，另外社會機制下的統合要因也逐漸浮現，那就是以寺廟為基礎的臺灣宗族社會的面向讓人注目。的確，我們可發現以廟為社會網路基礎的關係，也讓該地域社群居民產生信仰上的趨同性。比起同樣地緣出身的民眾，抱持同一信仰的民眾彼此交會可能性來得更高，共用同一個文化語境脈絡的契機也相對來得多。而依照彼此是否信仰同一神，可以成為瞭解彼此祖籍同質性的判准依據。但更重要的，同一神的信仰象徵，在於其更可能讓迥異祖籍的移民者彼此團結。如許嘉明指出 19 世紀中期，彰化地方的漳州人與客家人共同出資建廟，並聯合起來對抗泉州人的這個歷史實存案例。

與此同時，同一族群內部的紛爭也屢見不鮮。此說明了相較于以原先外來移入的祖籍出身為社會網路統合背景的脈絡，當地固有廟宇祭祀圈信仰的文化，更能與他者保持相形穩定的社會關係，同時意味著將實存的村落集群為基礎

² 泉州人與漳州人各自皆為閩南人細分之後的一支。

而融入其中的社群輪廓逐漸浮現。依彰文字的資料表示，自 19 世紀初期開始到明治時期為止的一百年間，臺灣漢人居住地每年舉行的祭祀活動，其次數從 8 倍明顯躍增至 20 倍。在此可看出，即便是強調祖籍的移民社會，也出現外人與臺灣本地文化融為一體的脈絡進程。

廟宇與臺灣地緣所形構出的社會網路關係可謂息息相關。以廟宇祭祀圈信仰為核心的地域社群網路關係的整合上，較以祖籍為判准的網路形構來得更具有彈性。究其原因，可知倘若只以祖籍為人際往來的判准，將與其他祖籍地的居民有所衝突，而難以融洽生活。另外，倘只以廟宇祭祀圈為互動判准，也意涵著只能在彼此參與相同祭祀圈內有所互動而成為局限所在。此起彼落於一個廟宇的祭祀圈所涵蓋的地域範圍皆為一獨立成形的社群。該社群雖具一定的範圍局限性，但仍可能以社群全體本身進而形塑出他者的形象，難以對我群與他者彼此的互構合作上有所幫助與貢獻。質言之整體社群在其目光所不及之處，要藉由他者作為媒介來形塑社會的這個框架可謂大不易。而相較於形塑他者，更具有高抽象程度的社群形塑構成是否有所可能性。而目前此種跨地域性的實踐上，“夜市”此一作為形構社群網路互動的角色定位，便是本文想進一步論證之處。

作為與異質他者邂逅的市場

一如上述臺灣夜市實例，其於特定範疇種類的市場所產生出的消費活動形式，可說相當貼近至今我們所瞭解的溝通意涵。誠然，此種形式的交流是藉以媒介經濟為傳導，但這相互行為是由於偶然性之前，連結了個體性與形式上的溝通，而類似於現代社會的協同性要素。與此同時，此場域雖實存著一市場，但屬於不具經濟上先占價值的市場形式，退一步而言，至少夜市存在目的，並非在追求經濟市場當中所謂的利潤極大化。而於消費者角度而言，夜市所進行的買賣行為，並非是在以轉售為目的性的存在。毋寧說，購物二字儼為形式。因先有溝通平臺的建立，貨幣交易才得以進行。但無論如何，按照此形式下，即便是橫跨異文化的行為者間，也可進行溝通。此並非側重以溝通為媒介的交換價值，而是之於行為者的使用價值，在交易中扮演了一核心角色，從而讓夜市這種場域當中，有悖於資本主義理論中的經濟利潤法則，夜市的市場特性已難用純然的資本主義邏輯角度加以捕捉。

佐伯啟思（2000）指出，現今世界經濟體系中有兩大論理之爭——物財交換模型與貨幣交換模型，兩者分庭抗禮而成為迥異的兩股勢力。前者是一股試圖打破狀態並帶來流變與擴大的力量，後者則為把所有活動皆納入同一種的場域中，使之固定不動的力量。一般而言經濟學是以人生存所需，以及資源稀少性為出發點作一基本假設，佐伯指出原先人們依賴土地的使用，生產並消費所需物質資源。但也往往出現一方剩餘，而另一方卻匱乏的情況，此時於焉有了交換行為，而此時的交換即以物易物的交換模式。而隨經濟發展的腳步，交換也逐漸有擴大趨勢，在資源稀少難以維持以物易物交換模式時，就誕生了以貨幣為交換的正式市場。一旦有了如此市場後，市場交換便更進一步擴大，依照稀少性原則，人們也進一步交換了與生產和生活必需品無關的奢侈品或稀有財。如此的經濟體，是從自給自足、以物易物、生產與市場交換經濟，逐漸朝向貿易的大規模商業經濟發展。但貨幣為何出現於以物易物體系階段當中？貨幣的出現與物物交易的邏輯似未有相關性存在。

在此情況下，貨幣正是自外部所導入。質言之貨幣在必需品生產與交換的局部市場之外被加以引入，甚至可說是侵入該局部市場。此意味著在局部市場本身生產交換之外，就已存在著流通著貨幣的交易市場，而這貨幣市場本身不參與生活必需品的生產與交換過程。（佐伯，2000，364 頁）

亞當斯密的國富論與重商主義的論述兩相對立，新教徒的市民資本主義與猶太教徒的賤民（流氓）資本主義二元對立，如此的二元對立劃分成為了我們認識該等學說異同的方式。而一般社會科學研究者而言，之於後者，更傾向於將前者定位為近代正統學說。佐伯援引布勞岱爾對於市場經濟與資本主義的區分方式，而有下列兩點：前者由奠基於一具體場域的勞動力作為生產主體的經濟發展模式，彼此交換行為是以使用價值為前提而進行；後者則無一固定的場域，本身就屬於一種“去場域化”的無疆界商業金融活動。全球化下的世界經濟不啻為上述兩者的融合，也說明了消費社會本質上是以競爭性使用價值的消費財作為活動基礎。吾人的行動更不可避免的與金融、商業主義的資本活動密切相關。但所有社會領域倘從這兩大學說辯論之爭當出發點來加以思考，資本主義力量伴隨著優勢全球化的同時，從而也產生了產業社會的場域，另一方面植根於市場經濟場域下的經濟活動，也可能結合了行為者消費活動其所對應出的場域。而夜市正做為這樣的場域而出現，即並非先有一經濟上媒介存在，而是消費行為者彼此基於自身所需，而孕

育出此交換場域。

原先成為一社群的必備條件乃為時間與場域，但因媒體的蓬勃發展，逐漸有了去場域化要素的現象，但去場域要素的同時卻也留下場域本身部分共通處。依照濱野的研究指出，由於即時互動的時間流概念，會出現如祭典般具活力的一集體熱現象。筆者雖同意如此的論證看法，但作為串接共通點的場域感這點應可加以補充其論述之處。而在上述的觀點出發來看，夜市無疑作為一物質性的存在場域，同時也無疑地作為一同時性的場域，而經常展現出濃厚嘉年華色彩的活力狀態。由於時間與場域的這一共用特點，讓重現現場互動的現象成為可能。如美國社會學家 R.Sennett 所指出，如消費社會學所假設的，資本主義影響力逐漸增強的同時，產業社會逐漸主宰日常生活，市場主義的場域可能就會出現非日常生活空間性的嘉年華化，而於消費社會所具有之共同性的現象就在其中表露無遺。

先行研究

至今有關臺灣的夜市研究，主要集中在公共政策學、都市政策學、建築學和人類學上。前三個領域的研究重點是，如何管理沒有規範的夜市。特別是從 70 年代以後，夜市被稱為“城市之瘤”。但由於夜市在一定程度上緩解了失業問題，政府沒有進行嚴格監管，然而也沒有對夜市做出肯定的評價。比如在 1990 年頒佈的〈臺灣省加強攤販管理執行計畫〉中寫到，為了發展成為先進國家，要儘量減少乃至取締攤販。另外，要增加超級市場、連鎖店的數量來改善消費環境，提高生活品質。

從以上分析可以看出，夜市研究的重點在於討論如何取締作為“非正式經濟”的夜市。這些研究對夜市的評價普遍比較消極，研究的重點集中在如何管理缺乏秩序的夜市上，而缺乏對夜市內部各個群體的真實狀況進行深入調查與研究。

對夜市持比較正面觀點的主要集中在人類學領域，當中餘舜德的研究（1995；1999）最具代表性。在他的研究中，詳細說明了夜市裡商店與攤販的關係；員警與攤販的關係；廟與夜市的相互作用；交通的發展與夜市發展的相互影響以及商品流通的形式。但是，他的研究重點局限在攤販這一群體以及夜市發展對城市發展所產生的影響。綜上所述，可以說關於夜市消費者的研究比較少。

問題意識

從以上研究得知，迄今為止有關夜市的研究中，以消費者為物件的研究比較缺乏。然而，針對夜市消費者的研究對研究夜市這個整體非常重要，是不可缺少的。因此，在對夜市的研究當中，我將從消費者的角度展開調查與研究。本次問卷調查的目的是，為了瞭解消費者眼中的夜市以及他們利用夜市的方式，從而進一步探索夜市在臺灣所具有的文化、社會意義。

調查內容

調查方法：問卷調查

調查地點：臺北市士林夜市附近

調查期間：2012/7/1 — 2012/7/25

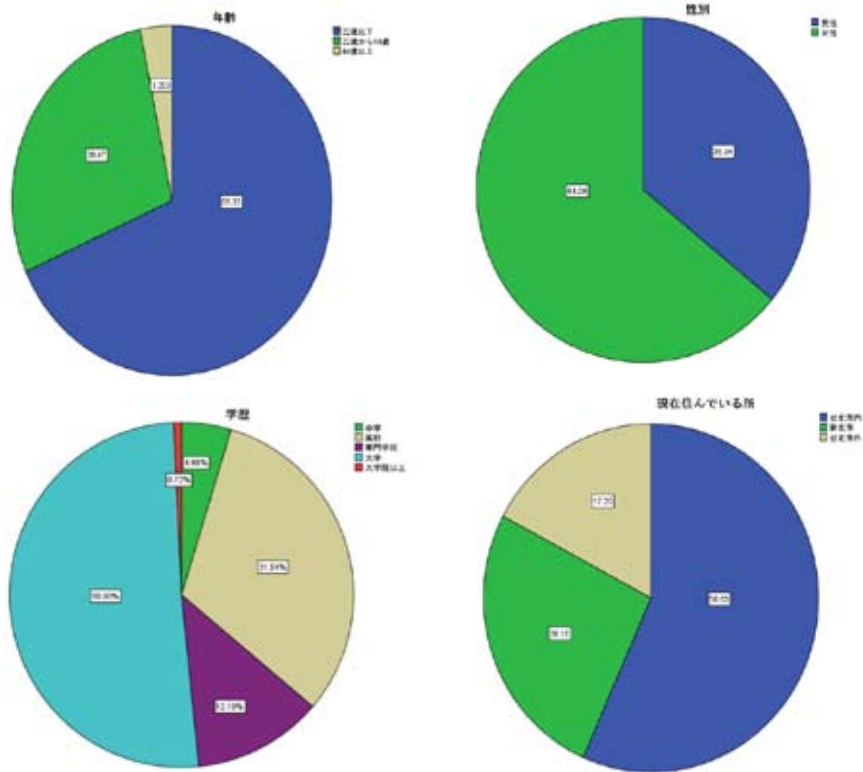
調查對象：夜市的消費者（臺灣人）

問卷數：282

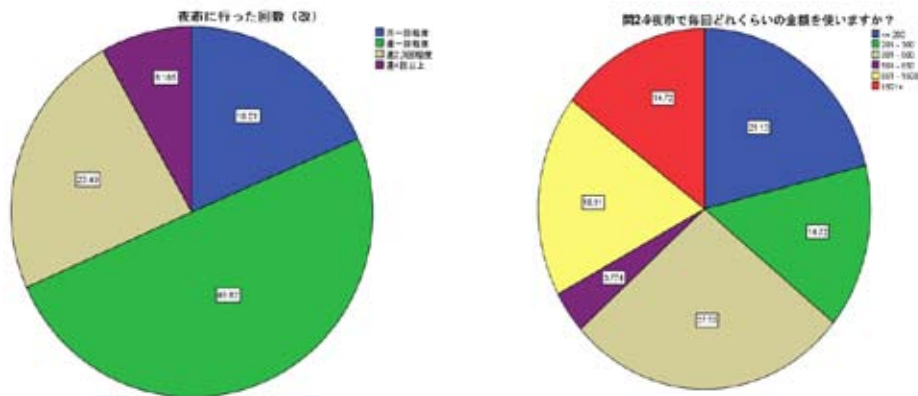
（由於夜市消費者群體十分龐大，涉及人群的社會屬性十分複雜，所以本次抽樣調查具有一定的參考價值，但也有其局限性。）

該問卷內容分為四個部分：消費者的社會屬性、利用夜市的方式、對夜市的印象、其他購物活動與社會活動的參與程度。社會屬性的主要內容包括性別、年齡、學歷、職業等。

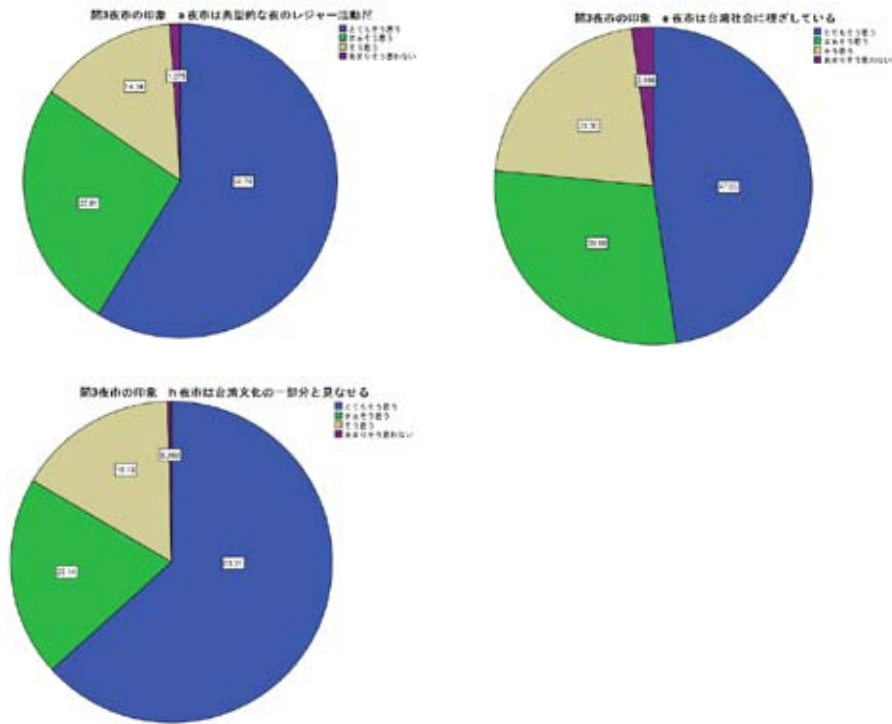
首先看一下受訪者的社會屬性。受訪者中，22 歲以下的人約占總數的 7 成。男性 101 人，女性 180 人。82% 的人住在臺北市附近（包括臺北市和新北市），約 50% 的人教育程度為大學以上。



接下來看看他們利用夜市的方式。該部分的内容分別是，去夜市的頻率、每次停留的時間、去夜市的動機、花費的金額、跟誰一起去夜市、買的主要商品等。受訪者中，一個星期去夜市的次數為1次以上（包括1次）約占81%。至於每次花費的金額，每次花費在300元以下約占35%，而每次花費在1500元以上則約占15%。



關於消費者對夜市的印象，本調查設定了三個問題，每個問題可用四個評價標準來衡量，即傳統、流行、共同體和文化交流。每個問題的回答結果按“1 非常同意”到“5 非常不同意”的5個階段進行評分。例如，a. 夜市是臺灣典型的夜間活動（1 非常同意 58%，2 基本同意 25%，



3 同意 14%，4 不太同意 1%，5 非常不同意 0%）；e. 夜市根植於臺灣社會（1 非常同意 47%，2 基本同意 28%，3 同意 21%，4 不太同意 2%，5 非常不同意 0%）；h. 夜市屬於臺灣文化的一部分（1 非常同意 63%，2 基本同意 20%，3 同意 16%，4 不太同意 0.3%，5 非常不同意 0%），這三個問題的結果合計組成傳統性評價標準。最後部分是關於其他的購物活動與社會活動的參與程度。該部分主要調查夜市消費者參加其他活動的頻率（半年內的參與次數）及其參與意識。

分析

假設

以下特別對夜市的共同體形象與其他三部分內容的關係進行討論。夜市不單純是一個買賣東西的地方，因此可假定消費者去夜市還有其他的原因。本次調查關注作為人們相互交流的空間——夜市，同時也關注消費者眼中的夜市形象是如何形成的。

本文作出以下假設，即消費者是通過消費而認為夜市是一個共同體的。

分析

首先確認一下本次調查裡有關共同體形象的內容。該部分內容也由三個問題組成，分別是 b. 對同時在逛夜市的人有感情（1. 非常同意 14% 2. 基本同意 21% 3. 同意 43% 4. 不太同意 17% 5. 非常不同意 3%），d. 在夜市感受到人情味（1. 非常同意 19% 2. 基本同意 34% 3. 同意 37% 4. 不太同意 8% 5. 非常不同意 1%），以及 i. 在夜市裡人際交流很活躍（1. 非常同意 19% 2. 基本同意 31% 3. 同意 38% 4. 不太同意 12% 5. 非常不同意 0%）。共同體形象的強弱由這三個問題的結果來進行判斷，分值最小為 3，最大為 15，得分越高則說明共同體形象越弱。

モデル要約

モデル	R	R ² 乗	調整済み R ² 乗	推定値の標準誤差
1	.483 ^a	.233	.221	1.97018

a. 予測値: (定数)、問2-3夜市に行った回数（最近半年）、問2-6どんな時に夜市に行きたいか b) ラックスしたい時、問1-2 学歴、問4-1私は積極的にレジャー活動に参加している。

分散分析^a

モデル		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
1	回帰	294.833	4	73.708	18.989	.000 ^b
	残差	970.399	250	3.882		
	合計	1265.231	254			

a. 従属変数 夜市イメージ共同体

b. 予測値: (定数)、問2-3夜市に行った回数 (最近半年)、問2-6どんな時に夜市に行きたいか、bリラックスしたい時、問1-2学歴、問4-1私は積極的にレジャー活動に参加している。

係数^a

モデル		標準化されていない係数		標準化係数	t 値	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
1	(定数)	2.952	.593		4.976	.000
	問2-6どんな時に夜市に行きたいか、bリラックスしたい時	.705	.129	.309	5.484	.000
	問4-1私は積極的にレジャー活動に参加している	.608	.139	.249	4.388	.000
	問1-2学歴	.320	.122	.149	2.626	.009
	問2-3夜市に行った回数 (最近半年)	.011	.005	.126	2.206	.028

a. 従属変数 夜市イメージ共同体

以下通過回歸分析，說明共同體形象形成的要素。在利用夜市的方式中，“花費的金額”、“在夜市停留時間”跟共同體形象的形成不相關。只有“去夜市的頻率”與夜市共同體形象的形成有關（標準化 β 0.126, t 值 2.206, $p < 0.05$ ）。此外相關的因素還有，去夜市的動機（去夜市是為了想放鬆自己（標準化 β 0.309, t 值 5.484, $p < 0.01$ ））、社區休閒活動的參與意識（標準化 β 0.249, t 值 4.388, $p < 0.01$ ）學歷（標準化 β 0.149, t 值 2.626, $p < 0.01$ ）。決定係數（標準化 R^2 ）的數值為 .221，即該模式對共同體形象有 22% 的影響力。從社會科學上看，該模式的影響力不小。所有變數的準確率達到 95% 以上，說明可信度較高。

解釋

從以上模型可得知：

- “去夜市是為了想放鬆自己”的人會認為夜市是共同體
- “對社區休閒活動的參與意識高”的人會認為夜市是共同體
- 教育程度越高，越傾向於認為夜市不是共同體
- 去夜市的頻率越高，越不認為夜市是共同體

令人感到意外的是，與本文的假設相反，去夜市的頻率高反而對夜市共同體形象的形成有負面效果。為什麼經常去夜市的消費者會否定夜市的共同體形象呢？也許是因為夜市已經成為了他們日常生活的一部份，也就是說每天去夜市的消費者可能對夜市沒有特別的想法。接下來排除頻率極高的消費者（半年去夜市一百次以上），再用同樣的模式進行分析。

係數^a

モデル		標準化されていない係数		標準化係数	t 値	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
1	(定数)	2.744	.613		4.475	.000
	問2-6どんな時に夜市に行きたいか、bリラックスしたい時	.744	.132	.323	5.649	.000
	問4-1私は積極的にレジャー活動に参加している	.619	.140	.252	4.410	.000
	問1-2学歴	.319	.123	.147	2.600	.010
	問2-3夜市に行った回数 (最近半年)	.020	.013	.088	1.558	.121

a. 従属変数 夜市イメージ共同体

排除頻率極高的消費者的情況下，“去夜市的頻率”準確率有 10% 的風險水準（標準化 β 0.88, t 值 1.558, $p > 0.1$ ），因此該資料的可信度不高。由於差不多每天去夜市的消費者不認為夜市是共同體，所以把他們排除的話，“去夜市的頻率”的負面效果消失了。根據以上結果，以“去夜市的頻率”為標準，可把夜市消費者分為 heavy user 層與 light user 層。為了體現 heavy user 層所具有的特徵，可能需要使用別的評價標準來進行衡量。

但是排除 Heavy user 層之後，發現對共同體形象的正面影響力也消失了。也就是說，本文的假設不成立。不過，這次的調查結果也顯示消費者具體的消費行為對他們眼中的夜市共同體形象沒有影響。今後有必要繼續討論他們眼中的夜市形象是如何形成的。

結論

通過本文，對夜市消費者的屬性、利用夜市的方法以及對夜市的印象有了一定的瞭解。從調查結果上看，夜市不僅僅是簡單的消費空間。因此本文對夜市的共同體形象進行了分析，得出以下結論：在夜市得以放鬆和積極參與社區活動的人對夜市的共同體形象比較有認同感（但與活動的實際參與頻率沒有關係）；學歷高和去夜市頻率高的人對夜市的共同體形象認同感較低。排除去夜市頻率極高的人之後，發現去夜市頻率高的負效應消失。根據以上分析結果，可把消費者分為占少數的 heavy user 層與占多數的 light user 層。除了夜市的共同體形象以外，為了說明 heavy user 層的特徵，還需要對其日常生活中的其他方面進行探討。

今後的課題

今後需要繼續研究不同社會屬性的人群對夜市的利用情況。除了夜市的共同體形象，還將探討夜市的其他形象（傳統性 / 流行性 / 文化交流性）。此外，還需要探討 heavy user 層對夜市的認知情況。由於 heavy user 層的人數很少，不適合進行定量調查，所以將計畫對其進行訪問調查。另外，本文所使用的資料為首次對夜市消費者的調查結果，當中存在不足的地方，今後除了需要在士林夜市不斷實施調查進行補充，還需要到別的夜市進行調查。今後將進一步探討夜市的形象與消費者的活動之間的關係以及夜市活動的社會意義。

參考書目

- Baudrillard Jean, “LA SOCIETE DE CONSOMMATION Ses Mythes, Ses Structures”, 1970, 今村仁司・塚原史訳『消費社會の神話と構造』, 1995, 紀伊國屋出版
- , “Le système des objets”, 1968, 宇波彰訳『物の體系 記號の消費』, 1980, 法政大學出版
- , “Carnaval et cannibal Pourquoi tout n’ a-t-il pas d j disparu?” 2007-2008, 塚原史訳, 『なぜ、すべてがすでに消滅しなかったのか』, 2009, 筑摩書房
- Bourdieu Pierre, “La distinction : critique sociale du jugement”, 1979, 石井洋二郎訳, 『ディスタクシオン：社會的判斷力批判』 1990, 藤原書店
- Delanty Gerard, “Community”, 『コミュニティ グローバル化と社會理論の変容』, 2003, 山之内靖・伊藤茂訳, 2006, NTT 出版
- 伊藤明己, 「消費の意味と社 性—相互依存性、ヴェブレン、ジンメル」, 2008, 『自然人間社 45 25-49』, 東 院大 經濟 部教養
- 大澤真幸, 『意味と他者性』, 1994, 勁草書房
- , 『資本主義のパラドックス 権 幻想』, 1991, 新曜社
- 荻野昌弘, 『資本主義と他者』, 1998, 西 院大 出版
- 松井剛, 「消費主義の制度化プロセスとしての消費社 」, 2003, 一橋論業, 129 (5): 575-91, 一橋大
- , 「消費社 批判の 4 類型」, 2004, 一橋大 研究年報 商 研究 45: 171-196, 一橋大
- 鈴木謙介, 『カーニヴァル化する社 』, 2005, 講談社
- , 『わたしたち消費 カーニヴァル化する社 の巨大ビジネス』, 2007, 幻冬舎
- 若林正丈, “台湾—変容し躊躇するアイデンティティ” 2001, 筑摩書房

彰文字，“閩台家族社會”，1998，幼獅文化事業股份有限公司

陳基南，“家族與社會 臺灣與中國社會研究的基礎理念”，1990，聯經出版公司

餘舜德，“空間、論術與樂趣 夜市在臺灣社會的定位” 1995，黃應貴主編，空間、力與社會：391 — 462 頁，中央研究院民族學研究所

———，“夜市研究與台灣社會” 1999，徐正光・林美容主編，人類學在台灣的發展：89 — 126 頁，中央研究院民族學研究所

許嘉明，“彰化平原福佬客的地域組織”，1973，中央研究院民族學研究所集刊 36:165-190 頁，中央研究院民族學研究所

試論戰後臺灣文學中的現代主義敘述特徵

——《現代文學》與舞鶴作品的敘述脈絡——

小笠原 淳

五十年代末至六十年代初，臺灣現代主義文學剛剛興起，白先勇、王文興、陳若曦、歐陽子、王禎和等台大外文系學生繼承了夏濟安主編的《文學雜誌》的文學理念，他們細讀、翻譯西方的經典作品的同時，還在其共同創辦的同仁雜誌《現代文學》上開始大量嘗試小說創作。六十年代崛起的這些所謂「現代文學派」作家在文本構成、語言運用上作了相當大的努力，他們在寫作技巧的創新上表現出了很高的造詣，對戰後臺灣文學的發展產生了深遠的影響。其中，意識流（內心獨白）成了最重要，而且也最常用的現代主義手法之一。作家在面對青春時代的苦惱和孤獨，以及同性戀、近親性欲望（Incest）等新時代特有的新的社會現象時，必須踏進個人的內心深處來表達他們（被壓抑者）的心聲。這一時期的臺灣小說正處在從「國家」到「個人」的轉捩點上，那麼小說的主題及其焦點人物如此轉變時，就需要一種寫作技巧來描繪出現代人複雜而細膩的心理狀態，並透過個人的心理狀態描述外在的事物和意象。而這種個人化的抒情書寫傳統一直延續到九十年代後現代時期的臺灣文學。但需要注意的是，戰後東亞文學的敘述以及文體，不能單純地用西方主動和東方被動的二元化思維來說明，它是在東亞戰後特殊的社會背景之下，受到「西方」一定程度的影響，東西方、新文學和古典文學等各種文學因素構成的一種複雜的混合性文體。

本文以意識流為主要研究物件，重新探討戰後臺灣現代主義小說的敘述特徵，同時對於六十年代的現代主義文學作品和九十年代作家舞鶴的作品之間的敘述脈絡進行一次簡單的分析。

關鍵字：戰後臺灣文學、《現代文學》、意識流、內心獨白、舞鶴、大江健三郎

一、意識流和戰後臺灣文學

五十年代末至六十年代初臺灣現代主義文學剛剛興起，白先勇、王文興、陳若曦、歐陽子、王禎和等台大外文系學生繼承了夏濟安主編的《文學雜誌》的文學理念，細讀、翻譯西方的經典作品的同時，還在其共同創辦的同仁雜誌《現代文學》上開始大量嘗試小說創作。六十年代崛起的這些所謂「現代文學派」作家在文本構成、語言運用上作了相當大的努力，他們在寫作技巧的創新上表現出了很高的造詣，對戰後臺灣文學的發展產生了深遠的影響。其中，意識流（內心獨白）成了最重要，而且也最常用的現代主義手法之一。作家在面對青春時代的苦惱和孤獨，以及同性戀、近親性欲望（Incest）等新時代特有的新的社會現象時，必須踏進個人的內心深處來表達他們（被壓抑者）的心聲。因為這些個人問題和情欲等往往潛在于每個人的心理深處，並處於不斷地飄移狀態中，所以僅描述外在因素是不夠的。這一時期的臺灣小說正處在從「國家」到「個人」的轉捩點上，那麼小說的主題及其焦點人物如此轉變時，就需要一種寫作技巧來描繪出現代人複雜而細膩的心理狀態，並透過個人的心理狀態描述外在的事物和意象。隨著以個人、家庭為題材的小說的出現，意識流成了必不可少的寫作工具。用這一理念和手法寫的小說，基本上都是頗為感性、極為個人、相當感傷的。而這種非常個人化的抒情的書寫傳統一直延續到九十年代後現代時期的臺灣文學。在本文中，筆者以意識流為主要研究物件，重新探討戰後臺灣現代主義小說的敘述特徵的同時，對六十年代的現代主義文學作品和九十年代作家舞鶴的作品之間的敘述脈絡，也進行一次簡單的分析。首先要追尋的是意識流在臺灣的接受。白先勇曾經也提到過敘述焦點的轉移，他剖析認為：

與「五四」時代的作家完全相反，這些作家為了避過政府的檢查，處處避免正面評議當前社會政治的問題，轉向個人內心的探索；他們在台的依歸終向問題，與傳統文化隔絕的問題，精神上不安全的感受，在那小島上禁閉所造成的恐怖感，身為上一代罪孽的人質所造成的迷惘等。因此不論在事實需要方面，或在本身意識的強烈驅

使下，這些作家只好轉向內在、心靈方面的探索。¹

那麼，臺灣是從什麼時候開始引進「意識流」的呢？在夏濟安的《文學雜誌》中可以看到最早的端倪。夏濟安在《文學雜誌》第一卷第二期（1956）上發表的〈評彭歌的〈落月〉兼論現代小說〉中提到，普魯斯特、伍爾夫、喬伊絲、福克納等作家的心理小說中使用的意識流手法是強調「把握住故事中人物生活裡面最重要的一剎那」。²

更重要的是，在《文學雜誌》第六卷第五期上刊載的朱南度所翻譯 William York Tindall 的《現代英國小說與意識流》（The Stream of Consciousness）。該文章介紹了從亨利詹姆士（Henry James）到伍爾夫的意識流發展脈絡，從中不難看出臺灣學院派企圖推廣意識流這一現代主義核心敘述方法的痕跡。管見所及，這是臺灣接受「意識流」的第一波。

接下來是刊載于《現代文學》第六期（1961）的「伍爾夫專輯」，白先勇、王文興等青年作家們透過該專輯介紹了包括伍爾夫的傳記在內的評論性文章共四篇以及她的〈鬼屋〉等四篇短篇小說。也許是受了伍爾夫專輯的影響，從此以後《現代文學》中便出現了一批主動使用意識流技法的現代主義小說。舉例來說，白先勇的〈寂寞的十七歲〉（《現代文學》第 11 期，1961）便是其中有代表性的作品。在該故事中，被家庭和學校所孤立的少年楊雲峰的孤獨和悲傷心理，從第一人稱角度、以獨白的方式表露出來。例如：

我沒有表，不曉得逃出新公園時已經幾點鐘了。**我**沒有回家，**我**在空蕩蕩的馬路上逛了好一會兒，路燈發著紫光，照在皮膚上，死人顏色一般，好難看。〔…〕**我**想到第二天的結業式，想到爸爸的話，想到唐愛麗及南光那些人，**我**簡直厭煩得不想活了。**我**蕩到小南門的時候，**我**真的趴在鐵軌上去過，有一輛柴油快車差點壓到我身上來。**我**滾到路旁，嚇得出了一身冷汗，跑了回來。³

作家故意使用大量的第一人稱「我」，清晰地勾勒出少年的焦慮，把無家可歸的孤獨靈魂的苦惱、糾葛等人物的心理活動真實地表達出來。由此，在父系社會和學歷社會的壓力中掙扎的一個少年的苦境便展現在讀者的眼前。像這樣，這個故事就有了採用意識流文體的必然性。這也是五四文學革命以來中國現代文學敘述的一個特徵。我們或許從魯迅的〈狂人日記〉（《新青年》1916）中可以看到其原型。

原來也有你！這一件大發見，雖似意外，也在意中：合夥吃**我**的人，便是**我的**哥哥！

吃人的是**我**哥哥！

我是吃人的人的兄弟！

我自己被人吃了，可仍然是吃人的人的兄弟！⁴

魯迅在此故意設計了狂人「我」的內心獨白敘述，因而通過個人內心成功地揭露了「吃人的社會」，並嚴厲地批判了中國的封建禮教傳統。之後不少中國現代文學作家都繼承了魯迅的這一敘述模式。臺灣進入五十年代後因戒嚴體制所帶來的政治壓力，不允許魯迅文學的閱讀和傳播，從此以後，「魯迅作品列入官方規定的禁書，沒有人敢於公開閱讀」。⁵

眾所周知，王文興是一位寫作實驗性非常強、特別注重文字效果的作家。《現代文學》第二期（1960）所刊載的短篇小說〈母親〉已充分地表現出了他的這一前衛性。

安靜些安靜些。他們叫我不
要胡思亂想。然而我是病人。他們要醫好我只有叫貓兒一刻也不要離開我。貓兒要每時每刻都在我身邊。都在我身邊。現在我就照醫生的話去做。我就照他的話做個乖乖的孩子。〔…〕真是神經質啊。真要笑死人了。小傻瓜小傻瓜。再流眼淚妳就不是個乖孩子。妳就不是醫生的乖孩子。

1 〈流浪的中國人——臺灣小說的放逐主題〉，《第六只手指》（爾雅出版，2007 年版），頁 81，文中黑體為引者所加。本文中所有引用的中文翻譯皆為本人翻譯。

2 參見柯慶明〈臺灣現代主義小說序論〉，《臺灣現代文學的視野》（麥田出版，2006），頁 144，彭歌〈夏濟安的四封信〉，《中外文學》第 1 卷 1 期（1972），111 頁。

3 白先勇〈寂寞的十七歲〉，《寂寞的十七歲》（允晨文化，2000 年版）頁 219，文中黑體為引者所加。

4 魯迅〈狂人日記〉《魯迅全集》第 1 卷（人民文學出版，1981）頁 429，文中黑體為引者所加。

5 陳芳明〈臺灣與東亞文學中的魯迅〉，王德威、陳思和、許子東主編：《一九四九以後》（香港：牛津大學出版社，2010），頁 170。

醫生，我是你的乖孩子嗎？ 哎喲妳胡說的什麼啊。 亂七八糟亂七八糟。⁶

臥在病床上的母親的妄想用內心獨白的手法表達出來。王文興的語言藝術耐人尋味。西方現代主義小說所採用的內心獨白敘事往往是去掉標點符號沒完沒了地講下去，而王文興卻把句子縮到最短，句子之間還插進空白，在視覺上也力求使人感覺寬鬆緩慢。作家用這一文本形式來表現躺在病床上的女性寂靜微弱的呼吸。

王文興在另一篇早期作品〈大風〉（第 11 期、1961）中，用滔滔不絕的內心獨白描述了在暴風雨中拉著客人往前奔跑的車夫的一天。和節奏緩慢的〈母親〉的文體不同，該篇中的內心獨白較長，寫得一氣呵成，抓住了現代人內心中所產生的各種複雜感性的起起伏伏。身體頂著大風往前賓士的車夫的姿態，象徵的是現代化的無情潮流之下生存的底層人的苦境。

《現代文學》創刊號發表了卡夫卡的專輯，已經體現了該雜誌的現代性特質，這也是臺灣第一次對卡夫卡文本的正式接受。⁷同一期，還發表了叢蘇的短篇小說〈盲獵〉（1960），這是作家「讀完 Kafka 的一些故事之後」，在一個夜晚裡匆匆寫完的故事。五位獵手們在一個連自己都看不見的黑暗裡，「一步一步地」繼續向前摸索著什麼東西。這個故事內容非常抽象，會讓人聯想到卡夫卡的荒謬風格。五位「盲獵」中的一位「我」在「沒有人回應」的情況之下，用內心獨白再三追求他人和自我的真實存在。

陳若曦的〈喬琪〉（《現代文學》第 7 期 1961）以浪漫主義的筆調描述了家庭對人性的束縛。敘述者「喬琪」生活在離婚家庭，年輕的她總是敏銳地感覺到自己與媽咪以及父親、繼父、男朋友（陸成一）之間所存在的不同層面的隔閡，小說將她的這種內心的糾葛和吶喊用內心獨白的小說敘事手法描繪出來。如：

受了為什麼就要佔有呢？媽咪愛我嗎？我懷疑，她只想完完全全佔有我罷了，從佔有中她獲得了對父親的勝利。恍惚中，我看見自己成了一塊肥肉，供人搶奪。我又看到我自己……我又看到我自己……一個小女孩，獨個兒蹲在門口，孤伶伶地瞧著天空，好久好久，沒有人理睬……然後我逐漸長大，離異的父母同時發現了我的存在，逐漸成了他們的安琪兒，她的心肝。

呵，我怎能完整，怎能得到解脫，既然我總是被佔有的目標？媽咪要佔有，陸成一也要佔有；即便能逃到另一個陌生的國度，我又怎能逃脫這些人性的枷鎖呢？不是他人的錯，我覺悟了，是我自己恐懼被佔有，我厭惡屬於任何人。⁸

經過這樣內心的思考，喬琪發覺媽咪對自己的佔有並非來自真愛。作家陳若曦透過喬琪心理的轉變探討了新時代的「愛」的本質。因為愛情、家庭的本質和面貌是隨著時代的變遷不斷發生變化的。

從王禎和〈鬼・北風・人〉中可以看出台灣現代主義文學的三個特徵。其一，採用了既身處社會底層又「不堪」的鄉土人物作為小說的主角；其二，敘述觀點的創新，即故事多半以內心獨白來展開；其三，小說語言及其內容含有濃厚的鄉土韻味，這種鄉土韻味也是該作品要努力表現的主題。

雖然〈鬼・北風・人〉採用的是第三人稱敘述，但是秦麗月與秦貴福姐弟的內心獨白所占比重相當大。作家在該作中讓各自敘述方式所負擔的角色非常鮮明，用第三人稱主要是為了詳細地刻畫出麗月與貴福的外表以及行動等外在的特點（比如貴福窺視麗月時所採用）。這樣的手法雖然具有典型的寫實小說的特徵，但卻並不像其他的寫實小說那樣有展開故事的功能，它僅為表達人物外在因素而使用，可以說只是局部的運用。而作家當刻畫人物的內心世界時，則大膽地使用內心獨白敘述，甚至姐弟二人的對話也是以這一非寫實的敘述方式來展開的。如：

「就是你一點也不體念我，你總應替你外甥想一想。像你這般無情無意的人，我可從沒見過哩！做了這般沒臉子的事，你也敢厚著臉皮回來。哼！」

哼什麼！？我要是有離開花蓮的打算，早拿了你的款子到別處去了！還會回到這裡？——貴福盤著手，偏起頭，兩隻微微上挑的眼睛對著麗月發呆。——妳想敢我走？做夢去吧！⁹

6 王文興：〈母親〉，《十五篇小說》（洪範書店、2006 年），頁 30。

7 李歐梵著、林秀玲譯：〈在臺灣發現卡夫卡〉，《中外文學》第 30 卷第 6 期（中外文學月刊社、2001 年），頁 176。

8 陳若曦：〈喬琪〉，《現代文學精選集》（台大出版中心、2009），頁 49。

9 王禎和：〈鬼・北風・人〉，柯慶明主編《現代文學精選集小說 1》（臺大出版中心、2009），頁 76，文中黑體為引者所加。

這是麗月所說的話和貴福內心獨白的「對話」，其中間在插入一句敘述者的寫實敘述之後，又繼續展開貴福的內心獨白。可見，這一文本的文體結構形式是較為複雜的。

白先勇就讀于愛荷華大學作家工作室時寫的短篇小說〈香港——1960〉（《現代文學》第21期、1964），更成熟地運用了意識流這一文學技巧。台大外文系時代他所用的內心獨白，像〈寂寞的十七歲〉那樣只聚焦於主要人物的心理活動，因此文本呈現的是一種抒情和感傷的韻味，而〈香港——1960〉的意識流運用所對準的不僅僅是焦點人物餘麗卿的心理活動，還包含她所在城市香港的整體意象。這篇小說達到了意識流運用的最高水準。

從上述所引用的幾篇小說中不難看出，經過五十年代的醞釀，意識流在六十年代臺灣現代文學的繁榮中大放光彩，作為一種新的文學要素，它迅速發展成一股新的審美浪潮和創作趨勢。

二、《現代文學》和舞鶴的敘述脈絡

那麼，臺灣現代主義的敘述脈絡究竟延續到何時？是否可以將九十年代的臺灣當代作家舞鶴列入其中的一條分支呢？接下來，筆者試圖探討《現代文學》和舞鶴創作之間的敘述脈絡關係，並進行一次簡單的文本比較。

邱貴芬曾指出王文興和王禎和的書寫特徵：

王文興的文字改革是一種現代派氛圍下「個人主義」的極端展現，或許如呂正惠所言，《家變》文字之交纏絞繞反映作家閉鎖孤獨的傾向。王禎和顛覆傳統中文寫作習慣的文字運用，卻是向現實裡庶民生活鮮活詞彙取經，他自稱他從1964年在軍中服役時，「開始注意到台語的美妙和活潑的地方」。¹⁰

按照邱貴芬的話，我們可以說舞鶴的書寫帶有王文興的「個人主義」之文字革新以及「閉鎖孤獨的傾向」，並具備王禎和那樣顛覆傳統中文寫作的臺灣庶民式文字運用。但要注意的是，舞鶴的小說語言沒有王文興的文體那麼自我節制，經常會失控。關於現代文學和鄉土文學渾然交織的舞鶴小說文體之起源，我們或許能追溯到王禎和的第一篇小說〈鬼・北風・人〉（《現代文學》第7期，1961年）。王禎和的小說〈鬼・北風・人〉明顯受到他在臺大外文系所讀希臘戲劇課程的影響，「以伊底帕斯戀母殺夫情結為基礎，但是小說以「不堪」的鄉土人物為主角，已透露了其後王禎和「鄉土文學」的筆調」。¹¹從這篇小說中還能看出貴福對麗月的近親性慾（Incest）。作家用貴福的內心獨白來表露貴福對麗月的這種情慾。舞鶴文本中的戀母殺父情結（Oedipus Complex）也很明顯，而且其追求方式更加嚴密尖銳。¹²舞鶴的早期作品〈微細的一線香〉（《前衛叢刊》第一輯，一九七八年）中有如下段落。

入殮時，剛觸棺底，父親頭向左一偏，眼皮拉開了，露著屍白的腫框；有人嚎叫起來；母親緊緊捏抓我的手腕入棺，用我的中指無名指將竟似溫熱的眼瞼撫合。¹³

母親硬握著「我」的手腕用「我」的中指和無名指閉上父親的眼眸。母親將「我」作為媒介間接地觸摸父親的身體，而「我」在他們的中間使父母聯通在一起。寫二二八事件的〈調查：敘述〉（《文學臺灣》第二期 一九九二年）又寫道：

——她爪齧相片掐成子彈一樣吞入肚內。我在家母臨終的癌痛中感受到，她正享受著那種穿齧的痛苦，在穿齧齧齧中她體貼同時滲入穿刺刺刺中的丈夫，汗水血水不斷滲出青年丈夫的肌膚是多麼秀美……她一定不要嗎啡止痛，燒炙的苦甘中，她在我肘肉留下斑斑爪齧的痕。¹⁴

這是一個情慾敘述。敘述者「我」的父親由於二二八事件被槍斃死去，在此母親將丈夫的遺像捏成子彈一樣吞入

10 邱貴芬：〈翻譯驅動力下的臺灣文學生產——1960-1980 現代派與鄉土文學的辯證〉，陳建忠、應鳳凰、邱貴芬、張誦聖、劉亮雅合著：《臺灣小說史論》（臺北：麥田出版，2007），頁255，文中黑體為引者所加。

11 邱貴芬：〈翻譯驅動力下的臺灣文學生產——1960-1980 現代派與鄉土文學的辯證〉，頁206-207。

12 大江也提過自己的戀母殺父情結，他說：「在小時候使我困惑的罪惡感，那就是殺父欲望」。參見（日）大江健三郎、すばる編集部編：《大江健三郎・再発見》（東京：集英社，2001），頁149。

13 舞鶴：〈微細的一線香〉，《悲傷》（臺北：麥田出版，2001），頁175。

14 舞鶴：〈調查：敘述〉，《悲傷》（同前），頁143。

肚內，當作和丈夫的最後一次歡樂。子彈穿入肉體的父親之痛和母親的病痛相交錯，身患癌症的母親在病床上接受丈夫的肉體與記憶。作家在此描述了垂死的母親和先父的化身以這種方式邂逅。留下母親爪痕的「我」成了父親的替代，和母親互動著。正如上文所提的「微細的一線香」中那一段落一樣，這裡描畫的也是父母與其兒子的接觸，呈現的是潛伏在「我」心裡深處的戀母情結與近親性欲。

舞鶴的另一篇〈拾骨〉（《文學臺灣》第七期、一九九三年四月）是臺灣喪葬習俗「撿骨葬」為題材的小說。通過這一葬禮，死者昇華為祖先，因此屍體就獲得永遠的精神生命，成為子孫崇拜的對象。而〈拾骨〉的敘述者「我」拾骨的動機來自他對母親的強烈情欲，這就是潛伏於他小說中的近親性欲的一種呈現。小說的結尾，「我」為了讓母親得以復活，帶著對母親的巨大愛欲去了妓院。「我」將妓女柚阿子看成是母親的替身，企圖挽回母親在大地中喪失已久的血肉。在此「我」的戀母情結和近親性欲相連接，圍繞母親的情欲書寫，逐漸歸結於母胎內部及已與母胎同化的鄉土內部。〈拾骨〉的原型還能追溯到日治時代用日語寫的臺灣小說，即呂赫若的〈風水〉（《臺灣文學》一九四二年）。舞鶴一面繼承了日治時代的鄉土敘事脈絡，一面潛移默化地受到了現代文學派的影響。而且，舞鶴隱居淡水的十年間「嘗試各種小說文體、試驗各種可能的形式」¹⁵，由此最終形成了他自己的文體。因此，在我看來，舞鶴的小說文體不僅是他個人爭取的產物，而且是在臺灣現代文學派與鄉土文學的醞釀之下發生的突然變異。

從小說人稱的角度來看，舞鶴也善於用第一人稱「我」，作家本人與其故事中的「我」關係非常緊密，明顯掛勾。

另撇一筆，我想把視角擴大到戰後日本文學。不僅僅戰後的臺灣文學，戰後的日本文學也把翻譯、精讀「西方」當作其創新小說文體的重要動力。在此我們不妨簡單分析一下戰後的日本作家大江健三郎的早期作品。大江早期作品的一個重要文體特色，那就是第一人稱「僕、ぼく」（我）的採用，而且主語絕對不能脫落，還經常使用指示代詞等，這些都是和大江的西方閱讀經驗有關的。下麵是其〈死者的傲氣〉（《文學界》一九五七年、八月號）中的段落。

これらの死者たちは、死後ただちに火葬された死者とはちがっている、と僕は考えた。水槽に浮かんでいる死者たちは、完全な《物》の緊密さ、独立した感じを持っていた。死んですぐに火葬される死体は、これほど完璧に《物》ではないだろう、と僕は思った。あれらは物と意識との曖昧な中間状態をゆっくり推移しているのだ。それを急いで火葬してしまう。あれらには、すっかり物になってしまう時間がない。¹⁶

我想，這些死者們和死後立刻送去火葬的死者不一樣。水槽中浮沉的死者們，有著完全的「物」的緊密度的獨立感。死後立刻火葬的屍體，我想沒法成為這麼完美的「物」的吧。那些屍體，是在物和意識的邊界模糊的中間狀態裡逐漸推移的。可是它們急急忙忙地就被火葬了，沒有足夠的時間成為徹底的物。

五十年代，每天沉浸於法文世界的大江，寫作時仍然逃不開法文結構的影響。¹⁷大江帶著第一人稱「僕、ぼく」（我）踏上寫作之途，但如何養成用第三人稱寫小說的能力卻成了長期困擾着他的問題。由此可見，「翻譯西方」的經驗對大江文體的形成存在著嚴重的制約。

臺灣「現代文學派」作家也和大江一樣，他們通過精讀、翻譯西方經典作品形成了自己的文學風格。這是戰後東亞地域文學演變時所要面臨的一個共同特徵。以「現代文學派」的核心作家白先勇的創作為例，他的《臺北人》敘述受到《都柏林人》的影響，作品中也能看到夏濟安所追求的「字字準確」的新批評理念，此外，他的第一人稱運用還可追溯到魯迅的《狂人日記》——即使當時的臺灣歷史條件不允許魯迅文學的閱讀與傳承，也可以指出這樣的一個敘述脈絡吧。由此看來，戰後東亞文學的敘述以及文體，不能單純地用西方主動和東方被動的二元化思維來說明，它是在東亞戰後特殊的社會背景之下，受到「西方」一定程度的影響，東西方、新文學和古典文學等各種文學因素構成的一種複雜的混合性文體。

15 舞鶴：《悲傷》後記（臺北：麥田出版，2001），頁242。

16 大江健三郎：〈死者の奢り〉，《死者の奢り》（東京：文藝春秋社，1958年），頁17，文中黑體為引者所加。

17 大江健三郎、すばる編集部編：《大江健三郎・再発見》（同前）頁57。

主要參考書目

中文

- 白先勇《臺北人》（爾雅出版，2009 年版）
- 葉石濤：《臺灣文學史綱批註版》（春暉出版社，2010）
- 夏濟安：《夏濟安日記》（夏志清注，遼寧教育出版社，1998）
- 柯慶明主編：《台大八十我的青春夢》（台大出版中心，2008）
- 柯慶明：〈臺灣現代主義文學概說〉（臺灣大學臺灣文學研究所 學術專書論文，2008）
- 梅家玲：〈夏濟安、《文學雜誌》與臺灣大學〉《臺灣文學研究集刊創刊號》（臺灣大學臺灣文學研究所，2006）
- 白先勇：《驀然回首》（爾雅出版，2009 年版）
- 〈 刊詞〉，《現代文學》第 1 期（現代文學編輯委員會，1960）
- 劉亮雅：《後現代與後殖民：解嚴以來臺灣小說專論》（臺北：麥田出版，2006）
- 李育霖：《翻譯闖境：主題、倫理、美學》（臺北：書林出版，2009）
- 王德威編選・導讀：《臺灣：從文學看歷史》（臺北：麥田出版，2009）
- 朱芳玲：《六〇年代臺灣現代主義小說的現代性》（臺北：臺灣學生書局，2010）
- 彭小妍編著：《大江健三郎——從自我到世界》（臺北：臺北中央研究院中國文哲研究所，2011）
- 林麗如：《歷史與記憶——舞鶴小說研究》（臺北：大安出版社，2008），頁 231。
- 王德威：〈原鄉人裡的異鄉人——重讀舞鶴的《悲傷》〉，舞鶴《悲傷》（同前）。

日文

- 山口守：〈白先勇と六〇年代モダニズム〉，山口守編《台湾文 講座》（国書刊行 、2003）
- 一條孝夫：《大江健三郎の世界》（大阪，和泉書院，1985）
- 江藤淳：〈対談 大江健三郎〉，《江藤淳 全対話 2》（東京：小沢書店，1974）

ITP コロキウム (ワシントン大学)

日本とアメリカ合衆国における日本学
——日本の言語・文化についての比較研究的視座——

Japanese Studies in Japan and the US
Comparative Perspectives on Japanese Language and Culture

発表原稿集

**Japanese Studies in Japan and the US:
Comparative Perspectives on Japanese Language and Culture**

Date: February 22, 2013, 14:00-18:00 Venue: HUB Room 307, UW Seattle campus

Cosponsors: AL&L, University of Washington & Kobe University

Chair: Marika OKINO (PD Fellow at Graduate School of Humanities, KU)

14:00-14:10 <Opening Remark>

Justin Jesty (Assistant Professor at AL&L , UW)

<Session 1 >

14:10-14:30 Kaori IGARASHI (PhD Student at AL&L, UW)

“Success and Hope for the Salaryman: Japan's Economic Miracle and the Comedy of the Crazy Cats and the Drifters”

14:30-14:50 Shunsuke SHIKATA (PD Fellow at Graduate School of Humanities, KU)

“A Reappraisal of the Taiwan’s Role in the Cold War in the 1950s”

14:50-15:10 Yin YANG (PhD Student at Graduate School of Humanities, KU)

“Offer Expressions in Japanese, Chinese, Korean and English”

15:10-15:40 <Comments and Q&A >

Hideyuki YAMAMOTO (Professor at Graduate School of Humanities, KU)

Justin Jesty (Assistant Professor at AL&L , UW)

15:40-15:55 <Coffee Break >

<Session 2 >

15:55-16:15 Bonnie McClure (MA Student at AL&L , UW)

“Enlightenment and Nonduality in Saigyō”

16:15-16:35 Sarah M. Clayton (PhD Student at AL&L , UW)

“Dematerialization in Abe Kōbō’s *Hakobune Sakura Maru*”

16:35-16:55 Megumi NAKAJIMA (PhD Student at Graduate School of Humanities, KU)

“The Importance of Motherhood in *The Tale of Genji* and *Harry Potter*: A Comparative Study about Gender in Old Japan and Current Western Culture”

16:55-17:25 < Comments and Q&A >

Daisuke HIGUCHI (Associate Professor at Graduate School of Humanities, KU)

Edward Mack (Associate Professor at AL&L, UW)

17:25-17:45 <General Discussion>

17:45-17:55 <Closing Remark>

Hiroshi OKUMURA (Vice dean and Professor at Graduate School of Humanities, KU)

日本とアメリカ合衆国における日本学

——日本の言語・文化についての比較研究的視座——

日時: 2013 年 2 月 22 日(金) 14:00-18:00 場所: ワシントン大学シアトルキャンパス HUB Room307

共催: ワシントン大学&神戸大学

司会: 沖野真理香(神戸大学大学院人文学研究科 PD 研究員)

14:00-14:10 <開会の挨拶>

Justin Jesty (ワシントン大学アジア言語・文学科助教授)

<研究発表 第1部>

14:10-14:30 五十嵐香里 (ワシントン大学アジア言語・文学科博士課程)

“Success and Hope for the Salaryman: Japan's Economic Miracle and the Comedy of the Crazy Cats and the Drifters”

14:30-14:50 四方俊祐 (神戸大学大学院人文学研究科 PD 研究員)

“A Reappraisal of the Taiwan's Role in the Cold War in the 1950s”

14:50-15:10 楊吟 (神戸大学大学院人文学研究科博士後期課程)

“Offer Expressions in Japanese, Chinese, Korean and English”

15:10-15:40 <コメントおよび質疑応答>

山本秀行(神戸大学大学院人文学研究科教授)

Justin Jesty (ワシントン大学アジア言語・文学科助教授)

15:40-15:55 <休憩 >

<研究発表 第2部>

15:55-16:15 Bonnie McClure (ワシントン大学アジア言語・文学科修士課程)

“Enlightenment and Nonduality in Saigyō”

16:15-16:35 Sarah M. Clayton (ワシントン大学アジア言語・文学科博士課程)

“Dematerialization in Abe Kōbō's *Hakobune Sakura Maru*”

16:35-16:55 中島恵 (神戸大学大学院人文学研究科博士後期課程)

“The Importance of Motherhood in *The Tale of Genji* and *Harry Potter*: A Comparative Study about Gender in Old Japan and Current Western Culture”

16:55-17:25 <コメントおよび質疑応答>

樋口大祐 (神戸大学大学院人文学研究科准教授)

Edward Mack (ワシントン大学アジア言語・文学科准教授)

17:25-17:45 <全体討論>

17:45-17:55 <閉会の挨拶>

奥村弘(神戸大学大学院人文学研究科副研究科長)

Kaori Igarashi

Introduction

In this paper, I propose to look closely at the art of two widely acclaimed comedy groups, the Crazy Cats (*Kureijii kyattsu*) and the Drifters (*Za Dorifutaazu*). My hope is that their particular brand of comedy will give some insight into what seems like a collective decision on the part of Japanese citizens to trade political independence for economic prosperity during the period of the Japanese post-war economic miracle. By the word “independence,” I mean the assumption of an active role in changing their country's social and political structures rather than living like caged birds without questioning the systems that constrained them. Also, I am trying to look more closely at the hopes of the ordinary people depicted in the works of the two groups.

Not only does their comedy reflect the history of the period; we can also assume that the laughter they evoked means that the premise of their comedy was shared with the audience.¹ Henri Bergson writes:

A man who was asked why he did not weep at a sermon when everybody else was shedding tears replied: “I don't belong to the parish!” What that man thought of tears would be still more true of laughter. However spontaneous it seems, laughter always implies a kind of secret freemasonry, or even complicity, with other laughter, real or imaginary.²

To understand laughter, we must put it back into its natural environment, which is society, and above all must we determine the utility of its function, which is a social one. Such, let us say at once, will be the leading idea of all our investigations.³

Given this perspective, my ultimate goal is gain insight into the shared premise that links the work and the audience and to investigate the era's social history through its comedy. I will discuss these two groups not because their work offered two different responses to the valorization of success and prosperity; they rather illustrate a gradual change in that response. If the Crazy Cats' popularity had lasted from 1960 to 1980, I might have focused solely on that group, but after their popularity dwindled the Drifters took the Crazy Cats' position in 1970s. Both groups were originally comic musical bands. The early works of the Crazy Cats sing in praise of the hope of economic success, a promise of prosperity they traded for a political voice. As represented by a famous phrase in their song, “It's so easy to be a salaryman! (*Sarariiman wa kiraku na kagyō to kitamonda*),” what they wanted was jobs that provided a stable income and a better standard of living without much effort from them. With so much potential for success, the expense looked worthwhile. However, the optimistic attitude did not last long. Hope seemed to decline. Later works by the Crazy Cats are much more sinister and sarcastic about economic prosperity, and especially about money itself: “Money, money, brilliant and shiny” (*Kane da kane dayo kinkira kin no kin*), they sang. Hope, which was regarded as reasonable within the given social and economic system, was actually not realizable without changing the system. Without the active participation of political subjects, the system grew more entrenched, and it was more difficult for people to realize their hopes. The Drifters sang less about hope than about dreams; their songs gave voice to those who knew that they would not be able to realize their hopes, and who passively accepted the status quo.

1 Angelo Restivo departs from a reflectionist position and characterizes films as “a highly charged historical conjuncture” in his book *The Cinema of Economic Miracle*. Angelo Restivo, *The Cinema of Economic Miracles*, Duke University Press, 2002, p. 4.

2 Henri Bergson, *Laughter: An Essay On The Meaning of The Comic*, translated by Cloudesley Brereton and Fred Rothwell, Macmillan, 1914, p. 6.

3 Ibid., pp. 7-8. Quoted in Junji Yoshida's dissertation, *Origins of Japanese film comedy and questions of colonial modernity*, 2006. He uses the quote in support of a different argument. Although I did not cite his dissertation in this paper, it taught me much about the close relationship between Japanese comedy and nation building in the Meiji period onward.

In my discussion, I will focus on the depiction of the salaryman (*sarariiman*) in the works of the two comedy groups. “Salaryman” is defined as “salaried, white-collar, permanent, male employees of private-sector organizations.”⁴ The term was first coined after the First World War, but it was during the post-Second World War decade that it came to stand for the ubiquitous everyman of Japanese industry.⁵ The “salaryman” as a demographic group is especially interesting in relation to consumer culture in terms of their predominance in the population and their role as a decisive force of consumer activity. Salarymen made up a large portion of the workforce. The rate of salaryman-type employees among all workers increased from 43.5% in 1955 to 70.0% in 1975.⁶ And they held purchasing power. Television, one of the three major home appliances spread during the economic miracle, first spread among restaurants, where they were used to attract customers, and then among the households of professionals and employees, who had higher incomes than other types of workers.⁷ Because of the important role the salaryman played in consumer culture, it is worth looking in detail at a series of “irresponsibility” films made by the Crazy Cats which center on the life of the salaryman.

In order to read the works of the two groups to examine their reaction to Japan’s embrace of economic prosperity, I structure this paper as follows. First, it will be necessary to provide a basic introduction to the work of the Crazy Cats and the Drifters. In spite of their popularity in Japan, they are virtually unknown to English-speaking audiences. I was not able to find any English translations of the Crazy Cats’ films or the Drifters’ short comedy sketches, nor could I find any academic studies of the two groups.

Next, I give a brief history of the political and social events of the 1960s and 1970s—one of the most turbulent periods in modern Japanese history—to lay out the background of the two groups’ work. Then I analyze four aspects of their work: happiness; “irresponsibility” and the system; economic prosperity; and their imagined future.

The Crazy Cats and the Drifters

The phenomenally popular comic band the Crazy Cats was regarded as a symbol of Japan’s post-war economic miracle.⁸ Originally called the Cuban Cats, they were more of a jazz band than a comedy group. The six male members of the Crazy Cats had all been members of other jazz bands before establishing the Crazy Cats in September, 1957.⁹ It is worth noting that the members were jazz men before they were comedians. During the period when the members were individually establishing their careers, Japan was in the midst of a jazz fad that had started around 1952, an extraordinary phenomenon in Japanese entertainment history.¹⁰ Michael Molasky argues that jazz cannot be ignored in any discussion of Japanese post-war cultural history.¹¹ Jazz musicians were, in a sense, on the frontlines of contemporary culture. According to Molasky, any type of upbeat music from the U.S., such as swing jazz, dance music, or even Hawaiian music, was referred to as “jazz.” Then, with the advent of “modern jazz” around 1957, which was regarded as more difficult to understand than “jazz,” the jazz boom declined.¹² The change in the jazz fad seems to have led to a shift in the emphasis of the Crazy Cats’ career.

In 1959, the group was given its own regular TV program, “Manga for Grown-ups” (*Otona no manga* おとなの漫画), which led to a significant increase in their popularity.¹³ Another TV program, “Soap Bubble Holiday” (*Shabondama horidee* シャ

4 Sandra Buckley, *Encyclopedia of Contemporary Japanese Culture*, Routledge, 2002, s.v. “sarariiman.”

5 Ibid.

6 *Waga kuni no omo na shakai keizai shihyō no sui* わが国の主な社会経済指標の推移, accessed on December 5, 2012, <http://www.whakusyo.mhlw.go.jp/wpdocs/hpaz199801/b0010.html>

7 Ishikawa Ken 石川研, “Kōdo keizai seichōki no minpō terebi no tenkai to kokumin seikatsu no henka. 高度経済成長期の民放テレビの展開と国民生活の変化,” *Kokuritsu rekishi minzoku hakubutsukan kenkyū hōkoku* 国立民族博物館研究報告 171(2011): 138-40.

8 Introduction by Suzuki Keisuke in the liner notes for *Kureijii: Ōgon sakusen*, DVD, directed by Tsuboshima Takashi (1967; Tōhō, 2006).

9 Toi Jūgatsu 戸井十月, *Ueki Hitoshi den: Wakkacha irukedo yamerarenai!* 植木等伝「わかつちやいるけどやめられない!」, Shōgakusan, 2007, p.94. Another member, Sakurai Senri, joined in 1960.

10 Ibid., p. 69-70.

11 See Molasky 2005.

12 Molasky, *Sengo nihon no jazu bunka* 戦後日本のジャズ文化, Seido sha, 2005, p. 136.

13 Introduction to the Crazy Cats in the supplemental material for *Sūdara bushi: Wakaccha irukedo yamerarenee*, DVD, directed by Yuge Tarō (1962; Kadokawa eiga kabushikigaisha, 2005).

ボン玉ホリデー), started in 1961 and lasted until 1972.¹⁴ After the smash hit song, “The *sūdara* song” (*Sūdara bushi*, 1961), they started a career in films.

The late period of the group’s prime overlaps with the rising popularity of the Drifters, who were active as a musical band until around 1970. They had a good relationship with the Crazy Cats, probably because they shared the same production company, Watanabe Productions, which worked to ensure that the Drifters would be able to fill in for the Crazy Cats when the Crazy Cats became too busy. Ikariya, the leader of the Drifters, recalls in his book that the Crazy Cats’ leader, Hana Hajime (ハナ肇), gave the Drifters members’ their stage names at a birthday party thrown for the company’s president.¹⁵

Although the Drifters, a five-man group, were famous more as a comedy group than as a musical band, they were still very successful as a band; they opened for the Beatles when the Beatles toured Japan in 1966.¹⁶ Films starring the group were made during the late 1960s and the first half of the 1970s.¹⁷ A historic TV program, “It’s 8 o’ Clock! Come On, Everybody!” (*Hachiji da yo! Zenin shūgō* 8時だヨ!全員集合) started in 1969. It was a live variety show consisted of short comedy sketches and music. The program was enjoyed by people over a broad age range and earned high ratings. At their highest, ratings hit 50.5%, which meant that almost half of Japanese households with a television were watching the show.¹⁸ Teachers regarded the show’s brand of comedy, which included hitting, wasting food, and dirty jokes, as harmful for children.¹⁹ Elementary school children loved it.

The program’s popularity dwindled and it was canceled in 1985 as a different mode of comedy was introduced by a new variety show on a different TV station that starred the comedian Kitano Takeshi, now an internationally well-known film director. Along with “It’s 8 o’ Clock! Come On, Everybody!” “The Drifters’ Big Laugh (*Dorifu daibakushō* ドリフ大爆笑)” was another popular variety show by the group. This one has enjoyed a longer life than “It’s 8 o’ Clock!” and survives in re-runs even today.

A brief social background of the period between the 1960s and the early 1970s

The period between 1955 and 1970 was one of great upheaval.²⁰ As the formal U.S. military occupation ended in 1952, the Japanese government started acting on its own initiative, although the political party structure had been put in place by GHQ (General Headquarters).²¹ Referred to as the “special procurement boom” (*tokuju keiki*), the first wave of the economic miracle was the period between 1950-53, when ordinary Japanese citizens were able to think for the first time about something more than everyday needs like food and shelter. As the 1956 Economic White Paper announced, “Japan is no longer in the post-war period.” Japan’s recovery from the aftermath of defeat was an established fact. To give some sense of the flavor of the era, 1954 was the year that the first Godzilla movie was screened and the year Marilyn Monroe visited Japan for her honeymoon with Joe DiMaggio.²² The Liberal Democratic Party of Japan was formed in 1955 and became the dominant political party in a political system called “the 1955 system” (*55 nen taisei*) that lasted until the 1990s. Cold War strategy meant that Japan was now regarded more as an ally of the U.S. than a defeated opponent.

The revision of the Treaty of Mutual Cooperation and Security (often referred to by its abbreviation, *Anpo*) between the United States and Japan caused an unprecedented scale of civil protest in 1960.²³ These protests were not those of small

14 Ibid.

15 Ikariya, Chōsuke いかりや長介, *Dameda korya: Ikariya Chōsuke jiden* だめだこりや: いかりや長介自伝, Shinchōsha, 2001, p. 70.

16 Liner notes for *Za Dorifutaazu, Dorifuda yo! Zenin shūgō* (Red), 2000, by Tōshiba EMI kabushikigaisha, TOCT-24482-83, Compact disc.

17 See Hara Kentaro 原健太郎 and Nagataki Takahito 長瀧孝仁, *Nihon kigeki eigashi* 日本喜劇映画史, NTT shuppan, 1995, for details.

18 Liner notes for *Za Dorifutaazu kessei 40-shūnen kinen ban: Hachiji da yo! Zenin shūgō* 1, DVD. Ponii kyanion, 2004.

19 According to Ikariya, anti-Drifters sentiment by teachers coincided with the period of their greatest popularity. Ikariya wrote that the Drifters’ prime was in 1973 and the bashing was heated at that time. Ikariya, 2001, p. 134.

20 Munroe, “Postwar Japanese photography and the pursuit of consciousness” in *Daidō Moriyama: stray dog*, San Francisco Museum of Modern Art, 1999, p. 31.

21 Miyazaki Ryūji 宮崎隆次, “Sengo hoshu seiryoku no keisei 戦後保守勢力の形成,” in *Sengo kaikaku to sono isan* 戦後改革とその遺産, ed. Nakamura Masanori 中村政則, pp. 195-231, Iwanami Shoten, 1995.

22 Liner notes for *Kureijii kyattsu derakkusu* クレイジーキャッツデラックス, DVD, 1984, Tōhō kabushikigaisha, 2005.

23 The original treaty was signed in 1951 as the “Treaty of Peace with Japan” or the “Treaty of San Francisco.” The treaty gave the U.S. the right to maintain military bases in Japan.

political or ideological groups. Hosaka Masayasu testifies that ordinary people such as taxi drivers, small retail business owners, and housewives supported the demonstrations despite the fact that the protests caused significant upheaval to their businesses and activities.²⁴ Great numbers of students assembled, encircled the congress building, flooded into it, and demonstrated loudly. The demonstrations ended up being suppressed by the police. The treaty was approved in the Diet by forcibly removing opposing party members. The cabinet of Kishi Nobusuke resigned after the incident and Ikeda Hayato's cabinet was inaugurated one month later. The cabinet announced the Doubling the National Income in Ten Years Plan in December of that year.²⁵

Disappointed, the attention of the Japanese population turned from politics to business.²⁶ The following year, the groundbreaking TV show called "Soap Bubble Holiday" (*Shabondama horidei*) appeared, which featured the Crazy Cats. Tokyo was full of construction projects in preparation for hosting the 1964 Tokyo Olympics, an acknowledgement of Japan's new status as an established nation. The Japanese population was allowed to travel overseas around 1964. During the 1950s and 1960s, pollution became a serious social problem. The Vietnam War intensified around 1965, eliciting sympathy from the Japanese population and giving rise to student demonstrations. The protests grew more violent and, in 1969, a student was killed by police at a demonstration at the University of Tokyo.

In 1970, the World Expo was held in Osaka, and half the Japanese population visited the exhibition. Its representation of an official narrative of industrialized Japan's future became a target of attack by some artists who resisted the official line. The 1973 Oil shock marked the end of Japan's economic miracle.²⁷

Why so happy?

The Crazy Cats' films and songs, especially those from the early stages of their career in the early 1960s, are extremely upbeat. Many of the works center on the life of the salaryman. The films are some of the many salaryman-comedies made by the film company Tōhō during Japan's economic miracle.²⁸ Because the salaryman was a company employee, his success and happiness were usually linked to a promotion or the attainment of high status in a company (*shusse*), which would bring him affluence as well as status.²⁹ In this section, I would like to look at what the era considered necessary for happiness, and the prospect of success as perceived by the characters in the Crazy Cats' films and songs.

A hit song performed by Ueki Hitoshi (植木等), "The Sūdara Song" (*Sūdara bushi*, 1961), marks the beginning of the Crazy Cat's most successful decade.³⁰ It was composed by Hagiwara Hiroaki 萩原哲晶 and the words were written by Aoshima Yukio 青島幸雄, who was a TV program writer, songwriter, and actor—and also a politician and the Governor of Tokyo from 1995 to 1999. The music is playful, and conveys a folk-song-like quality. Here are the lyrics with a translation:

24 *Anpo: Art X War*. Directed by Linda Hoaglund (ANPO Movie, LLC, 2010). Around 32:30 of the film.

25 Alessandra Munroe talks about 1960 anpo crisis and artists' response to it. Munroe 1994, pp. 150-54.

26 Yoshimura, Katsumi 吉村克己, *Ikeda seiken 1575 nichi* 池田政権・1575日, Gyōsei mondai kenkyūjo shuppankyoku, 1985, p. 63.

27 I owe my understanding of this period to Professor Justin Jesty's lectures at the University of Washington in 2012.

28 For salaryman-comedies, see Hara and Nagataki 1995, pp. 134-35.

29 *Shusse* means "entering society." Used in a broad sense, it means "to be influential in society." For example, becoming a Diet member would constitute *shusse*.

30 Carolyn S. Stevens briefly talks about this song and Ueki Hitoshi in her book. She focuses on the meaninglessness of the lyrics. Carolyn S. Stevens, *Japanese Popular Music: Culture, authenticity, and power* (Routledge, 2008), 136.

Choi to ippai no tsumori de nonde Itsu no mani yara hashigo zake Kigatsukya hōmu no benchi de gorone Koreja karada ni iiwakya naiyo Wakaccha irukedo yamerarenee A hore suisui sūdararatta Surasura suisuisui Suisui sūdararatta Sūdararatta suisui Neratta ōana migoto ni hazure Atama katto kite saishū reesu Kiga tsukya bōnas (w)a sukkarakan no Karakara Uma de kane mōke shita yatsa naiyo Wakaccha irukedo yamerarenee *repeat Hitome mita ko ni tachimachi horete Yoseba iinoni sugu te wo dashi te Damashita tsumori ga choi to damasareta Ore ga sonna ni moteru wakya naiyo Wakkacha irukedo yamerarenee *repeat	I was just going to have a quick one, But I found myself on a pub crawl and Woke up on a bench at the station. It's not so great for my health I know it's no good, but I can't quit. A hore suisui sūdararatta Surasura suisuisui Suisui sūdararatta Sūdararatta suisui The dark horse I bet on lost by a mile. I blew a fuse and bet on the last race. My bonus disappeared Like a drop of water on a hot griddle. No one makes money on the horses! I know it's no good, but I can't quit *repeat Caught a glimpse of a girl and Fell like a ton of bricks. I knew better, but I went for it anyway. I thought I'd have her but she had me instead. I strike out every time. I know it's no good, but I can't quit *repeat

Besides the fact that the song was used in the film *Sūdara song: I know it's no good but I can't quit* (*Sūdara bushi : Wakaccha irukedo yamerarenee* スーダラ節：わかつちやいるけどやめられねえ, 1962), about a young salaryman looking for success in a company, the lyrics themselves suggest the life of a salaryman. To have a beer or some sake with colleagues on the way home was one of the typical behaviors of the salaryman, and the bonus mentioned in the second verse is indicative of a salaryman's life, too.

Being drunk and sleeping on the bench of a platform of a train station is not respectable behavior, and the singer knows it. If the lyrics were written in serious language, they might convey a different story. But they are full of slang such as *choito*, or euphonic changes like *kigatsukya* instead of *kigatsukeba*. The last line of the refrain, "I know it's no good, but I can't quit," deflects rebuke. The singer acknowledges his behavior rather than resolving to change it, and the nonsense mimetic words that follow, *sui sui*, suggest swimming freely and cheerfully without obstruction. The singer loses all his money in the second verse and is deceived by a woman in the third verse, but still there is no sign of regret or pessimism. Ueki's performance only reinforces this effect. He laughs his way through lines like, "There's no way this is good for my health." The total effect is so lively and funny that listeners might feel they have never heard such a happy (or crazy) song.

The song's effect is jarring when considered against the backdrop of the era's complex social and political circumstances. It is difficult to think of *Sūdara bushi* as merely a happy song, and to consider that a happy song won such popularity. The song's composer, Aoshima Yukio, later became a politician. It is hard to think that he was ignorant of the political and social situation.

The beginning of the film *Sūdara bushi* is ironic in the extreme. Ueki, dressed as an announcer in a dark suit, says, "The film you are going to watch deals with the social problems of Japan today. Please watch attentively all the way to the end."³¹ Short film clips of nuclear tests by the U.S. and U.S.S.R. play on the screen while the emcee narrates, "On October 30, 1961, the Soviet Union tested a 50-megaton hydrogen bomb in Siberia. In response, the United States tested a bomb in the South Pacific on December 10. Stop it, please! What about the Japanese, who are between these deadly ash piles? Mr. Kennedy! Mr. Khrushchev! If you continue, the earth will be destroyed!"³² A film of a conversation between Nikita Khrushchev and John F. Kennedy follows. The emcee continues, "The translation of their conversation is..."³³ and the title of the movie, "I know it's

31 "Minasan korekara omenikakemasu eiga ha gendai nihon no shakai jōsei wo kiwamete shinkoku ni egaita monogatari de arimasu kara dōka saigomade seishuku ni goran ni natte kudasai."

32 "1961-nen 10-gatsu 30-nichi Sobieto renpō wa shiberia chihō ni oite 50-megaton no suisobakudan jikken ni seikōshita. Tsuzuite 12-gatsu 10-ka Amerika wa minami taiheiyō ni oite dōyō kakubakuhatsu ni seikōshita. Sore wo kikkake ni hutatsu no kuni wa hariatte – aa mō yametekure. Shi no hai no tanima ni iru nihonjin was dōnarun desu yo. Kenedii –san Furushichofu-san konomama de wa chikyū ga bukkoware te shimaimasu yo."

33 *Tadaimano kaiwa wo hon'yaku itashimasuto.*

no good, but I can't quit," is displayed in the clip as if it were a subtitle. The comic font style exaggerates the joke's stupidity. The happy melody starts while the scene shifts to an amusement area full of neon signs. What is being satirized in this lurid rendering?

A contemporary film critic, Ogawa Tōru (小川徹), wrote an analysis of Ueki Hitoshi in 1963.³⁴ He discussed the dual nature of Ueki and his art. Ueki, along with the contemporary star Ishihara Yūjiro (石原裕次郎), represented a new type of star with an overtly bad-boy image. But they were not identical. Unlike Ishihara, Ueki had a pale, clean face more like pre-war matinee idols. His songs sometimes sounded like war songs, or pre-war-era nonsense songs. Ogawa sees continuity from pre-war culture in both Ueki's appearance and his songs. At the same time, he refers to occasional abrupt changes in tone or register in the middle of Ueki's songs. For example, the song *That's It (Hai soremade yo, ハイそれまでヨ)*, 1962 starts out with, "You are my everything. Please, please don't go," with romantic lyrics set in a minor key, just like a typical conservative love song of the era. The song then modulates to a major key, and new lyrics imply that the singer, a woman, has learned that she has been nothing but a money tree for the man who spoke the words of the first line to her. The song ends with her farewell: "Nuts to you!" Ogawa reads these abrupt transitions from pre-war sentimentality to modern cynicism as subversion of the cherished sentiments of the pre-war and the war years.

Matsubara Ryūichirō (松原隆一郎) uses Ueki Hitoshi to understand the "economic miracle" of Japan.³⁵ He also mentions the duality Ueki embodied. Ueki's appearance projected an image of an "irresponsible" person, but his personality was serious and honest.³⁶ Matsubara argues that audience in the post-war Japan sympathized with this contradiction and hoped to overcome it. He also discusses Ueki's betrayal, his "irresponsibility" toward fellow Japanese who died in the war. Those Japanese who had contributed to suppression and censorship during the war—efforts which contributed to the war's support among the civilian population—drastically changed their behavior upon defeat, enjoying Jazz, American cars, alcoholic drinks introduced from the West, and showing off their acquisitions. Matsubara saw this behavior as a betrayal of those who had died in the war. Ueki's image of irresponsibility, he argued, helped those who had been complicit during the war reconcile their feelings of guilt and promoted the acceptance of American consumerism as a way to establish the Japanese economy.

The duality Ogawa and Matsubara see in Ueki's stage persona as well as in the work of the Crazy Cats is persuasive, and so is the idea of the pre-war elements on one side and its rejection after the war on the other. However, I do not read Ueki's irresponsibility as either a means of atoning for the past or else as a model for avoiding responsibility for those who died in the war. I understand it rather as an expression of the feeling of being secure and having the opportunity for success within a given structure they could not change—like a caged bird. Salarymen could aim to be a president of a company, or could dream of having a happy family living in modern *danchi* housing with their own bathroom, a flush toilet, and a dining and kitchen area.³⁷ But salarymen were permitted to dream about being company presidents precisely because the Japanese government was at that time promoting economic growth by announcing the Income Doubling Plan to distract them from any political interests they may have had at the time, while their dream house *danchi* were provided by the government-affiliated corporation called Nihon jūtaku kōdan (Japan housing public cooperation, 日本住宅公団). In addition, it is worth remembering that the Japanese government's policy was also "free" only within the framework established by the U.S. Keeping these aspects in mind, let's look at *Donto bushi*, another song used in a film called *The salaryman's donto song: What an easy job a salaryman has!* (*Sarariiman donto bushi: Kirakuna kagyō to kitamonda* サラリーマンは気楽な稼業ときたもんだ).³⁸

34 Ogawa 1963.

35 Matsubara 2007.

36 There are many anecdotes about Ueki's honest, sincere personality. He was the son of a priest and received training to be a monk, which made him reluctant to enjoy female companionship even after becoming a jazz musician. Toi 2007, p. 50. Kamoshita Shinichi, a TV director, recalls being told by Watanabe, the president of the Drifters' production company, to make sure to laugh while Ueki was rehearsing. According to Watanabe, Ueki was very shy and unwilling to do comedy. Without the laughter of his crew and co-workers during rehearsal, he could not perform. Satō 2010, p. 81.

37 *Danchi* were provided starting in 1955. *Danchi* living changed the Japanese way of living; previously, sleeping space and eating space had not been considered separate spaces. Matsubara 2007, p. 137.

38 Directed by Edagawa Hiromu and written by Takahashi Niisan (1962; Kadokawa eiga kabushikigaisha, 2005. Originally written by Aoshima Yukio.

Sarariiman wa Kiraku na kagyō to kitamonda Futsukayoi demo nebokete ite mo Taimurekōdaa gachan to ose ba Dōnika kakkōga tsuku mono sa Ha chokkora choi to Paa ni wa narya shinee a sore *Don to ikō ze don to ne Ha dongara gatta Donto donto ikimashō Sarariiman wa Kiraku na kagyō to kitamonda Shachō ya buchō nya naresō mo nai ga Teinen nante no wa mada saki no koto Keirin keiba ni pachinko maajan Makerya yakezake mata shakkin A sore *Repeat	What an easy job A salaryman has! Even if you have a hangover or you're half asleep, Once you punch in, Everything will be fine. Little things don't matter. a sore *Let's go, let's go, let's go! Ha dongara gatta Let's go, let's go, let's go. What an easy job A salaryman has! I'll never be a president or a director, But I won't retire for years, there's no need to worry yet. Even if I lose money at the track, on the horses, pachinko, or mah-jongg, I just get an advance and tie one on to make up for it. Hey! *Repeat

The song says that the salaryman has an easy job no matter what the reality is. In retrospect, we can be sure it was not so easy. However, what is striking is that the protagonist believes in the safety of his life as long as he is a salaryman. In other words, as long as he is protected within the structure of the company, he is safe, as the words *Chokkora choito paa ni wa narya shinee* suggest, and he is free to behave as irresponsibly as he likes, drinking enough to have a hangover the next day, or dozing off during work. He never has to worry about the risk of being fired, or about the company's going bankrupt. If he were to lose the safety net of company security after he retires, he might need to worry, but it is a long way off. These were the circumstances in which many salarymen in Japan found themselves. It's possible to infer that the irresponsibility displayed by the singer and his contemporaries in Japan was not heedlessness toward the deaths of his fellow Japanese, as Matsubara has suggested, but instead was directed toward the attitude they took toward the economic system that circumscribed them. They did not care about the consequences of choosing material wealth over independence or about how the economic system worked, but merely enjoyed the material wealth it brought.

The singer is very happy to be able to enjoy an economically "safe" life even if he has had to sacrifice his political freedom to obtain it. In other words, his behavior can be irresponsible because his success is insured, or to be precise, because he believes in achievability of success. One of the reasons why the early films and songs of the Crazy Cats communicate this sense of giddy happiness could be because of this trust in the future.

However, once the salaryman realizes that the success in his life is not at all as promised, that he may encounter hardship, his behavior is not a laughing matter anymore. We will see the change in the perception of the achievability of success in the songs of the Crazy Cats and of the Drifters' later work further on.

(Ir)responsibility and the system

The first two Crazy Cats films, which both starred Ueki Hitoshi, are called the "Irresponsibility Series." The first, *The Age of Irresponsibility in Japan*, (*Nippon musekinin jidai* ニッポン無責任時代) was directed by Furusawa Kengo in June, 1962. The second, *The Most Irresponsible Bum in Japan*, (*Nippon musekinin yarō* ニッポン無責任野郎), was made in 1962 and also directed by Furusawa Kengo. The main characters of these films are salarymen who excel in the social and communication skills that lead them to success. Success and happiness in the Irresponsibility Series are represented as achievable through active involvement in the social and economic systems of which one is part. The keyword "irresponsible" is particularly interesting. Active involvement looks "responsible" to contemporary eyes. What are "responsibility" and "irresponsibility" in the context of the Crazy Cats?

For individuals to be called responsible, they must be active agents in the social systems in which they participate. Parents are responsible for their children; they decide how many they will have, and how to raise them. Managers are responsible for

the services provided by their companies, and can change the way processes are handled or customers are served if they believe it will benefit the company or the company's customers. Ability to modify the system is a condition of responsibility.

In the case of one who is part of such a system, being irresponsible—being lazy—does not perpetuate the status-quo, but is rather a kind of passive participation in the system. It is participation, but in the form of removing an element from the system rather than adding it.

When one does not participate in a system, it is a different story. The character's presence makes no difference to the system whether he works hard or not. These two types of relationship to the social system can be seen in the Crazy Cats' work as well as in the Drifters' work.

In *The Most Irresponsible Bum in Japan* (*Nippon musekinin yarō*), the hero, Minamoto Hitoshi, does not obey any rules he considers unreasonable. For example, he does not arrive at the office by 9:00 a.m. Yet he never misses a good opportunity to achieve success, even if it involves staying late. When his boss scolds him, he just smiles and says, "It's ok. It's ok."³⁹ In the end, though, he makes this "flextime" work for him and makes a profit for both the company and himself.⁴⁰ Since flextime is not the official company policy (it didn't even exist as a concept at the time), not coming to the office by 9:00 a.m. is regarded as lazy. However, seen from a different aspect, he is challenging and modifying the rules of the system and demonstrating that he is participating in it.

The theme song of the film "The Most Irresponsible Man in the World" (*Musekinin ichidai otoko* 無責任一代男) in 1962, the third single released by Ueki Hitoshi, supports this idea.

Ore wa konoyo de ichiban Musekinin to iwareta otoko Gaki no koro kara chōshi yoku Raku shite mōkeru sutairu	They call me The most irresponsible man in the world. I've been pushing my luck since childhood. Succeeding without effort is my style.
Tamani kaisha ni ite mo desuku ja itsumo inemuri Chikoku ni hayabike zuruyasumi sore demo shachō ni natta	On those rare occasions when I am at the office, I'm sleeping at my desk. I came in late, left early, made up fake excuses But now I'm the company president!
Jinsei de daiji na koto wa Taimingu ni C-chō ni musekinin Tokaku konoyo wa musekinin Kotsu kotsu yaru yatua gokurōsan	The most important things in life are Timing, attitude, and being irresponsible. It's an irresponsible world! Good luck, plodders! You'll need it!

The sly thinking here is that although sleeping at one's desk, coming late, leaving early and making fake excuses do in fact indicate a bad attitude, not following arbitrary rules and leaving the office early to do something more productive also beat the system. And the protagonist's actions lead him to success as the president of the company. The third verse even laughs at those who follow the rules but do not change the system, for they do not fully exploit the privilege they have to modify the system in order to create an easier path to success. According to this vision, the opportunity for success is open to people who exercise it. It could be viewed as an optimistic picture.

The same type of optimism is seen in the film in which the song discussed above is used. In a scene in which the main character starts married life, he and his wife are seated at a table for breakfast. Their conversation reveals that they have separate finances, that they wash their clothes separately, that although the cooking is done by his wife, she requires a handling fee from her husband to do it, and that the husband pays for an additional egg for breakfast. He says, "We are husband and wife, but we're single!"⁴¹ They look very happy and the wife says, "Married life is wonderful!"

The next scene shows Minamoto's colleague with his newly married wife and his mother. The mother is extremely old-fashioned, and suggests that family members should depend on each other, and especially that the wife should do all the housework. The wife expresses her dissatisfaction with her mother-in-law's expectations. In addition, she objects to the

39 *Iikara iikara*, いいからいいから. This phrase is most unusual in the context. It sounds casual, but when the hero uses it, the boss seems to be irresistibly controlled by his words. This is another example of the way he adjusts the rules of the system to suit himself.

40 Matsubara touches upon the idea of flextime in the film. Matsubara 2007, p. 138.

41 *Fūfu to iedomo jinsei wa tannin dakara ne*. 夫婦といえども人生は他人だからね。

mother's insistence on thrift: "We are in an era of mass consumption."⁴² Both the Minamoto character's situation and that of his colleague are extreme; the film makes fun of both of them. However, judging from the happy looks on their faces, the former seems to have the filmmaker's implicit approval.

Other scenes later in the film suggest similar judgments. The Minamoto couple and the colleague couple decide trade houses; the Minamoto couple will live with the colleague's mother. Upon moving in, Minamoto converts the garden of the house into a parking lot to earn additional income over the colleague's mother's opposition. However, the mother takes over as an administrator of the parking lot and becomes livelier, happier, and healthier. She switches from Japanese kimono to what appear to be newly bought Western clothes. She says, "As I work harder in this way, illness stays away from me!"⁴³ In the end, her independence helps her to establish a good relationship with her son and his wife. This is another example of optimism regarding the possibility of achieving success through active involvement and the embrace of Westernization and consumerism. It is worth noting that "success" is defined here as economic or material prosperity and its benefits, such as enhanced professional status and warmer relationships between family members. We may also see the conflict between Japan's traditional family-centered values and the individual-centered values imposed by the U.S. after the defeat of Japan.

The depiction of the salaryman in the Irresponsibility Films annoyed Fujimoto Masumi, a Tōhō film company executive, because it went against the image of a salaryman whose allegiance to his company was paramount and subverted the moral principle that those who strive are inevitably rewarded, both of which Tōhō had been representing through its films.⁴⁴ The next film was forced to change its image of the successful salaryman. The word "irresponsible" was put into the title to modify its meaning.

Crazy Operation: Drop Dead, Irresponsibility! (*Kureijii sakusen: Kutabare musekinin* クレイジー作戦くたばれ！無責任, 1963) was directed by Tsuboshima Takashi. Tanami Yasuo again served as screenwriter. The film is set in a company as in the previous two films, but this time Ueki Hitoshi's character, Tanaka Tarō, is not the irresponsible one. Instead, an executive who is responsible for product development is irresponsible. The newly developed cola he is working on contains a chemical that makes lazy people become loyal and motivated. They test the product on Tanaka Taro, the laziest employee in the company. It's a complete success; he shows leadership and confidence he has never exhibited before.⁴⁵ However, they are later informed that the stimulant chemical has been approved by the government for medical use only, not for soft drinks, so they can not sell the product. The irresponsible executive dodges criticism by placing the blame on an affiliate company. In this film, "irresponsibility" has an unambiguously negative meaning.

This type of irresponsibility differs from the irresponsibility discussed above. The new irresponsibility expects a responsible company employee to carry out only what is demanded by the company hierarchy. The meaning of "responsibility" is reduced to "obeying the rules without fail." The executive should of course have checked the formula of the chemical in advance or, failing that, should have taken responsibility for the costs to develop a product they could not sell. The film provides no space for him to make amends; it is not of interest in the context of the film. The film is more interested in rewarding good and punishing evil. The plot by the "evil" executive comes to light and the suffering of the "innocent" employee ends.

The Irresponsibility Series represents a flexible system, while *Drop Dead, Irresponsibility!* represents harmony in a stable system. This is partly because of the policy change demanded by Fujimoto, the Tōhō executive. But it leaves viewers with the impression that the social systems in which individuals function are becoming more brittle as the 1960s go on. Opportunities for active involvement to modify the system are dwindling, especially when compared with later works by the Drifters.

The 1968 song "Mr. Stumble" (*Zukkokechan* ズッコケちゃん) is about those who find they cannot fulfill others' expectations. Like many of the Drifters's songs, each verse illustrates the experience of a different person, all of whom share a fundamental problem –not reaching a satisfactory level of performance– in spite of the differences in the social groups they belong to. What

42 Tairyō shōhi no jidai yo. 大量消費の時代よ。

43 Koushite isshōkenmei hataraitte iru to byōki no hou de nigete icchau yo. こうして一生懸命働いていると病気のほうで逃げて行っちゃうよ。

44 The liner note for *Kureijii sakusen: Kutabare! Musekinin*, DVD, directed by Tsuboshima Takashi (1963; Tohō kabushikigaisha, 2005)

45 In order to emphasize the difference in the main character's state of mind, the film uses black and white for his unmotivated state and full color for his motivated state.

I would like to focus on here is their own views of their problems.

Zuizui zukkoketa ze zukkoketa ze zuizui *Zukko ke hikko ke zukko ke hii hii Zukko ke hikko ke Tanbo uparratte Tokyo sa kita ga Miru mono me no doku kiku mono mimi no doku Kissaten boring kyabaree Arusaro etosetora Ki ga tsukya ichimomnashi Honto ni oki no doku *repeat Zukko ke hikko ke Daigaku ikanakya shusse wa dekinu Asa kara ban made gariben hon no mushi Yoromeki dorama ni shūkanshi Erehibando ni manga no hon Korehodo benkyō shitemo Daigaku hairennai *repeat Zukko ke hikko ke Menkyo tottashi kumuma mo kata no yo Kyō wa miyo-chan to doraibu shiyōka na Magare nai tomare nai Yūtan kinshi no ikidomari Korede wa itsu made tatte mo Susuma nu koi no michi *repeat Zukko ke hikko ke Shigoto wa dame da ga asobi wa makashitoke Ippatsu shōbu no otoko no jinsei Keirin keiba ni takarakuji Maajan pachinko oichokabu Nakanaka katenai no ga Shōbu no aji nano sa *repeat	Dolt, chump, nitwit, chump, *Nitwit, chump, nitwit, chump. Nitwit, chump, nitwit, chump, I sold up my rice paddies and came to Tokyo. All I see is poison to my eyes, and all I hear is poison to my ears. Cafés, bowling, bars Salons and all the rest. I was broke before I knew it. I'm sorry for your troubles! *repeat Nitwit, chump, Without a B.A., you can't succeed From dawn 'til dusk, I study nonstop. Soap operas, magazines, Rock bands, manga I study so hard but I still Can't get into college. *repeat Nitwit, chump, Got a driver's license and got a car I'll go for a drive with a girl today. Can't turn, can't stop, A dead end with no U-turn, If it keeps going like this I'm not going To get anywhere with her. *repeat Nitwit, chump, I'm no good at work But I'm a master at play. A man's life is a gamble. The bikes, the horses, the lotto, Mah-jongg, pachinko, cards, You lose most of the time, and That's the fun of it. *repeat

The nuance of the word *zukkoke* is difficult to translate. If it is used as a verb, *zukkokeru*, the meaning is a little clearer; it means “to trip” or “to stumble.” But used with nonsense syllables like *zuizui*, *hikko ke* and *hii hii*, the word *zukkoke* conveys a sense of inadequacy, a dolt or a nitwit, a sensibility like the characters in the song. The ex-farmer who wastes his money after moving to Tokyo, the city of consumption, is probably one among many who closed his farmhouse and moved to the city after the enactment of the Agricultural Basic Law (*nōgyō kihon hō* 農業基本法) in 1961.⁴⁶ Since he made his money by selling the rice fields he probably inherited from his parents and ancestors, the money was his only asset and crucial for his future. He could lament and determine to make things better, but all he says is, “I’m sorry for your trouble”—a particularly inappropriate expression because *okinodoku* is used to show sympathy to others, not for one’s own misfortune. In performance, the singer, Katō Cha 加藤茶, laughs at the end of the first verse. The character has no plan to recover his loss. What made him give up on his future?

To modify the system which caused his problems is even harder than in the case of the Crazy Cats films because the system he needs to change is even more monolithic than the company system. What has ruined him is the governmental policies which prioritized industrialization over farming and which promoted mass consumption, and the apparatus of the state which put the policies into practice. Although he is under the control of the system, he cannot participate in it, and his presence is too small to influence it. He is neither responsible for nor empowered to modify the system. All he can do is to accept what has happened and use laughter as an antidote even if what is happened is not what he wants.⁴⁷ In Bergson’s words, laughter gives him “a momentary anesthesia of the heart.”⁴⁸

46 The number of farmhouses decreased from 6.06 million in 1961 to 5.25 million in 1971. The decrease in population in farming areas was treated as a serious social problem by the mass media. *Kōdo seichō wo kangaeru kai* 2005, p 153.

47 Justin Jesty, University of Washington, personal communication.

48 Bergson writes that emotion and laughter cannot happen at the same time. When one laughs, emotion is put aside. Bergson 1914, pp. 4-5.

The subject of the second verse is a student preparing for entrance exams. He knows that getting B.A. is his ticket to the salaryman track and to the bigger society beyond that. He tries to study but is distracted by tempting entertainments. He does not like to study; he does it because the system requires it. Since he is not a participant, he cannot modify the system to accept an entrant without a B.A. And he knows he cannot pass the exam, no matter how hard he tries. His attitude of passivity and despair echoes that of the first verse. What is particularly interesting in this case is that he does not consider a career that does not require a B.A., such as a mechanic or an artisan. These options would be available for him, but he does not choose them. Although he chooses the student's path with passivity and despair, he is the one who makes the choice, not some other entity such as the government. This process of decision-making parallels the one for a decision which gives priority to prosperity over a political voice. These decisions are made by individuals according to their own interests, but the results does not turns out as they wish; it looks as if they have unanticipated consequences, but to find what they are is beyond the scope of this paper.

This passive acknowledgement can be detected in other works by the Drifters. In a sketch called "If There Were a Bar Run by an Old Sick Guy" (*Moshimo guai no warui izakaya ga attara* もしも具合の悪い居酒屋があったら, date unknown), a salaryman, played by Ikariya Chōsuke, visits a bar run by a sick old man, played by Shimura Ken 志村けん.⁴⁹ The old barkeeper cannot open the bottle of a beer or pour it into the customer's glass properly because of his shaking hands. He drinks the customer's beer and says it revives him. Then he brandishes a knife at the customer with an unsteady hand while he is cooking. Although the service at the bar is unusual, the customer does not leave. He accepts the situation. He does not attempt to challenge the power of the barkeeper. His passivity seems similar to the attitude seen in *Zukkoke-chan*.

Comparing the social interactions depicted in the Crazy Cats and the Drifters' works makes clear the flexibility (or non-flexibility) of the social system in force. As mentioned above, the hero of *The Most Irresponsible Bum in Japan* treats his boss's rebukes lightly when he arrives at the office two or three hours late. In *The Age of Irresponsibility in Japan*, when the hero's boss snaps, "What's going on? You're late on your first day," the hero replies, smiling, "Let's do away with formalities."⁵⁰ This communication suggests that the protagonist and his boss stand on the same ground and compete with each other to get the upper hand.

In the Drifters' case, Ikariya's position as a leader is firmer than that of Ueki's boss. The status of the other members is obviously inferior to Ikariya's, and all they can do is backbite or attempt to destroy the system. Because the position of Ikariya as the leader is one of trademarks of the group, he even sings the following phrases in *Go West*, one of the songs for their TV puppet drama *Fly! The Monkey*.⁵¹ "I am Xuanzang Hsüan...the great leader. Follow me! Obey me!"⁵² Then the members insert an interlude: "So stuck-up!"⁵³ In sketches, Ikariya is almost always the leader while other four members behave in ways that are petty and goofy. Laughter is evoked when at last the other members overthrow Ikariya.⁵⁴ For example, in a sketch about a school trip, Ikariya plays a controlling teacher.⁵⁵ While he's awake, his students obey him, but when he falls asleep, they beat him with washtubs (*senmenki*) in a manner that might be too violent to broadcast today. When the teasing reaches a climax, the sketch ends, leading to a musical bridge and a nonsense dance by the members.⁵⁶ There is no room for the others to modify the hierarchy. They are either objects to be controlled within the system or else they are ignored. The only thing they can do is destroy the system and to be dissolved with it.

We can trace the course of the flexibility of social systems as expressed in the work of the Crazy Cats and the Drifters over time. In the early 1960s, characters in their songs and films participate in the system and see themselves as able to change it to realize success. In the 1970s and on, songs, sketches and films depict characters deprived of the capacity to participate in or change the social system. Instead, they are reduced to filling space, just like packaging material in a box.

49 *Za dorifutaazu kessei 40-shūnen kinen ban: 8-ji da yo! Zen'in shūgō* v. 2, DVD, (Ponni kyanion, 2004).

50 24:00. Buchō-san kataikoto nuki de ikimashō. 部長さん、カタいこと抜きでいきましょう。

51 *Tobe! Songokū*. 飛べ! 孫悟空. Broadcasted from October 1977 to March 1979 by TBS. Liner notes, *Za Dorifutaazu, Dorifu da yo! Zenin shūgō* (Blue), 2000, by Tōshiba EMI kabushikigaisha. TOCT-24484-85..

52 *Watashi ga Sanzō...Erai riidaa*. Tsuite kuru no da iukoto kikunda zo. わたしが三蔵...えらいリーダー ついてくるのだ 言うこときくんだぞ

53 Ibid. Errasō ni ettara sōu ni

54 Takazawa Eiichi. Cited in Hara and Nagataki 1995, p. 195.

55 Date unknown, but judging from the appearance of the members, it would be late 1970s or early 1980s.

56 In many cases, even the stage sets start to be dismantled.

We have discussed works from the early 1960s and 1970s. Now I would like to look at characters in works from the middle 1960s.

Unlike the Crazy Cats' early 1960s films, their films from the mid-1960s require their protagonists to exercise not only their own will, but also to have some supernatural power to modify a given social situation. The success of the main characters is brought about not just by realistic means, but by fantastic elements. For example, in *Drop Dead, Irresponsibility!* (*Kutabare musekinin*, 1963), as we have seen earlier, the timid, lazy main character drinks a cola which contains a mysterious drug intended to make him strong and motivated, which leads him to success. In *Crazy Adventure* (*Daibōken* 大冒険, 1965), the setting is not a company. The main character plays an active role in catching an international counterfeit group. In the 1966 film *The Most Perceptive Man in Japan* (*Nipponichi no gorigan otoko* 日本一のゴリガン男), the protagonist injures his head, then undergoes complicated brain surgery that inadvertently makes him much smarter. He becomes successful with his superhuman brain.

The setting of *Las Vegas Free-for-all* (*Crazy ōgon sakusen* クレイジー黄金作戦, 1967) is outside of Japan. None of the main characters is a salaryman; they are a monk, a politician, and a doctor, and so are not chained to the restrictions of a salaryman's code of behavior. In *The Crazy Ghost Thief Jibago* (*Crazy kaitō jibago* クレイジーの怪盗ジバゴ, 1967), the main character is a magician-like figure from a foreign country.

We know that the later installments of film series tend to be over the top. The ever more chaotic scale of the Crazy Cats' films could be an example of this. However, the use of drugs or devices like superbrains might possibly suggest that success had started to be considered something that could not be realized with means that were within the reach of ordinary people, like flattering the boss or using tact as the salarymen did in the Irresponsibility Series. Situated between the flexible social systems of the early 1960s and the less forgiving systems that emerged in the 1970s and onward, films in the mid 1960s depicted the increasing inability of changing social systems to guarantee success.

What about economic prosperity?

The protagonists in the Irresponsibility Series, who had already attained high positions in their companies, enjoyed lavish lifestyles and the company of beautiful girls. Once a person has enough wealth, though, the desire for "more" is not related to his needs or success; it is mere attachment. *Las Vegas Free-for-all* (*Kureijii ōgon sakusen*, 1967) pokes fun at the desire for money.

Directed by Tsuboshima Takashi and written by Tanami Yasuo, this film was unconventional in many aspects. It was made to celebrate the thirty-fifth anniversary of the movie company Tōhō. In the 1960s, films were usually paired with another film in a double feature, but at two hours and thirty-seven minutes, this one was so long it had to be shown by itself. It was filmed on location in Hawaii and in the western U.S., the first time a Japanese film had been shot in a foreign country. The cost to make the film was ¥180 million in 1960s yen. It earned ¥340 million and drew 2.9 million people. The famous scene of the Crazy Cats singing and dancing on the main street of Las Vegas is said to be one of the most successful of any of the films they made.⁵⁷

The film is about a monk (Ueki Hitoshi), a politician (Hana Hajime ハナ肇) and a doctor (Tani Kei 谷啓). The monk is actually a notorious gambler heading to Las Vegas. The other two go to Las Vegas for their own reasons, but join the monk after they lose all their money. Because they are broke, they have to walk to Las Vegas from the outskirts of Los Angeles. The following two songs are sung in the film as a medley when they finally arrive at Las Vegas.

57 Introduction by Suzuki Keisuke in the liner notes for *Crazy: Operation Gold* (*Kureijii: Ōgon sakusen*), DVD, directed by Tsuboshima Takashi (1967; Tōhō, 2006).

Hello Las Vegas (Harō Rasubegasu)

Rasubegasu Rasubegasu Rasubegasu Tō tō tsuita ze rasubegasu Yappari atta ze rasubegasu Mattete kuretake rasubegasu Kureijii rasubegasu harō Harō ribiera Harō werukamu Harō rüretto Heei! gō! Kane wo tsukuru nara rasubegasu Kasegi makuru ze rasubegasu Kane nanka nakute mo rasubegasu Byūtifuru wandafuru Maabarasu rasubegasu Kane da kane dayo kane kane Kane ga uchū wo mawashiteru Kane sae areba ōkei! Kane ga nakereba nō! Harō! Rasubegasu Ieesu! Rasubegasu Gatten rasubegasu hao! Rasubegasu! Tōtō tsuita ze rasubegasu Mattete kureta ze rasubegasu Dōn to ikōze rasubegasu Byūtifuru wandafuru Maabarasu rasubegasu Rasubegasu rasubegasu Kureijii rasubegasu harō!	Las Vegas Las Vegas Las Vegas We've finally arrived in Las Vegas We knew it was there Las Vegas was waiting for us Crazy Las Vegas, hello Hello, Riviera! Hello! Welcome! Hello! Roulette! Hey! Go! Want to make money? Las Vegas I'll strike it rich! Las Vegas Don't have a dime? Las Vegas Beautiful, wonderful, Marvelous Las Vegas Money! Money! Money! Money! Money makes the universe go round With money, everything is OK! Without money, everything is No! Hello, Las Vegas Yes, Las Vegas Of course, Las Vegas, hao! ⁵⁸ Las Vegas! We're finally in Las Vegas We knew there was a Las Vegas Las Vegas was waiting for us Upwards and onwards, Las Vegas Beautiful, wonderful, Marvelous Las Vegas Crazy Las Vegas, hello! ⁵⁹

Money, Money (Kane da kane dayo)

Kane da kane dayo kinkira kin no kin Manee gōrudo kinkira kin no kin Kane no tamenara inochi mo iranee Kane ga sekai wo mawashiteru Kane sae kurerya kinkira kin no kin Iesu saa Kane da kane dayo kinkira kin no kin Manee gōrudo kinkira kin no kin Kane arya raku dayo ore demo shūchō Kane ga sekai wo mawashiteru Kane arya honto yo hao hao hao Kane da kane dayo kinkira kin no kin Manee gōrudo kinkira kin no kin Kane sae kurerya tsutome nanka yamechau Kane ga sekai wo mawashiteru Kane ga nai no ga shaku no tane Kane da kane dayo kinkira kin no kin A sore kinkira kinra kira Kinkira kin no kin A sore Kinkira kin no kinkira kin no Kinkira kin no kinkira kin no Kinkirakin no kinkira kin no...	Money, money, brilliant and shiny Money, gold, brilliant and shiny For money, I would throw away my life Money makes the world go round If I can just have some money, that's brilliant and shiny Yes, sir Money, money, brilliant and shiny Money, gold, brilliant and shiny With money, things are easy; I can be the chief Money makes the world goes around With money, it's real. Hao hao hao Money, money, brilliant and shiny Money, gold, brilliant and shiny If I had money, I'd quit my job! Money makes the world go round. The thing that really ticks me off is that I don't have any. Money, money, brilliant and shiny Money, gold, brilliant and shiny Brilliant and shiny That's it! Brilliant and shiny Brilliant and shiny Brilliant and shiny...

The song's characterization of those who are trying to look calm about material wealth but are actually obsessed with it is painfully apt—especially for those who have some sense that they may have sacrificed something important, such as freedom or life, in order to get more. The language is part of the message. *Kinkira kin* suggests a fake shine on a surface. *Kinkira kin* is

58 In the film, the monk, the politician, and the doctor make friends with a native American played by Ishibashi Eitarō, one of the members of the Crazy Cats. “Hao” is used here as the Native American greeting. It would be considered racist today, but was acceptable then.

59 Because many of the Crazy Cats' songs were used in one or more films and not recorded to sell as music, the lyrics tend to exist in several versions. I used two versions of “Hello, Las Vegas” for the translation here. The first half is followed by “Money, Money”, and then the second half of “Hello, Las Vegas” is performed in the main street in Las Vegas.

usually used in a negative sense, to depict something that's felt to be too shiny. If the speaker were non-judgmental, he might have chosen a word more like *kira kira* to describe it. *Kinkira kin* suggests the speaker's judgment—that the shine seems fake or tacky. The Crazy Cats' dance is also mocking; they twinkle their hands over their head to go with “shiny” as if they are kids are dancing to *Twinkle Twinkle Little Star*. The dance and song by all seven members of the Crazy Cats on the main street of Las Vegas laughs at money and at the attachment to the money, at the commercialism instilled by the U.S. and embraced by Japan. The location—Las Vegas—is symbolic, too. It is the center not of politics, but of money and consumerism in the U.S. In addition, Hana Hajime's remarks in the interlude between “Money, Money” and “Hello, Las Vegas,” have some interesting suggestions to make about the U.S.-Japan relationship. His character, the politician, says in an authoritative tone to other members, “Hey! This isn't Japan! This is Las Vegas! Be serious!”⁶⁰ This implies a hierarchy: U.S. first, Japanese authority (Hana Hajime) second, and the Japanese people (the other six members of the Crazy Cats) third. Japanese people seemed to identify with Americans in terms of consumerism, but confronted the U.S. itself with nervousness and a sense of subordination.

What I think is worth noting in this sequence is that what the scene satirizes is not the U.S., or even Japan, but the characters themselves. The monk, the politician, and the doctor are all expected to appreciate something more than money, but they march to Las Vegas and sing about their attachment to money and the way it can overcome difficulties without attempting to hide their greed.⁶¹ They acknowledge their choices and behaviors, they know something is wrong with them, but they also know they have made their own choices, even if they have made them reluctantly. As a result, they mock themselves.

Bright future as promised?

As we saw above, the films and songs of the Crazy Cats' earlier career were full of energy and a sense of happiness reinforced by the trust that the future would bring economic success. But was success really achieved or available for all? The characters in the following songs do not seem to have achieved the success that was promised to them.

The Drifters published “The tsun tsun song” (Tsun tsun bushi) in 1971. It is about a failed elementary school child, a failed secondary school student preparing for entrance examinations, a failed salaryman, a failed jobless worker, and a failed husband—five failures that might make up a single life. The failure seems due to circumstances rather than the individuals' attitudes; they seem to be ordinary people who perhaps did not have any particular talents, but had a certain amount of will to achieve success in life.

60 *Kora! Koko wa nihon ja nainda. Rasubegasu da zo. Majime ni yare!* こら。ここは日本じゃないんだ。ラスベガスだぞ。まじめにやれ！

61 Japanese's overseas travel was tightly controlled. In 1963, business trips under \$500 per year were permitted. The next year under \$500 dollar expenditure per trip was permitted. Then, in 1966, overseas trips that included sightseeing were permitted. The film was made soon after this change. Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism. Accessed on 12/3/2012.

<http://www.mlit.go.jp/hakusyo/transport/shouwa43/ind120403/000.html>

Tsun tsun, tsun tsun, tsun tsun, tsun tsun Boku wa kawaii shōgakusei tsun tsun Kokugo sansū rika shakai tsun tsun Atama no warusa wa papa ni nite tsun tsun Kao no mazusa wa mama ni nitano tsun tsun Boku wa majime na juken sei tsun tsun Mezasu ano mon ichiryū kō tsun tsun Nejiri hachimaki tora no maki tsun tsun Nikibi wo tsubushi te yo ga akeru tsun tsun Tsun tsun, tsun tsun, tsun tsun, tsun tsun Boku wa shiganai sarariiman tsun tsun Sue wa kachō ka kakarichō tsun tsun Machi ni matteta gekkyū bi tsun tsun Toire de kazoe te namidagumu tsun tsun Ore wa fumajime shitsugyōsha tsun tsun Shitugyō teate mo otsu na mono tsun tsun Meshi wa kuinige sake wa tsu ke tsun tsun Shakkin geppu wa fumitaoshi tsun tsun Tsun tsun, tsun tsun, tsun tsun, tsun tsun Boku wa aware na muko yōshi tsun tsun Kekkon kunen me rikon zata tsun tsun Ie tochi kuruma wa tsuma no mono tsun tsun Nabe kama kodomo ga boku no mono tsun tsun Omoe ba risō wa takakatta tsun tsun Dakedo genjitsu hiku kata tsun tsun Kyō koso iikoto arudarō tsun tsun Asu koso iikoto arudarō tsun tsun Tsun tsun, tsun tsun, tsun tsun, tsun tsun	Tsun tsun, tsun tsun, tsun tsun, tsun tsun I am a cute elementary school child. Japanese, math, science, sociology. My dumb head is from my dad, And my ugly face is from my mom. I am an earnest student preparing for entrance exams. My goal is a famous university. I've got a headband and reference books, But when daybreak comes, I'm poking my pimples. I am a lowly salaryman, It's life as a section chief or a unit head for me. I count my long-awaited salary in a restroom stall, And weep. I am a slacker, I'm unemployed. I'm on unemployment, it's not too bad. I eat in restaurants and leave without paying, drink sake on credit, And bilk credit collectors. I am a miserable husband married into my wife's family. We are divorcing in the ninth year of our marriage. The house, land and car belong to the wife. The pots, pans and kids belong to me. When I stop to think about it, my dreams were big, But reality did them in. Maybe something good will happen today. Maybe something good will happen tomorrow.

In the first verse, the child's brain and looks are not very good but there is nothing he can do because they are inherited from his parents. The student in the second verse intends to study to pass the entrance examination, probably because he knows that "without a B.A., you cannot succeed," (as in *Zukkoke chan*) but he avoids studying and wastes his time. The salaryman in the third verse is even more ordinary. He is not devoted or motivated, unlike the characters played by Ueki Hitoshi in the Crazy Cats films. He knows his future is not very bright or he would not be able to earn much more in the future than he receives now. Also he knows that nothing much awaits him although he will be able to maintain the life standard he has now. He weeps in the bathroom but does not take any risks, such as changing jobs, to make his life better. This is because he does not want to relinquish the status he has already achieved, although it is not so impressive.

The unemployed person in the fourth verse seems less typical. His so-what attitude fools us to think he is insincere by nature. But the "*mo*" in the line "*shitsugyō teate mo otsu na mono*" ("I'm on unemployment, it's not too bad [either]") is unexpected. Because *mo* implies other option(s), the line indicates that earning money from a legitimate job is good, but receiving unemployment is not so bad. This person has the will to work, but for some reason he has lost his job. He is an ordinary person who does the best with what he has.

A husband married into the wife's family is rather common in Japan, especially when the bride is from a wealthy family. In that case, the husband is under the control of the parents-in-law. The wealth (indicated by the house, the land and the car) and the freedom (indicated by the car) the marriage offered now belong to the ex-wife, and the drudgery (the pots, the pans and the kids) belong to him. These five characters sustain the image of ordinary people without any particular talents whose lives and futures are dictated by circumstance.

The sixth verse clearly states the gap between the ideal and the real. The characters dream of successful lives, but in reality their failure (and success) has already been dictated by what has been given to them. The effort they make does not seem to make any difference. There is no hope for success here; all they wish is to hold on to what they have.

This "success" is not the success to which the characters in the early Crazy Cats films and songs aspire. It is not the economic success that seemed to be promised in exchange for political independence after the failure of the Anpo protests. The character of the fifth verse is economically "successful", owning a house, land and cars, so long as he maintains his marriage,

but it is not something achieved through his initiative by utilizing “luck, attitude and irresponsibility.” This correlates to Japan’s situation; as long as Japanese citizens submitted to their “parents-in-law”—the state—they could experience some degree of prosperity.

The direction of hope

We saw the possibility of economic prosperity and the attitude toward success indicated by the characters in the works of two comedy groups, the Crazy Cats and the Drifters. In works from the early 1960s, the characters aspired to success, and success was depicted as something achievable through one’s own initiative. In works from the mid-1960s, success was still represented as something available, but it required a supernatural boost to realize; it was more difficult to achieve. In works from around the 1970s, the characters grew less ambitious, and the status quo seemed more attractive than change, because change often meant economic decline.

These changes in the depictions of success and the characters’ reaction toward it indicate a corresponding change in the perception of success among filmmakers and their audiences during the period between 1960 and 1970. Economic prosperity was valued over independence, and the choices of characters meant to represent ordinary individuals in the comedy of the period reflected that. It is ironic that choices made in order to survive often meant that the subject did not survive in the long run. Contemporary consumer society doesn’t seem to offer much more hope.

It might be worthwhile to talk briefly about the depiction of the salaryman today to get some sense of how the salaryman’s hopes grew (or diminished) after the 1970s. A contemporary performing group called the World Order focuses on the machine-like aspects of salarymen.⁶² During the performance the members stay emotionless, creating a single body by working together in the manner of Balanchine’s choreography with a mechanical twist; they walk like robots. They perform in industrial settings such as airports or construction sites and in religious sites such as temples. The inorganic quality of both their music and dance creates a tranquil beauty, but also evokes a sense of introversion and alienation seen in cult religions. Their salarymen do not show any of the kind of hope of success seen in Ueki Hitoshi’s characters, nor any sign of disappointment—probably because the salaryman lacks worldly hope from the beginning. It seems that the space for hope is even smaller for the salaryman depicted by the World Order than it was for the passive salaryman of the Drifters. What has led to this shrinking space for hope and possibility is a topic for future study.

Kaori – I tried to edit the acknowledgments in the text using Track Changes but the file crashed! So I wrote it separately. I hope copying it is not too much trouble.

Acknowledgements

I would like to thank editor Antonia Saxon for capturing the nuances of what I wanted to express and putting them into good English. The lyrics of the songs communicate the humor of the originals thanks to her. If errors are found, the fault belongs to me.

Acknowledgements

I would like to thank an editor Antonia Saxson for her sensibility to catch the nuance I want to express and put it in good English. The lyrics of the songs communicate the original’s humor thanks to her effort. If misinterpretations were found, all faults belong to me.

62 World Order official website, accessed on 1/14/2013.

<http://worldorder.jp/>

I think “Machine Civilization” and “Aquarius” could be representatives of their work.

Bibliography

Anpo: Art X War

Anpo: Art X War. Directed by Linda Hoaglund. ANPO Movie, LLC, 2010.

Bergson 1914

Henri Bergson. *Laughter: An Essay On The Meaning of The Comic*. Translated by Cloudesley Brereton and Fred Rothwell. The Macmillan Company, 1914.

Buckley 2002

Sandra Buckley. *Encyclopedia of Contemporary Japanese Culture*. Routledge, 2002.

Hara and Nagatarki 1995

Hara Kentaro 原健太郎 and Nagataki Takahito 長瀧孝仁. *Nihon kigeki eigashi* 日本喜劇映画史. NTT shuppan, 1995.

Ikariya 2001

Ikariya Chōsuke いかりや長介. *Dameda korya: Ikariya Chōsuke jiden* だめだこりゃ：いかりや長介自伝. Shinchōsha, 2001.

Ishikawa 2011

Ishikawa Ken. “Kōdo keizai seichōki no minpō terebi no tenkai to kokumin seikatsu no henka. 高度経済成長期の民放テレビの展開と国民生活の変化” *Kokuritsu rekishi minzoku hakubutsukan kenkyū hōkoku* 国立民族博物館研究報告 171(2011), pp. 135-155.

Kureijii: Ōgon sakusen

Kureijii: Ōgon sakusen クレイジー：黄金作戦. DVD. Directed by Tsuboshima Takashi 坪島孝. 1967; Tōhō kabushikigaisha, 2006.

Kureijii sakusen: Kutabare! Musekinin

Kureijii sakusen: Kutabare! Musekinin クレイジー作戦：くたばれ！無責任. DVD. Directed by Tsuboshima Takashi 坪島孝. 1963; Tōhō kabushikigaisha, 2005.

Kōdo seichō wo kangaeru kai 2005

Kōdo seichō wo kangaeru kai 高度成長を考える会. *Kōdo seichō to Nihonjin* 高度成長と日本人. Nihon editaa sukūru shuppanbu, 2005.

Matsubara 2007

Matsubara Ryūichirō 松原隆一郎. “Ueki Hitoshi ni miru kōdo keizai seichō ki” 植木等に見る高度経済成長期. *Tōkyō jin* 東京人 22(7): 241, pp. 134-39.

Ministry of Land, Infrastructure. “Transport and Tourism.” Accessed December 3, 2012.

<http://www.mlit.go.jp/hakusyo/transport/shouwa43/ind120403/000.html>

Miyazaki Ryūji 宮崎隆次. “Sengo hoshu seiryoku no keisei 戦後保守勢力の形成.” In *Sengo kaikaku to sono isan* 戦後改革とその遺産, edited by Nakamura, Masanori 中村政則, 195-231. Iwanami Shoten, 1995

Molasky 2005

Michael S. Molasky. *Sengo nihon no jazu bunka* 戦後日本のジャズ文化 . Seido sha, 2005.

Munroe 1999

Alexsandra Munroe. “Postwar Japanese photography and the pursuit of consciousness” in *Daidō Moriyama: stray dog*. San Francisco Museum of Modern Art, 1999.

Ogawa 1963

Ogawa Tōru 小川徹 . “Ueki Hitoshi: Musekinin jidai no warai” 植木等・無責任時代の笑い . *Jiyū* 自由 , February 1963, pp. 120-26. Jiyūsha.

Restivo 2002

Angelo Restivo. “*The Cinema of Economic Miracles*.” Duke University Press, 2002.

Sarariiman donto bushi: Kirakuna kagyō to kitamonda

Sarariiman donto bushi: Kirakuna kagyō to kitamonda サラリーマンどんと節：気楽な稼業と来たもんだ . DVD. Directed by Edagawa Hiromu 枝川弘 , and written by Takahashi Niisan 高橋二三 . 1962; Kadokawa eiga kabushikigaisha, 2005.

Satō 2010

Satō Toshiaki 佐藤利明 . *Ueki Hitoshi shō! Kureijii TV taizan* 植木等ショー！クレージー TV 大全 . Yōsensha, 2010.

Stevens, Carolyn S. *Japanese Popular Music: Culture, authenticity, and power*. Routledge, 2008.

Sūdara bushi: Wakaccha irukedo yamerarenee

Sūdara bushi: Wakaccha irukedo yamerarenee スーダラ節：わかつちやいるけどやめられねえ . DVD. Directed by Yuge Tarō 弓削太郎 . 1962; Kadokawa eiga kabushikigaisha, 2005.

Toi 2007

Toi Jūgatsu. *Ueki Hitosih den: Wakkacha irukedo yamerarenai!* 植木等伝「わかつちやいるけどやめられない！」 . Shōgakukan, 2007.

Waga kuni no omo na shakai keizai shihyō no suii

Waga kuni no omo na shakai keizai shihyō no suii わが国の主な社会経済指標の推移 . Ministry of Health, Labour and Welfare. Accessed on December 5, 2012.

<http://www.hakusyo.mhlw.go.jp/wpdocs/hpaz199801/b0010.html>

World Order official website

World Order official website. Accessed on January 14, 2013.

<http://worldorder.jp/>

Yoshida 2006

Junji Yoshida. “Origins of Japanese film comedy and questions of colonial modernity.” PhD diss., University of Oregon, 2006.

Yoshimura, Katsumi 吉村克己 . *Ikeda seiken 1575 nichi* 池田政権・1575 日 . Gyōsei mondai kenkyūjo shuppankyoku, 1985.

Za Dorifutaazu kessei 40-shūnen kinen ban: Hachiji da yo! Zenin shūgō 1

Za Dorifutaazu kessei 40-shūnen kinen ban: Hachiji da yo! Zenin shūgō 1 ザ・ドリフターズ結成40周年記念盤 8時だヨ！
全員集合 1 . DVD. Ponii kyanion, 2004.

Za dorifutaazu kessei 40-shūnen kinen ban: 8-ji da yo! Zen'in shūgō 2

Za dorifutaazu kessei 40-shūnen kinen ban: 8-ji da yo! Zen'in shūgō 2 ザ・ドリフターズ結成40周年記念盤 8時だヨ！
全員集合 2 . DVD. Ponii kyanion, 2004.

Za Dorifutaazu, Dorifuda yo! Zenin shūgō (Red)

Za Dorifutaazu. Dorifuda yo! Zenin shūgō ドリフだヨ！全員集合 . © 2000, by Tōshiba EMI kabushikigaisha.
TOCT-24482-83. Compact disc.

Za Dorifutaazu, Dorifuda yo! Zenin shūgō (Blue)

Za Dorifutaazu. Dorifuda yo! Zenin shūgō ドリフだヨ！全員集合 . © 2000, by Tōshiba EMI kabushikigaisha.
TOCT-24484-85. Compact disc.

A Reappraisal of the Taiwan's Role in the Cold War in the 1950s

Shunsuke Shikata

Introduction

Since the end of the Cold War, some twenty years ago, the analytic methods of the Cold War Studies have expanded from political analyses and analyses of military strategies¹ to analyses of the cultural and socio-psychological fields. As a result, there have appeared some remarkable research outputs, such as the study on the Cultural Cold War referred to as 'psychological warfare' in Cold War societies.

What is the Cultural Cold War? For example, the research by Kenneth Osgood provides a noteworthy illustration of this concept.² In his argument on the Cultural aspects of the Cold War, Osgood shows how the US Government propagated pro-US images throughout the world in the Cold War era. That is, he suggested that, in waging the Cold War with the Soviet Union, the US (in his case, the Eisenhower administration) did not only utilize its military pressure but also engaged in 'psychological warfare' through the exploitation of various media outlets with the aim of gaining a strong international sympathy for the United States (and antipathy toward the Soviet Union).

However, his research had a very narrow focus on US Governmental organization, its system and commitments to exploiting pro-US activities. As a result, it is unclear how significant American information and publicity were within the whole US Cold War strategy and how the US Government engaged in psychological warfare against the Soviet "peace offensive," for example. In comparison to Osgood's study, Asian historians examined the responses of East Asian countries as beneficiaries of American "psychological warfare," and verified whether or not the information and publicity campaign worked effectively in Japan, South Korea, and Taiwan. They presented various cases of American activities in East Asia.³ But, their studies also seemed to have adopted a limited perspective in assessing the outcomes of campaign activities. Asian historians as well as Osgood only concentrated on how the US officials utilized media outlets to build a pro-US image there, but they did not consider the reasons why the US did so. Consequently, they gave the impression that the campaign activities themselves were the main goals in the US Cold War strategies. These activities were not the ends, but the means. Even though the goals were different in each region, as far as Taiwan was concerned, at least, American policy-makers set out Taiwanese reconnection with the overseas Chinese and its economic progress as the goals.

Therefore, the purpose of this paper is to examine how Taiwanese linkage with overseas Chinese was pursued by the US government in the context of the "Cultural Cold War" and to inquire how and why that objective shifted in the mid-1950s.

US policy guidelines toward Taiwan in the mid-1950s

After the Korean War, the Eisenhower administration began to view the People's Republic of China (hereafter referred to as the PRC or Mainland) to be a regional threat. The administration attempted to prevent PRC from influencing the neighboring countries and considered the Republic of China (Nationalist Government, hereafter the ROC or Taiwan) as the Chinese alternative to communism. With respect to Taiwan policy in the 1950s, the Eisenhower administration formulated three basic statements of the Taiwan policy guidelines. The first one was a series of NSC146 (August–November 1953), the second was

1 Concerning US-Taiwan relations, the contemporary historiography similarly tends to concentrate on the military aspect and has therefore overlooked the role of Taiwan in the gradually emerging dimension of "politico-economic warfare" since the late 1950s. See Robert Accinelli, *Crisis and Commitment: United States Policy toward Taiwan, 1950-1955*, (Chapel Hill and London, 1996). See also John W. Garver, *The Sino-American Alliance: Nationalist China and American Cold War Strategy in Asia*, (New York, M.E. Sharpe, 1997)

2 Kenneth Osgood, *Total Cold War: Eisenhower's Secret Propaganda Battle at Home and Abroad*, (University Press of Kansas, 2006)

3 Toshihiko Kishi and Yuka Tsuchiya, eds., *De-Centering the Cultural Cold War: The U.S. and Asia* [Japanese], Kokusai Shoin, 2009.

NSC5503 (January 1955), the third was NSC5723 (October 1957). In these statements, there were eight objectives set by US officials. The eighth objective will be highlighted as it is related to the view of the Cultural Cold War.

In NSC 146/2, the eighth objective states that the “increased support for the Chinese National Government by all non-Communist Chinese groups outside mainland China and Formosa, especially the overseas Chinese of Southeast Asia, consistent with their obligations and primary allegiance to their local government.”⁴ In NSC 5503, the eighth objective bears similar expressions with the former: “increased support for the GRC (the Government of the Republic of China) by non-Communist Chinese outside mainland China and Formosa, especially [sic] the overseas Chinese of Southeast Asia, insofar as such support does not conflict with obligations to their local governments.”⁵ These two objectives of the Taiwan policy statement relate to the US strategy to strengthen the connection between Taiwan and overseas Chinese communities. To achieve these, as described hereinafter, the US Government expected the children of the overseas Chinese in Southeast Asia to be educated in Taiwan better than in the mainland.

But the eighth objective in the NSC5723 was very different: “GRC adherence to the principle of increased orientation of overseas Chinese, especially in Southeast Asia, toward the host countries and integration into their local communities.”⁶ This eighth objective substantially invalidated the above-mentioned objectives. Why did the revision in the third statement happen? Does this reflect the shift within the US policy making?

Activities of the US State Department in the Far East

Between the Chinese Revolution of 1911 and World War II, the Chinese Nationalist Party received a large amount of support from overseas Chinese⁷ worldwide, though the party was short of the support after the Chinese Civil War. In 1949, the ROC fled to Taiwan Island as a result of its defeat in the Chinese Civil War. In confrontation with the PRC after the Korean War, US policy-makers began to assist Chiang Kai-shek, the leader of the ROC, in rebuilding their relations with overseas Chinese.

On the other hand, most of the Southeast Asian Governments had been independent since World War II. Since then they was in the process of the state-building with the stirrings of modern nationalism and thus adopted a policy of communalism. Therefore, in the US officials’ judgments, the people in Southeast Asia felt more or less antipathy toward overseas Chinese because of their successful communities and their adherence to Chinese Culture and homeland.

The Government of Thailand, for instance, prohibited the children of overseas Chinese from having Chinese education in the fourth grade or higher at elementary schools. No matter how strongly Chinese parents in Thailand hoped to give a higher-level traditional Chinese education for their children, there were some obstacles to study abroad: most of the parents could not afford to send their children to foreign school even though the children were talented, and immigration of overseas Chinese had never been approved by the other governments in Southeast Asia (and Hong Kong).⁸

Under these circumstances, the PRC strenuously attempted to invite the overseas Chinese students to the Chinese mainland via their local offices in Southeast Asia.⁹ To win the loyalty of Chinese residents in Burma, Thailand, and the Philippines, China seemed to influence the local Chinese organization by contributing directly the Chinese newspapers, and by offering Chinese teachers and textbooks to the schools through its local branch. The US Government, however, estimated that Beijing’s

4 NSC146/2 (United States Objectives and Courses of Action with respect to Formosa and the Chinese Nationalist Government), Nov 6, 1953, U.S Department of State, *Foreign Relations of the United States, 1952-1954*, volume 14, (Washington DC, USGPO 1985), p.307-330. [hereafter referred to as FRUS 1952-54, 14:307-30]

5 NSC5503 (US Policy toward Formosa and the Government of the Republic of China), Jan 15, 1955, FRUS1955-1957, 2: 30-4.

6 NSC5723 (US Policy toward Taiwan and the Government of the Republic of China), Oct 4, 1957, FRUS1955-1957, 3: 619-23.

7 “Overseas Chinese” is the English translation of the Chinese-language term *huaqiao*, an identity promoted by various modern Chinese governments’ members and used to refer to members of the global Chinese diaspora. † See Stephen Fitzgerald, *China and the Overseas Chinese: A Study of Peking’s Changing Policy, 1949-1970* (Cambridge, UK, 1972)

8 Martin to McConaughy, Nov 14, 1952, *Records of the Office of Chinese Affairs, 1945-1955*, (Scholarly Resources, 1989), Reel.29, 2.501. no. 620 [hereafter ROCA, 29, 620]

9 ‘U.S. Problem among Overseas Chinese in Southeast Asia’, Sept 29, 1953, ROCA, 34, 570.2.

activities in Southeast Asia were in vain by that time partly because the local communities in Southeast Asia were usually anti-communistic, and partly because overseas Chinese wanted to keep a wait-and-see attitude toward the conflicts between China and Taiwan.¹⁰

Notwithstanding the failure of Beijing's activities in Southeast Asia, US decision makers understood from early on that desire for Chinese education was one of factors attracting the overseas Chinese to the mainland. Overseas Chinese youth's move to the mainland would increase Chinese influence in Southeast Asia in the future. It was reported that, in 1954, concurrently with PRC's gains in international prestige, a great number of overseas Chinese student went to the mainland for higher education.

Why did overseas Chinese go there? From the view of US staff in Singapore, three reasons were presented to Washington; pride in Chinese Communists' accomplishments, the Asian local pressure, and that the Communists were there to stay.¹¹ Consequently, the US Government began to consider the assistance in the establishment of educational facilities for overseas Chinese students in Taiwan and former Malaya.¹²

In the fall of 1953, when US Vice-President Nixon visited Taiwan during his Asian tour, he made a commitment that the US should assist Taiwan to improve and expand educational facilities for overseas Chinese students.¹³ Incidentally, as of the summer of 1955, there were about 1250 college-level and 650 high-school level overseas Chinese enrolled in educational institutions in Taiwan. About 85% of the college group came from Hong Kong or Macao. On the other hand, all the high school students were from localities other than Hong Kong and Macao.

Moreover, US officials took a great deal of interest in the establishment of Nanyang University, which was scheduled to open in the spring of 1956. Chancellor of Nanyang University, Dr. Lin Yutang, who was a prominent Chinese writer and ROC supporter, was thought to be instrumental in achieving US objectives though the US Government was not officially connected with the University. In April 1955, however, Lin's resignation from his position because of political struggles over the University in former Malaya greatly embarrassed the US officials.

Since then, some US officials got nervous and anxious about whether or not the US should "undertake any program which would impede the effort of the Southeast Asian Governments to promote the assimilation of the overseas Chinese."¹⁴ Any US action reflecting particular solicitude for the overseas Chinese would have produced adverse reactions on the part of these governments and other ethnic groups. For example, the office of Chinese Affairs, Department of State warned that "the establishment of a public Commission or other public action which seemed to reflect US assumption of a voice in the internal affairs of the Southeast Asian Governments would have unfortunate results."¹⁵

Interestingly, US policy prescribed the assimilation of the overseas Chinese for the local communities as the only long-range solution for the overseas Chinese problem. In essence, US officials did not think they could give any unequivocal answer to this problem for the time being because neither Taiwan nor China allowed the overseas Chinese to have dual nationality. Nonetheless, US officials continued to regard the overseas Chinese students' move to Taiwan as beneficial means to urge them to support ROC and not PRC with the primary loyalty to their local governments.¹⁶

10 *ibid.*

11 Field Comments on "Overseas Chinese students- A Study," Mar 14, 1955, *ROCA*, 41, 544

12 Memo of Conv., by Anderson, May 15, 1953, *ROCA*, 34; 570.1 Overseas Chinese, 204. See also Mika Sugimura, *Malaysian Education Policy and the minorities*, (Tokyodaigaku, 1981), see also Mak, I-Chun Kung, *the Overseas Chinese Network: Forms and Practices in Southeast Asia*, PROSEA Occasional Paper No.26, Academia Sinica, May 1999.

13 Education of Overseas Chinese Students in Taiwan, Aug 29, 1955, *ROCA*, 41, 568- 571. As a preliminary stop-gap measure, the local currency equivalent of \$554,000 in US aid counterpart funds, supported by the equivalent of \$255,000 from the ROC educational budget, was provided to construct dormitories and classrooms and to meet other urgent needs.

14 US concern with problem of Education of overseas Chinese, May 27, 1955, *ROCA*, 41, 555.

15 *Ibid.*

16 U.S. Department of State, *Report to Congress on the Mutual Security Program*, U.S. GPO, Washington 25, D.C., December 31, 1954, p18.

“Cultural” Activities of the US information Agency in the Far East

The US Information Agency (USIA), which had more than 70 subordinate bodies called the US Information Service (USIS) around the world, also engaged in the overseas Chinese problem from the outset of the Eisenhower administration. The Agency recognized the overseas Chinese as an important minority group in Southeast Asia. Over a period of time since the former agency, it had developed the program activities and the assignment of functional responsibilities specifically directed at the overseas Chinese problem. The program and their materials to deliver information regarding the lives of overseas Chinese in the US or the situation in Taiwan were presented through the various media outlets such as print, film, and radio (e.g., the Voice of America (VOA) broadcasts daily, special programs designed for this audience).¹⁷

In the field, all USIS posts serving an area, in which the overseas Chinese were deemed to be important elements, were charged with responsibility of developing and carrying forward programs specifically aimed at the overseas Chinese. The USIS Hong Kong operated under a mandate that designated the overseas Chinese problem as its primary functional interest, and charged it with coordinating and servicing the activities of USIS in Southeast Asian posts vis-a-vis the overseas Chinese. Some Chinese Americans like Jade Snow Wong, Kingman Dong was invited by USIS Hong Kong to mix with the overseas Chinese in Southeast Asia.¹⁸ They were introduced as “the overseas Chinese” who were relatively successful artist and performer and gained good acceptance in American societies.

USIS Taiwan, while primarily concerned with local affairs in Taiwan, devoted much time to the overseas Chinese problem and worked closely with USIS Hong Kong in its service functions. Moreover, USIS Taiwan participated in the operation of the International Cooperation Administration (ICA), which coordinated the foreign assistance and nonmilitary security programs under the control of the Department of the State. In 1956, USIS Taiwan and ICA Mission in Taiwan advised the ROC in the preparation and distribution of a brochure that would be sent to young people in Southeast Asia by the Overseas Chinese Affairs Commission of the ROC. Additionally, the ICA continued its cooperation with the Asian Foundation, which, as a NPO, had made sizable financial contributions to student scholarships and travel expenses.¹⁹

Though USIA/USIS was extremely active with various programs, assessing the difference between its activities and its achievements is difficult. In fact, one USIS official staff confessed as follows: “[It] is difficult to appraise the effectiveness of these efforts. We can say with assurance that we reach substantial numbers of these people [in Southeast Asia] – in terms of results we can speak with much less assurance.”²⁰ His remarks indicate that, while he admitted the importance of USIS activities through the Southeast Asia, he also doubted the consequence of its activities.

Since 1955, in fact, US decision makers realized the difficulties in dealing with the overseas Chinese problem in an integrated manner through Southeast Asia. Because the Southeast Asian Governments had adopted the assimilation policy, they opposed US assistance in the overseas Chinese going abroad. On the US part, there were some criticisms within the officials about the contradiction of US activities with regard to its acceptance of assimilation. Above all, US officials were afraid that their activities to deal with the overseas Chinese problem might be regarded as intervention in domestic affairs. The US Embassy in Taiwan pointed out that attracting high school students to Taiwan would contradict established US policy concerning the integration of overseas Chinese into their local communities. As a result, US aid funds were not allotted for some high school facilities since 1954. Furthermore, a member of the US staff of Public Affairs in Hong Kong also raised the question about the overseas Chinese problem. He observed that the importance of overseas Chinese was over-estimated and not great enough to warrant any significant increase in the propaganda operations aimed at them, and that the vast majority of them were entirely “apathetic” and “apolitical.” He thought that assimilation of overseas Chinese was under way in several forms through Southeast Asia and that the USIA publications had little effect as part of US propaganda.²¹

17 Meiklejohn to OCB working group, July 28, 1956, *ROCA*, 41, 541

18 See Ellen D. Wu, “America’s Chinese: Anti-Communism, Citizenship, and Cultural Diplomacy during the Cold War,” *Pacific Historical Review*, vol.77, no.3, p391-422.

19 Op.cit., Education of Overseas Chinese Student in Taiwan, Aug 29, 1955, *ROCA*, 41 568-7,

20 Overseas Chinese –Working Paper for Ad hoc Sub-Committee July 26, 1955, *ROCA*, 41. 561-2,

21 Hong Kong PAO’s comments on Overseas Chinese situation, Aug 15, 1955 *ROCA*, 41, 576-582

In addition, in August 1955, there was a statement from USIS Taiwan corroborates such observation: “the breach between the native Taiwanese and the superimposed “Mainlanders” has not been closed..., may be widening.”²² The question was raised as to whether some of the Taiwan activities in Taiwan might as well be carried out by USIS Hong Kong. USIS Taiwan insisted that USIS Hong Kong should be specifically charged with prime area responsibility to service the overseas Chinese population and that USIS Hong Kong should be given direction and responsibility to centralize the whole service of the overseas Chinese, and that the USIS Taiwan might have more time to devote to local problem.

Five days later, the US Government delivered the course of action with respect to the overseas Chinese. This course of action included two parts. One is “Action designed to exploit existing communalistic institutions or motives,” another is “Action designed to promote assimilation at the expense of communalism.”²³ The former course of action included the US assistance in the expansion of educational and training facilities for overseas Chinese teachers on Taiwan. In addition, it indicated that the US assistance developed the capabilities of Hong Kong to produce adequate supplies of textbooks for use in overseas Chinese schools, and it required US efforts to develop a society and a political system in Taiwan in as attractive a contrast as possible to the Chinese Communist regime. But more importantly, the US adopted the invisible approach by not getting directly involved in the recruitment of overseas Chinese teachers or students, and in the distribution of textbooks. The latter course of action included the educational exchange through Southeast Asia apart from US aid and advises to establish private credit cooperative associations. This approach recommended the openness of these actions to all nationalities throughout the world. By making the problem broader, they adopted the covert approach of hiding the migration of overseas Chinese students behind the global exchange program.

Finally, in November 1955 the US Government made the following conclusions: “a country- by- country approach to the [overseas Chinese] problem is indicated,” because “any US attempt to deal with or appeal to the overseas Chinese on a regional and a racial basis, might result in a heightening of the potential danger represented by these communities.”²⁴ In other words, the US apparently placed a serious emphasis on the assimilation of overseas Chinese to Southeast Asian communities. US officials were deeply concerned that strengthening the overseas Chinese linkage with Taiwan (or China) might make the situation in Southeast Asia unstable and volatile. Nevertheless, this approach at least continued at the end of the Eisenhower administration.

Why was the approach modified? It related to how the US government saw the overseas Chinese in the 1950s. The US officials did not understand what the overseas Chinese were. Who defined the overseas Chinese? The Nationalist government of the Republic of China promulgated a Nationality Law in 1929. The law adopted the principle of *jus sanguinis*, which means the principle to think much of Chinese blood lineage; any person born of a Chinese father, or of a Chinese mother where the nationality of the father was unknown or indeterminate, was a Chinese citizen, regardless of place of birth. It adhered fundamentally to same principle in the Law of 1909, which Qing Dynasty promulgated. And the law was still in force in Taiwan in the 1950s. The US government only followed this principle.²⁵ In other words, the US government intended to regard even the Chinese Americans as a part of the overseas Chinese. Despite the fact that the Chinese Americans were allowed to be the American citizens after World War II, they were regarded as “the foreigners” in many cases. The overseas Chinese who US policy makers knew was the patient, unvoiced ethnic minority like Jade Snow Wong and Kingman Dong. Moreover, the US government had a strong impression that the overseas Chinese showed the nationalistic solidarity and gave monolithic support to the Chinese Nationalist Party between the Chinese Revolution of 1911 and World War II. Therefore, the US top officials did not comprehend the differences between the overseas Chinese communities in Southeast Asia. When they learned to understand considerable diversity in the situations of the overseas Chinese, They began to bolster assimilation policy of the Southeast Asian countries and saw migration the overseas Chinese students within a larger context.

22 Meiklejohn to Busick, August 24, 1955. *ROCA*, 41, 57.

23 Course of action with respect to the overseas Chinese, August 29, 1955. *ROCA*, 41, 572.

24 Country-by Country Approach to Overseas Chinese Problem, November 23, 1955, *ROCA*, 41, 539-41.

25 Fitzgerald, *China and the Overseas Chinese*, op. cit., p5-9.

Conclusion

After taking office in 1953, the Eisenhower administration started to formulate its Cold War Strategy. With regard to Taiwan policy, US officials designed the policy guidelines after a ceasefire took effect in Korea. They set up an objective to strengthen the connection between Taiwan and the overseas Chinese. The US officials implemented the information and publicity campaign to inform the overseas Chinese that Taiwan, and not mainland China, had the more democratic, freer and more affluent society. By means of the campaign, they tried to stimulate overseas Chinese to support Taiwan.

This objective continued to be advocated even after the US realized that the Taiwanese military power could not be utilized in its Cold War strategy as a regional collective security in the Far East after the first Taiwan Strait Crisis. This is why Taiwan was regarded to be the alternative to Chinese threats. In the mid-1950s, however, US officials could not gradually deal with the overseas Chinese problem as a regional or racial one. Rather, the US Government began to place an emphasis on the assimilation of overseas Chinese as an internal problem of each country in Southeast Asia. This was a political shift, but did not mean the USIS stopped the activities towards overseas Chinese. US officials, for example, coped with their activities in broader ways like student exchange programs covering the whole Asian continent. That is to say, they did not indicate their direct concern about the overseas Chinese problem. But they continued to resolve the problem behind the scenes.

Offer Expressions in Japanese, Chinese, Korean and English

Yin Yang

1. Introduction

Offer expressions are utterances to offer the speaker's help to the listener. In Japanese, for example, expressions such as “お手伝いしますよ”, “家まで送みましょうか”, are used. What features do Japanese offer expressions have? How do they differ from other languages? This study aims to find out the features of offer expressions in Japanese, Chinese, Korean and English, comparatively. My research questions are as follows.

- What patterns of expression are used in Japanese, Chinese, Korean and English when making offers?
- How are offer expressions used in contemporary Japanese novels, and how are they translated into Chinese, Korean and English?
- What features do offer expressions have in Japanese, Chinese, Korean and English?

2. Research background

Offer expressions are classified as one subcategory of Act development expressions by Sakamoto et al. (1994). Act development expressions refer to utterances to initiate an action to be performed by the speaker or the hearer or the both, such as advice, invitations, requests, orders, giving permissions, offers, asking permissions, confirmation and declaration. This classification is shown in Table (1).

(1) Classification of act development expressions, based on Sakamoto et al. (1994):

Purpose	Action	Decision	Benefit	Typical patterns
Advice	H	H	H	シタホウガイイデスヨ
Invitation	SH/H	H	SH/S/H	シマセンカ・シマショウヨ
Request	H	H	S	シテモラエマスカ・シテクレマスカ
Order	H	S	S/H/O	シテクダサイ・シナサイ
Giving permission	H	S	H	シテモイイデス
Offer	S	H	H	シマショウカ
Asking permission	S	H	S	シテモイイデスカ
Confirmation	S	H	S/H/O	シテモイイデスネ
Declaration	S/SH	S	S/H/O	シマス・サセテモライマス

(S=Speaker, H=Hearer, SH= Speaker and Hearer, O=Neither of the two)

According to Sakamoto et al. (1994), offer expressions have a basic structure that the action of offer is performed by the speaker, the decision is made by the hearer, and the benefit is for the hearer.

However, it does not seem to always hold true that “the decision is made by the hearer”. For example, by saying “お手伝いします” the speaker offers help positively without asking the hearer's opinion. Whether the decision is made by the speaker or the hearer needs further discussion.

Besides, Sakamoto et al. (1994) only offers one pattern “シマショウカ”, which only provides a limited analysis. In order to compare offer expressions in four languages, more variations need to be considered.

Yoshinari (2008) does a contrastive study of offer expressions in Japanese and English. The survey uses questionnaires to

examine what patterns Japanese and English native speakers use when offering a pen. The results are shown in Table (2).

(2) Yoshinari (2008): Comparison of offer expressions in Japanese and English when offering a pen

Patterns	Japanese Example	%	English Example	%
<Telling Offer>	貸すよ	3.4	I'll lend you my pen.	0.0
<Asking Offer>	貸そうか？	10.0	Shall I lend you my pen?	0.0
<Asking H's act>	使う？	37.5	*Will you use my pen?	0.0
<Request>	使って	22.5	Please use this pen.	1.5
<With direct act>	はい、ペン	13.3	Here you go.	22.4
<Order>	使い	5.1	Take this pen.	10.4
<Telling possession>	ペン、持ってるよ	4.9	I have an extra pen.	6.0
<Asking H's needs>	ペン、いる？	2.2	Do you need a pen?	23.9
<Suggestion>	使ったら？	1.0	#Why don't you use this?	0.0
<Permission>	使っていいよ	0.5	You can use this pen.	7.5
<Asking H's wants>	#使いたい？	0.0	Do you want to use this?	28.4
		100		100

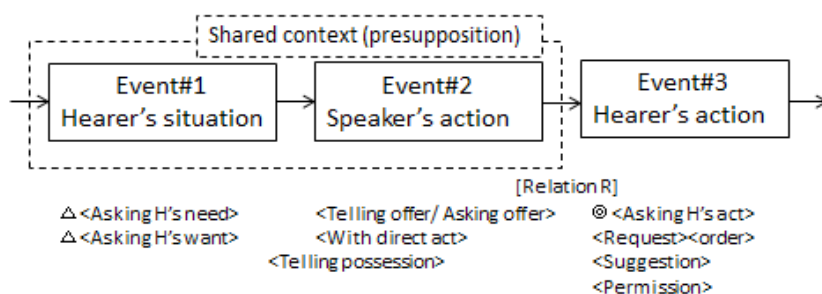
Yoshinari (2008) considers that an offer situation consists of a chain of three events. Taking offering a pen as an example, the first event is that the hearer wants to use a pen (Event #1[the hearer's situation]); the second event is that the speaker understands it and offers the hearer a pen (Event #2[the speaker's action]); the third event is that the hearer can use the pen (Event #3[the hearer's action]). Expressions used during these events are considered as offer expressions in her study. Moreover, the patterns of expressions in Japanese and English are named as <Telling offer/ Asking offer>, <Asking H's act>, <Request>, <With direct act>, <Order>, <Telling possession>, <Asking H's needs>, <Suggestion>, <Permission>, <Asking H's wants> according to their typical meanings.

I basically adopt the range and the naming from Yoshinari (2008), and make the following changes to fit the comparison among four languages. First, I divide <Telling offer/ Asking offer> into <Offer declaration> in declarative force and <Offer question> in interrogative force. Second, since <Telling possession> is limited to offering things, I substitute <Informing ability> for it. Third, I group both <Order> and <Request> as <Request>¹. Forth, I add <Permission request> and <Asking H's want of command>.

According to Yoshinari (2008), the type <Asking H's act> is more often used in Japanese, and <Asking H's wants>, <Asking H's needs> are more used in English. She explains that the first and second events of offer situation, the hearer's situation and the speaker's action, are a shared presupposition in Japanese. Therefore, the speaker tends to focus on the third event, the hearer's action. On the other hand, there is no such presupposition in English. Therefore, <Asking H's act> which needs the presupposition is not used in English. Instead, the speaker tends to focus on <Asking H's wants> and <Asking H's needs>. Picture (3) shows the comparison of focus in offer situations in Japanese and English.

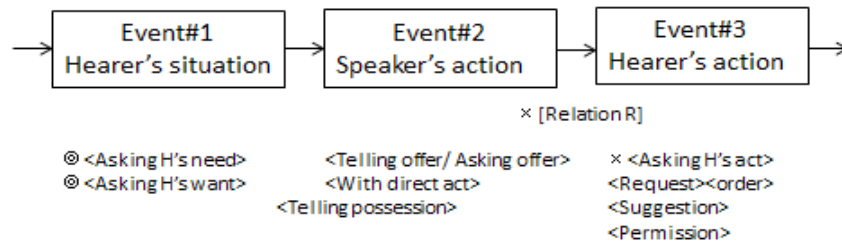
(3) Yoshinari (2008): Comparison of focus in offer situations between Japanese and English

Focus in offer situations in Japanese



¹ The Japanese pattern of <Order> mentioned in Yoshinari (2008) is only used in the Kansai dialect.

Focus in offer situations in English



Yoshinari (2008) discusses the different usage of <Asking H's act> and <Asking H's needs> <Asking H's wants> types in Japanese and English when offering a pen. However, other situations and other types also need discussion. In addition to Japanese and English, it is necessary to see the results when comparing with Chinese and Korean together.

3. Patterns of offer expressions

In spite of different languages, patterns of offer expressions in Japanese, Chinese, English and Korean are in declarative force, imperative force and interrogative force. Grouping similar meanings into one type, patterns can be summarized as in Table (4).

(4) Patterns of offer expressions in Japanese, Chinese, English and Korean

Force	Japanese	Chinese	English	Korean	Types
Declarative	J01a. できる	C01a. 我可以做	E01a. I can do	K01a. 할 수 있어	a.<Informing ability>
	J02a. してあげられる	C02a. 我可以给你做		K02a. 해 줄 수 있어	
	J03b. する	C03b. 我做	E02b. I'll do	K03b. 할게	b.<Offer declaration>
	J04b. してあげる	C04b. 我给你做		K04b. 해줄게	
Imperative	J05b. しよう				
	J06b. してあげよう				
	J07c. していい	C05c. 你可以做	E03c. You can do		c.<Giving permission>
	J08d. してください	C06d. 你做	E04d. Do	K05d. 해	d.<Request>
Interrogative	J09e. させてください	C07e. 让我做	E05e. Let me do	K06d. 해줘	e.<Permission Request>
	J10f. はい。／どうぞ。	C08f. 给。	E06f. Here you go.	K07e. 하게 해줘	f.<Direct action>
	J11g. いるか	C09g. 你要吗 / 你要不要	E07g. Would you like / Do you need	K08f. 자.	g.<Asking H's needs>
	J12h. しょうか	C10h. 我做，好吗？	E08h. Shall I do	K09g. 필요해	
Interrogative	J13h. してあげようか	C11h. 我给你做，好吗？		K10h. 할까	h.<Offer question>
	J14i. するか			K11h. 해줄까	
		C12j. 你要做吗 / 你要不要做	E09j. Would you like to do / Do you want to do	K12i. 할래	i.<Asking H's act>
		C13k. 你要我做吗 / 你要不要我做	E10k. Would you like me to do / Do you want me to do		j.<Asking H's wants>
			E11l. Why don't you do / Why not do		k.<Asking H's want of command>
	J15l. したら			K13l. 하는게 어때	l.<Suggestion>

4. Findings and discussion

4.1 Decision

In Sakamoto et al. (2004), it is considered that, when making offers, the speaker allows the hearer to make the decision. I would argue that there are both situations leaving decision making on the speaker's side and allowing the hearer to decide. a.<Informing ability>, b.<Offer declaration>, c.<Giving permission> and f.<Direct action> (shown in (4) above) are types that the speaker makes the decision. d.<Request>, e.<Permission Request>, g.<Asking H's needs>, h.<Offer question>, i.<Asking H's act>, j.<Asking H's wants>, k.<Asking H's want of command>, l.<Suggestion> are types that the speaker allows the hearer to

decide. Comparing the number of patterns of speaker-decision and hearer-decision in Japanese, Chinese, English and Korean, we find the following results.

(5) Decision of offer expression patterns

	Japanese (15)	Chinese (13)	English (11)	Korean (13)
Speaker-decision patterns	8[53%]	6[46%]	4[36%]	5[38%]
Hearer-decision patterns	7[47%]	7[54%]	7[64%]	8[62%]

As shown in Table (5), we find that Japanese and Chinese have more speaker-decision patterns than Korean and English do, though with a narrow difference.

Is there a similar tendency in use? To resolve the problem, I first look at how offer expressions are used in contemporary Japanese novels, and then how they are translated into Chinese, Korean and English. By counting the original types of offer expressions in Japanese and their counterpart translations in Chinese, English and Korean, we get the following results, summarized in Table (6)².

(6) Japanese offer expressions and their corresponding translations

Japanese	Chinese	English	Korean
<Offer declaration> (13)	<Offer declaration> (11) <Request> (2)	<Offer declaration> (13)	<Offer declaration> (12) <Offer question> (1)
<Request> (1)	<Request> (1)	<Request> (1)	<Request> (1)
<Permission Request> (1)	<Permission Request> (1)	<Permission Request> (1)	<Offer declaration> (1)
<Offer question> (6)	<Offer declaration> (3) <Asking H's want of command> (2) <Offer question> (1)	<Asking H's needs> (3) <Asking H's want of command> (2) <Offer question> (1)	<Offer question> (6)

Looking at Table (6), we can see that the use of speaker-decision types generally outnumber hearer-decision patterns in each language. In Japanese, <Offer declaration> expressions (speaker-decision) are the most often used, and they are generally translated into <Offer declaration>, too. (7) is one example of <Offer declaration> in Japanese which is translated as <Offer declaration> in Chinese, Korean and English.

(7) 「私がケーキ屋さんまで走って、もらってきましょう」

(*The Housekeeper and the Professor* : p.262)

“我跑到蛋糕店去拿回来吧。”(p.196)

I run to cake shop go take back BA³

“I'll run back to the bakery and get them,” (p.168)

“내가 빵 가게 에 뛰어가서 받아 올 게요.” (p.241)

I cake shop to run go take back will

The second most often used type in Japanese is <Offer question> (hearer-decision). Many of them are translated into <Offer declaration> (speaker-decision) in Chinese and <Asking H's need> (hearer-decision) in English.

2 This study uses Japanese novels and their Chinese, Korean and English translations because it ensures the same situation and characters' relationship in four languages and reliability of the translations as well. However, I have to admit that Chinese, Korean and English translations may not be exactly natural because they are sometimes influenced by the original Japanese and by the style of translator.

3 “吧 (ba)” is an ending particle, which makes the sentence sound softer.

For example, (8) is one example of <Offer question> in Japanese translated into <Offer declaration> in Chinese.

(8) 私は立ち上がって、「なにか作りましょうか。」と言った。(Kitchen : p.25)

我 站起来, 说: “我 来 做 吧。”(p.21)

I come make BA

I stood up. “Would you like me to make something?” (p.17)

“제가 만들까요?” (p.26)

I make shall

I have mentioned earlier that both Japanese and Chinese have more speaker-decision patterns. However, comparing the translations of Japanese novels, we find that even when the original Japanese patterns are of hearer-decision types, many of them are translated into speaker-decision types in Chinese. Thus, I consider that speaker-decision patterns are preferred in Chinese.

(9) is one example of <Offer question> in Japanese translated into <Asking H's needs> in English.

(9) リンゴジュースでも持ってきてみましょうか?

(The Housekeeper and the Professor : p.158)

我 给 您 端 一杯 苹果汁 过来 好吗? (p.116)

I for you bring a cup apple juice over good

Would you like some apple juice? (p.101)

사과주스 드릴까요? (p.144)

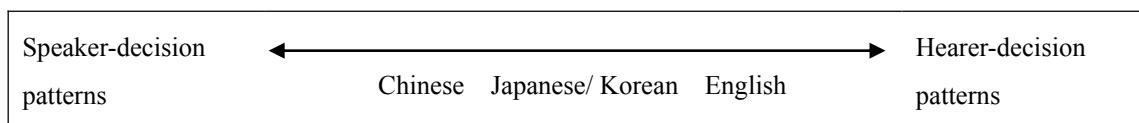
apple juice give shall

The original Japanese pattern allows the hearer to decide by asking about one's own action while the English translation is asking the hearer's need. (8) is another example of allowing the hearer to decide by asking the hearer's want of command.

Comparing the patterns of offer expressions, we have found that hearer-decision type patterns are more common in English. As hearer-decision types are also more used in English translations, I consider that hearer-decision patterns are preferred in English.

The above results of where the decision lies in offer expressions in each language can be summarized as follows.

(10) Comparison of where the decision is placed in the four languages



Offer expressions have both speaker-decision patterns and hearer-decision patterns. Speaker-decision patterns are preferred in Chinese, while hearer-decision patterns are preferred in English. There is little difference in Japanese and Korean.

4.2 Focus

The patterns of offer expressions shown in (4) can be classified as follows depending on what part of the chain of three events they are focusing on, as explained in Yoshinari (2008).

(11) Focus of Patterns in the chain of events

Event #1[hearer's situation]	→ Event #2[speaker's action]	→ Event #3[hearer's action]
<Asking H's needs>	<Informing ability>	<Giving permission> (K×)
<Asking H's wants>	<Offer declaration>	<Request>
(J×, K×)	<Direct action>	<Permission Request>
<Asking H's want of	<Offer question>	<Asking H's act> (C×, E×)
command> (J×, K×)		<Suggestion> (C×)

As suggested in the table, we find that Japanese and Korean have more patterns with focus on Event #2[speaker's action] and Event #3[hearer's act]; Chinese and English have more patterns with focus on Event #1[hearer's situation] and Event #2[speaker's action].

If we look at the use in Japanese novels and their corresponding translations (shown in Table (6)), we find that the most often used patterns in Japanese are <Offer declaration> and <Offer question>, which focus on Event #2[speaker's action]. However, some of their translations are in patterns focusing on hearer's situation or hearer's action as (12) shows. Other examples are translated into patterns focusing on speaker's action, which are not included in (12).

(12) Focus of offer expressions in Japanese and their corresponding translations

Event #1[hearer's situation]	→ Event #2[speaker's action]	→ Event #3[hearer's action]
<Asking H's needs>	<Offer declaration>	<Request>
(E 3 examples [16%])	(J 13 examples)	→ (C 2 examples [11%])
<Asking H's want of	<Offer question>	
command>	(J 6 examples)	
(E 2 examples [11%];		
C 2examples [11%])		

Korean translations are similar to the original Japanese, using patterns focusing on Event #2[speaker's action]. Thus, I consider that Japanese and Korean usually focus on Event #2[speaker's action].

Chinese and English translations are more varied. Except those examples translated into patterns focusing on speaker's action, quite a few examples are translated into patterns focusing on Event #1[hearer's situation] in English, and into patterns focusing on Event #1[hearer's situation] and Event #3 [hearer's action] in Chinese.

The results above regarding focus of offer expressions can be summarized as follows.

(13) Comparison of focus of offer expressions

Patterns focusing on Event #1 [hearer's situation]	→	Patterns focusing on Event #2 [speaker's action]	→	Patterns focusing on Event #3 [hearer's action]
English		Japanese/ Korean		
Chinese		Chinese		

If the offer situation is considered as the chain of events #1[hearer's situation], #2[speaker's action], and #3[hearer's action], patterns focusing on event #1 are more often used in English, and patterns focusing on event #2 are more often used in Japanese and Korean. There is little difference in Chinese.

4.3 Benefit

When making offers, the speaker is offering something helpful to the hearer. Benefactive forms that literally mean “to give” in Japanese, Chinese and Korean can be used to show that the act is for hearer's benefit. In this case, the benefactive forms refer to “てあげる” in Japanese, “给 (*gei*)” in Chinese, and “아 / 어 주다 (*a/e-cwuta*)” in Korean⁴.

Table (14) listed three types of patterns, <Informing ability>, <Offer declaration>, and <Offer question> (shown in (4)), which have these benefactive forms.

(14) Benefactive forms showing the act is for the hearer's benefit

	Benefit	Japanese	Chinese	Korean
<Informing ability>	Yes	J02a. してあげられる	C02a. 我可以给你做	K02a. 해 줄 수 있어
	No	J01a. できる	C01a. 我可以做	K01a. 할 수 있어
<Offer declaration>	Yes	J04b. してあげる J06b. してあげよう	C04b. 我给你做	K04b. 해줄게
	No	J03b. する J05b. しよう	C03b. 我做	K03b. 할게
<Offer question>	Yes	J13h. してあげようか	C11h. 我给你做，好吗？	K11h. 해줄까
	No	J12h. しようか	C12h. 我做，好吗？	K10h.J 할까

Looking at the above patterns, we find that there are both patterns with and without benefactive forms in each type of Japanese, Chinese, and Korean. However, when looking at the offer expressions in Japanese novels and their translations, it is not always the case that the patterns with benefactive forms in Japanese are translated into patterns with benefactive forms in Chinese and Korean, and vice versa. (15), (16) and (17) are some examples of Chinese and Korean translations that vary from the original Japanese in terms of benefit.

(15) 「みかげちゃん、もう抜けていいよ。先生には急な旅行で買い物があるからってうまく言っといてあげるよ。」
(*Kitchen* : p.98)

“美影，你先走吧。我们会跟老师说你要去购物，
We will to teacher say you have to go shopping
为突然的旅行做准备，帮你瞒过去。” (p.96)
for sudden trip do prepare help you cheat over

4 English benefactive forms are not considered in this study because there is no such auxiliary verb as “てあげる”, “给”, or “아 / 어 주다” showing benefit in English.

“Mikage, it’s okay to go out. We’ll tell Sensei you had to do some last-minute shopping for the trip.” (p.71)

“미카게, 그만 가도 괜찮아. 선생님 한테는 갑자기 여행을 하게 돼서
teacher to sudden trip do turn to
물건 사러 나갔다고 할 테니까”(p.95)
things to buy went out do will

In example (15), the original Japanese is “言っといてあげる” with the benefactive form while the Chinese translation is “说 (say)”, and the Korean translation is “할 테니까 (will do)”, both without the benefactive form. In Japanese, if there is not a need to be modest to the hearer, the speaker is likely to use benefactive forms, as the offer made is for the hearer’s benefit. However, in Chinese and Korean, if the act itself does not particularly bring benefit to the hearer, the speaker is not likely to use benefactive forms.

(16) 「痛いんだったら、お医者さんにもらった薬を飲まなきゃ。お水持ってくるね」
(*The Housekeeper and the Professor* : p.114)

“痛的话就把医生给的药吃了。妈妈去给你拿水来。”(p.83)
mum go for you take water come

“If it hurts, take the medicine the doctor gave us. I’ll get you some water.” (p.73)

“아프면, 병원에서 받은 약 먹어야지. 물 가져올게.”(p.104)
water bring come will

(17) 「この雨じゃ、自転車、無理やろ？車で送ってくよ」 (Villain : p.218)

“雨下得这么大，没办法骑脚踏车吧？坐我们的车回去吧。”(p.133)
ride our car back BA

“You can’t go home on a bike in this rain. We’ll give you a ride.” (p.119)

“이렇게 비가 오면 자전거는 힘들겠지? 차로 데려다줄게”(p.197)
car by take for you

In example (16) (17), benefactive forms are not used in the original Japanese. In contrast, their corresponding translation in Chinese (see (16) “给你拿水来”) and Korean (see (17) “데려다줄게”) are with benefactive forms. Even where the original Japanese does not show benefit to the hearer, in Chinese and Korean, the speaker is likely to use benefactive forms if the act itself does bring benefit to the hearer. The reason why “てあげる” is not used in Japanese can be considered for its condescending impression, as explained in Iori et al. (2001).

The above discussion about benefit of offer expressions can be summarized as follows.

(18) As the act of offer is for the hearer’s benefit, there are cases when benefactive forms “てあげる”, “给”, “아/어 주다” are used. In Chinese and Korean, whether to use benefactive forms or not tends to depend on whether the act itself brings benefit or not. On the other hand, in Japanese, the speaker gives priority to the relationship with the hearer over whether the act itself brings benefit or not. As a result, “てあげる” may be avoided according to the relationship with the hearer.

5. Conclusion and future work

This study has discussed the features of offer expressions in Japanese, Chinese, Korean and English by comparing the patterns of each language and their use in novels in three aspects: decision, focus and benefit. About the patterns of each language, I have clarified (a) Whether speaker-decision patterns or hearer-decision patterns are more often used; (b) Which event the expressions focus on in the process of an offer situation; (c) Whether benefactive forms are used or not. I found that the four languages differ in each of these three aspects. As different conclusions were given for each aspect, it was difficult to find an overlying trend. This shows the reality of offer expressions in Japanese, Chinese, Korean and English.

However, the limitation of this study is that the novels used in this study are written in Japanese and translated into Chinese, Korean and English, and the number of examples are not enough. I will collect more examples from novels written in Chinese, Korean or English and translated into Japanese, and deepen my study in the future. Also, I will conduct contrastive studies on other act development expressions related to offer expressions such as request and advice, and review the features of offer expression as one of the act development expressions.

References

- Huang, L. & Chen, J. (2009). Jianxi xiandai hanyu “Gei” zi ju zhong de “Gei” [On “Gei” in the “Gei” patterns in modern Chinese]. *Anhui wenxue*, 8, 292.
- Iori, I., Takanashi, S., Nakanishi, K. & Yamada, T. (2001). *Chujokyu o oshieru hito no tame no nihongo bunpo handbook [Japanese Grammar Handbook for people teaching Upper Intermediate Japanese]*. Tokyo: 3A Corporation.
- Ishiwata, T. & Takada, M. (1990). *Taisho gengogaku [Contrastive Linguistics]*. Tokyo: Ofu.
- Kyi, T. (2002) Birumago to Nihongo ni okeru moshide hyogen: moushide no shikata o chushin ni [Offering Expressions in Burmese and Japanese: focusing on offer strategies]. *Sekai no Nihongo kyoiku*, 12, 145-162.
- Leech, G. & Svartvik, J. (1975). *A Communicative Grammar of English*, London: Longman.
- Maeda, T. & Yamada, T. (2011). *Nihongo kara kangaeru Kankokugo no hyogen [Thinking Korean expressions from Japanese]*. Tokyo: Hakusuisha.
- Nagakura, Y. & Yamada, T. (2011) *Nihongo kara kangaeru Chugokugo no hyogen [Thinking Chinese expressions from Japanese]*. Tokyo: Hakusuisha.
- Nihongo kijutsu bunpo kenkyukai (Ed.) (2009). *Gendai Nihongo bunpo 7 [Series on modern Japanese Grammar]*. Tokyo: Kurosio Publishers.
- Okutsu, K. (1983). Juju hyogen no taisho kenkyu: Nichi-cho-Chu-Ei no hikaku [A contrastive study on benefactive forms: comparing Japanese, Korean, Chinese and English]. *Nihongogaku*, 2-4, 22-30.
- Sakamoto, M., Kawaguchi, Y., Kabaya, H. (1994). “Kodo tenkai hyogen” ni tsuite: taigu hyogen kyoiku no tame no kisoteki kosatsu [On act development expressions: a basic study for teaching attitudinal expressions]. *Nihongo kyoiku*, 82, 47-58.
- Sakamoto, M. & Kabaya, H. (1995). “Moshide” hyogen ni tsuite [On offer expressions]. *Kokugo kenkyu to shiryo*, 19, 25-35.
- Sekiyama, K. & Yamada, T. (2011) *Nihongo kara kangaeru Eigo no hyogen [Thinking English expressions from Japanese]*. Tokyo: Hakusuisha.
- Takanashi, S. (2011). Koikyoku ni tsuite: Nihongo kyoiku ni okeru mondai [On directives in Japanese: a discussion from a educational point of view]. *Bulletin of International Student Center of Kobe University*, 17, 1-17.
- Yamanashi, M. (1986) *Hatsuwa koi [Speech acts]*. Tokyo: Taishukan.
- Yoshinari, Y. (2008) Kansetsutekina “Moshide” hyogen ni kansuru goyoronteki kenkyu [A pragmatic study on indirect offer expressions]. Doctoral dissertation, Kobe University.
- Zhou, H. (2010). Xiandai haiyu “Gei” zi ju yanjiu zongshu [Literature review of “Gei” patterns in modern Chinese]. *Journal of Yulin Normal University*, 31-3, 89-94.

Novels used in this study

A) 吉本ばなな (1998) 『キッチン』 角川文庫

吉本芭娜娜著, 李萍译 (2009) 《厨房》, 上海译文出版社.

Banana Yoshimoto, Translated by Megan Backus (1993) *Kitchen*, Grove Press.

요시모토 바나나지음, 김난주 옮김 (1999) < 키친 > 민음사.

B) 吉田修一 (2009) 『悪人』 (上) 朝日文庫

吉田修一著, 王华懋译 (2010) 《恶人》, 文化艺术出版社.

Shuichi Yoshida, Translated by Philip Gabriel (2010) *Villain*, Pantheon Books.

요시다 슈이치지음, 이영미 옮김 (2008) < 악인 > 은행나무.

C) 小川洋子 (2005) 『博士の愛した数式』 新潮文庫

小川洋子著, 李建云译 (2005) 《博士的爱情算式》, 人民文学出版社

Yoko Ogawa, Translated by Stephen Snyder (2009) *The Housekeeper and the Professor*, Picador.

오가와 요코지음, 김난주 옮김 (2004) < 박사가 사랑하는 수식 > 이레.

Nonduality and Enlightenment in Saigyō

Bonnie McClure

Why should my heart
still harbor
this passion for cherry flowers,
I who thought
I had put all that behind me?
(Saigyō, Watson 39)

hana ni somu kokoro no ika de nokoriken sute hateteki to omou waga mi ni (SKS 76)¹

The master waka poet Saigyō (1118-1190) embodied the Japanese archetype of the traveling recluse-poet. He chose the composition of waka poetry as his form of Buddhist *shugyō*, and the natural world as his subject of contemplation. His two favorite images were cherry blossoms and the moon, both images possessed of deep Buddhist significance—the quickly scattering cherry blossoms symbolize the impermanence of all things, while the moon is an emblem of enlightenment.

Yet in many of his most beloved poems, Saigyō expresses the apparent conundrum visible in the poem above: he finds in himself lingering attachments to the very natural world he is contemplating on his road to enlightenment. This conflict can be seen throughout Saigyō's poetry. Why, indeed, could he not rid himself of these feelings? Or perhaps, why did he not try harder? The ostensible battle is a recurring theme throughout many of Saigyō's best-known works—the problem never seems to get any better, and the reader begins to suspect that Saigyō has grown accustomed to, even at ease with, his ongoing inner struggle.

In this paper, I intend to show that, somewhere along Saigyō's poetic journey, casting off attachments in fact ceases to be his first concern. When he first took the tonsure Saigyō may have held a preconceived notion of what enlightenment was, but through his poetic practice he follows a highly personal search for truth that culminates in the development of a conception of enlightenment of his own, one influenced by contemporary Tendai and Shingon doctrines but that goes especially far for his time in exploring frontiers of nondualism. Several little-discussed, never-translated poems from minor Saigyō collections explore radical definitions of enlightenment and reveal that for Saigyō, enlightenment comes to mean transcending the simple dichotomy between attachment and non-attachment, and peacefully coexisting with this and other apparent dualities.

Let me begin by briefly placing Saigyō in historical and literary context. Born with the name Satō Norikiyo, of a noble family who served as bodyguards to the emperor, at age twenty-three he suddenly and for unknown reasons renounced the world to become a hermit-monk and take the Buddhist name Saigyō ("westward journey"). He would spend the rest of his life in retreat on holy mountains or going on arduous pilgrimages to far destinations such as Shikoku and Michinoku.

Among the unique aspects of Saigyō's poetry is, first, its highly personal tone, which has inspired much curiosity over the centuries about Saigyō the man. There has been a broad tendency to interpret Saigyō's waka autobiographically, a trend which in the medieval period gave rise to many flowery legends and Noh plays embellishing the known details of his life and death, and in modern times has resulted in a largely biographically-oriented body of scholarship. Secondly, Saigyō's poetry is beloved

1 SKS = Sanka Shū. I use the following abbreviations for other Saigyō collections:

KGS = Kikigaki Shū

MSGUA = Mimosusogawa Uta-awase

MHSS = Matsunoya Hon Sanka Shū

SHKS = Saigyō Hōshi Kashū

Versions of poems are those appearing in the Kubota edition, except for the poem from the Mimosusogawa Uta-awase, which does not appear in the Kubota edition and for the numbering and Japanese text of which I refer to Stoneman

for its close observation of nature as, unlike the court poets of his day who stayed in Kyoto while writing of cherry blossoms in Yoshino, he actually traveled to the *utamakura*, or famous poetic sites, of which he spoke of and saw up close the nature from which he drew his inspiration. Saigyō imprinted himself upon the Japanese imagination by practicing what he preached.

Saigyō lived at the end of the Heian era and through the Genpei wars into the early days of the medieval period but foreshadowed many medieval literary trends and is considered basically a medieval poet. Saigyō himself, while he was not the first monk to write poetry, marked the beginning of the medieval prominence of the recluse-poet. His legend would inspire generations of poets after him, notably the great haikai poet Matsuo Bashō, who looked up to Saigyō as his greatest model and frequently followed in Saigyō's footsteps in his own travels.

Some of Saigyō's waka feature Buddhist contemplation of a straightforward nature. Waka such as the following represent the poet's meditation on the fleeting nature of all things:

Drops of dew
strung on filaments
of spider web--
such are the trappings
that deck out this world
(Saigyō, Watson 200)

sasagani no ito ni tsuranuku tsuyu no tama wo kakete kazareru yo ni koso arikere (SKS 1514)

Others represent the ideal state of mind he pursues:

Like star lilies
that sway in thick-grown fields
where larks fly up,
this mind bound
to no one thing
(Saigyō, Watson 140)

hibari tatsu arano ni ouru himeyuri no nani ni tsuki to mo naki kokoro kana (SKS 866)

But in many poems Saigyō seems unable to sustain such serenity. The following is one of the most renowned of all Saigyō's waka:

Even a person
with no heart
feels pathos:
a marsh where snipes fly up
on an autumn evening²

kokoro naki mi ni mo aware ha shirarekeri shigi tatsu sawa no aki no yuugure (SKS 470)

The phrase *kokoro naki mi* in its most straightforward interpretation refers to a person who has forsaken worldly passions for the Buddhist way, though interestingly it can also mean an unrefined person devoid of poetic feeling. The first is what Saigyō ostensibly seeks to be as a monk, the second the antithesis of what he seeks to be as a poet--yet there is perhaps a hint here that these two may be one and the same thing, and that to lose his attachments Saigyō fears he must lose his poetic sensibility. Fortunately for him and for us, that does not seem to be happening anytime soon.

In the following poem Saigyō seems to reprove himself for his inability to hold fast to his spiritual goal:

² Poems with no translation credit are translated by myself.

It was bound to be:
 My vow to be unattached
 To seasons and such...
 I, who by a frozen bamboo pipe
 Now watch and wait for spring.
 (LaFleur, *Awesome Nightfall* 16)

warinashi ya kōru kakei no mizu yue ni omohi suteteshi haru no mataruru (SKS 571)

Traces of the waywardness of Saigyō's heart surface even in poems such as this one that initially appear to be more unambivalent Buddhist utterances:

My heart becomes sky
 as it lifts with
 the spring mist
 determining once and for all
 to be in this world no more

sora ni naru kokoro ha haru no kasumi ni te yo ni araji to mo omoitatsu kana (SKS 723)

I have translated *sora ni naru kokoro* literally as "heart becoming sky" because of the impossibility of expressing all the nuances of the phrase. *Sora* can mean both "sky" and "emptiness," and at first glance in a Buddhist context such as this *sora ni naru kokoro* seems to mean a heart that has become emptiness, or has come to a realization of the impermanence and futility of all things. But the phrase has an additional traditional poetic meaning: a troubled heart, hovering in the air with unrest. Is Saigyō's heart resolved, troubled, or both?

The differing tides pulling at Saigyō's heart appear in the varying tones of his many poems on the moon. The moon in poetry is an established symbol of Buddhist enlightenment, and it frequently appears as such in Saigyō's poems:

Darkness dispelled,
 is the radiant moon that dwells
 in the skies of the mind
 drawing nearer now
 to the western hilltops?
 (Saigyō, Watson 142)

yami harete kokoro no sora ni sumu tsuki ha nishi no yamabe ya chikaku naru ran (SKS 876)

Amida Buddha's Pure Land is considered to be located in the west, hence the significance of the direction in which the moon sets, as well as of the "west" appearing in Saigyō's Buddhist name. Here Saigyō pleads with the moon to help him moor his wandering heart:

Autumn moon
 hold this heart fast
 that drifts
 this way and that
 with the world's drifts of grief
 (McKinney 27)

yo no usa ni hitokata narazu ukareyuku kokoro todomeyo aki no yo no tsuki (SHKS 58)

Yet in another poem it is the moon that is causing his heart to wander:

How it entices
my poor heart,
already
so easily swayed:
moon of an autumn's night

saranu dani ukarete mono wo omou mi no kokoro wo sasou aki no yo no tsuki (SKS 404)

The very moon upon which Saigyō turns his contemplative gaze provokes distracting emotions. Why can Saigyō not reign in his heart? Why is it “bound to be” that he cannot remain unattached to the seasons? Is he simply a failed monk, unable to attain the detachment he has devoted his life to pursuing? Or is he an insincere monk who uses his spiritual conflict for artistic ends? It must be admitted that torn feelings and inner conflict form excellent fuel for poetic output. Indeed, it was a subject of controversy in Saigyō’s day whether poetry, with its “wild words and flowery phrases” (*kyōgen-kigo*) was appropriate as a Buddhist practice. Laura Allen notes,

The conventional Buddhist view identified poetry as a hindrance rather than an aid to salvation.... Thus, for any poet to consider himself a devout Buddhist, he had somehow to reconcile his practice of poetry with the basic tenets of his religion (93).

Some of Saigyō’s contemporaries, prominently poet Fujiwara no Shunzei, were defending poetry as a valid form of Buddhist shugyō. The idea was still a new one, however, and Saigyō would have anticipated the criticism that being a poet precluded prioritizing the Buddhist way above all else. Yet it is difficult to accuse Saigyō of such disingenuity, if for no other reason than that according to various contemporary sources he actually cast off poetry in the last days of his life. Japanese scholars generally agree in affirming his apparent religious sincerity. Shozen Yamada says,

For Saigyō, composing poetry was not a way for a person of leisure to occupy himself, nor was it the fate of a recluse. It was unquestionably a Buddhist shugyō, if an unusual one. Saigyō performed a prolonged experiment with a shugyō method he constructed himself, and eventually broke his own ground (333).

In other words, waka as Buddhist *shugyō* could perhaps have been called into question before Saigyō, but not after him. Some scholars would claim, though, that poetry served an essentially diary-like and therefore rather low-level function in Saigyō’s spiritual process. Masahide Satō says,

[Saigyō] could not go all the way over to the realm of the ideal. He had to foil the effort toward the absolute deed of renunciation. For Saigyō, it is when he sees this [failure] that a poem is born.... Therefore, for Saigyō, poetry is an essential step of the process of his reclusion shugyō.

....But even if in the end Saigyō failed at full renunciation, behind the poetic exclamation lay an affirmation of his progress up to that point. (97-8)

This description of the mental moment associated with poetic composition for Saigyō could well seem to explain the starting point for many of the famous poems we have looked at thus far. However, in the second half of this paper I will turn to taking a look at several poems that record instants of success rather than failure—albeit success at achieving enlightenment

defined differently than mere renunciation.

Internal evidence in Saigyō's poetry suggests that over the course of his practice he began seeking enlightenment in his own way. He recorded his inner experiences honestly and probed them, not shying away from the problem of the dual nature of many aspects of reality as he saw it. To be sure, he seemed to possess an especially strong tendency to perceive the world through a dichotomous lens in the first place. Jack Stoneman comments,

The tension between opposing emotional impulses, higher aspirations and human needs, as well as the tension between the sacred and the profane, exalted and low, worldly and other-worldly, humanity and nature, form and formlessness, the religious and the secular, heaven and hell, human and divine, and a host of other dualities—such tension is the overarching theme of Saigyō's poetry (85).

Or perhaps it is not a special tendency of Saigyō's so much as the nature of the contemplative path. Toyofumi Mōri in his book *Saigyō no shisō: jūshiki to zettaichi* posits that the construction of multiple layers of polarity is an essential element of the path of the recluse who chooses separation from the world:

This [polarization] is that of the self, or the mode of our consciousness, confronting oneself and one's experience. In confronting this "oneself and one's experience," the self begins to separate from and float above "oneself and one's experience" (11).

After the creation of a polarity between one's consciousness and the temporal world, the next step is to back up and form yet another polarity with that very consciousness of one's own, Mōri says. Stoneman makes mention of essentially the same phenomenon in simpler words. He refers here to the same cherry-blossom poem quoted at the opening of this paper:

Saigyō seems to be asking himself (something he does quite often in his poetry, even addressing his "heart" as if it were another entity altogether) why the physical and spiritual elements of his being cannot be reconciled (106).

Continuing a vicious cycle of creating new separations between self and object, then self and self ad finitum is clearly no way to attain peace of mind. By bits Saigyō seems to come to the realization that holding onto these dichotomies and polarizations is the real entrapment he must overcome. In several of his most profound poetic moments he comes to a place of reconciling a duality or perceived contradiction. Frequently he utilizes an existing Buddhist concept but imbues the instant with a sense of personal discovery. I will here give several instances.

One of the simplest examples of a resolved dichotomy in Saigyō is the lack of conflict he perceives between his reverence for the native gods of Japan and his choice of Buddhism as a life calling. After spending a number of years on Kōyasan, the headquarters of Shingon Buddhism, Saigyō left to live for an extended period of time in Ise, sacred as the location of the Ise Grand Shrine. Many Saigyō poems record visits to shrines and express reverence for the shrine deity. For Saigyō this poses no problem in his devotion to the Buddhist path:

I hang my heart
with this paper prayer
on the holy sakaki tree,
knowing
the gods and Buddhas are one

(McKinney 40)

sakakiba ni kokoro wo kakemu yūshide te omoeba kami mo butsu mo narikeri (SKS 1223)

The idea of kamis and buddhas being one and the same was not Saigyō's own. He embraces here the doctrine popular in his day of *honji-suijaku*, or “original ground / manifest traces,” which reconciled Buddhist doctrine with indigenous Japanese cosmology by identifying the kamis of Japan as local manifestations of Buddhist gods. According to William LaFleur, Saigyō's enthusiastic acceptance of *honji-suijaku* offers a hint to his conception of enlightenment:

[Saigyō]... employed multiple strategies from within the Buddhist tradition in order to affirm the basic goodness and value of the natural world. And among these was the *honji-suijaku* concept. The logic appears to have been as follows: Since the Shinto kami are indeed manifestations of buddhahood and, since such kami are somehow present within all natural phenomena that impress us humans with their beauty and sacredness, then there need be no contradiction between even our most intense feelings for such things and efforts to move along the Buddhist path. Natural beauty is itself an articulation of the enlightened state. And to fall under its supposed “sway” is to be, when rightly understood, engaged in the practice of the true path (LaFleur, *Awesome Nightfall* 54-5).

Japanese tradition locates the source of truth in nature, while Buddhist tradition locates it in religious practice; the *honji-suijaku* concept that invited Saigyō to reconcile the two must have been a most welcome one. He also seemed to begin moving away from viewing passions as necessarily the antithesis of enlightenment. In the following poem from the Mimosusogawa Uta-awase Saigyō says,

Today's satori:
such a change of mind would
not exist without
my lifelong habit of having
my mind immersed in blossoms
(LaFleur, *Awesome Nightfall* 142)

omoikaesu satori ya kyō ha nakaramashi hana ni some oku iro nakariseba (MSGUA 9)

The phrase *hana ni some*, literally “dyed in blossoms,” is the same that occurs in the cherry blossom poem quoted at the beginning. But now enlightenment need not be an erasing of the hues of passion that dye the heart: the passions themselves can be part of the road to enlightenment. LaFleur says:

Theoretically, passion must be overcome in order to achieve enlightenment. But Saigyō is negating this negation in the case of blossoms (LaFleur, *Saigyō the Priest* 210).

Passions can be a tool for enlightenment, Saigyō seems to be saying—or even enlightenment itself. There is one poem in Saigyō's main waka collection, the Sanka Shū, that goes even farther. The only poem in the Sanka Shū to directly address the topic of *satori*, it is headed by the preface, “It is Buddha that lets the mountain plum send forth its fragrance. It is Buddha that makes the orchid show its purple color” (Saigyō, Honda 279):

The flowers of the field
in autumn, the
fragrant blossoms of spring:
from all these things too you can attain
a heart-impassioned enlightenment.

nobe no iro mo haru no nioi mo oshinabete kokoro somekeru satori ni zo naru (SKS 1542)

This poem, rarely translated and hardly among Saigyō's better-known, seems to radically redefine the nature of enlightenment. There is no longer a duality perceived between passions and enlightenment—"impassioned," which is actually the same word *some*, or "dyed," that has appeared in previous poems, is now a description of the enlightened state. Precedent exists in Shingon Buddhist theory for such a dissolution of the divide between passion and enlightenment, and Saigyō combines this concept with a Japanese-inherited affirmation of nature as source of truth.

The minor, mostly untranslated Saigyō collections contain several poems with equally striking statements on enlightenment. Saigyō states with a different image a similar realization to that above in this poem from the Matsunoya Hon Sanka Shū, a small collection that survived as a handwritten appendix in one of the major Sanka Shū texts (Saigyō, Kubota 491):

Just as I am,
wearing a robe
dyed in many colors,
I return
to enlightenment

samazama ni sometsutsu kikeru kinu no iro wo yagate satori ni kaeritsuru (MHSS 60)

The concept of "returning" to enlightenment is a further fascinating development. Another poem in the same collection expounds thus:

In my form
just as
my parents raised me,
enlightenment
was already there!

tarachine no ooshitatetaru sugata ni te satori ha yagate arikeru mono wo (MHSS 63)

The sentiment here reflects the Shingon/Tendai concept of *hongaku*, which, in the words of LaFleur,

...refers to the notion that when someone moves from the state of being unenlightened to one of enlightenment (*shikaku*), this occurs only because an already existent and underlying Buddha-nature (*hongaku*) is already present and intrinsic.... Because of this underlying and already existent enlightenment, things could be affirmed in the condition in which they existed, since their mode of existence in the world was one of an already enlightened state (LaFleur, Saigyō Buddhist Value 194).

He goes on later to say:

Out of the intellectual currents which he receive from the times in which he lived, times which...allowed for the harmonization of Tendai and Shingon patterns of thought, Saigyō brought forth a new valorization of the natural world.

....The natural "images" in Saigyō's poetry are not something which must themselves be transcended and mentally jettisoned once they have served to create a union of the subject and the real object of his "image-ing," that is, the Reality itself. Rather...there is no necessity here of negating the physical and phenomenological world once it has served to point to something beyond itself. there is no beyond. The concrete phenomenon....is itself both the symbol and the symbolized. It is the absolute which theorists might call "Emptiness," but which is, in fact, nothing other than the phenomenon itself (202-3).

Another remarkable poem from the Matsunoya Hon Sanka Shū addresses just this non-difference between form and substance:

Turning to the sky
of my spotless heart,
I find that
even fleeting shadows
are not so empty after all!

chiri mo naki kokoro no sora ni tomet sureba munashiki kage mo munashikaranu wo (MHSS 58)

A yet more eminently poetic expression of a similar concept can be seen in the following poem from the Sanka Shū:

Since I no longer think
of reality
as reality,
what reason would I have
to think of dreams as dreams?

(Saigyō, Watson 201)

utsutsu wo mo utsutsu to sara ni omowaneba yume wo mo yume to nani ka omowan (SKS 1515)

This waka, among Saigyō's more famous, stands out from most of the rest of the Sanka Shū in the depth of its philosophical probing of duality. But as we have seen, when considered along with the poems appearing in more minor collections this poem falls into a pattern of Saigyō poems directly addressing various dualities.

The last poem I will quote, from the Kikigaki Shū, is to me one of the most startling and transcendent utterances in all of Saigyō:

When even this self of mine
does not go although it goes,
goes without going...
is the enlightenment of another
really any different from my own?

ikide ikazu ikade mo ikeru mi ni nareba hokano satori mo hokano koto ka ha (KGS 146)

In its dissolution of self and other this poem represents an instant of enlightenment of a kind that is actually in a sense very traditional in its loss of self, at the same time that it is reached from quite a fresh thought process. Saigyō can be seen here striking out on his own in the conquering of new dualities. It is deeply individual reflections such as this one that show that Saigyō was engaged in a pursuit of enlightenment on his own terms. While much of the time he utilizes existing Buddhist concepts—selecting, of course, those that match his personal inclinations—in his explorations, at moments like this one we see him feeling his own way, pursuing truth with his intuition as though he were a Zen practitioner born just slightly out of time. It would not be many more years before Zen with its emphasis on the individual, intuitive pursuit of enlightenment would gain ascendancy in Japan. Saigyō was continuing the work of blazing the philosophical trail of nonduality that had already been started with such concepts as *hongaku* and *honji-suijaku*, and which would later continue with Zen's conscious priority on the dissolving of dualities of all kinds.

Saigyō starts with an apparent problem, the discord between his passionate heart and his determined mind. Over the course of his practice he observes that it is little use to fight his inner experience, so he begins to listen to it and to find new

pathways to truth within his own thought processes. These pathways lead him first to a gradually calmer acceptance of the various dichotomies suggested by the philosophical paradigms to which he subscribed as a Buddhist recluse, and then to a broadened viewpoint that allows him see these dichotomies as ultimately reconcilable. This moment of resolution is Saigyō's enlightenment, an enlightenment that encompasses even his feelings for the cherry blossoms he loves, and loved to end as expressed in this poem with which I will close:

If any would mourn me
after my death,
offer
upon my altar
a branch of the flowering cherry
(McKinney 81).

hotoke ni ha sakura no hana wo tatemasure waga nochi no yo wo hito toburawaba (SKS 78)

Works Cited

- Allen, Laura W. "Images of the Poet Saigyō As a Recluse." *Journal of Japanese Studies*. 21.1 (1995). Print.
- LaFleur, William R. "Saigyō and the Buddhist Value of Nature." *Nature in Asian Traditions of Thought: Essays in Environmental Philosophy*. Ed. J.B. Callicott and Roger T. Ames. Albany: State University of New York Press, 1989. 183-209. Print.
- _____. *Saigyō, the Priest and His Poetry of Reclusion: A Buddhist Valorization of Nature in Twelfth-Century Japan*, 1973. Print.
- LaFleur, William R, and Saigyō. *Awesome Nightfall: The Life, Times, and Poetry of Saigyō*. Boston, Mass: Wisdom Pub, 2003. Print.
- McKinney, Meredith. *The Tale of Saigyō: Saigyō Monogatari*. Ann Arbor: Center for Japanese Studies, University of Michigan, 1997. Print.
- Mōri, Toyofumi. *Saigyō No Shisō: Jiishiki to Zettaichi*. Tokyo: Senshu Daigaku Shuppanyoku, 2007. Print.
- Saigyō, and Heihachirō Honda. *The Sanka Shu: The Mountain Hermitage*. Tokyo: Hokuseido Press, 1971. Print.
- Mōri, Toyofumi. *Saigyō No Shisō: Jiishiki to Zettaichi*. Tokyo: Senshu Daigaku Shuppanyoku, 2007. Print.
- Saigyō, and Heihachirō Honda. *The Sanka Shu: The Mountain Hermitage*. Tokyo: Hokuseido Press, 1971. Print.
- Saigyō, Jun Kubota, Yoshihito Nishizawa, and Genkō Utsugi. *Sankashū: Kikigakishū; Kikigaki Zanshū*. Tokyo: Meiji Shoin, 2003.
- Saigyō, and Burton Watson. *Saigyō, Poems of a Mountain Home*. New York: Columbia University Press, 1991. Print.
- Satō, Masahide. *Inton No Shisō: Saigyō O Megutte*. Tokyo: Tokyo Daigaku Shuppankai., 1977. Print.
- Stoneman, Jack C. "Constructing Saigyō: Poetry, Biography, and Medieval Reception." *Dissertation Abstracts International, Section A: the Humanities and Social Sciences*. 67.3 (2006): 942. Print.
- Yamada, Shōzen. *Saigyō No Waka to Bukkyō*. Tokyo: Meiji Shoin, 1987. Print.

Dematerialization in Abe Kōbō's *The Ark Sakura*

Sarah Clayton

Shortly after publishing *The Ark Sakura* in November 1984, Abe Kōbō stated, “Japan is the only country in the world to have been victimized by an atomic bombing. However, it is not that Hiroshima or the Japanese were bombed. The globe was bombed.”¹ The exercise of such lethal technological advances ruptures notions of state or local sovereignty, reframing the continuity of the human species in global terms. Writing amid the historical period of mutually assured destruction, Abe conducts an imaginative experiment that explores the spatiotemporal impact and response to the abrupt insertion of the global into a local world. Centered on the issue of human continuity, Abe creates an allegory of logic that explores the question “Who should be saved in the event of atomic apocalypse?” What emerges, however, is not an answer. The frame of atomic apocalypse is gradually undermined, coopted by logics nurtured by the system of capitalism, and in the final moment of the novel, an apocalypse has not been delivered from above but seeded within. The characters are neither willing nor able to respond to the spatiotemporal disjuncture created by the new cognitive framework introduced by the advent of nuclear weaponry. In this sense, *The Ark Sakura* suggests that the values and practices engendered by capitalism equip societies to engage in the pursuit and production of technologies that alter the fundamental cognitive framework of the world, but it does not provide the ability to deal with the impact of that production.

In her study of the impact of globalization, Saskia Sassen characterizes nations as an aggregate of differing spatiotemporalities that become unified only within the larger frame of the global. Sassen’s vision conjures mathematical images, dividing the world into sets and subsets, contained shapes that overlap to greater and lesser degrees. She devotes attention to the “dynamic spaces of overlap and interaction,” what she has termed “frontier zones.” “Given the historically constructed meaning of the national as a dominant condition that mutually excludes both other nationals and the nonnational, these frontier zones are likely to be marked by operations of power and domination.”² These frontier zones are areas of contestation that produce definition. In particular, what becomes delineated are the spaces known as nation. Sassen approaches the study of the global from a distinctly spatial perspective. However, given that the world is divided both spatially and temporally, what might be gleaned by focusing on the temporal? As Abe notes, the advent and deployment of nuclear weaponry suggests the existence of a temporal zone of overlap. Within this framework, the geographical locations of individuals and communities is superseded by an awareness of the perpetual threat of nuclear attack, an awareness that Abe argues should bind citizens of the world together rather than increase a sense of division.

Nevertheless, global notions remains problematic within a cognitive framework that continues to regard the world spatially. As Saskia Sassen notes, “If the global is indeed rich in content and characterized by a diversity of conditions, then its insertion in an institutional world that has been historically constructed as overwhelmingly national is eventful. Indeed, it is what gives meaning to the notion of overlap and interaction among the multiple spatialities and temporalities of the national and the global.”³ When Sassen describes to the “insertion” of the global into the national as “eventful,” she refers primarily to the intrusion of capitalistic enterprises into local economies, and these disjunctures can provide opportunities. “The sharper the differentiation between these two temporalities grows (with dematerialization/digitalization), the more abundant the business opportunities become.”⁴ While she acknowledges that spatiotemporal differences between nations and economies preclude universalization of global economic practices, she makes the presumption that nations and economies will have the ability to respond and adapt to those disjunctures. Temporality, in this sense, refers to differing degrees of economic and technological

1 Abe Kōbō, “Kakujidai no ‘hakobune’: Dai 54 kai Shinchō bunka kōenkai,” *Abe Kōbō Zenshū* 28 (Tokyo: Shinchōsha, 1997) 23.

2 Sassen, Saskia, “Spatialities and Temporalities of the Global: Elements for a Theorization,” *Public Culture* 12, 1 (2000) 216.

3 Ibid., 218.

4 Ibid., 222.

development, viewing time linearly as progress and linking it uniquely to each spatial sphere. That is to say, each place possesses its own temporality. Abe suggests a temporality that is not linked to a particular space but to a cognitive framework produced by a catastrophic historical event. Rather than sink into a criticism centered on national interests, Abe claims that human interests supersede them. By this intellectual movement, Abe undermines the spatial, or national, frameworks, placing emphasis on the temporal—the nuclear age.

The intrusion, however, is not simply a difference in the degree of technological capability. It carries with it questions concerning the continuity of species. Under a logic of mutual deterrence, nuclear arsenals expand and develop worldwide. Instead of fostering a sense of greater security, the growing global nuclear capability only strengthens a sense of the inevitability of mutually assured destruction. As Abe notes:

The question of who is to survive in a lifeboat carrying two individuals is a dilemma impossible to answer. Who has the right or the qualifications for survival over the other? This is a chronic question of the age. As an author, I have put together such a determination for an unanswerable question. Having just completed the work, I do not feel a sense of release, but rather struggle with an urgency to continue writing the story.⁵

Given the historical environment in which this work was produced, it was not a trifling question. Yet, if it is unanswerable, why continue to engage it? That he devoted seven years to writing a lengthy tome centered around the subject and then expresses the desire to continue on with it only emphasizes the importance it held for him. It suggests that tackling the impossible somehow will yield something productive. In centering the novel around the consideration of a hypothetical question, the depiction acquires the character of an imaginative experiment.

In simplest terms, *The Ark Sakura* portrays the destruction of a protagonist's hopes for salvation, not just of himself but of the human race, in the face of an apocalypse. The story opens with the protagonist, Mole, choosing a crew for his ark, which is actually more like an underground bunker. However, his endeavor turns to misadventure from the outset. Because his crew members do not share his sense of impending doom, the space of the ark becomes an area of contestation. Each brings a unique logic to the question of how to use the space of the ark. Then, the ark faces the crisis of encroachment from a rival—the Broom Brigade, a paramilitary group of elderly men who, during the night, clean the streets of the town above the ark. In questioning the role and function of the ark, the crew has also challenged Mole's conception of himself as captain. Eventually Mole capitulates to the disruption of his hopes for salvation and abandons the ark. He emerges from underground, literally and figuratively, into the center of town, just outside the town hall, only to observe the dematerialization of the town's citizens.

I meant to take a souvenir photograph of myself and the street, but everything was too transparent. Not only the light but the people as well: you could see right through them. Beyond the transparent people lay a transparent town. Was I transparent, then, too? I held a hand up to my face—and through it saw buildings. I turned around, and looked all about me; still everything was transparent. The whole town was dead, in an energetic, lifelike way. I decided not to think anymore about who could or would survive.⁶

Clearly, his fears have been realized. However, the form of the apocalypse is something other than he had anticipated. However, the nature of this event is unclear. After all, people continue to engage in their everyday lives as if nothing has occurred. Since Mole is the only one to have observed the event, is it solely some sort of internal apocalypse? His final statement certainly expresses abnegation of the notion or even viability of survival. Rather than a resolution, this denouement instigates questions. What has happened to make everyone transparent? How can the town be both “dead” and “energetic”? Is this the apocalypse? If so, what is the nature of it and why does he seem to be the only one noticing it? What has he become aware of that has led to his rejection of survival, a guiding tenet for his creation of the ark? Rather than resolution, Abe has

5 Abe Kōbō, “Jisaku wo kataru—Hakobune sakura maru,” *Abe Kōbō Zenshū* 28 (Tokyo: Shinchōsha, 1997) 9.

6 Abe Kōbō, *The Ark Sakura*, trans. by Juliet Winters Carpenter (New York: Alfred A. Knopf, 1988), 335.

constructed an ending that prompts a kind of cyclical thinking, an intellectual movement back in time to retrace and reflect upon the events of Mole's story.

Notably, nothing in *The Ark Sakura* is what it initially appears to be. The story in a sense is one of revelation, as layers are peeled back or laid on a character or object. The ark, for example, comes into the story with a figurative history that undergoes a contemporary revision. As the setting for much of the story, and representative of the apocalyptic framework, this "ark" is tied inextricably to the framing question of the novel. The word conjures an image of a wooden ship filled with all varieties of life and designed to weather an extended deluge intended to cleanse the world of wickedness. Abe's ark is an abandoned underground stone quarry that has been outfitted by Mole to protect and supply a population of human survivors of an atomic apocalypse. The ark, despite continued references to it as a ship, will never leave dock, although its purpose of salvation remains the same. Already Abe has begun to play humorously with aspects of the figurative meaning, foreshadowing its transformation and ultimate demise as a symbol of salvation.

Abe then compromises the ark's ethical sheen. It is a maze of tunnels produced by excavation of blue shale by four companies that ruthlessly competed to discover rich veins of the rock.⁷ The protagonist reshapes the remains of an abandoned economic venture into a vehicle of salvation, but he too is not free from economic demands. In order to stock the ark, the unemployed Mole uses it as the means to obtain needed capital, contracting to dispose of a toxic waste chemical—hexavalent chromium. Not only was its creation ethically compromised but Mole's efforts actually threaten the viability of the ark's purpose. The presence of the contaminant within the contained space of the ark could potentially threaten the health of its crew. Notably, the ethical meaning of the ark has been challenged by the economic forces that figure into its creation and use. The ark has acquired the character of a product and instrument of financial venture.

Once Mole's "crew," who does not share his sense of urgency over an atomic apocalypse, begins to come aboard, the ark becomes further reconfigured as a material space subject to market forces. The crew members are impressed with the vastness of its caverns and are concerned, not so much with the future, as the here and now. The temporality of their vision only includes the immediate. In that light, they regard it as a financial opportunity, as a source of income to be marketed for the mentally ill or fugitives from justice. As an object of financial salvation, the ark loses any value in terms of a future, and Mole seems powerless to prevent its conversion.⁸

The importance of the economic system to the events is further signaled in the novel's final moments. Just before Mole notices that he and everyone else has dematerialized, he notes two slogans inscribed on commercial trucks: "FISH BEFORE PEOPLE" and "WHEN I AM GONE AND THE CHERRIES BLOOM, LOVE WILL ALSO BLOOM."⁹ Both aphorisms strike a bizarre note. The first inverts the conventional hierarchy of the food chain, which is all the more strange since the truck's purpose is to deliver fish to market for human consumption. The second is clearly a paradox. Love is an emotion attributed to human beings, yet in this aphorism it does not bloom until "I" (ore) has disappeared. How could love "bloom" when "I" no longer exist to produce the feeling? Does this "I" refer to material human existence? Could it denote individual subjectivity? Both "aphorisms" foreshadow the coming apocalypse. This death is the death of humanity. But what is the nature of the calamity that has prompted this "death"?

The aphorisms' placement on the sides of delivery trucks represents a play with the notion of materialism. More specifically, they reflect a dialectic between the spiritual and the material that Abe develops in the opening section of the novel. In a market atop a major department store, vendors are selling a variety of strange and unusual goods—horse's teeth, whale dung, glass nails, and memories of a husband are but a few examples. The products apparently possess little or no use-value. The nails, for example, would certainly break upon impact of a hammer. In this way, Abe has constructed a market for items that lack use value. The sole exception is a vibrator that can serve as a back scratcher or toothbrush, among other things. "'There you have the opposite of a dream,' I said. 'Sheer practicality (*jitsuyō*).'"¹⁰ Mole deems the material usefulness of the commodity as

7 Ibid., 181.

8 Ibid., 179.

9 Ibid., 335.

10 Ibid., 16.

valueless, manipulating notions of use-value away from the material and toward the abstract. The object that captures Mole's notion of use-value is a legless beetle that is the imaginative product of a confidence scheme. "There was a charm to the unassuming eupcaccia that went beyond practical concerns."¹¹ What gives a commodity use-value for Mole is not tangible: it must instigate imagination, which moves thought out of the immediate limits of reality and temporally into the future. In characterizing the Eupcaccia as epitomizing a commodity of value, Abe appears to be suggesting a re-evaluation in terms of spiritual value. As Christopher Bolton, who has investigated Abe's writing in terms of the aesthetic impact of its scientific qualities, notes:

One of the key terms Abe and other postwar avant-garde authors employ to refer to that narrowness is *nichijō*—the everyday. In Abe's usage, it connotes a way of thinking that is grounded wholly in present everyday experience, an attitude that refuses to transcend prevailing ideas and values. For Abe, this represents a lack of imagination that produces a dangerous conservatism—an inability to adapt self and society to the needs of a changing world.¹²

The Eupcaccia serves no practical purpose. It is a preserved specimen encased in a plastic cube. However, in the dealer's sales pitch, the description of the beetle encapsulates Mole's perspectives on life. The Eupcaccia, for the most part, remains in one place. It pivots in a circular pattern around its thorax, its head following the trajectory of the sun, spinning like the hands of a clock. From sun up to sundown, it feeds on its own excrement. For Mole, the Eupcaccia, also known as the clockbug, serves an emblematic function.

The clockbug contained, I felt, a revelation that could save humanity much rancor and anxiety. Take the anthropoids, who are thought to share a common ancestor with the human race. They exhibit two distinct tendencies: one is to make groups and build societies—the expansionary tendency—and the other is for each animal to huddle in its own territory and build its own castle—the settling tendency.¹³

Mole identifies a dialectic at work within the human psyche that sets in opposition the desire for society and the desire for isolation. In this characterization, the act of grouping prompts colonial aggression that is somehow connected to choices between who will be included and excluded. Its logic incorporates a kind of dynamism that prompts territorial expansion, although the connection has not been made explicit, except in contrast to the "settling tendency," which is characterized by an isolated and stationary positioning. Prima facie, the Eupcaccia serves as an emblem of a logic of non-aggression based on the development of a high degree of self-sufficiency and as an emblem of Mole's particular form of logic.

However, just as the Eupcaccia must venture out of its self-contained space to perpetuate the species, Mole begins to distribute tickets to the "crew" of his ark. More specifically, he decides to give a ticket to the insect dealer "to keep him from belittling my purchase," and another is grabbed by a pair of shills who work the rooftop market.¹⁴ The members of the "crew" leave the market and gather again at the closed environment of the ark, the central setting for an allegory of nuclear-age logic. At the ark, they must collaborate to establish systems for living with each other—a process accelerated by a crisis instigated by the Broom Brigade's territorial encroachment upon the ark. As they work through the crisis, each of the characters comes to represent more than an individual position. The Broom Brigade is clearly representative of the vestiges of wartime nationalistic logic—although the members now wield brooms rather than weapons. The insect dealer, it is revealed, is a member of the Self-Defense Forces who is on the lamb due to his weapons smuggling operation. He is Mole's greatest disappointment. As the man who created and sold the Eupcaccia, the insect dealer's philosophy should have been closer to Mole's. However, rather than imagination or dream, he represents practicality and in the end becomes, through an act of violence, the de-facto leader of the

11 Ibid., 8.

12 Bolton, Christopher, *Sublime Voices: The Fictional Science and Scientific Fiction of Abe Kōbō* (Cambridge, MA: Harvard U Asia Center, 2009) 56.

13 Juliet Winters Carpenter translated "*kakuchō keikō*" as "aggrandizing principle." I altered her translation here to reflect the contrast I believe Abe intends to establish. Abe, *Ark* 19.

14 Ibid., 18.

Broom Brigade.

The Broom Brigade's encroachment sets off a series of events, beginning as a single act that effectively splits the group into multiple trajectories. The insect dealer, along with a group from the Broom Brigade, scours the ark's underground tunnels for a group of teenage girls, while Mole's leg becomes caught in the suction of a large toilet and the shills work with him to try to extract the leg. The allegory of logic disintegrates into a chaotic interplay that mirrors the mating of the Eupcaccia.

Next came the annual mating season, when time died, as the eupcaccia flew off like clock hands leaving their dials. Then impregnated females criss-crossed clumsily over the ground, fluttering wings as thin as the film on a soap bubble, as they searched for semicircles of dung on which to lay their eggs. The cycle was suspended, time invisible. The clocks shorn of hands were like claw marks on the surface of the ground, lifeless and sinister.¹⁵

In disrupting the cyclical nature of the daily life of the Eupcaccia, time has stopped. Time here does not represent the linear progression from one moment to the next, as that certainly continues in the chaotic pursuit of reproduction. What has terminated is a consistent pattern represented by the cyclical, regulated movement of the Eupcaccia and its human reciprocal history and culture. This temporal disruption in the pursuit of a mate and then a place to lay eggs, notably in the dung left by another Eupcaccia, represents a kind of territorial free-for-all that parallels global colonization. Despite the disappearance of time, the islanders persist in believing in it because this too promises regeneration. They have faith that time will resume. However, the Eupcaccia's patterns from those of humans differ in one important aspect. While their movements mirror colonial expansion, they lack violence.

Through this symbol, Abe represents time spatially in the pattern of the eupcaccia's existence. In an interview with Nancy Shields, Abe equated the representation of spatial changes with an awareness of time. "Because human beings have words, they can perceive time as a kind of wrinkle or some shade of space. Human beings have the power to imagine. By using imagination as a function of change we are able to go beyond time."¹⁶ Time seems to possess a kind of restricting immanence that requires a cognitive force to break its bonds. For the Eupcaccia, time is broken by instinct or desire, if an insect could be said to have desire. However, the eupcaccia do not "go beyond time"; they simply stop it. Instinct or desire then is not powerful enough. In an interview with Chikushi Tetsuya, Abe states that life is "a kind of 'prison'" and that the current generation can be characterized as "prisoners of desire."¹⁷ According to this description, human beings reside within social structures that somehow prevent or limit the acquisition of some thing or things. In the case of Mole, the desire seems to be for an identity that permits him control over his environment. His dilemma takes shape in the voicing of his title of captain of the ark. Just after he extends an invitation to the insect dealer to board the ark, Mole experiences almost immediately the possibility of loss of control.

To erase any doubts, as soon as he came back from the men's room I could inform him that I was the captain, and have him sign a form stating that once aboard, he agreed unconditionally to obey any orders to disembark. The ship was mine. I discovered her, designed her, and built her. It was only proper for the crew to fall in line with my policies.¹⁸

Mole has disrupted his cyclical pattern for a union with other human beings. The title of captain represents not just a title or identity but the pattern of regularity he has exercised over his life as the sole inhabitant of the ark. However, the hollowness of that identity becomes apparent as soon as the "crew" begins to employ it. "The sensation of being called Captain, now that I could finally taste it, brought nothing like the satisfaction I had so long anticipated. On the contrary, I rather felt he was laughing at me."¹⁹ Mole interprets the use of his title as his crew's acknowledgment of his desire to retain control over his

15 Ibid., 18.

16 Shields, Nancy K., *Fake Fish: The Theater of Kobo Abe* (New York: Weatherhill, 1996) 61.

17 Abe Kōbō and Chikushi Tetsuya, "Kakujidai no 'hakobune,'" *Abe Kōbō Zenshū* 27 (Tokyo: Shinchōsha, 1997) 240.

18 Abe, *Ark*, 25.

19 Ibid., 62.

environment rather than recognition of his authority. Finally, the agency for establishing his identity is removed completely from him. ““In other words, he can call himself captain all he likes, but without the consent of the crew, it doesn’t mean a thing.””²⁰ Mole has abandoned his dung circle with the hope, ostensibly, of sustaining the human species. However, unlike the Eupcaccia, which share a singular desire for reproduction, human desire is too complex and varied to sustain any sense of time or the hope of regeneration.

In terms of the immediate, or perhaps immanent, temporal disjuncture represents a threat to continuity. The novel seems to suggest that without some agreement with regard to nonviolence, time cannot resume and regeneration cannot occur. The perpetuation of violence is in part a historical legacy that stems from the grouping nature of human beings. However, it is also a product of the practical thinking perpetuated by a society driven by economic forces. This practical thinking has elevated material concerns over the “dream”; it places the immediate fulfillment of desire over the imagination required to envision a future. It is not the abruption itself that prevents time’s resumption. What has been lost is cyclical thought, the processes of reflection and imagination that permit an escape from the constraints of time. As the protagonist becomes aware that dematerialization has occurred, he also recognizes that he has abandoned his unanswerable question. In this sense, the ability to exceed time somehow provides the materiality to human existence. It is not a resolution but the pursuit that is important. As Abe claims, his completion of the novel only increases urgency to address the question. In this sense, *The Ark Sakura* provides a mechanism for that cyclical reflection necessary to re-establish a sense of time.

20 Ibid., 145.

The Importance of Motherhood in *The Tale of Genji* and *Harry Potter*

A Comparative Study about Gender in Old Japan and Current Western Culture

Megumi Nakajima

This study is a comparison of two very different literary works, *The Tale of Genji* from ancient Japan and *Harry Potter* from contemporary England. Despite these differences, various similarities may be found; here the common importance of motherhood will be my central focus. This paper will give new perspectives on the theme of gender in literature.

Both works have been frequently criticized regarding gender equality. *The Tale of Genji*, which is one of Japan's most famous pieces of classic literature from the early years of the 11th century, is based on the life of one noble man, Hikaru Genji, whose name is adopted as the title. In this novel, Genji is portrayed as an ideal man, blessed with beauty, charisma, and artistic talent. Because of his standing, many women are naturally attracted to him. In fact, he enters into multiple relationships with various women. Feminists have argued that this novel is demeaning toward women because of the story's heavy focus on Genji's seemingly flawless character. Some feminists claim that the plot reveals a lack of consideration for the female characters, who are disregarded by Genji. Similarly, the series *Harry Potter* is also criticized for having females who are somewhat stereotyped, while having male characters who are often illustrated in detail. In both cases, however, less description does not mean that women are unvalued in their respective fictional worlds.

In fact, in both series, there is one person who is essential and partially determines the future of the protagonist: the mother. Motherhood actually molds the whole plot even though both mothers disappear at the very beginning of each series. In *The Tale of Genji*, ladies superficially seem to be used by Genji, but Genji never feels satisfied nor does he obtain what he longs for. Many have argued that this is because he was pursuing his stepmother, who was his first crush. She resembles his biological mother and after he initially coerces her into sexual intercourse, she rejects his subsequent advances. Likewise, Lily, the mother of Harry, who is already dead when the story starts, saves her son's life many times throughout the series. Her inherent virtue is overwhelming, in contrast to her husband's disgraceful past.

Thus, mothers are a symbol of inviolable femininity. By showing how these characters affirm femininity, which could be regarded as also affirming the female authors, both series reveal another perspective about gender equality and show us a commonality between Asian / Western culture and ancient / modern times.

In ancient Japan, men's literature and women's literature were regarded as separate. It had been asserted for a long time that females ought not to be educated as males. Firstly the writing system was re-created in different ways from Kanji, Chinese characters. Katakana were for men and Hiragana were for women. Therefore, women had few chances to learn Kanbun, classical Chinese texts, although it was the mainstream of literary accomplishment. Nevertheless, it is clear that some women were intelligent enough to produce works of high quality literature, literature with lasting value, such as *The Tale of Genji*, which have remained popular and entertaining, and are studied academically to this day. *The Tale of Genji* is one of the most famous works of Japanese classic literature, written by Murasaki Shikibu in the early years of the 11th century. She is said to have included references to more than 13 Chinese classics, 6 Buddhist texts and 41 Waka-shu, collections of poems. This fact proves the intelligence and the ability of educational attainment not only of Murasaki Shikibu but also of her readers, most of whom were women at that time.

This epic novel is frequently introduced as the story of one noble man, Hikaru Genji. Although this story is widely known as *The Tale of Genji* in modern times, it was possibly untitled by the original author as there were aliases such as *The Tale of Murasaki*. Genji is described as if he is perfect¹. He has frequent liaisons with various females whose names or places where they meet feature in most of 54 chapter titles.² Those chapters also might have been titled by others afterward. However, its

1 Genji is described as an amazingly beautiful man, who is musically talented and extremely intelligent.

2 Genji does not necessarily have sexual intercourses with those female characters.

big number still apparently shows that those female characters are individually important for the story that relies on them to continue.

Besides, the story starts before he is born. Two ladies appear at the very beginning and they haunt the story until it ends. One is Genji's biological mother Kiritsubo no Koi and the other is his stepmother Fujitsubo no Nyogo. After Kiritsubo gives birth to Genji, she passes away when her son is only 3 years old. Genji misses his mother and falls in love with Fujitsubo, whose resemblance to the deceased Kiritsubo let her enter the service of Kiritsubo Emperor, Genji's father. In *The Tale of Genji*, Genji has never felt satisfied and could not obtain what he longed for. He has been pursuing his stepmother who was his first crush.³ She renounces the world and disappears from the story at the same time, but Genji cannot forget her and marries the young girl Murasaki, who resembles her aunt Fujitsubo.⁴

However, Murasaki is only a replacement of Fujitsubo, though Murasaki is his most favorite wife. Why does Genji keep his mind on Fujitsubo despite the other 11 girl friends in his life? It seems to be because Genji cannot obtain Fujitsubo, no matter how he tries. When Genji sends Waka, a short poem, to Fujitsubo in Chapter 5 Wakamurasaki, he composes as below and cries:

見ても又逢ふ夜まれなるゆめのうりにやがて紛れるわが身ともがな⁵

Genji seems to have no moral struggle about their relationship. He only suffers from the fact that his demand is hard to fulfill. And Fujitsubo replies like this:

世語りに人や伝へむ類なくうき身を醒めぬ夢になしても⁶

Contrastingly, Fujitsubo mentions about people around them, which shows her interest is more extrovert while Genji is consistently described as a self-centered character. This difference becomes clearer especially after she gives birth to an adulterine son, who is brought up as the son of Kiritsubo Emperor. As Fujitsubo becomes mother, she starts worrying about the future of her son and separates from Genji indefinitely.⁷ Ironically it makes Genji's obsession eternal, but Genji cannot change her mind and it implies the power of mother.

Consequently, Genji starts pursuing Fujitsubo's replacements as Murasaki. Nonetheless he loses Murasaki on account of his flirtation. Rokujo no Miyasudokoro, who is physically involved with Genji, becomes an evil spirit and curses Murasaki to death. Her ghost is a metaphor of jealousy but it symbolizes Genji's sinfulness at the same time. He also has a marital relationship with Onna Sannomiya, another niece of Fujitsubo, just because of her biological background. However, she has an illicit affair with Kashiwagi and becomes pregnant. While it makes Genji angry, he starts worrying whether his father might have known about his infidelity with Fujitsubo since he has treated Kashiwagi as if he was his own son. Genji becomes aware of his sin for the first time at this point, almost at the end of his life. After most women leave Genji, he renounces the world and passes away alone.

Eventually, the life of Genji seems the punishment of his sin to change and ruin many females' lives. Thus, this plot is possibly read as the female story of revenge upon men in Heian. The situation for noble women in Heian era was severe in many respects. The marriage system, Tsumadoi-kon, in which the husband visits the wife at her hope rarely allowed females to actively choose their husbands; therefore, their marriage was practically polygamy and could be crucial for women as most of them had no means of living but serving for the palace. The noble hired intelligent women as their daughter's nursemaid in order to educate their daughter to be adequate as the emperor's wife, but on the other hand, they still believed females ought not to be educated. Thus, the society contained conflicted concept of values. Murasaki Shikibu was said to be also struggling

3 After initial sexual intercourse, Fujitsubo eventually rejects Genji's subsequent advances though she also cares for him due to a sense of guilt.

4 Murasaki is brought up by Genji and grows up as an ideal woman with beauty and intelligence.

5 Because it is difficult to see you again, I would like to disappear in the dream of the night.

6 People would rumor us, even though we let us be in forever dream.

7 If the fact is revealed, the future of Fujitsubo's son is spoiled. To protect the social status of her son, Fujitsubo renounces the world, which is only way to escape from Genji.

with this conflict. However, as the purity of Kiritsubo represents the unequivocalness of motherhood and her absence and absoluteness seem to reflect the power of the author. Therefore it is regarded that Murasaki Shikibu implied the potential power of women through her characters.

In this retributive story, readers find the mother's absoluteness despite the women's powerlessness in that period. The whole plot has roots in Kiritsubo no Koi. Without the resemblance to Kiritsubo, Genji possibly would not be interested in Fujitsubo. Genji would not need to seek for her replacements and distract their lives either. In other words, the absence of mother has a decisive impact on the whole plot. Besides, though a variety of feminine beauty is described in the story, Kiritsubo still overwhelms other female characters simply because she is his biological mother despite her absence in his life.

The series of *Harry Potter* and *The Tale of Genji*, both stories were written as fiction based on the setting of that time, consequently, they may highly reflect the reality of their actual background. More than 1000 years have passed and the actual condition of society for women has dramatically changed, however, there still seem to be gender gap left. Before J. K. Rowling first published *Harry Potter and Philosopher's Stone* in 1997, her publisher suggested she use capital letter "J" concealing her first name "Joanne", because it is obviously a female one. While United Kingdom has held Queens and English female prime minister and many people have supported them, in fact, they had still believed boys would not read and like what a female author wrote. There is no way to know if that strategy had worked or not at present, but, at least a huge number of children all over the world loved them as well as adults and they still love the series. This shows that female writers have been treated more coldly than male writers, not because of the poor quality of their writing, but because gender bias continue to be prevalent in society.

Harry Potter starts with the description of its protagonist Harry's uncle and aunt Vernon and Petunia Dursley. They are muggles, which mean ordinary human beings unrelated to magic, and the Dursley family play roles of antics on behalf of "muggle" readers who are also unfamiliar with the setting of this fantasy world. Story says they are proud of being ordinary except one fact, that Petunia has an extraordinary sister. When the family finds something weird is happening, Vernon asks his wife if she has heard from her sister Lily. Lily is the mother of Harry. Thus, readers notice her remarkable existence before anything. *The Tale of Genji* also begins the description of Kiritsubo as an introduction. It is considered that it implies the significance of mothers who gave birth to protagonists, because stories would not even start without them. Especially in *Harry Potter*, Harry's life is saved by maternal love of self-sacrifice. Its protective power lasts until the end, when Harry also shows his spirit of self-sacrifice.

Lily Potter is married to her husband James. In the early part, they appear like a pair but James is more focused on, especially through the sporting scenes. These masculine descriptions are included in the bright side of the plot and his past achievement tend to lead readers and Harry to hero-worship James. The condition has started changing in the middle, when Harry happens to know his father's past. James bullied young Severus Snape, the present professor of Hogwarts, the school of magic. Harry dislikes Snape but his own bullied past by his cousin Dudley and friends, his moral values makes him sceptical about his father's heroic image and start feeling a certain sympathy for Snape. This setting is significant to get rid of his blind belief and gives him wider perspective with more profound thoughts.

On the other hand, the purity and goodness of Lily lasts till the end of the story as her existence becomes more vivid in the latter of the series. In order to examine this, we need to focus on the past events of Lily and other significant character Snape that happened before the story starts. Lily was a beloved girl and Snape also has loved her since they first met when they were kids. But Snape never reveals his feelings to Lily. After they entered school, Snape is bullied by James and his friends, which makes him have a great esteem in the dark magic in order to resist the bully. However the dark arts contains a proclivity of racism against muggle-borns.⁸ However, Snape comes back from the dark side after Voldemort murdered Lily, because he

8 Most of them using dark arts claim the genuine breed among magic users, although some of them are not pure-blooded as Snape who is half muggle. When Snape calls Lily "Mudblood", which is a pejorative term for muggle-born people, their friendship turns over but since it is out of his intention, Snape will regret this until his death.

still loves her. Snape regrets that his spy sent Lily to her death and decides to protect her son Harry as a secret double agent.⁹ However, it does not necessarily mean Snape becomes a good man according to the reference below:

‘Don’t kill me!’

‘That was not my intention.’

Any sound of Dumbledore Apparating had been drowned by the sound of the wind in the branches. He stood before Snape with his robes whipping around him, and his face was illuminated from below in the light cast by his wand.

‘Well, Severus? What message does Lord Voldemort have for me?’

‘No – no message – I’m here on my own account!’

Snape was wringing his hands: he looked a little mad, with his straggling, black hair flying around him. ‘I – I come with a warning – no, a request – please –’

Dumbledore flicked his wand. Though leaves and branches still flew through the night air around them, silence fell on the spot where he and Snape faced each other.

‘What request could a Death Eater make of me?’

‘The – the prophecy ... the prediction ... Trelawney...’¹⁰

‘Ah, yes,’ said Dumbledore. ‘How much did you relay to Lord Voldemort?’

‘Everything – everything I heard!’ said Snape. ‘That is why – it is for that reason – he thinks it means Lily Evans!’

‘The prophecy did not refer to a woman,’ said Dumbledore. ‘It spoke of a boy born at the end of July –’

‘You know what I mean! He thinks it means her son, he is going to hunt her down – kill them all –’

‘If she means so much to you,’ said Dumbledore, ‘surely Lord Voldemort will spare her? Could you not ask for mercy for the mother, in exchange for the son?’

‘I have – I have asked him –’

‘You disgust me,’ said Dumbledore, and Harry had never heard so much contempt in his voice. Snape seemed to shrink a little. ‘You do not care, then, about the deaths of her husband and child? They can die, as long as you have what you want?’ (Rowling, *Harry Potter and The Deathly Hallows*, 2008, pp. 741-742)

Apparently, Snape does not care about Harry but Lily. Snape protects Harry not because Snape loves him but because Lily sacrificed herself to protect Harry. Furthermore, Harry is also a son of James, who Snape really hates. But as readers see in Snape’s patronus, the guardian spirit which forms specific animal, whose appearance is a female deer, the symbol of Lily, Snape’s love for Lily is so strong.¹¹ In fact, Harry could lose his life in every single volume without Snape. To have a mother of Lily protects Harry indirectly.

Nevertheless, those supports from Snape are not revealed in public but to Harry in the end. This episode tells readers the virtue of humbleness. Although Snape’s humility is considered as compensation of his past error, it is observed that his sin is absolved from the ending scene in which Harry names his second son Albus Snape. The boy who has same name as Snape seems to symbolize the hope of new life.

We can see another example of humbleness in the character Lily. Readers know more about Harry’s father James, for example he was an excellent player of Quidditch, the most popular sport in their world. Most of his old companions appear in the story, which makes it easier to image what kind of person he was.¹² Compared to James, the information of Lily is hardly told until the very latter part. Additionally, many characters know about James’s achievement with visual tools like his names on trophies, but readers learn about Lily through some specific character’s individual memories.

9 Snape tells Voldemort the prophet about the enemy, but Snape does not know it turns out to be Harry, Lily’s son.

10 Sybill Patricia Trelawney is a witch and the professor of Divination at Hogwarts. She was appointed as a professor by Dumbledore, after making a prophecy about Voldemort and a boy who is capable of conquering him.

11 This patronus charm is said that only wizards who have pure heart can spell and animals symbolizing people who users love appear for defence against dark arts.

12 James is described as a character with the personality of adventurous, popular, high-spirited and mischievous.

This kind of contrast is also observed in Harry's appearance. His entire body has a true likeness of his father but his eyes. Considering the proportion of the mention about James and Lily, James captures more than 80 percent. However, the scenes holding Lily give as big an impact as the ones of James in the narrative structure. When Snape sees Lily through Harry's eyes taken from his mother, he gives Harry his secret at his death, which is his memory with Lily and it explains the central core of the plot. Likewise, when Harry is investigating his enemy Voldemort's secret, Professor Slughorn is obviously concealing something significant. Slughorn once refuses to reveal his secret, but when Harry mentions about Lily, one of Slughorn's most adorable students, he recalls her braveness that lets him uncover his shameful past. These interchanges are only between Harry and the other, therefore other characters rarely know about these essential plots but the readers. James encourages Harry when he needs the power to move forward. For example, the reference of James tends to happen at the battle and sporting scene. To think about father gives Harry the strength to conquer the difficult situations. On the other hand, Lily more appears at the scenes of internal dialogue with which the plot proceeds. Although it seems that Lily plays the behind-the-scene role, her existence is more essential to the series than her husband.

Most of all, baby Harry survives for Lily's love of self-sacrifice. Before the story starts, the enemy Lord Voldemort attacked the Potters. The parents die but only Harry stayed alive because Lily protected him using the defensive magic in exchange for her own life. It is not clearly explained what kind of magic she used. However, no character seems doubtful that the power of her maternal love is so powerful that dark arts cannot beat it. Regarding the author, Rowling is a Christian, the preciousness and powerfulness of self-sacrifice that evokes Jesus Christ might have been taken for granted. It is interesting that readers all around the world accept her sense of value; otherwise the plot would not work and the story even would not start either. Alternatively, her readers might have felt empathy with the concept of the strength of love. Besides, as this series has begun as a children's book, it is probably not so difficult for readers to believe its universality regardless of their religions and cultures.

Although it is not stated in the story, Rowling reveals at the interview that Lily is beautiful and used to be popular among the schoolboys while it is apparent that her genuine quality is based on inner good aspect such as braveness. Rowling also mentions that these characteristics are seen in another character Ginevra Weasley, called Ginny, who becomes Harry's wife at the end of the story. Lily and Ginny are not analogous to each other in the respect of physical appearance. Therefore, Rowling implies their inner similarities. Harry has a girl friend named Cho Chang but her description is more focused on her looks. In consequence, Rowling forms Ginny and Lily emphasizing their interior aspects, which seems to be significant for the image of an ideal woman.

The tendency of the protagonist to choose the woman who resembles his mother is also seen in *The Tale of Genji* as mentioned above. In order to analyze the reason why they both have this tendency, other common points between Genji and Harry need to be examined. Firstly, they lose their mothers in very early stage. Secondly, they know their mothers were good people according to others. Furthermore, their mothers are actually given good characters by the authors. Therefore, it is possibly easier for them to idealize their mothers. Moreover, the early death of mothers makes them more inviolable.

Why authors give mothers such absoluteness? Their absence and the power of influence overlap the authors. The authors cannot appear in their fictional world. However, they have ability to control everything in the worlds and their affirmation must have been seen or spoken for through the stories. In those two series, authors' mouthpiece is the mother. Literally, Murasaki Shikibu and Rowling both have birth experience. Besides, they are both mothers of their literary works. Accordingly, they recognize how powerful mothers are through their own experience and reflect the strength in those characters.

Furthermore, as their works set in their periods, it cannot be ignored the fact that they reflect the actual situations. That means commonality that readers see in those books shows us the universality between the literatures across time and space. Compared to Heian era in Japan and modern society in England in each book, we still see the superficial male dominance as the debate about the lack of consideration for female characters has been commonly held for both series. However, it is considered that authors daringly wrote such current status with strong female characters. Because the strength of those characters is not obvious and direct, they can still bring the assertion without twisting the reality. Moreover, the strength of mother becomes more remarkable all the more under the severe situation for women and this is probably what the authors wanted to say through those characters.

Maternal strength is a hope for women. Although it is not only one possibility, it is one of the most reasonable forces as long as we are the living creatures born from our mothers. It is sad that this kind of gender issue is still kept being claimed despite the gap more than 1,000 years and 6,000 miles. However, the fact that both series have obtained so many fans means some ideas of authors are widely accepted. *Harry Potter* and *The Tale of Genji* are now world-famous and accordingly influential. Although they are often recognized as the stories of men superficially, re-reading both the series and realizing the power of the influence of mother probably have an effect on the new sense of values in the future.

ITP 総括シンポジウム

東アジアの共生社会実現に向けた
新しい東アジア研究

発表原稿集

ITP 総括国際シンポジウム「東アジアの共生社会実現に向けた新しい東アジア研究」

日時：2013 年 1 月 11 日（金）

場所：ソウル大学校国際大学院 GLRoom

共催：ソウル大学校日本研究所・国際大学院、神戸大学

使用言語：英語

「東アジア共生社会実現に向けた教育と研究」（10：00～11：30）

司会：南基正（ソウル大学校日本研究所副教授）

10:00-10:10 セレモニー

10:10-10:30 鄭鍾昊（ソウル大学校国際協力本部長）

基調講演

10:30-10:50 中村千春（神戸大学副学長（国際交流担当））

基調講演"Kobe University Ignites Strategic Partnerships with East Asian Universities"

10:50-11:10 朴喆熙（ソウル大学校日本研究所長）

基調学術講演

11:10-11:30 木村幹（神戸大学大学院国際協力研究科教授）

基調学術講演"Northeast Asian Relations in the Globalizing World"

昼食（11：30～13：30）

第 1 部会「韓半島と韓国社会」（13：30～15：00）

司会：松並潤（神戸大学大学院国際協力研究科教授）

13:30-13:50 三村佳充（神戸大学大学院国際協力研究科博士後期課程）

The Royal Power and the State

13:50-14:10 米沢竜也（神戸大学大学院国際協力研究科博士後期課程）

The Origins of the Civil Movements in South Korea

14:20-14:40 横溝未歩（神戸大学大学院国際協力研究科博士後期課程）

Gangnam Style: A New Aspect of Korean Society

14:40-15:00 曹娥羅（ソウル大学校国際大学院博士課程）

Social Change in Korea Reflected in 2012 Presidential Election

コーヒーブレイク（15：00～15：30）

第 2 部会「グローバル社会における文化交流」（15：30～17：00）

司会：林采成（ソウル大学校日本研究所副教授）

15:30-15:50 楊吟（神戸大学大学院人文学研究科博士後期課程）

A Constrastive Study on Speech Acts Based on Chinese, English and Korean Translations of Japanese Novels

15:50-16:10 沖野真理香（神戸大学大学院人文学研究科研究員）

On the Relationship between Japanese Americans and African Americans in Nina Revoyr's *Southland*

16:20-16:40 四方俊祐（神戸大学大学院人文学研究科研究員）

US Policy toward Taiwan and Overseas Chinese in the Early Cold War

16:40-17:00 鄭基仁（ソウル大学国語国文学科博士課程）

What does translation do? : Korean, Chinese, English Translations of Natusme Soseki's "Botchan"

総括（17：00～17：30）

司会：緒形康（神戸大学大学院人文学研究科教授）

17:00-17:15 油井清光（神戸大学大学院人文学研究科教授）

17:15-17:30 権肅仁（ソウル大学校人類学科教授）

Kobe University Ignites Strategic Partnerships with East Asian Universities

NAKAMURA, Chiharu

(Executive Vice President [in Charge of International Exchange], KU)

Kobe University Ignites Strategic Partnerships with East Asian Universities

January 11, 2013

Chiharu NAKAMURA
Executive Vice President, Kobe University

1

**1) Kobe City and Kobe University:
A Brief Introduction**

2

Kobe (神戸)
The city with rich cultural mixture !

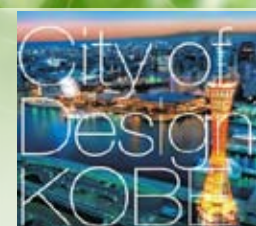


- 5th largest city in Japan (excluding Tokyo)
- Population ~ 1.5 million
- One of the earliest open ports for overseas trading
- Plays significant role in Japan's modern history

3

Kobe is UNESCO's City of Design (October 2008)

One of seven categories:
Literature; Cinema; Music; Crafts and Folk Art;
Design; Media Arts; and Gastronomy

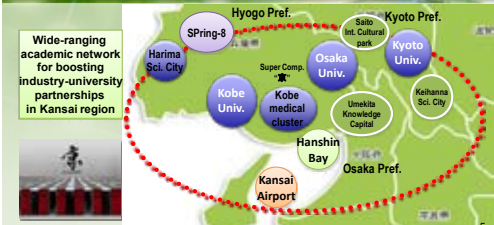


UNESCO established the "Creative Cities Network" in 2004, as part of its efforts to promote mutual understanding of different cultures. Its objective is to encourage cooperation and thereby facilitate mutual exchange worldwide among "creative cities", which are committed to city revitalization by strengthening their **cultural and creative industries**.

4

Kobe University Takes Advantage in Kansai
Kansai Innovation Strategic Special Economic Zone
for Life Innovation & Green Innovation

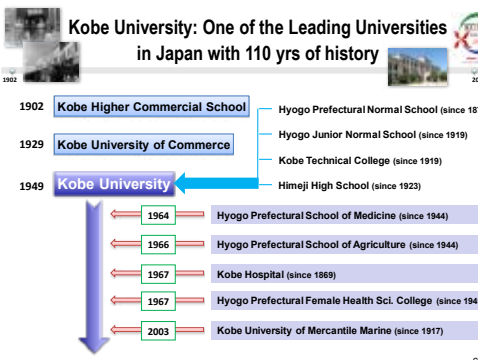
Kobe University's external platform (KU Integrated Research Centre) for boosting industrial partnership and social contribution in Kansai Region



Wide-ranging academic network for boosting industry-university partnerships in Kansai region

5

Kobe University: One of the Leading Universities in Japan with 110 yrs of history



Year	Event
1902	Kobe Higher Commercial School
1929	Kobe University of Commerce
1949	Kobe University
1964	Hyogo Prefectural School of Medicine (since 1944)
1966	Hyogo Prefectural School of Agriculture (since 1944)
1967	Kobe Hospital (since 1869)
1967	Hyogo Prefectural Female Health Sci. College (since 1949)
2003	Kobe University of Mercantile Marine (since 1917)

Other institutions mentioned: Hyogo Prefectural Normal School (since 1874), Hyogo Junior Normal School (since 1919), Kobe Technical College (since 1919), Himeji High School (since 1923).

Toward Global Excellence

6

11 faculties/schools & 14 graduate schools

Four academic domains

Faculties and Schools

(Undergraduate)
Faculty of Letters
Faculty of Intercultural Studies
Faculty of Human Development
Faculty of Law
Faculty of Economics
School of Business Administration
Faculty of Science
School of Medicine
Faculty of Engineering
Faculty of Agriculture
Faculty of Maritime Sciences

Graduate Schools

Graduate School of Humanities
Graduate School of Intercultural Studies
Graduate School of Human Development and Environment
Graduate School of Law
Graduate School of Economics
Graduate School of Business Administration
Graduate School of Science
Graduate School of Medicine
Graduate School of Health Sciences
Graduate School of Engineering
Graduate School of Agricultural Science
Graduate School of Maritime Sciences
Graduate School of International Cooperation
Studies Graduate School of System Informatics

Research Organizations

Research Institute for Economic and Business Administration
Organization of Advanced Science and Technology

7

2) Kobe University's Strategic Partnerships with East Asian Universities



8

Three Essential Factors needed for Successful Collaboration towards Broader Impact on Our Society

- Good partners
- Resources beneficial to both sides
- Common objectives



9

Kobe University's Core Values and Strategies



10

Kobe University's Visions

Kobe University Vision 2015
Toward Global Excellence in Research and Education



Integrity and Internationality

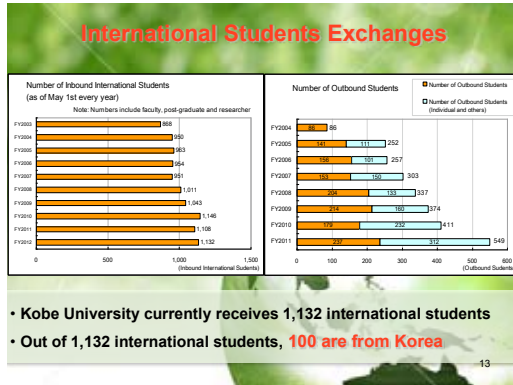


11

Kobe University's International Networks



12



CAMPUS ASIA PROGRAM Re-Inventing Japan Project (MEXT)

**Graduate School of International Cooperation Studies
Kobe University**

**Graduate School of International Studies
Korea University**

**School of International Relations and Public Affairs
Fudan University**

A consortium to offer consistent high-quality education programs in order to foster 'risk management experts' who can deal with global issues not only in East Asia but across the world.

Seoul National University & Kobe University Inter-University Exchange Agreement

Feb. 3, 2009 Concluded an Inter-University Exchange Agreement

Student Exchange: Graduate School of Humanities
Graduate School of Intercultural Studies
Graduate School of Economics

Faculty Exchange: Graduate School of Humanities
Graduate School of Intercultural Studies
Graduate School of Economics
Graduate School of Human Development and Environment
Graduate School of Agricultural Science
Graduate School of International Cooperation Studies
Research Institute for Economics and Business Administration

Prospective Student Exchange: Graduate School of Law
Graduate School of Engineering



Kobe University Global-Link Forum (KUGL)

Aims at forming stronger bonds with Kobe University's intelligent information resources including international alumni network and partner universities, and heighten the presence of "Kobe University Brand."

KUGL in Seoul (Nov. 2011)

The 2nd Global-Link Forum was held in Seoul on Nov. 25-26, 2011, in collaboration with partner universities in Korea, supported by "Kobe University Alumni Association in Korea".

**We can't change the direction of the wind,
but we can adjust our sails to the better future.
Let's collaborate!**

Institutional Program for Young Researchers Overseas Visits

To foster highly capable researchers and educators

Number of Dispatched Researchers (includes prospective) (As of Oct. 1, 2012)			
Europe	28	U.K.	10
		Germany	6
		France	4
		Belgium	3
		Sweden	2
		Austria	1
		Switzerland	1
		Italy	1
		Russia	1
	North America	22	USA
		Canada	2
Oceania	3	Australia	3
Asia	1	India	1
Middle East	1	Russia	1

*Total number per region may exceed the actual number since some researchers visited more than one country.

Engaging in research abroad and acquisition of ability to survive in a competitive world will not only benefit researchers but also contribute to promote the University's international exchanges.

19

Kobe University concluded MOU with the University of Oxford (March 2011)

■ Kobe-Oxford Japanese Studies Programme
Kobe University Graduate School of Humanities and Faculty of Oriental Studies at the University of Oxford signed the agreement for Kobe-Oxford Japanese Studies Programme.

■ Academic Cooperation with the University of Oxford

20

Royal Power and the State

A Study on the Annexation of Korea

MIMURA, Yoshitaka

(PhD Student of the Graduate School of International Cooperation Studies, KU)

The so-called “Western Impact,” such as Napoleon's expedition to Egypt and the Opium Wars triggered by the Britain in China that the West was exposed to the East as a threat. Non-Western countries then promoted Westernization to varying degrees in an attempt to cope with the expansion of powerful imperial states. Most of them, however, succumbed to imperialism and were ruthlessly colonized.

In the case of Korea (Chosun Dynasty), which this paper will focus on, the process of Westernization, although after a number of twists and turns, led to the loss of state power that resulted from the annexation of Korea (by Japan: 1910-1945). If we consider the armed clash with France that took place in 1866 (Byeong-in yangyo) to be the first “Western Impact” in Korea then some 40 years of time spans the clash and annexation, during which institutional reform modeled after Western countries was pursued, as it was in many other non-Western countries. What exactly was the factor that determined the success or failure of their reform, then? Or in other words which factors influenced the formation of the state and what kind of relationship did they have with its eventual annexation?

Needless to say a number of both domestic and foreign studies have explored its annexation.¹ This paper, however, will focus on the difference between the formation of states in Western and non-Western countries. That is, despite their efforts many states in non-Western regions were basically incomparable to those of Western countries with their modern administrations and massive military forces. “The reinforcement of royal power in particular that was then observed in Korea and Thailand was rather exceptional in the second half of the 19th century.”²

The Western-style state model could rarely be unconditionally transplanted into non-Western countries, and the rights or wrongs of Westernization itself will not be discussed. But if we take into account the fact that royal power in Korea was far from strong at the time how did it then get reinforced? Furthermore, what is the relationship between the establishment of a solid royal power and the loss of the state resulting from annexation? These questions will be kept in mind while a specific aspect of the annexation of Korea through examining the role of royal power is discussed.

The terms “royal power” and “state”, which are frequently used in this paper, should first be defined. The modern state was first said to have been established in Western Europe between the 18th and 19th centuries. Max Weber defines a state to be an entity that possesses a “rational bureaucracy” and a “monopoly on violence”. As is rather well known he defines the “three pure types of legitimate domination” to be legal domination, traditional domination, and charismatic domination. Of legal domination the purest form is “bureaucratic domination”, and which is regarded to be the most rational form of domination.³

With regard to the pre-modern state, and in contrast to the modern state, Weber presents the concept of “patrimonialism”, which is a form of “traditional domination”.⁴ In other words “patrimonialism” involves rulers enforcing their political will by means of their own personal officers. This type of regime involved the ruler-subject relationship being that of a patron-client relationship that was built upon loyalty and rewards. This type of idea can be a good standard to use in distinguishing “pre-

1 Yamabe, Kentaro. (1966). *Nikkan heigo syoshi*, Tokyo: Iwanami syoten, Moriama, Shigenori. (1987). *Kindai nikkans kankeishi kenkyu*, Tokyo University Press, Unno, Fukuju. (2000). *Kankoku heigoshi no kenkyu*, Tokyo: Iwanami syoten, Lee Tae-Jin. (2003). *Hanguk beophap ui yeongu*, Seoul National University Press, Ogawara, Hiroyuki. (2010). *Ito hirobumi no kankoku heigo koso to chosen syakai*, Tokyo: Iwanami syoten, Shinjoh, Michihiko. (2011). *Tenno no kankoku heigo: oukoku no sousetsu to teikoku no kattou*, Tokyo: Hosei daigaku syuppanyoku.

2 Tamada, Yoshifumi. (1996). *Cyakuri kaikaku to ouken kyōka: Kakuryō no hensen wo tegakari to shite, Sougouteki chiiki kenkyū*, vol. 11, p.35.

3 Weber, Max. (1967). *Shihai no syakagaku I*, trans. Sera, Terushiro, Soubunsha, p.33.

4 *ibid.*

modern” from “modern” regimes, and is also considered the trait of the type of domination observed in newly-independent states.

“Royal power” was normally the center of “pre-modern” regimes. The word “royal power” as used here denotes a power system in which the “monarch”, or ruler, is supported by a “monarchy”, or an institutional system with the monarch at the top, and bureaucrats who serve beneath. Of course in order for a royal power to retain control over the state the system of monarchy has to be shared among those belonging to the ruling class, and the bureaucrats kept under control. In this paper we will define a “strong royal power” to be a system in which the monarch’s political prerogative is not limited by anyone else and the monarch has an established decision-making system that works for his sake. This definition will be used to examine the characteristics of a “strong royal power” using the notion of patrimonialism and patron-client relationship.

First, maintenance of the patron-client relationship requires resources to be distributed as rewards. Therefore, “such regimes are obviously dependent on the economic situation.”⁵ For example, with reference to post-colonial African states, Robert H. Jackson argues that they could have only maintained their existence via aid from the international community as they were “quasi-states” that seriously lacked political will, systematized authority, and institutional power, despite the appearance of being independent sovereign states.⁶

Secondly, any states that succeed in maintaining their regime via aid lose contact with their society earlier on than Western-style states. As long as they can obtain resources from outside the rulers do not have to attempt to be a part of society. Any such governments consequently remain of a relatively small scale. There are exceptions to this, of course, but Joel S. Migdal’s argument that some third-world states which were “weak states” were also at the lower end of the level of capabilities needed “to be a part of society, regulate social relationships, extract resources and appropriate or use resources in a determined way” can be considered relevant to what we have seen above.⁷

With this in mind a “strong royal power” that is based on patrimonial rule can be classified as being of two types. The first involves the case where royal power increases alongside the state mechanism in the process of internal “top-down reform”. The other involves the case where royal power is enhanced with assistance from outside. The former may be related to the centralization and establishment of supremacy by a royal power that is often observed during the era of so-called absolute monarchism. The latter differs from the other type in the sense that the royal power concerned is only relatively strong, being based on “weak states” which lack the capability to increase their statehood and be a part of society.

Using the point of view that external assistance can affect the future state formation a comparative analysis of the reactions of non-Western countries both before and after the 19th century, from the opening up of countries through to institutional reform, will be presented. The aforementioned reactions can be classified into being of three types: opposition, submission, and cooperation. To summarize the option of “opposition” requires capability and the means of obtaining resources. The Ottoman Empire and the Qing Dynasty took this course. They adopted policies that prioritized the foundation of Western-style armies and the construction of modern factories while implementing reform of their traditional, centralized administrative frameworks.⁸ The royal power and the state worked together to promote Westernization. However, the internal reform was limited to very little political participation from people outside the royal power, thus leaving the new elites that emerged during the reform excluded from the central administration system. This then resulted in a “second defeat” that followed the “Western Impact” led to the downfall of the old elites who had supported the state. The royal power, which was closely tied to the state, was also consequently terminated by the new elites.

Conversely, the alternative of “submission” existed for any states that did not have the capacity to pursue the same course as the empires concerned, or which were regarded as incapable of doing so. Of course any form of easy submission would

5 Linz, Juan J. (2000). *Totalitarian and Authoritarian Regimes: With a Major New Introduction*, Boulder: Lynne Rienner Publishers, p.153.

6 Jackson, Robert H. (1990). *Quasi-states: sovereignty, international relations and the Third World*, Cambridge University Press, pp.21-22.

7 Migdal, Joel S. (1988). *Strong Societies and Weak States: State-Society Relations and State Capabilities in the Third World*, Princeton University Press, pp.4-5.

8 Such direction also can be seen from the discussion that took place between the central government and local ministers after the Second Opium War. For example, Zuo Zongtang(左宗棠) who was military leader emphasized the importance of preparing the Navy. Bao, Suo. (2012). ‘1860 nendai ni okeru shinkoku seifu no gunjiryoku kyouka seisaku to sono jissen’, *Tetsugaku kagakushi ronsou*, vol. 14, pp.193-196.

have probably resulted in an influx of cheaper products that would increase prices and heavily damage domestic industries, thus intensifying critics and opposition against the government. To suppress any such movements and stabilize their power the government would then implement reform by obtaining external resources. But as we can see in the case of the Anglo-Russian loan plan that was made available to Persia in 1907 there was obvious political pressure on Mohammad Ali shah, or, that is, the “Russian government apparently wanted to force him to adopt a political regime close to that of a constitutional European monarchy”.⁹ In a similar fashion the committee put together to investigate the financial status of Egypt demanded that Khedive Ismail “abandon his properties such as houses and land” and “admit British and French representatives into the Egyptian cabinet”, presumably in order to deprive Ismail of the base of his political power.¹⁰ In the end their sovereign default led to a decrease in their international credibility and eventual foreign intervention by the creditor nations concerned. Their royal power was weakened through these incidents.

Japan and Thailand, whose governments reacted in a “cooperative” manner, retained their royal power. Or, that is, after the opening up of their country these two states maintained pro-Western attitudes, formed alliances as a defense against other countries, and maintained their political independence. The two states shared a common reason for achieving these diplomatic accomplishments: they both received foreign assistance (aid). At the same time, however, Westernization occurred via two different processes in the two countries. In Japan westernization was led by the government, whereas in Thailand it was the royal power that took the initiative. A difference in the degree of affinity for Westernization of the royal families of both states can be observed here. The Japanese Imperial Court was against any opening up of their country and insisted on being anti-foreigner right from the beginning whereas the King of Thailand himself was the head of a pro-Western school. It was completely natural that foreigners were then invited to join the council at the initiative of the royal family. The councilors were deeply involved in national affairs, and their role was so important that their opinions affected the King’s decision-making.¹¹ In other words, the patron-client relationship between them meant two things for royal power: firstly a means of obtaining foreign assistance and secondly a power base to use in opposing the government.¹²

Analysis revealed the successful survival of royal power after the Western Impact to have occurred in one of the following two cases: (a) the royal power orchestrated reforms in cooperation with its administration and succeeded in maintaining its regime, or, (b) the royal power successfully secured the necessary physical and human resources to maintain its patrimonial rule. Conversely the royal regime lost its power when: (a) it was overthrown by anti-royalists or a foreign power, or (b) it was challenged by opposing groups within its regime, and it reached an agreement to transfer its power to them.

Let us now use the above results to examine the case of the Chosun Dynasty. First, we can see that while the Korean royal power was very weak during the reign of Daewongun and Gojong an attempt to transfer power from the government to the royal court was made during institutional reform. This move met strong opposition from the State Council of Chosun, Uijeongbu, and the royal power faced difficulties in dealing with the government. For example, Uijeongbu protested personnel recruitment plans and policy proposals implemented without having first been submitted to Uijeongbu. They criticized King Gojong, who relied on the royal court under the slogan of Gungbuilcheron (doctrine that aims at uniformity of both the royal court and the government),¹³ and the conflict between the royal court and Uijeongbu in the so-called co-governance system involving the King and Retainer then proved to be endless.

Secondly, internal pressure drove the royal power to seeking external assistance in controlling its government, thus providing foreign legations and councilors with the chance to emerge as loyal supporters of the royal power. The Historical

9 Mizuta, Masashi. (2002). ‘Eiro kyousho to iran no syakkan mondai’, *Syakaikagaku*, vol. 69, p.91.

10 Nishitani, Susumu. (1971). 19seiki kouhan ejiputo kokkazaisei no ikidumari to gaiseiki 2, *Syakaikazai shigaku*, Vol. 37-3, pp.82-83.

11 Murashima, Eiji. (1996). ‘Tai no kanryosei: kyousou shiken seido wo cyuushin to shite’. In Iwasaki, Ikuo, & Hagiwara, Yoshiyuki (Eds.), *ASEAN syokoku no kanryosei*, Ajia keizai kenkyusho, pp.188-189.

12 However, it is needed to pay attention to Japanese emperor’s political influence which was not eliminated by the institutionalization of the royal court. For example, royal court had a certain influence on the nomination of prime minister through an imperial command and the Lord Keeper of the Privy Seal was responsible for the administration of imperial documents. See Murai, Ryota. (2005). *Seito naikakusei no seiritsu 1918-27nen*, Tokyo: Yuhikaku, Chadani, Seiichi. (2009). *Syowa senzenki no kyuuicyu seiryoku to seiji*, Tokyo: Yoshikawa kobunkan.

13 Chu Chin-Oh. (2003). Hanguk Geundae Gukmingukga Soolipgwajeong eseo Wanggwon ui Yeokhwal 1880-1894, *Yeoksa wa Hyeonsil*, Vol.50, pp.47-48.

Event of Chun-Sen-Mun and the Korean royal refuge at the Russian legation was orchestrated by foreign powers and advisers of the king, and these events then contributed to the establishment of a strong royal power and the elimination of any opposition. Indeed, during the era of the Korean Empire the government had to seek the approval of Gojong before making a final decision. The Korean royal power had succeeded at last in building a “regime similar to absolute monarchism, in which the emperor directly governs all the authoritative bodies”.¹⁴ However, towards the end of the Korean Empire the advisors and councilors who had been supporting the royal power abandoned the political arena one after the other, thus narrowing the range of alternatives for the royal power to choose from.

The Empire then experienced Japan’s victory against Russia, followed by a collapse of the balance of the power, signed multiple Japan-Korea Annexation Treaties, and underwent approval for its annexation by Western imperial powers. However, it should not be overlooked that the government was left intact as the power that opposed the royal power. That is, a rift inside the regime arose from grievances harbored by former government bureaucrats driven from their positions during the establishment of a strong royal power. That rift later resulted in in reason for those outsiders to convert to being pro-Japanese. In the end their claim for restoration of government power, which basically equaled to the dismantlement of the royal power, came about through them joining forces with Japan. Gojong was forced to withdraw from the political arena via a request he abdicate made by the Resident-General of Korea, Ito Hirobumi.

14 Wang Hyeon-Jong. (2010). Daehanjegukgi Gojong ui Hwangjekwon Ganghwa wa Gachyeoknonri, *Yeoksahakbo*, Vol.208, pp.29-30.

Origin of Civil Movements in South Korea

MAISAWA, Tatsuya

(PhD Student of Graduate School of International Cooperation Studies, KU)

1. Introduction

After the democratization in 1987 of South Korea all the media as well as academia started to pay a lot of attention to the rise of Civil Movement Organizations (hereinafter as CMO) as proof of the rapid growth of civil society and democracy in South Korea. It has been stated that this was partly because the political party system was dysfunctional, or, that is, the regional alignment of political parties resulting from democratization, and also because of the distrust of politics of the people. The expectation of the people was that the newly emerging CMOs would play a key role in the democratization agenda in place of the political bodies they had no faith in.

This paper will focus on the process of how the course of the civil movement reflected the political development of South Korea. Towards this purpose the genealogy of the YMCA Christian movement will be discussed as an origin of the South Korean civil movements. The YMCA advocated the necessity for civil movements for the first time in the 1980's in South Korea, which was a deviation from mainstream Christian movements, and which then provided the theological grounds for the Citizens' Coalition for Economic Justice (hereinafter as CCEJ) that appeared in the limelight of the civil movement in the 1990's. More concretely this paper will clarify how the YMCA arrived at the decision that they would push forward with the civil movement in 1984, the type of characteristics of their logic for doing so had, and ultimately how this development characterized the civil movements in the 1990's in terms of their organizational structure and ideological foundation.

2. Christian Movement and Minjung movement

The 1970's in South Korea was tumultuous in that various social problems suddenly arose due to its rapid industrialization as well as oppressive political system. Its rapid industrialization resulted in large disparities between the rich and poor as well as urban and rural areas. Moreover, the authoritarian regime imposed restrictions on political rights that included freedom of expression and freedom of association, along with the right to labor for the purpose of propelling industrialization forward. This "simultaneity of un-simultaneous problems" gave rise to social movements, which were often categorized as integrated "democratization movements" because students, workers, intellectuals, peasants, and religious leaders all cooperated together in the belief that democratization of the political system would bring about overall solutions to their various social problems.

Among those movements, Christian organizations, both Catholic and Protestant, played a key role in providing a theological foundation as well as organizational strength to the overall democratization movements. Their engagement in the democratization movements in the 1970's derived from their ideological division into being either conservative or liberal, as influenced by the newly emerging theology. The liberal theology criticized conventional missionary work of having focused only on the salvation of individual divinity and ignoring the reform of the social structures that were the basic cause of their individual afflictions. This theology utilized scientific analysis of Marxism and argued for the need to liberate humans from the development of structurally evil practices in thereby achieving social justice. Their rigorous missionary work on the behalf of the poor (*minjung*) provided a moral legitimacy to their activities and eventually helped conceptualize the political situation as a confrontation between the oppressive authoritarian regime and the *minjung*. Furthermore, the leaders of the democratization movement attributed the appearance of the authoritarian regime to the division of Korea and subordination to foreign capital, and presented national self-determination, salvation of *minjung*, and democratization as the overall solution to the aforementioned un-simultaneous problems.

The severe oppression that occurred of the dissident groups by Park Chung-hee's regime also brought about substantial changes to the organizational form of the democratization movements. First the activists within the democratization movements became more radical and ideological due to the fact that they faced the risk of being arrested by the authorities. Second the churches themselves as well as the Christian organizations provided a sanctuary from the crackdown as well as a network function through their nation-wide and horizontally organized structures. This then contributed to the establishment of a liaison between the different sectors of the democratization movements that included both student and labor based movements.

In summary the Christian movements developed as a major pillar of the democratization movement alongside the *minjung* concept and via its organizational strength as a sanctuary from the oppression of the Park regime, and centralized into an elite movement. The *minjung* concept, which consolidated the different sectors of the democratization movements, was characterized as a victim of the evil social structure resulting from the contradictions enforced upon them by its nation state.

3. The YMCA and birth of civil movements

The YMCA is a Christian organization but whose features differ from other Christian organizations that joined the democratization movements. First, its origin dates back to a Christian youth organization that was first established in 1903. Second, it is a voluntary membership organization of laity and independent of any hierarchical church structure. Third, its leadership is run by both local magnates as program managers and Christian intellectuals on executive boards. Fourth, it is financed by independent financial sources that developed profit generating programs that include sports courses, language classes, and cultural courses. Fifth, it is an incorporated foundation registered under the relevant law. In summary the basic organizational goal of the YMCA at that time was to enhance the welfare of its members and not to deal with any social problems.

However, the YMCA leaders eventually commenced upon redefining the reason for its existence. There were three factors in the background to this. The first involved a recommendation made by the World YMCA, which was influenced by some new theology, to identify a new mission that was more in line with the contemporary social situation. The second involved financial aid being cut off by the US YMCA, thus resulting in a financial basis for the reconstruction of the Korean YMCA. The third involved the integration of the College YMCA and Korean Student Christian Federation (KSCF), which then led a hemorrhage of the most active parts of the YMCA.

With a view to identifying an organizational mission the YMCA established a *Committee for Pursuit of the Ideology and Objective* with the participation of the Christian intellectuals and executive boards of YMCA federation, as well as the program managers of City YMCAs. They shared the view that the YMCA should engage itself in social justice activities in South Korea as a Christian organization, while at the same time facing the dilemma of how to mobilize their members and what kind of programs could be developed within their capacity as a legal voluntary association.

They recognized several limitations of the organization after having redesigned their objectives to fit to the trend of the democratization movements. First, the members of the YMCA did not fit into the *minjung* concept, the connotation of which involved the underprivileged and political dissidents, as most of them were middle-class and political conservatives. Second, the YMCA had no organizational solidarity due to the diversity of its membership as well as the federal form of local independent YMCAs. It proved difficult for them to identify a common discipline to use in consolidating its members as their membership was rather diverse in that it included government officials, independent businessmen, housewives, young laborers, and even non-Christians. Third, their activities were limited to legal activities such as cultural campaigns and social welfare improvements as an incorporated foundation.

After a 10-year long discussion by the committee the YMCA then passed the resolution at a national conference in 1984 that it would engage in the civil movement (*shimin undong*). Their new civil movement concept reflected their organizational as well as ideological limitations. According to the argument they used the *shimin* should encompass the entire nation being subject to tackling the tasks imposed by the nation's modernization, and thereby including all the social classes such as the petit-bourgeois (*so-shimin*) and new middle class, as well as the underprivileged. The scope of the movement was

accordingly extended to all unsolved national problems that included the establishment of civil rights and preservation of the national culture. This comprehensive and nationalistic concept resulted from an attempt to integrate all the concepts raised by the committee, while also being a solution to the limitations imposed by the diversity of its membership. As a methodology to use in the movement the YMCA prioritized education for social leaders that included lawyers, teachers and labor unions, and which would then be the core of the new civil movement, thus reflecting not only their efforts to disseminate their ideology throughout their members and mobilize for the movement but also its limitations as a legal organization.

This rather comprehensive concept then resulted in the civil movement including various other types of movements under the goal of democratization and a mechanism to use in the mobilization of its conservative members as the subject of political reform. The civil movement itself then had the feature of being a top-down mobilization system originating in intellectuals.

4. Further discussion of the civil movement of the 1990's

The origin of the civil movement in South Korea provides some ideas on how the civil movement in the 1990's developed. Following the democratization process that took place in 1987 the illusion that democratization would bring about an overall solution to all the social problems resulting from the authoritarian regime was then shattered. The value and appeal of the *minjung* concept, which was inclined toward a class struggle, had rapidly weakened while the concept of *shimin* captured the spotlight as a new style of social movement. The leaders of the democratization movements now advocated a civil movement as a new solution to social problems in democratized Korea while still maintaining their top-down organizational form. And without a firm organizational base they did not suffer from the identity crisis that the YMCA had to. The concept of *shimin* provided legitimate logic as well as a mobilization function for the movements. Distinguishing the *minjung* movements from the *shimin* movements, as based on the issues they dealt with or the characteristics of their memberships, can therefore be considered rather inappropriate.

South Korean Society Viewed through “Gangnam Style”

YOKOMIZO, Miho

(PhD Student of Graduate School of International Cooperation Studies, KU)

1. Introduction

“Gangnam Style,” a song performed by the South Korean singer PSY, has been over nine-hundred million times on YouTube and become a topic of conversation not only in South Korea but all over the world. “Gangnam Style” refers to a well-known district in South Korea called “Gangnam,” and although the content of the song has a distinct local flavor exclusive to South Korea and satirizes the image of its elite it has also been a hit in many overseas countries.

In response to this phenomenon a considerable number of articles examining the background of the worldwide “Gangnam Style” boom have been published. These articles have focused on certain specific elements such as the peculiar composition of the music video and the use of the Internet for publicity purposes, with the question of “Why is Gangnam not popular in Japan?” having also attracted considerable attention. However, this paper will not provide any analysis of the reasons why the song has become so popular and instead will attempt to examine the image associated with the district of “Gangnam,” as referred to in “Gangnam Style.”

Prior to the release of “Gangnam Style” there was already increasing interest in the term “Gangnam” in South Korea. Specifically, there were discussions taking place concerning the so-called “Gangnam left.” While referring to the “Ahn Cheol-soo (former presidential candidate) phenomenon,” which is regarded as a symbol of the “Gangnam left,” I would like to consider the present-day sociological significance of “Gangnam,” which is essentially a single district of Seoul.

2. The “nature of Gangnam” as expressed in “Gangnam Style”

Kang Jun-man defined the term “Gangnam left,” which has been the focus of attention in recent years, as a reference to the image of the “nature of Gangnam” as being “rational, considerate, non-provincial and globally competitive”¹.

At this point it would be appropriate describe the district of “Gangnam” that is portrayed in “Gangnam Style.” First of all, PSY, the performer of the song, was raised by a wealthy family in the Gangnam District² of Seoul. His personal history includes a period of studying abroad at Boston University. Suffice it to say that his background can be said to be representative of the district of “Gangnam,” the heart of urban, globally competitive “South Korea.” Having clarified this connection I would now like to examine “the nature of Gangnam,” which can be observed in “Gangnam Style.”

If we first observe the lyrics, the main character, PSY, refers to himself as someone with “Gangnam Style,” and uses the following lyrics to refer to “Gangnam style”:

“낮에는 따사로운 인간적인 여자 커피 한잔의 여유를 아는 품격 있는 여자”

(A girl who is kind and gentle by day/A girl with dignity that likes the spare time for a cup of coffee.)

What draws our attention here are the expressions “with dignity” and “likes the spare time,” which conform to the image of “the nature of Gangnam” as described above.

Moreover, other impressive scenes that symbolize “Gangnam” also stand out in the video. All of the scenes provide the

1 「"안철수는 ... 엄친아 강남좌파"... 강준만 교수 핫이슈 12명 인물평」『동아일보』 May 24, 2012 (<http://news.donga.com/Politics/3/00/20120524/46476208/1>)

2 The head offices of the largest South Korean multinational enterprise, Samsung, are located in 강남구 (the Gangnam District).

viewer with a comprehensive view of the leisured class of “Gangnam” with its “dignity” and “time to spare.”

- A woman exercising against a backdrop of high-class apartments
- Scenes of daytime tennis games and yoga
- Sophisticated subway stations

3. Satiric Style

Now, as previously mentioned, one of the reasons why “Gangnam Style” became so popular in South Korea is that the lyrics and video both satirize the image of “Gangnam” (William Pesek)³.

For South Koreans “Gangnam” is a place that is idolized by many while also conversely being a symbol that arouses complicated sentiments, as observed in being a “target of resentment” over the “gaps” in the distribution of wealth and education within the country. PSY presents “Gangnam” as an object of satire in the following ways:

- Feigning an elegant beach, then inserting a sandpit in a park
- Juxtaposing working-class saunas and public baths with high-class images
- Showing a working-class tour bus with people dancing as they would in a classy nightclub
- Showing encounters with sexy ladies on the subway

Out all of the above images the “subway” has a particularly strong impact because the deliberation of inserting the subway, a working-class means of transportation that the South Korean elite would never use⁴, into a piece that presents “Gangnam” as a topic for discussion is already a form of satire in itself.

In addition, the lyrics of the song, for example “정숙해 보이지만 놀 땐 노는 여자” (A girl who looks modest but plays when it’s time to play) and “점잖아 보이지만 놀 땐 노는 사나이” (Boys who look gentle but play when it’s time to play) break down the façade of the “Gangnam Image” by describing people who are honorable and serious in the daytime but who then rid themselves of these personal qualities at night.

At this point we should focus again on the fact that the recipient of the irony aimed at “Gangnam,” or PSY himself, is also a South Korean from “Gangnam.” PSY, a “Gangnam” insider—a place that is an object of resentment but simultaneously an “idolized” place where every South Korean would like to live if they could—overturns the smart, cool image of “Gangnam,” and after revealing to the viewer the surface and underside of the district proceeds to present “Gangnam Style” in a positive fashion. An example of this would be the favorable message: “men and women of all ages, everybody do the ‘Gangnam Style,’” which characterizes the final mass dance scene⁵.

4. Conclusion—The “Gangnam Style” of Ahn Cheol-soo

Kang Jun-man, who defined the “nature of Gangnam,” described the former presidential candidate Ahn Cheol-soo as being exemplary of the “Gangnam left.” Ahn Cheol-soo advocated “new” politics rather than existing “old” politics, and who even after having stepped down from the presidential candidacy still boasts deep-rooted popularity.

The “nature of Gangnam” that Kang Jun-man describes does not refer to the overbearing style whereby an individual moves

3 “‘Gangnam Style’ Tells Economic Truth of Our Day” 『Bloomberg』 Oct. 15, 2012 (<http://www.bloomberg.com/news/print/2012-10-15/-gangnam-style-tells-economic-truth-of-our-day-william.html>), etc.

4 Even though in the Gangnam District, there are many subway lines, including line 2, the main line.

5 「[해외 화제] TIME 이 분석한 싸이 ‘강남스타일’ 의 숨겨진 의미는 ?」 『아시아경제』 Sep. 25, 2012 (<http://www.asiae.co.kr/news/view.htm?idxno=2012092515173238825>) This article analyzes the hidden meaning behind “Gangnam Style,” identifying the meaning: “Attitude is more meaningful in life than money,” and stating that “it (Gangnam Style) makes us reconfirm that in a society obsessed with money, social status, and overconsumption, the most important thing is ‘freedom.’”

up by beating others back down and instead a suitably laid-back style in which “success is achieved through one’s own strength in a smart and refined manner.” Ahn Cheol-soo is characterized by the “timid” way in which he addresses others rather than making strong appeals and is an “entrepreneur” as well as a “professor of Seoul University.” The resulting image of Ahn Cheol-soo, the flag bearer for the “new politics” due to his lack of past involvement in politics, is to this effect exemplary of “Gangnam.”

If that is the case it may suffice to say that peoples’ wishes with the “new politics” that they identify with Ahn Cheol-soo is equivalent of the “nature of Gangnam” portrayed in the positive images emphasized by PSY through his self-parody.

“Gangnam”, which can be considered symbolic of the various “gaps” that divide South Korean society, is a Shangri-La (earthly paradise) that all Korean people idolize. While PSY’s “Gangnam Style” satirizes real-life “Gangnam” it can be assumed that it also contains a message that encourages us to reconsider “Gangnam Style” in a positive light as a foundation for living life more constructively. Furthermore, I believe that the image of “joining hands for a future that surpasses the past confrontations between left and right” in “Gangnam Style” is somewhat representative of the “Ahn Cheol-soo phenomenon.”

Contrastive Study on Speech Patterns

Focus on Requests as Made in Japanese, Chinese, English, and Korean

YANG, Yin

(PhD Student of Graduate School of Humanities, KU)

1. Introduction

Speech patterns, for example commands, requests, advice, invitations and offers, are used to initiate the hearer's or speaker's actions. A variety of expressions are used in speech patterns, both directly and indirectly. Numerous studies have clarified the patterns of expressions used in individual languages. However, it has yet to have been clarified exactly how expressions used in one language differ from those in another. By focusing on requests this study aims to compare the features of speech patterns in Japanese, Chinese, English, and Korean. The questions raised in this research concern the following:

- i. What patterns of requests are used in Japanese, Chinese, English and Korean?
- ii. How are they used in contemporary Japanese novels, and how are they then translated into Chinese, English or Korean?
- iii. How do requests made in Japanese, Chinese, English, and Korean differ from each other?

2. Background

Searle (1975) classified "speech patterns" (referred to as basically the same thing as an "illocutionary pattern" by Austin (1962)) into five categories: assertive, directive, commissive, expressive, and declarative. Commands, requests, and advice fall under the category of directives. Felicity conditions are used to define each speech pattern. For example, Searle (1969) describes the felicity conditions for requests in the following manner:

(1)Searle (1969: 69)

Request

Propositional content: Future act A of H.

Preparatory: 1. H is able to do A. S believes H capable of doing A.

2. It is not obvious to both S and H that H will do A in the normal course of events of his own accord.

Sincerity: S wants H to do A.

Essential: Counts as an attempt to get H to do A.

Partly similar to the speech pattern theory of Sakamoto et al. (1994) Kabaya et al. (2009) devised a patterned development of expressions (*Kodo-tenkai-hyogen*) theory from the point of view of Japanese education. According to Kabaya et al. (2009) pattern development expressions can be classified as follows:

(2) Kabaya et al. (2009: 97)

Purpose of Expression	Action	Decision	Benefit
Ask permission	S	H	S
Request	H	H	S
Invite	SH	H	SH
Recommend/Advise	H	H	H
Offer	S	H	H
Confirm	S	H	S/H/O
Declare	S	S	S
Command	H	S	S/H/O
Give permission	H	S	H

(S=Speaker, H=Hearer, SH= Speaker and Hearer, O=Not on either side)

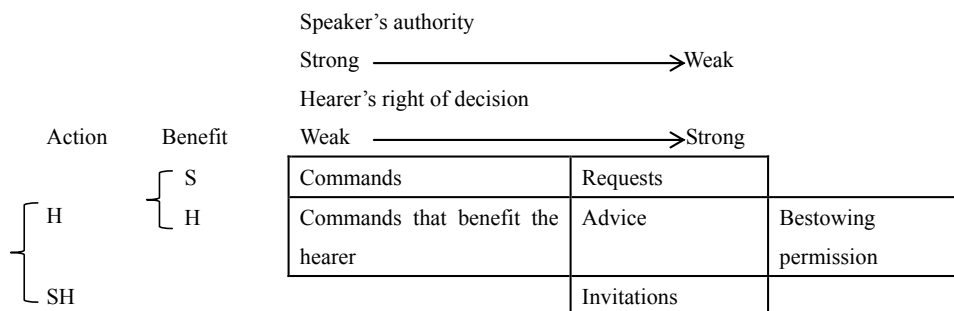
Request expressions have the basic structure wherein an action is requested by the speaker, the hearer has the right to decide whether to perform it or not, and the benefit is for the hearer.

Takanashi (2011) also studied directives (*Koi-yokyu-hyogen*) from the point of view of Japanese education. Takanashi argues that the extent to which the hearer can make a decision is inversely proportional to the strength of the speaker's authority. Moreover, expressions involving commands, commands that benefit the hearer, requests, advice, invitations and bestowing permission in Japanese have the following constant relationship shown in (3).

(3) Takanashi (2011)

Some expressions (ex. sitekudasai) that are common to requests, commands, and advice were also discussed by Takanashi (2011). The patterns request expressions take in Japanese, Chinese, English, and Korean will be further discussed in this study.

3. Patterns of Request Expressions



Patterns of request expressions in Japanese, Chinese, English, and Korean are declarative, imperative, and interrogative. Grouping similar meanings into one type results in the pattern summary of Table (4).

(4) Patterns of request expressions in Japanese, Chinese, English, and Korean

Force	Japanese	Chinese	English	Korean	Types
Declarative	J01a. よろしく お願いします J02a. してもら う	C01a. 拜托你了 C02a. 拜托/麻烦 你做		K01a. 잘 부탁합니다	a.<declaring request>
	J03b. してもら いたい J04b. してほ しい	C03b. 我想拜托 你做 C04b. 我希望你 能做	E01a. I want/ I'd like you to do E02b. I wish you would do	K02a. 해주기 바랍니다	b.<telling desire>
	J05c. してもら えれば助かる/ うれしい/あり がたい	C05c. 如果你能 做, 非常感谢	E03c. I'd be very pleased/ I'd appreciate it if you would do E04c. Thank you for your	K03c. 해주면 좋겠어요/감사 합니다	c.<telling feeling>
	J06d. してもら えればと思う		E05d. I wonder if you could do		d.<telling thought>
Imperative	J07e. して J08e. してちょ うだい J09e. してくれ J10e. してくだ さい	C06e. 你做 C07e. 请你做	E06e. Do E07e. Please do	K04e. 해 K05e. 해줘	e.<request>
Interrogative		C08f. 你能 做 吗? /你能不能 做?	E08f. Can/ Could you do? E09f. Would it be possible for you to do?	K06f. 해줄 수 있어요?	f.<asking H's ability>
	J11g. してくれ るか?/してくれ ないか (だろう か)	C09g. 你做 好 吗? C10g. 请你做 好 吗?	E10g. Would you please do? E11g. Do/ Would you mind doing? E12g. Do, would you?	K07g. 해주겠어 요? K08g. 해줄래요?	g.<asking H's intention>
	J12h. してもら えるか/してもら えないか (だ ろうか) J13h. してもら っていいか (だ ろうか) J14h. お願いで きるか (だ ろうか)	C11h. 能拜托你 做吗? C12h. 拜托/麻烦 你做好吗?	E13h. Can I ask you to do?	K09g. 부탁해도 될까요?	h.<asking possibility of request>

4. Findings and Discussion

As argued by Takanashi (2011) when making a request the speaker has less authority over the hearer than when issuing a command. And in fact the type of request can be further broken down into the strongly authoritative type and weakly authoritative type. a.<declaring request> in declarative and e.<request> in imperative (shown in (4) above) are of the strongly authoritative type. f.<asking H's ability>, g.<asking H's intention>, h.<asking possibility of request> in interrogative and b.<telling desire>, c.<telling feeling>, d.<telling thought> in declarative are of the weakly authoritative type. Comparing the number of patterns of both the strongly and weakly authoritative type in Japanese, Chinese, English and Korean reveals the following.

(5) Number of patterns of strongly and weakly authoritative type

Speaker's authority	Japanese(14)	Chinese(12)	English(13)	Korean(9)
Strong	6	4	2	3
Weak	8	8	11	6

As suggested by Table (5) English has more patterns in the weakly authoritative type than Japanese, Chinese, and Korean.

However, is there a similar tendency that English speakers prefer not to use strongly authoritative patterns on the hearer whereas Japanese, Chinese, and Korean speakers do? Or more simply what types of patterns are used the most in each language? To resolve that question we first look at how requests are made in contemporary Japanese novels, and then how they are translated into Chinese, Korean, and English. The results of enumerating the original types of requests in Japanese and their counterpart translations in Chinese, English, and Korean are provided in Table (6).

(6) Japanese requests and their corresponding translations

Japanese	Chinese	English	Korean
<declaring request> (5)	<request> (3) <declaring request> (1) <telling desire> (1)	<request> (2) <telling feeling> (1) Others (2)	<declaring request> (2) Others (3) ¹
<request> (19)	<request> (17) <asking H's ability> (1) Others (1)	<request> (10) <telling desire> (3) <telling feeling> (1) Others (5)	<request> (16) Others (3) ²
<telling desire> (7)	<request> (5) <telling desire> (1) Others (1)	<telling desire> (2) <request> (2) Others (3)	<request> (5) <telling desire> (1) Others (1) ³
<asking possibility of request> (6)	<asking H's ability> (4) <asking H's intention> (1) <asking possibility of request> (1)	<asking H's intention> (3) <asking possibility of request> (1) <telling thought> (1) Others (1)	<asking H's ability> (3) <request> (1) Others (2) ⁴

The strongly authoritative type in Japanese (<declaring request> and <request>) gets mostly translated as a <request> expression. (7) provides an example of the <request> type in Japanese that was then translated as a <request> expression in Chinese, English, and Korean.

(7) 天吾は頭の中で作業のおおまかな見積もりをした。「それなら十日あればなんとかなるかもしれません。大変なことには変わりありませんが」

「やってくれ」と小松は明るい声で言った。 (IQ84 Book 1)

do te-kure

1 English: <declaration> (2), Korean: <advice> (1), <declaration> (2)

2 Chinese: <obligation> (1), English: <advice> (2), <declaration> (2), <obligation> (1), Korean: <declaration> (1), <command> (1), <advice> (1)

3 Chinese: <prohibition> (1), English: <asking permission> (1), <declaration> (1), <advice> (1), Korean: <invitation> (1)

4 English: <question> (1), Korean: <question> (2)

天吾在脑中粗略估算了一下。“那样的话，十天也许就差不多了。但还是很紧张啊。”

“动手干吧。”小松声音爽朗地说。

start do ba

Tengo did a general estimate of the job in his head. “If that’s the case, I might be able to pull it off in ten days. It’s still going to be a huge job, though.

“Just give it everything you’ve got.” Komatsu urged him cheerfully.

덴고는 머릿속에서 작업일정을 어림해보았다. “그런 원고라면 열흘이면 어떻게든 될지도 모르겠네요. 무리한 일이라는 건 변함이 없지만.”

“해봐.” 고마쓰는 밝은 목소리로 말했다.

do try

In English translations the <request> type is not as common as in Chinese and Korean. Quite a few examples of < telling desire> and <telling feeling> are used, though. (8) provides one example of a <telling feeling> expression in English.

(8) 「……ちゃんと、部屋代入れます。」私はなんだか胸がつまって、必死で言った。「次住む所を見つけるまで、ここで眠らせて下さい。」 (Kitchen)

here sleep te-kudasai

“……房租，我一定会交的。”我心头翻涌起一股热流，激动地说，“请让我

please let me

暂时睡在这里，直到找到新的住处。”

for a while sleep at here

“...Naturally, I'll pay rent and everything,” I said, desperately moved. My chest was full to bursting. “But yes, till I find another place to live, I'd really appreciate your putting me up.”

“…방세는 내겠어요.” 나도 모르게 목이 메어, 온 힘으로 말했다.

“살 집을 찾을 때까지, 여기있게 해주세요.”

here stay do chuseyo

As mentioned earlier English has more weakly speaker’s authoritative type patterns. Comparing some translations of Japanese novels reveals that although the original Japanese patterns were of the strongly authoritative type many of them were then translated into the weakly authoritative type in English. This then leads to the consideration that patterns which are weakly authoritative are preferred in English.

Conversely, <telling desire>, a weakly authoritative type in Japanese was mostly translated as <request> expressions in Chinese and Korean, and both of which are strongly authoritative. This then leads to the consideration that patterns which are strongly authoritative are preferred more in Chinese and Korean. (9) provides an example of <telling desire> in Japanese that was then translated as a <request> expression in Chinese and Korean.

(9) 「そんな事分かってるわよ。誰のためにママが苦勞していると思ってるの？野球の

baseball

本ばかり読んでないで、ちょっとは一緒に考えてほしいんだけど」

book only read not a little together think te-hoshi but

(The Housekeeper and the Professor)

“这我自己也知道，也不想妈妈这么辛苦是为了谁。别老看棒球

don't always read baseball

书了，偶尔也帮着一起想想嘛。”

book sometimes also help together think ma

“I know! But whose problem is this anyway? Maybe you could stop reading your baseball books for a minute and help me.”

“그런 건 엄마도 다 알아. 하지만 누구 때문에 엄마가 이 고생하는 건데? 야구

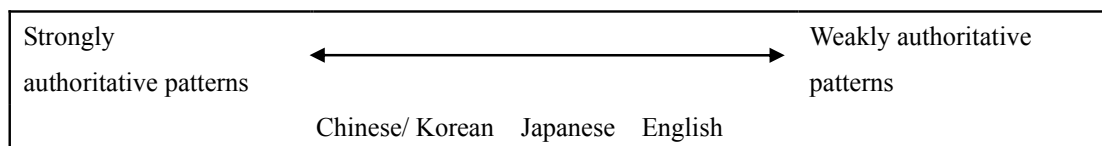
baseball

책만 보지 말고 너도 좀 생각해봐.”

books only read not you also a little think try

The above discussions can be summarized as follows.

(10) Comparison of speaker's authority



Request expressions include both patterns of being strongly authoritative and weakly authoritative. Strongly authoritative patterns are preferred in Chinese and Korean. In contrastive weakly authoritative patterns are preferred in English. Japanese lies in the middle.

5. Future Work

This study clarified what patterns are used in Japanese, Chinese, English, and Korean, and then compared what patterns are preferred in each of the four languages in terms of the speaker's authority.

However, only a few aspects of request expressions were discussed in this study. Other aspects, for example honorifics and the subjunctive, would be worthy of a further study.

Reference

- Austin, J.L.(1962), *How to Do Things with Words*, Oxford University Press.
- Searle, J.R.(1969), *Speech Acts*, Cambridge University Press
- (1975), “A Taxonomy of Illocutionary Acts”, in: Günderson, K. (ed.), *Language, Mind, and Knowledge*, Minneapolis Studies in the Philosophy of Science, vol. 7
- 井出祥子・荻野綱男・川崎晶子・生田少子（1986）『日本人とアメリカ人の敬語行動—大学生の場合—』南雲堂
- 生越まり子（1995）「依頼表現の対照研究—朝鮮語の依頼表現—」『日本語学』14-11 明治書院
- 高梨信乃（2011）「行為要求について：日本語教育における問題」『神戸大学留学生センター紀要』17
- 西光義弘（1993）「依頼表現の日英語対照」『英語青年』139-5
- 浜田麻里（1995）「依頼表現の対照研究——中国語における命令依頼の方略——」『日本語学』14-11 明治書院
- 姫野伴子（1991）「依頼と勧誘—受益者表現の日英対照を中心に—」『世界の日本語教育 日本語教育論集』1, 国際交流基金日本語国際センター

- 前田真彦・山田敏弘 (2011) 『日本語から考える韓国語の表現』 白水社
- 山岡政紀・李奇楠 (2004) 「依頼表現の日中対照研究」, 北京大学日本文化研究所, 日本语言文化系編, 《日本语言文化研究 第五輯》, 学苑出版社
- 林炫情・玉岡賀津雄 (2010) 「韓国語の行為要求表現とその否定表現の丁寧度に関する研究」『山口県立大学学術情報』 3, 11-23

Novels used in this study

- a. 吉本ばなな (1998) 『キッチン』 角川文庫
吉本芭娜娜著, 李萍译 (2009) 《厨房》, 上海译文出版社.
Banana Yoshimoto, Translated by Megan Backus (1993) *Kitchen*, Grove Press.
요시모토 바나나 지음, 김난주 옮김 (1999) <키친> 민음사.
- b. 小川洋子 (2005) 『博士の愛した数式』 新潮文庫
小川洋子著, 李建云译 (2005) 《博士的爱情算式》, 人民文学出版社
Yoko Ogawa, Translated by Stephen Snyder (2009) *The Housekeeper and the Professor*, Picador.
오가와 요코 지음, 김난주 옮김 (2004) <박사가 사랑하는 수식> 이레.
- c. 村上春樹 (2009) 『1Q84 BOOK 1』 新潮社
村上春樹著, 施小炜译 (2005) 《1Q84 BOOK 1》, 南海出版社
Haruki Murakami, Translated by Jay Rubin and Philip Gabriel (2011) *1Q84*, Alfred A. Knopf
무라카미 하루키 지음, 양윤옥 옮김 (2009) <1Q84 BOOK 1> 문학동네

On the Relationship between Japanese-Americans and African-Americans in Nina Revoyr's *Southland*¹

OKINO, Marika

(PHD at Graduate School of Humanities, KU)

1. Introduction

The American author Nina Revoyr was born to a Japanese mother and a Polish-American father. She spent her early years in both Japan and the United States, and presently lives in California. Her occupations include not only creative writing and teaching creative writing at universities as a visiting scholar but also supporting abused children and problem families as the executive vice-president of Children's Institute, Inc. To date she has had four novels published, *The Necessary Hunger* (1997), *Southland* (2003), *The Age of Dreaming* (2008), and *Wingshooters* (2011), all of which share the common feature of having a Japanese-American protagonist.

Southland earned Revoyr her first nomination for the Edgar Award, while numerous critics have declared it to be her most important work. The story is set in Los Angeles just after the 1994 Northridge Earthquake. The novel does not follow a linear narrative as most novels do and instead is comprised of a number of fragmentary stories that reveal to the reader the hidden past of a Japanese-American man and the truth about the death of an African-American boy. Jackie Ishida, the protagonist of *Southland*, is a law student. One day her aunt Lois asks her to research Curtis Martindale as Jackie's grandfather, Frank Sakai, had included Martindale in a will that he had written in 1964. Lois discovered the will in her father's closet after he died in January 1994. Frank left 38,000 dollars to Curtis Martindale in his will. The money came from a store that Frank owned and ran during his lifetime. Jackie and Lois have never even heard of Curtis Martindale, let alone know anything about him. In the process of researching Curtis Jackie meets James Lanier, his cousin. With Lanier's assistance Jackie gradually reveals the tragic death of Curtis, the cause of his death, and the relationship between Curtis and Frank. Meanwhile, Lanier asks Jackie to help him to sue a white police officer who is suspected of being involved in Curtis' death. As they continue research his death together Jackie and Lanier encounter opportunities to listen to many stories about her Japanese-American grandfather and the African-American boy named Curtis. They eventually uncover the surprising truth about their relatives.

The most significant theme throughout all four of Revoyr's novels is the encounters between Japanese-Americans and African-Americans. This paper examines the process through which Jackie Ishida grows aware of her identity as a Japanese-American through encountering and conversing with other American minorities, and African-Americans in particular.

2. Japanese-Americans and African-Americans: Crenshaw and The Holiday Bowl

Revoyr explains just why she features encounters between Japanese-Americans and African-Americans in all of her works: "[m]y own tendency is always to try and connect, to build bridges, to figure out what people have in common—and that is probably a result of my experience growing up, particularly being both mixed-race and bicultural" (Mattson). She explains this background in more detail, beginning with:

[M]y few years in Wisconsin. Because I was the only person of color there and was living with my white grandparents, there was no way for me to articulate what was happening to me. I could not go home and say to my family, I'm getting beat up on the way to school and people are treating me badly or calling me names or whatever. They could sympathize but they could not really understand what that was like. And so when I came to California and suddenly found myself in a community of people of color, even if a lot of them weren't Japanese, they were able to articulate things about race and

1 This paper is based on my presentation, "The Encounter among Minorities in Nina Revoyr's *Southland*," at the 105th Regular Meeting of Asian American Literature Association in Japan, November 2012, Kobe.

racial dynamics that I hadn't been able to speak about. (Cheng)

[M]y lens through which I see racial things was really shaped by my black friends and their families. It wasn't the white people who were talking about race, and I didn't have Japanese people around me all the time. When I was hanging out with my black friends, they and their parents were talking about race. There was such great comfort for me in that. Because of that, my identification with my friends was more than it would have been if I had had nourishment or sustenance from other sources. (Cheng)

Her reflections indicate that Revoyr believes living amongst African-Americans to have been necessary in identifying herself as being part of a racial minority. There appears to be a gigantic gap between Japanese-Americans and African-Americans, although they are both racial minorities in the United States. Most Japanese-Americans have ancestors who emigrated from Japan to the United States to better their lives or for change in lifestyle, whereas slave traders forced the ancestors of African Americans to come to the States against their will to work for free. Nevertheless, the two racial groups have cooperated with each other a few times in American history. For example, Revoyr mentions, "[w]hen Japanese-Americans were sent off to internment camps during World War II, their black neighbors watched over their houses. When African-Americans were speaking out during the civil rights movement, their Japanese friends stood beside them" ("Holiday Bowl"). The two minorities have therefore recognized each other and occasionally seized the opportunity to help one another.

In *Southland* Revoyr uses the Crenshaw district in Los Angeles to symbolize the historical interchanges between Japanese-Americans and African-Americans. Crenshaw, once called "Angeles Mesa," is where Frank worked at his store up until 1965.

She [Lois] loved the Crenshaw district, and she loved her father's stories about how much it had changed over the years, since the time it was known as Angeles Mesa. It is filled with houses now, and crowded with all different sorts of families. But Frank described a neighborhood of huge, open spaces; of fewer and heartier people. For Lois, going down to Gardena, which was stiff and all-Japanese, was like going to church—something she knew she should do and appreciate, but which bored her to the point of sleep. (*Southland* 35)

"[...] This [Crenshaw] was just a nice, solid, middle-class area, pretty mixed-race even way back then, with a lot of black and Japanese folks. During the '65 uprising, the looting didn't start up here until the third or fourth day. It was a lot less widespread than the mess in '92. But then, things were a whole lot worse in '92." (*Southland* 84)

Lois' history and latter quotation focus on the ways in which the activities of minorities defined the area. These passages specifically show the changes in Crenshaw due to the 1965 Watts riots and the 1992 Los Angeles riots. Frank spends his school days with his African-American friends and, later, hires some neighbor boys, including Curtis, to help run his grocery store before the Watts riots take place. The death of Curtis during the riots prompts Frank to leave the store. By the time the 1992 riots occur a Korean couple owns the store. In 1994 Lanier takes Jackie to see the remains of the store: the last riot resulted in it being a pitiful place.

Revoyr uses a combined bowling alley and coffee shop named "The Holiday Bowl" to represent the racial mixture of Crenshaw in the old days. Jackie discovers this social microcosm in a café when she comes across an old photograph of Frank wearing a T-shirt with "The Holiday Bowl" printed on it. She decides that visiting this shop could uncover even more information about her grandfather. When she arrives:

What struck her immediately was that the coffee shop was filled mostly with old people, about equal numbers Asian and black. She had seen gatherings of elderly Asian people; she'd seen gatherings of elderly blacks; but never before had she seen the two in one place. It was such a surprise to her, so visually inconceivable, that it was as if someone had taken footage of two senior citizens' groups and then skillfully spliced them together. (*Southland* 157)

A place where elderly Asian people and elderly black people still spend time together deeply surprises Jackie. Jackie also learns there that her grandfather often visited the shop, even after leaving Crenshaw.

3. African-Americans as a Mirror

(1) Frank's Relationship with African-Americans

Frank undergoes a similar self-discovery process as Jackie when he encounters other races.

One day during Frank's high school years he goes to Santa Monica beach with some African-American friends. He sees a sign there that reads, "Whites only." It is located above a left-pointing arrow. In contrast a "Colored only" sign is located above the right arrow. "Then they noticed the fence, which started at the parking lot and extended all the way down to the water." The signs prompted Frank to think about for the first time, "On which side did he belong?" While he is thinking about it a Caucasian man passes by Frank and tells him, "Japs go over there," while pointing toward the colored side (Southland 97-98). Frank therefore suddenly finds himself one of the oppressed races in American society, similar to his African-American friends. In other words, Frank, a Japanese-American, discovers himself through discrimination against African Americans.

Frank then finds himself thinking deeply about his Japaneseness during World War II:

Frank and his friends were such great American soldiers, ironically, because they were Japanese—because of their sense of duty, and integrity, and faith in each other. Because they knew that somebody always had their back; that if they got hit, their brothers would come in after them. Because the worst thing that they could imagine wasn't death, or injury, or permanent disfigurement, but bringing shame upon their families. For the sake of their families, they would never be less than heroes. (Southland 116, emphasis mine)

To escape the feelings of grief that arose from the loss of his father and sister in a Japanese Internment Camp Frank enrolls in a regiment. He is assigned to the 442 Regimental Combat Team, and he discovers that his superiority as a soldier is related to his Japaneseness. Unfortunately the superb qualities that he recognizes in his race in the passage above do not seem to matter to the Caucasians because the latter generally seems more concerned about the coincidence of the Japanese Americans' race and the race of the enemy they are fighting.

The most vital encounter between Japanese-Americans and American-Americans in this work by Revoyr is that of Frank and Alma, the mother of Curtis. After World War II Frank returns to Crenshaw and works at the store where he had also worked during his school days. It is being run by Mr. Labie at that time, but who later yields the ownership to Frank. As soon as Frank returns from the war he meets Alma, who had moved from Texas to Los Angeles. They repeatedly but secretly meet:

Frank found, with Alma, that he didn't have to explain things—that when he told her his sister and father had died, she seemed to know what it had been like, [...]. And while she gradually gave Frank the straightforward, newspaper facts about her family's history—Reese [Alma's brother]'s murders and suicide; her aunt's repeated stabbing of her violent, cheating husband; her father's drinking and struggling faith—she didn't have to explain to him, either. (Southland 281)

They are deeply attracted to each other because both of their life's journeys were riddled with family trouble, family deaths, and racial discrimination.

As the reader may suspect at this point in the story Curtis Martindale is the child of Frank and Alma's secret relationship. The boy therefore represents the most intimate encounter between Japanese-Americans and African-Americans in Southland.

(2) Thomas and Afrophobia

Frank first realizes that he belongs to a racial minority after encountering some other African-Americans; in other words, the experience of encountering other African-Americans provides Frank with a mirror that reveals his own marginalization. In the

meantime Robert Thomas is denying his own minoritiness, as reflected by other African-Americans, by violently oppressing them.

Robert Thomas is a policeman in charge of the Crenshaw district in the 1960s. Throughout the decade Thomas' senior colleague, a Caucasian officer named Nick Lawson, has been harassing the colored people in the district. To fall in line with his senior colleague, Thomas also violently frightens African-American kids, even though he is an African-American himself. Thomas eventually fulfills his fantasy of an ideal life by moving to an all-white, rich neighborhood and gaining a fair-skinned and intelligent wife.

Lanier visits Thomas in order to confirm his suspicion that Lawson killed four black boys, including Curtis, by locking them in the freezer at Frank's store during the Watts riots. When Lanier questions Thomas about the incident he notices that Thomas is hiding something from him. Through their research Lanier and Jackie then discover that rather than Lawson it was actually Thomas who killed the boys.

Similar to the other African-Americans Thomas is exposed to extensive racial discrimination. However, Thomas responds in an unusual way to this abuse by disliking his own identity more than he does Caucasians. His justification for this is that the vast majority of black people elect to remain in their miserable existences, and they hold back the ambitious African Americans like Thomas who wish to improve their status. He explains that he:

“[...] Had to work ten times as hard as the white cops to get any kind of respect. And then the recognition was grudging, you know, like we were a necessary evil. I tell you, there were a lot of racist cops back then, but on the other hand, some of the first few black men on the force didn't do much to change their views. Some of those Negroes were so ignorant I don't know how they got through the Academy. They came from nothing, you know, and acted like it. Made it real hard on the rest of us.” [...] He'd thought he was escaping them, blacks like them, by joining the department. [...] Robert, rather than hating the white men who were too offended by his father's skills to hire him at the work he was trained in, had instead despised the Southern masses with whom his family was lumped together. He swore that some of the kids he'd grown up around were the same ones he saw later, on the street. (*Southland* 136, emphasis mine)

Thomas can deny his own minoritiness by relegating the black children into a lower class through treating them oppressively. The Watts riots were “the worst thing he'd ever experienced, and beneath his anger at the punks who were tearing up the city was a deep and gnawing shame. Shame that he was the same color of the arsonists and looters. Shame that other people's worst beliefs had been confirmed” (*Southland* 313).

4. Political Awareness inside Jackie

(1) Changes inside Jackie

The narration portrays Jackie as a typical fourth-generation Japanese-American in the sense that she was raised by a wealthy family and lives in a world apart from her family history. What makes Jackie unique among fourth-generation Japanese-Americans, however, is that she is homosexual. She has always constantly sought white girls as partners and has no Asian-American friends apart from Rebecca Nakanishi, who is half-Japanese and half-Irish. In addition, and unlike her grandfather, Jackie feels uncomfortable around African-Americans. Given her social preferences Jackie would appear to resemble Thomas—with perhaps neither wanting to regard them self as being oppressed.

Jackie has very little interest in the issue of racism, even though she will soon become a lawyer and has a young politico girlfriend whose boss is a City Councilman famous for his effort to help immigrants. However, she gradually grows more aware of the issues involved in racism during the process of researching her grandfather's history:

Jackie still didn't know what to say. Everyone, it seemed, had something awful in their lives—some death or misfortune that shaped them. But she had nothing; her life had been flat and textureless as a starched white sheet. And while she'd

always considered herself lucky to be so blessed, now she felt that she was somehow not real. (*Southland* 146, emphasis mine)

When Lanier relates to Jackie his families' sad memories Jackie feels that she is "not real," because she has no story of any character-building hardships to share herself. Angela then recalls the impact the freezer incident had on her brother and herself. Her brother, Derek, was a part-time worker at the store when Angela was dating Curtis.

Angela shook Jackie's hand and then turned and offered her hand to Lanier. He looked at it for a moment. Then he took it, stepped closer, and hugged her. They stood holding each other and there was such intimacy in this gesture, such mutual sorrow, that Jackie looked away. Lanier didn't speak on the way back to Winchell's and Jackie felt, once again, as she sat hunched in the passenger seat, like a visitor in someone else's grief. (*Southland* 179-180, emphasis mine)

Jackie cannot conceal her own disappointment in her sense of being an outsider when she sees Lanier and Angela sharing their sorrows. Even in Little Tokyo, which abounds with Japanese culture, "Jackie felt more conspicuous on this street, as if everyone could sense how out of place she felt" (*Southland* 187). She would appear to have a newly arisen feeling of guilt for having been so indifferent to the history and experience of racial minorities in America, and Japanese-Americans in particular. One day while watching some news on the television about racist issues, "Jackie shook her head, not believing what she heard. Had it always been like this? Had she simply failed to notice?" (*Southland* 226)

(2) Jackie's Relationships with Laura and Rebecca

Jackie's awareness of racial issues can also be seen in her relationships with Laura and Rebecca.

Three years after Jackie and Laura first meet their relationship becomes dysfunctional, which worsens when Jackie commences seeking her grandfather's inheritor, and particularly when she realizes the importance of being committed to combatting racial problems. However, it is not Laura that rejects her partner due to racism and instead Jackie because of her partner's apparent ignorance. The denial that Jackie gradually discovers in her partner approaches the crucial stage when Jackie realizes how apathetic Laura and her boss are about a case of illegal indentured servants who have been brought to California from Thailand. Upon realizing this Jackie grows uncomfortable with what Laura represents, and even by her ideal, white body.

She [Jackie] remembered the sensation of Laura's hand on her hip, on her breast, and she stepped backwards, away from the memory. Now, looking at Laura—at her red cheeks, her tense mouth, her blond hair and milky skin—she felt a repulsion so strong it made her shudder. (*Southland* 225, emphasis mine)

The descriptions of "blond hair" and "milky skin" simultaneously reveal that Jackie, who had assimilated Laura's whiteness, now felt repulsed by the social inconsiderateness that it represented.

As the relationship between Jackie and Laura fades Jackie grows closer to Rebecca, despite the tumultuous mixture of feelings she has toward the latter. Near the beginning of the story the narrator anticipates Jackie's personal development by describing what Jackie thinks of Rebecca's traits.

She [Jackie] *didn't* want to sleep with Rebecca—she wasn't really attracted to her—but there was something between them, a challenge or a question. [...] Jackie assured her that there was no reason to be—she'd never go for Rebecca, girlfriend or not, despite, or maybe because of (as Laura said) "the things they had in common." It wasn't that she didn't find her friend attractive or appealing. But Rebecca was half-Japanese, and despite her green almond-shaped eyes and wavy brown hair, she looked Asian enough to turn Jackie off, to make Jackie think of her as a mirror she didn't want to look into. Kissing Rebecca would be like kissing a sister, if she had one—unerotic, strange, slightly creepy. (*Southland* 105, emphasis mine)

Jackie's friendship with Rebecca remains slightly cold for the first few years that they know each other because Rebecca reminds Jackie too much of her own Japaneseness. In addition, Rebecca takes racial issues to heart and wants to work for Legal Aid, whereas Jackie originally did not want to acknowledge race issues in thus avoiding having to acknowledge her own personal traits. Jackie therefore finds these features of Rebecca's initially uncomfortable. However, Jackie gradually realizes that she is attracted to Rebecca as she gradually accepts her own minoritiness as a Japanese-American.

5. Conclusion: Jackie and African Americans

In the process of seeking Curtis Martindale Jackie learns about the experiences of racial minorities for the first time in her life via communicating with the people who knew Curtis and Frank. Jackie has been exposed to histories, stories, and personal experiences that she can share with other racial minorities, including Japanese-Americans, by the time readers have reached the end of the story. The passage below suggests that Jackie is even entertaining the possibility of telling her own story when she shifts relationships.

Rebecca smiled. "Honey, look at me. I *am* in-between stuff."

And very gently, patiently, Rebecca kissed her again, and Jackie felt something loosen in her, something ancient and glacial start to creak and break free. [...] And she knew, for the first time—and finally, with this person—that in surrendering herself, she would also, somehow, be given herself in return—stronger, newer, and complete. (*Southland* 343-344, emphasis mine)

As her romance blossoms with Rebecca, the embodiment of multiculturalism, Jackie discovers herself feeling "stronger, newer, and complete" via her own multiculturalism rather than "not real."

The encounters that take place between the minorities in Nina Revoyr's *Southland* work as a device in the facing and accepting of minoritiness. The African-Americans' histories and experiences are especially influential to Jackie. Thanks to Lanier Jackie succeeds in learning about interchanges that have taken between Japanese-Americans and African-Americans. Discovering the romance of Frank and Alma then leads to Jackie realizing that she actually has an African-American uncle (Curtis). Moreover, the stories related by the people who knew Curtis, including Lanier, result in Jackie to start thinking about racism in America. Jackie and Lanier then finally share "the things they had in common" (*Southland* 105), including the grief caused by racism, even though they seem to be totally different people because of their race, gender, and sexuality.

In summary this analysis reveals that not only Frank but also Jackie have the psychological ability to grow more aware of their racial minoritiness via experiencing firsthand discrimination against others, especially African-Americans. Jackie in the meantime is forced to stop ignoring her racial minoritiness and to start facing up to it, upon which she realizes the importance of sharing the histories and experiences that apparently different people have in common.

Works Cited

- Cheng, Wendy. "Nina Revoyr's Los Angeles." *The Loggernaut Reading Series*. N.p., Spring 2007. Web. 20 Dec 2012.
- Mattson, Joseph. "Author+Bookseller Interviews." *Indie Booksellers Choice Awards: The Ultimate Shelf Talker*. N.p., n.d. Web. 23 Oct 2012.
- Revoyr, Nina. *The Age of Dreaming*. New York: Akashic Books, 2008. Print.
- . "Holiday Bowl." *Nina Revoyr*. N.p., n.d. Web. 20 Dec 2012. <<http://www.ninarevoyr.com>>
- . *The Necessary Hunger*. New York: Simon & Schuster, 1997. Print.
- . *Southland*. New York: Akashic Books, 2003. Print.
- . *Wingshooters*. New York: Akashic Books, 2011. Print.

US policy toward Taiwan and Overseas Chinese during the early Cold War

SHIKATA, Shunsuke

(PHD at Graduate School of Humanities, KU)

Introduction

Since the end of the Cold War, now some twenty years ago, the analytical methods used in the Cold War Studies have expanded from analysis of the politics and military strategies¹ used into cultural and socio-psychological fields. Some remarkable research has resulted from that, including a study on the Cultural Cold War, or ‘psychological warfare’ within the societies involved in the Cold War.

For example, some research by Osgood can be considered particularly noteworthy.² In his argument on the Cultural aspect of the Cold War Osgood shows that the US government aimed to propagate a pro-US global image during the Cold War era. He suggests that during the Cold War with the Soviet Union the US (in his case the Eisenhower administration) did not only utilize military pressure but also engaged in ‘psychological warfare,’ in which all possible media outlets were exploited to win over international sympathy for the US (and antipathy against the Soviet Union).

However, his research focused too much on the US governmental organization, its system, and its commitment to exploiting pro-US activities. This then resulted in it being rather unclear how the American information and publicity campaign was considered within the overall US Cold War strategies and how the US engaged in psychological warfare against the Soviet “peace offensive,” for example.

In comparison to Osgood’s study Asian historians have typically attempted to examine the responses of East Asian countries as the beneficiaries of American “psychological warfare,” and to verify whether or not the US information and publicity campaign was effective in Japan, South Korea, and Taiwan. They presented various cases of US activities having taken place in East Asia.³ However, and unfortunately, their studies also seemed to have had a limited perspective with respect to assessing the outcomes of those activities. Asian historians as well as Osgood merely concentrated on how American officials utilized media outlets to create a pro-US image there and did not take into consideration their reasons for doing so. This consequently results in the impression that the campaign activities themselves were the main goals within US Cold War strategies. However, surely the activities were the means rather than the goal. The reasons differed with each region, but as far as Taiwan was concerned, at least, American policy-makers set the economic progress of Taiwan and reconnecting with overseas Chinese as the reasons.

US policy toward overseas Chinese⁴ and Taiwan in the mid-1950s

The Eisenhower administration formulated three basic statements with respect to guidelines for policies to be used in Taiwan in the 1950s. The first was a series of NSC146 (August –November 1953), the second NSC5503 (January 1955), and the third NSC5723 (October 1957). The statements included eight objectives of the US officials. This research pays particular attention to the eighth objective, which was as follows.

1 Concerning US-Taiwan relations, the contemporary historiography similarly tends to concentrate on the military aspect and has therefore overlooked the role of Taiwan in the gradually emerging dimension of “politico-economic warfare” since the late 1950s. See Robert Accinelli, *Crisis and Commitment: United States Policy toward Taiwan, 1950-1955*, (Chapel Hill and London, 1996). See also John W. Garver, *The Sino-American Alliance: Nationalist China and American Cold War Strategy in Asia*, (New York, M.E. Sharpe, 1997)

2 Kenneth Osgood, *Total Cold War: Eisenhower’s Secret Propaganda Battle at Home and Abroad*, (University Press of Kansas, 2006)

3 Toshihiko Kishi and Yuka Tsuchiya, eds., *De-Centering the Cultural Cold War: The U.S. and Asia* [Japanese], Kokusai Shoin, 2009.

4 “Overseas Chinese” is the English translation of the Chinese-language term *huaqiao*, an identity promoted by various modern Chinese governments’ members and used to refer to members of the global Chinese diaspora. t See Stephen Fitzgerald, *China and the Overseas Chinese: A Study of Peking’s Changing Policy, 1949-1970* (Cambridge, UK, 1972)

NSC 146/2 outlined the eighth objective as being ‘increased support for the Chinese National Government by all non-Communist Chinese groups outside mainland China and Formosa, especially the overseas Chinese of Southeast Asia, consistent with their obligations and primary allegiance to their local government.’⁵

NSC 5503 outlined the eighth objective as being ‘increased support for the GRC by non-Communist Chinese outside mainland China and Formosa, especially [sic] the overseas Chinese of Southeast Asia, insofar as any such support does not conflict with obligations to their local governments.’⁶

Without going into the third statement the first two statements obviously shared very similar expressions.

Since the Korean War the Eisenhower administration had begun to view the People’s Republic of China (hereinafter referred to as “PRC” or “China”) as a regional threat. The administration attempted to prevent the PRC influencing their neighboring countries and considered the Republic of China (Nationalist Government, hereinafter “ROC” or “Taiwan”) as the Chinese alternative to Communism. One of the objectives of the Taiwan policy was to strengthen bonds between Taiwan and overseas Chinese communities. In helping to achieve that objective the children of overseas Chinese in Southeast Asia were expected to go to Taiwan to be educated rather than the mainland. The purpose of this research is to look examine how these courses of action were pursued within the US government and how the US objectives then changed in the mid-1950s.

Between the Chinese Revolution of 1911 and World War II the Chinese Nationalist Party received a large amount of support from overseas Chinese worldwide, which had been rather sparse since the Chinese Civil War. In 1949 the ROC fled to Taiwan Island after being defeated in the Chinese Civil War. As a part of a confrontation with the PRC the US policy-makers then began to assist Chiang Kai-shek, the leader of the ROC, in thereby also helping to rebuild their relationship with overseas Chinese.

US officials considered the successful communities of overseas Chinese in Southeast Asia, and their adherence to Chinese Culture and their homeland had basically provoked antipathy in the people of Southeast Asia. At the same time the other Southeast Asian Governments, most of which had been independent since World War II, aimed to build nation-states and had adopted a policy of communalism.

The Government of Thailand, for instance, prohibited the children of overseas Chinese from a Chinese education after the fourth grade of elementary school. And no matter how strongly Chinese parents living in Thailand wanted their children with a higher level of traditional Chinese education there were also other obstacles to them studying abroad: one was that most of the parents could not afford to send their children to a foreign school even if their children were particularly talented, and another that the immigration of overseas Chinese had never been approved by the other governments in Southeast Asia (and Hong Kong).⁷

China used to that situation to strenuously invite overseas Chinese students through their local offices in Southeast Asia to study in China.⁸ To win the loyalty of Chinese residents in Burma, Thailand, and the Philippines China attempted to influence local Chinese organizations by contributing Chinese newspapers, and by offering to make Chinese teachers and textbooks available to them. The US Government, however, assumed that those types of Chinese activities in Southeast Asia would get them nowhere, being partly because the local communities in SEA were anti-communistic, and partly because overseas Chinese maintained a wait-and-see attitude toward the conflict between China and Taiwan.⁹

Notwithstanding the Chinese failure in Southeast Asia it was recognized very early on by US officials that the desire for a Chinese education could be a factor leading overseas Chinese back to the mainland. In 1954, or around the same time that China was gaining international prestige, it was reported that a great number of overseas Chinese student went to the mainland to gain higher educations. Why exactly did the overseas Chinese go there? From the view of US staff members in Asia, for

5 NSC146/2 (United States Objectives and Courses of Action with respect to Formosa and the Chinese Nationalist Government), Nov 6, 1953, U.S Department of State, *Foreign Relations of the United States, 1952-1954*, volume 14, (Washington DC, USGPO 1985),p.307-330. [hereafter referred to as FRUS 1952-54,14:307-30]

6 NSC5503 (US Policy toward Formosa and the Government of the Republic of China), Jan 15, 1955, FRUS1955-1957,2: 30-4.

7 Martin to McConaughy, Nov 14. 1952, *Records of the Office of Chinese Affairs, 1945-1955*, (Scholarly Resources, 1989) , Reel.29, 2.501. no. 620 [hereafter ROCA, 29, 620]

8 ‘U.S. Problem among Overseas Chinese in Southeast Asia’, Sept 29. 1953, *ROCA*, 34, 570.2.

9 *ibid.*

example Singapore, there were basically three reasons: pride in the Chinese Communists' accomplishments, local Asian pressure, and because the Communists appeared to be there to stay.¹⁰ Overseas Chinese youth going to the Mainland then meant increased Chinese influence in Southeast Asia in the future. The US Government began to consider providing assistance for the establishment of educational facilities for overseas Chinese students in Taiwan and Malaya.¹¹

In the fall of 1953, or when the US Vice-President Nixon visited Taiwan as part of his Asian tour, it was decided that the US should assist Taiwan to improve and expand facilities for the education of overseas Chinese students. As a preliminary stop-gap measure the local currency equivalent of \$554,000 in US aid counterpart funds, and supported by the equivalent of \$255,000 from the ROC educational budget, was made available for the most urgent requirements, which was mainly the construction of dormitories and classrooms etc.¹²

Moreover, US officials also took a great deal of interest in the establishment of Nanyang University, which was scheduled to open in the spring of 1956. And although not officially connected with the University the Chancellor of Nanyang University, Dr. Lin Yutang, a prominent Chinese writer and ROC supporter, was thought to be instrumental in the objectives of the US. In April 1955, however, Lin resigned from his position because of political struggles over the University in Malaya had led to extreme frustration for the US officials.

From that time on some US officials grew increasingly nervous and anxious about whether 'the US should undertake any program which would impede the effort of the Southeast Asian Governments to promote the assimilation of the overseas Chinese.' Any US action reflecting particular solicitude for the overseas Chinese would apparently result in adverse reactions on the part of the governments and other ethnic groups concerned. For example, the office of Chinese Affairs, Department of State warned that 'the establishment of a public Commission or other public action which seemed to reflect US assumption of a voice in the internal affairs of the Southeast Asian Governments would have unfortunate results.'¹³

Interestingly, it was the assimilation of the overseas Chinese into the local communities that US policy prescribed as being the long-range solution to the overseas Chinese problem. It was apparent that US officials did not think they could provide an answer to the problem for the time being because neither Taiwan nor China allowed overseas Chinese dual nationality. Nonetheless, US officials continued to regard the overseas Chinese students' going to Taiwan to be a beneficial means of encouraging them to support Taiwan rather than China while still retaining their primary loyalty to their local governments.¹⁴

The US Information Agency (USIA), which had a subordinate body called the US Information Service (USIS) worldwide, had also long been engaged in the overseas Chinese problem. The Agency had recognized the overseas Chinese to be an important minority group in Southeast Asia. Over a period of time it had evolved program activities and the assignment of functional responsibilities that were specifically directed at the overseas Chinese problem. The program and the materials used to propagate the life of overseas Chinese in the US or the situation in Taiwan were presented through the media of press publications, film, and radio (e.g., daily VOA broadcasts, and special programs designed for the audience concerned).¹⁵ In the field all USIS posts serving in areas in which the overseas Chinese were considered an important element were charged with the responsibility for developing and carrying forward a program that was specifically aimed at overseas Chinese. USIS Hong Kong operated under a mandate that designated the overseas Chinese problem as its primary functional interest, and charged it with coordinating and servicing the activities of USIS/SEA posts vis-a-vis overseas Chinese. USIS Taiwan, while primarily concerned with local affairs, devoted much of its time to the overseas Chinese problem and worked closely together with USIS Hong Kong in its service functions. Moreover, in FY 1956 USIS Taiwan and the International Cooperation Administration (ICA) Mission in Taiwan advised the ROC in the preparation and distribution of a brochure that could be sent to young people in Southeast Asia by the Overseas Chinese Affairs Commission of the ROC. In addition, the ICA continued to cooperate with

10 Field Comments on "Overseas Chinese students- A Study", Mar 14, 1955, *ROCA*, 41, 544

11 Memo of Conv., by Anderson, May 15, 1953, *ROCA*, 34; 570.1 Overseas Chinese, 204. See also Mika Sugimura, *Malaysian Education Policy and the minorities*, and Mak, I-Chun Kung, *the Overseas Chinese Network: Forms and Practices in Southeast Asia*, PROSEA Occasional Paper No.26, Academia Sinica, May 1999.

12 Education of Overseas Chinese Students in Taiwan, Aug 29, 1955, *ROCA*, 41, 568-571

13 US concern with problem of Education of overseas Chinese, May 27, 1955, *ROCA*, 41, 555

14 U.S. Department of State, *Report to Congress on the Mutual Security Program*, U.S. GPO, Washington 25, D.C., December 31, 1954, p18.

15 Meiklejohn to OCB working group, July 28, 1956, *ROCA*, 41, 541

the Asian Foundation, which, as a NPO, had made sizable financial contributions available for student scholarships and travel expenses.¹⁶

Incidentally, and as of the summer of 1955, there were about 1250 college-level and 650 high-school level overseas Chinese enrolled at educational institutions in Taiwan. About 85% of the college group was from Hong Kong or Macao, whereas all the high school students were from localities other than Hong Kong and Macao. Regardless of the number of students the USIS officials' comments are worthy of mention: '[it] is difficult to appraise the effectiveness of these efforts. We can say with assurance that we reach substantial numbers of these people [in Southeast Asia] – in terms of results we can speak with much less assurance.'¹⁷ His remarks indicate that while he recognized the importance of USIS activities throughout Southeast Asia he doubted the effectiveness of them.

Since late 1955, in fact, the US Government had recognized the difficulty of dealing with the overseas Chinese problem unilaterally throughout Southeast Asia. While adopting the assimilation policy the Southeast Asian Governments were reported to have been opposed to US assistance in overseas Chinese going abroad. The US accepted the assimilation of the overseas Chinese as a matter of fact, and hence there were some criticisms within the US Government about contradiction of US activities posed. Some US groups in Taiwan pointed out attracting high school students to Taiwan would contradict established US policy concerning the integration of overseas Chinese into local communities. As a result, US aid funds had not been allotted for some high school facilities since FY 1954. Furthermore, the staff of Public Affairs in Hong Kong also raised the question about the overseas Chinese problem. He observed that the importance of overseas Chinese had been over-estimated and was not significant enough to warrant any significant increase in the propaganda operations aimed at them, and that the vast majority of them were entirely apathetic and apolitical. He considered assimilation of overseas Chinese to be well under way in several forms through Southeast Asia and that the US propaganda in USIA publications to have had very little effect.¹⁸ In addition, an opinion was aired by USIS officials that US activities aimed at overseas Chinese should be reconsidered. In August 1955 the report was made that 'the breach between the native Taiwanese and the superimposed "Mainlanders" has not been closed,... , may be widening.'¹⁹ The question was raised as to whether some of the Taiwan activities may as well be carried out by USIS Hong Kong. The statement was made that USIS Hong Kong should be specifically charged with the prime responsibility for servicing the overseas Chinese population and the positioning of the direction and responsibility in Hong Kong should increase the centralization of service, thus providing Taiwan with more time to devote to local problems.

Five days later the US Government approved a course of action with respect to the overseas Chinese. The course of action can be classified as being basically of two types. One was 'Action designed to exploit existing communalistic institutions or motives' and the other 'Action designed to promote assimilation at the expense of communalism.'²⁰ The former course included US assistance in the expansion of educational facilities in Taiwan and Southeast Asia for overseas Chinese, US assistance in the development of greater capacity of Hong Kong to produce adequate supplies of textbook for use in overseas Chinese schools, and US efforts to develop a society and political system on Taiwan that was an attractive contrast as possible to the Chinese Communist regime. But even more importantly the US adopted an invisible approach and a background role in that the US would not directly involve themselves in recruiting overseas Chinese teachers or students and in the distribution of textbooks. The latter course included educational exchanges throughout Southeast Asia and US aid and advice on establishing private credit cooperative associations. The latter course recommended openness in these actions to all nationalities throughout the world. They were basically indiscernible policies of US involvement in the overseas Chinese problem.

The US Government then finally made the following conclusions about the overseas Chinese problem in November. That a need for 'a country-by-country approach to the [overseas Chinese] problem is indicated,' because 'any US attempt to deal with or appeal to the overseas Chinese on the regional and a racial basis, might result in a heightening of the potential danger

16 31 *ROCA*, 41,

17 23-4 (July 26, 1955) *ROCA*, 41,

18 Hong Kong PAO's comments on Overseas Chinese situation, Aug 15, 1955 *ROCA*, 41, 576-582

19 Meiklejohn to Busick, August 24, 1955. *ROCA*, 41,

20 Course of action with respect to the overseas Chinese, August 29, 1955. *ROCA*, 41,

represented by these communities.²¹ In other words the US appeared to have placed emphasis on the assimilation of overseas Chinese into Southeast Asian communities. US officials were deeply concerned that to strengthen the overseas Chinese connection with Taiwan (or particularly China) could result in the situation in Southeast Asia becoming unstable and volatile. This approach was at least still being used at the beginning of the second term of the Eisenhower administration. NSC5723 outlined the eighth objective as being “GRC adherence to the principle of increased orientation of overseas Chinese, especially in Southeast Asia, toward the host countries and integration into their local communities.”²²

Conclusion

On taking the oath of office the Eisenhower administration began to formulate the Cold War Strategy. US officials made specific guidelines for use in Taiwan policy after the cease-fire occurred in the Korean War. In this statement they set the objective of strengthening the connection between Taiwan and overseas Chinese. After the first Taiwan Strait Crisis this objective continued to be advocated even after the Taiwanese military could no longer be utilized in the Far East in the Cold War Strategy of the US, and is why Taiwan was regarded to be the alternative to the threat posed by the Chinese. In the mid-1950s, however, US officials gradually lost the ability to deal with the overseas Chinese problem as being regional or racial. The US Government instead then began to emphasize the assimilation of overseas Chinese as an internal problem of the country concerned in Southeast Asia. Why this political shift took place remains to be accounted for, and is something I would like to discuss in more detail in my next paper.

21 Country-by Country Approach to Overseas Chinese Problem, November 23, 1955, *ROCA*, 41,

22 NSC5723 (US Policy toward Taiwan and the Government of the Republic of China), Oct 4, 1957, FRUS1955-1957,3: 619-23.

5. 外部評価

日時：2013年3月8日（金）15：00～17：00

場所：神戸大学大学院人文学研究科B棟小ホール

出席者

外部評価委員： 林 采成氏（ソウル大学校日本研究所副教授）

木畑洋一氏（成城大学法学部教授）

推進委員： 釜谷武志（推進会委員長、人文学研究科教授）

太田博史（国際協力研究科教授）

木村 幹（国際協力研究科教授）

松並 潤（国際協力研究科教授）

油井清光（人文学研究科教授）

緒形 康（人文学研究科教授）

山本秀行（人文学研究科准教授）

樋口大祐（人文学研究科准教授）



緒形：3時を過ぎました。ITP 外部評価を始めたいと思います。私、本日司会を担当させていただきます、ITP 推進委員のメンバーの緒形と申します。宜しくお願いします。

本日は遠いところからお二人の先生をお招きしました。まず、評価を行って頂く先生方を紹介させていただきたいと思います。まず、ソウル大学の日本研究所からいらっしゃいました林（イム）先生。宜しくお願いします。ソウル大学校はご承知のようにITPの最も重要な海外パートナー校の一つです。最近では2か月前に総括のシンポジウムをソウル大学で開かせていただいたばかりです。あの時も非常にお世話になりましたけれども、本日もわれわれの5年間の計画に対して忌憚ないご意見をお願いしたいと思っています。

もうお一方は木畑先生です。木畑先生につきましては、歴史学界の方はご承知のことと思いますけれども、東京大学の教養学部で長らく教鞭をとられまして、今は成城大学の法学部に所属されています。イギリス現代史、イギリス帝国主義史研究において非常に重要なお仕事を続けられてきた研究者でいらっしゃいます。文科省あるいは学振関係でも様々な委員を務められ、私たちのITPに関してもいろいろなお意見をお願いしたいと思っています。

林先生、木畑先生、今日はお越しいただきありがとうございます。まず、配布させていただきました資料一式をご覧下さい。最初に外部評価の進行次第というものがございいます。だいたいこの順番に沿ってご発言をお願いしたいと思います。早速ですが、私たちのITP推進委員長の釜谷先生の方から、開会のあいさつを兼ねて概略の説明をお願いします。

釜谷：推進委員会の委員長を引き受けております釜谷と申します。林先生と木畑先生に対しましては、本日の外部評価にお越しいただいたことに、心からお礼を申し上げます。

この若手研究者インターナショナルトレーニングプログラム、いわゆるITPですけれども、本プログラムは「東アジアの共生社会構築のための多極的教育研究プログラム」と題しておりまして、

平成20年度に日本学術振興会の募集に応募し、採択されて今日に至っております。神戸大学としましては、人文学研究科と国際協力研究科、この二つの大学院が協力して共同で実施しております。平成20年度から始まりまして、今年度、平成24年度の最後、平成25年3月で完成するというところであります。

このプログラムの目的につきましてはすでに資料をお送りしておりますけれども、繰り返しになりますがもう一度申し上げます、今日の東アジアにおきましては様々な問題が山積しております。とりわけ人文科学系におきましては、相互の対話・共生を可能にするための諸問題、それから社会科学系におきましても同様の問題があるかと思っています。そのような問題について、若手の研究者が東アジアにかかわる高度な研究能力とともに学術論文を作成するという能力、さらには外国語の運用能力、具体的には外国の研究者と研究内容についてお互いに情報を交換し合い、かつまた研究内容を外国語で発表しうる、こういった能力を養成する。加えて、若手の研究者が自ら国際学会・研究会・討論会などを企画し組織する、という能力をも涵養しようというのがこのプログラムの特徴であります。

具体的には今申しました問題を解決できるような若手の研究者を育成することを目的としておりますけれども、私どものプログラムの研究分野である東アジアにかかわる学問研究というのは、ご承知のように日本では戦前からいわゆる東洋学と呼ばれる文献学に重きを置いた研究の豊富な蓄積があります。今日でもなお色あせない資料的あるいは研究上の価値を持つものではありませんけれども、同時にまた戦後に地域研究の一環としてアジア研究と呼ばれる研究も盛んになってまいりました。それらはある意味では時に対立し、相互に反目しあうという一面も持っております。これに対して、いわゆる伝統的な東洋学と戦後のアジア研究については、どちらを選ぶかといった二者択一の問題ではなく、相互に補完しあうような、そのような姿勢が大事であろう。つまり、過去の豊富な研究成果を援用しながら、同時に新しい研究にも通じるようなものを作る方向で進めていこう、ということが我々の

プログラムの特徴であります。

具体的に申しますと、5年間のプログラムの中で、初年度の後半から、アジアプログラムと題しまして、大学院生を中心に秋の10月から翌年の6月にかけての最長9カ月の期間を利用して、アジアの諸大学に派遣しまして、向こうの資料を収集したり、あるいはまた当地の研究者と交流を深めるといった実質的な経験を身につけてもらおうとしました。さらに、その翌年度、今度は欧米プログラムということで、ヨーロッパあるいはアメリカの教育機関に赴きまして、これも最長9ヶ月間向こうに参りまして、東アジア研究の成果あるいはアプローチの方法などを参考にしながら、前年度に行ったアジアプログラムでの成果を再検討してもらう。このようなプログラムであります。ですからこのアジアプログラムと翌年度の欧米プログラムは二つで一まとまりになっていると考えています。さらに、これらの二つのプログラムを経まして、3年目に博士論文を完成させるということです。また、留学生を除けば大部分の学生は日本語で博士論文を書きますので、日本語で論文を執筆すると同時に、それを英語あるいは、第2外国語や第3外国語であるアジアの諸言語にも翻訳して研究成果を発信していこうということですね。加えて最後に、コロキウムを開催する。これは自らが企画し運営していくもので、そのような能力を実際に培ってもらおうというのがこのプログラムの特色であります。実際、5年間やってまいりまして、若干当初の予定通りにいかなかった部分もありますけれども、博士論文につきましては英語1本、中国語1本、期日までに仕上げることができました。簡単ではありますが、本プログラムの概要と経過につきましてご説明申しあげました。

緒形：釜谷委員長、どうもありがとうございます。それでは、最初に、林先生の方からプログラムに関するコメントをいただきたいと思います。主にアジアプログラムに関する問題点、派遣者選考に関する問題点、そして博士論文の執筆支援に関する問題点についてコメントをいただきたいと思います。宜しくお願いします。

林：ソウル大学の林と申します。いろいろと資料をいただきまして、その中でITP評価重点項目ということがありましたので、それに即して少し述べさせていただきたいと思います。

若手研究者の人材育成に関する組織的な取り組みの姿勢に関しましてですが、私が色々いただいた資料を拝見したところ、ITP推進委員会を定期的に開催されているということ、それから、派遣者が月例報告会を開催し、研究成果の報告書を出したり、それを様々なところで発信する目的で、現地での発表会やシンポジウムを開催されています。それらの点に私は強く興味を持ちました。特に、テーマともなっている、東アジア共生社会構築のための多極的な教育研究に関して、地域研究・社会学・歴史学など様々な分野で多元的なアプローチを志向しています。私が所属しております日本研究所は、学際的な活動を念頭に置いているのですけれども、そのような観点からも非常に感心しております。特に派遣して現地で調査をしたり、研究したり、それをさらに現地

あるいは第三国で発表する。その際には現地の言語で論文を作成して、最終的には海外で出版するということが、非常に望ましく、理想的な計画であると理解しました。特に、韓国側からみると、院生たちに対してはいろいろなプログラムがあるのですけれども、ITPはポストドクという立場の人々に対する制度でもあるということが非常に興味深く感じております。

アジアプログラムについて少し述べさせていただきますと、中国の中山大学、台湾大学、韓国の成均館大学・ソウル大学校と協力体制を構築しています。一般的に中国と言うことであれば、北京や上海、また日本との歴史的な関連で申し上げますと東北地域を中心として協定や交流が非常に頻繁に行われているのですけれども、そうではなく華南地域の港市に存在する中山大学と協力を結ばれたということは、珍しいことであると感じました。韓国でも、ソウル大学はもちろん入っておりますけれども、漢字や歴史の面で非常に競争力のある成均館大学校と協力関係を結んだということは非常に注目すべき点であると考えております。長期派遣者・短期派遣者を受け入れる観点から見ますと、まず派遣者の専門を念頭に協力する体制が非常によく整えられていると、感じました。

2点目として、海外パートナー機関との協力体制準備状況について、適切な協力関係を実現しうる枠組みが作られていることが感じられます。先ほど申し上げましたように、中国は中山大学を中心として行われており、台湾は台湾大学、韓国は成均館大学校とソウル大学校ということで、台湾も韓国もそうなのですが、該当地域の非常にメジャーな大学ですから、多極的なアプローチが可能となっております。また、調査研究の協力だけではなく、メールを通して様々な連絡を取っているということと、論文指導の点で以上のような強みを生かして、日本の神戸大学の方からも現地の大学からも双方から指導を受ける体制ができたということについては、非常に勉強になりました。私が感じているのは、今までの交流を踏まえてこれからも交流・協力の拡大を図るべきではないかということです。非常に感心させられたことに、現地での出版ということなんですけれども、現地の大学でも様々なリソースがありまして、例えば日本研究所では、日本関連のものとしてソウル大学校日本研究叢書シリーズというものがありますし、おそらくそれぞれの大学でこのような制度がありますので、それらと協定を結んで交流を拡大すれば、非常に有効な活動の基盤になるのではないかと思います。

これにつきまして、少し私から質問したいことがあります。学生たち、院生たちの研究テーマを見ますと、内モンゴルに関するテーマがありますけれども、これについてはやはり中国では北京にある中央民族大学が著名な拠点であると思いますし、あるいは内モンゴルに所在する大学もありますので、これから協定を拡大して、さまざまな大学を取り込んでいけばいいのではないかと考えております。総合的な交流の点から見ますと、私に対応させていただきましたソウル大学校のシンポジウムでは、国際大学院の韓国語学科や社会学科の院生たちがともに参加したということで、一方的ではなく双方向的な交流ができていました。ただし、これについても一つ質問させていただきたいと思います。海外か

らの派遣者の受け入れに関連していろいろな議論がなされたこと
 と思いますけれども、テレビ会議はどのようなものであったのか、
 後ほど教えていただければ幸いです。

3点目は事業実施計画の具体性と実現可能性というところで
 けれども、派遣・調査研究・外国語での論文作成・発表・海外出
 版ということで計画は非常に明確であり、さまざまな証拠資料の
 よってこれらを説明しているということです。海外での出版につ
 きましては、先ほど申し上げましたように、おそらく単独での出
 版は難しいので、学生たちのテーマを集めて共同で現地の協力者
 を探し、一緒に行くという形をとればもう少し実現し易くなりま
 すし、外部の評価者から見ても高い評価を得ることができると思
 います。派遣以外でも様々なことが実施されていますが、外国語
 で学術論文を発表したり、口頭研究発表をなさっているというこ
 とで、非常に興味深く感じております。評価項目では、単位取得
 であるとか、インターンシップということが論じられております
 が、単位取得というのは1年では調査研究との両立は難しいので
 はないか、と思います。この点をそもそもどのように捉えればよ
 いのか、教えていただきたいと考えております。

4点目は、事業運営体制の整備についてです。私が論じるまで
 もなく、年次計画は充実しています。アジアプログラムを経てそ
 れが研究成果につながっているということで、非常に高く評価す
 べきであると考えております。

5点目は、期待される成果とその検証の方法という点について
 です。研究人材を育成するというところで、様々な機会を与える
 という、これはある面では学術的な世界でのインフラストラクチャ
 であると考えられます。これからも、この制度を広く宣
 伝して、学生たちが参加するようにしていただければと思います。
 これにつきまして、経済学者の立場からパーセンテージで見ます
 と、選考に際して競争率がそれほど高くないように見えます。広く
 宣伝して多くの院生やポスドクといった若手研究者たちに、こ
 のような素晴らしい制度があるということを認知してもらい、応募
 が増えるように努める必要があると感じております。

博士論文執筆の支援についてですが、それぞれの多様なテーマ
 に対してそれぞれに適した現地の指導教官をどのように見つけ出
 すか、ということがおそらく最も重要なことだと思います。そう
 なりますと、高いレベルで指導いただいたとしても、現地の言葉
 で論文を作成しなければならないということで、私も留学時に経験
 がありますが、書いた論文を現地の言葉でレビュー・クリティーク
 してくれるような助力者が必要となります。したがって、単に
 指導教官だけの問題では収まらず、現地の院生たちをお願いして
 様々な助けを受けることが必要になってくるように思います。さら
 に成果を現地で出版するという点について、私が先ほど申し
 上げましたように、ソウル大学校の日本研究所ならば、私たちが
 できる限りの協力を行います。同様のものをそれぞれの大学で
 作って、それらを活用する形で行うとすれば、非常にうまく
 いくのではないかと考えます。以上になります。

緒形：どうもありがとうございました。今、個別に質問をいくつ
 かいただきました。それぞれについては推進委員会の委員から答

えられるものは答えまして、残ったものに関しては私ができる
 だけお答えしたいと思います。

続きまして、木畑先生からコメントをいただきたいと思います。
 木畑先生からは主に欧米プログラムに関する問題点、派遣者の指
 導に関する問題点、そして若手研究者の国際学会の企画・運営に
 関してコメントをいただきたいと思います。宜しくお願いします。

木畑：それでは、コメントさせていただきます。今、緒形先生が
 言われた3点にできるだけ沿っていいと思います。もう少し
 拡散するかもしれません。よろしく願いいたします。何はとも
 あれ、グローバルに活躍できる若手研究者を育てようという意気
 込みと、それにふさわしいプログラムを作られたことに敬意を表
 したいと思います。最近はグローバル化という中で、こういう人
 材を育てようという試みをいろいろな大学がやっているわけで、
 それなりにどういう特色を出してやっていくかということが、非
 常に難しいとも思いますが、その点に関しても、このプログラム
 は非常に特色を持ったものをお作りになったというふうに感じて
 います。ただそれだけに、実際に推進されていた先生方とそれか
 ら事務の方々の努力や労力たるや大変なものだったのだろうと、
 資料を読ませていただいて感じていまして、ご苦勞様でしたとい
 うことを最初に申し上げておきたいと思います。それから、こ
 ういった、若手を育てるということについては、実際にどういう成
 果が生まれるかは、もっと先にならないと分からないというのが
 本当なのだろうと思いますので、これからの発言は、あくまでも
 今の段階でのお仕事を拝見した、私の直感的な感想ということ
 です。それでご勘弁いただきたいというふうに思います。

まずこのプログラムですけれども、なんといっても特色は、先
 ほど釜谷先生が言われましたけれども、アジアプログラムと欧米
 プログラムを組み合わせているというところで、これは非常に大
 きな特色だろうと思います。頂いた文章の中で、欧米の東アジア
 研究の蓄積と分析的アプローチを参照するという点に、欧米プ
 ログラムの意味を見出していらっしゃる。これは確かにそうだろ
 うと思います。アジア研究をやる人間がそのアジアの現地に行く
 と同時に、それを外から見ている所に行って、またそこでの
 研究に触れるという、これは非常に野心的なプログラムで、他の
 所ではちょっと聞いたことがなく、高く評価できると思います。
 同じ人物がアジアに行き、それから欧米に行くということで、実
 際に多くの方々が両方に参加されてきています。成果を読ませて
 いただいた中だと、パリから見る東アジアの文学とか、実際に特
 色が発揮されている成果も出ています。ただ、その両方
 をやられているということが、今の段階でいいですが、どうい
 うふうな成果に結びついているのかということをお教えいただけれ
 ばと思います。先ほど言いましたけれども、本格的な結果評価は、
 今の段階ではまだ無理で、長期的に見なければ、どういう成果が
 出てくるのか分からないと思いますが、非常に意欲的なプログラ
 ムであるだけに、推進されてきた先生方から見て、これが具体的
 にどういう意味を持っているのかということをお伺いしたいと思います。

それから、このプログラムの申請では、人文科学と社会科学の

アプローチもクロスされるというふうなことを言われています。これはまた言うは易し、行うは難しということとして、実際に何か具体的な取り組みがあるのかということを伺いたいと思います。

それから、さらにこの事業の良いところだと私が思いましたのは、大学院の学生を長期にわたって派遣すると同時に、助教とかポスドクの方を短期派遣して、その方自身の研究を行わせると同時に、メンターとしての役割を担わせるということで、これも非常に優れた発想だと思います。ただ報告書を読ませていただいても感じたことですが、実際にそれは人間、個々人の関係の問題なので、うまくそれが合えばいいのですが、必ずしもそうなるわけではない。ちょっと問題が違いますけれども、国際交流の場合、たとえば日本に来る留学生に対して、個人的なチューターとして日本人学生をつけて、うまくいくときは非常にうまくいくのです。反面うまくいかない、かえって逆効果になったりすることもある。非常にいい試みであるだけに、そここのところの成果も伺えればというふうに思います。

私には欧米プログラムの評価をということが求められているのですけれども、ちょっと気になりましたのは、欧米プログラムの場合に、ワシントン大学は非常によく機能しているという感じがしますが、たとえば SOAS（ロンドン大学）は積極的に位置づけられているにもかかわらず、実際に行っている学生は少ないというところが気になりました。選ばれている大学は、アジアに関しても、先ほど林先生からもありましたように、非常にいいところを選んでいきますし、欧米に関しても、いい大学をヨーロッパにしる、アメリカにしる、選んでいращやというふうに思います。ただ、それを最大限に利用するということで、若干バランスが問題であるように感じました。

それから、派遣者の指導についてということでは、これは頂いた資料だけでは少し分かりにくいところがあるのですけれども、派遣される前にアカデミック・ライティングの訓練を行うとか、オーラル・コミュニケーションの指導を行うとかされている。それから双方向の交流として相手校からそのためのスタッフをお招きになっている例もあったようで、そういった点は非常にいいと思います。派遣準備ということで、短期間で効果をあげるのとはなかなか難しいのではないかと思いますけれども、しかしきちんと準備された上で送られていることは評価できると思います。それから、実際に向こうに行ってから指導ということで、先ほど言ったことに重なりますけれども、ポスドクの方とか助教の方にメンターとしての役割を担ってもらい、それから先生方ご自身も実際に行かれて、その様子を監督されている。これは非常に丁寧なやり方だろうと思っています。月例報告書を提出させているということも、指導という側面からは高く評価できるというふうに思いました。それから成果報告会を開催されて、その報告書をきちんと出されている。これも非常に労力がかかることですが、十分に行われていると思います。派遣された研究者の方の研究成果も着々と出ているようで、これもこれから先の成果を見なければ最終的な評価はできませんが、今までのところでも、プログラムがすでに走っている期間に、相当の成果を上げられているとい

うのは、やはりかなり効果が出ている証拠だと思います。

若手研究者の方の学会の企画運営についても、私のコメントとして求められているのですが、これはちょっと材料がないですね。最終的に開かれたシンポジウムに対しては、このプログラムをいただきました。それからワシントン大学でのものというのは、つい先日おやりになったわけですね。これらは、若手の方が実際に企画運営をしたということでしょうか。

緒形：ちょっと報告が遅れておりまして、ようやく今日出てきたところです。去年の12月に台湾大学で行った記録はおおむね整理できております。一方、ワシントン大学でやったのはつい2週間ほど前でして、その記録は今日出す結果になりました。申し訳ございません。

木畑：いえ、とんでもない。前にやられたのは頂いておりまして、ワシントン大学のものも今日見せていただきました。これだけのものを実際に行うというのは、準備企画で相当大変なわけで、若手の方がこれをやられたというのは大変な力を発揮されたというふうに思います。具体的な中身まで分かりませんが、そういうふうに考えております。

最後になるのですけれども、こういうプログラムをせっかく始められて、これからどういうふうに継続されていくのかということが気になります。最近はいかなるプロジェクトでもそれが問題で、文科省にしる、学振にしる、お金を一端出しておいて、あとは自分たちでやれよということになるわけで、そここのところはどういうふうになるのか、どういうふうにお考えなのか、これはむしろ神戸大学全体というか、本部が考えていかななくてはならないことなのだろうと思うのですが、せっかくこういう形で始められたものをどうしていくか。アジアとヨーロッパ両方のプログラムを結び付けるというプロジェクトを続けていくことは、いろいろな意味で大変であろうと思うのですけれども、多少とも規模は縮小する場合でも継続していく価値のあるプログラムであろうと思っています。以上が私のコメントです。

緒形：どうもありがとうございました。今先生がおっしゃった若手研究者の国際企画に関しては、今日ようやく資料が揃いましたので、推進委員の方から後ほど個別に説明させていただきたいと思います。以上、林先生、木畑先生、両外部評価の先生からコメントをいただきました。これから、各推進委員の先生から、今のコメントへの直接の回答、ならびに5年間のプログラムを通じて考えられたこと、課題や成果といったこととお話になっていただきたいと思います。一応私の方で、6つのテーマで進行次第に書かせていただきましたように、6つの側面から推進委員から回答をいただきたいと思います。それぞれの委員の先生は、各項目に関して非常にご尽力いただいた先生だと思っていますので、よろしく願います。それでは、まずアジアプログラムに関して、木村幹委員の方からご回答お願いいたします。

木村：神戸大学国際協力研究科の木村です。まず全般的なことを、

アジアプログラムだけに限らない部分にも触れてしまいますけれども申し上げますと、やってみて率直に感じるものがあって、学生たちにとっても非常にタフなプログラムであったということが、結果としてはよく分かったということでした。もちろん、最初からディマンディングであることはよく分かっていたのですけれども、やはり見ている学生、ウチのゼミ生も3名ほど派遣しているんですけども、見ていて非常に大変だなと思いました。とくに語学の問題は壁が厚くて、どうしても東アジア研究をやっている学生は、中国語・韓国語の方はできるんですけども、英語の方が追いつかないという現状があって、そのへんのところは、現地で見ていても大変であったなと思いました。もっと言えば、その中でメンタル的にも非常にしんどいシチュエーションが出てくるのも当然であって、それをフォローするのはなかなか大変だったというのが率直な意見になりますし、また最終的に論文を書くのは学生ですから、我々がこのスケジュールで書いてくれと言ってもなかなか出てこないということもありました。

では、必ずしもご質問の内容に沿ってというわけではありませんが、お答えさせていただきますと、まずはテクニカルな方からですが、例えばテレビ会議という話が出ました。申請した段階とその後の状況が変わったということが随分ございまして、当初は古典的なテレビ会議のシステムを使って、コミュニケーションをしようと考えたわけですが、考えてみれば、現在スカイプがこれだけ広く使われるようになってくると、ほとんど必要ないですね。そうすると、学生の指導なんかも、メンターも含めてスカイプ上でできてしまう。最近はスカイプ上で画像も出てしまうので、ある段階からは、とくに学生指導の方なんですけれども、スカイプを通じた交渉に変わっていったという、これはもう技術的な発展の中で、むしろ好ましかったのではないかという気がします。ただ、欧米の方とは時差の問題等ありまして、教員の方が朝の2時から3時にスタンバイしているというシチュエーションも何回かあって、なかなか大変でした。技術的には、そういう形で解決していききました。

単位取得やインターンシップに関しては難しかったと、これも率直に申し上げるべきだと思います。何が一番難しかったかといいますと、やはり5年間の間に2回学生を派遣するんですけども、結局9か月というのは当然オフィシャルなコースに入るわけではありませんので、研究生になるんですね。研究生は単位を取れないという原理的な問題もさることながら、研究生で受け入れられた場合は、先生たちはご存じだと思いますが、我々が客員研究員で行っても、こちらからアクティヴに接していけば、指導も受けられますし、いろいろなことができるんですけども、通常の学生と違いまして、なかなか積極的にアプローチできず、義務もないですし、向こう側もどうしていいかわからないということがあって、そここのところは非常に難しかったというのが率直な所です。ただ単位取得したかどうかは別にしまして、現地の授業等に出て、いろいろな活動を行ったという意味では、できたのかなという感じがしないでもありません。

順番が前後しますがけれども、外国語での博士論文の執筆ということに関しても、先ほど申し上げましたように、語学の壁は厚かつ

たというのが率直なところでありまして、下手をするとどっちつかずになってしまうというところもあります。ただ、成功例というのがないわけではありません。積極的に語学そのものに関心を持ちながら、接していた学生もあり、私の学生になってしまいうすけど、韓国に行つて、それからアメリカに行つて、双方の言葉が使えるようになって、現在ソウルの日中韓連絡事務所という所で仕事をしている、このあと彼は戻つてきて、改めてドクター論文を書くんですが、このような事例もありまして、二つの言語を持っていると、アカデミックな部分ではもちろんですが、実務的な分野でも活動する余地はやっぱりあるんだと。全般的な話ではありませんが、例としてはございました。

ただ、そのあたりのところはシステムのいくつかの問題があつて、それは率直に申し上げるべきだと思うのですが、まず一つは学生の意欲に全面的に依つているという問題と、あとは各大学、ソウル大学校さんもそうだったと思うんですが、語学学校は語学学校で、多くの場合別になっておりまして、アメリカでもそうなんですけれども、語学学校に通うのにもお金がいるんです。そのお金のフォローというのは、このプログラムでは出なかったもので、学生としては、とくにアメリカやイギリスの方では大変でした。アメリカの語学学校は非常に高いですから、大変だったということがあります。にもかかわらず、積極的に入つていたり、あるいは学生と交流するなど、語学交流を通じてうまくいった例は確かにございました。

次に競争率なんですけれども、これもなかなか上げるのは難しかったというのが、率直なところでもあります。これは、学生にとってディマンディングであったということもあり、これは本当に自分でサバイヴしていけるのだろうか、学生自身が苦慮せざるをえなかったということもありますし、あと文科省の制度的な問題でもあつて、受け入れ部局が人文学研究科と国際協力研究科の2部局なんです。そうすると、基本的にこの2部局から学生を送り込むという形になっていますので、本来であれば、神戸大学全体から幅広くリソースをとつて、学生に使ってもらえればよかったのですが、そういった制度的なものに限界があり、今の段階でもありますが、今後はこういったものを使いながら、全学的に使つていただく方がいいのかなと思います。メンターに関しては、卒業した学生に広く、特に人文学研究科でお声をかけていただきまして、使つていただいたんですが、こちらの方もポストクレベルとなつてきますと、非常勤の仕事だとかいろいろあつて、3か月行くことが難しいという部分があつて、なかなか人材を集めるのに苦労しました。ただ、今後こういったことを続けていくのであれば、変な話ですけど、支援が終わると、制度的な縛りもとれますので、少しは違つてくるのかなと思います。

次に出版の部分に関しましては、現地での出版はなかなか難しいということがありまして、これは私の専門の韓国のことになってしまいますけれども、林先生もご存じのように、韓国では現在、書籍形態の出版からアメリカ有力ジャーナルへと投稿へと比重が移つてしまつていまして、そうすると、韓国でこういった話をするときに、教科書は出せるんだけど、なかなか単行本は出せない、出してくれない、というような問題がございまして、出版する場

合、本当であれば神戸大学の別の支援、お金を使って、出版支援をして、出していくというのが、特に韓国においては現実的なのかなという気がします。韓国のマーケットは日本よりも小さいので、そういったことをやっていって、なんとか形にしていきたいと思います。

また、研究対象にあった大学を選ぶべきだということ、これはおっしゃる通りなんですけど、このシステムとしては、提携相手を選んで、そこに送り込むという形になっていたので、どうしても限られた、比較的大きくカバーしてくれる大学を選んだということだったんですけども、学生の交流としては、たとえばソウル大学校を基盤としながら、他の大学に行っていただくとか、中山大學を基盤としながら、内モンゴルや東北の方に行っていただくとか、許可の問題が中国の場合別に残りますが、今後はやっていかなければいけないかなという気がします。ただし同時に、前に学生が派遣されていて、すでにネットワークができているから、勉強しやすいということがあったと思いますので、その専門性の部分のところと、ネットワークの中で勉強していくという問題をどうやって両立させてゆくかを考えていかなければいけないのかなという気がいたしております。

最後に、継続に関して、これも各先生方おっしゃられていたと思うんですが、私の専門である日韓間で申しますと、良くも悪くも、現在日韓は経済的にも似た水準になってきていまして、非常に移動しやすくなっています。したがって、お金の件がなくても、とくにウチの学生たちはそうなんですけれども、先輩たちが順番に韓国に行きますと、行くのが当たり前という雰囲気になってきますし、ネットワークができて、行きやすくなります。今後支援がなくても、こういった基盤というのは残っていきますので、それを使って、韓国や中国は近いですから、アジア関係に関しては繋いでいけるのかなという気がします。ただ欧米関係に関しては、予算の問題も伴いますので、今後どうしていくのかというのは、それこそ全学的に考えていかなくてはいけないことだと思います。私の方からは、以上です。

緒形：どうもありがとうございました。アジアプログラムを中心に広く述べていただきました。木村先生のゼミの学生はこのプログラムへの参加率がとても高く、第1期で言いますと横溝さんと田中悟君、それから第2期で言いますと米沢君です。そして最後が三村君で、今ちょうど韓国に行っている最中で、月末には帰ってまいります。この3名ですね。また、長澤裕子さんも木村先生に紹介していただいて、短期派遣いたしました。

木村：長澤さんのケースは、外部から招へいして、メンターとして派遣しました。

緒形：それでは、木村先生と並んで、たくさんの学生を派遣していただいた油井先生から、欧米プログラムについて、ご回答お願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

油井：人文学研究科の油井でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

いたします。まずは、林先生、木畑先生から非常に貴重なコメントをいただきまして、ありがとうございます。

私も最初に感想めいたことを申し上げますと、私はこの5年間、このプログラムに関わってきました、一言でいいますと、楽しかった、やりがいがあったなという感じが、まずいたします。もちろん、先ほど木畑先生がおっしゃられたように、大変な労力ということがあります。教員の方も研究で忙しい中走り回っているということもあります。そういう面はありますが、しかし何と言っても、とくに若手の研究者が国際的なセッティングの中で育っていく姿を目の当たりにするということは、うれしいことであり、楽しい経験であったということがありました。これがまず基本的な感想です。

私は、派遣者の一覧を見ていただきながら、お話をしようと思いますが、全部について詳しくご説明できませんので、私がよく知っているモデル的なケースを詳しく取り上げたいと考えます。欧米プログラムにつきましては、延べ14名ほど派遣しておりまして、そのうちの、モデルケース的に言いますと、第一期生で私の所に所属しております藤岡君が行きました。彼は、まずアジアプログラムでは国立台湾大学に行きましたが、行く前に非常にインテンシヴな中国語のレッスンをこのプログラムの経費で受けました。この中国語に関しては、彼はこの5年間でぐっと伸びたんじゃないかと思います。もちろん問題は欧米の方でありまして、これはまたあとで詳しく申しますが、リヨン高等師範大学という所に行きました。受け入れ先はフランスですけれども、コンタクトパーソンと言いますか、受け入れの太いパイプのある指導教官の先生は英語の十分にできる人でして、それが分かっています。英語で行かせました。それでも、言葉の壁は難しいということがありました。それに関しては、彼も随分頑張ってやったというふうに思います。藤岡君は社会学専修ですが、先ほどご指摘いただきましたメンターも社会学専修の者を行かせました。じつはこのプログラムを最初に始めました時には、リヨン高等師範大学はメンバーでは必ずしもなかったんですが、最初にアジアプログラムが走るわけですし、その期間がありますので、本人がやっているテーマ性、あるいは学問的な背景と、それからITP全体のテーマである東アジアということを考えたときに、欧米に関してはどういう大学に東アジア関係の資源が一番あって、本人がやっている社会学で受け入れられる太いパイプのある教官がいるかという二つで考えますと、もちろんパリやロンドンも考えられるんですけども、非常にいい大学がここにあるではないかということが分かりまして、そのリヨンと新しく協定を結んだということです。その直前に、たまたま受け入れの教官でもあるリヨンの副学長が神戸大学に来ていまして、交流があったということがあり、またこちらからも当時の神戸大学の学長がリヨンまで行きまして、ITPに関する合意もそこで行いました。もちろん、これに関しては学振の承認と内部での委員会での承認を受けてやったわけなんです。その間、パリ国立政治学院や他の大学についても整備に努めまして、これらの大学についても、その後何人かの派遣者が出たわけです。第一期生については、カスタムメイドみたいなこ

とをやったということです。そういう形で一期生を行かせまして、そういう意味では、木畑先生がご指摘なさったことを順番に申しますと、アジア的な視野とヨーロッパ的な視野の組み合わせがどうなるのかという難しい問題がありましたが、本人の専門性、テーマ性との関わりで、カスタムメイド的に考えていったということになります。藤岡君がやっているのは台湾の夜市に関する研究ですが、そういうものを、リヨン高等師範大学の受入教官であったイヴ・ヴァンカンという社会学者が携わっている方法論と組合わせて考えると、どのような発想が生まれてくるかということが大きな課題になりました。藤岡君は、そういう課題によく応えてくれたと思います。リヨンでは、ヴァンカン教授の方法論を用いて、ショッピング・モールを対象として調査しましたが、これは台湾における夜市研究と、対照的な世界ということになり、その特性をかえって浮かび上がらせることになったと考えます。

リヨンでの調査と理論研究をうけて、もう一度台湾に行って、現地のフィールドワークでそれをどう活かすかという、そういう試みがありました。それでも何とか3年目に博士論文を仕上げまして、提出をして、学位を取得しました。ただその後、それを多言語で出版するというにつきましては、ちょっと苦戦をしております、今鋭意仕上げようとしているところです。先ほど言いましたように、この間、中国語は相当できるようになりましたので、なんとかやって欲しいなと思っています。

人文科学と社会科学という二つの視野につきましても、大変難しい問題なのですが、先ほど林先生にもご指摘いただきましたように、帰国をしましてからすぐに、帰国報告会というものを、その期に帰ってきた人たちが一緒になって行っています。そうすると、さまざまな分野の人たちですので、人文学でも文学系だとか、歴史系だとか、そういう人たちと一緒に議論しますので、そういう機会というのがありましたし、それから国際学会、今日お示ししているもの以外にもいろいろ日常的に国際学会はやっているわけでありまして、それをこのITPの成果として出すのはなかなか難しいんですけども、予算がどこだったかという問題もありますので。ただそういう学会を日常的にいろいろやっていまして、そういう場面では人文系と社会系とが、互いの視点を交流させながら、また何とか相手に分かるようなコトバで議論していくということがいくつかあったというように思います。

そういう意味では、次の問題であります派遣先のバランスですが、私に関わったようなところでいいますと、リヨンとか台湾とかということになりますが、長期の学生が多いですから、長期と短期が組み合わせられることによって、数が増えるということはありませんでした。そういう意味では、長期と短期が組み合わさって、人数が増えているように見える所と、長期で行っていても、人数としては多く見えない所があるのかなと思います。また欧米プログラムの他のパートナー校である、パリ国立政治学院につきましては、向こうのコンタクトパーソンに神戸大学に来て頂きまして、交流の形を整備するというのも進めてきましたし、リヨンからは学長が神戸大学へ来て、大きなシンポジウムをやったということもございました。

こういう様々な試みをやってきました、結局今後どのように継

続していくかが問題ですけれども、いくつかパートナー機関とのパイプを太くしてきたつもりですので、この5年間で築いてきたパイプをどうやって日常的にしてくかということが問われていると思います。これを土台にして、これからどこまでできるかということです。木畑先生にご指摘いただいたコメントについて、全部にお答えしたかどうか分かりませんが、とりあえず私の方からはこのようなところです。

緒形：どうもありがとうございました。それでは、次に私共が派遣者をどのように選考したのか、その中でどのような問題があったのかという点など、派遣事項全般につきまして、釜谷委員長からよろしく願います。

釜谷：はい、先ほど林先生のコメントの中でも応募者が少ないのではないかとご指摘がありまして、さらにこれに対しては木村先生から、2部局に限定されているという制約があることが大きな要因であるので、部局を広げられればかなりの志願者、応募者があつただろうということは既にお答えしました。選考について具体的にお話申し上げますと、毎年年度初めの4月にパンフレットを制作しまして、さらに掲示もいたしまして、両部局の該当する学生に広く周知しました。さらにはそれぞれの部局の指導教員にも依頼して、学生にできるだけ多く応募するよう声をかけてもらったのですが、数から申しますと、初年度平成20年度は派遣者が4名であつたのに対して、応募者は6名で、67%の採用率、それから21年度は、欧米プログラムも走り出しまして前年度からの継続を除いて新規8名でした。8名のところに10名の応募があり、80%が合格して派遣されたということです。それから、平成22年度は7名派遣したのですが、8名しか応募がなかったもので、90%近い合格率です。最近科学研究費補助金の新規の採択率は20%から30%ですので、科研もこれくらいの比率で採択されれば僕らも嬉しいのですが(笑)、それはさておき、ITPは残念ながら応募者が少なかったというのが実情であります。

今申しました通り、年度初めに博士課程の大学院生もしくはポスドク・助教に周知いたしまして、願書を出させる、その際に準備状況、これまでどの方面でどのような研究実績を上げてきたかということ、また具体的に論文になっているものもそうですが、論文になっていなくてもどういう研究をしていたかということを書いてもらう。それから、院生については博士課程前期課程における学業成績を提出させました。そして一番重要な研究計画書、自分が相手国に行つて具体的にどのような研究をしたいのか、申請する時点で考えていることではありますけれども、それを書かせるということをしました。それから、研究業績のリスト、こういったものを基に、第一次書類選考を行いました。これについては、ほとんどすべての委員が書類に目を通して、10点満点で点数をつけます。ただ利害関係者として、応募した学生の指導教員は採点委員から外れました。10点満点で採点して、その点数を基に第一次選考をしました。それを踏まえて、第2次選考としてインタビューですね。本人に対して面接試験を行いました。その結果、一定のレベルに達しているとして、総合判定で合格と

された者を派遣いたしました。

この過程で個々の問題がいくつかありました。一番大きな問題は研究計画書がある程度具体的にできていれば、それを基にして派遣先の教育機関の教員も具体的に指導できただろうと思われたのですが、学生自身が実際に先方へ行く前の段階では、なかなか明確な形が見えないのが実情だと思うのです。精一杯その時点で分かっていることを書いてはいたのだろうけれども、実際指導する側としてはこの学生は一体何を、どういう指導を求めているのかということが分からなかったということ、相手国の指導の先生から聞きました。と同時に、それが最終的に仕上げる博士論文の中で、どういうウエートを占めているかを必ずしも本人が意識していなかったということがいえます。これは指導教員にも責任の一端があるとは思いますが、最終的には本人の問題です。こうした問題点のあることがわかっただけでも大きな成果といえ成果ですけれども、私個人としてはやはり看過できない重要なことであると思いました。

緒形：どうもありがとうございます。今、釜谷先生から選考の話をしていただきましたけれども、今度は、選考した学生をどう指導するかという問題があります。これは、お話の中にもありましたが、神戸大学 ITP 推進委員会として指導するということと、海外パートナー機関の先生が指導するということの両方を含んでいます。事業の大きな目標として書かせて頂きましたけれども、共同指導体制、あるいは多極的教育ネットワークということを目指しました。この体制が、どのように推移したかということについて、指導委員・指導部会の松並先生にお話いただきたいと思います。お願いします。

松並：松並です、よろしく願いいたします。指導についてのところを報告するよう伺っていたので、先ほどの木畑先生のご質問に関連して、様々な意味での「指導」についてお答えしていきたいと思います。まず、アカデミック・ライティングの英語については、私の所に留学しているフィリピン人の留学生がほぼ常時教えていました。欧米に留学に行く前に、国際協力の建物に人文の学生も集まってきて、マン・ツー・マンないし一人対二人か三人という形で英語の勉強をしていたようです。これは、留学生として許される範囲のアルバイトということになっていました。英語を指導した留学生のバックグラウンドは大学の教員・助教・助手でしたので、いろいろな意味で刺激になったし、彼らにも役に立ったのかなということです。

そういう準備をしたあと、今時ですから指導教員とメールしたり電話したりいろんな方法があったと思うのですが、一応海外へ送り出しまして、狭い意味での「指導」が始まります。我々が想定していたところとちょっとずれてしまったのは、ほぼ全員のメンターが、学生の出発と同時に現地へ行けていないことです。これはすでに他の先生もおっしゃっていましたが、基本的に学生は 10 月から行くことができたのですが、メンターは非常勤をどこかの大学でしている人が非常に多くて、改めて表を見て愕然としたのですが、1 月のどこかで行っているのがほとんどでし

た。1 月の末まで授業があるので最後の 1、2 回の授業を休講にして、試験をして、ひょっとしたら答案を持ったままソウルに行ってもらったとか、そういう形でメンターに行ってもらいました。海外留学である意味一番ストレスが大きいのは、留学スタート時だと思うのですが、そのサポートが実はできなかったというのが率直な反省点です。その後は、現地に行ったメンターからの月例報告書によると、私の記憶では、半分くらいは指導に関すること、もう半分が自分のリサーチに関する話を書いてありまして、かなり頻繁に会って、話をしているようでした。そういうことで、メンターという存在は 2 か月遅れではあったけれども、大きかったかなということです。

もう一つ、最後まで問題になったことは、指導教員、特に受け入れていただいたアジアあるいは欧米の指導教員の義務が何なのか、これは率直に向こうの先生から聞かれたこともありました。概して言えば、欧米の大学の先生は、権利と義務がかつちりしていないといけないという意識があり、博士論文をここで出すわけではないので、そこまで指導はできない、無理だ、としつこく念を押される言い方をされた先生も目立ちました。それからもう一つは、日本の指導教員と向こうの受け入れ教員との関係です。ITP がはじまる何年も前から交流があった先生と、これを機会にしてお付き合いが始まった先生、あるいは人文・国際協力の他の教員とは随分仲良かったけれども指導教員とその先生との関係はそれまでさほどなかったなど、いろんなパターンがありました。神戸大学の教員と向こうの教員が既に知り合いで共同作業をしたことがあるという場合は、比較的いろんな問題も解決することができスムーズだったのですが、そうでなかった場合、もちろん、うまくいった例も多いのですが、どこかでトラブルが起きてしまうと、向こうの先生にとってみずとあまりよく知らない、ITP というよく分からないもので頼まれた学生で、何か起きてしまったという少し残念な結果になってしまった例というのもあります。向こうに学費をフルに払っている正規の学生については、もちろん向こうの先生は自分の学生として受け入れるはずなのですが、リサーチ・スチューデントとして行く場合学生はどのように振る舞うべきなのか、あるいは我々がどう要求できるのか、少し曖昧のまま走りながら考えたために、難しい問題がいくつかあったのかなと、それは率直に反省しなければいけない点だと思っています。

それから、教員の派遣をこのように表にできないのは、様々な予算で教員が派遣されていたことにも一因があります。ここにあげている学生で、ラッキーだったのかアンラッキーだったのか微妙なのですが、シアトルに行っている間に、指導教員がやってきてしまった学生がおりました。たまたま神戸大学の別の資金で、木村先生が海外派遣のチャンスがありまして、指導教員とフェイス・トゥー・フェイスで連絡が取れるという状況がありました。また、教員が研究上の必要で、ロンドンとかパリとかに行くことがありますので、指導教員ではない教員も含めて接触することとは多々ありました。そういう意味では、昔とは遠隔指導の意味が違うと言いますか、郵便で何かをやりとりしていた時代とは違うかなということも思いました。

あと最後に、成果報告会についても先ほど例がありましたけれども、大雑把な言い方をすると、人文は人文系の先生たちで、我々国際協力研究科は基本的には社会科学系ですが、しかし一緒に報告会を学生あるいはポスドクのために定期的にやりました。その時には、我々からの質問はときには少しトンチンカンなこともあったかもしれませんが、例えば歴史や文学を専攻する学生に対して、政治学や経済学から言うと、こうじゃないの、という議論をしまして、それはITPの副産物ではないか思います。これをさらに言語が違う形でやれていたというのも、ITPの一つの成果だったのではないかと思います。以上です。

木村：一つ補足させていただきますと、メンターで行っている者と学生で行っている者とで、必ずしも同じ学科で行っていないんですね。国際協力研究科の学生が学生として行っているが、メンターは人文学だということもあり、むしろそういう場合の方がうまく機能しているのかもしれないと思いました。専門が違うことで、かえって刺激になったようです。

緒形：はい、ありがとうございます。それでは、5番目の項目ですが、博士論文の外国語執筆支援ということで、これは私の方からお話をさせていただきます。

木畑先生から何度かお話が出ていますが、あくまでも5年間たった今の段階で、成果を生むということは、なかなか難しいものがございます。なぜかと申しますと、このプログラムはドクター1年生から募集を始めるものです。人文（人文学研究科）と国協（国際協力研究科）の1年生に声をかけて、その中から2人を長期派遣生として選びました。実際には、人文と国協から公平にバランス良く1人ずつ選抜できたと思いますけれど、この2人の派遣生を、2年目は欧米に派遣し、3年目には博論を書かせて、そしてそれをさらに外国語にするというのがプログラムのあらましです。

さて、こうした5年計画の現在の段階で博士を終わった学生は、現在まだ6名しかいません。人文から3名、国協から3名で、その後の4期の学生は今D2でこれから博論を書こうというところなんです。その後の5期生のD1は今アジアで研修中です。

こういう次第ですから、博論を書く資格がある6名の現況について報告が求められると思います。結論から申しますと、6名のうち博論を書けたのは2名です。4名は書いていません。これが実際の成果です。そして、この2名の学生の内、1人は、この3月に外国語として自分の博論を中国語で公開します。だからこの学生は日本語で博士号を取り、かつ外国語で出版したという、われわれのプログラムの目標を達成できた例です。もう1人、英語の博論をやはりこの3月に公開する院生がいます。ただし、この1人は、実は日本語の博論を出せなかったんです。英語の論文が最初に出たので、英語の方を最初に出すことになりました。ですから、2名の修士生が外国語で博論を書いたんだけど、1名は日本語の博論の方がまだ出てないというのが現状なんです。これが良くも悪くも私たちの挙げた成果です。

またプログラムの継続の話が出ましたが、林先生がおっしゃら

れた、例えば韓国であれば戦前日本学叢書シリーズなど、パートナー機関がもつその叢書シリーズに、私たちの院生の学問成果を入れていただくというアイデアは、たいへん良いと思うのです。その場合も単独での博論出版は難しいから、編著という形で、複数の書き手が共同で出版するというアイデアも、私自身は想定していなかったのですが、とてもいいアイデアだと伺いました。4月以降お願いするかも知れません（笑）。実は、台湾大学にもそういうシリーズがあるのです。実は、向こうの先生から、そうした叢書に参加しないかというお話をかなり前からいただいていますので、今後追求してみたいと、個人的には感じています。

それから6名の中で2名しか書けなかったとしても、木村先生がおっしゃいましたように、このプログラムは本当にタフな訓練だったと思います。木畑先生とはさきほどお話したのですが、このプログラムのようなアジア研究の在り方は、私自身で言えば個人的な夢だったんですね。つまり自分がもう一度博士課程の学生としてアジア研究をやるなら、アジアでのフィールドと欧米での訓練の両方できたらよかったな、そんなシステムがあったらよかったなと、個人的にはずっと思っていたのです。それで、5年前プログラムを作る時に、そういう夢を出して、木村さんにその夢の具体的な肉付けをしてもらって、いつ派遣するかとか、研修期間はどれぐらいが良いかなど、いろいろ二人で議論して作っただけけれども、学生にとってはやっぱり大変だったと思います。ただ、すごく大変ではあったが、思いがけない副産物というものも出てきて、これは油井先生が先ほど紹介した学生で、彼は社会学研究をやっていて、中国語は全く初めてだったんですけれども、5年ですごく伸びたと思います。また山本先生が後ほど話されると思いますが、英文学を専攻していたのが、欧米プログラムのある大学に行きたいがために、敢えてアジアプログラムに飛び込んだという院生がいて、その院生は初めてアジアの言語をやって、比較研究をやるような視点を獲得した。うまくいっていない点も多々ありますが、こういうふうなケースも出るんだというのが、率直な感想で、我々が計画を作っていた中では想定できなかったものです。だから、大変ではあったけれども、そういう形で頑張ってくれた学生もいるということもご報告したいのです。

以上が博論に関するものですが、最後に、若手研究者の国際学会企画に関してご報告をお願いします。これは学生主体の企画であることは確かですが、先生方の陰の援助には絶大なものがありました。ここにいらっしゃる山本委員・樋口委員には非常にご尽力いただきましたので、お二人からお話をお願いいたします。

山本：私はアメリカ文学を専門にしております、実は助っ人的に最後の2年間だけの参加ということでありましたが、コロキアムを担当しました。隣の樋口先生と力を合わせまして、そして研究員の方々、そしてこの中には出ていない陰の、縁の下の力持的に働いている研究員・ポスドクであったりドクター博士であったりという方々ですが、そういう方々の力をお借りながら、なんとか二つのコロキアムをすることができました。お手元にお配りしていると思いますが、これが2つのコロキアムのポスター、プログラムないしはアブストラクト（梗概）です。

まず1つ目のプログラムですが、「東アジアにおける域外経験と文化接触——言語から探る神戸台湾及び中国大陆の文化往還」ということで、去年の昨年の12月21日に国立台湾大学で行いました。これに関しましては、樋口先生が台湾の大学で教鞭を取られたということもありまして、台湾大学との太いパイプというのがあり、それをフルに利用して何とか成し遂げることができたということです。まず樋口先生から報告をしていただいて、その後2月に行いましたワシントン大学でのITPコロキウムについて私のほうから報告させていただきます。まず、樋口先生お願いします。

樋口：はい。それでは報告させていただきます。このコロキウムが台湾大学で開催されたのは、もともと神戸大学人文学研究科と台湾大学文学部との間にはかなりパイプがあり、私もよく知っている先生もおりますので、今回ITPコロキウムを開催するのに非常に大きな形で協力いただいたということです。人文学研究科からの派遣者5名のうち、4名が台湾大学でお世話になっているということで、すでにご協力いただいていたはりましたが、その中で12月の段階で実際に派遣されていた学生が企画をして、開催することができました。先ほど山本先生から教員の尽力と言っていましたけれども、最終的には、今回のコンタクトパーソンとして、第2期で台湾に行った小笠原くんが、ほぼ80%やったと言っても過言ではないと思います。

彼はもともと中国の大陸のほうの文学が専攻だったと記憶しておりますが、この台湾大学へ1年目に留学して、2年目はフランスに行きました。最終的には世界文学的な視点で東アジア研究をするという方向性へ、このITPプログラムを通じて研究を発展させることができたと思います。人文学の5名の派遣者の中では、一番の成功例と言えるでしょう。その彼が、今回自分を受け入れてくださった台湾大学の先生方と協力する形でこのコロキウムを開いたということで、出席者については、日本側が藤岡くん、小笠原くん、社会学のアルバロくんという3名です。もう一つ重要な、このコロキウムの課題は、先方の大学の若手研究者を巻き込むということです。こちらが行って、単に成果を報告するというだけでなく、向こうの同じような立場の学生を巻き込んで、ネットワークを作ってお互いに意見交換をするということができるかどうか。当然向こうの先生の指導もあって、先方の学生3名も来て頂いて、一緒にやったということです。

(スライドを示しながら) この青い建物が図書館ですね。改修工事があって、これはもともと帝国大学の旧帝大様式の非常に大きな建物で、旧帝大様式だけでも、熱帯の雰囲気を感じていて、すごく威厳のある建物です。キャンパスの一番中心に居座っているのがこの図書館です。この図書館で(コロキウムを)やったわけではありませんが。(新しいスライドを示しながら) 画像があまり鮮明ではないのですが、この右側の一番手前におられる方が柯慶明先生といって台湾文学研究所の所長です。台湾文学というのは新しいジャンルで、昔は認められていなかった。1980年代以降こういう形で制度化され、それを推進してきた方々の中のおひとりです。(新しいスライドを示しながら) 左側の一番手前に

いるのがこちら側のコンタクトパーソンだった小笠原くんです。真中にいるのがメキシコ人留学生のアルバロくんで、この写真は彼がコスプレに関する研究報告をしているところです。右側が、ちょっと暗いんですけど、統計グラフを使って台湾のナイトマーケット(夜市)に来た人へのアンケート結果を説明している藤岡くんです。

今回の成果ということで2点だけ付け加えさせていただきますと、台湾側の3名の報告タイトルをポスターに載せていますけれども、いずれも、先程油井先生もおっしゃったように、戦前の日本学に関わる報告だった。今、東アジアの文学研究の中でひとつ盛り上がってきているのが、「帝国」という枠組でものを考えることです。東アジアで言えば大英帝国とか色々あると思うのですが、そういう枠を設定した方が、ナショナルな文学研究では見えなかったような双方向的な繋がりが見えてくる。例えばアメリカなんかでも、そういう帝国の文学研究というのが盛んになってきています。日本人がなかなか気付かないようなことをこの3人は出してきてくれたという点で、非常に面白かったと言えます。それから我々側の2人(小笠原くんとアルバロくん)は、研究対象がむしろより現代、20世紀後半の東アジアあるいは現在の東アジアで、帝国的なものを基礎にしながら、さらにそれがグローバルに展開していく中で文学がどう変わっていくか。例えば小笠原くんと言うと、「意識の流れ」という小説の作法がありまして、元々アイルランド出身のイギリスの作家ジェイムズ・ジョイスが開発したものでして、それがアジアに受け入れられて、大陸の作家と台湾の作家がモダニズムの中でそれを自分の小説に活かした。さらにそれが現代の台湾の原住民が登場するような小説にも使われているという考えで、一国文学史では解明できないような世界文学の流れを扱っている。アルバロくんは本人がメキシコで日本のサブカルを受容して日本に来たんですけど、それだけでなく今度は台湾にも行っている。台湾におけるコスプレを中心とするサブカルを受容も研究することでグローバルに研究が繋がっている。そういう意味でITPの趣旨にかなった方向性を引き出す可能性を秘めていると言えます。ただし、最後ですけれども、彼らが十分にそれを自覚して、あるいはお互いのネットワークを形成して、今後も共同的に研究をやっていくという方向がはっきりと打ち出されているとまでは言えないと思います。そこは先程の林先生からのご提案等も考えながら、今後また新たな戦略を考えていけるのではないかと思います。以上です。

山本先生：続きまして、ワシントン大学で行われたコロキウムについてですが、ピンク色のポスターの方をご覧ください。コロキウムは2月22日に行いまして、神戸大学側の参加者として教員が、副研究科長の奥村先生、それから樋口先生、私山本。私と樋口先生はITP委員会の委員ということで参加いたしました。それからITPの学生は楊さん、彼女は中国人学生なのですが、1年目のアジアプログラムでは成均館大学校で韓国語を、とくに比較言語学の観点から学び、そしてワシントン大学では日本語と英語の比較言語学、さらに母国語も入れて日・韓・中・英の4ヶ国の比較言語学をやろうとしていて、これ自体がまさにITP的というか、

普通だと考えられないスケールであります。ただスケールが大きすぎて、英語論文の刊行はいたしましたが、残念ながら3年間で博士論文を書くことはできませんでした。ただし一定の評価はできるのではないかと思います。それから中島さんというのはD2の学生でございまして、イギリス文学の学生です。本来ならばイギリス文学だったらイギリスに行けばいいじゃないかという話ですが、そうではなくてイギリス文学の受容、あるいはイギリス文学の受容を比較文化論的に考察するという目的を持ちまして、最初の1年間は台湾大学で中国語圏における、世界的に人気を持つ『ハリー・ポッター』の受容を研究しました。この作品が研究の対象になるのかという議論も委員会ではありましたが、これを比較論的にやるなら良いのではないかと、ITPとしては、これは面白いのではないかと、チャレンジという形でやってもらいました。それで、中島さんは台湾大学では日文系と英文系両方の授業に参加して、そこの学生と討論等をして、『ハリー・ポッター』だけでなくとも比較文化的素養を身につけてきました。2年目の現在はワシントン大学の日本文学と英文学の授業に参加していますが、主に日本文学で受け入れてもらっています。なぜかと言うと、あえて日本文学ということで、比較文学の観点を持ち込もうということで、日本文学の先生方にお世話になっております。メンターとしましては1名、四方さんというPDの方には大活躍をしていただきました。それからもう1名のPD研究員の沖野さんは、人文学研究科が学振に採択された他の事業、「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」でワシントン大学に長期派遣をしました。その副産物と言いますか、このITP事業ではないですけども、他の事業の成果として沖野PD研究員が、この事業に関わったということです。

ワシントン大学は私も知っている教員が何人もいる、あるいはワシントン大学と神戸大学は提携校ということもありまして、非常に大きな繋がりがあるということを利用していただいて、今回のコロキウムに至ったわけです。相手側はJesty先生とMack先生というアジア言語・文学科で日本文学をされているお2人の若手の先生に協力していただきました。Mack先生はこちらの方に交換教授として来られた経験もあるということで、これも非常に大きな繋がりを持てたということです。それからJesty先生に関しては、今回のコロキウムで非常にお世話になった先生です。それから学生さんとしては、向こうから3名の学生が手を挙げてくれまして、こちら側は3名の発表者、相手側も3名の発表者、コメンテーターも2名・2名ということでかなりオープンな、すなわち対等な形で会が開けたのではないかと思います。会場が、小さな部屋ではあったにせよ、溢れかえらんばかりの参加者で、こちらの方としまして、驚いた次第です。たとえば、コロキウム終了後、コーディネーターという形で関わっていただいたJesty先生に、先ほどあそこに座っていた人は誰ですかと訊いたら、「いや、知らない」と、「あれはポスターを見て来た人たちだ」ということで、関係者だけでなく、かなりの波及効果をもたらしたということで非常に大きなことではないかと思います。それから、みなさん本当に熱心に最後まで聴いていただいて、まあ出たり入ったりということもなくはなかったんですが、ほとんど満杯

の状況でした。

会場となった部屋はHusky Union Building(HUB)っていう新しく建て直された学生会館で色々研究会ができるようなところで、(新しいPPTスライドを示しながら)画像が暗くて申し訳ないんですが、右の方が中国人の楊さんが発表しているところです。4ヶ国語の研究ということでございます。で、(左の方を示しながら)これは日本人の人でたまたまそちらに留学していた五十嵐さんという方で、クレイジー・キャッツの映画の社会学的あるいは経済学的分析という非常に興味深い発表をされました。それから、右の写真で一番手前にいる白人の方ですね、この方がJesty先生という方です。(次のPPTスライドを示しながら)最初にJesty先生が真ん中でお話をされているところがあります。それから四方さんですね。これは、アメリカの冷戦時代における在外華人(Overseas Chinese)の影響についての発表をしているところです。(次のPPTスライド)その次はちょっと違う人を写してしまった。中島さんのがちょっと切れてしまっただけで申し訳ない。中島さんの写真もあったんですが、ちょっと今回は残念ながらいい写真がありませんで、お見せすることができません。それからこの前の白人の女の方が日本語の、西行の詩ですね、お坊さんというか歌人というか、西行法師を研究していました。で、私はまったく日本学は専門外で、まあ非常に不安に思いながら行っただけですが、日本学というのが世界的な関心と呼んでいること、特に欧米等では非常に盛んで、しかも優れたレベルにあるということに気付かされて、非常にいい刺激を受けました。

それで、もうひとつの影響というはですね、やっぱり日本人の学生が日本学を英語でしゃべることによって、かなりその、比較的だけでなく、客観的なあるいは学術的な、グローバルな学術的視点を持つという成果が得られたのではないかとということです。まあひとつ残念なこととしては、まだ若い学生しかいなかったんで、楊さんにしても中島さんにしてもまだドクター論文を書き終えていない学生だったので、企画運営までその人たちが全部する事はできなかったんで、PD研究員の沖野さんと四方さん、それから向こうのJesty先生に助けていただきました。このような体制で非常に入念な準備の中でやっていただいた。もう一つ、なぜ成功できたかということについての私の考えを言いますと、その前年に私と樋口先生2人でMack先生という受け入れのキーパーソンを訪ねてお話をさせていただいた。ITPとはどういうものであるか、ITPの趣旨から話をしまして、それからこういう風な会を企画しているのだけれどもやっていただけないかという形できっちりそういう説明をしました。この趣旨をよく分かっていただいて、向こうの先生からしてもこういう会ならやりたいと、大歓迎だという風なことまで言っていただいただけでなく、向こうの学生とか先生にとっても非常に有益であったという言葉までいただきました。これは非常にうれしいことでした。現在進行中の話ですが、ワシントン大学にいる中島さんですが、比較文学的な観点あるいは受容論、あるいは比較文化という観点から論文を書こうとしております。まだD2なので、あと1年ございまして、これがどのような成果になるのか非常に楽しみです。

それからもうひとつ、最後に付け加えさせていただきますが、今年度を持ちまして、ITP それから、先ほど申し上げました組織的若手研究者等海外派遣プログラムの2つの事業は終わりますが、本年度より5年間の予定で、文学部・人文学研究科がグローバル人材育成推進事業に採択されまして、そちらの方に繋いでいけるのではないかと。つまり、この間の提携校と交流によって、ある意味太くなった幹から新しい枝が出てくるように、次の段階がグローバル人材育成推進事業と言うことで、例えば我々考えているのは、提携校の日本文学科に神戸大学の院生をインターンで行かせてもらえないかというようなことを考えていまして、今後これが新しい展開に繋がるような形でITPの最終年度を迎えることができたのではないかと、ある意味、手前味噌ながら、考えております。私からは以上です。

緒形先生：ありがとうございます。何か私たちの方が饒舌に話してしまって、思いがけず多くの時間が経ってしまいました。予定した時間も限られておりますが、今の我々各委員の報告を受けて、ご感想なり、できれば、こうした方がいいんじゃないかというようなご提言を、評価の両先生から出して頂けましたら幸いです。まずは林先生からお願いいたします。

林：大変感心しました。やはり教育ということがいかに大事であるかということを先生方から教わり、本当に勉強になったという気がいたします。私としては是非とも、このようなプログラムを続けてほしいと思います。このプログラムは多くの若手の院生たち、あるいはポスドクの方々に、アカデミックな、国際的な教育の機会を提供するということで良い取り組みです。

これからのことですけれども、もし可能でしたら、韓国にも 코리아・ファウンデーションとか、台湾にもいろいろなファウンデーションがありますので、それらを利用するのもいいのかなと思いました。私たちは現在ジャパン・ファウンデーションでいろいろな仕事をしているのですが、3年程度を単位として申請し、毎年、年次計画を提出して、さまざまなことを行っております。おそらくそのようなことが、中国の最近の状況は詳しく分かりませんが、台湾や韓国では可能ではないかと思えます。とにかく何らかの形でこのようなプログラムを続けるということは大事なことでと思いますし、それによって、神戸大学の院生たちが刺激を受けて、一つの学究の輪が大きくなるのではないかと考えます。以上です。

緒形：先程の叢書の件とか、今のファウンデーションの件とか、色々教えていただきまして本当にありがとうございました。ぜひ4月以降考えたいと思います。それでは、木畑先生お願いします。

木畑：非常に苦労されたこと、それから成果の両方を聞かせていただいてありがとうございました。せっかくこういう形で始めたものを、具体的な形は変わるにしても、継続されることが必要だと思います。それから、最初に木村先生が言われましたけれども、

学生たちの間でも行くのが当たり前だという雰囲気ができてくるというのが必要だと思いますが、そのことと先方の受け入れ姿勢とのマッチングというのがやはり非常に難しい。神戸大学からこういった学生が来るんだよということが先方に十分認知されることが重要です。日本で色々なプログラムを作っても、向こうで十分認知されないと、結局きちんとした扱いをしてもらえないということが多々あると思うのですが、その辺でも継続性という点は重要だろうと思います。それから、先ほどメンターの行く時期がずれるというお話がありましたが、私はむしろずれた方がいいのではないかと考えています。こういうプログラムがあった場合でも、学生はやっぱり苦労しないとダメなので、行った時からすべて世話してもらうということは果たしていいのかなと思います。いろいろ苦労し終わった辺りでメンターが来てくれてというのはむしろ良かったのではないかという感じがしているのですけれども。ただこれは感想に過ぎません。最後に、この非常にいいプログラムが、違う基盤に乗ってでも継続できるのであれば、それが非常に望ましいということを繰り返しておきたいと思います。

緒形：どうもありがとうございます。先程、山本先生が紹介されたグローバル人材育成事業ですが、これは人文学研究科だけではなくて、神戸大学全体として採択されたものですが、ひとつITPと違いがあるのは、学部生と博士前期課程の院生が中心だということです。博士後期課程の学生やPDをどうするかということが、今後の課題として残っており、引き続き検討していきたいと思えます。その節はまたご協力のほどよろしくお願いいたします。皆さま、長時間ご議論ありがとうございました。最後ですが、推進委員の先生でいらっしゃいます太田先生、先生は2010年当時、国際交流担当の理事として、本ITPプログラムを学振に申請する際の総責任者でいらっしゃいました。最後にお話を頂ければと思います。

太田：学振に申請するときにプレゼンテーションしたのは私でした。大変感慨深いものがあります。先生方のご尽力のおかげでちゃんと予定通り無事終わりますことを非常にうれしく思っています。先程言いましたように、学振でのプレゼンテーションの時に審査委員から出た話で印象に残っているものが2つ程ありまして、ひとつはタイトルに「東アジアの共生社会構築のため」と書いてあるんですけれども、我々は神戸大学としては、アジアプログラムをやって、次に欧米プログラムをやって、同じ事を研究していても欧米の研究者から見ると違う方向で見られているかも知れないということを学生自身が感じることによって、またそこで新しい研究が始まると。あるいは、欧米の人から見ても、若いアジアの研究者がこういう見方をしているというのを勉強してもらうのもいいだろうと、この部分でも神戸大学はいい事を考えたなと思っていただけです。ところが、最後まで気にしたのは、「共生社会構築」の部分で、一体中国と韓国と日本で共生ができるかという部分ですけども、なんとか採択されました。こういうプログラムを作るときにタイトルを考えるのは難しいなと感じました。

もう一つ審査のときにあったのは、やはり語学は大丈夫ですかという話になりました。その時おそらく審査員の頭にあったのはアジアの言語の問題だと思うんですけど、先程の先生方のお話を聞いていると、むしろ英語とかフランス語といった欧米の言語で学生が苦勞したということでしたので、そういう意味でもこういうプログラムをやったことの意味があったのではないかと思います。教育をする方も何が重要か必ずしもよく分かっていないかも知れないという気がして。それから、この話を今後はどう繋げるかですけども、外部の先生方から非常にいい評価をしていただきまして、これからも神戸大学がお世話になることがあるかと思います。今日は貴重な時間をいただきまして、本当に先生方ありがとうございました。

緒形先生：それではこれをもって外部評価会を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

5. 教員・派遣生からの声

・教員

ITP プログラムの終了を迎えて

釜谷 武志（人文学研究科）

若手研究者を海外に派遣する例はこれまでに数えきれないほどあったけれども、同じ研究者がアジアと欧米の両方に行くことをその眼目とする計画は、おそらく初めてではないか。アジア地域を研究対象とする研究者が、欧米での研究状況や研究成果を知悉するのは当然のことでありながら、これまでの日本の学界においては必ずしも重視されていたとは言えない。その点において、本プログラムで欧米に派遣されたアジア研究者が、欧米における研究の一端にふれて、その研究成果の一部を取り込みながら、自らの研究をすでにまとめている（たとえば小笠原淳による、クレーフェル著書の書評）ことをふまえれば、本プログラムの意図が理解され、その目的が達成されつつあるといつてよからう。

しかしながら、そうした特長を実現するために、やや無理を強いる所もあった。東アジア地域研究を行う若手にとって、研究対象とする地域に長期間滞在し、自らのテーマにしたがって研究を遂行すること自体がそれほど容易ではない。ましてや、それに加えて欧米の研究機関に比較的長期滞在するのは、生活に慣れるだけでもある程度のまとまった期間が必要であることを考えると、なかなか無理があったと思われる。そうした負担を研究者に強いっていることは、今後の反省の材料とならう。

プログラムのすぐれた意図を十全に実現するためには、外国での適応期間を考慮に入れた、ゆとりのある、さらに長期間の派遣が理想である。経費の点での困難をとまなうにせよ、今後はこうしたことを含めて改善する余地があろう。

また、すでに成果を挙げつつあるとはいうものの、かかるプログラムの成果は性急に求めるべきものではなく、派遣者の今後を長い期間にわたって見守り、その結果を検証する必要がある。同時にこうしたプログラムが5年という限られた期間ではなく、より長い期間にわたって実施できるような財政的支援を関係当局に要求したい。

I T Pの目指したものと、I T Pから見てきたもの

松並 潤（国際協力研究科）

（「若手研究者」をどう定義するかにもよるが）論文・研究報告などの「対話」がようやく最初期の院生たちによって始まった段階であり、まして「グランドデザインの提供」は今後のものと思

われる。このように考えると、I T Pが目指した「対話と共生のグランドデザインを提供できる若手研究者」の育成は、まだその途上にあるのだろうと筆者は判断する。その意味では、プログラム終了時の現時点よりも、5年、10年が経過した後にこそ、本プログラムの意義が真に問われるべきだろう。

I T Pのもう一つの狙いは、複数ディシプリン内での複合的トレーニングであった。あるいは隣接するがゆえに対話が減じていた人文科学と社会科学の双方からインプットを得たことは、学生たちの研究に広がりを与えることになったと考えられる。

本プログラムはまた、参加した学生・メンターだけでなく、推進委員会メンバーにも影響を与えてくれた。推進委員会の当初の想定は「中国（台湾あるいは韓国）研究をめざす大学院生を欧米にも派遣することにより、より広がりを持ち英語発信力も持つ若手研究者を育成する」ことであつたと思うが、実際のところ、想定よりも広い研究テーマを持って東アジア諸国で学び、その経験を生かした研究を欧米で追求しようとした学生が現れた。彼ら彼女らの研究報告を聞く中で、少なくとも筆者は、狭義の東アジア研究以上の広がりを持つ比較研究の可能性を考えることができ、この点では推進委員会のメンバーであつたことに大変感謝している。

今後も、このような取組によって学生に研究のチャンスと刺激を与えるとともに、教員もまたそこからフィードバックを得ることが必要だというのが、5年間に対する筆者の感想である。

・派遣生

横溝 未歩（国際協力研究科）

報告者はITPの第一期から参加させていただき、韓国・成均館とアメリカ・シアトル大学にそれぞれ9ヶ月ずつ、またメンターとしてソウル大学に3ヶ月の留学をさせていただいた。

報告者の研究地域である韓国においては、現地の資料に触れられることや、インタビューなどの情報収集を容易に行えることによって、その時々「韓国社会の雰囲気」を肌で感じられることが、なによりも貴重な体験となった。特に、ソウル大への派遣中の2012年には、5年に一度の大統領選挙と滞在が重なり、各候補の遊説や討論会、そして選挙をリアルタイムでみることもできた。

また、多くの韓国人に、生活や研究のことで助けてもらい、韓国における人脈も広げられたことも、報告者の研究において重要なことだった。成均館大への留学後、研究地域である韓国で発表をする機会を得たことで、韓国の方からのコメントをいただくことができ、自らの研究が韓国でどのように受け止められるのかを

知る非常に重要な機会となった。またその関係で、2012年12月21日にも韓国における発表の機会をいただくことができた。

アメリカへの派遣中においては、経済的な問題のため語学学校に通うなどの語学学習をおこなうことは容易ではなかった。しかしながら、Language Exchangeを通して、少しではあるが英語を使用する機会を作る努力を行ってきた。

研究地域の韓国以外の国で生活するという経験は、短い期間ではあったが韓国の地域研究を行う際に「アメリカ」というファクターを念頭におくことが必要だという点について、再確認した。アメリカにおける韓国研究に関しては、韓国政治を専攻する学生と意見を交わすことができたし、今後も関心を持って観察していきたいと考えている。

このように派遣の体験は現在、報告者の研究に次のように生かされていると考える。

1つ目は、韓国の政治・社会的雰囲気と直接触れることによって感じたことを、論文のアイデアとして生かしているのではないかということである。

2つ目は、韓国での発表などの機会をいただけるようになり、自身の研究が韓国でどのように受け取られるかを知ることのできる重要な機会になっているということだ。

今後も、研究地域の「空気」を大切にすることや、語学的重要性について再確認しながら、韓国での研究発表の機会を増やしていく努力を行っていきたい。韓国国内の研究から一定の距離を置き、客観性を維持しつつも、韓国の研究者との議論の機会を大切にし、韓国の「感覚」から大きくかい離しない研究を行う努力していきたいと考えている。

米沢 竜也（国際協力研究科）

私はITPプログラムの支援の下、韓国ソウル大学で9カ月間、アメリカワシントン大学で6カ月間研究する貴重な機会を得ることができた。韓国市民団体のネットワークと政治の相互関係を研究テーマに据え、韓国では研究対象である参与連帯にインタビューする機会を得ることができ、多くの示唆を得ることができた。また、ワシントン大学では東アジア研究の本場であるジャクソンスクールに所属し、担当してくださったハ・ヨンチュル先生の指導を受けたほか、韓国学専攻の学生たちとたくさんの交流を通して、韓国政治に対する理解を深めることが出来た。日本語、英語、韓国語を駆使した研究の成果は、2011年5月のAsian Studies on the Pacific Coast 年次総会における発表や、2011年11月の現代韓国朝鮮学会での発表などで実を結んだといえる。

現在は、ITPプログラムでの経験を活かし、日中韓協力事務局で研究員として勤務している。日中韓協力事務局は日中韓三国政府が合意してソウルに設立した国際機関であり、三国間に存在するさまざまな協力事業をサポートし、拡大するという役割を担っている。当事務局の使用言語は英語であり、なおかつコミュニケーション言語は韓国語という環境であるが、ITPプログラムを通じ

て得たコミュニケーション能力や分析能力が非常に役に立っている。今は、日中韓FTAのプロモーション行事や日中韓経済関係分析プロジェクトを担当しており、韓国だけでなく中国を含めた北東アジアの国際関係の現場に身を置いて働いている。ITPでの留学経験がなければ、このような国際機関で働くことは出来なかっただろう。

私の場合、ITPプログラム後の論文執筆を終えないまま就職したため、今後の目標は今の仕事を続けながら、2年以内に韓国民団体に関する博士論文を執筆することである。その後には、ITPでの経験、日中韓協力事務局での経験を活かして、日中韓三国関係に関する研究に携わっていくことが目標である。

楊 吟（人文学研究科）

現在、「日本語・中国語・英語・韓国語の行動展開表現に関する対照研究」というテーマで博士論文を書いている。対照研究のアプローチから、従来の日本語研究、そして一般言語学に新たな知見を加えようとしている。西洋において、印欧諸言語は類似点が多く、移民に対する言語政策なども背景にあって、クロスカルチャーの言語研究が盛んに行われている。それに対して、東アジアにおいて、そのような研究がまだ少ないように思われる。グローバル化が進む今の時代、東アジアの言語を対象とする対照研究が特に必要だと感じられる。

しかし、ITPプログラムの援助がなければ、この研究テーマに挑戦することもできなかったと思う。韓国成均館大学に滞在している間、大学付属の語学院に通い、韓国語をゼロから勉強し始めた。幸いに日本語に似ているところが多く、中級レベルまで順調に進み、研究に必要な程度の語学レベルまで習得できた。また、中国語中国文学学科の朴正九教授に指導教官になっていただき、中国語の文法統語論の知識を深めた。先生の講義及びゼミ生との議論が大変勉強になった。2011年度韓国日語日文学会春季国際学術大会にて、「第一人称からの恩恵表現に関する日韓中対照研究」というテーマで研究発表をした。これは「てあげる」「給」「아/어 주다」に関する一考察であったが、この発表をもとに、博士論文の一部としての「申し出表現」の対照研究につなげて論文にまとめた。

アメリカワシントン大学に滞在している間、アジア言語文学学科日本語専攻のAmy Snyder Ohta教授に指導教官になっていただき、社会言語学と第二言語習得を中心に習った。質的調査法の会話分析について、会話の収録から、書き起こし、分析まで実践課題でやってみた。これまでは小説から用例を抽出などして理論的研究を行ってきたが、会話分析がもっと現実を反映したデータを用いているため、今後研究に取り入れてみたいと考えている。2012 Asian Languages and Literature Colloquiumで、「A Contrastive Study on Request-Action Expressions between Japanese and English」というテーマで研究発表をした。また、アメリカの大学生とグループワークすることや、アメリカの学生

に授業を教えるなど、貴重な経験をいろいろとさせていただいた。

このように韓国とアメリカで得た知識と経験が、博士論文の執筆に示唆を与えてくれただけでなく、今後の仕事と人生にとって宝物であるに違いない。

台湾・アメリカでの派遣経験を通して知る、相互理解の重要性

中島 恵（人文学研究科）

博士論文の題材であるイギリス文学『ハリー・ポッター』では、他者理解の重要性に関する描写が顕著である。ファンタジーという仮想現実を舞台に一見ステレオタイプ化された登場人物が多く登場するが、それぞれの存在は生々しく、まぎれもなく現実を反映させた上で新たな可能性を提示するものだ。

台湾という地域は、日本人にとって極めて特殊な環境であると言える。歴史的に深い関わりのなか、日本人という存在はあらゆる点においてステレオタイプ化されているあらである。日本人の台湾在住者は多く、実際はステレオタイプから外れた人々が多くいるはずなのだが、日本に関するあらゆる情報が溢れているからこそ、より強固なステレオタイプが出来上がるという矛盾が生じており、相互理解の難しさやその重要性を感じさせられる体験が出来た。

アメリカで何より感じるのは、キリスト教の影響の大きさである。『ハリー・ポッター』の根底に見られる哲学は、ファンタジーというフィルターを通して信仰の違いや国境を越える普遍性を備えていながら、やはり大きくキリスト教の影響を受けている。教会という繋がりがあらゆる階層や時にはまったく違う人格同士をも結び付け、それが大きく機能している社会に身を置くことは全く新鮮であり衝撃でもあった。また、外国文学に相当するが故か『ハリー・ポッター』の研究も児童文学であることを理由に冷遇されがちな本国イギリスより進んでおり、比較的多くの参考文献に恵まれたことは大きな収穫であった。

台湾とアメリカでの研究経験は、日本人である被派遣者のアイデンティティを大きく揺さぶるものであった。アジアとアメリカはわかりやすく異なる環境であるが、どちらも一筋縄ではいかない歴史を背景に、あらゆる人種や文化が混在しており、そこでの生活はアジアにおける日本人、欧米圏におけるアジア人としてのアイデンティティを問いたださざるを得ないものであるという点で共通していたからである。自分自身の背景について再考させられると同時に、他者との相違と意識し続けることで、相互理解という課題の難しさとその重要性をより強く感じた。この経験は、現代が舞台である外国文学を題材にする上で、そこに見る課題の更なる追求を促すものであり、また作品をより深く理解するためにもかかげえのないものになったと言えるだろう。

三村 佳充（国際協力研究科）

平成 24 年度派遣生として韓国ソウル国立大学校を訪問してから三ヶ月近くが経つが、その間の報告と今後の研究への展望について述べたい。

今回の研修では、大きく二つの目的をもっていった。第一に、今後、近代韓国史を研究していく上で、韓国語能力の向上が必須となることは当然であるが、さらに研究を深めていくにあたり、現地に滞在しながら見聞を広め、研究者として必要な語学力を身につけることであった。この点については、大学付属の言語教育院に通いながらスピーキングと読解を平行して学ぶことができ、同時にニュースやインターネットを通じて、韓国大統領選挙の動向や討論、遊説、周囲の人々の意見等、幅広く見聞きできたことは何よりも幸いであった。

第二に、今回の滞在期間を博士論文執筆のための準備期間と位置づけ、長期的な視点をもって研究に邁進しつつ、自らが地域研究を行うにあたり何を明らかにしたいのかを確認することである。今回、指導教官を引き受けていただいたイ・サンチャン教授をはじめ奎章閣の方々と話しながら、こうした自分の研究を顧みる契機となった。近年の朝鮮王朝や大韓帝国に関する研究動向の一つとして国王（後に皇帝）高宗に対する再評価を挙げることができる。例えば、2010 年に開催された（韓国）歴史学会でのシンポジウムのテーマは「近代移行期における君主制」であったが、その中で「韓国の君主制が近代国家への進行過程に如何なる役割を果たし、影響を及ぼしたのか」を考察するために「王権の絶対化」への着目は、個人的に示唆に富むものであった。今回、研修テーマとして「閔氏勢道」を事例として選択したのであるが、現在は上記関心を踏まえ、韓国における国家形成の過程を一次資料と二次資料を整理しながら、論文執筆につなげている段階である。

速水 奈名子（人文学研究科）

報告者（速水）は、ITP からの研究活動経費をもとに、国立台湾大学社会学 [2009 年 2 月から 3 月まで]、及びエコール・ノルマル・シューベリウール文学・人文科学学校（以下 ENS LSH と表記する）[2010 年 2 月から 3 月まで] に滞在した。滞在校期间中に藤岡達磨氏（当時、神戸大学人文学研究科院生）のメンターとして研究指導補助を行うと共に、自らの研究促進に努めた。

報告者が、両研究機関において進めた研究活動は、(1) アメリカの社会学者アーヴィング・ゴッフマンの理論の内在的研究を深めること、(2) 同理論をはじめとした身体社会学理論を分析的枠組みとし、現代東アジア社会における女性の身体統制に関わる比較調査研究を進めること、の二点に集約できるが、国立台湾大学の滞在を通して、同大学社会学部教授シャオ・シンファ氏の指導下で、主に後者の研究活動、すなわち台北における経験的調査を通じたデータ収集を行い、日本と台湾の比較研究を促進していくことに努めた。また、ENS LSH においては、同大学校教授イヴ・

ヴァンカン氏の指導下で、主に前者に関わる活動、すなわちゴッフマン理論の内在的研究を進めた。ヴァンカン氏はゴッフマン理論家であり、同理論に関するアーカイブスを自ら所有している。報告者は、滞在中に未交換資料の収集をはじめとしたアーカイブス調査を行うと共に、同氏とゴッフマン理論の現代的展開に関わるセッションを行った。

現在、報告者は神戸大学人文学研究科において学術推進研究員として、上述した研究活動を継続しているが、ITP の枠組みにおいて遂行した両機関における活動は、現在の研究の基盤になっているといえるだろう。ITP による海外渡航がはじまった 2009 年度から 2012 年 12 月現在に至るまでの間に、報告者は、上述の研究課題に関わる国際学会報告（英語）を 6 回行い、関連論文（日本語・英語）を 6 本執筆している [詳細については研究成果を参照のこと]。また、現在においては、これらの成果を単著として総括的にまとめる作業に入っている。さらには、これらの業績をもとに、国内外の研究機関において複数回講演を行う機会にも恵まれた。今後も、ITP からの研究活動経費をもとに培うことができたこれらの経験を生かし、研究の更なる促進に努めていきたいと思っている。

田中 悟（国際協力研究科）

報告者は、ITP プログラムにおいて、成均館大学校東アジア学術院(2009 年 1 月～3 月)およびソウル大学校国際学研究所(2009 年 12 月～3 月)において、在外研究を行なう機会を得た。この期間中に実施したフィールドワークや資料収集を基にした研究成果には、次のものがある。

1. 田中悟「現代韓国における「死者の政治学」—独立記念館から国立墓地まで—」（島根県立大学北東アジア地域研究センター『北東アジア研究』第 18・19 合併号、15～32 頁、2010 年 3 月）
2. 田中悟「現代韓国の都市イメージに関する一考察—「民主と釜山」をめぐって—」（大阪女学院短期大学『大阪女学院短期大学紀要』第 39 号、1～18 頁、2010 年 3 月）
3. 田中悟「現代韓国における葬墓文化の変容—納骨堂を中心に—」（大阪女学院短期大学『大阪女学院短期大学紀要』第 40 号、19～36 頁、2011 年 3 月）
4. 田中悟「迷惑施設化する国立墓地—韓国・「国家報勲」政策の一側面—」（神戸大学国際協力研究科『国際協力論集』第 19 巻第 1 号、65～86 頁、2011 年 7 月）
5. 田中悟「韓国葬墓文化と経済合理性—慶尚南道南海郡を事例として—」（大阪女学院短期大学『大阪女学院短期大学紀要』第 41 号、1～18 頁、2012 年 3 月）

なお、これらの研究については、一部を ITP アジアプログラム派遣者成果報告会（第 1 期・第 2 期）において報告し、『ITP ア

ジアプログラム派遣者成果報告書』（第 1 期・第 2 期）に掲載したほか、日本比較政治学会・日本宗教学会・「宗教と社会」学会などにおいても研究報告を行なっている。

また、現代韓国の葬墓文化とナショナリズムをめぐるこうした研究は現在、科学研究費補助金（若手研究 B・平成 22～24 年度、研究代表者：田中悟、研究課題名：「死者を通じて形成される世界観に関する研究—「ナショナルな墓地」を手がかりとして」、研究課題番号：22720027）によって継続中であり、最終的には単著書籍の形に取りまとめていきたいと考えている。

村田 省一（人文学研究科）

私は 2009 年 12 月から 2 月にかけて、ITP プログラムにより台湾・国立台湾大学文学院歴史学系に派遣されました。もともと私の専攻が近代中国・上海における都市開発というテーマであったこともあり、台湾派遣におきましては、同時代の台湾における都市開発、特に上海研究でも主に扱っていました水道開発について研究をさせていただきました。

国立台湾大学におきましては受け入れて下さった周婉窈教授や周ゼミの皆様の協力を得て、台湾における研究状況の把握や、台湾総督府公文類纂など、現地にしかない一時資料の調査にまい進する事が出来ました。また、台湾研究で活躍なさっている日本人学者の方々とも交流が出来、自分の直接の研究分野のみならず、台湾史全般につきまして非常に多くの知見を得る事が出来ました。

派遣の終了後、2010 年後半に周教授のご推薦を得て、国立台湾大学にて短いながらもポストドクターとして受け入れていただき、更に自分の研究・知見を継続して深める事が出来ました。その一連の成果の一部は、既に学術論文として公表させていただいております。まだ公表に至っていない部分につきましても、機会を見て世に問えればと考えております。

この派遣で得た成果につきましては、従来私が研究を進めてきました上海などといった中国圏・そして東アジア圏の中での位置づけを考えつつ、こうした地域における開発や自治の問題を考える上での重要な要素として今後とも扱っていくつもりです。

最後に、ITP 派遣の機会を与えていただいたプログラム推進委員の先生方、神戸大学の関係各所の方々、そして台湾にて受け入れていただいた国立台湾大学の関係者の方々にお礼を申し上げます。

長澤 裕子（国際協力研究科）

私は、ソウル大学校教育大学院に長期派遣されていた大学院生のメンターとして、2012 年の初頭から三ヶ月間、韓国ソウル大学校に滞在した。振り返れば、2011 年の 10 月末から ITP プロ

グラムへの応募準備を始め、11月にはソウル大学校奎章閣側への訪問学者応募書類の送付、ビザ取得など年末までに渡航準備を終えソウルでの住まいも決めて、正月明けには渡航することができた。年末年始にかかる慌ただしい短期間で、神戸大学との事務連絡が初めてだった私が無事に渡航準備をできたのも、毎回、メールで親身になってご指導くださった、木村幹先生、緒形康先生、橋本寛子先生の支援や、国際協力研究科および人文学研究科の先生方の見えないサポートがあったからに他ならない。

こうしたサポートは、渡航中も変わりなく、たいへん心強かった。ITP 事務所に月1回のペースで報告書を提出することで、渡航後の研究内容やその意義を自ら振り返ることもできた。報告書をまとめる中で、自らの研究が他分野の研究者にとってどのような意義があるのか、という点を意識することができたのはひじょうに大きかった。それも、専門の異なる長期派遣者と、月に2〜3回ほど、食事を兼ねて面談をすることで、他分野の研究やコンサルティング業務に関心を広げることができたからだと思う。派遣期間中は、ソウル大学内外で文化財返還問題について、二度の研究報告をする機会にも恵まれた。現地での資料収集やインタビューや韓国研究者との研究交流に加え、ソウル大学に研究滞在中の日本や米国等からの海外研究者とも意見交換ができた。帰国後は、非常勤講師として勤務する二松學舎大学で、学部生の韓国交換留学の相談にも積極的に応じることができた。今後もコンサルティング業務と共に、現地で得た研究成果をまとめ、隣接分野にも有用な日韓現代政治に関する研究を発信できることを望んでいる。

伊賀 司（国際協力研究科）

私は ITP プログラムにより、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院（SOAS）に2011年11月から翌年の1月末まで派遣されました。この期間中に、SOAS の図書館を活用できたことや SOAS やロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（LSE）などで開催されていた各種のセミナーやワークショップに参加できたことは、自らの研究の幅を広げると言う意味で現在、非常に役立っています。また、派遣期間の終盤に SOAS でセミナーの報告を行ったことも大きく自信となっています。

派遣期間中の研究が現在どのように役立っているかについて、より具体的に言えば、派遣期間中に調査した情報化をめぐる理論的な研究動向やマレーシア以外の各国の事例が、今後の研究の枠組みを形成するうえで大きく貢献しています。現在、私はマレーシアの社会運動と、東南アジア各国の情報公開法の制定過程という2つのトピックに関して研究を行っていますが、これらの分野での先行研究については SOAS 滞在時に収集した文献が非常に役に立っています。さらに、派遣中は中東の「アラブの春」の動向に関するセミナーなどもありましたので、これらの諸国の社会運動の実態を知ることで、マレーシアを中心とする東南アジアを比較の視点からもう一度捉えなおすことができるようになりました。

た。

今後は、ITP 派遣で得た成果を基に更なる研究を進めていきたいと考えていますが、その際に国際的な学会での報告や雑誌への英語での投稿を含めて、研究発表の幅を広げていきたいと考えております。特に、SOAS での留学を通じて、ヨーロッパでは東南アジアの実状に根差した地域研究は依然として需要があって必要とされている一方で、必ずしも十分に研究者がいない実情が見えてきましたので、今後の研究の発表先としてイギリスを含むヨーロッパを一つの選択肢とできるのではないかと考えている次第です。

おわりに

人文学研究科と国際協力研究科を推進母体とする本プログラムの遂行は、国際部（国際交流推進本部）、国際部国際企画課、国際部留学生課の皆さまのご協力なくしてあり得なかった。まず最初にそのことを記しておきたい。とりわけ、本プログラムを運営した5年間に、国際担当理事（副学長）を務められた太田博史、中村千春、両先生には、多くのご助言とご指導を頂いた。歴代部長（副本部長）の渡部慎二、勝平宏、海内保男、松村仁の各氏にも御礼を申し述べたい。

5年間にわたる運営の中で、本プログラム推進委員会のメンバーにも多くの異動があった。本プログラムの最初の構想を提示された佐々木衛教授は、平成20年度より3年間、人文学研究科長という重職を務められる中、推進委員長を兼任され、本プログラムの先頭に立たれた。その後、佐々木先生は、日本学術振興会北京センターの責任者として北京に赴かれたが、本プログラムが終了するこの3月をもって、同センター長を退かれると同時に、神戸大学を退職される。心よりお疲れさまと申し上げます。

本プログラムのやはり初期の推進委員会メンバーであり、国際協力研究科長でもあられた五十嵐正博教授については、平成22年度にオーストラリア大使館に出向されるまで、ご一緒に仕事をさせて頂いたことが、忘れ難い思い出である。また、推進委員会の初代の選考部会長を務められた窪園晴夫教授は、五十嵐教授と同じ平成22年度に国立国語研究所に異動されたが、その的確な実行力によって初期のプログラム運営が受けた恩恵は計り知れない。

実務を担当する人文学研究科事務局においては、中井啓介、西橋英夫両事務長に、本プログラムをしっかりと支えて頂いた。

その他、数々のご支援を頂戴した全ての関係者の皆さまに、この5年間のご厚誼に対して深甚の謝意を表したい。

神戸大学人文・社会 ITP 推進委員会委員
緒形 康

若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム (ITP)

東アジアの共生社会構築のための多極的教育研究プログラム

成果最終報告書 (平成 20 年度～平成 24 年度)

平成 25 年 3 月 29 日発行

編集・発行 神戸大学若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム (ITP)
推進委員会

URL : <http://www.lit.kobe-u.ac.jp/itp/index.html>

住所 : 〒 657-8501 神戸市灘区六甲台町 1-1 神戸大学大学院人文学研究科内

印刷 株式会社 七旺社